

進撃の巨人2～名もなき 兵士という名の悪魔～

Nera上等兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

巨人の脅威によって人類が壁の中で暮らす時代に

シガンシナ区のおそこそ裕福な商人の令嬢だったフローラ・エリクシア

ある日、彼女の生活は一変した。

飛んできた瓦礫によって、両親は潰されて振り返るとそこに鎧の巨人が居た。

全てを失い、避難船で俯く少女は、少年の決意の一言で鎧の巨人に復讐を誓う！

ウォール・マリア陥落した日以前の記憶を消失した彼女は、調査日誌にこまめに記録していき、後に多くの人の手に周っていく事になるが無名の英雄の日誌になってしまった。

第104期訓練兵団出身の同期達が気を遣ったのもあるが、本当の理由は…。

内容：

ゲーム、進撃の巨人2 final Battleのオリジナル主人公の話となります。

原作とゲームをごちゃ混ぜにしながら、オリジナルの展開に行きます。

ネタバレになります、とある人物がこのルートを選ばなかった時点で、一見原作キャラの救済に見えて、本編より地獄になります。

話の都合上、原作で死なないキャラが死んで、原作で死ぬキャラもある程度救済があります。

結論から言うとゲームのオリ主は、良い所で地獄を回避したんだってな…って。

更新速度はきまぐれ

目次

1章 地獄の中では心から笑える分、まだ生易しかった時代

1話 第104期訓練兵団の女訓練兵

2話 予期せぬ初陣

3話 頼むから囿になって死んでくれ

4話 目覚めてしまった力

5話 救える命を見捨てる勇氣

66

6話 戦え!!

7話 ただいま

115

90

8話 エレン・イェーガーは人類の味方か敵か

137

9話 トロスト区奪還作戦 発動

161

10話 圧倒的な技量不足

185

11話 悪夢からの目覚め

210

12話 自由の翼

232

13話 鎮魂歌

256

2章 希望が1つずつ潰えても絶望的状況を乗り越えられると信じていた時代

14話 前代未聞の抜擢

282

15話 巨人捕獲作戦

307

16話 運命を変えた骨の燃えカス

307

24話	壁外調査に向けての最終調整	534	29話	ジャン・キルシュタインの決断	671
23話	エレン巨人化実験計画	480	28話	女型の巨人襲来	645
22話	リーブス商会	453	27話	旧市街地戦	618
21話	相棒との出会い	429	3章	多大な犠牲を払えば、相応の対価が得られるという間違いを結果で教えてくれた時代	
20話	調査兵団の目的	406	26話	第57回壁外調査 開幕	592
19話	独自の技術ツリーの誕生	382	25話	リヴァイ班から兵長へのプレゼント	561
18話	決して破られない約束	355	17話	特別兵法会議	331
17話	壁外調査に向けての最終調整	534	18話	決して破られない約束	382
First Battle		696	19話	独自の技術ツリーの誕生	406

3 1 話	巨大樹の森	726
3 2 話	運命の決断	756
3 3 話	反撃の咆哮	787
3 4 話	全てを捨て去る覚悟	815
3 5 話	命懸けの騙し合い	846
3 6 話	なんの成果も得られませんで した	876
3 7 話	回想 3—1 カラネス区撤退	
作戦 開幕		906
3 8 話	回想 3—2 不測の事態はい	
つも唐突に		938
3 9 話	回想 3—3 最大の難関は、	
カラネス区前門の守備隊		967

4 0 話	その日、人類は思い出した！	
巨人という恐怖を！		1004
4 1 話	調査兵団の精鋭 V S 壁登	
りの変異種		1034
4 2 話	抗え！最後まで！	1062
4 3 話	エレン・イエーガーの選択	1093
4 章	死に物狂いの努力と代償で、絶望 的な状況が好転していると錯覚していた	
時代		
4 4 話	翌日を迎えられる喜び	
4 5 話	クリスタとミーナの根性と執	1133

着心

46話 技術の発展には犠牲が付き物 1163

47話 アニ・レオンハートの至福の 1194

一時 1222

48話 ベルトルト・フーバーの憂鬱 1258

49話 急変 1289

50話 第58回壁外調査 開幕

1327

51話 王政の地雷原でタップダンス

した女の末路

1361

52話 フローラ VS 対人立体機

動部隊

53話 茶番劇 1418

54話 偉そうに椅子に踏ん反り返る 1389

大臣と大総統と兵士 1452

55話 ダリス・ザックレー総統と芸

術 1481

56話 サウナ調査兵団 1508

5章 平穏な日常が崩れ去っても、いず

れ以前の様な日常生活に戻れると思つて

いた時代

57話 破滅への足音 1553

58話 女型の巨人継承者：アニ・レオ

ンハート 1590

- | | | | | | |
|---------------|----------------|------------|---------|-----------------------------------|------|
| 59話 | 残酷な世界 | 1621 | 66話 | 東防衛線 | 1878 |
| 60話 | フローラ VS 女型の巨人 | | 67話 | 駐屯兵団第一師団精鋭部隊 | |
| Second Battle | 1662 | VS 穴掘りの変異種 | 1911 | | |
| 61話 | 人類最悪の日は、いつも唐突 | 1701 | 68話 | 黄昏のラガコ村と月明りのウ | |
| に | | | トガルド城 | 1949 | |
| 62話 | 未知なる物を見て慄く者達 | 1730 | 6章 | 全てを偽っても過去は変わる事無く自身や裏切った者を苦しめると分かっ | |
| 63話 | この日、ジーク・イエーガーは | 1761 | てしまった時代 | | |
| 恐怖で脱糞した | | | 69話 | 壁外から来たと察した者達 | |
| 64話 | サシヤと少女の出会い | 1804 | 1979 | | |
| 65話 | 臆病な男と頭進撃の女 VS | 1836 | 70話 | ウトガルド城防衛戦 | 2010 |
| 双頭の変異種 | | | 71話 | ユミルの覚悟 | 2048 |
| | | | 72話 | 本当の名前 | 2082 |

7 3 話	正体	116
7 4 話	奪取	153
7 5 話	発覚	194
7 6 話	追跡	202
7 7 話	再会	226
7 8 話	因縁	231
7 9 話	撤退	255
7 章	何気ない日常は夢く過ぎていき大切な思い出は少しずつ失われて残るのは絶望だけの時代	248
8 0 話	奪還を目指す者達	2397
8 1 話	人類の希望であるエレン・イェーガーの価値	2436

8 2 話	フレイゲル・リースの約束	2474
8 3 話	過去は変えられないが未来は変えられる	2508
8 4 話	鎧の巨人 V S 獣の巨人	2537
8 5 話	対人立体機動部隊と頭進撃娘	2574
8 6 話	叶わぬ夢と叶う夢	2607
8 7 話	エレンとキッツ隊長の再会	2642
8 8 話	負傷兵と残された者と少女の決意	2673

8 9 話	1 0 4 期女調査兵の女子力	
アツプ大作戦	—	2711
8 章	破滅だと分かってても人は前進するが、更に地獄の釜の蓋が開くと後に発覚する時代	
9 0 話	人類活動領域の最北端ユトピア区	27752745
9 1 話	終わりの始まり	—
9 2 話	ユトピア区旧市街地防衛戦	2808
9 3 話	この日、ジーク・イエーガーは悪魔を思い出した	2839
9 4 話	超大型巨人 V S 悪魔の末	

9 5 話	3 つ首の尻尾が生えた変異種	2875
9 6 話	最強の異形の巨人	2906
ジ・ダハーク j r. " 戦	—	2946
9 7 話	アニ・レオンハート奪還作戦	2989
9 8 話	世界は残酷だ…されど…とても美しい	3026
裔達	—	

1章 地獄の中では心から笑える分、まだ生易しかった時代

1話 第104期訓練兵団の女訓練兵

不幸は見えるが、幸せは見る事はできない。

人間というのは、失って初めて幸せだったのが実感できる。

この世は、諸行無常だ。

何気ない日常が幸せである事に気付かず崩壊はいつも突然だ。

その日、人類は思い出した。

人類は鳥籠の中に囚われていたことを。

奴らによって、外へと羽ばたけなくなったことを。

「貴様は何者だ!？」

「フロック・フォルスターであります!」

「貴様は何しにここに来た!？」

「駐屯兵団に所属し、家族や知り合いを守るためです！」

「名前の通り、まぐれで生還できる訓練などないぞ！首を縊る準備でもしておけ！」

訓練兵の教育に任命されたキース・シャーデイスは、通年の「通過儀礼」を行なつていた。

兵士として実感がない新兵たちを「兵士に適した人材」にする為に完膚無きまで否定するのだ。

正常性バイアス、自尊心、過信、甘え、価値観など、兵士でいる以上、躊躇う物を全て抹消する為に。

特に現実に向き合っている気である今の新兵など尚更だ。

「二列目後ろを向け！」

キースの怒声で、方向転換する訓練兵たちの動きはぎこちなく足並みは乱れていた。

彼らからすれば、鬼教官に目を付けられない様に背筋を伸ばし、指示があるまで体勢を維持するので精一杯である。

だが、彼らは知らない。

教官が言い放った末路は、役割を全うできた時点で大分マシな死に方である。生き残って、数えきれない部下の家族に部下の死を知らせるのがどれだけ地獄だという事を。

「ミーナ・カロライナです！」

「トーマス・ワグナーです！」

「デント・アクアです！」

初々しさを残す940人の訓練兵たち。

いや、「立体起動装置」を駆使して移動できない彼らは「兵」と呼ぶのも烏滸がましい。だからこそ、キースは彼らの事を餌や囿、ゴミ、家畜、産業廃棄物などの名称で怒鳴りつけるのだ。

前述の三人も含め囿にすらなれない【ゴミ】に喝を入れた後、一人の女が目付いた。一瞬、顔を背けていたのもあったが、兵士が香水を使用するなど言語同断。

「貴様は何者だ!!」

「シガンシナ区出身、フローラ・エリクシアです！」

「そうか、エリクシア！お前も間抜けみたいだな！名前だな！家畜臭を誤魔化しながらここに何しに来た！」

「鎧の巨人を倒すためですわ！」

「ほう…せいぜい頑張るといい…ただし！貴様の死体が目視でも分かるように目印をつけておけ！」

『通過儀礼』に対して、緊張して強張りながらも「鎧の巨人」という単語を発してから取り繕っていた訓練兵の仮面を外し、瞳孔が大きく開き口角が吊り上がるのを必死に堪えている。

地獄を知りながらもあえて、無垢な訓練兵を演じている化け物がそこには居た。

あらゆる事で経験豊富と自負しているキースですら、このような人間は見たことが無かったほどの化け物であった。

まるで過去の自分を見ているような感覚であり、自分の後任者のような親しみすらあった。

つまり、どう反応していいか困る訓練兵である。

お陰様で、香水を指摘するどころか肯定してしまう発言をした瞬間、彼は後悔してしまふ。

しかし、それさえも凌駕する【芋を喰らう女】を目撃するとは、この時点でキースは夢にも思わなかった。

【平和】とは、戦争の準備する期間のことである。

巨人が誕生する前の遙か古の偉人が言い放った名言とされる。

では、人類は巨人と戦争しているのか。

大きな壁で周囲を囲い、攻撃を仕掛けるだけで税金と兵士が散っていく惨状は、戦争ではなく虐殺である。

「わたくしはー」

平和だった幸福は、砂上の楼閣よりも容易く崩れ去って目の前には地獄が広がっていた。

避難船に乗り遅れて置いていかれた市民たちの後方には巨人の群れが迫っていた。

たった10分の差で地獄から振り切って避難船に運よく乗れた少女は、未だに現実か

悪夢か判断できずにいた。

「わたくしはー」

「駆逐してやる！この世から一匹残らず!!」

避難船に揺られて一人で三角座りで俯いていた少女。

全てを失った少年が発した一言は、鎧の巨人が飛ばした瓦礫によって両親を失った少女を立ち上がらせるには充分であった。

超大型巨人と鎧の巨人が襲撃してきた結果、人類はウォール・マリアを放棄した屈辱の日。

巨人を駆逐し、故郷を取り戻す！

その為ならなんでも犠牲にし、悪魔になろう！

地獄から這い出てきた二人の人間は今日をもって死に、代わりに二人の悪魔が誕生した。

少年の名は、エレン・イエーガー。

少女の名は、フローラ・エリクシア。

黒色の髪の少年は、壁外の自由を求め、「人類」を守る為にどんな手でも使って、敵を

一匹残らず駆逐する悪魔。

栗色の髪の少女は、鎧の巨人を討伐する為に過去を全て切り捨てて、驚異的な聴覚と視覚で敵を駆逐する悪魔。

共通点はいくらでもあるが、突出しているのは、誰にも彼らの道を阻む事ができず全力で突き進んでいく点であろう。

同じシガンシナ区出身で、940人居る訓練兵の中で全てを犠牲にしても巨人を駆逐しようとするのは彼らだけである。

仲良くなれないわけが無く同期の中でも特別な絆で結ばれていく。

例え、死体で舗装された道でも臆さずに二人は全力で突き進んでいくだろう。

それが新たな人類の存亡のきっかけになろうとも。

2話 予期せぬ初陣

この世界では、人類最悪の日は、いつも突然に更新される。

最悪という定義はなされていないが、民間人が大勢死に仲間が無力で散っていく事であらう。

ここに居る誰もが言う、油断はしていなかっただと。

「上官の食糧庫からお肉をたくさん盗ってきました」

キース・シャーデイスの「通過儀礼」の眼前で呑気に芋を食った挙句、食べかけの半分を手渡した女。

芋女こと、サシャ・ブラウスは当然の様に肉をくすねて来た事を自慢していた。

それを見て慌てたのは壁上固定砲を整備していた第104期の訓練を修了した同期たちである。

「おいおいおい！早く戻してこい！」

「お前…本当にバカだな」

「サシヤ…貴女はともかく私たちまで独房に入れさせる気なの!」

「バカつて怖ええ」

サムエル、トーマス、ミーナ、コニーは、真つ先にあの鬼教官の顔を思い浮かべた。

しかし、めつたに食べられることができない肉を見て、食欲に負けそうになっているのも事実である。

エレン・イエーガーは、その様子に呆れながらも微笑ましい光景に笑みを浮かべてしまった。

何度も言うが上官の食料庫から窃盗というのは、除隊され憲兵によつて独房に叩き込まれる悪行。

知り合い以外が居ないか見渡すと、調査日誌に何かを記しているフローラ・エリクシアを見つけた。

「フローラ、今の出来事も書くのか?」

「当然よ! 忘れないうちに記しておかないとね」

「もし、憲兵にバレたらその手帳が証拠になっちゃまうぞ」

「そうかもね、でももしかしたらこれが最後かもしれないでしょ？だから些細な事でも書いておきたいの」

フローラは既に両親の顔も体格も声も忘れてしまった。

最後に残っているのは、鎧の巨人によって両親が死んでしまった事実だけ。

それどころか、一緒に遊んでいた友人や家庭教師など接点がある人達。

ウオール・マリア陥落以前の思い出は、記憶の彼方へと追いやつてそのまま消えてしまった。

だから、彼女は忘れない様に全てを調査日誌を記していた。

「もしかして昨晚の騒動も書いたか？」

「もちろん、だって送別会の出し物でしょ？書かない方が可笑しいわよ」

鈴を転がすような声を出して笑うフローラ。

それを聴いて脱力するエレン。

ジャンとエレンの殴り合い、熱が冷めて落ち着いた今では、恥ずかしい記録に間違いない。

整備班に志願してきた彼女をどうするか迷った結果、承諾したが間違いだったかもしれない。

「大丈夫ですよ。土地を奪還すればお肉がたくさん食べれるようになりますから」

「え？」

「ああ、なるほどウォール・マリア奪還する前祝いか。食ったら腹を括るしかないからな！」

サシヤの一言で困惑する一同。

次にトーマスの一言がこの場に居る兵士たちに響いた。

そもそも肉が食えなくなったのは、巨人のせいである。

だから巨人共をウォール・マリアから叩き出せば、昔の様に肉が食える。

「オレも食うぞ！」

「私も食べるわよ！」

「今更、返しても意味が無いしな」

「ここに居る7人の誓いって事か！良いんじゃねーの！オレも乗ったぜ！」

【固定砲整備4班】、全員の志が一致した瞬間であった。

悲劇から5年、人類の2割と領土の3分の1を失つてようやく人類は立ち直りつつある。

エレンは実感していた。

人類は巨人に勝てると！

人類の反撃はこれからだ！

「は?！」

目の前に壁がある。

50mの壁の上にいるはずなのに、赤い壁があった。

否、これは壁ではない！以前にも見たものだ！

次の瞬間、熱気を伴った蒸気と共に固定砲整備4班は、壁の内側に吹っ飛ばされた。

「立体起動に移れ！」

目の前に現れたのは、超大型巨人であった。

知っている！こいつが人類最悪の日を更新する元凶だと！

エレンの一言で気を取り戻した4班はアンカーを壁に刺して落下死を防いだ。

唯一氣を失ったサムエルは、サシヤがアンカーで刺して落下を止めており、4班全員が無事なのを確認して安堵する一同。

「危なかった」

「そうね」

だが、不幸はいつも畳みかけてくる。

大きな衝撃と共に壁に大穴が開き、遮る物が無くなった巨人が侵入してきた。ウォール・マリア陥落時と同じだ。

超大型巨人が壁に穴を空け巨人共が侵入して人を喰らい始めるだろう。

また人類は、生存領域を狭めて鳥籠でガタガタと震える毎日を送るのか。

「固定砲整備4班！戦闘用意！」

自分たちの無力さは知っていた。

戦う術がない以上、駐屯兵団の兵士を責めることもできないと！

だが今は違う！

940人居る訓練兵を218人まで脱落する訓練に耐え抜き一人前の兵士として認められた者だということをしる！

「巨人……ここまで近くで見たのは初めてだ」

「ど、どどうしよう！震えが止まらない！」

「おおっ落ちち着けけけけ。まだ始まったたばっかしだぞ!？」

穴を潜り抜けてきた巨人を目の前になると、コニーとトーマス、ミーナは震えが止まらなくなった。

死神が目の前に居るのだ。

いくら誓いを立てても実際に災厄に遭遇すれば、走馬灯が回り死を恐れて思考が停止する。

サムエルを連れて安全地帯に向かったサシャが羨ましいということしか言いようがない現実。

だからこそ、いち早く動いたエレンの動きに付いていけなかった。

「駆逐してやるううう！まず一体目！」

エレンは、唯一巨人の弱点であるうなじを狙うべく背後に周ろうとした。感情的に猛進するエレンをあざ笑うように左手を伸ばす巨人。

「頭が高いわよ！跪きなさい！」

ガスを噴出して勢いよく右ひざ裏を斬り付けた影響か、両断できてしまい支柱を失い重心が傾いた巨人は、大きく体勢を崩した。

何が起こったか分からないエレンの鼻を嗅ぎ慣れた香水の香りがくすぐった。

「フローラ!？」

「ミカサやアルミンを悲しませる気!?!何の為に私達が居ると思ってるの!」

エレンを救ったのはフローラであった。

息の合ったコンビネーションで一時期、幼馴染のミカサを嫉妬させたほど慣れ親しんだ関係だ。

彼女は、成績10位内に入れる実力があつたにも関わらず入れなかつたのを皆は不思議に思っていた。

原因は、遊撃隊員の如く立ち回ってしまい部隊をよく抜けてしまう彼女に教官の逆鱗に触れた説が主流になったほどだ。

もし、キース教官がこの有様を見たら、すぐにエレンとフローラの成績順を入れ替える大失態であつた。

「すまねえ！」

「謝るなら後にして！ほらもう傷口が再生を始めてるわ」

フローラの指差す通り、切断した直後にも関わらず既に膝が生え始めていた。

巨人は、弱点であるうなじ以外に攻撃を加えてもすぐに再生してしまふ。

しかも動き回る特性上、大砲で撃破するのは困難である。

そこで、立体起動装置で巨人相手に立ち回り、うなじを狙う必要があるのだ。

「大丈夫、訓練通りやれば勝てるわ！」

「ああ、そうだな！」

大穴の向こうから巨人たちが侵入してくる！

たった一体の大型巨人に手古摺っている場合ではないのだ。

シガンシナ区の悲劇を繰り返すわけにはいかないのだ！

「やってやる！」

エレンが先行して巨人の懐に近づく。

それを見て喰らおうと口を開き両手を伸ばす巨人。

その隙を見逃さず背後に周ったフローラは、うなじを双剣のスナツプブレードで刈り取った。

返り血で紅く染まる彼女は、気にもせず死体から離れてエレンの傍に舞い降りた。

「オレ達でもなんとかなった……！訓練通りやれば勝てるぞ！」

「習っても実際、目撃するまで信じられないですわね。死体が蒸発するなんて」

フローラが仕留めた巨人の死体は瞬く間に灰のように崩れて霧散していく。彼女が浴びた返り血ですら、すぐに粉になり風によって飛散していった。

「わ、わたしも戦うわ！」

「オレも！参加するぞ！」

「ここで戦果を挙げれば堂々と肉が食えるしな！」

今まで巨人の認識は、無敵の存在であった。

だが、死ぬということは無敵ではない。

巨人絶対一匹残らず駆逐する気満々でいる二人に鼓舞激励され参戦していく固定砲整備4班。

しかし、エレンはその先を見ていた。

巨人を多く通れるようにする為に穴を更に広げた超大型巨人。

壁を破壊できるあいつを倒さなければ、平和にならないからだ。

「行くぞ！」

「「「おう！」」」

瓦礫を回避して臨戦状態の4班。

人類の領域に土足で踏み込んできた二体の巨人に熱い歓迎会を行なった。

3話 頼むから囿になつて死んでくれ

エレン・イエーガーは困惑していた。

全ての元凶、超大型巨人に向かつていったのは覚えている。

熱気を帯びた蒸気を噴出されて空振りしてしまい、うなじを削ぐ事ができなかったのは確かだ。

だが、蒸気が晴れるとどこにも超大型巨人の姿は見えなかった。

「おい！エレン！超大型巨人を討ち取ったのか!？」

「違う！逃げたんだ！5年前の様に！あとちよつとだったのに！」

やっと念願の1つである超大型巨人を討ち取れるところだった。

逃がしたせいで、また同じ出来事が発生するという事に彼はプレッシャーに潰されそうになる。

コニーの発言通りにできたらここまで空しくなる事はないだろう。

「何言ってるんだ！オレ達は、動けなかったんだぞ！よく動いた方だ！」
「そうよ！死者無しで5体の巨人を討ち取ったのよ！頑張った！そう頑張ったよ！」

そんな心境を察してミーナとトーマスはフォローを思わず入れた。

落ちこぼれと自覚しており、1週間に1回報告会を開いて協力した結果、兵士になれただけだ。

実際に巨人討伐に動いたのは、エレンとフローラだから誰にも責める事はできなかった。

「フローラもそう思うよな！」

「ええ…でもこれ以上は止められないわ」

コニーのフォローに答えたかったフローラだが、もはやそれどころではない。

壁上固定砲を失い、全員が刃もガスも半分以上消費したにも関わらず既に10体を越える巨人の侵入を許した。

何故か今日に限って50体を越える巨人が破られた門の前に殺到し、辛うじて残った門の大砲で砲兵が侵攻の時間稼ぎをしている状況だ。

「おい訓練兵！何をしてるんだ！超大型巨人が出た時の作戦は決まっているはずだ！」

「「「ハッ！申し訳ございません！」「」」

「速やかに配置につけ！」

「「「ハッ！先遣班のご武運を祈ります！」「」」

兵士として自覚せず、定められた作戦を遂行せず命令違反で独断に行動した固定砲整備4班。

既に作戦は開始しており、慌てて兵団本部の建物へと駆け出して行った。

だが、その後ろ姿を見守った駐屯兵団の兵士たちは、言葉と裏腹に内心穏やかであった。

「なあ、ジェイソン！あいつらをここで失うのは勿体ないよな？」

「そうとも！新兵ですら5体狩れたんだ！俺たち8人なら20体は行けるぞ！」

「そうだな!!」

「さあ！巨人共！これ以上進ませんぞ!!」

覚悟が揺らいでいた駐屯兵団の兵士達であったが、思わぬ新兵の奮闘を目撃しており門を文字通り死守する事を決意。

互いを見合い合った兵士たちは、覚悟を決めて壁外に居る巨人へと飛び掛かった。

その20分後、門の正面で応戦していた砲兵たち以外の兵士は全滅した。

新兵を叱ったはずの先遣班は、同じように作戦を無視して独断で行動を取ってしまった結果、想定より早く全滅したのだ。

「実戦経験が豊富な調査兵団は運悪く出払っている！」

「だからどうしたというのだ！街を守るのは我ら駐屯兵団の仕事！壁の修復と迎撃の準備は進んでいる！」

「お前達、訓練兵も他人事ではないぞ！卒業演習を合格した時点で立派な兵士だ！」

「兵士になった以上、敵前逃亡したら即刻死罪だ！覚悟して任務へ当たれ!!」

「「ハッ!!」」

「解散！」

お偉いさんによる時間を無駄に消費するだけの激励の演説が終わった瞬間、全員持ち場に着いた。

「おいアルミン大丈夫か！」

「ねえエレン、巨人と戦ったんだって？」

ボンベに繋がるバルブを閉めるスパナの手元が震えるアルミンの姿を見たエレンは駆けつけた。

だが、いざ話しかけると喉から出かかった言葉が唾と共に飲み込んだ。

奴らなんて大したことない！うなじを切れば死ぬんだ！

本当は、そう伝えなかったが、伝令兵から先遣班の全滅の報告が相次いでいた。

作戦では前衛部と中衛部、後衛部の3つに分かれていたが既に中衛部が最前線になっていたのだ。

「ああ、みんなと協力して倒した！みんながいれば倒せる敵なんだ！」

「でも穴を防げなければこの街は放棄されるんだよ!？」

「ああ分かってる！」

「ウォール・ローゼが放棄されるのも時間の問題だよ！穴がある以上、いつか突破される……」

「アルミン!!!」

エレンは、アルミンの名を力強く呼ぶ。

アルミンは、親友の心情を察したと同時に手元の震えが止まった。

「ごめん」

「いや、オレもお前の気持ちを察することができなくてごめんな」

「ちよつとエレン良い？」

すると、ミカサがいつも以上に深刻な顔をして耳元に呟いてきた。

「戦闘で混乱してきたら後衛部にいる私の所に逃げてきて」

「ハアツ!!何言ってるんだよ!?!オレとお前は別の班だろう!?!」

「緊急時に筋書き通りに行かない物よ、既に前衛部は壊滅状態だし」

ミカサの言う通りであった。

既に兵団本部の建物の眼前まで巨人が攻め込まれているのだ。

住民の避難など間に合っていないどころか、避難民の居る場所が戦場になっている有様だ。

だけど、ミカサの甘い思惑に乗れば結局、5年前と変わらない。

「でもオレは逃げない！」

「うん、やっぱりエレンには敵わないわ。でも約束して！死なないで……」

「分かった約束する」

「ミカサ!? 僕は放置なの!?!」

「ゴメン、アルミンあなたも死なないでね！」

ミカサはアルミンに抱擁してから握手をした。

もちろん、同じようにエレンにもやった。

大事な幼馴染でもはや家族の仲である3人は絶対に死なない事を誓った！

「畜生!! なんで今日なんだ！翌日なら内地に行けたのに！」

「もう！男の癖に何度も細かい事を気にし過ぎよ！早く腹を括りなさい！」

「なんだとフローラ!?」

「同期で一番、立体起動装置の扱いが旨いんだから貴方が前に出なきや始まらないでしょー!」

「うるせええ! お前は巨人討伐経験したからって調子に乗るな!」

フローラとジャンが口喧嘩しているのを見て、自分たちって凄いなと思う幼馴染組であつた。

見かねてライナーが仲介してその場を収めたが、駐屯兵団の兵士ですら揉めているのだから誰もが不安を感じていることであろう。

内情は、ミカサがエレン達に抱擁した所をジャンが目撃して、嫉妬心から溢れる怒りでフローラに喧嘩を売ったのが原因だったが。

「ハンナ! 僕は君を! 絶対に! 守り切ってみせるよ!」

「フランツ! 愛しているわ! まだ両親に貴方の事を紹介してないだもん! 死ぬ訳にはいかないわよね!」

空気が読めないラブラブな二人の会話に全体の空気が凍り付き誰もがこう思ったの

だろう。

リア充、派手に爆散しろと！

ただ、混乱を治めて皆の心をひとつにまとめた点については、上官たちは内心感謝をしていた。

「おいフローラ大丈夫か!？」

「ライナー、心遣い感謝するわ。でもマルコの方に伝えた方が良いんじゃないの?」

「それを言うなら顔が真っ青なベルトルトに言っただけよ」

「おいおいベルトルトは、潜在能力なら俺以上なんだぞ!まだバテる訳ないじゃないか!」

「やめてよ、みんな!ここは戦場なんだよ!」

訓練兵 31班は、班分けに失敗したのか僅か10分で4体の巨人を葬っていた。

明らかに過剰戦力であり、各員が1体ずつ躊躇いもなく葬ったその雄姿は、訓練兵で構成された班では間違いなく最強だった。

唯一討伐できていないマスコットキャラと化したマルコであったが、それ以上に影が薄いベルトルトはアニに寄せて並走した。

「アニは大丈夫？」

「ああ、だからそれ以上密着しないでくれない？ぶつかって損するのは嫌だからさ」
「でも…」

「分かったからマルコの援護に行ってくれない？あいつを放置していると心配だから」

アニは、巨人を真つ先に討伐して貢献した幼馴染のベルトルトよりも、並走するだけで精一杯のマルコを評価していた。

ほつとけば、何でもできる影が薄い奴と、皆から愛されるマスコットキャラポジションを確保した男。

どっちが大切なんて分かり切った事だ。

自身の扱いを改善したくて奮闘しているベルトルトには悪いが仕方がないって奴だ。

「みんな！巨人が！巨人がこつちに来たよおおお!？」

「よし、お前ら！マルコに戦績を譲るぞ！肘は俺とフローラ！アニ達は膝を頼む！」

「ああ、分かったよ！やればいいんでしょ！やれば！」

「マルコ行きますわよ！」

「待つてええええ！心の準備ががが……」

あたふたしているマルコを尻目にフローラとライナーが左右に分かれて巨人の上半身へ突撃していった。

「いくぞフローラ！」

「えええ！ぶっ倒して差し上げましょう!!」

ガスを噴出して加速した二人は見事に15 m級の巨人の両肘を切断してみた。動きが鈍った隙にすかさずアニとベルトルトは、両膝を切断し、巨人は勢いよく民家に激突してうつ伏せになった。

「ふーん、ベルトルトにしては頑張った方だね」

「ええっ!?!」

「今だ！うなじを狙って斬り付けろマルコ！」

「高低差で訓練通りやればできますわよ！」

扱いが酷いベルなんとかさんは、アニに抗議をしようとしたがフローラとライナーの声援に打ち消された。

一方、自分の名を連呼され、頼れる仲間達の声援を無視できるほどマルコは女々しくなかつた。

男は度胸と言わんばかりにマルコは、民家の屋根から落下して巨人のうなじを見事に切斷した。

だが、焦ってアンカーを射出し忘れたので、そのまま地面にぶつかるといわけにもいかず、ライナーによって華麗に回収された。

「見てたぞ！よくやったなマルコ！」

「あ、ありがとう！みんなのおかげだよ！」

「そうだ！記念にマルコとハイタッチやりましょう！アニも手伝って下さい！」
「あーしようがないな、一回だけだぞ」

ベルトルトは、4人がハイタッチするのを呆然と見るしかできなかつた。

なんか班に所属してきた二人が自然と幼馴染たちと打ち解けていて戦士候補生から一緒だった自分が蚊帳の外になっているからだ。

するとフローラが視線を送ってきて『早くやれ』というジエスチャーを送ってくるのだから、取り残された者にはたまったものではない。

「…おいベルトルト何をしてるんだ！早くやれよ！」

「全く、いつもは空気が読める癖に肝心な時だけ読まないんだね、あんたは…」

「いいよいいよ！みんなの気持ちでいっぱいだからさ！」

「マルコ、ベルトルトを甘やかすと、ただの凡人になっちゃうから叱るのも一つの手ですわよ？」

フローラの視線を無視したら幼馴染に勘付かれ、失望された視線を向けられてしまった。

一仕事してきて命ガラガラでライナーたちと合流したベルトルトが泣く一歩手前なのは、しょうがないって奴だ。

「よし、フローラはコニーたちを援護してくれ」

「4人で大丈夫ですよ?」

「ああ、見たところ巨人は少ないみたいだしな!それより女神のクリスタが心配で頭が一杯なんだ!!」

「はいはい、分かったわ。ライナーの好意アップ作戦に協力しますわ」

「ありがとうフローラ!やっぱお前は親友だぜ!」

親指を突き立てて頼れるニスガイを通り越して気持ち悪い男になったライナーたちと別れてフローラは、コニーたちの方へ向かった。

彼女は、手元にある地図を見ながら屋根伝いに飛び回っていると、判別できないほどの肉塊が地面に転がっているのを見つけた。

巨人は、人だけを喰らうが中途半端に消化した後、猫の毛玉のように吐き出すのだ。

5年前の悲劇で発覚した衝撃的事実は、兵士全員にトラウマを植え付けたほどだ。

「獣未満の畜生化け物め、わたくしが必ず鎧の巨人と共に殲滅して見せますわ」

フローラは改めて巨人に対して殺意と怒りが増した気がした。

思わず目の前に居た7m級の巨人のうなじを通り魔の如く、刈り取って更に口角が吊

り上がってしまう自分に情けなさを感じていた。

そしてコニー班の配属場所には距離があつたが、目標となる29班の声が聴こえてきたので顔を元に戻した。

「おいジャン！何やってんだよ！」

「くそくそくそ！トリガーを触つても動かねえんだよ！」

「ジャン！向こうから巨人の群れが来る！早く早く！」

「クリスタ、こいつを見捨てようぜ！いつも喧嘩ばかりしてるこいつにはお似合いの最後だぜ」

ジャンは焦っていた。

トリガーを引こうが押そうがアンカーがびくとも動かなくなつたのだ。

翌日には、内地に向かつていき憲兵となり安定した生活を待つてははずだった。それでも、ここさえ乗り越えれば巨人と無縁の場所に行けるのだ。

必死に訓練して成績上位10位内に入り憲兵になれるというのに、これほど不条理なことはない。

「動けポンコツ！うごけて！おい！メンテナンスしたばかりじゃないかこの野郎!!」

コニーたちの無駄に響く叫び声で巨人達が近づいている。

地面が揺れ奇声がどんどん強くなっており、頭が一杯になってきている。

ところが急に周りが静かになり背筋が凍り付き身体が震え始めてジャンは、死が刻々と迫ってくる感覚を嫌ほど実感できた。

だからこそ、必死に足掻くが一度解体してメンテナンスをしないと、どうしようもないのも分かっていた。

「ジャン！囿まれてるぞ！」

「うるせー！早く援護しろ！」

「そうは言っちゃって……」

コニーが見渡すと民間人と兵士の死体が至る所に転がっておりどこかしらが大きく欠損していた。

巨人の群れに飛び込めば、彼らと同様の死になるのは頭の回転が悪い彼にも瞬時に理解できた。

「何をしているの!？」

「ジャンの立体起動装置が壊れたの!」

「はあ!?! 立体起動装置が壊れたジャンなんて、エレンと体術を競い合うくらいしか長所がないじゃない!」

喧嘩別れしたフローラの声がジャンの鼓膜を振動させ、彼のまぶたには涙が零れ墮ちてきた。

ミカサにエレンが抱き着かれて嫉妬した彼は、心配してくれた数少ない女友達をボロクソに口で貶めた。

彼女との出会いは、優秀なジャンに立体起動を指導して欲しいと、ミーナとトーマスを引き連れて懇願してきた時であった。

最初は拒否したが、自分が家族以外に褒められるのは悪くないので最後まで面倒を見た。

「おいフローラ! お願いだ! 助けてくれ!」

「あなた、さつき私に魅力がないだの、兵団一の体臭を誤魔化す為に香水を使ってるとか

散々罵倒しましたわよね!？」

「ああ、そうだ! やっちまったよ! ミカサと仲良くしているアイツに嫉妬したんだよ!」

異性と親しくしたのは母親とこいつくらいものだ。

だから頼れる男として必死に見栄を張ったが、すぐにその計画は破綻した。

「おい! ジャン坊! かあちゃんを泣かす気か!？」

「コニー、揶揄っている場合じゃないでしょ!？」

「でもよフローラ! こうしないとあいつは、本気出さないんだぞ!」

ジャンは、母親との手紙でコニーとサシャに揶揄われた時も彼女が傍にいたから見栄を張る為に、カツとなって暴力を振るうことを避けられた。

女にモテない性格なのは実感できているが、それでも自分なりの幸せの家庭計画は作っている。

キース教官ですら、仲良く二人で雑談できるほどのコミュニケーション能力の彼女が居れば、ミカサを説得できるかもしれない。

傲慢かもしれないが、もう少し仲良くなればやってくれると信じていた。

とにかく彼女ができれば、少しは照れ臭いお節介がなくなると思ったから。

「こんなところで死んだらエレンに笑われるわよ！」

「もういいじゃねえか、こんな奴ほつといて行こうぜ」

「ユミル、救える命を見捨てる事には……」

「じゃあ一緒に死ぬってか？」

「だめ、私にはまだ……」

この班の良心であったクリスタの声のテンションどんどん下がっていた。

既にこの場に居る全員が立体起動で逃げられるほど楽観視できない頑固な包围網ができあがっているからだ。

更に青年男性一人抱えてこの場を切り抜けるなんて巨人にご飯を無料で提供するものである。

「フローラ！すまねええ！立体起動装置を治すまでの時間を稼いでくれ！」

「それをしてわたくしに何かメリットがあるの!？」

「生還して母ちゃんに逢って、できた思い出を全てお前に打ち明ける！」

「それだけなの!？」

「今晚の食事を全部持つていけ！」

無理難題をフローラに吹っ掛けた。

この中で囿になって生還できるのは彼女だけしかいないのは立体起動を教えたジャンが一番理解していた。

彼女は、逃げるかのように29班と離れて遠くの屋根に着地した。

「くそ、駄目だったか」

賭けは全て外れた。

来世は、もう少し気配りになる人間になることを決意しジャンは瞼を閉じた。

「地べたを這いずるしか脳がない巨人共!ここに美味しそうなお肉があるのに無視するなんてどれだけ眼が節穴なの!？」

「おいフローラ!むぐ！」

「バカ…黙って見てるんだよ…」

ジャンは信じられなかった。

喧嘩して終わった彼女が、双剣を刃こぼれするほど勢いよく何度も衝突させ、巨人の注意を惹いていた。

「3体程度ならわたくしの敵ではなくてよ！ほらほらこの美味しそうな肉体は誰が頂けるかしら？」

「さあさあ、世界でもっとも美味しいこの肉体を手に行けるのは誰かしらねーまあ……」

しかし、これ以上フローラの挑発が続くことは無かった。

10体の巨人が全速力で彼女の方に向かって飛び掛かってきたからだ！

余談であるがライナー班の付近に巨人が少なかったのはコニー班に誘導されていたからである。

「ああああああ！無理無理！いくらわたくしが魅力的だからってええええええええ！」

さすがに10体同時相手は無理と本能で理解している彼女は全速力で逃げていった。命懸けの追いかけてこの開幕である。

捕まえた時の賞金はないが、程よく引き締まった肉塊は巨人共に幸せな味を提供してくれるだろう。

「すまねえ、頼むから囿になって存分に時間を稼いでから死んでくれ」

「お前、ホント酷いな…」

「コニー、お前には分からんだろうな」

ジャンが培った立体起動の技術を全て彼女に叩き込んだのだ。

彼は知っていた。

彼女がああの程度で死ぬ技量ではないと、それはともかく犠牲を無駄しない為に立体起動装置の修理を始めた。

4話 目覚めてしまった力

「ああああ！しつこい男は嫌われますわよおおお!!?」

自称、世界で一番美味しいお肉こと、フロラ・エリクシアは全速力で逃げていた。相手選手は馬並みに早い巨人10体である。

命懸けの追いかけてここが開幕して間もないが決着は近い。

「ジャン！絶対に赦さないんだからああああああ！」

立体起動は、こういった街中で真価を発揮するものである。

平地で戦うことが多い調査兵団はともかく、ここなら撒けるはずであった。

「しつこいのよおおおお！せめて何体か諦めなさいよおおお！」

障害物競争なんてなんのその、逆に考えるんだ。

障害物を破壊して追いかけてこをすればいいんだと言わんばかりに建設物を無視して直進する巨人たち。

よつぼど、神がフローラを亡き者にしたいのか、疲れて止まる様子はない。

彼女は考えずに逃げ回っているせいで、味方部隊が居る場所から遠ざかってしまい援護には期待できなくなっていた。

壁からトロスト区を見下ろす駐屯兵団司令官、ドット・ピクシスは今年一番の憂鬱であった。

慌てて壁を登ったため、スキットルの中身が空っぽなのも大きい、それ以上に戦況が最悪であったからだ。

本来、巨人の侵攻を遅滞戦術で妨害し、その間に民間人を脱出させる手はずであった。

しかし、逃げ遅れた民間人を真っ先に誘導する場所が巨人との最前線になっており、駐屯兵団は総崩れになっていた。

「ピクシス司令！ 救援に送った壁上固定砲整備6班が巨人によって全滅しました！」

「報告申し上げます！兵団本部の建物から「救援の信煙弾」が打ち上げられました！」
「閣下！民間人の避難の誘導に当たっていた技術3班が全滅しました」

そして部下から上がってくる報告は、戦況が好転した報告などなかった。

前任者であるシガンシナの駐屯兵団司令官は、さぞかし苦しんだことだろう。

「アンカ、この戦況をどう見る」

「個人的な意見ですが、民間人を切り捨てて撤退命令を下し残存兵力を回収すべきかと」

「そうじゃのう…」

既に巨人共を壁の隅に誘導する兵力などなく、女参謀であるアンカ・ラインベルガーの意見がもつともマシな妥協策であることは間違いないだろう。

だが、それをすれば、駐屯兵団の信頼と信用は調査兵団より突き抜けて落ちることもある。

希望を失った民衆によって起こされる内戦の引き金になりかねない事は、絶対に避けなければならない。

人類の守護者である駐屯兵団は、決して善良な市民を見捨ててはいけないのだ。

「ピクシス司令！」

「どうしたグスタフ!？」

「壁内に居た巨人の大群がこちらに向かって来ております」

部下から望遠鏡を借りてピクシスが確認すると、なんと一人の兵士が15体を越える巨人を引き連れて壁へと進撃していた。

もちろん、壁の隅に誘導する作戦は、民間人の脱出が済んだ段階後であり明らかに命令違反であった。

だが、これを利用すれば少なくとも付近の巨人を一掃し、一時的な安全地帯が確保できるチャンスである。

「グスタフ、あの巨人の群れを殲滅するぞ！腕利きの砲兵部隊を呼んでこい」「ハッ！」

願わくば、勇敢な兵士ができるだけ多くの巨人を惹きつける事をピクシス司令は祈っていた。

まだ精肉になっていないフローラは既に限界を迎えていた。後ろを振り返る度に巨人が増えてくる有様で自暴自棄にならないのが奇跡なほどに。しかし、逃げ回っている間に壁へと近づいている事に気付く。

「あああああああー！」

あそこまで行けば、壁上固定砲で巨人たちを一掃できる。ただそれだけで、アンカーを次々と刺していく。

しかし、いざ壁に近づいた時、壁にアンカーを指すまでの障害物が無い事に気付いた。そして運が悪い事に15m級の大型巨人が立ち塞がっている。

「う」

だがもはや気にすることは無かった。

文字通り、捕まったら最後の命懸けな追いかけてっこをしている。逆に言えば、捕まらなければ巨人に触れても良いのである。

「あああああ！」

アンカーを射出し大型の巨人の鼻に突き刺しワイヤーを高速で巻き取り始める。相手から見れば、勝手に口の中に入ってくる豪華なお肉に見える事であろう。

思わず微笑んで口を大きく開けて待ち構える巨人を見て、追跡してきた巨人は更にスピードを上げて飛び掛かってくる。

しかし、フローラは自殺したわけではなかった。

ギリギリまで惹きつけた後、アンカーをわざと全部外して落下しながら身体を大きくうねって方向転換を行なった。

そして巨人の咀嚼を回避した実感が湧く前に右鎖骨に1つだけアンカーを打ち込んでワイヤーを巻き取る。

巨人の背後を回る軌道をとって大円筋にアンカーを打ち込み身体を捻りながら大きく回り込んだ。

その瞬間、身体中に掛かる圧力で内臓を圧迫し、いつの間にか音を失い目の前が暗く

なった。

「ガスの消費が激しくて、訓練時間が短くなっちゃってしまっ……アドバイスして頂けませんか？」

「そうだな、一瞬だけ強くガスを噴出するんだ！そして慣性を利用すれば消費が少なくて済むぞ」

「ありがとうジャン、これでわたくしは更なる高みに進められるわ！」

「そういえば、教える前のお前は、なんか空中機動で無駄に身体を捻ったよな？身体痛めるだけじゃないか？」

「空間把握能力が無いと上達しないと思って、どんな姿勢ならどう動くのか調べていたのよ」

「お前、よく死ななかつたな!？」

「鎧の巨人を討伐するまでわたくしは死ねませんので」

一瞬、ブラックアウトでフロォーラが視界を失った瞬間、彼女にとって懐かしい光景が見えた。

今となつては、無意識にどう動けば、巨人だけを使って飛び回るか研究していたかも

しれない。

とにかく地面に激突する前に交互でアンカーを入れ替えることで一度も着地する事もなく大型巨人の後ろに回ることができた。

それで終わりという事もなく、すかさず彼女は近くにあった街路樹にアンカーを射出して茂みへと隠れた。

見事に【壁】になってくれた大型巨人は、目の前から迫ってきた巨人達の激突に耐えきれずに身体が崩れた。

20体を越える巨人たちは、ドミノ倒しのように積み重なって身動きがとれなくなっていた。

「ハアハアハア……よおし！」

右手の拳を握りしめてガッツポーズを行なったフローラは呼吸が少し落ち着くまで待機していた。

そして、50mの壁をよじ登ろうと見上げた。

そこには、拍手する観客や彼女の生還を喜んでくれた駐屯兵団の兵士や同期たち。

少しは期待していた彼女の眼前には、そんなものなど映っておらず、ただ榴弾の雨が
見えるだけだった。

「お待ちください！誘導した兵士の離脱が済んでおりません！」

「奴らが動けない今がチャンスだ！榴弾！撃ち方始めええええ！」

「撃て撃て!!」

ピクシス司令は、巨人同士が激突して動けなくなった瞬間を見逃さずに砲撃の指示を
出した。

うまく誘導した兵士には悪いが逃して兵士100人を死なせるより兵士1人ごと巨
人共を吹っ飛ばすことにしたのだ。

「やめて！この子だけは！このぎゃあああつが！」

「嫌だ！死にたくない！兵士になったのは家族を……ごぶっ!!」

「フランク！危ないいいいむがあっ!!」

「え？えええ!!嘘だろう!!ハンナ!!ハンナあああああ!!!」

意識が曖昧なフローラであったが、声が四方八方からはつきり聴こえてきた。

嘆き、悲しみ、憤怒、絶望、自棄、自殺、悲鳴などあらゆる負の感情から発した声が彼女の脳内に響かせた。

「……煩いですわ」

地獄にしてはやけに生ぬるく思わず臉を空けるとそこは、黒煙が立ち上り肉が焼ける匂いがする戦場であった。

彼女は、四肢と顔半分を喪失した巨人たちに挟まれた隙間に運よく気絶していた。

皮肉にも巨人によって爆炎と衝撃から守られたが敵なのでさっさと討伐をしなければならぬ。

フローラは、空気抵抗であり重みであったスナップブレードを全て捨てたので、その巨人たちに止めを刺すことができなかつた。

「運悪く、こいつらを殺せないわ、ああ残念よ。本当に残念」

視界が霞みながらも壁にアンカーを射出し、後ろを振り返らずに駆け上っていく。

キース教官に罵倒されながら、しごかれた毎日に比べればこの程度の垂直な壁などな
んの障害にもならなかった。

「おい！二体も残っているぞ!？」

「次弾装填を急げ!!」

「ハッ!!」

「よくやったお前たち！この調子で頼むぞ！」

黒煙が晴れた事で撃ち漏らしに気付いた兵士たちが次弾装填を急いだ。

その傍らでピクシス司令は、久しぶりに人類の勝利の一報を受けて感動で震えてい
た。

それと同時に見捨てた兵士への罪悪感で胸を締め付けながらも兵士達に激励の言葉
をかけていた。

「ワイヤー音!? 下からか!?!」

大戦果に信じられない兵士たちは歓喜していたので高速で下から這い上がってくる兵士に気付くことは無かった。

ピクシスだけが、気付いて慌てて邪魔になる兵士たちに移動の指示を下そうとした。

「おぬしら!そこを…」

「退いてええええ!きやあああああ!!!」

「ほげえええええ!!」

「ぬわっー!!!」

司令官の指示は間に合わなかった。

勢いよく壁上に飛び出してきたフローラは、歓喜に震える観測手二名を巻き添えにして衝突した。

想定外の事態に衝撃を受けた兵士たちが事故現場に急行した。

「痛ええええ…」

「なにが…」

「うっ…痛い…失敗した」

ガス切れに焦ったフローラは、壁を越える直前のガス噴出の勢いで壁上に飛び出そうとした。

そのせいか、ほとんど勢いが出ておらず兵士達を巻き込みながらも激痛に身動きとれない程度で済んだ。

「おい貴様！何をやっているんだ!？」

「なにつて…壁上に登ってきました」

「持ち場を放棄してここにきただど!?!脱走兵か貴様は!?!」

「よせ！グスタフ。貴公は、囷になってあれだけの巨人をここまで連れて来れるのか？」

「…申し訳ありません」

グスタフが怒りで斬り付けるのを制止したピクシスは、壁上に飛び出してきた兵士を観察する。

栗色の髪を後ろで束ねた三つ編みのおさげがチャームポイントの疲労困憊で喘いでいる女訓練兵であった。

スナップブレードは装備しておらず、土埃と汗で汚れた顔が真っ青の状態で仰向けで倒れていた。

「驚いた…訓練兵か!？」

「ふむ、訓練兵なら作戦を勘違いしてもしょうがないのう。なあアンカ？」

「そうですね、例外で見逃してあげましょう」

さすがにこの状態で戦場に戻れというのは訓練兵には酷であろう。

そう思ったピクシスであるが、彼女がこちらに手を伸ばしている事に気付く。

「…ください」

「済まん、もう一度大声で言ってくれないか？」

「ガスボンベとスナップブレードをください！仲間が！同期がまだ戦っているんです！」

「正気か!?!そんなボロボロな状態で、また壁内に行くのか!?!」

「補給をしたらすぐにここから飛び降りて配置場所に向かいます！ですから補給物資をください!!」

その場にいた駐屯兵団の兵士たちは耳を疑った。

自分たちに殺されかけた事を抗議するのでもなく、奇跡の生還を果たして恐怖に怯えている訳でもなく再び、あの地獄の釜の蓋が開いた悪夢の場所に行こうというのだ。

「いいだろう！高級士官用の予備品をもっていくといい」

「ピクシス司令!!」

「構わんだろうアンカ?」

「あーもうどうなつても知りませんよ!!高級士官用の装備を新兵に渡すだなんて!!」

「わしが全責任をとる。ある分だけここに用意しろ」

「すぐに手配致します」

「閣下、ありがとうございます」

ピクシスは別に彼女の決意に心を打たれたわけではなかった。

ただ、昔に大暴れしていた友人とそっくりでつい手を貸して見なくなつたからだ。

「中々良い面構えをしておるな。君、所属と名前は？」

「訓練兵 31班 フローラ・エリクシアですわ！」

「フローラか、良い名だ。機会があったらまた逢いたいものだ」

キース・シャーデイスは彼女の教官だ。

元調査兵団の団長を後任に譲って後進を育成していると聞いていたが、彼の意志は彼女が引き継いだようであった。

「ところで訊きたいことがあるのだが？」

「はい、わたくしでよければ何なりと」

「戦場で超絶美女の巨人を見なかったか？」

「えっ!?! いえ見てませんわ」

「そうか、残念だ。美女だったらわしは食われても良いのだがな」

彼女が即否定したことで美女の巨人は居ないという空気が広がった。

また始まったよと言わんばかりの呆れ果てた兵士たちの視線を向けられるが、生来の

変人と称されるドット・ピクシスに効果はない。

「司令、用意ができました！」

「ボンベ6本、剣は1人分か」

「急いで掻き集めてきましたが、こんなにいるのでしょうか？」

「だそうだが？」

「はい、4本背中に背負ってきます」

てきばきと装備していく手さばきは、鬼教官のおかげであろう。

先ほどまでは死にそうな顔をした彼女は凛々しく微笑んだ。

「戦場に戻ります！ありがとうございます！ございました！」

そして敬礼をし、すぐに後ろを振り返り走って壁内へと飛び込んでいった。

「なんで……」

一方、アルミンは戦意喪失していた。

彼はただ、仲間が巨人に食われるのを座り込んで見ている事しかできなかった。

「どうして」

訓練兵 34班は壊滅した。

トーマス、ミーナ、エレンは門の攻防戦で5体の巨人討伐経験があった為、過信していた。

彼らはすぐに出撃する気満々であったが敷地内に巨人の侵入を許したため、足止めを喰らっていた。

「巨人を多く狩れるか勝負だエレン！」

「言ったなトーマス！フローラより多く狩ってあいつを驚かせようぜ！」

いぎ、出撃すれば救援の信煙弾が林のように立ち昇っており、もはや新兵たちではど

うしようもない状況であるにも関わらず、討伐経験という正常性バイアスに囚われていた。

その結果が、トーマスを食った奇行種を怒りに燃えたエレンが単独で討伐しようとして家の影から奇襲してきた巨人に左足を食い千切られた。

それを見て座り込んだアルミンを残して突撃した3人はミーナを残して速攻で喰われた。

「いやああああ!!やだやだ!!」

ミーナ・カロライナは、穴と言う穴から液体を垂れ流して必死の抵抗をしていた。

こんなはずではなかった。

無念にも死んでいった者達もそう思っていただろう。

キース教官に家畜小屋の豚未満と評されて足掻いて兵士になった結果がこれだ。

「あつ」

捕食する前に覗き込んで舌で舐めまわしてから捕食する癖がある黒髪の巨人はつい

に口を開いた。

鉄臭くて高熱の吐息が嘔き付け垂れてきた唾液が彼女を包み込む。

これで自分は人生という舞台から強制退場してしまう。

彼女が最後に思い浮かべたのは、頼れる親友の笑顔だった。

「助けてフローラああああああ!!」

決してここに居るはずのない親友の名を叫んだ！

その親友がキース教官を上回る凄まじい形相で巨人の背後に映った。

「ミーナになにしてんの!!この下衆がああああああ!!」

フローラは勢いを誤ってうなじどころか、首さえも斬り落とし一緒にぶっ飛んでいった。

そんな光景を目撃してなんとも現実味がないと思った。

その場にはいないはずの親友の名を叫んだら救出に来てくれたなんてありえない事であつたからだ。

「ミーナ！起きてる!?!」

「えっ!」

「ああよかったわ。何度も声をかけたのに返事をしなかったから心配したのよ!」

心配そうに顔を近づけている頼もしい親友が居た。

それで安心したと同時に目頭が熱くなつて彼女の胸に顔をうずめて香水と体臭を思う存分堪能しながら大泣きをした。

「ミーナだけでも助かつてよかった」

フローラは、トーマスの“声”が聴こえてきた方向に急行したが、辿り着いた時には声は聞こえなくなつた。

代わりにミーナの“声”を頼りにしていたら巨人に食われる寸前だった為、強襲した勢い余つて自分が吹っ飛んでいったのは想定外であつたが。

正直、アルミンの悲鳴が気になつていたが親友が放心状態で放置できなかつた為、反応があるまで呼びかけていた。

「ごめんなさいごめんなさいトーマスが…エレンが!!」

「ミーナは悪くないわ。だから一回深呼吸しましょう」

「ああああ!!もう嫌ああああ!どうしてこうなるの!?ああああ!!」

「ミーナ、これあげるわ」

「なにこれ」

とにかくミーナは大声を出して恐怖から逃れようとしたら、すかさずフローラから何かを貰った。

「私が使っている特製の香水よ!リラックスハーブっていうのが入っていて寝る前にか付けると安息な睡眠が得られる成分が入ってるの!」

「なんで?」

「だって貴女、身体中が汚れているじゃない!匂いを誤魔化すのはちようどいいわよ」

ここで失禁してのを気付いて顔が真っ赤になるが無残な死体を山ほど見てきたフローラからすればどうでもいいものであった。

とはいえ乙女たる者、これ以上ミーナの自尊心を踏みにじられるのは許せなかつただけだ。

「ううっ」

「ほらーいい香りでしょ？ 試しに首に塗ってみる？」

「ありがとうフローラ」

「だってわたくししたち親友でしょ？」

「ええそうね!!」

密かに自慢であつた両方のおさげで遊び始めたフローラを見て少しずつパニックが収まつてきた。

どんどん冷静さを取り戻すうちに1つ疑問が思い浮かんだ。

「ねえ、どうして私がここに居るのが分かつたの？」

「声」が聞こえたの。トーマスやエレン、ミーナ達の悲痛な叫びが！ 悲鳴が！

親友ではあつたが、これだけ広い戦場でも聞き取れるほど聴力が良いのは初耳であつ

た。

でもそんなことはどうでもよかった。

ガタガタ震える哀れな子豚に救いの神が出現したのだから。

「まだ耳にこびり付いて居るのよ。たくさんの人の声が！でもね、まだアルミンの音が断続的だけど今でも聴こえてくるの」

「私には何も聞こえないわ」

「だから一回、上に居るアルミンと合流して兵团本部に戻ろうね？」

「うん、分かった」

手を差し伸べてくれた親友のおかげでなんとか立ち上がって見せたミーナ。

親友が立ち直ったと実感したフローラは、すかさず一つの質問をした。

「ねえ、エレンやトーマスを喰った巨人の特徴って覚えてる？」

その質問を受けてミーナは、頼れる親友の顔を見た。

そこには、復讐に燃える狂気染みた瞳と悪魔のような笑みを浮かべた化け物が居た。

いった。

自分より優秀な奴らが成す術もなく死んだのだから、勝てるわけない。

「なんだ急に暗くなつたあ!？」

恐る恐る見上げると笑顔でダズを見ている15m級の巨人の姿が！

お前の浅はかな考えなんかお見通しと言わんばかり襲い掛かってきた。

「うわあああああ！やめてくれえ!!」

抵抗空しく親指と人差し指で背中を摘み上げられて口元に持つていかれた。

家族を守るために兵士になったダズは、兵士になった雄姿を家族に見せる事もなく散るだろう。

「邪魔!!」

女性の声だろうか。

なんだか聴き慣れた声が聴こえてきたと思つたら急に巨人の力が抜けてなんとか脱出できた。

「何が起こつたんだ!? つてフローラじゃねえか!」

「あらダズ! こんな所で逢うなんて奇遇ね! おひとり様で絶景でも眺めていたの?」

「お前!! 俺がどれだけ! 苦労して!」

「はいはい、もう行くから機会があつたらまた逢いましょう」

彼は訓練通りに不意打ち時の落下に対処したら顔馴染みの女に話しかけられた。

フローラ・エリクシア、とりあえず彼女に任せておけば安心できる。そんな女であつた。

初めて逢つたのは、夜間特殊訓練時に同じ班員になつた時である。

コニーやサシヤなどの問題児をまとめあげて、ビリから1位の班となり唯一、肉を頬張れた記憶がある。

余談であるがキース教官は、問題児を1班にまとめといて見せしめに叱責する予定だつた。

ところがビリから1位の班になるといふ予想外の快挙を受けて教官たちに出される

予定だった肉料理をフローラ班に全て提供したのだ。

即座に他の者をまとめあげて能力を引き出す者は多くない。

フローラとマルコ、その稀有の素質を持っていたと元調査兵団の団長として評価した。

「おいちよつと待つて！生きて帰れるのか!？」

「ええ、兵団本部の建物に向かう予定ですわ」

「バカ！あそこには巨人がわんさか居るんだぞ!!」

「でも、撤退命令が出ていない以上、ガスが尽きかけているでしょ？みんな集合しているはずよ」

言われてみれば、撤退を知らせる鐘が鳴っていないのに気付いた。

そして彼女が自分を救う為に巨人を討伐したのが分かった。

「でもよ…俺じゃ無理だ」

「じゃあ親御さんにダズは勇敢に逃げて袋小路に追い詰められて自爆したとも言っておくわ」

基本的に彼女は同じ姿勢で同期に話しかけるが、唯一ダズだけ扱いが違った。

「分かったよ！行けばいいんだろう！その代わり！俺を守ってくれよお！」

「大丈夫！わたくしの命令に従っていれば絶対に死なせないわ！」

何の根拠で自信満々にここまで言えるのか分からない。

ただ、あいつに付いて行けば生還できると不思議な確証があった。

というか、扱いが違うのは卑屈な性格を熟知しており、わざとやっていたのを知っている。

今まで震えていたのに何だか希望が湧いてきたのはフローラの手腕の賜物であった。

「アルミン、ミーナ！ダズも加わるって!!」

「えっ!?居たのか!?!」

「生きててごめんなさい」

「ほら、アルミンが鬱になったじゃないの！謝って！ついでに私にも！」

「なんかすまん、アルミン、ミーナ」

なんだか釈然としなかったが、彼女たちもきつと地獄を見たのだろう。
地獄の中で訓練と同じように振舞っている頭エレン娘がおかしいだけだ。

アルミン・アルレルトは劣等生だった。

座学は訓練生の中でトップだったが、巨人との戦闘にそんな物は役に立たなかった。
ミカサと約束した皆で生き延びるという約束もエレンは守ることができなかった。

何一つ為すべき事ができず、仲間を見殺しにしたと自覚している。

「おい！兵団本部から遠ざかっているじゃねーか！」

「巨人との戦闘をできるだけ回避する為には仕方ないの!!」

フローラを隊長として編成された3人は彼女の背中に必死で着いていくことしかできなかつた。

特に巨人との戦闘は、全て彼女に全振りしないといけない為、絶望的に弱い班である。

「フローラ！左側の離れたところに巨人が居るわ!!」

「念のために迂回するわ！みんなしっかり付いて来て！」

ミーナの報告により急遽ルート変更が決定した。

誰もがフローラの判断に反対しない。

唯一、巨人を討伐できる彼女と逸れれば、命がない事は嫌でも自覚している。

だから戦えないからこそ、索敵だけはしっかりやっていた。

隊長を除く班員は全員臆病だったので、索敵に関して班の中で一番かもしれない。

「目の前に巨人が居るぞ!？」

「こいつは片付けるわ！何があってもこのまま直進して!!」

ガスを噴出して班員を引き離すフローラは、真つすぐに7m巨人へと向かっていった。

道路の脇にある左右の建物それぞれにアンカーを射出して水平移動している彼女は正面対決を望んでいた。

一方、巨人は獲物を発見して走ってきており、臨むところというところだ。

「マジでやる気だ。あいつ……！」

「やっっちゃえフローラ！」

アルミンたちはただ、彼女に言われた通り巨人の居る方向へと向かっていった。彼らができることは声援くらいのものである。

「行きますわよー！」

フローラはタイミングを見据えて、両方のアンカーを外し高速で巻き付けて落下を始めた。

そして巨人が目の前に立ち塞がってきた瞬間、左側のアンカーを右肩に射出して高速で巻き取った。

巨人に対して肉体の内側に向けるように45度回転しつつ宙返りをして、右肩から左アンカーを外す代わりに右アンカーを首に刺した。

見事に噴出したガスの速度を高度に変えた彼女は、綺麗なU字型のシャンデルの軌道

を描いて背後を取った。

何が起こった把握する暇もなく巨人は、うなじを切られてアルミンたちへと倒れ込んだ。

「危なっ!?!」

「えーつと、とりあえず勝ったみたいだね」

「フローラが負けるわけないじゃない!」

一撃で仕留められた巨人は、アルミンたちに一矢報いる事もできずに蒸発していった。

もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな…を直に行く彼女の無双姿を見た3人の中の絶望感が死んでいった。

「すごいじゃないかフローラ!」

「あいつですら成績上位10位に入らんとかどんだけ魔境なんだ…」

「教官が嫉妬したのよ! そうとしか考えられないわ!!」

「はいはい、褒めるなら後にして」

さきほどまでは、ガタガタと震えて自殺願望まで溢れていた3人は、既に気力が回復していた。

再び、フローラが先頭になり左右をアルミンとミーナがカバーをして、技量が低いダズは、フローラの背中を必死に追いかけた。

これなら生き残れるな！

ダズはそう思って、家族に逢った時の事を考えていた。

「ダズ！死にたくないならミーナの所に行つて！急いで！！」

「おおお!?おおう！」

突然、怒声で怒られたダズは、アンカを射出して大急ぎでミーナの所に向かった。

その瞬間、背後で大きな衝撃が起こったので振り返ると奇行種がひっくり返っていた。

10秒でも判断が遅かったら彼は巻き込まれていただろう。

「あ?!ん?!おいおいおい!あいつ!俺を喰おうと…」

「3人は早く行って！この下衆野郎はここで駆逐しますわ!!」
「全く気付かなかった…どうやって奇襲を知ったんだ…」

フローラは屋根の上に立ち止まり奇行種を睨む。
そんな彼女の上を3人は通り過ぎ去っていった。

「本当にこの道で大丈夫なのか…」

「でも僕は、彼女を信じるよ」

「生きてみんなに逢えるなら私は…」

また背後で大きな衝撃を感じて3人が振り返るとすれ違いざまに瞬殺したのだろう。
黒く変色して蒸発している奇行種に背を向けて屋根の上に佇んでいるフローラの姿
があった。

「とりあえずあいつを怒らせたジャンはやべえな」

「ははは、そうだね」

兵団本部に居た時、ジャンはフローラを尊厳を破壊する勢いで罵倒していた。

3人はその様子を耳で聞いていた程度であったが、今では死んだなあいつとしか思えなくなつた。

「何をしているの!?!置いていきますわよ!」

「待て待て!分かつたから見捨てないでくれえ!」

「あああ置いてかないでええ!」

立ち止まっている間にフローラが追い付いてそのまま突き進んでいったのを見て慌てた3人。

できるだけ彼女から離れない様に付いていった。

彼女の傍に居れば安心だと。

しかし、巨人が他の同期を追いかけていても彼女は無視していた所から疑問が生じてきた。

「ねえフローラ?あつちにキニスン班が居たんだけど?」

「彼らならきつと大丈夫よ!信じて進みましょう!」

「ヤバそうに見えたんだがな…」

あの後、彼女は巨人と直接対決はしなくなり、見かけても迂回するルートをとりに続けた。

駐屯兵団の精鋭部隊の班長イアン・デイトリツヒは驚愕していた。

首席で卒業したミカサ・アツカーマンを直々に指名して後衛部に配属させていた。

しかし彼女は、精鋭班の誰よりも活躍していた逸材であった。

おそらく1000人の兵士に匹敵するほどに。

「撤退の鐘の音だ！」

「正気か!? まだ6割も避難が完了してないぞ!?!」

「やむを得ん! ガスを補給して壁に登るぞ!」

駐屯兵団上層部が、避難している民間人を切り捨てた。

それは、人類を守護する者は誰もいないということと同意義だ。
人類は、また敗北したのだ。

「前衛の撤退を支援してきます」

「おい単独行動をとるな！」

「ミカサ！戻ってこい！！」

ミカサからすれば、エレンがいれば何でもいいのだ。

なんとしても彼の元に戻らなければならぬ。

命令違反で同僚から制止されようとも行かなければならぬ。

止まらない胸騒ぎを鎮める為にも。

「兵士さん！ここだ！助けてくれ！！」

「こつちこつち！」

「お願い助けて！」

「早く来て!!」

屋根の上で避難していた家族が、4人の兵士を見かけた。しかもこちらに向かって来ているではないか。

2体の巨人に囲まれて絶体絶命のピンチだったが、これで助かる。

しかし、兵士たちはそのまま通過してしまった。

まるで気付かなかったように。

「嘘でしょ!? 待ってええええ! 私達はここに居るのよ!」

「なにやっつてんだ!! 誰が貴様らに飯を喰わせて…」

巨人たちは躊躇いもなく見捨てられた4人家族に襲い掛かった。

そして何も妨害されることもなく絶望した家族を好き放題に食った。

「待ってよ! 今、4人家族が助けを求めてたよ!!」

「何を言ってるのアルミン？ 貴方の見間違いよ」

「そんなわけがない!! 君だって分かっているだろう!？」

「わたくしたちはこのまま進むわ」

「フローラ!!」

アルミンが先導していたフローラの前に飛び出した。

やむを得ず彼女は、近くの屋根の上に乗って残りの2人も従った。

華麗な着地をしたフローラに詰め寄り胸倉を掴むアルミンの姿に緊張が走った。

「今すぐ戻るんだ!」

「班長の命令が聞けないの？ あそこには何もなかったわ」

「ふざけないでよ!! 死角に居た奇行種すら感知できた君が分からなかった訳ないだろう!!」

アルミンの脳裏では、シガンシナ区で死んだエレンの母親カルラの顔が思い浮かんでいた。
いた。

あの時は、自分たちではどうしようできなかった。

でも今は、巨人を討伐して悲劇を回避できる実力者がいる。

それにも拘わらず、両親を失ったのに見殺しにする選択肢を取った彼女が許せなかった。

「君なら2体の巨人を無傷で討伐できただろう！なんで見捨てたんだ！」

「疲れているのね、ちようどわたくしもボンベを交換したかったからここで少し休憩しましょう」

「フローラああああー！」

殴り掛かろうとしたアルミンを慌ててダズが羽交い絞めにして止めた。

「やめてアルミン！私たちが喧嘩しても状況は変わらないわ！」

「両親を失った君なら分かるだろう!?あの苦しみを！なんで見捨てたんだ！」

「仕方が無かったんだ！諦めろ。そして落ち着け」

ダズも彼らを見た時、自分と同じ家族構成だったのもあって、とても他人事ではなかった。

家族を守れる力が欲しくて兵士になった彼には、とてもきついものがある。

「ゴメン、熱くなり過ぎた」

「ミーナ、ガスボンベを2個頂戴！」

「…うん、分かった」

ミーナからボンベを受け取ったフローラは、ボンベを付け変えようとした。しかし、何度も滑らせてうまく装着できないようであった。

「おい、いくらショックを受けたってこれはひどいじゃねえか。手伝うぞ」

ダズは呆れながらもフローラの傍に寄って補充用のボンベを手を取った

駐屯兵団の紋章が掘られ豪華な赤い装飾のボンベであったが、何の失敗もなく装着できた。

ただ、彼女は汗でも書いていたのか、かなり生暖かい液体の感触がしたが。

「ありがとうダズ、おかげで助かったわ」

「まあ、これくらいしかできんからな。それにしてもお前らしく…なんだその血は!」

彼女の両手から血が流れていた。

思わず、自分の掌を見ると彼女の血で染まっていた。

剣ダコが潰れてもここまで出血しないだろう。

「お前、まさか限界だったのか!」

「昔の古傷が開いただけよ。民間人を見捨てた理由にはなりえないわ」

「じゃあ、なんで…」

フローラは、いつになく真面目な顔をして3人に向き合う。

「ええ! そうよ見捨てたわよ!! なんか悪いの!」

「助けることはできたわ! じゃあその後は!? 家族4人をそれぞれ背負っていくの!」

「ただでさえ、戦況が悪化して味方は死んで巨人は増えていく一方、使えなくなってくる立体起動装置!」

彼女は、すでに精神的に限界だった。

“声”が聴けるようになってから1000人以上の断末魔の叫びを聴いてきたのだ。更に巨人から発せられる呻きの“声”も聴こえてくるようになっており頭がどうにかなりそうだった。

そこにピンポイントでトラウマを抉るアルミンに心が折れそうになった。

「ライナーたちが居るならともかく、この貧弱パーティーじゃ切り抜けられないわよ!!」
「そもそもなんでこのルートを選んだか理解してるの!? 罔が居たから巨人との戦闘を避けられたのよ!!」

今までの鬱憤を貯め込んだ堤防が決壊したかのように感情を剥き出しにしてきた。豹変した事に呆気にとれてた3人に気にすることは無く彼女は喋り続ける。

「ルート選定、索敵、戦闘、編成の管理、班員の体調管理! ガスの残高の計算!」

「ただでさえ、やる事は多いのに更に足手まといの4人追加ですって!」

「冗談じゃないわ!! わたくしは誰一人欠けないように気を遣ったのに何で責められないといけないの!」

「4人家族を一時しのぎで助けたいならアルミン一人だけで行けばいいじゃない！」
「わたくしがどれだけ民間人や同期達を見捨てたと思ってるの!?!まさかあの4人だけって言いませんかよね!?!」

フローラからしてみれば、大切な3人を守るために同期や民間人を100人単位で見捨てたのだ。

たまたま、視界に入ったのがあの4人家族だっただけでさつきから何度も見捨ててきた。

アルミンには優れた頭脳を頼りたいのであって、お説教を受ける為に助けたわけではなかった。

「それは…」

「貴方だって! エレンを犠牲にして生き残ったじゃない!」

「あつ…!」

「人は何かを犠牲にしないと生きていけないのよ! だからこそ、わたくしは貴方達を犠牲にしたくない!」

「もうあんまりなのよ…これ以上友人が死ぬのは…」

エレンがきっかけで今の自分があるフローラからすれば彼を失ったのは大打撃だった。

それでも班長として弱みを見せるわけにもいかず、冷酷に対処してきた。でも、エレンの名を口に出した途端、涙が止まらなくなった。

「なあミーナ」

「どうしたの？」

「フローラってあまりにも別次元の強さで化け物だと思ってたんだよ。」

「私も親友のつもりだったんだけど、遠い存在に行ってしまったみたいなきがしてた」「でもさ！あいつの泣き顔を見て、ああ俺たちと同じ人間なんだなって安心したんだ」

都合の良い時だけ彼女に頼って、悪い時は見て見ぬふりをしてきた3人。

彼女の本音を知れた事でようやくフローラ班は結束できた気がした。

「だからアルミン、貴方だけでも生還させてミカサに逢わせるわ。だから私の命令に従って」

「分かったよフローラ、僕はもう迷わない」

「ありがとう」

時には、助かる命も見捨てなければならぬ。

その時、撤退を知らせる鐘の音が鳴った。

もし、家族4人組を救出していたら更にパニックになっていただろう。

何故なら民間人の避難が完了したと同意義なのだから。

「だからアルミン、わたくしを恨んでもいいわ」

そう言ってフローラは握り締めたスナップブレードをアルミンの背後に投げつけた。

慌てて3人が振り返ると、口元を血で濡らして片目に刺さって怯んだ巨人が居た。

忍び歩きで捕食するタイプの巨人だったのだろう。

「撤退命令が出たので、兵団本部でガスを補給して壁上に登るわ！いいわね」

「おう！」

「分かった」

「やっと帰れるう…」

フローラの気持ちを理解した3人はもう迷うことは無い。

「それじゃあ出発するわ！生きて帰りたいかったら、わたくしに黙ってついてきて！」

そう言つてアンカーを射出して進んでいくフローラ。

フローラ班の班員たちは、その頼もしい背中だけを見て駆け出していった。

6話 戦え!!

「何故、撤退していないの…」

ミカサ・アツカーマンは、屋根の上に人だかりを見つけた。

撤退の鐘の音は聞こえたはずであり壁上に避難しないのに疑問に思った。

とりあえず、情報を得られるのはありがたい。

とにかく、エレンの居場所を訊き出すために現場に急行した。

「クソが！補給班の連中、本部に立て籠りやがって！」

「どうしよう、もうガスがないのに…」

新兵である訓練兵たちはガス切れで動けなくなっていた。

ようやく撤退の命令が出たのにガス補給班が任務を放棄したせいで、ガス切れで動けなくなった。

充分なガスを補充していないと50mの壁は登れないのである。

唯一の補給場所である兵団本部の建物を見ると巨人が群がっている状況だ。

「ははは、せっかく撤退できるのにガス切れだとはな」

「一か八か本部に突っ込んでみねえーか!?このまま逃げていたらガス欠で動けなくなるぞー!」

「で?今の兵力でどうやってやるんだ?先輩たちは全滅してここに居るのは腰抜けだけだ」

「それは…」

とにかく状況を打開したいコニー・スプリンガーであったが、どうすることもできなかった。

何度も彼に呼びかけられているジャン・キルシュタインは既に戦意を喪失していた。

フローラが囿になったおかげで九死に一生を得たが、巨人から逃げ回ったせいでガス欠が近い。

「おそらくガス補給室にも小型巨人が侵入してるぜ。決死の作戦をやったところまで…」

「でも、ここに留まっても巨人を集めるだけだ!足掻くべきだ!」

「じゃあ、フローラみたいにお前が囿になって巨人の注意を惹けよ！その間にみんな仲良くガスを補給しに行くから」

「お前!! 囿にしたあいつを見捨てた癖によくも堂々と生きてられるな!!」

コニーは激怒してジャンの胸ぐらを掴んだが助けなかった時点で、お前も同罪と言わんばかりの態度をしていた。

身長が小さいおかげで丸坊主をわしゃわしゃと掴んで遊べるほどだ。

「私が先陣を引き受けます！みなさんが力を合わせればきつとできますよ！」

「どうせ、無駄死にだ」

「勝手にやつてろ」

サシャ・ブラウスが必死に本部急襲作戦の協力者を募っているが誰一人賛同しなかった。

この場に居る訓練兵は34人。

本部に居た時には、200人近い規模であったのにたった数時間でこの有様だ。

「ライナー、どうする？」

「もう少し、人が集まないとダメだろう。おいベルトルト、良い案ないか？」

「無理だよ。この手勢じゃなんともできない」

「もう終わりだよ…このまま街から出れずに死ぬんだ」

「マルコ、蹴られたくなかったらそのまま静かにして」

ライナー班は唯一、複数の巨人を討伐した班である。

しかし、フローラをコニー班に救援を向かわせた後、班が孤立しているのに気付き、中衛部に戻ると地獄絵図であった。

よくもまあ、呑気に巨人のキルスコアを競いあったものだなど後から震えてしまう状況だった。

成績順で、2位、3位、4位、7位、13位で構成された訓練兵の中で最強の班もガス切れで身動きがとれなくなっていた。

「お前ら！何体巨人を討伐したんだ？俺らは6体だ」

「はああ？1体討伐した班の方が珍しいぞ!？」

「そういえば、成績トップクラスの連中だったな！お前らが率先して兵団本部に行けよ

「！」

「「『そうだ！』そうだ!!」」

「しまった…がっ！」

失言をして注目されてしまった顔が真っ青になったライナーをアニが殴り倒した。

その様子を慌てふためいて歩き回るだけのベルトルト。

マルコはもう、心が折れかけていた。

「バカだね、これで私たちが行く羽目になるじゃないか」

「…だって、ふがっ！」

「うるさい黙つてろ」

この頭兵士のライナーに付き合っていたら命がいくらあっても足りないな。

いつそのこと、こいつらを見捨てて逃げ出してやろうか。

アニ・レオンハートは、不機嫌ながらも戦士と人間の狭間で揺れていた。

「お願いだ！誰か助けてくれ！ハンナの血が止まんないんだ!!」

「もう手遅れだ！諦めろこのクソ野郎！」

「ふざけんな！ハンナはまだ生きてる!!生きてるんだあああ！」

兵団本部でもバカ夫婦の異名だった片割れのフランツ・ケフカは恋人の止血をしていった。

ハンナ・ディアマントの左脚のふくらはぎが食い破れたように消失していたのだ。

だから彼は、左膝をしつかり紐で縛り止血したのだが、流血が止まらない。

誰かに助けを求めても無視をするなんて薄情の奴らだと感じている。

もつとも、彼女の胸から上は喰い千切られて存在しないのだが。

「まさに人生の終わりが近づいているようだ。ああこんなことなら……」

ミカサに告白すればよかったな。

そう考えていたジャンの目の前にミカサの姿が移った。

「ミカサ!!おまえ、後方に居たんじゃないのか!？」

「心配で駆けつけてきたの!とところでエレンを知らない!？」

「あの死に急ぎ野郎の事だ！まだ最前線で巨人でも狩ってるじゃねえのか」
「そうだといいんだけど、胸騒ぎがして…」

とりあえず、ここで彼女の好感度を稼ぐのも悪くないな。

思い立ったら即実行できる男と自認しているジャンはすぐさま計画を始動させた！

「おい！34班を見た奴は居るか!?!」

「いや…知らない」

「逃げるので精一杯だったし」

「ここに居ないって事は、そういう事だろう」

こうしてジャンの始動させたミカサ好感度UP作戦は無残にも失敗したのであった。

「すまん、誰も知らないようだ」

「ここには居ないの?」

「ああ、ここに居るのはガス切れで動けない腰抜けだけだ」

「そう…」

「ガス管理ができる有能な班は既に安全地帯に行ってるさ。あいつらは無理そうだが……」

ミカサからすればエレン以外どうでもよかった。
ここに居ないのなら別の場所を探すだけである。

「うわあああああー!」

静寂とした空気を切り裂く悲鳴に何事かと視線を向ける一同。

訓練兵の1人が複数の巨人に囲まれて叫んでいる。

自分の時と違って、ガス噴射機構が微かに動いているのを望遠鏡で確認したジャンは
確信した。

これは、完全にガス欠で立体起動装置が機能していないと。

「今助けるぞトム!」

「リーダーを見捨てるほど薄情じゃないわ!」

「バカ!よせ!!」

ジャンの制止を振り切って同期の顔馴染みが飛び出していった。そして間もなく3人は巨人の餌として食われた。

不幸中の幸いなのは、彼らが囹になつてくれたおかげで巨人たちが遠くに行つたことか。

「あれが俺たちの未来か」

「そうみたいね」

「ミカサなら助けられただろう？」

「貴重なガスを消費したくない」

「だよなー」

ミカサのやる気なさにもうダメだ助からねえ。

あーあー、結局フローラの犠牲は無駄になるのか。

せめて、彼女と和解してから死にたかった。

以前やったようにジャンは抵抗を諦めて瞼を閉じた。

「あつーー！そこに居ましたのね！」

ついにこの世に存在しない奴の幻聴まで聞こえてきた彼は更に意識を闇へと沈めた。

「呑気に寝てるんじゃないわよ！」

「ぶはっ!？」

手加減無しの平手打ちにむりやり現世に呼び戻されたジャン。

出迎えたのは、囮にした瞬間、全力で見捨てたはずのフローラであった。

「おお!?!…よおフローラ！生きていたのか！立体起動を叩き込んだ甲斐があつたつてもんだぜ」

「そ う ね！その点については感謝してるわ!!でもねー!」

「大変だ！巨人が来たぞおおお!!」

「きゃああああ!!」

フローラに問い詰められる前に絶好の機会で巨人がきてくれたものだ。

いや、充分まずい事態だが、それより彼女の方が怖かったのだ。

まだ、遠くに居るように見えるが相手は巨人、遠近感がおかしくなっているかもしれない。

「そんな訳だ。後でみっちり怒られるからさ！今は見逃してくれないか」

「しようがないわね。アルミン、ミーナ、ダズ！ここでお別れよ！」

「待てよおおおお！お前が居ないと生き残れる気がしねえんだよおおおお！」

「嘘でしょ!?!私を見捨てないでええええええ！」

「めそめそするなら後にして！動けないんだけど!?!」

フローラ班は無事に味方と合流したので班の解散を命じたフローラに対して、ダズとミーナは泣きながら班長の腰に抱き着いてきた。

彼女からすれば一時的な班編成であったが、ダズたちからすれば恒久的な班だと思っ
ていたようだ。

少なくとも彼らからすればフローラは、クリスタ以上の女神であるのは間違いないだ
ろう。

「アルミン!？」

一方ミカサは、アルミンの名を聞いてエレンと同じ34班に所属していたのを思い出した。

そしてフローラの背後に隠れるように縮こまっている彼の姿を見つけた。

「あつ」

アルミンはミカサを見つけて凍り付いた。

自分が巨人に? まれた時、死んでおけばよかったと後悔するほどに。

「アルミン、怪我はない?」

「うん…」

「エレンはどい?」

だけど、エレンに代わって生き残ってしまった以上、報告する義務がある。

自分が説明を果たさなければ、助けてくれたフローラと死んでいった班員たちに顔向

けできない。

涙が溢れてきて言葉が喉につつかえて震えながらも大きく口を開けた。

「僕たち…訓練兵 34班、エレン・イエーガー、トーマス・ワグナー、ナツク・テイアス、ミリウス・ゼルムスキー」

「以上4名は、使命を全うして…壮絶な最期を遂げました…」

ミカサは自身を構築している世界が崩れ落ちる音が聴こえた気がした。

もう一度見たアルミンの表情から嘘でない事を知る。

全てが真つ暗になりこの世は残酷だという事を改めて知った。

「ごめんなさいミカサ、わたくしが駆けつけた時には…エレンの死体は確認できなかったけどおそらく…」

まだ頭で整理がつかないうちにフローラは、エレン以外の遺品を見せてくれた。

つまり、彼女が必死に戦ってきた証であり、アルミンたちの命の恩人に他ならない。

「…そう、でもアルミンとミーナは、貴女が助けてくれたのね」

「ええ、恐怖で震えていた二人とオマケを連れてなんとかここまで来れたわ」

「ありがとうフローラ。」

同じシガンシナ区出身で、一時はエレンに着く害虫だと思っていた女。

今では、4人で語り合えるほど仲良しになった友人である。

ウオール・マリアが陥落した日、それ以前の記憶をなくした彼女に思い出話をするのが日課になったほどだ。

「お前ら！巨人が来てるんだぞ!?何をぼさつとしてるんだ!？」

「ですって」

「フローラ、あの巨人たちをやれる?」

「貴女こそ」

「「ふふふ!」」

怒りのボルテージが限界を超えていた彼女たちからすれば、巨人などちよいといいサンドバックであった。

彼女から放たれる異様な雰囲気から逃げ、事を忘れた男共は、ただ震えているしかできない。

「駆逐してやりますわ！」

「潰す!!」

2人は、屋根から飛び出して巨人の群れに向かっていった。

「俺え、絶対にシガンシナ区出身の女と結婚しないと誓うぞお」

「ダズ、お前」

「コニー、お願いだから今の事を忘れてくれ」

「いや…お前と同感だよ」

ダズとコニーは、シガンシナ区出身の女と絶対に結婚しないことを共に誓った。

フローラとミカサは、先鋒に居た7m級の巨人を見事なコンビネーションでうなじどころか首を切り落とした。

すぐさま、彼女達は片手で合図をしてミカサは群れの後方を、フローラは訓練兵たちに近い屋根に陣取った。

「物足りませんわ！もつと来ていただかないと…」

バカ正直に真正面で対決したフローラ。

もはや、巨人より立体起動による負担の方が脅威になっていた。

両手で掴もうとする巨人を見て左側にあつた建物にアンカーを射出した。

巨人の方に身体を向けるように身体のひねり具合を調整しながら首にアンカー刺して高速で巻き取る勢いでうなじを切り落とす。

「次は…！」

目の前に向かって来る巨人を見据えて別の屋根にアンカーを刺そうとした。

ところが人外の“声”が背後から聴こえてフローラは高所に右アンカーだけ射出し

た。

右側に横転しワイヤーを巻き上げて、崩れ落ちる巨人から脱出したと同時に飛び込んできた4 m級巨人の衝突をギリギリ回避する。

オーバーシュートさせた巨人に左アンカーを刺すと同時に右アンカーを外して高速で巻き取った。

状況が逆転したフローラは、落下速度と回転を利用してうなじを切り落とし、目の前に迫ってきた巨人の眼球にアンカーを刺した。

両方の視力を突然失った巨人はパニックになったが彼女は隙を見逃さずうなじを斬り落とし一撃離脱した。

「すげえ…」

「マジかよあいつら」

「つーか、エレンを殺されたミカサはともかくなんでフローラまで覚醒してるんだ？」

諦めムードで傍観していた訓練兵たちであったが、わずか数分で7体の巨人を討伐した彼女たちに驚いた。

ミカサが大切なエレンを殺害されて、激怒したのは嫌でも分かる。

じゃあなんでフローラは、あのミカサと互角になるまで覚醒したのか。

明らかに死角から飛び込んできた奇行種を回避して背後にまわってうなじを斬るまで20秒もかかっていなかった。

そこまで覚醒した要因が絶対にあるはずだ。

「おい…なんでこつちを見るんだ…」

「だつてな…あいつ」

「だよな…」

そういえば、ジャンがボロクソにフローラを侮辱していたな。

記憶の隅から思い出した一同の視線を集めた当事者の彼は、耐え切れずに震え始めた。

「ジャン。正直に話してみろ」

「俺たちも一緒に謝ってやるよ…お前フローラになんかしたな!？」

「罵倒しただけで巨人を狩る鬼神にはならんぞ!?!まさかお前、恐怖のあまり凌辱したのか!？」

「うわ…最低!きもっ!」

噂が噂を呼び瞬く間にジャンの評価が地に落ちていく。

これ以上の身の覚えのない噂を広げないように彼は自分の罪をカミングアウトする事にした。

「俺の立体起動装置を修理するまでフロアに囷になってもらったんだ!でも10体の巨人が群がった彼女を見て諦めたんだ!」

「俺は!彼女が存分に時間を稼いで死んでくれと!囷になった彼女を見捨てて逃げ出したんだ!!他は何もやってねええ!!」

あれだけ騒がしかった外野は沈黙した。

ジャンは第104期訓練兵団の卒業生の女と結婚できる可能性は0に近かったが、この時ついに0になった瞬間である。

女に頼っておきながらも目標を達成したらポイ捨てる男に誰がときめくというのか。

「あいつら!兵団本部に向かったぞ!?群がる巨人を二人で排除する気か!」

ライナーの指摘を受けて衝撃を受ける一同。

「おいお前ら！あいつら二人だけで戦わせるって学んだか!?お前ら本当に腰抜けになっちゃまうぞ!!」

「ジャン！お前だけには言われたくねーよ!!」

「俺はあいつらに助けてもらってガスを補給しに行く！じゃあなお前ら！」

「やーい弱虫！家畜未満の腰抜け！」

ジャンは彼女達の方に駆け出してサシヤが口だけの腰抜け共を煽って走る。

「バカにしやがって!!」

「やってやるぞ!!」

「「おう!!」」

覚悟を決めた訓練兵はそのまま駆け出して残った腰抜けは、その後一人残らず巨人の胃袋に収まった。

「ミカサに続け！」

「すげえなあいつ、どんだけ早く移動できるんだ」

「違う…」

コニーは、ミカサの圧倒的機動力に感心していたが、アルミンだけは彼女の危うさを見抜いた。

直前まで、フローラの背を見てきたのもあり同じ強者でもガスを蒸かし過ぎているのが見て取れた。

やはり、冷静さを失い動揺を行動で消そうとする彼女がとても心配である。

「あつ…！」

アルミンの不安は的中してミカサはガス欠により落下していった。

コニーとアルミンは彼女の元に急いだ。

「ハアハア…また大切な物を失った」

ミカサは運よく助かったものの呆然としていた。

この世界は残酷だ。

でも美しくもある。

強者が弱者を喰らい生き延びていく世界。

自分もまた、その食物連鎖に組み込まれた人間の一人に過ぎないのだ。

目の前に15m級の巨人がこちらを見て微笑んでいる。

あれが私の死であろう。

本当に良い人生だった。

「戦え!!戦え!!」

この時、ミカサにエレンの声が聴こえてきた。

脳内には、必死な叫び声が聴こえてくる。

彼が殺されたかけた時に叫んだ言葉だ。

あの時、彼女は戦ったから生き延びることができた。

「ごめんエレン！私はもう諦めない！！」

ガスが切れたがまだ剣がある！

死んでしまったらそれで終わりだ！

だからこそ生き残って見せる！！

「うああああああ！！！！」

しかし、ミカサの刃が巨人に届くことは無かった。

何故なら、立ち向かった相手が別の巨人にぶつ飛ばされたからだ。

「嘘……！」

新手の巨人が咆哮しながら巨人を殺していた。

エレンの言い放った戦え!!

それを忠実に実行しているかのように。

「大丈夫なのミカサ!？」

「なんだ!?! 巨人が巨人を襲っているのか!?!」

ミカサに迫いついてきたコニーとアルミンは、巨人が巨人を襲撃するという前代未聞の現場を目撃した。

「どうせ奇行種だろう! こんな奴が1人居たっておかしくねえーよ」

「ちよつと待って! あの巨人、弱点を理解してるよ!?!」

アルミンの一言で二人は巨人の方をみる。

うなじを損傷したのか黒ずんで蒸発する巨人を無視して新手の巨人に向かっていく奇行種の姿であった。

「なんだあいつ、俺たちを狙わないのか」

「人間を襲わない奇行種か…そうだ、良い事を思いついた！」

アルミンは瞬時に名案を思い浮かんだ。

決して勝率が良い作戦ではなかったが、このまま進んでも巨人に喰われることを考えればマシな案である。

「座学トップの軍師さんよ！この状況を突破できる名案を思い浮かべたのか」

「自信がないけどやるしかない！」

「ふふふ、期待してるわ」

アルミンは、ミカサ達に作戦を簡潔に説明した。

7話 ただいま

「フローラ！ミカサがガス切れで落ちた!!」

「わたくしより強いミカサがああの程度で死なないわよ！今はただ、コニーとアルミンを信じましょう！」

本当はフローラが真つ先に救援に行きたかったが同期たちを導いてるので身動きが取れなかった

とりあえず、コニーとアルミンに任せないといけない歯痒さに唇を噛み締めた。

「二本のボンベを渡しに行っていない？」

「いえ、わたくしが使うわ、ミーナ最後まで離さずに居てありがとうね」

「でもミカサが…」

「分かってるわよ。でもこっちもガスの残量がまずいの。二人同時に落ちるわけにはいかないわ」

泣きそうなミーナに微笑みながら受け取った最後のガスボンベの装填をした。これで最後、ブレード4本も彼女に元から装填していたものを使っている。あとは同期たちが兵団本部の建物に飛び込んでなんとかしてもらおうしかない。

「ジャン、囷にして見捨てた時の怒りを鎮める方法を思いついたわ！」

「なんだよフローラ、まだ細かい事を気にしてるのか」

「貴方が先陣を切って窓ガラスから飛び込みなさい」

「おい！何を言ってるんだ!!あの大群に突っ込めっていいのか!？」

真顔でとんでもない事を言い出したフローラにジャンは驚愕した。

周りに居る同期たちも顔が真っ青だ。

目と鼻の先に兵団本部の建物が見えるが巨人だらけでとても突破できそうにない。

「当然でしょ?こういうのは立体起動が一番得意な人物がお手本を見せるべきよ！」

「つまりおまえは、大っ嫌いな俺に自殺しろって事か?」

「そう思ってたら、無言でやってるわよ!さきさきと行きなさい!」

巨人の大群か、自分に殺意を向けている巨人のキルスコアが二桁の化け物女。どつちが怖いか明白だ。

「分かった！やればいいだろう！やれば!!」

「ようやく男らしくなったわね！ダズ、ミーナはジャンの背中に続いて！合図はわたくしが出す！」

「お前、本当に悪魔だな」

「良心なんてとつくの昔に巨人に喰わせたわよ！みんな準備は良い?」

この作戦で、大勢死ぬだろう。

だが、背後から巨人の群れが迫ってきている以上、腹を括るしかなかった。

ここにいる全員は、犠牲など覚悟の上だ。

できない奴は、既に置いてきたのだから。

遙か遠くから突入する予定だったが、フローラの奮闘で立体起動であれば3分足らずに到達できるまで来た。

だからこそ、彼女の作戦にみんなが命を賭けたのだ。

「信煙弾！撃て！！」

あらかじめ同期に掻き集めさせた駐屯兵団の兵士の死体から拝借した信煙弾。

フローラは、地上と建物の高所に登っている巨人に向けて撃つように命令した。

勝負は一瞬、煙幕で一時的に視界を奪って建物に突入する作戦。

これは、自分たちの視界をも奪う諸刃の剣である。

「総員突入！生きて中で逢いましょう！！」

「「「うおおおおお！！」」」

比較的、すぐに煙で隠れないであろう5、6階の窓に突入する為に全員飛び込んでいった。

「うおっ！」

巨人の隙間を合間縫って建物へと向かっていく。

決死作戦の指揮を執るフローラは、直後に一体の巨人を討伐したが、いかんせん数が

多すぎる。

巨人にビビってコントロールを誤って民家に激突した同期も出た。

それでも生き残るために訓練兵たちは無我夢中で窓に向かつていく。

「うっーこのっー！」

ジャンは左脚を巨人に掴まれたが指を斬り落とすことでなんとか脱出した。

しかし、目の前に大口を開けて待ち構えた10m級巨人が待ち構えていた。

そんな巨人を、フローラは大量のガスとブレード二本を犠牲に首を吹っ飛ばした。

「行きなさいー！」

「ああー！」

ジャンの目の前には、最後の難関である窓ガラスが待ち構えていた。

メルダ・プリントは、訓練兵 11班に所属している。

いわゆる補給班であり、彼女は実働部隊にガスや武器の補給を担当していた。

ところが、上官である駐屯兵団の兵士たちが全員戦死を遂げて、補給所に4m級の巨人の侵入を許してしまった。

偉大な先輩たちの壮絶な死に様で全員が戦意喪失をしてテーブルをバリケードにして立て籠っている。

「ぎゃあ!!」

「きゃあああ!!」

銃声と共に悲鳴が上がった。

これで3件目である。

どうせ苦しくて喰われるくらいなら覚悟を決めて自決した方が楽に死ぬる空気が漂っていた。

「ねえどうしよう!?撤退の鐘が鳴ったのに逃げられないよ!!」

「知るか!とにかくここで籠城して、救援に来るのを待つだけだ!」

「待つて!?いつまで待てばいいの!？」

「うるせえ!無駄口叩く暇があったらバリケードを補強しろ!!」

メルダが必死に人に頼るが誰もがまともに対応してくれなかった。

出撃していない分、50mの壁を登れるが包囲している巨人を突破できないのだ。

既にかくつか石壁を巨人に穴を空けられ、手を入れて探るようになっている。

もはや、壁が崩壊するのも時間の問題であった。

「誰か【救援の信煙弾】を打ち上げたか!？」

「もうこんな状況でできると思ってるのか!？」

「窓を見ろ!なんか煙が上がっているぞ!？」

「ホントだ!救援部隊が近いかもしれない」

これで助かった。

補給班全員、救援部隊がいつ来ても良いように待機した。

「よし、いつでもいい」

「これであたしたち助かるのね！」

「ああ！早まって死んだアイツらには悪いがオレたちは旨い飯を喰わせてもらおうぞ」

メルダ・プリントは既に頼もしい救援部隊の隊員たちに助けられる光景を想像していた。

しかし、現実はいつでも非情である。

最後の難関である窓ガラスを蹴破って転がり込むジャン・キルシュタイン。すぐあとにミーナ・カロライナも突入に成功した。

それをきっかけに次々と窓ガラスを破って突入してくる訓練兵たち。

中には、ガラスを破れずに巨人に掴まって喰われた不運な新兵。

破片が片目に刺さって悲鳴をあげて転げ回っている奴も居た。

「くっ！…何人辿り着いたんだ!？」

「はあはあ…予想以上に多いよ。キース教官の教育の賜物だね…」

ミーナの言う通りジャンが見渡せば、成績上位陣はほぼ全員揃っていた。更にクリスタ、ユミル、マルコなど比較的、立体起動が苦手の連中も突入に成功したのを確認した。

フローラの決死作戦で何名か犠牲者や負傷者が出たが、巨人一人に30人は死ぬらしいので大成功といえる。

「うおおおお！ やったぞ！ ようやく帰れるんだ！」

「あああ！ 良く来てくれました!!」

「きやああ！ 勇者様!!」

突入してきた兵士たちに歓喜する無責任な補給班の腰抜けたち。

一方、困惑する肩で息をしている実働部隊の残存兵たち。

「はあっ!？」

「えっ!？」

命ガラガラで突入してきたのに、籠城してた奴らは楽観的で歓迎会を開くテンションである。

いつも悪態をつくアニとユミルですら何が起こったか判断できずにフリーズしてしまっただけであつた。

「おまえら補給班だよな!？」

「…ああ！そっか!？」

ジャンは思わず返答した腰抜け野郎を殴り倒した。

マルコが慌てて羽交い絞めをするが彼の怒りが全然収まらない！

「おまえらが任務を放棄したせいで何人死んだと思ってるんだ!!」

「しょうがないでしょ！補給所に巨人が侵入してきたんですもの!」

「お前らだつて兵士だろうが！なんで戦わなかったんだ!!」

「先輩たちですら勝てないのにあたしたちにどうしろって言うのよ!!」

メルダが反論するがその声を打ち消すほどのジャンの怒声で泣いた。

更に彼の怒りを補給班にぶつけようとした瞬間。
大きな衝撃と共に壁に穴が開き巨人二体が訓練兵たちを覗いていた。

「中に入れ！早く!!」

「急げ!!」

誰もが安全地帯を目指して中に進んでいく。

「ああああああああ!!」

ただ一人、メルダは別の壁の穴に向かっていった。

とにかくこの場の居たくなかったのだ。

こんな所に居られるか！あたしは壁の上を登る！

そう決意したのも空しく偶然、巨人が穴に手を突っ込んだせいで驚掴みにされてしまった。

「助けてええええ！助けてええええ！」

穴から引き摺り出された彼女は、絶望した。

しかし視線を下ろすと窓枠の付近でワイヤーが複雑に絡まった間抜け野郎を助けようとしているフローラが居た。

「フローラあああ！あたしよ！メルダ!!とにかく助けて!!」

地獄に垂らされた蜘蛛の糸を掴むように恐怖を振り払って大声で彼女に助けを求めた。

しかし、彼女はこちらを軽く見た後、ワイヤーを取り外す作業を続行した。

「なんで助けてくれないの！ダズなんて屑ほっとけばいいじゃない!!」

憤怒に満ちた彼女の頭は14m級の巨人が美味しく頂いた。

誰にも貢献しなかった彼女であったが、最後は巨人の食事として貢献できて幸せであろう。

「おい、名指しされていたぞ。いいのか？」

「クリスタを守るために身体を張ったダズと比べればどうでもいいわ」

「とにかく早く助けてくれえ!!」

「もう面倒だからワイヤーを切ってもいいかしら？」

「やめてくれえええ!!」

「冗談よ！ほら外れたわ」

生きたままワイヤーをありつたけ身体に巻き付けて宙ぶらりんになっているダズを見たフローラ。

同じようにワイヤーで絡まって悲惨に死んだデント・アクアに比較しても酷い有様だった。

別の意味で彼には才能があるんじゃないかなと感じていたほどだ。

少なくともクリスタに襲い掛かった巨人のうなじを斬った彼を見殺しにはできなかった。

「来世は、ブランコになるなら先に仰ってくれればいいのに…」

「痛たたたあ…もう少しうまく救出して欲しかったぞお」

「だからワイヤーを切れば良い話じゃないですの」

「そしたら壁上に登れんだろぅがあ！」

「はいはい、生き残っただけ奇跡なんだから生の実感でも噛み締めて…なんかあつたの？」

突入組では、最後になった彼女たちが窓から入ると呆然とした同期たちが居た。

「巨人を襲撃する奇行種が出現したんだ！アルミンの作戦でここに誘導して巨人共にぶつけてやったんだ」

「とにかくあいつを利用すれば、ここから逃げられるぞ!!」

「良く分からないけど、みんなが生還できるなら何でも利用するべきね」

ミカサ達の姿を見た瞬間、安心して眠くなってきてしまった。

立体起動で身体を酷使し過ぎたのだろう。

巨人を襲撃する奇行種が気になったがフローラからすれば、休息が重要だった。

「わたくしは、少し休ませてもらいますわ。脱出する時に起こしてくださいね？」

「ああ！良く頑張った！ゆっくり休め！」

とりあえず、フローラは補給班が震えている場所にあつたソファーに腰掛けてそのまま瞼を閉じた。

「あいつ、戦場で寝るとか良い度胸してるな！」

「僕には真似できないよ……」

「私が見てないところで頑張ったみたいだし、ああなるわ。というか私も眠い！」
「アニ！お前は駄目だ！次の作戦の重要な戦力だからな！」

「チツ！」

同じ班員であるライナーたちは寝息を立ててる彼女に毛布をかけてあげた。

「ちよつと待て！！あの女と俺たちと扱いが全然違うじゃないか！！」

「「「「ああん？」」」」

「申し訳ございませんでしたー」

補給班の1人が扱いに異論を唱えようと、クリスタとマルコを除いた成績上位7人を筆頭する突入組が指を鳴らした。

死線を越えてきた彼らからすれば、おまえらだったら100回は死んでる激務だったあいつと一緒にするなど！

もちろん、立て籠っていた補給班には知る由もなかった。

ただ、突入してきた他の訓練兵と違って青年男性を背負って歩いていた時点で気付くべきであった。

とはいえ、彼らも貴重な戦力であり、突入組は威嚇だけで終わらせた。

「本当に鉄砲でいいのか？」

「うん、目くらましになればなんでもいいよ」

アルミンたちは補給室に入り込んだ巨人を掃討する気である。

もちろん、ここで失敗すれば完全に水の泡であるが彼らは何も恐れてなかった。

先ほどの作戦は、マルコが巨人に目くらましで妨害するのを提案したのがきっかけだった。

それを聴いてアルミンは、主戦場だったので信煙弾がいくらでも転がっているを見

つけて作戦を立案した。

その話を聞いたフローラがアルミンの案に乗って責任者を名乗っていたに過ぎない。無謀な作戦だったが、自信満々の彼女の巧みな話術で皆の意志を結束させていたからできたのだ。

「でも、僕たちの作戦にみんなが乗ってくれるのかな？」

「これで行くしかないよ！それにこの案以上に思い浮かべないしね」

ただ、今回は皆をまとめあげるリーダーが居ない。

ライナーかジャンかミカサが適任であったが、彼らはリーダーになるのを嫌がった。

さっきの作戦と違って、ぶっ飛んだ奴が指揮官じゃなくてもアルミンたちだけで皆を説得できると。

「もう一回説明するよ！このリフトで四部隊が補給室まで降りて行って巨人たちを充分引き寄せてから発砲するんだ！」

「四方八方発砲した事で一時的に視覚を奪った巨人を天井に待機していた討伐班が急所を狙って一撃で倒す！」

「たった1回のチャンスで全員の命を賭けることになるから気を引き締めてね！」

囃部隊は、荷物運搬に使うリフトに乗って、囃かつ目潰し要員でありアルミンたちが乗る事になっている。

討伐班は、立体起動装置を付けずに落下して、囃で近づいてきた巨人のうなじを斬ることになる。

もちろん、運動神経が良い人を選んだが全員が一撃で仕留めないと作戦が失敗に終わるのだ。

「もし、失敗したら？」

「たくさんの犠牲を払ってフローラを叩き起こす」

「それだとフローラが俺たちの敵にみたいに聴こえるな」

ライナーの軽口に突入組が大笑いをした。

みんな彼女の話題になると笑顔になる。

それだけ彼女の影響力は凄く、この地獄の中で精神的に支えになってくれる。

だからこそ、兵士である自分たちだけでやる必要があるのだ。

「いいよー！降ろしてー！」

リフトはゆっくりと地獄の釜へと降下していく。
幸いにも偵察した時と同じ数であった。

「ひいひい…」

「まだだよ…まだ撃たないで！」

「もう少し…もつとだ」

「よーし！今だ！撃て！！」

充分巨人を惹きつけたと判断しリフトから散弾が巨人の顔に破裂した。

「今だ！！」

ライナーたち討伐班が天井から降下して巨人共のうなじを斬った。

だが、戦闘経験が少ないサシャがうなじを斬り損なった。

「ごめんなさいいいいいい！」

一撃で全ての巨人を討伐する作戦は失敗した。

しかし、ミカサとアニのフォローが間に合って最後の巨人を討伐できた。

「ごめんなさい!!」

「謝るならあとにしろ！今はガスを補給するんだ」

サシヤが罪悪感で胃が痛くなっているが、結果よければ全てよし！

誰もサシヤのことなど責めようとしなかった。

その光景を上階から見下ろして勝利を確認したミーナはフローラを起こしに行つた。

「起きてフローラ、ガスの奪還作戦は成功したよ」

「うーん、寝た気がしないんだけど…もう少しだけ寝ても良いかしら？」

「ダメ！」

優しく起こされたフローラは手鏡で最低限の手入れをしてすぐに皆の様子を見に行った。

そこには、両腕を挽がれた奇行種に群がっている巨人の光景を見ている同期たちが居た。

「よくもまあ、20体以上巨人を葬ったものね」

「お前も似たような事してるんだが？」

「わたくしが同時に相手にできる巨人は三体までよ？」

「やっぱこいつ、頭エレン娘だ。常人じゃ複数人で一体が限界だっつーの！」

コニーの呆れた視線を無視をし、フローラは巨人を噛み殺す奇行種を眺める。

エレンだったら、あの巨人はどうするのか。

こいつも駆逐するのか。

それとも利用するだけ利用して最後に駆逐するのか。

そう考えているうちに奇行種が限界だったのか倒れ込んだ。

うなじから何かが見えた。

死んだはずのエレンの上半身が奇行種のうなじから生えていたのだ。

「ちよー！ちよつとミカサ!?!」

奇行種の肉体はうなじが斬られたように蒸発していつて五体満足のエレンがそこにいた。

フローラの制止を振り切って、ミカサは彼に駆け寄って抱き寄せて泣いた。

その光景を駐屯兵団の兵士が目撃した。

明らかに異常な信煙弾の撃ち方で、慌てた上層部が増援部隊を送り込んだのだ。

8話 エレン・イエーガーは人類の味方か敵か

「一体何が…」

駐屯兵団の精鋭部隊の班長イアン・デイトトリツヒは、現在の事態を呑み込めていない。

撤退の鐘を受けて、部下と共に壁上で待機していた。

ところが、兵団本部付近で異常事態が発生し、同僚のミタビとリコと共に部隊を率いてきた。

そこで見たのは、巨人のうなじから人間が出てきた光景だった。

しかも、訓練兵でありその傍には高く評価していたミカサ・アッカーマンが居た。

「イアン班長！あいつ、巨人に化けていました！」

「ああオレも見ただぞ！」

「私も見ました!!」

巨人のうなじから訓練兵が出てきた。

逆にいえば、巨人に化けられる人間が居るという事だ。

それも、兵士に紛れて活動していたというのだ。

「これは人類の脅威とみなす！私が責任を取る！奴を討ち取れ！」

「うおおおお!!」

「リコ!?勝手な真似を！」

「イアン！これは人類を守るためだ！」

スナップブレードを構えて突撃するリコ班の班員たち。

しかし、彼らはどこから射出されたアンカーのワイヤーに足元を取られて転倒した。

「誰だ!?!」

「アンカーを射出したのはあいつか!?!」

兵団本部の建物付近に居た女訓練兵がリコ班を妨害した。

「おっほっほっほ！御免遊ばせ！手元が狂ってアンカーを射出してしまいましたわ」
「何の真似だ！貴様！」

「それはこっちの台詞よ！同期に殺意を向けている貴方たちを見過ごすわけにはいきません」

「人類の敵にまわるという事か!？」

「そうご判断されるのなら、そうなのでしよう！」

イアンは意味が分からなかった。

状況を把握するには時間が足りなかった。

あの信煙弾の意味も理解できなかった。

自分たちがどうすればいいのかも。

「ミカサ！エレンを連れて逃げなさい！」

「分かってる！」

ただ、彼女たちをそのまま放置してはいけないのは分かる。

「逃がすな!!」

「イアン班長!我々も行きましょう!」

「ああ、分かった!」

とにかく自分の任務を全うするだけだ。

フローラは後悔した。

明らかにエレンに殺意を向けている駐屯兵団の部隊を目撃してしまった。

一瞬で眠気が吹っ飛んだ彼女は、親友のミーナからボンベを受け取って装填し直して刃を構えた。

「え?フローラ!?!何をやる気!?!」

「良い!?!わたくしと貴女は関係ない!だからついてこないで!!絶対に!!」

「何を言ってるの…」

ミーナの困惑した姿が最後に見ると考えると憂鬱になった。それでも、エレンを殺されるのを阻止するためにアンカーを射出して兵士達を足止めた。

「人類の敵にまわるという事か!？」

「そうご判断されるのなら、そうなのでしよう!」

これで晴れて「人類の敵」になったわけだ。

ああ、今日是最悪の日だ。

敵部隊は3個班だけ。

ただ、あつという間に敵だらけになる。

全人類を敵に回すとは数分前まで考えた事なかった。

「これは正当防衛ですわ!」

「言い訳無用!女二人も人類の敵だ!!」

後方に居る彼らの怒声を聴きながらもなんだか開放された気持ちがあった。

まるで理性で抑圧されたりミッターが解除されたように。

「ミカサ！ 援護するわ！」

「フローラ!?!…ありがとう！」

「と言つても相手は、精鋭班みたいね！ 同期たちと動きが全然違う！」

「邪魔するなら切り裂くまで!!」

「それは最後の手段にしておきなさい！ 巨人を利用して撒くわよ!!」

敵の敵は味方とはよく言ったものだ。

ミカサの無駄な殺人を防いでかつ敵部隊の人員を減らすには好都合である。

「ミカサ！ 先の交差点を右折して二個先の交差点を左折して!!」

「なんで!?!」

「巨人の群れがいるからよ」

「分かった！ 貴女を信じる」

いくらミカサが人間離れしているとはいえ青年を担いで立体起動で移動するには無

理がある。

最悪の場合、この手を消えない血で汚さなければならぬ。

「なんだあいつら!? 訓練兵の動きじゃないぞ!」

「巨人のスパイだからだろう! 奴らを人間とみるな!!」

必死に追跡をしている精鋭班であつたが、なんと訓練兵に引き離される失態を犯していた。

それほどに彼女たちの動きが化け物染みており、Gなど完全に無視しているようである。

既に後続として率いてきた1個分隊は追跡を断念して、包囲網を構成にする段階に入った。

ただ、ここは巨人が侵入している危険地帯である。

「ミタビー! リコ! あいつらは兵士100人分の戦闘力を持つてるぞ! 一旦退くべきだ!!」

「何言つてんの! だからこそ私たち精鋭班が討ち取るべきでしょうが!!」

イアンは焦っていた。

味方になれば心強い戦力2名を失ったどころか、3つの精鋭班を壊滅させられる危険性があったからだ。

「巨人だあああ!!」

「しまった! やられた!!」

目標が交差点を左折したので、それを追って左折した精鋭12名は巨人の群れに遭遇した。

「畜生! やつぱりあいつらは巨人のスパイか!」

「違う! それだったら巨人を討伐しないだろう!」

「イアンいい加減にしなさい!」

そこには3体の大小の巨人が居た。

ただ、他にも3体の巨人がうなじを斬られたようで黒ずんで蒸発を始めている。

たった2人で僅かな間に3体の巨人をヘッドオンでうなじを斬り落としてみたのだ。それも1人は青年を背負っている上に追跡されているハンデを抱えているにも関わらずだ。

「まずこいつらを手早く片付けるぞ！」

「4人で1体を狩れ!!」

「おう！」

しかし彼らの予想に反して討伐に手古摺ってしまい、更に巨人の増援が来たため、泣く泣く退却する羽目になった。

幸いにも精鋭班で死者は出なかったが、率いた1個分隊が巨人によって全滅してしまい事実上の惨敗である。

フローラは、今日の出来事を日誌に書き記していた。

超大型巨人襲撃から逃亡兵になるまで一日経ってないというのが驚きのスケジュー

ルだ。

少し寝たとはいえ、肉体的にも精神的にも疲労した人生最悪の日である。

「ねえフローラ、エレンって人類の敵だと思う？」

「少なくとも、そう認定されたわね」

「個人的にはどう思うの？」

「エレンはエレンでしょう。それ以上もそれ以外もない。ただ巨人になれるのが発覚しただけ」

「ありがとう」

「改まって感謝されるとなんかムズムズするのよね」

精鋭班には、巨人の群れを押し付けてフローラとミカサは壁上に登って休憩していた。

フローラは大事な同期であり友人であるエレンが巨人になれると発覚しても怖くなかった。

むしろ、間違つてうなじを斬つて討伐しそうで怖いくらいだった。

「さて、これからどうしよう！晴れて人類の敵になったわたくしたちに居場所はないわ」
「シガンシナ区にでも戻る？」

「それは却下、最低でも馬と二週間分の食料が必要よ！いずれ帰るつもりだけどね」

殺人だけはなんとか避けられたが、二人とも人類の敵になってしまった。

それでも人間でいる以上、人類を信じたかった。

「それにしても、いつまで寝ている気かしら？」

「巨人化は相当疲れるみたい」

「せっかく美少女2人に介抱されているのにね！これじゃあエレンがヒロイン枠じゃないわい！」

エレンの容態は安定しており時折何かになさされているくらいだ。

それにしてもアルミンに彼は左脚が欠損したと聞いてたが特に問題なく生えていた。

「ワイヤー音がする！」

「大丈夫、敵ではないわ」

殺意剥き出しで臨戦状態になったミカサをフローラが宥めた。壁上に登ってきたのはもう二度と逢えないと思っていた人物だった。

「あらアルミン、よくここが分かったわね」

「うん、なんとなく来てみたらね…偶然会えてよかったよ」

「偶然…か」

フローラが意識を集中して“声”を聴いても辺りに伏兵は居なさそうである。友人を疑ってしまうほど、彼女たちは追い詰められていた。

「それで何か用？」

「僕がエレンが人類の脅威じゃないって証明するから戻ってきて欲しいんだ」
「説得できるわけないでしょ。それともまたここで説教をする気？」

「アルミン、私たちは脱走兵でもあるの。戻ったところで死罪ね」

「大丈夫だよ！あそこの水門のところで交渉の場を作ってきたよ!!」

ますます疑いが強くなっていった。

つまり駐屯兵団は、アルミンを使ってミカサたちを抹消しようとしているのは明白である。

どうせ、仲がいいって事で選ばれたのであろう。

「私はアルミンを信じる」

「ミカサ、ありがとう」

「アルミンの気転にいつも助けられてたから……だからフローラも信じてくれない？」

「連中の聞き耳がないなら意味がないと……もう勝手にして」

「ありがとう！これでまたみんなで仲良くやれるようにするよ！」

ミカサがアルミンに賭けた以上、フローラは追従するしかできなくなった。

そうと決まれば、交渉の場に向かわなければならない。

時間を浪費するほど交渉が成功する確率が減っていくのだから。

案の定、アルミンの指示通り向かった結果、包囲された。

「反逆者ども！もう逃げ場はないぞ!!観念して死ぬが良い!!」

「アルミン！なにが交渉の場を設けたよだ！相手が交渉する気ないじゃない！！」
「違うんだ！みんな混乱しているだけなんだ！ちゃんと顔を向き合って話し合えば！！」

水門の壁の隅に追い込まれたミカサたち。

毘だど知りながらもアルミンに続いた結果、300人以上に包囲されてしまった。

壁の外に逃走されれば、討伐できないと踏まえたのだろう。

あえて、トロスト区の壁を超えた先に誘導して包囲した。

「コロシテヤル！イツピキ！ノコラズ！コロシテヤル！！」

「エレン？」

「エレン!？」

「ああもう！最悪ですわ！」

ただでさえ、不味い事になっているのに元凶が寝ぼけて殺害予告してしまった。

不幸中の幸いか、叫んだ瞬間エレンが目を覚ました。

なので、これ以上の失言は避けられた。

ただし、発言は撤回できない上に駐屯兵団の兵士が恐怖で震えている。

「おい…今殺してやるって…」

「聞いたぞ！やっぱりあいつ!!」

「俺たちを殺す気なんだ!!」

エレン・イエーガーは意味が分からなかった。

巨人になって、巨人たちを殺す夢を見ていた。

ところが、目を覚ますと殺意剥き出しで駐屯兵団に包囲されていたのだ。

「エレン！知ってる事を全て話すんだ！とにかく誤解を解かなければいけない！」

「はあ？」

「やっぱりあいつは危険だ！ここで討伐する!!」

「いいか！どうやって巨人になったのか、兵団の皆さんに一言一句分かり易く説明するんだ！」

「えっ!?!」

アルミンの話が現実味に感じられなかった。

何故か自分たちが殺意と恐怖剥き出しの駐屯兵団に包囲されているのか。彼らの手には、巨人に向けられるはずの武器を自分たちに向けていたのだ。

「イエーガー訓練兵！意識が戻ったようだな!!」

「えっはい！」

「貴様らがやったのは、人類に対する反逆行為だ！ここで命の処遇を問わせてもらう！」
「もし誤魔化したり少しでも逃走の素振りを見せた場合、榴弾をぶち込む！いいな!!」

エレンは必死にアルミンを庇って胃袋に直行した記憶を思い出していた。

胃袋の死体たちを見て最後まで足掻こうとしたら身体が大きくなって巨人と殴り合いをしていた。

だが、それは夢のほずであった。

ふと自分が立てている事に気付き左脚を見ると何事もなかったように生えていた。ポロポロになったズボンだけが食い千切られたという証拠を辛うじて残している。

「率直に問う！貴様は人間か？巨人か？」

「え？質問の意味が分かりません!!」

「ここに来てシラを切る気か貴様は!!もう一度巨人になる暇など与えんぞ!!」
「貴様が巨人から出現した現場を、大勢が目撃しているのだ!」

エレンは、巨人化して巨人を討伐していたのは夢でない事を知る。
そしてそのせいで、自分を含めた4人が危機に陥っていることも。

「貴様は味方か!?敵か!?!」

「味方です!!」

「人類の味方が巨人になるわけないだろう!!」

駐屯兵団第一師団精鋭部隊であるキッツ・ヴェールマンは、化け物と向き合っていた。

巨人に化けられる人間が人類にとって脅威であることは明白だ。

ウォール・ローゼに得体のしれない化け物を侵入させた以上、排除しなければなら
ない。

「作戦はうまくいきましたね」

「ああ、良かったぞ。取り逃がしたという報告を聞いて卒倒しそうだったが、これで安心

できる」

「精銳班に対する敵対行動で、反抗的態度は明らかです！速やかに抹殺するべきです」
「無論だ！私の考えは変わることは無い」

副官であるリコ・ブレッツェンスカの提言により平穩を乱す異物を抹消をする事を改めて決意する。

いつまでも兵力も時間もここに割くわけにはいかなかった。

5年前にウォール・マリアを破った鎧の巨人がいつ出現してもおかしくないのだ。

もう、駐屯兵団はこれ以上の失態は許されないのだ。

「私の…特技は…肉を削ぎ落とすことです…必要があれば…ここで披露してみせます」

「交渉する気がないなら、もう良いですわよね？道に立ち塞がるなら1人残らず駆逐しますわ！」

異端者エレン・イエーガーを守るように前に出てスナップブレードを構える2人の女
訓練兵。

たった2人でこの包圍網は突破できないはずである。

だが、彼女たちが放つ異様な雰囲気は、巨人と交戦経験があるベテラン兵ですら子犬の様に怯えるほどであった。

「隊長、黒髪の女がミカサ・アッカーマンです！我々精鋭班と任務についていました」「だからどうしたというのだ？」

「彼女の働きは、並みの兵100人の活躍です！ここで失えば人類は大打撃となります」

イアン・デイトリツヒの洞察力をキッツが一番評価していた。

だからこそ、冷静沈着で精鋭の中で最強の彼が彼女を高評価するという事は事実であろう。

「報告申し上げます！もう1人の女はフローラ・エリクシアです！」

「我々が見捨てた兵団本部を、訓練兵のみで構成された部隊の指揮を執り見事に巨人の手から奪還させました」

「その影響により、補給班が友軍にガスを補給できた為、当初生存が絶望視された駐屯兵団の兵士が無事に撤退できました」

「駐屯兵団の兵士だけで100人以上、それにより残された民間人の救出が捗り、予想よ

り損害を抑えられました」

「ふん、巨人を庇った時点でその功績ですら意味もない」

キッツは、ウォール・ローゼの扉が破られるのを一番恐れている。

そこが陥落すれば、トロスト区だけではなくカラネス区やクロルバ区なども放棄しなければいけないのだ。

内地であるウォール・シーナは、農業や縫製、畜産などの開拓地が集中しているウォール・ローゼに依存している状況だ。

扉が破られるという事は、5年前と同じようにウォール・ローゼを放棄するというのと同じ義だ。

そうなれば、確実に内戦が勃発して人類が滅亡する。

内戦を避けて人類を守る為にもトロスト区の住民を見捨てても扉だけでも死守する必要がある。

その為、キッツはローゼの扉付近を中心とした住民を救出した後、兵団本部ごと切り捨てた。

戦力をローゼの扉に集中させたかったのだが、巨人と交戦した前衛部と中衛部の部隊を見捨てた形となったのだ。

当然、撤退命令が出た時、死守命令を下されていた兵士たちが壁を登れるほどガスの残量があるわけがなかった。

「訓練兵や同僚の聴き取り調査を行なった所、彼女たちは初陣において巨人を二桁討伐した実力者です！ここで失うには…代価が…」

「隊長、ガスが補給できたおかげで生還できました！ご再考を！」

「もしかしたら、状況を打開できる鍵になるかもしれません！」

キッツは、ただ人類の繁栄と安定を存続するために規律に従うことしかできない人間であった。

「貴様の正体は何だ！」

「人間です！」

「巨人になれる人間は、人間と言わん！化け物だ!!」

「それでも人間です！」

「悪く思うなよ…これも人類の為だ！」

全人類を守る為、キッツは砲撃を許可した。

「エレン、逃げるわよ！フローラはアルミンをお願い！」

「おいお前ら！オレから離れろ！」

「安心して、既にわたくしたちは人類の敵！もう手遅れなのよ！！」

「待つて！話し合うんだよ！聞いてください！巨人のこと、全て話しますからー！！」

ミカサに抱き抱えられた時、エレンの首元から鍵が出てきた。

エレンは、この鍵を知っている。

「いいかエレン、この鍵を肌身離さず持っているんだ！」

「そしてこの鍵を見る度に地下室に行く事を思い出せ！！」

「お前はウォール・マリアを奪還して地下室に辿り着かなければならない！」

「この【力】は必ず役に立つはずだ」

「ミカサやアルミン、みんなを守るためには、この力を支配しなければならぬ」

父親であるグリシャ・イエーガーの会話を頭痛とともに思い出した。

エレンは、ここで為すべきことは知っていた。

彼は、ただ友人を砲撃から守るために!!

やるべきことはー。

榴弾がエレンたちに直撃した。

命中すれば、巨人を一撃で討伐できる威力をもつ榴弾の爆炎が辺りに吹き荒れる！
そして土煙と共に黒煙が晴れた。

「うああああああ!!」

「きゃああああ!!」

そこには、両肩が挽がれているボロボロな巨人の姿であった。

エレンの大切な友人たちは、肋骨の中で守られていた。

「ごほごほ!…:…:またですかの!?!榴弾の砲撃を巨人がまた守ってくれたの!?!」

「えっ…:フローラ、同じ経験をしたの?」

「困になった時に巨人ごと撃たれましたが何か?」

「なんかごめん」

エレンが巨人を再び、出現させたことと言いつれができなくなった。

これでこの場に居る4人が人類の敵だという事を再認識させただけである。

「それでも僕は、説得して見せる」

そんな絶望的な状況でもアルミンは諦めてなかった。

9話 トロスト区奪還作戦 発動

「おい！大丈夫かお前ら！」

「エレン、これは一体……」

「とにかくこいつはすぐ蒸発する！巨人の死体と同じだ！少し離れるぞ！」

自身でも把握してないエレンであったが、本能的に巨人が崩れると予感して脱出を呼びかけた。

それと同時に榴弾の砲撃から友人たちを守った肋骨が剥き出しの巨人が崩れ始めた。どうやら、うなじから出てきたエレンが重要な活動器官のようである。

「エレン、一体君の身体に何が起こってるんだ!？」

「分からねえ！ただ、一つ思い出した事がある！地下室だ！」

「オレがこうなったのも親父が原因だ！おれの実家の地下室に行けば全てが分かるはずだ」

駐屯兵団の兵士たちは、突然出現した肋骨剥き出しの巨人にパニックになっており攻撃が中断していた。

しかし、すぐに白兵戦なり、砲撃などの行動を続行することになるのは明白である。

「だからオレはここを離れる！」

「どうやって、どこに予定なの？」

「どこでもいいさ！もう一回、巨人になってここから脱出して地下室を目指す」

エレンは、とにかくここから脱出するつもりであった。

だが、顔色が悪く鼻血を出しており体調不良であることは第三者から見ても分かる状態である。

「オレに2つの考えがある！オレさえ庇わなければお前たちは…」

「その点については大丈夫ですわ！既に人類の敵って罵倒されたので」

「そうね、既に私たちも殺されかけた！なら一緒にエレンについていく」

2人も抹殺対象だと知ってエレンは右手を顔面に当てて悩み始めた。

アルミンはその様子を横で眺めていながら過去を思い出していた。

今までの人生を振り返って自分は臆病者以外の何者でもなかった。

何度もエレンやミカサやフローラに助けられてきた。

そんな彼らがここから脱出するというのだ、

もう、「シガンシナ組」と呼ばれた4人は揃う事はなくなるだろう。

「待てよ！あくまでこれは最終手段だ！もう一つは、もつと非現実的だがな」

「どういう事？」

「アルミンがオレが脅威じゃないって駐屯兵団を説得できればオレはその判断に従う」

「できるか、できない。どちらでもオレは従う。お前の意見を尊重して行動をするぞ」

「まあ、アルミンの作戦には助けられましたね。わたくしもそれで賭けてみますわ」

「アルミン、あなたの答えは？」

頼れる3人が自分を信じてくれている。

どんな時もガタガタ震えている事と教科書通りしかできない劣等生に全てを委ねている。

「ねえみんな、なんでそんな大切な決断を僕に託すの？」

「お前はやばいって言う時ほど、正解を選べるって知ってるから頼りたくなつたのさ！」
「5年前のあの時だって、お前がハンネスさんを呼んでなかったらオレ達は死んでたしな」

「そもそも交渉したいって言ったアルミンの話に乗ってきたわけですし、今更よ」

「ええ、アルミンを信じて私たちは戻ってきた。だから責任もって決断しなさい」

自分で無力で足手まといって思っていたが友人たちはそう思っていなかった。

ここで行動しなければ、エレン達の覚悟が無駄になるのだ。

アルミンは腹を括り一世一代の大舞台で最後になるかもしれない演説を披露するのを決めた。

「絶対に説得して見せる！だから極力抵抗の意志がないことを示してくれ！」

頼もしいアルミンの後ろ姿を見送りつつ、ミカサとフローラはスナップブレードと立
体起動装置を地面に置いた。

「説得できると思うか？」

「少なくともあの頭でつかちの指揮官は無理でしょうね」

「周りを巻き込んでくれれば、うまくいくかもしれない」

「オレも同意見だ、とにかく結果を見守るしかねえな」

既に3人は、さきほどの不毛な会話の応酬で説得が無理のは分かっていた。

「もういつその事、全裸になればあの頭でつかちが鼻血を出して卒倒するんじゃないかしら」

「真面目そうだもんね。別に減るものじゃないし、フローラの意見に乗ったわ」

「待て待て待て！お前ら正気か!?おい！本当に脱ぎ始めるな!!」

「どうせ死ぬなら仲良く全裸で死んで、殿方の目の保養にでもしてあげましょう」

「やめてくれ！せめてアルミンの演説を全部聞いてからやってくれ！」

「拒否自体はしないってことは、エレンも大人になったのね」

「ミカサまでそんなことを…」

アルミンが、駐屯兵団の兵士たちに魂を揺さぶる説得をしている裏では緊張感がない

会話が續いていた。

エレンは気づく事は無かったが既にフローラもミカサも説得に失敗した後の事を想定していた。

ただ、勘付かれない様にわざと兵士たちに聞こえる様に色惚けじみたやりとりをした。

あの指揮官を殺害して、兵士たちを混乱させてどんな犠牲を払ってもエレンを逃がせるようにと。

「わたしは、とうに人類復興の為なら心臓を捧げると誓った兵士!!」

「人類の勝利の為に必要ならば今ここで、命を捧げて見せましょう!!」

「彼の〔巨人の力〕と残存兵力を組み合わせればトロスト区奪還も不可能ではありません!!」

「わたしは、人類の栄光を願い！不可能を可能にする彼の存在価値を説きます！」

指揮官が例え思考を放棄していても誰かに届けばいい！

アルミンは一世一代の大舞台で演説をやりきってみせた。

その雄姿をシガンシナ組が見届けた。

「どう命乞いしようとも私は規則に従うまでだ！砲兵…」

「よさんか」

キッツ・ヴェールマンは右腕を振り下ろそうとした瞬間、第三者に掴まれて驚愕した。

「ピクシス司令…!?!」

「凶体の癖に小鹿のように繊細の男じゃのう！おぬしにはあの者の敬礼が見えんのか？」

「司令！私は人類の為に…」

「今到着したところじゃが、早馬で情報は伝わっておる。貴公は増援の指揮をとれ」

「…わかりました」

駐屯兵团司令官ドット・ピクシスは、演説を行なった勇敢な訓練兵に心を打たれた。

巨人の力と残存兵力でトロスト区奪還できるといふのだ。

南部領土のそして最重要区防衛を王政府より託された身としては、見逃すはずもなかった。

「わしが全責任を取る！君たちの罪状は全て抹消する事をここに宣言する!!」
「その代わり、人類の為に協力してくれないか！」

その瞬間、演説を行なった訓練兵は泣き崩れて、背後に居た訓練兵たちは座り込んだ。その4人の中で見覚えがある訓練兵を見つけてピクシスは口角を上げた。

「やっぱアルミンに任せて成功だった！」

「そんな事ないよ！ピクシス司令官のおかげだよ」

「司令官の心を動かしたのはアルミンよ」

なんとか、首の皮を繋ぐことができアルミンは一息ついた。

ただひたすら生き残る事を考えたせい、二人から褒められても謙虚してしまう状態だった。

「ところでフローラだけ名指しで指名されたんだが、なにやらかしたんだアイツ？」

「僕にも分からない。ただ……」

「ただ？」

「フローラは何故か駐屯兵団の高級士官用のガスボンベとブレードを所有していたんだ」

3人は、ピクシス司令に頭を何度も下げているフローラを眺めていた。

「申し訳ありません閣下！頂戴したボンベとブレードは全て消費してしまいました！」

「それで巨人を討伐できたのなら喜ばしい事じゃないか！そこまで頭を下げんでよい」

「それだけではありません！信煙弾を乱用してしまい兵団全体に混乱をもたらしてしまいました!!」

「頭を上げたまえ！わしは君の謝罪を聴くために呼んだわけではないぞ！」

やはり、この娘は若きキース・シャーデイスにそっくりである。

部隊長までこなせるが、彼女が本領を発揮するのは単独になった時だ。

「君には、あとで重要な役職に就いてもらう！さて、友人たちをこちらに呼んできてくれたまえ」

「ハッ！」

ただ、あくまでも人間であるキースと違って、彼女は人の皮を被った悪魔に見えた。

「ピクシス司令！お連れしました！」

「ふむ、よろしい！アルミン訓練兵だったかのう？」

「ハッ！」

「おぬしは、さきほど巨人の力を使えばトロスト区を奪還できると言ったな」

「それは、本当か？それとも苦し紛れの嘘か」

「両方です！トロスト区の名物の大岩で、門に空いた穴を塞ぐことを提言したかっただけですが…」

ピクシスは、すぐにその案に興味を惹かれた。

穴を防ぐことができれば、トロスト区を取り戻すことができる。

「エレン訓練兵よ」

「はい！」

「穴を塞ぐことができるのか？」

「はい！塞いでみせます！どんな犠牲を払っても！」

ピクシスは、彼の言葉と覚悟を決めた顔を確認して確信した。

「良く言った！すぐに参謀を呼んで作戦を立てよう！！参謀を呼んで来い！」

「はい、お呼びですか？」

「司令、ここにおりますが……」

「……アンカ、グスタフ、もう少し、わしに恰好つけさせてもいいのじゃよ？」

「冗談は飲酒している時だけにしてください」

アルミンは、自分の提案した案が採用されたことに驚愕したと同時に恐怖した。

「皮算用ですらない思い付きなのに……」

「オレもそう思ったが、この作戦には根本的な欠陥がある」

「どういうこと?」

「敵は巨人だけじゃないってことさ」

エレンはフローラの顔をみる。

優しいそうな近所のお姉さんに見える。

だが、彼女の中身はこんなものではない。

「おそらくフローラが真っ先に捨てた物さ」

「マルコ、俺、気付いちまったんだ」

ダズ・ウィズリーは絶望していた。

なんとか壁上に登って部隊を再編制する間の休憩中に気付いたのだ。

「俺たちの仕事って、巨人に喰われるまで戦わされるってことを!」

「もう嫌だああ!!無残に喰われるくらいなら今ここで…!!」

「やめろダズ!みんな同じことを思っているんだ!」

「サシャを見てみる!あんな目に遭ってもいつも通りだぞ!」

「ぐああああ…急にお腹があああ!」

ダズだけではなくサシャもジャンもコニーも恐怖で押し潰されそうだった。

成功させたはずの兵団本部に突撃する決死作戦ですら、今では絶対にできないだろう。

無謀な作戦であったがフローラの大げさな手振りと言論が一致しないギャツプ萌え。

そして、目の前を通りかかった際に漂う甘い香水でうまく誤魔化されていただけだ。

恐怖の対象である巨人をいとも容易く討伐してしまう彼女の背中に付いていたからできたのだ。

逆に言えば、ムードメーカーでメンタルケアの達人である彼女が居なくなった途端。

死の恐怖と、巨人の恐ろしさ、なにより【護ってくれる存在】の消失で精神が総崩れになった。

「おお！クリスタ無事だったか！」

「うん、なんとか生き延びることができたよ！ライナーも無事でよかった」

「おう！俺はあんな所でくたばる気はなかったからな！」

「そういえば、フローラってライナーの班だったよね？」

「ああそうだ！コニーたちが心配になって増援に向かわせたんだ！」

「ありがとうライナー！おかげで私もジャンも死なずに済んだよ！」

ライナーはクリスタに抱き着かれて顔を赤く染めており、内心でガッツポーズをしていた。

それを呆れて見守るベルトルトとアニ。

「よし、あとはお前たちだけだ！すぐに指定された場所に待機せよ！」

「ハッ！ハッ！」

ダズだけは返事をせずに俯きながら待機した。

直立不動で待機している同期や先輩たち。

何故、そんなに普通にいられるのか疑問である。

「はあ？トロスト区奪還作戦!？」

「今からですか!?!穴を塞ぐ手立てがないのに!？」

「上官ども！そんなに手柄が欲しいか」

前方から広がってきた噂は、秩序を崩すには充分であった。

ダズの脳内に思い浮かぶのは、両親と可愛い妹である。

任務に行けば、もう二度と逢いに行けなくなるだろう。

「やだ行きたくない！家族に逢いたい！」

「ダズ、声がでかいぞー！」

あの時、自分たちに助けを求めた4人家族。

それが自分と両親と妹を映し出しているようでー。

兵士になれば家族を守れると思つた。

だけど現実、自分より優秀な同期や先輩が成す術もなく巨人に喰われた。

巨人を二桁討伐したフローラですら、片手で数えられる人数しか守りきれずに泣いたほどである。

「やだやだ!!家族に逢いたい!!」

「貴様!任務を放棄する気か!」

自分が、いや仲間たちが必死に訓練してきたのは家族を守る為である。

決して、巨人に特攻して喰われる為に訓練したわけではない!

「こんな無意味で成果もない作戦に命なんて賭けられるか!」

「正気か!?私には貴様を処刑する権限があるのだぞ!」

「望むところだ!巨人に喰い殺されるくらいなら!!」

スナップブレードを抜いたダズの反逆行為に動揺する同期や駐屯兵団の兵士たち。

その大半が同情しており、班長やベテラン兵、士官のみが彼の反逆行為に対処しようとした。

「注もおおおおお!!」

「これから！トロスト区奪還作戦を！説明する！！」

「この作戦の！成功目標は！破壊された！扉の穴を！塞ぐことである！！」

壁上からピクシス司令より作戦概要が説明された。

「どうやって？」

「無理に決まってる」

司令は、すかさずエレンを前に出して息を大きく吸った。

「まず！作戦の要の彼を！紹介しよう！彼の名は！エレン・イエーガー！！」

「彼は極秘に研究された巨人化人体実験の成功者である！」

「彼は巨人の肉体を精製し、意のままに操ることができる！」

「巨人と化した彼が、トロスト区名物の大岩を持ち上げて門の穴を塞ぐ！！」

「諸君らの任務は、彼が大岩で穴を塞ぐまで他の巨人から守る事である！！」

ピクシス司令の発言は、壁下で整理していた兵士たちを混乱させるのには充分であった。

「本当にそんなことが…」

「そんなわけあるもんか！死地に向かわせる口実に決まってる！」

「人間兵器なんか信じる奴なんているのか!？」

ダズは確信した。

これは兵士を特攻させてローゼの扉を守る時間稼ぎに過ぎないと。

「ふざけんな！俺たちは、使い捨ての刃になる為に訓練してきたわけじゃねえぞ!!」

「おい、死罪だぞ!!」

「ああ、そうですか！俺は人類最後の日を家族で過ごさせてもらいます！」

地獄を見てきたからこそ、ダズは装備を持ち逃げして家族の元に帰ることにした。
そんな彼の勇気ある一歩により、秩序が崩壊した。

「そうだそうだ！意味が分からん作戦で命を投げ捨ててたまるか！」

「集団自殺なんてまっぴらだ!!」

「俺は逃げるぞー！」

「私もー！」

訓練兵や駐屯兵団の兵士、まさかの精鋭班の副班長まで壁から背を向け始めた。

既に一度、前衛部と中衛部に展開していた部隊を見捨てた兵団上層部に不満があったのだ。

「味方を見捨てたお前らなんか信用できるか！」

「訓練兵にすら劣る上層部がなにを偉そうに！」

「どうせ我々も見捨てるんだろう！お前ら帰るぞ！！」

「「おう！！」」

その光景を見ていたキッツ・ヴェールマンは覚悟を決めた。

秩序が完全に崩壊する前に脱走兵を殲滅して規律を保つ為に！

「反逆者共！！一人残らず肅正してやる！！覚悟はいいな！！」

「隊長、協力します！」

「人類の存続のためにいくらでも手を汚しますよ！」

「…すまん」

速やかに反逆者を抹殺して秩序を回復させる。

それが自分の使命だと理解しているキッツは迷うはずもなかった。

協力してくれる部下たちに心の中で感謝し、反逆を企てた先導者を見据えた。

「わしが命じる!!今この場から立ち去る者の罪を免除する!!」

思わずキッツは、スナップブレードを手から落としてしまった。

まさかの脱走許可が下りて、逃亡していた兵士たちも一度足を止めた。

「巨人の恐怖に屈した者は、二度と立ち直れん!」

「巨人の恐怖を知ってしまった、武器をとれない者は、今すぐ立ち去れ!」

「ただし、その恐怖を!子供、伴侶、兄弟などの愛する家族に味合わせた者もこの場から立ち去れ!」

逃走していた兵士たちは動揺した。

「それはできない…娘を喰わせはさせない！」

「畜生、やるしかないのか」

「ウォール・ローゼが陥落すれば、オレ達の家族が…」

誰もが愛する家族、知り合い、親戚がおり巨人に踏みにじらせたたくないのは当然である。

トロスト区の悲劇を自分の家族に同じように味合わせたい兵士などいない。

誰もが家族を守るために兵士になり、壁を守ってきたのだから。

「4年前の話をしよう！ウォールマリア奪還作戦の話じゃー！」

「奪還作戦というと聞こえがいいが、実際は養えない失業者を口減らしにした作戦だった！」

今から4年前にウォール・マリアを奪還するべく、ウォールマリアの住民の半数近くを動員した。

「諸君らも感じた様に訓練した兵士ですら成す術なく殺されるあの巨人共に！」

「農具や狩猟銃を持たせた民間人を動員したところで効果がないことを!!」

「結果がどうなるか！おぬしたちが一番詳しいはずだ!!」

結果は惨敗した。

人類は1割ほどの人口を失った。

だが、それにより物資生産量と人口が辛うじて釣り合った。

更に山間部や農地に適さぬ場所も開拓地としてウォール・マリアの住民を投入した。それによりようやく今年になって、人々の暮らしが元に戻りつつある。

「前は、ウォール・マリアの住民が少数だった為、内戦はなんとか抑えられた！」

「だが、ウォール・ローゼが突破されれば、話は別じゃ!!」

「ウォール・シーナだけでは、人類の3割も養えん!!」

トロスト区が陥落すると、ウォール・ローゼの扉が破られるのは全く別問題である。トロスト区が陥落してもウォール・ローゼの土地は守られたままである。

しかし、ローゼの扉が突破されれば、ウォール・ローゼを放棄しなければならない。

奇しくも、トロスト区の犠牲者を増やしてでも辛うじて守れた扉が陥落すればー。
本日に発生した犠牲は全て無駄に終わってしまう。

「人類は、巨人によって絶滅しない！」

「人類は、シーナとローゼの住民による内戦で滅びるだろう！」

「だからこそ、我々はこの壁より後ろで死んではならんだ！」

「どうか！ここで死んでくれ！」

「トロスト区を奪還する為に死んでくれ！」

ピクシス司令は、壁下にいる兵士たちの大半を無駄死にさせる覚悟で告げる。

「家族を守りたい者だけが任務に参加せよ！トロスト区奪還作戦を本時刻をもって開始するー！」

「心臓を捧げよ!!」

「「ハッ!!」」

「以上だ！」

ピクシスの演説を受けて兵士たちは、自分たちの迂闊な行動に反省して部隊へと戻っていく。

負傷兵、心的外傷後ストレス障害など精神障害がある兵士以外の全員が参加するのだ。

失った小さな領土を奪還する。

それは、人類にとってマイナスをゼロに近くする行為である。

だがその行為は人類史上、巨人に勝利したという快挙の証である。

人類が初めて巨人に勝利するための戦いが始まった。

10話 圧倒的な技量不足

ローゼの扉は、丈夫な網の繋ぎ目に結ばれた銚に突き刺さって身動きが取れない巨人たちによって守られていた。

通常、巨人は巨人を攻撃しないのを着目した駐屯兵団の技術班によってなされた応急処置だ。

巨人で扉を守るといふ逆転の発想の勝利であった。

ただし、いつまで保つのかは誰にも分からない。

その人類最後の希望を死守する責任者は、トロスト区駐屯部隊長ハンネス・ルドマンである。

「5年前まで飲んだくれだったオレが最後の砦の警護を任されるとは皮肉な物だ」

人類の未来がどうなるのかは、良く分からない。

ただ、少しずつ着々と変化しているのは実感できる。

守られる事しかできなかつた3人は、既に立派な兵士になった。

一人は高い戦闘技術を、一人は強靱な精神力を、一人はとても賢い頭を持っている。

ならば、彼らに笑われないように自分の責務を全うして手本になるべきである。

「見ているしかできないとは、こんなにも歯痒いものだな」

ハンネスが壁上から見下ろすと現時点で動員できる総戦力が展開していた。

彼らの大半がエレンの為に囚になり、その何割かは戦死するのだろう。

それでも彼らの犠牲無しには人類は勝利ができない。

この世は、等価交換。

何かを得たいなら何かを支払わないといけないのだ。

たとえば、代価が1000個の心臓であっても。

「何をしている！・さささつと進め!!」

不甲斐ない兵士たちに喝を入れるベテラン兵ですら涙をこぼして震えていた。

彼らを支配しているのは恐怖である。

時には大きな原動力となる恐怖であるが、その象徴が目の前にいるのだ。その圧倒的な恐怖を前にして、人間は思考を停止し歩みを止めてしまう。ただ1人の例外を除いて。

「行くしかありませんね…」

フローラ・エリクシアは、「恐怖」という生物が持つべき感情が欠如していた。

もちろん大事な同期や知り合いを失ったら悲しむ感情を持ち合わせているがそれだけであつた。

「ミカサ・アツカーマンは、精鋭班と共にエレンの護衛についてもらう」

「はい分かりました」

「アルミン・アルレルトは、作戦立案者として、我々と共に壁上から巨人体となったエレンを観測してもらおう」

「ハッ！了解しました」

一番強いミカサがエレンの護衛に付き、アルミンはピクシス司令と参謀たちと共にトレスト門にほど近い所の壁上で待機する。

別に問題はないし、誰からも異論が出ない当然の結果だとフローラは思っていた。

「フローラ・エリクシアは、遊撃要員として、できるだけ多くの巨人を討伐せよ」

「は…えっ？」

ピクシス司令から告げられたのは、遠回しの死刑勧告であった。

「お待ちください！わたくしは人間ですよ！ガスもブレードも尽きれば囮にすらなりません！」

「そこじゃ！おぬしは、補給があればいくらでも巨人を討伐できるという事じゃ！」

「えっ…」

「安心せい！補給は駐屯兵団の精鋭部隊が担当しておる」

「ちよつと待つてください！？」

いつの間にか、君の任務は死ぬまで巨人と交戦せよ…と言わんばかりである。シガンシナ幼馴染3人組はおろか、参謀たちまで唾然としている。

「何か問題点でも?」

「大ありです!何故訓練兵であるわたくしが、精鋭班ですら卒倒するレベルの命令を!」
「おぬしが巨人の大群を引き連れてここに来た時から確信していたのじゃ」

「君は、皆を導く道標となる素質があり、兵士の命を救える実力があると…やってくれるな?」

「…はい分かりました」

肩を叩いてきた司令官の命令に逆らえ切れずに承諾したフローラ。

その代わり、最優先で補給を受けられる権利と、臨機応変に移動できるほどの権限を授かった。

エレンたちも参謀たちも同情の眼差しをしていたが、彼女からすれば何の慰めにもならなかった。

フローラは、足枷になる【恐怖】という感情がない事に感謝していた。

それと同時に恐怖で足が竦んでいる者たちを導くのは自身の役割だと理解していた。皆が濃霧で前に進めないのを明かりを燈して道標になるのが自分だと。

ここでいう恐怖が巨人であるならば一匹残らず駆逐すれば良い事だ。

「所詮、我々は囷だ！巨人共を惹きつけるだけでいい！」

「無駄な戦闘を避けよ！一体でも多く惹きつけるんだ!!」

無我夢中に巨人のうなじを斬っていたら両方のブレードの根元が折れていたのに気付いた。

ピクシス司令から頂いた高級士官用の『二式刀身』と比べると遥かに強度が劣っている。

いくら補給の最優先権限があるとはいえ、数体討伐するだけで折れていては話にならない。

刃を差し替えながらも何か対策を打たないといけないのを実感していた。

「ぐああああっ!!」

「班長ー!?!」

「だめだ!!逃げきれないいい!うわあああ!!」

“声”を聴いてみると巨人に4人で立ち向かった班が半壊していた。

そもそも巨人相手にリヴァイ兵長のように1人で立ち向かうのが間違っているかもしれない。

「そこね!」

“声”がした方向から紫の煙弾が打ち上げられたのを確認して現場に急行する。

それが唯一の遊撃要員としての任務だから。

9 m級が目の前にいる兵士たちに気が取られている内に背後にまわってうなじを斬る。

「おお!助かった!」

「よくやってくれた訓練兵!!」

他人から感謝されるのは嬉しくないわけではない。

ただ負の感情を剥き出しにした「声」を聴き続けているフローラはそちらの方に慣れてしまった。

巨人の「声」を聴けば、囿になっている兵士たちの方に群がってきている。作戦通りにエレンが出現する予定の場所から壁へと巨人を誘導できていた。

「黒色の煙…奇行種ね！これは狩っておかないと！」

ただし、奇行種は動きが読めない為、狩らないとエレンたちの移動の妨げになりかねない。

現場に急行すると4足歩行で民家を体当たりで破壊しつつ兵士の頭を食べている奇行種が居た。

動きが奇行種を凌駕しており肌が日焼けしたように肌黒く白色の刺青のある様な巨人である。

さきほど黒色の信煙弾を打ち上げた兵士なのだろう。

まだ微かに身体が痙攣していた。

「よせ！こいつは勝てない！逃げるんだ!!」

「こんな獣未満な奴に遅れは取りませんわ！」

逃げ回る先輩からの警告を無視して機動力を削ぐためにフローラは左手首に斬り掛かった。

しかし、他の巨人と比べて体表が硬いのか勢いが足りないのか刃が弾かれてしまった。

やむを得ず建物を利用して反時計回りで回避をする彼女であるが、巨人は容赦なかった。

「いの…!!」

突然倒れ込むようにフローラが居た場所に転がり回って民家を破壊した。

フローラは直感で理解した。

こいつが“変異種”だと！

だからこそ、こいつをミカサたちに向かわせるわけにはいかなかった。

「はあ!? うなじが硬過ぎますわ!!」

どんな巨人も攻撃を回避してうなじを刈り取るだけでいい。

ところが、こいつはうなじに鎧が覆われている様に硬くてブレードが歯が立たなかった。

巨人は、鬱陶しいそうに両脚で立ち上がり両手を押し付けるように勢いよく叩き付けた。

間一髪回避を成功させたフローラを嘲笑うかのように怒涛の追撃をしてくる。

「あいつ、マジで戦ってるぞ…」

「今だ!今のうちに逃げるぞ!!」

「でも…」

『変異種』に10人以上殺されて必死に涙目で逃走してきた3人の兵士たち。

成す術なく同僚や部下が死ぬのを振り返りながら見る事しかできなかつた者たちだ。

次に狙われるのは彼らであったが、訓練兵に巨人が気を取られたおかげで壁まで逃走できた。

「何なんだあいつら！どつちも普通じゃねえ!!」

“変異種”は地面に叩き付けた両手を軸にして回転の遠心力を武器にした蹴り技を繰り出してきた。

一方、女訓練兵は地面ギリギリになりながらも立体機動で両手の隙間に潜り込むついでに左手首を斬り付けた。

斬撃は効果なかったが衝撃で重心が傾いて転倒した巨人は、刺青のような所が赤く染まる。

まるで激高したかのように咆哮した巨人は、障害物を無視するようにフロアに向かって突き進んできた。

その様子を兵士たちは見守る事しかできない。

「あらあら獣になりましたわね。所詮、怒りで猪突猛進するしか行動できない獣」
「動きが分かり易くなった分、さきほどより隙だらけですわよ!!」

彼女はブラックアウトに耐えながらもアンカーを休む暇もなく射出し続けて立体機動で小回りに回避していた。

しかし、巨人はその動きを読んでいたのか、両手で指を組んで掌を大きく腹に叩き付けて口から何かを吐き出した。

その何かは、射出したワイヤーを霞めて屋根に激突して地面に転がり落ちた。

それは、さきほど齧って喰い千切った兵士の頭部であった。

「えっ……吐き出した物を飛ばしてきたの……!？」

吐瀉物を自分に向けて飛ばしてきたのは、ある程度動きを予想していたフローラですら想定外であった。

動きが止まったのを目撃した巨人は調子に乗ったのか、何度も腹を叩き付けて吐物を彼女に向けて飛ばしてきた。

まるで無くなった分は、自称世界一美味しいお肉であるフローラで埋め合わせるかのように胃の中を空にしていく。

「巨人が遠距離攻撃してくるなんて！そんなの無しでしょおおお！」

「なんで激高したら、知能がアップするのよおおお！」

民間人や兵士の成れ果てである吐物は、直撃するのも脅威であるが一番問題なのはそこではない。

胃液を広範囲でばら撒きながら飛んでくるのだ。

もちろん、いくら酸性の液体とはいえ瞬時にあらゆる物を溶かすほどの劇薬はない。

だが、肌に触れれば大きな痛みを伴ううえに、目に付着すれば失明させるほどの威力があった。

それを何度も飛ばしたせいで空気中には霧状に漂う胃液がある状況だ。

汚いスプリングラーは、白兵戦を挑む兵士からみれば想像以上の脅威であった。

「あああああ!!汚物を見せるんじゃないわよおおお！」

さすがに胃液の霧を浴びるつもりはなかったフローラは建物を利用して後退した。

逃がさないとと言わんばかりに4足歩行で突っ込んでくる変異種をうまく撒こうとした。

「うぐっ」

内臓を圧迫し過ぎて呼吸すらできなくなつて首元に手を当てた彼女であつたがその瞬間、最後の賭けを思いついた。

幸い、巨人の「声」が聴こえるおかげで大まかな位置を推測できる為、安心して呼吸を整えられた。

「…えっマルコ!?!」

いざ、反撃に移ろうとしたその時、マルコの悲痛な叫びが聴こえてきた。

アニやベルトルトの負の感情を抱いた「声」も聴こえてくる。

ただ、距離があり過ぎるのと、周りの声が煩くて内容まで聞こえなかつたが。これはさっさと変異種を撃破して救援に向かわないといけない。

「そのゲロ男! さっきはよくもやってくれたわね!! 覚悟しなさい!!」

「ぐおおおおおおっ!!」

わざと目の前に飛び出して変異種を煽るお肉。

ようやく見つけたと言わんばかりに突っ込んでくるゲロ男。

その攻撃を華麗したフローラに向けて、同じように腹を叩いて吐物を撃ちこもうとした。

その瞬間、待ってたと言わんばかりに彼女は正面に突っ込んでいった。

「隙あり!!」

腹を叩き、胃から口内まで吐物を運んで、それを口で撃ち出す動作までの僅かな隙がある。

立ち止まって吐瀉物を撃ちこむまでの間に両目に向けて破損したブレードを投げつけた。

さすがに眼球は鍛えようがないので突き刺さった瞬間、咆哮しながら両目を両手で抑えた巨人。

巨人の眼球を攻撃しまくった彼女だからこそ思いついた策である。

「てえいー！」

巨人の視界を奪う事に成功したフローラは、喉頭の上にスナップブレードを深く突き刺した。

その柄にワイヤーを絡ませて両手で握り締めて左のガスを多めに噴出をした。

「ううっ！」

結果、反時計回りに高速で螺旋状に回転しながらブレードは切り口を広げていった。

その様子は、まるでねじ切りの工程のようである。

ただし、回転しているのは刃具の方でありそれに固定されたフローラである。

何故うまく巨人の首を中心にして、螺旋状に斬れたのかは本人ですら分からない。

慣性力とか遠心力と向心力とか考える事すらできなかった。

何故なら、今までと比べ物にならないGが身体を圧迫させ気絶寸前だったからだ。

「そー……！」

辛うじてうなじを斬ったのを目視で確認した彼女は、屋根にアンカーを射出して飛び出していった。

それ以上の行動を取ることはできずに、まるで振り子のように徐々に勢いを殺していくのを待った。

そして揺れ幅が大幅に狭くなった頃には彼女は動かなくなっていた。

「やりやがったぞ!?!」

「と言ってもあの様子じゃ死んでいるんじゃない…」

「とにかく確認するぞ」

その様子を見守っていた3人の兵士は駆け寄って生存の安否を確認する為に思わず駆け出していた。

「生きてるか!!」

「(ぼ)ほ…」

「マジかよ、あの動きで生き残るのかよ…」

「(ぼ)ほ(ぼ)ほ! ハアハア…生き…てる…の…」

兵士たちが揺さぶった衝撃で彼女は目覚めたが意識が朦朧としていた。うなじは固い皮膚に覆われていると踏んで柔らかい首を狙って螺旋状に斬ろうとしたのは覚えている。

ただ、あそこまで肉体の負担が掛かるとは思わなかったのだ。

「声〃が…聴こ…る」

「声!?!」

「巨人…そこ…」

3人の兵士が女訓練兵の指差した方向を見る。

そこには、追加オーダーが入りましたと言わんばかりのさきほどの巨人が3体居た。ご丁寧に、1体は吐瀉物を口で飛ばしてきている。

「お願いが…の」

フローラは残された力を振り絞ってお願いをした。

兵士たちは、恐怖に耐えながらも瀕死状態の訓練兵の願いを聞こうとした。その1時間後、1個分隊規模を率いている元気なフローラの姿が！

「あそこに居るのも奇行種よ！」

立体機動訓練のし過ぎで死にかけたなど日常茶飯事。

呆れたキース教官から立体機動装置使用禁止令を発動された日。

逆立ちし過ぎて倒れたり、ワイヤーで訓練し過ぎて何度も医務室送りになった彼女に隙は無かった。

「よし俺がやる!!」

「では、援護しましょう」

あの後、一時的に兵士たちに時間稼ぎをしてもらった間に完全復活した彼女が囮になった。

それと同時に壁上固定砲を運用している砲兵たちを活用した。ブドウ弾は、榴弾と違い巨人に対してさほど効果がない。

あの変異種なら尚更であるが、足止めするには充分であった。

何度か攻撃している間に【刺青】がうなじの装甲を脆くする弱点と判明してから早かった。

「しゃああ！これで3体討伐した！討伐してやったぞ!!」

「これだけ活躍すれば出世は間違いないな」

刺青部分は通常の巨人と同じ皮膚であり、そこを斬ると一時的に動きが鈍くなる。

激高すると刺青が赤く染まる所を見ると何か巨人に影響を及ぼしているのは明白だ。

しかし、原因究明などして居る場合ではなくささっと変異種を討伐した。

「憲兵になって内地で優雅に暮らせるのはいつになることやら」

「そうなる前に巨人に喰われそうだな」

「もういいでしょ!?!これ以上の討伐するのはガスの残量で厳しいわ!」

フローラは最優先で補給を受けられるのを悪用して、榴弾やブドウ弾、ガスボンベなどを補充した。

武器やガスは消耗品として割り切って、使い潰すことにしたのだ。

そして、兵士3人と共に救援に向かって行っていたらいつの間にか1個分隊規模になっていった。

「しかし訓練兵に率いられるとは…」

「じゃあ、お前が変わってやれよ」

「残念だが、俺はまだ死ぬ気はない」

1番強い訓練兵が駐屯兵団の兵士を率いるという付け焼刃の編成であったが意外とうまくいった。

臆病者は索敵に、脱走兵には砲兵との連絡係に。

戦果を挙げて憲兵になりたい者は、うなじだけを狙わせた。

ただ役割分担しただけで、巨人を狩れてしまった。

そして救出した兵士が次々に加入していった。

「これだけやっておけばいいですわ！壁上に戻りましょう！」

「ああ、やっと帰れる…」

「はあ!?まだいけるぞ!」

「憲兵志願のお前だけ残って好き勝手に狩つてろよ!」

「済まん、やっぱ帰る!」

砲兵部隊の協力があつたとはいえ、最終的に分隊は、通常種4体、奇行種8体、変異種3体を討伐した。

トロスト区奪還作戦で挙げた戦果の中で最高であり、二度と記録が塗り替えられることもないだろう。

壁上に帰還したあと、フローラは名も知らぬ兵士たちと1人ずつ無言で抱擁してから別れた。

あまりにも情が移り過ぎると、同期以上に大切な存在になってしまうから。

一方その頃、エレンは複数の精鋭班とミカサと共に大岩を目指していた。

大岩は、トロスト区のほぼ中央にある自然公園に存在する。

下流によって運ばれてきたと思えない大岩は、トロスト区住民の数少ない自慢であり

名物だった。

「いいかエレン！ 巨人の大半が囷に釣られたとはいえ奇行種は釣る事ができん！」

「だからこそ、貴方の護衛として私たちが居るの」

「もし、少しでも失敗だと判断したらすぐに見捨てるからな！ 覚悟しておけ！」

「分かっています！ 必ず成功させます」

精鋭班はエレンの事を信用しておらず、ピクシス司令の命令なので従っている状態であつた。

家々の屋根を立体機動で駆けまわり目標の大岩に目指していく。

ちようど、巨人化するにはいい大通りが見えてきた。

「なんてことだ…」

歴戦の猛者であるミタビ・ヤルナツハが思わず目を逸らしてしまう惨状が眼前に広がっていた。

ここはトロスト区でも活気がある商業区であつた。

リース商会が中心となって数十年かけて造り上げた区間は屍で覆われていた。

「もし壁を突破されれば、こんな犠牲者じゃ済まねえな！」

「なんとしても穴を塞がねば人類に希望は無いつて事か」

何度も巨人に踏まれたのか、原型すら留めておらず肉塊にしか見えないほどである。

この惨状を見て、エレンは自分の双肩に大勢の兵士と王政府民の命が賭けられているの自覚する。

だからこそ、あの大岩で穴を塞いでみせる！

そう決意した彼は、無意識で左手首を噛み付いた。

「なるほど、確かに巨人になったな……」

「この巨人が人類の未来を左右するなんて……胸糞が悪いな」

民家の一部を破壊して大量の煙と共に出現した15 m級の巨人。

威嚇するように雄叫びをあげて腕を振り上げている。

「エレン…」

変わり果てたエレンの姿をミカサが見つめる事しかできなかった。
動き始めた彼の様子を屋根の上で見ている彼女はある事に気付いた。
彼が目標である大岩の方向に向かって歩いていないのだ。

「エレン!?!どうしたの!?!そっちじゃない!!」

ミカサがエレンに呼び掛けると彼は無言で振り返った。

その目は、まるでどこにも居る巨人のようであった。

「えっ!?!」

エレンは、無言で彼女に居る屋根に向かって右の握り拳で突き抜いた。

派手に破壊されて散らばる屋根の残骸が彼に異変が起こったのを知らせている様であった。

11話 悪夢からの目覚め

「貴様、新兵の癖に中々やるではないか」

壁上に登り立体機動装置の点検をしているフローラに声をかけてきた男。

駐屯兵団第一師団精鋭部隊隊長キッツ・ヴェールマンであった。

さきほど、エレンを人類の脅威を見なし排除しようとした指揮官である。

「ありがとうございます」

「問おう！何故、貴様はあそこまで戦えたのだ？」

「わたくしたちやエレンは、人類の敵ではない事を証明する為です!!」

「ふん！お前がどれだけ活躍しようとも私は、奴を！エレンとかいう化け物を信じたわけではない!!」

フローラは、ミカサと画策して彼を亡き者にしようとしていたほどの印象しかなかった。

だが、包囲していた時の彼と違って少し笑みを浮かべているのは見間違ひではないだろう。

「ただ、貴様の活躍は特筆に記録するべきものであった！ここで満足せずに更に精進するとよい」

「ハッ！」

「以上だ、貴様は更なる戦いに備えるといい」

キッツは、壁上から兵士たちの動きを観察しており、戦況を見守っていた。

投入した戦力の大半がトロスト区の巨人を惹きつける囷という事もあり劣勢であった。

極力戦闘を避けたにも拘わらず1割以上の損害を出していた。

「たった1割で作戦を成功させたのは不幸中の幸いだな」

新兵や脱走兵で構成されていながらも、1割の損害だけで済んだのが驚きである。

調査兵団における壁外遠征で新兵が生存する確率が3割程度。

とにかくベテラン揃いの調査兵団の損耗率と比較すればむしろ良くやったと褒めるべきである。

「フローラ・エリクシアか…」

キッツは、この作戦における損害は3割と見込んでいた。

所詮、無理やり兵士たちを投入したものだから脱走兵が続出して総崩れになると考えていた。

ところが、あの女訓練兵が残存兵力をまとめあげて遊撃していた結果。

死傷者が減少し、奇行種など囷では釣れない巨人を討伐した為、誘導が早く終わったのだ。

彼は、彼女が駐屯兵団に志願した場合、すぐに精鋭班に入れるように推薦し、自分の配下にするつもりだった。

そして数年の経験を積ませた後、新たに精鋭班の班長に任命して人類の守りを盤石にするために。

もつともフローラは駐屯兵団に入ることは絶対に無いので彼の夢は叶うことはないのであるが。

「ガスよし、予備の刃よし、動作確認よし」

フローラはキツツと会話した後、引き続きやっていた装備の確認が終了した。ピクシス司令から彼女に命じられたのは、巨人の討伐である。速やかに出撃する為に装備の手入れをしていたのだ。

「エレンたちは大丈夫かしら…」

フローラがエレンを気にして呟いた瞬間、赤色の信煙弾が打ち上げられたのを確認した。

そこは、大岩がある場所でありそこで活動している部隊など心当たりしかなかった。

「全然大丈夫じゃない!!」

指揮系統に縛られない彼女は、単独で壁下へと降りて行った。

「精鋭班から赤い煙彈を確認、穴封鎖作戦に支障が出たようです」

「司令、直ちに扉の防衛体勢に戻すべきです！既に作戦は破綻しました！」

「精鋭班を速やかに撤退させます！」

「ならん！アンカは引き続き精鋭班の動きを監視せよ！引き続き作戦を続行させるぞ
！」

「ハッ！」

この場の責任者であり事実上の戦犯であるドット・ピクシスは、作戦を続行させた。

サンクコスト効果、ここではエレンの為に犠牲になった兵士たちの命を無駄にしたくない心理。

彼は作戦を続行すれば2倍以上の死者が出ると分かっていた。

だからどうしたというのか。

既に人類を守る為なら殺戮者になる事も厭わない彼の意志は誰にも曲げることはできない。

「ですが！これでは精鋭班を見殺しにしています！」

「人類の命運を託した精鋭中の精鋭に権限を委任しておる！」

「ならば、彼らが任務を放棄してここに戻ってきた時、作戦は失敗したと認めよう」

「王政府なんて言い訳をすればいいのですか!？」

「わしが全責任をとる！貴公たちは、黙って作戦を続行させる事だけを考えよ！」

「「ハッ！」」

既にピクシスは、賭けの成功率がかなり低い事に気付いていた。

なにしろ、大岩は街のほぼ中央部にあり、穴を塞ぐまでかなりの時間を要するのは誰でも分かっていた事だ。

つまり本作戦は、何度も囀部隊を投入して巨人を惹き付けないといけないのだ。

現時点では、1割しか損害を出しておらず、作戦を断念すれば無駄死にする兵はなくなるだろう。

だが、それでは足りないのだ。

前代未聞の勝利を達成するには、等価が！血が！犠牲が！

だからこそ、彼は鬼となり人類の勝利の為に作戦を継続させた。

その舞台裏で、1人の訓練兵が行方不明になっている事に誰も気付くことは無かつ

た。

精鋭班の班長リコ・ブレッツエンスカは焦っていた。

作戦は既に破綻しており、既に撤退するべきであるのにイアンが任務を続行する気だったのだ。

「イアン、貴方どうしたの!? さっきから正気じゃない!」

「司令から指揮権を託されたのは俺だ! 黙って3体の巨人を討伐しろ!」

イアン・デイトトリツヒは既に壊れていた。

正気を失ったのではなく、最初から正気ではなかったのだ。

エレンという奇跡を目撃してしまい、哀れにも妄信的に彼の可能性を信じている哀れな男だ。

「作戦を変えるぞ! エレンを守るために周りの巨人を討伐する!」

「なっ!!何を言っているのか分かっていないのか!?!」

「彼は人類にとつて貴重な可能性だ!替えが効く俺たちと違ってな!!」

「この出来損ないの人間兵器様の為に何度も同じ過ちを繰り返せと言うの!?!」

「ああそうだ!何度でもやってやる!!」

エレンを見捨てようとして知って斬り掛かろうとするミカサを制止しながらイアンは同僚達に意志を示した。

たとえ自分が犠牲になろうとも絶対にエレンを見捨てず、巨人に戦うことを!

「イアン、頭を冷やせ!この作戦で何百人犠牲になったのは分かっているだろう!だったら…」

「では!どうやって巨人に勝つと言うのだ!」

「リコ!教えてくれ!人間性を保ったまま誰一人死なせずに勝つ方法を!」

「そんなの知るわけじゃない!」

「ああそうだ!だから俺たちがやるべきことは限られている」

一瞬、悲痛な顔をしたイアンは、震えている自分を誤魔化すように大きく深呼吸をし

た。

「良く分からん人間兵器の為に命を投げうって全力を尽くすだけだ」

イアンの覚悟を見た精鋭班は黙って彼に従った。

精鋭班12名及びミカサ・アッカーマンは、正気を失ったエレン・イエーガーを守る為に巨人と交戦した。

「おい！訓練兵！止まれ！いい加減にしろ！」

「なんてこった！こんな奥地まで来ちゃったぞ!？」

「どうする!?!奴を見捨てて逃げるか？」

「ここまで来たら精鋭班に合流したほうが良いだろう！」

こつそり司令部から抜け出してきたアルミン・アルレルトを発見して追いかけてきた駐屯兵団所属の班。

たかが訓練兵1人の事を心配して追ってきたお人好しな部隊である。

「巨人!？」

「運が悪いな…」

しかし、彼らの命運が尽きた。

目の前に2体の巨人が立ち塞がってきたからだ。

「僕は！僕は行かないといけないんだ！…ここで立ち止まるわけには…」

少し前に兵団本部に向かっていた経験を生かして、エレンたちと合流するまで目と鼻の先まで近づいた。

巨人を前にしても恐怖で立ち止まるより回避機動をとれるようになっているアルミンであるが無意味だった。

回避した先にもう1体の巨人が居たのを見つけた彼は抵抗を諦めてしまった。

「やっぱり…僕は…」

「ささつと死になさいいい！」

聴き慣れた女の声による死刑宣告で思わず顔をあげると、巨人のうなじを刈り取るフローラが居た。

「えっ!?なんで居るの!？」

「それはこつちの台詞よ！ダイナミック自殺でもしに来たの!？」

「違う！僕はエレンに用があつて！」

「わたくしもそうよ!!」

動機が一致した。

34班が壊滅した時、鬱になっていた自分を生還させてくれた頼もしい同期が居ればなんとかなる。

「フローラ！僕をエレンたちのところまで護衛して欲しいんだ！」

「別に良いですけど、そちらの班は別に放置しても良いの!？」

「ゴメン！彼らも助けて欲しいんだ!!」

「あーもう！やればいいんでしょ！やれば!!」

やたらと注文が多い顧客に呆れながらも対処する受注者のフローラ。

幸いにも囿が4人も居るおかげで、2体の巨人のうなじなど簡単に刈り取れた。いと也容易くやってみせた彼女の動きを、アルミンは凝然と見つめていた。

「助かったぞ…訓練兵!?!」

「最近のルーキーは我々の様なおっさんとは訳が違うらしいな」

助けてくれた兵士が訓練兵だと知って驚愕する兵士たち。

精鋭班ですら2体同時に巨人を相手にするのは無謀である。

それにも拘らずたった1人で3体も討伐してみせた訓練兵を見て既視感があった。人類最強と評されるリヴァイ兵長に匹敵する人材とはこういうものだろう。

「それより極力俺たちを避けているのが気になる」

「お前の顔が野獣に見えるんじゃないの？なあグリード？」

「よーし、背後に気を付けろよバレット!」

フローラとアルミンは、エレンを優先しているだけあるが兵士たちにはそんな事情など知る由もない。

ただ、軽口を叩きながら任務を遂行するのが彼らの流儀であり日常であった。

「グリード班!? お前たちの持ち場はここじゃないだろう!？」

「ミタビ! 錯乱した訓練兵を追っていたらここに来ちまったんだよ!」

「しようがねえな! とりあえずそこに寝転がっている巨人以外を掃討するぞ!!」

ミタビ・ヤルナツハは、同期であるグリード班の軽率な行動に呆れつつも嬉しくもあった。

ここを死地と決めた彼にとって、リコたちを任せられる人材であったからだ。

「ミカサ!?! 一体何があったの!?!」

「エレンが巨人の本能に支配された!」

「あああ!?! この人類滅亡の瀬戸際に! 呑気に巨人ごっこですって!?!」

「とにかく巨人がエレンを狙ってるの!」

「どいつもこいつも！ さっさと全滅させて腐った根性を叩き直してやりますわ！」

そしてなにより兵団本部の建物で見かけた女訓練兵が居たのだ。

彼女の实力は知らないが、既にここで3体の巨人を葬ったミカサと同格と考えると心強い援軍である。

「気を付けろよミタビ！ あの嬢ちゃん、既に3体の巨人を討伐してる実力者だ！」

「ああ、こつちにも居るぞ！ お互い手を出して殺されないように気を付けろよ！」

「んな事分かってるぞ！ この糞野郎！」

「よし！ 我々ミタビ班は、グリード班と合流して共同で巨人を狩る！ いいな！」

「ハッ！」

囿作戦など失敗しているのではと疑いたくなるほど巨人が集ってきている。

その誰もが、自滅して動けなくなっているエレンを狙っていた。

トロスト門の穴を塞がない限り、消耗戦に持ち込まれてジリ貧になるだけである。

「ミカサ！ 作戦は!? エレンはどうなったんだ!？」

「失敗した！その巨人にはエレンの意志がない！」

「そんな…」

「私が話しかけてもダメだった！もう誰がやっても意味がない！」

アルミンは、目の前が真っ白になった。

頼れる友人が化け物になってしまった。

「いや違うー！」

エレンは混乱しているだけで、何かショックを与えれば正常になるはずだ。

兵団本部で巨人の肉体から出てきた場所は「うなじ」であった。

ならば、巨人化した彼の本体はうなじに居るはずである。

「どの巨人も後頭部からうなじにかけて：縦1m、横10cm」

「アルミン!?何をやる気!?!」

「僕が正気に戻す！ミカサは巨人を頼んだ！」

弱点である巨人のうなじからエレンが出てきたという事は、巨人の本質の謎と無関係ではない。

おそらくどの巨人にもこの部位が本体であると仮定すれば、ここを刺激すればエレンは反応するはずだ。

「真ん中さえ外せば！大丈夫！だから！！」

「やめてアルミン！！」

「ミカサ、後ろに『変異種』！そいつは遠距離攻撃をしてくるわ！！避けなさい！！」
「くっ！」

フローラの警告を受けてミカサが振り返ると、14m級の刺青が入っている巨人が向かって来ていた。

アルミンの行動に気を取られて索敵をおろそかにした結果、ここまで踏み込まれたのだ。

せめてその失態を帳消しにしようと巨人に向かっていき、建物を利用してうなじを狙った。

「えっ」

しかし、いつも通り斬ったはずなのに刃は皮膚に弾かれて折れてしまった。

思わず、両脚で蹴って回避機動をとると巨人は腹を両手で叩いて吐瀉物を飛ばした。運よく吐瀉物を回避できたものと一緒に飛んできた胃液の一滴が彼女の頬に触れた。肌を強火で焼くような激痛が襲ってきたが耐えて回避機動をした。

「なんだあの巨人!？」

「キッツ隊長が仰った『巨人の行動は我々の理解を越える』って奴でしょ!」

「リコ、ミタビ!スリーマンセルであいつを狩るぞ!」

「了解!」

さすがにやばいと察した精鋭班の班長たちが巧みな連携で巨人を誘導していく。

それは、調査兵団のベテラン班と遜色ない動きであった。

しかし、その連携でうまくいくのは通常種や、動きが鈍い奇行種までである。

「3人がかりでも斬れないの!？」

「なんて硬さだ！こいつが【鎧の巨人】か!？」

「ああああ!?!こんなのが!あの!鎧の巨人なわけないじゃない!こいつは変異種よ!」

「あーなるほど!?!で?弱点は?」

「首元の刺青の塊の所を斬ると皮膚が柔らかくなるわ!!」

フローラは【鎧の巨人】という単語に過剰に反応して発言の取り消しを遠回しに要求した。

彼女の両親が奴によって殺害されたが、そんな事情など兵団の兵士が知るはずもなく無視した。

彼らが反応したのは「変異種」という単語である。

巨人は初見殺し満載のオンパレードである。

ベテラン兵の死因は、経験に基づかない予期せぬ攻撃だと言われているほどだ。

種が割れれば、こっちの勝ちだと言わんばかりに班長3人とミカサが微笑む。

一方、鎧の巨人の発言の撤回がされておらず不機嫌なフローラが居た。

そしてエレン巨人のうなじを刺したアルミンの事など記憶の彼方に追いやられていた。

エレンが目覚めると、そこは見慣れた自宅の中であつた。頼もしく博識な父は、珍しく患者のカルテを開いて何かを記しているようである。厳しくも優しい母は、ミカサと共に煮物を作っている。珍しい光景だけど、平和だな……と呑気に思つてしまう空間であつた。

「エレン！エレン！」

「あれ？アルミン？」

何故か窓ガラスを叩いて自分の名を呼んでいる親友が居る。

家族はこの事に気付いていないようだが、そもそもなんで玄関で来ないのか。

「お母さんの仇はどうすんだ！巨人を駆逐するんだろう！」

「何言つてんだ？母さんならそこに居るじゃないか」

「とにかく外に出るんだよ！ここは安全じゃない！早く！」

「なんで外に出ないといけないんだ……調査兵团なんて」

エレンは調査兵団という単語を口にして硬直した。
なんで、調査兵団？

そもそもなんでここにいるのか分からなくなってきたのだ。

「僕たちはいつか、外の世界を探検するんだろう？」

「外の世界？」

巨人、調査兵団、外の世界。

「ねえエレン、壁の外は地獄なのに外の世界になんで行きたいと思ったの？」

「どうしてかって？それは…決まってるだろう！」

「オレが！この世界で生まれてきたからだ！」

エレンは覚醒した。

現実逃避して自分の都合の良い生温い夢より、残酷で非情で救いようがない地獄を選んだ。

鳥籠に囚われた現状を！未知なる世界を知らずに死んでいく。

そんな空しい人生なんて死んでいると同じだ。

彼は一生狭い籠で長生きするより、たとえ地獄に到着すると知っても羽ばたく鳥になりたかった。

「クソ……これ以上無理だ！」

「イアン、もういいでしょう！……これ以上やり合ったら全滅する！」

既に精鋭班の1人が喰われて更に1名が重傷であり既に限界の状況であった。アルミンが何度もエレンの名を呼び掛けているが反応はまだない。

「エレンの状況を見て判断するぞ」

遂にイアンですら、この作戦は続行不可能と実感した。

全員がガスと刃の半分以上を消費しており、これ以上の継戦は不可能である。

唯一予備のガスボンベを所持していたフローラは“声”を聴いて壁の隅に寄せたはずの巨人たちが囷に目もくれずにこちらに向かつて来ているのを感じた。

ただでさえ、穴から巨人が湧いて出て来るのに包囲されるのだ。

「このままだと囿になって犠牲になった兵士たちが報われませんわ！」
「こうなったらわたくし一人だけでも…」

その時、エレンが居た方向で咆哮が聴こえてきた。

何事かと、全員が振り返るとそこには大きな影があつた。

エレンは、大岩を担ぎ上げてゆつくりと歩き始めていたのだ。

彼は巨人の本能に打ち勝った。

それは記念すべき人類の勝利への第一歩であつた。

12話 自由の翼

エレンが大岩を担いでトロスト門に空いた穴に向かって進んでいる。彼が無事に大岩で穴を塞げば人類は勝利するのだ。

「やったよミカサ！エレンを援護すれば僕たちの勝ちだ！」

全員が理解していた。

例え自分たちが全滅してでも彼を守り通さねばならないと！

「死守しろ！何があろうともエレンだけは死守しろ!!」

「ミタビ班!?!どこに行った!?!」

「あそこだ！地面に降りて何やってんだあいつら!?!」

イアンの号令で気を引き締める精鋭班と訓練兵たち。

しかし、何故かミタビ班は地面に降りて巨人たちを挑発していた。

「こつち向けや！この頭豚野郎！」

「きたねえケツに刃ぶち込んで殺すぞこの野郎！」

「やーい！お前のかあちゃん出べそ!!」

当初は、エレンを狙っていたがさすがに複数で騒がれるとそちらに注目したのか。巨人たちはミタビ班を狙い始めた。

「来やがったぞ！」

「とにかくここから離すんだ！走れ走れ！」

「そんな…自殺行為だ！平地で囷になるなんて戦えない！」

「いや、やるしかない」

調査兵団の死因がやたらと高いのは、平地における戦闘が多いせいだとアルミンは理解していた。

立体機動装置は、障害物がある場合のみに巨人と交戦できるステージに人類を立たせ

るだけだ。

成人男性の全力疾走より6 m級の歩みの方が遥かに早いのだ。

エレンの為に囷になんて自殺行為に他ならない。

すぐに追いつかれるのは明白だったが、イアン班もミタビ班に続いた。

「いいか、お前たち2人は、エレンを援護しろ！」

「でも……」

「これは命令だ！」

呆然としていたミカサとアルミンにイアンは、囷にならないようにエレンの援護に向かわせた。

新兵を囷にさせるつもりがない彼は、彼女たちを死地から遠ざけようとしたのだ。

「足首を斬り落として時間を稼ぐぞ！」

「うおおおおお!!」

グリード班のバレットは巨人の足首にアンカを突き刺してガスを噴出して突っ込ん

でいた。

だが、たまたま通りかかった巨人の脚にワイヤーが引つ掛かり彼は民家の壁に頭から激突して2度と動かなくなった。

「この屑野郎！よくもバレットを！」

「よせグリード!!」

戦友の死で頭に血が上ったグリード班長は、ワイヤーにぶつかつた巨人の左手首にア
ンカーを射出した。

しかし、巨人の動きで大回りに軌道を描いたせいでGに耐え切れずに意識を失つた。
左手首に違和感を覚えた巨人が左腕を下に振るとグリードは地面に激突して肉塊と
なつた。

「あああああー!!ふっ!!」

ミタビ班の新米が巨人から逃げきれずに左手で押し潰された。

彼の死によって発生した隙を見逃さずにミタビはその巨人のうなじを斬つて討伐し

た。

今なら馬鹿にしていた調査兵団の気持ちを理解した気がした。

死が目の前に迫っているのにミタビは呑気にそんな事を考えてしまった。

「無理だああああ！なにやっっているんだ俺はあああああ!？」

「ホークマン！落ち着くんだ!!」

「どこに落ち着ける要素があるんだよおおお!?言ってみろ！」

「くっ！だからって…おいどこに行くんだ！」

1人は狂気に吞まれて先輩の制止を振り切って突撃して巨人に掴まれて口元に持つていかれた。

「離せ離せ!!ここでええええええ！」

その隙にフローラはうなじを斬ってホークマンを救出した。

落下したホークマンが近くの民家にアンカーを撃ちこみ辛うじて激突を回避できた。

そんな彼が見た光景とは!?

「嘘だろう…」

巨人たちを利用して大空を駆けまわり笑いながら、うなじを刈る自由な女訓練兵が居た。

気流すら無視して空中を駆けまわるその姿は、鳥よりも自由に見える。

「ぶっ倒してさしあげますわ！」

精銳班はおろか、調査兵団のベテラン兵ですら巨人の肉体を使って飛びまわるのは片手で数えられる。

それだけ動く障害物というのは脅威なのだ。

考えてみてほしい。

ただでさえ空間把握能力と筋力、バランス感覚、耐G能力、ガスの残量の把握が必要である。

更に巨人の動きやワイヤーの衝突まで考慮するなんてとてもではないが、現実的ではない。

「おっほっほっほ！わたくしの敵ではなくてよ！」

一方、頭進撃娘にはそんな事など気にしてなかった。

巨人の左腕にアンカー撃ちこんだ瞬間、腕を振り回されてあらぬ方向に飛ばされたフローラ。

飛ばされた先に巨人が居ると分かるとそこにアンカーを撃ちこみ小回りうなじを刈り取った。

そしてお礼と言わんばかりにさきほどの巨人にアンカーを射出してうなじを切り裂いた。

「あの女に巨人を狩ってもらおうぞ！」

「やっぱ無駄死には辞めだ！とにかくあいつを利用して全力で生き残れ!!」

ミタビ班とイアン班は、フローラに全力で頼り始めた。

ほとんどの班員が50mの壁を登れるほどのガスの残量がなくて身動きが取れなかった。

ところが、フローラは予備のガスボンベを装着した為、多少の余裕があったのだ。心臓を捧げる覚悟を決めた兵士も、生存できる道があると判明したらそこに行くのは当然である。

『なんで地上にミカサとアルミンが居るんだ!?!』

エレンは、巨人の体重の30倍以上ありそうな大岩で身体が潰れそうだった。

だが、彼は大岩を持ち上げてゆつくりと前進していく。

巨人が彼の目の前に立ち塞がってもリコ班が必死に喰らい付き、ミカサが援護した。

『オレたちは！皆、生まれた時から自由だ!』

『外の世界を見た者は、この世界でもっとも自由な奴だ!』

『その為なら命なんて惜しくない!戦え!戦え!』

『どれだけ世界が残酷でも構わない!戦え!戦え!』

エレンは、とにかく自由を思い浮かべて奮い立たせた!

一歩進む度に自由に近づいていると信じて突き進んでいく。

それでも、穴までまだ1／3の距離を進んでいないのだ。

このままでは、エレンが大岩で穴を塞ぐまえに味方が全滅してしまうだろう。

「ハアハア…もう巨人はうんざりですわ！」

「なら、俺はどうだ？むさ苦しいと自覚してるが巨人よりマシだろう？」

「ハアハア…検討しておきますわ」

「あーあー振られちゃったなミタビ、まあ尻に敷く女房になるのは目に見えるがな」

「誰のせいでこうなったと思ってるんだイアン！」

「痛い所を突くな！」

なんとか付近の巨人を殲滅して精鋭班の犠牲者を3名までに抑えた。

しかし、お人好しであったグリード班は、ミタビ班とイアン班を庇って全滅してしまっただけだった。

「やめなさい！訓練兵に何をしてるの！」

「リコ、もう俺たちは抜け殻なんだ…若い女の子に励まされないと元気になれないくらいにな…」

「それって私に魅力がないってこと!?!」

「よし!俺たちが悪かった!分かったからそのブレードを巨人に向けてくれえ!」

「よっ!精鋭班の眼鏡アイドル!リコ班長!」

「あんたたちのそういうところが嫌いよ!」

1名を除いて、恐怖と責任の重圧に押し潰されそうだった一同。

ただ、汗だくで喘いでいるフローラを見た男共は興奮していった。

男の悲しい性というか、闘争心に基づいた嗜虐心がくすぐったのだろうか。

軽くセクハラされていたが、フローラからすればどうでもいいものであった。

なんなら士気が上がるなら上半身を裸にしてもいいぐらいの感覚である。

「このまま…戦うのは…」

【巨人の吸引力が変わらないただ1つの穴】に内心キレていたフローラであったが疲労と共に別の感情を抱いた。

大岩を持ち上げているエレンの移動が遅すぎるのだ。

人間で例えると自身の体重の何十倍も重量がある大岩を持ち上げているものだから

しょうがない。

なんて言うと思ったか、いくら何でも遅すぎるエレンに彼女は苛立ちの感情を抱いていた。

だって、穴までまだ半分どころかほとんど進んでいないのだから。

「おいなんか音がしたぞ？」

「あああつ!? 僕の鋼貨! 待ってー!」

「命よりも金が大事とはたいしたもんだな!」

「待って〜! 僕の鋼貨ー!!」

金属音がし、転がっていく鋼貨の音に気付いたミタビ班が持ち主のホークマンの焦った姿を見て笑っていた。

もちろん、鋼貨1枚で1日における4人家族が消費する小麦を買い取るほどの価値があるものだ。

開拓地の連中など、豆だけのスープで我慢して常時腹を空かしているのを知っていれば無視できないものである。

ここが、戦場でなければ。

「ああ、鋼貨の音でしたのね…えっ?」

鋼貨は、スナップブレードの元である【超硬化スチール】の精錬工程で生み出された副産物だ。

削るのも溶かすのも容易ではない、ただ硬いだけの質の悪い鋼に刻印を押したものである。

その為、大きさも厚みも形もばらつきがあるのだが、そこは問題ではなかった。

「エレンが担ぎ上げている大岩ってあんなに丸いのね」

「大変だ!また巨人の群れが前方から来たぞ!!」

「まだ3分も休んでないぞ!」

「もうダメだ!お終いだ!これ以上は守り切れんぞ!!」

フローラは1つの案を思い浮かべた。

これをアルミンに話すべきか迷ったが直接、エレンに話した方が早いだろう。

そう判断した彼女の動きは早かった。

「エレン！一体何をやってるの!!」

フローラの問いかけに対して呆れたようにエレンは彼女に顔を向けた。

見れば分かるだろう！大岩を担いで運んでいるんだよ！

巨人でありながらそんな事を考えている顔をしていた。

「エレン!!わたくしの話を聴きなさい!!」

「えっフローラなにやってんの!？」

「ちよつと黙って!」

「ええっ!？」

いきなりエレンの進行ルートを妨害するかのようの現れたフローラにシガンシナ幼馴染組は唐突さにビビった。

思わず咄めたアルミンを一言で蹴散らしたフローラは、エレンに向けて衝撃的な一言を放った。

「大変です！エレン・イエーガーが大岩を地面に降ろしました！」
「なんじゃと!？」

注視していた女参謀のアンカ・ラインベルガーの一言によりその場が凍り付いた。
頭が真っ白になったピクシス司令は思わず立ち上がった。

無理もないだろう。

囿で巨人の注意を惹き付けているのも時間の問題であった。

その為、再度、囿作戦を執行しようとしていた時にトラブルが発生したのだ。

「また暴走したのか…?」

「やはり、作戦を中止した方が…」

「信煙弾は上がっていないようなので、休憩しただけでは？」

「お前！休憩している暇なんてないぞ！」

「俺に向かって叫ぶな！俺のせいじゃねーぞ！」

最初、エレン・イエーガーが大岩を持ち上げた時、歓声があがったがすぐに静まることになった。

何故なら移動速度が遅すぎたのだ。

これで日が落ちる前に穴を岩で防ぐことはできない。

夜間になれば巨人の動きは鈍くなるが、それまで精鋭班が防衛できるはずもない。

「ピクシス司令！」

「どうした!?!」

望遠鏡で注視しているアンカの言葉を全員が固唾を呑んで待った。

「エレン・イエーガーが大岩を転がし始めました！」

「凄い速さです！もう穴まで1/3を切りました!!」

思わずピクシス司令は、手を打って感心した。

「ああそうか、その手があったか！じゃないでしょうが！あんた何やってるんですか！」

「グスタフ、一応わし、司令官なのだが…」

「何故、指摘しなかったんですか！あのままだったら兵を無駄死にさせる所だったんですよ！」

「だって現場に判断を委任したもん！わしは悪くない！」

良く考えて見れば、岩を持ち上げるより転がした方が早いのは誰にも分かる。

なんの為に車輪が開発されたか思い出してみればすぐに分かる事である。

参謀のグスタフは、ピクシス司令の「大岩を持ち上げる」という指示に囚われていた精鋭班を心情を思い同情した。

「大変です！」

「今度は何だ!？」

「大岩が民家に直撃しました！あそこは確か美術館が…」

震える女参謀の右肩に手を当てて笑うピクシス。

「司令、セクハラで訴えますよ!？」と返答する余裕がないアンカ。

人種の財産の消失を受けて愕然とする彼女を勇気づける為に彼は発言した。

「良い事を教えてやろう！こういう人類にとって都合が悪い事はな…」

「全部、巨人のせいによければよい！」

「全部、巨人のせいにしておきなさい！」

ピクシス司令とフローラは同時刻、ハモった。

「フローラああああ！美術館をぶっ壊しちゃった!!どうしよう!？」

「コラテラル・ダメージ！仕方なかったって奴よ！」

「でも…」

「人命と財産、どっちが大事かアルミンなら分かるでしょ！エレンも早く動きなさい！」

フローラは大岩を転がすようにエレンに指示した。

戸惑うエレンたちであったが、下手すると彼女が一番怖い為、素直に岩を転がした。

すると、前方で迫ってくる巨人共を薙ぎ払って都合が良いうえに素早く岩を動かすことができた。

調子に乗ったエレンは張り手で押しまくった結果、岩が大通りから逸れて美術館に激

突した。

人類の財産であり過去の遺産である貴重な展示物を破壊してしまったのだ。その結果、混乱したやりとりが上記である。

「こんな所で止まっている場合じゃないでしょ！早く押しなさい！」

「ぐおおおおおおおおお！！」

「いけええええ！エレン！！」

「やっちまえ！エレン！！」

「塞いじまええええエレン！！」

「頑張れエレン！」

【巨人の吸引力が変わらないただ一つの穴】を塞ぐためなら何でも犠牲にする。

人命も含んでいたが、まさか人類の遺産まで犠牲にするとは誰にも思わなかっただろう。

やけくそになったエレンは大岩を一度持ち上げて、設置し直して大岩を転がしていった。

穴を塞ぐのが自分の使命と理解している彼は、フローラ流ごり押し戦術で突っ込んで

いった。

とにかく派手に転倒した巨人は精鋭班の餌食となり、後方から来る巨人は、フローラとミカサが葬っていた。

「ぐおおおおおおお!!!」

そしてエレンが門に近づいた時、咆哮をあげて大岩を持ち上げて穴を塞ぐように強く押し込んだ。

その衝撃は壁に更なるヒビを増やすほどであった。

「終わったのか?」

「ああ作戦完了だ」

穴を塞ぐ様子の一部始終を、ミタビとイアンは見届けた。

「どうする?もうガスがないぞ」

「どうするって?どうしようもないさ」

「おいおいイアン、作戦が成功した後の事は考えてなかったのか？」

「巨人に喰われる前にみんなが助けてくれるさ！」

もう自分たちはお役御免と言わんばかりに座り込んで向かい合って笑った。

人類の未来をあらゆる犠牲を払って、守って見せた漢たちに悔いは無い。

「困らなかつた犠牲になつた訓練兵と駐屯兵団の兵士たち。」

精鋭班では、犠牲者4名、重傷者2名、軽傷者5名。

精鋭班を援護して全滅したグリード・ホルツマン班長が率いたグリード班の4名。

大勢の心臓を捧げて人類は勝利したのだ。

「皆…死んだ甲斐があつたな…今日、人類が…初めて巨人に勝利したよ」

穴が塞がつた事を確認したりコ・ブレッツェンスカは、泣きながら黄色の信煙弾を打ち上げた。

黄色の煙には2つの意味がある。

作戦遂行が不可能になつた。

もしくは作戦が成功した場合だ。

「黄色の煙を確認！作戦が…成功しました！」

「ただちに援軍を送れ！精鋭班を救出せよ！」

「ハッ！」

アンカは、ただ自身の役目を全うした。

作戦成功の報を聴き歓声を上げる暇もなく慌ただしく兵たちが部隊を編成していく。

まるで英雄たちを絶対に死なせない覚悟を全員が共有したような動きであった。

その様子を見届けたピクシス司令は、ようやく部下から受け取った酒を飲む事ができた。

「やはり仕事をやり切った後の酒は旨い」

彼は安心して肩の力を抜いて酔いに溺れていった。

何故なら、頼もしい援軍が壁内へと攻め込んでいったからだ。

「ミカサ！エレンの様子はどうか!？」

「すごく熱い！アルミンも手伝って！」

「うん分かった！」

大岩で穴を塞いだ瞬間、エレンの巨人は力尽きた。

以前と同じように、うなじから現れたエレンを幼馴染たちが必死に救出しようとした。

「ダメだ！身体の一部が同化してて取れない！」

「もう斬るしかない！」

「そんな……」

巨人と同化したエレンの脚をリコ班長が躊躇なく斬り落とした。思わず彼を抱き締めながら立体起動をこなして着地したミカサ。

「ミカサ、逃げろ！巨人が!!」

作戦の成功で気が緩んでいたのだろう。

2体の巨人を取り逃がしており、ミカサの目の前に居た。

フローラはミカサたちに追った巨人たちを追っていたが距離があり過ぎた。

そして精鋭班の班員たちもガス欠で身動きが取れなかった。

要するに積みみである。

もうダメかと思ったその時、閃光が迸り高速で回転する何かか2体の巨人に襲い掛かった。

高速回転で巨人のうなじを抉り取り自分の死を知る暇もない哀れな巨人たちは倒れ込んだ。

誰もが目を疑う光景である。

色々とバグった動きをするフローラですら何が起こったのか判断できなかった。

「一体何が…」

「あれは…」

倒れこんだ巨人の屍に緑のフード付きマントを羽織った黒髪の男が舞い降りた。

そのマントに描かれていた紋章は、重なり合った2枚の翼。

通称、【自由の翼】と呼ばれている紋章。

巨人の脅威に立ち向かいマリア・ウォールを奪還を目指す兵団。

調査兵団の紋章である。

エレンは意識が朦朧でありながらも必死にその頼もしい後ろ姿を見つめていた。

「おいガキ共…これは一体どういう状況だ!?!」

人類最強の男、リヴァイ兵長が振り向いて訓練兵たちに、この惨状の説明を求めた。

13話 鎮魂歌

ここ最近の調査兵団の任務は、来るウォール・マリア奪還作戦の布石を打つ作業である。

荷駄隊に掲載した保存食や補給物資を点在する廃村や廃街に設置して橋頭堡にする。

ただそれだけなのだが、巨人が覇者のように闊歩する危険地帯。

巨人の領域への派兵には毎回、3割以上の損害を被るのだ。

「エルヴィン、今なんて言った？」

「退却だと言ったんだ」

「今、部下の死を看取ったところだぞ。俺の部下は犬死にか？」

リヴァイは、調査兵団団長のエルヴィンの命令が信じられなかった。

ここで退却したら、文字通り何の成果も得ておらず、部下数名が巨人に殺されただけである。

先ほど死んだ部下に意志を継ぎ巨人を殲滅すると約束したばかりであった彼には譲

れないものがあつた。

「巨人が街を目指して一斉に北上を始めた！」

「まさか……」

「ああ、察しの通り、5年前と同じように壁が破壊されたかもしれない」

5年前、つまりシガンシナ区陥落の事件。

これがきっかけで、人類は1割の人口と約3割の領土を失った。

今度はトロスト区で同様の事件が繰り返されようとしている。

それだけは、絶対に避けなければならない。

「ペトラ！右翼に展開したオルオとエルドを呼び戻せ！退却の準備をすろぞ」

「はい分かりました」

共に死を看取った彼女の後ろ姿を見送るとリヴァイは亡き部下の前にスナップブレードを構えた。

「済まねえなアンダーソン、お前との約束は少しだけ先延ばしになっちまった」

「だが、お前の残した勇氣と意志は俺の力となり必ず巨人を殲滅してみせる」

「だからよお、ゆっくり休んでいけ」

リヴァイは、決して後ろを振り向かず本体と合流する為馬に跨り駆けていった。

ところが調査兵団は再編成に手古摺りトロスト区の門を目視で確認できる頃には夕方になつていた。

「うわ…想像以上に酷いことになつてるね」

「ほう？さすがにこの状況だと人間性が残るか」

「もう、酷いね！私をなんだと思つてるんだい！？」

「人類の奇行種」

「うわあああひどいー！聞いたかモブリット！？」

「分隊長！前を見てください！！」

第4分隊長ハンジ・ゾエは、建前上ではあるがリヴァイの評価に傷つき副官のモブリットから満足を得る返答をもらった。

そうでもしないと心が折れる所だった。

巨人と何度も対峙している自分ですら恐怖で怯えることがあるのだ。

それを民間人が味わったとなると何かに酔わないとやっていけなかった。

「リヴァイ、あの門を見て何を思った？」

「ああん？ 超大型巨人に破られて穴を空けられて必死に防戦してるしか見えんが」

「それだ、いくらなんでも戦力が手薄過ぎないと思わないか？」

「…何が言いたい？」

エルヴィンの意見を踏まえてリヴァイが門を眺めてみると戦力が過剰に少ないのが分かった。

門を最優先で守るはずが何故か複数にまとまって分散しており、まるで誘い込んでい
るようである。

それほど、応戦している兵力が少ないのだ。

「もしかしたら、これは内通者によって起こされたかもしれない」

「チツ！ 厄介だな！」

「リヴァイは、第3分隊を率いて門の右翼側から侵入してくれ」

「ハンジ、君は第4分隊を率いて左翼から侵入し、情報収集を頼む」

「おいおい、死ぬ気か」

「だったらこんな指示はしないさ」

エルヴィンは、本隊を率いて正面の門に群がっている巨人を掃討する指揮を執るつもりだった。

ただし、門上に展開している部隊は味方と限らない可能性があるのも承知の上だ。

それを横目で見ていたリヴァイは最悪の事態を想定して、スナツプブレードを構えた。

「よしお前ら！俺に黙って付いてこい！」

「「ハッ！」」

リヴァイが第3分隊を引き連れていったのを確認したハンジも左側に馬を走らせた。

「よし、団長から聞いた通り、私たちは左へ行くぞ！モブリットはその指揮を頼む！」

「ええ!? ちよ、ちよつと待つて…分隊長! 先走り過ぎです! せめて1個班だけでも護衛を…」

モブリットに面倒事を全振りしてハンジは門前にいる巨人の群れを回避してアンカーを壁に突き刺した。

「いやーっほいいいいい!」

滅多に〔壁〕を登る機会が無いが、こうして壁を登っていくのは楽しい物があった。少なくとも巨人を観察しているだけで一日を終わらせるよりは。

「なんだこれ…」

ハンジは驚愕した。

トロスト区は想像以上に地獄であった。

壁下を眺めれば、民間人や兵士の肉片が散らばっており巨人が堂々と闊歩していた。

ただ、何故か壁の隅に30体以上巨人を集めているにも関わらず砲撃をする気配がな

かった。

「おい、あんた調査兵団か!？」

「見れば分かるでしょ!…一体何をやってるんだ!何であそこに砲撃をしないんだ!」

「巨人化できる人間兵器が大岩を担いで穴を塞ぎに来るんだ!」

「そのせいで、戦力の大半がその囷として使われて身動きが取れないのよ」

「砲撃したショックで巨人を街に目を向けるのを防ぐためでもある」

ハンジは、駐屯兵団の兵士たちの会話が理解できなかつた。

巨人化?人間兵器?そんなものあるわけじゃないじゃないか。

だって、人類の英知で造り上げられた調査兵団にそんな情報など一切入って来なかつたのだから。

「はあ?人間兵器?!しかも巨人化できるの?」

「ああそうだ!あそこに岩を担いでいる巨人が居るだろう!あいつがそうだ!」

「うっそ!」

「とにかく岩を担いだ巨人だけは討伐しないでくれって調査兵団に伝えてくれ!」

慌てて望遠鏡で覗くと大岩を担いでいる巨人の周りで兵士たちが護衛していた。

その中に顔馴染みのリコ・ブレッツェンスカの姿もあった。

駐屯兵団第一師団の精鋭部隊が巨人を護衛するかのよう展開しているのを見て事実だと思つた。

「なるほど、良く分かつた」

「リヴァイ?! あんた、右翼に展開したんじゃない?」

「そのつもりだったんだが、どうも違和感があつてな! ここに来てみたら当たりつてとこか」

「ところで、あの巨人、誰がなつたんだい!」

「ピクシス司令の演説では、エレン・イエーガーつて言つてたな」

エレン・イエーガー。

ハンジの記憶では、そんな人物名など知らなかつた。

とにかく王政府が調査兵団に内緒で何かを隠しているのは間違いないだろう。

少なくとも何も知らずに屍の山を築いてきた調査兵団の尊厳を踏みにじる行為だ。

「おお！岩を転がし始めたぞ！」

「早いな！これならすぐに穴を塞げるぞ！」

「えええ!!?あの巨人、知能があるの!?!」

「我々だって知らされてないさ！ただ、あの巨人が岩で穴を塞げば万事解決なんだよ！」

巨人に多少の知能があるのは、交戦した経験から分かっていた。

ただ、あそこまで露骨な行動を取るのは想像を超えていた。

「分隊長！やっと追いつきましたよ！今度は…」

「モブリット！巨人化する人間って信じるかい？」

「何を仰るんですか！そんな人間居るわけがないでしょう！」

「居るんだよ！あの大岩を転がしている巨人だよ！」

「ハア…!?!」

副官のモブリットが疑問に思うのはしようがないとハンジは思った。

自分ですらまだ心の整理が付いていないのだ。

「事情は理解した、つまり少数なら巨人を狩ってもいいのだろう」

「ええ、そうですか」

「俺一人で充分だ！ハンジは、第3分隊の指揮を頼む」

「ちよつ、嘘でしょ!?!」

リヴァイは、駐屯兵団の足手まといになりかねない第3分隊をハンジに押し付け壁内へと降りて行った。

慌てたハンジを横目であんたが私にやった事と同様の事ですよ！

と言わんばかりの視線を送ったが効果がない事は、彼が一番理解していた。

「モブリット！」

「今度はどうされたのですか!?!」

「見て見て！あの巨人の群れの飛び回っている兵士を！」

上官が子供の様に目を輝かせているのを見て、モブリットは望遠鏡で現場を覗いてみた。

そこには巨人の群れの中心で飛び回っている栗色の髪の女兵士が居た。

巨人にアンカーを撃ちこんで空中を駆けまわる技量の兵士などそういない。

リヴァイ兵長、ミケ分隊長、オルオ、エルドくらいのもだろう。

「確かに凄い技量ですね！さすが駐屯兵団第一師団の精鋭！」

「その子、訓練兵だよ」

「うっそ!？」

慌てて望遠鏡で覗くと、確かに背中の紋章が駐屯兵団の薔薇ではなかった。

さきほど見た時と比べて巨人を2体討伐しており只者ではない事は一目でわかる。

「モブリット！」

「はい！」

「私、あの子が欲しい！」

「ええええ!？」

「あんな人材を駐屯兵団や憲兵団で腐らせるのは勿体ないよ！ぜひ私の部下になつてもらう」

兵团選択は、訓練兵の意志によって行われるもので決して圧力で決めさせるものでない。
い。

そもそも訓練兵は王が預かっている。

つまりフリッツ王が一時的に所有している戦力であり、ザックレー総統ですら兵团を任命する権限はないのだ。

なのにハンジ分隊長は、無理やり調査兵团に連れてきて第四分隊に拉致する気満々である。

もちろん、そんな外道な事を阻止する為に論争したが、モブリットの完敗で終わった。

「おいお前ら、いつまでやっている気だ」

「くっ分隊長！お願いですから勝手な行動を取らないでくださいね！」

「ああ分かつてる分かつてる！」

その場にいた者たちは、絶対に分かつてないだろうと内心で感じていた。

当事者であるハンジですら他人事でそう思ったくらいだ。

「報告！精鋭班の救出が終了しました！なお巨人を駆逐するまで後1日は掛かるかと……」

「本当に穴は大丈夫なのだろうか」

グンタ・シユルツの報告により、精鋭班の救出が終わった事が判明し駐屯兵団の兵士たちは安堵した。

これedyouやく、壁内巨人の討伐に取り掛かれるのだ。

一方、エルド・ジンは金髪の頭を掻きながら不安を述べた。

「その心配は不要です。駐屯兵団の工兵部が封鎖作業を行なっております」

「駐屯兵団には多大な負担をかけてしまった。本当に申し訳ない」

「いえいえ、調査兵団の皆さんのおかげで工兵部隊が安全に作業ができております」

「我々だけではとても……」

ハンジは、エルヴィン団長とリコ班長の会話よりあの女訓練兵が気になっていた。

ちょうど都合よく、ゲンタに続いて壁上に登って来てくれた。

第一印象は、疲労でポロポロになっているが少なくとも勇敢な兵士に見える。

「ご苦労だったリヴァイ」

「劳いの言葉ならそのガキにかけてやれ」

「…彼女は？」

「穴を塞いだエレン・イエーガーと同じ第104期の訓練兵です」

「…そうか、恐怖に耐えながらよく頑張ってくれた。皆に代わって礼を言う」

ここでフローラは、なんとなく壁上に登ってきてしまったのが間違いだと気付いた。

人類最強のリヴァイ兵長の扱い具合から目の前にいる整った金髪の男。

彼こそが、調査兵団の団長エルヴィン・スミスだと気付いた。

思わず姿勢を正し、敬礼をしたが団長はそんな堅苦しい事は嫌いのようであった。

「エルヴィンは見てなかったと思うけど、卒業したての訓練兵とは思えなかったよ」

「分隊長!?まさかここでやるつもりですか!？」

「いやいや、さすがにお疲れの所に畳みかけるほど私は鬼じゃないよ」

それよりゴーグルを付けた女性隊員がこちらを舐め回すような視線をしており身の危険を感じていた。

そして、優しそうな男性が副官であり色々苦勞している事をなんとなく察することができた。

「とにかく君は疲れているだろう…兵舎に帰還して同期たちに顔をみせてあげなさい」
「ハッ！」

とにかく逃走できる大義名分を得たフローラは慌てて逃げ出すようにその場を後にした。

それと今まで肝心な事を忘れていたのもある。

結局、お肉が食べられなかったのだ。

彼女は、食堂に一直線に向かっていった。

「あつー………!!」

「分隊長!」

「どうした奇行種？」

「あの子の名前を訊くの忘れてたあああああ！」

「エルヴィン、こいつを殴って良いか」

「構わん、やれ」

「ええっ!？」

まさかの団長による殴打許可に微笑むリヴァイと対称的な反応を示したハンジ。さすがに第三者視点からでも、ハンジ分隊長の乱心には目に余っていたようだ。リヴァイが軽く殴ると、彼女はまるで鶏の首を絞めたような悲鳴をあげた。

夜の帳が下りてトロスト区内にいる巨人の活動が鈍くなる頃。

いつもなら訓練兵で席が埋まるほどで騒がしくなる食堂が静寂な空気である。

「ううっ…」

芋女こと、サシャ・ブラウスは食事に手を付けられなかった。

トロストの門の上で隠したお肉が結局食べられなかったのもあるが、今回はそれどころではない。

いつもなら食欲旺盛で、油断している同期たちのパンまで齧る彼女も地獄で心が折れたのだ。

「ごめんなさいごめんなさい…」

【固定砲整備4班】がウォール・マリアを奪還してお肉をたくさん食べる誓い。

今考えれば、なんて身の程知らずで無知で無謀なことだったのだろう。

兵団本部の建物で巨人のうなじを斬り損なった時、死を覚悟した。

誰もあの失敗を責めて来なかったが、逆に彼女の心にヒビが入った。

「すまねえ…やつぱオレは憲兵に…」

コニー・スプリンガーは、トロスト門で誓った事を無かった事にして憲兵になる事にした。

超大型巨人が空けた穴から巨人が侵入してきた時、彼は足を動かすことはできなかった。ところが、訓練兵だけで巨人を討伐できてしまい、自分でもできると突っ込んでい

た。

「誰も責めんだろう…母ちゃんだって…」

結果、5体も巨人が討伐出来て英雄気取りだったが何のことは無い。

全部フローラがやったことであつた。

巨人討伐も、囷になつて逃げ道を切り開いたのも、兵団本部に突入できたのも全てそうだった。

故郷であるラガコ村の皆に自慢する為、憲兵になる。

それが亡き同期たちにできる…いや、ただ巨人から逃げたいだけであつた。

そうでなければ、顔を机に埋めて震えたりなどしないのは彼自身が自覚していた。

「生きているのが信じられねえ…」

ジャン・キルシュタインは、最も長く感じられた1日を生き延びたのが信じられなかった。

一番、怖かつたのが立体起動装置の一部である操作装置が故障した時だ。

突然、トリガーを弄ってもファンが動かずに立体機動が行えなくなった。

原因は、操作装置のメンテナンス作業中に異物を入れてしまった自分のミスである。

「あいつ、結局帰って来なかったな…」

あの時、ミカサの抱擁に嫉妬した彼は、近くに居たフローラに喧嘩を売った。

そしてなんだかんだで結局、直接謝る事はできなかった。

そもそも食堂に居る同期たちは、フローラに助けられている。

彼女が指揮した兵団本部に突入する作戦に参加しなかった者は誰一人ここには居なかった。

本部に立て籠った補給班の連中は縮こまってテーブルに伏せている。

「あんな強い奴でも、あっさり死ぬのか…」

ジャンは、憲兵になり内地で優雅に暮らす予定だった。

そう、巨人と縁がない生活をしたかった。

でもトロスト区に巨人が侵入してきた時、どこにも安全な場所は無いと悟ってしまっ

た。

あれだけ強かった彼女がここに居ないという事は、既に戦死したのだろう。だつたら目の前のパンと温かいスープを食べていいのではないか。

「ダメだ…震えが止まらねえ…」

せつかく食堂の隅にあるテーブルで一人で晩飯を食べようとしたが震えていた。

過呼吸で息が苦しくなり、地面が揺れている気がして精神的に不安定になってきた。

「あああああああつ!!めしいいいいい!!」

突然、扉を勢い開けて奇声をあげて突入してきた女が居た。

何事かと、落ち込んでいた訓練兵たちは声の主を見た。

「ねえ!晩御飯!まだ残ってる!?!」

「ゴメンね、既に残飯回収班が持つて行った後だよ!」

「そんなあああ!!わたくし頑張ったのに!こんなやつてないわよ!!」

声の主はフローラであった。

サシャに次ぐ食欲旺盛で煩い奴である。

彼女は、食堂に来るのに遅れてしまい慌てて突入したが、結果は無残であった。

「あいつ生きてたのか…」

「見ろよ、あの泣きそうな顔を…」

昼ご飯すら食えなかったフローラ。

だが彼女には賭けがあった。

すぐに同期たちの顔を見てお目当ての男を探す。

その姿を見つけた瞬間、走り出してジャンの席の向かい側の椅子に勢いよく座った。

そして、ジャンのパンとスープに手を伸ばした。

「おい、なんのつもりだ!？」

「はあ!?!『今晚の食事を全部持っていけ』って言ったのジャンじゃないの!!」

「待ってくれ…俺、昼飯を食べてないんだ…!」

「奇遇ね！わたくしもそうよ！そういう事でもらうわよ！」

無慈悲に奪おうとして彼女が掴んだパンの反対側を掴み阻止をしたジャン。

「…ジャン、貴方は約束を守る男だと思っていたけど、失望したわ」

「失望してくれてもいい、今日だけは見逃してくれ」

「フローラ？」

「どうしたのミーナ？クリスタも…？」

そこにはパンを差し出しているミーナとクリスタが居た。

それどころか同期たちがパンの欠片を差し出している。

あのサシャですら食べかけのパンの半分を差し出していた。

「これでジャンを許してくれない？」

「気持ちがありがたいけど、わたくしは正当な理由でジャンから晩御飯を取り上げるの

よ」

「分かってる…でも、みんな貴女に助けられたから…！」

「心配したの…みんな、心配したの!!」

ミーナとクリスタが泣き出してしまい、オロオロとするフローラ。とりあえずハンカチで涙を拭こうとしている彼女の後ろ姿をジャンが見つめていた。

「フローラ済まない…」

「何よ、急に改まって…晩御飯を提出する覚悟でもできたの？」

「俺は本当に最低野郎だ」

「そうね」

「こんな最低な野郎を！助けてくれてありがとうな！」

頭を両手で掻きながら恥ずかしそうに謝るジャン。

それを見たフローラの怒りは徐々に収まってきた。

「分割して晩御飯を渡すからさ…今回はこれで勘弁してくれ」

パンを半分に割って右手で取立人に手渡すジャン。

彼女は無言で右手でパンを受け取りそのまま美味しそうに頬張った。その様子を見て、フローラってこんな美人だったのかとまじまじと見つめていた。視線に気づいたフローラはジャンに対して口角を上げて優しく微笑んだ。釣られてジャンも同じように微笑んだ。

「ほげっ!!」

「汚くてパンがまずくなつたじゃない!この嘘つき野郎!!」

唐突にもらつた「平手打ち」!

予想外の「罵倒」!

当然の暴力がジャンを襲つた!

その後、どうでもよくなつたのか追撃することはしなかつた。

それから同期たちから少しずつパンを分けてもらつてご機嫌になつたフローラ。

その勢いのまま彼女は、即席で作つた鎮魂歌を歌い始めた。

教官のキース・シャーデイスは食堂の前で立ち竦んでいた。教え子たちが意図せず地獄を見たのだ。

傍観者に徹するのが彼のスタンスであるが、さすがに無視できずにここまで来てしまった。

深呼吸をして覚悟を決めてゆっくり扉を開いて中の様子を覗いてみるとそこには…。

「心臓をくっ捧げようくっみんなの為に」

「心臓をくっ捧げようくっ亡き友の為に」

そこには円陣になり男女が肩を組んで大声で鎮魂歌を歌っている104期生が居た。フローラの作った鎮魂歌をミーナとクリスタが歌い始めて、そのまま全員を巻き込んだのだ。

発狂しそうな気持ちを大声で掻き消すように亡き同期たちの事を思っ歌っていたのだ。

それを目撃した彼は、ここに来た自分の選択が間違っている事を深く反省した。

既に104期生は、様々な試練を乗り越えて兵士として認めて送り出していたのだ。

自分の役割は、後輩になる人材の教育と、彼らの活躍を見守る事を思い出して帰路に

2章 希望が1つずつ潰えても絶望的状况を乗り越えられると信じていた時代

14話 前代未聞の抜擢

フローラは死にかけていた。

昨日、あれほど立体機動で身体に負担をかけたのだ。

むしろ、よくもつたほうである。

「朝…わた…の…」

人体は、空中を回転しながら飛び回る動作など想定外である。

彼女の場合は、常人より遥かに平衡感覚と三半規管が鍛えられているとはいえ、

昨日だけで筋肉、内臓、三半規管への負担が、常人の生涯で受ける1万倍以上もあったのだ。

勢いとやる気と復讐心で誤魔化しても、疲労と肉体の負担は誤魔化せなかった。

なにより寝坊して朝飯を喰い損なつたせいで、自律神経が大幅に乱れていた。

「フローラ！」

「フローラ起きてる!?!」

ノック音と共にミーナとクリスタの声が聴こえてきた。

声を上げたくても呻き声しかできない彼女は諦めて無言で瞼を瞑った。

「あれ?まだ寝てるの?」

「フローラの事だもん、パンを鼻に近づければ起きると思うよ」

「サシヤに次ぐ嗅覚の持ち主だもんね」

「ワンちゃんと同じ勝負のサシヤに次ぐってすごいよね」

さすがにここまでコケにされると彼女は黙っていられずに抗議の声をあげた!

「あつ!!い!ぬ!?!」

「起きちやつた…」

「とりあえず食べさせてあげましょう」

ミーナとクリスタは、パンをフローラの口元に近づけて食べさせようとする。

フローラは優しく手を払い除けて自分でパンを掴みベッドの上で齧って食べた。

「すごい生命力ね…明日には自由に駆け回ってるかも」

「だから言ったでしょ！2日間で医務室に7回も搬送された実績は伊達じゃないわ！」

生命力に対して、信頼されているのか馬鹿にされているか分からなくなったフローラ。

ただ、ミーナの性格上、前者であることは間違いない。

「目覚めた事だしフローラをトイレに連れていきましよう」

「ええ、命を助けられた私たちがしつかり介護しないと…」

さすがにトイレくらいは一人でできる。

そう思ったフローラは、無理やり立ち上がり身体がふらつきながらもトイレに向かお

うとした。

「ダメじゃない、まだ安静にしてなきゃ！」

「トイレなら一緒に付いて行ってあげるわ！だから一緒に行こうね！」

彼女たちの邪悪な笑みで完全に理解した。

乙女として尊厳を踏みにじられた所を目撃した自分にも尊厳を損なってもらう。

すなわち、お相子を狙っているという事に…。

「あっ！待ちなさい！」

「しまった!？」

彼女たちの制止を振り切って扉から飛び出したフローラは、凄い勢いで兵舎中を駆け回った。

「おい、あいつ。疲労で寝込んでいたって聞いたのにもうあんなに元気になったのか…」「知らんのかコニー、あいつは一晩寝ただけで疲労が全回復する噂があるって事を！」

「じゃあ、今晚もお前の晩飯を狙って来るな」

「その前にほとんど食べて見せるさ」

「お前の本能のままに生きていく図々しきだけは、ホント尊敬するよ」

ジャンとコニーを背後から追い抜き、時折四足歩行で駆けまわるフローラを見て呆れた2人。

これでもかなり心配したが、彼女の元気そうな姿を見て落ち込んでいたのがバカらしくなった。

「ねえコニー!? フローラを見なかった!？」

「あつ!? ああ、あいつなら、その角を右折していったぜ」

「ありがとう! 行くわよクリスタ!」

「ええ、絶対に捕まえて見せるわ!」

血眼で睨みつけながら服を力強く掴んできた彼女たちに思わず嘘を言ってしまったコニー。

異様な雰囲気を出しながら獵犬のように駆け出していく女たち。

「なにやらかしたんだあいつ」

「少なくとも女の子にモテモテで羨ましい、俺にも追ってくれる乙女はいないものか」

「お前みたいな糞みたいな性格の馬面じゃ、女は寄ってこないと思うけどな」

「言つたなこの坊主野郎！」

喧嘩を始めた2人は、たまたま通りかかったライナーに仲介されるまで続いた。

一方、フローラはトロスト区戦で培った「特殊能力」を最大限に駆使して彼女たちから逃れた。

男子トイレの個室を利用して周囲の「声」を聴きながら移動しようとしたが無理であった。

結局、同期たちの目を盗むように重傷を負った逃亡兵の如く進んでいった。

道中で俯いてるフロック、ダズ、サムエルの憂鬱3兄弟に気付かれないように移動したほかに。

「そう、兵団選定の日は、10日後になったのね」

「トロスト区の巨人殲滅作戦が終了してないのもあるな、今でもやってるんじゃないか」

「それでエレンの処遇を決める会議は開かれてないのね!」
「良く分からないが、そうらしいな」

入手した情報を軽くメモをしてフローラは手帳を閉じた。

エレンの安否が判明しなかったのは、もどかしいさがあったが少なくとも推測はできる。
る。

既にエレンが巨人化できる人間であると壁内中に知れ渡っている以上、隠蔽など不可能である。

必ず人類を納得させる為に、公式に「兵法会議」を開き処遇を決めて発表するはずだ。
そう考えた彼女は、あらゆる可能性を想定して対策を練ろうと考えた。

「それより大丈夫なのか!?!すぐくフラついてるが!?!」

「これが大丈夫に見えるの?」

「いや、全く見えんな、今日は休日になったから部屋に戻って休んだ方がいいぞ」

「ありがとう、でも安静にしていると悪化するから軽く乗馬で三半規管を慣らしてから寝るわ」

「余計に悪化すると思うんだけどな」

「とにかくクリスタとミーナには伝ええないでね！ゴードン、貴方を信じてるわ」

同期の気遣いと情報提供に感謝しつつ彼女は、吸い込まれるように訓練所に向かっていった。

兵舎から訓練所に繋がる門は、目と鼻の先である。

もつとも、自分の思考を先読みしている女たちによつて門で待ち伏せされている可能性がある。

だからわざわざ遠回りをし、近くの門から訓練所に向かった。

道の真ん中で昼寝しているサシャのおかげでフローラの移動はさほど目立たなかった。

「フローラ、安静にしてなきや駄目だよ…」

「ありがとう、ベルトルト」

「本当に死ぬよ!? あんたが死ぬとこっちまで精神的に参るから勘弁して」

「立体機動のやりすぎで平衡感覚が狂ったのよ! 馬に乗るだけで良いのよ」

いぎ、訓練所に着くとアニとベルトルトと遭遇してしまった。

慌てて理由を述べるが彼らは納得しないようである。

彼らの性格上、必ず自分を有無言わせずに兵舎へ送還するだろう。

普段ならありがたい心遣いであるが、今回はさすがに遠慮したかった。

「フローラああああああ！」

「なんかアルミンが呼んでるよ？」

「うーん、良く分からないけど良い話じゃなさそうね」

「まったく、気晴らしに訓練に來ただけなのに何で面倒事が重なるのかね……」

精神的に参っているアニは、訓練所に來たもののベルトルトの視線が気になってそれどころではなかった。

問い詰めても曖昧な返答しか返さずに場所を変えても付いてきてうんざりした。

更に明らかに死にかけているフローラが訓練所に併設されている馬小屋に向かつて行こうとしたので呼び止めた。

すると、訳が分からない理屈で馬に乗ろうとするおバカさ加減に呆れるを通り越した凍り付いた。

必死に連れ戻そうとしたところ、アルミンがこつちに向かつて走ってきたのだ。

頭がパンクした彼女は、死んだ目をして情報処理を放棄した。

「ちよ、何事なの!？」

「フローラ!早く逃げた方が良いでしょう!」

「クリスタとミーナ率いる救護班がお尋ね者のわたくしを探しに来たのね!？」

「えっ?」

「えっ?」

自分の羞恥心や尊厳破壊された姿を見たがる女たちの話かと思ったフローラは肩透かしである。

アルミンもなんか良く分からない彼女の返答で一瞬、思考を停止してしまった。

「じゃあ、エレンの重要参考人として憲兵が連行しにきたのね!？」

「それも違うよ!」

フローラは内心で、心当たりがある事を言ってみたが外してしまった。

むしろ、これ以外の何があるのか本気で分からなくなった。

「調査兵団の分隊長がフローラを連行しようとしてるんだよ」

「憲兵じゃなくて？なんかの間違いでしょ!？」

「ホントだつて！外観でフローラの名が出た途端、血眼で探し回ってるんだ」

「その分隊長つて、ゴーグルを付けた女の人じゃなかった？」

「そうだよ」

身の危険を感じたほどの視線を送ってきた調査兵団の女兵士。

分隊長クラスとは知らなかったが、とてもじゃないがこの状態で遭遇したくなかった。

「あー!!そこに居たー!!」

「待つてください！彼女はまだ安静にしないと…」

「分隊長ー!?!任務を部下たちに押し付けてどこに行く気ですか!?!」

噂をすればなんとやら。

ハイテンションでこちらに走ってくる女分隊長。

それを宥めようとするが失敗して後ろから追つて来るミカサと副官らしき男。

「ベルトルト！ 足止めを頼むわ！ その間に逃げる」

「えっ！ えっ！？ えええっ！？」

「良く分からないが、あの女は制止させないと不味いね」

「つて！？ どこに行く気なの！？ 君は安静にしてなきや駄目だよ！！」

ベルトルトを囿に任命して気力を振り絞つて馬小屋に駆け出したフローラ。

未だに平衡感覚のズレが直つておらず、直進してるつもりがだいたい遠回りになってしまった。

それでも馬小屋に転がり込んだ彼女は、管理者たちの制止を振り切つて乗馬して逃げ出した。

馬小屋に到着して1分ほどの早業であった。

「ほら！ やつぱ元気じゃないか！」

「どう見ても我々から逃げ出しているしか見えませんが！！」

「そんな事はどうでもいい！ とにかく勧誘しに行くぞ！」

「ちよつと…止まって」

「待つてください！一旦話をしましょうよ！」

勇気を振り絞つて両腕を広げてベルトルトは呼びかけた。

アルミンもとりあえず釣られて進撃するハンジを制止させようとした。

しかし、彼女は馬の方に向かって走つてしまい、彼らの努力は水の泡になった。

「何してるの？」

「僕にもよく分らない」

「僕も…なんでこんな事を…えーつとアニ？」

「なんだい？」

「訓練している姿…もう一回見ていい？」

「ダメに決まつてるだろう！アルミン、ベルトルトを頼んだ!!私は帰る」

バカらしくなったアニは、ベルトルトをアルミンに押し付けて兵舎に向かつていった。

「サンドラ：フローラを見なかった？」

「見てないわ」

「どうせ、訓練所に居るんだらう？」

「でもここには来なかった」

「訓練所に入る門は複数あるんだぞ？絶対侵入してるって」

門を見張っていたクリスタであるが、フローラが来ずに困惑していた。

仕方なく少し離れて同期に聞き取り調査を行なうが成果が得られなかった。

その様子を見ていたユミルが事情を聞いて呆れながらもアドバイスをした。

「だって…」

「私も取り押さえるのを協力するからさ、訓練所に行ってみようぜ」

「ありがとうユミル！」

頼れる親友の手を掴んで共に門を開いて訓練場に進んでいった。

ついでにサンドラも興味本位で気になったので同行して3人で歩いていった。

訓練所で彼女達が目撃した物はー。

「分隊長！さすがに可哀そうですね！一旦退きましようよ！」

「モブリット！ここで話をしとかないとまずいんだよ！」

「待ってください！フローラに何をやる気なんですか!？」

「もうなんなのよおおお！神様はわたくしに恨みでもあるわけ!？」

そこには、パジャマを着たフローラが馬で訓練所を駆けまわっており、その後方では調査兵団の兵士2名とミカサが馬に乗って追いかけている状況だった。

「凄いぞ！あの昨日で今日だ！これだけ動けるなら凄い兵士になるぞ！」

「あなたは人の心つてあるんですか!？」

「今、伝えないとまずいんだよ！直前になって伝えるのは可哀そうじゃないか」

ハンジ・ゾエは、速やかにあの訓練兵に伝えておきたいことがあった。

逃げられたのは予想外だが、そのタフさとスタミナ、そして行動力。

間違いなく逸材であった。

「しまった…色々やらかした…」

フローラは、乗馬して馬を走らせて初めてパジャマを着ている状態に気付いた。それどころか、色々やらかしており報告書が10枚以上になるのは間違いない事にも気付いた。

「やつほーい！その君！そろそろ乗馬訓練は止めてもらえないかな？」

「分隊長、パジャマ姿で乗馬って、どう見ても我々から逃げる為にやつてるのでは？」

「やだねー、まるで私たちが彼女を拉致して強制労働させる悪党じゃないか？」

「では、例の抜擢の話ではないのですか？」

「いや、その話だよ！」

「やつぱり悪党じゃないですかー！やだー！」

クリスタから見ると、何が起こっているのか分からなかった。

ただ、フローラが肉体を酷使している現実に絶望した。

思わず、彼女の前に飛び出していった。

「チッ！」

遠くに居るクリスタの姿を見たフローラは舌打ちをした。

涙目になっている彼女が一心不乱で、こちらに飛び出してくることを察したからだ。

舌鼓を何度も打って両脚で胴体を圧迫させて馬に次の指令を送るといふ意志表示をした。

そして馬が察してくれたのを確認した後、上半身を大きく傾けてから軽く手綱を引いた。

馬は嘶きながら大きく前脚を上げてその後、立ち止まったクリスタの目の前で振り下ろした。

「クリスタあああ!!危ないじゃない!!自殺しに来たの!」

「だって…だって…!」

「さすがに焦った、クリスタ大丈夫か!」

間一髪であった。

1秒でも判断が遅ければクリスタは最低でも全治半年の重傷を負うところだった。

そうならない為に彼女から横に回り込むようにしたのに無駄に近づいてきた結果で

あった。

馬から降りてクリスタの身体に異常がないか、必死に確認するフローラ。

まさか、馬に向かって突撃するとは思わず傍観してしまったユミルも追いついた。

「あなたの行動のせいでクリスタが死にかけたんだが、どう責任とるつもりだ？」

「じゃあなに？ 自己犠牲精神溢れる女神さまの看護ごっこに付き合えというの？」

「やっぱ、そういう理由だったか、そうじゃなきゃこうならんもんな」

泣きじやくるクリスタに軽く小突いたユミルは、彼女の頭を優しく撫でた。

「とにかく私のクリスタが無事でよかったよ」

「そうね、さすがに彼女の心境を無視し過ぎたわね…今日は大人しくしておくわ」

「そんな事言つて、またみんなの迷惑を掛けてクリスタを傷付けるんだろう？」

「……無言は肯定と取って良いか？」

「コニー、サシャと同じトラブルメーカーのわたくしに何を期待してるの？」

「大丈夫だ、最初からあんたに期待していない」

無傷なのを確認して一息つく暇もなくユミルに責められるフローラ。既に罪悪感があったが、ここまで悪い意味で信用されているのはショックであった。

「フローラ！」

「どうしたの？」

「トイレ行つてないでしょ？ 私が連れて行つてあげる」

「大丈夫、お世話はやんとしてあげるから…安心して放尿して」

「ねえユミル…クリスタが落ち着くまで面倒見てあげて」

「…そうだな、メンタルケアは、あんたに任せるから責任もつてやれよ？」

「ええ…分かつてるわよ」

ユミルは、近くに居たサンドラと共に抵抗するクリスタを兵舎に連行していった。

クリスタは、何も残せずに巨人に喰われそうになったのを何度もフローラに助けられた。

命の恩人である彼女に何かしてあげたいが、昨日は中々機会が訪れなかった。

ところが翌日、動けなくなつたフローラを見て絶対に看護するという気持ちが発露していたのだ。

「よし、話は終わったみたいだから今度は私の話を聴いてもらおうか!」

肩を叩かれてフローラが振り向くと、さきほど追跡してきた女分隊長が居た。

「さきほどの会話で分かっているけど、名前でフローラで良いよね?」

「ええ、そうですけど」

「よし単刀直入で言うよ!君には調査兵団に入ってもらおう」

「別に構いませんわ、巨人を殲滅してシガンシナ区を取り戻す気なので…」

フローラすれば調査兵団一択であった。

ただ、ここまで露骨に勧誘されると思わなかったが。

「聞いたかモブリット!?やっぱ無駄な心配だったじゃん!」

「君、本当に良いのか!?!無理をして言っていないかい?」

「無論です、わたくしは調査兵団に入る予定ですし、考えが変わる事はありません!」

「よしよし!良い返答だ!」

ハンジは、訓練兵の返答に大満足してご満悦な笑みを浮かべていた。それと対照的に申し訳なさそうにモブリットは顔を背けた。

「じゃあ、明日の午前7時にフル武装してトロスト門の壁上に集合してね」

「はい？」

「いやー調査兵団に入る前にどういう仕事をしてるか知っておくのとて重要じゃない？」

「確かにそうですけど」

「そこで、明日、体験入隊してどんな仕事をするか確認しても損はないよね？」

「ええ、仰る通りです」

なんか話が良く分からない方向に転がっているものの納得はできるので肯定した。

「しかし不味いですよ…正式配属前の訓練兵を使うなんて…」

「大丈夫大丈夫、上には今から話を通しておくからさ」

「分隊長!?今からですか!?!」

「だって、名前も分からないのに話せないだろう？」

昨日の壁上であつた時もそうだが、この女兵士はかなり自己中心的である。

副官らしき男が必死に宥めているが、そこまで止める気はない感じがして同罪な気がした。

「じゃあ、明日の午前7時にトロスト門で逢おう！私の名前はハンジ・ゾエ！よく覚えておくように」

「私の名前は、モブリット・バーナーだ：済まない君を巻き込んでしまった」

「なにやっつてんのモブリット！要件は済んだから、はやくトロスト区に戻るぞ！」

「はい、ただちに！」

嵐のように現れて嵐のように調査兵団の兵士たちは去っていた。

とりあえず、名前と特徴と第一印象を手帳に記録したフローラは馬を馬小屋に返しに行つた。

何度も頭を下げたなんとか解放されて兵舎に帰つた。

一方、ミカサとアルミンは調査兵団に報告してハンジがこつてり絞られるのは別の

話。

「ユミル、バトンタッチよ」

「ああ、頼む」

フローラは、途中でライナーに逢って挨拶した後、ユミルたちと合流してクリスタを回収した。

目を充血させた彼女を伴って部屋に戻ると先客が居た。

フローラが寝ていたベットにミーナ・カロライナが寝息を立てて寝ていたのだ。

「さすがに叩き起こすのは可哀そうね」

「うん」

「髪の毛を梳かして、香水を付けたら寝るわ」

「私も手伝っていい？」

「じゃあ髪の毛を梳かすのをお願いするわ」

「うん」

目を輝かせてブラシをもったクリスタは、無駄に髪の毛を梳かした。

そして予備のパジャマを何故かゆっくりで着せ替えてもらった。

その後、自作した香水を彼女に付けてもらったフローラはベットに向かつていった。

「でもなんでフローラのベッドに居るんだろう？」

「よく分からないけど、温もりと匂いが欲しかったんじゃないのかしらね」

同期であり親友であったトーマス・ワグナーが志半ばで戦死。

同じ班だったミーナも巨人に喰われかけて精神が崩壊寸前だった。

最後の抛り所になったのは、親友であり命の恩人であるフローラであった。

クリスタと別れたあと、寝室に戻って親友が戻るのを待っていたがそのまま寝てしまった。

そんなドジっ子のミーナであったが、壊れかけた心を癒すように熟睡していた。

「クリスタ、あとは頼んだわよ」

「フローラおやすみなさい」

フローラはクリスタに自身が勝手な行動を取らないように見張るようお願いをした。

こうすることで、頼られていると認識させると同時に勝手な真似をさせずに済むからだ。

そして先客のミーナであったが、追い出すことはせずに同衾する事にした。

今日逢った同期たちの誰もが鬱状態であり、その中でも追い詰められた彼女。

今朝逢った時の「声」は、「私は貴女の為なら、肉体も精神も魂も全て捧げます」だった。

「人生って中々うまくいかないものね…」

乗馬によって平衡感覚を調整したフローラは、ミーナに向き合いながら瞼を閉じた。

15話 巨人捕獲作戦

「これであらかた片付いたか」

「はい、間違いありません、ただまだ数体残っているようです」

「ミケ分隊長の嗅覚で感知できたら楽なんですけど…」

「さすがにこの市街地じゃ感知しきれんだろう…特に今はな」

アーベル・オツペンハイマーは、ニファの提案を一蹴した。

今回の作戦は、巨人を殲滅するよりも遥かに難易度が高い。

状況を把握する為にトロスト区の街並みを望遠鏡で眺めていた。

「クソ、10m以上はあるな…」

「さすがにデカすぎますね」

「と言っても4m級じゃ壁上で眺めていても見つからんしな…」

巨人を1体発見したが【目的】のものではなく諦めて彼は、懐に仕舞いゴーグルを付

け直した。

「やつほーい！みんな元気？」

「ハンジ分隊長！」

気が抜けた声の主の呼びかけによって2人は振り返った。

「遅いじゃないですか！」

「いやー作戦の説明に時間が掛かってね！」

「…その子は誰なんですか？」

上官であるハンジ分隊長の傍らに見かけない兵士が居る。

しかも紋章から訓練兵であることが分かる。

2人は何故、この重要な作戦に場違いな訓練兵が居るのか疑問に思った。

「よくぞ訊いてくれました！この子は、フローラ・エリクシア！今回の作戦に参加するよ
！」

「はあっ!?!」

「待つてください! 巨人捕獲作戦に参加させる気ですか!?!」

「ケイジ、さっき説明したのにまた聞くの?」

「いやいや、本当に参加させる気とは思わないでしょうが!?!」

同僚であるケイジ・ランドルフの慌て具合から本気で訓練兵を加えるようである。

余談であるが【巨人捕獲作戦】は過去にも何度も実施されたが、5回だけ成功しただけである。

その成功例も壁外であった為、新手の巨人によって護送部隊が壊滅して結果的に失敗に終わった。

今回は、奇遇にも壁内に居るという事で、回収も容易く捕獲作戦の難易度は大幅に下がっている。

とはいえ、巨人を討伐するより遥かに難易度が高い作戦である。

「おいそのガキ、この女に付き合つてると早死にするぞ」

「そうだぞ、せめてオレの実力に追いつくまでえはあ!?!」

「オルオ、調子に乗つてるから舌を噛むのよ」

「うふはあい！へはあら！」

捕獲作戦の指揮を執る第4分隊の精鋭以外は、調査兵団でも最精鋭の人員が勢揃いしていた。

それを見たフローラは、話が違くと内心で憤っていた。

てつきり体験入隊かと思つたら実戦投入されるのを10分前に聴いたのだ。

さすがに抗議したが、華麗に無視されてここに来てしまったのだ。

「腕は確かなのか？」

「駐屯兵団第一師団精鋭部隊のお墨付きって言えば分かるでしょ？」

「なるほど、それはヤバいな」

そう口にしながらもリヴァイ兵長は、既にフローラのやばさに気付いていた。

それは巨人を討伐する技量でも桁違いなスタミナでもない。

困惑している彼女には恐怖と言う感情が一切見られなかった。

すなわち、訓練兵の皮を被った得体のしれない化け物とだと見抜いていた。

「ハンジ、そいつはお前が連れてきたんだから最後まで面倒見るんだろうな？」

「もちろんだよ！もし困った事があつたら遠慮しないで私に聞いてね」

「今がその時では？」

「なんか言つたかい？グンタ君」

「いえ、なにも…」

かつて、鬼の形相で叱ってきた教育係だった上官の圧力で縮こまるグンタ。

寵臣のニファ以外は、ハンジこそが調査兵団の中で一番怖い人物だと理解している。

そして普段は調査兵団の頭脳としてエルヴィンをサポートしているからこそ無理がよく通るのだ。

「おい始めるならささっとやれ、グズグズしていると待たせている駐屯兵団に悪いからな」

「よし、捕獲作戦開始だ！みんな絶対に死ぬんじゃないぞ！」

こうして、フローラに巨人捕獲作戦の全容を説明される前に作戦が開始した。

「フローラ、君は我々と一緒に行動してくれ！」

「はい、分かりました」

副官であるモブリットの指揮の元、第4部隊と共に市街地へ駆けていく。新兵ということで気を遣っているのか立体機動の動きは抑え気味であった。

「分隊長！新兵を置いてどこに行く気ですか!？」

「その子ならついてこれるよ！さあ、一緒に可愛い子を捕まえに行こう！」

一方、知るかバカと言わんばかりに班員たちを引き離して突っ込んでいくハンジ。もちろん、全員が自身が選抜した精鋭中の精鋭だからこそ無茶な行動をしていた。

「ハンジさん！14時方向に10m級巨人です！」

「うーん、さすがにデカすぎるか！残念だけど討伐するよ！」

ゴーグルがよく似合うアーベルの警告を聞き流した彼女は目の前の巨人は要らないと判断した。

襲い掛かってくる巨人の拳を間一髪回避して急旋回して綺麗なV字型の軌道を描いてうなじを斬り落とした。

「あははは！惜しかったね！」

「分隊長！いい加減にしてください！」

気ままに自由奔放で動き回る女隊長を宥めるイケメンの副官。

戦場ではなかったら微笑ましい光景かもしれない。

だが、フローラはハンジ分隊長の動きだけを事細かく見て分析していた。

一見ぶぎけたようで、相手の攻撃速度を計算した上で死角に周るように移動した。それも最低限の動きと重心の傾きだけで綺麗なV字を描いて見せたのだ。

「立体機動って中々奥深いですわね」

フローラの場合は立体起動中にどう動けばどう動くのかは理解していた。

ただ、その通りやれば正解というわけではない。

自分の技量は、訓練と実戦で極限まで高めたものの、技術に関しては教科書の延長上

でしかない。

だからこそ、新たな技術が必要である。

「さて、次の巨人を探しに行くよ！」

「まだ続けるつもりか……」

「ケイジさん、この機会を逃せば巨人を捕獲する機会ないですし、もう少し続けませんか？」

「まったく……ニファは優し過ぎる……」

リヴァイ兵長の回転斬りと、地面にアンカーを射出するという発想、最短ルートでうなじを斬る動作。

同期たちや精鋭班では絶対に身に付かない【巨人を狩る為の立体機動】がここにはあった。

彼女は、この中で自分が使いこなせる技術を学び、極限まで肉体に負担をかけない立体機動。

すなわち、フローラ専用の立体機動戦術を造り上げようとした。

「あーっ！あんな所に4m級の巨人が!!この子を捕まえるぞ!!」

「分隊長!【捕獲銃】はどうされたのですか!？」

「あつ、フローラに渡したまんまだった…!」

「なにやっつてんですか!!」

「そんなワケでフローラ、よろしく!」

「ええっ!？」

フローラは、捕獲銃と呼ばれている特殊兵器を取り出した。

撃ち方や射程範囲、効果などは、無駄に熱く語ってくれたおかげで理解している。

「無茶です分隊長!」

「いいから黙って見てろ!」

「はい」

まずは、班編成から外れて4m級の巨人を飛び回ってみた。

巨人は動きに振り回されて混乱していた。

その隙を見逃さずあらかじめ拾っておいた小石を両目に向けて投げつけた。

異物が入って膝をついて両目を両手で抑える巨人を確認し捕獲銃のトリガーを引いた。

「臆さず成功させたな」

「ハンジ分隊長ですら初回は外したのに……」

「分隊長？急に静かに……どうかされましたか!？」

勢いよく射出された捕獲用の網は、巨人の身体を包み込んでそのまま壁に激突させた。

当然、反動で吹っ飛ばされたフローラは屋台のテントにめり込んでいた。

しかし捕獲班は、そんな事より俯いて黙り込んだハンジだけを心配そうに見つめていた。

「やったぜええ！4 m級ゲットだぜ！」

「分隊長、興奮し過ぎです！」

手の差し伸ばたモブリットを無視して、鼻息を荒くしながら飛び跳ねまくる人間の奇

行種。

呆れながらも巨人の捕獲を喜ぶ第4分隊の班員たち。

そして新兵を守ると誓っていながら、その存在を完全に忘れてしまったモブリット。

「そういえばフローラは？」

「「「あつ……」」」

急に現世に戻ってきたかのように冷静になったハンジの一言で第4分隊は彼女を探し始めた。

「おい大丈夫か!？」

「大丈夫に見えますか!？」

「あはははは!面白おかしくトッピングされちゃったね!」

屋台にあったあらゆる果物の果汁まみれになったフローラを見て腹を抱えて笑うハンジ。

誰も救出しなかったので自力で脱出して落下した結果、酷い目にあったフローラ。

客観的に判断できる者が入れれば、この異様な空気に気付いただろう。誰もが目の前の惨状に気付いていながらもあえて無視をしている事がある。

「分隊長！目標を達成できたので速やかに巨人を殲滅しましょう！」

ここは、死体から漏れ出したあらゆる体液が地面を汚しており、大量の羽虫とウジ虫の縄張りになっていた。

トロスト区では判明しているだけで800人以上の犠牲者が出ておりその死体が点在していた。

それだけなら良かったのだが、疫病を運ぶ鼠を筆頭に普段見慣れない「死の使者」が出現していたのだ。

死の都から病魔の都に変貌しつつあるこのトロスト区で調査兵団ができる事は限られている。

「いや！まだだ！もう1体の巨人を捕獲するぞ！」

「何を仰っているんですか！これ以上居るとこちらが病魔に蝕まれますよ！」

「たった1体では、ここに居る犠牲者たちに顔向けができない!!」

「我々は、この悲劇を二度と起こさないように巨人の生態と本質を解明し、人類の勝利へ近づける！」

「これ以上、この恐怖を！悲劇を！繰り返してはならない！そうだろモブリット？」

「仰る通りです」

絶望の表情のまま硬直した死体の穴と言う穴から体液が噴き出して地面を染め上げており、

甘くも鋭い死臭が毒ガスの様に口元を覆うように巻いた布を貫通して鼻と喉を刺激して脳に死を囁いている。

羽ばたくカラスと羽虫が嘲笑うかのように生存者に更なる新鮮な死体を要求していた。

そんな地獄の中でハンジは一層に巨人を憎んだ。

だからこそ理性を狂わして常軌を逸してでも、巨人を理解しようとした。

「分隊長！7m級がこちらに向かって来ています！」

「えっ？それってもしかして仲間を助けに来たって事!？」

「よーし！あの子も捕まえるぞ！」

しかし、彼らは大切な事を思い出した。

「おいなんで誰も捕獲銃をもつてないんだ!？」

「だってハンジさんが新兵を引き連れて来たせいで準備が…」

「ケンジ！私のせいにする気!？」

「本当に誰も持っていないのか!？」

一斉にフローラに視線を映す第4分隊。

彼女は、なんとなく木箱から持ち出した1個の捕獲銃を差し出した。

「よし、お前に捕獲を託す」

「最後のチャンスだからな！結果はどうあれこれで終わりにするぞ」

最後のチャンス。

確かに巨人の「声」がこの1体しかないのを聴いてフローラは実感していた。だからこそ試したいことがあった。

「まず両腕を斬り落とせ！」

「アイサー！」

ケイジとアーベルは、息の合ったコンビネーションで両腕を斬り落とした。そしてニファとモブリットが両脚を狙って動き出す前にフローラは動いた。トロスト門の前でリヴァイ兵長が披露した回転斬り。それを物にして見せる。

「おいーまだ…！」

男の制止する声が聴こえた。

でもフローラからすればどうでもいいことであった。

刃渡り以上のいる存在に斬撃を繰り出せるあの技を！くり出して見たかった！もし、失敗しても優秀なハンジ率いる第4分隊が助けてくれるだろう。

「喰らいなさい！！！」

巨人の足元に飛び出して両方のアンカーを右太腿に射出してワイヤーを高速で巻き取る。

動きを巨人の注視しながらガスを噴出させて勢いを付けてアンカーを外して回転斬りをした。

右太腿を斬り落とすどころか左太腿をも両断する威力であったが、乱用できる技ではなかった。

自他共に認める空間把握能力と平衡感覚の良さのおかげでなんとか生還できたほどである。

「ほお！リヴァイと同じ回転斬りを独学でやったのか」

「つて！なんで新兵が戦ってるんですか!？」

「そういうお年頃なんだろうね」

「なーにを呑気に言ってるんですか!？」

フローラは屋根の上から四肢を挽がれた7 m級巨人に捕獲銃を向けてトリガーを引いた。

同じく反動で勢いよく吹っ飛ばされたが他の建物にアンカーを刺して華麗に回避行動を取った。

「うおおおお！7m級の巨人捕獲成功！やっほおおおお！！」

「おい信煙弾を上げろ！これ以上付き合ってられん！」

「了解！」

ハンジが7m級の巨人が捕獲できている間に部下たちは撤収の準備をした。すかさずアーベルが黄色の煙弾を打ち上げて捕獲作戦を強制的に終了した。

「しまったああああ！！」

「分隊長!？」

「ハンジさん何かあったんですか!？」

ハンジの一言で衝撃が奔った一同。

「あの子たちに名前を付けるの忘れてたああああ！」

「そんなの後でいいでしょうが！」

「全然良くないよ！そうだな……」

「分隊長！せめて捕獲した巨人をどうにかしないと……」

「よし決めたぞ！」

「聞いてくださいよ！」

ハンジの動きに振り回される第4分隊を見て、このやりとりが続いていくのかと戦慄するフローラ。

今回みたくない無茶ぶりは、ずつと続いていくと考えると何か考えないといけない。

例えば、リヴァイ兵長から直接指導してもらおう事で巨人愛好家の彼女から逃げるとか。

「4 m級をソニー、7 m級をビーンとする」

「はいそれにしましょう！」

「良い名前ですね！」

「さすがハンジさん」

さっさと終わらせたい隊員たちは、もはやお世辞を通り越して馬鹿にしているようであった。

「おい終わったか？」

「兵長！2体の巨人を捕獲しました！」

「チツ！さっさとこいつを運ぶぞ！」

「丁重に扱ってくれよ！被検体とはいえ、これから意志疎通を図るんだから」

「イルゼの様にか？冗談は、ほどほどにしておけ！」

イルゼという単語を聞いて困惑するフローラ。

話の流れから過去に巨人と意志疎通ができたようである。

そんな事、教本にも書いてないし聞いたこともない

「すみません、イルゼとは？」

「あーそうだったね！イルゼ・ラングナーっていうのは死んだ調査兵団の兵士だよ」

「その子が最後に書き記した手帳から巨人と意志疎通を成功させたって書いてあったんだ」

「ユミル様、ユミルの民、よくぞって発言していたそうだ」

「モブリット、最後まで私に説明させてくれないかな？」

「今は時間がありませんので簡潔にご説明させて頂きました」

ユミルという単語を聞いてそばかすの彼女を思い浮かんだ。

クリスタと一緒に行動しているが、その口の悪さから敵を作り易い。

本当は優しい女であり、クリスタと一緒に居るのも暴走しないように見張ってるからだ。

誰かに褒めてもらえるように犠牲になろうとするクリスタを全力で守っている聖女。

「そのイルゼって方、そばかすがある女の兵士ではありませんでしたか？」

「うん？ そうだけど何で分かったの？」

「もしかしたら顔に特徴があると思ひましてー」

「顔かー、考えたこともなかったな…」

「お前らしい加減にしろ！」

リヴァイ兵長の叱責を受けて慌てて巨人の護送作業に移る一同。

討伐が完了したようで、護送中で調査兵団の兵士を多く見かけた。

時刻を確認すると午前10時、昼の休憩後に死体回収の任務があるかもしれない。恐怖に怯える兵士の視線を無視して最後まで巨人の護送をやりきった。

「いやー助かったよ！これで巨人学は更なる進歩を遂げるだろう！感謝しきれないよ！」

「本当に済まなかった…今度はこんな事がないように気を付けるから…」

「なーに悲観的になってるの！モブリット！」

「今回は、調査兵団始まって以来、死者が出なかった初めての作戦だったんだよ！」

今は大分環境が良くなったとはいえ、壁外探索の度に調査兵団は3割ほどの損害を出すのだ。

過去4年で所属してた兵士の9割を損失し、既に大隊未満の組織となっていた。

あまりにも死者が出過ぎた為に、兵団で唯一兵士に個室が割り振られている兵団である。

それが本日、史上初めて死者なしで対巨人作戦において目標を達成できたのだ。

「今日は、めでたい日だ！いまから記念にパーティでも開くぞ！」

「分隊長、午後12時40分から全兵団を動員して遺体回収と清掃作業があります」

「ああもう！」

フローラが懐中時計で時刻を確認すると11時50分であった。

今からでは、兵舎に帰還して予備の戦闘服に着替えるだけで終わってしまう。

羽が生えた昼飯がさよならバイバイしてしまう絵図を思い浮かべながら俯いていた。

「次も機会があったらいいね！」

「分隊長、せめて正式配属してからにしましょうよ」

「そうですよ！」

「むしろ、新兵がここまで動けたのが奇跡ですよ」

ハンジが同僚たちと会話している隙にこっそり逃げ出したフローラ。

「リヴァイ、あの子を見てどう思った？」

「ああ、お前と同じ悪魔だな……いや、悪魔として向こうの方が格上かもしれねえ」

「やはりそうか」

訓練兵の背後を見守るようにしているエルヴィン団長とリヴァイ兵士長。

「キース元団長の再来だと思ったが、とんだ化け物が居たもんだ」

「彼女は104期生、元団長の教え子だ。戦闘技術以外にも何か受け継いでいるのかも
しれない」

「で？彼女は どう扱うんだ？」

「もちろん、彼女の選択に従うだけだ」

「昨日、あれほどハンジを叱責させたのに自由にやらせた訳がこれか」

「そうだ、彼女を見極めたかった」

エルヴィン・スミスの脳裏には、かつて上官であったキース・シャーデイスの顔を思
い浮かべた。

彼をよく知っているエルヴィンだからこそ、彼と同じようなフローラを気にした。

「彼女はトップになるべき人材ではない、精々分隊の部隊長までなら本領発揮するだろ

う」

「その点は、キースと同じだな」

「ただ、彼と違うのは全てを犠牲にしても目的を達成できるという事か」

「悪魔だからこそ理解できるってか？」

「ああ、よくも悪くも彼女は調査兵団を変える存在になるだろう！それが良い事か別にして」

2人は底知れぬ新兵を継続して見守ることを決意した。

巨人より質が悪い悪魔がどんな【影響】を与えるか。

彼らの危惧は正しかった。

もつとも、彼らがその影響に気付いた時には手遅れになるとはこの時、想像だにしてなかつたが。

16話 運命を変えた骨の燃えカス

ジャン・キルシュタインは、地獄の釜の底に居た。

トロスト区における巨人殲滅が確認された後、招集されて遺体搬送の任務に就いていた。

そこで目にしたのは、死屍累々の屍と大量の羽虫、そしてなにより知り合いだった者たちである。

彼が最初に遺体を運んだのは、「バカ夫婦」の片割れであるフランツ・ケフカだった。

兵団本部突入前では、生きており既に死んでいた恋人のハンナの止血を必死にしていた。

そんな彼は、下半身が消失しており、奇しくも胸より上を食い千切られたハンナと対称的だった。

「くそくそくそ！なんで俺たちがここまで苦しまなければならぬのか！」

「新兵、これが現実だ。受け入れて黙って遺体を運べ」

その後も顔馴染みの死体を荷台へ運んでいくジャン。

その道中で女性と思われるうつ伏せの死体を見つけた。

何のことは無い、ただ髪が長いから女性だと分かったただけだ。

蠢く無数の蟲によってあらゆる所が覆われており凄惨な状態で判別が付かなかったのだ。

「彼女も運んでいいですか？」

「構わんが、身元が分かる物を見つけたらすぐに教えてくれよ」

衛生兵の許可をもらいジャンは哀れな死体を持ち上げた。

遺体を退かすと、そこには赤子が居た。

「うわあああああああつ!!!」

いや、赤子だった肉塊があった。

母親とみられる死体から体液を浴びており粘液状の物体が全身を覆っていた。

その粘液に絡むようにウジ虫と蟻が至る所に張り付いて赤子を喰らっていた。

「思わずジャンは、死体を投げ捨てて後退りして背中を壁に激突してもなお声を上げて号哭した。

「ほう？硬直具合から見て、まだ死後4時間つてところか」

「ああああああああつ!!」

「おそらく庇った母親の死体から漏れ出した体液で窒息したんだろうな…可哀そうに」

ジャンは憲兵になろうと成績上位10位内を目指して必死に努力した。

彼は幼少期から反対する母親に反抗して、憲兵になり内地で優雅な生活を夢見ていた。

だが、現実是非情だった。

一步、判断を間違えればここに居る屍たちの仲間入りをすると実感して任務を忘れて泣き叫んだ。

彼の出身地は、このトロスト区であったのだ。

「なんですかこれ」

サシャ・ブラウンは、粘液状で覆われた複数の物体を指差した。

「巨人が吐いた死体群だろう、あいつらには消化器官がないもんな」

「腹いっぱいになった巨人が吐いたんだろう」

「もしくは、討伐した巨人の腹に収まっていたものか」

指を指したところには肉塊が重なっていた。

皮膚は溶け筋肉の筋が剥き出しになっており一部白骨が剥き出しになっていた。

老若男女、軍民間問わずこの世に居た痕跡を辛うじて示すように重なり合っていた。

黄色く黄ばんだ肉塊に粘液が多い重なっており鼻を貫く独特な甘酸っぱい匂いを保っていた。

これでは、遺体の身元確認などできるわけなかった。

「あつ！あつ！ああつ!?!」

「よお、クリスタ！」

「ゆゆゆ、ユミル…」

「なんだよ、そこまでビビることないだろう」

「だって…だって…」

男性陣が肉体労働をしている裏では、女性陣は掃除を任されていた。

その中でクリスタ・レンズは、目の前の惨状に脳が付いてこれずパニック状態になっていた。

それを見かねたユミルが肩をゆすり優しく髪を撫でてもお震えが収まることは無かった。

「わたし、巨人に包囲された時、囿になろうとしたの…」

「保身しか考えてない馬面野郎を見捨てられなかった時か」

「うん、自分が囿になれば…みんなが救われると思ったの」

「あん時、フローラが居て助かったな、クリスタじゃ無駄死にただけだからな」

「うん…そうだね」

事実であった。

成績上位10位に何故か奇跡的に入れたクリスタが一番実感していた。

誰かを助ける為なら自分の命など捧げていい。

そう思っていた彼女も実際に【死】の具現化した姿を目撃して恐怖で全身が硬直した。心臓の音とユミルの声だけが頭に響いており全てを投げ捨てて逃げ出したくなつたほどに。

「いいか！ 私たちの仕事は、掃除をすることだ！ 面倒事など臭くてうるさい男共に任せちまえ！」

「でも……」

「あそこに居るフローラを見て見ろよ！」

「わざわざ全身を果汁塗れにして【空飛ぶ雑巾】としての使命を果たしてるぞ」

ユミルが指差した先には、何故か立体機動装置どころか戦場に向かう一式を身に着けたフローラが居た。

屋根掃除にしては、明らかに過剰な装備であり何かやっていたのは間違いないだろう。

「そんなワケで清掃の続きをやろうぜ！」

「でも彼らはゴミでは……」

「クリスタ、失ったことより今やるべきことを考えるべきだ」

「えっ!? フローラ!?」

「ほら、よそ見していたフローラが盛大にすつ転んで立体機動で無駄に足掻いた挙句、屋根にぶら下がってるぞ」

「他の人にこうさせないように一緒に掃除をしような?」

「分かったよ…」

あまりにも間抜けな絵面のおかげでクリスタの笑みを見逃さなかったユミルは、強引に掃除へ専念させた。

自分をどんどん責めて、動く屍になっていく彼女の悪循環を断ち切ってくれたアホ女。

最初は大つ嫌いだったが、クリスタの自己嫌悪を崩してくれる存在力に感謝しつつ掃除を続けた。

「ごめんなさい」

アニ・レオンハートは死体に謝った。

そんな事など無駄だと分かっていたいながら謝った。

責務と責任で心が潰されそうになっておりそれを絞り出すように何度も謝罪した。それが死者から見れば、本当に無意味で誰も得しない行為であっても。

「ごめんなさい」

「謝っても仕方がないぞ、早く吊って次に行くぞ」

冷静なライナーの声が非情に響いた。

それは兵士なのだろう。

兵士であるからには死に対しても動じない精神力が必要だ。分かっていて、分かっていたがアニの心は限界だった。

「ごめんなさい」

「せつかくあんなに訓練したのにな…」

まるで他人事のように抜かすライナーに暴行する気力もないほどに。

そしてライナーの腰巾着と化した役に立たないベルトルトにも気が向かなかった。

「お前…マルコか？」

ジャンは右上半身を喰われたマルコの死体を発見した。奇跡的に特徴があるソバカスのおかげで見抜けられた。思わず、群がった蟲を追い払い顔を近づけてしまうほどに衝撃的であった。

「訓練兵、この人物の名前を知っているのか？」

「あり得ない…あいつに限ってこんな死に様は…」

「いいか訓練兵、仲間の死を嘆いている時間など無いのだよ！」

しかし、最悪の対面を果たして打ちひしがれるジャンに衛生兵は喝を入れた。

「ですが…」

「大岩で穴を塞いでもう2日になるんだ、この意味が分かるか？」

「分かりません」

「つまり死体を2日も放置してしまつたのだ、これ以上放置すれば伝染病が発生するだろう」

なんとかトロスト区を奪還したが死体による疫病で二次災害が発生する可能性があった。

街の復旧作業を阻害し、新たな死者を望む遺体をこれ以上放置する時間など無かつたのだ。

「彼の名は？」

「104期訓練兵団…所属の…マルコ・ボット…です」

「良かったなマルコ、判別すらできずに合同墓地に入れられる兵士が大半の中でお前は幸せ者だ」

「訓練兵、彼も荷台に運んで置け、これ以上死人を出すのは彼も望んではいないはずだ」
「分かりました」

トロスト区奪還作戦時には、まだ生きていたマルコ。

一体、何が起こったか分からない。

ただ、1つ言えることはマルコは、巨人に喰われたという事だ。

他の訓練兵に呼ばれて衛生兵が立ち去った後でもジャンは思考を停止させていた。

「ジャン大丈夫？」

「あつ?! ああ、フローラか？」

声を掛けられて振り向くと、一昨日から晩飯の取り合いをしているフローラが居た。

「マルコが死んだ」

「そうみたいね…」

「あいつが死ぬわけがない」

「でしょうね」

フローラは他人事のようにマルコの死を受け流しているように見えた。

「フローラ、何でマルコは死んだんだ!？」

思わずジャンはフローラに大声で質問した。

その問題に答えなど無い。

ただ、結果だけが残るだけである。

「何が起こったか分からないけど立体機動装置がないってことは―」

「ことは？」

「誰かの為に渡したんじゃないのかしら」

「どういう事だ!？」

他の兵士たちは立体機動装置を付けたまま戦死していた。

それは巨人との交戦していた、もしくは交戦できずに死んでいたからだ。だが、マルコは身に着けていたはずの立体機動装置を装備してなかった。

「ジャンと同じように立体機動装置が壊れた人に渡したんじゃないの」

「何が言いたい…」

「そのままの通りよ、誰かの為に立体機動装置を渡して罔になって喰われた」

「マルコは優しかったからね、そうでもなければ装置を外さないでしょ」

ジャンはフローラの言葉を聞いてあの時の事を思い出した。

「マルコ、お前は一番に目標を見つけたのに誰かに譲ったように見えただが…」

「うん、どうしても実戦の事を思ってしまったね」

「これは訓練だぞ？ 頑張らないと憲兵になれないのに何やってんだが…」

訓練終了後に獲物を譲ったのを知ったエレンとコニーがマルコに問い詰めていた。

ジャンは、客観的に見て、その行為をするなんて本当にバカな奴だと思った。

成績上位10位内に入らないと憲兵に志願する資格はないのだ。

だからこそ他者を蹴り落としても、どんな手を使ってもトップを目指さなければならぬ。

「うん、憲兵団になるのは憧れだけど、それでもやっぱりみんなと協力してやっていくんだ」

「なるほどな、マルコは指揮官に向いてるってわけか」

「私、次の班に所属する時はマルコの班がいいですね！」
「そうだな！マルコと居ると生き残れる気がするしな！」

次の班編成、つまりトロスト区襲撃時の訓練の班編成だとジャンは分かった。

「それなら俺もあやかりたいな」

「ジャン、お前もか」

「間違っても『死に急ぎ野郎』の班には入りたくないしな」

「おい、誰に向かって言ってるんだ」

「心当たりがあるんだろう？それだよ死に急ぎ野郎」

「お前……！」

マルコなら適切な指示で導いてくれるだろう。

もちろん、強かに彼の分の得点を奪う算段もあつたが。

「でましたよ、ジャンの遠回しなラブコール」

「……何言ってるんだサシャ？」

「ジャンはエレンの永遠なライバルだろうが」

「よし、芋女もコニーもこれ以上俺を怒らせる前に黙っててくれ」

まったくバカ2人に死に急ぎ野郎に付き合っていると本当に疲れるものだ。

思わず地面に座り込んで医務室に搬送されるフローラを眺めながらその場に座り込んだ。

「またたフローラが医務室送りにされてるな」

「今度は何やらかしたんだアイツは…」

「なんでも巨人の模型で無駄に回転斬りをやった挙句ダウンしてああなっただよ」

「ミカサじゃあるまいし、超人じゃないあいつがやってもああなるだけなのにな」

キース教官ですら呆れて声も出せないほど医務室送りの常連であるフローラ。

それでも寝たらずぐに復活して立体機動の訓練で身体を酷使して搬送されていた。

「立体機動訓練の禁止令を出したら2日間で7回も医務室送りにされた女は違うな…」

「常連過ぎて、医務室の連中と仲良くやっているって噂だ」

「意味が分かんねえなあいつ」

「拳句にフローラ専用の医務室搬送班が2個も創設されたって噂だぞ」

「なあジャン、死に急ぎするのはオレじゃなくてフローラじゃないか？」

「野郎はお前だから、お前に相応しいあだ名だ」

エレン以上の死に急ぎ人、通称、「頭エレン娘」であるフローラ。

意外にも指揮官としては有能であり彼女といると不思議と身体が楽に動けるのを皆が実感していた。

「しかしなんだろうな、あいつのおかげでトップになつて肉が何度も食べたんだよな」

「ええですので、お肉が出る班別の巨人討伐訓練は彼女の班が人気ですよ」

圧倒的なコミュニケーション能力と、いつの間にか張り巡らされた友人関係。

彼女は馬鹿にされることがあつても本気で嫌いな104期生は居ないといつても過言ではなかつた。

精神的に追い詰められている時ほど、彼女の存在感はありがたいものであつた。

何故なら、唯一の相談役のポジションである為、誰よりも104期生全員を理解して

いたのだ。

バカ夫婦で知られるハンナとフランツをくつつけたのもフローラである。

「俺も恋のキューピット様になんとか願いを叶えてもらおうとしたら…」

「「「したら?」」」

「他人任せじゃなくて、貴方自身の力で勝ち取って見なさいってフローラに怒られた」
「ハハハ、あいつらしいな」

事実上、フローラですら匙を投げられてしまったジャンは笑われても気にしなかつた。

そんな感じでメンタルケアの達人である彼女はマルコと同じくらい人気である。

「でも僕はジャンの方が指揮官に向いていると思うな」

「冗談だろう?なんでそう思ったんだ」

マルコの思わぬ発言によりジャンは何を言ってるか分からずに一瞬だけ硬直してしまつた。

「怒らないで欲しいんだけど、ジャンは強くないから弱い人の気持ちが良く分かるんだ」
「はあ？意味が分からん」

「それで居て弱者の視点から現状を的確に把握できるからみんなも付いていけるんだ」
「マルコ、俺を過大評価してないか？どうしようもない屑なのは自分がよく知ってるんだぞ」

自分はどうしようもない男だ。

エレンやフローラみたいに戦う覚悟なんてできない弱虫で屑な男だ。

「僕もみんなも弱いって言えるけど、だからこそ同じ視点で考えられるジャンの指示がー」

「困難で打ちひしがれそうな時でも、みんなに的確に心に響くんだと思うよ」

そんな事考えた事も無かった。

少なくともマルコは自分にそこまで期待してくれたのだ。

彼の期待を裏切ることは男として！自分として絶対に赦せない！！

「大丈夫か？」

「少し考え事をしていた」

「そうか、あまり気を病むなよ」

「分かっているよライナー」

差し出されたライナーの手を掴み立ち上がるジャン。

ちようど回収した遺体を茶毘に付するところであつた。

積み重なつた死体の中にマルコの遺体があるはずだ。

「心臓を捧げた同胞たちに敬意を！」

「我々は彼らの意思を継ぎ巨人を殲滅する事をここに誓う！」

「彼らの残した火種は必ず燃え上がり最後まで燃え続けるだろう！」

「だが志半ばで亡くなり彷徨う彼らは、【道】を見失つてしまった！」

「せめてもの手向けに生存者の我々は、彼らが道を見つけられるように明かりを灯そう
！」

「総員、点火せよ！彼らが新たな道を発見できるように明かりを灯せ！！」

ジャンもお世話になった女衛生兵の演説が終わった。

それと同時に衛生兵たちが一齐に松明で木材に火を付け始めた。

予め油を撒いたこともあり火が激しく燃え上がった。

劫火と見間違えるほどの炎は骨すらも跡形もなく燃え尽すほどである。

「あのだどこかにマルコがいるんだらうな」

「そうだな」

ジャン・キルシュタインは、「骨の燃えカス」になってしまうマルコを想った。

ライナーの返答からマルコがあそこから見守っているのを感じる。

そして自分が今、何をするべきか理解した。

「これは頼もしい夫になるはずだったフランツ・ケファの分！」

「これは良妻賢母になるはずだったハンナ・デアアマントの分！」

「これは率先して囀りになって仲間を救ったトム・ベクターの分！」

「これは無念にも誓いを果たせなかったトーマス・ワグナーの分！」

訓練兵の中で唯一武装していたフローラは、スナップブレードを構えて素振りしていた。

犠牲になった訓練兵たちの名前を一人ずつ発して仇を討とうしているのだろう。

「これはオールバックのナック・ティアスの分！」

「これは仲間思いのミリウス・ゼルムスキーの分！」

疲れてきたのか段々適当になってきたフローラ。

実際、訓練兵の顔と性格、どんな人物か思い出しながら素振りをしている為、単純にきつい。

既に息切れしていながらも素振りを続けているのでほぼ力尽きていた。

「ベルトルト以上に空気の奴らが出て来たな」

「あまり接点がないから分からないよ」

「いや、本当に誰だっけ？」

「印象の薄さですら負けていたら、ベルなんとかさんはどうすればいいんだよ！」

「えっ!?! そつから僕を弄るの!?!」

ミーナ・カロライナとアルミン・アルレルトは、同じ34班の班員という事で覚えていた。

ただし、トーマス以外はほとんど忘れかけているし、フローラですら印象に残っていない2人。

実際、彼らの事を覚えている人物は、きつと片手で数えるほどしかないだろう!

「これはベルトルト・フーバーの分!」

「待って! 僕はまだ生きてるよ!!」

『『まだ』って事はこれから死ぬのか、あいつは…』

「なんでそんなこと言うのおおお!!」

「珍しく目立ってるなあいつ…」

ついにネタ切れになったフローラは、ベルトルトの名を出して素振りを終えた。

いや、泣きつかれたベルトルトに強制終了させられた。

その瞬間、その場が静かになった。

まるで無の世界のように。

「よお！おまえら！所属する…兵科は何をするか…決めたか？」

ジャンは、この機が最後のチャンスと思いい、震えながら喋り始めた。骨の燃えカスにこんな所を見られたら本気で心配されるほどに震えていた。

「俺は…俺は…決めたぞ…」

兵站行進、馬術、技巧術、立体機動術、対人格闘術、銃術、弾道学、座学、巨人学。全てを修了して卒業した104期訓練兵団の新兵たち。

その自信を嘲笑うかのように打ち砕いた巨人の恐怖！

1名を除いて、これは全て無駄だったのかという絶望が脳裏を横切っていた。だからこそ、ジャンは発言した。

「俺は…調査兵団に！入る！」

震えながらも胸を張っているジャンを全員が驚愕した表情で見っていた。

その時、火が大きく燃え上がってジャンの後方から骨の燃えカスが勢いよく飛んできた。

「もう俺は！・迷わん！・調査兵団に入隊する！・それだけだ！！」

もつとも意外であった男の決断に、思わずフローラはスナップブレードを手から落としました。

自由落下に基づいて衝撃を受けたブレードは金属音と共に刃が欠けた。

その音は、風に乗って遠くまで響き渡った。

それはジャンの確固とした決意を、皆に知らせるようであった。

17話 特別兵法会議

ミカサ・アツカーマンは、早朝に憲兵が扉を叩く音によって起こされた。同期たちも瞼を擦りながら何事かと、動向を見守っていた。

「エレンが目覚めたんですか」

「ああ、さっそくで済まんが重要参考人として来てもらう、すぐに出発の準備をしたまえ」

彼女はエレン・イエーガーが3日ぶりに目覚めたという話を聴いてひとまず安心して、

だが、憲兵の放った次の一言で凍りついた。

「奴は兵法会議によってその身柄の処遇が判断される……どうせ解剖されて処分されるだらうよ」

その瞬間、頭痛が彼女を一時的に正常な判断力を失った。すなわち憲兵の首を爪で搔き切ってやろうという気持ちになったのだ。

「どうかしたのか？」

「いえ、なんでもありません」

「扉の前で待ってるぞ」

「はい、10分で支度をします」

その殺意の衝動に耐えられたのは、目の前にアルミンが居たからだ。

「では、わたくしたちは着替えますので扉を閉めさせて頂きます」

フローラは、ミカサの“声”を聴き取り、とにかく負の連鎖を断ち切るために扉を閉めた。

少しでも扉を閉めるのが遅れたら理性が薄れたミカサが憲兵に飛び掛かっていたからだ。

そんな事したら、弁解の余地などなくなってしまう。

さすがに憲兵と言えども、よつぽどな正当な理由がない限り、女部屋には踏み込めない。
い。

それ故に彼女は扉を閉めたのであった。

「よかつたわね、エレンが生きてて……」

「でもあいつ！エレンを解剖して処分するつて言った……！」

「所詮、保守派の下っ端に過ぎない小物に殺意を抱いていたらキリがないわよ」

「……フローラはどう思う？」

「少なくとも憲兵団と王政府は、エレンを排除しようと考えていそうね」

ミカサはエレンを守る為ならこの手を汚すのを厭わなかった。

しかし、敵は王政府及び、憲兵団。

彼女がいくら強いからと言って国家には勝てない。

「大丈夫よ、エレンには心強い味方がいるから」

「……慰められても私の心は変わらないわ」

「調査兵団と商会、トロスト区の住民が味方になっているわ」

調査兵団？商会？

ミカサからすれば巨人を敵視する組織が味方だというのは初耳であった。

「どこで情報を仕入れてきたの？」

「商会に関しては、聞屋の娘さんのサンドラ経由で仕入れてきた」

フローラから二つの新聞を手渡されて思わず受け取って確認をした。

丸められた新聞の記事には、トロスト区奪還について簡潔に書かれていた。

もう一つは商会の機関紙で「人類の味方である巨人によって壁の穴は塞がれた」と書いてあった。

「少なくとも商会は味方…か」

「調査兵団に関しては、エルヴィン団長から直接聞いてきたから間違いはないわ」

「分かった、フローラ。貴女を信じる」

エレンを味方になってくれる組織がいる。

ただそれだけで彼女の心は晴れていった。

「あまり憲兵を待たすのも悪いし、さっさと制服に着替えましょう」

「ええそうしましょう」

「ナイフや針を仕込むのは駄目だからね？」

「分かったわ……」

フローラによって思考を先読みされて牽制されてしまった為、ミカサは武器を仕込むのは諦めた。

そのフローラもこっそり武器を仕込む気満々だったがミーナに牽制されて諦めた。どちらも似た者同士であった。

「無駄に豪華な馬車ですこと」

「うん、私にはこの椅子は慣れない」

「これはソファアームという奴だよ」

アルミン、フローラ、ミカサは、エレンが拘束されている審議所に向かう馬車の中に

居た。

「さすがアルミン、物知りね」

「そんな事よりエレンを助ける事を考えないと…」

「決めるのは、お偉いさんであってわたくしたちにできるのは少ししかないわよ」

「だからこそ、僕たちの証言によって展開を変えていくんだ」

まず、巨人はエレンの巨人に敵視していること。

巨人化したエレンは、20体以上の巨人を葬った事。

トラブルはあったもののトロスト区の穴をエレンが大岩で塞いだこと。

幼少期からエレンは巨人を憎んでおりその点については何も変わっていない事。

「エレンの幼少期に怪我した時は、傷の治りは普通だった」

「巨人になれるようになったのは本人が言ってた通り、ウォール・マリアが陥落してからか」

「でも、こういう情報は黙っていた方が良いかもしれない」

「確かに、あえて伏せておく方が混乱させずに済むかもね」

時折、外にも聞こえる程度の雑談をこなしつつ、打ち合わせをしていく3人。
エレン、エレン、エレンのゲシュタルト崩壊で3人が頭エレンになりそうな頃に審議所に着いた。

「トロスト区の兵団本部並みにでかいね」

「そこまで重要な施設ってことかしら」

「あそこにエレンが居る…待ってて」

憲兵に誘導されながら彼女達は審議所に入っていた。

エレン・イエーガーは、目覚めた時は牢屋の中で拘束されていた。

ライフルで武装した兵士は、雪よりも冷たい態度で彼に接しており質問すらまともに返してくれなかった。

「あいつら……無事だといいな」

不思議と自分よりも140期生の同期たちの顔を思い浮かべていた。
もう戻れない日常。

5年前にも経験したが、今回も同じ経験をしてしまい悲しくなっていた。
それからが怒涛の出来事の連続であつた。

「君がエレンだね？」

当然鉄格子に顔面を激突しながらも凄まじい執念の顔で見つめてきた女兵士。

「やっと目覚めたようだな」

目つきが鋭くまるで殺意剥き出しの小柄な兵士。

「もう少しの辛抱だ、必ず君を救い出して見せる」

金髪をしつかりとセットした胡散臭い兵士。

「やあエレン！生きてるかい？」

「ええ、なんとか」

「待たしてゴメンね！でもこれでようやく出れるようになった」

「はあ…？」

考え事で周りが見えてなかったのか鉄格子の前に兵士たちが勢揃いしていた。

戸惑うエレンを無視をして罪人を強制連行するかのように牢に出された。

後ろにはライフルで武装した兵士3名。

両腕を背中にまわされて手錠を填められながら先導する兵士に向かって進んでいく。

「あの…なにか」

「ああ、彼はこうやって初対面の人の匂いを嗅ぐのが趣味なんだ」

「…ふん！」

「そして鼻で笑うのが癖だ、まあこう見えても分隊長なんだけどねー」

「そうなんですか…」

大男が自分の首元を嗅いでくるといふ奇行に背筋が凍りつくほどであった。

丁寧の説明している女兵士の頭髪が油まみれで寝ぐせが目立っていた。

殺意と恐怖を向けている兵士達の方がいくらかマシと言う意味が分からない状況であった。

「彼はミケ・ザカリアス、私の名はハンジ・ゾエ」

「まあ、今は覚えなくて良いよ」

「えーつと、どこに行くんですか？」

「そうだなー君の処遇を左右させる断頭台ってところか」

「えっ…」

物騒な単語を聴いてしまい立ち止まりそうになっちゃった。

ただ、まだ殺されていないのが奇跡なのかもしれない。

友人たちは怖がらなかつたが大半の民衆や軍人から見れば、自分は化け物である。

自分ですら身体に何が起きているか分からないのに他者に人権を認めもらうなど

無理な話だ。

「ゴメン、ちょっと言い過ぎたみたいだ」

「いえ、自分でも人類の異端って事は理解してるんで…知ってる事を説明するだけですよ」

「いやいいよ！巨人化の説明しなくても！エレンが思っている事を一言一句叫ぶだけでいいよ」

「えっ!?!」

巨人化した原因を説明しようとしていたエレンは、ハンジから咎められた事に驚いた。

人類の異端者である自分は、巨人化できる要因になった「地下室」など話すつもりだったからだ。

もし、自分が殺されても意志を継ぐ人がきつとなんとかしてくれろと信じていた。もちろん、死ぬのは嫌であったが。

「勝手に悪いんだけど、後がない我々には君に縋る事しかできないんだ」

ハンジとミケは目の前に立ちただかるような大きな扉を開いた。

そこには、そうそうたる顔ぶれが集結していた。

憲兵団の師団長、ナイル・ドーク

駐屯兵団の司令官、ドット・ピクシス

調査兵団の団長、エルヴィン・スミス

兵団のトップはもちろん、その3つの兵団を束ねるダリス・ザックレー総統

トロスト区の商人を束ねるリーブス商会の会長、デイモ・リーブス

ウオール教の南部支部の主任司祭、ニック・ボーデヴィヒ

エレンの処遇を決める為に現時点で集結できる首脳陣が勢揃いしていた。

「進め」

「はい」

兵士たちに誘導されてエレンは前に進んでいく。

まるで罪人の様であったが、彼は半ば受け入れていた。

「あゝ…」

この兵法会議は、人類の未来を左右するものであり、選ばれた者しか参加できなかった。

だがこの場には、ミカサとアルミン、フローラといったシガンシナ区出身の同期が居た。

おそらく水門で追い詰められた時の3人も重要参考人として招集されたのだろう。自分だけではなく彼女たちを巻き込んでしまい彼は唇を噛み締めた。

フローラ・エリクシアは、「特別兵法会議」という名の茶番劇に呆れ果てていた。

別にエレンが無事に生活できるのであれば、それ以外はどうでも良いと考えていた。

保守派や壁教や王政の連中によって妨害されるのは想定していたが予想以上に酷かったのだ。

彼女は既に、人や巨人などから発せられる負の感情の“声”を聴ける能力で大体把握していた。

「あいつは人間に化けた悪魔だ！すぐに処分するべきだ！」

「いや、ここは解剖して巨人の仕組みを調べるべきだ!」

「何を言っている! 奴の力でトロスト区の復興作業に当たらせるべきだ!」

「巨人関連は調査兵団の管轄だろうが! 我々に任せろ!」

「調査兵団如きが憲兵団に意見に反対するな!!」

要するに『エレンという高度な政治の道具』で王政上層部共が遊んでいるだけであつた。

彼らの口から発せられる声と裏腹に誰かを出し抜く、蹴落とす、貶めるなどの感情である。

あのザックレー総統ですら憲兵団か、調査兵団にエレンを押し付けてさっさと会議を終わらせたい感情である。

「あいつもだ! こいつと2人で強盗を3人刺殺しているなんて無関係なはずはない!」

「そうだそうだ! 奴の報告書には願望しか書いておらず、まるで庇っているじゃないか!!」

「もしや、彼女も巨人化できるのでは!?!」

ミカサとアルミンの証言と提出した資料を一蹴されたところか貶されているのも問題であった。

特に彼女の場合は、過去の出来事も併せて圧倒的に不利であったのだ。

このままでは、無関係な彼女まで巻き込まれてしまう。

「違う！彼女は無関係だ！もしそうならここには来るわけありません！」

「黙れ！許可が下りるまで貴様の発言権はないぞ!!」

不毛な応酬を繰り返されるどころか一方的だった。

説得して見せると意気込んだアルミンも一瞬で意気消沈しており項垂れている。

未曾有の危機の状況下で、こんな茶番劇を繰り返す人類にフローラは失望していた。

「静粛に！願望や推測だけで話を進めていくのは真実を捻じ曲げて歪曲する行為である!!」

「この特別兵法会議にて、貴重な証言を妨げる行為は、誰であろうとも許さん!!」

「…ミカサ・アッカーマンの証言はここまでとする」

なんとかザックレー総統によって過熱した議論は鳴りを潜めて静かになった。裏ではエレンの処遇を巡って牽制し合い、妄言でも考えているのは誰でも分かる事である。

「最後は同じ出身地のフローラ・エリクシア君、君の話をお聴きたいのだが良いかね？」
「はい、恐れ多くも新兵であるわたくしが、エレン・イエーガーについて証言させて頂きます」

ザックレー総統に発言の許可をもらったフローラは少し黙り込んでから発言をした。

「エレン・イエーガーという少年は、救いようもない男の子でした」

「彼は激情家で、思った感情を？き出しにして相手に暴力で表現する…そんな男です」
「感情のまま、誰かを傷付けたりしましたが！それでも目標に向かって進撃していく人です」

どう足掻いても否定される事を察していた彼女は、あえて開き直った。

わざと傍聴人が望んでいた餌をばら撒き、最後まで証言を聞かせようとしたのだ。現に証言を妨害してきた貴族や憲兵ですら必死に耳を傾けている。

「訓練兵団に所属していた時もそうでした」

「アルミンをいじめた同期に、彼は感情を爆発させて殴り倒して医務室送りにしました」
「それだけではありません、率直で救いようもないほど正直なエレンは様々な問題を引き起こしました」

ミカサやアルミン、エレンが信じられないという表情をしてフローラの顔を見ていく。

彼らから聴こえてくる“声”は、完全にパニックになっており彼女の想定通りである。

「待て!?! エレン・イエーガーが危険な人物であると証言するのか?」

「ええ、おそらく内心では…失礼ですが、王政や憲兵団に伝えたい事が山ほどあると思います」

「それは我々に脅威であるというのか? エレンは我々に敵意を隠しているのか!?!」

「本能に基づいて行動する彼ですが、おそらく発言権がない為に必死に我慢しているの
でしょう」

フローラは柱に両手を固定されて跪いているエレンを見る。
何かを言いたそうに、必死に我慢しているのが確認できた。

「なるほど、君の意見は良く分かった」

「だが何故、水門で庇ったはずのエレン・イエーガーに対して不利の証言をしたんだ？」

審判者であるダリス・ザックレーは思わず自分の本心で感じた事を質問した。

報告書や水門での行動からして、彼女はエレンを庇うと推測していたからだ。

ところが、保守派や憲兵団の危惧を裏付けるような証言をしており意図が読めなかつた。

「こうでもしませんが、エレン・イエーガーという男は、本心を曝け出す事はできません
つまり、この証言は事実であるが、わざとやったとも言いたいのか？」

「仰る通りです、彼を見てください」

傍聴人たちは指示される通りにエレンを見た。

まるで火薬庫に火が放たれたように爆発寸前の彼は震えており、怒りを露わにしていた。

「ご覧いただいたように彼は怒っています」

「ああ間違いない！」

「やっぱり奴は危険だ！」

「排除するべきだ!!」

外野は巨人化を恐れてあたふたしながら暴言を飛ばしていた。

ここで巨人化される恐怖で頭が一杯になっておりパニック状態になっていた。

その様子を見ていたザックレーは証人を見つめると口が笑っているのが目に見えた。

保守派や憲兵派、王政派を焦らせて感情剥き出しにしている無様な姿を嘲笑っていたのだ。

「静粛に!!」

「…言いたいことは良く分かったが、君は彼の代行としてその〔怒り〕とやらを発言するのかわ？」

「いえ、本人に言わせた方が、巨人の恐怖に縁がない皆さまの心に響く事でしょう」

「そこまでしても、エレン・イエーガーに発言させたいのかわ？」

「はい、その為の証言なのですから」

「よかろう！エレン・イエーガーの発言を許可をする」

たかが小娘の計略に乗るのは癪に障るものであったが、中々面白い経験だったので彼は乗った。

一斉にエレン・イエーガーへ視線を映して黙然としている兵士と傍聴人。

「さてどんな発言をするのやら」

ザックレーは内心では、未知なる光景に子供の様に心躍っていた。

一方、エレンはフローラが親指を立てて『検討を祈る』というジェスチャーを目撃した。

今まで発言する権利すらなかったエレンは、ようやくこの場で発言する権利をもらっ

たのだ。

後押しをされた彼は決意して口を開いた。

「ずっと、話を聴いて！あなた方は！何を恐れているんですか！！」

「俺は！トロスト区の穴を！大岩で塞いだ！英雄なんですよ！！」

感情を爆発させてエレンは思い浮かんだことをただ叫んだ！

「大体あなた方は！なにもやってない！！」

「トロスト区を救ったのはオレだ！！」

「さつきから聞いていれば人類の危機に対して他人事じゃないか！！」

「兵士達はあんたらみたいな！腰抜け共を！守るために死んだんじゃない！！」

「穴を塞ぐオレの為に！！大勢が犠牲になったんだ！！」

もはや止まることは無かった。

ただ、理性で抑えられていた感情や想いから言葉がどんどん溢れてきていた！

「人類を救えるのは！オレだけだ!!」

「この何もせず税金を浪費する腰抜け共が!!」

「分かったら！全財産を！黙って！オレに！投資しろ!!」

「この腰抜けの役立たずで糞みたいな豚共が!!」

エレンが放った魂の叫びは、審議所全体に響き渡り全員の鼓膜を振動させた。

次の瞬間、エレンの顔面に蹴りを入れられた。

その衝撃は、歯を1個飛ばす威力があつた。

「リヴァイ兵士長、そこまでにしてはどうだ？」

「ああん？お前らはこいつを解剖して処分するつもりだっただろうが！」

「それ以上やると巨人化する恐れが…」

「今更、何を抜かしているんだ？」

人類最強の男によって、エレンは凄惨な暴行を加えられていた。

巨人化の能力による肉体の再生がなかったら即死しているくらいの酷さであつた。

エレンを敵視していたナイル師団長が制止するまで兵士長に蹴りは止まることは無

かった。

「こいつは巨人化した際に20体の巨人を葬ったと聞く」

「ああ…だから！」

「だからなんだ、俺ならこいつを殺せる…だがお前らはできんだろ？」

リヴァイ兵士長は、躰けは痛みを与えるのが一番だと思っている。

彼に必要なのは、教育でなく教訓である。

つまりここでいう教訓は、「身の程を知れ」ということだ。

これはエレンだけではなく、政治の道具と扱ってきた腰抜け共に向けたものだ。

「総統、ご提案があります」

「発言を許可する」

「エレンの【巨人の力】は不安定要素を含んでおります」

「そこで巨人のプロフェッショナルである調査兵団が彼の身柄を預かり徹底的に管理します」

「それにリヴァイ兵士長であれば暴走した時にいとも容易く殺す事ができます」

エレンという未知なる巨人の恐怖で支配された審議所。

ここぞと言わんばかりに調査兵団の団長エルヴィンの独壇場であった。ザックレー総統は、返り血を浴びて血まみれになったリヴァイを見た。

「できるのか？」

「殺す事には全く問題ない、問題なのはその中間つてところだ」

潔癖症の彼がわざわざ血塗れになってでも場の空気を変えた覚悟を見た。

「お待ちください！内地の問題は解決しておりません」

このままエレンを容認する空気を感じ取り思わずナイル師団長が異議を唱えた。彼もまた、人類を想い行動してきた人物である。

「我々の壁外での活動は、内地のおかげだと認識している」

「決して内地の問題を軽視していません」

かつての同期であり友人であるナイル師団長の心境を察したエルヴィンが返答をす
る。

彼としても憲兵団や王政を敵に回してでもエレンを匿う気はなかった。

「そこで壁外調査でエレンが人類にとって有意義だと証明してみせます」

「その結果で判断して頂きたい」

エルヴィン団長の提案は魅力的であった。

成功すればエレンは人類の戦力として公式に承認できる。

失敗してもそれを元に有無言わずに断罪できるのだ。

どちらにしても、壁外に送るといふ提案は、壁内の問題に苦しんでいる傍聴人たちは
賛成した。

「決まりだ、エレン・イエーガーは調査兵団に託す」

「ただし、成果次第ではここに戻ってくることになるう」

「ハッ！」

フローラは、リヴァイ兵士長に暴行されていたエレンを指をくわえているしかできなかった。

ミカサに至っては、暴行した元凶を睨んでいた。

「おい！そのガキ！お前のせいであんなになったんだ！介抱してやれ」

リヴァイの一言で、証言台から飛び出したフローラはエレンの元に駆け寄った。

「ごめんなさいエレン！わたくしのせいであんなに……」

「いいんだ……結果がよければ……」

久しぶりにフローラの香りを嗅いだエレンは安心したかのように瞼を閉じた。拘束器具は外されたものの、未知の存在を恐れたのか誰も運ぼうとしなかった。やむを得ず彼女は、自身の肩に彼の腕をまわして無理やり運ぼうとした。

「私も手伝おう」

「お願いします」

エルヴィン団長の申し出を受け入れて2人でエレンを運んでいった。その様子を身動きが取れないミカサとアルミンが見守っていた。

18話 決して破られない約束

エレン・イエーガーの処遇を問う特別兵法会議が終了して3時間後。

エレンは、エルヴィン団長に付き添われて広場に居た。

ここでは調査兵団の兵士が直立不動で整列しており、思わず唾を飲み込む迫力があつた。

「諸君からも聞いている通り、会議の決定を受けてエレン・イエーガーを正式に迎える事になった」

「エレン・イエーガーです！よろしくおねがいます」

エルヴィン団長に紹介された以上、挨拶は大事だと思い彼は元気よく自己紹介をした。

「あいつが噂の……」

「なんでこいつなんかの為に」

「ヤダ……こっち見てる」

「さっさと牢屋に送還してくれないかな……」

残念ながら調査兵団の兵士ですら、第一印象は最悪のようで全員が目を逸らしていた。

それどころか、聴こえるように雑談を始めたくらいである。

「諸君、静粛に！」

「私は、エレンが人類にとって希望であると確信している！」

「その証明をするのが我々調査兵団の当面の目的である！」

「なお、リヴァイ兵士長の管理下に置かれる事になるがそれ以外の方針は未定であるので……」

「今後の予定は、逐次報告していく事になるだろう」

「人類の未来の為！諸君らの働きに期待する！！以上だ！」

「」「ハッ！」「」

団長の言葉で無言になり敬礼をし、1人また1人広場から去っていた。

エレンは、集合していた調査兵団の団員たちに交じって見慣れた人物が居たのを見て困惑した。

「すみません…なんでフローラが？」

「ああ、うん、調査兵団は慢性な人手不足でねー、君の入隊で更に人員が割かれるから私
が借りてきたんだ」

「分隊長、やっぱり正式配属前の訓練兵を動かすのはまずいのでは？」

「大丈夫、上にはちやんと話を通したし、エレンも同期が居た方が安心できるだろう？」
「はい仰るとおりです」

どうやらハンジ分隊長がフローラを連れてきたようである。

兵団配属前に訓練兵が調査兵団に居るのは前代未聞の出来事であった。

が、彼女の実力は第4分隊の精鋭たちから聞いているおかげか、誰も気には留めな
かった。

「すみません、フローラの所に行ってもいいですか？」

「ああ、構わんよ。どうせ彼女も連れて、安全な場所に移動するんだからね」

「ありがとうございます」

エレンは思わずハンジ分隊長と副官であるモブリットに頭を下げて彼女の元に駆け出していった。

さきほどまで緊張で固まっていた彼の気が抜けたのを見てハンジは己の選択は間違っていないと確信していた。

それを見たモブリットは、更に上官が暴走しないか心配になった。

「お前が居て正直ホツとしたよ」

「そうなの？逆に暴行されるきっかけを作ったわたくしを恨んでいるかと…」

「結果的になんとかなったからいいさ、偉そうな奴らに反撃できたし…」

「そうね、もしエレンが言わなかったらボロクソに奴らを罵倒するつもりでしたし」

さすがに気まずそうだったが、すぐに本性を現してエレンは頼もしく思えた。

とにかく、心から許せる友人が居るだけでこれだけ落ち着けるのは良いことだ。

「でもなんでハンジさんに指名されたんだ？」

「実は、ハンジさんと巨人捕獲作戦を手伝ってて、なんかそのまま配属されちゃったの」
「お前、本当にトラブルの中央にいるな…」

「でも、こうやってあなたと話せるなら悪くないわ」

巨人捕獲作戦というワードが出てきて本当に色んな意味で尊敬した。

同じく巨人を駆逐すると決めた同志。

対抗精神でなんだか身体が熱くなってきたくらいだ。

「ほら、ハンジ分隊長が呼んでるわよ…多分、出発するわね」

「ところでどこに行くんだ？」

「旧調査兵団本部、古城を改修した施設ですって」

フローラから情報を得たエレンは調査兵団本部と聞いて立派な建物を思い浮かべた。
そして実際に目視で確認すると、そこそこ立派なお城であった。

「おい調子に乗るなよ新兵」

「はい？」

「お前の様な小便臭いガキにリヴァイ兵長が付きつ切りなっ!!
「だ、大丈夫ですか!」

いきなり話しかけてきた老け顔のオルオが会話中に舌を噛んで出血したのだ。
乗馬しているので振動で舌を噛んだのだが、初対面なら必ず驚く光景であった。

「おいおい、怖がっちゃまったな」

「ごめんね、こいつはよく舌を噛むの」

「○×▽×□○!!」

「えええっ!?!」

「とにかくいつものことだから無視していいわよ」

ペトラがオルオを半ば馬鹿にするように無視を促していた。

だが、この優しいそうな女の人も舌を噛んだ人も、自分が暴走を止めることができる
実力者。

それを知っている以上、エレンはなんともいえない感情で俯きながら馬を操作するし
かできなかつた。

「さて、ここが目的地だ」

「先遣隊が清掃したとはいえ、まだ散らかってますね」

ペトラの言う通り城門はともかく、内部はまだ散らかっている状態だった。

だが、活動していくには問題ならないほどのゴミである。

「それは重要な問題だ…すぐに取り掛かるぞ」

「えっ…何を…」

「もちろん、お城の清掃よ！」

「ははは、驚いたか、兵長は綺麗好きなんだ」

サブリーダーポジションのエルドが笑顔でエレンの肩を叩きながらほうきを差し出した。

「今日からの任務は、城の大掃除だ」

「はああ…？」

「団長や分隊長たちもやるんだから気を抜くんじゃないぞ！」

「はいー！」

とにかくみんなの信用を築くためにエレンは、ひたすら掃き掃除をした後、雑巾がけを行なった。

昔から憧れだった調査兵団にいざ所属してみると、何故か掃除が任務で困惑していた。

ただ、下積みの期間でありこういう事もあるのだろうと割り切って一生懸命にやっていた。

しかし、リヴァイ兵士長が傍を通る度にビビって硬直していた。

「チツ！最低限しか終わらんかったな」

「食堂と寝室、そして地下室はあらかた掃除しましたが翌日も改めて掃除する必要があります」

「おそらく長くなるぞ…覚悟は良いか！」

「「はいー！」」

日が地平線に落ちて辺りが暗くなった頃、本日の清掃活動が終了した。

護送してくれたハンジ分隊長なども手伝ってくれたが、清掃活動はまだ続く予定である。

「エレン君、少し時間を頂きたい」

「はい、構いません」

「すまなかつた…」

さきほどまで清掃をしていたエルヴィン団長に親しみを覚えていたエレンは突然の謝罪に驚いた。

「君の偽りのない本心を伝える為に我々は君に危害を加えてしまった」

「効果的なタイピングでカードを切れたのも君の痛みによってなんとかなったものだ」

「いえ、そんな…自分じゃ何もできなかつたです」

「これからもよろしく頼む」

「よろしくお願ひします」

差し出された手を掴んで握手をすると、とっても温かった。

「なあエレン？」

「は、はいいい!!」

いきなり隣の席に座ってきたリヴァイ兵士長に怯えてしまった。

「俺の事を恨んでいるか？」

「い、いえ、必要な演出でした、あれがなかったら憲兵たちがオレを撃つていたですし…」

「なら良かった」

口から心臓が飛び出しそうに鼓動の音が小刻みに聴こえておりエレンはパニック状態であった。

「しかし、エルヴィンも用心深いねーわざわざこんな辺境でようやく謝罪するなんて…」

「あそこじゃ、どこで盗聴されているか分からん」

「だからと言って第4分隊を使ってこの城の警備をさせるのは過剰じゃないかい？」

「いや、今回だけだ」

エルヴィン・スミスは警戒を怠らなかつた。

特に憲兵団の中でも厄介な連中が居たのを見て、最後まで警戒していたくらいだ。

いくら兵法会議で正式に決まったとはいえ、闇討ちや隠蔽してくるの可能性はあったからだ。

ただし、名目上は総統や貴族の護衛である為に今日だけ凌げればあとは何とかなると踏んでいた。

「一体、何の話をしているんですか!？」

「えーっと、この王政は一枚岩じゃないってこと」

「そうなんです」

なんとかハンジの咄嗟の反応で誤魔化せたが、早急に対策を練らなければならない。

【中央第一憲兵団】は決して油断できる相手ではないのだ。

「お呼びでしょうかハンジ分隊長」

「待ってたよフローラ、さあさあエレンに渡してあげなさい」

フローラが食堂に入室してくると何故かハンジ分隊長が勝手に盛り上がっているの

を見てエレンは困惑した。

何でこんな夜中に鼻歌を歌いながら盛り上がるのか疑問だった。

「エレン、これはわたくしからの差し入れよ」

「え、ありがとうな」

フローラから手渡されて受け取るとずっしりとした重量がある厚い本であった。

中身を確認すると、『対巨人戦闘マニュアル』と書かれた。

内容としては【第55回壁外調査】までのデータを基にした文字通り巨人の攻略本だった。

訓練兵团でも似たような冊子があったが、これは5倍以上の厚みがあり最新版のものである。

「ホント、凄いやこの本は！差し入れをチェックした私が一番欲しいiiiiiiii!!」

「分隊長、落ち着いてください」

「この本には、わたくしが遭遇した巨人の戦闘データもイラスト付きで追記したものなの」

「そうそう、暗号文かと思っただけどかなり真面目な事が書いて見入ってしまったんだ」

何故か差し入れを受け取った本人よりも鼻息を荒くしている人類の奇行種。

その行動にドン引きしているフローラ。

そんな光景など気にせずエレンは本に集中していた。

ページを捲っていくと『胃液を飛ばしてくる変異種』、『空中に飛び出してくる4m級巨人』なども手書きで書いてあった。

彼女の繊細で綺麗なイラスト共に遭遇した巨人の姿が描かれており、弱点なども余白を使つて書いてある。

「エレンは、壁外調査で成果を得るまでこの城ですつと軟禁状態になるの」

「ああ、先輩たちから聞かされたな」

「だから、巨人と接する機会がほとんど無くなるつて思つてこれを買つてきたの」

「訓練兵団の教科書なんて実戦では使い物にならなかつた経験から役に立つ本を持ってきたわ」

エレンは巨人など頑張れば討伐できると思っていた。

トロスト門でも訓練兵だけで討伐できたので調子に乗っていた。

だが現実には、率いていた34班が奇行種による想定外の動きで壊滅した。

もし、教科書にこの事を書いてあったらみんな慎重になれて生還できたはずである。

「どうしてお前はそこまでしてくれるんだ？」

「同じ目標を掲げた同志、少しでも力になりたい…でいいでしょ」

「ああ、ありがとう」

フローラからすれば同じ立場になったら、ありがたいと思う事をしているだけである。

というのは建前で、負の感情が分かる彼女は、エレンが相当追い詰められているのを知っていた。

「さすがに毎日は来れないけど、定期的に差し入れと同期の土産話をもってくるわ」

「いいね！やっぱ友情って最高だよ!!」

「分隊長、いいムードをぶち壊さないでください」

「あれー？もしかしてだけど！もしかしてだけど!!」

「ご安心ください、彼には幼馴染の女の子が居ます」

「おいフローラ!!」

仲間思いで責任感が強い彼は自分を精神的に追い詰めて壊れていくのを察した。

だからこそ、こうやって定期的に緊張を解く必要があった。

「違いますミカサは、ただの幼馴染で…」

「ほうほう！気になる子はミカサって言うんだね！」

「違います!!」

彼の「声」がミカサへの好意を必死に隠そうとしているのを確認できた。

そして【調査兵団特別作戦班】も初々しいエレンを見て警戒を解いているのを感じとれた。

ハンジ隊長の提案に乗る代わりにエレンの護送任務に志願した理由がこれだった。

「おいガキ共、惚気話はそこまでにしてさっさと寝ろ」

「はい、分かりました!!」

フローラは、エレンとリヴァイ班、そして同期たちを繋げる架け橋が自分の任務だと自覚した。

故に日課の訓練時間を削ってでも繋がりを強化する為の手を考えながら寝室に戻ろうとした。

「やあ!」

「ハンジ分隊長、どうされたのですか?」

「私たちは、リヴァイ班に全て押し付けてとんずらするよ!!」

「そんな夜逃げみたいな事…」

「大丈夫だ、団長である私も逃げるつもりだ」

廊下で鉢合わせした第4分隊とエルヴィン団長がまるで夜逃げするかの様に荷物をまとめていた。

「この紙にサインを書いて」

「…はい、書き終わりました」

「よし！これでテーブルに置いておけば逃げられる」

「しかし、無言で帰還するなど…」

「じゃあ、モブリットはリヴァイ兵士長の元、頑張つて清掃できるかい？」

「無理です」

真面目そうなモブリット副分隊長が即答するという事はよつほどである。

「みんなで逃げれば怖くない…つてね！」

「というわけだ、次の任務は気付かれる前に乗馬してこの城から脱出する事だ」

「ええ…」

こうしてエルヴィン団長を先鋒とした古城脱出部隊は、馬まで忍び足で歩いた。

「よし、気付かれてないな…出発だ」

清掃の悪魔リヴァイの魔の手から逃れるように総員、古城から脱出した。

道中で現地解散したあと、フローラは団長からもらった許可証を提出して馬を返却した。

そして少しでも睡眠時間を得ようと、兵舎まで全力で駆け抜けた。

「あーもう寝たい…」

兵舎に着いた時には、既に午前2時を過ぎていた。

午前5時半に起床し、7時から17時までトロスト区の清掃活動がある。だからこそ、少しでも寝ておきたかった。

「…誰かいるわね」

兵舎の門の前にはミカサが居た。

まるでエレンを帰ってくるまで待ち続ける忠犬のようであった。

「エレン!!…ごめんなさい」

「いいのよ、紛らわしかったでしょ」

ミカサの心は荒れていた。

大事なエレンが、アザだらけになるまで暴行した男の班に居るのだ。誰だって心配するだろう。

「フローラ、エレンの居場所を知らない？」

「…知ってるわ」

その言葉を聞いてミカサは、フローラを押し倒した。

「お願い教えて!!」

「守秘義務で言えないわ!」

「友人でしょ!？」

「だからこそよ!!」

「なんで!!なんで!!」

珍しく感情を爆発させたミカサは友人の肩を揺す振り答えを求めた。

フローラからすれば、現在の彼女をエレンの元に向かわせるのは危険であった。半ば自暴自棄になってる彼女は、リヴァイ班と交戦しかねない心理状態だったのだ。

「なんで!!」

「エレンは巨人の力のコントロールする訓練をしてるわ」

「だから!？」

「ミカサを…傷つけないように…頑張ってるの」

実際、兵法会議までミカサに攻撃していた事に気付かなかった彼はショックを受けていた。

古城に着いてから清掃しかしていなかったが、掃除が完了したら訓練を始める事だろう。

「そんな、私なんか…」

「エレンは、巨人化するたびに貴女を傷付けることを恐れていた…」

「だからって!」

「エレンは…一か月後の壁外調査で功績をあげないと処分されちゃうのよ…」

特別兵法会議の判定を思い出したミカサは、ようやく押し掛かっていたフロアから離れた。

「ただ、今は巨人化する度に街を壊しちゃうでしょ?」

「うん」

「だからコントロールできるまで待つてあげなきゃ…誰かを負傷させたらそれこそ迷惑よ?」

「ごめん」

大粒の涙をこぼしているミカサを優しく撫でて落ち着かせた。

不安要素などいくらでもある状況下で、なんとか彼女を安心させる何かが必要である。

「でもエレンの居場所を知ってるんでしょ?」

「ええ、だから貴女の手紙や差し入れをわたくしが責任持って届けるわ」

「どういうこと?」

「エレンとミカサを繋げる連絡手段になるってこと！」

周囲からは自分たち以外の“声”が聴こえないのを確認したうえで彼女に提案した。おそらくミカサが調査兵団に入団してもエレンには暫く会えないだろう。だからこそ、彼女の想いを彼に伝えるのが自分であると認識している。

「分かった…」

「大丈夫、絶対にエレンを守って見せる」

「本当？」

「もちろん!!」

彼女を安心させるにはどうすればいいか迷っていた。

実際は、差し入れにチェックが入り、口頭連絡も許可が下りない可能性が高かったのだ。

「じゃあ、約束して」

「約束？」

「私の代わりにエレンを守って！」

「約束するわ！【死んでもエレンを守ってみせる】！」

だから約束した。

ミカサがエレンと合流できるまで：できてもエレンを守ってみせると！

自分の命を投げ捨ててでも、どんな犠牲を払おうともエレンを必ず守ってみせる！
フローラの中で最優先事項は決まった。

それは鎧の巨人の討伐や、シガンシナ区奪還、巨人を駆逐するよりも優先されるほどに！

「私の命も犠牲にして……」

「そしたらエレンが悲しむわよ」

「それは同じ事でしょ？」

「そうね」

拳同士を当てて約束を確認した2人。

例え何があろうともエレンを死んでも守ると！

兵舎の前を月明りのみが照らしているこの幻想的な空間で約束した。

「フローラ、私の後ろを任せられるのは貴女だけ…だから死なないで」
「わたくしだって貴女の代わりは誰も居ないわよ」

いつ死んでもおかしくないこの残酷の世界でも友情は変わらない。
少なくともエレンを絶対に守るという意味では。

「朝は早いし、部屋に戻って眠りましょう」

「確かに寝ないときつい」

2人は手を繋いで部屋に戻って就寝した。

そして仲良く寝坊した。

19話 独自の技術ツリーの誕生

「あいつら、本当に仲が良いな」

「ジャン、起こして来いよ」

「やめてくれ！俺はまだ死にたくない！」

フローラとミカサは寝不足であり、トロスト区の清掃活動中に寝ていた。

無駄に信頼しているのか、お互いが寄り添いながら立ったまま寝ていた。

その様子を見た同期たちがジャンを起こすように指示をしたが、彼は断固として拒否した。

「お前がお世話になった2人だろう？起こしてやれよ」

「よしお前ら、合計すると巨人のキルスコア、最低でも30体以上の女たちを起こせるのか？」

「無理だ」

「冗談じゃないわ」

「ばあちゃんを泣かせたくない」

フロック、サンドラ、ゴードンは顔を真っ青にしてジャンの意見を完全に否定した。すなわち、ジャンが酷い目に遭う事を内心、愉しみにしていたのだ。

「お前ら!! やりたくない仕事を俺に押し付けるんじゃねえ!!」

「うるさい、聞こえてる!」

「ジャンのおかげで目覚めましたわ」

奇遇にもジャンの大声で起こされた2人はご機嫌斜めであった。

名指しで指名されたジャンは凍り付き、おまけの3人は慌てて逃げ出した!

「おいお前ら…ふぎけんな! 戻ってこい! おいしい!!」

「とりあえずジャンだけでも…ね?」

「何かお礼してあげないとね」

一見すると女の子2人からお礼がもらえると聞くと、男共は変な妄想をしてしまうだ

ろう。

口は微笑んでいるが目が笑っておらず相当不機嫌な顔を見ない限りは…。

「まさか!?!また逢えるなんて!?!」

ジャンが覚悟を決めた瞬間、大柄な髭もじやの駐屯兵が驚いたように駆けつけた。

この場に居た3人は面識がないので困惑した。

「あんたのおかげで命拾いした!本当にありがとう!!」

「フローラ?この人と知り合い?」

「あー、変異種に追われていた3人組のうちの1人だった記憶が…」

「そうだ、本当にあんたのおかげで両親に逢えることができた、本当に感謝している」

身長が1m90cmを越える大男。

それは鬼教官と悪名高いキース教官に匹敵する体格の持ち主だった。

そんな彼がフローラに何度も頭を下げていた。

「そこまで感謝されなくても…」

「何か礼を…そうだ！今日の午後6時にローゼの扉で待ち合わせをしないか？」

「別に問題ありませんわ」

「ありがたい、俺の名はグリズリー・グリユーブルク、まあ『グリグリさん』とでも呼んでくれ」

そう言って、グリグリさんは去っていった。

「お前、本当に人に好かれるな」

「ジャンも一緒にいかが？」

「勘弁してくれ、あんな臭そうな大男の所に行きたくない」

「私もそうね」

珍しくミカサとジャンが意見を一致したのを見てフローラは、明日大雨になると感じてしまった。

ちなみにジャンの両親は生存しており、両親に逢えたという言葉は彼の心に深く突き

刺さった。

とにかくフローラは疲れが取れたので、みんなと清掃活動をした後、言われた通りローゼの扉の前に待機した。

「あつ！居た！」

「グリ班長！いましたよ」

駐屯兵団の兵士たちが集まっており、その中にグリグリさんが居た。

「グリズリー班長の命の恩人だと聞いて、一同貴女に感謝しています」

「えーつとあなた方は……」

「ああ済まない！我々は駐屯兵団第一師団、工兵部、技巧科の技術4班に所属しているんだ」

技巧科は、立体起動装置などのブラックボックスを管理しており、よつほどのエリートでないと所属できない。

第104期訓練兵団では、アルミンが唯一、技巧科に推薦されたくらいで他の話はな

いほどである。

「そんな…私はただ…」

「というわけで命の恩人である嬢ちゃんに我々の仕事場に案内しようと思つてな」

「貴重な体験つスよ！」

「ガハハハッ！ 違うない!!」

まるで山賊団のような兵士たちと共にフローラは吸い込まれるように建物に入つていった。

「どうだ！ いろんな立体機動装置があるだろう？」

「ええ、こんなに多くの種類があるとは思いませんでした」

そこには様々な立体機動装置や鞘が存在した。

「まあ、訓練兵は一式シリーズしか装備できんからな」

「駐屯兵团の高級士官用の『二式刀身』は切れ味も耐久度も凄かったです」

「そうだろうな…技術2班の最高傑作だから…ってなんで知ってるんだ!」「ピクシス司令から高級士官用の刃をお借りした事がありますので…」

グリズリー班長は、この女訓練兵が只者ではないと見抜いたが予想以上であった。高級士官用の装備を使用する訓練兵など聞いたことが無かった。ただ、戦果を見る限り大体察しは付いたが。

「これとかどうだ?」

「まるで樽みたいな立体機動装置ですわね…そういうえば調査兵団の方々が装備されていましたわ」

「その通りだ!これは『強化装置・1型』と言って調査兵団が愛用している装置だ!」「訓練兵や駐屯兵団が装備する装置と比べて2倍以上の重量と値段があるが、その分高性能だ」

フローラは、自分の常識が崩れ落ちる気がした。

確かに任務毎に装備を変えるのは当然であると、頭で理解していた。

でも実際には決められた装備しか使用できずその事が抜け落ちていたのだ。

「興味があるみたいだな」

「ええ、立体機動をする兵士として関心があります」

「じゃあ、どんどん説明していくぞ」

「はいー」

フローラは調査手帳を取り出して生き生きと説明するグリズリー班長の説明をメモしていった。

訓練兵及び駐屯兵団の一般兵は、一式刀身と一式鞘と一式装置

駐屯兵団の精鋭班及び高級士官は、二式刀身と二式鞘と二式装置

調査兵団の一般兵は、強化刀身・1型、強化鞘・1型、強化装置・1型

調査兵団の精鋭兵は、強化刀身・2型、強化鞘・2型、強化装置・2型

リヴァイ兵士長の専用装備で、強化鞘・3型、強化装置・3型

強化シリーズは、一式シリーズの装備に互換性があるが逆はない

そして高性能であるが、鞘と装置は2倍以上の重量と値段である

「つまり、大きく分けて2種類のシリーズがあるのですね」

「いや、他にも色々あるんだが諸事情により正式採用されていない」

「そうなのですか…」

「大体、憲兵のせいだ」

「ここから技術4班による愚痴を聞かされたフローラは、適当に頷きながら考え事をしていた。」

ハンジ分隊長やリヴァイ兵士長の立体機動の動きに惚れ惚れしていたが、それは装備の違いでもあったのだ。

回転斬りをやった時に想像した動きが出なかつたのは装備のせいだと分かつた。

今思えば、リヴァイ兵士長の動きは、驚異的な身体能力とそれにあつた立体機動装置のおかげで実現できたという事だ。

「あの糞共は！技術発展を遮り妨害する屑だ!!」

「そうだ！王政共はまるで我々を恐れているように弾圧してくるんだ！」

「特に中央第一憲兵团なんか糞喰らえ!!」

「あいつらに爺さんを殺されたのは絶対に赦せん!!」

よっぽどストレスだったのか、怒りでヒートアップしていく技術4班。

常識的に考えれば、そもそも技術班の班長が囀作戦に参加する時点でおかしいのは分かっていた。

おそらく左遷させられたか、憲兵のせいで落ちぶれたか。

どちらにしてもフローラからすれば、勿体ない事だと思った。

「すみません！これなんですか!?!」

「それは我々が開発したシュツルムシリーズだ!」

「巨人との接近戦を想定してアンカーの強度の強化と軽量化をした鞘と装置だ!」

彼女が気になった立体機動装置と鞘は、かなり小型化されていた。

ガスボンベを装備すると鞘から飛び出すくらいに小さいのだ。

装備品の重量で苦しんでいた身としてはかなり興味が惹かれる物である。

「ただこの鞘に納める刃は、シュツルムメツサーという専用装備なので流通していないんだ」

「強化シリーズと一式シリーズの刃は、共通規格の長さなので互換性があるが、こいつは

無理だ」

「全長が通常の刃の6割しかないがその分、頑丈で軽いんだよ」

「だから結果的に兵士の身体に負担が掛からるので継続戦闘するにはうってこいの逸品だ」

技術4班の話を聴いてフローラは、シユツルムシリーズに興味を持った。

自分が使用している装備は、自身の肉体と合っておらず無駄に身体に負荷をかけているのを実感していた。

もちろん、訓練兵たちは自分の身体に合うように工夫していたが根本的な所までは弄れなかった。

だからこそ、技巧科の技術を目撃して、自分の合う装備を確保しようとした。

「これ、身に着けてもいいですか？」

「ああ、嬢ちゃんの頼みならいいぞー！」

「ありがとうございますー！」

さっそく取り付けてみると、予想以上に軽かった。

鞘には収納数が10個あり、シュツルムメツサーという専用の短剣を10本装備してみても軽かったのだ。

ただし、ガスボンベの後方が剥き出しになっており、いつもと違う重心のズレを感じていた。

「調子はどうだい？」

「予想以上に身体に合ってますね！これなら肉体に負担が掛かりにくいですわ」

「嬢ちゃん、結構立体機動装置に振り回されていたもんな」

グリズリー班長は、フローラの嬉しそうな表情を見て口元が緩んでいた。

シュツルムシリーズの開発に携わった技術4班の8名は、とても嬉しい光景である。

完成品を駐屯兵団の工兵部の上層部に提出したところ、バカにされながら返品されたからだ。

要求通りに開発したのに、侮辱された挙句ゴミ扱いにされた過去を思い出せば泣ける光景である。

「よし、そのシュツルムシリーズ一式は、嬢ちゃんが持つていっていいぞー！」

「えっ？良いのですか!？」

「どうせ、使う事もなく倉庫に眠っているだけの代物だ」

「君に使い潰してくれれば、開発した我々も装置も喜ぶさ!」

「ありがとうございます!さっそく訓練所で動作テストしてきます!」

フローラはさっそくこの立体機動装置と韜で動作テストをしたかった。

技術4班の8名も自信作の動作を確認する為に彼女と共に訓練所へと目指した。

「中々良い動きをするな…」

「そりやあそうだ、嬢ちゃんの動きは精鋭班すら凌駕してたんだ」

「よく見惚れて民家にぶつかりませんでしたね」

「おい…それはどういう意味だ」

訓練所で動作テストしている彼女を観戦しながら技術4班は軽口を叩いていた。

もちろん、動作テスト自体はしていたがここまで客観的に動きを見る機会は初めてであった。

「やっぱりアンカーの射程範囲が狭いな…」

「せめて一式装置並みの射程範囲になるまで改良したいですね」

「ワイヤーの強度はしっかりしたつもりだが、ブレが酷いな」

「それとガスの噴出とアンカーがうまく噛み合っていないくてちよつとズレてますね」

人間離れたフロアの動きに感心しながらシユツルムシリーズの欠点を記録していく技術班。

空中3回転、軌道転換、ワイヤーの巻き取る速度など、視覚と聴覚で判断して記録していく。

「おい嬢ちゃん！動きはどうだ!？」

「とつても身軽で動きやすいですけど！思った通りにアンカーが刺せませんわ!」

「これは予想通りだな」

「ガスの噴出を一式鞘と同じように想定しているせいかもしれん」

「それもあがるが、どうも操作装置が触りにくそうに見えるんだが…」

立体機動の技量が限界まで極められた彼女だからこそ判明した欠点。

すぐさま、改良の余地があると判断して技術班の何名かは既に計算を始めていた。

「ああ、とつても快適……」

巨人の正面からU字の軌道を描いてうなじを斬り落とす動作。

地面から障害物を使って巨人のうなじを斬る動作。

自由落下している時にアンカーを撃ち出して体勢を立て直す動作。

落下の勢いを利用してうなじを斬る動作や回転斬り。

フローラは自分の想像した動きがある程度近づいているのを実感していた。

「しかし、よくもあれだけのパターンを試せるものだ……」

「立体機動装置のテスト要員としては最適ですね」

「毎回思うんだが回転斬りで目をまわさんのか？」

「空中で二回転するだけで吐く人も居るしな」

こうして、立体機動の動作テストが終わった頃には晩飯の提供が終わった時間帯であった。

晩御飯を食べられないと悟ったフローラはかなり落ち込んでいた。

それを見た技術班は、晩御飯を奢り喜ぶ彼女の姿を見ながら酒を飲んだ。そしてなんだかんだで、仲良くなった彼らは23時まで雑談をしていた。

「いつでも来いよ!」

「はーい!また行きますうー!」

上機嫌になったフローラは技術班全員に抱擁した後、ふらつく足取りで兵舎に戻っていった。

「ガハハハハ!女の子に抱き締められるのは悪くないな!!」

「そういえば、訓練兵にお酒を飲ませてしまいましたけど良かったんでしたっけ?」

「いや、駄目だろう」

「良い飲みっぷりで4杯くらい飲んだよな」

規則違反だと分かっていたが彼らは止められなかった。

むしろ、酔っていて上機嫌な彼女に襲い掛からなかった紳士の彼らはどうでもよかつ

た。

今から、技巧室に戻り研究を続けるのだ。

一方、104期生は、お葬式状態であつた。

明るい未来を描いていた新兵たちは非情な現実には砕かれて鬱状態になつていた。

トロスト区の清掃活動は終わりつつあり、あと数日すれば住民が帰還できるようになるだろう。

ただ、そこで地獄を見た兵士たちは、未だにその傷が癒えてなかつた。

「今日もフローラが食堂に来なかつた」

「なんか忙しそうだもんね」

「アニ、どうすればいいの？」

「私に聞かれてもな……」

ミーナは、アニとフローラを誘つて晩御飯を食べるつもりだつた。

だが、誘おうとしても姿が見当たらずに探し回っても見つからなかった。

食堂に待機していれば逢えると思ったのに結局、入室してこなかった。

それが2日連続であつた。

A二に慰めてもらっているが彼女も相当精神的に参っている。

「やっぱさあ、俺たちって死ぬまで戦わされるんだろうな」

「やめろよダズ…」

「いつそ、うまく怪我すればいいんじゃないかな」

「右脚失つた兵士が教官になつた話も聞くしな、案外良い案かもしれん」

精神的ストレスと肉体疲労で壊れた兵士たちは規則を破り食堂を占拠していた。

そこで繰り広げられるのは、将来の不安と愚痴、悲観的な想いなどを打ち明けていた。

ただ、精神的に追い詰められている同士がそんなことをしあえば悪化していくのは当然の流れだつた。

「おいコニ、なんかやれよ」

「無茶言うな…お前こそなんかやれよジャン坊！」

「フローラに母さんに手紙を出してやれって言われたが…こんな状態書けるわけない」
「肉…肉さえあれば…」

「トロスト区の騒動で当分、肉料理が出ないっておばさんたちが言ってたぞ」
「わたし、兵士になれば肉を喰えると思って兵士になったんですうー」

ムードメーカーのコニーとサシャもどうしようもなかった。

憲兵団の上官たちとは別方向に墮落した104期の新兵たち。

任務中では身体を動かすことで恐怖を誤魔化しても真夜中では恐怖に怯えていた。

「エレンは無事なのかな…」

「フローラは無事って言ってたけど…」

ミカサもアルミンもエレンが心配であった。

調査兵団に入団するまであと4日以上もあるのだ。

逆に言えば、調査兵団に保護されている以上、それまで彼と逢える手段がない。

唯一、居場所を知っているフローラはここ最近行方が良く分かっていない。

「私ねー、エレンの演説で調査兵団に入ろうって思ったの」

「前も言ってたね」

「でもー負けちゃったの…みんな喰われて私も喰われそうになったのー」

「ミーナ、貴女疲れているのよ…」

親友のトーマスが戦死して自分も死にかけてミーナは既に自分が死人だと感じていた。

「ここは実は死後の世界で、自分は永遠にここを彷徨い続けるのだと。」

「あはっはははー！ただいまー！」

その空気をぶち壊すようにフローラが上機嫌で食堂に入ってきた。

「おいフローラ、もう晩飯は食べちまったぞ？」

「あははっは！良いの！もう食べてきたからあー」

未だに晩飯を狙われていたジャンは、現実を告げても彼女は上機嫌であった。

「なんかアルコール臭くないかこいつ…」

その一言でアニ、ミーナ、ミカサが慌ててフロローラの元に駆け付けた！

「フロローラ!?何をやってたの!?!」

「うーん、気のいい兵士たちとねえーお食事会をしたのー!」

「やばい、相当アルコールを飲んでる」

「ねえフロローラ、大丈夫?」

「とっても気持ちよかったああー頭ぐるぐるーぐるぐる」

この一言で女性陣はパニックになった！

「フロローラあああ!今すぐ風呂に行くわよ!!」

「たしかにー身体がー汚れちゃったしいねえー」

「この馬鹿!!なんで貴女はそこまで身体に無頓着なの!!」

アニの叱りにも気にせずにはフラつきながら笑いながら歩き回っていた。彼女からすれば、なんで友人たちが大慌てになっているのか理解できなかったのだ。

「大丈夫大丈夫、風呂は後でー」

「だめえええええ！早くしないと!!」

「なんでえええなの？」

「アニ手伝って!!」

「分かってる!!」

女性陣は慌ててフローラを風呂に連れて行った。

そして、様子を見守っていたジャンとライナーは「お礼参り部隊」を結成した。

鬱状態になっていた104期生は、フローラを汚した兵士たちに復讐心を燃やしていた。

結果的に怒りで統一された彼らは、巨人の恐怖などどうでもよくなっていたのだ。

「だからー変な事されてないわよ!」

「いいのいいの…だから」

「確かにお酒を飲んだのは悪かったけど！」

「いいから、お食事会した兵士たちの名前を教えて！」

「嫌よ！殺意剥き出しの貴女たちに教えるわけないじゃない!!」

結局、フローラは同期たちの誤解を解くまでに2日掛かってしまった。

軽率な行動で大混乱を引き起こした元凶は、監禁されたことで反省した。

なお、2日間で104期生の絆は深まり、結果的に兵士として立ち直ることができた。事実上、2日間兵舎に監禁されたフローラにとっては、たまったものではなかったが。

20話 調査兵団の目的

「おい糞ゴークル！なんでこのガキがこんなところに居る！」

「初めての壁外任務に慣らしておきたいと思ってるね！」

「面倒を見るとは言ったが、こんな最前線まで連れて来るんじゃないか!!」

「うわー怖い！巨人より怖っ!!」

リヴァイ兵士長は、壁外任務で新兵を最前線まで連れてきたハンジに激怒した。

ウォール・マリア陥落の翌年では、初めての壁外任務における新兵の生還率は5割。

今は大分、環境が良くなったとはいえ、それで生還する確率は7割と低いのだ。

一方、フローラはシュツルムシリーズの実戦テストがうまくいってご満悦である。

普段使用している刃が巨人1、2体で使い物にならない感覚であった。

今回使用した『シュツルムメッサー』という刃は3体のうなじを斬っても刃が機能していたのだ。

もちろん、刃渡りが通常の6割ほどという事で巨人を欠損させるという意味では困難

になったが。

「とにかく！トロスト区周辺をうろつく巨人を殲滅できたんだから良いでしょ！」

「それは結果論だ、新兵をほったらかしているこいつには何かしらの罰を与えんといけねえな！」

「おいガキ、お前も何か言わねえと、絶対に早死にするぞ！」

副官であるモブリットが居ないせいでもより暴走しているハンジ分隊長。

その分、ニファアやケイジ、アーベルといった第4分隊が援護していた。

が、守られるべき新兵が巨人に喰われそうになった先輩を助けていたり立場が逆転していた。

だからこそ、実戦慣れしているフローラを失いたくない為にリヴァイは、ハンジに激怒したのだ。

「新装備の実戦テストができたので満足です！」

「そうそう！この子いつの間にか新装備を持ってているんだよ!!凄いやな!!」

「おまえら似た者同士だな……」

「まだハンジさんの領域には達していませんわ！」

「誉めてねえよ！」

今回の調査兵団の任務は、トロスト区の外壁の周囲にうろつく巨人の討伐であった。

巨人の好奇心を抑えられないハンジは、兵舎で寝ていたフローラを連行して壁外任務に巻き込んだ。

彼女自身は、シュツルムシリーズの実戦テストがしたかったとはいえ、壁外任務に投入されるとは思わなかった。

人類史上初めて、訓練兵が壁外任務に投入されて生還した例である。

当然、公にする事はできずに調査兵団の記録すら残される事はなかったが…。

「ただいまー!…お帰りなさいは!？」

「あいつの行動を見る度にこっちの寿命が縮むな…」

「それはつまり老化って奴だね！」

「しばいてやろうか糞ゴートル！」

熟練夫婦のように慣れたやり取りをするリヴァイとハンジに誰も関わる気がないよ

うである。

フローラはその2人の背後を追いながらシユツルムメツサーの刃の補給方法を考え
ていた。

さきほどの戦闘で、4本を消費してしまった為、残りの刃は6本。

小さな鞘のせいで、調査兵团や駐屯兵团の刃は扱えないのでどうしてもジリ貧になっ
てしまう。

「少しいいか？」

「はい、なんでしょうか…!？」

呼び止められて停止すると、大男がいきなり首元の匂いを嗅いできて思考が停止し
た。

皆から自作の香水の香りを嗅がれたりしたが、ここまで露骨に嗅がれたことは無かつ
た。

しかも巨人討伐の任務明けで、汗をかいており体臭が気になっている乙女の身として
はきついものがあつた。

「ふっ……！」

「なんですか！その顔は!？」

「良い香りだ、何度でも嗅いでいられるな……もう一度……」

「ちよ、ちよつと！」

鼻で笑われて少し苛立ったフローラであったが、またしても首元の匂いを嗅がれて慌てた。

スンスンという音が何度も聞こえてきて、これが匂いフェチの変態だと思った。

今ならミカサやアニ、ミーナから言われた乙女としての危機感の無さの指摘が良く分かる。

顔を赤くして思わず股間を両手で抑えて恥じらってしまうほどに混乱していた。

「済まん、うちの分隊長が迷惑をかけた」

「ミケさん！いくらなんでもやり過ぎですよ!!」

ミケ・ザカリアスは部下たちの必死の制止を受けて残念そうに嗅ぐをやめた。

ここまで匂いを嗅いだのは、部下であるナナバ以来であった。

フルーティの香りがするナナバに対して彼女は心地いい花の匂いである。一回嗅いだら癖になって何度も嗅ぎたくなる中毒性があった。

「彼は初対面で人の匂いを嗅いで鼻で笑う癖があるんだ」

「なんかおかしいと思うけど、分隊長に悪気がないから許してやってくれ」

「は、はい分かりました」

頭が混乱しているフローラであったが、ようやく解放されたことでとりあえず安心した。

「ついでにミケ分隊長は、嗅覚が凄くて巨人の姿を見る前に匂いで察知できるんだ」

「えっ：そんなに嗅覚が優れているんですか!？」

「それ以外にも調査兵团の中ではリヴァイ兵士長に次ぐ実力者だったりする!」

それを聴いてフローラはミケ分隊長と呼ばれた大男を見る。

さきほどまでは変態な大男に見えたが、改めて見るとかなり頼りがいのある男性に見えた。

「自己紹介が遅れた、俺の名はミケ・ザカリアスだ！第1分隊の分隊長を務めている」
「よ、よろしくお願いします！わたくしの名はフローラ・エリクシアと申します」
「フローラか、良い名だ」
「ありがとうございます！」

どんな口調が飛び出してくるかと身構えたが見た目通りに常識人であった。
おそらく嗅覚が優れているからこそ、それで人を判断しているかもしれない。

「私は、リーネ・ハウズドルフ、こいつはヘニング・ラインマイヤーだ」
「リーネ先輩、ヘニング先輩、よろしくお願いします」

茶髪なポニーテールの冷静で落ち着いたリーネ、緘黙で何事も動じなさそうなヘニング。
グ。

しかし、さきほど焦った様子を見る限りは見た目ほど厳しい人たちではないようだ。
「しかし、新兵なのにミケさんレベルの動きとかどうなつてんだろうね」

「リーネ知らんのか、彼女は訓練兵団で最強だつて話題になっている子だぞ」
「巨人化できるエレンといい、104期訓練兵団は化け物揃いか」

褒められているだけ、怖がられているのかフローラは分からなくなっていた。

「そういえば、3日後に兵站拠点の設置任務があるのを知っているか？」

「ええ、一カ月後にある第57回壁外調査の布石として橋頭堡を作るって言ってきましたね」

「橋頭堡というよりは、一時的な補給拠点ついでいうところだ」

調査兵団がウォール・マリア奪還作戦の布石として4年間かけて作りあげてきた行軍ルート。

それが先日のトロスト区の奪還作戦により入り口が大岩に塞がれたことにより事実上破棄された。

トロスト区の門から出撃する予定だった為、門が使えない以上、無駄になってしまったのだ。

その為、トロスト区から北東にあるカラネス区から、ルートの作り直しが始まる予定

である。

「その任務なんだけど、君にも参加してもらおう事になったんだよ」

「ちよつと待ってください！その日は兵団選定をする日ですよ!」

「私たちも伝えただけどね…午前中の任務ですぐ終わるって事で強制参加させるらしいよ」

トロスト区の巨人襲撃を受けて兵団選定の日が大幅にズレた結果。

最前線のトロスト区ではなく、ウォール・ローゼ東区のカラネス区で行なわれる事になった。

「兵団配属前の新兵にやらせる任務じゃないんだけどね…君なら大丈夫だろう」

「か弱い女の子なの?」

「その女の子に助けられた男が居るらしい、ねえヘニング?」

「…ああ、本当に済まない」

そういえば、巨人に掴まって喰われそうになった兵士ってヘニングさんだ。

任務中はそこまで気にしていなかったものの、いざ面識になるとなんだか恥ずかしくなる。

特に大の男に頭を下げられて感謝されるのを見てフローラは何とも言えない感情が溢れていた。

「大丈夫そうか？」

「大丈夫です！」

「すぐ終わる任務とはいえ、巨人がいる！気を引き締めていけ！」

「はい！ミケ分隊長！心して任務に掛かります！」

フローラは敬礼をして第1分隊の面々を見送った。

「ホント、健気だねーどつかの目つきが悪い男も見習ってほしいよ」
「そつくりそのまま返していいか？」

相変わらずリヴァイとハンジは夫婦漫才をしていた。

「ハンジ分隊長！大変ですー！」

その時、副官のモブリットが馬を翔けて向かってきた。

「どうしたのモブリット!?!」

「被験体が！巨人が2体共殺されました!!」

「なんだってええええ!?!」

目の色を変えたりヴァイ兵士長とハンジ分隊長は巨人研究所に向かつていった。

ついでに無理やり編成されてフローラも向かわされた。

「ビーン！ソニー!!嘘だああああ！嘘だと言って!!」

ハンジは無残な現場を見て取り乱した。

日光を遮る実験、痛覚を確認する実験、意思疎通の実験。

どの実験でも巨人に喰われそうになっていた彼女であるが彼らに愛着があったのだ。

「犯人はまだ見つからないのか？」

「ちようど交代の時を狙われたらしく見張りが見つけた時には立体機動で逃げられたら
しう」

「貴重な被験体なのに……どこのどいつがやったんだ」

「同時に巨人をやるって事は、複数の兵士の仕業なのは間違いないだろう」

「案外、これで良かったかもよ？ 巨人に恨みを持つ奴は多いし、壁内にいるだけで恐怖した民間人もいるしな」

集まった兵士からは様々な意見があつた。

どれもが間違つてはおらず、納得する意見ばかりである。

「君には何が見える？ 敵は何だと思う？」

「巨人の仲間が兵士に化けてソニーとビーンを介錯したとか？」

「……中々面白い意見だ」

エルヴィン団長に質問されて思わず適当に答えてしまったフローラ。

答えを聞いた彼は、何度も頷いて他の人にも同じ質問をしていた。

そしてエレンにも同じ質問をしていたが、あえてフローラは無視をした。

その日、104期訓練兵団の新兵たちは憲兵たちによつて取り調べを受けていた。

「クリスタ・レンズの装置も問題ないようだ」

「よし、次だ！」

正直104期生は、この取り調べにうんざりしていた。

訓練兵が被験体を殺す動機などないからだ。

むしろ、巨人なんて殺して罪に問われる方がおかしく感じるくらいである。

同期を喰い殺された彼らには、巨人にいくらでも恨みがあるのだから…。

「ん？その席が空いてるな？」

「そこは…フローラ・エリクシアだな」

「ああ、あいつか」

「事件当時、調査兵团と共にトロスト区の壁外で巨人の掃討をしていたので除外だ」

「むしろ、訓練兵を編入している調査兵团を問い詰めたいくらいだな」

「ははは面白い！」

憲兵たちはフローラを疑わずに残りの訓練兵の立体機動装置を調べていた。

訓練兵たちの内心では戦場の処理に疲れているのになんか意味分かんない女に興味津々だった。

誰もが巨人の恐怖に怯えているのに、巨人を駆逐するという目標を有言実行する女を。

「ホントすげえなあいつは……」

「そうだね」

コニー・スプリングァーは、巨人を恐れないフローラを尊敬していた。

巨人と交戦する前は、トロスト門で調査兵团に入隊すると言った。

だが地獄を見た後、二度と巨人の顔を見たくなかった。

トロスト門で誓ったウォール・マリアを奪還して肉を食べる誓いも頭の隅に追いやら

れていた。

「俺、最初は調査兵団に入ろうと思ったんだが憲兵も悪くねえと思ってる」
「せっかくあのジャンが調査兵団に入団するって決意したのにな…」

コニーの成績順は上位8位、憲兵団に入団を志願する資格があった。

元々彼は、故郷の奴らに見返すつもりで兵士になろうと決意したのだ。

だから、憲兵になればみんな尊敬してくれるだろう。

隣に居たアルミンと会話していくうちにその気持ちがちがどんどん膨れ上がってきた。

「アニ、俺は憲兵団に入るべきだと思うか？」

「じゃあ、私が死ねって言えばあんたは死ぬのか？」

「はあ!?意味わかんないし!死ぬわけないだろう!」

アルミンの隣に居た4位のアニに考えを聞いてみたらとんでもない問いが返ってきた。
た。

思わず死なないって返答を返すと珍しく彼女の笑みが見えた。

「なら自分に従えばいいんじゃないの」

「そうだ、そうだよな」

「アルミンは死ねって言えば死ねるの？」

「僕は、そうしないといけなくなったら死ぬかも…もちろん嫌だけどね」

「そうか…あんたは弱いくせに根性があるからね…それでいいんじゃないの」

「アニって本当は優しいよね」

アニ・レオンハートは思わずアルミンの顔を見た。

自分の行動と言動のどこに優しさがあるというのか。

「だって、アニは僕たちに死んでもらいたくないって思ってるし憲兵团に入るのも理由があるんでしょ？」

「買い被り過ぎだよ、私は…ただ生き残りたいだけだ」

彼女の脳裏には父親の顔を思い浮かべていた。

必ず父の元に帰ってくると約束した以上、彼女は死ぬ気などなかったのだ。

いつ帰れるかも分からないけど、もうすぐ帰れるという実感はあった。

「私は、調査兵団団長、エルヴィン・スミスだ」

「単刀直入に言う！君たちに話すのは調査兵団の勧誘の話だ！」

「諸君らもトロスト区の戦場で、己の限界や巨人の恐怖を感じた者が多いはずだ」

「だが、トロスト区の犠牲で失ったものも多いが人類は勝利へと前進した！」

エルヴィン・スミスは自分が悪魔であると自覚していた。

自分の夢の為にこの場に居る新兵を犠牲にしても進んでいくと決意していた。

「それは、エレン・イェーガーという存在だ！」

「彼と諸君らの健闘によりトロスト区を奪還できた！」

「それに我々は巨人の正体を辿り着く術に近づいている！」

間違っではない。

今まで王政府に妨害されており、調査兵団の兵士は事実上の無駄死にであった。

だが、彼らの死体の山が幾度も築かれた今日、ようやく状況を打開できるチャンスが来た。

「彼に関しては話せる事は少ないが！少なくとも彼は人類の味方でありそれを証明できる！」

「そして出身地であるシガンシナ区の実家の地下室に！巨人の謎があるとされている！」

「ようやく辿り着きそうなんだ！そこでは100年も支配している巨人の支配に！」

「巨人の支配から脱却できる事実がそこに眠っている！巨人の謎がそこにあるのだ！」

彼には夢があった。

父親は自分の夢のせいで王政府に殺されたものである。

だが、止まるわけにはいかなかった。

屍で道を築いてきた以上、幼き日々から求めてきた事実がそこにある以上！

決して止まるわけにはいかなかった。

「だが、シガンシナ区の地下室に行くにはウォール・マリアの奪還が不可欠である」

「もちろん我々は当初からウォール・マリア奪還を目標にしてきた！」

「しかし、トロスト区が使えなくなつた以上、東のカラネス区から遠回りになつた」
「諸君らも察した通り：我々が4年間で築きあげてきたものが全て無駄になつた」

エルヴィンは恥ずかしながら、自分は優しいと思つている。

嘘を付いて新兵を使い潰す方法をいくらでも思いついているにも関わらずできないからだ。

どんな犠牲を払つても目標に向かつて突き進んできたが、今回は違う。

曖昧な目標ではなく、頑固としたものであり夢の手がかりがそこにあるからだ。

だからこそ、冷静になれた。

「その4年間で調査兵団の兵士が9割死んだ！2500人以上死んだのだ！」

「少なくともウォール・マリアに大部隊を送るには、その数倍の犠牲者が……」

「いや、正直に言おう！最低でも5倍の犠牲者と20年の月日が必要になる!!」

実際はこんなものでは済まないだろう。

果たして、10代先の団長ですら達成できるか疑問なほどに犠牲が出るはずだ。

目標が明確になり客観的に考えられるようになったこそ、無駄死をさせたくなかつた。

後方では慌てた調査兵団の兵士があたふたしているのを感じられるほどに愉快だ。

「諸君に告ぐ！我々調査兵団は常に人材を求めている！」

「慢性的に人手不足であるからだ！」

「隠したりしない！今期に入団した新兵も一カ月先の壁外調査に出てもらおう！」

「初回の壁外調査で死亡する確率は3割ほどだ！1年以内に死ぬ確率は7割以上だ！」

だからこそ、ここで『ふるい』をかける。

甘い言葉で釣られて兵士など調査兵団に不要なのだ。

屍になつて道になる覚悟がある者だけが入団するように彼は現実を教えた。

「この惨状を知つてもなお、自分の命を投げだしてもやるといふ者だけがここに残れ！」

「もう一度言う！1年以内にほとんど死ぬこの兵団に！人類の未来の為に！」

「心臓を捧げられるのだと内心で考え抜いた者だけがこの場に待機せよ！」

「他の兵団の志願者は解散したまえ！以上だ！」

誰かが初めに動いた。

自分は死にたくないと！

誰かがその後、動いた。

自分は生きたいと！

この場に集結した104期訓練兵たちは、少しずつ歩みを速めた。小さな穴から大量の水が低地に流れ出すように立ち去っていく。

「死にたくない」

「冗談じゃない」

「捨て駒になりたくない」

「内地に行きたい」

「巨人に会いたくない」

それぞれの想いを胸に皆は地獄から逃げ出した。

そして広場は静かになった。

「君たちは死ぬと言われたら死ぬるのか？」

「「死にたくありません！」」

「そうか…皆…良い表情だ…」

「よろしい！君達を調査兵団に迎え入れる！これが本物の敬礼だ！」

「心臓を捧げよ!!」

「「ハッ！」」

ミカサ・アツカーマンは、エレンを守るためにこの場に残る覚悟をした。

アルミン・アルレルトは、震えながらも皆が居て少しでも安心した。

ジャン・キルシュタインは、全てに絶望しながらも敬礼をした

サシャ・ブラウスは、故郷を思い浮かべながら震えながら泣いていた。

「君たちの覚悟は本物だ、何も恥じることは無い」

コニー・スプリンガーは、ヤケクソになって開きなおった。

クリスタ・レンズは、みんなの為なら犠牲になれると覚悟したが震えて泣いた。

ユミル・ゲッティンは、クリスタを心配して残った。

ミーナ・カロライナは、亡き親友の為に、なにより親友が居るから泣きながら残った。

「訓練とは本能を克服する行為という話がある」

ライナー・ブラウンは、兵士として戦士として逃げることはしなかった。
ベルトルト・フーバーは、皆の想いで踏み留まった。

「ならば君たちは恐怖という本能に打ち勝った英雄たちだ」

エルヴィンは、彼らの表情をしつかり確認して想いを受け止めた。

「第104期調査兵団は敬礼をしている23名だな」

「ありがとう、君たちの英断を心より尊敬する」

しかし、エルヴィンは1人だけ想いを受け止める事ができなかつた。

それは訓練兵でありながら調査兵団で何度も任務に就いていた女である。

フローラ・エリクシアは悪魔の様に嗤っていた。

まるで自分の正体を見透かされたように、瞳孔を大きく開き口角を釣り上げて嗤っていた。

悪魔になろうと成り切っている人間が本物の悪魔に馬鹿にされているように嗤われていた。

「…悪魔には悪魔の囁きを通じない…って訳か」

エルヴィン・スミスという男は、悪魔に慄き後退りをしながらも笑って返してみせた。

21話 相棒との出会い

フローラは難題にぶつかっていた。

それは馬である。

巡航速度は35 km/h、トップスピードは75 km/hと唯一巨人から逃げられる移動手段だ。

平地で活動する機会が多い調査兵団には必須の相棒である。

「問題なのは、馬によって言う事をきかないということよ」

「扱い方が悪いせいじゃない?」

「借りる度に馬が違うのよ!?!さすがにそれはないわよ」

何度か壁外任務をしていて分かったのは、自分専用の馬が居ないと駄目だという事である。

さきほどの任務では、指笛を何度も吹いても帰って来ずに馬を諦めた。

やむを得ず同僚に襲い掛かる巨人を利用して味方部隊に帰還せざるを得なかった。

そして合流した時に自分の馬がそこに居て頭が痛くなったのだ。

「おい馬を置いてどこに行つてたんだ!？」

「馬が可哀そうだろう!？」

先輩たちの叱責で反省したフリをして二度と馬を借りないことにした。

もちろん、調査兵団用の馬は、庶民の生涯年収に匹敵するので新兵に買えないはずであつた。

しかし、彼女には馬を買うお金があつたのだ。

任務でウォール・シーナのストヘス区に行つた時に大貴族にバカにされたのがきっかけだつた。

役立たず、ゴミ、税金泥棒と調査兵団を侮辱していた大貴族が居たのを見てチャンスにしたのだ。

自分なら巨人を10体、1人で討伐できると啖呵を切つたおかげで大金を稼げてしまった。

「本当にこの小娘ができるのか？」

「まあいいではないか、若い娘が尊厳を投げ捨てて泣き叫ぶ悲鳴を聞けるのも良い余興だ」

「ぐふふふ、さあ魅せてもらおうじゃないか、彼女の晴れ舞台とやらを……」

「やはり、命知らずだな。調査兵団の兵士というのは……」

見るからに悪徳貴族たちを巻き込んでカラネス区の壁外でパフォーマンスを行なった。

もちろん、ガスボンベ6本、シユツルムメツサーの替え刃12本を事前に用意していた。

ガスボンベを6本も新兵が用意できるのではないが、ピクシス司令の権限がある為、用意できた。

フローラ・エリクシアには最優先で補給ができるという権限がトロスト区攻防戦以降も効果を発揮していたのだ。

「うおおおおお！やるではないか！」

「ふむ、これなら第57回壁外調査も期待できるといふもの」

「つまらぬ……やはり無様に泣いてくれんと」

「正気じゃない……本当に馬鹿だあいつは……」

無様な死に様を見に来た貴族は、思わぬ彼女の奮闘で興奮しており上機嫌だった。

その中でトロスト区を拠点にしていたリース商会の会長以外は。

「はあはあ……この通り、支援して頂ければ……巨人を……倒すことが……できますわ」

フローラは内心切れた。

理由は2つである。

巨人を10体討伐してみせて『巨人討伐ショー』が終わる合図の黄色の信煙弾を撃つても援護がなかった。

つまりカラネス区壁外にいる巨人を殲滅する羽目になったのだ。

最前線であるトロスト区と比べてここは、兵士の練度が低く砲兵の腕前も下手くそどころか砲撃すらしなかった。

正式でないとはいえ、王の側近で行政担当の大貴族が壁上に居るにも拘わらず無視を

した友軍に失望した。

「よし、こつちを見ろお嬢ちゃん！」

「ひゅーひゅー暑そうだね！もつと脱ぐか？」

「はあはあ…固定ベルトで…これ以上…脱げません…わ！」

しかも必死に巨人を討伐した後、無駄にパフォーマンスをしなければならなかったのだ。

上着である兵服を脱ぎ捨てて、黒色のノースリーブ姿でセクシーポーズをとらなければならなかった。

上肢は訓練で怪我した時についた傷まみれで、美しい肌とは言えなかったので見せられなかった。

それでも身体を売るよりマシだと思いつローラは必死に頭を垂らして、土下座したのだ。

「ふむ、中々世渡りが良いではないか」

「侯爵様のおかげで王政が成り立っているのは僻地の末端でも理解しておりますので

…

こうして集まった活動財産の半分を王政府に納税という形で手放して、大貴族に謝礼金として2割を手放した。

更に迷惑をかけたとしてカラネス区に1割分を納税してから換金して金貨20枚を確保した。

そして事前に事情を説明していた調査兵団本部で頭を下げつつ金貨10枚を収めた。こうして一頭の馬を購入できる金貨10枚を確保したのだ。

「長い険しい道のりだったけど、これも全て巨人を駆逐する為…」

「だからって無理をし過ぎだよ…」

「とにかく行くわよ！」

さつそくウォール・ローゼで有名な厩舎にクリスタを引き連れて突撃していった。しかし、すぐに挫折した。

とりあえず乗馬したものの、実戦で役にたつのか不明だったからだ。動物と仲良くなれる事に定評あるクリスタを連れてきたものの旨い事は行かなかった。

「やはり、専用の馬をもつのは無理なのかしら…」

「分隊長クラスでようやく専用馬が与えられるくらいだもん…しょうがないよ」

一般兵に配備されるのは『鹿毛』という茶褐色の体毛の馬 金貨6枚

士官用に配備されるのは『栗毛』という黄褐色の体毛の馬 金貨9枚

調査兵団の団長と同じなのは『白毛』という白馬 金貨100枚

「乗ってみただけど中々これって決まるのではないわね」

「それより気性が荒そうな馬が居るんだけど、あれを試してみない?」

「むしろ、気性が荒いのは駄目な気がするけど、まあいいわ」

クリスタの提案した馬を見ると赤い体毛で覆われた馬で、他より一回り大きい牝馬であった。

なにより目を惹いたのは値段、たったの金貨4枚である。

「すみません！あの馬って何ですか？」

「あーあれは止めておいた方が良いでしょう」

「白毛同士でかけ合わせたら、突然変異で生まれたじゃじゃ馬さー！」

「とりあえず乗ってみますか」

まず鞍を付ける所から手古摺る馬であった。

10人がかりで30分かけてなんとか取り付ける事に成功するほど気性が荒かった。

大抵の動物なら仲良くなれるクリスタですらお手上げというある意味、値段通りの馬である。

そして乗れるようにしたと思ったら柵を乗り越えて暴走していった。

結局、立体機動装置で5分くらい苦戦した末に乗馬できたが、大暴走してしまい止まったのが1時間後であった。

「大丈夫？」

「死にかけたわ」

「ごめんなさい……」

「いいのよ、乗ったのは自分だし」

「馬だけに？」

「そう馬だけに……？」

疲れているフローラは、気分転換に馬用ブラシで馬の毛の手入れを行なった。気のせいか心地よく感じているようで少し大人しくなった気がした。

「オーナーさんにも迷惑かけちゃったし、この子でいいわ」

「良いのか!? 本当にこの馬でいいのか」

「ええ、この子にします」

安物買いの銭失いと言わんばかりにオーナーに警告されたがフローラはそのまま支払った。

「やはり愛着というのがあってな、売り物にならんと思っても殺処分できなかつたのだ」
「必ず彼女を幸せにしてみせます」

「ハツハツハツ！期待しておくよ」

厩舎のオーナーに別れをつけて、クリスタとフローラは帰路に着いた。

「さつきまで暴れていたのに急に大人しくなったわね」

「だって、窮屈な馬小屋で嫌われながら過ごしていたんだもん」

「…まるで他人事じゃないみたいに言うわね？」

「えっ？」

クリスタは凶星を突かれたように歩みを止めてしまった。

「もう、フローラったらそんな冗談を言うなんて…」

「そうね、命と引き換えに馬を止めようとした貴女にはきつい冗談ね」

「なんでそんな事を言うの？」

「わたくしは、貴女を死なせたくないからよ」

昔からフローラとユミルは核心をついてくるが多かった。

雪山訓練にダズと共に志願した際に防寒具をありったけ渡してきて無理やり着せたのはフローラだった。

評価欲しさに志願した彼は、体調管理ミスで死にかけたが辛うじて凍傷を免れた。

そして体力に劣っていたクリスタが大丈夫だったのは、フローラの防寒具のおかげであつた。

「どうして?」

「ユミルが一番知っているんじゃないかしらね」

「…いじわる!」

誰かの為に犠牲になろうとする度にユミルとフローラに妨害されていた。

その度に自分が必要とされていると説いて、無理やり信念を曲げてくるのだ。

「いじわるで結構!」

「じゃあ私もいじわるをする!」

「えっ?」

「寝ている時に傷口を舐めてあげる!!」

「えっ、やめて!」

ユミルとフローラの最大の違いは、自分が嫌だと思ふ事をすると嫌がるのが彼女である。

ユミルだと、耳を舐めようがトイレに付いて行こうが背後から胸を揉もうが喜んでしまう。

しかし彼女には弱点があるのでこうやって反撃できるのだ。

「えーっと、そうそう!この子に名前を付けてあげなきゃ!」

「それはフローラが名付けるべきじゃないの?」

「客観的に名付けられないからクリスタに頼むわ」

焦ったフローラはクリスタに馬の名前を考えてもらい誤魔化そうとした。もちろん、傷口は舐められるのは避けられないと経験から分かっていた。それでも少しでも思考を変えようとしたのだ。

「ライリーってどう?」

「怒り、勇敢、元気、活発か……この子にぴったりね」

フローラの相棒の名が決まった。

女の子の名前の由来としてはどうなのかという問題は……細かいことは気にしなかった。

「でもどうやって認識させるつもりなの？」

「餌付けするときに名前を呼んであげれば、そのうち身に着くでしょ」

久しぶりの遠出で満足しているライリーは鼻息をしながら悠々と歩いていた。

「私もお世話していい？」

「いいけど、その時は一緒にやりましょ」

「なんで？」

「わたくしよりクリスタに懐いたら意味がないから！」

馬を引いているのはクリスタである。

フローラも引きたかったが馬と仲良くできるのがクリスタの特技であった。むしろその為に連れて来たせいでも言えない気持ちになった。

「これから相棒になるんだからしつかりわたくしだけを認識させないとね！」

段々嫉妬したかのように不機嫌になったフローラ。

その様子を見たクリスタはなんとか誤魔化そうとした。

「そういえば、フローラってミカサと仲が良いよね？」

「ええ、同期の中で背中を任せられる相棒みたいなものね」

「どうしてそんなに仲良くなったの？」

「今ここで話すべき事なの？」

「二人と一頭しかいないから……」

まだ、兵舎まで距離があった。

「そうね、みんなに内緒にするって約束するなら馴れ初め話を話すわ」

「約束する！絶対に黙ってる！」

「そうねー！あれは845年のウォール・マリアが陥落した日ー」

ただ歩くだけでは寂しいのでフローラは昔話を話した。

「駆逐してやる!!この世から…一匹…残らず!!」

決意したエレンの一言でフローラは生まれ変わった。

鎧の巨人を討伐し、シガンシナ区を奪還する。

例えこの身を悪魔に売り渡してでも…達成してみせると！
避難船の中で少女が死んで悪魔に転生した。

「エレン…」

「ミカサ…！オレは絶対に成し遂げてやる」

泣きながらエレンは決意した姿を見てミカサは慌てた。

あの強大な力の巨人に向かっていき、そのまま喰われかねない自暴自棄に見えたからだ。

「協力…するわ」

「誰!？」

「巨人に、両親を殺された…の」

「お前も…なのか」

フローラは人波を掻き分けてエレンの元に辿りついた。そして泣いている彼の手を取ってしっかりと顔を見た。

「わたくしも…協力…します」

「ありがとう」

「2人とも…」

これがエレンとミカサの出会いだった。

その2年後、訓練兵団に入団した時、3人は再び出会った。

「よお！久しぶりだな！」

「エレン、あの時の決意は揺らいでいませんよね？」

「もちろん！巨人を駆逐してみせる！」

「それは良かった…一緒に頑張りましょうね」

「お前もな！」

2人は意気投合して訓練に育もうとした。

それに危機感を覚えたのがミカサだった。

「ちよつといいい？」

「いいわよ」

「エレンに近づかないで！」

「どうして!?!」

エレンは弱いから自分が守ると決意したミカサにとってフローラは危険人物だった。まるでエレンを地獄に巻き添えにするヤバい女と本能で認識したのだ。

「エレンは絶対に死なせたくないの」

「それはこつちも同じよ！」

「いいえ、貴女は害虫！エレンにこれ以上纏わりつくな！」

ミカサは、彼女を仮想敵にした。

まるで寄生していくように訓練兵たちと仲良くなる姿に寒気がしたのだ。

凡人だった彼女が同期たちの技術や知識を吸収していき人間離れになっていた。

自分以外、彼女の化け物っぷりに気付かないどころか、骨抜きになる有様だった。

「貴女は一体誰なの!？」

「フローラ・エリクシアですわ！」

「違う!! 恐怖の感情がない貴女は人間じゃない!!」

「みんなの精神を喰らい蝕んでいく害虫だ!!」

既にフローラの存在なしに104期訓練兵団が成り立たないほど骨抜きにされていたのだ。

「コニーやサシャといったムードメーカーポジションは居るが彼女は別格だった。

「…そうかもしれないわね」

「だったら！」

「だからどうしたと言うの!？」

「何を…」

「巨人を一体残らず駆逐できるなら、わたくしは何でも犠牲にしてみせるわ！」

フローラもミカサを警戒していた。

自分の力不足を実感しているからこそ同期たちと仲良くなり技術や知識を盗もうとした。

両親が【鎧の巨人】のせいで大岩に潰されたのと、エレンの決意の一言以外の記憶がなかった。

だからこそ、失った記憶を埋める勢いで、同期たちと思い出作りをしていた。

「その犠牲は、同期たちも含んでいるでしょ！」

「そうね、できるだけ犠牲にしたいくないけど覚悟をしてるわ」

「こいつううう!!」

フローラの一言で激高したミカサは短剣を押し倒した彼女の喉元に向けた。

「おいミカサ…何をしてるんだ」

「エレン!？」

その様子をエレンに見られたミカサは真っ白になった。

もちろん彼に嫌われるのも嫌であったが殺人未遂の現場を見られた以上、手遅れだった。

第三者から見られたら言い訳ができないほど追い詰められた。

「なあ、なんで…どうしたんだ!？」

「それは…」

「ミカサがねえ、わたくしがエレンを殺すと思って先手を打とうとしたのよ」

「なにを…」

顔を真っ青にしたエレンに言い訳できずに震えているとフローラに先手を打たれた。

「わたくしの行く道は、屍で築かれた道を進んでいくのよ」

「何を言っているんだフローラ!？」

「巨人を絶滅させるなら、相応の犠牲が必要なのよ!この世は等価交換の法則に基づいている限りね!」

「だからミカサに言っっちゃったの!同期を友人を!巨人の餌にしても駆逐してみせるって!」

「友人たちをゴミの様に扱おうとした女にミカサが激怒したのよ!」

エレンは混乱した。

忘れ物を取りに教室に戻ったらミカサがフローラを殺そうとしていたのだ。

ミカサは言わずもがな、フローラは同じ志をもった同期である。

ベルトが壊れていて、姿勢制御訓練に失敗していた時に励ましてくれた優しい女。そんな彼女から耳を疑う言葉を発していたのだ。

「とりあえず、落ち着こう!なあ!」

「…そうね」

「…ごめん」

彼には、彼女たちに声をかえるのが精一杯だった。

「なあ、お前ら同じ同期だろう？なんでこんな事になったんだ？」

「男の子には分からないかもね…」

「こいつ…」

「ねえ、エレンは巨人を本当に駆逐できると思う？」

「絶対にやってみせる!!」

エレンは当然のように言い放った！

それを見たフローラは安心したように微笑んだ。

「それなら、わたくしの夢も…エレンに託して良いわよね」

落ちていた短剣を手にとって、フローラは自分の首元に刃を近づけた。

「お前！なにやってんだ!？」

「エレン！同じ目標を掲げている同志だけど、方向性が違うのよ」

「エレンは巨人を駆逐して自由になるのに対して、わたくしはどんな犠牲を払っても駆逐する気なの！」

「ミカサは、その犠牲が…エレンも含んでいると感じて問い詰めてきた」

「そしてその危惧を容認したことで貴方を守るために殺そうとしたの」

既にフローラは自分が自分じゃない感覚に襲われていた。

それについて恐怖は無かったが、エレンすら切り捨てられる冷酷さがあるのに悲しんだ。

記憶喪失で過去の自分は喪失しており、ここにいる自分は850年から2年で創られた物だった。

「845年のウォール・マリア陥落した日の記憶はショックで全て失ってしまいましたわ」

「大切な物を全て失ったわたくしは、どんな物でも切り捨てられるようになってしまっ

た」

「それがミカサやアルミン、エレンであっても目標の為なら捨てられるほどにね…」

「フローラ…」

「もしかしたら、わたくしという存在はこの世界に存在してはいけない異物なのかもしれない」

時折、自分がこの世界に存在してはいけない存在と認識することが多々あった。

自分という存在のせいで、本来あるべき世界を捻じ曲げているかもしれない…。

「もう空っぽの存在には、この残酷な世界はきついものがありました」

「だからこれで終わりにします」

「あなたたちにアリバイができたのを確認したらこの首を掻き切って終わりにします」

「意志を継いで目標を達成してくれるなら、わたくしの犠牲だけで済みますからね」

「さあ、行って…早くしないと手遅れになるわ」

「これで悪魔は死んで、意志を継いだエレンたちが仇を討ってくれると信じて…。

「何言ってるんだよフローラ！シガンシナ区の記憶がないなら…教えてやるよ！」

「え？」

「オレたちの故郷を！アルミンやミカサ、オレの思い出をいくらでも話してやるよ！」

「何を悟った感じで自己犠牲で逃げようとしてるんだよ!!」

エレンからすれば、フローラの悩みは理解できなかつた。

ただ、両親を殺されたショックで記憶を失ってしまい、自己防衛で恐怖の感情を封印したと感じ取った。

だから彼女がそこまで追い詰められていると知った以上、放置はできなかつた。

大切な同志であり同期の彼女を見捨てる事なんてできなかつた。

「な？ミカサ！あいつにオレ達の思い出を教えてあげないか！」

「うん、あそこまで追い詰められたと知らなかったから、迷惑かけた分教えないと…」

「ありがとう…2人とも…」

こうして、シガンシナ出身の3人組の思い出話を聞いて積極的に手帳にメモした。

まるで、自分の過去を書き記すように残していった。

そしていつの間にかフローラとミカサは背中を任せられるほどの関係になつていった。

「つて感じでミカサの疑いを友情に変えて今に至るつてわけね！」

「…ねえ、さつきから黙り込んで…何で泣いてるの!？」

「なんかごめんなさい」

「なんで謝るの!？」

フローラからすれば昔話をしただけであつたがクリスタがここまで泣くとは予想外だつた。

もうすぐ兵舎に辿り着いて彼女と別れてライリーを専用の厩舎に連れて行く予定だつた。

それなのにここまで泣かれると寄り添つて部屋まで連れて行かないといけなくなつてしまつた。

「とにかく、全世界の人に存在を否定されても、誕生を祝福してくれる人が居るって事ね！」

「…うん」

「だから、こうやってクリスタと会話できてよかったと思うわ」

「例えこの時の為だけに2人がこの世に誕生したと知っても、後悔しないし嬉しいわよ」

「ありがとう…」

「ああああ!?!なんで泣くの!?!」

話しかける度に彼女が大泣きをしてしまい、フローラは休憩せざるを得なかった。

結局、泣き止んだ彼女を食堂に送ったが馬を送迎するせいで晩飯を食べる事ができなかった。

そして、へとへとになって兵舎に戻ったら上機嫌のジャンと遭遇した。

「よお! 晩飯を食べる気がないなら、晩飯を提出する約束はチャラで良いよな!」

「というか、廃棄が勿体ないから俺が全部もらってるぜ! ありがとうなフローラ!!」

無表情になったフローラが、ジャンに平手打ちをしたのは言うまでもないだろう。

22話 リーブス商会

「いいか新兵！調査兵団は100個の班で構成されているのは、さきほど伝えた通りだ！」
「しかし！壁外調査では更に細かく編成されるのだ!!」

データー・ネス班長は、23名の104期調査兵に向けて教鞭をとっていた。

10日間に渡る基礎訓練を修了した22名と、自由人に壁外調査の編成を叩き込む為だ。

「初日にも伝えた通り、この『長距離索敵陣形』をしつかり学んでもらう！」

黒板には、魚鱗の陣が描かれており目立つように色分けをしてある。

その一番上には、『長距離索敵陣形』と書かれていた。

「諸君らは、調査兵が巨人を討伐するエキスパートとイメージしている者が多いが実際は違う！」

「我々の任務は、あくまで調査及び補給拠点の構築であつて、巨人討伐ではないのだ！」
「もう一度言う！調査兵団は、巨人を討伐するのはやむを得ない場合のみだ!!」

ネス班長がいじけているフローラの顔を一瞬だけ見て、また教鞭をとり始めた

巨人と索敵する班の役割、新兵の配属される場所、新兵の任務、部隊の移動などを伝えた。

それでも1名、実戦では、やらかすんだらうなという確信はあつたが…。

「ネス班長！巨人を避けて移動するのは良いのですが！これでは包囲されませんか!？」

「アルミン、良い質問だ」

「先代団長までの調査兵団は、巨人を積極的に討伐しつつ進軍したが多大の犠牲者が出た」

「…何故だと思ふ?」

新兵に納得してもらう為にネス班長は全員の解答を待った。

質問されたことにより、講義の内容が頭に入るからだ。

彼は、新兵が納得するまでここから帰す気はなかつた。

「平地が多いため、立体機動が生かせないからです！」

「落馬して、馬を見失うせいだと感じました！」

「進軍を止めると、巨人たちが集ってきて身動きがとれなくなるからです！」

「交戦したせいで本隊から逸れて撃破される可能性が高いから……」

22名の新兵たちは、考えながら返答したのを聴いてヘス班長は満足した。

どれも間違っただけは無いし、彼らのやる気が感じられたからだ。

問題なのは、最後の女。

「カラネス区壁外、討伐戦績14体、フローラ・エリクシア！何故だと思う？」

「補給物資が切れて戦えなくなったからです！」

「よし！お前は調査兵团本部の周りで1時間マラソンをしろ！」

「ううっ……分かりました!!」

こうして22名の視線を背後に受けながらフローラは退室した。

「さて諸君らの答えは間違っていない」

「先代までの調査兵団の団長は、討伐を目指したが却って犠牲者を増やすばかりだった！」

「しかし、エルヴィン団長が考案された陣形で、壁外調査の損害率が劇的に改善されたんだ！」

「積極的に巨人を避けるという逆転の発想でー」

データー・ネスはフローラの實力は認めていた。

壁外の平地で単独で巨人を14体討伐する新兵など實力を認めざるを得ない。

いや、認めていたが今回の講義では絶対覚えなйдらうと踏んで退室させた。

キース元団長にそっくりな彼女に関しては、個人指導しないと覚えないと踏んだのだった。

フローラが解放されたのは正午であった。

・巨人を発見したら赤色の信煙弾を撃て

- ・ 周りが緑色の信煙弾を撃つたら自分も同じ方向に撃て
- ・ 奇行種だけ討伐しろ

- ・ 許可なく編成を崩すな

- ・ 周りの動きに合わせて移動しろ

結局、片手で数えられる事だけを叩き込まれて解放された。

彼女からすれば巨人が居るのに討伐できないほど、もどかしいものはなかった。

「スケジュール表には…午後の予定はないわね」

気を取り直して、旧調査兵団本部へ4回目の訪問に行くために兵舎に戻った。

兵舎は訓練兵時代に利用した建物より立派であり、個室があるので広々に感じられた。

未だに木箱が置いてあったり、イラストを描くのに使う道具が机に置いてあったりと部屋は汚かったが…。

何より問題なのは、山ほどある勲章であった。

「もう、どっかに売り飛ばしたい！」

先日のパフォーマンスやトロスト区攻防戦で頂いた勲章が山ほどあったのだ。無駄にかさばるうえに処分もできないので扱いに困っていた。

「どっかで売り飛ばせないか訊いてみましょう」

とりあえず適当に小さい勲章を何個かバックに入れて持ち運ぶことにした。

エレンと軽く面会した帰りにどっかの商店に立ち寄って聞く予定をたてたのだ。

以前だったら馬を借りる分、数日前に手続きをしないといけないかったが今回は違

！

専用馬のライリーのおかげで手続きが簡略できて動きやすくなったのだ！

「ねえライリー！ たった1日放置しただけでそんなに怒ったの!？」

「ブルブル!!」

「うっ…毎日定期的に走らせなきゃダメなのね…」

不意打ちで後ろ蹴りされなくなった分、心を通わせたと思っていたのは自分だけで

あつた。

名前を呼んだり、指笛で反応はするもののまだ相棒とは言えなかった。

高品質の名馬から誕生したという事もあつて1時間早く到着したが落ち着かせるまで1時間掛かった。

「あとで虫よけの煙を焚くからもう少し我慢してね」

何度も頭を撫でて落ち着いたのを確認してから旧調査兵団本部に入つていった。

「ハハハ！お前らしいな」

「別に笑うことじゃないと思うんだけど」

「あいつらが元気にやつてるだけで嬉しいよ」

エレンとフローラは、定期的な面会をしていた。

もちろん、持ち物はもちろん会話内容まで確認されるくらいに制限されていた。

それでもエレンは彼女の土産話に満足していた。

「そういえば、壁外で巨人化実験をするんだが聴いているか？」

「いえ、全く…むしろ巨人化計画なんてあえて訊くのをやめたくらいよ」

「3日後の午前にとrost区の壁外でやるみたいだ」

エレンはかなりフローラを信頼しているのか、機密情報を漏らしていた。彼女にとつても彼にそこまで信頼されるのは嬉しい事である。

「それは分かったけど、リヴァイ兵士長とエルドさんが居る前で発言することなの？」
「あつ…」

監視役の人類最強の男の眼前ではきついものがあつた。

最悪、彼女も第57回壁外調査までこの城に軟禁されかねない事件である。

「よし選べ、自発的に動くか、肩ポンか、暴力で動くかだ」

「自発的に動きますわ」

「ごめん…」

「これでエレンを支えられると思えば良いかもしれませんわね」

観念したフローラは、立ち上がり観念したかのように両腕を上げた。

「あー！居た居た！ねえフローラ!!」

堅苦しい空気を壊しに来たかのようにハンジ分隊長が上機嫌で室内に突撃してきた。

「3日後、壁外でエレンの巨人化計画があるんだけど参加できる？」

「はい、できますけど、それって機密情報じゃないんですか!？」

「そうだよ、でもフローラなら良いでしょ？」

「そこまで知ってしまったら軟禁されるのでは？」

「あー！いいよ調査兵团全員に知らせておくからさ！」

機密情報が機密ではなくなってしまった。

思わずエルドは頭を抱えて、リヴァイも額に手を当ててしまった。

ハンジ・ゾエという人間は、普段は頭脳明晰であり優秀な人材であり団長の右腕である。

だが、巨人になるといような意味で理性が崩壊してしまうのだ。

「えーっと、助かりました！ありがとうございます！ごぎいますー！」

「良く分からないけど喜んでくれて嬉しいよ！」

軟禁を避けられたフローラは恩人であるハンジ分隊長に感謝した。

いつもお世話になっているお札にと羽ペンとスケッチブックをプレゼントしたら喜んでくれた。

というのは建前で何か問題事を押し付けられる前に逃げたかった。

「あれ？フローラは？」

「プレゼントを囿にして素早く逃げていったぞ」

「ええええ！もつと話をしたかったのに！！」

「じゃあエレンが付き合ってよ！」

思わぬ流れ弾にエレンは硬直した。

以前、巨人の実験について尋ねたら酷い目に遭ったのだ。

彼女は実験について熱く語って、真夜中だったのに日が昇るまで話続けたくらいであつた。

「おつとエルド、どこに行く気かい？」

「いえ、用事を思い出して…」

「あと6時間は用事が無いのは確認済みだ！」

「クソ！こうなったらオルオたちも巻き込んでやる!!」

逃げられないのを確認したエルドは犠牲者を増やす為に分隊長を伴って探索した。

「ええっ!?!嘘でしょ!?!」

「マジか!?!」

「用事を思い…」

「逃がさん!」

フローラからプレゼントという名の撒き餌に釣られた『特別作戦班』は1人残らずお縄についた。

掃除器具が増えたものの、彼らはこの後、掃除をすることはできなかつた。

「やつてられん、ここで見張つてるか」

一瞬で物事を判断できるリヴァイのみがハンジの魔の手から逃れることに成功した。

一方、逃げきれたフローラはトロスト区に居た。

半数以上の住民が帰還できたといえ、かつての活気を取り戻すにはまだ時間が掛かりそうである。

もっとも住宅のほとんどで被害が出ており、犠牲者は街の3割。

一カ月前と比べると街の人口は3割弱で、復興どころか廃れていつている。

「見ろよ調査兵だぞ……」

「税金泥棒が……」

「俺たちは飢えているっていうのに……」

少しでも大通りから離れるとこれである。

トロスト区を起点としてシガンシナ区まで4年かけて道を開拓したものの放棄された。

故に調査兵団の拠点なども東区のカラネス区に移転しており、更に街の活気はなくなっていた。

街の住民からすれば、復興に手伝わずに勝手に備品を持ち出していく泥棒のような扱いらになっていった。

「おいその下っ端！そこで何をしている！」

「巡回任務です」

「嘘つけ、それは駐屯兵団の仕事だろうが！」

「…勲章を高く売れる店を探してみました」

「勲章だと!?!」

デイモ・リーブスは苛立っていた。

拠点であるトロスト区が壊滅的ダメージを受けて築き上げてきた市場も財産も人材

も失ったのだ。

更に人類最前線の街という事でいろんな商機があつたのにここ数日は一切なかった。王政は、トロスト区の復興を事実上放棄していた。

「王政は、トロスト区を切り捨てて、街の役割をカラネス区に移行したんだ…」

誰かが言ったこの一言が全てを物語っていた。

辛うじて駐屯兵団の総本部がこのトロスト区に置かれている為、街としてやっていけている状態である。

しかし、情報筋によると、兵団本部もこの街の北部にあるエルミハ区に数年で移転するそうだ。

つまり、内地であるウォール・シーナの突起しているエルミハ区を駐屯兵団の拠点にするのだ。

「ボス、この街はもうおしまいです」

「仕事がなくって…家族を養っていけない…」

「薄めた豆スープすら2日も飲んでない」

「配給されたのが、おが屑だった」

辛うじて残つてくれた部下たちの生活は絶望的であった。

下々から搾取して良い暮らしをしていた商会も搾取する相手が居ないなら滅びるだけであった。

リーブス商会の財産を切り崩して部下たちの家庭を養うのが精一杯だった。

「何、上から目線で見てるんだ!」

「税金と人命を投げ捨てる調査兵団如きが!」

「お前たちのせいでどれだけ搾取されていると思つてるの!!」

リーブス商会の会長として、何か商機がないか街を見回っていると騒動を見つけた。

近寄つてみると、乗馬している女調査兵と揉めていたのだ。

ちようどストレスの発散として彼は現場に急行した。

「勲章をここで売買してると思つてるのか!」

「合法ルートが見つからないのでここに来ましたが迷惑をかけたので撤収させて

頂きます」

話しかけてみると、巡回任務と嘘を付いたので追及すると勲章を売り払うという珍しい奴だった。

窃盗で非合法ルートに売りさばくにしては堂々としてるな：と顔を確認したら衝撃的であった。

巨人を10体以上討伐して金品を荒稼ぎしていた凄腕の兵士がこんな僻地をうろついていたのだ。

「おい、ちよいと待ち！」

「はいなんでしようか？」

「お前、金貨10枚持ってたよな？」

「はい、この子を金貨4枚で譲り受けました」

リーブスは呆れた。

馬など勝手に配備されるものなのにわざわざ無駄に金貨を消費していたのだ。

更に気性が荒いところを見ると外れを掴まされたという所だ。

「お前、馬鹿だろう？」

「馬鹿にされるのはいつものことなので…」

「そのポンコツな馬を売っ払った金で、リーブス商会の品でも買ったらどうだ？」

「…ライリーを馬鹿にしましたの…？」

空気が凍った。

今まで野次を飛ばしていた老人や貧困者が震え始めた。

それどころか、会長の護衛たちすら震えあがって護衛対象の背中に隠れる有様だった。

「済まん…失言をした」

「失言で済むと思っておりますの…？」

そこに居たのは、巨人のうなじを刈り取る狩人であった。

ここでリーブスは自身の失言が彼女の逆鱗に触れたのを感じて後悔した。

「調査兵団の兵士にとって、馬は相棒どころか家族みたいなものです」

「いえ、下手すれば自身の命よりも大切な大切な…伴侶です」

「それをそれを…許さない…許さない…絶対に許さない…！」

「よくも…ライリー…を…馬鹿にしましたわね…！」

フローラは激怒した。

鎧の巨人の次に怒りで身が震えたかもしれない。

震えるほど拳を強く握り締めたせいかな古傷が開いて、血を垂れ流しにしていた。

さきほどまで鼻息を荒くしていたライリーは主人の怒りを感じて縮こまった。

もし、武装していたら巨人のうなじを刈るように裕福そうな壮年の男性の首を刎ねて
いただろう。

「済まないライリー！俺の無知さによって君を馬鹿にってしまった」

「こんなどうしようもない俺をどうか！どうか！許してくれ!!」

デイモ・リーブスは、人生で初めて馬に頭を垂れてお詫びをした。

それは今までの中で一番の謝罪であった。

人見知りで他者に身体を触れられる事を抵抗して嫌がるライリーもこの時ばかりは静かであった。

「ライリーが…許すなら…ここまでにしておきましょう」

青筋を立てたどころか、立体機動訓練の傷が開いて頭から血を流しているフローラ。馬鹿にしてきた壮年男性の本心からの謝罪の言葉を聞いて少しずつ落ち着いていった。

「おい大丈夫か？」

「訓練に失敗した時に付いた古傷が開いただけです」

「怒りで開くとは思いませんでしたけどね」

既にフローラを馬鹿にしていた人々は泣き叫んで逃げ出していた。

ここに居るのは、乗馬した調査兵と、壮年男性と、その護衛3名だけであった。

何もしてないのに勝手に流血していく彼女の姿は、まさに恐怖そのものだったのだ。

「あらよく見たら、リーブス商会のデイモ・リーブス会長さんじゃないですか」
「俺の事を知ってるのか？」

「ええ、このトロスト区の有力者は一通り目を通しています」

「…というよりカラネス区の巨人討伐ショーに観戦にきてましたよね？」

「ああ、商談のついでに、なんとなくな…」

頭に登った血が文字通り頭から垂れてきているせいかわろろは冷静になった。
すると目の前に居る男性がこの街の裏のボスであるリーブス商会の会長であることに気付いた。

「さきほどのご無礼をお詫びいたします」

「いや、そこまで謙虚することはない」

「リーブス会長様は、この勲章を売買できる場所をご存知でしょうか？」

「ああ、非合法ルートだが知ってるぞ…売ってどうする気だ？」

王都ミットラスに兵士の勲章をコレクションにしている大貴族が居る。

兵士の勲章というのは誇りというのもあって中々裏ルートですらやり取りされない

のだ。

故にかなりの高値でやりとりされているのをリーブスは知っていた。

「納税を引いて残った資金で投資する予定です」

「投資だど!?!」

「いつ戦死してもおかしくない兵士に大金を貯め込んでも意味がないので…」

「両親とか家族とかに分けられないのか?」

「既に両親はこの世を去って、わたくしの死を悲しむ家族など居ませんので…」

リーブスは、投資をする兵士など聞いたことがなかった。

よっぽどの高官でなければ、投資をする元金すら貯蓄できない。

憲兵団に20年以上所属してようやくスタートラインに立てるほどである。

「というのは建前でお金を更に稼ぎたいんですけどね」

「まあ、そうだろうな…」

「ところで名前は何て言うんだ?」

「フローラ・エリクシアと申します」

リーブスには、エリクシアという姓に心当たりがあつた。かつてシガンシナ区で儲けていた商人であり親友であつたからだ。

「もしや君の両親は、商人だつたりしないか？」

「分かりませんが多分、違ふと思います」

「そうか」

会長であるデイモ・リーブスには息子が居る。

フレーゲル・リーブスという親の七光りと言わんばかりの未熟者だ。

そんな彼は10年くらい前にエリクシア夫妻の1人娘と仲が良かった。

商会がトロスト区で満足できずシガンシナ区に経済圏を拡大しようとしていた時期であつた。

「パパ？その人はだれー？」

「デイモ・リーブスって言う父さんの友人だよ」
「そうなのー」

栗色の髪をした可愛らしい女の子であった。

「父さんは忙しいからフレージャーと遊んでなさい」
「分かったわ！」

何も知らず天真爛漫な子だった。

「わたしがしょうかいのリーダーでサブなの！」
「リーダーとサブは違うよ〜！」

だがわがままで彼の息子のフレージャーを困らせていた。
その息子とは3年くらいの付き合いしかなかったが…。
わがままな彼ですら振り回すほどの女の子であった。

「デイモおじさん！じこしょうかいするわ！わたしの名はー」

その子の名はー。

「ふろーら・えりくしあ　なのよ！」

目の前の女兵士と同じ名前だった。

そしてなにより彼女の母親と同じ香水をつけていたのだ。

別人？そんな事はあり得ない。

「どうかされましたか？」

「いいや、昔を思い出していただけだ…」

「そうですか…わたくしは昔より現在を考えてますね」

デイモ・リーブスは過去を思い出していた。

まだ事業拡大に燃えていた若き挑戦者だった過去に…。

「ところでどこに投資をする気だい？」

「兵器開発と土木工事ですね…あそこはいくらあっても足りませんから」

彼女の返答を聴いて無知さに呆れると同時に懐かしさを感じていた。

「それも良いが、このトロスト区に投資してみないか？」

「トロスト区に？」

「見たまえ！ここまで投資のしがいがある街などないぞ！」

「すべてがリセットされているんだ、下手な投資よりもやりごたえがあると思わんか？」

「確かに資金の一部で投資してもいいかもしれませんがね」

兵士であつても商人の血は争えないということだ。

「それでは取り分の契約書を作りましょうか？」

「ん？」

「リーブス商会が紹介してくれるのでしょうか？その配分について取り決めをしたいのですわ」

「ああ、そうだな」

巨人で打ちのめされて、死んでいた1人の商人は1人の兵士によって立ち直った。商機を求めめるのではなく作り出す事を思い出したのだ。

「なんだか懐かしく感じるわ…」

「どうかしたのか？」

「いえ、なんでもありません」

フローラは会長と話をしている懐かしさを感じていた。

理由はよく分からない。

ただ、探求すると今の自分が崩壊するような…そんな気がして！

そのような感情は、脳裏の彼方へと飛ばして会長たちの後ろについていった。

23話 エレン巨人化実験計画

エレンの巨人化計画の当日、トロスト区壁外の遺跡にて9名の兵士が集結していた。今回の計画では、かなりの困難を伴うので、少数精鋭によってエレンの巨人化実験を行うのだ。

…というのは、建前で本音は王政にバレない様にトレーニングする為である。

参加メンバーは、調査兵特別作戦班、通称リヴァイ班の5名及びエレン。

第四分隊からはハンジ分隊長と副官のモブリット。

そしてエレンの体調管理及びメンタルケアも含む支援兵としてフローラ。

エレンからすれば、1人でも自分を信頼してくれる人物が居るだけで安心できた。

「よし、これからエレンに向けて巨人の誘導を行うー！」

「エレン、準備はいいか？」

「はい、問題ありませんー！」

巨人化実験自体は、壁内で何度も行われたものの成功しなかった。

ハンジ分隊長は、過去のデータから分析した結果、とある仮説を立てた！
戦場で巨人化したのを着目した結果、本実験が行われる事となったのだ。

「エレン、私たちは巨人戦闘のプロだけど、それでも君を守り切ることとはできないかもしれない」

「君の命を守れるのは君しか居ないんだよ、それをしつかり心に刻んでくれ」
「分かりました、やってみせます」

いつもと違って真面目になったハンジ分隊長の話に彼は緊張していた。

この中で一番、巨人との戦闘に不慣れであり立体機動も経験不足のせいで劣っているからだ。

「大丈夫よエレン、わたくしは死んでもエレンを守って見せるってミカサと約束したから」

「最悪、フローラという世界一美味しいお肉で囿になってみせるから安心して…」

「お前…」

「なんてね！死ぬためにここに来たんじゃないわ！頑張つてねエレン！」

「ああ、今度こそ成功して見せる」

会話して落ち着きを取り戻したエレンは覚悟を決めた。

ここに居る全員が覚悟を決めていたのだ。

最後に笑ってみせたフローラの顔を見た彼は、腹を括る！

「よし、私たちも配置に付こう！」

「分かりましたわー！」

本作戦の流れは以下の通りである。

まず、リヴァイ班が囷になり各方面から巨人をおびき寄せる。

その中で奇行種が釣られてきた場合は討伐する。

そして巨人がエレンを目視できる距離になった時、1体の巨人を残して討伐をする。

危機が迫った彼が自傷行為を行って巨人となり、回避行動または攻撃態勢に移行する。

「しかし、巨人化したら正気を保っていられるのでしょうか？」

「モブリット、エレンを信じようじゃないか！」

「アルミンが言うには、うなじに刺激を与えると正気に戻ったそうですよ」
「なるほど、うなじに居るエレンを刺激してやればいいのか」

問題は、エレンが正気を保っていられるかという事。

駐屯兵团第一師団の精鋭班のリコ班長の報告書には、エレンは暴走していたという記されている。

巨人形態では3回に渡って人に攻撃をしたという記述で、フローラ以外の全員が警戒していた。

ただ、対処法が今さっき判明したので、少なくともハンジはなんとかなると踏んだ。

「巨人がこっちに向かってきます!!」

「さすがリヴァイ班の皆さんは、仕事が早いね！」

まず先行したオルオ班の2名が巨人を3体引き連れてきた。

そしてリヴァイ班も巨人を5体引き連れて目標場所に向かって進撃している。

「よし！オルオ班の一番小さい巨人を残して、あとは討伐だ!!」

「モブリットはオルオ班に向けて信煙弾を撃って合図を！私たちは急いでオルオ班を援護する」

「了解しました！」

フローラ・エリクシアは、覚悟を決めて愛馬のライリーに乗馬してオルオ班に向かっていった。

最大の懸念であったライリーは巨人を恐れておらず安心してシュツルムメツサーIIを鞘から抜いた！

「グリズリー班長たちの改良品、ここで使わせてもらいます」

彼女は、シュツルムIIシリーズという以前の装備品の改良型を身に着けていた。

巨人討伐ショーで入手した金貨と戦闘データを技術4班に提出して改良してもらったのだ。

グリズリー班長曰く「ようやく技術班らしい事をする事ができる」と自信満々に取り組んだ代物である。

量産化を見据えた試作品の設計を全て見直して、ギアから外観のフレームの材質まで変更した。

その結果、重量を変更せずにアンカーの射程範囲以外を改善した代物になった。

「ハンジ分隊長！もういいですか!？」

「よし、オルオ班はリヴァイ班と合流して付近の警戒に当たれ!」

「了解!」

馬を翔けるオルオとエルドは、リヴァイ班との合流を見据えて前だけ見て全力疾走した!

まるで第四分隊に後始末を頼んだかのように。

「お前たちの相手はー! 私たちだよ! いやっほいいいいいい!!」

「分隊長! 先行し過ぎです!」

「覚悟なさい!」

「あんたも出過ぎだああ!?!」

フローラは、鞍上から操作装置のトリガーを引いてアンカーを射出した！
迷わず立体機動に移って驚くモブリット副長の声を背後に巨人へと向かっていった。
ハンジは、一番後方に居た巨人の左膝裏を斬り付けてバランスを崩させて倒れた。
その隙を見逃さずにうなじを刈り取ると、別の巨人に後頭部にアンカーを射出した。
勢いよく突き刺さったアンカーを回収するようにワイヤーを高速に巻き取る。

「死になさい！」

ついでにフローラは、ガス噴出をして身体を時計回りに回転させてうなじを勢いよく刈り取った。

巨人の前に飛び出した彼女は、ある程度の高さには達すれば振り子の様に後方に落ちていくだろう。

もちろん、そんな事など想定済みだ。

彼女は、空が真下にある事を確認し、アンカーを外し回収を行ない何度も身体を後転させた。

再度位置エネルギーに基づいて、後方に居る前屈みで倒れ込む巨人と激突する未来。
それは回転した後方に空気が引き摺れた分、揚力が発生して前進したおかげで回避で

きた。

「本当に無茶な戦い事をしてるな…あの子は」

前屈みになって倒れ込む巨人よりも前に飛び出せた彼女は、近くにあった木にアンカーを射出して無事に離脱できた。

それを見て、ハンジ分隊長以上の死に急ぎの女兵士に呆れているモブリットであった。

ちなみにトロスト区攻防戦で、戦死した兵士たちの大半は、巨人を攻撃する際に身体回転を行なっていなかった。

投球で例えると、ボールにスピンをかける技能が無い為、変化球ができずに決まった軌道しか投げられないのだ。

逆に言えば、回転を理解すればある程度、空中における方向転換や、落下地点や攻撃の角度を変えられる事ができる。

故に、調査兵団に入隊した兵士は、立体機動に肉体の回転を加える動きの訓練をさせられるのだ。

もちろん、フローラは独学であるにもかかわらずパスできた分、空き時間があつた。

「見た見たモブリット!? あの子凄い動きしたよ!」

「ええ、本当にどつかで事故りそうで見たられませんよ!」

「あの動きも調査兵団の訓練内容に追加しようか!」

「いやいやマジでやめてください! 冗談抜きで死人が出ますよ!」

思わず、エレンに向かっていった巨人の事を忘れて盛り上がる2人。

一方、フローラはリヴァイ兵士長の動きを観察していた。

立体起動訓練で無理をして何十回も医務室に搬送された分、空間認識能力を培ったのだ。

しかし、そんな彼女でも兵士長の動きが信じられなかった。

回転する刃物が巨人のうなじだけを狙って刈り取る動きは、彼女目線から見ても化物の動きだったのだ。

「兵士長の動きは…真似できないわね…」

フローラは回転斬りのコツは見抜いたが、兵士長の動きを完全に真似するのは不可能

だと諦めた。

自分が空間把握能力に優れていて、どの動きをすればどう動くか理解しているのは自認している。

それでも、兵士長の動きは無理だと判定した。

3次元の動き、ガス噴出、回転、腕力、動体視力、空気抵抗、重力、経験、姿勢、重心、空間把握。

そこまでなら真似できるのに低身長、骨格、平衡感覚、生まれもった鬼才の勘まであるのだ。

彼の動きに感心をしつつ肉体の負担を和らげる姿勢を新たに発見して笑みを浮かべた。

「そういえばエレンは？」

「あつ…」

ハンジ分隊長の一言で現実に戻った。

「なんでだよ…」

エレンは自傷しても巨人になれずに呆然としていた。

目の前に迫ってくる巨人が居るのに自分の情けなさに失望した。

「あの時はできたのに…」

「おい糞ガキ!! さっさと巨人化するか、回避しろ!!」

上官であるリヴァイの警告で慌てて立体起動で巨人を回避した。
噛みついた右手首から血が滴れ落ちて地面に飛び散っていった。

「なんで再生しないんだ…」

彼はかつて、脚と腕を消失したことがあった。

しかし、巨人化の影響か肉体が元通り再生できることは知っていた。

つまり再生できないのは、人間の肉体のままであるということだ。

「オレは…オレは!!」

巨人の攻撃を遺跡を利用して回避するものの本来の目的が達成できなかった。
この場に居る全員が自分に期待しているのだ。

全員が課せられた任務を達成したのに自分だけ達成できていない。
その事実は彼の心を絶望に染めるのに時間は掛からなかった。

「おいまだか!?!」

「エレン! 早く巨人化しろ!」

「俺たちは、お前の為にここに来たんだぞ!?!」

「壁外調査まで2週間切ってるのよ!?!」

リヴァイ班も中々巨人化しないエレンに痺れを切らして急かし始めた。
それが更に彼の心を傷付けた。

「できません」

「やってみます」

「分かりました」

「成功させてみせます」

どれだけ皆の期待を背負って返事をしてきたのだろう。

どれだけ皆の期待を裏切ってきたのだろう。

どれだけ無能な自分のせいで人命を失ってきたのだろう。

どれだけ失敗のせいで時間を喪失してきたのだろう。

「オレはー！オレはあああああ!!」

ついに追い詰められて8 m級の巨人にエレンは驚掴みされてしまった。
持ち上げられる間にも何度も手を噛んだが効果は無かった。

「しまった!!」

「エレン!!」

「間に合わねえ…」

リヴァイ班も第4分隊も巨人の興味を惹かないように遠くに布陣していたのが裏目に出た。

一番早く反応したリヴァイですら、うなじを斬る前にエレンが喰われる状況だった。

「ああああ!!なんでだああああ!」

エレンは絶望して泣き叫んだ!!

「エレンを!!放しなさいいい!!」

彼の頭が口内に入る瞬間、フローラは回転斬りをして巨人の手首を両断した。衝撃で巨人の唇に激突した彼は何が起こったのか把握できずに落下していった。そんな彼をフローラは間一髪、抱き締めて受け止めながら回避行動を取った。

「くそが…危なかった…」

巨人は衝撃のショックで隙ができて放心したかのように8秒ほど硬直していた。その隙が命取りとなり、リヴァイの回転斬りの餌食となった。

「あ？あつ？えつ？」

「エレン、大丈夫？」

エレンが気が付いた時には、地面に寝っ転がっており心配そうにしているフローラの顔が見えた。

「もう良いだろう糞眼鏡！実験は中止だ！」

「ええー！エレンはまだ巨人化できてないのにー!？」

「よく見ろ、自分で噛んだ手首の傷が塞がってねえ…つまり人間形態のままってことだ」「じゃあ、これ以上やっても無駄だな！まあ、俺様は無理だと分かっていたけどよお！」「何を偉そうに！知ったかする男ほど、無様な姿はないわ！」

「ペトラ…お前、本当に見る目がないな？俺の雄姿をじっくり見て目を慣らすんだな！」

エレンは自分の情けなさに次々から涙が零れて、呼吸が荒くなってしまうた。

周りの反応は、巨人化できるとは期待していないかのように失望した者は居なかった。

人類の希望と讃えておきながら、現状を変える事を望んでいないように…。

自分が大勢の心臓を捧げる価値などないと、どんどん思いが汲みあがって来ていた。

「おかしいね、エレンが確実に命の危機を感じられるようにセッティングしたのに…」

「エレンの自身の気持ちの問題じゃないでしょうか？」

「どういう事？」

「心のどこかしら、リヴァイ班の皆様を守られる安心感があり決死の覚悟には至らなかったと…」

「そうかもしれない…いや、私の仮説が間違っている可能性があるね」

ハンジ隊長とフローラの会話で更に自分の無力さに泣いてしまったエレン。

フローラからしても見てられず、彼の涙をハンカチで拭き始めてなんとか落ち着かせようとした。

「オレは…どうしようもない…みんなが頑張ってくれているのに…オレはあ!!」

「とりあえず撤収作業に移ろうか！私とモブリットは実験結果をまとめておくよ」

「エレンはここで少し休ませて：フローラは彼の手当てをしてあげてくれ」

「了解しましたわ！」

テキパキと指示をしていくハンジ分隊長の指示を受けてフローラは持ち込んだカバンを手に取った。

そこから消毒薬と包帯など、止血に使う道具一式を取り出してエレンの元へ駆け出した。

「やっぱ、オレは処分された方が人類の為かもしれない」

「そんな事ないわよ！エレンには無限の可能性があるのよ！」

「これで8回目の失敗だ、もう誰も期待してない：」

既に心が折れた彼を見て、どう励ますか迷うところである。

同情すれば逆ギレをされるし、優しく励ましても更にダメージを与えるだけだ。

それどころか、超大型巨人に突撃していった体験ですら精神を締め付ける拘束具になっ

「仕方ないわよ…今までのエレンは鳥籠に居たんだから」

「意味が分からん」

「エレン、鳥籠で生まれた鳥が大空に向かって飛べると思うの？」

「無理だ」

「エレンはその状態よ…自由を求めていたけどいざ自由になると上手く飛べない鳥なのよー」

彼は自由に憧れていたのを思い出してみるとかく自由を意識させた。

人類を守る壁を鳥籠と評して、そこに居る人類を鳥としていた彼の言葉を思い出したのだ。

「ほら、ここは壁外、エレンは鳥籠から出された鳥。もう少し慣らさないといけないの」

「そうか…」

「自由になった鳥は、自由過ぎて怖くなって鳥籠に戻ろうとしてるわ…エレンあなたの事よ」

「自由…」

「時間はまだあるわ！その間に自由について考えればいいじゃない」

フローラの言葉を聞いてエレンは思い出した。

『自由』という単語が心に響いて脳裏から離れなかった。

自由を考えると不思議と力が湧き上がってくる気がする。

この右手で大空を掴みたい！

鼓動が早くなり体内が燃え滾る炎が外に出ようとする感覚がした！

「とにかく手当をするから腕を出して…ああ、こんなに怪我しちゃって」

フローラは傷の深さを探る為に軽く傷口に触れた。

その瞬間、辺りに閃光が迸って爆音と共に目の前が真っ白になった。

「きゃあああああがあがつ!!」

突然、巨人化したエレンより放たれた衝撃波でフローラは地面に叩き付けられた。

エレンの右手だけが巨人化して肉塊が付着した肋骨の部位となっていた。

「なんで…今頃!?!」

エレンは困惑した。

なぜ今になって巨人化したのか分からなかった。

「落ち着け!」

「違います…兵長これは…!」

リヴァイ兵士長の声を聴いて思わず振り向いた。

そこにはリヴァイ班の面々が抜剣して身構えていた!

「何故許可なくやった!?! 答えろ!」

「どういうつもりだ!?!」

「その腕を少しでも動かして見ろ! その瞬間、首を飛ばしてやるぞ!!」

「兵長下がってください!」

「落ち着けお前ら!! 俺の勘がよせて言っている!」

既に全員がパニック状態であった。

リヴァイですら理性ではなく勘で班員たちを止めている時点で察しが付くだろう。

「エレン！証明しろ！人類の敵じゃないってことを！」

「動くな！大人しろ！」

「兵長！危険です!!」

「答えろ!!」

エレンはどうすればいいのか分からなくなっていた。

どうすれば、この状況を打開できるのかと！

「酷いわ…エレン」

「フローラ！大丈夫か!?!」

気力で復帰したフローラはゆっくりと彼に近づいて抱き締めた。

まるで盾になるかのように庇っていた。

「これで…あなたを守る…」

「おい！しっかりしろ!!」

飛び掛かろうとしたリヴァイ班の面々も彼女が盾になったせいで身動きが取れなくなった。

そして、時間が経過していくうちに少しずつ興奮が薄れていった。

「うひょおおおおお！巨人だああああ!!」

1名を除いて。

「そのお！腕え！触っていいいい!!?触るうだけだからあああ！」

音と衝撃で何事かと駆けつけてきたハンジ・ゾエはエレンを見て興奮した！

奇声をあげながらモブリットを引き離して部分的に巨人化した肉体に突撃した！

「うおおおおお！というかあんた邪魔ああ!!」

巨人の肌に触ろうとしたが、エレンにしがみ付いているフローラが邪魔であった。なので、力づく掴んで投げ飛ばした。

既に瀕死だった『盾』は受け身をとることができず地面に叩き付けられた！

「あ…ああぐあ!!」

「『フローラ!!』」

「熱い熱い熱い！めっちゃ熱ううううう！皮膚じゃないとおお！すつげえ熱い熱い！」

「分隊長、いくら何でも酷過ぎます！」

リヴァイ班は、動かなくなったフローラを見て慌てて介抱しに駆け出した！
そんな事などお構いなしに肋骨に触れた瞬間、ハンジは熱さで転げ回った、

「ねえ！エレンは熱くないの!?!右手の繋ぎ目はどうなってるの!?!」

「そうだ…！これを抜けば…」

皮肉にも当事者が置いてけぼりにされたおかげで冷静になれたエレンは右手を引き抜こうとした。

左手で掴んで身体を外側に倒すようした瞬間、右手が抜けて巨人体から転げ落ちた！

「うわああああ！早過ぎるよおおお!?まだ調べきれてないのにいいいー!」

エレンという本体から切り離された巨人体は、蒸気を噴き出して蒸発していった。

「はあはあ…」

「気分はどうだ?」

「兵長、気分は最悪です」

「だろうな」

兵長に話しかけてようやく落ち着きを取り戻したエレンはゆっくりと息を整えた。

「分かっていました、ああやって敵意を向けられるまで考えていませんでした」

「自分があそこまで信用されていないって事に」
「だから、選んだ」

リヴァイは、部下達の行動に満足していた。

生きて帰ってくるのが一人前の調査兵と言われている。

選抜した兵士4名は、その地獄の中で何度も生き延びて成果をあげたのだ。
だからこそ、非常事態に対処できて即決断できる者たちを編成した。

「俺は今まで間違った選択肢を選んできたが…後悔はしていない」

「…そうですか」

「お前も後悔しないようにしっかりと決断できる男になれ」

「…はい！」

リヴァイは激戦を生き延びてきた人類最強の兵士と評される。

故に多くの兵士達を看取ってきた。

自分の選択ミスで死なせた者も居れば自分を庇って死んだ者もいる。

それでもそのおかげで今があり、生きているのだ。

これからもずっと悔いのない選択肢を選んでいくだろう。

「なんで巨人化したんだ!？」

「分かりませんが…フローラが手当しに行った時に発生した感じですよ!」

「おおっ!じゃあフローラに事情聴取すれば巨人化のメカニズムを発見できるかもね!」

リヴァイ班に聴き取り調査したハンジは、フローラが鍵を握っていると分かった。

さすが自分が選んだ部下!

ようやく巨人の謎を解明できると!

興奮が止まらずに、歩き回ってしまふほど正気を失っていた。

「フローラ!!…死んでる!？」

「分隊長!あなたが投げ飛ばしたせいですよ!」

いつきに巨人に対する熱意が吹っ飛んだ。

愛する部下が全身が血塗れで虫の息であったからだ。

そうなった理由は副官のモブリットが伝えたものの、耳に入らなかった。

「ああ！フローラ！！起きろ！！起きてくれえええ！！」

「やめてください！マジで死にますよ!?!」

「総員！この糞、ゴーグルをとめろ!!」

慌てたハンジは、意識が朦朧としている殉職間近の女兵士の肩を大きく揺さぶった。

哀れなフローラは、自分を指名してくれた上官に止めを刺された。

享年、多分15歳、記憶が消失しているので5歳くらいの短い人生であった。

合掌。

「ぶはっ!!ああああ!なんでこんな目に遭うのおお!!」

あまりにも散々な目に遭った怒りでフローラは息を吹き返した。

「巨人だ！4体!!こちらに向かって来ています!」

「しようがないね…こいつらをやっつけたら撤退するよ!」

ハンジは口惜しいように呟いたが、覚醒したフローラが瞬く間に巨人4体を葬つたのを見て黙り込んだ。

リヴァイですらその様子を唾然として見届けるしかなかった。

そして撤退する間、誰も口を開くことはなく無事に誰一人も欠けずに壁内に帰還できた。

「じゃあ、そういうことで！上に報告してくるから！」

「待ちなさいいいいい！！」

「ひええええええええ！！」

旧調査兵団本部に帰還した瞬間、ハンジは逃げるようにエルヴィン団長に報告しに向かった。

その背後に鬼の形相をした女兵士と主人の仇を討たんと言わんばかりに鼻息をあげている馬！

彼女達の追いかけてこは、エルヴィン団長が仲介するまで続いた。

24話 壁外調査に向けての最終調整

第57回壁外調査まで後4日まで迫った頃。

エレン・イエーガーは、ようやく同期たちと再会できた。

【長距離索敵陣形】の大規模な演習の際にリヴァイ班から許可をもらったおかげだった。

「エレン、無事だった!? 酷い事されなかった!?!」

「ね…ねーよ! この通りピンピンしてるぞ!」

「ねえフローラ? 本当に何もなかったの?」

ミカサはエレンの反応から何かを隠しているのを感じ取り、更に不安になってしまった。

「ここならあの【糞チビ】の監視が緩いので本音を訊き出せると思い、フローラに現状を訊いた。」

調査手帳に索敵陣形の訓練時の感想を記録していたフローラは急なフリに戸惑った。

「えーっと、軟禁された場所の大掃除とか訓練とかしていたわよ」

「本当に？危ない事はなかったの？」

「…壁外で、巨人化しようとした時に喰われそうになったり、ハンジさんに無理やり脱がされたり…」

「やっぱり…！」

「おい！心配させる事を言わないでくれ!!」

「まだあるの…？」

小声で教えてくれた相棒に感謝しつつ絶対に彼を守らないといけなないとミカサは誓った！

「あのチビを筆頭に…いつか私が然るべき処置を」と呟き始めた彼女にエレンは慌てた。

「エレン！」

「お、お前ら！元気だったか！」

「お前も相変わらず元気そうでよかったぜ」

「コニー、サシャ、ライナー、ベルトルト、アルミン、クリスタ、といった顔馴染みの

同期たちと再会できて安心した。

トロスト門で確認していたものの本当にコニーとサシャが調査兵団に入隊したのは驚いたが。

「…つて事は！ジャンとアニとマルコは、憲兵団に入団したのか」

「マルコは死んだ…」

「ジャン！まさかお前も!?…待て！マルコが死んだのか!？」

「ああ、トロスト区奪還作戦中に戦死したみたいだ、劇的に死ぬって訳にはいかねえらしい…」

最も意外な男が調査兵になっているのも驚いたが、更に衝撃的事実が告げられた。

あの優しくてみんなの事を考えてくれたマルコが死んだ。

それは、数日前の2回目の壁外での巨人化計画で戦死した兵士で曇っていた心を更に曇らせた。

こんなどうしようもない自分のせいで、死人が出たのが発覚したからだ。

「なあ、死に急ぎ野郎！巨人化した時にミカサを殺そうとしたらしいな！」

「…そうだ、巨人になった時に殺そうとしたらしい…」

「違う！私は蠅を叩こうとして…」

「ミカサ、蠅を叩こうとして頬にそんな傷ができるわけないだろう…」

「済まない…オレは本当にどうしようもない男だ」

ざわつく同期たち。

エレンが巨人化してトロスト区の壁の穴を塞いだとしか知らず、ミカサに襲い掛かったのは初耳だったからだ。

巨人化したら正気を失って暴走するとは誰も予想していなかったことである。

それだけエレン関連の情報は、機密情報だったのである。

「らしい…って事は自我がなかったのか？」

「だから調査兵団の精鋭たちに軟禁されて、巨人化の訓練をしている最中だ」

「つまり巨人の力とやらは掌握できてないって事か、ホント最悪な気分だ」

「ごめん…」

普段喧嘩してきたジャンだからこそ、エレンは申し訳なさそうに頭を下げる。

同期たちもなんて声をかけていいのか分からず、ただ時間が無情にも過ぎていくだけであった。

「こいつのせいで、また死人がでるんだろうな、あーやれやれだぜ！」

「ジャン、それは言い過ぎじゃないですか？」

「ああん？サシヤ、俺たちはこいつの為に命に代えても守るんだぞ？」

「だからこそ確認しておきたいんだ！こいつが俺たちの命、それぞれ見合うかどうか！」

全員が理解していた。

4日後にある第57回壁外調査で死人が出ると！

そしてエレン・イエーガーの頑張り次第で調査兵団、いや人類の未来がかかっていると！

だからこそジャンは彼に自覚させた。

お前は本当に俺たちが守る価値があるかという事を！

「だから…エレン…お前…本当に頼むぞ…」

「あ、ああ！」

珍しくジャンに諭されたエレンは必ず壁外調査を成功させると誓った。

作戦自体は、シガンシナに向けて進軍する為の演習ではあるがそれでも誓った。

皆の心臓が捧げられるほどの価値のある男になると！

その様子をフローラは一言一句、調査日誌に記録していた。

ついでに黒鉛で、ジャンとエレンの顔を描いて挿絵にした。

「フローラ！フローラは居るか!?!」

「あらリーネさん、何かありましたか?」

「リーブス商会の人から手紙を預かっている!」

「…確かに受け取りました」

茶髪のポニーテールが目印のリーネ・ハウズドルフから手紙を受け取ってさっそく拝見した。

「何を読んでいるの?」

「…ミーナ、横から覗き込むなんて乙女がやるべき仕草じゃないわよ」

「何を讀んでるの？」

「知り合いから招集されちゃってどうしようかなーって」

「ここ最近、親友の様子がおかしいと感じているミーナ・カロライナは横から手紙を覗き込んだ。

ところが簡潔な文章しか書いておらず、内容が全く分からなかった。

『フイージビリティ・スタデイの準備が整いましたので手紙をお受け取りされた日に例の試作品を持参し、午後5時にお会いしましょう』

たった一文しか書かれておらず差出人すら書かれていなかった。

明らかに暗号文であり、親友を縛り付けているのは間違いないだろう。

「何を讀んでるの？」

「これからの未来を…」

「フローラ、おかしいよ」

「昔からみんなに言われているわね」

ミーナは許せなかった。

親友のトーマスは戦死して、アニは憲兵団に所属して離れ離れになってしまった。それは仕方がない事だと理解している。

ところがフローラは自発的に自分の元を離れようとしている。

いつも励まし合った親友が遠い存在になっていくのが、手に届かなくなるのが嫌だった！

「…何か言いたそうね？」

「いじわる！」

「ミーナだけにこっそり教えるけどこれは新型の立体起動装置の話なの」

「どういう事!？」

「こっそり新型のテストをやつて、その報告会があるのよ」

泣きそうになっているミーナの頭を撫でながらフローラは優しく語り掛けた。

機密事項であったが、それ以上に親友が病んでいくのを見てられなかったのだ。

「じゃあ、その立体機動装置も？」

「似てるけど、これは自分専用の装備ね…癖があり過ぎて量産は無理よ」

事情を知る女は親友の問いに笑って答えてみせた。

フローラは、カラネス区で巨人を14体討伐して馬を買う資金を調達した。

行政トップの大貴族を筆頭に富豪層を掻き集めてパフォーマンスをやった結果、憲兵に目を付けられた。

それは当然であるが、自身以上に立体機動装置に興味をもたれてしまった。

仕方なく彼女は予備のシュツルムシリーズの一式と設計図を憲兵本部に提出した。

「通常の装備品と比べて軽い」

「動きやすい」

憲兵たちは、貴族を警護する傍らフローラの動きを観察し装備品に興味をもったようである。

そして実際に装着すると新兵からベテラン兵士まで高評価となった。

それどころか、何故か試作品にも拘わらず王政府によって生産許可が下りた。

慌てたのは、装備を開発した駐屯兵団第一師団の工兵部技巧科の技術4班とフロラである。

「1年以内に量産するなんて!」

「設計の品質マネジメントすら整っていないぞ!!」

「あの馬鹿政府!何を考えていやがる!」

「というか初期流動管理をすつ飛ばしている時点で確信犯だろう!」

半年以内に量産体制を確立し、3年以内に憲兵の装備がシュツルム一式に統一される事となった。

一見すると技術発展を意図的に妨害してきた王政府が珍しく譲歩したように見える。

実際は、王政府によって仕組まれた破滅に向かって進撃する計画であった。

「香水と衣装だけが一流な糞共は、よっほど俺達を監獄にぶち込みたいらしいな」

グリズリー班長の愚痴が全てを物語っていた。

要するに絶対に失敗する計画であり、ほくそ笑んでいる貴族たちの姿が容易に想像できるだろう。

調達、輸送、装備の生産コスト、品質、安全性、動作試験など思考する時間すらない。しかもシユツルムシリーズは、正式採用されている装備品と規格が違う。つまり装備の互換性がないために今までの設計が役に立たないのだ。

「こうなったらわたくしが持っているコネと人脈を駆使してなんとかするしか……」
「新兵の嬢ちゃんに何ができるって言うんだよ……」

呆れたグリズリー班長の言葉にもめげずに彼女はピクシス司令に協力要請をした。事情を知ったピクシスは、参謀のグスタフを派遣すると共に友人のザックレーに連絡をした。

ザックレー総統は、ウォール・ローゼの工業都市の区長及び工場長を緊急招集を発令した。

更に3つの兵団を統べる【総統局】から優秀な人材を派遣した。

「こういう苦難な状況下だからこそ、商機がある……そう思いませんか？」

「机上の空論だ、最初から破綻している計画に商機はない！」

「やはりお気づきになれましたか」

「…まあよくもこんな巨大なプロジェクトを引つ張ってきたな」

「絶対に破綻するのはご理解いただいたと思います」

「じゃあ、なんでリープス商會に協力を要請したんだ!？」

リープス會長は、エリクシア夫妻の忘れ形見が呑気にお茶を飲んでいるのを見て呆れた。

目隠しをした5万人の國民を壁外に365日徒歩で進軍させるような案件を引つ張ってきたからだ。

調査兵団は、人命と税金をドブに捨てる無能集團と揶揄されるなら、これは死刑執行のサイン待ちの書類だ。

「商會が持つ人脈と商業ルート、特に各都市にある「商人ギルド」との縁が欲しいからです」

「なるほど、嬢ちゃんは我々にただで働かせようって魂胆か？」

「このプロジェクト自体は、リープス商會が甘い汁を啜る所はありませんから…」

「つまり、それ以外にあると？」

たかが調査兵団の新兵と駆け引きをしている会長は、自身でも何をやっているのかわからなくなっていた。

ただ、彼女が持ち込んできた書類を見れば、何を手札にしているのかは想像がついた。小切手、フリッツ王の側近であり全商會を束ねるメテオール伯爵の直筆サイン入りの計画書、総統局の刻印入り封筒。

そこから導けるのは…。

「なるほど、リーブス商會には王政府の首脳陣や貴族との縁を作ってくれるのか」

「お察しが早くて助かります…商會が武力をもつなどと憲兵が黙っていませんので」

リーブス会長の懸念の通り、フローラは新立体機動装置の計画が失敗するのは察していた。

そこで計画を隠れ蓑にして別の手を打とうとした。

王政府に嵌められたなら、王政府の支援母体である有力貴族を味方に付けようとしたのだ。

当然、甘い汁がないと寄って来ない害虫なので相応の餌を用意することにした。

「つまり軍需産業という餌に釣られた商会と投資家を締め上げる貴族を狙い撃ちにする
と？」

「ええ所詮、兵団上層部しか知らない機密ですので、これほどの計画が失敗するとは夢に
も思わないでしょう」

「そうだな…」

裏事情を知るリーブス商会は、紹介料と王政幹部との関係構築がメインとなる収益で
ある。

支配層の貴族は、群がった蟲を退けて甘い汁だけ吸って失敗したら即座に切り捨てる
だけの事。

失敗するとは思わない商会や個人投資家が出資して経済をまわしていく。
装備品は、ともかく王国の経済が発展するのだから問題ないだろう。

「しかし悪魔だな…総統やピクシス司令には計画を成功させる為に協力要請したのだろ
う？」

「もちろん、成功する為には努力しますが…リスクヘッジとしてこのような手を打っておくのも大切です」

「…この情報を我々が漏らすとは思わなかったのか？」

「あら、このような取引で成り上がってトロスト区の裏のボスになったと思ひまして、わざわざ密会していますのに…」

「何も知らない小娘が…まあいいだろう」

こうして悪魔と悪徳商人はグルとなり自分たち以外を欺く事に合意して契約が成立した。

そして各方面の優秀な人材とその部下によってわずか1週間である程度、装備が制式化された。

これにはグリーズリー班長を筆頭する技術4班は、フローラの人脈にドン引きしたほどである。

「とにかく再設計された立体機動装置の結果を発表する場所に招集されたのよ」

「夜遅くまで訓練所に居たのは、新型のテストをしたのね」

「そういう事!…貴女だけに話した秘密だから絶対に話さないでね?」

「うん、分かってる」

リーブス会長に話した裏事情と自分の装備以外の事はミーナに打ち明けた。

口が堅い事で有名な同期のゴードンほどではないが、嫌われるのを避ける彼女。きつと新立体機動装置が日の目をみるまで口外しないだろう。

逆に言えば、ある日を境に堂々と同期全員に説明する姿も思い浮かべることができ
が。

あえて真面目な顔をしたフローラは、ミーナを連れて兵舎の前まで連れ添った。

「今度は訓練じゃなくて本番だからね?」

「大丈夫、フローラと一緒に最後まで戦えるもの!」

「だから!戦うじゃなくて探索だからね!」

「分かってるわ!」

親友が段々自分の操り人形と化している事にフローラは危惧していた。

トロスト門の肉の誓いと、親友を喰った巨人の恐怖の板挟みになった結果、壊れてしまった。

命の恩人である自分に過度の依存しており、神格化して拝めているようである。

「またお話にしてね？」

「今度はもつと明るい話を考えておくわ」

「うん、トーマスも喜ぶと思うし私も嬉しいから…」

「…そうね」

結局、フローラは彼女をどうすることもできなかった。

自身の目的の為に使い潰すこともできず、だからと言って放置することもできない。

“声”を聴けるおかげで負の感情が分かるからこそ親友という距離感に惑わされていた。

ザックレー総統、ドーク師団長、ピクシス司令といった面々を前に会話していても消えなかった。

「フローラ君は、専用のガスボンベについての意見を訪ねたいのだが良いかね？」

「装備の互換性を踏まえると制式承認済みのポンベを使う方がよろしいと思います」

「うむ、ポンベまで考慮する場合、更にデータをとらなければならぬしな…」

「出力を調整する必要があるが、まあ現状はこのままでいくとするか」

今回は、立体機動装置に装填するガスポンベについての話題であった。

新装備であるシュツルムメッサーという刃は、他の鞘と比べて6割ほどの大きさしかない。

これはシュツルムメッサーという刃の全長が通常の刃と比較して6割しかないからだ。

一式刀身の寸法が70cm、つまり新型は約44cmの鞘でしかない

「だが25cmも後方に飛び出したポンベで飛び回るのは、きついものがあるだろう」

「実際に装備するのは、実戦を行なわぬ憲兵のみ…そこまで気にする必要はないのでは？」

「しかし、重心のズレはよろしくない」

ただ、70cmの鞘に納める用のポンベをそのまま装填していたので剥き出しになっ

ていた。

もちろん専用のポンベは製造していたものの量産コストが未知数の上にガスの残量が大幅に減る。

つまり、せつかくの機動性が売りのシュツルムシリーズの利点を潰してしまう懸念があった。

「フローラ氏の実験データによると通常品のポンベと比較し2割増しほど使い切るのが早くなっております」

「意外と残っているものだな」

「ガスの重量と空気抵抗の減少、そして何よりポンベをぶつける心配がない分、消費量が減っているか?」

「はい閣下の仰る通りです」

「我々もこの身で実験したところ」

フローラからすれば、データならいくらでも提出したのでどうでもよかった。

この先の分野は、技術班と兵站部署、ポンベを量産する職人と話し合っただけで決めた欲しかった。

「そもそもガスの残量など戦い方で変わる物であつて、ここで判断できることではない。

「せいぜい、同じ状況下で全力で噴出して空になるまでの時間を図るしか比較できないのだ。

「うむ！ボンベが各都市に備蓄した時期に互換性を取り除いた鞘を生産するべきだな！」

「よし、動作テストは問題ないとし、新型のボンベの生産を許可する！」

「異論がある者は挙手をしたまえ！」

「…ないのであればここまでとする」

「本日はお忙しいところ、貴重な時間を頂いたいただいた事を心より感謝申し上げます」

新型のガスボンベの動作テストの話からガスの残量にシフトして呆れ果てたフロラ。

思わずメモを書き記してこつそり隣接していたザックレー総統に手渡した。

同じく呆れ果てていた彼はメモを読んですぐに決断をし、そこから先は独壇場で全員を誘導させて無理やり会議を終了させた。

「ところでフローラ君」

「はい！なんでしょうか！」

「今度はもう少しうまくやりたまえ」

「ハッ！今回の経験を踏まえて精進します」

厳格そうな總統からアドアイスを受けてフローラは敬礼をした。

彼はどちらかというと、装備品より説明していた自分の方に興味津々である。

王政や兵団の重臣が集まる会議で唯一の新兵であるという理由だけではなさそうだった。

彼の“声”は『偉くない奴が偉そうに：あとで見てろ』という声であった。

それは会議を掻き回してマウントを取ろうとする貴族に向けたものである。

ただ、長年蓄積して積もった恨みは凄まじい執念と我慢で濃くなっていた。

下手すれば、巨人と交戦する緊張感の方がマシな部類である。

「君のような若い者を見ると情熱に燃えていた自分を思い出すよ」

フローラが総統にメモを渡したのは、彼の感情が高まり過ぎて危機感を覚えたからだ。

立ち去る前に言い残した言葉は、決して過去のものではなく今でも火種が残っている。

だからこそ、爆発する前にメモに集中させて意識を逸らした。

するとザツクレー総統は、一瞬だけ口元を緩めて負の感情が薄れていった。

それはいいのだが、今度は自分が注目されてしまい複雑の気分になった。

総統の後に続いていく来賓を全員見送るまで笑顔は崩さなかったが。

「よお！ちびらずによく頑張ったな！」

「それが乙女にかける言葉ですか？」

「済まん済まん！」

グリズリー班長のやり取りも慣れてきた彼女であるがストレートの下ネタは未だに苦手である。

「さて、本題に入るがいいか？」

「問題ありません」

「シユツルムシリーズとは一線を描す自信作が完成した」

「量産計画で振り回されているのによくできましたね…」

「嬢ちゃんが死なれたら困るからな」

第57回壁外調査に行くのを知っていた技術4班は、量産計画と並行して新装備の開発をしていた。

タイムシフトで24時間フル稼働した結果、ボロボロになっていた。

それでも装置を最大限引き出せる彼女の為であれば、頑張つて乗り越えられたのだ。

「じゃじゃん！どうだ!!」

「赤色以外はシユツルムシリーズと変わってなさそうですけど？」

「中身は別物だから安心してくれ」

寝不足のせいなのか、いつもより動きが怠慢であった。

それでもフローラは彼らの説明をしっかりと聞いていた。

刃はブリッツメツサー

鞘はブリッツシヤイダー

装置はブリッツハーケン

シユツルムが【嵐】を意味する単語であるが今回は【急襲】という単語で統一されていた。

今回の改良点は継戦能力の向上である。

特に鞘の部位は、外観と鞘を納める部位以外は大幅に設計を変更していた。

今回は、なんと内部に細いガスボンベが12本内蔵されている。

さきほどガスの残量が少なくなる欠点を既に解決していたのだ。

コストは高級素材をふんだんに使用している上に最先端の技術を使用したので…。

「ほれ、これが請求書だ」

「金貨6枚…庶民の生涯年収に匹敵する値段ですわね」

「当然、払ってもらうからな」

「もちろん代価は支払います」

装備一式で、庶民の生涯年収に匹敵するほどの値段になってしまった。

その分、ガスの容量を大幅に増加させたにも拘わらず以前と重量を保っている。無駄と言う無駄を省いた技術4班の最高傑作であった。

「これは調査兵が使用している『強化韜・1型』のガスの容量と同じように調整しておいた」

「事前に過剰分のガスの補充が必要になるが……まあそこはしようがないだろう」

「それって専用のボンベでそうなるのですか？」

「おう！だからいつものボンベを装填すると更に継戦能力があるってことだ」

ガスが逆流しないように強化された弁が内臓されており、装填するボンベを切り替えても予備ボンベのガスが残っている場合、そのままガス量が加算される親切設計である。

ちなみに充填の優先は内部ボンベだが、装填された外部のボンベが空になるまで使用されることはない。

「どんな仕組みなんですか？」とツツコミたくなるがブラックボックスなので詳細は不明である。

ボンベの互換性も残したので、これ以上の改良は不可能である事は間違いない。

立体機動装置と短剣もそれぞれ改良してあるが、鞘と比べると地味だった。

「これで一人だけガス切れでリタイヤしなくて済むな」

「ありがとうございます！」

「よし、これだけは約束してくれよ！」

「生還して戦闘データを持ち帰ってくれるって！」

「はい！絶対に生還します！」

フローラは技術4班と約束をして倉庫で別れた。

前と同じように飲み会に誘われたが、同期たちに怒られるので泣く泣く帰路に着いた。

今度やらかせば、壁外調査まで監禁されかねないからだ。

それでもお別れの抱擁をやって兵舎に戻ると、ミーナから「男の匂いがする」と言われた。

一番気にしていた馬の匂いにツツコミがなかったのでおそらく彼女の直感であろう。

彼女の「声」は『男たちに抱擁を強制されたの……？許さない！許さない！』であった。きつと女の勘であり、間違っても嗅覚で判断したのではないだろう。

ミケ分隊長？あれは自分と同じ【特殊能力持ち】だから除外する！

「良く分かったわね…でもお別れの挨拶をただけよ」

「お別れの挨拶？」

無理やり作り笑いをしていた親友を見てフローラは正直に抱擁の理由を話した。

そして本日からミーナと別れる度に抱擁する羽目になる事を現時点では気付けなかった。

25話 リヴァイ班から兵長へのプレゼント

壁外調査が数日に迫ってきている時、調査兵は基本的に長期休暇を取らされる。

それは伝統行事である。

この期間中に調査兵は、家族の元に帰省したり、お世話になった恩人に挨拶をする。壁外調査をする度に3割ほどの兵力を損失するからこそ温情で認められている措置である。

もちろん、それは死者だけではなく腕や脚を欠損した者も含まれているが。

「行つてきます」

「お世話になりました」

「母さん、生んでくれてありがとう」

「でえじよぶだ！どうせすぐ帰つてくる」

「この任務が終わったら俺、結婚するんだ！」

何気ない日常から地獄へ行く彼らは大切な人々の暮らしを再確認して腹を括る儀式

となつてゐる。

調査兵団特別作戦班、通称リヴァイ班も例外ではなかった。

「行かないで……」

「大丈夫だ、短期間の任務だからさ！だから安心して待つててくれ」

故郷に戻つたエルド・ジンは、恋人のドロテア・メビウスに挨拶をしていた。

「兄ちゃん！頑張つて！」

「おみやげ！おみやげ！」

「巨人を倒してきてね！」

「絶対に帰つて来てね！」

「おう！帰つてきたら更に増えた武勇伝を聞かせてやるから！」

大家族の長男であり稼ぎ頭のオルオ・ボザドは兄弟の面倒を見ていた。

「本当に無理をしてないかい？」

「生きていれば再起を図れる…それだけは忘れるなよ…」

「爺ちゃん、母ちゃん大丈夫だ！俺は勇敢な父さんの子だから！」

グンタ・シユルツは引き留めている母と祖父を必死に宥めていた。

『拝啓、お父様。お元気でいらつしやいますか』

『わたしは、あの憧れのリヴァイ兵士長に腕を見込まれて抜擢されました』

『正直、今でも興奮していて、少しでも彼に寄り添いたくて手紙を書かせて頂きました』
『彼の為ならこの身を捧げても良いと誓った…ごめんなさい、まだ生きて幸せになりました
い…です』

『こんな親に迷惑をかけてしまっている娘に育ってしまつて申し訳ありません』

『ただ、壁外調査が終わつたら実家に帰省して元気な姿を見せたいです』

『ペトラ・ラル』

「まつたく、男手一人で育てた父親の気持ち振り回す子に育てたつもりはないんだが
な…」

ペトラの父親、ブルーノ・ラルは娘からの手紙を見て号泣していた。

生意気で我儘だった娘が一人前の兵士になって遠い存在になってしまい彼は涙が止まらなかつた。

とにかく調査兵たちはお世話になった人たちに挨拶をしていた。

両親が無事だったジャンも、ラガコ村に凱旋したコニーも含めて、みんなお世話になった人に挨拶をしていた。

「だからと言って挨拶に来たのは貴様が初めてだぞ！フローラ・エリクシア!!」

特にお世話になった人に挨拶したら怒られたフローラは理不尽に感じていた。

誰もが恐れる鬼教官のキース・シャードイスも内心ではかなり驚いている。

だからこそ、恥ずかしさを打ち消すために久しぶりに怒声で彼女に話しかけていた。

「俺より真っ先に行くべきところがあるのではないのか!？」

「もちろん、真っ先に医務室に向かいましたわ」

「それにしても、冷淡としているな!？」

「元氣な姿を見せたら医師も搬送班もビビって気絶してしまいました!!」

3年間の訓練中に医務室送りをされた回数、合計106回のフロア。これまで7回だったキース・シャーデイスの記録を大きく更新した偉業の持ち主である。

そのせいか、初めて健全な状態で医務室に挨拶しに行ったらお化け扱いされた哀れな女である。

「だったら起こして謝罪してこい!!」

「はい!!すみませんー!!」

慌てて駆け出す彼女の後ろ姿を見てキースは溜息をついて思いに耽っていた。

「何の成果も!!得られませんでした!!」

自分が特別な存在と信じて無駄に部下達を死なせた無能な男。

突撃しか脳がない男。

五体満足で調査兵団から逃げ出した男。

愚かな自分を殺害したくなるほどの過去が溢れてくる。

「進むべき目標があるならその信念は絶対に曲げるな!!」

彼の口癖だったこの言葉。

訓練兵たちは全員、この信念を意識させていた。

だが、教官である自分が信念を曲げて再起不能になったとは彼らは思いもしらないだろう。

キースは、傍観者になりきれない自分を自嘲した。

カルラの息子であるエレン・イエーガーと、不屈精神のフローラ・エリクシア。

彼らの過去を思い出す時だけ彼は人知れず鬼教官の仮面を外すのだ。

「それにしても…」

フローラが公共事業を兼ねて作らせた物。

トロスト区の貧困者たちに2週間分のパンとスープの等価交換で創らせた『訓練用巨人模型』

その数はなんと50体!

なんとも見すばらしい形状であったが、実物の血痕や死体から出た体液が付着している廃材で創られていた。

「これは良い物だ」

彼女がお世話になったキースにプレゼントしたのは、不気味な装飾と色彩で色塗られた巨人の模型だった。

それは、生温い環境に愚痴を溢している訓練兵にはうつつけの教育教材である。

「あーちょうど良い所に！ねえちよつと話を聴いてくれない？」

「はい問題ありません」

恩師に挨拶を終えたフローラは、吸い込まれるように旧調査兵团本部に立ち寄った。するとリヴァイ班の4人が隠れるように集まっているのを発見した。

「いつも兵長にお世話になってるだろう？日頃の感謝の思いを伝えたいと思っ
ていたんだ」

「だが、いざ4人で話し合ってみると中々意見がまとまらなくてな…」

「兵長は皆さまの感謝の一言でかなり喜ばれると思います」

「そうだよなーでも何か形に残しておきたいんだ」

サブリーダーのエルド副班長が頭を掻いて照れながら返答をする。

どうやら、リヴァイ班の4人はリヴァイ兵士長に何かプレゼントをしたいようだ。

「俺はやっぱり班として戦果を挙げる事が一番だと思っうな」

「私はみんなで掃除をするのが良いと思う！屋根や外壁も磨き上げると良いかも！」

「だが4人全員で取り組んでも、本気を出した兵長には遠く及ばないじゃないかな…」

「そうね」

「だよなー」

真面目なグンタは傍から見て分かり易い戦果アップを！

仲間思いなペトラは兵長の趣味の手伝いを！

しかし優秀なりヴァイ班の班員たちより兵士長の方が成果を出してしまうので躊躇ってしまった。

「俺は贈り物をするのが良いと思うがな…」

「オルオさんの仰る通り、贈り物が一番良いのではないでしょうか!」

「新兵の癖に分かつてるじゃないか…やっぱり俺の意見が一番だよな!」

「そうね、プレゼントが一番明確に伝わるわね」

口は悪いが悪い人ではないオルオさんの意見に便乗すると鼻が高くなっていった。

いつもは呆れているペトラであったが、今回は馴染みの男の意見に同意した。

「しかし兵長のことだ!凝った贈り物にしてもそんな暇があったら訓練をしろって言われるんじゃないか?」

「そうだね…贈り物って言うけど何を送ればいいのか分からないし…」

「…って感じで意見がまとまらなくてな?フローラ、君はどう思う?」

「とりあえず全員の場合を出してみて、みんなで決めていくのが一番だと思います」

「そうだな、みんなで少し考えてみるか」

先輩方が何を送るのか気になったフローラは、エレンに挨拶するのを忘れて暫くこの場で待機した。

「オルオ、本気で言ってるの？嘘でしょ…そこまで間抜けだったの…」

「何を言ってるんだペトラ、本気で兵長に役に立つ物だぞ！」

「確かに雑巾は実用性がありますが、すぐに消費されてリサイクルされそうですね」
「言われてみればそうだな…」

オルオ以外の4人は内心で雑巾は無いだろうと実感している。
ただ口に出すと反論してくる為、フローラは遠回しに宥めて却下させた。

「じゃあ、他に代案はあるのか？」

「高級な紅茶が良いと思うの！少なくとも雑巾よりマシよ」

「ふん、やはりその程度か、兵長なら好物より役に立つ物の方が喜ぶに決まっているだろう」

「ねえオルオ、その話し方、いい加減にやめてくれない？」

「おっ！反論できないからって妻でもないのに全否定するのはやめろよ」
「ペトラ、オルオそこまでにしておけ」

夫婦喧嘩のように揉める前にグンタが話の腰を折る。

別に2人でやっているなら構わないが、今回は真面目の話をしているからだ。

「でもストヘス区名産の『上質な紅茶』をフローラがいつも差し入れしてるじゃないか」
「…ああ確かに！これじゃ二番煎じになってしまうわ」

「俺の案で決定だな！」

「はあ？何言ってるのこいつ!？」

「よし、お前達に聞かせてやろう！フローラはリヴァイ班の合計した資産より金持ちだぞ！」

邪険になった2人を見てまとめ役に定評あるエルドは、フローラをスケープゴートにした。

全員の視線を集めてしまい、たじろぐ彼女。

「確かに彼女は自分専用の馬を所有してるけど…」

「お前ら本当に流されるままだな…もらった羽ペンとか手帳とか鍛錬器具をしつかり確認してみる」

「えーつとエルドさん！何を仰っているのですか！」

「こいつ、商会や商人ギルドからもらった寄贈品を横流しにして周囲に配布してるんだ」

「…意味が分からん」

「貧乏人に投資家や商会の人間が寄贈品をもって訪ねてくるわけないだろう！」

「おそらくそういった奴らが群がって投資をお願いするほどの資産を所有してるんだろ
うな」

凶星だった。

勲章を売り払って入手した資金を元にフローラは投資をしている。

それで儲けていくうちに目を付け始めた商人たちから寄贈品を頂くようになってきた。

もちろん、彼女も適当に購入した物を寄贈しているものの部屋が寄贈品で埋め尽くされ始めていた。

なので、同期や先輩たちに使いきれない消耗品や器具などを提供していた。

「ここ最近始めた事なので、まさかバレるとは思わなかった彼女は度肝を抜かれた。」

「エルドさん！エルドさんのプレゼントの意見を訊きたいです！」

「そうだなーオルオと同じように実用性がある物を送りたいな」

「つて事はいつも使用する物にすればいいんじゃないか？」

「グンタ、そう言っても…いや待てよ！ティーカップとかどうだ！」

リヴァイ兵士長は紅茶が好物で、フローラが何度もそれをプレゼントしていた。

エルドは、オルオの実用性とペトラの好みを兼ね備えたティーカップという答えを導き出した。

グンタのいつも使用するという単語で閃いたのだ。

「ティーカップか！良い案だ」

「それならいつも使ってもらえるな」

「兵長ならきつと大切にしてくれるはずよ！」

「それなら兵士長も喜んでくれると思います!!」

「ふん、俺も実は思い浮かんでいたがエルドに譲ってやったよ」

「あんたは少し黙ってて」

全員の意見が一致した。

リヴァイ班のプレゼントは、ティーカップの決定した！

「カップを買うなら良い店を知ってるぞ！今から買いに行かないか？」

「え？でもエレンを放置していいのでしょうか？」

「大丈夫だ、地下室でハンジに捕まって事実上、軟禁状態だから安心していい」
「そつそく買いにいきましょう！」

さつそくりヴァイ班は、ティーカップを買いに行く事にした。

「あのー、なんで袖を引っ張るんですか？」

「俺たちは薄給でなー、自分の家族を養うだけで精一杯なんだ」

「俺なんか大家族を養わないといけないんだ」

「そうだな、自分たちの生活で貯蓄できないしな」

「もちろん、フローラも来るよね？」

この時、フローラは察した。

自分がティーカップを買うべきだと。

お世話になっている方々だし今後の事を踏まえれば悪くない出費ではある。

「分かりました、一緒に行きますわ!」

「そうこなくっちゃ!」

哀れなエレンを置き去りにしてリヴァイ班と金蔓はカップ専門店に向かった。

「これとか可愛くない?」

「それもいいけど、洗うのが大変そうだな」

「やはり兵長には無難のシンプルがいいだろう」

「ちよつと待て!金貨6枚!?!調査兵団の馬一頭買えるじゃないか!」

彼らは、あらゆる品揃えのカップから兵長に合いそうな物を探していた。

グンタが選んだカップは陶器製で保温性に優れている白いカップを手を取った。

シンプルな装飾が施されており、兵長の持ち方にもぴったりの形状をしている。ただし、庶民の生涯年収に匹敵するお値段である。

「値段さえ見なければこれでいいのにね…」

「歴史的価値があるものなんだろうな」

「これにするんですか？」

「ああ、でもこれ…高過ぎないか？」

調査兵団の全団員の貯金を集めても購入できなさそうな値段である。

そもそも新兵にティーカップを買わせるのはパウハラでは？

リヴァイ班の4人は気まずい雰囲気になっていた。

「すみませんー！お会計お願いしますー！」

「はいよ！金貨6枚だ！」

「金貨6枚です！お受け取りください！」

「確かに頂いたぞ！」

一方、彼らの懸念に反してあっさり支払ってみせたフローラ。カップを緩衝材を詰めたしつかりとした箱に詰めてもらった。

ついでにカップの製作者とその陶器の歴史が綴られた紙も梱包されている。

「子供が小遣いで羽ペンを買うノリで買いやがったぞ…」

何気なく庶民の生涯年収を持ち歩いている彼女。

両親も親戚もおらず、みなしごで調査兵団に入団して一カ月経つくらいの兵士のはずである。

「やっぱり金持ちは価値観が違うな…」

「調査兵団の会計係か、物資調達部門の幹部候補生でいいんじゃないかな」

「俺もあやかりたいものだ」

上機嫌のフローラの後ろ姿を見ながら彼らは小さな声で雑談していた。

「おっ？肉を販売してるじゃないか!？」

「どっかの貴族が主催した社交界がキャンセルされたかもな」

「肉ね…もう何年も食べてないわ」

「あーだめだ。ここから離れられん」

匂いに釣られた4人は、肉を見ていた。

お値段は、鋼貨300枚。

一般の4人家族の消費するパンの300日分である。

ここでの一般家庭と言うのは内地に住んでいてそこそこの裕福な暮らしをしている者たちを示す。

「おい税金泥棒共！おまえらの見世物じゃねーぞ！」

「んだとコラア！」

「やめなさいオルオ！」

肉屋の店主からすれば、邪魔なだけである。

「店主さん！このお肉をください」

「あ？てめえらに売る肉は…小切手？」

肉切り包丁を構えて不機嫌そうだった店主は、若い女兵士から小切手を受け取った。王都中央銀行の印、中央商会連盟の印、総統局のザックレー総統の印が捺されていた。専用の小道具で確認すると印が青く発光したので本物である。

「ははは、すみません！冷やかしする輩が絶えないもので…」

「どさくさに紛れて、定期購入のサインを求めるのはちよつと…」

「いえいえ…今後の役に立つと思い、書類だけでもお受け取りください」

「今回は領収書で充分です」

「はあー若いんだからお肉をたくさん食べないと大きくなれないぞ…」

「乙女に向かつて発言することじゃありませんよ」

「あからさまに目の色を変えた店主は、純粹な笑みで虎視眈々と定期契約を促している。

本人もそう簡単に契約できる相手ではないと察したが商売人として見逃すわけにはいかなかった。

一方、購入する際に自分の名でサインしたので定期的に自室に広告が来ると察したフローラ。

巨人戦とは別系統の緊張感溢れる戦闘が2人で繰り広げられていた。

「調査兵団の全団員を3日は養える金額を出しやがった…」

「キャッシュレスとは未来に生きてんな」

「なんかティーカップのインパクトが消えそうだが…」

「大丈夫、兵長はティーカップの方を喜んでくれるわ」

お肉を受け取って謙虚していた4人だったが、すぐに上機嫌で旧調査兵団本部に帰還した。

「分隊長、これ以上の長居は無用です！さっさと帰還しますよ！」

「あーまだ話したかったのに…あれ？フローラたちじゃないか」

「あら、分隊長たちはお帰りになられるんですか？」

「うるさい部下のせいでエレンとの交流を強制的に打ち切られてね」

不機嫌のハンジは愚痴って見せたが、それより抱えているお肉が気になっていた。

「もしかしてこれから焼肉をするの?」

「ええ、早くしないとお肉を痛めちゃうので…」

「分隊長! 早急な任務はごさいませんので、ご馳走になっていきましようよ!」
「モブリット!?! さつきと言っている事が違うよ!?!」

上官に振り回されたモブリットはさつきと帰リたかつた。

ただ目の前で精肉を見せられて帰る馬鹿などいない!

前言を撤回してここでご馳走になる事にした。

「よく考えたら、初回の壁外巨人化計画の参加者9人で焼肉パーティをやっているのか」
「エレン、早く食べないと冷めちゃうわよ」

「ああ…しかし油で煩そうな兵長が率先して肉を焼いているとは…」

「部下想いの方ですからね…焼き加減をチャックしないと気が済まないかもね」

リヴァイ兵士長は、部下から精肉を持ち込まれて困惑したものの率先して肉を焼い

た。

彼も人間なので食欲には勝てなかったし、部下達の喜ぶ顔をみたいのもあったからだ。

もちろん、後片付けと掃除はしっかりやると約束させていた。

彼らはこの時ばかりは、純粹に焼肉を愉しんだ。

「兵長！お渡したいものがあります」

焼肉を食べ終えて満足しているリヴァイ兵長に声を震わせながら箱を差し出して、ペトラ。

選抜した4人とフローラが彼を囲むように直立不動で待機している。

「お前ら、いつの間にそんな物を用意していた？どういう風の吹き回しだ？」

「その…いつも俺たちを信賴してくれている兵長に、感謝の気持ちを伝えたくて…」

「みんなで考えて、贈り物をすることにしたんです！…お気に召しませんでしたか？」

グンタとエルドの話の聴いて彼は思わず俯いてしまった。

孤独で生き抜いてきた彼にとっては誰かにプレゼントされるといふのは中々ないものであった。

そう、彼にも世話してくれた兄貴分が居たので経験自体はあった。

それでも信頼する部下達から差し出されたティーカップを見て湧き上がる感情がある。

「余計な事を考えやがって…」

「いいかお前ら…贈り物なんて考えている暇があつたら訓練でもしとけ」

「いつ死んでもおかしくねえからな…」

「[[[[兵長…]]]]」

「だが、良い物だ。次回の紅茶を飲むときから使わせてもらおうぞ」

「[[[[兵長…]]]]」

兵士長から開幕から否定されて落ち込む5人であったが、すぐに顔を上げた。いつも不機嫌そうに眉をしかめている彼が一瞬だけ微笑んでみせたのだ。

「兵長！一生ついていくつす！絶対にー！死なないように猛特訓するつすよー！」

「オルオ、久しぶりに口調を戻したのね」

「なんだとペトラ！人が…」

「はいはい」

夫婦漫才を始めた2人を見て少しだけ羨ましいなと思うエレンであった。

「なんですかその手は？」

「私にも何か頂戴！」

「分隊長!? 露骨すぎますよ!?!」

感化されたハンジ分隊長はモブリットから何かもらえることを期待している。

彼は更に頭痛の種を増やすのであった。

「ありがとうねフローラ！おかげで計画が旨くいったみたい」

「チツ…確かにお前が居なかつたら今頃、意見がまとまらず壁外調査に行ってたかもしれない」

「オルオの言う通りだ、例を言うぞ」

「またお前に協力を仰ぐかもしれない…その時はよろしく頼むぞ」

リヴァイ班の4人から感謝されたフローラ。

彼女としても微笑ましい光景であるし、いい経験であった。

もちろん、この事を日誌に書いてあるし、購入した陶器と彼ら4人と兵長のイラストも描いた。

ただ一点だけ最後のエルドさんからの言葉が引つ掛かった。

「…それは相談だけでしょうか？」

「それだけだと思うか？」

「いえ、皆様の期待を応えられるように投資をして儲けていきます」

「兵士なんだから巨人を殲滅して凱旋してみせるとか言ってみろよ」

「グンタ、あなたの100倍以上金持ちによくそんな事言えるわね…」

「おっとグンタ君、フローラの好感度がただ下がりだな」

「いやいや！俺はそんなつもりで発言したつもりじゃない!!」

雑談で盛り上がっている4人を見て彼女は冷静になれた。

あと数日で壁外調査に行くことになる。

それは、誰かが死んでもおかしくないという事。

彼らが精鋭中の精鋭だと関わっている内に実感している。

自分より強いと分かっているが、それでも戦死する可能性があるのがこの残酷な世界である。

「壁外調査を終えても全員ここに帰ってこれるでしょうか…」

「おっと…珍しく気弱になってるな！」

「大丈夫だ！俺はお前の100倍強いからよ！安心しろ！」

「…まあいいわ、フローラこそ帰りで道中で夜盗に怪我しないですよ？」

「とんだ命知らずだな、その盗賊は」

「はい、気を付けて帰ります！」

いつも通りに振舞わうリヴァイ班の面々を見て安心したフローラ。

愛馬のライリーに袴って手を振りながら旧調査兵団本部を後にした。

皆の期待を胸にただひたすら前進していった。

「アニ？なんでここに居るの？」

「フローラこそ」

帰り道で盗賊には遭遇しなかったが、憲兵になったアニ・レオンハートと再会した。彼女の管轄はストヘス区と聞いていたがこのトロスト区の北部に居るのは疑問だった。

「任務の帰りにここに寄ってみたんだけど、さすがにこの時間じゃ…」

どうやら任務をこなしてへとへとになって休んでいたようだ。

ただ彼女は何か追い詰められていた。

まるで重圧で押し潰されそうで必死に気力を振り絞って耐えている感じがした。

誰にも相談できない悲惨な気持ちを隠しながら、その場を後にしようとしている。

「ねえ気分転換に対人格闘の手合わせをしてみない？」

「今から？」

「むしろ暗くなつて人が無くなったからこそよ」

「しょうがないね…」

新天地で精神が疲弊していると思ったフローラは、気分転換にと対人格闘の手合わせを申し出た。

それに対しアニは態度では嫌々であったが内心では喜んでいた様であった。さり要求を受け入れた。

任務明けの肉体的疲労よりも精神的疲労が大きかったようだ。

「私の勝ちだね」

「最初の2回は勝ってましたわ!」

「でも最終的に勝ったから文句は言わせない」

「ううっ!」

彼女達の対人格闘の手合わせは、2勝3敗でアニの勝ちで終わった。

何故か2回戦までアニが惨敗したが、会話をしているうちに立ち直ったようでフローラは完敗した。

「もし蠅が巨大化して積極的に殺人してきたらフローラはどうする?」

「虫が人間の様に知能を持って会話をしてきたら…ああああ!」

「虫が生者を喰らう化け物だったらどうしよう!」

「掌サイズの蠅が知能を持って襲い掛かってきたら…私はどうすればいいの!」

相当、精神がおかしくなっていたようでアニは2回戦まで蠅や羽虫の事を口にして
いた。

トロスト区に集った死体を食う蟲が、精神的にストレスになっていたのかもしれない。
い。

無理もないだろう。

住民の3割が犠牲になったうえに兵士の死体が山のようにあったのだ。

それに群がる蠅と羽虫、そして排泄物と体液。

悲惨な状況を目撃して、精神的に追い詰められ兵士を辞職した者が相次いだ話をよく
聞いた。

「そんな虫なんて潰せばいいじゃない!」

「所詮、虫でしょ!?! いちいち殺生を気にしてたらきりが無いわ!」

「故郷に帰ってお父様に逢うんでしょ！ 気にせず潰せばいいわ」

「お父さん譲りの格闘術で虫なんかぶっ飛ばしちやえ！」

「アニは悪くないわ！ 無駄に寄ってくる虫が悪いのよ！」

なんとなく虫を潰す方向と、彼女の格闘術と父親を話題にしたら元のアニに戻って安心した。

フローラは何故、彼女がここまで追い詰められていたのか疑問であった。

「お互い頑張りましょう！」

「ああ、五体満足で生還するのを心から祈ってるよ」

袂を分かつことになった2人であるが、それでも友情は変わることは無かった。

拳を合わせて再会を誓ってそれぞれ帰る場所に向かつていった。

「それにしても何であんな所に居たのかしら？」

アニが配属されているストヘス区はウォール・シーナの東区である。

一方、ここはウォール・ローゼの最南端のトロスト区から壁を挟んだ北側の街付近だ。複数の早馬を使い潰す覚悟で走らせて最低でも日は跨ぐ距離。

なのになんでこんな所に居るのか。

馬すら連れずに俯いて1人で歩いていたのか。

なんで蠅を何度も口にして精神的に追い詰められていたのか。

逆に対人格闘の手合せを終えた彼女があそこまで落ち着いたのか

フローラがその答えを発見したのは、それから約2週間後のことである。

26話 第57回壁外調査 開幕

死ぬ時に何かをやり残したことは無いかと、問われれば誰でもあると答えるだろう。恩人に感謝の一言を伝える事ができなかった。

もつと早めに医者に診てもらおうべきだった。

家族全員の食い扶持を稼げなくなるなんて嫌だ。

もつと勉強に励んでおけば…。

復讐を果たせなかった。

調査兵団の兵士が死に際に思い浮かべるのは、やり残したことではない。ただの後悔だ。

「死にたくない」

「助けて」

「入団しなきゃよかった…」

「ごめんなさい」

「家族が…待っているのに…」

あらゆる感情を含んで調査兵団に入団した新兵たちは3年以内に8割が戦死する。そもそも第12代目団長のキース・シャーデイスが団長職を移譲するまで事実上の終身刑であった。

調査兵団の団長が戦死する度に巨人の脅威に立ち向かう勇氣ある者が引き継いできた。

そうやって、生者が死者の意志を継ぎ次世代へと未来を託してこれまで歴史を紡いできた。

調査兵団は、歴代の団長も含めて大勢の屍を積み重ねながら、850年まで存続している。

「少しだけ時間を頂けるか？」

「はい、構いません」

調査兵団の第13代目団長であるエルヴィン・スミスは、壁外任務の当日、とある新兵に逢いに行った。

本来ならば新兵に伝える内容ではないが、今回だけは例外で報告する事にした。

この第57回壁外調査の真の目的について！

「君はこの壁外調査についてどう思う？」

「正直、肩透かしです！これではエレンの評価を覆らせることはできません！」

特別兵法会議においてエレンの処遇は一時保留となった。

本日、開始される第57回壁外調査の結果次第で彼の未来が左右される。

しかし作戦内容は、南西にあるシガンシナ区方面まで進軍してカラネス区に帰還するだけの任務。

王政派や憲兵派はもちろん、戦果を期待している商会や調査兵団の支援母体も失望させるものである。

「カラネス区の東にあるネドレイ区の扉を占拠するべきではなかったのでしょうか」

「中々鋭い提案だな、扉さえ封鎖すればネドレイ区は要塞になるだろう」

「王政を含むエレンに敵対している組織は、分かり易い実績を欲しています」

「ああ、分かっているさ」

新兵のフローラ・エリクシアは、この壁外調査に不満に思っている。

悪く言えば、ただの遠足をする任務だったからだ。

この任務を成功させてもエレンの実用性は証明できない。

ならば、そのまま直進してネドレイ区に向かった方がいい。

以前にも団長に提言されたが、却下されているがそれでも諦めきれなかった。

「君には本作戦の真意を伝えておく」

「…でしょうね、この作戦を成功させても人類の功績など得られませんから」

エレン・イエーガーの実用性を証明したいなら壁上に有力者を集めてパフォーマンスをするだけでいい。

エレンが巨人化して巨人を倒しまくって、援護と誘導はリヴァイ班が行うだけでいい。

フローラが大金を入手したように、分かり易くかつ目視で確認できる事で実感できるからだ。

「シガンシナ区まで進軍できるか試したただけ？ たったそれだけだったのか？」

「第57回壁外調査は、ただの遠足だったと：はっはっはっ！笑わせてくれるわ！」

シガンシナ区まで進軍ルートの確認をしたところで第三者から見ればどうでもいい事である。

遠征が成功したからといってエレンは人類の味方とは証明できないし、納得できない。

「君はこの作戦の本当の意味を理解しているようだな」

「まるでエレンを餌にして何かを釣り上げるみたいですよ」

「その通りだ、私は兵団内に居るスパイ、それも巨人化できる者を捕らえるつもりだ」

彼女からすれば彼が何を考えているか見当もつかなかった。

ただ「声」は『どんな犠牲を払っても捕らえてみせる』という感情がある。むしろ、それが負の感情なのはかなり犠牲を含んでいるということ。

「私は超大型巨人と鎧の巨人がエレンと同じ人間が化けていると確信している」

「確かに巨人は人間しか襲撃しないのであそこまでピンポイントに攻撃できません」

「だがトロスト区の門が破られたのにローゼの扉が破られなかった…何故だと思う?」
「何かしらのトラブルがあったのでは?」

エルヴィン団長はフローラという少女の理解が早くて助かっている。

もしリヴァイ班の面々に説明しても、戸惑ったり作戦に支障が出るだろう。

「そうだ、5年前も今回も調査兵団が不在の際について行われた」

「だが、トロスト区の場合は門を破られるだけしかなかった」

「エレンというイレギュラーが発生したせいですか?」

「ああ、だから私は5年以上調査兵団を務めている者しか味方だと思っていない」

彼は巨人のスパイでも仲間でもない存在は、調査兵団に5年以上所属している者しか
確証がない。

だから5年以内に入団したリヴァイ班のメンバーも仮想敵になる可能性を考えてい
る。

もちろん、これまでの壁外調査で104期調査兵以外は信頼できると思っている。

「わたくしは記憶喪失している新兵ですよ？何故そのような事を打ち明けたのでしょうか…」

「エレンに対する君の態度と実績、そして何より私と【同類】だからだ」

「つまり仲間を利用して愛する人を犠牲にしても目標を達成させる人物だと言いたいのですか？」

「違うのか？」

トロスト区防衛戦の時の彼女は、僅かな同期たちを救う為に大勢の命を切り捨てた。

ミーナとアルミンとダズを救う為に同期を100人単位で見捨てて、民間人の救援を無視した。

大切な物を守る為ならそれ以外を切り捨てられるのがフローラ・エリクシアという悪魔である。

「その通りです」

「これは君だけに伝えておくが当の本人は内緒にして欲しい」

「大丈夫です、墓まで持ち込む覚悟があります」

「ありがとう」

エルヴィンは、その信頼している古参の兵士すら伝えて無い事を彼女に話すつもりだった。

「個人的見解だがエレンは弱い、それは誰よりもだ！希望が絶望に変わった時、全てが終わる」

「きつと彼は一人で抱え込んで破滅に向かうと知っても進撃していくだろう」

「…仰る通りです」

「だから彼の心が折れそうになったら君が支えてあげるんだ」

「エレンの本質を理解して精神的に支える事ができるのは君しかないし代わりはいないんだ」

彼がエレン・イエーガーを観察している時に気付いた事がある。

何があっても志が折れない不屈の精神があるのは理解したが、それに身体がついてきていない。

「絶対に巨人を駆逐してみせます！」

「巨人化計画を成功させます」

「人類の希望になってみせます」

「自分の為に犠牲になった人たちを無駄にしないように精進します」

エレンは口では大層な発言をするが、それに追従できる能力はまだ無い。

立体機動も巨人との戦闘も巨人化も全て経験不足である。

それによつて発生する失敗に彼はどんどん自身を追い詰めていくだろう。

例外を除いて誰一人心境を打ち明けずに手遅れになった時に初めて告白するのだ。

「エレンは知らず知らずのうちにフローラという存在に支えられている」

「あいつには負けたくない、同志として切磋琢磨したい、一緒に目標を達成したいなどだ」

「…そうですか」

「エレンを唯一、救えるのは君だけだ、だからこそ壁外任務で死んではいけない」

エルヴィンがこの壁外任務の本当の目的を打ち明けた最大の要因である。

フローラという存在を消失したエレンは、全てを自分一人で抱え込んでしまう。

彼は特別な存在になり過ぎて同期や幼馴染ですら距離を取っている。そんな彼は、同志であるフローラのみ悩むを打ち明けて精神的な癒しを求めている。それは重要な事であり彼を運用していく上で、なくてはならない。

「だからこそ、君に命令をする！ エレンより先に戦死をするな！ 以上だ」
「大丈夫です、彼を死んでも守ると約束しているのですから……」

エルヴィンが一番危惧しているのは、エレンを唯一メンタルケアできるフローラの損失だ。

兵団全体を見れば巨人を討伐できる実力者を損失するので大きな痛手である。

「もう一度言うぞ、エレンより先に戦死をするな！ この私ですら犠牲にしても生き残れ！」

「……はい、分かりました」

だが、本質は追い詰められたエレン・イエーガーという男を絶望から救出できなくなる点だ。

調査兵団の団長として、様々な死を目撃した上での経験がそれを実感させている。壁内の人類の為に、エルヴィン・スミスが夢を叶える為にも必要不可欠なピースだ。しかし、ここで承諾したと勘違いした彼は、後に確認しておかなかつた事を後悔する事になる。

フローラは理解したとは言ったが、死なないとは言っていない事に…。

「エレン・イエーガーは、長距離索敵陣の『5列中央・待機』に居る」

「もし何かあればリヴァイ班の元に向かい、リヴァイ兵士長の指示に従い行動せよ！」
「ハッ！」

フローラは自分を信頼してくれたエルヴィン団長の期待を裏切らないように覚悟した。

自分を信頼してくれたという事は、それ以外の兵士はどれだけの損害を払ってもやるつもりだ。

エレンと同じ巨人化できる人類。

それは【鎧の巨人】かもしれない。

団長の為にもエレンの為に、そして何より自分の為にも絶対に成功させてみせる。

「それはそうとして、援護班としての活躍も期待しているぞ」

「はい、本隊の進軍を妨げないように旧市街地の巨人を殲滅するつもりで精進します」
「頼もしいな、期待しているぞ」

フローラはカラネス区壁外における単独巨人討伐14体が評価されて援護班に所属する事になった。

付近の巨人を掃討して270人以上の調査兵を旧市街地から安全に進軍させる重要な役目だ。

長距離索敵陣を展開するうえで真っ先に重要な役割を任されていた。

「済まない、1時間ほど時間をとらせてしまったな」

「いえ、有意義な時間を過ごせてとても幸せでした」

「よし、同期の元に向かって彼らを元気づけてあげてくれ」

「ハッ！」

壁外調査まで2時間を切ったのを知ったフローラは慌てて身支度をした。

ただ彼女は『強化・1型』シリーズという調査兵が愛用している物を装備した。

技術4班の自信作である『ブリッツ』シリーズは真の目標を達成させる為に不可欠だったからだ。

専用装備と違って補給できるのも強みであり例え団長から真相を聞かなくても装備変更をしていた。

『ブリッツ』シリーズと専用のガスボンベは愛馬に持たせてある。

「ライリー、ようやく貴女が求めていた自由を謳歌できる状況になったわね」

愛馬のライリーは最低でも3時間走らせないと気が済まないほどの気性が激しい性格だ。

少しでも走らせずに機嫌を損ねれば、例えパートナーであって本気の蹴りを繰り出してくる。

そんな彼女も見渡す限りに騎兵が居る環境では萎縮したのか、落ち着いていた。

「いよいよ始まるね…」

「みんなこの時の為に訓練してきたもの、必ずうまくいくわ」

「うん、絶対に生き残ろう！」

不安になったアルミンは恐怖の対極な存在であるフローラの顔を見て安心した。自分たちの活躍で人類の為、そしてエレンの為になる！

そう考えたら、壁外調査などこわくなくなった！

「調査兵团だ！かっこいい！」

エレンは、自分を見つめて興奮している少年とその後ろで心配そうに見つめる少女を見つけた。

「英雄たちの凱旋だ……！行くぞミカサ！」

5年前のシガンシナ区で、調査兵团に憧れていた幼き自分と、ミカサの姿を重ねていた。

あの時は惨敗した調査兵团の兵士を見てなんて勇敢だと思った。でも実際に所属してみると何のことも無い。

勇敢に巨人に挑む凄腕の兵士ではなく、巨人と戦えるようになった人間である。

「あの時とは違う！」

それでも成す術もなく母親を喰われたのを背負わられて見ているしかできなかった自分ではない。

決して彼らの期待を裏切ることとはしない！

そう決意したエレンは、前を向いて手綱を強く握り一人前の兵士として彼らに魅せていた。

「緊張してきた…」

「ちやんとトイレ行ってきたか？」

「なんだよジャン、俺が漏らすとでも？」

「漏らされると馬に迷惑をかけるからな」

「さすが馬面は、馬の事をよく理解してるってか？」

「なんだとコニー！心配してやったのに！！」

ジャンとコニーは軽口を叩き合い、104期調査兵はその様子を見て微笑んでいた。その中で1人だけ例外が居た。

ミーナ・カロライナである。

「どうしてフローラだけ初列十四・索敵なの…」

長距離索敵陣形における配置場所は周囲に伝えられていた。

その中で新兵の配置場所は荷馬車の護衛班と索敵支援班の中間。

予備の馬と並走及び伝達係の任務が104期調査兵の任務である。

大切な親友だけが初列十四・索敵、魚鱗の陣で例えると右端に配置されていた。

「なんで私の大切な人は、みんな離れていくの…」

彼女は両親から渡された狩猟銃を手に取って眺めていた。

両親には、巨人に頭から喰われそうになったのを親友に助けてもらったと伝えた。すると慌てて家宝のライフル銃を渡してくれたのだ。

「巨人にライフル銃なんて役に立たないわよ！」

「これは壁内に逃れてきた祖父の祖父から受け継がれた由緒正しき銃だ！」

「これで巨人の眼球や関節を狙って援護してあげなさい！」

帰省した大事な娘が話した出来事に両親は青ざめていた。

こんな華奢で可愛い一人娘が巨人の手に捕まり口内で食られる。

てつきり駐屯兵団の兵士として生涯を過ごすと思っていた両親は耐えられるものはなかった。

「こんなの役に立たないわよ！」

「それで急所を狙撃して親友を援護してやれ」

「巨人は一人で倒すものじゃないでしょ、視覚を潰してフローラさんが動きやすくしてあげなさい」

両親の言葉を聞いてミーナは、初陣の事を思い出した。

トロスト前門が破壊されて巨人が進撃してきた時のことを。

負傷したサムエルをサシャが搬送して残った固定砲整備4班が相手にしていた。

足が竦んでどうしようもなかったが、それでも生還した。

訓練兵たった5名で巨人を5体も討伐した偉業を思い出していた。

「ありがとう、お父さん、お母さん」

その5体の巨人を討伐したのはフローラであった。

ただ、全員がガスと刃を半分以上消費したからこそ、彼女が活躍できた。足手まといになるなら、せめて遠距離から狙撃で援護したい。

「結局、使う事はできないのね…」

そう思っていたのに、親友は遠い場所に居て援護できそうもなかった。

ミーナは悔しそうに得物を馬に固定させて指示を待った。

「どうするライナー」

「どうするって…兵士として任務を全うするだけだ」

ベルトルトは思わずライナーに自分たちはどうするべきか尋ねた。すると兵士として彼は模範的回答を行なった。

傍から見れば頼もしく見える兄貴分である。

しかしベルトルトから見れば、ライナーの対応がちぐはぐしていて不安である。

「しかし、エレンが巨人化できるとはな…」

「もしかしなくても僕たちが求めているのはエレンじゃないかな…」

「何言ってるんだベルトルト？ エレンは俺たちの希望だぞ」

「…うん、そうだね」

戦士候補生としてアニと共に過ごしてきたライナー。

彼はいつの間にか成長して頼れる兄貴分となっている。

まるで志の半ばで散っていたマルセル・ガリアードの意志を引き継ぐように。

ただ本来の目的を時折忘れており、さきほどの会話も成立しているか不安になっている。

「これで僕たちは故郷に帰れるんだね」

「ああ、奪還できれば全てが終わり故郷に帰れるんだ！」

ようやく終わるのだ。

この悪夢の世界から脱出できて、巨人の脅威がない世界に行けるのだ。

「それにここで格好いい所を魅せれば、クリスタも振り向いて喜んでくれるしな！」

「ライナー？何を言ってるんだ!？」

「お前も何か活躍しないと、好きな人に振り向いてもらえんぞ？せいぜい頑張れよ！」

「…そうか戦士じゃないんだな」

「何言ってるんだこいつ、すっかりしろよ！」

頼れる親友がクリスタに向けて何度も視線を送っている。

まるで、雄鳥が雌鳥にアピールする機会を伺っている様に。

戦士だったライナーが気持ち悪い男に切り替わってベルトルトは動揺を隠せなかった。

自分が震えている姿を見て、励ましてくる彼の声は痛々しかった。

「見ろよクリスタ、ライナーがこっちを見てるぞ」

「もしかして髪の毛にゴミが付いているの？」

「馬鹿だな、私のお嫁さんの髪にそんなゴミを放置させるわけないだろう！」

「ユミル……」

「おっと、まだ告白されても……別にいいかもな！サシヤはどう思う？」

クリスタは、さきほどから自分に向けて視線を送るライナーに困惑していた。

別に彼が嫌いなわけではないが、原因が分からない以上対応しようがないからだ。

頼みの綱であるユミルも完全にボケてしまつて、真面目に伝わっていない。

「告白できるなら今のうちが良いですよ……」

「サシヤまでそんな事を言うの!？」

「だって、いつ死ぬか分からないじゃないですか、私だったら死ぬ前にお肉を奢ってもらいます」

「お前、恋人より肉か！ホントお前と結婚する豚は可哀そうだな！」

「ユミル！冗談はやめてよ」

ユミルは、死に場所を求めているクリスタをどうか助けようと画策している。

かつて『ユミル』と崇められて奉られていた彼女からすれば放置する事はできなかった。

第二の人生を歩んで自由になったからには、自分から不自由になる少女を助けたかったのだ。

「それができたらどんなに幸せでしようか…」

兵士としての責務を放棄して自由に暮らす。

それができたらどんなに良かったことか。

自分を犠牲にしても大切な物を守り抜く覚悟があるミカサが羨ましい。
サシャ・ブラウスは、自分の無力さを嘔み締めながら手綱を握っている。

「エレン、私が絶対を守るから…」

ようやくエレンと逢えたもののすぐに引き離される事を知っているミカサ・アツカーマン。

それでも、彼が無事だったことに安心してしまう自分に情けなさを感じている。これでは、エレンを守るところか彼を遠い場所に送り出す見送り人になりかねなかった。

「フローラ？ 覚悟は良い？」

「もちろん、援護班の一員として巨人を掃討してきますわ！」

「貴女は強いよね…」

「心身共にミカサの方が強いじゃない！」

「過剰評価よ、エレンが居なかったら今の私はないから…」

ミカサという女は、エレンに縋っているだけの存在だ、

心細かった自分にマフラーを付けてくれて家族の様に接してくれた彼。

両親を失った自分に道を示してくれた男の子。

「それは奇遇ね、わたくしもエレンが居なかったらこの場に居ないですわ」

「お互い生き残りましょう」

「もちろん、エレンを守り続ける為には生還しないとイケませんわ」

「無論よ、私たちは絶対に生き残る」

エレンには敵が多い。

だから信頼している仲間と共に彼を守らねばいけない。

ミカサはマフラーをしつかりと締めて向かい風で飛ばされないようにした。

「いよいよだ！これから人類はまた一步前進する！」

「お前たちの訓練の成果を見せてやれ！」

「「「おう！」」」

先鋒に居る第2分隊長の掛け声に続いて兵士達は声を挙げた！

これから壁外に行く道中であらゆる犠牲を払うかもしれない。

1人の兵士が死ぬ度に家族や仲間が悲しみ、1つの希望が潰える。

それでも成せばいけないことがある！

「第57回壁外調査を開始する！」

続いて先頭に居るエルヴィン団長が続けた。
彼の言葉なしでは、壁外調査が始まらないからだ！

「進めーっ!!」

号令と共に先陣をきる団長。

壁上に待機している調査兵以外の全員が団長の後を続いていった。

「頑張れ！」

「生きて帰ってこいよ！」

「どうせ期待してないが、せめて巨人をたくさん倒して来いよ！」

「トロスト区の悲劇が1カ月前にあったばかりだということに……本当に凄い奴らだよ……」

その後ろ姿を見送る壁内の住民。

何度も送り出してきた調査兵団がボロボロになってくるのを目撃した者は多い。

それでも初めてカラネス区から大規模の部隊が出撃したのだ。

トロスト区出身ではない住民は、何かしら戦果を挙げて帰ってくると内心は思っていた。

まさか今朝送り出した調査兵団が半壊して夕方までに帰ってくるとは誰も思っていなかった。

3章 多大な犠牲を払えば、相応の対価が得られるという間違いを結果で教えてくれた時代

27話 旧市街地戦

「進めーっ!!」

調査兵団の団長エルヴィン・スミスの号令で壁外調査が開始された。

カラネス区の門から出るとそこは、旧市街地が広がっている。

かつて、4000人以上が暮らしていた旧市街地が巨人の目から守る障害物となっていた。

「我々本隊は旧市街地を抜けて平原に移動し、長距離索敵陣形の展開の準備をする!」

「後続班は、平原に出てから本隊と合流させる!ミケ、後続班の援護と誘導を頼むぞ!」

「了解した!」

出撃する門が一つしかない為、一斉に出撃すると長蛇のように進軍せざるを得ない。

更に騎馬隊の為、相互の距離を空ける為にどうしても3列以上で進軍ができない。側面の攻撃に脆く下手をすれば孤立しかねない為、部隊を本隊と複数の後続班に分けた。

援護班が担当するのは、後続部隊の荷馬車及び伝令係の新兵、支援班の護衛である。

「援護班は速やかに荷馬車の援護にまわれ！」

「ハッ！」

ミケ・ザカリアスが率いる第一分隊を中心に構成された援護班は複数の荷馬車の周りで待機した。

団長の勅令により最優先護衛対象に指定されている荷馬車。

調査兵団の古株以外には何を積んでいるかは知らされていない。

「最優先護衛対象となると…積み荷は…」

フローラ・エリクシアは、壁外調査直前に団長直々に本作戦の真実を知らされていた。この壁外調査自体が囮で、巨人化能力者を捕らえる罠だという事に。

あの積み荷は、超大型巨人や鎧の巨人を捕獲、いや能力者を捕縛するものであろう。

「なんで本隊から離されたんだ？本隊に護衛してもらえば楽だろうに……」
「分からん、ただやけに遅いな。積み荷が重すぎるのか……」

ミケ分隊長も作戦の真意を知っている兵士の1人である。
しかし、積み荷の詳細については彼ですら知らされていない。

「……！複数の巨人の匂いだ！荷馬車の前方3体！」

「私が行きましょうか？」

「いや、俺だけで充分だ！お前たちは荷馬車の護衛任務を続けるろ！」

「了解しました」

だがやる事は変わる事はない！

嗅覚で巨人の匂いを感知したミケはすぐに巨人の出現を知らせて配下の班員たちに
伝達した！

「リーネ、ヘニング、フローラは西を！トーマ、ナナバ、ゲルガーを東に展開し待機せよ！」

「「ハッ！」」

あくまでミケが嗅覚で感知できるのは風上だけである。

風下の巨人の匂いはどうしても分からないうえに市街地のせいで匂いが遮られている。

4 m級などは見逃す可能性があった為、信頼できる実力者に守らせる必要があった。

「あれ？いつもと装備が違うね？」

「特注品ですので、おいそれと補給できないので今は装備していません」

「そうか、慣れない装備に振り回されるなよ」

「はい！」

リーネ・ハウズドルフとヘニング・ラインマイヤーの2名は何度かフローラと任務を共にした。

故に彼女が専用の装備をしてない事に気付いて指摘ができた。

荷馬車と巨人しか意識できないフローラは些細な変化を見逃さない先輩方に感心した。

「ところでフローラって金持ちなの？」

「ええっ!？」

「オルオから聞いたんだけどフローラが買った肉で焼肉パーティをやったんだって」

「おいおい、俺らも招待してくれないとダメじゃないか」

自信家で武勇伝を良く話すオルオは、僅かな友人に焼肉パーティの事を漏らしていた。

それは、口軽ではなくフローラという人柄に好印象を抱かせるためにやった親切心である。

当の本人からすれば余計なお世話だが口止めしてなかった為、文句が言えない齒痒さに苦しんだ。

「えーつと壁外調査が終わったら生還祝いに何か奢りましょうか？」

「そうだな、激辛の料理がいいな」

「じゃあ私は高級な甘いお菓子がいい」

「…分かりました」

更に墓穴を掘ってしまったので「調査兵団の財布」はこれ以上、発言しないことにした。

「ヘニングさん！6メートル級の巨人！荷馬車から見て南西です！」

「くそ！奇行種だ！さっさと討伐して後続部隊の進路を確保するぞ！」

予想通り風下の建物の影に居た巨人が見落とされていた。

腕を激しく横に振り眼球が激しく動いて視線が定まらない巨人を早急に駆逐しなければならぬ。

「女の子走りか！ふざけやがって!!」

「私が止めを刺す！2人は援護をしてくれ！」

「了解しました！」

リーネの指示によって三位一体となりフローラとヘニングが先行した。

2人は予め決めておいた合図ですぐさま両膝裏を同時に攻撃した！

その衝撃で巨人は顔を民家に激突させて一時的に動きが止まった！

「せいやー！」

「もう少し女の子らしい動きをして欲しいものだ」

「それは巨人ですか？それともリーネ先輩のことですか？」

「お前に言ってるんだよ」

「ええっ!?わたくしですか!？」

巨人の返り血を浴びて蒸気の中から現れたリーネは鬼神のようであった。

だから彼女の事を言っているかもしれないと思ったフローラはまさかの自分で驚いた。

ヘニングから見れば左膝裏を攻撃して巨人の股を潜り抜けて急旋回して離脱したやばい奴である。

「こいつ、壁方面から出てきたぞ…壁上固定砲の餌食にならんかったのか？」

「所詮、駐屯兵団第三師団のぬるま湯に浸かっていた奴らだ……そんなもんでしょ」

駐屯兵団第三師団は、トロスト区を除くウォール・ローゼの突起した都市を防衛する部隊である。

西方のクオルバ区、北方のユトピア区、そしてカラネス区を防衛する彼らの練度と士気は低い。

南方から巨人が出現する関係上、スクランブル出撃が多い南部のトロスト区の兵士と比較して明らかに劣っている。

巨人の戦闘より壁の補強工事や新兵の実践訓練の指揮などが主任務の彼らには酷と言えるが。

「荷馬車班の元へ帰還するぞー！」

「思ったより巨人が少ない……これで終わるといいけど……」

再び荷馬車班の護衛に戻る3人。

障害物が多い分、立体機動が生きる一方で死角から巨人が出現する可能性がある。

彼らは、極限まで気を配りどこから巨人が出現してもいいように慎重に帰還した。

ちようど巨人3体を討伐したミケ分隊長が率いた部隊も合流を果たして荷馬車の護衛を続けた。

「本隊を警護していた護衛班が3つ、荷馬車の護衛に戻るそうだ」

「……つまり、次は後続班の護衛をすればいいのでしょうか？」

「その通りだ！中央通りは荷馬車が占拠している以上、他の道の安全を確保しなければならぬ」

本隊が駆け抜けた中央通りは移動が遅い荷馬車班が占拠している以上、後続班は別ルートを通る。

後続班は4つに分かれており、護衛班の合図で一斉に並行して大通りを進軍し本隊と合流する。

巨人の襲撃による損害を減らせるが防衛する班が増えた為、結果的に襲撃されやすくなっていた。

「報告！荷馬車班に新たな護衛班が合流しました！」

「索敵班から合図は？」

「ありません！」

「…黄色の信煙弾を撃ちあげろ！」

ミケ分隊長の号令の元、荷馬車護衛に成功させた合図を撃ち上げた！

3つの黄色の煙が晴れた大空に向かって立ち昇り、兵士達の緊張を更に増加させる。

今は安全でもここは壁外、いつ巨人の大群が出現してもおかしくないのだ！

何事もなく無事に任務が達成できるように護衛班の全員が祈っていた。

「黄色の信煙を3つ確認！」

「よし、第一段階は無事に成功させたようだな！」

「お前たち！これから班長に続いて前進せよ！何があつても歩みを止めるな！」

「ハッ！ハッ！」

後続班の4人の班長は、それぞれの班員たちに指示を出し、出撃の準備を行なった。

たとえ護衛班が巨人を掃討しきれずに安全ではないとしても信じて進むしかない。

壁外で歩みを止める事は死に直結するからだ！

「班長！本当に大丈夫なんですか!？」

「サシャ！お前は黙って俺のケツを見て馬を走らせればいいんだ！」

サシャ・ブラウスは正直、逃げ出したかった。

何故なら黄色の煙が上がっているのにまだ遠くで戦闘が行われているからだ。

つまり、安全ではなく巨人の脅威は目の前に迫っている。

「お前たちも！死にたくなかったら黙って俺についてこい!!」

「[[[ハッ!]]」

班長も内心では、早合点した護衛班に恨み節をいくつか抱えていた。

だが、黄色の信煙弾が出た以上、彼らを信じて部隊を率いて進軍するしかなかった。

それが彼に課せられた任務であり班長としての役割なのだから。

「兵長！遠くで赤い信煙弾が複数、打ち上げられています！」

「チツ！展開した索敵班が新手の巨人を発見したか」

「どうするんですか!?!これじゃ出撃できませんよ!?!」

リヴァイ班の紅一点が報告した情報にエレンは思わず不安を口に出してしまった。

「…この一カ月、何を学んだ？そのちっぽけな頭で考えろ」

「兵長…」

「お前は上官の命令に従う…ちっぽけな頭でそれだけを覚えてるって言ったよな？」

「…はい、申し訳ありません」

エレンは許可なく巨人化できない。

それ以外にも上官の指示は絶対であり、いろんな制約を課せられていた。

未知なる存在という事で、人類の切り札というより諸刃の剣の扱いだった。

リヴァイは錯乱した彼を冷静にさせる為に有無言わずに命令に従うように命じた。心を乱して勝手な行動を取るほど、規律と編成を崩し危機に招く行為は無いからだ。

「出撃だ！俺の後ろに続いてついてくるだけで良い！できるか？」

「できます！」

「返事だけはご立派だな…オルオ！黄色の信煙弾を上空に撃ちあげろ！」

「了解しました!…撃ちました!」

「よくやった」

その後続班が動こうとしないのに痺れを切らしたリヴァイは信煙弾の打ち上げを命じた。

本来の手順は、始めに動いた後続班の班長が撃ち上げて、進軍を開始する手筈である。とろくさい奴らに代わって自分が進軍する意思表示をして他の班を勇気づけたのだ。

「リヴァイ兵長の班から信煙弾が!」

「よし、進軍開始!!」

その合図を元に4つの後続班は目の前にある大通りを進軍した。できるだけ迂回したくない彼らは護衛班を信じて馬を走らせていく。

「索敵班!お前らのせいで安全が確保できないまま進軍が始まったじゃないか!」

「信じてくれ!急に巨人が湧いたんだ!まるで地面から湧いたように!」

「もういい!!」

「ミケ分隊長……」

「我々の任務は、後続班を死んでも守る事だ！失態を返上する気で任務に当たれ！」

「ハッ！」

言い争いを収めて一致団結させたミケ分隊長。

彼も黄色の信煙弾を撃ちあげさせた直後に複数の巨人の匂いを感じ取った。

つまり、判断ミスは彼らではなく自分であり、失態を取り返そうとしているのは自分である。

「各員！定められた後続班の護衛に当たれ！」

「「ハッ！」」

「フローラは俺と来い！遊撃部隊として後続班を援護するぞ！」

「分かりました！」

ミケはフローラを抜擢したのは訳があった。

もちろん単独で14体の巨人を討伐する腕を買っていたがそれだけではなかった。

おそらく彼女は、自分と同様に巨人を感知できる「特殊能力持ち」だと理解していた。

確証が持てないのは、彼女が実際に意識してやっているか疑問であるからだ。

「分隊長！奇行種が護衛班を振り切りました！このままだと第2後続班と接触します！」

「させるか！」

ミケは、フローラの報告を受けて第2後続班に救援に向かった。

市街地と風の向きによって巨人の匂いが阻害される影響で嗅覚の本領が発揮できなかった。

一方、彼女は風向きや障害物に阻害されずに巨人を感知できているようだ。嗅覚や視覚ではない事は確かだ。

「班長！巨人が来ましたあああ!?!」

「後ろに居るのはミケ分隊長か…前進せよ！」

「ですが、目の前に居るんですよおおお!?!」

「怯むな！援護班に任せて前進しろ!!」

巨人を前方で目撃したサシヤは思わず左折しかねた。

しかし力強い班長の言葉で思い留まり前に向けて馬を走らせた！
後続にいる班員たちも班長の言葉を信じて馬を走らせている。

「ひいー！」

「落ち着け！あいつは、うなじを削がれた！もう動かん！」

ミケの回転斬りによってうなじを削がれた奇行種は大通りから逸れるように倒れ込んだ。

その転倒した衝撃は馬を走らせてもしつかりと感じ取れるものである。

自分に向けて10m級の巨人が手を伸ばしているように見えたサシヤは他人事ではなかった。

ここは、地獄であると身をもって再認識した。

「次はどこだ!?!」

「エレン…じゃなかった！第4後続班の右側面から2体の巨人が迫ってます！」

回転斬りの反動で索敵どころはなくなったミケはフローラに索敵を任せた。平衡感覚が狂いながらも正確に立体機動を行なえるのは訓練と経験のおかげである。しかし、嗅覚まで頭が回らないので彼女の索敵能力を信じて進むしかなかった。

「兵長！立体機動に…」

「何度も言わせるな！許可するまで馬を走らせろ！」

「…はい」

エレンはもどかしかった。

せっかく立体機動の訓練をしてきたのに本領を發揮せず見る事しかできないからだ。その間にも同志でありライバルであるフローラが戦果を稼いでいる。

彼女から、アンカーを刺した巨人が転がった場合の対処法など色々教わってきた。

だからこそ、これ以上差をつけられるのは…悔しくてしょうがなかった！

「おいガキンちゅっ!!」

「まーたカツコつけようとして舌を噛んだの？いい加減に学習しなさいよ…」

「うふはひふほらー！」

憧れの兵長に迷惑を掛けるガキを叱ろうとして舌を噛むオルオ。

それを見て呆れているペトラ。

エレンが発言しなかったら自分が発言しようとしていてホツとしたエルド。

それを後方から見ていてこの先に不安を感じているグンタ。

平常心を崩さない彼らを見てさすがだなと思うエレン。

「とはいえ…やるしかないか」

グリップを握り鞘から刃を取り出そうとするリヴァイ。

しかし彼の予想に反して巨人は方向転換を行なった。

「援護班か…このまま進むぞ」

「よしエレン！指示通り真つすぐ進めよ！」

「了解です！…えっ？フローラ？」

後続班に向かって来ていた2体の巨人は何か釣られて誘導されたかと思うと転倒

した。

それも勢いよく転倒したせいで付近の民家を巻き込んで大惨事になった。

蒸気が噴出しているところを見るとうなじを削がれたのか。

そう思っていたエレンの眼前の上空をフローラが駆け抜けていった。

てつきり後続班に居たかと思つたのに予想外の遭遇に驚いてしまった。

「済まない……2体討ち漏らしてしまった……」

「御託は良い、状況を説明しろ」

「索敵班が数体の巨人を見逃してしまいました。只今、残存する巨人を掃討中ですわ」

「なら早く行つてこい！いつまでも編成と士気を保てるとは限らんからな」

兵士長の発言を終える前にミケとフローラは次の巨人へと向かつていった。

それと入れ替わるように本来の警護担当である護衛班が帰還した。

「申し訳ありません！」

「俺たちより後続の班員たちを守れ」

「ですが……」

「二度は言わんぞ」

「了解しました！」

自分の選択が正しいのかは結果が教えてくれる。

だが、結果次第では答えが不明確のこともある。

リヴァイは昔から間違った選択肢を選んで続けていた。

自分の選択が間違っていたなどすぐには気付けないのは経験で実証済みだ。

だからこそ、さきほどの選択肢もエレンの方が正しかったかもしれない。

「兵長…取り乱してすみません」

「いや、お前の考え自体は間違っていない」

「えっ…」

「もしあいつらが来なかったら無言で俺が討伐していた」

「そうですか」

リヴァイ兵士長は、後ろを決して振り向かなかつた。

そのせいで彼がどんな表情で発言しているかエレンは分からない。

それでも、兵長は自分たちの事をしつかり考えていると分かる。頼もしい背中が自分たちをしつかり導いてくれているからだ。

「第1、第3の後続班は旧市街地を抜けて平原に出ました！」

「予定より早いな…：多少のトラブルはあったが損害皆無！よし！」

「ゲルガー班が護衛する第2後続班も…：抜けました！」

「残りは第4後続班のみです！」

荷馬車班を本隊に合流させた護衛班は、旧市街地と平原の境目で待機していた。

彼らは状況確認及び本隊への情報伝達の任務をこなしていた。

「なんで第4後続班だけ遅れているんだ!？」

「巨人が右側から出現しているせいです」

「まるで何かに誘導されているみたいだな…」

「さて、原因は…：つと！」

百聞は一見に如かず、何か原因があると判断したデイルク班長は望遠鏡で確認した。

確認すると、確かに後続班の右側から巨人の襲来が相次いでいた。

必死に護衛班が食い止めているものの複数体を取り逃がしてしまった。

ミケ分隊長とその配下が何とか取り逃がした巨人を討伐しているが不利に見えた。

「これじゃキリがないな…」

「クラスス！マレーネ！お前達の班も援護に向かえ！」

「ハッ！」

クラスス班とマレーネ班を見届けたデイルクは原因を分析していた。

本日発生したトラブルと経験は、今後の壁外調査に生かせるからだ。

「何故第4後続班だけ巨人に狙われているんだ…」

「第4班は右端…つまり一番南側です！巨人が多いのはそのせいでは？」

基本的に巨人は南からやってくる。

だからこそ南部のトロスト区は、人類の最前線であり最後の希望なのだ。

そのトロスト区から迂回してきた巨人が第4後続班と遭遇している。

言われてみればその通りだが、何かしつくりこない点がある。

「デイルクさん、悩んでますね…」

「ああ、巨人共の動きがいつもと違うせいだな…」

「さつきから見て気付いたんですが報告してよろしいですか？」

「頼む」

優秀な副官が何か法則性に気付いたようである。

思わず口角を釣り上げてしまったデイルクは平常でいるように心掛けた。

「さつきから巨人共、後続班の先頭だけ狙っているように見えるんですよ」

「先頭…リヴァイ兵長のところか」

「あそこには…エレン・イエーガーが居るな」

今回の壁外調査はエレン・イエーガーの有意義を示す為に行なわれている。

その割には、短期間の進軍であり調査というより遠征に近いものであった。

誰もが巨人化できる能力者が最大限発揮できる作戦ではないのは気付いていた。

それでもエルヴイン団長を信じていた為、誰も反論はしなかった。

「エレンといえばトロスト区防衛戦で巨人化して巨人を20体以上葬ったと聞くぞ」

「ああ、でも能力を使いこなせずに暴走する事もあるようだ」

「ホント、未知数って怖いな…」

エレン・イエーガーの巨人化能力は人類の希望だ。

少なくともトロスト前門に空いた穴を大岩で塞いだ彼は街の英雄である。

だからこそ、この壁外任務を成功させて彼の存在意義を王政府にアピールする必要がある。
あった。

「何か言いたそうだな？」

「いえ、何も…」

「オイオイオイ！今言わないと後で後悔するぞ」

「こいつの言う通りだ、思った事を口にしてみる」

副官の顔が一瞬歪んだのをデイルクは見逃さなかった。

こういった細かい点を分析していけば、物事はある程度分析できるのだ。

「いえ、まるで巨人化できるエレン・イエーガーを巨人たちが狙っている気がして…」
「つまりなにか！エレンは巨人の人気者って言いたいのか？」

「いえいえ、個人的な感想なので…」

「そうかもしれないぞ」

「えっ？」

ディルク班長の思わぬ一言で冗談で流そうとしていた班員たちが思わず彼の方を見た。

彼は本気でその意見について考え込んでいた。

巨人化したエレンは20体以上の巨人を討伐した。

しかし暴走気味で巨人化のコントロールがうまくいっていない情報を踏まえると…。
逆に言えば、20体以上の巨人に襲われていたという事になる。

「もしかして巨人が人間を襲うのは、巨人化できる能力者を狙っているせいかな…」

「班長…」

「なんてな！おそらく音で反応してるんだろう」

「そうですよね！巨人は聴覚と視覚が異常に発達している説がありますもんね」

彼らは、エレンと巨人が敵対している。

その事実だけで彼を信用した。

デイルクが立てた推測は霧散し消え去った。

「報告します！第4後続班が旧市街地を抜けました！作戦成功です！」

「トラブルがあったが、終わり良ければ全て良し！」

「まだ壁外調査は始まったばかりですけど……」

「そこ……余計な事を言うな！」

後続班が全て旧市街地を通過した事により次の作戦が発動した。

平原で部隊を再編成して、長距離索敵陣形となり進軍していく。

第57回壁外調査は始まったばかりだ！

「しかし、良いんですか？援護班が旧市街地を抜けてませんか？」

「しょうがないな！ 奴らが来るまでここで待機するぞ」
「了解！」

デイルク班は、後続班を護った援護班が旧市街地を抜けるまで動向を見守った。

28話 女型の巨人襲来

「よお！調子はどうだ？」

「絶好調ですわ！」

「よーし、その調子で頼むぞ！」

「はい！」

旧市街地を抜けたフローラはリヴァイ班のエルドに声をかけられていた。

「周囲の巨人は片付いたようだな…これなら問題なく進めそうだ」

「少し遅れはするが、ここで態勢を整えてから本隊に合流しよう」

「ですが早めに本隊に合流しないと巨人と遭遇するのでは…？」

「休憩できるならしとくのも手だぞ？ここで休むか本隊で休むかの違いではないが…」

「グンタの言う通りだ、まだ本隊と合流するまで時間に余裕があるからな」

精鋭中の精鋭であるリヴァイ班の面々は、休息の重要性を理解している。

身体を酷使する彼らは、空き時間を休息に割いて定期的にストレスと疲労を発散させている。

集中力が続くのは長くても90分ほど、いざという時が多い壁外調査だからこそ休息は大事なのだ。

英気を養った彼らは巨人を70体以上討伐しても誰一人欠ける事が無かった。

「それにしてもここまでよく働いてくれたな」

「うん、この一カ月でかなり成長したみたいだし、きつと今回の壁外調査でも生き残れるよ」

「まあ、俺たちの初陣に比べれば全然」

「ほう？お前らの初陣の事を話しても良いんだな？オルオ君…？」

フローラの奮闘をペトラは先輩として素直に評価したが、オルオは違ったようだ。

露骨に頼れる先輩面をしていたオルオを見てエルドは意地悪したくなった。

まさかの発言に忘れ去りたい過去を思い出した2人は彼を睨んだが効果はなかった。

フローラは、エルドさんの一言で先輩たちの顔が蒼白になり露骨に動揺したのに気付いた。

「オルオさんに一体何が…?」

「いいか新兵、余計な事に首を突っ込んでお陀仏なんてここでは良くある事だ!」
「肝に銘じておけえ!」

オルオは新兵に釘を刺して威嚇していた。

まるで初陣で大失敗されたのを詮索されないように…。

「ペトラさん、どうしたんですか?」

「え!?!ど、どうもしないよ!私、この話には関係ないからわからないな!」

一方、ペトラは可愛い後輩に見栄を張ってたら思わぬ飛び火に動揺が隠せずに脂汗をかいていた。

オルオに意識させたかったものの返答が棒読みになってしまい隠し通せたか内心で焦っていた。

「まあ、こいつらにも初々しい時期があったって事だ：それに比べれば慣れ過ぎて感心するな」

「人類の未来を考えているお二方と違って、巨人を狩り過ぎて感覚が麻痺してますわね」
「そ、そうよね！フローラは頑張り過ぎてるわ！ちゃんと休まないとダメよ」

「ああ、今は通用しても後でガタが来るからな！」

「そうだな、小娘らしく慎まずに傷だらけになつて後悔しても知らんぞ」

フローラからすれば、失禁しようが泣き叫んで無様な姿を見せていようがどうでもよかつた。

トロスト区戦は、羞恥心など消し飛ばすほどの凄惨な地獄だったので気にしなかつた。

といつてもミーナの尊厳を守る為、香水を同期達に配りまくる工夫をしたのでそれは理解できた。

「オイ、無駄口を叩いてないで、さっさと行け」

「兵長、す、すみません！」

「既に支度の準備はできております！」

リヴァイ兵士長は、彼らの軽口を聞いて気が緩んでいると思いき締めに来た。視線を逸らす事で自分のせいで緊張しているエレンにリラックスしてもらおう意図もある。

「お前とはここまでだ…陣形の展開までに自分の配置に戻つとけ」

「ハッ！」

「根性だけは認めてやるが調子に乗って死ぬなよ？」

「はい！生き残ってみせます！」

フローラ・エリクシアという女。

既に調査兵団で屈指の実力者であるミケ・ザカリアスの実力を部分的ではあるが凌駕している。

だが、危なっかしい動きをしており自分の戦闘スタイルを確立できていないと感じられた。

それはかつて生き急いで無念にも戦死したモーゼス・ブラウンを彷彿させていた。

大切な戦力だからこそリヴァイは、あえて彼女を高評価せず生き残る事を意識させた。

「オルオさん！オレの同期は巨人に勝てると思いますか？」

「バカ、この一カ月何をしやがった！」

「壁外調査って言うのはな！いかに巨人と戦わないか懸かっているんだあつ！」

急な揺れでまたしても舌を噛むオルオ。

それを見て自分の迂闊な発言を後悔したエレンだが、仕方が無かった。

訓練をしてきたとはいえ壁外調査から生還できるかどうかは神にしか分からないのだから。

「長距離索敵陣形！展開！」

エルヴィン団長の号令で訓練通りに展開していく調査兵たち。

104期調査兵も予備の馬と並走、伝達の任務を課せられており全員が持ち場についていく。

「お前ら！小便漏らすんじゃないぞ！」

「言い出しつぺのお前が漏らすなよ」

「言いやがったライナー！後で覚えておけ！」

「フローラ！頑張つて！」

「もちろんよアルミン！また壁内で逢いましょう！」

新兵の中で1人だけ索敵班に編入されたフローラは同期たちと別れて持ち場に向かった。

「ここが初列十四・索敵の班ですよね!？」

「そうだ！よく来た！」

「名前はフローラです！短い間ですがお世話になります」

「お前…何度も訓練しただろう…そこまで堅苦しい挨拶はしなくていいぞ」

「そうだぞ新入り！」

班員については事前に説明を受けていたし、何度も訓練してきた仲である。

それでもつい挨拶をしてしまうのは、やはり自分が新米で何も知らない初心者だからであろう。

「赤い色の信煙弾が出ました!?!」

「さっそく巨人の発見か…フロローラ！お前が撃て！」

「了解しました」

フロローラは班長の指示に従って専用の小型銃を手にとった。

状況に応じて専用の発煙弾を使い分けるが、今回は赤い発煙弾を使用する。

中折れ式の為、ラッチ操作を行うだけで自動で排莖されるので装填が楽である。

トロスト区の兵団本部突入作戦にも使用したと同様の銃なので感慨深いものはあった。

「撃ちました！」

「よし、指示があるまでそのまま前進せよ」

「了解しました！」

基本的に巨人の速度より馬の方が早い。

更に巨人には人間と同じように疲労の概念があるので、距離を離せばそのまま逃げられる。

「緑色の信煙弾が撃たれたな！」

「よし左折するぞ！準備はいいか？」

「大丈夫です！」

赤色の煙を確認したエルヴィン団長が次の進路に向けて緑色の信煙弾を撃つ。それは最短時間で陣営全体の進路を変更し、新たな方角に舵を切る為である。

「俺が撃つ！撃った瞬間、左折するからちゃんとしてこいよ！」

「了解しました！」

班長が緑の信煙弾を上空に撃ちあげて左折を開始した。

その動きを受けてフローラは彼の後ろへとついていった。

全体に方角を知らせる為に班長が緑の信煙弾を撃ちあげてから進路を変更する。

長距離索敵陣形は、巨人の戦闘を避ける為に蛇行の進路をとり臨機応変に進軍していく。

そう、訓練通りの手筈で進軍しているようであった。

「班長！」

「どうした!？」

「初列八と初列十の索敵班が反応してません!!」

フローラは、すぐに異変を察知した!

前方に居る初列十二・索敵班は、緑色の信煙弾を撃ちあげたのにその次が続かなかつたからだ。

そして、異変が起きた班の辺りに巨人の「声」を聴き取った。

それも1体や2体どころか20体以上の大群の呻き声が聴こえてきたのだ。

「最初に巨人を発見した関係だろう!危機が去ったら撃つから安心して進め!」

「アルバン班長！前方の初列十二・索敵班が進軍を停止しました！」
「なんだと!？」

同僚が更に悪い知らせを報告してアルバン班長は苦悩した。

例え隣接している索敵班が全滅しても進軍するのが長距離索敵陣形なのだ。
とはいえトラブルが発生した班を見捨てられるほど彼は鬼ではなかった。

「フローラ！次列六・伝達班に右翼索敵班が壊滅したと伝達しろ！」
「分かりました！」

班長の指示を受けてフローラは次列六・伝達班に向けてライリーを走らせた。

その班は頼りになるライナーが所属している班である。

所属していた初列十四・索敵班のご武運を祈ってライナーが居る方向へ向かった。

「バルタザール！何をやっている！」

「アルバンか！あの女型の巨人が索敵班を掻き回しているんだ！」

「女型？おまえ、巨人は…なんだありや」

アルバン班長が駆けつけるとバルタザール班長が進軍を停止した理由が分かった。珍しい筋肉質の女性の巨人が索敵班員を蹴散らしている惨状だった。たった今、騎手が凄まじい勢いで蹴り飛ばされて遙か大空に向かって飛んでいった。

「あれは奇行種か!？」

「分かんない！だが既にあいつに10人以上やられた!」

「舐めやがって!リンハルト!シーモア!手を貸せ!」

「ハッ!」

仲間思いのアルバンは、女性の巨人を生かして帰すつもりはなかった。

意志を感じ取った部下達は、馬を走らせて彼より先行して援護に向かった。

リンハルトは右手の手背を!シーモアは左足首にアンカーを突き刺した!

お互いを信じている彼らは自分の責務を果たす事を考えてワイヤーを巻き取っている。

「うわっ……っ!」

「えっ…」

「なっ!」

右脚を支柱に振り返った女型の巨人は、右手を勢いよく降ろしリンハルトを地面に叩きつけた。

更にそのまま左脚で下段蹴りを行ない勢いよく上空に飛び出したシーモアは耐え切れなかった。

肉塊が限界を超えて吐血どころか身体から血が噴き出した!

「なんだこいつ…」

「アルバン逃げろ!早くしろ!!」

「はあっ!?!…ぐふおっつ!?!」

バルタザールの叫びも空しくアルバン班長は視界を覆い尽される何かの肉塊を目撃した。

それが彼が見た最後の光景だった。

女型の巨人が繰り出した掌で彼は馬ごと潰された。

不幸中の幸いなのは即死した為、巨人に食られながら喰われるよりだいがマシな末路という事か。

「うわああああああっ！」

部下も同僚も他の班の援軍も全滅して一人になったバルタザール班長は逃げ出した

！

本隊の進軍方向とは逆に：つまりウォール・ローゼに向かって馬を走らせた。

パニック状態になった彼は既に自殺に向かっていった。

単独で本隊と逸れて生還した例は無いからだ。

「やだあああああ！かああちやあああん!!」

人知を上回る未知なる存在を目撃すると、人間は思考を放棄して精神崩壊する。

彼は軍人である為、辛うじて手綱を使って全速力の馬で戦線離脱を試みた。

そんな後ろ姿を見た巨人は、左足首についていた肉塊を手にとって投げつけた。

地面にバウンドする度に血吹雪を噴出する破片が見事！バルタザールの馬に命中し

た！

「うわあああああつがつ！ああああああ！！」

奇跡的に破片の直撃を免れた彼は馬から飛び出して地面に激突した。全身に激痛が迸り息が一瞬止まり身を縮めて絶叫した！

「やだあ…生きるんだああ！」

それでもなんとか我慢して女型の巨人に向けて視線を移した。興味を失ったのか「彼女」は見向きもせず去っていった。

「ううっ助かったのか…う!?うわあああつ!!」

すぐに彼は巨人が放置した原因が分かった。

背後から別の巨人に驚掴みされたせいである。

4本の指が凄まじい握力で内臓を圧迫させ口から内臓の繊維ごと吐血した。

「いっほっ！いっほおおおお！」

両腕が塞がって内臓を圧迫されているバルタザールはそれでも抵抗を諦めなかった。そんな努力など無意味と言わんばかりに別の巨人が目の前に映った。

彼は成す術がなく別の巨人に頭を齧られた。

獲物を先に手に入れた巨人は慌てて握り直して獲物の腹部を噛み千切った。

鮮血と共に小腸と胃が引き摺り出されて、ある程度伸びきった後、音を立てて千切れた。

「~~~~~!!」

初列十二・索敵班の班長テオ・バルタザール 享年27歳。

巨人たちによる踊り食いされるといふ最悪の末路となった。

極限まで延命するかのように齧られたせいで彼が絶命したのは3分後であった。

「…変だ、まだ陣形が乱れている…何が起きているんだ…」

次列四・伝達班に所属するアルミンは困惑していた。

赤い煙弾が撃たれてしばらく経つのに未だに陣形が乱れていたからだ。

「あれ…もしかしたら…!」

彼は優れた頭脳で分析を行なった結果、一つの結論に辿り着いた。

そしてその結論を結びつける決定的な証拠が見えた。

「黒色の煙弾!間違いない!!」

基本的に巨人は近くの人間に向かって攻撃を行なってくる。

しかし、近くの人間を無視して遠くに居る人間を狙ってくる巨人がいる。

未だにその巨人の謎は解明されていないが、嗅覚や視覚で自分の好物を狙っている説が有力だ。

「奇行種だ！」

壁外調査において基本的に巨人との戦闘は行わない。

ただし、動きが読めない奇行種は例外であり、見つけ次第討伐しないといけない。

長距離索敵陣形の内部を掻き回されて進軍に支障が出るせいだ！

新兵に向けて教鞭をとっていたデーター・ネス班長は過去の発言を振り返った。

「畜生！やるしかねえか！」

「シス！お前はうなじを狙え！俺は動きを止める！」

「了解！」

調査兵団の兵士は鞍上で立体機動に移れるように訓練されているし、馬も対応できる。

しかし、訓練と実戦は違う！

平地では立体機動を生かせない上に落馬する関係上、隊列から孤立するリスクがある。

更に巨人を討伐しても馬が戻ってくるとは限らない。

「俺が新兵に教えたことだ！俺ができなくてどうする！」

「こいつの先にはアルミンが…まだ新兵に逢わせるわけにはいかねえ…！」

新兵のアルミンに奴をぶつけるつもりはないネス班長は2人で討伐する事にした。

『やらなくて後悔するより、やって後悔する』を座右の銘に掲げている彼は腹を括った。

馬からガスで飛び出して右足首にアンカーを射出した！

「うおっ…まだまだ!!」

ブーツを地面の摩擦で摩擦させながら身体の重心を傾けて動きをコントロールする。

半円を描くように巨人の死角から移動するように心がけた。

ワイヤーを高速で巻き取る勢いで、彼はうなじを斬る要領で右足首を双剣で挟り取った！

アキレス腱を切られた巨人は凄まじい勢いで地面にめり込んだ。

「今だシス！」

「おう！」

！
ルーク・シスはガスを噴出し鞍上から飛び出して巨人のうなじにアンカーを射出した

そして立ち上がる前にうなじを刈り取って奇行種を討伐した！

「やった…勝ったぞー！ネス班長…！」

アルミンはその様子を遠くから目撃して興奮で身が震えていた。

「イテテテ…」

「大丈夫ですか…？」

「いやそれより馬は…双方とも来てくれたようだな」

ネスの愛馬であるシャレット、シスの馬も無事に戻って来ていた。

調査兵団の兵士は、巨人討伐よりも馬に見放されて死ぬ方が多いとされる。

「よく来てくれた…さすが俺の愛馬！」

それだけ壁外では馬が重要であり、大切なパートナーである。とにかく本隊から逸れずに済むと分かって彼らは安堵した。

「ん？」

しかし遠くで地鳴りがして振り返ると新手の巨人が地平線の彼方から出現した！

右翼の索敵班が担当している場所であり、またしても奇行種を取り逃がしたようだ。

「またかよ…右翼の索敵班は何をやってんだ…」

「索敵班を無視してこちらに向かって来ているとなるとあれも奇行種ですね…」

「しようがねえな…もう一回やるぞシス！」

「了解！」

壁外調査が終わったら右翼の索敵班を問い詰めて奢ってもらおう！

ネスとシスは顔を見合わせてその確認をとって再び襲撃に備えて展開した。

「チツ！14 m級か！こいつはきついで…おい待て！早過ぎるぞ!!」

データー・ネスは人生で初めて全力疾走する巨人を目撃したと断言できる。

15 m級の巨人が走る速度は、時速70 kmを越えると巨人学で習った。

しかしこの奇行種はそれより早いスピードで追い付いてきた。

馬の速度が巨人を引き離せるので、巨人との戦闘を避けてきた故に脅威の事である。

「くそ！回避が間に合わねえ…」

「ひええええ…」

彼らの懸念と裏腹に奇行種は興味が無い様に過ぎ去っていった。

損害は、衝撃によって馬が少し呼吸と足並みを乱したくらいだった。

しかし、その巨人が向かう先には新兵のアルミンが居た！

「シス！行かせるな！」

「はー！」

2人は巨人を新兵の元に行かせる気はなかった！

同時に鞍から飛び出してうなじにアンカーを突き刺して空中を舞った！

高速でワイヤーを巻き取っている分、衝突する危険性があつたが2人は気にしなかつた。

とにかく調査兵団の未来を担う新兵を護りたかつた！

それだけで同時にうなじへと向かつていった。

「えっ!?!」

そんな2人の熱い想いは、巨人によって文字通り潰された。

左肩に向かつていったシスは巨人の左手で受け止められて握り締められて潰された。

その血は風に煽られて花卉のように飛び散っていった。

「はー！」

信じられない光景で思わず思考を停止させたネスは、それが命取りになった。ワイヤーを掴まれて勢いよく地面に叩きつけられた。

衝撃で背中を270。以上曲げてもダメージを和らげることはできず肉塊になった。彼が最後に思い浮かべていたのは、遺してしまふ愛馬のシャレットの事だった。

「違うぞ……」

アルミンは二人の死に様をしかと目に焼き付けた。

「違う……奇行種じゃない……ネス班長！教えてください！」

「どうすればいいですか！奴は！通常種でも！奇行種でも！ありません！」

頼れるネス班長たちが戦死した現実を脳が拒否した！

アルミンは錯乱して既にこの世に居ない班長達に指示を求めた。

「『知性』がある！鎧の巨人や超大型巨人と！エレンと同じです！」

「巨人の身体を纏った人間です！誰が!?なんで!?どうして!?!」

さきほどの奇行種の動きは普通ではなかった。

まるで人間が操作しているように兵士を殺した！

食べるのではなく、躊躇いもなく殺すのは間違いない知性がある証拠である。

「やばいよ!?!どうしよう!?!死んじやう!僕も死ぬ!!僕も殺される!!」

巨人の動きを熟知しているデータ・ネス班長とルーク・シスを葬った奇行種。

その正体は、右翼に展開していた索敵班を壊滅させた巨人！

巨人を呼び寄せて長距離索敵陣形を崩壊させた元凶！

「誰か!誰かあああ!!」

【女型の巨人】がアルミンに迫っていた。

まるで最初から彼に興味があったように追いかけていた。

向こうの方が早いせいで少しずつ距離を詰めており、もう少しで攻撃範囲内に入るだろう。

「誰かああああ！」

それでもアルミンは馬を走らせる。無駄だと内心で気付いていても走らせる！
1秒でも多く生き延びたいからだ！

29話 ジャン・キルシュタインの決断

「ん？フローラじゃないか？なんでこんな所に？」

「報告します！右翼の索敵班が壊滅的な打撃を受けました！索敵が機能していません！」

「なんだと!？」

慌ただしいフローラの口頭連絡にライナー・ブラウンは驚愕した！

何かしらのトラブルが発生すると想定していたが想像以上に悲惨な事になっていた。

索敵班が壊滅したという事は、右翼方面の巨人が陣形の中央に侵入してくるといふ事だ。

「第八、第十班が反応せず！第十二の索敵班が巨人と交戦中です！」

「ライナー！速やかに他の班に情報を伝達せよ！フローラも援護してやれ」

「了解しました！」

最悪なシナリオを思い浮かべた次列六・伝達班の班長は、新兵のライナーに情報伝達を任せた。

「フローラが居て助かったぜ！俺一人じゃ心細いからな」

「それ、わたくしが言うべき台詞でしょ…」

「カラネス区壁外で14体も討伐した英雄に比べれば…俺はまだまだだ」

正直、フローラはライナーが居て助かっていた。

索敵班が展開している場所で人間の「声」が次々と途絶えていた。

代わりに巨人の「声」が増えており、致命的な打撃を受けていると実感している。

まだアルミンは生きているが彼を守りながら巨人の群れを1人で相手するのが無理であった。

やはりライナーという頼もしい男がいないとアルミンを巨人から守り切れる自信がなかった。

「アルミンが心配よ…」

「大丈夫だ、あいつは逆境に強いからな…自慢の頭脳で切り抜けてくれるさ…おっと！」

言葉とは裏腹にライナーもアルミンが心配なのだろう。並走していた予備の馬の手綱を放してしまい、慌てて追いかけて握り直すくらいには。

「黒色の煙！奇行種か!？」

「ええ！あそこは…アルミンが居る！」

それと同時にデーター・ネス班長を含む2名の“声”が途絶えた。

彼の最後の言葉は愛馬のシャレットを残して死ぬ自分の不甲斐なさだった。そしてネス班長を殺した巨人の声は、ひたすらあらゆる物を拒絶していた。

アルミンは女型の巨人に追いつかれた。

それでも生き残る為に思考を停止しなかった。

「行つて！」

まずは並走していた予備の馬を手放した。

無駄死にするのは自分だけで済ませるように。

もちろん死ぬ気はなく、全力で馬を走らせながら障害物を必死に探していた。

考える事を止めることは死に直結するからだ。

「うわああああ!!」

間近で巨人が踏み込んだ衝撃で馬から地面に放り出されるアルミン。

地面に激突した際の激痛で悶えるが必死に動かない様に心掛けた。

巨人がしゃがんで様子を見ている以上、死体と勘違いしてもらおうのを願うしかない。

「……！」

怯える調査兵が羽織っている外套のフードを巨人は指で摘まんで顔を覗いた。

アルミンは何だか不思議な気分であった。

まるで誰かを確認するように覗き込まれている…そんな気がして。

“彼女”と視線が合つても特に人間を捕食するような動きはなかった。

「……殺さない…のか？」

「え、ちよつと待てよ…何だ今の…？フードを摘まんで…顔を確認した!？」

女型の巨人はフードを摘まんでアルミンの顔を確認すると興味がなくなつたように去っていた。

動悸が激しくなり、死を覚悟した彼はその後ろ姿を見送る事しかできなかつた。

そして落ち着くと、女型の巨人の目的が殺戮ではなく特定の人物の搜索である事に気付いた！

「アルミン!!」

「ライナー！それにフローラも！」

なにより知り合いが話しかけて来たおかげでアルミンは少しだけ落ち着く事ができた。

馬を並走してきたライナーと周りを警戒しながら彼の後ろに続いて来たフローラ。2人とも頼れる存在でありこの地獄の中では安心できる同期たちである。

「おい立てるか!？」

「うん!」

「とにかく馬を走らせねえと壁外じゃ生き残れねえぞ!早く乗れ!」

「ありがとうライナー!」

アルミンの馬は地平線の彼方へ行ってしまった為、彼はライナーが並走してきた馬に乗馬した。

そしてさきほど自分の顔を確認した巨人が前方に居るのを確認して馬を走らせた。

死にかけてにも拘わらずアルミンの判断力の速さに皆が驚きながらも彼の後ろについていく。

「煙弾を確認したが……あのプリケツな奇行種がそうか?」

「奇行種じゃない!巨人の身体を纏った人間だ!」

「ん?なんだって?」

「エレンと同じ巨人化の能力者なんだよ！早く煙弾を撃つて知らせないと…」

バンダナを被った死体を通り抜けたフローラは巨人の後ろ姿を見据える。

もし、あの巨人がエレンと同じ巨人化できる能力者と発覚してたら…初見殺しで死なずに済んだ。

少なくともさつき発見した亡骸の正体であるネス班長は死なずに済んだはずだ。

「悔しいわ…」

この壁外調査自体が罠で巨人化能力者を捕縛する餌である事を団長は自分に伝えていた。

だからこそ、こうやって対応できるのだが、いくら何でも情報伝達する人物が少なすぎた。

右翼を担当した索敵の班員たちは、巨人化能力者と知らずに突っ込んで無駄に壊滅してしまった。

「いや待て！ジャンが黄色の煙弾を撃つたみたいだ！」

「右翼からも黄色の煙が見えますが、数が少ないですわね…」
「作戦遂行不可能な痛手というわけか！」

ライナーの発言を聴いてフローラは内心で『むしろ、これは想定内なのよ』と呟いた。それと同時にフローラは、所属していた班長の判断に感謝した。

もし、巨人化能力者と知らずにあの巨人に挑んでいたら戦死していた。それだけ初見殺しで全滅してもどうしようもない存在だった。

「おい大変だ！右翼の索敵班が壊滅したらしい！」

「ああ、フローラから聞いた！」

「何でか知らんけど巨人がわんさか来たんだ！必死に食い止めているが索敵はもう機能してねえ！」

「索敵班が壊滅して隙を突かれたか！このままだと全滅するぞ!！」

ジャン・キルシュタインの報告で3人は最悪の状況下にいることが実感できた。

長距離索敵陣形の右翼から中央部は既に安全地帯ではないので巨人と遭遇してもおかしくはない。

「あいつが来た方角からだ…まさかあいつが率いてきたのか?」

「おいちよつと待て! アルミン、なんか知ってるのか!」

「エレンと同じ巨人化できる能力者みたいよ! 前で走っている巨人がそうらしいわ!」

ジャンが疑問に思う暇もなくフローラから衝撃的な情報がもたらされた。

「嘘だろう!」

思わずジャンは、魅力的な尻が目につく女っぽい巨人を見た。

それは、エレンと同格どころか更に好戦的で敵対しているというヤバい奴だと発覚した。

思わず戦線離脱を図りたくなるほどの絶望感を味わった。

「アルミン、どうしてそうだと断言できるんだ?」

「巨人は『人を喰う』しかない! その結果死なせるのであって『殺す』のは目的じゃない!」

「あいつは、先輩たちに急所を狙われた時、握りつぶしたり叩きつけた！」
『喰う』んじゃないくて、『殺した』んだよ！他の巨人とは本質が違う！」

アルミンの言葉を聞いて3人はどうするか迷った。

下手に介入すれば、まず間違いなく死人が出るが放置すれば更に犠牲者が出る。

味方に奴が巨人化の能力者だと知らせる術が無い以上、現状維持しかできなかった。
特にライナーは、巨人の実力を知っているので無意味に交戦したくなかった。

「超大型巨人や鎧の巨人が出現した時に壁を破壊して大勢の巨人を引き連れてきたかも……」

「巨人化できる能力者が率いて来たとしてもいいのかアルミン!？」

「ライナー、巨人は一貫して人類を捕食する……でもあいつは誰かを探しているみたいなんだ」

壁外調査前にエルヴィン団長と会話した内容を照らし合わせると答えが出てくる。

シガンシナ区やトロスト区は超大型巨人に門を破壊されて巨人の大群が侵入してきた。

それが巨人化できる能力者がやったとすれば、答えが分かる。

つまり、奴らは本気で壁内の人類を滅ぼそうとして巨人を連れて門を破壊した。

混乱しているうちに避難民に紛れ込んで壁内の住民と馴染んでいる可能性がある。

「話はよく分かったけど、なんであの巨人が誰かを探していると思ったの?」

「馬から転落した時にフードをとって僕の顔を確認して去っていったんだ…」

「もしかしたらエレンを探しているかもしれない」

巨人が人間を目の前にして捕食しないのはあり得ない。

急所を狙われた時に的確に調査兵を殺害したのも踏まえると、巨人化できる能力者の
仕業だ!

∴第三者視点なら、話を聴いてみれば分かるが、当事者ならまず気付けないだろう。
しかも動作でエレンを探していると分析できるとはさすが座学トップ。

フローラは、僅かな情報だけでそこまで導き出した将来の参謀候補に素直に関心して
いた。

「エレン?あいつの居るリヴァイ班は右翼に展開しているはずだが…」

「右翼側？オレに配布された作戦企画紙では左翼後方になってたぞ」
「わたくしの作戦紙には団長の後ろに展開している事になってるわ」

ライナーは右翼、ジャンは左翼、フローラは次列の後方にエレンが居ると言っている。アルミンは3人の話を聴いてエレンの居場所を意図的に隠していると気付いた。部隊ごとに人類の希望である彼を配置している場所をわざと変えている。

つまり、エレンを狙っている敵がどの情報を掴んで襲撃してきたかという事に気付けるように！

今回の場合は、エレンが右翼に居るといふ情報を知っている人物が敵だと暫定できる！

「僕の作戦紙には右翼前方と書かれていたけどそんな最前線にいるわけがない」
「じゃあエレンはどこに居るんだ？」

「一番安全なところに居るはず…だとしたら中央の後方あたりかな」

ライナーの素朴な問いに対して的確にエレンの居場所を当てたアルミン。

ここで第57回壁外調査が、巨人化できる能力者をおびき寄せる罠だと伝えるべき

か。

フローラはその判断を迫られていた。

この作戦に参加している者の誰かが人類と敵対しているスパイである。

だからこうやって犠牲者を出してでも進軍しているがもう我慢の限界だった。

『わたくしは記憶喪失している新兵ですよ？何故そのような事を打ち明けたのでしょうか…』

『エレンに対する君の態度と実績、そして何より私と〔同類〕だからだ』

その残酷な事実を新兵の自分に教えてくれたエルヴィン団長。

目的を達成するならどんな犠牲を払っても達成してみせるといふ覚悟をした顔であつた。

彼の言葉と信頼を踏まえるなら自分がとるべき選択肢は―。

「アルミン！あの巨人化能力者がエレンを探して襲撃してきたって事でいいの!？」

「あいつの行動を考えるとそうだとしか思えない！」

「じゃあ！その事を味方に伝えないといけないわ！」

フローラは、残酷な事実を彼らに伝えなかった。

もしかしたらこれ以上の犠牲者を減らせるかもしれない情報を握り潰した。

これで何も知らずに調査兵がいつも通り巨人に挑んで死体を更に増やしていく事だろう。

「おいおい！煙弾が指令班に届いて撤退運動に移れば巨人集団は回避できるが…」

「ここで巨人化できる能力者だという情報を伝達する術はねえぞ！」

後が無いと断言するライナーの発言を聴いてジャンは腹を括った。

「確かに届くわけがないな…気付けない指令班が潰されたら陣形が崩壊してお陀仏ってところか」

「ジャン、何か腹案があるように言っているみたいだけど、どうしたの？」

3人は馬を走らせているジャンの顔を見た。

いつもの自己中心的で偉そうで他人事な態度をする彼のする表情ではなかった。

だからといって絶望して恐怖に怯える表情でもない。
まるでー。

「つまりだな…この距離なら奴の興味を惹けるかもしれない…」
「オレたちが撤退までの時間を稼げるかもしれないねえ…何つつてな」

ジャンの発言に3人は無言になったどころか、発言した張本人ですら口をつぐんでしまった。

そして前方で走っている巨人と4頭の馬が走らせていく音しか聞こえなくなった。
まるで誰かの決断する一言をちゃんと聞き取れる環境にしているかのように。

「あいつには『理性』がある…僕らは虫けらの扱いみたいに叩かれるだけで潰されちゃうよっ…」

「ハハハ、マジかよ…おかねえな…それ」

「お前…本当にジャンなのか？俺の知るジャンは、自分の事しか考えられない糞つたれのはずだ」

「そうよ、いつもの貴方らしくないわ…馬の小便でも浴びて頭でも冷やしたらどう？」

「おいおい……本当にデリカシーの欠片すらねえのか……お前らは……本当に……失礼だな」

口とは裏腹に本気で氣遣ってもらえるジャンは自分が幸せ者だと思った。

トロスト区を巨人に襲撃されたにも拘わらず実家も両親も無事だった自分は幸運だと思った。

この壁外調査という地獄の中で、複数の巨人に襲われても安心できるほど頼れる仲間たち。

ここで何もせずに馬を走らせていれば、きっと生き残れる。

「……オレはただ」

思い浮かぶのは、トロスト区に死体を集めて茶毘たびに付したあの日の事。

自分が調査兵団に入団するとその場にいた同期たちに明言した時の事。

その発言に驚いたフローラが正気に戻す為に、バケツに入った水を自分に浴びせた時の日の事。

本気でみんなから心配されて、野郎2人に担がれて兵舎に直行で運ばれた事。

今、思い出しても碌な事がないなつとジャンは思ってしまうくらいには、情けなかつ

た。

「誰の物とも知れねえ骨の燃えカスに……がっかりされたくないだけだ……！」

あの日に誓ったのは、自分が骨の燃えカスに情けない姿を見せない事。

こんなどうしようもない自分を信頼してくれたマルコ・ボットに失望されない行動をする。

それがあの運命の日から目標であり目的であり自分を縛り付ける呪いだっただ。

それでもジャンは決して自分が後悔しない生き様を骨の燃えカスに見せつけたかった。

「オレは……オレには！今何をすればいいのかわかるんだよ！」

「そしてこれが！オレたちの選んだ仕事だ!!何でも良いから力を貸せ!!」

自分の想いを絞り出すように痰火たんかを切ったジャンは後悔していない。

例え見捨てられて一人になっても、あの巨人相手に突貫して玉砕するつもりだった。

「フードを深く被るんだ！深くだよ！顔があいつに見えないように！」

「あいつは僕らが誰か分からない内は下手に殺せないはずだから!!」

最初に発言したのはアルミンだった。

彼は自分の発言を受けて気が紛れる程度の対策案を告げた。

「なるほど、エレンかもしれない奴は迂闊に殺せないと踏んでか……」

「気休めにしては上出来だ！ついでにあいつの目が悪い事にも期待してみよう」

頼れる兄貴分のライナーが自分の意見に乗ってくれた。

彼も本当は戦いたくないだろうに本能を理性で抑えつけてくれて賛同してくれた。

「はあ……成長したと思いましたがの……根本的には変わってないのね」

「なんだとフローラ！てめえ！」

「女が惚れるカッコイイ男になったと思つたら結局、私を巻き込んで死地に行かせるつて事よ！」

「…すまねえ」

「いいわ！ジャンの提案に乗るわ！要するに誰も死なないように妨害すればいいんですよ？」

「ああ、そうだ」

何かにつけてジャンはフローラを巻き込んだ。

最近だと、ミカサに抱擁されたエレン達に嫉妬して近くに居た彼女に喧嘩を売った。

立体機動装置が壊れた時は、彼女に囮になつてもらった。

ガス切れで兵団本部に突入していった時には援護してもらった。

トロスト区の攻防戦だけでこれだけ迷惑をかけてしまったにも関わらず彼女は賛同してくれた。

「ありがとうな…お前ら」

「感謝の言葉なら壁内に帰った時にしてくれない？死亡フラグ満載で見られないわよ？」

「チツ！しょうがねえな！お前ら、オレ様がお礼を言うまで死ぬんじゃねーぞ！」

無理難題に対して3人が頭を縦に振ってくれてジャンは嬉しかった。どうしようもない糞野郎の意見に賛同してくれた彼らに内心で先にお礼を告げた。

「アルミン…お前はエレンとベタベタするんでばつかで気持ち悪いって思ってたが見直したぜ」

「え？どうも、でも気持ち悪いとか心外だよ」

ライナーは、フードを被ったジャンを見て変わったんだなーと思った。

昔のあいつなら巨人と遭遇する事すら嫌がったし、このような無謀な発言をしなかったからだ。

兵士というより人間として成長した彼を見て羨ましくてしよがなかつた。

「良いかお前ら！これからオレの言う事を踏まえて行動してくれ」

「まずフローラを囿にして全速力で味方に伝達しに行きますとかじゃなかつたら何でも良いわ！」

「よーしオレの発言が終わるまで、黙っててくれないか？」

空気を讀まないフローラの言葉によつて緊張感がほぐれる。

1人だけ壁外任務を何度もこなしているからこそその発言だと、彼らは気付いていた。現にさつきまで声が震えていたジャンが怒りでいつも通りになったのが答えだ。

「少しでも長く注意を惹きつけて：陣形が撤退できるように尽くしてくれ」

「もし脚の腱を削げたら、それだけで充分どころかお釣りがくるだろう」

「だが無茶をするなよ……うなじの弱点を把握している以上、即座に反撃してくるぞ」

「他の巨人と違って仕留めるのは不可能だからな！」

ジャンの作戦を横で聞いていたアルミンは、倒すのは不可能でないと思った。

トロスト門の前で、一瞬で巨人を2体同時に討伐して見せたりヴァイ兵士長。

カラネス区の壁外で単独で14体討伐してみせたフローラ。

彼女とほぼ同格、それどころか活躍できる機会がないだけで、それ以上のはずのミカサ。

ジャンもライナーも訓練兵の中では立体機動の達人であり実戦経験が少ないだけだ。

「おいフローラ！ここで倒れても医務室に運ぶ搬送班は来ないぞ！」

「まるでわたくしは無茶をやって死にかけるみたいに言うわね？」

「違うのか？」

「じゃあ、無茶しないで遠くから傍観してるわ」

「待て待て！悪かったって！フローラが居ないとマジで瞬殺されるから頑張ってくれ
！」

「素直に頭を下げないから、ジャンは嫌われるのよ」

軽口を叩こうとして予期せぬ彼女の反撃に必死に頭を下げるジャンが何か滑稽だった。

それと同時にアルミンは気付いた事がある。

「ねえフローラ？フードを被らないの？」

「一齐にフードを被ったらアルミンの作戦に気付かれちゃうでしょ？」

「ダメだよ…本当に死んじゃうんだよ！」

「じゃあ死なないように先人たちがどんな感じで死んだのか教えてくれない？」

フローラからすれば幾度となく死線を越えてきたので慣れているがそれでも欲しい

物がある。

回想すると常人からすればとんでもない経験をしてきたが、それでも情報が足りなかった。

「握り潰されたり、叩きつけられたりしたよ！ワイヤーを掴んでくるかもしれない」

「胃液を吐き出したり、アンカーを刺した瞬間に転がったり空中で高速回転したりしなかった？」

「いや、さすがにしていけないよ…」

「所詮、人間の動きしかできないって事ね！」

変異種を相手にしてきたフローラからすれば、予想範囲内で終わっていた。

あとは巨人化能力者の格闘術くらいか。

超大型巨人みたいに蒸気を噴き出していないので、個体によって違うかもしれない。とにかく、人間が動作をしている以上、人外の動きができないと知って安心した。

「その口ぶりだと実際に経験したみたいに聴こえるんだが？」

「実際にそんな動作をした巨人に遭遇したし、対応して討伐したわよ」

「すまねえエレン、やっぱ本家は違うわ…死にかける経験が桁違い過ぎるぜ…」

この壁外調査で生還したら、フローラの経験談を聞いて自分の役に立てよう！
彼女の発言に呆れながらも3人はそう誓った。

彼らはまだ死にたくないし、同じ経験をして学ぶのは嫌だったから。

「フードを被っていない以上、攻撃優先度はわたくしが一番高いわ…あとは分かるわよね？」

「オレに文句を言いながら自分から囮になるつもりか？」

「代わりにジャンがやってもいいのよ？」

「フローラが巨人の気を惹いているうちに脚の腱を斬って妨害するぞ！」

「おう！」

「うん！」

ジャンの決断で女型の巨人の足止めをする事となった。

エルヴィン団長から緑色の信煙弾が撃たれていないせいで、未だに陣形は進軍状態のままだ。

彼が異変を察知して速やかに部隊に指示を下すまでの時間稼ぎをする。長距離索敵陣形の運命は、この場に居る4人に託された。

「行きますわよー！」

フローラは黒色の信煙弾を女型の巨人に向けて撃った。

弾は回転しながら黒煙を吐き出しつつ「彼女」の右肩を霞めた！

それに気づいて振り返ると目の前にフローラ、そして後方に3人が展開するようになった。

戦闘は避けられないが、時間稼ぎをする事はできる。

104期の調査兵でありながら巨人の討伐数30体を越える女兵士。

経験豊富な調査兵団の兵士を20人以上いとも容易く葬ってきた女型の巨人。

彼女達による初めての殺し合いが幕を開けようとしていた…！！

30話 フローラ VS 女型の巨人 First B
a t t l e

“彼女”は蠅の群れに襲われている。

それも体長が掌サイズもある積極的に殺人をしてくる蠅である。

その癖、人語を解して集団で襲い掛かってくるから質が悪い。

「ぐぎやああっ!」

まるで伝承上に出てくるマンドレイクみたいな虫である。

地面から引き抜くと凄惨な悲鳴をあげて人を死に至らせるといふマンドレイクという植物。
う植物。

それを彷彿させるかのように潰す度に大声で断末魔の叫びをあげてくる。

「ほげっ!」

踏む、殴る、蹴る、握り潰す、叩きつける、両手で叩く。
何をしてもその悲鳴が頭から離れない。

せめてもの情けで一撃で殺すようにしてもなお、蠅の顔を忘れることができない。
殺人ではなく虫を退治していると割り切っても彼らの悲痛な叫びが身を引き裂きそうになる。

「ば、化け物！早く団長に…ぶほっつおおおっ!？」

でも、もうすぐこの地獄で苦しむ事は無くなる。

今まで搜索してきた探し物らしきものを見つけたからだ。

これでようやくこんな地獄から抜け出せる。

「行きますわよ!」

それなのに!それなのに!

自分の知り合い…それもよりによって自分を勇気づけてくれた虫が挑んできてしまった。

フローラ・エリクシア…来るな！こっちに来るな！！

人間の理性と巨人の本能、希望と絶望、悲しみと怒り、荒くなる呼吸と高まる鼓動。ようやく大切な知り合いを殺す覚悟ができた。彼女”であつたが動きがぎこちなかった。

「妙ね…襲撃して来た割には感情がすごい事になっているわ…」

フローラは、女型の巨人から”声”を聴いて心境を探るとかなり違和感があつた。

巨人の”声”は人間と違って呻き声をあげている。

通常種は悲しい”声”、奇行種は楽しそうな”声”という感じだ。

今回の場合は、巨人化能力者なので人間の”声”が聴こえている。

『来るな来るな！やっぱり戦いたくない！お願いだから来るな！！』

さきまでは、やけに消極的な負の感情だったが自分の顔を見た途端、拒絶反応を起こ

していた。

健全なる精神は健全なる身体に宿るというが、完全に精神がボロボロであった。女型の巨人がフードを外したアルミンを殺害しなかったのも分かる。

「ライリー！GO！」

フローラは舌鼓を3回打ちながら同時に鞍を3回叩いた。

この合図は、『自由に駆け回れ！』という指示だ。

殺人を恐れている以上、狙って来るのは愛馬のライリーだと分かっていたからだ。

緊急事態に対応できる芸を仕込める専用馬の特権をフル活用した。

「予想通りね…」

女型の巨人が真っ先にこっちに向かってきたのを確認して鞍上から飛び出してガスを噴出した。

巨人が伸ばす右手の真下を潜って加速したライリーは回避し、彼女も身体を捻じ曲げて回避した。

そして巨人の右耳の耳たぶに左のアンカーを射出してワイヤーを高速で巻き取った。人が高速で動く小さな生物を掴む時は、必ず停止してしやがみ込むのを利用したのだ。

「…うっ」

目の前から右上に飛び込んでくるのを見た巨人は無意識で左手で掴みにかかる。

そんな事など織り込み済みの彼女は左のアンカーを外して地面に向けて右のアンカーを射出した。

更に射出したワイヤーを巻き取ると同時に両方のボンベからガスを噴出して急降下した。

これにより、フローラより立派な女型の巨人の胸と左腕の死角に彼女は隠れることができる。

フローラを視認、左手の位置確認、目標に向かって手を伸ばす際のタイムラグで回避できた。

「…っ！」

当然、そのままだと3秒足らずで地面に激突するので更に回避行動を取った。

まずは地面に撃った右アンカーを外す動作をした。

立体機動に肉体がついてこれてないフローラは既にブラックアウトで何も感じ取れていない。

記憶と経験と優れた空間把握能力を駆使して左足首に両方のアンカーを射出した。

「……」

耳たぶや地面に撃って外した2つのアンカーの位置や向きなどフローラが確認する術はなかった。

それどころか、自分がどこに向いているか、目標の左足首の位置はおろか手の感覚すらなかった。

彼女はできるのは、過去の経験と訓練と事前の記憶に基づいて、双剣を構えているつもりだった。

「？」

女型の巨人は、右肩に飛び込んできたフローラを補足した。

左手で叩き落そうとしたが、視界から彼女は消えてしまった。

慌てて両手でうなじを守りながら後ろを振り向くが彼女の姿はなかった。

僅か数秒で跡形もなく蒸発した彼女に疑問に思いつつ他の3人を狙おうと立ち上がろうとした。

大きな衝撃を感じたと共に立ち上がれず、前のめりで転倒して顔面を強打した。

「ようやく跪いたわね！女型の巨人！」

フローラ・エリクシアは今回初めて、急上昇からの急降下で方向転換して攻撃を成功させた。

こういった状況を想定して、訓練兵時代に4回実施したが全て失敗して医務室送りになった。

それでも彼女は諦めなかったし相手側が立体機動を理解しているからこそ無謀な行為に挑戦した。

初めての实战、そして地面にアンカーを撃ち出して急降下という状況下で成功させた

のだ。

コンマ秒と20cmでもズレていたらどこかを強打したにも関わらずフローラは怯まなかった。

「隙あり！」

ようやく視界が回復してきたフローラは自分が左足の腱を削り取ったのを辛うじて確認できた。

まだ視界が狭窄しておりグレイアウトの症状が続いており、ほとんど勘で動いている状態である。

それでも倒れ込んだ女型の巨人のうなじを補足した彼女はスナップブレードを振り下ろした。

「…やはりダメね」

女型の巨人は状況が把握できずにパニックになっていた。

腱が斬られるなんて想定してなかった「彼女」は無様な姿で前のめりでうつ伏せに

倒れてしまった。

その際にうなじを守っていた両手を無意識に地面に付けているので弱点が剥き出しであった。

辛うじて【硬質化】が間に合ってフローラの斬撃からうなじを守ってくれた。

「すごい…」

アルミンは頼れる先輩たちを惨殺した圧倒的強さであった女型の巨人。

そんな巨人が無様にも首を垂れて両手を地面について討伐されそうになっていた。思わず索敵をやめて馬を止めたまま、その状況を眺めていた。

「うなじを守ったのは結晶？この巨人特有の能力かしら？」

結晶の様な物で刃が遮られて双剣をダメにしたフローラは速やかに回避行動を取った。

未知数の能力なので追撃よりも様子見をして情報を収集するのを優先した。

すぐに巨人が彼女を捕まえようと両手を勢いよく伸ばしてきたので先見の明であつ

た。

「さて、どうくるのかしらね…」

左足首の傷を回復させた女型の巨人は、すぐに立ち上がって敵を殺す覚悟をしている。

フローラの実力は知っていたが、まさかここまで強いとは思っていなかった。

訓練兵時代の彼女は立体機動訓練で無茶をやって医務室送りになるイメージしかなかったから。

まさかそれがフローラの強さに生かされているとは知らない。彼女は恐怖した。

「マジかよ…」

ジャンはフローラと女型の巨人を注視しながら距離をとってライナーと共に索敵をしていた。

自分が突っ込んででも邪魔にしかならないと思っていたが正解だった。

既に腱を斬って女型の巨人相手に時間稼ぎをしている上に運が良ければ討伐できそ

うなくらいだ。

3人ができるのは、新手の巨人を発見してフローラに危機を知らせるくらいしかなかった。

「跳んだ…!?!」

戦闘を傍観していた3人は女型の巨人が飛び上がったのを目撃した。

「!」

女型の巨人は本気でフローラを殺しにかからないと自分が殺されると自覚していた。しかし、フローラは他の兵士と違ってワイヤー掴ませるほどの隙を見せてくれなかった。

それは、彼女が肉薄するように白兵戦をするのが得意だったのもあるが別の要因があった。

専用装備として身に着けていたシユツルムハーケンという立体機動装置。

それは他と比べてアンカーの射程範囲が狭かった。

逆に言えばワイヤーを巻き取る速度が速いので、必然的に小回りが利いていたのだ。

“彼女”は目で追いきれない以上、空中を跳ぶ事で移動の妨害と同時に有利に立ち回ろうとした。

「喰らいなさい！」

それすらも先読みしていたフローラは、折れた刃を女型の巨人の左目に向けて投擲した。

2本の刃の内、1つが眼球に命中し、巨人の視界を狭めるのを確認する前に空中で刃を交換した。

空中で刃を交換する事など教本には記されていないし、落下中にやる馬鹿など居ない。

ただ、リヴァイ兵士長が空中で刃を換装したのを目撃した彼女は見真似してラーニングした。

『空中刃換装』のスキルがある彼女からすれば、大きな隙を作った巨人に感謝するくらいだった。

「その首ごとぶっ飛ばしてあげるわ！」

強化刀身・1型を換装したフローラは、女型の巨人の喉袋より下の部位を大きく切り裂いた。

その双剣の刃は、女型の巨人のうなじまで迫っており、巨人化能力者の眼前で肉を切ってみせた。

嫌な予感がして反射的に「彼女」が仰け反らなかつたら額を斬られる錯覚をさせるほどだった。

「さすがに無理だった…残念だわ」

女型の巨人という巨体を操作している「彼女」は恐怖で全身が震えていた。

瞑目めいもくしたおかげで返り血が眼球に直撃するのは避けられたが錯乱して思考が狂った。跳んだ衝撃で振り回されたフローラを殺すつもりが逆に本体に刃が迫る結果になってしまった。

狩られる巨人の立場になった「彼女」は意識がある分、更に動きが鈍った。

「やべえ…なんか想像したと違う結果になってる…」

ジャンは、巨人の足止めをして時間稼ぎができれば上出来だと思った。

経験皆無の新兵たちが巨人化能力者を少しでも惹き付けられるなら良いと考えていた。

現状は首を大きく斬られて頭が大きく傾いている女型の巨人が成す術なく地面に激突していた。

卓越な戦闘能力で追い詰めて高笑いするフローラを見て彼は現実感の感覚が薄れていた。

「おいおい大丈夫なのか…」

ライナーは彼女が負けるわけがないと思っていた。

だが、予想以上にフローラが奮闘しており衝撃を受けていた。

さきほど見せた動きといい、まだ隠し玉を持っていそうな彼女に殺されないか心配になっていた。

「さあ、次はどこを削いであげようかしらね！」

精神的な支えになつてくれたフローラとは思えない殺意剥き出しの口調。

このままでは本気で殺されると思つた「彼女」は別のターゲットを捕捉して駆け出していった。

何故か馬を停止して俯瞰している調査兵が状況を打開できる鍵だと思つたからだ。

必死に左手でうなじごと首を抑えて傷が附着をするのを期待しながら全速力で駆け抜けていく！

「しまった！アルミン！逃げなさい！」

フードを被っている以上、フローラは騎乗しているのが誰かは目視で識別ができなかった。

ただ、「声」を聴く限りアルミンだったからそう発言しただけだ！

「うっ！」

アルミンは慌てて回避行動を取るが遅かった。

女型の巨人の右手の指先が馬の胴体に接触して吹っ飛ばされた。

鞍上から放り出された彼は、空高く舞って地面に激突してもなお動きが止まらなかった。

立体機動装置や鞆、ガスボンベがぶつとんでいっても転がり続けていく。

彼の顔面が血塗れになった時、ようやく停止した。

「ハッ!!」

フローラは怒りに身を任せて双剣を構えて女型の巨人を強襲した。

一方、絶望的な状況から脱出できた「彼女」は落ち着きを取り戻しており余裕ができていた。

冷静に声が出した方へ右腕を後方に思いつきり薙ぎ払った!

「くっ!」

目の前に拳が見えたフローラは両方のアンカーを外してワイヤーを回収して回転斬

りを行なった！

直撃を免れた同時に攻撃を受け流す事には成功したが強化刀身・1型は音を立てて派手に折れた。

スナップブレードは巨人のうなじを削ぐためにあえてしなるように作られている。殴打の衝撃で吸収しきれずに刃が折れるのは当然の結果だった。

「ううっ…」

ガス噴出して回転斬りを行なったおかげでさほど肉体にはダメージを受けなかった。ただし吹っ飛ばされたフローラは適度に身体を回転させながらガス噴出をして着地に備えた。

再び空中で刃を換装した彼女が目にしたのは…。

女型の巨人に向けてアンカーを撃ちこんで突っ込んでいくジャン。そして着地点になるはずの地面から飛び出している大岩を発見した。

「どっどっしてっとうなるのおおおっ！！」

フローラは落下速度をガス噴出である程度抑えたもののそこに激突したら肉塊になると察した。

換装したばかりの双剣をやけくそに大岩に叩きつけてそこを乗り越えて更に吹っ飛んでいった。

刃は折れ、両腕に激痛が迸って身体は予想外の方へ飛んで行って地面に衝突した。

それでも命があつて五体満足であるのは彼女自身の判断力と過去の経験からか。

訓練兵時代でも立体機動訓練に失敗しても、受け身だけはしっかりとこなした彼女である。

唯一の例外は、巨人化したエレンを庇った時にハンジ分隊長に投げ飛ばされた時だけだった。

「クソ！なんでこんなことを…」

一方、アルミンを攻撃されて女型の巨人に突貫してしまったジャンは後悔していた。「アルミン！」と叫んで魅力的な筋肉質の女の身体にアンカーを撃ちこんだのは良かった。

ただし、直後の巨人の動きを見て運動精度が尋常じゃないのを見抜いてしまった。

フローラに弄ばれる様に追い詰められていた女型の巨人。

異常だったのは巨人ではなくフローラであつて、彼では殺された調査兵の実力でしかなかった。

「うっ！」

人が考えて巨体を操っている。

それはアルミンから話を聴いて理解していたはずである。

フローラによつて一方的にボコられていたので失念してただけで本来はかなりの脅威だった。

「あぶなっ！」

目の前から左腕による薙ぎ払い攻撃を視認したジャン。

一度アンカーを外して、左脚に撃ちこんで左腕の薙ぎ払い攻撃を辛うじて回避した。ガス噴出と身体を捻る事でなんとか巨人の後方に回り込んだ。

「ジャンー！」

一連の騒動を見ていたライナーは急いで馬を駆けて女型の巨人へと向かっていった。

「くそくそー！」

ジャンは、できるだけ女型の巨人から離れようとしたのが運の尽きだった。

女型の巨人がうなじを左手で抑えて守っているのを見下ろすことしかできなかつた。

さつきは運よく攻撃を躲せたものの今度は伸びきったワイヤーを掴まれる危険性があつた。

「どつかの『頭エレン娘』のように無謀にも巨体に突っ込む事ができない彼は死を覚悟した。

「ひっー！」

女型の巨人の右腕が動いた瞬間、ジャンの時は止まりそうになつた…。

「ジャン！仇を取ってくれ！」

痛みも絶望も押しつけてアルミンはただ大声で叫んだ！

「右翼側で本当に死んでしまった『死に急ぎ野郎』の仇だ！そいつに殺されたんだ！」

アルミンは何度も殺す機会があったのに自分を殺さなかった女型の巨人。

それを踏まえてある賭けを行なった。

「いつ!？」

一方でアルミンの意図を察せなかったジャンは焦った。

彼は頭を打って錯乱したとしか思えなかった。

ただ、何故か殺意剥き出しで右腕を伸ばしてきた女型の巨人の動きが止まった。

とにかくこれが好機だと思い、近くにあった木にアンカーを射出して生還できた。

「僕の親友をそいつが踏み潰したんだ！絶対に逃がさないでくれ！」

「早く『死に急ぎ野郎』の仇をとってくれ!!」

アルミンに惹かれた女型の巨人の隙を見てライナーが飛び掛かったのをジャンが目撃した。

何故か策士アルミンの策であるフードで顔を隠すのを放棄していた。

まるで自分の顔を見せたいように彼は巨人に双剣を構えて突撃していった。

もつとも『エレンが死んだ』とアルミンを断言したのを聞いて邪魔なフードを脱いだのだろう。

そう思ったジャンは死角から飛び込んでいった彼の動きを見守る事しかできなかつた。

「早くきてえええええ! フローラあああああ!!」

アルミンは女型の巨人のうなじを狙うライナーを目撃した。

だからこそ女型の巨人の注意を惹くべく逃げる事もせずに大声で叫んだ。

しかし、その努力も空しく終わった。

ライナーと女型の巨人が顔を見合わせてしまった。

「あつ…」

「おい…」

ジャンとアルミンは、ライナーが死んだと思った。

一瞬のうちにあの彼の巨体を片手で掴んで締め付けてしまった。すぐに肉塊になって血の噴水になってしまっただろう。

「くっ…うっ…い…ぐっ！」

分かってはいた。

分かっていたが実際に握り締められると相当きつい。

ライナーは本気で死を覚悟するほど女型の巨人は冷たい視線で見つめながら握りしめている。

相当苛ついているのか、彼を苦しめる様にゆっくりと締め付けており呻き声が聞こえてくる。

人体の圧迫に逃れようと無意識に抵抗する彼の涎と汗が巨人の指を濡らしていた。

「ライナーああああああっ!!」

すぐに痛みから復帰したフローラは全速力で女型の巨人に向かっていった。

既にライナーは手遅れに見えたがそれでも最後まで諦めずに双剣を構えて突撃していく!

「フローラ! お前なら絶対にできる!」

「ライナーも絶対に故郷に帰れるわよ! お互い頑張りましょうね!」

「ああ! これからも頼むぞ!」

「こちらこそよろしく!」

互いに目標達成を願った仲である。

同志のエレンとはまた違った親友だ。

だからこそ気力を振り絞って息を切らして吐き気を必死に我慢しながら全力で向かっていった。

「お、おいライナー…お前！」

「えっ…」

「あっ！ああああああ!!せめてええええ！討ち取ってやるうう!!」

女型の巨人がライナーを握っている拳に力を込めた瞬間、血が噴き出した。

絶望する2人と噴出した血を見て復讐心で戦鬪狂になってしまったフローラ。

哀れなライナーは握り潰されて圧死してしまつたと全員が思った。

その瞬間！

「えっ!?!」

血塗れになつたライナーが巨人の指を全部切断しながら飛び出してきた。

さきほどの血は彼のものではなく女型の巨人のものであつた。

回転斬りでなんとか脱出した彼は必死にアンカーを刺して華麗に着地した。

高熱の体液で顔や胴体を痛めながらも必死に逃げ切つて見せた。

「もう充分だろう！お前ら急いで逃げるぞ！」

本気で死にかけたライナーは、動けなくなったアルミンを抱えて必死に逃げ出した。ジャンは元から戦う気はなかったし、フローラもこれ以上の戦闘は危険だと察している。

「人喰いじゃなければ、俺たちを追いかけたりしないはずだ！」

「でもあいつを攻撃した班長達は殺されたんだよ!？」

「逆に言えばこつちから仕掛けなければ、攻撃してこないって事だ！」

「ジャン急いで！わたくしがしんがりをするわ！」

ライナーに続いて2人も女型の巨人から逃げ出した。

といつても、追撃して来たら返り討ちにする気満々のフローラは彼女を注視していた。

「やっぱ、すげえよライナー……」

「どうしたジャン……」

フローラを筆頭にミカサも凄い奴だったがライナーも充分頼れる男だと再認識した。成績上位10位のうち、筆頭のミカサが化け物染みた強さの女である。

それに食いつく2位のライナー・ブラウンが凄くないわけがなかった。

フローラは…医務室送りの印象が強くてどうしても凄いというより不死身だと感じた。

とにかく命の恩人である彼にジャンは内心で感謝していた。

「えっ…」

「見ろ！筋肉質のデカ女め！狗みたいに威嚇しているフローラにビビってお帰りになる様子だ！」

「よしフローラ！大声で吠えろ！あのでかい女を更にビビらせてやれ！」

「あなたたち！わたくしを番犬か何かと勘違いしてない!?こんなにか弱い乙女を…」

「深窓の令嬢のように振舞ってもオレたちの目は誤魔化せんぞー！」

フローラからすれば心外でもライナーもジャン視点で見れば、番犬である。

さきほどまであれほど脅威だった女型の巨人が別方向に向かっていくその姿はー。

屈強な長身の女戦士が番犬を恐れて必死に逃げ惑うその姿に見えた。

「ぶっ倒してさしあげますわ！」

「もつと強く叫べ！」

「次！来たら！ぶっ殺す!!」

「よし、よくやった…これで来ないよな？」

とにかく叫ぶことを要求されたフローラは必死に女型の巨人に向かって罵倒した！

何度もジャンからダメ出しされながら殺意を剥き出しにして叫んだ。

それはもう、たまたま通行人を発見して姿が見えなくなっても吠え続ける番犬みたいな…。

女型の巨人の後ろ姿が見えなくなった時、ようやくライナーとジャンはその場に座り込んだ。

「なんで…」

アルミンだけは女型の巨人が向かっていった方向に危機感があった。

“彼女”は陣形の中央部、つまりエレンが居ると推測される場所に向かっていったか

らだ。

殺人どころか、誰かを搜索している素振りすら見せていた「彼女」。

もし、探し求めているのがエレンであるならば、早く本人に伝えなければならぬ。

「フローラ！お座り！お手！」

「ジャン…やりやがった…骨だけは拾ってやるぞ…」

「おいズルいぞ！ライナー！お前がフローラを番犬って評したから乗っただけなのに
！」

「やって良い事と、悪い事の見分けくらいつけておけよ…」

「ジャン、後で覚えておきなさい…！」

軽口を叩き合っている3人も自分も馬が居ない。

エレンにどうやって連絡すればいいのか。

それでもアルミンは思考を停止しなかった。

「みんな！ちよつと良い!？」

彼は女型の巨人の目的と、向かっていった方向をライナーたちに説明した。

31話 巨大樹の森

ジャン・キルシュタインは必死に指笛を何度も吹いていた。

女型の巨人の戦闘後に戻ってきた馬は一頭だけであつた。

必死に指笛で呼び戻そうとしているが帰ってくる気配がない。

馬が居ないと壁外では自殺行為といわれるほど、詰みの状況下である。

「おいしいい！こいつをなんとかしてくれ！」

「ライリー！落ち着いて！どうどう！」

フローラの愛馬のライリーが何か恨みがあるようにライナーを追いかけていた。

別に名前が似ているせいで混乱して追いかけているのではない。

この人見知りの赤い体毛の馬は、フローラですら乗せてやっているんだという気質があつた。

その為、良く分からん大男のライナーが自分の許可なく乗馬しようとしたので激怒したのだ。

「悪かったって！うおおっ!？」

自称ご主人気取りのフローラが乗馬して宥めようとするが知るか馬鹿！

こいつ、さっきの女型の巨人と同じ気配がするから蹴っ飛ばしてやる！

と言わんばかりに執拗に追いかけるライリーはライナーを全力で蹴ろうとしていた。

「あの馬鹿共……こっちは必死に指笛で呼び戻している時に何をやってんだ……」

ジャンは段々馬鹿らしくなってさきほどの出来事を回想し始めた。

女型の巨人が居なくなつた直後、フローラが何故か立体機動装置を外し始めたのは覚えてる。

「お前何やってんだ!？」

「淑女の着替えを見ないでよ！エッチ!」

「馬鹿！壁外で立体機動装置を外すな!」

「だから立体機動装置を変えているんでしようが!」

何故か予備の立体機動装置や鞆を付け始めたフローラ。

それは赤い色で統一されており、自分たちの鞆や装置と形状が違っていた。なんで変えたのか分からないが、身軽になって動きやすくなった印象である。

「なんだこいつ!」

「ライナー!なんで勝手にライリーに乗ろうとしたの!?!」

今度はライナーがフローラの愛馬に何かをやらかしたらしく追いかけて回されていた!

彼女は慌ててさきほどの立体機動装置と鞆を抱えながら愛馬へと駆け出していった。

「ぎゃああああ!」

「ライリー!ライリー!待ちなさい!!」

「…全く、あいつらには危機感がないな」

それを見てアホらしくなってさつきまで指笛を吹いて馬を呼び戻そうとした!

…したが、帰ってくる気配が無くて諦めて振り返ったらまだ追いかけていた。続いていた。

激怒したライリーが口を突き出し歯を剥き出しにしながらライナーを追いかけている。

気を紛らわせる為、文章にしてみると名前が似ていてややこしくなってきた。

「畜生…これじゃどうすることもできねえぞ」

唾液で濡れた両手を振ったジャンは、好き勝手にやっているフローラの馬を恨めしく思った。

アルミンの馬は死んで、ライナーと自分の馬が行方不明になっていた。

唯一帰ってきたのがよりによってあの馬であり、事実上3人は徒歩で移動しなくてはならない。

「ねえみんな！信煙弾を撃つて味方に知らせよう！まず馬が必要だ！」

「アルミン！近くにクリスタが居るわ！きつと彼女なら予備の馬を持っているはずよ！」

「それはいいから、今はこいつを何とかしてくれ!!」

貴重な信煙弾を撃ち込む事にしたアルミンの提案に全員が賛成した。

フローラの言葉を受けてジャンは緊急事態を知らせる黄色の信煙弾を上空に撃ちこんだ!

一方、ライナーは未だに馬に追われており、悲鳴をあげていた。

「これで来るといいけど…」

「それよりアルミン、立体機動装置は大丈夫なのか?」

「留め具が正しく外れてくれたおかげで壊れていないよ」

「五体満足で生還できたといい不幸中の幸いだな」

「ありがとうジャン…君は本当に優しいんだね」

その時、彼の脳裏に浮かんだのはマルコの笑顔だった。

それは過去の記憶から作り出された幻影のはずだったが何故か現状に喜んでいるように感じた。

「どうしたの?」

「いや、なんでもない」

これであいつも安心して安らかに眠ってくれよう。

アルミンの質問を受け流したジャンはマルコの冥福を祈った。

「ほーら、ライリー! 好物の野菜よー? 大人しくしないとあげないわよ!」

フローラは隠し持っていたポロポロになった野菜を持って彼女の気を惹いていた。

何度も好物争奪戦でフローラに負けていたライリーはしぶしぶ歩みを止めた。

フローラは、大人しくなった相棒の口内に野菜を突っ込んで優しく頭を撫でてあげた。

「ふう…酷い目に遭った」

「図体がでかくて体臭が臭い野郎に乗られたら誰だって怒るさ!」

「さすが馬面野郎、馬の気持ちを理解しているな!」

「お前…オレのコンプレックスの1つを…」

ライナーとジャンが喧嘩しそうなのを無視してアルミンは望遠鏡で辺りを確認していた。

ちようどフローラが指を指した地平線からクリスタがこつちに向かって来るのが見えた。

「クリスタが来た！フローラの言った通りだ！」

「アルミン！馬は!?!馬は居るのか!?!」

「馬を3頭も引き連れてるよ！」

「よっしやああ！これで全員が本隊に合流できるぞ！」

クリスタが馬が3頭引き連れてきている。

つまり予備の馬と2人の馬を連れて向かってきたと分かった瞬間、フローラは決断した。

喜んで浮かれている3人に両手を強く合わせて音を立てて自分に注目させた。

「わたくしは、リヴァイ班と合流してエレンに危険を知らせるわ！」

「ダメだよ！無謀過ぎるよ！」

「まだ早い！とにかくクリスタが来るまで待った方が良いぞ！」

「落ちて着けフローラ！仲間が死に行くのを黙って見送れというのか!？」

心配して声を荒らげるアルミンや冷静な判断で団体行動を促しているジャン、そしてなにより…。

目の前で手を広げて立ち塞がったライナーの視線は、絶対に無駄死にさせない覚悟が見て取れた。

「もう時間がないわー！」

それでも女型の巨人を無視する事はできなかった。

団長から第57回壁外調査の真の目的を知らされているはずの兵士長に伝達しなければならぬ。

それが同じく作戦の真意を知る調査兵の役目なのだから。

「フローラ待って！」

「止めても無駄よ！」

「せめてこれを持って行つて！」

「これは…望遠鏡？」

フローラが望遠鏡を手にとって確認すると『アルレルト』と筒部に苗字が彫られていた。

ハンドヘルドの折りたたみ式という…つまり片手で運べる小型の望遠鏡であった。

さきほどアルミンがクリスタを発見したのに役立つた物。

それをどうして自分に渡すのか困惑した。

「君にこれをずっと預かって欲しいんだ」

「なんで？」

「これは最後に残った祖父の遺産なんだ…フローラに渡しておけば絶対に紛失しないと思つてね」

まるで、自分が生き残れないみたいに言うアルミンにフローラは不機嫌になつていく。

託されても扱いに困るし、さっきの野菜みたいに立体機動で粉々になりかねないからだ。

「そんな大事な物なんて受け取れないわよ…あなたに返すわ」

「せめてそれを使って女型の巨人を遠く離れた場所で確認して欲しいんだ」

「分かったわ…大事に扱うから安心して」

アルミンが自分を心配してくれている以上、受け取らない方が無礼だった。

丁重に受け取った彼女は、ライリーに備え付けられたポーチにしまつて出発をした。

「行きやがった…」

「本当に良いのか？お前の爺さんの遺産だろう？」

「うん、きつと彼女なら最大限に役立ててくれるさ！」

アルミンたちはフローラを見送った。

正直、さきほどの戦闘では援護どころか邪魔になってしまった。

4人で知らせに行くより彼女単独の方が女型の巨人と遭遇しても生き残れると判断

した。

フロローラの後ろ姿が豆粒より小さく見えた時、代わりに女神がやってきた。

「みんな！無事?!」

「「クリスタ！」」

「104期生の女神」ことクリスタが馬を3頭も連れてやってきた。

よく見れば、彼女が連れてきたのはライナーとジャンの馬であった。

おそらく女神パワーの効力に抗え切れずに同行したと思ってしまうほどの奇跡の状況。

彼女の心配そうに見つめる顔の背後からは後光が差しこんでおり女神パワー2000%はありそうだ。

思わずライナーとジャンは手を合わせて彼女に拝み始めた。

「もう！そんなに感謝しないでよ！」

「いや助かったぜ！一時はどうなるかとー」

「ああ！命の恩人には感謝できる時にやっておくべきだ」

ライナーとジャンは馬に跨って出発の準備をしていた。

クリスタが連れてきた予備の馬はアルミンが乗ることになった。

「アルミン、怪我は大丈夫？」

「うん、なんとか…見かけよりは酷くないよ」

「そう、良かった…」

アルミンが乗馬したのを確認した3人は本隊に合流するべく馬を走らせた。

まるでさきほどまで待機していた時間を取り戻すように大慌てで馬を駆けさせた。

「よくあの煙弾で来る気になったな…」

「ちようど近くに居たし、2人のネームプレートが付いている馬を発見して無視できなかったの」

「お前には俺と違って馬に好かれるし不思議な人徳があるようだな、命拾いした」

さきほどまでライリーという馬に追い回されていたライナーはクリスタを尊敬して

いた。

以前からそう思っていたが是非、彼女とお近づきになってもっと仲良くなりたかった。

下心もあるが、それ以上にクリスタは彼にとって女神であり天使であるからだ。

「最悪の事にならなくて本当によかった…」

クリスタの一言によって心を掴まれた男3人衆。

アルミンは彼女を『神様』と感じた。

ジャンは彼女を『女神』と崇めた。

ライナー・ブラウンは『結婚したい』と仲良くなる段階を飛ばして告白したくて緊張していた。

「急いで陣形に戻らないと…」

クリスタはそんな3人衆の気持ちなど露知らず必死に陣形に戻る事を考えていた。

そんな健気で純粋な女の子に3人の視線は彼女の後ろ姿に向けられている。

久しぶりに逢えた純粋な女の子に野郎共の心は驚掴みされてダメ男と化していた。フローラ？あれは女じゃなくて「性別フローラ」と3人は割り切っていた。

「緑色の信煙弾!?進軍を続行するっていいのか?」

「バカな!撤退命令だろう!」

左翼側の班から次々と緑色の信煙弾が上がった。

指令班を指揮するエルヴィン団長からの進軍の方向転換の指示に基づいて行われた。

右翼の索敵班が壊滅したにも関わらず、陣形の進路だけを変えて進軍を続行するようである。

「作戦続行不可能と判断する選択権は全兵士にあるはずだ」

「ああ、だから作戦不可能を伝える黄色の信煙弾があるんだよな…」

「もしかして指令班に煙弾が届いていないのか!」

ジャンとの会話でライナーは最悪の事態を思い浮かべた。

それは女型の巨人を過小評価、もしくはただの奇行種と判断して団長は作戦を続行し

た可能性。

もし、そうだった場合は、早急に真実を伝達しなければならない。

壁外において、長距離索敵陣形から逸れたら死が待っているだけである。

しかし、このままでは指令班が全滅して陣形が完全崩壊、巨人に各個撃破される最悪の未来。

そんな事になったら故郷に帰るどころか、巨人で死ぬか、今死ぬかの選択肢しかなくなる。

「どうすればいい!？」

「どうするって僕たちがやる事は決まっているよ」

「頼もしいなアルミン、じゃあ俺たちは何をすればいいんだ?」

「判断に従うんだよ」

ライナーの質問に対してアルミンは、他の班と同じ方向に向けて緑色の信煙弾を撃つて返答した。

“彼女”は笑った。

やはり、さきほどの光景は悪夢だった。

目覚めれば、きつといつもの天井が視界に広がっておりベッドの上に寝ているのだろう。

時折、地面が高速に落下したり肉親が殺されるなどの悪夢を見ると同じだ。夢から覚めれば、いつもの日常に戻るだろう。

「こつちを向け！バケモンが!!」

でも夢から覚める前に少しでも愉しんでも良いじゃないか。

自分の眼前に信煙弾のような煙を撃ちこんでくる虫。

掌サイズで飛び回る蠅。

馬の様な形状をしたフナムシ。

嗜虐心を刺激された女型の巨人は笑った。

「今だー！」

「余計な損害を出しやがって！」

「覚悟しろ！」

衝撃から両足首と背中にアンカーが刺さっているのだろう。

少し動きづらいのを実感した。

だからどうした。

フローラと愉快的な同期達に比べればただの虫じゃないか。

「な!？」

信煙弾で巨人の視界を遮ってみせたダリウス・ペーアーヴアルブルンは驚いた。

女型の巨人が3人のアンカーを突き刺さったまま空中を飛んだからだ。

三位一体の攻撃を仕掛けたダリウス班も思考が付いてこれず動きに振り回された。

足首を狙った2人は慌ててアンカーを外した。

「いっふっー！」

「えっ…っっ!!」

「彼女」は、左足首に纏わり付いていた虫を左脚で踏み潰した！

更に右足首を狙っていた蠅は、小さな民家のオブジェごと蹴り潰した。

いくら虫とはいえども生命、苦しめずに一撃で殺してあげるのが礼儀というもの。

「なっ!?は、離せ！」

最後に背中にひつつこうとした虫を捕まえた。

厳密に言うくと、虫が吐き出した糸を掴んで動きを止めた。

蜘蛛の糸が大きくて頑丈なら、こんな感じに糸をぶら下げたままの蜘蛛を掴めるのだらう。

せつかくの夢だし、悪夢なりに愉しんでもいいかもしれない。

そう思った女型の巨人は再び微笑んだ。

「…やばこ」

うなじを守るように左手で抑えている奇行種。

厄介な相手だと思ったが3人に勝てるわけがないだろうと思っていた。その結果がこれだ。

今さつき、ワイヤーを掴まれた兵士が死んだ。

「やばいやばいやばい！」

奇行種は右手でワイヤーを何度も高速で振り回していた。

体重の20倍以上のGが掛かった人体は耐え切れずに血が噴き出していった。

出血が左手を中心として綺麗な赤い色の円を描いていた。

その様子を唾然として見ていたダリウスだったがすぐに正気を取り戻して馬を走らせた。

「くそー！報告しないとー！こいつは…！」

“彼女”がうるさい虫を放置するわけもなくフナムシに乗っかっている蠅を蹴り飛ばした。

馬ごと空中に蹴り飛ばされたダリウスは下半身がさよならバイバイしながら60m

まで上がった。

「奇行種だ！」

「こんなところに出てきやがって！」

「よし討ち取るぞ!!」

ダリウスが上空に吹っ飛ばされたのを目撃した別の班が女型の巨人を発見した。何も情報知らされていない彼らは、ただの奇行種としか思っていないかった。

エレンと同じ巨人化能力者と知らない彼らはダリウス班の二の舞になるだろう。

「突撃！」

「了解！」

新しの虫が湧いてきた。

潰す度に人間の様な悲鳴をあげてくる虫にうんざりしながらも楽しくもあつた。

これを持ち越えれば悪夢は終わる。

ならば、それを妨害する虫なら潰してやる！

“彼女”は無駄に交戦的な掌サイズの体長がある蠅に向かって全力疾走した。

「妙だ…」

「どうした？」

「俺たちって南部にあるシガンシナ区方面に行くんだよな？」

「そうだが？」

左翼の端を担当している初列十三・索敵班の班員たちは違和感に気付いた。

「進路が東のままだぞ」

「そうだな」

「班長、このままだと陣形があそこにぶつかります！」

「団長を信じろ！我々は指示に従っていればいい」

班員たちは疑問に思いつつも班長に指示に従った。

自分たちは兵士であり上の命令だけに従って行動すればいい。

そうやって教育されて訓練されてきた以上、どうする事もできなかった。

「まだ距離があるな」

「はい、あそこは大きいですからね、豆粒より小さいならまだ距離があります」

ウォール・マリアの住民なら、そこそこ有名な観光スポットだった場所が少しずつ見えてきた。

「緑色の信煙弾です！」

「オルオ、お前が撃て」

「了解です！」

次々と煙弾が打ちあがるのを見てエレンは順調に進軍していると思った。

長距離索敵陣形でもっとも安全な場所という事もあって他人事のように感じられた。

何事もなく進軍しているように見えて、索敵班に死者が出ているのではないか。そんな事が頭に思い浮かべてしまって、任務に集中できなかつた。

「リヴァイ兵士長！緊急事態です!!」

右翼側からフローラが全力で馬を駆けてやってきた。

ただ、彼女が伝達する範囲ではないし、そもそも索敵班に所属している。

任務を放棄して伝達班に回すべき情報を伝えずに直接伝達に来たという事は…。

リヴァイは最悪の事態を覚悟した。

「報告します！右翼の索敵班が壊滅的な打撃を受けました！」

「既に索敵が機能していない上に右翼側から巨人が多数侵入してきています！」

彼からすれば損害など想定内だった。

毎回、壁外調査で3割くらいの損害を出すし、5年以上前は更に酷かつた。

だからこそ、その程度の情報では驚くどころか思ったより損害が少ない印象に聞こえた。

問題はその後である。

「知性のある巨人がエレンを狙っています！速やかに避難してください！」
「はあっ?!何言ってるんだフローラ!俺が…狙われている…のか!」

エレンは混乱した。

知性のある巨人?自分は狙われている?そもそもなんでフローラが伝達しているのか。

次々に疑問が思い浮かんで混乱してしまった。

「チツ!俺達はこのまま移動を続ける…お前もエレンの護衛に加われ!」

「了解しました!」

リヴァイは、フローラの話から巨人化能力者が襲撃してきたと読み取った。

むしろ、わざわざ『知性がある巨人』と誤魔化した時点で彼女も察しているだろう。だつたら、巨人捕獲作戦に協力してもらった方が利点があると判断した。

不安を誤魔化しているエレンが精神的な癒しを求めているのも分かっていた。

顔馴染みが居れば、少しは落ち着くという意味でも彼女は必要だった。

「フローラ、みんなは無事なのか!? 一体何が起こっているんだ!？」

「とにかく歩みを止めないで! エレンは巨人に狙われているの!」

「狙われてる!?! なんで?」

第57回壁外調査の本当の目的が巨人化能力者を炙り出して捕獲する事である。

そんな事を知らないエレンは、さきまで順調に進軍していたのに事態が急変して混乱していた。

「オイ余計な事を考えなくていい、新兵らしく黙って移動に集中しろ」

「…兵長」

「なんだ?」

「前方に大きな森が見えます!」

「そうだな」

フローラを加えたリヴァイ班は、エレンの指摘を受けてもそのまま進軍した。

緑色の信煙弾で進軍する方向が指定されている為、その通りに進軍するしかなかった。

そして眼前に見えてきたのは大きな森、巨大樹の森と呼ばれている場所であった。文字通り巨大な樹が多く集まって森になっている地域である。

「おいフローラ！」

「はいなんででしょうか!？」

「その知性のある巨人は、エレンの居場所を知っているのか？」

「右翼を壊滅させた巨人は、次の目標を陣形の中央後方に定めたようです…それ以上は

…」

「そうか…お前ら…俺についてこい！」

つまりエレンの居場所が漏洩したとは限らないがこちらに来るのは間違いないようだ。

尚更、巨大樹の森に向かわなければならない。

リヴァイは部下達に指示をしてそのまま進軍する事にした！

「団長、このままだと陣形が巨大樹の森とぶつかります！迂回行動を取るべきでは？」

「いやそのまま進む」

「は？」

エルヴィン団長の提案に副官が戸惑った。

あの森林では長距離索敵陣形が機能せず、巨人を事前に発見して回避行動ができないからだ。

ただ、団長が命令した以上、副官としてできるのは、部下達に指示を伝える事だけだ。

「団長！先遣班が戻ってきました」

「そうか……こつちに呼んでくれ」

「了解しました」

エルヴィン・スミスは、既に右翼が壊滅していたのも理解していた。

それどころか右翼後方も巨人と戦闘になっており多大な損害を被っているのを理解

している。

故に巨大樹の森へと進軍させた。

巨人を捕獲する秘密兵器を隠すには絶好の場所だからだ。

彼は伝令が近づいてくるのを待った。

「団長！報告します！予想通り巨人の往来があつたようで路地に草木は生えてませんでした」

「荷馬車は通れそうか？」

「はい、いくつかの路地が充分通れるほどです」

「ご苦労だった、諸君らには後方の班に伝達してもらいたい事がある」

エルヴィンは仕上げにかかった。

自分が作戦を偽つたせいで大勢の調査兵を死なせた。

兵団内のスパイを暴き出すためとはいえ、ただでさえ少ない戦力を損失してしまつた。

だからこそ、もう後戻りはできない。

「これより荷馬車護衛班のみ森に侵入しろと伝達してくれ」

「他の部隊はどうすればいいのですか!？」

「臨機応変に対応せよ、左翼だったら森を左に迂回し右翼だったら森を右に迂回する」

「そして森を包囲するように展開したら馬から降りて抜剣し、巨人の侵入を食い止めろと……」

通常種や奇行種などには用が無かった。

必要なのは巨人化能力者を捕縛することだけだ。

その為に捧げられた心臓を巨人の餌にした彼は迷う事が無かった。

「どうした？早く伝達してくれ」

「荷馬車護衛班以外は、『樹の上で抜剣して待機せよ』と命じればいいのでしょうか？」

「ああ、森に侵入しようとした奇行種のみ討伐、残りは全部無視し待機せよ」

「了解しました！お前ら行くぞ!!」

「ハッ！」

先遣班が伝達班に命令を伝えて、彼らが索敵班などに情報展開していくだろう。

犠牲になった右翼の索敵班を想うなら、結果で示すべきだ。

これまで調査兵団は屍で道を築いてきた。

今後も屍を山の様に築いていくだろう。

「だが今回は曖昧な事ではない」

「団長？」

「いや何でもない…気にしないでくれ」

巨大樹の森に侵入してくるのは、奇行種だけではなく巨人化能力者もいる。

自分は更に犠牲者を増やす命令を下した。

だが後悔はしていない。

巨人の謎を握る巨人化能力者を捕獲すれば、これまでの犠牲に釣り合う対価が得られる。

調査兵団の団長であるエルヴィン・スミスは、副官に気付かれない様に自分を嗤ってみせた。

32話 運命の決断

「班長、巨大樹の森に向かっていますが我々はどうすればいいですか？」

サシャ・ブラウスは不安になって班長に尋ねた。

何故か長距離索敵陣形が崩れており想定外の事態に質問せずにはいられなかった。

「…森を回り込むぞ！俺についてこい！」

「「はい！」」

彼女は班長の後ろについていくことしかできなかった。

上官の命令は絶対であるし、取り乱して逃走してもウォール・ローゼには生還できないからだ。

ただ生き残りたい一心で大きな班長の背中だけを見て馬を走らせた。

「おいミカサ、中列だけ森に入ってたんだが陣形ってどうなってるんだ？」

「陣形は無い、左右の陣形は森に阻まれて迂回した」

「つまり索敵能力は無いって事か！」

「コニー・スプリンガーは、ネス班長に教育された長距離索敵陣形の事を思い出していた。」

できるだけ巨人の戦闘を避ける為に索敵に特化した陣形。

「ミカサの言う通り、それが機能しなくなるといつ巨人と戦闘になってもおかしくはない。」

「なんでエルヴィン団長は進路を変えて森を避けなかったんだ？」

「分からない、右翼の脅威に避けようと森にぶつかったかも」

「マジかよ……このままじゃやられちまうぞ」

「死なない、私は約束した」

「コニーはミカサとの会話でーっと思った事がある。」

「なあ、ミカサ？」

「何？」

「お前、いつも片言で話すのにフローラと会話する時だけは流暢に話すよな？」

「そうかもしれない、いつもの思い出話で慣れてるかもしれない」

たどたどしく片言で話すミカサであったがフローラの時だけ千言万語を尽くして会話を話していた。

同じシガンシナ区出身でありながら記憶喪失でほとんど覚えてないフローラ。

そんな彼女にミカサは、子供時代の幼馴染の話やハネスさん、自分の過去を教えた。

ただし頭に浮かんだ事を伝えるのが苦手であった。

「ごめん、うまく説明できない」

「良いのよ……忘れない様にこうやって調査手帳に記すだけだから」

「なんか恥ずかしい」

「乙女の手帳を覗く奴なんて居ないからそこまで気にしなくて良いわ」

フローラは一言半句で告げられた思い出話を何とか分かるように書き記した。

ミカサが発言したのは以下の通りである。

父と母を3人組に殺されエレンに助けられた、敵を1人殺した、エレンがマフラーを巻いてくれた。

一度死んだけどエレンの家で生き返ることができた、その家族も5年前にエレン以外失った。

「つまらない話だった……ごめん」

「そんな事ないわよ、エレンとの繋がりが貴女の強さなのよ？」

「彼とのきつかけがつまらない話なワケないでしょう」

「そうね」

・ある日、暴漢3人組にミカサが拉致されようとして彼女の両親は必死に抵抗したが無念にも殺されてしまった

・そして女の尊厳を踏み躪られる寸前にエレンによって助けられるが残りの1人に殺されかけた

・絶体絶命のピンチだったが、彼の雄姿に勇気づけられた彼女は勢いで殺人をして恩人を救った

・殺人と両親を失ったショックで落ち込んでいた彼女だったが、エレンにマフラーを巻かれて温かく感じたようだ

・身寄りがない彼女は、エレンの家族に迎えられていたが、5年前にエレン以外を失ってしまった

・唯一の家族を絶対に失いたくないミカサは強くなると決意して104期訓練生で首席にほど鍛えた

「とりあえず小出しにされた情報をまとめてみたけど、時系列はこれで大丈夫かしら?」「こんな感じであってる…口下手でごめん」

「別に良いのよ、ほとんど記憶が無い分、実体験したかのように新鮮な気持ちで愉しめたわ」

「次は、もっとうまく話をする」

フローラに調査日誌を見せられて内容があっていると報告したミカサ。

片言のせいで理解しにくい思い出話をしたのを反省して次回はもっとうまく話せるように誓った!

そして思い出話をし続けたミカサは流暢に話しかけられるようになった。

エレンと顔を見合わせて会話するより話せるようになったが流暢に話せる相手はフローラ限定となつてしまった。

「お前にとつて、フローラは家族のエレンとは別の意味で大切なんだな」
「うん、とつても大事」

珍しくミカサが微笑んでいるのを見てコニーは絶望的状况なのに他人事に感じた。

「兵長！リヴァイ兵長！」

「…なんだ」

「ここ森の中ですよ！中列だけ森に侵入したら巨人の接近に気付けません！」
「どうやって巨人の接近を発見したり、中列の馬車を守ればいいんですか!？」

巨大樹の森に突入したリヴァイ班であったが、左右の班とは孤立していた。索敵が機能していない以上、どこから巨人が来てもおかしくはなかった。

なにより作戦の意図が全く分からないまま前進している状況にエレンは不安になった。

「全員が分かっている事をピーピー喚くな…もうそんな事できるわけないだろう」

「えっ…？なんで!？」

「周りを良く見ろ、立体機動装置を操作するには絶妙な環境だろう」

「思考を停止させるな、そのちっほけな頭で必死に考えろ、死にたくないならな…!」

ここでエレンは気付いた。

リヴァイ兵長の言葉で、自分で考えて行動する事も大事だと!

何でも人に尋ねるのは、子供でもできる。

一人前の兵士になった以上、尋ねる前に作戦の意図を見抜いて行動するのは当然である!

「分かりました…」

「ならいい」

もちろん、新兵である自分がそんな事に気付けるわけがない。

でもここには、精鋭中の精鋭であるリヴァイ班の方々が居る。

彼らの行動を観察すれば、きつと答えに辿り着けるはずだ！

老け顔のおかげで風格があつて何かと心配してくれるオルオさんにエレンは視線を移動させた。

「ふざけるなよ……なんだこれ……聞いてない……」

しかし、予想は外れて彼も想定外の出来事で困惑している様子だった。

慌ててエレンは他のメンバーに視線を映した！

「兵長……信じてますが……これでは守り切れません……」

「平原ではもつとそうだろうな……」

ペトラは索敵班から逸れた事に不安を隠せずに小声で不安を漏らしていた。

グンタはフォローを入れたものの自分も不安でしよがなかつた。

リヴァイ班の班員でサブリーダーポジションのエルドは黙っていたが彼も青ざめた

様子である。

「そんな…」

リヴァイ班の誰もが理解していなかった。

下手すればリヴァイ兵長すら何も知らされていないかもしれない。

そこで新たに加入したフローラの存在に気付いた。

いつも何かと頼りになる彼女なら何か知っているかもしれない！

そう思っただけでエレンはこっさり馬を手綱で操作して後方が見えるようにした。

「!？」

フローラは何故か時折停止して、後方を望遠鏡で覗いて何かを探そうにしていた。明らかに何かがあると確信している様子から導き出せるのはー。

「フローラ…何か知ってるのか!？」

「エレン、団長を信じて前進しましょう」

「教えてくれ！一体なんでこうなったんだ!？」

不可思議な行動をするフローラ、それはリヴァイ班も気になっていた。だからこそ、エレンの問いを妨害したり却下させたりしなかった。

「さつきも言ったでしょ？知性のある巨人がエレンを狙っているって…」

「だから説明してくれ…お願いだから…!」

「フローラ、何か気付いたか？」

「兵士長、巨人が一体だけ森に侵入したようです…後方の班が交戦しているようですが全く歯が立たないようです」

「…そうか、耳が良いな」

余計な事を喋られる前に牽制したりヴァイは、彼女の返答から巨人化能力者が侵入したと察した。

「お前ら、剣を抜け！それが姿を現すとしたら一瞬だ」

兵長の言葉にエレンとリヴァイ班の面々は抜剣しながら馬を走らせた。

たかが一体の巨人が巨大樹の森に侵入してきただけだ。

しかし、彼の声はいつも以上に重苦しくてただ事じやない存在に警告しているようであつた。

「な、何の音だ!？」

「後ろからか!？」

「右翼を壊滅させた何かなのか!？」

悲鳴と衝撃、そして戦闘音で後方で何かが来るのを全員が察した。

エレンも含むリヴァイ班は無意識に手綱を握って馬を加速させた。

一方、フローラは“声”を聴いて何が来たのか察した。

巨人特有の呻き声ではなく、精神崩壊寸前の女の声。

中列後方に向かっていった女型の巨人がエレンを狙って森に侵入してきた。

「兵長! エレンが狙われているなら外套のフードを被りませんか!？」

「グンタの言う通りです! 時間稼ぎができるはずです!」

「兵長！ご指示を！」

「ダメだ、誰もフードを被らずに馬を走らせる」

しかし、部下からの建設的な提案をリヴァイは許可しなかった。

エレンが狙いならば、彼を餌にして最大限引き寄せる必要があったからだ。

「兵士長！巨人を捕捉しました！知性のある巨人です！後方から来ます!!」

専用装備の刃である短剣型のブリッツメツサーを構えたフローラは報告をした！

リヴァイ班が後方を振り返ると筋肉質な女型の巨人が全力疾走で駆け抜けているのが見えた！

「速い!?!」

「この森の中じゃ回避できんぞ!?!」

「追い付かれるぞ!?!」

「兵長！立体機動に移りましょう！」

エレンの姿を発見した女型の巨人は更に加速して彼らを追った！

基本的に巨人から逃げられるほどの馬の全力疾走をもつてしてもすぐに追いつかれそうであつた。

瞬間的ではあるが時速70km以上出せる馬より女型の巨人は速かつた！

「背後より増援です！」

フローラの一言により、兵士長を除くリヴァイ班は改めて後方を確認した。

女型の巨人の背後から現れた2名の兵士がアンカーを突き刺してうなじを刈ろうと奮闘していた。

そんな努力を嘲笑う様に1人を巨大樹に叩きつけ、もう1人のワイヤーを掴んで地面に叩きつけた！

一瞬で肉塊どころか、ミンチになった彼らは自分たちが死んだと気付かずにこの世を去った。

援軍が出現して、たった20秒の出来事である。

「兵長！指示を！俺達が討伐するべきです！」

「仕留めてやる！お似合いの末路をあいっつに……！」

オルオとペトラが女型の巨人を狩ろうとグリップを強く握ったのを目視したエレン。

この場に居るのは人類最強と、リヴァイ班4名の巨人討伐数を合計すると70体の精鋭中の精鋭。

訓練兵時代で巨人討伐10体以上、カラネス区の壁外で単独で巨人を14体討伐したフローラ！

何も知らずに巨人殺しの達人集団という地獄に向かって来ている巨人に彼は心底、笑った。

「えっ!?」

「兵長!?! 指示を！」

「討伐しましょうよ！」

「全員、耳を塞げ！」

ところがリヴァイは交戦を許可しないどころか耳を防げと指示され全員が両耳を塞ぐ！

彼は音響弾を真上に撃って任務に支障が出る雑音を一掃する。

「…お前らは感情に身を任せて任務を放棄するのか？ 違うだろう？」

「この班の使命は、そのクソガキを傷一つ付けずに尽くすことだ…命の限りな」

尊敬する兵長の一言でリヴァイ班の4名は一時の感情に支配された自分を軽蔑した。時々の感情に身を任せて行動するのではなく、命令を忠実に遂行する事、それが兵士の本分だ。

訓練兵になったら真っ先に学ぶことを実施できていない彼らは深く反省した。

「え…？」

エレンはてつきり調査兵团特別作戦班は、自分を監視するのが使命だと思っていた。壁外で身体の一部が巨人化した時に殺意を見せてた4人を見ているから尚更驚いた。

「俺達はこのまま馬を駆ける…いいな？」

「了解です！」

「兵長の指示に従います！」

「えっ…駆けるってどこまで行く気なんですか!?!それに…」

「おいガキ、黙って馬をはしっつだあああ！」

「こいつの様に舌を噛みたくなかったら、口を閉じて前だけを専念して！」

オルオが舌を噛んでペトラが呆れながらもエレンに優しく語り掛けた。

エレンはそれでも納得できなかった。

自分以外は巨人戦闘のプロ、勝てない敵ではないはずだからだ！

「また増援です！早く！早くしないとやられます！」

「エレン、前だけを見ろ！最高速度を保て！」

女型の巨人を食い止める為に4名の増援が現れた。

“彼女”は鬱陶しい蠅を片っ端から叩き潰した。

一匹は巨大樹に叩きつけてもう一人はワイヤーを蹴っ飛ばして樹にぶつかって気絶した。

その気絶した蠅を拾って握り潰してもう一匹の蠅に投げつけた！

「うっ！」

慌てて回避した調査兵の真上を覆うように巨人の右手があつた。影に気付くこともできず彼は高速で地面に叩きつけられて絶命した！最後の1人は必死に背後にまわつて女型の巨人に攻撃を続行していた！

「リヴァイ班がやらずに誰があいつを止められるんですか！」

「まだ果敢にも1人だけで戦ってます！今なら助けられます！」

エレンはこれ以上、人命が失われるのが我慢できなかつた。

助けられる命を見捨てるリヴァイ班が信じられなかつた。

「エレンはまだ純粋なのね…」

既にフローラはトロスト区で救える命を見捨てる勇氣をもっていた。

アルミン、ダズ、ミーナの3人を守る為に同期と民間人をそれぞれ100人単位で見

捨てた。

あの時は、巨人と戦闘できるのが自分しか居なかった上に民間人を救出する余裕がなかった。

せっかく助けても自分たちが身動き取れなくなって死ぬという本末転倒を避ける為に見捨てた。

「でも…今回はー」

全員が巨人と戦闘できる。

エレンを除いて精鋭中の精鋭であり、女型の巨人を討伐して援軍の兵士の命を救う事はできる。

だが、第57回壁外調査の真の目的は、兵団に居る巨人化能力者を捕獲することだ。殺すのではなく生け捕りにする。

だからこそ、巨人殺しのプロフェッショナルが行ってはいけない。

「そうか…」

エレンは、自分が他人頼りにしていたのに気付いた。

まるで5年前のシガンシナ区が陥落した日。

母親を助けずに逃げ出したハンネスさんを口で責めていた自分と大して変わっていない。

今は違う！

巨人と戦えるように訓練してきた兵士だし、何より自分には巨人化して戦うことができる！

自分で戦うという選択肢を見つけた彼は巨人化になろうと右手を噛もうとした！

「何をしているの!?!」

「…ペトラさん」

「それが許されるのはあなたの命が危うくなった時だけって私たちと約束したでしょ!」

ペトラ・ラルは本気でエレンを心配していたからこそ、彼の異変に気付いた。

彼は巨人化してたった1人で女型の巨人と交戦している兵士を助けるつもりだった。

気持ちは良く分かる。

同僚の命が救えるのに見捨てて馬を走らせるのは彼女にとつても苦痛だった。それでも約束を守らせようとした。

「エレン、お前は間違っていない…やりたきややれ！」

「兵長!？」

だがリヴァイはエレンの選択を否定しなかった。

むしろ、考え抜いた彼が決断した事を肯定するつもりだ。

「俺には分かる、こいつは本物の化け物だ」

「どんな武力でも拘束でも抑圧でも、こいつの意識を服従させるのは誰にもできない」

特別兵法会議が行われた審議所の地下牢で拘束されていたエレンを見てすぐに分かった。

例え殺されても服従しない男の目だと…。

自分と同じだからこそ気付けたことだった。

「お前と俺達の判断の相違は経験と信念、環境に基づくものだ」

「ただ、そんなもんアテにしなくていい、選べ。自分を信じるか、俺ら、調査兵団を信じるかだ」

既に女型の巨人相手にたった一人で時間稼ぎをしている第三分隊長は限界だった。彼もまた、エルヴィン団長から巨人化能力者を生け捕りにする計画を聞かされていた。

交戦している知性のある巨人が巨人化能力者だと気付いていた。

だからこそ、必死に時間稼ぎをしていた。

リヴァイ班が目標地点に到達するまでの時間稼ぎを…。

「俺には分からない」

「ずっとそうだった…自分の力を信じて…信頼している仲間の選択を信じて…」

「結果は誰にも分からなかった…」

「だから…せいぜい、悔いが残らない方を自分で選べ」

リヴァイは今まで悔い無き選択肢を選んできたが、ほぼ全てが失敗した。

先輩も同期も後輩も友人もみんな死んで行つて自分だけ生き残つた。

選んだ選択肢が正しいのか、現時点で確認する術はない。

だからこそエレンには、悩んだ末に悔いがない選択肢を選んで欲しかった。

「ううっ…」

一方、フローラはたった一人で時間稼ぎをしている兵士の援護に向かうか迷つた。

彼から聴こえた負の感情は『ここで行かせたら全ての犠牲が無駄になる！それだけは…』だった。

つまり、自分と同じく第57回壁外調査の本当の目的を知らされている兵士。

そもそも彼は、調査兵団の第三分隊長エリック・マンシュタインであつた。

「くっ…！」

いつもなら即決断して彼の元に駆け付けるはずだった。

しかし、フローラの脳裏には、ある人物の顔が浮かんでいた。

「ネス班長！お呼びでしょうか！」

「とりあえずそこに座ってくれ」

「了解しました！」

バンダナが似合ういぶし銀のデーター・ネス班長。

長距離索敵陣形を筆頭に調査兵団における基礎を叩き込んでくれた教官である。

フローラが間違えた返答をして調査兵団本部の周りを走るように命じたのも彼であつた。

「なんで呼んだか理解しているか？」

「心当たりが多すぎて分かりません！」

彼は自由人のフローラに呆れた。

その心当たりを聞いてみれば、おそらく20個以上の要因が口から出てくるだろう。

実力はあるからこそ、ここでしっかりと注意しておきたかつた。

「お前は物事を焦り過ぎている」

「はい…」

「もちろん、立体機動における即決断は生死が分かれる重要な要素だ」

「だがな、班から外れて独断行動するのが多すぎるんだ！お前は新兵だ！分かるか！？」
「はい…分かっております」

ネスは、組織で行動せず単独で行動しがちな彼女を注意したかった。

なまじ実力があるせいで壁外調査でも単独で動いて孤立する危険性があつたからだ。

本気で心配しているからこそ、彼女をここに招集した。

「いいか、班で行動してるなら班長の指示に従え！」

「班長は班員全員に気を配って計画を立案して行動している！」

「それなのにお前と来たら班長の命令を聞かずに単独行動をしている！分かるか？」

「お前の勝手な判断が班、いや調査兵団全体に迷惑を掛けているのを自覚しているか！？」
「申し訳ありません…」

104期訓練兵時代からフローラは同じ失態を繰り返して指摘されてきた。

カラネス区壁外任務の活躍っぷりから成績上位10位に入れなかったのはそのせいだと言われた。

「いいか！班長の決断に従え！新兵のお前はそれに従ってればいい！」

「分かりました！」

「分かったうえでまた繰り返す気か!?ちゃんと返事をしろ！」

「ネス班長の忠告をしかと胸に刻み、班長の決断に従う事をここで誓いますわ！」

「よし、それでいい！お前は班長の決断に従うだけでいいんだ！」

データー・ネスはフローラの返答に満足した。

そんな彼はアルミンを女型の巨人から守ろうとして戦死した。

皮肉にも命令や作戦に忠実だったせいで戦死してしまった。

それでも最後の言葉となった『班長の決断に従う』という単語にフローラは縛られた。

ここでの班長は、リヴァイ兵士長である。

しかし彼はエレンの選択を尊重した。

つまりエレンの発言次第で、分隊長を援護に行くのか、見捨てるのかが決まるのだ。フローラは彼の発言を臨戦状態で待った。

「エレン…信じて…」

ペトラ・ラルは彼に告げた。

自分たちを信じて欲しいと。

『わたしたちを信じて』

初回の壁外巨人化計画でエレンの事を理解したリヴァイ班は自分の手を強く噛んだ。それは勘違いしてエレンを殺そうとしたささやかな代償だった。

1人では大した事が出来ない。

だから組織で活動しているし、自分たちはエレンを信じていると告げた。

だからこそ、エレンも自分たちを信じて欲しいと告げた。

それはハンジ分隊長が勢いよくフローラを投げ飛ばして裏切ったように見えた日である。

「っ！」

エレンは先輩のペトラさんの手にその時の噛み後がまだ残っていたのを発見した。

「ううっ！」

「エレン！早く決めろ！」

「進みます!!」

兵長に急かされたエレンは援軍の兵士を見捨てて進む事を決意した。

みんなが前を進むと決めたから彼も一緒に進む事にした。

仲間外れが嫌だった！

化け物扱いされるのは嫌だった！

104期の同期みたいに心の拠り所が欲しかった！

「うわああああ！はなせええええっがっつ！？」

女型の巨人は、ようやくしっこい虫を潰せた。

最後の悲鳴は、救援要請でも助けを求めるのではなく最後まで希望を捨てきれなかったものだ。

第三分隊長エリック・マンシユタインは戦死した。

死因は高速で上半身を樹に叩きつけられた際の胴体断裂による出血性ショックだった。

「ごめんなさい…！」

仲間外れなのが嫌なエレンは彼を見捨てた。

仲間を信じるのが正しいことだと信じたかっただけだった。

その方が都合が良いから。

「目標加速しました！」

「このまま逃げ切るぞー！」

リヴァイの背後に続いた6名は全力で馬を走らせた。

フローラの愛馬のライリーはその指示に従ってリヴァイの馬を抜いて先頭になった。久しぶりに全速力で疾走したその瞬間、束の間の自由を謳歌した。

汗血馬の彼女からすれば、足の遅い同胞に呆れてイライラしていた鬱憤を晴らすように。

あまりの加速っぷりに何かの作戦と勘違いした女型の巨人は一瞬、走るのを躊躇った。

それが命取りだった。

「撃て!!」

巨大樹の影に居るエルヴィン団長の号令で『対特定目標拘束兵器』から複数の矢じりが放たれた!

四方八方から起爆した勢いで飛んできた矢じりは女型の巨人の肉体を貫いた!

あまりの勢いに「彼女」は両手でうなじを守るのが精一杯であった。

矢じりに繋がっているワイヤーの張力により身体の動きを拘束してしまった。

第57回壁外調査で発生した犠牲は、全てがこの瞬間の為にあった。

「えっ?」

エレンが振り返ると女型の巨人が数えきれないワイヤーで身動きが取れなくなったのを目撃した。

そしてリヴァイ班のメンバーを見渡すと彼らも一瞬何が起こったか判断できなかつたようだ。

次第に余裕を取り戻した彼らはエレンに先手を打たれる前に発言した!

「見たかエレン!」

「どうだ! 生け捕りにしてやったぞ!」

「これが調査兵団の力だ! 舐めてえんじやねーぞこの馬鹿! 分かったか!」

「はい!」

女型の巨人が拘束されたのを実感して彼らを信じたエレンは久しぶりに笑った。

今後も彼らを信頼して行動していくつもりだ。

リヴァイ班、104期生と同じ心の拠り所にしたかった。
仲間外れが嫌だったエレンはようやく自分が安心できる場所ができて嬉しかった。

「むっ！なんかわたくしが空気扱いされてますわね…」

一方、指示に従わなくなったこの世で一番自由な奴と化したライリーを放棄したフローラ。

空しく一人で巨大樹の枝にぶら下がって彼らの様子を望遠鏡で確認する事しかできなかった。

それでも全員が無事に生存できた嬉しさを微笑んでいた。

だが現実是非情である。

この成功例が取り返しのない要素になるとは…。

この時点で全員が気付くことは無かった。

33話 反撃の咆哮

「少し進んだ所で馬を繋いだら立体機動に移れ。俺は一旦別行動だ、班の指揮はエルドに任せる」

「適切な距離を取ったらあの巨人からエレンを隠せ、馬は任せたぞ」

女型の巨人を捕獲したが予断を許さない状況。

固定させたワイヤーを引きちぎるかもしれないし、特有の能力を隠しているかもしれない。

未知数である以上、リヴァイは“彼女”の目的であるエレンを安全地帯に隔離しておきたかった。

兵士長の指示を受けてエルドは彼の馬の手綱を引きながら班員に指示を出した。

「フローラ！お前も来い！」

「了解しましたわ！」

女型の巨人を『知性のある巨人』であると最後まで誤魔化していた彼女。

どうも、素振りから交戦経験があるように見えたので彼は聴取をすることにした。

一方、緊張がほぐれたりヴァイ班は、微笑みながら彼らを見送ってその場を後にした。一時的に自由になった馬のライリーは、見捨てられるのが嫌で主人の後を追いかけていった。

「あいつと交戦して何か判明した事があるか？」

「急所を結晶の様な物で覆って防御する能力があるみたいです」

「結晶？」

「鋼より硬い結晶体で、うなじを防御しました。おそらく『彼女』特有の能力かと…」
「そうか…」

とりあえず鋼より硬い結晶体の鎧を生成する能力があるようだ。

防御に使用したが攻撃に転用しないとは言い切れない以上、警戒は必要だ。

責任者のエルヴィンを見つけたリヴァイは真っ先に彼の所に駆け付けた。

「動きを止めたようだな」

「まだ油断できない……リヴァイ、よくこのポイントまで誘導してくれた」

「後列の班が命を賭して交戦して時間稼ぎをしてくれたおかげで助かった」

「歯痒かっただろう？」

「心臓を捧げた彼らの雄姿がなければここまであっさり捕縛できんだろ。あんたのおかげさ」

「そうか、ならば尚更彼らの犠牲は無駄にできないな」

爆発音がして振り返った2人は、更に関節を複数の槍で貫かれた女型の巨人を見つめた。

第三分隊長のエリック・マンシユタインを筆頭とする後衛の班員達。

右翼に展開していた索敵班、森に侵入を防ぐために交戦した兵士達。

調査兵団としては痛手だったが、そのおかげで巨人化能力者を捕縛できる。

「こいつのうなじに居る奴とようやく逢えるな……中で小便を漏らしてなければいいのだが……」

リヴァイは眉をしかめてグリップを強く握り締めいつでも飛び掛かれるように巨人

を睨んだ。

「なんだこの爆発音は…」

ライナー・ブラウンは巨大樹の森から聴こえてくる連続した爆発音に困惑していた。森林に侵入した中列の荷馬車に巨人を討伐できる大砲など積んではいなかった。

それなのに合計10発以上の爆発音が森に響いていた。

つまり爆発音をさせる「秘密兵器」を荷馬車が積んでいたという事か。

「本当に大丈夫なんだろうな…」

「そんな事より巨人を見ようぜ…」

「コニー、お前は気にならないのか?」

「気になるけどよーそんな事を考えるより生き残るのを考えないか?」

「そうだな」

コニーからすれば爆発音より樹の真下に居る巨人の方が重要だった。

長距離索敵陣形を崩して巨大樹の枝で待機せよ…と命じられた時は正気を疑ったものだ。

だが、ここだけで樹の下に7体の巨人が集まったことを見ると適切な判断だと感じた。

「ミカサ、この音なんだと思いますか？大砲でも撃つてるでしょうか？」

「分からない…大砲なんてなかったはず」

「ですよー補給物資と兵站拠点を建てる為の資材しかなかったはずですよね」

サシヤは自慢の聴力で森の奥から音がすると分かった。

ただし、何の音かは判断できなかつた。

「さつきからうるせえな！おいベルトルさん！クリスタがどの辺に居るか分かるか？」

「ごめん…分からないよ…」

「クソツ！クリスタが居ないんじゃないやこの爆発音に耐え切れねえ…」

思わずベルトルトにクリスタの居場所を問うほどユミルは彼女を心配している。

無理をしてないか、囿になるうとしていないか、自殺願望を抱えていないか。

いくらでも確認したい事があつた。

空気扱いされているベルトルトも大切な人が無事なのか心配であつた。

「あのーナナバさん、巨人が登つてきましたけど…」

「うんうん、ここまで登つてきたら退いてあげようね」

「冗談を言われても困ります…」

まるで他人ごとのように告げる先輩にクリスタとミーナは心配になつた。

特に無駄死にだけは絶対にしたくないクリスタは戦慄した表情で集つてきた巨人を見つめていた。

意地でも待機を続行するナナバ班から離れていない場所に事情を察する班が居る。

「しかし釈然としねえな」

「人為的に壁を破壊しようとした奴らが兵団内に居るとしてもだ！」

「…もつと教えた方がよかつたじゃないか？」

アルミンから自分たちが女型の巨人をこの巨大樹の森に誘い込む囿になったと聞かされたジャン。

彼の推測には一理あり、納得できることが多かったがその分、団長の冷酷な作戦に寒気がした。

「そうだけど、もし彼らを捕まえる事ができたら調査兵団の悲願である情報が…」

「この世界の真相の情報を入手できるってか…くだらねえな」

「せめてスパイがどの兵団に居るか絞って目星をつけて欲しかったんだがな…」

「この壁外調査が期限だからね…：しようがないよ」

人間が巨人化できると判明したのが超大型巨人によるトロスト区が襲撃された日である。

そこから一カ月と少して第57回壁外調査であり、その結果次第でエレンの処遇が決まる。

たったそれだけの期間でスパイを炙り出すのは不可能だったのだろう。

だからこそ、エルヴィン団長は第57回壁外調査で一か八かの賭けをして見事に勝利

した。

「もし相手が巨人化能力者だって知ってたら、お前の班長は対応できて死なずに済んだだろう?」

「いや、間違ってるよ」

「は?意味分からん!?無駄に兵士がどれだけ死んだと思ってるんだ!」

女型の巨人の足止めにある程度成功して生還したフローラはアルミンに感謝していた。

相手が巨人化能力者だと知らせてくれたから初見殺しに対応できたと…。

彼女の言葉は、戦死した調査兵も情報さえあれば、生還できた可能性を示唆している。

だからこそ、ジャンはアルミンの言葉が信じられなかった。

「ジャン、結果論であれこれ言うのは誰だってできるけど結果を途中で知る事は誰にもできない」

「巨人化能力者は何人か、兵団のスパイは何人か、目的は、何を知っているのか」

「分からない事だらけなのに選択する時間は止まってくれない。限られた時間で選ぶし

かない」

「団長は確かに非情で冷酷な人物かもしれない……でも僕はそれで良いと思うんだ」

アルミンは、トロスト区で逢ったピクシス司令やイアン班長の顔を頭に思い浮かべていた。

彼らは、兵士を大勢犠牲にしてもトロスト前門に空いた穴を塞ごうとした。

イアン班長は自分の命を賭けて、ピクシス司令は自分が殺戮者と罵倒されても作戦を実行させた。

その結果、囿になった駐屯兵团や訓練兵たちの遺体の山と引き換えに目的は達成された。

今回も同じことだ。

「団長は選んだんだ、1000人の仲間の命と壁内の人類の命を……そして選んだ」

「1000人の仲間を切り捨てて目的を達成させたんだ」

「個人的に何かを変えられる事ができる人間は、『大事な物を捨てられる人間』だと思う……!」

「何も捨てる事ができない人は、何も変えることはできない!」

「だからといって、知らずに殺される兵士の気持ちを考えて欲しいものだ……全く!」

ジャンは、トロスト区奪還作戦を聞いて啖呵を切ったダズの言葉を思い出す。

『ふざけんな！俺たちは、使い捨ての刃になる為に訓練してきたわけじゃねえぞ!!』

全くその通りだ。

自分だって、死んでいった兵士達だって同じことを思うことだろう。

巨人と交戦して死ぬ覚悟はできていても、殺されていいというワケではない！
でもこの残酷な世界ではどうしようもできない。

調査兵団に所属し続ける以上、偉くなるまで利用され続ける人生を送るのは間違いない。
い。

できるとしたら…。

「死なないように実戦豊富なフローラに巨人の対応の仕方でも聞いた方がいいか」

「ジャン！巨人が樹を登ってきたよ!?!」

「畜生が！野郎、木登りのコツを掴みやがった！逃げるぞ」

巨人には学習能力があると判明して改めて脅威と実感した彼らは別の場所に移動した。

「しかし、新兵はともかく長く調査兵団をやっている先輩たちにも知らされてないなんて…」

「私たちが団長や兵長に信頼されていなかったとでも!？」

「…いえ、そこまでは言っていないせん」

「うるせー小僧だ、知らされてなかったんじゃなくて、それだけ信頼されていたって事だ!」

エレンはリヴァイ班のメンバーにも知らされていない事実に驚愕していた。

あの巨人を捕獲する為とはいえ、おそらく大半の兵士が知らされていなかった。

彼らと一緒に行動してきた身とすれば、信頼できるからこそ、団長の非情さに驚くだけだった。

「だが、それなりの人数が事情を知らなければ、あの罠は成功しなかったはずだ」

「確かに…【荷馬車に扮した巨人拘束兵器】といい、意外と知ってた奴は多いかもな」

「計画を知らされていたのは、5年以上前から生き残っている兵員に限るだろう」

「なるほどな、それなら合点が行く！そういうことだエレン！分かったな！」

「うん、そうに違いないよ！そういう事なら仕方がない！」

エルドの言葉に頷くリヴアイ班の面々たち。

それを聴いてエレンは1つだけ思った事がある。

「オルオさん！」

「どうした？」

「…という事は、5年以内に入団したことですよね？意外にもお若いんですか!？」

「誰が！老け顔でおじいちゃんだコラあ!!ペトラ！こいつの前歯と奥歯を入れ替えてやれ!!」

「やめなさいオルオ、みつともないわよ！」

オルオは自分が老け顔なのにコンプレックスを持っていた。

同い年のペトラと比べて貫禄が出てるとか褒められるが全然嬉しくなかった！

まだ19歳、育ち盛りで実力は未だに未知数の期待のルーキーだから！

「そういえば、フローラって真の目的に気付いていたみたいだな」

「ああ、新兵なのに知ってたっぼいな」

「下手すれば、女型の巨人を森に誘導してきたのもあいつかもしれない」

話題を変えようとしてエルドは、フローラの行動を思い出していた。

不可思議な行動といい、兵長との会話といい、絶対事情を知っていたはずだ。

決定的だったのが、リヴァイ班を差し置いて兵長と共に拘束した女型の巨人へ向かった事だ。

「もしかしたら巨人が2体殺された時に団長が質問した返答の次第で作戦に参加できたかもな」

「ああ、被検体2体が殺された時か」

「えっ!?!先輩たちも質問されたんですか!?!そういえばフローラも答えていたな…」

エレンの言葉を聞いてリヴァイ班の面々は、答え合わせをする為にエレンの顔を見た。

いきなり視線を集めた彼は、自分が更に失言を重ねたと思い頭が真っ白になった。

「よし、エレン、答え合わせだ！フローラは何て返答したんだ？」

「え？ええ？」

「とぼけんなよ！団長が質問した『君には何が見える？敵は何だと思う？』の返答だよ！」

「…確か『巨人の仲間が兵士に化けてソニーとビーンを介錯したとか？』って返答してきました」

「『『それか！』』」

ようやく団長の質問の意図が判明して納得したりヴァイ班のメンバーたち。

内心で自分たちは信頼されていなかったのか、もしかして巨人の討伐数だけ評価されていた!?

そんな感情を抱えたまま死ぬ事になるのは避けられた。

エルヴィン団長は、協力者を募る時に自分と同じ思考の持ち主を探していたのだ。

敵対する勢力なら、そんな事を口から漏らすわけないし、咄嗟の判断力も評価の1つなのだろう。

「なるほど、これからは団長の行動をしつかり理解する必要があるな」

「あーなんてこった、そんな答えで良かったのか」

「あー？何が…」

「要するに！重要な作戦に参加したかったら！物事を客観的に身に着ける癖をつつ！」
「オルオ、舌を噛み過ぎ、もう少し落ち着いてゆっくりと話なさい」

後輩に格好いい自分を見せつけようとしてオルオが舌を噛んだのを見て呆れるペトラ。
「さきほどまで緊迫した状況下に居たのにすぐに立ち直つてみせたりヴァイ班。そんな彼らを見てようやくやく平常心に戻りつつあるエレンは憧れた。」

「…さつきから何の爆発音でしょうか？」

「知るわけねえだろう！？面倒事は団長たちに任せておけ！」

「とにかくエレンを狙っている以上、俺たちは事が終わるまで安全地帯に居ればいいんだぞ」

「ふひふあひほへ」

「おじいちゃん、ご飯はさつき食べたでしょう？」

「ふははあ!!」

決め台詞を言えないどころかペトラにボケられたオルオは両手を握りしめて彼女を睨んだ！

「ほら！もう一発！」

一方その頃、上機嫌なハンジは紐を引っ張って『鉄杭射出装置』を起動させた。

爆発音と共に射出した鉄杭は、巨人の肉体をも貫き動きを鈍らせるものだ。

巨人には脅威的な再生能力があり頭を吹っ飛ばしても5分以内に元通りになる。

ただし、ある程度の大きさの異物を巨体から退ける機能はないので、そのまま残ったままである。

「どう？これで身体が痒くても掻けないよ！再生するほど杭で固定されて動けなくなるからね！」

「分隊長、わざわざそんな事を周りに告げなくてもよろしいのでは!?!」

「何言っているんだい！説明しないと鉄杭射出装置の効果が甘く見られるじゃないか！」

既に10回以上、複数の装置を稼働させて関節部や顔に杭を射出した。

それでも投降する気がない以上、脅し続けて屈服させるか強制的にうなじから出すしかなかった。

「ミケもリヴァイも何をやってるんだ…まだ肝心の中身を取り出せないのか」

「うるせえな、だったら代案を出してみたらどうだ？」

「あの硬化の皮膚を突破しようとしたら本体ごとお陀仏だしね…中々加減が難しいな」

「おいフローラ、その短剣っぽい刃でちよつと試してみる」

「やってみます」

スナツプブレイドは巨人のうなじを刈り取るのに特化した刃である。

故にしなやかで脆くて折れやすく肉自体を斬るには向いていなかった。

唯一、フローラの装備している刃が短剣型であった為、試してみたくなっただけである。

常識で囚われているリヴァイは未知なる可能性に賭けてみた。

「おりゃあー！」

ガスを噴出しながら回転斬りをした彼女の斬撃は硬質化した皮膚を欠けさせただけで終わった。

結局、うなじを守る両手から出現する結晶のような物質を突破できる刃物はなかった。

しかし、その結晶は時間と共に？がれ落ちていたので常時に覆う事ができないようである。

「なるほど、肉体の一部を硬質化した皮膚で覆う事ができるが時間制限があるという事か」

エルヴィンは、ウォールマリアの扉を体当たりで破った【鎧の巨人】の事を思い浮かべていた。

無傷で破ったとされるその巨人の皮膚は凄まじく硬く、斬撃も砲撃も効果がなかった

とされる。

文字通り鎧の巨人であるが、同じ硬質化で構成された皮膚だったのだろう。しかし、長時間にも耐えたとされる文章から女型の巨人には時間制限があるようだ。

「お前！何をやっている!?!」

「何って？硬くない皮膚を斬っているんです!」

フローラは、皮膚が結晶に覆われていない所からブリツツメツサーの刃で切り裂いていた。

うなじから能力者を取り出せないなら、別の場所から取り出せばいいという思考で動いている。

最初は傷を修復するかと思ったが、そんな事はなかったものでどんどん肉を切り取っていった。

少しずつではあったが、傷口を広げており巨人化能力者へと近づいている。

「おい…なんか肉体が再生してないぞ?」

ハンジ分隊長の部下であるケイジ・ランドルフが異変に気付いた。

「そんな馬鹿な!?! 杭を撃ち込まれた時は傷を修復してたぞ!?!」

同じく部下でありゴーグルが良く似合うアーベル・オツペンハイマーがその意見を一蹴した。

「もしかして硬質化と肉体の再生って両立できない感じなんですかねー?」

更に寵臣であるニファ・ヴューラーは、2人の意見を聞いて頭に思い浮かんだ事を述べた。

そしてその一言を最後に女型の巨人も含めて全員が静かになった。

1人の女が肉を切り取る音を除けば。

「エルヴィン聞いたか?」

「ああ、ばっちりだ」

女型の巨人は小刻みに全身が震えた。

その様子を見た兵士たちはスナップブレードを構えて嗤い始めた。

誰もが立体機動による白刃攻撃で弱らせるしか本体を巨体から取り出せる方法がない。

そうと思っていたからこそその嗤いだった。

「なあ聞いたか？ どうやらお前は、すぐにお天道様と逢えるらしいな」

「良かったじゃないか、窮屈で臭くて汚い肉塊と悪事から開放されるんだ」

「縛り付けて思う存分、日光浴させて心身共に浄化させてやるから感謝しろよ？」

リヴァイはようやく本体の顔を拝められるという事でご満悦だった。

正常な判断力を失わせるように精神的に追い詰めて気力を低下させようとした。

「お前は確か、いろんなやり方で俺の部下たちを殺したが…あれは愉しかったか？」

「絶対的な強者の立場で生命を踏み躪るのは愉しかったか？」

「俺は今嬉しい、お前も同じ立場だったらそう思うだろう？なあ？」

リヴァイは愉し気な口調と似合わない殺意を必死に我慢しながら睨めつける表情をしていた。

彼らの犠牲のおかげで今がある以上、こいつには相応の罰を与えなければならぬ。人権は人権を守っている者にしか適応されなければならない。

私刑だろうが拷問だろうが尋問だろうがいくらでも壁内に帰ってからやるつもりだった。

『やだやだ！ 帰りたーい！ もう殺したくない！ あの場所に帰りたーい！ フローラ助けて!!』

“彼女” から発せられた負の感情の中から自分の名が出てきて思わずフローラは手を止めた。

アルミンから何度も呼ばれていたせいで自分の名が割れているのは理解していた。なのに何故か自分に助けを求めてきた。

すなわち自分と接点があり親しく交流してきた女性が能力者の正体であるには間違いないかった。

「おい、どうした？」

「いえ、なんか知り合いの気がして…えっ!?」

生き生きと肉を捌いていたフローラの手が止まったのを確認したりヴァイは異変に気付いた。

突然、彼女は刃を鞘に納めて慌てて女型の巨人の首から離れたからだ!

へきやあああああああああああああ!!!
! !! ! <

その瞬間、女型の巨人から大音量の金切り声が発せられた。

それは森の外側に居た兵士達はおろか、カラネス区の住民の耳にも微かに聴こえるほどだった。

あまりの騒音に耳を傷めたりヴァイを筆頭に全員が両耳を抑えてうずくまった。

負の感情から切り札の存在を掴んで逃げ出したフローラも報告する暇もなく耳を塞いだ。

「なんだったんだ今の？」

「女の悲鳴？森の奥からか!？」

「先輩たちは奥で何をやっているんだ…」

何も知らされていない調査兵はおろか、真の目的を知っている兵士すら動揺を隠せなかった。

連続で爆発音がして、止まったと思ったら女の甲高い断末魔の叫びを聞かせれたのだ。

巨人より質が悪い「巨大樹の森の主」が目覚めたのではないかと…感じられるほどに。だが、全員が想像よりも早く悲鳴が止んだ。

まるで断末魔の叫びの様に…。

「嘘だろう!?!なんで!?!」

「巨人が!?!動いた!?!」

「報告します!巨人が森へと侵入しました!」

「なんだと!?!」

金切り声を聴いた巨人は1体残らず森の奥へと突き進んでいった。

その数100体以上、更に遙か遠く離れたトロスト区にうろついていた巨人も引き寄せられていた。

彼らの表情は大切な物を守るといふより捕食を望んでいた顔であった。

まるで女型の巨人を狙っている様に。

「なんで俺たちを無視するんだ!？」

「こいつら奇行種だったのか!？」

「そんな…こんな事って…」

「とにかくこいつらを奥に行かせるな！背後から奇襲できる地の利を生かせ!!」

「ハッ!」

そうとも知らず、突然巨人が奇行種になったのを見て混乱した待機組の兵士達。

とにかく巨人を森に侵入させるなという命令に基づいて交戦を始めた。

自分たちに目もくれずに、うなじを丁寧にも見せてくれる巨人たち。

それは動くだけの巨人の模型のようであった。

「私も行く！」

「待つてくださいミカサ！さっきの悲鳴を聞いた事があります！私が居た森の中で！」
「聞いたの？同じ声を？」

サシャの一言でミカサ・アッカーマンは足を止めた。

尋常じゃない事態が発生している以上、エレンが心配だった。

アルミンから推測であるが真の目的を知った彼女。

敵が大切な家族を狙っているなら速やかに彼の元に駆け付けたかった。

ただ104期生の中で一番森を詳しい彼女の話を聞いた方が良いと判断した。

「あれですよ！追い詰められた生物が全てを投げうつ時の声なんです！」

「聴いて損した…やけくそって事？」

「違います！狩りの最後ほど返り討ちの可能性が高くなるやつです！」

「生きようとする力が思わぬ力を発揮して飛び道具を持った人類を返り討ちにするんですよー！」

「いつもの100倍注意しないと逆に殺されます！」

やけくそで叫んだとしか思えなかったが、サシヤの意見を尊重した。

彼女の勘はよく当たる事で有名であり、食事の献立と狩りに関しては誰にも引けを取らない。

山で生活していた時期があったミカサであったが、エレンとの新生活で慣れて勘が鈍っていた。

だからこそ、勘と狩人としての能力が損なわれていない彼女の話を素直に受け入れた。

「ミカサ!?どこに行くんですか!?!」

「エレンを守りに行く!」

「無謀です!戻って来てください!」

アルミンからエレンは中列に居るといふ情報を得ていたミカサ。

巨大樹の森でも奥深くに彼が居るならばそこに向かう事にした。

一応、フローラがりヴァイ班に情報を伝達しているが護衛は多いほど良いはず。

もし咎められても彼女の巧みな話術で切り抜けられると信じて森へと進んでいった。

「ミカサ！ああ、駄目です！もうお終いです」

超人的な身体能力で巨人を蹴散らしてくれる知り合いが居なくなつて絶望したサシヤ。

こつそり持ち込んだ生の芋を咀嚼そしゃくしながら樹の真下を通り抜けていく巨人を眺める。巨人狩りの経験がない彼女は、それくらいしかできなかつた。

「芋喰つてる場合かあつ!?!」

懐のポケットから4個目の芋を取った時、近くで通り掛かつたコニーに突つ込まれた。

34話 全てを捨て去る覚悟

女型の巨人があげた金切り声によって調査兵団の兵士たちは心身共に疲弊した。女性特有の甲高い断末魔の叫びは、声が途絶えてもなお脳内に響いており気分を害していた。

「クソ…なんだったんだ」

「断末魔の叫びって奴ですかね…迷惑だ」

「てめえ…びつくりさせるじゃねえか」

第4分隊所属のモブリットとケイジは「彼女」の叫びで頭痛と吐き気を催していた。リヴァイ兵士長に至っては「彼女」の頭の真上に居たせいで直で声を聴いてしまい苛立っていた。

「ただの悲鳴？そんなわけがない…何か意図があるのか…？」

女型の巨人が悲鳴をあげた瞬間、エルヴィン団長は巨大樹の幹に身体を隠すように注視する。

何の意味もなく悲鳴をあげるのはあり得ない事であった。

ただ意図が分からない以上、時間の経過で判断するしかなかった。

「まずい、まずいわ……！」

奇しくも団長の隣で同じように身体を幹で隠して、頭だけひょっこり出しているフローラ。

女型の巨人が気になったのもあるが、それ以上にまずい状況になったのは理解している！

ちょうど隣の幹にエルヴィン団長が居るのを発見した彼女は一呼吸置いてから報告した！

「団長！大変ですわ!!」

「どうした!?!」

「巨人の大群が四方八方からこっちに向かって来ています！数は100体以上！」

「なんだと!？」

フローラの報告を聴いて思わずエルヴィンは周囲に耳を傾ける。風の音や兵士たちの愚痴以外に何か来る音が聴こえ始めた。

「エルヴィン! 巨人の匂いがする!」

「方角は?」

「全方位から多数、同時だ!」

「数は?」

「良く分からんが…かなりの数だ」

巨人の匂いを感知できるミケ・ザカリアスも異変に気付いた。

巨大樹によって匂いが遮られやすいとはいえ、数が多すぎて濃厚な匂いを感じてしまった。

しかし、匂いを感知した頃には巨人が地鳴りと共に巨大樹の間から出現し始めていた。

「まさか…」

エルヴィンは、ミケよりも早く正確な数を感じたフローラに疑問に思ったが…。

出現した巨人が女型の巨人の脚に噛みつき始めたのを目視し、最悪の事態を思い浮かべた。

「全方位から巨人が出現！」

「総員、戦闘開始！女型の巨人を死守せよ！」

包囲している兵士を無視をして女型の巨人に群がって肉体を喰らい始めた巨人達。彼らの目的は明確だった。

それを阻止する為、その場に居た兵士は全員、巨人の大群に突っ込んでいった。

「あの叫び声で巨人共を呼んだってわけか、舐めた真似しやがって…」

女型の巨人の頭を踏みつけて踏み台にしたりヴァイは目の前に来た巨人2体のうなじを刈り取り、5 m級の巨人を回転斬りで首ごと斬り飛ばして、その勢いのまま14 m

級の両脚を両断した！

「こうも巨人が多いと俺の鼻も役に立たんな…」

「では、こうやって巨人を討伐して役に立ち…ましようよ！」

「ゲルガー！今のは危なかったぞ」

「おっとリーネ、口説くのは後にしてくれないか」

ミケは回転斬りで14m級のうなじを刈り取って、8m級の巨人を捕捉して右脚を両断した！

体勢が崩れた巨人にゲルガーが突っ込んで高所から双剣を叩きつける様にうなじを
切る！

そのまま離脱したが、一歩間違えれば地面に激突しそののを目撃したりリーネは本気で
心配した。

彼からすれば、巨人相手に全力で挑むのは当然であり、刃の消耗など考えてなかった。
違う、そうじゃないと言わんばかりに心配事が噛み合っていないが、別に問題は無
かった。

「おーい！おーい！…何でだ!?何で私たちを無視するんだ!?」

「分隊長、巨人の群れの前で両手を振って大声で叫ばないでください!」

「なんで私たちに興味を示さないんだ…」

「考えるのは後にしましょう!」

覚悟を決めて巨人の前に飛び出して両手を激しく振ってみたが無視をされて衝撃を受けるハンジ。

それを宥める副官のモブリットは、上官を無視した巨人のうなじを刈り取った!

続いていて、同じ部下であるケイジとアーベルが別の巨人の狩ってニファが煙幕を張った。

「分隊長!?死ぬ気ですか!」

「ケイジまでモブリットみたいな事、言い出して…」

「良いから早く巨大樹の枝に乗りますよ!数が多すぎて地上は自殺行為です!」

既に1名、射出したワイヤーを巨人に脚に引っ掛けて、そのまま巨人の足元に消えていった。

だからこそ、女型の巨人を中心として外円から必死に巨人を減らしていたが減る気配がなかった。

煙幕から逸れた巨人をニファが右ひざ裏に斬り付けて転倒させてモブリットがうなじを斬った！

もう1体が煙幕を突き進んだものの女型の巨人と離れた場所に出てしまい後戻りをしようとした。

「そー！」

フローラはその隙を見逃さずにうなじを斬って急降下して近くに居た巨人の右足の腱を切断した。

その勢いで股を潜り抜けて巨大樹の幹にアンカーを突き刺して急上昇した。

「くっ…きっ…」

巨大樹の枝に飛び乗った彼女は肩で息をしながら巨人を見据えた。

肉体の負担もそうだが、巨人が多すぎた。

ライナーやベルトルトがここに居れば巨人の群れを「津波」と評しただろう。全方位から押し寄せた「肉の波」から守りきれず、次々に巨人が女型の巨人を喰らい始めた。

「させるか!」

その隙だらけの巨人のうなじを次々に刈っていく1人の兵士。

しかし彼は気付かない。

何故誰もその隙だらけの巨人を狩っていないのか。

リヴァイ兵士長ですら手を出していないのか。

それを身をもって経験する事となる。

「よし……まだ行ける……ぐっ……ああああああっ!!!」

巨人討伐数を更に稼ごうとした彼は背後から来る巨人に気付けなかった。

1分間で20体の巨人を討伐しても50体の巨人が群がってきている以上、そこは無
法地帯だ。

射出したワイヤーに巨人の胸が引つ掛かって、思わぬ方向に引つ張られた。そして何度も巨人と激突して地面に激突してもなお、止まらないどころか踏まれ続けた。

「いやああああー！」

巨人の背後を追つてうなじを斬り続けた女兵士。

いつの間にか完全に孤立してしまい、巨人の大群に取り残された。必死に離脱しようとしたが遅かった。

「あああああ？つあ？あ？あ？あ？あ？あ？つつ！！」

巨人捕縛作戦に従事した兵士たちは彼女を見捨てた。

孤立した彼女は必死に脱出しようとしたが巨人の肉壁の波に吞まれていく。

揉みくちやにされて血しぶきを噴き上げるのを彼らは傍観する事しかできなかった。もし突撃すれば累が及び無駄死にすると分かっているからこそ黙視した。

「いっまでか…」

彼女の壮絶な死に様を見届けたエルヴィンは決断した。

陣形の右翼に展開していた第二分隊と中列の後続班を犠牲にして捕獲した女型の巨人を…。

ここで捨て去る覚悟を！

「全員、一時退避！」

団長の号令に全兵士が巨人から離れた。

女型の巨人には既に40体以上が群がっており本体の生存は絶望的であった。

本体が巨体から切り離されて喰われたのか、女型の巨人から蒸気が噴き出していた。

更に30体以上の巨人の骸から放たれる蒸気と共に現場は真っ白な霧に覆われるほどである。

「おいエルヴィン…なんて面してやがる…」

「やられたよりヴァイ…私の完敗だ」

「情報漏洩を阻止する為に自己犠牲をするという選択肢を考慮してなかった…」

「奴らを掃討して、遺品捜索でもするのか？」

「いや、撤退だ。これ以上の戦果は無意味だ」

リヴァイが発言した遺品捜索には3つの意味がある。

まずは、情報分析をする為に巨人化能力者の遺品だけでも回収する事。

2つ目は、犠牲になった兵士の遺品を回収して遺族に渡す為。

そして、結晶のように覆った硬質化した皮膚の回収である。

何故か、その皮膚だけは本体から切り離されても蒸気が噴き出さずに原型が保っていたからだ。

成分の分析をすれば、その装甲を貫く武器の開発に役立てる事ができる。

「総員速やかに撤退せよ！」

「巨人共が囷に気を取られている内に馬に乗り巨大樹の森、西方向で集結！」

「陣形を再展開し、カラネス区へ帰還する！荷馬車は全てここに置いていく！良いな？」

「ハッ！ハッ！」

しかし彼はそれをしなかった。

既に今期に調査兵団に迎えた104期の新兵23名より多くの損害を出していた。

荷馬車に見えるように製造された複数の『対特定目標拘束兵器』や囷となり犠牲になつた兵士達。

これ以上の損害を極力抑えたいからこそ、全てを切り捨てた。

「審議所で啖呵切つてこの有様か、大損害に対して実益無し、帰つた所で何の意味がある？」

「意味など後でいくらでも考えられる。今はこれ以上の損害を出さずに撤退する事を考えろ」

巨人の死骸から蒸気が噴き出しており視界が悪くなつていた。

これでは、信煙弾の合図にも支障が出る上にいつ蒸気から巨人が飛び出してくるか分からない。

そこでエルヴィンは気付いてしまった。

「俺の班を呼んでくる…あいつらの事だ、かなり遠い所に行っているんだろうな」

「待てリヴァイ！ガスと刃を補充していけ」

うなじを斬られた巨人は死んで蒸気を噴き出して、その肉体を霧散していく。

しかし能力者が生存していても本体から切り離された巨人の肉体は蒸気を出して霧散する。

それはエレンの巨人化の結果であり、調査兵団の兵士には知れ渡っている事実である。

女型の巨人の肉体から蒸気が噴出しているが、彼女自身は生存している可能性があるがなかった。

巨人の大群に気を取られて、“彼女”が死んだ場面は誰も目撃していない…。

そう、巨人化能力者は、何食わぬ顔でここに居る兵士に紛れている可能性があったのだ。

「時間が惜しい」

「命令だ、従え」

「…了解だエルヴィン、お前の判断を信じよう」

リヴァイにはエルヴィンが何を考えているか理解できなかった。

ただ、今までの経験上、彼の意見を聴いた方が生存できる可能性が高いと判断しただけだ。

そんな2人のやり取りに水を差すようにフローラが登ってきた。

「…お前か、何をもたもたしてる」

「さっきまで補給をしましたわ!」

「補給ってその装備を?」

彼らからすれば彼女の発言を聞いて疑問に思った。

知る由もなかったがブリッツシリーズという名前が付いた専用装備であり補給品などない。

一式刀身もしくは、強化刀身・1型というスナップブレード、あとはガスボンベくらいか。

ボンベですら専用装備の鞘から20cm以上も飛び出す長さなので何を補給したのか気になった。

「いえ、予備の立体機動装置に使う強化・I型シリーズの刃とガスボンベを補充しました！」

「ならさっさと撤退しろ…遅れるなよ」

「ハッ！」

負の感情を聴くことができる彼女は団長の“声”を聴いて指示を受ける前にガスを補給しに行った。

専用装備であるブリッツツシャイダーという鞘は、通常のガスボンベの互換があつたからだ。

ところが、道中で自由を謳歌していたはずの愛馬と遭遇したので刃もついでに補充した。

結局、女型の巨人との戦闘で消耗した刃とガスを補充するだけで終えた。

これ以上、もっていけば凶々しくて補給担当に恨まれそうだったから。

ライリーに括りつけた鞘に刃を収めて満足した彼女は団長たちを発見し、様子を確認しに来た。

「行くわよライリー！」

「あうちー…って！何をやってんの!？」

降りてきたフローラを目視したライリーは真つ先に外套のフードに噛みついて強く引つ張った。

後方に引つ張られて踏ん張った結果、野外にも耐えるように編まれていた布は音を立てて破れた。

いつもは反発する癖に非常事態の時に限って構って欲しいと甘える彼女。

足掻いてもしょうがないという事で頭を撫でて落ち着かせたフローラは乗馬して去っていった。

ボロボロになったフード付き外套を買い替えようかと考えながら…。

「黄色の信煙弾だ!？」

「総員撤退！馬に乗りなさい！」

「はー」

ミーナとクリスタは、ナナバ先輩の言葉を聴いて安心した。他の兵士たちも意図が分からない作戦が終わったと知って安堵した。

「あいつは無事なのか…」

「分からない、でも信じるかできないよ」

相棒と合流できたライナーとベルトルトは、彼女の事を心配していた。

単身で巨大樹の森に飛び込んで行ったからこそ、黄色の信煙弾を見届けて心配した。

あの合図を見たせいで、作戦が失敗して戦死したかと思っていたからだ。

「やっと帰れる!」

「ふはい!はっは!」

「芋喰って頬張りながら喋るなよ…というか何個目だ」

帰れると安心したコニーは、芋を頬張りながらガッツポーズで喜んでるサシャに呆れた。

気分を紛らわせるために思わず何個芋を食べたか訊いてしまった。

「…7個か」

「ふはひふふ！」

「まさか12個か!？」

「ふおへふ！」

彼女が左手の指を広げて、右手は人差し指と中指を立てた事で彼は7個と思った。

ところがなんか否定的な反応を示したので12個と言ってみたら当たってしまった。

どんだけ芋を隠し持っていたんだと呆れるしかない。

12個も芋を隠し持ったまま立体機動で巨大樹の枝に乗った事はある意味凄い事ではあるが…。

ちなみに芋はもう無い。

サシヤの腹は壁内に帰る前にもたないだろう

「どうやら終わったようだな！」

「よし馬に戻るぞ！撤退の準備だ！」

黄色の信煙弾は、遠く離れたリヴァイ班にも確認する事ができた。

真つ先に確認したグンタの話を聴いたエルドは即決断した。

「だそうだ、さつそくあいつの中身を拝見しようじゃないか」

「残念だが、奴がエレンを狙っている以上、顔を合わせるわけにはいかん」

「チツ！仲間を惨殺したクソ野郎の顔を確認したかったんだがな…」

「それならウオール・ローゼに戻った後でもできるわよ」

「そうだな…兵長の指示に従うまでだ」

オルオの意見を一蹴したグンタであったが班員の中で一番顔を確認したかったのが彼である。

仲間を心配しているからこそ、時には辛辣の言葉をかけてしまう性格だった。

だからこそ、エリック分隊長も含めて虐殺した女型の巨人の正体を知りたがっていた。

ペトラのフォローでその手があったと思いつつ先陣を切って進んで行く。

馬を待機させている場所までリヴァイ班は立体機動で移動していた。

「本当に奴の正体が…？」

「エレンのおかげでね…」

「え？オレは何もやっていません!？」

頼れるお姉さん肌のペトラに感謝されてエレンは驚いた。

自分はみんなに言われるまま馬を走らせてだけと自覚していたせいで余計にそう感じた。

「私たちが信じてくれたでしょう？」

「あの時、私たちを選んだから今の結果がある…正しい選択をするって結構難しいことだよ」

「おいペトラ、そいつを甘やかすんじゃないやねえ…今回は餌以上の働きをしてないからな」
「オルオさん…」

彼の言う通りだった。

後ろから迫りくる女型の巨人をパニックになって班を乱していた。

それどころか、勝手な行動を取ろうとして班員たちに迷惑をかけていた。いつもなら飛び出して巨人に突っ込むフローラですら無言で従っていたのだ。エレンは改めて何もできなかった自分の情けなさに唇を噛み締めた。

「まあ最初は生還できれば上出来だ、だが作戦が終わって壁内に帰るまで評価できない」「いいか、ガキンチョ！お家に帰るまでが壁外調査だからな」

「もう…分かつてますって…」

「先輩に向かったため口はないだろう？なあ？」

「気にしなくて良いわよ、こんな奴の真似したら舌を噛むだけよ」

ぶつきらぼうながらも彼なりに自分を心配してくれているオルオさん。

段々お節介な近所のおばさんのイメージがして何か嫌だった。

何かと口に出してくる母親に反抗したくなる気持ちに似ていた。

だが迷惑を掛けたまま、母親と死に別れたエレンにとって懐かしい感覚が…。

「お前ら2人とも…初陣でシヨンペン漏らして泣いてた癖に立派になったもんだな」「えっ？」

2人の先輩であるエルド・ジンの一言で全てが変わった。

一瞬、エレンは聞き間違いだと思った。

頼もしい2人がそんな無様な真似をすると思わなかったからだ。

「ぎゃああああ！言うなよ！威厳とか無くなったらどう責任とつてくれるの!？」
「事実だろうか？エレン、言っておくが俺は漏らしてないからな」

ペトラ・ラル、まだまだ元気で初々しさが残る19歳の乙女。

先輩によって隠したい黒歴史をよりによって可愛い後輩の前に暴露されてしまった。

思わず元凶のエルドに怒鳴り散らしたせいで肯定しまい墓穴を掘ったと感じたが後の祭り。

「討伐数とかの実績は上なんだが！俺が上なんだが!？エルド！覚えてろよ!」

「討伐数だけでは兵士の優劣は語れないぞ、泣き虫だったオルオ君」

「うるせえ馬鹿!!アホ!!女を泣かせたと彼女にチクってやるぞ!!」

同じくオルオ・ボザド19歳、調査兵団の期待のルーキーと自他が認識している。老け顔がコンプレックスだった彼は巨人をとにかく討伐して今の地位を獲得した。その根本を崩されて錯乱した彼は、元凶に向かって唾を飛ばして抵抗していた！最後の頼みだった実績も無視されたので少年のような語彙力で罵倒しかない惨状だった。

「すげえ…空中で撒き散らしたって事ですか!？」

「エルドおおおお!!」

「お前ら…ここ壁外だぞ！ピクニックじゃないだぞ！ちなみに俺も漏らしてないぞ」

純粋なエレンによる思い付きの一言は、オルオとペトラの黒歴史を掘り起こすものだった。

巨人から逃げる手段は、馬か立体機動しかない。

乗馬していたら巨人の唾液やらで誤魔化せるので、…つまりそういう事だ。

「ううっ…見ないで…」

！
特に後輩に顔を向けられて発言されたペトラは赤面してエルドを睨みつけて恨んだ
初めて巨人を目撃した彼らは泣き出して、小便を漏らしながら必死に先輩たちに守つ
てもらった。

今でこそ精鋭中の精鋭であるが、彼らもまたひよつこの時代があつたのだ。

「はいはい」

「エルド！お前も絶対何かやらかしてゐるだろう！？」

「うん？おかしいな？なんでムキになるのかなグンタ君」

「チツ！早く馬と合流するぞ！」

あまりの馬鹿さ加減に呆れたグンタが作戦達成で気が緩んでゐるメンバーを叱った。
…が自分のフォローをするのは忘れなかつた。

巨人と初遭遇した時は、敵前逃亡して団長の後ろに隠れた黒歴史があつたからだ。
彼らと違って逃げ出した過去を知っているエルドを牽制するのに精一杯である。

「おっと！緑色の信煙弾、きつと兵長の連絡だな」

気分転換をしたいグンタは、上空に緑色の煙が見えて何かの合図だと思った。

自分たちを探している兵長が居場所を知らせる為に撃つたのだろう。

他の兵士は作戦終了した時点で孤立しておらず、そんな信号を出さないだろうし…。まさか自分たちを探しているのは兵長以外にも居ると想定しなかった。

「よし、兵長と合流するぞ！続きは帰ってからやれ！」

兵長が自分たちを探しているならそれに応えなければならぬ。

グンタは同じように緑色の信煙弾を上空に向かって撃つた。

自分たちの居場所を知らせる為に。

それは罠だと気付かないまま。

「皆さんの初陣では色々あったんですね」

「エレンほどじゃないがな…」

「初陣の日は散々でしたよ」

「そうね、あの怒涛の出来事なんて常人じゃ信じられないもんね」

グンタの後ろ姿を見て追跡するように移動するリヴァイ班。

エレンと同様の立場だったら自分たちはここまで信じられなかったと自覚している。だからこそ、エレンが自分たちを信じてくれた事が嬉しいし、エレンも嬉しかった。ずっーとこの関係が続けばいいのにと。

「そういえばフローラの初陣の事は聴いたか？」

「ああ、あいつは頭がおかしい」

「トロスト前門に侵入した巨人5体のうなじを斬った事すら信じられん」

「訓練兵を率いて兵团本部奪還作戦の指揮を執ったとか聴いたよ」

「駐屯兵团の第一師団の精鋭班の合計した数より巨人を討伐したらしいぞ…」

現在進行形で色んな伝説を作り続けるフローラ。

既にリヴァイ班の班員たちが合計した巨人討伐数を越えている可能性があった。

カラネス区壁外で1人で巨人を14体討伐して貴族たちから大金を荒稼ぎした噂もある。

というか、調査兵团の馬が買えるティーカップを購入してもらった時点で金持ちだ。

「私たちは時速70kmの馬に乗っているのにフローラは時速120kmで駆け抜けていくみたいね」

「このままじゃ追い付かれるな…」

「はあ？オレたち5人で頑張ればあいつなんて一捻りなんだが!？」

「オルオの言う通りだ、ワンマンアーミーでは限界があるからな!」

女型の巨人の本体の捕縛に成功したと思っっている彼らは次の目標を決めた。

次の目標は、フローラの記録を打倒する事であった。

あまりにもとんでもない記録のせいで公式に記録されない物ばかりであった。

そんな彼女に対抗するには5人の団結力とチームワークが試される!

104期生とは違った安心できる居場所を見出したエレンは、満悦であり笑みを溢していた。

「居た!エレナー!!」

「噂をすればなんとやら…やべえ奴が来たな」

「……妙だな、作戦が成功したような顔に見えんぞ」

「ああ、嫌な予感がする」

話題になっていた人物が馬を駆けてやってきた。

ただし、彼女の表情からは作戦成功とはかけ離れたものである。

「報告します！ 巨人化能力者の捕縛に失敗しました！」

「なんだと!？」

「まさか取り逃がしたとでもいうの!？」

「分かりません、ただ女型の巨人に巨人が群がってしまい手が出せなくなりました」

フローラの報告を受けて戦慄したりヴァイ班。

なら、さきほどの黄色の信煙弾はなんだったのか、エルドはすぐに問い詰めた。

「あの黄色の煙は何だったんだ!？」

「撤退命令ですわ！ この森の西方で陣形を再編成してカラネス区に帰投する為です！」

「待て待て!! じゃあ、あの緑色の信煙弾は兵長が撃ったんじゃないのか!？」

「兵士長なら補給した装備の点検をしていますので、ここに来るのに時間が掛かるはず

ですが…」

そしてさきほどの緑の煙は兵長が撃ったわけではない。

では誰が撃ったのか。

エレンと先行したグンタを除いたりヴァイ班のメンバーはすぐに答えを導き出した。

「グンタ!!戻れ!!あれは罠だ!!」

「ああ!?!すまん聴こえん!もう一度、おっと…!」

先行したせいで一連のやり取りが聴こえなかったグンタは何事かと思った。

しかし、視界に緑のフードを被った兵士が見えたのでエルドの警告を無視をした。

きつと後方の奴らで問題解決できると思ったし、兵長に報告するのを優先してしまっ
た。

「兵長!…いや違う!?!誰だお前は…!?!」

今までの相手は巨人だった。

殺し合うのは巨人であり敵もそれで固定されていた。

だからこそフードのせいで顔が分からない不審人物が近寄ってきてても逃げる事はしなかった。

それが命取りになった。

「うっ……っほおお……」

その人物が自分を掠めた瞬間、視界が明らかに別の場所に移動しており息ができなかった。

何故か口から吐血してしまい、慌てて両手で塞ごうとするが何故か力が入らない。

それどころか体全体が重く感じて視界が真っ赤に染まった。

そこで自分が不審人物に斬られたと理解した瞬間、激痛が奔ったが声に出せなかった。

「グンタさん!?!」

グンタが最後に見たのは心配そうに自分を見つめるエレンの姿だった。

「早く逃げろ」という発言も口から血を流すだけで終わり意識はそこで永遠に途絶えた。女型の巨人の本体である能力者に自身のうなじを斬られたと理解する暇などなかった。

「つつ…」

グンタ・シユルツは尊敬していた父親と同じように油断して死んだ。

しかし彼は幸せ者である。

真つ先に脱落したおかげで、これ以上苦しまずに済んだ。

地獄はまだ始まったばかりなのだから…！

35話 命懸けの騙し合い

“彼女”は初めて人殺しをした。

そもそも何度も過去に殺人してきたし、さきほどまで調査兵団の兵士を殺害してきた。

一緒に3年間訓練してきた同期すら事故に見せかけて結果的に殺した。

それでも明確な意志を持って殺人をしたのは今回が初めてだった。

自分には帰る場所があるし彼にもあつただろう。

「エレン止まるな！進むんだ！」

「誰がやった!?!出て来い！」

「エレンを守れ！」

だが殺さなければ殺される。

死にたくないから殺してやった。

「出て来い卑怯者！最低でも差し違えてやるう！」

「エルド！どこに向かえば良い!?」

「馬に乗る暇はない！とにかく味方と合流するぞ！」

“彼女”はそんな事させるつもりは無かった。

ここを逃せばエレンと接触する機会がなくなるどころか二度と襲撃する事も出来なくなる。

この日の為に昨日は酷い目に遭った。

人探しをさせられ、背後から心臓を撃ち抜かれ、タバコの匂いを嫌というほど嗅がされた。

更に今まで向き合わなかった父親の事を思い出させられて故郷に帰りたい想いで胸が一杯だった。

とにかく壁内の人殺しはここで終わらせたかった。

「俺達が時間を稼ぐ！エレンはその隙に味方と合流しろ！」

「フローラはエレンを援護して！」

「時間稼ぎなんてしねえよ！ここでぶっ殺してやる!!」

「…でも！」

「エレン、3人を信じて本隊に合流しましょう」

“彼女”はエレンの護衛班の話を聴いて安心した。

まずエレンを巻き添えにして殺害する心配がなくなった。

ここで彼を殺せば同僚の死も同期たちを偽ってきた自分の苦労が無駄になってしま
うから。

そして何より！フローラと殺し合いをしたくなかった！！

「これが最後の殺人…これさえ乗り越えれば…」

故郷に帰れる。

仲間を見捨てた癖に作戦を続行させられ、泣きじやくる同期の立体機動装置を取り外
させた。

あの他人事でどうしようもない『兵士ごっこ』をしている糞野郎とおさらばできる。

もしエレンが【座標】じゃなくても『もう1つの巨人』を奪取できるだけでも充分だ

！

あとは女々しい腰巾着野郎と糞野郎に任せて故郷に帰る！

少しだけ落ち着いた「彼女」は冷静に指を道具で切って出血をさせた。

一滴の血が滴り地面に落ちる前に「彼女」の身体は発光し、爆発音と共に巨人化した。

「やはりか！来るぞ！」

「女型の巨人だ!!」

グンタを失って悲しむ暇もないリヴァイ班は女型の巨人の姿を捕捉した！

女型の巨人も護衛班とエレンとフローラを捕捉した！

「オレも戦います！今度こそ倒してみせます！」

「ダメだ！俺達に任せてお前は先に行け！」

「これが最善の策だ！お前の力はリスクが大きすぎるんだ！」

「何だ!?!俺達の腕を疑ってるのか!?!」

「そうなのエレン？信じられないの？」

エレンは戦いたかった！

グンタさんを殺したあの女性の巨人を倒す……いや巨人化能力者を殺害したかった！

1か月も満たなかったが彼との思い出は大切なものだったからだ！

それでも、彼らの顔を見て踏み止まった。

「皆さんの勝利を信じています……武運を！」

リヴァイ班を信じた。

彼らを信じたことで女性の巨人をワイヤーで捕縛できた。

今回も信じていれば絶対に間違いない。

不安はあったが、指示に従って逃亡した！

それが自分の役目だとエレンは理解したから！

「こつちよ……このまま進めば本隊に辿り着けるわ！」

「でも……やっぱり見捨てる事が出来ない！」

「この騒動でリヴァイ兵士長が気付かないわけないでしょ！あと3分あれば合流してくるわ！」

立体機動を行ない誘導しているフローラについて本心をぶつけてしまった。

自分が狙われているからグンタさんが殺害された。

殺したのは女型の巨人だが、原因は自分のせいだとエレンはずっと悩み続けていた。それを察した彼女は、すぐに人類最強が合流するから大丈夫だと諭してくれた。

巨人化能力者を抑えつけられる実力がある兵長が居れば何も問題ないと…。それを信じて前だけを見て進む事しかできなかつた。

『……で殺す！』

目の前の敵を殺す！

死にたくないなら殺すしかない！

動きが機敏で今までの敵と違う！

虫と揶揄して潰してきた兵士たちの動きとは別物だった。

『速……』

だがフローラには劣る。

彼女なら一瞬で姿を消してしまうから！

「うおおおお!!」

『そっ!』

「なんてな…!」

『うっ?!…両目を潰された…!』

さすが重要人物の護衛を任されている事はある。

掴みかかろうとした右手をギリギリに回避した金髪の男!

そつちに目をとられた隙に2人の兵士が両目を切り裂いていった。

少なくとも視界が真っ黒になった以上、そうとしか考えられなかった。

『ここです終わるわけにはいかない…!』

幸い倒れ掛かった時に衝突したおかげで巨大樹の存在に気付いた。

両手でうなじを抑えて首を竦めて幹を背中に合わせれば少なくとも急所を狙われる

ことは無い。

自分の弱点に真つ先に気付いたフローラが居たら既に目潰しされた瞬間、死んでいただろう。

彼女はうなじではなく、うなじに居る自分を真つ先に両断するはずだから！

拘束された時に他の兵士と違って、首を掘り進めていたフローラの存在は恐怖でしかなかった。

『視力を奪った！少なくとも1分間は暗黒の中だ』

エルドは経験上、女型の巨人の視力が回復するまで最低でも1分以上と読んだ。

『それまでに仕留める！』

同じく感覚と経験で知っていたペトラは1分経つ前に終わらせるつもりだった。

『捕獲なんてクソ喰らええ！』

オルオは団長の意志に反してでも巨人化能力者を殺害するつもりだ！

『今殺す!!』

『無様に死ね!!』

『グンタの仇を討つ!!』

3人は手の動きで合図を出し合ってスリーマンセル編成で両肩を狙う事にした。両手をいくら傷付けても再生して終わるうえにうなじから退かす事は出来ない。しかし根元の両肩の筋肉を削げば、勝手に両腕が垂れるしかできなくなる。

「すげえ…あの女型の巨人が一方的にやられてる…」

「そうね、あの調子ならうなじを狙えるじゃない？」

「ああ、信じて正解だった！」

エレンは、追い詰められていく女型の巨人を見た。

両肩を何度も切り裂かれて左腕が力なく地面に向かって垂れた。

もう片方もエルドさんとペトラさんの斬撃に耐え切れず右腕も垂れた。

「いつか、オレも参加させてくれるのかな…」

「壁内に帰ったらグンタさんの後任として訓練をお願いすればきつと喜んでくれるわ」
「そうだな、グンタさんの後任…になれたらいいな」

一言も告げずに黙々と連携が取れて息の合ったタイミングでの攻撃。

仲間同士で信じあっているからこそ、グンタさんを失った直後でも強かった。

フローラとミカサ、ライナーとベルトルト、アルミンとマルコ、フランツとハンナ。

同期でもお互いを信じた者達は強かった。

エレンは連携して『バディアクション』で巨人を討伐できるようになりたかった。

「…できるのかな」

「トロスト門で巨人を5体葬った【固定砲整備4班】の班長さんが弱気になってどうするの…」

「実際に巨人を5体、討伐したのはフローラだろう!？」

「連携がなかったらできなかつたわよ…最初もエレンが引きつけてくれたから討伐できたしね」

「そうか…そうだったな」

フローラの返答で、実は自分がリヴァイ班と同じ事をしていたのを思い出した。

あの時は、がむしやらに突っ込んで、とにかく巨人を街に入れないと奮闘していた。結果は、巨人を5体討伐して刃とガスを全員が半分以上消費していた。

そう、全員が刃とガスを消費していた！

全員が協力した結果、巨人を討伐できていたのだ。

「ありがとうフローラ」

「えっ…？…どういたしまして…？」

フローラはいきなりエレンに感謝されて戸惑った。

元気になったのは良い事ではあるが、いきなり感謝されても心の整理が追い付かず反応に困った。

彼女はエレンが考えている以上に深い意味を言ったつもりはなかったからだ。

交戦した時と比べてあっさり追い詰められていた女型の巨人に違和感を覚えていた。

硬質化すれば斬撃をガードさせて刃を消耗できたし、地面に仰向けで寝ればもつと無

敵になれた。

まるでわざとやられたように見えて要因を思考している片手間でエレンと会話したら感謝された。

彼女目線から見れば、忙しい時に感謝されても困るといふ状況だった。

「何かおかしいわ…」

硬質化と肉体の再生は両立できない。

それは自分が拘束された女型の巨人の首の肉を斬っていた時にニファ先輩が気付いた事である。

逆に言えば、硬質化した様子が見られないのに無駄に斬られているのはおかしかった。

巨人化能力者が操作している巨人が、その辺の巨人と同じように斬られ続けるのはあり得ない。

つまり！あれは罠！

後方から来たエレンを抜かせてフローラは巨大樹の幹を蹴って踵を返して女型の巨

人に向かつていった。

視界に映ったのは、噛み付いたエルド・ジンを吐き捨てる『彼女』の姿だった！

『彼女』は無駄に両肩を切り裂かれていたわけではなかった。

肉体の再生に使える力を全て潰された右目の修復に費やしていた。

おかげで反撃どころか身体を動かす事ができない上に無駄に修復で発生する煙が出ていた。

それでも彼らは経験豊富だからこそ、両肩だけを狙っていたおかげで無事に回復した。

両腕が使えない以上、目の前に突っ込んでくる兵士に向かつてやれることは一つしかなかった…！

「エルド!?!」

忌まわしき無垢の巨人のように兵士を噛み千切る。

口内に肉塊と一緒についてきたスナップブレードが入っており違和感を覚える前に吐き捨てた！

次は！あの女兵士を仕留める…！

「まさか…片目だけ優先して直したの!? そんなことが…できるなんて!」

気付かれた以上、殺すしかない！

両肩を必死に修復させているが集中して修復させるには時間が掛かる！

体勢を立て直される前に殺さないと今度は隙だらけになった自分のうなじを狙われかねない！

両腕が使えない以上、蹴り殺す!!

「ペトラ！早く体勢を立て直せ！」

悲痛な男兵士の声を聴いて女型の巨人は地面を蹴り上げて加速した！

つまり、体勢を立て直せない状況！殺すのはここだけしかないから！

全速力で駆け抜けていけば、踏み抜いて殺すことができる！

完全に腕が使えるまで2分以上掛かると踏んだ。『彼女』は全力でペトラを踏みに行った！

「ペトラ!!早くしろ!!」

幼馴染のオルオの声はしつかりペトラの耳に届いていた！

…がどうしようもなかった。

「オルオ…」

彼女は女型の巨人を確認する為に振り返ったせいで仰向け状態になっていた。

真下に逃げようとすれば地面に激突し、横に逃げようとしたら巨大樹の幹に激突する。

体勢を立て直してもアンカーを突き刺した以上、再度装填してから撃たないと意味は無かった。

取り外し直後のアンカーを射出してもへ口へ口としておりどこにも突き刺さらないからだ…。

要するにどう足掻いても絶望だった。

「…いめん」

「ペトラああああああつ!!いやだあああああつ!!」

悲痛な嘆きの咆哮がペトラの耳を突き抜けていった。

彼女の眼前には自分を踏みつぶそうと企む足の裏がすっかり見えた。

それは意外にも綺麗だった。

自分の足の裏よりもとっても綺麗だった…。

涙で視界が歪んでも…印象的に目に焼き付いた。

「あああああ!!」

エレンは自分の苦しみを吐き出すように叫んだ!

怒り、悲しみ、不安、怨嗟、殺意!

理性でむりやり抑制されていた負の感情を爆発させて自暴自棄の様に号哭した!

「こいつを！殺す!!」

自分の大事な居場所を易々と踏みにじった女型の巨人を！

104期生と同じような心の拠り所を潰した巨人化能力者を！

選択を間違えた自分を殺せない以上、その怒りも含めて全力で殺す!!

怒りに任せて右手を噛み千切った！

『俺には分からない』

『ずっとそうだった…自分の力を信じてても…信頼している仲間の選択を信じてても…』

『結果は誰にも分からなかった…』

リヴァイ兵長の言葉が両肩に強く押し掛かる！

前回は成功したから今回も仲間を信じた結果、仲間が死んだ！

グンタさんもエルドさんもペトラさんもオルオさんもフローラもみんな死んだ！

最初から、こいつをぶつ殺しておけば！困になった兵士も！誰も死なずに済んだ！

追われていた時は、兵長もフローラもリヴァイ班も居たんだ！

絶対に負けるはずがなかった！

「グオオオオオオオッ!!」

巨人化したエレンは、右腕を失っている女型の巨人に怒りに任せて突っ込んでいった

！

一方、女型の巨人は焦っていった！

フローラに右腕を両断されたどころか、短剣の様な刃で右の眼球に突き刺されていた

！

巨人化している間は、視界が制限されている上に巨人化の活動が限界だった…！

更にエレンが巨人化していろんな物をなぎ倒して突っ込んできた！

『やだ！あとちよつとなのに!!』

気力を尽くして活動できて10分程度、その間にエレンを撃退して逃走しなければならぬ。

当然、エレンを抱えて誰にも見つからない様に逃げなければならない！

まだそれだけならいい!

少なくともフローラが「あれで死んだ」と絶対に思っただけでなかった!

106回も医務室送りされても、どんな負傷をしても何食わぬ顔で翌日には活動する女を!

下手すれば1時間もあれば動き出す不死身の彼女を知っているからこそ恐怖した!

「お前!?俺の犠牲を無駄にする気か!?!」

うなじを斬られて死んだグンタさんの幻聴が聴こえてきた。

「痛い…:よ」

食い千切られたエルドさんの幻聴が聴こえた

「どろろしてっ!」

巨大樹の幹に叩きつけられたペトラさんの幻聴が聴こえた。

「ペトラああああ!?なんでだあああ!」

女型の巨人に一矢報いれなかったオルオさんの幻聴が聴こえた。

「覚えてなさいいいいい!」

ワイヤーを巨人に薙ぎ払われて茂みに吹っ飛んでいったフローラの幻聴が聴こえた。自分が選択を間違えたせいで全員死んだ。

でもやっぱりこいつが悪い!

こいつが全員殺したから!全部こいつが死んでいれば解決できた!

「オマエ!!ガアツ!!オアエアガアツ!!」

エレンは右アッパーを回避した女型の巨人を見据えた!

アニ・レオンハートから習った対人格闘術で女型の巨人を葬り気であった!

『あの構え…まずい!』

女型の巨人は右目が回復せず視界が潰されているのに加えて右腕がうまく再生しなかった。

ブリッツメツサーという刃は、それぞれの傷口に深く突き刺さっており修復が無意味になった。

よってエレンの巨人に右目と右腕が使えない状態で挑むしかなかった。幸い、格闘術の動きは読めるものの彼を倒しきれない自信がないが。

『左フック!次は蹴り!』

エレンの左フックを辛うじて回避する “彼女” !

しかし次の攻撃が読めても回避しきれずに転倒した無防備な状態を蹴られた!

砲撃とは比べ物にならない衝撃で意識が飛びそうなのを辛うじて耐えて逃げ出した!

…が、彼に押し掛かれて押し倒されてしまった!

「ジネエ!!」

『私は…帰るんだ!こんな所で終わってたまるか!!』

右ストレートパンチを辛うじてして回避した!

地面に激突した彼の右拳は衝撃で粉碎した!

もし直撃すれば“彼女”の頭などトマトの様に粉碎して中身が飛び出しただろう!

「ツギイツ!!」

『させるか!!』

女性が男性に押し倒されて馬乗りにされた。

憲兵団に通報する案件であるが、そもそも自分は憲兵である!

巨人に性器はないので女性の尊厳を踏みにじられないが護身術はそのまま通じる!

『そっ!!』

「アアアアアアア!!?」

顔を近づけてきたエレンの右目を左手の親指で突いた！

“彼女”はサミングという格闘術でも反則技に分類される技を繰り出した！
右目だけだとはいえ、初めて視界を失った彼はパニックになった！

『この変態野郎!!』

隙を見せて拘束を緩めたエレンの右脚の膝をしっかりと左腕で抱え込みブリッジをする勢いで身体全体で踏ん張って態勢を入れ替えた！

すかさず股間に強烈な蹴りを入れて吹っ飛ばした!!

巨人化したエレンは吹っ飛んで地面に何度も激突しながら巨大樹の幹に激突した！

『くたばれ!!』

激突を見届ける事すらせずに飛んでいった方向に駆け出す女型の巨人！

目標は、巨人のうなじの中に居るエレン・イエーガーだけだ！

エレンは押し倒したものの形勢が逆転して巨大樹の幹に吹っ飛ばされたのを実感した！

未だに脳内が揺れているのか視界がぼやけて吐き気がして呼吸ができなかった！

それでも「彼女」の姿を捉えた彼は脚を丸めて飛び込んでくるタイミングを待った

！

「グダアアアアアレ!!」

『お前が死ね!!』

飛び込んできた女型の巨人を右フックで顎を強打して怯ませた！

更に両脚で蹴り飛ばした!!

動きを予想していたものの回避しきれずに地面に叩きつけられる巨人！

それでも立ち上がる2体の巨人！

巨人同士の闘いは苛烈を極めて衝撃音と地鳴りが辺りに響き渡った！

『やっぱり向こうの方が格上か!』

『くそ！訓練が封じられてなかったら必死に巨人化して格闘術を練習したのに……！』

エレンは巨人化ですら許可が無い場合、自身の命が危うくなった時しかできなかった。

リヴァイ班と約束した取り決めに基づいて訓練してきたせいで経験不足だったのだ。壁上固定砲を薙ぎ払った超大型巨人と仲間であるなら5年以上前からの能力者なのは間違いない。

明らかに巨人で格闘戦をやるには不利だった！

それでも勝機はあった！

『このまま時間を稼げば兵長が来てくれる！』

『そうすればお前なんかすぐ……！』

エレンはそれ以上続けられなかった。

女型の巨人が見覚えのある構えをしてきたからだ。

それはよく知っていた。

だって同期から教わった格闘術にそっくりだったのだから。

『ア…!?!』

その隙を女型の巨人は見逃さなかった!

硬質化した回し蹴りでエレンの顎を強打し頭ごと吹っ飛ばした!

高熱の流血も巨人化した“彼女”に効果はなかった。

そして巨人の頭を吹っ飛ばす衝撃を受けた彼は気を失った。

巨人化能力者同士の闘いはエレンの敗北で終わった。

『なんとか勝てた…これで帰れる…やっと父に逢えるんだ』

“彼女”は動きが止まった首なしのエレンの巨人を見て口を開いた!

頬を引き裂くほどに開いた口でうなじの肉を食い千切って吐き捨てた!

傷口には気絶した見覚えのある男が生えていた。

エレン・イエーガー、自分たちの希望になる存在である。

「オマエ!!ガアツ!!オアエアガアツ!!」

しばらくしていつもと違う巨人の咆哮が聴こえてきた方向に突き進んでいった!

進むにつれて衝撃音と咆哮が聴こえており、ただ事じやないのが理解できた。

そして辿り着いてみると女型の巨人が、巨人化したエレンのうなじを食い千切っていた。

「エレン!!」

目を開けたまま気絶したエレンは女型の巨人に噛みつかれ口内に入っていた。

それをただ呆然として見守っていたミカサ。

そして口を腕で拭い、何事もなかったように「彼女」は立ち去っていた。

「ま、待って…エレン…行かないで…」

ミカサは呟いて手を伸ばした。

そんな行為でエレンを奪還することなどできないと頭で理解していても手を伸ばし

た。

「やだ、…私を…おいて行かないで…」

グリップを握って『強化鞘・1型』から刃を装填した！

その様子を見た女型の巨人は全速力で逃げ出した！！

何故なら巨人化できる時間は5分もないからだ！

そしてなにより…！

「このおお!!エレンを返せええええ!!!!」

鬼神と化したミカサ・アッカーマンが双剣を構えて殺意を剥き出しにて突っ込んできたからだ！

トロスト区防衛戦及びトロスト区奪還作戦での戦果はフローラと互角の女。

むしろ、身体能力ならフローラや自分でさえ凌駕している黒髪の女！

104期訓練兵団の首席で卒業した鬼神が逃亡した誘拐犯を追跡した！

それは地獄から這い出てきた3つ頭の獵犬のようであった！

『絶対に！逃げきってやる！』

「エレンを返せ！返せえええ!!!」

『これで！終わりにする!!』

「逃がすかああ!!」

ボロボロになった女型の巨人と鬼神になったミカサの追いかけっこが開幕した！

36話 なんの成果も得られませんでした

女型の巨人は必死に逃走しているが限界が近かった。

視界が赤く染まって息苦しく身体が自由に動かなかった。

もって3分、それまでにミカサ・アツカーマンを撒いて馬をバレないように呼んで逃走する！

もちろん、気絶したエレンを運んで巨人に狙われない安全な場所まで行く！

『無理無理！絶対に無理！』

“彼女”は絶望した。

口内に【希望】があるのにどうしようもない現実の壁が立ちはだかっていた。

既に巨体の至る所をミカサに斬られてしまい最低限の修復で済ませている。

それでも彼女達は諦めなかった。

「絶対に……生きてる！」

「どこにいても…身体中を搔っ捌いて汚い所から…出してあげる!」

一度、呼吸を整える為に幹にぶらさがったミカサはエレンが生きていると何度も口に出していた。

彼女の脳裏には辛い現実があった。

「丸呑みされたトーマスなんだけど…ダメだったわ」

「どうして!?! 巨人は消化しないって聞いた!」

「胃液よ、消化器官がないけど人間の死体を蓄える胃袋みたいなものがあつたの」

「サシャも言つてたけど胃袋らしき器官が死体で満杯になると吐き出すみたいね」

思い出話をしている時にフローラは残酷な事実を告げた。

巨人に丸呑みされたらすぐに救出しないと中途半端に溶かされて死んでしまうと…。

「同じく呑み込まれたエレンの話から、少しの間は生きていられるけど…」

「じゃあどうすればいい!？」

「もちろん、呑み込まれたらすぐにうなじを斬って巨人を討伐、迅速に救出しないといけないわ」

彼女はトーマス・ワグナーの名前が書かれた訓練兵団のワツペンを見せてくれた。少しボロボロになっていて汚れているが彫られた文字はしっかりと読める。

「見ての通り、そこまで強力な酸性はないわ…もっと早く狩ったら救えたかもね」

「早くってどれくらい?」

「エレンの経験談からすると3分くらいじゃない?」

「分かった!次にエレンを巨人が喰ったら胃袋を掻っ捌く!」

「うなじよ?うなじ!巨人の本体を斬らないと助けられる命も助からないわよ」

アルミンの話から推察して、この巨人はエレンと同じ巨人化能力者!

他の巨人と違って捕食する為とは思えないが身体は巨人!

今は口に含んでいるが胃袋に収容する可能性もないとはいえない！
速やかに奪還する必要があった。

「待て!!」

女型の巨人の突きを回避したミカサは背後にまわった！

「落ち着け、同じだ、一旦離れるぞ」

飛び込もうとした瞬間、リヴァイ兵士長に制止された。
思わず睨もうとしたが、彼の目を見てすぐに信じて指示に従った。

「この距離を保て……ここならどんな行動でも対処できる」

「このままじゃ……ダメです！」

「落ち着け、良く見ろ……奴の疲弊しているのかそこまで速力を出せないようだ」

確かに通常の巨人のようにスタミナが切れてきつきより速度が落ちている。

しかし、追手2人を油断させる策かもしれない。

ミカサはそう思ったが兵長は既に結論づけたからこそ距離を取った。

「うなじごと喰われたようだがエレンは死んだのか？」

「エレンは生きています！わざわざ口に含んだまま戦い！逃げています！」

「エレンを喰うのが目的かもな…そうなればエレンは胃袋の中、そしたら死んでるか」

「生きてます！」

「だと良いのだが…」

ミカサは激怒した！

そもそもエレンを護衛していたのはリヴァイ班だ！

なら、彼がちやんと護衛していればこんな事にはならなかった！

護衛のトップが護衛対象を放置した結果、こうなったのだから貴方が悪い！

彼女は無言でエレンに暴行したことがある人類最強の男を睨んだ！

「何か言いたそうだな…ああ分かってるさ」

「お前の過去はフローラから少し聞いている…大切な家族なんだろう？」

「だったらい！」

「落ち着け、ここでしくじれば取返しが付かんぞ」

リヴァイは自分で発言しておきながら家族という単語に反応した。

だがそれはすぐに消えた。

うなじを斬られたグンタの死体を目撃した時、思い浮かんだ単語は『またか』だった。大切な物ほど壊れていくのを経験してきた彼は、またしても失ってしまった。

現在、ミカサの大切な家族であるエレンが失われようとしている…。

それを無視するほど彼は冷酷ではなかった！

「目的を一つに絞るぞ…まず女型の巨人を仕留めるのは諦める」

「奴は仲間をたくさん殺しました」

「あの硬化する能力がある以上は無理だ、俺の判断に従え、新兵なら尚更な」

自分が選抜した班員たちが間抜けに死ぬわけがない。

つまり、まだ何か隠し玉を隠していると思ったりヴァイは湧き上がる復讐の感情を抑えた。

ミカサ以上に情熱的で感情的な彼は新兵にその顔を見せない様に堪えていた。上官が感情的になって動くほど情けない物はないからだ。

「エレンが生きている事に全ての望みを賭けて、奴が森を抜ける前にエレンを救い出す」
「俺が奴を削る」

「お前は奴の注意を引け、あと死ぬなエレンの為にな…」

ミカサはその話を聴いて拳を握りしめた！

『嫌だ…絶対に嫌だ』

「彼女」は必死に逃げた！

危惧していた人類最強の男が出現したからだ！

『嫌だ！嫌だああああ!!戦いたくないいい!!』

思えば、襲撃する度に難易度が上がっていた。

掌サイズの喋る蠅、フローラ、リヴァイ班、フローラとリヴァイ班残党、ミカサ、ミカサと兵長！

いくら【車力の巨人】の次に持続性が優れているとはいえ【女型の巨人】で連戦はきつかった。

特にフローラですらGで振り回されていたのに、ミカサはその様子すら見せずに急旋回を繰り返していた。

それより強いリヴァイ兵長など想像したくなかった！

『あれはミカサ…!?!』

“彼女”の赤くなった視界に飛び出してきたのはミカサだった。

執拗に身体を刻んできた彼女が理由もなく前方に飛び出してくるはずはなかった。

つまり囿！本命は後ろ!!

『お願い！死ね!!』

振り返って左ストレートで貫いたが無駄の抵抗だった。

リヴァイ兵長は一瞬ガスを噴出させて勢いをつけて貫いた巨人の左腕で何度も蹴って回転斬りを行なった。

そして視界は真っ黒になった。

『また目つぶし!?…えっ?』

女型の巨人が目を潰されたと実感した瞬間、兵長は両脚に回転斬りで無理やり座らせた!

『座った!?…ええ!?』

またしても巨大樹の幹にぶつかつたと感知した頃には螺旋状に斬られた左腕が上がらなくなった。

もはやうなじを守るのは背後の樹だけであった。

密着させるのは不可能なので刈り辛いという事だが彼ら相手には何の役にも立ちそ

うになかった。

早過ぎて反応できず、肉体の再生を諦めてうなじを何度も硬質化させるしかできなかった。

それも持続しないし、どんどん巨人化の限界が近づいていた。

「殺せる…」

動けなくなった女型の巨人を見てミカサは「彼女」の首にアンカーを突き刺して突っ込んだ！

「よせ!!」

リヴァイは、命令を無視した新兵を見捨てられず女型の巨人に突っ込んでいった！
衝撃で位置を察した「彼女」は無我夢中で飛んできた方向に頭を振った！

間一髪、彼はミカサが女型の巨人の頭に激突させないように軌道変更できた。

だが代償は大きかった…。

左脚を強打し、骨折してしまった。

それでも彼は力を振り絞って双剣を握りしめて回転斬りをして女型の巨人の頬を切り裂いた！

「エレン」

頬の筋肉が削がれた結果、顎を支える事ができずに唾液だらけのエレンが日の光を浴びて光った。

その隙を見逃さず汚れるのも構わずに彼を抱えて潔癖症のリヴァイは戦線離脱を図る！

「目的は達成した！ズラかるぞ」

「…すみません」

「エレンは呼吸しているから生きている、多分無事だろう」

「はい…」

ミカサは自分を助けてくれた兵長に申し訳なかった。

作戦は囿になって気を惹くのであって討伐する事ではなかった。

作戦の目標であるエレン奪還を昂る感情で見失ってしまい、己のミスで彼を負傷させてしまった。

「作戦の本質を見失うな…」

「こいつより自分の欲求の方が大事なのか？お前の大切な家族より優先事項があったのか？」

「ないです…エレンが居れば私は…」

「だったら撤退だ、次破ったらこいつを投げ捨てて帰る、良いな？」

「分かりました」

反省しているミカサの気持ちは良く分かる。

だからこそ、同じ過ちを繰り返さない様にリヴァイなりの優しさで警告した。

実際に痛みを知らない人間は同じ過ちを繰り返すのだから。

もつとも自分が代償になってしまったが…若い奴らを死なせるのは汚物を触るより嫌だった。

彼は念入りに確認してなかった自分が悪いと判断して、結果を受け入れた。

「さて、あいつは…!?!」

リヴァイは次の襲撃に備えて女型の巨人を見ると驚いた。

“彼女”は無言で修復された左目の眼球から涙を垂らしていた。

殺戮兵器と言わんばかりに暴れ回った巨人の末路に何とも言えないままその場を後にした。

結局、兵士の死体をほとんど回収する事ができなかった。

選抜した【調査兵团特別作戦班】の死体は、うなじを斬られたグンタ・シユルツの名のみ。

彼らがエレンを放置して敵前逃亡するのはあり得ないので全員、名誉の戦死をしたのだろう。

生存の見込みがない行方不明より、名誉の戦死の方が彼らも少しは救われるだろう。リヴァイは心の中で『済まない』と呟いた。

「もう死亡を確認しただろうか？それで充分だ」

「遺体があるうがなかるうが死亡は死亡だ、変わる事はないだろう」

「ですが！第二分隊の遺体を回収できておりません!!」

辛うじて回収できた荷馬車にありつただけの遺体を載せた。

それでも死体が足りなかった。

特に右翼の索敵を担当していた第二分隊の隊員たちの遺体は誰一人回収できなかった。

運よく生き残った隊員が必死に縋って回収を懇願していた。

「死体は放棄、死亡が確認できなかった兵士は行方不明と処理する」

「これは決定事項だ…諦めろ」

すかさずエルヴィン団長が彼らの心を砕いた。

こうでもしないといつまで経っても壁内に帰れないからだ。

無駄な希望などさっさと捨てて現実を認識させるために冷酷に切り捨てた。

その背後を生き残りの兵士だけではなく104期調査兵たちも目撃した。

「お二人には…人間らしい気持ちがないのですか!!」

「おいやめろ! 団長たちだってそう想っているはずだ!」

背後から聴こえる兵士の悲痛な叫びが彼らの胸を鋭く貫いた。

宥める兵士の声もしっかりと届いていた。

「なあエルヴィン、俺が言うのもなんだが…もつと言葉を選べただろう?」

「壁に帰還するだけ考えさせろ、そうではないところは生き残れないのだからな」

「我々は決して弱音を吐いてはならない、それでもしなければ組織は瓦解するからだ」

「ならさっさと乗馬して撤退の合図を出せ」

「ははっ…分かってるさ」

彼らは馬に跨り背後を振り返った。

そこには出発した時より半減しており、悲痛な顔をして命令を待っている兵士達が居た。

そして、遙か遠くには複数の巨人の姿が見えた!

「聞け!!これからカラネス区に帰還する!総員!ウォール・ローゼに進撃せよ!」
「ハッ!」

スナツプブレードを構えて調査兵団の団長は前へと馬を進めた!

「進め!!」

それに続いて騎兵たちは馬を走らせていく。

長距離索敵陣形を編成する暇すらなかった為、巨人と遭遇しないのを祈るしかなかった。
た。

既に12体の巨人が背後から押し寄せて来ているのは…無視をした!

「大きな木も見えなければ建物も見えん、思うように戦えんな…」

「壁まで逃げ切る方が早い」

「そうか、分かった…やるんだな?」

「ああ、やってくれ」

エルヴィンの意図を察したリヴァイは後方に居る荷馬車へと向かった。

「おい！もう追ってきたのか!？」

「赤色の信煙弾を撃て！」

「もう向こうが撃った！」

「こつちにも来ているだろうが！早く撃て!!！」

死体を載せ過ぎて過剰重量の荷馬車は速度がとても遅かった。

護衛班は団長の命令を無視して交戦する気満々だった！

「ディター!？」

「今、助けるぞ!!！」

既に巨人の攻撃を回避しようとして負傷者を投げだしてしまった。

慌てて彼は立体機動で戦闘に挑んだが平原での戦闘は圧倒的に不利だった。

覚悟を決めた彼は1体の巨人を討伐して負傷者を担いだが馬は戻ってこなかった。

何度も必死に指笛をしていたせいで背後の巨人に気付かず喰われてしまった。援護に向かった兵士2名も返り討ちで終わった。

「俺があいつらの後ろにまわる！その隙に…」

「おいお前ら！」

「兵長！」

「早くあいつらを討伐してください！」

「お願いします！」

リヴァイ兵長を見た荷馬車の死体輸送班員たちは喜んだ。

これで遺体を壁内にもっていけると…！

だが現実是非情だった。

「遺体を捨てろ、追い付かれる前にさっさとやれ！」

「しかし…」

「遺体を持ち帰れなかったのは過去にいくらでもある…こいつらだけが特別じゃない」

「何故ですか!?!兵長ほどの実力なら…」

「俺の刃は生存者を守る為であって、死者を守る為ではない…分かるか？」

兵長から聞かされた残酷な現実。

死体の重量で荷馬車の速度が出ないなら、それを捨てればいい。

考えれば簡単な話だが、現実的には中々できない事だ。

仲間であり同志である戦友を投げ捨てるなんて…覚悟ができる方が頭がおかしいのだ。

「やるんですか!?! 本当にやるんですか!?!」

「俺が全部責任を取る…生き残りましたかったら早く決断しろ」

リヴァイは左脚の痛みのせいで交戦できないのが歯痒かった。

負けはしないが、そのまま馬から見放されればどの道、終わりだ。

それに先ほど言った通り、できれば生存者を助けたかったのだ。

「クツ…やるしかない!」

「うわあああ!」

死体輸送班の班員たちが死体を投げ捨てていった。

その様子をアルミン、ジャン、コニーが目撃した。

さきほどもで生きていた兵士だった物がゴミの様に投げ捨てられる光景を…。

リヴァイもその様子を見届けた。

死体の中にはグンタ・シユルツもあつた。

言い出しぺの彼は責任をもつて最後まで見届けた。

エレンは大きな音と振動で目覚めた。

「おっ？ 起きたか」

「えっ…」

さつきまで女型の巨人と交戦していたつもりでいる彼は混乱した。

何故、馬車に乗っているのか、下半身が動かないのかと。

「エレン！」

「ミカサ!？」

「まだ起きないで…安静にして…」

「女型は!？」

「ゴメン…逃がした」

ミカサの返答が信じられなかった。

第57回壁外調査は、結果的にあの巨人をなんとかするものであった。
それを逃した。

「なんで…どうして…なあ作戦は…」

「失敗した…今は休んで」

「これは…まさかまた助けてくれたのか…」

「もう壁に着くから…今度はもつといいベッドで休める」

「えっ?」

緑色の外套を羽織っているのに気付いたエレンであったが更に衝撃的事実を知った。何の成果も得られずに壁内に帰るといふのだ。

耳を澄ませば、5年前にシガンシナ区と同じ鐘の音色が聴こえた。

あの時に帰還してきた調査兵団は負傷者だらけで動く屍の行進のようであった。今回も同じ失敗を繰り返して、のこのこと恥知らずに帰還している事に衝撃を受けた。

「調査兵団がもう帰ってきたぞ」

「こいつら何しに行つたんだ？」

「さあな？ただ、俺たちの税金を壁の外に投げ捨てたのは成功したみたいだ」

「なんでこいつら未だに存続してるんだ？俺が王様ならすぐに廃止にしてやんよ！」

自分たちの苦勞も知らずに安全地帯から罵倒しかできない腰抜け共。なにより自分よりリヴァイ班を馬鹿にした感じがして許せなかった。殴りたかった、蹴りたかった、罵倒したかった、謝罪させたかった。それでもミカサに諭されて必死にエレンは我慢した。

「あ！ かつけー！ さすが調査兵团だ！」

「あんなボロボロになっても戦い続けるなんて！」

「お兄ちゃん… 危ないから脚立を降りようよ…」

「エリー！ 僕は調査兵团に入つて… 巨人を倒すんだ!!」

荷馬車に居るエレンの姿を見て興奮する少年とエリーと呼ばれた少女。

皮肉にも壁外調査の開始前に自信満々の姿を見せていた少年たちであった。

5年前のシガンシナ区で、調査兵团に憧れていた幼き自分と、ミカサの姿を重ねていた。

そんな少年たちの目には、同じようにボロボロになった調査兵にしか見えなかったのだろう。

エレンは右手で目を隠して、隠すように泣いた。

「これで最後か…」

「リヴァイ兵長…」

ウォール・ローゼの突起した要塞都市であるカラネス区。

最後に入れたのは、役割を自分から放棄した死体輸送班と荷馬車だった。

「ああ、残酷な命令をして済まなかった」

「リヴァイ兵長…自分は…自分は！」

リヴァイは彼らが戻ってくるまで双剣を構えていた。

まるでしんがりのように、唯一の出口が塞がるまで待機していた。

巨人が入ってくるのを警戒していたのもあるが、どうしても彼らに逢いたかったからだ。

「これが【奴らの生きた証】だ、俺にとってはな…」

「これは…」

「ああ、あいつらのワッペンだ、今度は投げ捨てるなよ」

「兵長…」

渡したのは【自由の翼】のワッペンだった。

もちろん、さきほど積み荷のように扱った死体たちのものだ。

死体を確認するついでに回収しておいたのがここで役に立った。

これが亡き戦友たちが残した「生きた証」だった。

思わず泣いてしまった兵士たちは、無言で馬に乗って去っていく兵長に敬礼した！

「見ろよ……リヴァイ兵長だぞ」

「本当に1個旅団の実力があるのか？ 過剰評価じゃないか？」

「だよなーあんなチビがそんな活躍できるわけないもんな」

「うるせえ!!」と普段なら返したいリヴァイであったがそれどころではなかった。

選抜した部下たちの死は、いつも以上に影を引き摺っており遺族と面会する勇氣すらなかった。

「思わず馬を進めて最後尾から逃げ出して先頭に居るエルヴィンを抜かしたくなるほどに……」

「兵長！ リヴァイ兵長殿！」

エレンが乗っている荷馬車を見つけて思わず馬から降りてしまったのが運の尽き

だった。

「娘がお世話になつております！ペトラの父です！」

「娘に見つかる前に話してえことが……」

「構わない……続けてくれ」

よりによつてペトラの父親に遭遇してしまつた。

シングルファザーに育てられた大切な部下を預かつた身。

兄貴分につつきらぼうながらも育つたリヴァイからすれば、感じる物があつた。

「娘から手紙が来ましてね……腕を見込まれてリヴァイ兵士長に仕える事になつたとか……」

「あなたに全てを捧げるつもりとか……ホント親の気苦労も知らねえで惚気てるわけですよ」

「調子に乗つた娘が迷惑をかけませんか？」

「そんなことは無い、立派な兵士だつた」

兵士長に呼びかけたブルーノ・ラルは気付いていた。愛する一人娘のペトラが戦死したことを。

それでもなければ彼から離れるわけがなかったからだ。なにより彼の表情から碌な死に方をしてないと分かる。

…分かつているのに事前に考えていた言葉が喉から溢れてきて止まらなかつた。

「…まあ、父親として嫁に出すには早えかなと思ひまして…あいつは19歳だしまだ…」
「そうだな」

「…兵士長、正直に言つてください！娘は！娘は死んだのですね!!」

「済まない…遺体すら確認できなかつた」

「分かつていました、覚悟してましたよお…気を落とさんでくでせえ…」

「そんな顔をされたら娘は成仏できませえんから…!」

ペトラの父親の気遣いが却つてリヴァイ兵士長を傷付けた。

今回も選択肢を間違えて部下を死なせた。

次回も選択肢を間違えて部下を死なせる糞野郎に気遣つてくれる優しい父親を直視できなかつた。

荷馬車で話を聴いていたエレンは更に泣いた。

「なんだ？ 後ろの方が煩いぞ…？」

しかし、近くに居た兵士が後ろの騒動に気付いた。

カラネス区の住民の大半が歓迎ムードではなく、むしろ罵倒や軽蔑をしていた。それでも口論しながら馬を走らせる複数の兵士が煩すぎたのだ。

「【人類最強の女】という称号をこの俺様が認定してやるぞ！」

「全然！ 嬉しくありませんわ!!」

「その引き換えに、ペトラを病院に連れて行く権利をやろう」

「エルドさんと比べて軽傷なんだから、調査兵団の衛生兵で充分でしょう!？」

「バカ！ 野郎にペトラの裸を見せろって言うのか!？ 天地がひっくり返っても許さん！」

「まだ裸を見れる関係じゃないのね…」

「すぐに見れるようにしてやるとも！」

聴き慣れた声がしてブルーノ・ラルとリヴァイは後ろを見た。

ついでにエレンも荷馬車の縁を掴んで声が出た方に覗き込んだ

「あんたたち！私を何だと思ってるの!？」

「負傷して足手まといになったメインヒロイン」

「怪我をして少しは素直になった優秀な俺様に相応しい嫁候補オンリーワン！」

「オルオはともかく、フローラまでそんな事言うとは思わなかった!!」

「事実だろう?」

「事実ですわ」

「あーむかつく!」

彼らが目にしたのは、罵倒し合いながらも馬で爆走するフローラとオルオ。

フローラの後ろには何故か縛り付けられながらも罵倒できる元気がある血塗れのペトラ。

そして後方には黒髪で、おさげが2つある死んだ目をして馬を走らせる女兵士の姿だった。

「生きていたのか…あいつら」

彼女達は女型の巨人の戦闘で生き残る事が出来た。

むしろ、その後が苦難の連続であった。

特にフローラが！

エルヴィン団長が率いる本隊に合流できなかつた彼女達が帰還できた理由。

それを説明するには、エルド・ジンが女型の巨人に噛まれた時まで時間を遡る必要がある。

37話 回想3—1 カラネス区撤退作戦 開幕

！
女型の巨人は、仰向けになってこちらを見ている女兵士に向けて全速力で駆け抜けた

両腕がまだ使えない以上、踏み潰す以外に殺す事ができなかった。

ここで逃せば形勢が逆転してこちらが殺される以上、やるしかなかった！

「ペトラあああああつ！！いやだあああああつ！！」

次はあの女の名を叫んだ兵士を殺す！

そう決意した「彼女」は跳んで、ペトラと呼ばれた女兵士を右足で踏みつけようとした！

「隙あり！」

聴き慣れた声が聴こえた瞬間、女型の巨人は身体を捻って頭を地面に叩きつけて横に

転がった!

肉体を再生している以上、うなじを硬質化で守る事ができないので回避行動を優先した。

身体を回転させることで、前回みたいうなじを攻撃させないようにした。

「なんてね!」

フローラ・エリクシアは、自身の實力ではペトラ先輩を助ける事ができなかった。

だから女型の巨人の攻撃自体をキャンセルする必要があった。

さきほどの発言は、「彼女」との初戦で実際にうなじを斬り付けた時の発言だ。

「ペトラさん!今のうちに!」

「…ええ!ありがとう!!」

巨人化能力者は、必死に肉体を再生しつつ目の前の敵に夢中で他に気を配る余裕がなかった。

【硬質化】と【肉体の再生】は両立できないのを知っていたフローラは、うなじを硬質化

できないと瞬時に判断！

うなじを2度も斬られる失態を繰り返さない実力者だと賭けて、わざと「隙あり」と発言した。

賭けは成功して、うなじを斬られないように回避行動をしたのを巨大樹の枝から確認していた。

「？」

“彼女”は攻撃されなかったのに疑問に思った。

てつきりあの女兵士を囿にしてフローラがうなじを狙ってきて斬り付けてくると思ったからだ。

すぐにその疑問は解決することとなる。

「…死ね！」

オルオ・ボザドは立ち上がった女型の巨人の隙を見逃さず、うなじを斬り付けた！

「…何故だ…刃が通らねえ…」

当然、うなじを硬質化できるようになったからこそ、女型の巨人はそんな隙をみせた。硬質化で斬撃をガードできると知らなかった彼は鋼鉄並みの皮膚の感触に判断力が鈍った。

“彼女”がそんな隙を見逃すわけも無く蹴り飛ばそうとした！

「無視するんじゃないわよ！」

フローラは、視力が完全回復した女型の巨人の右目に刃を奥深くまで突き刺した！

一般兵の刃は、スナップブレードという巨人のうなじを刈るだけに特化したものである。一方、彼女の専用装備であるブリッツメツサーという刃は、短剣のような形状だった。

「やっぱり眼球は鍛えようがないわね！」

トロスト区奪還作戦では、皮膚が硬い【変異種】ですら眼球に壊れた刃が容易に突き

刺さった。

ならば、女型の巨人にも通じると思ったフローラは迷うことなく刃を突っ込んだ！

さすがに眼球を硬質化する事はできないと思つたし、眼球の刺激で動きが鈍ると判断し行動した。

「オルオさん！こいつは結晶を作り出して鎧にする能力があります！」

「はあ!?じゃあどうすればいい!?」

「肉体の再生と硬質化は両立できません！片足と片腕を斬り落とすだけで無力化できませんわー！」

「なるほどね…うなじを守らせるだけで精一杯の環境を作ればいいのね」

「ペトラ!?大丈夫なのか!?」

「オルオに心配されるほど、か弱い身体じゃない！」

眼球を攻撃されて怯んだ隙に2人は安全な距離を取って情報を共有していた。

復帰したペトラは、その会話を聴いて雪辱を果たす気満々である。

無様な姿を後輩とオルオに見せた以上、女型の巨人を討伐して話のタネ程度に抑えたかった。

手品の種が割れた以上、リヴァイ班は2度も同じ失態を繰り返すほどの愚かではなかった!

「命令を無視したのは癪に障るが、お説教は後だ!まずこいつの両腕を両断する!」

「フローラ!俺と来い!」

「分かりました!」

わざわざ大声で、指で指して目標を伝えるオルオの意図を察したフローラは返答と共に突っ込む!

その声を聴いた女型の巨人は身構えて蹴り落とそうとした!

それを見越して2人は分かれて別方向から挟撃しようとする!

「バーカ!」

「引つ掛かったわね!」

2人は前言撤回したように息のあったバディアクションで、うなじを切り裂いた! さつきと同じように大声で叫んだのはフェイクだった。

最初からオルオとフローラは指を指した場所、うなじを狙っていた！

『しまった!?!』

“彼女”は声に気を取られて垂れた両腕の硬質化をしまい、うなじを守るのを忘れてしまった！

今の一撃で肉が薄くなり、次狙われたら即死しかねないので最優先でうなじを硬質化させた！

そのせいで両腕についた結晶は零れ落ちていった。

「ペトラさん！お願いします！」

「エルドの痛み！思い知れえええ!!」

フローラの一言を聞くまでもなくペトラは双剣を構えて両肘を切り裂いていった!!

スナップブレードが折れるほどの衝撃は彼女の両腕を痛めたがそれ以上の効果があった。

「そい!!」

肉を断ち骨を粉碎して皮で繋がっている右腕をフローラが双剣で斬り付けた! うなじを硬質化しているせいで驚異の肉体再生などなく、あっさりと切断した。置き土産に刃が欠けたブリッツメツサー2本を傷口に突き刺して離脱した!!

「よし! 上出来だ! 次は脚を狙う!!」

「了解しました!」

「もうすぐ兵長が来る! それまでに…」

次は脚を狙おうとした3人。

ここで倒すつもりはなくリヴァイ兵長を待つて指示をもらうつもりだった。少なくともペトラは、そう思っていたが…予想外の事が起こる。

「ウガガアアアアア!!」

巨人化したエレンが怒りに身を任せて女型の巨人の居る場所に向かって突撃したの

は想定外であった！

身の危険が及んでいないにも関わらずエレンが巨人化したのを目撃をして衝撃を受けた3人。

しかし、女型の巨人を無視するわけにもいかず、対処に向かうペトラに任せて戦闘を継続させた！

「エレン！なんで巨人化したの!?!」

「ゴロオオズウウウウ！」

巨人になったエレンは怒りで視界が狭くなっており邪魔だった巨大樹の枝を左腕で薙ぎ払った！

その際、彼を制止しようとしていたペトラのワイヤーを巻き込んでしまった！

「どうして!?!…ぐっ!!」

その衝撃でぶっ飛ばされたペトラは巨大樹の幹に激突して地面に落下した！

「ペトラああああ!?なんでだあああ!」

まさかのフレンドリーファイアに動揺して動きが止まったオルオ。

ワイヤーを自身の右脚に引つ掛けたと気付かず動いたせいで余計に回避行動ができなかった。

慌ててアンカーを外すが時遅し、エレンによつて愛する彼女と同様に巨大樹の幹に激突した。

「この馬鹿!なんてことをしてくれたのよ!!」

思わずフローラはエレンの身体に右アンカーを射出して突っ込んでいったのが間違いだった!

そんな彼は知るか馬鹿と言わんばかりに左腕を振って彼女のワイヤーにぶつかろうとしていた!

「同志だからそんな事しないで」と願っていた彼女の想いも空しくワイヤーに接触する!

「覚えてなさいいいいいい！」

ぶっ飛ばされたフローラは何とか激突を回避しようとしたが、どうしようもなかった。

制御を失った彼女は体勢を立て直そうと悪戦苦闘しながら茂みの中に突っ込んでいた。

『助かった…』

その騒動で何とか左目の再生を完了させた女型の巨人は呆然とその光景を目撃した。敵の敵は味方とは良く言うが、まさかエレンが味方をぶっ飛ばすとは思わなかった。とにかく、状況が好転したのを利用して、彼の攻撃に備えた。

「絶対に赦さない！次逢ったら平手打ちしてやるわ！」

茂みから顔を守るために両腕でガードした結果、血塗れになった。それだけならまだいい。

外套が無かったら首が枝で突き刺さっていた所だった！

なんとか巨大樹の枝にアンカーを突き刺して振り子のように衝撃を抑えたフローラ。そんな彼女の脳内は、エレンへのお仕置き的事で頭が一杯だった！

「あれは…」

そして揺れが収まってきた頃、下を見るとある人物を見つけた！

「エルドさん！…まだ生きてる」

両腕を喰い千切られて地面に叩きつけられたエルドが居た。

降りて安否確認をすると驚いた事にまだ生存している。

噛み千切られた事で意図せずに傷口が潰れて、出血する場所が少なかった事。

衝突した場所が巨大樹の枝や葉でクッションになったおかげでダメージを緩和して

いた事。

奇跡的な条件のおかげでなんとか助かったが、すぐに命の灯が消えるのは明白だった。

「やばい…早く止血しないと…」

だが、ここには包帯どころか、止血する為の紐すらなかった。

トロスト区防衛戦で戦死した恋人のハンナの止血をしようとしたフランスの事すらできなかった。

「何か…あっ」

代用できる物はある。

ライリーに噛まれたせいで破れた緑色の外套は、さきほどの衝撃で更にボロボロになっっていた。

すぐに両手で端を引っ張ると面白いほどにうまく布を破けた！

そして自作した紐で緊縛して止血を施した。

あくまで延命の為の応急措置であり、この壁外では介錯してあげた方が苦しまずに済むまでである。

「ペトラさん…オルオさん」

それでもフローラは軽くなったエルドを背負って「声」を辿りに2人を探しに行った。

それぞれ血塗れになっていたのを発見して全員に『モールフィン』という鎮痛剤を打ち込んだ。

衛生上、針を変えないといけないが、そんな暇はないし、なにより分量を計算する時間が惜しい。

本来なら衛生兵など、所持する資格がある人物しか携帯できない第一類医薬品である。

もちろん、新兵が所有できるはずもなかったが、106回も医務室送りをされた経歴をもつ彼女。

匙を投げた医師から、特例で取り扱い扱いと管理方法を叩き込まれて譲渡された代物だった。

「ううっ…」

「大丈夫ですか？」

「おい…なんで俺たちを助けた!? エレンを…」

「大丈夫です! リヴァイ兵士長が女型の巨人と接触しました。エレンに危機が及ぶ事はないです」

「…そうか、くっそおお…エレンめ」

比較的軽傷で済んだオルオは、フローラとの会話で現状把握し、元凶のエレンを恨んだ。

だが、すぐに大切な人を思い出した!

「ペトラ!?!」

「大丈夫ですわ…血塗れですが思ったより身体に損傷はありません」

「傷は残るのか!?!」

「そうですわね…経験上、目立たない傷で済みそうですわ」

「そうか…」

緑色の外套と兵服が血塗れになっているが、フローラの言葉を信じる事にした。

「馬に向かって撤収するぞ…」

「エレンを放置するのですか？」

「兵長と一緒に平気だろう、今の俺たちじゃ足手まといだからな」

当初の予定通り、馬と合流する事にした。

まず壁外では馬がなければ話にならないからだ。

「フローラ、ペトラを頼む…運んでくれ」

「何故ですか？」

「魅力的な彼女の身体を堪能するには、必要な手順を踏んでないからだ…」

「義理深い方ですわね…」

「うるせえ…黙って俺の案内に従え」

「了解しました」

オルオがエルドを、フローラがペトラを背負い、馬のライリーは自由を背負って駆け出した。

そして、無事に6人分の馬を繋いでいる場所に着いたがトラブルが発生した。

「オルオ!?!」

「んっ!?何でお前らがここに居るんだ!?!」

「黄色の信煙弾を見たから駆けつけた!それなのに何も指示がないせいで動けなかったんだ」

「くそっ!情報が共有されてない弊害が出たな!?!」

そこに居たのは14名の兵士であった。

物事を判断する班長たちが女型の巨人に対処しようとして戦死した結果、部下達は取り残された。

しかも、壁外調査の【真の目的】を知らされていた班長が討ち死にした為、指揮系統が断絶した。

その結果、エルヴィンの真意が伝わらず、彼らは身動き取れないまま森に取り残されていた。

「衛生兵！衛生兵は居るか!？」

「ああ、俺たちがそうだ！」

「エルドがやられた！診て欲しい！」

衛生兵が6名も居るといふ壁外では信じられない医療環境が整っているのは不幸中の幸いだった。

それどころか馬医師の5名も居た。

原因は、エルヴィン団長が中列の部隊のみ巨大樹の森に進軍させたせいだった。

それは巨人捕獲班だけではなく戦闘支援兵科の班も含んでいた。

「ううっ…見捨てられない…」

フローラは頭を抱えた。

衛生兵6名と馬医師5名、1人でも失えば調査兵団は大打撃を受ける。

最悪、一般兵なら10日の基礎訓練を修了すれば使い物になる。

だが、彼らの育成は最低でも数年、しかも壁外に付き添う志を持つ者なんて一握りだ。

彼女は悩んだ、どうやったら彼らを生存させたままウォール・ローゼに帰還できるのかと…。

「フローラー！」

それ以上に悩ましい存在が居た。

ミーナ・カロライナ、自分の親友が何故かここに居て縋るように話しかけてきた。

ここに居る理由は、大体察したが問題だらけの現状に頭が痛くなってきた。

「…何で答えてくれないの？」

「何で貴女がここに居るのか、悩んでいるからよ」

「それはフローラーも同じでしょ？」

「そうね…どうしようかしら」

不安そうに自分を見つめるミーナ。

他の班員たちが見当たらない以上、おそらく彼女が単独行動した結果だろう。

班の決定を無視してここに来た。

それはキース教官や今は亡きネス班長が自分に口煩くしてきた事と同じ事だった。

「……めんなさい」

「どうしたの？」

「何でもないわ」

班長の命令を聞かずに単独行動をして班員に迷惑を掛けるという事を身をもって知る事となった。

実際にその状況下に置かれてみると彼らは、自分を想って叱ってくれたと思った。

とはいえ、そんな事を反省するよりも、この状況を打開する案を必死に考え始めた！

“彼女”は泣いた。

口内から奪取されたエレンを直視する事もできずに泣いた。

今までの殺人は全て無駄に終わった。

それだけではない。

彼に教えた格闘術の構えを見せてしまったので、正体を見破られた可能性があった。

「嫌だ…帰りたいたい」

現実逃避したかったが、訓練や決意のせいで、精神分裂をした糞野郎のようにできなかった。

リヴァイとミカサが去った瞬間、時間切れとなり女型の巨人は蒸気を上げて崩れ去った。

残されたのは、立体機動装置を纏った己の身体一つのみ。

だからこそ、壁内に降りたかった。

「…あの場所に降りたいたい」

やたらとお節介の彼女が居るあの部屋に。

今日の為に病欠にしてくれたあの女の元に降りたかった。

気遣って花のアクセサリーをくれた何だかんだで優しい女が居る部屋の元に。

ストヘス区の憲兵団本部の一室に帰る。

巨人化したまま巨大樹の森に侵入した際に追撃をしてきた兵士たち。殺した以上、どこかに彼らが置き去りにした馬が居るはずだ。全力で疾走してきたのに増援が間に合った以上、何頭か近くに居るはずだった。指笛を必死に鳴らしながら「彼女」は彷徨うように暗い森の中を進んで行った。そして、物音がして息を切らしながらもそこに縋るように歩いた。

「そんな…」

度重なる緊張で口から漏れ出した唾液を拭いていた両手が地面向けて垂れた。馬の出す音だと思つて近づいたら、14 m級の巨人と遭遇した。そして巨大樹の幹に隠れていたようで更に2体の巨人が出現した。

「ああ…」

女型の巨人を喰らい尽した巨人たちは次の獲物を探しに巨大樹の森を徘徊していた。そして運よく次の獲物を見つけた。

さきほどのお肉では満足できなかったように「彼女」の元に駆け寄ってくる。

「ハアハア…ク…ル…ナ！」

「彼女」は肩で息をしているどころか、必死に吐き気を我慢しながら早歩きで逃げ出した。

そんな事で巨人から逃げ出せたら誰も死なない。

追いつかれて巨人に喰われるのは、5年前のシガンシナ区襲撃で嫌ほど目撃した。そして一か月前のトロスト区で復習済みだった。

「ハア…ハア…だ…め…」

すぐに追いつかれて巨大樹の幹を背にして背後を取られない様にするのが精一杯だった。

捕食されてしまうと思った瞬間、意外な人物が助けに来た。

「死になさい」

誰かがそう呟いたと思ったら、うなじから血を噴き出した14 m級の巨人が倒れ込んだ！

更にもう2体の巨人も瞬く間にうなじを斬られて倒れ込んで煙幕のように蒸気を噴き出す。

あつという間に目の前が巨人の蒸気で真っ白になって何も見えなくなった。

「大丈夫ですか？」

霧から現れたのはフローラ・エリクシアだった。

さきほどまで殺し合いをしていた彼女は元気づけようと微笑みながら手を伸ばしてきた。

思わず「彼女」は頷いてその手を取って誘導されるまま一緒に歩き始めた。

「これからウォール・ローゼに帰還します…だから一緒に生還しましょう」

以前と何も変わらないフローラが纏っている香水の香りが鼻をくすぐった。

「思わず吸い込んで堪能してしまう甘い花の香りが高まった鼓動を鎮めてくれるようだった。」

彼女曰く、リラックスハーブという植物由来の精油とエタノール。

そして数少ない記憶の母親から教わったレシピと試行錯誤で得た経験で作られた香水だそうだ。

「次は、この馬に乗ってください」

「大丈夫ですわ！巨人が来たらわたくしがぶっ倒して差し上げますので！」

さきほど巨人化したエレンに巻き込まれて茂みに勢いよく突っ込んでいったはずの彼女。

身に着けていた外套は着けておらず兵服のジャケットに所々穴が開いていた。

きつとあの時にそうならざるを得なかったのだろうと馬に跨つてもなおそう考えてしまった。

「もうすぐ味方の部隊に着きますわ！」

「大丈夫、諦めない限りウォール・ローゼには絶対に帰れます！」

何故か自信満々で話しかけてくるフローラ。

だけど、その根拠のない自信が追い詰められた心にいつも響く。

とりあえず彼女の意見に従っていればなんとかなるだろう。

トロスト区の兵団本部突入作戦の時もそう思った。

だからこそ、彼女が同じ戦士じゃなくて本当に残念だった。

「あと少しで合流できます！頑張ってください！」

フローラは、後ろに居る兵士が心配だった。

精神的に追い詰められる環境を考慮しても自害しかねない心理状態だった。

負の感情を“声”として聴ける彼女は、包帯で顔を覆っている兵士を何度も励ました。

極限まで精神的に追い詰められるとノイズが激しくなり声が乱れる。

その為、致命的な失敗をしたのか何度も自問自答しているが内容が聴き取れなかつ

た。

「はい、合流しました！」

「これから出発しますけど…覚悟は決めました？」

女型の巨人の捕獲失敗か、それか戦友を見捨てて逃げ出したか。

良く分からないが、発狂して攻撃してこないだけマシだった。

声をかけていくと落ち着いていったので今度は彼女の意志を尊重する必要があった。未だに引き摺っているのか声は出さなかったが、頷いたので大丈夫そうだった。

「よし、これで全員ね！」

フローラは“声”を聴ける能力で巨大樹の森に居た兵士を掻き集めてきた。

既に本隊は出発してしまった以上、すぐに後を追わないといけない。

『死にたくない…』

『暗いよ…お母さま…に…逢…っ』

まだ森には10名以上の兵士が彷徨っていた。

動ける兵士も居れば、今さつき死んだ兵士のような負傷者も居る。

フローラは、彼らを見捨てた。

今は亡き班長の指示に従って反対側の森の入り口で待機している104期調査兵3名も見捨てた。

何故か、巨人が巨大樹の森に侵入してきている以上、長居は無用だった。

「はいー注目!!」

両手を痛めるほど激しく叩いて大声をあげて注目を集めた。

もちろん、本隊から見捨てられた敗残兵たちに聞かせる為だ。

「これから！カラネス区に進撃します!!もちろん犠牲者無しで帰還するのは難しいです

！」

「それでも…家族の元に生還したいなら…」

言い終わる前に突っ込んできた巨人のうなじを刈り取ったフローラ。全員がそれを他人事のように見つめていた。

その動きは、兵士たちに自身の意見をこり押しするには充分だった。

「巨人が来たのでカラネス区に撤退しますわ!! わたくしは生きたいので…さようなら!!」

それだけを言い残してフローラはカラネス区の方角に馬を走らせた。

残された馬医師5名、衛生兵6名、兵士6名、オルオとペトラとミーナ。

馬に乗せてもらっているエルドも含む負傷者3名。

当然、自分から動かなければ状況は変わらないので。

「俺たちも行くぞ!!」

「「おう!!」」

「進めーっ!!」

旗手となった彼女の後ろ姿を追って残された全員が馬を走らせる。

フローラを含めた24名の敗残兵はカラネス区に向けて進軍を開始した。

「うまく乗ったわね…」

全員が生還する可能性は低い。

それでも数が居れば、とりあえず自分が生き残る確率は上がる。

本隊から見捨てられた敗残兵の集団は、ただひたすらに壁に向かって進撃する。カラネス区撤退作戦の開始である。

勝利条件は、どんな事が発生しても1人でも多くカラネス区に帰還する事。

敗北条件は、文字通り全滅。

とある兵士は「調査兵団の歴史上、本隊から逸れて生還した班は無い…」と告げた。「だったら今日からその例が歴史に記されるわ！」とフローラは返答してみせた！

「鎧の巨人を…討伐するまで…死ねないわ！死んでたまるもんですか!!」

前方に映った巨人を見ても臆さずに双剣を構えて彼女は突撃する！

こうして最も困難で苛烈で危険で過去に例がない撤退戦が始まった！

38話 回想3―2 不測の事態はいつも唐突に

第57回壁外調査は大失敗で終了し、エルヴィン団長率いる本隊はカラネス区に向かっていた。

その遙か背後に敗残兵たちが同じ場所を目指して進撃していた。

ただ、一足早く出発した本隊ですら追いかけてきた巨人と接触し交戦する羽目になった。

その背後に居る部隊が巨人と交戦せずに帰還できるわけなかった。

「ねえ！このままだとあの巨人と戦闘になっちゃうけど…どうするの!?!」

「進軍するのに邪魔な奴だけ潰すわ!」

前方の右側に巨人を捕捉したフローラ!

顔馴染みのミーナに軽く返答して交戦の準備をした!

舌鼓を3回打ってから、愛馬のライリーの首の右側を軽く3回叩いた。

この合図は、混乱させないように相棒に情報を伝達する為に行なった。

舌鼓の3回は緊急事態、3回叩いたのは交戦する、右に叩けば右に巨人が居るという意味である。

彼女が訓練や壁外任務などの実戦で予め調教して仕組んでいた物だった。

「おりゃあー！」

ブリツツメツサーを構えていたフローラは、ライリーの鞍上から飛び出して巨人の首に左アンカーを射出した。

巨人の攻撃を身体を捻って辛うじて回避し、右のガスだけ噴出して時計回りに首を斬った！

うなじを抉り取った感触を確認する暇もなく、近くにあった木にアンカーを射出して離脱した。

「ライリー!!…なんで指笛吹く前に帰ってきたの…」

相棒を呼び戻そうと指笛をしようとしたら何故か飛び移った木の下におり、フローラは困惑した。

ライリーは巨大樹の森で爆走していた時に見捨てられて、かなりのショックを受けていた。

なんだかんだで自分に構って欲しい彼女は、早く降りて来いと言わんばかりに木を揺する！

「ただいま…ちよちよつと待つて…まだ！」

前足で揺すり始めたのを見て慌ててフローラは着地して彼女を愛撫しながら手綱を握った。

ところが鐙につま先を乗せて鞍と手綱を掴んだ瞬間に走り出してしまい、必死にしがみ付いた。

誤って彼女の腹を強打しないように体勢を立て直した頃には、背後に居た巨人を引き離していた。

彼女は巨人に対して好戦的であるが、今回は相棒を乗せて地平線の彼方へ行きかけたようだ。

「これは、待機の命令も覚えさせないといけないわね…ねえ聞いてる？」

耳を伏せて急加速したのを肌で感じ取ったフローラは即座にこの案を諦めた。後ろを振り向くと巨人たちが更に引き離されているのが見えた。

ここまでは、巨人の習性と馬の速度を利用した長距離索敵陣形と同じだった。問題だったのが…。

「何で追い付かれそうなの…?」

他の調査兵団の騎手たちに巨人が距離を詰めていた。

誰もが疑問に思ったが、馬からしてみれば息切れしてるのに『全速力』を保てなかった。

更に10体を越える巨人による蹬音と地面の衝撃で、馬が大混乱しているのもあった。

調査兵団の馬は、頻繁に相棒となる騎手が変わるので温厚で順応できるように訓練されている。

逆に言えば、順応できない環境に置かれると使い物にならなくなる性質であった。

「ミーナ！手綱を緩めて！！」

「フローラ！！無理よ！これ以上遅くしたら！追い付かれる！」

「ああもう！」

「待つて!?!どこに行くの!?!フローラあああああ!?!」

ミーナの馬が限界だと察したフローラは、3体の巨人を惹きつける為にわざと前に出た。

巨人の群れはミーナから新手の女兵士の方に向かって進撃していく。

舌鼓と扶助によって、別の巨人へとライリーは指示に基づいて向かっていく！

進行方向に居た4体目の巨人は目視でフローラを捕捉し、両手を前に出して走り出した！

その股をタイミングよく潜り抜けていった結果、走っていた巨人達は激突した！

「まず4体……これで当分は大丈夫なはず……」

それぞれ巨大な質量が速度をもって激突した衝撃は凄まじく巨体はバラバラに飛び散った。

うなじ自体は損傷していないので、1時間もすれば元通りに復活するだろう。もつとも、それまで敗残兵は黙って待機するわけなかった。

「よせ!!やめろおおおおお!!」

声が見ると負傷兵を後ろに乗せた兵士に1体の巨人が襲撃してきている所だった。

彼は巧みな操作で辛うじて攻撃を回避させたものの負傷兵を落下させてしまった。

見捨てられなかったのか、落下した負傷兵に群がった巨人の群れに突撃していった。

そして振り返りに遭うのをフロアを含めて敗残兵たちは見ている事しかできなかった。

これで脱落者2名、生存者22名。

「オル…」

「エルド、気が付いたか!」

「捨て…くれ」

「ああん?もう一度言ってくれ!」

「俺を…匣に…捨てて…」

「バーカ！お前には生きてもらうんだからな！青二才に生かされる気分はどうだ！」

オルオの背後に乗せてもらつたエルド・ジンは死にたかつた。

全身を強打し両腕を喪失した彼の痛みは想像を絶するものであつた。

生物は他人の痛みを味わう事はできない。そう、痛みは本人しか分からない。

だからこそ、瀕死の彼は介錯して欲しかつた、苦しみを終わらせて欲しかつた。

「痛い…よ…苦…しい、早…く」

「うるせえ…黙つて乗つてろ」

「もう…痛…死…を」

死は安息だ。

あらゆる生物がこの世に誕生している以上、最終的なゴールである。

つまり【生】は泡の様に【死】を内包している。

どんなに苦しんでも、どんなに激痛だつても、どんなに高熱、低温で苦しんでも。

どんなに失敗しても、どんなに絶望しても、どんなに行きたくても。

最終的に苦しんだ先にたった一人で深淵に沈んでいく。

そこは、痛みも自身の感覚もなく、ただ永遠の安息に得られる場所である。

「オ…落と…て…死に…たい」

エルドは頼んだ。

身を引き裂くような激痛で声すらあまり出ず、あまりの苦しみに自身の死を欲していた。

死ねばこれ以上苦しむことは無い。

子孫を残そうとする本能より死という甘い眠りを欲していた。

そしてなによりオルオまで自分のせいで死なせたくなかった。

「絶対に捨てねえぞ！これを前前の恋人に笑い話として話してやるからな！覚悟しておけ！」

オルオは、なんとか彼の気力を回復させて、生還させたかったが会話する度に弱っていく。

その様子を唇を噛み締めながら必死に馬を走らせる事しかできなかった。

「エルドさん！しつかりしてください！」

「フ……口……ラ……殺……して……」

「痛いんですよ！苦しいんですよ！息ができないんですよ！分かりますわ！」

「わたくしも立体機動訓練で何度も落下して死にかけてますから！」

「でも激痛は我慢するしかないんです！その痛みに耐えるしかないですわ！」

フローラはエルドの負の感情を聴いて彼の元に向かって話しかけた。

人は痛みを味わうまで何度でも失敗を繰り返すように激痛を何とかする事はできない。
い。

さきほどフローラに服用させられた鎮痛剤は、ペトラやオルオと比べれば誤差レベルだった。

壁内に帰還したら劇薬を服用する可能性から、事実上、薬による鎮痛作用はほとんどなかった。

衛生兵も死にかけて兵士に多量の鎮痛剤を使用するほどの価値はなかったと思われる。

「エルドさん！大丈夫です！貴方なら絶対に耐え切れます！」

「リヴァイ兵士長直々に！選抜した兵士が、激痛で、自殺するなんてありえない！」

「もう壁が見えてます！もうすぐです！着いたら本格的な治療が、受けられますわ！」

「今が一番激痛です！苦しいです！これさえ乗り越えれば、少しは痛くなくなります！」

「エルドさんには！待っててくださいる人が！居ます！ここで死んだら！全て無駄になります！」

「激痛を我慢して！もつと！貴方なら耐え抜いて！生還できるはずですよ！」

必死に話しかけているフローラの話にオルオは割り込む勇氣はなかった。

自身も激痛で馬で駆け抜けている内に悪化していた。

誰かに文章で伝えても体感には伝わらないが、死にたくなるほどの激痛としか言いようがなかった。

神は生物に激痛を味わって欲しくてこの世に誕生させたのかと思うほどの苦痛だった。

「エレンはエルドさんが噛まれた時、怒りで巨人化しました！」

「ならここで死ねば、彼はストレスから自暴自棄になって人類に反旗を翻して暴走しますわ！」

「激痛も苦しみも！身体がエルドさん本人を生き永らえさせる為の防衛反応です！」
「痛み！苦しみ！もうすぐ鎮痛剤の効果が出ます！それまで我慢してください！」

事実に嘘を交えながらフローラは何度も声をかけた！

辛うじて50mの壁が地平線に見えてきただけでまだ距離があつた。

鎮痛剤もほぼ意味はない、それでも彼の生きる原動力になるなら平気で嘘をついた。

「クソ！左に新手の巨人！」

「オルオさんは右に行ってください！」

「俺様に指図をするのか!？」

「ではエルドさんを紐で縛り付けたまま戦う気ですか？」

「ぐっ…後で倍返しするからここで死ぬんじゃねえぞ！」

「分かつてます！」

オルオは最低限の武装、エルドに至っては両腕と装備品はなかつた。

それでも過剰重量になっており馬の速度が落ちている以上、追ってきた巨人を狩るしかない。

フロローラは絶好なカモを狙っている巨人に向けて鞍上から立体機動に移った！

「しつこい人は！嫌いですわ!!」

左アンカーを射出して巨人の首に撃ちこんだ！

そしていつも通りワイヤーを巻き取ろうとした。

「えっ…」

ところが刺したはずのアンカーが外れた。

違和感を覚えてすかさず右アンカーを射出したおかげで地面に激突せずに済んだ。

原因を考えている余裕もなく巨人に突撃してただ討ち取る事を専念し双剣を構えた

！

なんとかうなじを切り裂いて地面に着地した彼女は左グリップを確認した。

「よし、よし、よし、よし、あれ？」

人差し指で引くアンカー射出のトリガーに問題は無かった。

中指で引く圧縮ガス噴出も通常通り機能した。

2つのトリガーの前にある護拳の様なレバーを引いてワイヤーが巻き取れるのを確認した。

ハンマースイッチを上下に動かしてアンカー射出装置の角度調整も問題なかった。

「まさか補助スイッチが壊れたの!？」

アンカー射出するトリガーの真上にあり、上下に並んでいる2個の補助スイッチだった。

その下にあるアンカー開閉機能のスイッチ、厳密に言うとは伝導に異常があったようだ。

感覚では気付かなかったが操作してもアンカーが開かなかったので現物を目視で確認した。

そこで原因に気付いた。

「ライリー!!」

慌てて指笛を鳴らしてライリーを呼び戻した。

すぐに上の補助スイッチを弄りブリッツメッサーの刀身ロックを解除し刃を回収した。

大きく変形したアンカーが開くわけなかった。

「なんで…」

フローラはライリーに跨って遙か遠くに行つた敗残兵たちの後を追いつつながら考えていた。

アンカーはとにかく頑丈に作られていた。

民家のレンガ、樹の幹、50mの壁、巨人の肉体、とにかくあらゆる所で酷使される部位。

だからこそ、下手すれば命綱のワイヤーよりも頑丈だったはずだ。

もちろん、壊れる前に交換するが技術4班の自信作であり新品だからする必要はな

かった。

「グリグリさんの説明じゃアンカーは頑丈だったはず…」

調査兵団が使用している立体機動装置は、『一式装置』と『強化装置・1型』もしくはその改良型である。

装備品である『ブリッツハーケン』はそれらと比べてアンカー強度と巻き取る速度が優れていた。

ヒット&アウェイに特化した急襲の名を冠しているこの装置は伊達じゃない。特にアンカー強度が優れているのに壊れた以上、何か要因がある。

「エレンにぶつかった時？いえあれは右ワイヤーだったはず…それに」

巨人化したエレンにぶつ飛ばされた時の衝撃で壊れたかと思ったがすぐに案を却下した。

さつきまで機能したので、そこで壊れたわけではないし、金属疲労でもない。

まさかの品質問題による強度不足を浮かべたが試作品のアンカーでやらかすわけな

いだろう。

「応急措置、ないよりマシね」

左アンカーにさきほど外したブリッツメツサーを外套で生成した紐で結び付けた。

少なくとも緊急事態の時に左アンカーを撃ちこんだ際、少しは張り付いてくれるだろう。

そう思っていた時、大きな雄叫びを聴いて声が聴こえてきた方向を見た！

「この！忙しい時に【変異種】!?!」

褐色の肌で身体中に白色の刺青が隅々に入ったような独特な巨人である。

問題なのは、どいつもこいつも通常種や奇行種と違って異様な強さであり相手にしたくなかった。

胃液を吐き出したり、アンカーが刺さった瞬間に転がったりと相手にしたくない化物。

白色の刺青の大元のような大きな膿のような部位を攻撃しないと、うなじが斬れない

強敵である。

今思えば、女型の巨人が使用した硬質化のような物であるのかもしれない。

「こつちに來なさい！」

フローラは赤色の信煙弾を変異種に向かって撃ちこんだ！

ハンマーのような頭部、特に顎が異様に発達した変異種は四足歩行で彼女に向かってきた！

口を縦に大きく開いた口からは、大きな臼状の歯がびっしりと生えていた。

彼女は咆哮をしながら口を開きながら突っ込んでくる巨人を岩場に誘導してみた。

「ほら！こつちよ！そう、そう！今！！」

馬のライリーごとフローラを捕食して胃袋に収めようとした変異種。

噛みつきようとした瞬間、彼女たちは急加速して代わりに大岩を喰わせた！

「よし！これで…あっダメね…こつちで仕留めない！！」

これで放置して逃げられると思ったフロアの考えは甘かった。

大岩を脅威な顎で噛み千切って咀嚼した岩を彼女に向けて噴出した！

散弾と化した岩の欠片は距離があつたおかげで直撃は免れたが、これで放置はできなくなつた。

こんな散弾を前方に居る調査兵の編成に撃ちこまれたら全滅しかねないものであつたからだ！

調査兵団の馬は疲弊して速度が極端に落ちており追撃されたら振り切る事は困難だつたのもある。

「かかつてきなさい!!」

最後だつた予備のブリッツメツサーを装填して変異種と正面对決をした！

ライリーに指示を出しつつ、変異種の動きを観察し、弱点を探した！

幸いにも、両肩に白い器官が露出しており、うなじ付近で都合が良かった。

もし腹部にあつたら一度横転させるなり動きを止めないと攻撃の仕様がなからだ。

「ああもう!!」

フローラは右アンカーを巨人の首に向けて撃ちこんだが硬くて弾かれた！
やむを得ずワイヤーを回収しつつ左アンカーで左肩の白色器官に撃ちこんだ！

「くっ!」

その瞬間、変異種が両手を地面に叩きつけて両脚を閉じて尻を頭より高くした。

それを見たフローラは左のワイヤーを手で捻るように引っ張った！

簡単に抜けてしまった刃付きアンカーであったが些細な問題だった。

変異種は前転して獲物を押し潰してから喰う算段だったが彼女は見抜いた！

既に右アンカーを地面に射出しており、高速でワイヤーを巻き取った！

地鳴りと砂煙と共に高速で前転する巨人の攻撃を辛うじて彼女は回避したが地面に
激突した！

「この……岩砕きの変異種!!絶対に赦さない!!」

受け身を取ったものの左腕を強打して痺れて動かなくなった。

それでも変異種の攻撃は止まらなかったがフローラも素直にやられる気などなかった！

同じように右肩の白色器官に右アンカーを撃ちこんだ！

変異種もさきほどと同様に前転した！

「そっ!!」

アンカーを撃ちこんただけで立体機動に移らなかった。

すぐにアンカーを外して前転を落ち着いて回避した彼女はもう一度右肩に撃ちこんだ！

勢いを殺さずに1本のブリッツメツサーで両肩を斬り付けた！

肌の硬化化を保っている器官と予測される部位は膿のような性質のおかげであっさり潰せた！

これどうなじを狙えるようになったフローラだったが更に問題が発生した！

「痛っ!!」

度重なる酷使により固定ベルトが破断した。

固定ベルトは腿に鞆を取り付ける為に重要な役割を果たしているが他にも機能があつた。

それは足の裏に全体重支える時に負荷を和らげる役割があつた。

今回の場合は、左アンカーが破損している為、必然的に右アンカーを酷使する。

その為、左足の裏に全体重をかける必要がある。

今までは固定ベルトのおかげで負担を減らせていたのにそれが破断してしまった。

「このボンコツっ!!こぶっ!!」

幸いにも鞆を取り付ける部位のベルトは無事だったので、辛うじて立体機動で回避できる。

問題なのは全負担が腰に集中してしまうということか。

例えば物を持ち上げる仕事で腰にコルセットやベルトをすれば負担を減らせて腰痛防止になる。

もちろん無くても支障は無いが、三次元の動きに加えて全体重とGが掛かる立体機動

は別だった。

両肩を斬った後に掴み攻撃を立体機動で回避したフローラは負担が大きすぎて吐瀉した。

一日中立体機動できるように訓練してきた彼女。

それでも固定ベルトが機能しない立体機動は意識が飛びそうになるほどの負担だった。

「ハア…ハア…この!!」

破断したベルトを左手で掴んで呼吸を整えるフローラであったが時間がなかった。

まず巨人は肉体の再生能力が尋常ではなく、さきほどの傷が完治するのに2分もなかった。

巨人の弱点はうなじを斬る事だけなのに、それを硬質化して守っている部位が修復されていない。

つまり、急いでうなじを斬らなければ振り出しに戻る。

それどころか立体機動がうまくできなくなったせいで逃げ切れる自信もない。

ライリーを呼ぶ前に喰われるし巻き込みたくなかった！

「喰われて！たまるもんですか!!」

咆哮をあげて突っ込んでくる変異種にフローラは右手で刃を構えて動きを見据えた！

乾いた音と共に変異種の右目が突然弾けた！

眼球という重要な器官が破損した事により脊髄反射で両手を押さえた隙を彼女は見逃さなかつた。

「ああああああ!!」

両方のアンカーを変異種の首に撃ちこんで高速で巻き取った！

すぐに左アンカーが外れたら気にもなく双剣でうなじを切り裂いた！

辛うじて肌の硬質化する前にうなじを斬られた顎が異様に発達した変異種は倒れ込んだ。

褐色の肌が更に黒ずみ蒸気を噴き出して巨体を徐々に霧散して地上から消滅していく。

その姿を見届ける事もなくフローラは指笛でライリーを呼び戻した！

「あれ？」

ライリーの後方に続いて駆け寄ってくる一騎の兵士の姿が見えた。

何故か狩猟銃を持ちながら手綱を握っており、まるで…。

「まさか乗馬したまま、変異種の右目を撃ち抜いたの!？」

そしてスナイパーが誰か判明した！

「フローラああああ!!」

「ミーナ!？」

冒頭で会話したつきり放置状態だったミーナがまさか助けに来るとは思ってた。なかった。

ミーナからすれば危なっかしい親友を心配して追いかけていた。

いつ死んでもおかしくないこの残酷な世界。

先陣を切って死地へと進撃する親友の姿を必死に連れ戻そうとしていたのだ。

そして変異種に苦戦しているのを見て両親に託された狩猟銃を構えて右目を狙撃した。

元々獣を狩る物であり巨人には効果がないはずだったが眼球だけは例外だったようである。

「大丈夫!？」

「ええ、ミーナのおかげで助かったわ」

「よかった…」

狩猟銃の銃口から煙が少し出ており、フローラはミーナが右目を狙撃したと瞬時に判断した。

銃の扱いや狙撃も血反吐を吐いた3年間の訓練兵時代に習っていた。

ただ、立体機動訓練に比べれば対人格闘訓練と同様に真面目にやらなくていい科目であった。

狙撃で巨人を倒せない以上、最低限の知識と技量さえあれば良かった。

それでもミーナの数少ない得意な科目でありベルトルトに次ぐ射撃の名手である。まさか、ここで役立つとは思わなかったフローラはライリーに跨りながら考えていた。

「ねえさっきの動き、フローラらしくなかったけど何かあったの？」

「固定ベルトが破断して左アンカーが壊れた」

「フローラああああ!!」

まるで他人事のように衝撃的な真実を述べたフローラにミーナは叫んだ！

なんで親友は自分の身体を酷使して死にかけるのか理解できなかった！

温もりも香りも声も死んだら二度と味わう事はできない。

トロスト区防衛戦の時、覗き込む巨人に喰い殺されそうになった彼女は…。

実は自分は死んでいるのではないかと思っていた。

「フローラああああ!!」

「ああ分かったわよ、もう無理しないわよ！」

「フローラああああ!!」

でもフローラに助けられて彼女の胸の中で思う存分、泣いた。

汗と体臭、温もり、香水の香りを思う存分味わったミーナは自分が生きていると実感できた。

だからこそ、フローラが死ねば今度こそ自分は死後の世界に取り残されると恐怖した。

トロスト門での誓いを果たせなくなった親友のトーマスの遺志を継いだ。

でも一人では重責で潰されそうな彼女は残った親友と一緒に居たくて調査兵団に入団した。

「ミーナ！一緒に帰るわよ！」

「ほんとに？」

「ええ、カラネス区に帰ったら…一緒に食事をしましょう」

「一緒に寝てくれないの？」

「今日の晩、一緒に寝るから生き残る事と馬を走らせる事だけ考えましょう！」

「うん！」

前方で赤色の信煙弾がいくつも上空に向けて撃たれた！

巨大樹の森から抜け出した残党から撃たれたものではなかった。

遙か前方に居るはずの本隊が巨人と交戦している証拠だった。

「残念だけど、まだ巨人が立ちほだかっている様ね」

「私が全部、撃ち抜くわ！」

「最低限で良いわよ……」

次弾を装填したミーナの自信満々な笑みを見てフローラは溜息をついた。

前方に居る巨人は14体ほど、背後に居るのは18体ほどである。

問題なのは、巨大樹の森に集結していた巨人の大群がこちらに向かって来ている事だ。

1000体どころか3000体以上の唸り声の大合唱を聴いたフローラは表情を崩すことはなかった。

「ミーナ、ちょっと良い？」

「どうしたの？」

「これから前方の巨人に狙撃してもらおうけど準備は良い？」

「もちろん！私に任せておいて！」

「頼りにしてるわよ」

立場が逆転して頼られている実感があるミーナは手綱を強く握り締めた！

ようやく親友に恩返しができる！絶対に狙撃を外す無様な真似をしないと決意した
！

その隙にフローラは、破断した固定ベルトをどうするか考えていた。

39話 回想3—3 最大の難関は、カラネス区前門の守備隊

「ロボフ隊長！そろそろ休憩なされた方が…」

「壁外調査に向かった調査兵団が気になってな…」

「ご親族が参加なされたのですか？」

「いや、血税と人命を投げ捨てる調査兵団が巨人を連れ帰ってくると思うと…堪えきれない」

「そうですか…」

ハルトマン・ロボフは、駐屯兵団第三師団に所属するカラネス区の前門の守備隊長である。

彼の脳裏にはトロスト前門の惨劇の話を思い浮かべていた。

門に穴を空けられ、多数の巨人が侵入してきたあの事件を…。

トロスト前門の守備隊は、両手で数えられる砲兵以外戦死した。

そして今度は自分にお鉢が回ってくるのかと、右往左往し壁上を歩き回っていた。

「ですが今回はあの女兵士が参加されています…取り越し苦労なのでは？」
「あいつかー何か人間らしくなかったんだよな…」

調査兵団は異常者の集まりだ。

調査兵団結成から勝利した歴史はほとんど無い。

意識高い系や自殺願望者が定期的に入団して戦死する兵団であった。

あの女兵士も実力を過信したバカ女だと思っていた。

ところがカラネス区壁外で14体も単独で巨人を討伐してみせた。

「隊長、我々も何もせず稼がせてもらったんですから良いじゃないですか」

「そうですよ。2回目もやってもらって、おこぼれをもらいましょうよー！」

「お前ら…」

王政の行政トップ、ピエール・J・アウリール宰相を筆頭とする貴族達。

遊び感覚で壁上にリフトで登り巨人討伐ショーを見下ろして興奮していた。

よっぽど面白かったのか、気前がいくらくらいに鋼貨をばらまいてくれた。

お陰様で部下達は「二度目はいつでしようか？」と毎日、何度も訊かれる羽目になった。

正直、勘弁して欲しかった。

カラネス区前門の責任者として、カラネス区の住民として本当にやめて欲しかった。

「隊長！調査兵団の集団を発見しました！」

「予定よりだいぶ早いな……」

「赤色の信煙弾を確認……おそらく巨人の襲撃で壊走したのでしよう」

「チツ！やはり口だけの集団だったか！休憩中の固定砲整備班を全員ここに呼び戻せ！」

「ハッ！」

壁外調査に帰還する度に面倒事を持ち帰ってくるとトロスト前門の隊長は愚痴っていた。

面倒事というのは、調査兵団を追っている巨人の事だろう。

友軍だから見捨てる事はできないが、だからといって砲撃で援護するほどの技量はない。

「先頭はエルヴィン団長か、そして規模は…半壊か」

「貴重な馬と命と血税を壁外に投げ捨てやがって…どうかしてる」

彼は望遠鏡で調査兵団の状況を確認していく。

思ったより壊滅しておらず、また壁外調査に行く余裕がありそうでうんざりした。

「ん？本隊以外にも居るのか…？」

更に地平線の彼方から調査兵団が出現した。

規模は1個分隊規模、本隊を死守する殿しんがりには見えなかった。

「隊長！指示を！」

「エルヴィン団長率いる調査兵団が壁内に帰還するまで援護する！砲兵は準備を急げ
！」

「先遣班は、居残り組の調査兵団の兵士と共に撤退を援護せよ！」

「本隊を収容したのを確認したら門を閉める！以上！」

「ハッ！ハッ！」

ロボフは、うんざりした。

調査兵団が存続している以上、何度も同じ事を繰り返すのだろう。

精々、頑張つて西方のクロルバから出発して足掻いてくれとしか思つてなかつた。

とにかく問題をこれ以上持ち込んで欲しくなかつた。

自分にはそれを受け止める器などないのは自覚しているから…。

——

「団長！もうすぐカラネス区の門に到着します！」

「速やかに先鋒を派遣し、門付近の巨人を掃討！撤退の援護をせよ！」

「ハッ！」

エルヴィン・スミスは、衛生兵や馬医者や巨大樹の森に置いてきたのをさきほど思
い出した。

下手すれば育成まで10年は掛かる価値がある人材を切り捨ててしまった。

これでは、ウォール・マリア奪還が10年以上先延ばしになるだろう。そもそも今回の失敗で調査兵団が存続できるのかも怪しいという有様だ。

「今回も壁外調査は失敗、これではエレンが…いや、まず王政と交渉するのを考えた方が先か」

「啖呵を切ってこの有様です…なんと説明すればいいのでしょうか…」

「それは私に任せてくれ、先鋒の指揮は任せただぞ」

「ハッ！」

副官が後方に下がったのを確認して彼は壁を見る。

それは大きかった。

人類を守る壁、それは壮大で素晴らしくウォール教ができるのも納得するほどのスケールだった。

ただ、門の穴を塞ぐことすら苦戦している人類がこんな壁など築けるのだろうか。まるで巨人が人類を閉じ込めておく鳥籠に見えてしょうがなかった。

「団長、報告します！」

「どうした？」

「壁上固定砲の援護が期待できません」

「何故、それが分かった？」

「壁内に待機させた兵士がここに来て知らせてくれました」

第57回壁外調査は、最低限の人員だけを壁内に残して非戦闘員も投入した。

巨人化能力者を釣る餌であつたが、得た成果以上に代償がかすぎた。

そして援護するのは、壁を補強工事と警備をするのが主任務である駐屯兵団の第三師団。

最初から期待していなかったが、ここまで分かり易く無能っぷりを発揮するとは思わなかった。

「そうか…」

「一応、前門の砲兵部隊は援護してくれるそうですが…」

「期待はできないな」

トロスト前門で展開していた第一師団の部隊はかなりの精鋭だった。

壁上固定砲が壁上に設置され、壁外調査から帰還する度に援護してくれた砲兵部隊。自分たちの命を投げ出してでも巨人に立ち向かう先遣班。

そんな彼らでもトロスト区防衛戦では巨人を7体討伐する事しかできなかった。

普通の兵士では30人を犠牲にして巨人を1体討伐できると考えるとキルレシオは良いくらいだ。

第三師団には同じ働きを期待するのは酷であろうし、期待する方がおかしいだろう。

「第一分隊にも門付近に居る巨人の掃討をしてもらおう、それをミケ分隊長に伝えてくれ」「了解しました!」

団長の指示に従って一騎が指令班から外れていった。

それを見届けようと振り返ると赤色の信煙弾がいくつも登っていた。

だが、明らかに本隊から離れた場所からも1本登っていたのを確認した。

「まさか…まだ居るのか」

「どうかされましたか!」

「いや何でもない、我々は少しでも時間を稼ぐ!」

エルヴィンは緑色の信煙弾を撃ち出して進むべき方向を示した！

あえて蛇行して巨人を門付近と合流させないように時間稼ぎをする為に！

本隊から脱落した兵士など構っている余裕などなかった。

「おかしい…」

「どうしたの?」

「巨人が多すぎるの!いくら何でも集まり過ぎよ!!」

フローラ・エリクシアは何度も壁外任務をやっていたからこそ違和感に気付けた。

巨人が出現するのは南方と言われており、実際に南のトロスト区の壁外に巨人が襲来してくる。

今、向かっているのは東区のカラネス区である。

つまり部隊から左側から巨人が襲来してくるのを想定していた。

「確かに……どうすればいい!？」

「信煙弾で視界を妨害するしかないわ!」

だからこそ敗残部隊は雁行の陣形で展開していた。

左翼側が一番前に位置しており右翼側が最後尾になるように並走していた!

左側から巨人が襲来してくる可能性が高い以上、索敵も兼ねてフローラが一番前に居る。

振り返らなくても巨人の“声”で数はおおよそ把握していたが、数が多すぎた。

さきほどまで大合唱と揶揄したが、今はフリッツ王の誕生祭といわんばかりの騒動だった。

「それに……何でこっちに来ないの!!」

左翼が一番前で右翼が後方になっている以上、右翼が狙われるのは必然である。

だが、左翼を狙える巨人もわざわざ前を通り迂回して右翼を狙っていた。

挟撃というよりまるで右翼に「巨人を惹きつける要素」があるようであった。

「ミーナ！右翼を援護しに行くわよ！」

「…見捨てればいいのに」

「え？」

「ごめん、早く帰りたくて本音が出ちゃった」

「そうね、これで最後にしましょう」

ここに居る兵士の大半は、少しでも馬の負担を軽くする為、替えの刃を捨てた。

立体機動を行なうのに必要なガスボンベですら捨てた者もおり交戦できるのは一握りしかない。

右翼に何か巨人を惹きつける物があるならば、それを知っておかなければならない。巨人化学の発展に生かせるし、なにより上官のハンジ分隊長を喜ばせたいからだ！

「ハアハア…」

“彼女”は必死に馬を走らせた。

ただ生きて帰りたいからカラネス区に向かって無我夢中で走らせた。

ところが何故か自分を狙って巨人が襲撃してきた。

女型の巨人の能力者である「彼女」は喘ぎ声に紛れた【悲鳴】で巨人を呼び寄せていた。

無意識だったので気付かなかったが、無垢の巨人を呼び寄せていたので自業自得であった。

「そこの兵士!!何をやらかしたの!!」

「……」

フローラの声を聴いて思わず手綱を放してしまった。

もしかして正体がバレた!?

既に立体機動ができる体調ではないのでガスボンベも刃も全部捨ててしまった。

ここで正体が判明したらここで死ぬしかない。

それだけは嫌であった。

「どうも巨人は何か釣られて誘導されてるわ!一体何をやらかしたの!?!」

ここで「彼女」は女型の巨人の特有の能力で巨人を呼び寄せていたのに気付いた。

メンタルケアの達人と同期から揶揄されていたフローラの洞察力は凄まじいものである。

それは戦闘にも生かされているのは、二度の交戦で嫌ほど味わった。

「もしかして巨大樹の森に咲いていた花か果実に触れたりしなかった？」

「…やっぱり何かやったみたいね！ミーナ！援護するわよ！」

「護つてくれるのは私だけでいいのに…」

「夜中と思う存分、布団の中で守ってあげるから手伝って！」

「分かった…」

自分の「能力」のせいですと素直に告げられない「彼女」はフローラの助け舟に乗った。

無言で頭を下げて肯定の意志を告げた！

彼女の同僚を虐殺した身であり申し訳ない気持ちで一杯だったが、とにかく助けて欲しかった。

糞野郎も腰巾着野郎にも頼れなかった「彼女」に手を差し伸べてくれたフローラとミーナ。

彼女達と会話する時が睡眠に次いで数少ない娯楽であり安らかな気分になれた。

不安で押し潰されそうになった結果、2人の元氣そうな顔を見て安心して泣くほどに弱っていた。

『みんな殺しちやつた…私のせいで！故郷に帰りたい！父に逢いたい！死にたくない！！』

顔を包帯で纏って緑色のフードを深く被った兵士の負の感情をしつかりフローラは聞いた。

一瞬、能力と言っていたがすぐに自分の推測を肯定した以上、特に追及はしなかった。まるで調査兵を殺害したようにも聞こえる発言もしていたが無視をした。

何故なら巨大樹の森に104期調査兵、つまり同期である104期生を3人置き去りにしたから。

定期的に味方を見殺しにするフローラは彼女の発言の意味には気付くことはできなかつた。

「どうやって足止めをするの!?弾は1発しかないの!」

「どうやって?それはもちろん決まってるわ!」

さすがに巨人の大群を不完全な状態の装備のまま戦う気力はフロローラになかった。

一往直前で巨人に向かって猪突猛進する彼女も左アンカーの故障と固定ベルト破断はきつかった。

両親の仇である鎧の巨人を討伐する!

それはライナーやベルトルト、エレンやミカサに打ち明けた目標であり夢である!

少なくとも鎧の巨人を討伐するまで死ぬ気はない彼女は無謀にも突撃する気はなかった。

「これ、何だと思う?」

「どう見てもガスボンベじゃないの…!」

「正解!専用装備のガスボンベよ!」

フロローラはブリッツシャイダーという鞆に装着する専用小型化したガスボンベを取り出した!

その鞆は特注品であったが、強化装置・I型に装着したボンベを使用できるように互

換がある。

つまりフローラは、馬のライリーに一式の武装を2個と自身の体重で負荷をかけていた。

それ自体は問題ではなく一番不要だったのがその専用のガスボンベだけであった。どうせ捨てるなら少しでも役立てたかった。

「これで何をやるの!?!」

「ミーナがこれを撃ち抜いて爆発させるの!」

「そんなの時間稼ぎもならないよ!」

ミーナの言う通り、爆発が直撃しない限り1人すら殺せないほどの爆発しかないだろう。

既に複数の巨人と戦闘してガスの量が少ないなら尚更である。

「いいから!わたくしが指示したら撃ち抜いて!!」

「分かった…フローラを信じる!!」

動いていた変異種の右目を乗馬したまま撃ち抜いたミーナの狙撃の腕をフローラは信じた。

いや、信じることしかできなかった。

あの壁のように押し寄せてくる巨人の大群の動きを止めるにはこれしかなかった。

舌鼓と手綱でライリーをコントロールして巨人の大群の先頭にいる巨人を直指して進んで行つた。

「そっ!!」

フローラはガスボンベを投擲して音響弾を撃ちこんだ!

巨人は痛みなどで怯むことは無いが人体と似たような構造をしている。

眼球を刺激すれば脊髄反射で両手で負傷部分を覆つたり腱が切れたら走れないなど例はある。

人間だけを捕食する為に視覚と聴覚が異常に発達している説に基づけば効果的である!

一瞬、音で怯んだ巨人を足を止めた隙にフローラは合図を出してミーナに狙撃させた!

見事にボンベを撃ち抜いて右足首で爆発し、姿勢を崩して巨人が倒れた！

「ミーナ！走って!!」

「でも…これじゃあ!」

「充分よ!ほら…!」

1体の巨人が転倒したところですからすぐに立ち上がってしまい、意味は無いはずだった。後続の巨人さえいなければ!

転がった巨人に脚を引っ掻けて後続の巨人が転倒した。

更に連鎖的な転倒が続き、一番下に居た巨人は耐え切れなかったのが蒸気を噴出させていた!

たった1発の爆発が20体以上の巨人を巻き込んだ上に意図せず壁になっていた。

「すごい…!」

「とにかく今のうちに逃げるわよ!」

「うん!」

「これで少しは時間稼ぎはできたわ…問題なのはそこじゃないんだけどね」

「え？他にも問題があるの!？」

ミーナの問いにフローラは返答に迷った。

何故なら、一番の敵は巨人ではなく駐屯兵団の兵士と伝えにくかった。

ここからでもカラネス区の前門が見えた。

それは出発の時は調査兵団を見送ってくれた門は、今は施錠され固く閉じられていた！

「カラネス区の門を開く必要があるわ！」

「到着したら勝手に開けてくれないの？」

「カラネス区に絶対に入れる気はないわ！」

「なんで…」

「カラネス区の住民を巨人から守る為に決まっているじゃない！」

ライリーという相棒に逢う為にカラネス区壁外で巨人を単独で14体討伐したフローラ。

そこでカラネス区の守備隊の練度はトロスト区と比較して明確に劣っていたのを実

感した。

ウォール・マリア陥落から最前線であるトロスト区と比較して巨人の数が少ないカラネス区壁外。

スクランブル出撃も少なく、壁外任務を遂行する調査兵団を援護する機会もない守備隊。

そんな彼らが本隊はともかく、自分たちを救う為に門を開くことは絶対ないと確信できた。

「フローラ…何をやる気なの…」

「ゴメンね、手を汚すのはわたくしだけで充分よ」

「何言ってるの…今夜、一緒に寝るんでしょう?」

「そうね」

「じゃあ血で手を汚せば…一緒に留置所で眠れるね」

「…巻き込んだりしてごめんなさい」

ミーナの意志を聴いて謝ったフローラは最後になった2本のブリッツメツサーを構えた!

その刃は、巨人に向けているものではない。

カラネス区守備隊に危害を加える為のものであった。

どう足掻いても説得できない以上、武力行使でしか門を開く事はできない。

そもそも説得する時間すら惜しいのでこうするしか手が無かった。

「目標は下から三段目に居る兵士よ！」

「殺すの？」

「最初は脅すだけよ……ダメだったら喉笛を斬るから……そしたら……」

「殺せばいいんでしょ！フローラと一緒になら怖くない！」

ミーナの決意を見てフローラは悲しくなった。

共に支え合って磨き合った親友が自分の眷族のような存在になってしまった事に。

トーマスを失った結果、彼の遺志に囚われて本来の彼女は死んでしまった。

純粋にウォール・マリアから巨人を駆逐して昔の様に肉を頬張るように努力する。

ただそれだけだったのに、今の彼女は自分の指示で殺人すら辞さない覚悟をもっている。

それは嬉しい反面、彼女の人生を弄んでおり悪魔として心を喰ってしまった自分に吐

き気がした。

カラネス区前門の責任者、ハルトマン・ロボフは溜息をついた。

調査兵団の本隊を壁内に収容して門を再び降ろして施錠した。

それなのにまだ1個小隊に満たない部隊がこの門に向かってきているのだ。
大量の巨人を引き連れて…。

「ロボフ隊長…いかがなさいますか」

「当然、見捨てる」

「…ですが」

「どうせ立体機動で壁を登って来るだろう？ 門が閉まったからと言って詰むわけじゃない」

50mの壁の上に登る方法は大きく分けて3つある。

まずは門がある建物に入って階段を利用して辿り着ける。

もう一つ壁上から垂らされたリフトを利用すること。

最後はアンカーを突き刺して立体機動で登ってくるのだ。

確かに壁を登るのはきついかもしれないが基本的に全兵士が登れるように訓練されている。

それが訓練兵を修了する条件であるからだ。

「所詮、馬や荷台など使い捨てだ。特に調査兵団っていうのはそういう連中だぞ」

「そうですか」

「ほら見ろ、もう2人が立体機動で登って来るぞ」

副官が見下ろすと確かに2人の女兵士が隊長の言う通り壁を登ってきた。

ただ、何かおかしかった。

「隊長…なんかぐはっ!!」

フローラは見下ろしてきた兵士を裏拳で吹っ飛ばして強襲した!

カラネス区壁外のパフォーマンスで誰が隊長か知っていた彼女!

何が起こったか分からず混乱していたロボフ隊長を押し倒して首元に刃を当てた！

「動かないで！動くと言長の命は無いわよ！」

「ついでにこいつの命もないわ！」

ミーナ・カロライナは気絶した副官の首に刃を当てつつ片手で狩猟銃を他の兵士に向けた。

もちろん弾は空ではあるがそうとも知らない兵士に牽制にはなるだろう。

「何の…真似だ？」

「何の真似ですって!? 貴方達が門を開けないからこうするしかなかったのよ!」

「しよ、正気かお前ら!? こんな事をして、ただで済むと思うなよ!!」

「そう…なら仕方ないわ」

フローラは震えながら発言した兵士を睨んだ。

発言をした兵士はそれを見て失禁した。

相手は、巨人を単独で14体も討伐した女兵士だったからだ。

彼女のおかげで貯金が増えたのでここに居る守備兵は全員、彼女の顔を覚えていた。その顔は、巨人を殲滅する狩人による殺意がこもった悪魔の様な顔であった。

「一つだけ確認していいか？」

「ええ…良いわよ」

「今さつき殴られた副官は死んだのか？」

「気絶しただけよ」

ロボフ隊長はそれを聴いて安心した。

「約束してくれ…門から巨人を絶対に侵入させないと…」

「ええ、そのつもりですわ！」

「総員！門を開けろ！私が責任を取る!!」

「「隊長!」」

「いいから早くしろ！巨人より怖い女に殺されなくなかったらな!!」

「「了解しました!!」」

呆然としていた兵士たちは隊長の叱責を受けて門を開ける準備を始めた。それを見てフローラは刃を鞘に納めて相棒のライリーの元へ急ぐ。

こうして本隊から見捨てられて逃走の為に装備を捨てた兵士たちは馬と共に帰る事ができた。

門が開いた瞬間、翼をもたぬ生存者たちが壁内へと突っ込んでいく！

「お願いだあ!!助けてくれ!!嫌だあああつ!!」

最後に残ったフローラは、落馬してこちらに手を伸ばす兵士を無視して門に突入した。

巨人の大群が迫っている以上、門が施錠される前に見捨てて壁内に帰還するしかなかった。

見捨てられた兵士は絶望の表情を浮かべたまま巨人の大群に踊り食いされた。

「これで終わりね」

帰還が成功したのは21名、その内訳は重傷者2名、軽傷者8名、あとは怪我人無し

であった。

衛生兵6名と馬医師5名は全員無事であり、2名の兵士と負傷兵1名が犠牲になっただけで済んだ。

希望が目の前にあった分、最後の兵士は気の毒ではあったが、仕方がなかったって奴だ。

「おっフローラ！ちようど良い所に来た」

「えっ？」

「ペトラの容態が悪化してな…馬に乗せて病院に送って欲しいんだ」

「はあ!?足が動けなくなっただけよ！」

ペトラは抗議したがフローラの背後に紐で結び付けられてしまった。

強がって見せたが実は両腕も動いてないのを2人に見抜かれていた。

そして、オルオの度重なる軽口で気が緩んだフローラは反論するようになった。

意外と相性抜群な2人の会話にペトラは嫉妬しながら無抵抗で口だけ動かして抗議していた！

「あんたたち！私を何だと思ってるの!？」

「負傷して足手まといになったメインヒロイン」

「怪我をして少しは素直になった優秀な俺様に相応しい嫁候補オンリーワン！」

「オルオはともかく、フローラまでそんな事言うとは思わなかった!!」

「事実だろう?」

「事実ですわ」

「あーむかつく!」

ペトラは悔しかったが、それでも兵長、そして父親に逢えると事実。

不機嫌な顔をしつつもそれだけが嬉しかった。

一方、一緒に並走どころか特等席を奪われてミーナは死んだ目をして彼女の後姿を追っていた。

「おっと！俺様のお義父さんが居るぞ！」

「え？どこどこ!?!オルオさんのお父様!？」

「そこだ！兵長と会話しているナイスガイだ！」

「ライリー！止まれえええ!!」

思わずフローラは大声をあげて手綱を強く引つ張った！

珍しく乱暴なやり方だったのでライリーは異常事態と察して大人しく足を止めた！

「ペトラ!?!」

「お、お父さん」

さきほどまで泣くのを我慢していたブルーノ・ラルとペトラ・ラルは久しぶりに親子の対面した。

「ご、ごめんなさい負けちゃった…の」

「良いんだ…ペトラが生きて帰ってきただけでも…」

情けない姿、そしてなにより壁外調査が失敗したとペトラは泣いて父に謝った。

勝ち負けなど気にしてないペトラの父親は彼女が生還したという現実に泣いた。

ついになんとか下半身が動くようになったエレンも、もらい泣きをした！

ここでフローラは、ようやく彼がオルオでなくペトラの父親だと理解した。

「感動的な再会だな」

「そうね」

「お前…なんでそんなに非情なんだ」

「だってわたくしの身体に縛り付けられているせいで親子水入らずを邪魔してるのよ」

感動的な再会だった。

フローラの背中に紐で結ばれて緊縛プレイされているペトラ。

なんとか降ろそうとしたいが手が届かず、空振りしている父親。

話の流れが分からずイライラして小便をしている馬のライリー。

感動的な再会の雰囲気をつち壊す展開でなければ喜ばしい事であろう。

「とりあえずペトラを解放してやってくれ」

「…はは」

オルオとリヴァイ兵長とミーナを含めて10人以上がなんとかして状況を打開する。

こうして治療が必要なペトラはエレンの乗っていた荷馬車に乗せられて移動を始め

た。

兵長と父親が寄り添う姿を見つめていたエレンは、不意打ちでフローラに平手打ちを喰らった！

それに抗議したら衝撃的な事実を告げられて、凹んだ。

「ごめんなさい」

「またリヴァイ班に訓練してもらえないかね」

「もう無理だ、時間切れだ、何の成果もないオレに誰も期待してくれない」

そんな彼を見ながらフローラは強化・1型シリーズに装備を変更した。

ブリッツシリーズの欠陥が見つかったので技術班に情報提供する為であった。

何故装備を変えたかというと特に理由はない。

あるとすれば、何が起こっても対応できるようにしたかったという事か。

その彼女の判断が運命を分けた。

「撃てえ!!」

20を超える砲門から榴弾やブドウ弾が壁下へと撃ち込まれていた!

カラネス区前門の守備隊は忙しかった!

フローラ：厳密に言うくと女型の巨人の継承者が惹き連れてきた巨人の対応に追われていた。

「ロボフ隊長!ダメです!数が多すぎます!」

「ということは適当に撃つても当たるって事だ!憲兵団になれる絶好のチャンスじゃないか!」

「お前たち!ここで戦果を稼げば内地勤務できるぞ!」

「やってやる!」

「ここさえ乗り越えれば…巨人の恐怖から開放されるんだ…!」

ロボフは危機的状況をうまく利用して兵士たちの士気を向上させた。

憲兵団は訓練兵時代の上位成績10位までしか入団できない。

ただし、戦果を稼いで出世して憲兵団に転属することはできる。

それができなくても内地、ウォール・シーナ内で生活できる権利が確実に入手できる。だからこそ、固定砲整備班も前門固定砲の砲兵たちも必死に砲撃していた。

「くそ…奴らを殲滅する前にこちらの弾薬が切れるぞ！」

「夜勤の奴らや衛生兵も呼んで来い！とにかく人手が欲しい！！」

「撃て撃て！」

適当に撃ても、うなじに当たるほど巨人が密集しているせいで既に20体以上仕留めていた。

ただ、数の暴力で攻めて来た巨人は100体以上で壁に群がっている。

あまりの重量で門や壁が破壊しかねない状況は砲兵の休み暇を与えなかった。

「なんだよまたかよ…しかも律儀に編成までしやがって」

気分転換にと、ロボフは望遠鏡を手にとって辺りを見渡してみた。

すると褐色の肌をした小さめの巨人を4体発見した。

まるで訓練を受けた兵士の様にフォーマンセルでこちらへと向かって来ていた。

「いいだろう！かかってこい！」

どうせあの巨人たちも壁で止まると思い、彼はそう呟いた。

それが聴こえるはずもないし、理解できるはずもなかった巨人たち。

まるで双子の様に顔も身体もそっくりだったのは気が付かなかった。

経験に基づいていつもの通常種だと判断していた。

「相手に……えっ……」

その巨人達は、前方で群がっていた巨人を踏み台にして50mの壁を登っていった！
そして壁上固定砲と激突したが、特に気にせずには薙ぎ払って雄叫びをあげた！

「嘘だろう……」

ロボフは15年以上の兵歴をもつベテランの駐屯兵団の兵士だったが混乱した。

今まで人類を守ってきた50mの壁を乗り越えてきた巨人を、4体も目撃してしまっ

た。

その雄叫びは、調査兵団に野次を飛ばしていたカラネス区の住民の耳にも届いた。

「なんだあれは!？」

「きよ、巨人!？」

「なんで壁の上に居るんだ!？」

住民たちは一瞬、何が起こったか分からなかった。

50mの壁の上に巨人が4体も居る。

今まで壁内で過ごしており巨人と縁がない彼らは、巨人の姿など見たことは無かった。

ただ、巨人だとすぐに分かったが脳がその現実を拒否して咄嗟の判断が鈍るほどに現実逃避した。

「嘘でしょ…！」

女型の巨人の本体であった“彼女”は巨人を目撃してその場に座り込んだ。

「マガト隊長…私たちを…戦士隊を見捨てたのですか…」

“彼女”は壁上に居る4体の巨人を見て絶望した。

その巨人に見覚えがあつたからだ。

「ライナー！あれを見ろ！！」

「どうした!?ベルト…ル…ト…」

ライナー・ブラウンは相棒が指差した方向を見て言葉を失った。

そして自分がドベでどうしようもない糞野郎だという事を思い出した。

その巨人は良く知っていた。

帰れなくなった故郷で目撃した巨人と瓜二つの姿だったからだ。

「オイ…何で…【顎アキトの巨人】が…4体も居るんだ…」

ライナーはそう呟いて頭を抱えてしまった。

自分のせいで死んでしまったマルセルの事で頭がパンクしてしまったのだ。

「グオオオオオオオッ!!」

顎の巨人の脊髄液に強い影響を受けて誕生した変異種4体は雄叫びを続けた!

まるで自分たちの獲物がここに居る事を外に居る巨人に伝えているように!

この日、巨人は壁を乗り越えるというのが証明されてしまった。

彼らが何故、捕食以外の行動を取ったのか後世の歴史家や巨人の専門家で答えは出な
かった。

ただ一つだけ言えることはある。

変異種、もとい「異形の巨人」はカラネス区の住民を恐怖のどん底に突き落とした事
だろう。

40話 その日、人類は思い出した！巨人という恐怖を

！

「くだらねえな……」

ケニー・アッカーマンは部下と共に王政の行政トップ、アウリール内務大臣の護衛をしていた。

彼らがカラネス区に来たのは初めてではない。

調査兵団の命知らずの馬鹿女がアウリール卿に巨人を単独で10体討伐すると豪語した。

あまりの馬鹿さ加減に興味もった彼らは、惨劇を見る為にここに来たことがあった。

その結果、その女兵士は14体討伐して、取り巻きの貴族から大金を稼いだ。

世渡りが上手なのか、王政府に半分を納税、更に2割を謝礼金としてアウリール卿に納めていた。

自分だったらへつらう前にもっと金を要求して目をつけられていただろう。

「想定した通りで助かったぞ。あんな危険人物を壁内で放置するわけにはいかぬからな」

「やはりレイス家を襲撃したのはあの小僧なのか?」

「いや、レイス卿の証言だと眼鏡をかけた男だ」

「どちらにしても【神の力】を宿しているのは間違いないだろう」

「これで大義名分ができたというもの、有無言わずに身柄が回収できるといふものだ」

見え張りの貴族や兵士と関わりたくないケニーは距離を取って考え事をしていた。

友人…かつてウーリが所有していた【神にも等しい力】。

それは同じレイス家のフリーダという小娘が引き継いだ結果、同じ人格になった。

ならばその力を奪取されて継承されたとされるエレン・イエーガーを喰らえば手に入るのか。

自分の命よりも他者の為に頭を垂れて謝罪するあの男の思考を理解できるようになるのか。

この世界を文字通りひっくり返す事ができるのか。

「いや…ねえな」

アウリール卿とその取り巻きの会話を遠くから聞いていたケニーは一蹴した。

少なくとも、特別兵法会議の時、エレンはそんな思考をしていたとは思わなかった。

とはいえ、ウーリと同じ巨人化能力者、何か関係があるかもしれない。

もう少しだけへつらつて、情報を集めてもらうのもいいだろう。

意気消沈して覇気がなく動く屍のような調査兵団の兵士の行列を見ながらそう思った。

「アツカーマン隊長！」

「どうした？」

「アウリール卿が満足されたようで、王都ミットラスに帰還されるとの事です！」

「そうか、やっとこんな臭くてしょうがないゴミ溜めから開放される」

副官のカーフェンの報告を聴いて空を見上げた。

そこは決して…いや頻繁に天気が変わるがそれでもいつも同じ解放感がある空間だった。

大空を羽ばたける鳥が羨ましい。

糞を垂れ流しにして何も考えずにあの空間で自由に飛び回れるのだから。そして視線を壁に映していくと違和感を覚えた!

「おいカーフェン、あれは何だと思う?」

「はっ…?あ、え?あれって…」

「クソ!!巨人が50m級の壁を登ってきやがった!!」

ケニーの発言と同時に6m級の変異種が一斉に咆哮をした!

「はあ?」

カラネス区の前門の守備隊長ハルトマン・ロボフは、正門の固定砲上段から壁を見上げていた。

そこには褐色の肌をした巨人が4体も居た。

正直、現実の光景だと思わなかった。

今まで人類を守ってきた壁を乗り越える巨人が居るなど信じたくなかった。

「総員！交戦せよ！これ以上の侵入を許すな！」

怖気ずに大声で副隊長が指示を飛ばしていた！

そんな様子を他人事のようにロボフは座り込んだまま巨人を眺めていた。

「どっから来やった!!」

1人の勇敢な兵士が6 m級の巨人に突っ込んでいった！

それを見た巨人は口を開いて飛び込んで兵士を丸ごと喰らい付いた!!

何が起こったか分からないまま絶命したが、即死できた分、運が良かった。

その勢いのまま壁上固定砲を、兵士を吹っ飛ばした!!

「ぐあああああつ!!」

「うわあああああつ!!」

何名か固定砲が直撃して肉塊になったものの大半の兵士は壁外に飛ばされただけで済んだ。

落ち着いてアンカーを壁に射出すれば、落下して地面に激突するのは避けられる。

トロスト区の前門で超大型巨人の蒸気で吹っ飛ばされたエレン率いる班員も同様だった。

落下物で頭を打ったサムエルを除き全員が壁にアンカーを刺して復帰してみせた。教官が意図的に命綱を切って落下の対応を訓練しているからこそできたものであった。

「ぐいふううううっ!」

「がっ!」

ただし、それは訓練修了したての新兵だからこそ対応できたといえる。

座学の数学もそうだが、連立方程式や積分などが日常生活に役立つとは限らない。

せっかく技能を身に付けていても使用しなかったら鈍り使いこなせないものだ。

理不尽で不測な自体に陥りやすい調査兵と比べて遥かに練度が劣っていた兵士は落下死した。

「た、助かった…なああああつ!？」

カラネス区壁外に放り出された兵士がなんとかアンカーを刺して壁に張り付いた。壁上に巨人が居る以上、心理的にそこへ向かうのを躊躇ってしまった。

その隙を見逃さなかった15m級の巨人に掴まれて成す術なく喰われた。

「舐めやがって!!し…ほがっ!？」

変異種の右腕の肘にアンカーを突き刺した兵士は双剣を構えて突撃した!腕を振られて勢いよく壁に叩きつけられた彼は意識を失った。

そして獲物を見つけた変異種は口を開いて彼を含んだ。

「させるか!!」

別の兵士が双剣でうなじを斬ったが刃が折れるだけで終わった。

「な、なんで…」

後に「異形の巨人」と呼ばれる変異種は、白色の器官以外、全身を硬質化ができた。もちろん、「鎧の巨人」と比べれば厚さも硬さも劣っていたが、解除しない限り皮膚は斬れない。

そうとも知らずに鋭利な爪でワイヤーを切り裂かれた兵士は絶望したまま落下死した!

「ひいいい!!」

正門の固定砲上段にいたロボフ隊長は固定砲の影に隠れて両手で頭を押さえて丸まっていた。

優秀な奴は出世したが、トロスト門の守備に回された。

たまたま残ってしまい年長者だった彼は年功制で隊長にされただけで無能だと自覚していた。

だからこそ、優秀な副隊長と副官に任せて、生じる責任は自分が取るスタイルで回っていた。

遙かに優秀だったトロスト前門の守備隊長すら戦死したのだから、どうする事もできなかつた。

「ぎゃあああああ!!!」

変異種の1体が前門に備え付けられた三段で構成される固定砲の列を襲撃していた！

副隊長は既に戦死して、副官は悪魔の女に殴られて気絶しており盾状態だった。咀嚼する音と断末魔の叫び！巨人の雄叫びに衝撃音！

一瞬で地獄に落とされた彼はただ泣きながら声を出さない様に震えていた。

「団長！巨人が！巨人が……！」

「ああ、分かっている」

エルヴィンは、壁上にいた変異種が雄叫びをしながら周囲の兵士を襲撃しているのを

見て…。

調査兵団が置かれている状況を打開する好機だと思った。

50mの壁を乗り越えたのは初めて見たが、実はそうなる可能性を知っていた。

『エルヴィン…あくまで噂話なのだが…』

エルヴィンは、同期だった憲兵団のドーク師団長の話を思い出していた。

ウォール・マリアが陥落した時、シガンシナ区から北西にあるクイント区で扉が封鎖された。

それは取り残された民を守るためのものであった。

しかし本土から孤立し、補給が断たれ極限状態に陥った駐屯兵は恐怖政治を行なってしまった。

最終的に恐怖政治を行なったリタという女兵士率いる守備隊は全滅したとされる。

『何故、そんな事を知っている?』

『辛うじて脱出できたクインタ区の生き残り達が教えてくれた…ただ信じられない話を聞いた』

なんと巨人が壁を乗り越えてクインタ区の住民を喰らい始めたという事だった。信憑性がない話の上、実際そんな事はあり得ないと思っていた。

クインタ区の駐屯兵は、壁を乗り越えてきた巨人から住民を避難させる為に玉砕したという…。

まるでクインタ区のリタ率いる駐屯兵団の守備隊の名誉を守る作り話のようであった。

妄言と思われた話が現実になったのを感じてエルヴィンは笑った。

「第一分隊と第四分隊の精鋭は変異種の討伐を！残りは民間人の避難誘導をする!!」

「おいエルヴィン！」

「リヴァイ、君はここに残ってくれ」

「何故だ？」

リヴァイの問いを聴いてエルヴィンは周りを見渡す。

「兵長！助けてください!!」

「兵士さん!守ってください!!」

「善良な市民を守るのが兵士の役目だろう!?!早くなんとかしろ!!」

あれほど調査兵団を馬鹿にしていた民間人は巨人を目撃した瞬間、掌を返した。

歯医者者を馬鹿にしていたのに虫歯になった瞬間、激痛で医者に泣きつく患者のようである。

そして自分の思い通りにならないと発覚した瞬間、怒り狂い善良な自分に対処しろと叫ぶのだ。

なんとも自分勝手に、浅ましくて不満ばかり口に出して利己的な者たちなのだろう。

だがそれでいい。

「安心してください!ここに人類最強の男!リヴァイ兵長が居ます!!」

「彼がここに居る限り!誰も死なせることはしません!」

だったら、その愚か者共の集団心理を利用してやるまでだ。

彼らはとにかく自分の命が惜しい。

巨人から逃げ出した彼らは、罵倒や馬鹿にしてきた兵士に近寄るのだ。

兵士が居れば巨人に遭遇しても戦つてくれて討伐してくれるものだ！」

「今から！我々の避難誘導に従つて！落ち着いて！移動を開始してください！」

5年以上前から巨人と交戦してきたエルヴィンは自身が驚くほど落ち着いていた。

「デイルク！クラース！マレーネ！訓練通り民間人をローゼの扉へ誘導せよ！」

「ハッ！」

調査兵団は壊滅的な打撃を受けており、とにかく人員が足りない状態だった。

実際に変異種4体と交戦できる人材は20名も居ないだろう。

だが、なんとかするしかない。

駐屯兵団第三師団では、決して変異種を止める事はできない。

「リヴァイ」

「なんだ？」

「これから避難する住民を誘導するぞ」

「巨人に攻撃できないのは歯痒いな…」

「そう言うな、これも兵士の立派な仕事だ」

エルヴィンは、彼が負傷して巨人戦で活躍できないのは知っていた。

それがバレたとなれば、せっかく愚かな民衆をまとめたのに瓦解するのは目に見えている。

だからこそ、リヴァイは「英雄」として「対巨人用の最終兵器」として居て欲しかった。

「運が良いな、俺たちを馬鹿にする為に後を追っていたせいで門付近はもぬけの殻だ」

「ああ、少しでも民間人を犠牲にすれば我々の「作戦」は失敗するだろう」

「汚名返上するか、汚名挽回の分かれ目ということか」

「調査兵団は、民衆から支持される善良な兵団でなければならない」

「ここが調査兵団の存続の瀬戸際であった。」

何事もなければ翌日、王都に招集されてエレンを王政に引き渡さなければならなかった。

下手すれば、調査兵団が解体されるという時に都合よく巨人が襲撃してくれたものだ。

「兵士の指示に従ってください！」

「手ぶらでそのまま向かいます！」

「そこ！家に帰るな！！」

「落ち着け！！我々から離れるな！！」

優秀な兵士たちによって、民間人の避難が開始した。

これで少しは調査兵団を見直してくれるといいのだが。

「さて、どうなる…」

さきほど、王政府の行政トップであるアウリール伯爵を見かけた。

彼もあの巨人を見れば、少しは考えを見直してくれるだろう。

巨人さまさまであり、エルヴィンは好機をもたらした変異種に感謝した！

「あの馬鹿共!任務を放棄して逃げやがった!」

ケニーは激怒した!

伯爵を護衛する【中央第一憲兵団】は護衛対象を見捨てて逃走した!

ついに取り巻きだった憲兵団の兵士も貴族もローゼの扉に向かって逃走している。残ったのは、【対人立体機動部隊】の自分と部下のカーフェンだけだった。

「おいケニー!これは一体どういう事だ!」

「対人に特化した中央第一憲兵団は、巨人に勝てないようですな!!」

「いいか!なんとしても私を護れ!どんな犠牲を払ってもな!!」

「分かってますよ…貴方に先立たれたら、フリッツ王が嘆き悲しみますからねえ!!」

2人ともライフル銃と短剣を装備しているが、立体機動装置がない時点で無意味だ。とりあえず巨人は、巨人の専門家である調査兵団の兵士に任せるしかなかった。

「ホント、巨人を相手にするあいつらは、どうかしてるぜ！」

壁上では変異種が大暴れしており、駐屯兵団の兵士では全く歯が立たないようであった。

巨人を目撃したのは初めてではないが、想像以上に機敏で手ごわそうだった。少なくとも立体機動程度では逃げ切れる相手でないと直感で理解した。

「アツカーマン隊長！」

「カーフェン！大事な大事な、伯爵様を護りながらローゼの扉に逃げるぞ！」

「了解!!」

幸いにもローゼの扉から距離は離れておらず、すぐに辿り着けるはずであった。ところがすぐにそれを諦めることになった。

「退け！私はアウリール伯爵だぞ！」

「無理言うなって、もう階級や地位など、ここじゃ役に立たねえつつの！」

「この愚民どもが！」

ローゼの扉に避難した住民が殺到していた。

それはケニーも予想していたが、それ以上に糞みたいな理由で渋滞していた。

カラネス区支部の憲兵や駐屯兵団のお偉いさんが扉を封鎖してしまった。

自分たちさえ助かれれば、行政トップの大臣すら見捨てる即断即決は評価していいだろう。

「なるほど、予想以上にカラネス区のお偉いさんは、腐っていたって訳か!」

「おい!どうするんだ!」

「アウリール卿、今から民家に身を隠します」

「女風情が!私に指図するな!」

ピエール・J・アウリール伯爵。

こんな奴がフリッツ王の側近であり、王政府の行政のトップである。

正直、ここで巨人の餌にした方が壁内人類の為ではないかとケニーは思い始めた。

だが、それはできなかった。

自分の夢を叶えるまでこんな糞野郎でもおべっかをしなければならぬ。

友人であるウーリの考えを理解する為にも、ついてきた部下達の為にも！

「おい！なんでローゼの扉を封鎖した！」

「ウォール・マリア陥落の！再来を防ぐ為でありますううう！！」

「ふざけんな！民間人の避難誘導せずに封鎖しやがって！！」

駐屯兵団の兵士であり、この門の守備隊の隊長は激怒した！

避難誘導もせずに真っ先に逃亡して扉を封鎖した憲兵を！

「ご丁寧に壁上で休憩して同僚と酒を飲んで見物している状態だった！

「は？お前からこそ、善良な市民を守るために巨人に突撃しろよ」

「そうだぞ、憲兵は秩序を保つためであって、誘導はお前らの仕事だろう？」

カラネス区とウォール・ローゼを繋ぐ門の責任者は真っ先に憲兵に問い詰めた！

屁理屈を一丁前に並べて反論していたが、要するに自分だけ助かれば良いという事

だった!

「この糞共が!!」

「おっと! 貴様、我々憲兵団の公務執行を妨害をしたな?」

「あーあー、憲兵団さん! どうしますかあ?」

「はっはっはっ! お前も憲兵だろう」

「そうでしたー残念ですねー! 名前を覚えましたのでえー反逆者として…?」

カラネス区後門の守備隊長は、酔っぱらった憲兵の首をスナップブレードで斬り落としました!

それは無言で、返り血を浴びても表情は決して崩す事はなかった。

「こいつううう!! 反逆者だああああ!」

「王政に反逆するとは良い度胸だな!?! 覚えてやがれえええ!!」

まさかの友軍から攻撃されると思っていなかった腐敗した憲兵たちは逃走を図った!

「ぐほっ!？」

「がっ!!」

隊長の勇氣ある行動に感化された部下達が逃がすわけなかった。

ここに居るのは、王政でも兵団にも忠誠を誓った兵士でもなかった。

ただ、カラネス区の住民を守りたい一心で兵士になった者達であった。

「お前達……」

「どうしたのですか隊長、早く開門の指示をください」

「この指揮系統は隊長がトップですよ！」

「勇敢な憲兵たちは、巨人に突撃して戦死したんですから……ね？」

「すまない……」

自分の迂闊な行動に部下を巻き込んでしまつて何とも言えない気持ちだった。

それでも勇氣ある決断を無駄にしない為にもやるべきは1つ！

「開門せよ!速やかにカラネス区の住民を脱出させよ!」

「了解しました!!」

憲兵殺しの罪は全て被るつもりであった。

部下達は納得してくれるはずもないが、実際に罪自体は侵していた。

兵法会議に断罪されるのは自分だけでいいと守備隊の隊長は思っていた。

「報告します!」

「どうした!?!」

「調査兵団が避難誘導を始めました!」

「よし、調査兵団と共同で住民の避難をさせる!」

「指揮系統は、いかがなさいますか?」

「エルヴィン団長の指示に従えと班長に伝達しろ!!」

「了解!」

隊長は、さつきまで調査兵団を馬鹿にしていた。

安全である壁から飛び出して犠牲者を出す無謀な兵団を見下していた。

だが、こうして巨人が攻めてくるのを知った以上、エルヴィン団長の言葉が重く押し掛かった。

調査兵団は「人類の矛」であると…。

自分たち、駐屯兵団は「人類の盾」である以上、思考が相容れることはない。

だけど、手を取り合って協力する事はできる。

少なくとも巨人のスパイのような「無能な働き者」と比較する事すら烏澁がましい！

「ロボフ…お前は凄いや…俺なんか腐敗した憲兵を殺すだけで精一杯だった」

望遠鏡で前門の方角を覗けば、未だに交戦しているのだろう。

巨人の事を考えるだけで震えが止まらない彼は、無駄に最前線にいる男を尊敬した！

「ああああああつ!!」

兵士は必死に逃げた！

交戦した同僚も先輩も食い殺されてガスも全て使い切った。彼ができるのは、全速力で走って逃げることだった。

「ガアアアアアアッ!!」

6 m級の変異種は、その兵士を見逃すつもりはなかった。右手で握り潰した肉塊を捕食するのを忘れたまま、追撃した!!

「撃て!!」

左手で掴まれそうになった瞬間、大きな網が変異種に向かって飛んできた! 機敏な動きでそれを回避したが、獲物は逃がしてしまった。変異種は追いかけてきたが、新たな獲物が見つかって足を止めた。

「よく時間稼ぎをしてくれたよ…あとは調査兵団に任せて!!」

第四分隊長のハンジ・ゾエは逃げていく兵士に向けて発言した。

彼がその声が聴こえたかどうかは気にしてなかった。それでも自分たちが到着するまで時間稼ぎをした兵士に感謝したかった！

「分隊長！あれは捕獲するんですか？」

「モブリット…何を言ってるの…」

「ハンジさん…？」

豹変した上官に戸惑うモブリットと第四分隊のメンバー。

「捕獲してたまるもんかあっ!!こいつらはここで殺す!絶対に殺す!!」

「私は、こいつらを許さん!!絶対に許さん!!すぐに存在自体を抹消してやるう!!!」

ウォール・マリア陥落から5年。

ようやく人類は巨人の恐怖から立ち直れた。

それなのに、こいつらは再び人類を滅ぼそうとしている!

許せるわけなかった!!

全ては人類から巨人という恐怖を無くす為に生きてきた!

ハンジは、既にマッドサイエンティストを捨てて、巨人を憎悪を抱く兵士になつていた!

「手伝います!」

「私も!」

「俺もだ!」

「分隊長!指示をお願いします!」

モブリット、ケイジ、アーベル、ニファは彼女の意外な面を見ても驚かなかつた。ただ、上官の指示に従うまでであつた。

「さすが変異種…手ごわいな」

「ミケ分隊長!!」

ミケ・ザカリアスは、屋根に着地して折れた刃を換装した。

褐色の肌の巨人は、異様に強く弱点である白色の器官を攻撃しなければ皮膚に刃が通らなかつた。

女型の巨人の戦闘で、硬質化の一種だというのは分かっていた。ただ問題なのは、その器官が両手の甲にあるということ！

「すみません、1体を取り逃がしてしまいました…」

「大丈夫だ、あそこにはフローラが居る！」

ナナバが泣きそうな顔をして報告してきたのを見て慰めるように返答した。

巨人を感知する特殊能力持ちのフローラが見逃すとは思えないし、しないだろう。自分たちがやるべき事はー。

「トーマー！もう1体はどうした!?!」

「カラス区の前門の守備隊と交戦しています！」

「急いで討伐するぞ！合流されたら勝ち目がない!!」

リーネとヘニング、ゲルガーが変異種相手に時間稼ぎしている。

2体の変異種は、それぞれフローラとハンジに任せればいい。

問題なのは、最後の1体!

今は囿のおかげで交戦せずに済んでいるが同時相手は無理だった。

すぐに3人に助太刀して討伐しなくてはならない!

「やばい!」「デンジャーゾーン」です!」

「チツ!俺が行く!!」

ナナバの報告を聴いてミケは焦った!

白い器官を赤くして体表から蒸気を出す現象を「デンジャーゾーン」と呼んでいた。

この状態になると巨人の身体能力が向上して、手が付けられなくなるからだ!

もちろん代償があるが、それで待っていられるほど悠長な時間など無い。

「そこだ!!」

ミケは辛うじて攻撃を回避して赤くなった器官を切り裂いた!

その瞬間、元通りになり変異種は落ち着いた。

「くそっ！まだ動けるか！トーマは駐屯兵団の援護にまわれ！」

「了解!!」

これで最低限の人員になった。

やはり巨人は慣れた人員でないと戦いづらくてしようがなかった。

少なくともあの変異種は、いつものメンバーではないと狩れる気がなかった。

「お前ら！まだ生きているか！」

「「生きています！」」

ゲルガー、ヘニング、ナナバ、リーネは返答した！

彼らは決して臆さなかった。

ただ、変異種を討伐してカラネス区の平穏を取り戻す事だけを考えていた。

「行くぞ!!」

「「ハッ！」」

ミケ分隊長に追隨して4人は変異種へと突撃した!

決して最後まで諦めてはならない。

それは調査兵団に入団した際に先輩から告げられる言葉であった。

例え勝ち目がないと分かっているも最後まで努力する!それだけである!

調査兵団の第一分隊と第四分隊の精鋭たちは、変異種の交戦を開始した!

4 1 話 調査兵団の精鋭 VS 壁登りの変異種

ハンジ・ゾエは、目の前の変異種を睨んだ！

巨人の右手には握り潰された死体があり、その腕の手首にはアンカーが突き刺さったままだった。

その先には別の兵士の死体が繋がったままであり原型を留めてなかった！
相手は6 m級であるが、明らかに今までの巨人とは機敏性と残虐性が違う！

「分隊長！下がってください！！」

「これ以上、下がれるものか！！」

副官のモブリットの提言を無視する理由があつた。

これ以上、奴に侵入されると避難民が襲われる可能性があつたからだ！

変異種は、右手で握っていた死体を噛み千切ってみせた！

これをカラネス区の住民に見せるわけにはいかなかった！

ようやく巨人という恐怖から立ち直った民間人に味わせるわけにいかない！

「くっ！」

残った胴体を自分に向けて投擲するのを見切ったハンジは立体機動で回避した。

それを予想していたかの様に巨人は、口に含んでいた上半身を噴き出した！

高熱な唾液を纏って高速で突っ込んでくる肉塊を近隣の屋根にアンカーを刺して回避する！

動きを感知し巨人はその方向に跳んで民家に向かって突撃してきた！！

「ああ！手ごわいなね！だからこいつら嫌いなんだよ！！」

激突する瞬間を見計らって、すぐ近くの民家の壁にアンカーを突き刺してワイヤーを巻き取る！

見事に民家に激突した変異種は、無防備にうなじを露出させ討伐してくれと言わんばかりである。

だが、それで倒せるなら苦労しない。

「アーベル！弱点はどこだい!？」

「両手の甲です!!」

変異種は白色の器官で皮膚を硬質化しており、そこを潰さない限り斬撃が通用しない。

今回の場合は、よりによってワイヤーすら切り裂く鋭利な爪を持つ両手の甲にあるというのだ。

「どうしますか!？」

「プランCで行く!」

まともにやり合うのは分が悪いので、一時的に拘束して器官を潰してうなじを斬る事にした。

荒々しい討伐が第一分隊の作戦ならば、第四分隊はテクニックで攻める!

ハンジは青色の信煙弾を撃ち、第四分隊に作戦を伝えた!

「おいチビ野郎!!こつちを見ろ!!」

物陰から飛び出したケイジの大声に反応して変異種がそちらを見る！

「そっ!!」

その隙にニファが狩猟用の散弾銃で発砲し、巨人の視覚を潰した！
散弾の欠片が眼球に食い込み二度と元の視界を取り戻す事は無いだろう。

「モブリット！」

「分かっています!!」

動きが止まった変異種に向けてモブリットとハンジが双剣を構えて飛び出した！
狙いは両手の甲にある白いの器官、そこさえ潰せばうなじを狙える！
すぐにその狙いは打ち砕かれた！

「あああ!!?モブリット！伏せろ!!」

「うっ!?!」

ハンジの警告に思わずモブリットはアンカーを外して地面に着地して伏せた！
その瞬間、真上を何かが高速で通り過ぎた！

もし、上官の警告がなければ『何か』に身体かワイヤーに衝突する所だった！

「何だ!？」

「死体だ!!」

モブリットがその正体を分析する前にケイジがその正体の名を叫んだ。

それは、右腕にアンカーを突き刺したまま戦死した兵士だった肉塊である。

厄介な付属品は、表面積……つまり接触判定を増やしており腕を動かすだけで武器になった。

「この野郎おおおおー！」

！
屋根を使って上空に飛び出したアーベルは、6 m級の変異種の首にアンカーを刺した

その瞬間、巨人は飛び跳ねて身体を高速回転して民家に激突しようとした！

飛び跳ねた時点でアンカーを外したおかげで、巻き込まれずに済んだ彼であった。

…が、アンカーを突き刺すとカウンター攻撃をしてくるのは厄介である。

右手首に繋がったまま戦死した兵士は、このカウンター攻撃で死んだとすぐに分かった。

「チッ！」

「俺に任せろ!!死ねええええ!!」

「お前だけ行かせるか!俺も行くぞ!!」

ケイジとアーベルは、大声をあげて巨人へと向かっていく。

目が見えない巨人は脅威ではないはずだった。

「うわっ!?!」

何故か獲物の居場所を把握しているようで変異種は、胃液を目標に向かって吐き出した!

高熱の酸性の液体が彼らに向かって飛んでいく!!

「クソがつ!?!」

「ゴーグルをしていなかったら失明してたな…」

ケイジは辛うじて回避できたもののアーベルは、液体の一部が顔に掛かった。何滴かがゴーグルに付着するだけ済んで、なんとか失明を避けられた。

しかし、安心している暇は無かった。

失明しているはずの変異種が的確に位置を把握して飛び掛かってきたからだ!!

「分隊長!」

「くそ…こいつ! 音で反応してるな!!」

ハンジは経験から音で反応していると即時に分析した。

誰よりも巨人に向き合ってきたからこそ、こいつを存在させるつもりはなかった! 作戦の練り直しを迫られた第四分隊は速やかに次のプランに移行した!

「ゲルガー!! 避ける!!」

「クソがつ!!」

一方その頃、ミケ分隊長が率いる第一分隊は変異種の動きに翻弄されていた。比較的小さめの巨人は素早く、中には馬の最高速度を凌駕する者も居る。ただ、それだけならミケ分隊長も第一分隊も苦労しなかった!

「【爪】を回避しろ!!」

ナナバの叫びを聴いているゲルガーは「見りやあ分かる!!」と叫びたかった! 6 m級の変異種の爪は鋭い!

その両手の爪が伸びるとは誰が予想したのだろうか。

それはワイヤーどころかスナツプブレードですら容易く両断するほどに!

「そのチビ!! こつちを見ろ!!」

ヘニングの叫び声に反応した変異種はそこに向けて爪で引つ掻いた！

彼は大声で叫んだ瞬間、屋根から飛び降りたが着地するまでに紙一重で爪が掠りそうになった！

「一秒足らずで爪が伸びるなんてひでえよ…」

「巨人は初見殺し満載だが、こいつはいくら何でも酷いな…」

ヘニングのおかげで何とか安全地帯に離脱したゲルガーであったが動悸で呼吸が苦しかった。

ミケは、彼と変異種の距離が13 m以上という事から爪は最低でも10 mは伸ばせると分析した！

そして、うなじを斬る為に潰す必要がある白色の器官が両手の甲にある。

「こりゃあ、砲兵の援護が必要だな」

「できると思うか？」

「オイオイ、リーネ…少しくらい現実逃避させてくれよ…」

真面目なりーネの一言で、溜息をつきながら残酷な事実と向き合ったゲルガー。正直言つて、砲兵の援護がなければ勝ち目が薄い。

その砲兵は壁上で全滅しており、どう足掻いても肉弾戦でケリをつけるしかなかった。

まだ壁上に生き残っている兵士は居るが、とてもじゃないがそれどころではない。こいつと同格の存在が逃げ場がない場所で襲撃してくる地獄絵図では…。

「だが諦めるな！まだ我々は生きている！」

幸いにもここは住宅街という事があり、立体機動にも身を隠すにも最適な場所である。

むしろ爪が伸びすぎるせいで、民家の壁や屋根に激突し、本領が発揮できていなかった。

小柄で、すばしっこいがスタミナはそれほどでもない様である。

故に爪を伸ばして体力が消耗しないやり方で獲物を狩ろうとしているのだろう。

「チツ！」

ミケの声に反応した変異種は、吐瀉物を口から勢いよく射出した！

思わず舌打ちをした彼は双剣のロックを外し、回避しながら刃を投げつけた！！

巨人は伸びきった右手の爪で刃を弾いたが民家の壁に激突して崩壊した瓦礫に呑まれた。

「突撃！！」

分隊長の号令に反応して4人が一斉攻撃に移った！

瓦礫によつて右手が塞がったうえに得意な機動力が削がれている隙を見逃さなかった。

すぐにそれに対応した変異種は、振動させた大気が人体を吹っ飛ばすほどの咆哮をあげた！

「ああっ!?!」

「ぐっ!?!」

ナナバとゲルガーが振動の直撃を受けて怯んだ！

それを見逃さなかった巨人は左手を2人に向けて爪を伸ばそうとした！

「させるか！」

ミケは変異種の左腕の腋下を勢いよく双剣で斬り上げた！

衝撃で巨人の左腕が真上へと伸ばされ無意味に空気を搔いただけで終わった。

「このへタレ!!こっちだ!!」

リーネが変異種の右脚の前で大声で叫んだ！

自分から囿になった意志を尊重するかのように、巨人はその場所を左手で薙ぎ払った

！

それが自身の右脚を両断するとは知らずに。

巨人化能力者ではないからこそ、通用する戦法だった。

「ナナバ!!」

「分かってる!!」

何が起こったのかも理解できずに体勢が崩れたのを復帰しようとしている変異種。

その隙にナナバとゲルガーは息の合ったバディアクションで両手の甲を切り裂いた

!!

「頼む……!」

「大丈夫だ!! 行ける!!」

! すかさずヘニングとリーネは長年培ったコンビネーションで巨人の喉を切り裂いた

その衝撃で頭が垂れて、分かり易く剥き出しになったうなじをミケが回転斬りで抉り取る!

勢いよく飛び出した褐色の肉きりは、地面に落ちると同時に肉体も蒸気を発生させる。

巨体が蒸気を出しながら粉になり風に吹かれて霧散していく。

まるで、そこに巨人が存在しなかったように綺麗さっぱり痕跡を無くそうとしているようだった。

「なんとか倒せたな…」

「まだ何か隠し玉があったようです…早めに倒せてよかった…」

「なん…だと!?!」

リーネの一言で、ミケは更に変異種が何かを隠していたのを知った。

爪を伸ばす以外にも何か特殊能力があったようだ。

速やかに情報伝達するべく彼女に訊き込みを試みようとした!

「ミケさん!ハンジ分隊長も討伐したようです!」

「そうか…では次にやるのは…」

カラネス区の壁を守護する守備隊を喰らい尽している変異種。

第一分隊が勝利できたのは、地の利がこちらにあったからこそ。

駐屯兵団の守備隊と同じ立場だったら、成す術なく殺されていた。

だからこそ、迅速に彼らを救出しなければならぬ！

ミケは壁を自身の庭の様に駆け回る6 m級の巨人を睨み、折れた刃を換装した。

「うひよおおお！みてみてモブリット！あの巨人すげえな！！」

「分隊長！ふざけてるとマジで死にますよ！」

音響弾で誘導していたら変異種は、両手の爪を伸ばしてヤケクソに周囲を切り払いを始めた！

まるで障害物を一掃して獲物の音をしっかりと聞けるように念入りに破壊していった。

もし、ニアが散弾銃で目潰ししていなかったら即全滅していたと言わんばかりの大暴れである。

「だから殺す！！」

「分隊長？いきなりマジになるんですか…」

「こいつはこの世に存在しちやいけない。速やかに抹殺する…それだけさ」

調査兵団の中で『恐ろしい人間』は誰かと問えば、リヴァイ兵士長と答える者が多いだろう。

だが、調査兵団のベテラン兵たちからすれば、一番怖いのはハンジであると返答する。巨人を知る事で、人類は巨人を克服できるという信念を見つけたから今の人格になっただけだ。

本来のハンジは、気性が激しく熱情的で巨人に対して復讐心を燃やしていた兵士。力なき民間人に絶望を与える巨人、特に変異種は最優先で抹殺する気満々である。

「ほら来た!!」

「あぶなっ!」

変異種の右手首にアンカーを刺したまま戦死した死体が鎖鎌の分銅のように打ち付けてくる。

下手に近づけば、伸びた爪で切り裂かれるか、ワイヤーと死体に接触して動きを封じられる。

変異種はある程度、知能があるのか。

動き回る捕食対象の人間に何かをぶつけければ動きが鈍るのを知っているようである。少なくともハンジとモブリットの居る場所にワイヤーを叩きつける所を見る限りは
…。

「おーい下手くそ！悔しかったら当ててみな!!」

ハンジは、ひたすら変異種を煽る！

理性と本能が交互に入れ替わるせいで自分がどういう状況か把握していない。

ただ必死に大声で変異種の気を惹いているのは確かだ。

少なくともこんな事をさせるのは自分以外ではフローラしかないだろう。

フローラがそれを聴けば必死に抗議してくる顔を思い浮かべながらハンジは双剣を

構えた！

「おっ！やる気になったね！それで良いよ…本気で！お前を！ぶつ殺せるからな!!」

ハンジの声だけを頼りに6 m級の変異種は爪を振り回しながら突撃した！

その動きを第四分隊が予想していなかったわけなかった。

「今だ！」

「喰らえ!!」

建物の影に隠れていたケイジの許可で、アーベルは巨人に向けて音響弾を撃ちこんだ

!

音だけを頼りに突っ込んできたのを知ってるからこそ、一番効果的に撃ちこんだ!

唐突な音に一瞬、変異種は足を止めて、どこで発生したか辺りを探っていた。

物音がした瞬間、巨人はその方向に飛び跳ねて民家に激突した。

アーベルは音響弾を撃ちこんだピストルを適当な民家の壁に投げつけただけである。

「撃て！」

「了解！」

ハンジとモブリットはバディアクションで捕獲銃の引き金を引き、網を撃ち出した!
以前、フローラが使用した捕獲銃の改良型であり、反動を大幅に抑えた最新鋭の装備

だった。

立体機動装置と鞘を刃を装備している兵士を反動で吹っ飛ばす威力があつた捕獲網！

普通の6 m級の巨人なら一撃で捕獲する勢いと頑丈さ、そして速度を兼ね備えている。

それで捕獲できていたら変異種などに苦労しないのだが。

「火炎瓶を投擲しろ！」

もちろん、ハンジは捕獲する気はないので動きを一時的に止める程度でしか期待してなかった。

その網には油がべつたりと附着しており、捕獲する気がないのが窺える。

捕獲網を解こうとしている変異種に第四分隊は火炎瓶をありつたけ投擲した！

「どうだい？これが人類が持っている最大の武器だよ！」

ハンジの声に反応するように火は瞬く間に劫火になり巨人の全身を舐めるように炎

で包み込んだ。

まるで今まで犯してきた罪を禊ぐように業火が巨人の肉を焼き尽くす！

「まだだ！」

ハンジは決して油断しなかった！

捕獲網を破壊した変異種が動き出そうとした瞬間、またしても音響弾を撃たれ怯んだ。

いくら硬質化しているとはいえ、元は人の皮膚と同じである。

炎を浴びれば火傷をするし、榴弾が直撃すれば鎧と化した皮膚でも破壊できる。

この火炎瓶による攻撃で両手は灼熱の焰で焼かれ火傷を越えて炭化した！

「とどめ!!」

ニファは自作した手榴弾を巨人のうなじに向けて投擲し、見事に命中した！

うなじを爆風で損傷した変異種は、地面に倒れ込み黒煙を出したまま炭となった。

「これでよし！」

「ミケ班はどうなった!？」

「どうやら同時に討伐した様です!!」

ケイジが討伐したのを確認し、アーベルが戦況を俯瞰し、モブリットが状況を報告する。

誰一人、無駄は無く歴戦の猛者の風格を漂わせていた。

この場にエレンが居たら、変態集団がリヴァイ班並みに精鋭っぷりに驚いただろう。

伊達に壁外任務で生き残っていないのだ！

「分隊長！次はどうしますか？」

「先に壁上の変異種を叩く！」

「了解しました」

とにかく変異種2体の討伐が終わり、残りは街中に向かった変異種。

そして明らかに不利な状況下で必死に応戦しているカラネス区守備隊を喰らう変異種の2体。

街中の巨人は、フロローラに討伐されるのを賭け、ひとまず守備隊の援護に向かうつもりだった。

「ハンジ！無事か！」

「ミケも無事ようだね！」

ここで第一分隊と第四分隊の精鋭が合流した！

意外と近くで交戦していたようで、変異種が合流するという最悪の事態になりかねなかった。

ただ、変異種2体の討伐が終わった以上、無用な心配となった。

「ハンジ！変異種の1体が街に向かったようだ！」

「あーもう！どっちがそいつを討伐するんだい？」

どちらかが街中の巨人、壁上の巨人を対応するか協議する為にハンジは口を開こうとした。

「うおっ!？」

「なんだ!？」

「ぐあっ!？」

突然、街中から大きな咆哮が聴こえてきた。

まるで巨大樹の森で悲鳴をあげた女型の巨人のような叫び声であった。

すぐに止んで、何かが街中で発生しているのを嫌というほど実感するほどである。

「逃げろおおおお！固定砲が落ちて来るぞ!!」

ゲルガーの警告で調査兵団の精鋭たちが慌てて後退した！

その瞬間、彼らが居た場所に壁上固定砲が地面に激突した！

50 m壁の上に居た変異種が投げつけたものであった。

その巨人は、街中で放たれた咆哮に誘導されるように器用に壁を降りて全速力で向かっていった。

「何故俺たちを無視した!？」

「女型の巨人と同じ咆哮です!! 巨人を呼び寄せたのでは!？」

ミケ分隊長の独り言に、すかさずリーネが返答した。

巨大樹の森で拘束された女型の巨人が咆哮をした後、巨人の大群が群がってきた。

その時の巨人は、奇行種のように目の前の人間を無視をした。

まるで女型の巨人だけを狙うように。

今回も同じ事が起こったと！

「つまり、なんだ！ あいつらは仲間を呼ぶために叫んでいたのか!？」

あの場に居たゲルガーはその恐ろしさを身をもって知っている。

巨人の肉の波に吞まれ、何名かが苦悶の表情で死んでいったのを目撃していた。

それがカラネス区に押し寄せてくると考えるだけで思考が停止するほどだった。

「多分、そうじゃないか？ じゃなければ巨人が編成して襲撃するわけない」

変異種の不可解な行動とリーネの意見を踏まえてケイジなりに特性をまとめてみた。

その意見を肯定するハンジ。

「という事は…さらに新手が来るという事か…？」

ミケ分隊長の一言で全員が最悪の事態を思い浮かべた。

「ハンジ分隊長！新手が来ました!!」

モブリットの報告と同時に上から何かが降ってきた。

それは、まるで量産化された兵器のようにさきほど討伐した巨人とそっくりの変異種であった。

褐色の肌にも6m級の巨人が両手の爪を伸ばしてハンジ班を見据えて口を開いていた。飢餓状態の狼より質が悪い巨人の悪意が嫌ほど感じられる。

「どうするっ…」

「どうするって？早急にこいつを討伐して、街に行った変異種を討伐するだけだ!!」

ミケ分隊長の確認にハンジ分隊長が的確な指示を出した。
放置すればするほど、新手の巨人が壁内に侵入してくる。

その事実は、脅威であるどころか、冗談抜きで人類が滅亡しかねない。

それが巨人のせいだろうが内戦の結果だろうが、そんな事はどうでもいい！

「行くぞ!!」

「ハッ!」

臆さずにヘニングとミケ分隊長は、先陣を切って変異種の元へと走り出した!

振り下ろしてきた右手の引っ掻き攻撃を回避した彼らは民家にアンカーを刺した後方にまわった!

「ニアア…目潰しできるか?」

「モブリット副長!問題ありません」

ニアアとモブリットは、再び変異種の光を失わせようと画策した!

「あいつらの援護をするよ！」

「やれやれ人使いが荒い……」

「酒を奢ってやるから来い！」

「よし、ナナバ！期待していいよな!? 頑張っちゃうぞ!!」

ナナバとゲルガーは軽口を叩きながらニファたちの援護にまわった！

「俺たちは？」

「もちろん、壁上固定砲で援護する！ついでに生存者が居たら手当するのが優先だがな

……」

「私も手伝うぞ!!」

アーベルとケイジは、リーネを加えて50mの壁へと目指す！

ハンジ班とミケ班の混成精鋭班は、新たに壁内へ襲撃してきた変異種に対応した！

「くそっ……巨人め……」

やるせない気持ちを抱えながらハンジはスナップブレードを構えた！

例えばここで討伐しても、このままだとウォール・ローゼが陥落するのも時間の問題である。

巨人が50mの壁を乗り越えてくるといふ事実は…内地ですら安全では無いと示す証拠だった。

偶然にも自分たちが居たから、被害をなんとか最低限に抑えられた。

では、居なかったら一体、どうなっていたのか。

「ははは、怖いね…」

壁の外に初めて出た時の恐怖と絶望感、それを久しぶりに感じてハンジは身震いした。

それを武者震いに変えてマッドサイエンティストの仮面を被って、変異種へと向かっていった。

自分と同じ経験を他者に味わせないように…。

なにより死んでいった者たちを無意味な死にしないように！

42話 抗え！最後まで！

「この野郎！俺の故郷を!!」

ナナバが取り逃がした変異種を駐屯兵団の1個班が追跡していた。

巨人は自分たちに興味を示さず、民間人が居る街の中央部に突き進んでいた。

少しでも詳しい者が居れば、教本に書かれていた奇行種と呼ばれる存在だとすぐに分かる。

「待ちやがれ!!」

勇敢な兵士は、アンカーを射出して機敏に動く巨人に喰らい付こうとした！

しかし、動きが読めずアンカーを巨人の右肩から逸れてしまった。

目の前にワイヤーが飛び出してきたのを見て巨人は無意識にそれを強く引っ張った！

「あああああがつ!!」

その反動で引つ張られた兵士が壁へと激突してもなお止まらず、複数の民家に激突していった。

声があるので変異種が振り返ると、4人の兵士の姿が見えた。

持っていたワイヤーを振り回しながらその兵士たちに向かって突撃した!

「くっそ!この化け物め!」

「バルカン!同時にうなじを斬るぞ!」

「了解!」

首にアンカーを撃ちこんでうなじを斬ろうとする2人。

そんな必死の努力を嘲笑うように変異種は民家の屋根から飛び跳ねて身体を高速回転させた。

滞空5秒間に13回転した変異種の動きについていけず、かといってアンカーも外せなかった。

その結果、身体中を民家や地面に激突させて2人の兵士は肉塊になった。

「バルカン！ラルフ!?嘘だあああああつ!」

同僚が死んだのを見てしまい、地面に着地して思わず叫んでしまった兵士。そんな号哭の叫びは、巨人の口へと消えていった。

なんの感慨もなく、ただひたすらに咀嚼する変異種。

ただ本能に基づいて人間を喰らうその姿は、人類の捕食者としか言えなかった。

「みんな…!」

最後に生き残った女兵士は震えた。

自分の未来の姿を見たような感じがしてスナツプブレードが小刻みに揺れている。

呼吸は激しくなり、視界が涙で歪み、鼻水が堤防を決壊したかのように溢れている。

「あああ！よくもおおお！みんなをおおお!!」

それでも大声で自身を奮い立たせてスナツプブレードを構えて突撃した!

その声を聴いて笑ったようにみせた変異種は伸ばした爪で引つ掻いた!

恐怖という本能を怒りで上書きした女兵士は、その動きを見切つて立体機動で回避した。

目標を外した爪は、近くにあつた民家を引つ掻いて瓦礫の山にしてもなお止まらず破壊を続けた。

「死ねえええ!!」

訓練通りうなじを狙いにいった女兵士。

だが、訓練兵団を首席で卒業した彼女の必死な努力は実らなかった。

硬質化した肌につきい傷を付けることは無く音を立てて折れたスナップブレード。

常識が通用せず屋根に飛び乗つて刃と巨人を交互に見て狼狽えた女兵士。

動きを止めて思考を停止した彼女を容赦なく左手で掴んだ!

「は、離せえええええ!!」

彼女は必死に抵抗するが、腕ごと胴体を掴まれており脱出は困難である。

それでも必死に指を噛み付くなりして拘束から逃れようとした。そんな動きを受けて握りを強めて獲物の内臓を圧迫させていく。

「があああっ?! ああああああ!!」

音が鳴るおもちゃを手に入れて、この先に居る人間を捕食するのを忘れて変異種は遊んでいた。

少し握るのを強めると大きな悲鳴をあげるが、すぐに小さくなる。

そしたら少し弱めてあげると、少しだけ回復して暴れるようになる。

また、強く握り締めると音がなるのが面白いのか、ひたすら巨人は同じ事を繰り返していた。

「兵士さん!! この子たちを連れて逃げて!!」

さきほど爪で崩壊させた民家だった瓦礫の山から女の悲痛な叫び声が聴こえた。

それを聴いて変異種は、女兵士を握り締めながらそちらの方に見た!

少年は無我夢中で息を切らしながらも走った。

少女は、必死に離れない様に少年のあとを追った。

「エリー!ついてくるな!」

「だって!パウエルが逃げないから!」

「母さんを見捨てて逃げられない!!」

調査兵団の雄姿に目を輝かせていた少年は、さきほどと打って変わって絶望の表情をしていた。

巨人が壁内に出現してパニック状態になったカラネス区の住民たち。

調査兵団の兵士がなんとか避難誘導をしようとするが、パニック状態を抑える事が難しかった。

混乱により負傷者が20人以上出ており、兵士の努力も空しく好き勝手に動きまわっていた。

駐屯兵団の兵士が援軍にきてくれたおかげで辛うじて混乱の收拾ができるようになった頃。

少年と少女、そして1人の兵士の行方が分からなくなっていたのに気付くわけがなかった。

パウエルは走る！

慣れ親しんだ自宅に居るはずの母さんの姿を確認する為に。

妹のエリーはそんな彼を無視できるわけも無く必死に追いかけていた。

そんな2人を追っていた兵士が居た。

エレン・イエーガーである。

「なんで…巨人が…それよりも…」

巨人化して暴れ回ったせいでもリヴァイ班の2人と彼女を吹っ飛ばした。

そんな話を平手打ちしてきたフローラに聞かされて落ち込んでいたエレン。

そしてらいつの間にか、住民がパニックになっており、何事かと確認したら巨人が襲撃していた。

まるでシガンシナ区の悲劇を彷彿させる光景に思わず唇を噛み締めた。

「母さんが危ない!」

「だめ!パウエル!戻ってきて!」

少年の声が現実を受け入れたくないエレンを振り向かせた。

第57回壁外調査の前には、自分の雄姿を見て憧れと期待の視線を注いでくれた少年。

無残にも負けて帰って来て荷馬車に寝かされていた自分を否定しなかった少年。

そんな彼らを見捨てることなどできなかつた。

「エレン!?どこに行くんだ!」

「アルミン、すまねえ!大切な用事を思い出した!」

「待ってよ!単独行動は…エレン!!」

5年前の自分にそっくりであり、エレンは彼らを見捨てる事ができなかつた。

少年たちが路地裏に入るのを見て、アルミンの制止を振り切って追いかけた。

「母さん!」

パウエルは自宅に辿り着いた。

無残な瓦礫の山になっているその場所に。

どんな強風にも！どんな大雨でも家族を守ってきた家。

ずっと続くと思っていた平穏は、砂上の楼閣のように崩れ去っていた。

「パウエル!? パウエルなの!?!」

「母さん!?! どん!?!」

膝をついていたパウエル少年であったが、母親の声を聴いて必死に瓦礫を見て母親を探し回った。

妹のエリーも泣きながら兄の手伝いをした。

「パウエル! 巨人がそこまで迫ってるの! あなたたちだけでも逃げて!」

「母さんを見捨てて逃げられない!! すぐに助けるから!! エリー! 手を貸して!」

避難を促す母親の両脚を圧迫している瓦礫を退かそうとするが、びくともしなかつ

た。

「あああああああああ!!?」

この世の物とは思えない悲鳴が聞こえてきてパウエルは、その声が出た方向を見た。巨人が兵士を握りしめて遊んでおり、悲惨な状態になっていた。すぐに2人は瓦礫を取り除こうと奮闘するが何も進展がなかった。

「これは…」

少年たちを追いかけてきたエレンは、そこに辿り着いた。そして言葉を失った。

民家の瓦礫に巻き込まれて動けなくなった母親。

それを泣きながら必死に退かそうとしている少年と少女。

「5年前と同じ…」

5年前のシガンシナ区の門が超大型巨人に破られたあの日。

エレン・イエーガーは大事な母親を壁内に侵入してきた巨人に喰われた。

何もできず、ただ母を握り潰されて喰われるのを見ている事しかできなかった。

あの時は、アルミンが呼んできたハンネスさんのおかげで自分たちは助かった。

「母さんの言う事を聞きなさい!!」

「やだ! 3人で暮らすんだ!!」

まるで5年前の出来事を振り返っているようである。

少年と少女が瓦礫で動けなくなった母を助けようとしている。

目の前には巨人がおり、このままでは3人とも喰われるだけだ。

「兵士さん!! この子たちを連れて逃げて!!」

あの時に居た兵士は、ハンネスさんだったが今回は自分である。

まるで追体験している感覚であり、だからこそ彼の心境が痛いほど分かった。

「大丈夫だ！オレがこいつを駆逐してやる!!」

そう思つてエレンは腰に手を伸ばした。

そこで自分が鞆も立体機動装置も身に着けていないのに気付いた。

あの荷馬車で寝かせる為に予め装備を外されていた。

そして装備品は荷馬車に全て置いてきており、取りに戻る暇など無い。

巨人に対する爪と翼を挽がれた鳥は、ただ震える事しかできない。

「そんな…」

ちようど少年たちの母親の声で反応したのか巨人がこちらに向かつてきた。

褐色の肌に白色の刺青を全身に入れた風貌をしている6 m級の巨人だった。

初めて見た見た巨人であるが、その正体は知っていた。

「変異種…」

特別兵法会議が終わり旧調査兵団本部の建物でフローラが自分にプレゼントしてく

れた本がある。

その『対巨人戦闘マニュアル』は巨人の情報の他に彼女は交戦した巨人の情報を記していた。

全身の肌が硬く、白色の器官を潰さないと倒せない強敵であると記されていた。とてもではないが、勝ち目がある巨人ではなかった。

「ああっ……あああああ……」

巨人の左手に握られている女兵士はエレンに向けて助けを求めていた。

4日後に自分の結婚式があり、翌日に寿退職する予定だった。

将来を見据えて計画を立ててきた以上、ここで死ぬわけにはいかなかった。

「ああ……がっあああ!?!」

変異種は女兵士の髪を深く噛んで勢いよく毛った!

しっかりと手入れされていた頭髮は、頭皮どころか顔の皮膚さえも巻き込んで引っぺがした!

人体の模型のように顔の筋肉が剥き出しになっており後頭部の一部は頭蓋骨が露出していた。

それでも彼女は生きていた。

「あああ…」

内臓を圧迫され吐血し、筋肉が剥き出しになった顔が大気に刺激され声にならない激痛だった。

それでも残された力を振り絞って、エレンに助けを求めた。

エレンは、少年たちは、母親は、女兵士が巨人に弄ばれるのを黙って傍観するしかできなかつた。

「いっ!いっ!」

変異種は更に左手を強く握り締め!女兵士は口から内臓の一部を吐血と泡と共に吐き出した。

真っ赤に血で染まった顔は、苦痛で歪み切って全身を激しく痙攣している。

すぐに動きは緩慢となり替わっていき小刻みに揺れるだけになった。それでも彼女は辛うじて生きていた。

「兵士さん！この子達をお願いします！」

パウエルとエリーの母親は、両足を瓦礫に挟まれて身動きが取れなかった。

5人ほどの成人が瓦礫を除けば、この地獄から脱出できるはずであった。

でも、巨人が人間を捕食しようとする場面を目撃して自分は生き残れないと悟った。せめて子供たちだけでも生かしたいと思い、兵士に頼んでいた。

その兵士は、かつて自分たちを助けてくれたハンネスさんの気持ちを理解してしまつた。

「兵士さん！あの巨人を倒して！」

「お願いします！お母さんを助けてください！」

少年と少女は、最後の希望であるエレンに巨人の討伐を泣きながら懇願した。

だが、立体機動装置も武器も無いのでは、リヴァイ兵長ですら逃亡するしか選択肢が

無い。

ハンスさんの時と違って、巨人と交戦して3人を助ける選択肢すらなかった。いや、自分には巨人化という最終手段があった。

「できない…」

エレンが巨人化する度に誰かを傷付けた。

トロスト区奪還作戦では、ミカサの右頬に永遠に残る傷を残した。

巨大樹の森では、フローラとペトラさんとオルオさんを無意識に攻撃して負傷させた。

ここで巨人化すれば、また誰かを傷付けるだろう。

「お願い!早く逃げて!」

「お願いだ!巨人をやっつけて!」

「お母さんを助けて…」

「あ…あ…」

4人が無力の自分に助けを求めている。

ここで母親を助けられなかったハンネスさんの言葉を思い出す。

担いでいた彼に暴れ回って抵抗して！いざという時に活躍しなかったのを憎んだ時

！

『お前に力が無かったからだ…』

『オレが…巨人に立ち向かえなかったのは…オレに勇気がなかったからだ…すまない』

ハンネスさんの泣き顔を見て振りかざした拳は、地面へと垂れて大泣きした。

実際に同じ状況になったからこそ、彼の即断即決は凄かったのだと実感する。

今、女兵士は喰われた。

上半身を巨人に噛み付かれて、そのまま引き千切られた！

鮮血と共に噴出した排泄物が手を汚すが気にすることもなく巨人は丸呑みをした。

その血は花卉が散るように舞ってエレンの頬を生暖かい温度で濡らす。

すぐにその温もりは冷えて、生命の儚さを実感させるものであった。

『駆逐してやる…この世から一匹残らず!!』

ウォールマリアの門に突貫して、扉どころか壁内の人類の平穩をも破壊した鎧の巨人。

その時に発生した破片がフローラの両親を潰して、1人残された彼女は記憶喪失となった。

この日、エレンは誓った!

弱くて泣き虫の自分から絶望を怒りに変えて巨人を一匹残らず駆逐してみせると! 必死に訓練してきた先が、この巨人を見て傍観している有様だった。

「お願い! 逃げて!!」

少年たちの母親は、自分を見捨てても兵士に子供たちを安全な場所に運んで欲しかった。

巨人は既にこちらに気付いており時折、自分と子供を交互に見ていた。

だからこそ、兵士さんに子供たちだけでも逃がしてほしかった。

その時、胃袋に居た女兵士は、ようやく死ねた。

灼熱の釜茹で地獄と言わんばかりの高熱の胃液に足掻きながら沈んで溺死した。

次は、エレンか少年か少女か母親か。

「ごめん…」

「なんで、なんでだよおおお?」

エレンは歯を食いしばって少年を抱き抱えて逃げようとした。

母親を見捨てたハンネスがやった事の二の舞、先人の轍を踏んでいた。

むしろ、すぐに決断して素早く撤退した彼の方が偉大だった。

結局、自分はどうしようもない口だけの男で特別兵法会議で裁かれて解剖された方がよかった。

エレンは自分を責めながら「少年を保護する」という建前で敵前逃亡した。

「ありがとう…」

パウエルと呼ばれた少年、エリーと呼ばれた少女の母親は兵士の決断に泣きながら感謝した。

その意志を絶望に変えるように変異種は瓦礫を退かして彼女を捕食しようとしてい

た。

瓦礫が動く音を聞いてエレンは足を止めて振り返った。

5年前に口喧嘩して別れた母親が瓦礫から取り出されて、掴まれて喰われる瞬間を思い出した。

「嫌だ…」

エレンは、自分の無力さで誰かが死ぬのは嫌だった。

同期、仲間、戦友、先輩、上官、市民、壁内で逢った人達が目の前で死ぬのは嫌だった。

「おい!!」

エレンは何も考えず本能で変異種に向かって叫んだ!

大声で反応したようで、巨人はエレンの方を見た。

何故か口角をつり上げて笑っていた。

エレンの母、カルラを助けようとしたハンネスの決意を砕いた絶望感を自覚させる笑

みであった。

ここで自分が何をしたいのか分からなくなった。

『何をしている……！抗え！最後まで戦え!!これは……お前が始めた物語だろうか?』

この時、男とも女とも取れる掠れた声がエレンの耳元で囁いた感じがした。

まるで鼓舞させるような発言に思わずエレンは少年を放してしまった。

考えてみればすぐ分かる事だ。

ここに居る少年も少女もそんな事をいう訳が無かった。

巨人は、エレンと瓦礫に埋まった女性を交互に見てどちらを選ぶか迷っている様子だった。

「オレは……オレは！エレン・イエーガーだ!!お前を殺す男だ！冥土の土産に覚えておけ!!」

エレンはヤケクソに大声で叫んだ！

結局、振り出しに戻っただけだ。

いや、エレンに向かって巨人が手を伸ばしてきた時点で状況は悪化した。

口だけで何も考えてなかったせいで、死を覚悟した!

口を開いて血塗れの牙を見せていた巨人の背後に2人の兵士の姿が視界に映るまで…。

「巨人は調査兵団の精銳が対応していますわ!その隙に…」

「兵士さん!本当に大丈夫なのか!?!」

「俺たちを守ってくれ!!」

「お父さん!?!お父さんはどこ?!」

フローラ・エリクシアは、カラネス区の住民の避難誘導をしていた。

パニックで怪我人が続出しており、混乱に紛れて尻を触ってくる輩までいる。

それでも上官の命令に従い、ひたすら住民をローゼの扉へと誘導していく。

中には、兵士と一緒に居た方が安全と思う輩のせいで更に避難が遅れていた。

「フローラ！ エレンを見なかった!？」

「え？ 荷台に寄り掛かっていたはずじゃ…」

フローラはミカサの問いで慌てて“声”を聴こうとした。

だが、辺りの負の感情が強すぎてエレンの声が聴こえなかった。

ただ、巨人が近くに居るのは分かる。

独特な呻き声が耳にこびり付いて離れないからだ。

「あの状態じゃ遠くに行けないはず！ フローラも探すのを手伝って!？」

「無理よ！ 班長に命じられて避難誘導をしてるせいでできないわ!？」

「どうして!？ 貴女らしくない!!」

ミカサの苛立つ声にフローラは何と返せばいいか困った。

自分だって真つ先にエレンを探しに行きたい。

ただ、彼女には以前と違って独断で行動する事ができなかった。

「データー・ネス班長に誓ったの！ 班長の決断に従うて!!」

「ネス班長は死んだ!もう死んだ!!守る必要なんてない!」

「だからこそ守るのよ!彼の遺志を踏み躪る行為は…」

話が平行線で終わり、これからミカサとフローラは激しく口論するはずだった。

「フローラ!ミカサ!大変だ!!」

大勢の住民に突き飛ばされながらもアルミンが彼女たちに向かって叫んだ。

ただ事ではないと見抜いた2人は立体機動で取り巻きの住民を撒いて彼の元に着地した!

「エレンが!少年たちを追って路地裏に行っちゃった!!」

「なんですって!?!」

彼の負の感情の声を聴いて、立ち直るまで時間が掛かると思っただけで放置したのが裏目に
出た。

やはり先輩のペトラさんの緊縛プレイに使用した紐で結び付けておくべきだった。

今頃になってフローラは、彼を放置して避難誘導をしていたのを後悔した。

「アルミン！その路地裏を教えて！私たちが行くわ！」

「えっ!?!わたくしも行くの!?!」

「当然でしょ！貴女以外に私の背中には任せられない!!」

ミカサの一言でフローラの決意が揺らいでいた。

自分だって助けに行きたい！

でもこの住民達を放置してエレンを捜索するわけにはいかない。

命令違反は…。

「私が一番偉い班長になる！班長命令！フローラも一緒にエレンを探しに行く!!」

「ああもう！分かったわよ！アルミン！案内して!!」

「わ、分かった！こっちだよ!!」

ミカサは、ネス班長の遺志に縛られているフローラを解放するべく、更に上の班長を名乗った！

ネス班長より偉くなれば、彼の命令より自分の意見を優先してくれると思ったからだ！

その作戦は成功し、104期生でもっとも巨人討伐経験がある戦友を引き抜けた！さすがにエレンとアルミンを同時に守れないから少しでも戦力が欲しかった。

ただでさえ、リヴァイ兵長が自分のミスのせいで負傷した以上、彼に頼れなかったのもある。

「ここだよ！ここからどっかに行つたんだ！」

「フローラはどう思う？」

「エレンの事だから巨人に向かつて……」

ここでフローラは、エレンの「声」が聴こえた。

そして近くに少年と少女、そして身動きが取れない母親が居るのが瞬時に分かった。そして彼が置かれている状況は過酷どころか大ピンチであると察した。

まだ現場は確認していないが、ミカサの昔話で聴いたシガンシナ区の悲劇にそっくりだった。

『ハンネスさん、あそこでオレは巨人に喰われるべき人間だったんだ…』

なによりエレンは一步間違えれば自殺しかねない精神状態だった。

特別兵法会議で大半の出席者から否定され、新たな心の拠り所を女型の巨人に破壊された。

速やかに彼の所…巨人が居る場所に行かなければならない！

「ミカサ！エレンの声が聴こえた！」

「声？声なんか住民しか聞こえないけど？」

「いいから早くしないとエレンが喰われるわ！」

「分かった!!すぐに行く!!」

フローラの勘と聴覚を信じたミカサは、彼女の立体機動についていった。

なんか取り残されて呆然としていたアルミンは、立ち直った瞬間、後を追いかけた。

「エレンはどこに居るの!?!」

「変異種の近くに居る！」

「じゃあ、それを討伐すればいいのね!」

「今からじゃ間に合わない!」

「じゃあどうすればいいの」と言おうとしたミカサ。

「オレは…オレは! エレン・イエーガーだ!!」という声がして黙り込んだ。

そして大切な家族を見つけた。

「お前を殺す男だ! 冥土の土産に覚えておけ!!」

エレンは、自分から囮になって大声を出して巨人を惹き付けていた。

巨人は今すぐにも彼を食べようとした。

その様子を望遠鏡で覗いていたフローラとミカサは顔を向き合って頷いた。彼女達はスナップブレードを構えて背後から巨人のうなじを強襲した!

「ミカサ! フローラ!」

「エレンに手を出す奴はぶっ殺す!!」

「さっさと死になさい!!」

エレンが勇を鼓して作った20秒間の隙。

たったこれしか巨人に時間稼ぎしかできなかった。

それで充分だった。

フローラとミカサがエレンの元に駆け付けて巨人のうなじを刈ろうとする時間は！
変異種のうなじを狙った4本のスナップブレードは音を立てて折れた！

「こっちよー！」

「私たちが全部、ぶった切ってやる!!そしてエレンを助ける！」

巨人に発見されない状態で2人で奇襲攻撃をした。

普通の巨人なら瞬殺できたが、こいつは変異種。

白色の器官を攻撃しなければ、うなじの硬化を解除できず刃は通らない。

それどころか、器官を赤く染めて変異種は本気モードになった。

調査兵団が「デンジャーゾーン」と呼んでいるとはフローラもミカサも知らない。

ただ言えることは、巨人がフローラとミカサを最優先で狙ったという事だ！

「エレン!無事か!」

「アルミン!」

アルミンはエレンの無事を確認して泣いた。

エレンはもう泣いていた。

「最強の援軍を連れてきたよ!2人が勝てなかったら、もう終わりだ!!」

アルミンの言葉を聞いてエレンは、あの時の事を思い出していた。

シガンシナ区に巨人が侵入した時、彼はハンネスさんと呼んでくれた。

そのおかげで、自分とミカサは助かった。

今回も104期生で最強クラスの2人を呼んでくれた。

やばい時ほど、正解を当てる親友に感謝した!

「アルミン!瓦礫に埋まっている人が居る!手を貸してくれ」

「わ、分かった!」

アルミンは民家の瓦礫に巻き込まれた女性を助けようとした。ふと、巨人を見る。

両手から爪を伸ばして空中を引っ掻いた巨人の攻撃を2人が必死に回避していた。あの2人が居て、巨人を瞬殺できない時点で相当強いと分かった。

「僕たちも手伝う！」

「よし！その柱から退かそう！」

「一斉…のーでー!!」

「「「よいしょー!」」」

「…ダメだ。動かねえ…」

4人は必死に柱を退かそうとしたがびくともしなかった。やはり人員が足りなかった。

しかし、呼びに行く暇は無いし付近には住民も兵士もいないだろう。

アルミンとエレン、パウエルとエリー、そして母親。

彼らは、2人の女兵士が6m級の巨人に勝利するのを祈るしかできない。

カラネス区の悲劇は、最終局面を迎えていた。

43話 エレン・イェーガーの選択

目の前に居るのは、やけに顎がごつつく牙が鋭い6m級の変異種。

今まで交戦してきた変異種の中でも著しく小型の部類に入る。

だからこそ、今までの経験から機敏で飛び跳ねて捕食行動を取る巨人だとフローラは思った。

折れた刃を捨てて強化鞘・1型から刃を交換して巨人を回り込む軌道をとっていた。

ミカサと連携して挟撃すれば、簡単に倒せる…はずだった。

「はあ!？」

フローラを捕捉した変異種は、口を開いて彼女に向けて両手を伸ばした。

そこまでは想定していた。

さすがに爪が伸びるとは予想できず、交換したばかりの強化刀身・1型で攻撃を受け流した。

だが勢いよく突出した爪は、紙細工を切断するように刃を破壊し、彼女の胴体を貫く

勢いだった！

巨人の牙にアンカーを撃ちこんだフローラは身体を回転させて口に向かってガスを噴出させた！

獲物が自ら口の中に入ろうとするのを見て、変異種は両手を動かさずにそのまま待機していた。

「そんなに欲しいなら……あげるわ!!」

アンカーを外し高速でワイヤーを巻き取りながら、フローラは折れた刃を巨人の口内に投擲した！

飛んできた2本の刃が口蓋垂と口腔を損傷して、思わず変異種は口を閉じた。

右アンカーを巨人の右目に射出してガスを噴出して巨人に対して反時計回りに彼女は回り込んだ！

リヴァイ兵士長の動きからランニングした『空中刃換装』のスキル。

それは、ただ空中で刃を交換する技術ではない。

捨てる刃を巨人に向けて投げ込み負傷させる上に姿勢を崩さず空中で刃を換装するスキルである！

世界一美味しいお肉ではなく、刃を投げつけられた巨人は、爪を縮めて両手で口と喉を抑えた！

「ミカサア!!」

「相変わらずよく動けてる…やああああ!!」

ミカサは、囷になったフローラのおかげで変異種の両膝裏を削ぐことができた。

関節部なので硬質化が不可能だと判断して、ミカサは独断で削いでみたが、うまくいった！

爪を縮めて口と喉を抑えている巨人は、ひとたまりもなく民家に顔面を激突させた！巨人が一方的にやられているのを見て、少年達どころかアルミンもエレンも声すら出せなかった。

「すごい…これが調査兵团…!」

パウエル少年は、2人の雄姿を見て感動していた。

妹のエリーは、母親に押し掛かっている瓦礫を退かす努力を忘れて彼女達の動きに見

とれていた。

『いやいや！あいつらがおかしいだけだ』とアルミンとエレンは即否定した

だが、少年の夢を壊すわけにもいかなないので、心の中で全力で否定した！

調査兵団は、巨人を討伐するのではなく壁外の環境を調査する兵団だと伝えたいが野暮であろう。

「削いでやる！」

「これで終わらせる！」

フローラは左の手の甲を、ミカサは右手の甲を削いで、同時にアンカーを民家の屋根に突き刺して急上昇していった。

上方で宙返りをして反時計周りに楕円を描いたインサイドループで、再びうなじを狙おうとした。

足が頭より出る前に真下の巨人を確認した彼女達は、うなじにアンカーを射出して突っ込んだ！

その動きはシンクロしており、相当に信頼していないとワイヤー同士が衝突するほどであった。

「うううおおおおお!!」

「覚悟なさいいいいい!!」

2人は同時にうなじを削ぐつもりだった。

しかし巨人が両手を地面に叩きつけた瞬間、彼女達はアンカーを外してワイヤーを巻き取った!

勢いよくうつ伏せに民家に接触していた変異種は、身体を回転させて仰向けになった。

1秒でも判断が遅れていれば、ワイヤーで引っ張られて地面に叩きつけられただろう。

「……!」

フローラとミカサはお互いの姿を見て、それぞれ相棒に向けて右アンカーを射出した!

巨人の動きを確認するまでもなく、ただ回避行動をする為に!

屋根にアンカーが刺さった瞬間！

ワイヤーを高速で巻き取ってランデブー、空中衝突するかのように同時に向かっていった！

落下して激突する前に回避しようとする相棒の姿が、2秒足らずで加速した肉体がずれ違う！

相棒を信頼して身体を捻り、真正面から肉薄し至近距離で腹を見せ合い間一髪、衝突を回避した！

いつも通り地面に叩きつけたはずの獲物を探して変異種は、周囲を見渡すがどこにも居なかった。

「くっ！」

「うっ！」

ミカサの衝突を回避した直後、ブラックアウトしてフローラはアンカーを外した。

そして屋根との距離と、高さと自身の落下速度を勘と経験で導き出して、双剣を振り下ろした！

見事に刃が壁に衝突して、その衝撃で身体が屋根の上と乗りだした！

操作装置に付いている補助スイッチを弄って刃を捨て屋根の上を転がって肉体の負担を低減した。

屋根から飛び出した瞬間、光を取り戻した彼女は、煙突に左アンカーを撃ちこんで落下を防いだ。

「フローラ……うっ！ガスが……!？」

ミカサはうまく着地したが、自身に残されたガスと刃がほとんど残っていないのに今、気付いた。

エレンを口内に入れたまま逃亡した女型の巨人を追撃している時にほとんど使用してしまった。

装備を変更したフローラはともかく、ミカサは連戦続きのままですべて補充できていなかった。

予備も含めブレードが3つしかない上に、少しでも立体機動したらガスの残量が尽きそうである。

そのせいで、フローラが復帰してくれるまで身動きが取れなかった。

「ああ！もう！！なんでこうなるの！！」

106回も医務室送りされても、2日間で7回も医務室送りされても復帰してみせた
フローラ！

今回も不死者のように復帰して屋根を上って巨人を見据えた！

その間、巨人は自身の腹を叩き、両手に吐瀉した！

高熱の胃液と体内に収まっていた兵士の残骸が両手に零れそうなほどに貯め込んだ。

「何をする気？」

ミカサは、巨人の不可思議な行動に困惑して、詳細に確認する為に近づいた。

その瞬間！変異種は両手に溜まった吐瀉物を彼女たちに向けて投げつけた！

胃液と死体の破片は、散弾となり高速に飛んでいき民家に激突した！

「くっ！」

「……この……ゲロ吐きがあああ！！」

ミカサは、屋根にある煙突に隠れて攻撃を回避したが、本調子ではないフローラは屋根に伏せた。

そのせいでフローラの真上を胃液や死体の破片が飛び散っていく。

見事に微量の胃液を兵服のジャケットと髪に浴びたフローラは激怒した！

怒りで元気100倍になった「お肉」は、巨人に喰われるように真正面に飛び出していった！

「絶対に許さないわ!!」

巨人が両手を伸ばしてくる前に何度もアンカーを交互に射出して、指を向けられない様に動いた！

膝まであるブーツが地面に掠ったが気にすることはなく、巨人に向かっていった。

爪を伸ばして彼女を突き刺そうとしたが、あまりの動きについていけずに動揺している様だった。

その隙を見逃さず、巨人の左肩に飛び出した彼女は、首に向けて双剣を振り下ろした！

「硬直が…早いわよおおおお!!」

2つの刃は肉を削ぐこともなく折れてしまった。

ミカサと自分が潰した白色の器官の再生が完了して再び身体中を硬質化したようである。

刃のしなり具合からフローラは即座に近くの民家の壁にアンカーを射出して離脱した。

皮肉にも変異種を硬質化の皮膚のせいで何度も斬り損なっている経験が活きた場面である。

「ミカサ!？」

ミカサの援護がなかったのに疑問に思ったフローラは、彼女が居る場所を見た。

さきほどとは打って変わって、まるで他人事のようにそよそよしくしていると感じた。

「まさかガス切れ!？」

エレンが最優先のミカサが、その脅威になる巨人を放置するなど理由は限られる。ガス切れか、刃が無くなったか。

彼女の装備している『強化韃・1型』に替えの刃が1本しかないのに気付いた。

「刃も切れたの!?!」

フローラの心理に気付いたのか、ミカサは申し訳なさそうに頭を縦に振った。

これで変異種と戦えるのは、必然的にフローラのみになった。

嘆くより突撃をする思考の「頭エレン娘」は、諦めずに白色の器官を再度攻撃しようとした!

「グオオオオオオオオオオッ!!!」

その瞬間、6m級の変異種が空に向けて大声で咆哮をした!

あまりの音量で大気を震わせ、地面を揺らす威力にその場にいた全員が両手で耳を塞

いだ!

しかし、その間でも巨人はフローラを攻撃したい様で右手から伸ばした爪で引つ掻こうとした！

「…!!」

左アンカーを射出しながら両手のグリップを握り締め爪攻撃を刃で受け流した。

刃は脆く折れたが、身体への直撃を免れた彼女は地面に着地してスライディングをした！

激突する鞆のベルトと、固定ベルトを補強した紐が千切れないのを祈りながら必死に回避した。

振り下ろされた爪は石床を抉ったが弾かれた衝撃で民家に激突し、肉を抉られるのは防げた。

「とっ、とん、今日はついてないわ!!」

フローラは、咆哮を止めた巨人が勢いよく突っ込んでくるのを見てそのまま直進した！

彼女の脳裏に浮かぶのはー。

ミーナ・カロライナと約束した今晚、一緒の布団に寝る事だけだった！

浅ましい理由ではなくミーナを残したまま死ねない以上！

足掻くしかない！と決意させるために思い浮かべた！

「いっちょよー！」

フローラは大声で叫びながら巨人に向かって駆け出していた。

巨人も口を開きつつ両手を広げて踏ん張った！

その刹那！フローラは巨人の足元だった場所に両方のアンカーを突き刺した！

飛び掛かる巨人に、ブーツを石畳に擦りながらワイヤーを高速で巻き取っていく。

滞空する巨体の真下を潜り抜ける様に突っ込んでいった。

獲物が消えたので、再び変異種は、民家に激突するだけで終わってしまった。

「今度こそ！！」

無防備な隙を見逃すはずもなく、フローラは巨人に向けてアンカーを撃ち込もうとし

た！

その瞬間、何故か自分が新たに出現した影に隠れたのを感じて、思わず前転する！
すぐに衝撃と共に破片が彼女の頬を掠りながら飛んでいった！

華麗に受け身をして何事かと振り返ったフローラは、思わず動きを止めた。

「この！忙しい時にいいいいいい！！」

先刻までフローラが居た場所に褐色の大きな右手があった。

見上げると、さっきまで相手をしてきた化け物と差異がない変異種が居た！

わざわざ6 m級の変異種の姿であり、同格の存在だとすぐに分かるのが不幸中の幸い
くらいに！

お代わりを要求してないのに追加オーダーをした創造神に対して彼女は憤慨した！

「もう良いわ！まとめてぶっ倒して差し上げますわ！！」

この状況が絶望なのかと…その感情を欠如したフローラは、右手のグリップを握り締め
めた！

変異種からすれば、50mの壁上と正門に居た駐屯兵団の兵士を喰らい尽してしまつた。

その時、同胞からの呼び出しを兼ねた咆哮を聴いて駆けつけて、偶然フローラに攻撃したただけだ。

さきほどまでご馳走になつた兵士とは違つて動きが機敏だったが、やる事は変わらな
い！

巨人は、人間のみを捕食する本能に基づいて襲撃するだけである！

「もおおお!!またなのおおお!!」

アンカーを撃ち込むとしたフローラに向けて変異種は胃袋にあつた死体を口から噴
き出した！

美味しそうな彼女を入れるスペースを作ると同時に祝砲を兼ねているように撃ち込
んだ！

「あああ!!」

胃袋に30人以上の死体を収めているようで、怒涛の間隔で次から次へと死体を嘔き出していく！

必死に回避するフローラだが決して路地裏に逃げる事はしなかった。

空気扱いのおかげで、巨人の興味から逸らしたエレンたちが襲撃される可能性があったからだ。

故に巨人から姿を隠す事ができず、必死に回避するしかできなかつた。

「いの…!!」

フローラがなんとか反撃の隙を見つけて飛び掛かろうとした瞬間、背後から何かが右肩を霞めた！

復帰した変異種が彼女を爪で貫こうとしていたのだ！

こうしてリヴァイ兵長に次ぐ実力者であるミケ分隊長ですら絶望する事態！
フローラは変異種を同時に相手をする羽目になった。

「なんでえええ!!」

目の前は胃液と兵士だった残骸が飛んでくるうえに変異種が飛び掛かってきている。背後では、変異種が両手の爪を伸ばして自分を引っ掻こうとしている！

完全にキャパシテイオーバーであり、リヴァイ兵長以外では対応できるはずはなかった。

当然、フローラは近くの民家にアンカーを射出しようとしたが、付近の民家は瓦礫になっていた。

あれほどの戦闘を繰り返して周囲の民家が無事で済むわけなかった。

「嘘っ!？」

仕方なく目の前に居る変異種に右アンカーを撃ち込んだが硬質化した皮膚に弾かれた！

すぐさまワイヤーを回収しつつ、後方転回して足元を狙ってきた爪を回避した！

右アンカーが右脚に強打したが、気にせずに後方に居た巨人の首に左アンカーを撃ち込んだ！

アンカーを撃ち込まれた変異種は、飛び跳ねて身体を回転させた！

「そ………!!」

巨体が1回転する前にフローラはアンカーを外した!

こうして上空に投げ出された彼女は一時的に巨人の攻撃から逃れることができた。

新手の変異種は、そのアンカー攻撃のカウンター攻撃した巨人と激突した!

すかさず右手の甲にアンカーを撃ち込んで白色の器官を両断しようとするフローラ
!

そんな彼女の努力を水の泡にするように、新手の変異種は足の爪を伸ばした!!

「ああっ!?!」

さきほどまでの攻撃で両手の爪だけが伸びると先入観があったフローラは対応でき
なかった。

その爪は、油断した彼女の胴体を貫こうとした!

「させない!!」

ミカサは、僅かなガスを全て噴出しきって双剣のスナップブレードをその爪に激突きさせた！

爪を切るどころか刃が根元から折れてしまったが、爪がフローラを貫く事はできなかった。

「ミカサ!!」

「フローラ！私も戦う!!」

勇ましくミカサは発言してみせたが、今の行動でガスをほとんど使い切った。

そして最後の刃を変えたが1本しか刃を装備できていない。

2対2の状況になったが、圧倒的に人間側が不利であった。

ガスも刃もないミカサ、連戦続きで肉体も固定ベルトも立体機動装置も限界のフローラ。

このままでは、すぐに巨人に押し切られるのは明白だった。

「!!?」

その様子を見て少年は頑張つて考えた！

この状況を打開する策を！

だが教育を施されて思考の回転が早いアルミンですら策を見いだせないのに出るわけがなかった。

「お兄ちゃん！兵士なんですよ!?!戦つてよ!!」

パウエル少年は、自分の無力さに落ち込んでいるエレンに話しかけた！

カラネスの正門から出発する時、凛々しく立派な兵士だった。

ボロボロになつても戦い続けた兵士に最後の希望を託したかった。

泣くか逃げる事しかできない少年は、ただエレンに頭を下げて頼み込む事しかできなかった。

「だってオレは…」

エレンは、少年の言葉を聴いても決心がつかなかった。

アルミンと少女は、小さな残骸から取り除いていたが母親を助けるまで時間が掛かり

そうだった。

結局、どの選択肢も選べず、ただ時間を浪費しており、なんとか状況を打開したいと思っていた。

エレンには、「巨人化」という文字通り、最後の切り札がある！

ただ、それは周りを無自覚に傷付ける諸刃の剣だった。

ここで巨人化すれば、本能に支配されて少年や少女を踏みつぶしてしまうと…自覚していた。

『それが許されるのはあなたの命が危うくなった時だけって私たちと約束したでしょ！』

巨大樹の森で女型の巨人に追われている時にペトラが発言した言葉をエレンは思い出す。

やはり、自分は役立たずだと思ってしまった。

あの時、いや以前から誰も自分に期待していなかった！

『エレン、お前は間違っていない…やりたきややれ！』

その後、リヴァイ兵長が自分の選択を肯定してくれた。

エレンは走馬灯のように次々と記憶が浮かんで脳内を巡っていた。

結果はどうなるか、誰にも分からない。

だからこそ兵長は、判断に迷って決断できないエレンを念入りに後押しした！

『だから…せいぜい、悔いが残らない方を自分で選べ』

彼の言葉が強く心に残った。

「うっ…うっ…まだ…」

「ミカサを放せえええ！この下衆野郎!!」

不意打ちに対応できず、変異種の右手に掴まれて捕食されそうになったミカサ。

掴まれて指で胴体を締め付けられて呻き声を漏らしてもなお、抵抗を止めなかった。

相棒のピンチを見逃すはずも無かったフローラは、左手首を双剣の刃と引き換えに強

打した！

衝撃で指が離されて落下していくミカサを抱き寄せて回避行動をするフローラ！
その先には、もう1体の変異種が待ち構えていた！

「兵士さん…!？」

少年は、女兵士が掴まれたのを見た兵士が巨人に向かって駆け出したのを見送った。
立体機動装置どころか、刃すら何も身に着けていない兵士。

巨人に対して何もできるわけがないとパウエル少年にも分かっていた。
それでも彼の後姿を見送る事しかできない。

「オレは…ミカサを…みんなを護る!!」

巨人に向かって突撃したエレンは、泣きながら左手首を思いつきり噛み付いた！

その時、衝撃波が発生し、フローラとミカサを喰おうとした変異種は体勢を崩した！
エレンの身体から生えた大量の赤色の筋は筋肉を作り出して体格を作った。

まだ体格が形成中でありながらエレンは両手の指を組んで変異種に振り下ろした！
まさかの巨人からの攻撃に動きが機敏な変異種も対応しきれず、叩き潰された！

『こいつが！こいつらが！！絶対に！許さねえ！！』

風で黒髪がなびく15 m級の巨人は、怒りの咆哮をあげた！

その声は、カラネス区から脱出する全ての住民の足を速めたほどだった。

『させるかああああ！！』

巨人化したエレンに飛び掛かった変異種！

その脚をエレンは右足で蹴り姿勢を崩した変異種の右腕を左手でしっかりと鷲掴みした！

更に左手で掴んで引き、6 mの巨体を背負って抱え込むように投げつけた！

6 m級の巨人では、15 m級の巨人のリーチの長さでパワーに勝てず子供の様に回転した！

そして変異種は、さきほどのダメージが回復していない巨人に激突した！

『まだだ！まだああああ！！』

エレンは怒りに任せて何度も殴りつけた！

さきほどまでは、彼は6m級の巨人を見上げて恐怖と無力さで何もできなかった。

今度は、15mの巨体から6m級の巨人を見下ろしており、今までの鬱憤を晴らすように攻撃した！

「エレン！エレン!!…ダメだ！全然聴こえていない…」

アルミン・アルレルトは、巨人化したエレンに必死に何度も呼びかけていた。

トロスト区の大岩を運送する時に巨人化した時のように巨人の本能に吞まれたと想像した。

ただ、以前と違って理性である程度、身体を操作できるようで、呼びかけるのを諦めた。

「ねえ兵士さん…」

「えーっと、どうしたの？」

「あの兵士さん…巨人になった…なんで？どうして？」

「それは…」

純粋な少年の疑問にアルミンは、座学トップの頭脳をもってしても返答できなかつた。

そんなの自分が一番知りたいし、むしろ教えて欲しかった！

「アルミン!!」

そこに聴き慣れた2人の女の声が聴こえた！

ただし、その声はまるで…!

「うわあああああ!?!」

フローラとミカサは、鬼の形相をしてアルミンの元へ全速力で駆け抜けてきた!

【人類最強の女】を争う狩人たちが、屠所の羊を見つけたように鬼気迫って向かって来

る。

思わずアルミンは、少年と少女の前に一步出て咄嗟に両手を伸ばして庇ってしまっただけに！

アルミンは泣いた！無様に鼻水を垂らして！震える2匹の子羊を護る羊の様に！

「アルミン！刃をよこしなさい！」

「ガスも！もろう！」

フローラは、アルミンの一式鞄から一式刀身を2本頂戴した！

更にミカサは、彼からガスボンベをも奪い取り自身の鞄に装着した！

彼女達からみれば、アルミンは絶好の「補給拠点」であった。

そうとも知らず、彼は彼女達にされるまま受け身となって震える事しかできなかった。

「行くわよ！」

「分かっている！すぐに行く!!」

装備を整えた2人は、踵を返して変異種の方へ向かっていった。

大嵐が通り過ぎた様に静かになったのに残された少年達は呆然としていた。

咆哮で気を失った母親を気にすることもできず、ただ座り込んで泣くしかできなかった。

空になった2つのガスボンベが風に煽られて音を立てて転がっていく。

「え……ええ……何が起こったの……？」

エリーは、さきほどの記憶をシヨックで消失していた。

パウエル少年に至っては、壁に背もたれながら座り込んで気を失った。

「う、うん……ちよ……つと待ってね……」

シヨックで気力を失ったアルミンは、兵服の懐のポケットから筒を取り出して蓋を開けた。

それは、フローラが纏っている香水が入っており、安らぐ香りがした。

リラックスハーブで調合されている香水の香りを存分に嗅いで正気を取り戻した。

「とりあえず安全な場所に行こうか」

一か月前の兵団本部突入作戦の時にフローラから渡された香水。

何故、こんなものを渡してきたか理解できなかったアルミンであったが今、理解できた。

これで正気を取り戻して行動できるようにする彼女なりの計らいであった。

ついでに小便の匂いを誤魔化せると思ったアルミンは、少年たちの匂いを誤魔化す為に使った。

『くっそ!!』

巨人化したエレンは、目の前が真っ赤に染まっていた。

初めての経験だが、巨人化できるのが限界というのは分かっていた。

既にほとんど力が入らず気を抜けば、巨人化が解除されると実感している！

『まだ…倒せていないのに』

1体の変異種の両手の甲を潰して両腕を引き千切った！

だが、それだけであり止めを刺そうとした瞬間、自由に身体が動かなくなってしまうた。

怒涛の攻撃を受けた変異種は、立ち直りつつあり、形勢が逆転しようとしていた。

『まだ…倒れるわけには…』

両手が無事だった変異種は、爪を伸ばして巨人化したエレンを切り裂こうとしていた

！

その瞬間！

「おっほっほっほっ！どこを見てるの!!お肉はこっちよ!!」

フローラは大声で変異種に呼び掛けた。

両腕を挽がれた変異種の右肩に乗っており、わざわざ脱ぎ捨てた兵服を握って振っていった！

視覚よりも聴覚が発達していた変異種は、その挑発に乗って右手を薙ぎ払った！
あらゆる物を切断する爪は、同族の巨人の首を刎ねた！

引つ掻くように薙ぎ払ったせいで鎖骨や左肩さえも綺麗に切断した！

「中々の威力ね…もしかして硬質化の皮膚すら貫通するかも…」

巨人を囿にして見事に逃げ切ったフローラは、「変異種の爪」に興味を持っていた。

女型の巨人が生成した結晶といい、あの変異種の爪といい、新たな物質が気になってきた。

「あの爪の素材がブレードの素材になったら…どれだけ楽になるのかしらね…」

もし、巨人が生成した物質で、立体機動装置が強化できるかもしれないと！

既に立体機動装置もアンカーも強化し尽してしまい、壁にぶつかっていた。

巨人の生成物で強化できれば、更に技術が発展すると考えてしまった。

だからこそ、判断に遅れた！

「え？どこに行く気!？」

斬り掛かろうとしたミカサは、変異種の動きに対応できず攻撃を中止して離脱した。巨人は何かを思い出したように瓦礫になった民家に向かっていく。

『させるか!!』

その魂胆を理解したエレンは、怒りでむりやり巨体を操作して追いかけた！
変異種は、痛みで目覚めたパウエル達の母親の悲鳴を聴いて捕食行動を凶っていた！

「いやあああああ！」

あれほど動かなかった瓦礫を巨人は容易く退かして、女性を右手で鷲掴みにした！
捕食しようとした巨人をエレンは背後から抱擁して持ち上げた！
フローラとミカサは、右手の関節を全て切断して女性を救出する！

それを見届けたエレンは、しつかりとホールドしながら自身の身体を後方に倒した！

『許さねえええええ!!』

踵を上げて爪先立ちになり、ブリッジ体勢に移行し、背中は綺麗に反った！

もしこの場にアニ・レオンハートが居たら「バックドロップ」について熱く語ってくれただろう。

技名も知らないし、対人どころかやった事も無いエレンであったが、無意識にやった。ただ巨人を殺す…その為に！

『さっさと死ねええええ!!』

大きな弧を描いて6m級の変異種は成す術なくその巨体を地面に激突した！

巨体の重量と激突した衝撃を首だけでダメージを逃せるはずもなく派手に首が折れた！

エレンの対人格闘成績は、ミカサに次ぐ2位！受け身が取れない無垢の巨人に勝ち目は無かった。

大きくうなじを損傷した巨人は、カラネス区という『リング』どころかこの世から退場した！

『これで…休める…』

勝者は、エレン・イエーガー！

決定打は、バックドロップ！

最初で最後の「カラネス区のリング」での勝者は彼に決まった！

セコンドが選手と最初に交戦していたり、選手が乱入していたが何でもありの無差別格闘技！

そもそもレフェリーが居ないのでルールなんて最初から関係なかった！

勝者のエレンの巨人がリングの床に倒れた！

そして最後まで立っていたフローラとミカサは勝者として讃えられる事になるだろう。

「エレン!?!」

勝者になったフローラとミカサというセコンドは、必死にエレン選手の救出を行なった！

「フローラ！早く斬って!!」

「分かっているわよ!!」

怒りで興奮して黒色の肌になった巨体は文字通り火を噴き出しており、激しく燃えていた！

そのまま放置すれば、本体のエレン自身が焼き尽くされる危険があった。

火傷なんか気にすることもなく彼女たちは、うなじを刻んで必死の救出活動に当たっていた。

「熱い!!」

「川にぶち込んで冷やすわよ!」

見事に救出したエレンを2つの兵服で包み込んで、フローラとミカサは川に向かって進撃した！

それを少年と少女と、その母親が見守っていた。

更に5体目の変異種を討伐した調査兵団の精鋭たちが合流し、事態の收拾を図った。こうしてカラネス区の事件は幕を閉じた！

壁外調査に掛かった費用と損害の痛手は、調査兵団の支持母体を失墜させるには充分だった。

調査兵団を敵視する王政府としては朗報であったが、他人事で済まなかった。

それ以上に憲兵団と王政府の権威が失墜したからだ。

よりによって中央第一憲兵団が、巨人が壁内に侵入してきたのを主要都市で宣伝！

配下の憲兵団の高官は、住民を見捨てて自身の財産を掻き集めて王都に避難した！

王都ミットラスは大混乱に陥り、見捨てられたアウリール卿は激怒！

フリッツ王は、その報告を兵士から聞いて、呆れたのか声も出さず寝室に行ったほどである。

「ケニー！あの役立たず共を肅正してこい！手配書の首をここに全員持ってくるんだ！

「良いな！」

「了解、さくつとやってきますよ……」

王政の行政トップ、アウリール卿は王都に帰還してすぐに手配書を作成し肅正の指令を出した！

対人立体機動部隊のケニー・アッカーマンは、部下を率いて愚か者たちを肅正していった。

更に王政民を落ち着かせるために、大総統は全兵団を駆使して壁内の調査に当たらせた。

その影響で、エルヴィン団長含む責任者が王都に収集されるのは一時保留とした。

エレンの引き渡しは、壁内の安全が確認するまで調査兵団が引き続き預かる事となる。

第57回壁外調査が実施された日の晩、カラネス区の兵舎でフローラは髪を梳かしていた。

厳密に言うとう髪をミーナに梳かされていた。

「フローラ！髪は大丈夫そうよ！ちよつと毛が痛んだだけで済んでる！」
「そう、それならいいけど…」

巨人の胃液を浴びたせいで相当酷くなっていると予測したフローラ。
その予想は、彼女の声と“声”を聴いて杞憂だと分かつて安心した。

「じゃあ、約束通り一緒に寝よ！」
「そうしましょう」

フローラは、ミーナの部屋で就寝する事にして彼女のベットのの中に入っていった。
持ち込んだ枕を頭の下に敷いて掛け布団を被った。
ミーナも掛け布団に潜るようにしてフローラの横に頭を出して笑った。

「フローラ…あつたかい…！」
「まだ寝たばかりよ？」

「だって、一緒に寝れるんだもん！心も身体も温かいよ」
「じゃあわたたくしも…」

フローラはミーナをゆっくりと抱きしめた。

「フローラ!？」

「これでじっくり温もりを感じられるわ…どうしたの?」

「もつと抱き締めて!」

激戦を生き抜いた兵士が乙女になって甘えてきた。

フローラは彼女の言いなりになって強めに抱き締めて甘えさせた。

その後、ガールズトークをした後、ミーナは安心したのか眠ってしまった。

「ミーナ?寝ちゃったか…」

フローラは、本日起こった出来事を記した調査日誌を手に取りとうとした。

…が、暗すぎるし、なによりがっしりとミーナに拘束されて身動きが取れなかった。

隣人の寝息を聴きながら久しぶりの安眠を期待して瞼を閉じた。

「おやすみミーナ」

フローラは、そう呟いて第57回壁外調査の疲れからか、そのまま熟睡した。

『カラネス区というリングのレフェリーは、王政府の重臣ピエール・ジヨナ・アウリール伯爵』

と、調査日誌に書くのを忘れて…その後にも思い出す事もなく、ついには書かれる事は無かった。

4章 死に物狂いの努力と代償で、絶望的な状況が好転している
と錯覚していた時代

4 4 話 翌日を迎えられる喜び

フローラ・エリクシアは、液体の感触で目覚めた。

まだ出血大サービスの日ではないし、だからといってオネシヨでもない。
敷布団に無意識で垂らしていたと思われる唾液で顔を濡しただけだった。

「しまったわ…」

自分の布団ならともかく、親友のミーナ・カロライナの布団で涎を垂らしてしまった。
どう言い訳しようかと、親友の寝顔を見ると普通に口を開けて寝ていた。

思った以上に涎で敷布団を湿らしており、なんとも言えない気持ちになった。

「まあいいわ…」

空き時間に謝れば良いと思ったフローラは身体を動かさそうとしたが無理だった。トロスト区奪還作戦の翌日のように、疲労で身体が動かないと思った彼女は二度寝した。

親友も精神的ストレスでああなったのだろうと、特に気にする事はしなかった。その結果、寝ぼけたミーナに全身を涎塗れにされるとは知らずに。

調査兵団の団長エルヴィン・スミスは、昨日の損害を把握しようとして情報を分析していた。

長距離索敵陣形の右翼を担っていた第二分隊が2名を残して全滅。

第三分隊長のエリック・マンシユタインを筆頭とするベテラン兵の戦死。

一か月前に入団した104期調査兵23名のうち、6名が行方不明となっている。

「きついな…」

調査兵団の歴史は、敗北の繰り返しであった。

それでも技術や技能、巨人への知識を発展させてここまで組織を存続してきた。

1日で戦力の3割を損失して、組織として壊滅的打撃を受けたのも過去の事例ではマシの方だ。

幸いにも衛生兵と馬医者は全員無事であり、組織としては辛うじて存続できる状況である。

「団長！エルヴィン団長！」

ドアのノック音と共に副官の声が聴こえた。

どうせ自分が一番、頭を悩ましている問題の事であろう。

今のうちにため息を吐きながら、服装と髪を整えた。

そしてドアノブを開くと、悲痛な顔をした副官が直立不動で待機していた。

「何があつた？」

「速やかに巨人を討伐しろと、カラネス区長が取り巻きを率いて抗議しています！」

「…いかがなさいますか？」

「本格的な討伐作戦は後日にと、至急、正門に2名、壁上に3名を増員すると伝えてくれ」

昨日のカラネス区における巨人襲来事件による民間人の死者はゼロとされている。

問題なのは、カラネス区を守護していた駐屯兵団第三師団が全滅して戦力が激減していた。

その為、壊滅した調査兵団がカラネス区を防衛する責務をむりやり押し付けられた形となった。

「ですが……」

「嘘でもいいからフローラ・エリクシアが増援の要員に入っているとでも言っておけ！」
「了解しました！」

今期に入団したフローラ・エリクシアは、調査兵団史上で最悪の問題児である。

入団して1か月ほどなのに、両手で数えきれないほどの問題を引き起こしていた。

特に王政府のアウリール大臣と中央第一憲兵団とレイス家といった有力貴族達を巻き込んだ事件。

それを聞いた時にエルヴィンは、卒倒するかと思うほど、ショックを受けたのは記憶

に新しい。

「何故、こんな馬鹿げた事をやろうとした？」

「自分専用の馬を調達する為の資金調達……そして貴族を見返してやりたいからですわ！」

部下からその情報を知らされてフローラを緊急招集して問い詰めた！

カラネス区壁外で10体の巨人を単独で討伐する件について、彼女は自信満々で返答してみせた。

エルヴィンは叱責し、調査兵団の装備品の使用を禁止にすれば計画を阻止できると……思っていた。

まさかピクシス司令の支援を受けて独自にガスボンベと刃を調達するとは予想できなかった。

「色々とやらかしてくれたが……今回は役に立ったな」

副官が急ぎ足で廊下を渡っていく後ろ姿を見ながらエルヴィンは呟いた。

カラネス区壁外で、14体の巨人を単独で討伐したフローラの雄姿はカラネス区長も目撃していた。

百聞は一見に如かずとは良く言ったものだ。

増員にフローラの名を出すだけで、区長とその取り巻きの苦言を黙らせる威力がある。

もちろん、絶対にやらかすのは確定しているので、彼女を壁の守りにする気は一切なかったが！

太陽が壁内全てを照らすように真上に登った頃、無駄に外観だけは豪華な駐屯兵団支部の建物。

その4階の個室でカラネス区正門の守備隊長、ハルトマン・ロボフは執務を行なっていた。

いや元守備隊の隊長であった。

何故なら部下は昨日、全滅したからだ。

「退役届の封筒は、1113通か…多いな」

50mの壁を登って壁内を襲撃した6m級の巨人は、正門と壁上に展開していた兵士を全滅させた。

壁上や正門は、逃げられる場所もスペースも限られるうえに、兵士は交戦に不慣れだった。

更になじを攻撃しても、硬質化しているせいで倒せないという初見殺しで歯が立たなかった。

結果、正門の守備隊や固定砲整備班も含め、死者は97名、行方不明者67名であった。

追い込みをかけるように、1113名が巨人の恐怖に負けて退役届を出していた。

「昨日の事件は、直接交戦していない兵士ほど恐怖が感染し、集団発生したのでしょうか」

ロボフ隊長の副官は、あの地獄の中で生還した。

今思い返しても奇跡としか言いようが無かった。

「大丈夫か？」

「なんとかな…部下達は…どうなった？」

「見ての通りだ、ようやく今、生存者を発見したぐらいだ…」

「そうか…」

ロボフが目覚めた時には、全てが終わっており救護に駆け付けた調査兵に話しかけられた。

意識が朦朧としながらも、起こった出来事を報告しつつも辺りを見渡していた。

そこには、破壊された固定砲やブレード、血痕や内臓の欠片が附着した壁。

そしてなにより、1時間前には生きていた顔馴染みの兵士だった物が散散として転がっていた。

「おーい！生存者が2名居るぞ！！運ぶのに手をかしてくれ！」

「2名？」

ロボフ隊長は、その調査兵の一言で足元に副官が無傷で倒れているのを発見した。

フローラに裏拳でぶっ飛ばされて気絶した副官は、皮肉にもそれで巨人から生き延び

る事ができた。

優秀な副隊長が戦死しており、配下の部下も全滅し、生き残ったのは自分たちだけである。

「私は、退役届を出した彼らを責める事はできない」

ロボフは必死に部下達が交戦している時に固定砲に身を寄せて隠れていた。

勇敢な兵士は戦死して、死んでおくべき臆病者だけが生き残ってしまった。

なんとという不条理な世界であり、卑劣な自分のみが心配されているのだろうか。

あの時、どうすればよかったのか、彼は起床してからずっと悩み続けていた。

「心境をお察しします」

「とにかく、現時点で届けられた退役届は113通で良いのだな？」

「いえ、もう1通あります」

「ん？」

副官の言葉を聴いて、上官であるロボフは彼の顔を見た。

副官は顔を歪ましており必死に耐えていたが、たった今、感情が崩壊した。兵服の懐のポケットから折り畳まれた退役届を、作業机の上に置き声をあげて泣き出した。

優秀な彼は、一步間違っていたら戦死した恐怖と、巨人という具現化した【恐怖】に潰された。

「隊長…申し訳ありません…小官は、もう戦えません…小官は…私は…」

「生きたい!!もう巨人に逢いたくない!!私は逃げたいんです!もうやだ!!」

「あんなに訓練してきたのに!巨人には勝てなかった!みんな死んだ!このままだと私も死ぬ!」

「嫌だ!生きたい!死にたくない!!ロボフ隊長!!退役届114通を受理してください!」

副官は上官に謝罪した一言で、今まで感情を堪えてきた堤防が決壊し、感情が爆発した。

床に伏せて大声で泣き出した副官を呆然としてロボフは眺める事しかできなかった。

彼は、泣き喚く部下に励ましの一言も告げられなかった。

できるとすればー。

「分かった…上官と掛け合ってみる。絶対に承諾してもらおうさ」

「隊長…ありがとうございます」

「もういいだろう？今日は休め、昨日の疲れを癒してから再びここに来てくれ」

「申し訳ありません…失礼しました」

副官は頭を下げて、執務室から退室した。

「クソー！」

ロボフは、机にあった羽ペンを床に叩きつけた！

自分だって逃げ出したかった！すぐに隊長の役職から退きたかった！

それでも昨日の羞恥と隊長としての責務によってなんとか耐えていた。

そんな彼も、優秀で黙々と業務をこなす副官だった者が壊れたのを目撃してやけくそになった。

無駄に年を重ねたせいで、若者の様に感情を爆発する事もできず、退役届の山を見つ

めていた。

「ん？」

しばらく眺めていると、再びドアのノック音がした。

「入室を許可する！」

「失礼します！」

入室してきた兵士を見てロボフは驚愕した。

カラスス区壁外で巨人討伐のパフォーマンスをし、昨日に自分の喉元に刃を突き付けたきた…。

フローラ・エリクシアが気まずそうな顔をして、大きな肩掛けのバックを持っていた。

「なんで…ここに？」

「え…だって、昨日、ご迷惑をかけてしまい、その謝罪をしに参りました」

フローラは、本日の業務が取り消しになったのを良い事に自由行動をしていた。

まず朝食をした後、壊れた新型の装備をトロスト区の技術4班の所に事情を説明して提出した。

その後、店に寄り、自ら出費して製作し試食した『復興饅頭』を代金を支払って受け取った。

そして、迷惑を掛けた駐屯兵団第三師団の方々に謝罪しようとここまで来たのだ。

「あれ？」

兵団支部の建物に到着すると彼女は違和感を覚えた。

警備兵どころか、受付嬢すらおらず中は閑散としていた。

駐屯兵団の死者が100人以上居るとは知っていたが、文官すら居ないのは衝撃的だった。

ようやく通路で逢えた人物は、昨日、裏拳でぶっ飛ばした兵士であった。

「君のおかげで助かった…ありがとう…」

何故か、彼は怒るところか泣きながら感謝の一言を呟いて抱擁してきた。

地味にフローラは押し倒されてしまい、第三者から見れば誤解を生む状況ではあった。

とりあえず、彼の“声”を聴いて察した彼女は、深くは踏み込まず饅頭を渡して終わりにした。

ついでに彼からロボフ隊長の居場所を訊いて、その場所にやってきたのだ。

「何でそんな能天気なんだ……」

ロボフは、饅頭を差し出してきた女兵士に恐怖した。

昨日、第57回壁外調査で地獄を見てきたはずなのに呑気に差し入れできる元気があった。

それならまだいい、こいつは単独で巨人を二桁討伐できる化け物だった。

巨人の天敵が生き生きとした女兵士の皮を被っている感じがして、気分が悪くなった。

「よく同期から言われますね」

一方、頭エレン娘はいつもの事だと思つてスルーした。

彼女には絶望という感情が欠如しており、壁にぶつかつても進撃する性格である。

馬鹿にされようが、失望されようが飯食つて寝ればすぐに忘れる女だった。

今回もなんか呆れられているなーと他人事だ。

「あつ、よろしかつたら、この饅頭を兵団の皆さまに差し入れて頂けませんか？」
「饅頭？」

「はい、トロスト区防衛戦で戦死した兵士のご両親が作った饅頭ですわ！」

作業机に置かれた肩掛けカバンにずっしりと饅頭が梱包された箱が入っていた。

『復興饅頭』という表題、横にはワグナー製菓と書いてある。

この饅頭を差し入れてきたフローラは、謝罪以外の魂胆があった。

それは、ワグナー製菓の広報である。

「そうか…」

「そうです！」

フローラが初めて仲良くなった同期は、トーマスとミーナであった。

そのトーマス・ワグナーは、トロスト区防衛戦で戦死し、両親と歳が離れた弟が残された。

その両親が無力な自分たちがせめて何かできないかと模索していた。

元々、菓子店を経営していた彼らは、ワグナー製菓を設立して食で支援しようとした。そして頓挫した。

「三大欲求の1つ！食事で兵士や住民を盛り上げようと計画され、作られた饅頭です」

「そこまで言うなら美味しいのか？」

「はい、これを食べれば、巨人の恐怖に打ち勝ちます！試しに召しあがってください」

ただでさえ自信満々だった化け物が、ドヤア顔でいるのに腹が立ったロボフは饅頭を口にしました。

「旨いな……」

皮はもちもちで、餡子が舌で踊り、程よい甘みとスパイスの塩辛さが癖になりそうだった。

確かにストレスで胃痛と頭痛に悩まされていたが饅頭を口に行っている時は幸せであつた。

「隊長のお口に合つて安心しました」

「これなら落ち込んだ部下達や同僚の気分転換にはなるだろう」

ロボフ隊長が饅頭に満足して、部下に配布してくれると知つたフローラは微笑んだ。

もちろん、これが目的であつた。

当初の予定では、調査兵団の上官に振舞う予定だったが、こちらを優先しただけであつた。

そう、この饅頭を兵団の上官たちの印象に残す為に持参してきていた。

「もう1個だけ良いか？」

「はい、これで昨日、迷惑をかけた件について少しでも許していただけるなら…いくらでも」

「さすがに…そこまで食べる気はない」

「そうですか…中々注文できない饅頭なので…」

こんなに美味しい饅頭を作れるワグナー製菓が頓挫した理由。

それは、桁違いな材料の運送費のせいで加算された饅頭の値段である。

一時期のトロスト区の住民は、豆のスープにおが屑を加えた物が主食の有様だった。

そんな状況下で、内地に住む4人一家を5日分の食費の値段の饅頭など売れるわけなかった。

そこでフローラは逆転の発想をした。

「有名な店なのか？」

「いえ、知る人ぞ知る完全予約制の店です！」

庶民に饅頭が売れないなら、金持ちに大人買いしてもらえばいいと！

手始めに兵団上層部の胃袋を掴んで、100人単位で饅頭を発注させる事で値段を下げる事にした。

1個の饅頭と100個の饅頭の材料の運送費は、同じである。

つまり、まとめて饅頭を注文してくれば、1回の運送費とその饅頭の材料費+αで済む。

もちろん、露骨に配れば商売敵にバレる可能性があるし、庶民がそんな事できるわけなかった。

「だろうな…こんな旨い饅頭なんて…待て！なんでそんなに饅頭を購入できたんだ?!」
「戦死した兵士と同期でして、友人だった縁で安く購入できました」

いろんなトラブルを引き起こして上官に迷惑を掛けている自覚があるフローラ。

謝罪する際の手土産にお菓子を持参して頭を下げる事にした。

そうすれば怪しまれないし、兵団の上層部に接触できるからだ。

需要ができるまでフローラは自腹で饅頭を購入するしかないが、これも亡き親友と両親の為。

この饅頭がトロスト区の復興の代名詞になるまで奮闘するつもりだった。

「…ところで壁外の巨人討伐について何か聴いているか?」

「後日、調査兵団の精鋭部隊による巨人掃討作戦があると存じております」

「…君達に手を煩わせるのは心苦しいものではあるが…」
「どの道、壁外調査の脅威になる以上、討伐は免れないので」

いつの間にか、ロボフ隊長から愚痴や悩み相談役になってしまったフローラは困惑した。

まあ、これも野望の為…と思っていたら退役届けを提出した兵士のメンタルケアまでさせられた。

話し合った全員に抱擁して、兵団支部の建物から出た頃には夕焼けで大地が染まっていた。

「ライリー！ライリー！あっダメね…完全に怒ってる…」

相棒のライリーは放置されて怒り心頭に発しており乗馬できる状況ではなかった。

昨日の壁外調査で思う存分、自由に駆け巡れた分、本日の不自由さにご立腹であった。仕方なくフローラは後ろ蹴りを何度も回避しながら、落ち着くまで毛の手入れを行なった。

こうしてライリーが落ち着いたころには、夜の帳が降りており晩飯が喰えそうな

かった。

「しようがないわ…とことん付き合ってあげるわよ」

少し落ち着いたが、このまま厩舎に戻せば、明日は制御できないとフローラは理解していた。

そのせいで、とにかく走るのが大好きな彼女に思う存分走らせて満足させるしかないかった。

真夜中で月明りもない曇り空で走らせるのは彼女からしても中々ない機会ではあった。

もし、夜間に巨人との戦闘になっても対応できるようにするという名目で走らせた。

「ふふふ、…全く見えないわ」

馬は夜目が利くと習ったがその通りでライリーは平然と真夜中の平原を駆け回っていた。

人間の負の感情を聴くことができるフローラは、その特殊能力を活かしながら…。

活かす以前に人間が居ないせいで役に立つことは無かった。時折ランタンを照らして、地図で地理を確認し遭難しないようにするだけであった。

「トーマス…」

暗闇の中でフローラはトーマスの事を考えていた。

自己紹介と甘ったれた精神を叩き直された「通過儀礼」が行われた日から1週間後。彼はミーナと揃ってキース教官にボロクソに叱責されて落ち込んでいた。

「今よりも訓練成績を上げるのは、正直難しい気がするんだよな…」

兵士を諦めたくないトーマスは愚痴を溢していた。

「うん、全力で取り組んだ結果が今の成績なわけだし…フローラ、どうすればいい？」

突然、ミーナという少女に話を振られてフローラは困惑した。

記憶喪失から2年ほどしか経過しておらず、経験がないせいで何とも言えなかった。

「優秀な仲間を見習ってみればいいじゃないかしら？」

適当に返答するのが精一杯だった。

「仲間を見習う？…確かにみんなの長所を学べば、兵士として成長できるかも？」

「長所を学べば…それを意識して皆と交流すれば色々と学べそうだな」

なんか適当に発言したら、それを元に独自に解釈して次の目標を考えたトーマスとミーナ。

「よし、後でお互いの結果を話し合おう！フローラが言い出したんだし付き合ってくれよな」

「ええ、分かったわ！」

こうして1週間に1回、恒例となる報告会を3人で行なっていた。

訓練兵を卒業した以降、一切やっていない。

それどころじゃなかったし、トーマスは戦死してしまったから。ただ、その時の内容は、議事録のように調査手帳に記してあった。

「後で手帳を見直してみようかしらね…」

ここ最近、ミーナが壊れているのは、彼女と向き合って交流していないせいなのかもしれない。

そう思ったフローラは、ライリーを走らせながら回想をしていた。

その報告会が恒例となっているなーと3人が認識した頃。

「俺はあれからエレンとアルミンの2人と交流する機会が多くなったんだ」

「エレンの長所は、とにかく根性だな。絶対に諦めない不屈の意志がある奴だ。」

「アルミンの長所は、頭の良さと、負けん気の強さかな」

「身体能力の欠点を補うために陰ですごく努力している奴なんだ」

最初の報告会と比べて、すっかり自分の意見を述べるようになったトーマス。

「根性と負けん気か…訓練に対する姿勢とか考え方に長所があるのね」
「うん、そういう長所なら俺達も見習えそうだ…ミーナはどうだった？」

ミーナも前と比べてしつかりと分析できるようになった。
もはやただ流されるだけしかできない以前の彼女ではなかった。

「私はミカサとクリスタの2人と仲良くなれたかな」

「ミカサは、どんな状況でもエレン閥連を除けば、自分の感情を制御できるの」

「クリスタは、いつもまわりの状況をよく見てる。みんなの動きに気を配って…すごいよね」

「なるほど、ミカサの長所はともかく、クリスタなら見習えそうだな」

トーマスもミーナも仲良くなった同期たちの長所を少しでも真似しようとしている。
鎧の巨人を討伐するのを目標にしているフローラも、同期達の長所を取り入れる予定である。

「次はフローラの番ね」

「そうね、仲良くなったのはジャンとライナーとベルトルトね」

「ジャンは立体機動の動きがうまくて、憲兵団を目指している分、誰よりも動きが良いわ」

「ライナーは頼れる兄貴分ね、お節介に感じるけどそれだけ安心できる…そんな気がするわ」

「ベルトルトは、一見頼りにならない気がするけど、誰よりも強いわ」

「自分の意思是弱いけど、逆に言えば任務に私情を持ち込まずに淡々とこなせるって事だし」

フローラも仲良くなった同期たちの長所を述べた。

「なるほど、口が悪く横暴なジャンも良い所があるんだな」

「ちよつと、トーマス。ジャンが聴いたら怒り出すよ」

「大丈夫だミーナ。ここにはジャンが居ないからな」

2人が楽しそうに雑談していて、フローラは微笑ましく見ていた。

これが仲間であり同期であり戦友になっていくのだと。

「よし、今回の報告会は終わりだな。話を聴いて参考になったよ」

「私もみんなと仲良くなれて、自分の役に立ちそうな事をたくさん学べたかな」

初めて本来の目的であつた同期の長所を述べる事となつた報告会。

本当に些細な会話であつたが、ミーナもトーマスも一段と兵士になる覚悟を決めたようである。

「このまま続けければ、教官を見返してやれそうですね！」

「もう豚小屋に帰れなんて言わせないから!!」

ミーナは未だにキース教官に言われた事を引き摺っているようだった。

でも、この報告会を続けていけば教官を見返す日は来るだろう。

「ねえ、2人ともこれからジャンの所に行かない？」

「え?なんで?」

「3人で頭を下げて、ジャンから立体機動について学ぶのよ!」

「コニーは座学が壊滅的だけど、立体機動の成績が良いから成績上位……」
「つまり、皆が苦手な立体機動の技術を伸ばせば、きつと教官を見返せるわ！」

この後、フローラはミーナとトーマスを連れてジャンに逢いに行った。

1人なら断られるが3人で頼れば、きつと立体機動のコツを教えてもらえると。

最初は断っていたジャンであったが、最終的に折れて指導してもらえるようになった。

そして、今ではジャンよりも立体機動が旨くなつてみんなから頼られるように……。

「ライリー？どうしたの？満足した？」

いつの間にかライリーの動きが止まっており、自分の指示を待っている様であった。

「じゃあ、帰りましょう？明日をより良い形で迎えられるようにね」

フローラはライリーを誘導して厩舎へと向かっていく。

翌日を最高の環境で迎えられるように。

トーマスは一カ月前のトロスト区防衛戦で戦死して、明日を迎える事は絶対に無い。それだけではなかった。

昨日、戦死した調査兵団や駐屯兵団第三師団の兵士達も迎える事はできない。

「辛いわね…」

人生は有限。

兵士を続けていく以上、いつか戦死するだろうし、しなくても翌日を迎えられない日は来る。

だからこそ、フローラは毎日を大事にして、何があっても後悔しないようにしている。絶対に翌日を迎えられる保障なんて無いのだから。

だからフローラは、お別れをする時に抱擁する習慣を身に着けた。

その人を少しでも覚えていられるように…と。

「ミーナ、また報告会をやりましょうね…」

トロスト区防衛戦から一切報告会をしなくなり、1人にしてしまったミーナ。

親友の一人は戦死し、もう一人は憲兵団に所属して逢う機会がなくなった。

きつと、彼女は寂しくて自分の眷族のように振舞って、寄り添おうとしたのだろう。

だからこそ、以前のミーナを取り戻すためにも報告会を続けることをフローラは決意した！

そうこうしている内にウォール・ローゼとカラネス区を繋ぐ門の明かりが見えてきた。

それは、地平線から登ってきて翌日を実感させる太陽のようであった。

45話 クリスタとミーナの根性と執着心

第57回壁外調査から2日目、今回も新兵は任務を課せられず待機しろという命令だった。

入団してから一カ月で地獄を見た新兵に対する調査兵团なりの思いやりなのである。

…なんてフローラは樂觀視できなかつた。

「数日後に【第58回壁外調査】が控えているぞ…気を引き締めていけ」

食堂で、すれ違ったミケ分隊長の小声の囁きに思わずフローラは“声”を意識した。しかし彼は、部下達の事を考えて、悲觀的になつている感情しか読み取れなかつた。フローラの特異能力は、負の感情を“声”として聴けるだけで、心を読む能力ではない。

だからこそ、読心術の使い手だとかメンタルケアの達人と呼ばれるのは心外である。

「とりあえず、この様子だと前回みたいな規模じゃなさそうね」

すかさずフローラは、スケジュール手帳にさきほど聴いた予定を記した。

おそらくではあるが、壁外調査という名の巨人掃討作戦であると大体察した。

前回の壁外調査で、調査兵団の支援母体が失墜している名誉を挽回する為なのだろう。

…というのは建前で、王政が調査兵団の力を削ぐつもりで遠回しのやり方にしたかもしれない。

「考えても仕方がないか…」

とりあえず頭エレン娘は、思考を停止するより前に向かって進撃する。

ミケ分隊長が部下達の負傷の可能性について悲観的になっていた。

それで、リヴァイ班が大体エレンのせいで病院に入院しているのを思い出した！

「まず病院に面会の許可を取りますか！」

そう決意をしたフローラの行動は早かった！

朝食を取るのを忘れたまま、食堂から飛び出して病院へと向かっていった。

ミーナが自分を待っており、朝食を取るのを我慢していると知らずに…。

「……ね…カラネス区第三病院！」

トロスト区では兵団の関係者専用の診療所があつたが、カラネス区はそんなものはない。

そもそも兵士が負傷しないので、そんな診療所など建てる必要は無かつた。

民間人からすれば、自分たちを診てくれる可能性が低くなる兵士の入院は嫌がるものである。

人類最前線の街の役割がトロスト区からカラネス区に移行した現在ではそうも言つてられない。

とにかくフローラは表札で病院名を確認して、そのまま進もうとした。

「クリスタ！こつちに荷物をもってきてくれ！」

「はあ、はい！すぐに持つてきます！」

トロスト区で調査兵団が活動していた時は、診療所の手伝いをしていたクリスタ。どうやらここでも【女神】として振舞っている様である。

すっかり人気者になった彼女の姿を見たフローラは、無言で回れ右をして立ち去ろうとした。

「あつーフローラ！」

残念ながらクリスタに見つかってしまい、フローラは全速力で駆け出した！別にそういう活動は嫌いではないし、良い事である。

ただ、彼女は過労レベルで他人に尽くす為、自身が倒れるという本末転倒の性格だと知っていた。

医務室送りの常連だからこそ、彼女の狂気を見てられず手伝ってしまい、酷い目に遭うのだ。

「あつ…鎧の巨人…」

「なんですつてええええええ!？」

クリスタは、全速力で逃走したフローラを見て、蚊の羽音より小さな声で「鎧の巨人」と呟いた。

すると無駄に聴覚に優れる彼女は、踵を返して全力疾走で元凶に向かった!

「…ねえ、両親の仇の名を軽々しく発言しないでくださらない?」

「こうでもしないと来ないじゃない…」

フローラは、両親の仇の名を自分呼び寄せる餌に使われるのを忌み嫌っている。

同期や手当を受ける負傷者からは、良い子を演じているクリスタを「天使」だと比喻するが…。

フローラからすれば、「良い子の振りをした悪い子」という感覚でしかない。

「…。」

「分かったわよ…手伝えばいいんでしょう?」

「うん、人手が足りなくてね…」

カラネス区に巨人が襲撃してきた日、住民が避難しようとして負傷者が続出した。

一通り訓練しているおかげで、ドミノ倒しになったりコケて踏まれた人が居ないのが奇跡だった。

負傷者の発生を防ぐ事態は不可能で、膝を擦り剥いた人から屋根から落下して骨折した人も居る。

それでも、重傷者ではない以上、そこまで大した事ではないはずだった。

「クリスタ！俺を診てくれ！」

「何を言っていていやがる！俺が先だぞ！」

「一番怪我している私が先でしょ!?!」

クリスタの女神つぷりに癒される為に本来来るべきではない人が病院の前に来ていた。

医療崩壊させるつもりか、と思わずツツコミたくなるほど無駄に怪我人が居た。

要するにクリスタは、彼らを診るのが精一杯で荷物の運送ができないって事だ。

誰かの頼みならでできる範囲で、対応しようとして、結果的に身動きが取れなくなったようである。

「すみませんー！通ります！通りますっつて!!」

仕方なく集まってきた負傷者を退かしてフローラは人ごみの渦中から荷物を運び出した。

せめて自分みたいに立体機動の失敗で全身を地面に叩きつけられてから来て欲しい。内心ではそう思っていたが、調査兵団の兵士の印象を悪くしない様に笑顔を固定して歩いていた。

乙女たる者、自然な笑顔で男共を誘惑して…クリスタが人気のせいでフローラはスルーされた。

段々、収容所を建設してクリスタとこいつらをぶち込んだ方が良い気がしながらも荷物を運んだ。

「ありがとう…助かったよ」

「本当にこんな仕事を続けて大丈夫なの？」

「うん、みんなの笑顔が私にとっての特効薬だから…」

「思いつきり何度もセクハラされたんだけど…貴女、いつか無頼漢に襲われるわよ?」

堂々とフローラの尻や胸を触ってきたり、下ネタを連発する自称病人に通院が必要な負傷者!

本当に負傷者だったら、そんな余裕があるわけないだろう。

自分ですらセクハラされたのにあんなに可愛いクリスタがセクハラされない理由は無い。

かといって、ライナーやユミルに相談すれば、「クリスタ親衛隊」を結成して暴行を働かたろう。

フローラは、どうにかクリスタにこの仕事を辞めさせる為、高速で頭脳を働かしていた。

「大丈夫だよ!もしクリスタにそんな事したら私が止めて見せるからさ」

「じゃあ、なんでわたくしの時は止めてくれなかったのですか?」

「…仕方のない犠牲だった!」

「やだ、この病院。警備兵が警備兵として機能してないわ…」

病院の警備を担当している武装した女兵士は、フローラの事を知っていた。

だからこそ、セクハラされている現場を見て、あいつ終わったな…としか思わなかった。

職務怠慢過ぎて呆れたフローラは、気を取り直して患者の面会を取れるか確認に向かうとした。

「こんにちは」

「あっこんにちは、見舞いご苦労様です。奥の病室にどうぞ」

女兵士は、負傷兵の妻と娘に挨拶を返して病室へと口頭誘導していった。

浮かない顔をして女性と女の子は病室に向かって歩き出した。

「あの人たちは？」

「奥に居た兵士が居ただろう。彼の家族だよ…もう長くないかもしれないんだ…」

「そうですか…」

どうやらクリスタは、重傷者の看護もしていたようである。何かと気にかけていたのか、兵士の返答で顔を地面に向けていた。

「君の方が一番詳しいんじゃないかな？」

「えっ？」

「よく壁外からあの重傷者二人を帰還させたと感心するくらいだよ」

ここでフローラは、自分が指揮をしたカラネス区撤退作戦の事を思い出していた。

その作戦で帰還できたのは自分も含めて21名。重傷者は、エルドさんともう1人、黒髪の男。

「両腕がある黒髪の兵士さんですか？」

「ああ、そうだ」

「破傷風ですか？」

「察しが良いな…四肢が痺れる症状が出てるぞ」

「あつ…死ぬわね」

破傷風で苦しんだことがあるフローラは、すぐにその兵士がヤバいと分かった。

エルドさんには、破傷風にならないように工夫していたが、それ以外は無視した。

衛生兵が居るんだし、最低限の治療を…した気がしないまま出発した。

怪我の詳細は分からないが泥まみれで不衛生だった彼は、おそらく…。

「フローラ！なんでそんな事を言うの!?!」

「実際に発症したからこそ分かるのよ!」

その一言でクリスタは黙り込んだ。

医務室常連のフローラは、色んな怪我や病気を経験した。

お陰様で、負傷した訓練兵を診る医師や衛生兵の経験値稼ぎが捗った。

トロスト区戦で負傷した兵士たちに的確な医療をできたのは彼らのおかげという噂がある。

今度、本が出版されるが、表題は『三桁も医務室送りされた女から学んだ30個の医療対応』。

つまりフローラのせいで、的確な医療体制や負傷兵の運搬など役立つ事が…経験で得られていた。

「今の状況じゃ治療がね…」

女兵士は肩を竦めて諦めた表情で発言した。

クリスタは諦められない表情で喰い付こうとしたがフローラは手で制止するしかできない。

「あの…お父さんは助からないの？」

さきほど母親から水をもつてくるように指示された少女は、兵士の元に向かっていった。

そこで自分の父親が助からないと知って思わず質問した。

誰も答えてくれないので、それが事実だと分かってしまった。

「だ、大丈夫だよ…お母さんには内緒にするから…悲しむから…」

そう告げて水を貰いに走り出した。

「待つて…あつ…!」

手を伸ばしたクリスタであつたが、どうする事もできなかった。

「フローラ…私、あの子の事が気になるよ。だつて今にも泣きそうな顔をしていた…」

「可哀そうだけど仕方がないわ。父親が調査兵団の兵士である以上、覚悟はしてもらわないと…」

「でも…私、あの子に何かしてあげたい」

それでも彼女は何かをしてあげたかった。

それが無駄になろうとも偽善であつても、少女の支えになつてあげたかった。

「私…しばらくここに通つていいですか?あの子の事、励ましてあげたいんです」
「構わないけど、本来の職務に支障が出ない程度にしておくんだよ」

これで、兵士が死ぬか峠を越すまでクリスタはこの病院に通い続けるだろう。

幸いにも特に命令を下されていないので、当分はここに通う事ができる。しかし、ここに来る以上、自称負傷者たちも含めてこの手伝いもするのは分かる。すぐに破綻すると分かっているがらフローラは無言を貫いた。

「よおフローラ！元氣そうだな！」

「それはこっちの台詞では？」

「こまけえ事を気にするな！」

オルオは、フローラが見舞いに来たのは驚いたがその表情を見せない様に誤魔化した。

その感情を“声”として聴いたフローラもあえて触れることはしなかった。

「症状はどんな感じですか？」

「もうすぐ退院できるぞ…さすがに訓練しないと現役時代に戻れんがな…」

「リヴァイ兵士長に次ぐ実力者のオルオさんならすぐ追い付けますよ」

「さすがにミケ分隊長の方がまだ強いと思うがな…」

気を遣ってお世辞を述べたフローラに感謝しつつもオルオはベッドの上で寝返りをした。

彼は自分よりエルドやペトラ、なによりリヴァイ兵長の事が心配だった。

「兵長は何か言ってたか？」

「それはご自分で確認された方がよろしいかと…」

実際、兵士長に遭遇していない以上、フローラは答えようが無かった。

うまくはぐらかしてオルオさんに確認してもらう為に、彼女はあえて受け流した。

「…ペトラはどうだった？」

「打撲と腕の負傷だったそうですよ。脳震盪の可能性もあるので暫く入院されるそうですか…」

「そうか…」

女型の巨人にペトラが踏みつぶされそうになった時、オルオは叫ぶ事しかできなかった。

フローラのおかげで、危機を回避したもののこのままだと彼女を護れない。

同期であり大切な人であるからこそ、彼は必死に今まで努力してきた。

それでもダメだった。

だから更に努力する必要がある。

「フローラ、俺様が復帰したら訓練に付き合ってくれ」

「それはペトラさんや兵士長に内緒にするんですか？」

「無論だ！俺はまだ成長途中だからな」

決してオルオは弱いからと告げない。

それを認めれば、自分のアイデンティティを全て否定することになるから。

ペトラを護れる男が弱さを見せるわけにはいかなかった。

「あと、エルドさんは絶対安静で面会できませんでした」

「危篤か？」

「いえ、むしろもう一人の重傷者の方がまずいみたいですわ」

「喜べんな…」

オルオは拳を握り締めた。

自分にもつと力があれば、リヴァイ兵長の期待に応えられたはずである。

今まで巨人討伐数だけを狙って競っていたが、エルドの言う通り、それだけは駄目だった。

彼を見返して、初戦の失態を二度と彼の口に出させない様に努力するつもりだった。

「…そういうえばエレンはどうした？」

「意識がはつきり覚醒しないようで、例の場所で安静に…」

「そうか、ありがとう」

フローラは周りの“声”を聴いて聞き耳を立てている人が居ないのを確認して発言した。

王政府などのスパイが隣室に居る可能性がある以上、軽はずみな発言はできなかつた。

オルオも発言した後に後悔してしまい、察して発言したフロローラに感謝した。

「それではまた生きてお会いしましょう」

「ああ、被害者3人組を結集して彼女に心配される加害者に愚痴つてやるさ」

手を振って退室したフロローラを見届けた後、オルオは掛け布団を引つpegした。そこにあつたのは、彼の家族からの励ましの手紙があつた。

両親の綺麗な字から末っ子の汚い字まで様々な物である。

大口叩いて無様な姿で帰ってきた自分を責めずに帰還をよろこんでくれた家族。

「お兄ちゃん…もつと頑張るからな！」

その家族をもう1名、いやそれ以上増やす予定のオルオ。

まずは休養が必要と感じたので手紙を近くにあつた机の上に置いて再び寝た。

自分に向けた数少ないペトラの笑顔を思い浮かべながら夢を見ていく…。

「おっ！フローラじゃねえか！」

「ライナー！ジャンにコニー、アルミンまでどうしたの？」

フローラは帰り道で、同期達と遭遇した。

「フローラ！僕も居るよ！」

「ベルトルトまで……」

ついでになんか民家の壁に擬態するかのようにつんでいたベルトルトも居た。

「これから訓練に向かうつもりなんだが、フローラも付き合ってくれ」

「別に構いませんけど、ライリーも連れてきたいので待っていてくれませんか？」

「ライリーってあの馬か……」

ライナーは、ライリーと呼ばれたフローラの専用馬に追いかけて回された記憶が蘇った。

「本当に連れて来るのか…?」

「4時間以上、走らせないと攻撃してくる気性が荒い馬ですので…」

「よく、そんな馬に乗れるな…」

フローラとライナーのやり取りを聞いたコニーは思わず本音を口にした。

相棒を馬鹿にされたのにフローラが激昂しないのはそう感じてもし方無いと自覚していたからだ。

『『ライリー』か、ライナーを意識して名付けたの?』

「おつ、もしかしてだけど!もしかしてだけど!」

アルミンの純粋な疑問にそれに乗ったジャンがフローラを煽った。

「ええっ?!?フ、フローラ!ライナーの事が好きなの!?!」

今まで空気だったベルトルトがフローラの双肩を掴み何度も揺さぶった。

いつもとは違う彼の行動に誰もが驚いた。

まるで彼が好意を抱いているアニが異性と仲良くしてきたと知って動揺しているかのように。

「嫌いか好きかと言われたら好きよ!」

「駄目だよ!ライナーは…戦士候補生から…」

ここでベルトルトは、背後からの冷たい視線を感じて彼女の肩から手を離した。

「戦士候補生?」

「…えーっと、訓練兵時代からライナーはクリスタが大好きで…」

「そのクリスタが馬に名付けたのよ…」

彼の慌てぶりに何事かと思ったが、クリスタの事かと思った。

ライナーどころか、同期達から女神として人気者の彼女。

ミカサですら彼女の気遣いに素直に関心しているほどである。

「ライリー…勇敢か、確かに良い名前かもしれないね」

アルミンは素直にクリスタのネーミングセンスを褒めた。

「つまりクリスタは、ライナーを馬と思っているんだな」

ジャンはライナーの顔を見ながら煽るように発言した。

「馬面野郎は、ついに馬の知能未満になったか…」

ライナーは呆れたように右腕の肘をジャンに軽く当てて牽制した。

「マジかよ！成長するどころか知能が退化するってすげえなジャン！」

ライナーの発言を聴いてそのままの意味で受け取ったコニーは素直にジャンを褒めていた。

もちろん、ジャンは普通に馬鹿にされるより腹が立つて握り拳が震えている。

「ライリーをライナーって呼んじゃう時がよくあるのよね…」

これはジャンがコニーを殴るな…と思いつながら他人事のように話すフローラ。
一通りの発言をしたら、風以外の音が聴こえなくなった。

「…とところで何の訓練をするの？」

「巨人との戦闘に関する訓練だ…トロスト区戦や壁外調査で嫌ほど必要だと分かったからな」

ライナーはフローラの質問に即答した。

ここに居る5人は、巨人との戦闘で自身が力不足だと実感した。

アルミン以外は、立体機動の成績が良かったが実戦では、あまり役に立たなかった。

巨人の動きを想定して立体機動で動く技能は、経験しないと分からない。

だが、実際に巨人の前で対峙すると学ぶ前に戦死する可能性が高い。

「巨人との戦闘経験があるお前だけが頼りなんだ…初見で攻撃を回避できんからな…」

かつてフローラに立体機動を教えたジャンは、今では彼女に教えてもらう立場になった。

誰もが巨人に喰われて死にたくなかった。

しかし兵士で居る以上、巨人との戦闘は避けては通れない。

50mの壁を平気で乗り越えてくる巨人が居る以上、憲兵ですら交戦する可能性がある時代。

内地に行けば優雅な生活を送れると思っていた過去の自分を自嘲するほどに。

「お願いだ！経験した全ての事をオレたちに教えてくれ！」

ジャンは生まれて初めて両親以外に頭を下げて教えを請いた。

誰もが横暴で偉そうだった彼が成長したと実感できる出来事である。

フローラは、すぐに調査手帳を取り出してこの事を簡潔に記した。

そうとは知らずに、ジャンは返答があるまで頭を下げていた。

「良いわよ！じゃあライリーを連れだしたら訓練所に向かいましょう」

フローラは同期たちに巨人との戦闘で得た経験や知識を伝授する事にした。

大切な同期が、巨人の知識がなかったせいで殺されるほど悲しいものは無い。

トーマスもナツクもミリウスもハンナもフランツも、巨人を内心で過小評価していたから死んだ。

肉体が大きい分、動きが鈍いとか、巨体では小人など感知できるわけないと。

そんな過ちを繰り返すのを看過できるわけなかった。

「まさか医務室送り常連だった奴がここまで頼りになるとは思わなかったぜ…」

「コニー、あいつは空間認識能力を鍛える為に、わざと無理な立体機動をしたそうぞ」

「マジかよ…じゃあ…」

「ああ、おそらく立体機動に詳しいのはあいつだ」

コニーは訓練兵時代のフローラを思い出していた。

いつも医務室送りされているイメージがあつたが、訓練だからこそ無理をしていたというのだ。

ならば…。

「フローラ先生！いくらでもしごいて良いから、正式な一人前の兵士にしてくれ」

「…それで思い出したんだけど、ライナーが欲しがっていた『兵士心得帳』を入手したわ」
「ありがとうな！お代は…」

「プレゼントよ！だからそんなに気にしなくて良いわ！」

ライナーはフローラに軽口を叩きながら厩舎に向かつていった。

その後ろ姿を見てベルトルトは溜息を吐いた。

こうして厩舎に着いたフローラ御一行様。

だが、彼らは想像だにしていなかった事件が発生した！

「ライリー！ライリー！止まってえええええ！！」

興奮した馬のライリーがライナーを追いかけた！

まるで鞍に乗せてやっている主人の不？戴天の仇と言わんばかりに殺意剥き出しで
追撃する！

たまたらずライナーは逃げ出してフローラはライリーの暴走を抑えようと奮闘する。

「うおおおおおい!?早くなんとかしろ!」

何の恨みも買ったつもりはないと自覚している【兵士のライナー】は必死に逃げた。

「ライナー!ライナー!止まってええええ!!」

「俺が止まってどうするんだフローラああああ!」

「間違えたああああ!」

名前が紛らわしいせいでフローラは何度もライリーとライナーの名前を間違える羽目になった。

「俺が何をやらかしたっていうんだああああ!!」

「実感すらないの…か」

愚痴を溢す同胞にベルトルトは頭を抱える羽目になった。

こうしてライナーは、馬のライリーに更なるトラウマを植え付けられた。

それでも訓練の結果、全員が兵士として更に成長したのを実感して口角をつり上げようとした。

両耳を伏せて睨めつけている馬の視線のせいで、ライナーは笑う事は出来なかった。それを他人事のように感じていたフローラも、その日の晩、同じ視線を感じる事となった。

「ミーナ？」

「なーに？」

「怒ってる？」

「怒ってない!!」

親友のミーナ・カロライナが過去最悪で不機嫌になっておりフローラは対応に悪戦苦闘した。

口頭で説得できず、病院でセクハラされた以上に身体を触れられた。

それで満足できなかったのか、そのままミーナの寝室に連行されてしまった。

「わたくし、まだ風呂に入っていないんだけど…」

「知ってる」

「訓練帰りで体臭が気になっているんだけど…」

「知ってる」

「せめて香水を…」

「駄目に決まっているでしょ!!」

ミーナは、親友の困惑する顔を見てほくそ笑んだ！

言葉で理解できないなら身をもって尊厳破壊させて反省させるつもりだった。

兵服のジャケットと膝丈のブーツと固定ベルトを脱がした親友をベッドに押し倒した！

「次、私を無視したらもっと酷い尊厳破壊をしてやるんだから…!」

「分かったわ…!」

「じゃあ、素直に私の抱き枕になって!!」

「えっ!?!」

ミーナは、フローラの胴体に脚を通して蟹バサミにし両腕で抱き寄せた。

身長143cmのミーナに対して183cmのフローラ。
その頼もしい肉体を非力な肉体で拘束できる優越感と安心感。
そしてなによりー。

「嘘でしょ…?」

「残念でしたー！これが現実よー！」

珍しく弱気になる親友を征服するという快楽！

同性だからこそできる仕切りの低さを悪用して尊厳破壊をできる！

異性同士のセクハラは認知されているが、同性同士は理解すらされていない時代。
同性は友人以上の関係に発展しないと常識にされている時代。

その時代を悪用してミーナ・カロライナは、フローラを辱めようとしていた！

「ま、待つて！とりあえず深呼吸をしましょう！」

「いただきますー！」

「いやあああああああつ?!」

ミーナは、親友の汗臭い匂いと温もりを思う存分に味わった。

負の感情を“声”として聴けるせいでフローラは抵抗を諦めるしかなかった。逆に考えるんだ！

拘束されて体臭を嗅がれるだけで済んで終わったのは、不幸中の幸いだと！

1時間も待たずに満足し解放されても、ミーナから離れる事は出来ずに寝るしかできなかつた。

46話 技術の発展には犠牲が付き物

「うわっ…部屋が汚い。駄目だよフローラ！兵士としてゐる以上、整理整頓をしなきゃ！」

ミーナはフローラの部屋を訪れて部屋の汚さに驚愕した。

木箱や梱包材が部屋の片隅に転がっており、大量の書類が紐で縛られて放置されている。

作業机の上に黒鉛やパンの欠片が散らかっており、スケジュール表が細かく書き込まれていた。

そしてなにより、床が少し見える程度で色んな物が置かれていた。

「貴女に涎塗れにされるより綺麗だと思っただけだね…」

「話をはぐらかさない!!」

「はい、ごめんなさい…」

上下関係が見事に逆転したフローラ。

昨日の朝までは自分の眷族に見えたミーナが、自分の母親に見えてきた。

両親の記憶が鎧の巨人がウォール・マリアの扉を破った際の破片で潰された時しかない。

顔も姿も声も名前も覚えていない以上、リース会長から告げられた情報しか分からなかった。

実際、母親が居たらこんな叱責を受けるのかと、他人事だった。

「うーん、これは…」

駐屯兵团第一師団、工兵部、技巧科の技術4班の速達の書類が届いていた。

内容は暗号化していたが、『ブリッツシリーズ』の故障についての話だと分かった。相変わらず兵团上層部からの命令はなく、104期調査兵は独自の訓練をしている。そのおかげで、フローラは自由行動ができていた。

「また暗号文…!」

「ミーナ! だから横から見るのをやめてくれないかしら!」

「これのせいでフローラは…私から離れていくのね…!」

ミーナは、フローラが覗いていた書類を見て確信した!

これが親友を惑わして自分の元から去る元凶だと!

「何か勘違いしてない?」

「別に…!」

腕を組んでそっぽを向く親友の姿を見て口で説明しても納得できないとフローラは分かった。

だからといって、グリグリさんの事を放置する事はできず、彼の元に向かうつもりだった。

「どこに行くの?」

「専用装備を開発してくれる親切なおじさん達のところに行くのよ」

「私も行く」

「駄目よ」

「また私を置いていくの…?」

目が虚ろになって光が失われていく親友を見たフローラ。

ここで無視すれば、取返しが付かないと分かり彼女の顔を見て溜息を吐いた。

「分かったわ…他人に口外しないと約束すれば、連れて行ってあげるわ」

「うん、約束する!」

態度を一変して興味津々になった親友の姿を見て嬉しい反面、学習されてしまい困惑した。

意見を通すのに「私を置いていくの?」を連発してくると実感し、対策を早急に練る必要がある。

こうして、馬を並走させてウォール・ローゼの扉まで辿り着いたがそこで問題が発生した!

「お前は通す事ができん!」

「なんで!?!」

フローラは、駐屯兵団の見張りから顔パスで通してくれたが、ミーナは無理だった。何度もトロスト区とカラネス区を出入りしているフローラはともかく、他はそうもいかなかった。

狼狽えたミーナが涙目で親友を見る。

「ここを通行するにはサインだけで充分だったのでは？」

「事情が変わった！許可証か命令書が無ければここを通すわけにはいかない」

「そんなのおかしいよ！じゃあ何でフローラは顔パスで通れるの!？」

「だって、フローラだし…なあ？」

「ああ、フローラだから仕方がない」

見張りの兵士は交互に見合って同じ意見だと確認した。

毎日のようにウオール・ローゼ内の領土に飛び出していくフローラ。

それはこの門の名物であり、来ない日を巡って賭けを成立させるほどである。

ついでに、ここ守備隊と仲が良いおかげで、手続きが簡略されていた。

コミュニケーションの化け物はともかく、一般兵のミーナはこれ以上進む事はできな

かった。

「お願い通して!!」

「だからお前は駄目だ! 門前払いされた以上、正式な許可を上官からもらって来い!」
「色気や賄賂は俺達には通用しないからな!! しっかり頭を下げて来い!」

腐敗した憲兵団の兵士を文字通りこの世から一掃した者達だ、面構えが違う!
さすがに兵士から制止されれば、ミーナは諦めるしかなかった。

「この子の装備調達をしたくて、トロスト区に向かいたいですの」
「オイオイ、勘弁してくれ。これ以上、例外を作ったら俺達の首が危ないぞ…」

フローラの頼みでも兵士達は、ここを通すつもりは無かった。
そんな事を予想済みの彼女は、ある書簡を彼らに渡した。

「これだ。」

「第58回壁外調査を知らせる書簡ですわ!」

「…ホント、お前は痛い所を突くよな！」

「こうなる事を対策しないわけないでしょう？」

フローラが渡したのは、【第58回壁外調査】が6日後にある事を知らせる書簡である。

壁外調査が数日に迫ってきている時、調査兵は基本的に長期休暇を取らされる。

それは、他の兵団の兵士にも徹底しており、調査兵の行動を最優先にさせる権限がある。

つまり、壁外調査があるのだから、調査兵を通せよ…とフローラは遠回しに脅していた。

「分かったよ！お前も通って良いぞ！」

「ただし、これ以上、問題を起こすなよ！」

兵団一の問題児であるフローラに釘を刺して牽制した兵士達は、彼女達を見送った。

「ねえ…第58回壁外調査って何？」

一方、ミーナは壁外調査がすぐにある事に驚愕していた。

また、あの地獄の中に投入されると知って震えて手綱がうまく持てなかった。

「大丈夫よ、調査兵団の精鋭しか招集されていないからミーナには関係ない話よ！」

「でもフローラは招集されたんでしょ？」

「そうね」

もはや、調査兵団の古株よりも巨人と交戦してきたフローラ。

第58回壁外調査という名の巨人掃討作戦に駆り出されるのは必然であった。

身体能力自体は、コニー・スプリンガー未満の彼女であるが、誰も納得してくれなかった。

「フローラ…」

「何で悲しむのよ？ 巨人を駆逐してウォール・マリアを奪還する！ そう誓ったじゃないの」

「そうだけど…」

一か月前にトロスト区正門で壁上固定砲を整備していた彼女達。

固定砲整備4班の7名による「肉の誓い」は半ば呪いとなって生者を蝕んでいた。

志半ばで戦死したトーマス・ワグナーが幸せだったと実感できるほどの残酷な世界。

巨人が駆逐されるか戦死するまで戦い続けるしかない兵士になった以上、いつか終わりがあ

「フローラ、私はずっと貴女の傍に居たい…離れたくない!」

「だから、生き残るために装備を更新するのよ」

次々と現れる初見殺しの変異種!

爪を伸ばしてくる巨人が出現した以上、穴を掘る巨人や空飛ぶ巨人が出現してもおかしくない。

今までの常識に囚われていては、必ず対応しきれなくなる。

フローラ自身が、自分の身体能力がこれ以上伸びないと実感している以上!

技術4班の開発してくれる最新の装備だけが頼りであった。

「ミーナの装備も作ってもらおうわ」

「えっ？」

「なんで困惑してるのよ！わたくしと生き延びたかったら装備を更新しないと駄目よ！」

トーマスの死を引き摺っているフローラは、エレンに次いでミーナが心配であった。華奢の肉体の親友に装備している立体機動装置が合っていないのは明白である。

せめて彼女の狙撃能力が生きる装備品にしたい。

例えば、狩猟銃の弾丸をストックできる鞆にするなど…。

「フローラ…いろんな事してるのね…」

「生き残る為なら何でもやるわ！全ては鎧の巨人を討伐する…その日の為だね！」

フローラは手綱を強く握り締めて、鎧の巨人を思い浮かべて決意を再確認した。必ず鎧の巨人を討伐してみせると！

そして自分もミーナもエレンも、全員が笑顔になる世界を見届けてやると！

「見えてきたわ！あそこがトロスト区を繋ぐ門よ！」

雑談している内に門が見えてきた。

そこを通り抜ければ、技術4班が居る建物まで徒歩で辿り着ける！

「はい！退いて退いて！壁外調査に向かう調査兵のお通りよ！」

フローラは権力を象徴させる銀時計や印籠を振りかざすように壁外調査の書簡を掲げて通過した！

平伏まではしなかったが、ミーナの通過について止めるどころか咎める事すらできなかった。

壁外調査に向かう調査兵という権限をフル活用したし、その勢いで技術4班に逢いに行った！

「よお嬢ちゃん！今度は可愛い子ちゃんを連れてきたのか！」

グリズリー班長は、ミーナを見て白い歯を見せつける様に笑った。

ミーナからすれば、野蛮でぶっきらぼうな大男を見て親友の後ろに隠れるしかできなかった。

「男臭い、秘密の研究所にようこそ！」

「男臭いのは大体、班長のせいですけどね！」

「何か言ったか？」

「男臭いのは班長のせいですよ……」

「よし、あとで潰す！」

軽口を叩き合う技術4班を尻目に自分の専用装備を見ていた。

「嬢ちゃん！どこから説明すればいい？」

「まず左アンカーが破損した件について訊いておきたいですわ」

「説明するが……メモの準備はできたか？」

「もちろんですわ！」

グリズリー班長の説明を一言一句聞き逃さない様にフローラは真剣に聴いた。ブリッツハーケンという立体機動装置は、アンカーをしっかりと強化してあった。ただし、訓練兵が使う一式装置のアンカーを基準に強化をしていた。巻き取る速度や、衝突する衝撃などは考慮していなかった為、変形したという…。

一式装置のアンカー強度が100とするならば

ブリッツハーケンのアンカー強度は、185と…約1.8倍に強化されている

それはあくまで理論上であり、実戦では様々な条件が加わっているので実質1.3倍程度だった

「ついでに嬢ちゃんらの固定ベルトが切れたのも、立体機動に耐え切れなかったようだ」

「本当に頑丈ですね！」

「それは誉め言葉ですか？」

「…多分」

「せめて即答してくれませんか…」

全員が半ば呆れられながらも、固定ベルトについても説明してもらった。

固定ベルトは、その兵士専用の装備であり、身長が伸びる度に微調整する必要がある。ただし、装備品を変えても固定ベルトは変えない為、疲労に耐え切れず破断したという話だった。

「固定ベルトに関して研究は進んでいないのが現状だ！」

「兵士」とに調整されている上に、そもそも切れる前に引退しちゃうからな」

固定ベルトが切れるまでに兵士が戦死するか退役するか。

それくらい例がないという話なのだから前例などほとんど無いようだ。

固定ベルトを交換するのは、リヴァイ兵士長かミケ分隊長クラスだろう。改めて残酷な世界である。

とにかく新型にするより交換した方が安上がりなのは間違いないのはフローラも理解できた。

「そこで改良したのがブリッツⅡシリーズだ!!」

ブリッツメッサーⅡという刃

ブリッツシヤイダーⅡという鞆

ブリッツハーケンⅡという立体機動装置

「なにこれ…」

ミーナ・カロライナは、一切話についてこれず親友の三つ編みのおさげで遊ぶしかできなかつた。

「以前、言つてた専用装備の改良版よ！」

「でも壊れた装備とそんなに変わらないじゃない…」

「君の言う通り外観上には変化はない！だが性能は保証するぞ！」

「御託は良いから説明してくれませんか」

「せつかちだね…」

「戦わなければ生き残れない世界なので」

既に新型装備だからといって全てを信頼する事はしないフローラは説明を急がせた。

実戦で使用する以上、性能と変更点を把握したいからだ！

「一番の変更点は、ブリッツハーケンⅡだ！」

「ワイヤーを巻き取る速度は、一般兵が使う機動装置の2倍だ！」

「更にアンカー強度に至っては、2.3倍だ！」

「つまり更にアンカーが壊れやすいのね……」

フローラは、カタログスペックを聴いて辛辣な発言をした。

一般兵が使う立体機動装置の『ワイヤーの巻き取り速度』と『アンカー強度』を100とすると……

ブリッツハーケンは、巻き取り速度1.4倍、アンカー強度は1.8倍

ブリッツハーケンⅡは、巻き取り速度2.0倍、アンカー強度は2.3倍

並べただけでも、明らかにアンカー強度が釣り合っていないのが分かる。

ブリッツハーケンのアンカー強度が実質1.3倍だと判明して数値化すると……

1.3 / 1.8 でカタログと比較して、約0.72倍のスペックだと実戦で発覚したことになる。

そこで、2・3に実質の0・72倍を掛ければ、1・65…。

つまり、アンカー強度は大して変わっていないのが分かる。

新型の巻き取り速度が増加しているので、更に脆くなっているのは間違いないだろう。

「中々、アンカーの強度を強化するのはきついんだぞ」

「巻き取り速度は、もう少し落とすべきだったのでは？」

「実際にできたのがそれだからしょうがない」

射出装置にアンカーを収める以上、設計し直しても劇的に改善するのは不可能であった。

せいぜい、破損したアンカーを解析して、不足していた強度を補う程度しかできない。コストを度外視し、高級な素材をふんだんに使用した以上、このスペックで行くしかないかった。

所詮、試作品ということもある。

「鞘については、どうなりましたか？」

「内蔵されたボンベを試製高圧ボンベに変えてある」

「つまりガスの容量が増えたのですか？」

「それもあるが、高圧のガスを装填できる…つまりガス噴出も良くなったぞ」

グリズリー班長の話を聴いてフローラは、半信半疑であった。

確かにガスの容量が増加すればその分、長期に渡って活動できる。

逆に言えば、ガスの重量で身動きが取れなくなるという意味である。

これもカタログスペックの詐称であり、実戦では本当に出力が出るのか疑問であった。

基本的にこういうスペックは、安全な環境で身に付けもせずテストするからだ。

「なんだか浮かない顔をしてるな？」

「ガスの重量が気になってまして…」

「そこは、安心してくれ！更に軽量化してフル容量でも以前と変わらない重量になってるぞー！」

「つまり、鞘の強度も怪しいということですかね…」

「嬢ちゃん…なんか悲観的になってないか？」

グリズリー班長は、フロウラが悲観主義者になっているのに気になっていた。確かに新型装備が壊れたからといって、ここまで否定しなくていいと思っている。

「いつも悲劇は唐突に、そして畳みかけてくるので…最悪の想定をしておきたいのですわ」

左アンカーが破損して、すぐに固定ベルトが破断した彼女は、既に装備を過信していない。

新型装備のテスト要員になった以上、不測の事態への対処できるようにあらゆる想定をした。

辛辣の言葉もスペックや努力だけを熱く語る技術4班に対する警鐘を鳴らす為だった。

「だって、死んでしまったらそこで終わりですもの…」

立体機動の訓練を繰り返してアンカーが射出できないほどトリガーを摩耗した時も

ある。

メンテナンス作業ミスで操作装置を故障させたジャンの例もある。信頼していた装備品が破損するリスクは低いが、それでも発生する。

そこで生き延びられるのかは、兵士の素質と経験と知識で左右されるものである。

「ああ、分かっているさ！だから日々、切磋琢磨して技術を磨いているんだぞ」

フローラの両肩に手を乗せてグリズリー班長は、安心させるように述べた。

技術班の班長として取捨選択を目標しているがそれでも現実という壁がある。

そもそも立体機動装置の存在自体が無理があり、苦勞している。

巨人を討伐するだけなら、もっと効率が良い方法がある！

「大体、王政が新技術を抑圧するのが原因なんだ!!」

「「「そうだ！そうだ!!」」」

「我々だって、巨人の頭を吹っ飛ばす銃とか、野砲を作りてえよお!!」

「「「そうだ！そうだ!!」」」

普通に考えて、大砲を強化したり飛び道具を強化するのが普通である。なのに、巨人を殲滅する気が無い王政府のせいでこんな歪な進化を遂げた装備品。

「そして、いざ自分達が危なくなったら死んでも守れという…ふざけた奴らだ！」

そんな王政もいざ、巨人が壁内に侵入すると発覚すると狼狽して大混乱した。

その結果、第58回壁外調査という、巨人掃討作戦をしなければならなくなった。

もちろん、散々虐めて来たせいで非効率な白兵戦で兵士が巨人と交戦しなければなら
ない！

「あの…グリグリさん？ブリッツメツサーIIの説明をしてくれませんか？」

「あー、済まん済まん、つい熱くなっちゃった」

ミーナはともかく、フローラも置いてきぼりになったので話を元に戻した。

「軽量化と刃の先端を工夫したくらいかな」

「消耗品ですものね…そこまで力を入れる必要はないですわ」

「それでも嬢ちゃんの報告から、良いデータが取れたぞ」

それを聴いてフローラは自分の戦闘データが活かされてるのを実感し、微笑んだ。

「以前、嬢ちゃんが持ち帰ってきた巨人の結晶体があっただろう?」

「ええ、6 m級の変異種が伸ばしてきた爪の一部でしたけど…」

50 mの壁を登ってきた6 m級の変異種。

その巨人は、鋭い爪を伸ばしてきたせいで、遥かに恐ろしく危険度が高い巨人であった。

なんとか討伐して、巨体は消滅したものの、何故か爪だけ残った。

フローラは、カラネス区の混乱に紛れてこっそり爪の一部を回収して技術班に提供した。

「実は、あの爪の成分分析をしていてな…もうすぐ結果が分かるはずだ」

「つまり爪と同じ物質を生成するのですか?」

「さすがに無理だな…ただ、変異種の硬化した皮膚を破れるヒントになるはずだ」

変異種が厄介なのは、皮膚を硬質化してうなじを初手で狙わせない事である。白色の器官を損傷しない限り、スナップブレードもメツサーシリーズも通用しない。そのせいで、平原で出現した時の絶望感は異常である。

「あの硬質化した皮膚を破れる刃なら……もつと犠牲者を減らせますわね」

「ああ、カラネス区の守備隊員も、うなじを狙っていたそうだからな」

「もし、貫通する刃が完成できれば彼らの犠牲も無駄にはならないだろう」

カラネス区の壁上や正門の守備兵は、隊長と副官の2名を残して全滅した。

だが彼らが時間を稼いでくれたおかげで第一分隊と第四分隊が現場に到着できた。

結果、巨人を全て掃討し、新たな技術発展のきっかけをもたらした。

彼らに犠牲に報いるなら、硬質化した皮膚を貫通できる刃の完成しかない。

「ねえ、フローラー！一体何の話をしているの？」

ミーナ・カロライナは、さきほどから置いてきぼりであり、理解できなかった。

そもそも硬質化や変異種といった単語すら分からなかった。

なのに親友と技術班のメンバーが楽しそうに会話していて疎外感を味わっていた。

「要約すると、装備品の改良型ができたことと、新型の刃が開発されているそうよ！」
「なるほど、つまり装備品が良くなってるって事ね！」

自分も専門的な知識をもっていないので、フローラは簡潔に一言で終わらせた。

ミーナの反応からとりあえず理解してくれたのでそれ以上、言及しなかった。

「ところで嬢ちゃんのお友達の装備の事なんだが…難しいな」

「やはりそうですか…」

「とりあえず狩猟銃の型は取ったから、鞘に装着できるように設計してみせるが…」

「弾薬のストックは難しそうですか？」

「そうだ、反乱に使われると王政に目を付けられるからな…」

王政のせいで、立体機動で巨人のうなじを刃で削ぐしか巨人戦闘技能が発展しなかった。

どちらかというと、壁内に閉じこもって人類を存続していく事に舵を取っている現政府。

空を飛ぶ気球など、便利になりそうな技術は全て握り潰されていった。

「ですって…」

「うん、分かってたよ…私じゃ役に立たないって」

親友が落ち込んでしまい、どうしようかと悩むフローラ。

技術4班もなんとかしてあげたい気持ちで一杯だった。

「とりあえず、予備のブリッツシリーズ一式をもっていくと良い」

「え？フローラと同じ装備なの？」

「さっき紹介していたのは、その装備の改良型だ」

「渡すのは、アンカーの強度を補強した旧品だが、軽い分、華奢な身体でも操作しやすいぞ」

新型のブリッツIIシリーズとブリッツシリーズの外観は大して変わっていない。

まるでお揃いの装備品であり、ミーナ目線で見れば親友と同じ装備にしか見えなかった

「持つて行って良いの？」

「ああいいぞ！」

「フローラ！やったよ！ついに私専用の装備が手に入った！」

ミーナは嬉しそうに装備を装着していた。

小型の装備品なので、身長143cmの彼女でも似合っている。

「さっそく訓練所で動作テストしてみましよう」

「うん！」

こうしてミーナとフローラは、技術4班を伴って訓練所に向かった。

「いいぞ！その調子だ！」

グリズリー班長の応援に答える様にミーナは立体機動を行なった。

最初は操作に手古摺ったミーナは、何度も練習しているうちに慣れていった。訓練兵時代に使用していた装備品より軽いおかげで、気持ちがいいくらに動きが鋭かった。

フローラは、訓練兵時代を思い出して目尻から涙が零れた。

応援していた技術4班もフローラとは違ったデータを測定できて満足である。

あつという間に日が暮れて、技術班と別れた時には21時であった。

「フローラ、今日はありがとう…」

「今日も…になるように努力するわ」

カラネス区に着く頃には翌日になるだろう。

それでも有意義な時間を過ごさせて2人は満足であった。

末永くこの時間が続くのを願っていたが、そもいかなないのがこの世界。

「フローラ、明日も一緒に練習していい？」

「別に構わないわ」

「ありがとう」

暗闇の平原で馬を並走させて走らせる2人。

馬のライリーは正直満足していなかったが、今回は見逃した。

上機嫌のフローラは、ライリーの好物の野菜をたくさん食べさせたのもある。

「ずっと一緒に居ようね！」

「もちろんよ！」

何か良い雰囲気を感じてしまい、ちよっかいを出しづらいのもあった。

とりあえず自身を無視しないようなので、ライリーは指示に従って走らせた。

この時、ライリーは、ミーナを無意識に乗馬を認めており、後に大きな意味を持つ事となる。

2人どころか、当の本人ですら気付かなかったが…。

これが、フローラとミーナの命運を分ける事になった。

47話 アニ・レオンハートの至福の一時

「アニ、パンドラの箱って知っているか？」

「パンドラという女が興味本位で箱を開いて災いを解き放って、残ったのが希望って話でしょ」

「実はその話に続きがある」

「続き?..」

アニ・レオンハートは、ただひたすらに戦士になる為に訓練をしていた。

同期のマルセル・ガリアードの話など、いつもなら軽く受け流すはずであった。

彼が深刻な顔をしており、ただ事じゃないと思ひ聞く耳を立てた。

「その希望が【最大の災い】っていう奴さ」

「どういう事?..」

「つまり、【まやかしの希望】は、人を絶望に突き落とす最高の災いって事だ」

「人は希望と信じて代償を払ってでも前進できるが、達成できなかった時:..」

「希望に近づいた分だけ、絶望が増すってわけだ」

何かと思つたら与太話をされてアニは馬鹿らしくなった。

そもそもパンドラの箱の話は、様々な解釈があり彼が発言したのは一説に過ぎない。

「聴いて損した…」

「無関係じゃないぞ…何せ俺達はパンドラの箱を開く事になるかもしれないから…」

「まだ戦士になっていないのに偉そうな口を利くな」

「すまない…」

アニは、偉そうにうんちくつぽい事を述べるマルセルが大つ嫌いだった！

それだけではない！

ドベのライナーも、空気のベルトルトも大つ嫌いである！

彼女はただ、父を…。

「ハアハア……夢か」

ア二は、いつもの寝室で目覚めた。

同室の女は既におらず、またしても寝坊したのは確実である。

体のだるさは残るが、すぐに着替えて膝丈のブーツを履いた。

そして何食わぬ顔をしてドアノブを掴んでゆつくりと扉を開いた。

「あらー？ やつと起きたの？ ゴメンねー寝顔が怖くて起こせなかったのー」

「お前は最近、たるみ過ぎだぞ……もつと早く寝ろよ」

階段を降りると同僚達が直立して上官の指示を待っている様である。

同室のヒッチ・ドリスト、堅物のマルロ・フロイデンベルクが彼らなりに氣遣つてくれた。

特に大切な日に病欠扱いにしてくれた彼女には頭が上がらない。

そう思っているも、自分のプライドと性格のせいで素直に感謝の一言を告げられなかった。

「もしかして怒ってる?」

「愛想が無い奴だな…」

未だに傷が癒えていない以上、そつとして欲しかった。

特にマルロ、お前は真面目過ぎてこつちまで迷惑していると告げたいくらいだった。

それでもアニは、気だるさを誤魔化さずヒツチの隣に整列した。

「ほつておいてやれよ。アニは、あのトロスト区出身なんだぞ」

「ああ、この支部で唯一の実戦経験者だったな」

「性格がああなつてもしょうがないか…」

銀髪が特徴のボリス・フォイルナーのフォローもあり、それ以上言及されなかった。

周りの空気しか読めないベルトルトは、彼の爪の垢を煎じて飲んで欲しいくらいに嬉しかった。

なんならベルトルトと入れ替えても良いくらいだ。

「…つて言つてもカラネス区の憲兵も巨人と交戦したらしいがな」

「調査兵団がたまたま居たおかげで、討伐できたって話だぞ」

「もしかしたら調査兵団が巨人が引き入れたかもしれない」

「約70年前のシガンシナ区で巨人信奉者が巨人を招き入れて大惨事になった事件みたいにか？」

「じゃないと、調査兵団にとって出来過ぎな事件だろう」

50mの壁を登りカラネス区に侵入してきた複数の巨人。

実は、アニもあの場に居て、その巨人達を目撃していた。

あの時に目撃した巨人は、まるで「顎の巨人」であった。

そのせいなのか、ここ最近、マルセルが出てくる夢を見るようになった。

巨人に喰われて死んだ彼が、生者の自分と呼んでいるようで、うんざりした。

「おい、私語を謹んでおけ……そろそろ時間だ」

真面目に懐中時計で時間を確認していたマル口の一言で全員が敬礼して待機した。

「……クソが!!」

ストヘス区憲兵支部所属のデニス・アイブリンガーは機嫌が悪かった。昨日の賭けで大損をしたのもあるが、指令書を見てイライラしていた。しかし、壁を背に整理している新兵達を見て名案を思い浮かべた！

『なんであんなに機嫌が悪い？賭けで負けたのか？』

マルロは、直属の上官の機嫌が悪い事に疑問に思っていた。いつもなら気だるさを隠さず、仕事を新兵に投げやりして個室で賭博に明け暮れているはずだ。

「よお！お前ら元気か？」

「はい！！」

「アニ・レオンハートは…まだ体調が悪いようだな」

珍しく新兵の体調に気を遣う上官を見て、翌日に槍でも降って来ないか心配する新兵一同。

珍しく真面目なマルロに仕事を全振りしてこない時点で、嫌な予感しかない。

「お前ら、数日後に第58回壁外調査があるって知ってるか？」

「…いえ、存じておりません」

「だろうな、俺も今知った」

アニは第58回壁外調査がある事に驚愕した。

前回の壁外調査で調査兵団が半壊しており、暫く身動きが取れないと思っていたからだ。

彼らが、人類活動領域の最東端のカラネス区を防衛しているというのもある。

「カラネス区で憲兵が逃げた事件があっただろう？」

「巨人と交戦して戦死した同僚を見て、憲兵全員が敵前逃亡した事件でしたね」

「それで、憲兵団の権威が失墜してな…王政が名誉挽回を目指しているそうだ」

マルロの模範的な回答を聴いて頷きながらデニス班長は、元凶のカラネス区の憲兵を恨んでいた。

憲兵になれば、巨人と交戦せずに済むと思っていたし、実際に今までそうであった。だが、ゲラルド大総統の印鑑が捺された指令書には、驚愕の命令が記されていた。

「突然で悪いが、お前達の中から3名を選抜して、第58回壁外調査に参加してもらう事となった」

「はあ!？」

とんでもない命令に思わずヒツチが声を漏らした。

ここに居る新兵全員がその命令を聞いて全身を硬直させた。

トロスト区の悲劇は、内地であるここでも良く話題になる話である。

つい先日もカラネス区の駐屯兵100名以上が戦死したとストヘス区の住民で話題になっている。

「壁から突出した城壁都市に憲兵が200名程度配備されているのは知ってるな？」

「存じております！」

「その城壁都市から各3名を選出して参加させて、民衆に憲兵団の勇敢さを示す作戦だ」

デニスも自分で何を言ってるか、よく分からなくなってきた。

盤石だったはずの王政が、壁内に巨人が侵入してきたという情報で崩壊しそうになっていた。

そこで、王政の重臣アウリール卿がゲラルド大統領に提言した案を元に作戦が立案された。

新聞記者や地元の有力者を集めて、カラネス区の壁上で見物するというまさに見世物のようだ。

「は、反対意見は出なかったんですか!？」

「ボリス：お前の言う通りだよ！実際に壁教のローデリヒ枢機卿が反対されたそうだ」「神聖な壁の上で下等人間如きが、居座って見下ろすのではないと：：さ」

「討伐作戦に参加する憲兵自体は反対されてなかったって事だ！諦めて命令に従え！」

デニスは腐りきっていたが、それでも訓練兵の中で上位成績10位内になったエリートである。

すぐに今期配属された新兵の顔を覚えたり、全員の性格や技能などを把握していた。既に1名参加させるのは確定しているが、まずは一番嫌がっている兵士を任命した

かった。

「おつとヒッチ？なんで視線を逸らした？」

「こちらの顔を舐め回すように拝見されていたからです」

「よし、ヒッチ・ドリス！根性を叩き直して成長してもらおう為にお前に参加してもらおうぞ！」

とりあえず、気に食わないヒッチを参加させる事にした。

：戦死すると思うが、死んでも痛くも痒くもないから厄介払いにちようど良いと思っただけだ。

「う、嘘でしょ!?!デニス班長！私は、か弱い乙女ですよ!?!」

「つーても、上位成績10位内に入ったんだらう？良かったじゃないか、鈍る前に参加できて！」

訓練兵の成績は、立体機動の試験で高成績を修めた者が優先的に上位になる。

ヒッチも憲兵である以上、上位成績が確定しているので並みの駐屯兵団兵士より戦え

るはずだ。

ちなみに新兵を選抜したのは、古株の兵士は勘が鈍って参戦できないという建前もあつた。

「な、なんで…」

ここでヒッチは不正で成績上位10位内になった事を後悔した。

「お前みたいな馬鹿女が憲兵になれるわけがない」と同期から告げられたが実際に不正していた。

さすがに並みの訓練兵より立体機動は上手だが15位の成績だった。

採点担当の教官をいろんな手で誘惑して、10位にしてみらつて晴れて憲兵になった。

巨人から逃げる為に憲兵になったのに、本末転倒になってしまい、彼女は頭を抱えた。

「デニス班長！さすがに彼女は向いていないのでは？」

「そんなに心配ならポリス、お前が全力で守ってやれ」

「えっ…？」

デニスは、口答えしてきたボリスも参加させる事に決めた。
これで参加メンバーが決定した。

「じゃあ、責任感が強いマルロに班長として頑張ってもらおうじゃないか」

「…はい」

「マルロ、2人を率いて第58回壁外調査に参加してくれるな？」

「…了解しました」

真面目だから逆らう事はないだろうという無駄に安心感がある男だった。

マルロを脅して、他の2人の承諾をする前に3人の参戦を決定させた。

彼の承諾で残りの2人も承諾させたと同意義にする為に！

任務を承諾した以上、敵前逃亡をしたら死罪か、監獄行きだから逃げる事はないだろう。

「…：そうそう、お前ら3人は、今日から壁外調査の日まで休暇を取らせる」

「ゆっくり身体を休めて、当日、カラネス区の正門に整列しろ」

「アニ・レオンハートは、本日は休暇、翌日から休日返上で働け！以上！」

「ハッ」

「俺は、さっそく3人の名前を記入して書簡を提出してくるので、後はよろしく！」

泣き出したヒツチを無視して、デニスは全速力で走って個室に籠り、書類を執筆した！

「しかし、王政の奴らもやべえ事を考えるもんだ……」

第58回壁外調査は、突出した城壁都市、28名の憲兵と王都の憲兵7名が参加する。もはや捨て駒にしか思えなかったが、調査兵団の精鋭部隊が参戦するので大丈夫であろう。

憲兵の雄姿を記者どもに魅せ付ける上で、できるだけ戦死させないはずだと考えていた。

わざわざ、各都市をモチーフにした色分けした腕章まで付けさせる徹底ぶりである。

「というか、調査兵団の参戦兵力少な過ぎだろうか？本気で巨人を掃討する気があるのか

？」

付属された調査兵団の書類を見て疑問に思った。

調査兵団の第一分隊は、ミケ分隊長を含め、5名

調査兵団の第三分隊は、名も知らない3名

調査兵団の第四分隊は、たった1名のみ

もちろん、壁上にも兵力が配備されているが、それでも壁外に出るには少なすぎる。

一応、全員の簡潔な経歴が記されており、文字だけでも精鋭と読み取れた。

第四分隊の1名を除いて。

「特に第四分隊のこいつは何だ？ 新兵の癖に大総統と内政大臣のお墨付きとか何をやってた!？」

デニスは、第四分隊のフローラ・エリクシアという名が気になった。

マルロヤヒッチと同じ104期の兵士という経歴しか記されていない。

なのに、大總統と内政大臣の勅令で参加を義務付けられていた。

正式な兵士になってから二か月も経過してないのに、指名されるとはよつぽどの事である。

まるで…邪魔者をこの機会に抹消したいように！

「まあ、考えてもしようがねえーか！俺は関係ねえーし！」

達筆で3名の名前を記入し、憲兵団のナイル・ドーク師団長に提出する為に書類を封筒に入れた。

「アニ！私、死んじやう！死んじやううううう！」

「ヒッチ、とりあえずお酒を飲むのを止めたら？」

「はあああああ!?!もうムリ！せめて殿方に貢がせたかった…」

ヒッチ・ドリスは自暴自棄になってアニと共に昼間の露店で酒を飲んでいた。

泣き上戸の彼女は、更に悲観的になって友人に甘える事しかできなかった。

机に突っ伏した酔っ払った友人を見て、アニは何て声をかけるべきか迷っていた。

「アニ：どうやってトロスト区的地獄から生き残ったの？」

「同期たちや先輩に助けてもらった」

「うわああああああ！あの2人に助けてもらおう？無理に決まってるうううう！」

ヒツチは、あの2人では役に立たないと分かっていた。

真面目だが、なんか気になるマルロと、気遣いはできるが頼れる男ではないボリス。

調査兵団は税金の無駄遣いの無能集団だし、頼れるアニは居ないし、もう終わりだった。

「ねえ、周りの客に迷惑だから静かにして」

「もうやだ！アニまで私の存在を否定するうううう！うわああああああ!!」

さすがに煩過ぎて、アニは、自称友人のヒツチを殴りたくなってきた。

同じく104期兵で泥酔したフローラは笑い上戸で、比較的静かな部類だった。

あまりの無防備さに男共に股を開かされて凌辱された可能性を考えるほど上機嫌で良い子だった。

だからこそ、周りに迷惑かけている馬鹿女を暴力で黙らせたかった。

「アニ、香水を貸してえ…」

「香水？」

「とぼけないでえ！」「15m級の巨人」とやらの男に振られてから使ってる香水よおお！」

アニ・レオンハートは、トロスト区の兵团本部奪還作戦で、フローラから香水をもらった。

第57回壁外調査の日の晩、精神崩壊して寝室に泣きながら戻った。

あまりの豹変っぷりにヒツチは、話しかける事もできず掛け布団を被って見なかった事にした。

その時、アニは香水が入った筒の蓋を開けて香りを嗅いだ。

『この香水はリラックスハーブの成分が入ってるの！快眠や精神を落ち着けるにはびつ

たりよ!』

フローラが簡潔に説明して渡してくれた香水。

それは発言した通りであるが、なにより彼女の香りがして安心した。

憔悴したミーナやクリスタも香水を纏った途端、元気になるほどの不思議な特効薬。

アニは、壁外調査の日から香水を服用していた。

「ちよつとだけなら良いよ」

「ありがとお……ああ、いい香りいい……」

友人から受け取った香水の筒を受け取ったヒツチは、すぐに蓋を開いて香りを嗅いだ。

体臭を誤魔化す為に使う香水は、匂いが強い上に癖があるせいで好きでは無かった。

ただ、第57回壁外調査の日から同室の友人が使用している香水は不思議と嫌いになれなかった。

欲しいと言っても非売品としか返して来ず、貸してくれなかったが実際、原液を嗅ぐと安らいだ。

「ふううー……う……う……」

「落ち着いた？」

「まあね……『ゴデロイン』とかいう麻薬より、この香水が流行れば良いのに……」
「それは同感」

もつとも、フローラしか精製できないので、流行る事はない。

香水を受け取った友人たちも決して、他人には貸しはしないだろう。

「ねえ、パーカー娘さんう！どうやってこの香水を手に入れたのお？」

「友人からもらった……」

「うええあつ!?マジで？一匹狼のあんたにも友人が居たのお？」

アニは他者と仲良くなるのを恐れていると見抜いたヒツチ。

だからこそ、彼女にこんな香水をプレゼントしてくれる友人が居るなんて思わなかった。

「香水をくれた友人と、食事の時に話し相手になつてくれた友人が居る」

「それでえ、その友人達はどこに居るのお？」

「2人とも調査兵団に入団した」

「うえっ…マジかあ、いかれポンチよりひでえわ…」

調査兵団といえ、アホみたいな信念を掲げて税金と人命を投げ捨てる頭おかしい集団。

先日の壁外調査も規模を半壊して帰還して、いつもの調査兵団と揶揄されるほどのやべえ奴ら。

そりゃあ、アニも他者と仲良くなるのを避けるわ。

仲が良い友人達が自殺志望者として逝つちやうなんて精神がむちゃくちゃになるわけだ。

だからこそ、代わりに友人になつてやると、ヒツチは再確認した。

「そうか、死んじやつたか…」

「2人ともまだ生きてる！」

「壁外調査で死んだんでしょ？」

「生きてると確認した!!」

「ふーん…」

文通のやり取りはしている様子は無いし、直接面会して確認した形跡はない。

どうやって生存を確認しているか分からないがヒツチにとつてはどうでもよかつた。

第58回壁外調査に参戦させられると思いつくと、身体が震えて鼻水と涙が止まらなかつた。

「やっぱり行きたくない…まだ生きたいから、行きたくない…!」

「気持ち分かる」

「はあん、あんたなんかに分かるわけないでしょ!私は弱いんだからあ…」

実は、アニも壁外調査にこっそり参加していた。

そこで巨人に追い詰められて殺されかけた。

そのピンチを救ってくれたのはフローラだった。

彼女のおかげで壁内に戻って来れて、こうやって美味しい物を食べることができる。

「こんな時にフローラが居たら…」

「なんか言った…?」

「なんでもない」

アニは露店の椅子に深く寄りかかって溜息を吐いた。

悲観的になり過ぎてこっちまで落ち込んでしまったので立ち上がって肩を回した。

「あれ?アニ!」

聴き慣れた声がして彼女は振り返った。

そこには乗馬したフローラとミーナが居た。

「…というわけさ」

「大変ね…」

アニは、フローラとミーナに事情を説明した。

ここに居るヒッチを含む同期の憲兵3名が第58回壁外調査に参加する事。それでヒッチは自暴自棄になって昼から酒を飲んでる事などを話した。

「何よお！他人事のように聴いてえ！あんたたち調査兵団の兵士なんでしょ！」

「そうですわね」

「巨人が怖くないの!?!」

「巨人を一匹残らず駆逐するつもりですので、怖いとか言つてられません」

ヒッチは、あまりの価値感の違いに混乱した。

アニとミーナはフォローを入れてくれたが、やべえ女に困惑するしかなかった。まるで悩んでいる自分が馬鹿に感じる様に。

「ちようどよかった、わたくしも第58回壁外調査に参加しますわ」

「そうなのお？」

机に突っ伏している自分に向けて手を伸ばしているフローラという女。

良く分からんけど、とりあえず彼女のおかげで不安が少し薄れた気がした。差し伸べた手を握ると、とても温かった。

なによりーあれだけ欲しかった香水の香りが鼻をくすぐって安らぎを…。

「ちよつと待つて！その香水は!？」

「えっ？わたくしが作った香水ですけど…お気に召しませんでしたか？」

「私、その香水が欲しいのお…」

「そんなに欲しいなら、差し上げますわ」

フローラは、馬のライリーに装着させたバックから香水の筒を持ってきてヒツチに手渡した。

「ありがとう…」

「ついでに私にもくれないかな？」

「はい、どうぞ」

「…どうも」

アニもすかさず香水を受け取った。

「アニ、ちゃんと髪を梳かしてる？」

「ミーナ、ちゃんとやってるって…」

「ちゃんとしないとフローラみたいに女子力が無くなっちゃうよ！」

「ミーナ…それ、どういう意味!？」

久しぶりに親友に再会したミーナは嬉しそうに話しかけていた。

まるで子猫の様に甘えてくる彼女にアニも抵抗できず甘やかすように右手を撫でた。

フローラは、ミーナの爆弾発言でそれどころではなかったが！

「ほら、ここに寝ぐせがあるじゃない」

「さすがにそこまでは…」

「ダメ、女の子は少しでも手入れをサボるとすぐに老けちゃうもん！」

両手を腰に当ててほっぺを膨らますミーナを見て思わずアニは微笑んだ。

「笑い事じゃないってば!! フローラの二の腕を見てよ!」

椅子に乗ったミーナは、フローラの兵服のジャケットを脱がした!

そこには両腕が傷塗れで目も当てられない惨状が見えた。

「なにこれ…」

ヒッチは、女性と思えない傷塗れの腕を見て、声もうまく出せなかった。

「ヒッチは知らなかったね、フローラはよく立体機動に失敗して負傷してた」

「いくら何でも多すぎでしょお!」

「でも、その分、立体機動と巨人戦は私より優れてるよ」

「マジで?」

「南方訓練兵団で成績4位だった私が保証するよ」

アニの純粋な笑みで嘘ではないとヒッチは察した。

ミーナと呼ばれた少女は、自信満々にこうなるなと警告していた。

馬鹿にされているのか、褒められているのか分からないフロローラは黙って微笑む事しかできない。

「そういえば、フロローラたちはここに何しに来たの？」

「エルヴィン団長からドーク師団長に機密書類を届ける使命でここに来たの」

「もう終わって、フロローラは同期たちやお世話になった人へのお土産を買ってるの！」

「ふーん……」

おそらく機密書類は、壁外調査関連だろう。

そして彼女達の口ぶりからエレンは無事だとアニは感じた。

「エレンは元気にしてる？」

「ここ最近、意識がはつきり覚醒しなくてね……面会ができないのよ」

「そうなのか……場所は分かる？」

「いえ、わたくしにも知らされていないわ」

フロローラは半分嘘をついた。

未だにエレンの意識は朦朧としており、しつかり覚醒する日が珍しいと知っている。それは、旧調査兵団本部だった古城に寄った時に聴いた話である。

エレンと面会したかったが、彼は弱い所を見られたくないと察して、見舞い品だけ渡していた。

機密情報なので彼の居場所は、ミーナにも伝えていない。

「それで？お土産は何を買ったの？」

「よくぞ訊いてくれましたわ！」

「ジャンの好物のオムライス、サシヤにあげる霜降り肉、兵長に渡す上質な紅茶！」

「アルミンとピクシス司令に渡すチエスセット、ハンジさんには兵器工学詳論！」

「ベルトルト用の高級寝具に、高価な酒を……」

「ああ！もういいって！」

フローラは、アニの質問を聴いて購入した物を片っ端から発言した。

あまりの多さにアニもヒツチもびっくりするほどである。

飢えた乞食に目を付けられる前にアニは、お人好しの女を制止した！

「金持ちじゃないの…良い友人をもったねえ…」

「いや、訓練兵時代はそんな裕福じゃなかった」

ヒツチは、アニに嫉妬した。

人懐っこいミーナに、金持ちで気遣いできるフローラ。

愛想が悪く他者との関わりを極力避ける女には、もつたいない友人である。

「私たち、休暇中なのお！よかったら買い物に付き合ってくれない？」

「良いですわよ！アニも一緒に行きましょう！」

「分かったよ…」

こうして4人はストヘス区の商店を周って買い物をした。

ヒツチは、フローラに奢ってもらい、化粧品や日用品を買った。

アニは…。

「ドーナツ店…！フローラ！あそこに行くよ！」

「えっ？」

「えっ…：じやない！私はあそこに行く!!」

『幸せ真ん丸ドーナツ専門店』という看板を見たアニは豹変した！

ドーナツとやらのお菓子を食べたい子供の様な表情をして3人を見つめていた！
フローラもミーナもヒツチも初めて見る彼女の顔に度肝を抜かれたが…。
楽しそうなのでお店に向かっていった。

「これは前、食べたドーナツ！これは…抹茶？抹茶って何!？」

「そういえば、アニは甘い物が好きなんだっけ…」

「初耳よ…：なんで教えてくれなかったの?」

「だって、訓練兵時代は、甘い物を食べる機会がほとんどなかったし…」

ドーナツを見て目を輝かせるアニは、どれを食べようか迷っていた。

壁外調査の前日に探し人を搜索していた彼女。

その探し人であるカーリー・ストラットマンという女性からドーナツをもらった。

それは、何度もお代わりしたくなる甘いお菓子であり虜になっていた。

ミーナとフローラが自分の話題をしているが、特に気にすることはなかった。

「とりあえず、一通り買ってみましょう！」

「ほんとに!?!」

「アニが嬉しそうな顔がこっちまで笑顔にする魔力だからね！」

こうしてフローラは、店にあったドーナツを購入した。

アニの件もあつたが、ワグナー夫妻に『復興饅頭』以外のお菓子も検討させるつもりだった。

それぞれ紙袋を抱えた4人は、近くにあつたベンチに座ってドーナツを頬張って食べていた。

「美味しい！」

「このドーナツはね！上にある特性の甘いパウダーが甘くてね！中にあるもちもちの感触と噛み合つて舌でとろける様な感触と！ゆっくりと広がる甘味とスパイスになつている塩辛さが…」

無口で無愛想なアニが、ドーナツについて熱く語っているのを見て不思議な感じがす

る3人。

「普段喋らない人だからこそ、今まで抑圧されてきた分だけ話続けていた。」

「とりあえず頷いておけばいいや…的なノリで、取り巻きの3人は、リズムよく頷いていた。」

「なんか、いつものアニじゃない…」

「今度、機嫌が悪かったらドーナツを用意しようかな…」

「ミーナもヒッチも、アニの本性を目の当たりにしたが、むしろ親しみすらあった。」

「彼女は、自分たちと変わらない人間なんだなと実感していた。」

「一方、フローラはドーナツを頬張っているアニの似顔絵を手帳に描いていた。」

「熱く語っているドーナツの内容も、ぎっしりと書いて意外な一面をしっかりと記した。」

「とりあえず、アニもヒッチも元気になって良かったわ」

「書き終えたフローラは、3個目のドーナツを掴もうとしたら何も掴めなかった。」

何故かと紙袋を確認したら、あれほどあったドーナツが消えていた。仲良しになった3人が、ドーナツを喰い尽くしていたようである。

「今度、奢る時はわたくしを破産させる勢いになるわね…」

ここ最近、溜息を吐く癖がついたフローラは、手をハンカチで拭いて立ち上がった。ストヘス区が夕日で染まりつつあったからだ。

「アニー！また逢いましょう!!」

「今度は、フローラとの生活を教えてあげるよー!」

「余計な事は言わなくて良いわよ!!」

フローラとミーナは、カラネス区に帰還する為に馬を走らせた。

「あんた、あれほどの友人が居るなら言ってくればいいのに…」

「言っても、信じてくれなかったじゃん」

「まあね！」

ヒッチ・ドリスは、今朝の出来事で落ち込んでいた素振りなどなかった。化粧品と日用品を抱えている以上、すぐに寝室に戻りたい様子だった。

「ちよつと、寄りたい所があるから先に帰ってくれない？」

「言われなくても！帰るわよおお！」

壁外調査に参加する兵士とは思えないほど上機嫌の彼女は帰路に着いた。それを見送ったアニは、人気が無い路地に入っていった。

「(い)で(い)いか…」

そして、誰も居ないのを確認して顔を両手で覆った!!

「やだ…使命なんか忘れて、このまま(い)こで暮らしたい…！」

104期生であり、ストヘス区の憲兵であるアニ・レオンハート。その正体は、調査兵団の兵士を殺しまくった【女型の巨人の本体】である。

「分かつてる……こんな幸せな生活は続かないって……！」

ヒツチに壁外調査の当日、「15m級の巨人」の男に逢うと伝えた！

彼女は、冗談と受け取ったが事実だった！

エレン・イェーガーを捕縛する為にヒツチにその日を病欠にしてもらった。

もしかして、このまま故郷に帰れるという楽観は、残酷な世界に打ち砕かれた！
体調不良だったのは、巨人化し過ぎて限界を超えていたからだ！

「もうやだ……！」

精神が戦士のアニ・レオンハートと、憲兵のアニ・レオンハートに板挟みされた。
挟撃されてプレッシャーと故郷の想いと、ここの思い出で潰されそうになった。

鼓動は高まり、涙と鼻水は止まらず、呼吸は粗くなった！

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

フローラからもらった香水が入った筒の蓋を開いて原液を嗅いだ！

まるで麻薬の中毒者のように香水に魅入られた彼女は、それしか精神を落ち着かせなかつた。

下手すれば、翌日には破綻するスパイ生活！

今日が人生の絶頂期であるならば、あとは転がり落ちていくだけしかないと実感している！

だからこそ、精神分裂して他人事のように兵士ごっこをする糞野郎を殺したくなるほど恨んだ!!

「フローラ、ミーナ……私はどうすればいいの……！」

裏切っている友人たちを想って、答えがない問いを呟く事しかできなかつた。

48話 ベルトルト・フーバーの憂鬱

「フローラー！僕と…付き合ってくれないか？」

ベルトルトの一言で、あれだけ騒がしかった調査兵団の第一分隊の面々は黙り込んだ。

「ぶふつううううう!!」

発言の意味を理解したゲルガーは、思わずフローラーの顔に向けて酒を噴き出してしまった！

彼の唾液を含んだアルコールが彼女の顔と上着の兵服を濡らした。

「冷たっ?!?!」

「ぶはっ!?!」

ゲルガーの横では、リーネが喉にドーナツが引つ掛かり、咽っていた。

ヘニングは、聞かなかつた事にして黙々と激辛のソテーを口にしていく!

ナナバは、ちやつかりフローラを盾にしてアルコール攻撃から身を護ってみせた!

「ゲルガーさん!ちよつと酷過ぎませんか!!」

「だってよお!大胆な告白をされてたら誰だつて驚くだろう!」

「せめて地面に嘔き出してくださいませんか!」

第58回壁外調査に参加する第一分隊の精鋭4名とフローラは、露店で昼食を取つていた。

厳密に言うくとゲルガー主導で、昼間から酒盛りパーティを開いて情報交換しつつ食事をしていた。

「なるほど、マレーネさんは調査兵団一の酒豪なんですね」

「女だからって油断するなよ…あいつは一樽のアルコールを飲めるような奴だ」

「ゲルガーさんは、飲みくらべされたのですか？」

「そうだ、そしてあいつに完敗した」

フローラは第一分隊の面々を奢りながら、接点の無い第三分隊の話の聴いていた。彼らとの接点は、壁外調査で旧市街地で共闘したくらいのものであった。

巨大樹の森に侵入してリヴアイ班を追いかけて来た「女型の巨人」を追撃した部隊でもある。

彼女は、奢る約束を果たすついでに情報収集を勤しんでいた。

「おい、誰か見てるぞ?」

「ああ、わたくしの同期ですわね…ベルトルト!何か用なの?」

そこにひよっこり現れたベルトルトが、話しかけ辛そうに無言で彼らを見ていた。彼は意志が弱く、積極的に話しかけられないと自他が認めている。

兵士として自我が強くないこと自体は良い事だが、行き過ぎればそれも欠点だ。

そんな彼が自分に用があると思ひ、フローラは自発的に話しかけた!

その結果が、彼女がゲルガー先輩にアルコール塗れにされる惨状を引き起こした!

「ち、違うんです!!」

「あー良いって良いって! そういう時期もあるだろう」

「違うんです!」

大胆な告白すら酒のつまみにしたナナバは、必死に否定するベルトルトをあしらった。

もちろん、誰もが言葉足らずでこうなつたのは理解している。

「大胆な告白は若さの特権だもんねえ!」

「こつち見んな!」

そして彼女は、青春から遠ざかって浮いた話が一切無いヘニングを見つめて笑つた。見つめられた彼は、まだ自分が若いと証明しようとしたが…何も思いつかなかつた。

「で？ベルトルト、何か用？」

「発声練習を頑張ってきたんだけど確認して欲しいんだ」

「さっきのを聴く限り、ばっちりだと思っただけだね」

ベルトルトは、自分に自信を持たず、訓練兵時代からフローラに相談していた。

自分の意志をはっきり持っていて、我が道に向かって進撃していく彼女。

それは、昔から同期に振り回されてきた彼女にとっては尊敬する存在である。

もつとも、好意を抱いているアニと仲が良いので、アドバイスをもらおうつもりでもあったが。

「ん？滑舌が悪いのか？」

「いえ、彼は自発的に行動するのが苦手で、それを克服する為に努力をしています」

「なるほど、告白は自発的に行動するのにぴったりだね！」

「ナナバ、おちよくるのも、それまでにしておきなさいよ…」

あまりにもベルトルトを弄り過ぎているナナバにリーネが牽制した。

乙女の勘が、これ以上弄るのは危険だと警告していたからだ。

「でも…僕は…」

「分かったわよ！訓練を手伝うわ!!」

「そこは、『わたしも付き合う』で良いんじゃない？」

「ナナバさん…」

「あーゴメンゴメン悪かったって…！だから睨むのは止めて!!」

あまりにもしつこい先輩を牽制する為にフローラは睨めつけた！

さすがに巨人の討伐数が三桁の女を怒らせたくないナナバは、これ以上弄るのは止めた。

「それではお会計しますがよろしいですか？」

「まだ食べたいんだがな…」

「じゃあへニングが払ってやれよ」

そう言つて、リーネは会計伝票をへニングに手渡した。

彼の注文した激辛料理が料金の半分以上を占めており、途方もない値段になってい

た。

下手すれば肉よりも香辛料は貴重であり、このような値段になった。

これを見たヘニングは更なる注文を諦めた。

「しかし、後輩に奢ってもらうのは違和感があるな……ここは先輩として奮発し……」

「会計伝票を受け取れ」

「オイオイ、こんなもん払ったら死ぬわ俺」

「払うんじゃないのか？」

「リーネが俺を養ってくれるなら……」

「嫌だよ……アルコール臭いヒモ男を乙女の部屋に入れるなんて……」

ゲルガーは、ヘニングから渡された伝票を見ると、自身の年収の10倍以上の値段であった。

フローラは、ヘニングの要請で激辛料理店を探した所、この高級料理店しか取り扱ってなかった。

思い切ってここにした結果、とんでもない額になった。

「つて事は、ゲルガーが禁酒すれば、リーネの部屋でヒモ生活して良いつて事だよね？」
「…ナナバ、そんなに頭と上半身を分けて欲しいなら、させてあげてもいいよ？」
「もういいでしょ！ベルトルトが待つてるのでお会計してきます！」

無駄話をする先輩たちから会計伝票を受け取り、露店の店主に渡した。

「すみません！お会計お願いします！」

「…ホントに払えるのか？こんなに鋼貨を持っている様に見えないが…」
「もちろん、小切手でお願いします！」

店主は半信半疑で女兵士から受け取った小切手を小道具で確認して本物だと分かった。

そして付属された書類の支払いの履歴からお人好しなのか、無駄に金払いが良いのが分かる。

「…次回のご予約はいつ頃になされます？」

「第58回壁外調査から生還したら検討させて頂きます」

「最後になるかもしれないじゃないですか？もう一回味わってみてはいかがでしょう？」

「不謹慎な事を本音で述べないでくださらない？友人を待たしてるので会計をお願いします」

フローラは、しつこい店主を牽制して会計を済ませた。

「毎度あり！次回のご予約は…」

「壁外調査が終わってから予約させて頂きますわ」

「それと…お騒がせしてお詫びに…置いておきますわ」

「またお越してください！なんなら今からでも…」

「お邪魔しました!!」

あまりにもしつこいので、さきほどの騒動の迷惑料を兼ねた鋼貨を支払ってフローラは逃走した。

領収書と一緒にクーポン券まで渡してくる執念深さに二度とここに来ないと誓うのであった。

「ベルトルト！お待たせ！」

「うん、なんかゴメン…君に迷惑かけちゃって…」

「そう？ベルトルトのおかげでお会計が早くできて助かったわ」

香辛料をふんだんに使用された料理が予想以上に高額で小切手で払えきれるか心配だった彼女。

…
食事中に第三分隊の話題を振ったのは、食事から会話に夢中にさせて食欲を誤魔化し…。

これ以上、注文されない様にする為でもあった。

「しかし、あいつら人生をエンジョイしてるな…」

「まあ、いつ死んでもおかしくないんだから愉しんだもん勝ちだろう」

ヘニングとゲルガーは仲が良い2人を見て素直に関心していた。

「それで？あの2人の関係はどんな感じに見える？」

「残念ながら恋人の関係じゃなさそうだね」

異性どころか同性とも恋愛経験があるナナバは、新兵達のやりとりを見てそう思った。

初々しいカップルというより、我が道を行く彼女に彼が必死についていている感じ。

おちよくったのは、更に恋愛を意識させる作戦であつたが残念ながら成功しなかつた。

もし、成功すれば恋愛のアドバイスをする気満々であつたが……。

それでもベストカップルの様に見えて名残惜しいように彼らの姿を見送るしかできなかつた。

「ねえフローラ？」

「どうしたの？」

「臭いよ」

「せめてアルコール臭いって言って欲しいわね…」

「ゴメン…」

ベルトルトが自発的に呼びかけて来たのに感心していたが、すぐに撤回したフロラ。

空気は読めるが、どこか抜けており、共感を得たいアニとの相性が悪いのも領ける。

「やっぱり僕は、このまま他人に流されるまま終わるのかな…」

「でもさつきから積極的に発言できるようになったし、だいぶ成長したんじゃない？」

「そうだね…君と居ると何か言葉が浮かんでくるんだ…」

言葉足らずであったり、どこか配慮がない彼ではあるが以前と比べると成長していた。

今まではライナーの腰巾着野郎と皆から揶揄される事すら忘れられるほどの存在感。そんなベルトルトであるが、フローラは異性の中で一番仲が良い。

自身の悩みを打ち明けることがあっても、それを克服する為に相談したのは彼女だけだった。

「君みたいに意志の強い人を見習っていけば、もっと自信が持てるかもしれない」

「じゃあ、練習しましょう！」

「何の練習？」

「相手の顔を見て発言する…それだけよ」

ベルトルト・フーバーは、主体性に欠けており周りに振り回されて損をする性格である。

逆に言えば、任務に私情を挟まずに冷静に行動できるといふ利点があったが…。

彼はそのままではいけないと思っている。

「それだけ？」

「結構、難しいのよ？人の瞳とか見ながら発言するのって…」

「やってみるか」

「その意気よ！」

こうして、ベルトルトはフローラの顔を見ながら何かを発言する事にした。

…が、何を発言すれば良いか全く分からなくて声に出せなかった。

「どうしたの？」

「何を話せばいいのか分からない…」

「そんなの…ベルトルトが思ってる事をそのまま口にすればいいじゃない！」

彼は、自分を覗き込むように笑って見せたフローラを見た。

そのままの意味で発言すればいい。

では何を発言するべきか。

10秒ほど迷った彼が導き出した答え…それは！

「フローラ！アルコール臭いから顔を洗いに行った方が良いんじゃない？」

「はいはい、ありがとうベルトルト！相当臭いみたいね！」

「怒ってる？」

「本来ならね！ようやく自分の意見を言えた人を罵倒するほど器が小さい女じゃないわ
！」

「そうだね…どの男よりも男らしい意志を持った人だと思おうよ！」

「…せめて乙女心に気を遣って欲しいわ」

ミーナから女子力がないと言われたフローラ・エリクシア。

一応、寝起きには10分ほど梳かした髪を結んで三つ編みのおさげにする努力ならしている。

体臭も気にして、香水を服用し足が蒸れるブーツに対策したりしていた。

逆に言えば、それくらいしか乙女らしい事をしてないので同期からは…。

性別フローラとか、頭エレン娘とか、頭のやべえ奴とかいろんな異名をつけられた。

特に酷かったのは、「医務室で誕生してすぐに還る女」くらいか。

「やっぱり迷惑をかけちゃった？」

「アニに向かって発言していたら、蹴りで股間を潰されたくらいに酷いと思うわよ」

「こういう時ってどうすればいい？」

「ただひたすら、自分の非を詫びて納得してもらうまで謝るしかないわ」

ベルトルトがフローラに自分が積極的に行動できるように訓練してもらっている理由。

それは、昔から好意を抱いているアニと仲良くなりたいたいからだ。

自分から絡んでも、何も伝えることができずに気持ちが悪振りになっていた。そこで、アニと仲が良いフローラに相談に乗ってもらってから1年以上経つ。

「えーつとごめんなさい」

「えーつと…が付くだけで好感度がただ下がりになるから止めた方が良くわよ」

「どうすればいいかな…?」

「『アニ、ゴメン！ハンカチを渡そうと考えたら頭に横切った事が口に出ちやった…』」

「『今すぐ兵舎に戻って、風呂を沸かしてくるから待つて』…くらい言えば良いんじゃない?」

優秀な彼は、すぐに伝えるべき答えを見つけ出すことはできる。

ただ、それを口に出せず黙ったまま他者がきっかけを作るまで発言できないのだ。

悪く言えば、指示待ち人間でありそれを自嘲してしまうほど自覚しているものだった。

「難しいな…」

「でも気持ち伝えるのって大事よ？察して欲しいなんてやってたらすぐに見限られちゃうもの」

「確かにアニは僕の意見を肯定してくれた時がほとんどなかった」

「あくまで他人事だと思ってるのよ…貴方は努力すればできる男なんだから頑張らなきゃー」

ベルトルトは、アニに「好きだ」と伝えたくて必死に努力している。

自分たちがするべき仕事を彼女一人に押し付けて、訓練兵時代を送っていた。

だからこそ、別の事で彼女の力になりたかったのだが、全て断られた。

今思えば、相当苛つかせていたな…と自嘲してしまうほどにしつこかっただろう。

思わず過去の出来事を振り返ってしまうほどに…。

「何か手伝おうか？」

「別に困ってない」

疲れているアニに何かを手伝うか聴いても淡泊な人の反応しかなかった。

「一緒に居て良い？」

「お願いだから一人にしてくれない？」

ある時は、寂しそうにしていた彼女に寄り添おうとしたら断られた。

「一緒に訓練して良い？」

「もう邪魔！あっち行って！ライナーと仲良くやってる！」

ついには一緒に訓練する事すらアニは嫌がるようになった。

嫌われているとは分かっていたが、どんどん悪化している関係にお手上げ状態だった。

そこで、なんか同期と仲良くやっているフローラに相談した。

アニとの仲を改善するにはどうすればいいのかと。

「アニの中ではベルトルトという存在すら認識したくないみたいね」

「ど、どお、どうしよう!?! どうすればいいんだ!?!」

「まず兵舎の掃除を自発的に取り組む…それだけをやっていれば良いんじゃない?」
「でもアニは…」

「彼女からの印象を変えたいなら、自分から変わらないと! ほら実践あるのみよ!」

こうしてベルトルトは、フローラの提言を受けて自発的に兵舎を掃除した。

最初は、ジャンやコニーが馬鹿にしてきて、ライナーが呆れていたが我慢した。
そして3週間以上続けていると、自然とみんなから評価され始めた。

「お前…変わったな!」

「ありがとうライナー!」

「教官の中で、お前で話題になってるぞ! なんか変わったって!」

最初はライナーと教官達から評価された。

「ベルトルト! 私も掃除を手伝っていい?」

次はクリスタが掃除を手伝い始めた。

彼女は、黙々と掃除して評価を上げている彼の話を聴いてその手があったか！と言わんばかりに健気な女神っぷりで男共の心を捉えた。

そして彼女が目立ってしまい、再びベルトルトの存在感が薄れた。

「クリスタが掃除するなら私も手伝う…良いよな？」

「別に構わないよ！ただみんなが使う所を綺麗にしたいだけだから」

クリスタが居る所にユミルの姿ありという冗談が作られるほど仲が良い2人。

そのユミルが、彼の返答に違和感を覚えた。

明らかに彼が短時間で返答できる台詞ではなかったからだ。

「ベルトルさんよ…誰の入れ知恵だ？」

「…フローラだよ…返答する台詞も考えてくれた」

「だと思ったよ…」

呆れたユミルもクリスタと一緒に居る為に掃除を手伝い始めた。

「ベルトルト…あんた、頭を強打してたりしない？」

「酷いよアニ…」

「あんたがここまで清掃活動を頑張る男だと思わなかったよ」

「みんなと…一緒にやってるおかげでなんとか続いているんだ」

「…どうやら、私はあんたの事を過小評価してたみたいだ」

フロローラに唆されて、始めた兵舎掃除は104期生の習慣となり、教官たちも感心していた頃。

ベルトルトは、ウォール・ローゼに避難した頃くらいのアニとの関係を取り戻した。

アニからすれば、当初は「何やってるんだこの馬鹿」と思っていた。

「すごい…新聞紙で、窓の汚れを簡単に落とせるなんて…」

「この裏技、サンドラから聞いたんだけどね…」

「サンドラから新聞をもらってこようかな…」

「アニなら喜んで譲ってくれると思う」

ところが、様々な清掃をしている内に、誰よりも清掃に詳しくなっていた。汚れを見て、的確な行動ができるようになったベルトルトは皆から頼られるようになった。

これには、アニも素直に感心するしかできなかった。

フローラの指示で動いているのは察したが、知恵や技量は彼が必死になった覚えたものである。

掃除に関しては、彼に相談していくほどアニの信頼を取り戻しつつあった。

「フローラ！アニと話せた！アニが自発的に話しかけてきたよ！」

「よかったじゃない！イライラする男から清掃人にランクアップしたわね」

ベルトルトは、久しぶりにアニと会話できて嬉しかった！

そこから好意を伝える為にフローラに相談して自分磨きをしてきた。

何故か、クリスタが自分の真似をして目立ってしまったが特に気にしなかった。

こうして、ここまで来た。

我が道を行くエレンと、過保護のミカサの論争も仲介して騒ぎを収めるほど成長した彼。

本来の目的であるアニに自分の好意を伝えるという目標自体は先送りになってしまった。

憲兵になったアニは、ストヘス区に配備されてしまい、行く機会が無かったせいである。

「努力してもアニに逢いに行けないよ……」

「第58回壁外調査が終わるまで正式な通行許可は難しそうね」

「どうすればいい？」

「だからこそ今のうちに伝える練習をするのよ」

できるだけフローラの顔や首元に視線を移して発言している。

それでも、アニと面を向かい合った時に話せるのか。

そもそもここ最近、彼女の精神状態が良くないみたいで、ベルトルトは心配になってきた。

「ねえフローラ！ストヘス区に書簡を届けに行ったよね？」

「そこで偶然、アニに逢ったわよ」

「どんな感じだった!?なんか僕やライナーの事を言ってた？」

「体調はあまり優れない感じだったわね…2人の事は何も言っていなかったわ」

フローラからすれば急に大声をあげたベルトルトに驚いたが、アニの心配をしてるの
だろう。

とりあえず、明るい話題を出して落ち着いてもらおう事にした。

「そうか…」

「でもね！アニの好物が分かったの！」

「え？」

「甘い物が大好きみたいでね！ドーナツを見て目を輝かせていたのよ」

無愛想なアニのイメージしかないベルトルトからすれば衝撃的な情報だった！

アニは甘党！

たったそれだけであるが、ウォール・ローゼに来る前からずっと一緒だったのに気付
けなかった。

改めて自分の不甲斐なさに悲観的になると共に希望が湧いてきた！

「ドーナツか…今度、逢いに行くとき、買いに行こうかな…」

「良いわね！お詫びの品を持参するのでもいいかもしれないわ」

フローラやキース教官、ライナー、同期達に自分はやればできる男と評されている。

特に相談役になってくれて後押しをしてくれる彼女には、感謝してもしきれない。

頭がおかしくなったライナーの介護と監視、同期達を偽り続けた自分。

自分まで頭が可笑しくなりそうな環境で、彼女と一緒に特訓してもらうのは良い気分
転換になる。

「ところで、アニは、精神を分裂した糞野郎を恨んでいるみたいよ」

「そ、そうなの!？」

「直接は言っていないけど、自分だけ責務を押し付けて逃げた奴に殺意すら抱いていたわ」

ベルトルトは、一瞬でその人物を特定した。

とうか、そのせいで、いつ爆発しても可笑しくない時限爆弾に悩まされている。ストレスでどんどん寝相が悪くなり、第57回壁外調査の晩は、3階の窓から転落した。

「おいおい……ベルトルト！お前、自殺でもしたいのか？夢の中ですら巨人に追われてるのか？」

夢遊病が悪化してしまい、元凶であるライナーから心配される始末……。

「確かにトロスト区の悲劇とかあったから……精神が壊れてもしょうがないよ」

「そういうえば、渡した寝具は使ってる？」

「もちろん使ってるよ！あれのおかげで久しぶりにベッドから動かなかったし……ね」

ストヘス区から戻て来たフローラがお土産を親しい人たちに渡していた。

アルミンはチェスセットで喜んでいたり、ジャンはオムライスを美味しそうに食べて見せた。

サシャに至っては、霜降り肉を見て号泣し、生で食べようとしたくらいである。そして、ベルトルトがもらったのは、職人が作った高級寝具。

その寝具は、寝る為ではなく身体をリラククスさせるものだと言値観を変えるほどであった。

そして翌日、目が覚めた時に布団に居たのは、感動したくらいだった。

「ベルトルトは、過度のストレスで寝相が悪くなってると思うの」

「多分、アニと同じ理由だと思う」

ベルトルトもアニも悩ましている精神分裂した兵士こと、ライナー・ブラウン。

発言が、兵士なのか戦士なのか一目じゃ分からない上に切り替えのタイミングが掴めない。

そのせいで、彼が発言する度にフォロー入れるなどしないと全てが破綻するくらいだった。

「ねえフローラ、多重人格をもった人を治療するには、どうすればいい？」

「どうしようもないわ！」

「そうか……」

「ただ、元の人格を繋いでいるワードをしつかりと伝えてあげればいいじゃない？」
「例えば、どんな感じにすればいいかな……？」

相棒として仲間として戦士として、共に認め合ったライナー。

マルセルのような兄貴分になろうとして、良く分からない人格を作り出してしまつた。

自然に切り替わるせいで、兵士なのか戦士の人格なのか全然分からなかった。

アニが未だに恨んでいる以上、ライナーはどうしようもない

「ベルトルトで例えるなら『故郷に帰還する』って感じはどう？」

「故郷か……まだ帰れないけどいつか帰りたいな……」

「とにかく、元の人格が強く認識している単語を何度も告げれば良いんじゃない？」

「そうだね……これから故郷を念を押ししていくよ」

故郷、それはウォール・マリアの南東に位置する山奥の村。

そこが自分たちの故郷とされている場所だ！

正確な場所は混乱のせいで確認できていないが、きつとそこにあるはずである。おそらくそこを伝えれば、「兵士のライナー」として活動するだろう。

「はあ…難しそうだけどね…」

「じゃあ、誰かに手伝ってもらえば良いんじゃない」

「手伝うって…君が!？」

「もちろんよ!」

何故か手伝う気が満々のフローラ!

確かに手伝ってもらえれば元通りになりそうだけど、色々と危険過ぎる!

そう思っていたベルトルトであるが、彼女の目から離せられなかった。

ここで特訓の成果が活かされていると分かり、驚愕すると同時に色々諦めた。

「ベルトルトは優秀だけど、1人じゃ何もできない時があるわ!」

「無理やり部隊長にさせられたりとか、巨人に掴まれて喰われそうになった時とか…」

「前者はともかく、後者は絶対に無いと思うけど…なんか嫌だね」

大袈裟に両手を動かしているフロウラを見て思わずベルトルトは吹き出してしまった。

それを見て、彼女は顔をしかめっ面にして冗談ではないと抗議していた

「結果は誰にも分からないわ！でも…もし、ベルトルトが巨人に喰われそうになったら…」

「わたくしの名を呼んで！その場に居たら絶対にベルトルトを助けるから！」

「本当に？」

「ええ！約束するわ！絶対に貴方を巨人に喰わせたりしないわ!!」

何故そこまで言い切れるか疑問に思うほど、自信満々で約束してくれた。

もつともベルトルトには、そうならない自信があったものあまりの堂々たるその姿に。

「じゃあ、お願いしても良いかな？」

「もちろん！」

フローラに約束してもらった。

だからといって何かが変わる事ではない。

胸を張って力強く頷いた彼女の姿を見届けて、この経験がア二に生かせるかどうか考えていた。

特に、この約束自体は大して気にしてなかった。

後にベルトルトが巨人に喰われそうになるまでは…。

49話 急変

ベルトルトと別れて兵舎に帰還したフローラはさつそく私室に戻った。アルコールの匂いがある以上、さつさと着替えておきたかったからだ。が、入室して違和感があった。

「…紙が落ちてる」

ドアに挟んでおいた小さな紙が落ちていた。つまり誰かが入室した証拠だということ！

この汚部屋に入る物好きなど大体限られる。

辺りを見渡せば、相手は馬鹿ではないのか、何かが変わった痕跡が…！つあった！

「ミーナ！何をしてるの!!」

「ふにゃあ！」

フローラのベッドでぐっすり眠っていたミーナ・カロライナが大声で目覚めた。親友の温もりと匂いに触れていくうちに、癖になってしまった彼女。

第57回壁外調査から特に兵団の上層部から指令が無いので訓練以外は、ここに入れ浸っていた。

「不審者かと思ったじゃない！」

「寝てたのに酷い……」

「そんなに疲れているなら自室で寝てたらどう？」

「……が一番落ち着くの」

寝ぼけているせいなのか、全然会話が成り立っていないかった。

瞼を指で擦りながら敷布団の上で呑気に欠伸をする彼女。

その姿を見て、フローラは隠し持っていた投擲用の短剣を兵服に仕舞った。

そこそこ有名人になった以上、護身用の短剣は所持している。

どちらかというとその刃を見せるのは、不審者というより……。

「……なんかお酒臭くない？」

「先輩たちの酒盛りに付き合つてね…すぐ着替えるわ」

ミーナの狗並みの嗅覚で気付かれたがフローラは特に気にしなかった。

クローゼットから予備の兵服を取り出して着てた兵服を脱ぎ捨てて洗濯行きの箱へ粗雑に入れた。

「ちよつと待った!!」

「ど、どうしたの!？」

いきなりミーナに大声で制止されて吃驚した！

「これじゃあ皺になつちやうじゃない！」

「どうせ洗うから良いでしょ？」

「ダメに決まつてるでしょ！こんな乱暴に入れるから女子力が皆無つて言われるのよ！」

何故かミーナのお説教が始まってしまい、適当に受け流そうとした。

しかし親友には見抜かれており、お手本を見せられて実践させられた。女の子なんだから、身の振り方にもう少し気を遣えと言わんばかりに徹底的に教え込まれた。

手を抜けるなら、とことん抜きたいフローラからすれば余計なお世話であるが…。

「分かった？」

「分かったわよ」

「じゃあ何が分かったか、発言してみてよ！」

段々お節介が鬱陶しくなってきたフローラ。

マナーの実践だけならともかく、やたらと身体に触れてくる時点でそれが目的だと気付いている。

「第58回壁外調査の準備があるからまた今度ね！」

「逃げるの？」

「現実に向き合わないとね！」

「この汚部屋と向き合う気は？」

「ライナーがクリスタと付き合って結婚したら向き合うつもりよ！」

「じゃあ、一生無理じゃない…」

地味に辛辣な一言を告げるミーナを無視して着替えたフローラは部屋から飛び出していった。

それを引き留める事をせずに見送ったミーナは、ドアの鍵を閉めてベッドの下をまさぐった。

そこにあるのは、エッチな本でも春画でもない。

フローラが104期訓練兵団を卒業した217名の描いたイラスト集が入った箱があった。

【南方訓練兵団104期卒業生217名の似顔絵集】と描かれたラベルが箱に貼られている。

「トーマス…」

箱から取り出し、一番上にある表紙を捲ると同期のトーマス・ワグナーの似顔絵が描かれていた。

純粋で前向きな顔をしており、これからの未来に希望を持つている瞳は、ミーナの顔を歪ませた。

何故か、フローラ自身は描かれていない104期訓練兵団の卒業生のイラスト集。

それは、5年前に記憶喪失したフローラが、みんなの顔を忘れない様に描いたものである。

「マルコ、ハンナ、フランツ、ナック、ミリウス…みんな居る」

もはや、話題に出る事もなくなり、詳細な顔を思い出せなくなった戦死した同期たち。

南方訓練兵団を卒業した218名のうち、生き残ったのは50人も満たない。

このイラスト集には、フローラ以外の全員の生きた証が記されていた。

ちなみに2枚目はミーナ、3枚目はエレン、4枚目はライナーである。

もちろん公式な記録として残っているが、ここまで同期を詳細に思い出す事はないだろう。

「あつ…メルダ・プリント」

教官には良い子ぶって、同期の陰口を叩いたり、落ちこぼれを虐めてきた性根が腐っている女。

自分やトーマスを遠回しなやり方で虐めてきて、マルコやクリスタの優しさを悪用した女。

自身は面倒な事はせず、誰かに頼るだけで、優しくした人を踏み台にして成績12位になった女。

最後はトロスト区の兵团本部で何もせず、喚きながら逃走して巨人に喰われた末路だったそうだ。

「嫌な物を見ちゃった…」

最後に描かれた女の顔を見て、気分が悪くなったミーナはイラスト集を箱に仕舞って元に戻した。

そして嫌な記憶をフローラで上書きする為に再び、掛け布団に入り込んで瞼を閉じて寝た。

「おつ、ミーナを自室に連れ込んで弄んでるフローラじゃないか」

「ユミル……人間きの悪い事を言わないでくれない？」

「至理名言で、男女の好感度を稼いで喰う飯は旨いか？」

「そりゃあ、皆と食べるごはんは美味しいわよ」

皮肉にも負けず、フローラは素直に感想を述べた。

ユミルには何個か『貸し』を作ってるせいで、あまり関わりたくない気持ちがあるが我慢した。

「今回も『恩』を返してもらうぞ」

「洗濯？水汲み？貧民街の子供たちへの寄付？」

「いや、私のクリスタ」を奪還するのを手伝って欲しい」

ユミルは、カラネス区第三病院に行っているクリスタを心配していた。

自分の事を省みず『いい人』になろうとして早朝から夜遅くまで活動している彼女。

積み重なった疲労で焦痺しきっており昨日の晩、ついに卒倒してしまった。

これ以上は生命活動の危機と危惧しており、ついに軟禁を強行しようとしていた。

「まだあの病院に行つてあの兵士の看病をしてるのね…」

「知つてたんなら止めろよな！クリスタの性分くらい分かつてただろう？」

「まあね、でも止めようが叱ろうが、彼女の意志は止められないわよ」

「だから2人で止めるんだよ！」

単独なら説得できなくても複数人入ればさすがに今日は手伝いを中断すると踏んだユミル。

そして兵舎に戻つた彼女を数日、軟禁して身体を休ませる！

ミーナやサンドラ、最悪サシャも巻き込んで交代制で見張らして逃がさないつもりだった！

フローラもクリスタの本性を知っているからこそユミルの案に賛成した。

そして2人は女神様をただの少女にする為に病院へ向かった！

「お姉ちゃん！いつもありがとう！」

「…うん、大丈夫よ、安心して…頑張ればきっと報われるから…」

少女は、金髪の女兵士さんが無理をしているのに気付いていた。

でも、何度言っても何かに憑りつかれているように離れようとしなない。

今は、体調が良さげなお父さんであつたが、波があるようで、定期的に苦しんでいた。既にお母さんは、お父さんが助からないのを考えており、お墓の準備を始めている。

自分でも諦めかけているのに、女兵士さんだけが助かる事に縋りついているようだった。

「クリスタ…ちよつと良いかい？」

「…はい、すぐに向かいます」

クリスタ・レンズは女医に呼ばれて少女に手を振って退室した。

そして医療スタッフの休憩所を兼ねている給湯室に連れてこられた。

「よく今まで頑張ってくれたよ」

「いえ、私はまだ何も…」

少女やその母親を励ましたり父親の看護をするだけならまだ良い。

連日、無駄に湧いてくる負傷者を自称している男共の対応していた。

悲しむ少女を見てられないと思って、ここに来たのにほとんど寄り添う事ができなかった。

「明日から同僚たちと一緒に遊びに行きなさい」

「そんな……ここに居る患者たちが苦しんでいるのに私だけが…」

「正直に言うと、もう限界じゃないか！いつ倒れてもおかしくないよ」

女医の鋭い指摘にクリスタは凶星を突かれてしまい、反論できなくなった。

昨晚、ついに疲労で、よりによってユミルの眼前で気を失ってしまった。

既に現時点で、立っているのが精一杯であり、瞼を閉じればそのまま眠ってしまいうだった。

もはや女医と会話が成立しているのが奇跡と感じるほどに限界だった。

「先生！急患です!!」

「分かった！すぐに行く!」

看護婦が新たな患者を医師に知らせて去っていった。

「とりあえず、明日は休みなさい」

「嫌です…」

「君は頑張りすぎだよ…せめてここで休憩していなさい。良いね?」

「はい…」

女医は反論できないクリスタに余計な行動をさせないように牽制して去っていった。

それを見届けて、数分が経過したのを確認してクリスタは少女の元に行くために立ち上がった。

脚はがたつき、呼吸は乱れ、視界は歪んでいた。

それでも、お父さんを失う少女の為なら自身の命を捧げても良いと自負していた彼女。

手すりに掴まりながら必死に例の個室に向かおうとしていた。

「おいクリスタ！なんて恰好で歩いていやがる」

クリスタは目の前が暗くなった。

お節介でお馴染みのユミルに呼びかけられてしまった。

それだけではない。

腕を組んだフローラの表情から自分を連れ戻しに来たと分かってしまったからだ。

「まあた、『いい人』やろうとしてるだろう？少しは自身を省みたらどうだ？」

「でも！あの子の悲しむ顔を見たらどうしても放っておけなくて……」

「ふーん、どう見ても倒れそうになっているクリスタは、少女にその姿を見せるのか？」

「あつ……」

ユミルの指摘を受けて思わず手すりを放したクリスタは、そのまま地面に跪いた。

このまま自分がここで倒れてしまえば、少女を更に悲しませて本末転倒になる事に気が付いた！

だからといって、少女を無視できない。

「お願い！手伝って！」

「手伝う？」

「少女に付き添って励ましてあげて……」

お節介焼きの2人なら自分の頼みを断らないはずだ！

それだけを賭けてクリスタは頭を垂らして土下座した！

「……どうする？」

「毎日誰かがここに来ないと、クリスタは絶対に許してくれないと思うわ」

「だろうな……しようがねえな！……ここまで女神様にお願いされたらやるしかねえよ！」

彼女達は、断ると泣き叫んで大暴れするクリスタを思い浮かべて素直に意見を受け入れた。

彼女たちが本気でクリスタを止められるならとつくの昔に性格を矯正できている。

「よしフローラ！お前がここに来るんだ！」

「えっ?」

「えっ…じゃねえよ! 私に借りがあるんだろう?」

そしてユミルは面倒くさそうな事をフローラに投げ出した!

爆弾発言を受けて「2人が交代して来るべき」だとフローラは告げなかった!

ただ『借り』のせいで沈黙するしかできなかった。

「沈黙は肯定と判断するけどいいよな?」

「分かったわよ…」

「ユミル! フローラに全部押し付けないでよ!」

「大丈夫だ! こいつ、ミーナやサンドラを巻き込んで、ここに来る算段だと思うぞ?」

フローラはさきほどの話と違くと、喉から出そうになった言葉を飲み込んで黙り込んだ。
だ。

ただ握り締めた拳が小刻みに震えてしまい、2人には動揺を隠しきれなかったが!

邪魔にならない様に壁に沿って一列で整列している3人は、今後の予定の為に打ち合わせをした。

「みんなごめんね…」

「うおっ！可愛い！さすが私のお嫁さんだ！」

「や、やめてよ！頭皮を嗅がないで…」

良い香りがするのに定評あるクリスタの髪に頭を突っ込んで嗅いでいるユミル。

あまり人の性癖にツツコミたくないが、香水を使っているフローラとしては、他人ごとではない。

ミケさんとか！第一分隊の分隊長とか！調査兵団NO. 2の実力者とか！何度も嗅がれていた！

というか、やけに匂いを気に入られてしまい、しつこいくらいに嗅がれていた！

胸や尻を触られても気にしない頭エレン娘であるが、さすがにしつこいくらい嗅がれると恥じた。

「おいクリスタ！大変だ！」

「ええっ!?今の状況ですか!?!」

「違う！あの子のお父さんの容態が悪化した!!」

少女の父親の容態が悪化したと知ったクリスタは、その場で泣き崩れた。これ以上悪化すれば助からないのは明白だったからだ。

「今さっき、急に苦しみ出してね……このままじゃ数日も持たないだろう……」

「な、なにか助ける方法は!? ねえ! 無いんですかあ!？」

「特效薬が無いわけじゃない……でも無理なんだ!」

ここでクリスタは、特效薬の値段が一兵士では稼げないと察した。

それどころか借金しても到底払え切れない大金だろう!

でも少女の父親を絶対に助けたい!

「私! あの子の父親を助ける為なら! いくらでも脱ぎます!!」

「……痛あああああつ!？」

フローラとユミルは同時にクリスタの頭をしばいた!

その衝撃で床に倒れ込んだ彼女は、ただ涕泣するしかできなかった。

「私のクリスタ」を臭い男共に汚染させるつもりはねえよおお!!」

「だってえ…だってえええええ!!」

「金なら出すからクリスタは黙ってて!!」

「ううっ…」

次、同じ発言をしたらクリスタを半殺しにしかねない心理状態の2人！
当然である！

ただでさえ他者の為に命を捧げようとしている無垢で純粋なクリスタ。

悪徳貴族に騙されて、股を開いて腰を振った挙句、一錢も支払われず道端に捨てられるだけだ！

そんな事！フローラもコムイルも許さないし！ライナーが聴いたら壁内人類を滅ぼすだろう！

「次！同じ発言をしたら絶交よ！エルヴィン団長に懇願してクビにしてもらからね！」

「次なんてねえよ！私だけしか考えられないようにしてやるよ！今晚は覚悟しとけ！」

こうしてクリスタは、二度と他人の為に脱ぐと発言する事は無く生涯を終えることになる。

「えーっと、話の続きを良いかな？」

「はい」

蚊帳の外にされた医師は、今の状況に困惑しつつ淡々と説明を続けた。

「特効薬の材料が壁外でしか採れない貴重な薬草なんだ！」

「だから諦めるしかないんだよ……」

「そんな……じゃあ」

人類の守る50mの壁の外。

第57回壁外調査で嫌というほど地獄を見た。

だからこそ、クリスタは諦めかけた。

「ちよつと待つてください！どこでその薬草が採れるんですか？」

常人なら絶望的な展開であるが、壁外で任務を遂行する調査兵。もしかしたら、近くに薬草があるのを賭けてフローラは発言した！

「ちよつと調べてみる」

「私たちも手伝います！」

医師と共に書室に向かった3人。

そこにあつた本からカラネス区壁外の北東の森で獲れると判明した！

ちよつと第58回壁外調査でカラネス区壁外に出る機会があるフローラ。

当初の計画ではいかなない地域であるが、馬で行けば40分も掛からない距離！エルヴィン団長や兵団上層部と交渉して成功させれば行ける場所だった！

「その薬草を採ればあの子のお父さんが助かるってことね！私、探してくる！」

「ダメに決まってるだろ!!」

薬草を採りに行くこうとするクリスタにフローラとユミルはハモって発言した！

「でも！せっかく助けられる命なのに見捨てるなんてできないよ！」

「フローラに任せておいて、私たちは看病しながら待つていれば良いだろう？」

「やだ！私も壁外に行く！」

「自分の都合で、壁外調査に参加できるわけないでしょ!!」

頑固なクリスタは、絶対に意見を曲げなかった！

定期的なポロポロな心理状態になっていたが、その度にフローラとユミルに立ち直した！

その結果、駄々をこねる子供の様に壁外調査に参加する覚悟ができる兵士になった！

「しょうがねえな…上官を説得してみようぜ」

「ユミル…！」

「ただし、私も壁外に同行するからな！クリスタから絶対に離れないからな！」

「うん、ありがとう！」

医師とフローラは困惑した。

なんで壁外調査に参加する資格が無いのにここまで盛り上がれるのか。そもそも上官を説得して作戦を変更できる規模ではなかった。

王政が立案した作戦であり、憲兵が大勢参加する壁外調査という名の巨人掃討戦！エルヴィン団長を説得しても変更できるわけなかった。

「私たち3人居ればきつと説得できるよ!!」

そして何故かクリスタに巻き込まれたフローラ。

「お前も提言してくれよ? そうしないと…」

未だに『借り』で脅してくるユミル。

「分かったわよ! まず3人でエルヴィン団長に説得してみましょう!」

「ありがとうフローラ!! 心強いよ!!」

「よし、言い出しっぺはお前だからな! 絶対に説得して見せろよ!!」

そして全責任が自分に来てしまい、フローラは承諾したのを後悔した。
仕方なく、取り巻き2人を連れてエルヴィン団長が居る調査兵団本部の建物に突撃した！

「無理だな」

「ですよねー」

頭を下げてエルヴィン団長と面会する時間を作ってもらい、執務室に突撃した3人。事情を説明し、頭を垂らした3人を見たエルヴィンは即答で拒否した。

思わずフローラが本音で溢してしまうほど、骨折り損のくたびれ儲けだった。

王政が立案した作戦である以上、調査兵団の団長如きでは意見が通るはずもなかった。

「何！諦めてるのよ！フローラ！もっと強く言って！」

「無理に決まってるでしょ！決定権は王政にあるのよ！」

せめて自分だけでも薬草を採りに行きたかったが、それすら無理だった。だからフローラはあつさり諦めた。

強い言葉で囃し立てるクリスタの言葉など耳から入って反対側の耳から出て行っていた。

「分かったなら早く退室してくれ……これから客人と面会する予定でな……」

「だって！だってえええ!!」

「諦めようぜ……急な押しかけに対応してくれただけ良い方だぞ……」

ユミルは暴れるクリスタを羽交い絞めにして諦める様に諫めようと奮闘している。むしろ、フローラもユミルも対応してくれた団長に感謝しており、去ろうとした。

「エルヴィン団長!!アウリール大臣とゲラルド大統領がお見えになりました」

ドアを3回ノックして、副官が団長に來客の知らせをした。

最悪のタイミングで来てしまい、入室の許可を出した事にエルヴィンは後悔した。

「しようがない…君たちは本棚を後ろにして直立不動で待機してくれ」

「ハッ！」

「団長…」

「良いから早くやれ！」

「はい…」

ユミルに涙を拭かれ、変えたばかりであるフローラのハンカチで鼻を嘸んだクリスタは敬礼した。

それを見届けたエルヴィンは、ドアノブを掴んでゆつくりと回した。

そこには、怯えた様子の副官、そして後方にはアウリール大臣とゲラルド大總統が待機していた。

彼らの表情を見る限り、碌な事ではないと直感で分かるほどである。

「君は下がって良いぞ！」

「ハッ！失礼しました！」

大總統の命令で、副官は逃げるように去っていった。

「わざわざこの最前線の街に…」

「御託は良い！入室しても構わんよな？」

「もちろん、お二方…」

「入るぞ!!」

もはや調査兵団の団長が新兵未満の立場になっていった。

王政の重臣2名は、自宅の私室のようにならずかかと入室してきた。

「ふむ、悪くない椅子だ」

必死に頭を下げるエルヴィンをあしらい、煙草に火を付けるアウリール卿。

「見たことがある兵士が居るな？」

「ええ、彼女達は…」

「フローラ!!この前は良い余興だったな」

「はい、伯爵…」

「お世辞は結構!!第58回壁外調査で改めて王政に忠誠を示してみろ!」
「ハッ!」

役立たず、ゴミ、税金泥棒といつものように調査兵団を馬鹿にしていたアウリール伯爵。

それを反論して、自分なら巨人を10体、1人で討伐できると啖呵を切ったフローラ。そこから何かと縁があり、同期や上官が知らない所で文通をしている。

「少女に対して手厳しくはないか?」

「前に話した通りだ…この三つ編みのおさげがある女がフローラ・エリクシアだ」
「ほう、こいつが噂の…」

アルフォンス・ゲラルド大統領とフローラは、初対面だった。

さすがに兵団トップの男と対峙してどんな感じに話しかけるか彼女は迷った。

壁内には3つの兵団がある。

フリッツ王に忠誠を誓い、内政のあらゆる部分に隠然たる権力がある【憲兵団】
人類を守護し、壁の補強や防衛を担当し、人類の盾である【駐屯兵団】

ウォール・マリア奪還を目指し、巨人の脅威に立ち向かう人類の矛である【調査兵団】その3つの兵団を束ね、行政、司法、公的組織を総括、監督する【総統局】王政を事実上運営している【議会】に次ぐ上位機関。

巨人化できるエレンの処罰を下す特別兵法会議の議長を務めたダリス・ザックレーは、総統局の長であり、三兵団を統べるトップである。

「フローラ・エリクシアであります！」

「なるほど…ザックレーが愛でるわけだ…」

そのザックレー総統ですら呼び捨てにできる権限があるのが、ゲラルド大総統である。

王政は、国王から内政を委任された議会で運営されている。

議会を構成している議員は181名おり、4つの組織に所属している。

名門の貴族で構成され、フリッツ王の意向を尊重し内務を司る【貴族院】

壁を神と讃え、不安に駆られる人類をトランス状態にし一致団結させる【壁教】

全ての商人を束ね、金融と財政の政策を担当し、安定した物資を供給させる【中央商

会連盟】

壁内の軍事組織を束ね、司法を管轄し、議会を構成している組織を監督する〔総統局〕

そこから選抜された11名の議員が大臣となり、王政を運営していく。

ただし大臣は貴族しか任命されず、いずれの組織も平民は総統局を除いて支部長止まりとなる。

貴族出身で『背広組』のゲラルド大総統は、『制服組』のザックレー総統より格が上である。

「しかし、女兵士3人を執務室に並べるとは良い趣味をしているなエルヴィン？」

「彼女達は……」

「憲兵団のナイルから、お前が妻帯しない理由を知っている……もつと堂々としたまえ」

「心遣いありがとうございます」

大臣を代々選出している大貴族であるアウリール伯爵は、ハーレム状態のエルヴィンを煽る。

ゲラルド大総統も、優しい言葉ながらも童貞がお似合いだ的なニュアンスを含んでいた。

要するに2人は、エルヴィン・スミスに嫌がらせをする為にわざわざ王都から出向いている。

「すぐさま、兵士を退室させますので…」

「いや、調査兵団の兵士だろう？ 壁外調査の情報を知らせておくべきだとは思わないか？」

「お二方からご指名を受けたフローラ以外を退室させますので…」

第58回壁外調査にフローラが参加する原因になったのは、この2人の勅令のせいであつた。

以前、カラネス区壁外で行われた討伐ショーを見届けたアウリール卿。

おそらくその縁で、大總統に情報が伝達しこのような結果を招いたとフローラは分析していた。

逆に巨人掃討作戦で、巨人討伐を掲げて実行する彼女を入れない方がおかしいくらいである。

「待ってください!!」

無意識でクリスタは発言してしまった。

「ほう？我々に何か用かね？」

「えーつと…」

このままだと少女の父親が救えないと思い、2人に助けてもらうために声をかけた。

…が、そこから何て発言するべきか分からなくなった。

そもそも王政の高官と関わりたくなかったクリスタ！

フローラを見上げて、『なんとかして！』という視線を送った。

『あああああつ?!余計な事をしないでえええええ!!』

もし、クリスタと2人つきりだったら、フローラは平手打ちするくらいにヤバい状況だった。

下手に発言すれば、エルヴィン団長に迷惑を掛けるどころか調査兵団が廃止される可能性がある。

エルヴィンですら、論争が通用するどころか返り討ちに遭う強敵が2名も居る。しかも待たせれば待たすほど、追撃をしてくる厄介な連中だった。

「第58回壁外調査に、恐れ多くも提言したいと思い、ここに集まりました！」

ヤケクソになったフローラは、アドリブを交えて勢いで会話した。

「我々に提言するとは、良い度胸をしているな？」

「ハッ！王政の存続する上で重要な作戦だと思い！発言をしました！」

「面白い！言ってみろ！」

ゲラルドとアウリールは、エルヴィンに口撃する口実を求めてフローラの発言を許可した。

「カラネス区壁外で叢生そうせいしている薬草を収集する任務を追加するべきと提言します」

「薬草？」

「はい、兵士の死因は巨人によるものですが、実は傷口からの感染症の死因が多いです

「！」

「トロスト区における兵士の死因の3割が、不衛生な巨人による感染症で亡くなっています！」

「その感染症の特効薬がカラネス区から北東にある森林に叢生して生えております」「別の感染症にも特効薬となる薬草の採集の許可を得たくて、提言させて頂きました！」

トロスト区の死者の死因？

巨人に喰われて死んだに決まってる。

負傷兵がどうなったかはフローラも知らない。

『さて、どうするかしら？』

ただ、馴染みの訓練兵団の医務室の連中が、調査兵団における死因の1つだと話してくれた。

不衛生な巨人の攻撃を受けて、できた傷口から感染症を発症し死に至る。

それがその薬草が発見されるまで、調査兵団で5割以上の死者を占めていたと聴いていた。

伊達に106回も医務室に搬送されたわけじゃない
106回も医療について聴ける機会があったのだ。

「その薬草についてだが、どれくらいの感染症に効果があるのだ？」

「持参している図鑑によりますと、10種の感染症に効果があります！」

「……いいだろう！ どうせならここで作戦を立案しようではないか！」

ゲラルド大總統は、フローラの提言を受け入れたどころか、すぐさま作戦の立案準備をした。

知り合いであるアウリール卿ですら、このような彼の対応は見た事がないほど円滑に進んだ。

実は、流行り病で壁内人類の祖先は滅亡の危機に瀕していたのを彼は知っていた。

かつてシガンシナ区で伝染病が流行り死者300人を超えた事もあり、特效薬は確保したかった。

……というのは、建前で【もう1つ理由】がある。

「……これでいいかね？」

「はい、問題ありません！」

「よろしい、これで進めて行こうではないか！」

ゲラルド大総統は、フローラの肯定をもつて、作戦の修正案を記した書類を持ち出す。追加された作戦に異議を唱えられる者は存在しないだろう。

「この作戦は、君が責任もつて遂行すべきだが……大丈夫そうか？」

「もちろんです！ 必ずしや薬草を採取して王政府に献上致します！」

「良い返事だ！ エルヴィン、お前も見習うべきだと思うが？」

「承知しております」

ついでに大総統は、エルヴィンを煽るのは忘れなかった。

そして、きつかけを作った金髪の女兵士の顔を見た。

「君の名前は？」

「く、クリスタ・レンズです！ 104期調査兵です！」

震えながらも、必死に重圧に耐えながら、絞り出した声を出したクリスタ。それを聴いたアウリール伯爵とゲラルド大總統は、笑った。まるで震える女兒を見て見下すような嗤いだった。

「クリスタ・レンズか…素晴らしい名だな！」

アウリール伯爵は、クリスタの名前を知って、わざとらしく大声で発言した。

「ああ、さぞかしご両親から愛されているだろう！」

ゲラルド大總統もその意見を肯定するかのように皆に聞こえる様に大声で発言した。その会話を聴いてクリスタは凍り付いた。

だって、この名前は…。

「クリスタ君…立派な勤めを果たしてくれたまえ！」

「父親の名誉を傷付けないようにな？」

「はい…」

王政の重臣2名からの重圧でクリスタは泣きそうになった。事前に泣いたおかげでなんとか耐えることはできたが、ただ見送るしかできなかった。

『クリスタ…その名前、偽名なのね…』

クリスタの負の感情を“声”として聴いたフローラは、それ以上踏み込むことはしなかった。

自発的に打ち明けてくるまでそつとしくつもりだった。

何故なら、本名を打ち明けると皆に迷惑が掛かるという“声”も聴いていたせいだ。

とにかく、第58回壁外調査に『薬草の収集』という王政のお墨付きをもらった追加任務ができた。

「第一分隊と第三分隊の参加者に奢らないといけないわね…」

フローラは呟きながら、予約を取る為に飲食店に向けて歩き始めた。

一方その頃、ユミルは力尽きたクリスタを部屋に連れ込んで存分に愛でた。翌日、フローラは寝起きのユミルに向かって元気よく発言した！

「無抵抗になったクリスタを自室に連れ込んで弄んだユミル！おはよう!!」

フローラがユミルに殴られたのは、言うまでもないだろう。

50話 第58回壁外調査 開幕

「ハアハア……！ ついに来ちゃった……私の最後が……」

ストヘス区支部に所属している104期憲兵のヒッチ・ドリスは、手綱を持つ手が震えていた。

彼女だけではない。

同期のマルロ・フロイデンベルクとボリス・フォイルナーも真つ青である。

いくら立体機動が旨くて上位10位内に入れても、巨人と交戦できるかというとなんことはない。

ベテランの調査兵ですら油断すれば3m級の巨人に殺されるほど、人類は弱い。

ましてや、鞍上から立体機動に移る訓練すらしていない素人集団。

28名の憲兵と王都の憲兵7名は、調査兵団の精鋭に自分の心臓を託すしかないのだ。

「おい……お前ら、カラネス区の憲兵だろう!?」

「お前らのせいで！俺達が駆り出されたんぞ!!」

「そうだそうだ！お前らが敵前逃亡しなれば、こうならなかったんだ!!」

今回、憲兵団が巨人討伐に駆り出された原因。

カラネス区に巨人が侵入してきた時に敵前逃亡した現地の憲兵のせいである。

王政は、失墜した憲兵団の名誉挽回の為に巨人掃討作戦に憲兵を派兵した。

憲兵には、各城壁都市ごとに色分けした腕章を付けるのを義務付けられている。そのせいで、カラネス区の憲兵3名は申し訳なさそうに必死に頭を下げていた。

「憲兵が何名生き延びるか賭けをしないか？」

「私は13名に30枚の金貨を賭けよう」

「ならば、18名に40枚の金貨を賭けようじゃないか」

「どうせ全滅するだろう？全滅に5枚の金貨を賭けよう」

壁上に居る貴族たちは、憲兵団の兵士が何名生き残るか賭けをしていた。

彼らからすれば、憲兵など勝手に生えてくる消耗品としか思っていない。

当事者はたまったものではないが、文面に置き換えれば彼らも納得するだろう。

例えば、第55回壁外調査における調査兵団の死者21名、負傷者5名などと文面で示されても、『それだけ死んだのか』としか思わない。

様々なドラマがあつた当事者の兵士とは違って、民間人も貴族も他人事だった。

ただ分かるのは、調査兵団が無能のせいで、税金と人命をドブに捨てたという事実だけだ。

「死にたくない…死にたくない」

ヒツチもその1人だった。

実際に壁外調査に行く事となつて初めて調査兵団の勇敢さが理解できた。

50mの壁上で、大総統や内務大臣を筆頭に、記者や地元の有力者が傍観している。決して逃げることはできない。

巨人を前にして敵前逃亡した憲兵の名誉挽回の作戦である以上！

再び敵前逃亡したら死罪なのは嫌でも分かつてしまった。

「大丈夫だヒツチ！俺達が居るぞ！」

そんなヒツチを勇氣づける為にマルロが声をかけた！
ボリスも頷いているが、2人とも顔は青ざめており、頼りなかった。

「ハア……」

憂鬱な彼女は、香水の入った筒の蓋を開けて香りを堪能した。

アニの友人のフローラからもらった香水で気を紛らわせてるのは何度目か。
覚えていないが、パニック状態にならないのはこれのおかげである。

「いいか！これから壁外に出る！調査兵の指示に従って行動せよ!!」

「生き残りましたかったら！最後まで足掻け！戦え！これは掃討作戦である!!」

「巨人を殲滅しない限り、壁内に帰還できないと思え!!」

調査兵団の第一分隊長のミケ・ザカリアスが鼓舞させる為に大声で叫んだ！

顔を強張らせていた憲兵たちが必死に彼の言葉を聴いていた。

全員がただ生き残るだけを考えている！

「…合図が出たな」

正門の壁上に居る調査兵4名が旗を振り出した！

出撃許可が出た合図である！

腹を括ったミケ分隊長は、それを確認して深呼吸した！

「只今より第58回壁外調査を開始する!! 覚悟は良いか!？」

「「はい!」」

「声が小さい!! 大声で復唱しろ!!」

「「はい!!!」」

「進めーっ!!」

号令と共に先陣をきるミケ分隊長！

参戦兵力の兵士は分隊長の後を続いて壁外に出る門へと進撃していく！

「行くわよライリー!!」

汗血馬に跨ったフローラ・エリクシアは、すぐにミケ分隊長を抜いて交戦準備に入
った!

すぐに左から11m級、その背後に6m級の巨人を発見した!

どんな時でもやる事は変わらない。

彼女は、舌鼓を2回打ってから愛馬のライリーの首の左側を軽く3回叩いた。

これは、「左に居る複数の巨人を殲滅する」という意味である!

主人の意志を感じたライリーは、巨人に向かって進撃した!!

「死になさい」

鞍上から飛び出したフローラは、6m級の首にアンカーを撃ち込んでワイヤーを巻き
取った!

彼女が装備しているブリッツハーケンIIは、通常装備の2倍速度でワイヤーを巻き取
れる。

凄まじい加速力によりグレイアウトするのを必死に耐えて、アンカーを外した。

勢いのまま回転斬りでうなじを削いで、そのまま巨体から飛び出していく！

「そー！！」

フローラは後転し、両膝が視界の真ん中に映った瞬間、両脚を左手前に倒した！

さつきまで背後に居た11m級の巨人の姿を視界に捉えた時、即座に右アンカーを撃ち込んだ！

ワイヤーを巻き取りながら左のガスを一瞬だけ噴出した勢いで11m級のうなじを首ごと両断した！

更に討伐した巨人の後頭部にあった毛髪を掴む為にアンカーを撃ち込んだ！
うなじを斬られ力尽き全身を黒く染めながら倒れ込む巨人。

「わたくしの敵ではなくてよー！とうー！」

巨体が地面に激突する場所を見つけて、フローラは毛髪から飛び出した！

そして両足で着地してドヤア顔をした！

馬のライリーは、さつきと乗れと言わんばかりに彼女に向かって突っ込んできた！

「待つて！ちよ、つと!!」

手綱と鞍を掴んでもなお、放り出されそうになる勢いを堪えてなんとか乗馬できた。ブリッツメツサーⅡの刃が誤って、相棒を斬りそうになって冷や汗を掻いた彼女。更なる訓練が必要だと思った。

「なにあれ…」

ヒッチ・ドリスは、調査兵が瞬く間に巨人2体討伐したのを見て今までの常識が崩れ去った。

だって、調査兵団は壁外に出て無駄に損害を出す無能集団だと思っていたからだ。こんなに強いなら何故、巨人を全滅させずに壊滅してくるのか、全く分からなかった。

「あつ！ヒッチ!!」

「ええっ!?!」

さきほどの調査兵が憲兵の集団に合流した時、ようやくフローラだと判明して彼女は驚いた！

仲良く4人で買い物したり雑談していた女が、巨人を殲滅と豪語していたのが事実だと発覚した。

フローラからすれば、ヒッチの声がしたので近づいただけで大した意味は無い。

だが、ヒッチからすれば地獄から生還することができるアリアドネの糸にしか見えなかった。

「あんた、私の傍に居て！ああいう巨人から私を護つてよ！」

「別に良いですけど、巨人を殲滅したらお別れですわね」

「どういう事？」

「巨人掃討後、そのまま北東の森に向かって薬草を採集する予定ですわ！」

「ええ……」

憲兵どころか調査兵ですら巨人に殺されないように動くのが精一杯である。

そんな中、巨人を掃討した以降の事を考えている女。

価値感どころか人間であることすら疑わしい。

エレンと同じ【頭進撃】だからという裏事情などヒツチに分かるわけなかったが！

「ヒツチ!!逃げろおおお!!」

「えっ?」

ヒツチはマルロの大声がした方を見た。

そこには、四足歩行に追いかけてられているマルロとボリスがこっちに向かって逃げてきていた!!

「この馬鹿ツ面!!こっちに来ないでよ!!」

「戦わないんですの?」

「巨人と戦う為に憲兵になったわけじゃないんですけど……!」

「そうでしたわね……行くわよライリー!!」

フローラは四足歩行で向かって来る巨人の真正面に向かって突撃していった!

「ダメだ!追い付かれる!!」

「正面から味方が来る！ボリスもつと頑張れ!!」

必死に逃げるマルロとボリス！

何故か憲兵団の兵士が騎乗しているのは、民間でも使われている馬であった。

よつて、巨人の移動速度に完敗している上に、巨人を恐れて錯乱して本領を發揮できていない。

特にボリスの馬が顕著であつたが、マルロは必死に励ましながら逃げていた！

いくら立体機動がうまい彼らでも、平原で立体機動などできるわけがなく他に手がなかつた。

「うおっ!？」

「ひいひいひい!」

調査兵団の女兵士は、わざわざ正面衝突しそうなほどギリギリで自分達とすれ違った
!!

激突するかと思つた2人は一瞬、目を閉じてしまつたくらいだった！

そして10秒も満たないに内に大きな衝撃がして、馬が混乱し走行を止めてしまつた

!!

「おい嘘だろう!? 動いてくれ!!」

「だから嫌だったのにいいいい!!」

彼らは必死に馬を宥めようと叫ぶなり叩くなりして復帰できるように奮闘していた。

「なーにやってんの」

「ヒツチ! 何で逃げないんだ!!」

「だって、もう討伐されちゃったし…」

「ええっ!?」

呑気に話しかけてきたヒツチを彼らは叱責したが、衝撃的な発言を受けて振り返った。

さきほど追いかけてきた巨人は黒ずんで蒸気を出して消滅しつつあった。

「何が起こった!?!」

「だから！うなじを削がれて巨人は死んだんだって」

「あの一瞬でか？」

「その反応は正しいし、私だって理解しきれないってば！」

全員、驚くしかなかった。

障害物がなければ立体機動に移る事はできない。

ここは平原でアンカーを撃ち込める障害物などない。

なのに立体機動で巨人を討伐したという事実は、彼らを混乱させるのに充分だった！

「…良く見れば調査兵の連中、巨人にアンカーを撃ち込んで立体機動に移っていやがる」

「ボリス…俺達が学んだ事ってなんだったんだろう」

「そりゃあ、立体機動を頑張れば、憲兵になれる手段って事じゃないのか？」

「だよな…」

見渡せば、ミケ分隊長や第一分隊の精鋭はコンビネーションで巨人を討伐している。

巨人にアンカーを撃ち込んで立体機動に移る姿は、まさに人外である。

試験では、動かない障害物や壁を利用してどれだけ正確に立体機動に移れるかという

物である。

巨人討伐も動かない模型であり、実戦では役に立たない立体機動術しか教えられなかった。

「ヒッチ！いつまでお友達と雑談しているの？」

「ああ、ちょうど良かった！あんた、こいつらも守ってくれない？」

「わたくしは巨人を掃討する係なので、守るところか危険ですけどね……」

マルロとボリスは、さきほどの女兵士とヒッチが仲良く会話していて驚いた。

ヒッチの性格上、調査兵と関わる事などないと思っていたからだ。

「おいヒッチ！知り合いなのか!？」

「アニの友達のフローラですって！あいつ、良い友達をもって嫉妬するわ」

「アニに……友達がいたのか……」

ウォール・マリア陥落で、ウォール・ローゼに4つの訓練兵団が存在する。

アニの出身は、文字通り人類の最前線であるトロスト区付近に存在する「南方訓練兵

団】。

そこは、巨人の恐怖を味わった唯一の訓練兵団である。

卒業生218名のうち、トロスト区防衛戦で100人以上戦死したほどの過酷な環境であった。

更に防衛戦どころか、奪還作戦にも投入されたせいで生き残ったのは、強者だけしかないかった。

決断力が無い臆病者ほど真つ先に死に、生き残れたのは本当の強者だけなのだろう。

3人は、とりあえず納得するしかなかった。

ストヘス区にあるベルク新聞社の記者、ロイとピユレは目の前の出来事が信じられなかった。

「本当に信じられませんよ」

「だろいな、私だってこんな作戦が成功するとは思わなかったぞ」

第58回壁外調査が巨人掃討作戦だと聞いた時、耳を疑ったものだ。

4年前のウォール・マリア奪還作戦で1割の人類を失った。

それを1個小隊にも満たない兵力で壁付近に居る巨人を殲滅するというのだ。

「さあ、新聞屋さん方！号外だよ！憲兵団と合同作戦が成功してるぞお!!」

調査兵団の第四分隊長ハンジ・ゾエは、半ば奇声すら思える声で発言していた。

巨人の恐怖を打ち消すには、それ以上の物をぶつけるしかない。

リヴァイ兵士長から「人類の奇行種」と称されるハンジにはぴったりだった。

「あの…分隊長さん…憲兵団の兵士が活躍しているように見えませんが…」

「何を言っているんだい！討伐補佐も立派な活躍だよ！彼らの雄姿を文面で表現してくれ！」

「おつ！ほらあ！あの赤色の煙がある場所を見てごらん!!巨人の首の皮が飛んだでしょ!?!」

「うなじを斬ってないから討伐できなかったと思うでしょ!?!」

「違うんだなあ!!実は巨人の…」

50mの壁上で飛び跳ねて奇声を上げてバク転しながら記者たちに状況を説明していくハンジ。

記者たちはその姿に圧倒されながらも、情報を元に兵士の活躍をメモしていく。いや、調査兵団の兵士の活躍を憲兵の物にする為に必死に頭脳を働かせていた。

「おい…誰かあいつを止めろ」

「兵長…無理です」

「モブリット、お前が止めなきゃ誰が止められるんだ」

リヴァイ兵士長は、「人類最強」としてこの場に居た。

もし、再び変異種が壁上を乗り越えようとした場合の対応をする為だ。

…が、壁上で曲芸師のような事をやっている糞ゴークルに腹が立ってきた！

ハンジなりに考えているのは理解しているが、同僚の邪魔をしているのは明白だった。

「兵長！巨人の討伐は順調に進んでおります！」

「残りは？」

「18体であります！」

彼は観測手の話を聴き、ハンジとかいう奇行種から巨人に目を向けた。

「…オイ！フローラが憲兵を率いてるじゃねえか！」

「何故かよく分かりませんがストヘス区の憲兵を率いてますね」

「それは第三分隊の連中の仕事だろうが！早く止めさせろ!!」

「無理です！あそこまで遠いと…」

「クソ！」

リヴァイ兵士長は、フローラの実力を良く知っていた。

だからこそ、ほぼ戦力にならない憲兵を率いるのは、彼女の強みを殺していた。

憲兵は壁外に必須な基礎訓練を修了してないどころか、馬すらまともじゃなかった。

既に憲兵が5名戦死しており、このまま憲兵を戦わせれば更に死者が増加する。

だからこそ、フローラに殲滅してもらいたかったが、頭進撃はそんな事まで気にして

なかった。

「また憲兵が死んだか」

「そんなもんだろう」

アウリール大臣とゲラルド大総統は、高みの見物をしており惨状を見て嗤っていた。憲兵が死ぬほど、憲兵団の名誉挽回できると同時に調査兵団に責任を問う事ができる。

そもそも調査兵団の参戦兵力が少ないのは、彼らが妨害したからである。

とはいえ、全滅されても壁内人類を絶望させてしまい内乱を引き起こす可能性があった。

だからこそ、最低限の兵力は壁上に確保したし、作戦自体は成功すると踏んでいる。

「しかし、あそこの部隊は強いな」

「巨人討伐8体か、多分あいつだな」

「なるほど、あれがフローラか」

「そうだ、奴は強い。だからこそ脅威なのだ」

ゲラルド大總統は、フローラの實力をその目で確認した。もはや調査兵団どころか、王政でも問題児だと認識されていた。ただし結果は出しているし、調査すればするほど伝説が発掘されるので…。

「貴様、ふざけてるのか？」

「いい、いえ報告書の記述は全て正しいです…」

調査した部下から提出された報告書があまりにも現実離れしているせいで…。大總統は報告した部下20名を処罰したくらいだった。

「また、同じ情報だ…何やってんだこいつ…」

訓練兵時代に106回も医務室送りにされた

憲兵団、駐屯兵団、調査兵団のトップと親交がある

ザックレー總統と芸術について語り合う友人関係である

見物人や同僚から報告された彼女の巨人討伐数は150体以上

壁外で固定ベルト破断、立体機動装置の破損からの生還

アウリール大臣と文通している
フリッツ王を殴ったことがある

特に最後は、信じられず本人と侍女に確認を取った所、事実だと発覚した。
当の本人どころか侍女ですら笑い話にしており、本気で困惑した。
実際、ここで見下ろすと全て事実なんだろうな…と思うほどだ。

「どうだ？民衆にあいつの存在を隠し通すのは不可能に近いだろうか？」

「むしろ、今までどうやって隠し通してきたんだ…」

「当の本人が積極的に公言しないからな…おかげで知る人ぞ知る断片的な情報になって
いる」

他人事のように肩を竦めて発言するアウリール卿に腹が立ったゲラルド。

お前が無能のせいでこうなっただろうと告げなかったが我慢した。

既に手を打っている以上、ここで自分達ができるのは、事実を確認するくらいである。

「クリスタ！大丈夫か!?」

「大丈夫！戦えるよ!!」

「いや、荷馬車の御者が交戦しちや駄目だろう!」

クリスタは、補給物資を載せた荷馬車の御者担当に配属された。

ユミルは荷台に乗って兵士に物資を譲渡、後方の見張りを担当していた。

この場に参戦している調査兵は精鋭でも指折りの兵士達である。自分たちは、戦えないからこそサポートを頑張るつもりだった。

「でも……この戦いは前哨戦なの！約束を絶対に……」

「クリスタ！巨人だ!!荷馬車から見て右方向からこつちに来る!!」

友人の警告を受けてクリスタは馬を走らせた！

ユミルは上空に向かって赤色の信煙弾を撃ちあげたが、すぐに援軍が来るかは分からない。

「やっぱ、平原で戦う事自体が間違ってるな！」

「どうしよう！振り切れないよ!!」

「仕方ねえ…最後の手段だ！」

ユミルは、荷台から飛び出して向かって来る巨人と対峙した。

「待つて…ユミル!!だめえええええ!!」

クリスタの悲鳴を聴いて心地良い気分になったが彼女はそのまま巨人が来るのを待った。

9m級の巨人は、目の前に居る人間を見つけてすかさず飛び込んできた!

「やれやれ、誰かの為に犠牲になるなんて前世で充分なのにな…つと!」

ユミルは、落ち着いて巨人の動きを見極めて攻撃を回避した。

助走をつけて飛び込んできたので方向転換ができなかつたおかげで助かった。

顔面を地面に激突して動きが鈍くなった巨人。

「くたばれ!!」

巨人のうなじにアンカーを突き刺してワイヤーを巻き取ってガスをありつたけ噴出させた!

その勢いでうなじを削いでアンカーを外し倒れる巨人に巻き添えにならないように着地した。

「はっ、こんなもんか」

初めて巨人を討伐したユミルであったが浮かぬ顔であった。

何故なら自分が同じ立場になっていたらと自覚しているからだ。

悪夢を見て彷徨う彼ら、自分だけが悪夢から覚めて来世で暮らしている後ろめたさ。

「巨人のおやつになるわけにはいかないだろう…クリスタを放置して死ねない…!」

「ユミルううううううう!」

「この馬鹿!なんで戻ってきた!?!」

何故か踵を返してこちらに戻ってきたクリスタを見て呆れた。
それと同時に嬉しかった。

ようやく自分をお嫁さんとして受け入れてくれた…わけじゃないが心配してくれた
とこ。

「早く荷台に乗って！」

「ああ、私の為に戻って来てくれたのか」

「当然でしょ!!」

「さすが私のお嫁さん、愛してるぜ」

「早くして！」

ユミルが荷台に乗ろうとした時、新手の巨人を発見した！

「よし乗ったぞ！早く出発させてくれ!!」

「ユミル…」

「おい…どうしたんだ!?!」

「手綱が切れちゃった…」

「ああん!？」

クリスタは手綱を握り締めた時、違和感を覚えた。
そして確認していたら手綱が切れている事に気付いた。

「早く結べよおおおお!!」

「分かっているけど中々結べないの!!」

「貸してくれ!私が結ぶ!!」

クリスタが結ぶのに手古摺っているのを見たユミルは急いで手綱を結んだ。
しかし、その間に巨人の魔の手が2人に迫った!

「おりゃあああああ!!」

聴き慣れた叫び声と共に巨人のうなじは削がれ、その巨体は活動を停止させて転倒した。

何事かと彼女達が振り返ると、巨体の死骸の上に頼もしい兵士が居た。

「フローラ!!」

「なんで貴女達が前線に出てきてるのよ! 護衛はどうしたの!」

「憲兵の護衛なんて役に立つわけないだろう!!」

「それもそうね」

平原での戦闘は、調査兵団の兵士ですらできる者は一握りしかない。

平原で戦えないのは無能ではなく、そもそも戦うべきではないのだ。

「や…やつと追いついた…」

「ぜえぜえ…きつい…」

ヒツチとドリスもフローラとクリスタの荷馬車に合流した。

巨人と交戦できない以上、交戦できる兵士の傍に居る方が安全だと思ったからだ。その結果、自由気ままな進撃娘に振り回されていた。

「ボリスは…死んだか？」

「あそこに追いかけてられているのがボリスじゃないの？」

クリスタとユミルが無傷で安心したフローラは冷静に巨人に追われている彼を指差した。

「分かっているなら助けてくれよ！」

「こっちが優先だったのよ！行くわよライリー！」

繁盛している料理店で、てんてこ舞いのウェイターのように駆り出されるフローラ。勝利の余韻を味わう暇もなくブリッツメッサーIIを構えて突撃していった！

「私たちはどうするの？」

「とりあえず、この荷馬車を護衛するんだ」

「意外ね！巨人を討伐すれば昇進に近づくとか言うと思ったのに？」

「俺らは、巨人戦闘の初心者だぞ？プロに任せておいて俺達ができる仕事だけやる」

マルロもヒツチも平原で巨人と交戦できない以上、どうしようもなかった。とはいえ、そのまま逃げまわっていれば評価に響く。

ただ危機的状況を利用すれば、出世は間違いなし、なにより実績ができる。

「私、ヒツチ！こいつはマルロ！今から貴女たちの護衛をしたいけど良いよね？」
「戦力は1人でも欲しいからな…護衛してくれるならありがたい」

ヒツチの提案にユミルは受け入れた。

さすがに1人ではクリスタを守り切れないと分かっているからだ。

憲兵団の兵士であるが新兵なので、まだ腐敗していない分、囿には役に立つという算段もある。

「おっ、もう終わったみたいだな」

フローラが巨人を討伐して、憲兵を1名救ったのをユミルは確認した。

これであらかた巨人を片付けたと思いい、安心して手綱の切れ端を確認してみた。

そして彼女は凍り付いた。

「これは…」

「どうしたのユミル？」

「いや何でもない…」

手綱の切れ端は、途中まで綺麗に切断されていた。

つまり、誰かが意図的に切り口を作って任務中に切断できるようにしていた。

自分たちは急遽参戦する事となった為、手綱を切れる連中など限られた。

調査兵団の兵士がそんな事をするわけないのでやったとすれば…。

「チッ！厄介だな」

よく分からないが、クリスタを亡き者にしたい勢力が居る。

それだけでユミルは死ねなくなった。

拜まれた女神様が転落人生を味わうのは自分だけで充分だ！

絶対にクリスタを護って見せると改めてユミルは心の中で誓うのであった。

「なんとか生き残れそうで良かった：死ぬ時を考えると震えちまうな」

「そうね、今まで培った物が役に立たないって分かると気が楽になるな」

「俺は小賢しい男だ：どうやったら生き残れるか、さつきからずっと考えてる」

マルロは悩んでいた。

腐敗した憲兵団を変える為に憲兵になった。

だが、こうやって巨人の脅威を目の当たりにして、大した問題ではない感じがした。

自分のアイデンティティが現実否定されて目標を見失いかけていた。

所詮、個人では何も変えるどころか、死んでも王政も憲兵団も機能していくと分かっていた。

では、自分の価値は何なのか：いくら思考を巡らせても答えは出なかった。

「ヒツチ：俺が死んだら憲兵団はどうなると思う？」

「何も変わらないわね！少なくともここに居る憲兵が全滅しても機能すると思うよ」

「そうか…」

「ただ、あんたみたいな見てて面白い馬鹿が死んだら：あたしの兵団生活つまんなくなるね」

ヒツチの一言でマルロは彼女を見た。

いつもとは違い真剣な眼差しで自分を見ていて驚いた。

「だから生き残りましょう？何かを変えたいならまず生還しなきゃ駄目じゃん？」
「もちろんだとも……！」

マルロは、両手を握りしめて絶対に生き残って見せると決意した！

もはや、巨人を見て逃げ惑う兵士ではなくなった。

フローラに率いられた涙目のボリス・フォイルナーが合流し、更にその想いは強くなった。

「あら？マルロさん！さきほどと違って覚悟を決めた表情ですわね」

「ああ、俺はもう迷わん！」

「そうですか……では、背後から迫ってくる巨人を討伐してみませんか？」

フローラの一言で全員が後方を見た。

第一分隊が取り残してしまった巨人がこっちに向かって来るのが良く見えた。

「もちろんだ！俺は憲兵団を変える男だ！経験を積み組織を知り！できる範囲から変えていく！」

マルロは、新型装備であるシュトルムメツサーを構えた！

それを見たフローラは、かつての装備品は量産品になったと実感し微笑んだ。

新型装備が新兵でも役に立つか知りたい彼女は見届けるつもりだ！

「えっマジで？馬鹿って言っても死に急ぎ野郎ほどじゃないと思つてたのに！」

ヒツチは口では否定していたが男らしくなったマルロに喜んでいた。

いつか、自分を護れるほどの男に成長して欲しい反面、危険な事はしないで欲しい気持がある。

それでも、馬鹿だった奴が男らしい馬鹿になって乙女心をくすぐるものがあった。

「フローラ！援護してくれ！」

「もちろんですわ！」

マルロは自分から巨人に向かって馬を走らせた！

必死に頑張つて鍛え上げた立体機動術で巨人を討伐する為に！

フローラは、勇敢になった兵士を見て絶対に死なせないと誓うのであった！

5 1 話 王政の地雷原でタップダンスした女の末路

「マルロ！止めをお願い！」

「おう！」

「やっちやえマルロ！」

フローラの掛け声で、マルロはシュツルムメツサーを両手で構えて突撃した！

高速でワイヤーが巻き取れ、刃を構えてうなじへと向かっていく！

事前にフローラが鎖骨付近の首元を斬っているおかげで巨人は振り返る事はできない。

ヒツチの応援が彼に力を貸した！

「ふんううう!!!」

鼓舞された彼の振りかぶった双剣が綺麗にうなじを削ぎ巨人は活動停止、死んだのだ。

「マジ？信じられない！私たち、本当に巨人を討伐したのねえ！」

「なんとか仕留めたぞ！訓練を真面目にやってきたおかげだな」

「…いや、みんなのおかげか、ありがとう」

マルロは、初めて巨人を討伐して実績を得て昇進に近づくとは思わなかった。

まずは、自分を指導してくれた教官、そして両足の踵を削いだ2名の同僚。

そしてアニの友人である精鋭の調査兵に感謝した。

「これで全員、巨人を討伐しましたわね」

「あー最悪だったよ！巨人の血ってホント、高熱なんだね…髪を痛めてなければいいけど…」

「フローラさんを見る限り、髪を痛めている感じはしないから大丈夫じゃないかな」
「ボリス、私の髪は繊細なんだよ！どれだけ手入れをしてると思ってるの!!」

ヒッチはボリスの気遣いに感謝しつつ素直になれずに反抗した。

これがいわゆる、ツンデレという奴なのかフローラは思った。

ツンデレといえ、ユミルであるが彼女はどちらかというところと嫌われるようにしている。

「俺たち3人、それぞれ巨人討伐1体、巨人討伐補佐4体か！ストヘス区に帰ったら皆が驚くな」

「大丈夫か？信用されなくて虚報をしたと思われないか？」

「証人は、壁上に居る！だから堂々と言えば良いんだよポリス」

「…たく、すっかり英雄だなマルロ！」

3人は巨人を討伐して自信を持てたようだ。

これなら、もう1体巨人が来ても武器を捨てて逃げ出すことは無いだろう。

僅かな期間で成長した彼らを見てフローラは羨ましく感じた。

トロスト区で戦死した同期たちも、こうやって成長させたかった想いがあったからだ。

「黄色の信煙弾が上がったぞ!？」

「どうやら第58回壁外調査は、これで終わったみたいね！お疲れ様！」

フローラは辺りの“声”を聴くと、負の感情しか聞こえなかった。巨人であるならば、呻き声が聞こえるので付近の巨人は掃討できたといえる。もつとも、フローラやクリスタはここからが本番であるのだが…。

調査兵団の第一分隊長、ミケ・ザカリアスは嗅覚に秀でている。それは、巨人の匂いを感じて居場所すら把握できるほどであった。

「スンスン、これで最後か…」

「ミケさん！ 巨人はまだ居ますか？」

「カラネス区壁外付近の巨人は全て掃討したようだ」

「では、黄色の信煙弾を撃ち上げても…」

「ナナバ、やってくれ」

「了解！」

ナナバは、上官のミケ分隊長の許可を得て黄色の信煙弾を撃ち上げた！
それを見た第三分隊の面々も黄色の信煙弾を次々と撃ち上げていく！

「作戦終了！帰投するぞ!!」

「ハッ！」

調査兵団の第三分隊所属のデイルクの一言により、引率されていた憲兵たちの顔色が戻った。

誰もがこんな地獄に二度と来るかといわんばかりに正門に向かって馬を走らせた。

第三分隊の3名は、細心の注意をしていたがそれでも死者が出た。

馬の鞍上から立体機動に移れないどころか、そもそも馬が壁外調査用ではなかったせいで。

調査兵団が利用する馬は高額だがその分、移動速度が速く、なにより命令に順応である。

巨人を見て逃亡したり移動が困難になる馬を与えた王政を恨むほどだ。

「やっと帰れる…」

「怖かった…」

「憲兵なのに…」

「生きてる…生きてるよな？俺、生きてるよな？」

何故か壁外で必須な訓練をせず投入された憲兵たち。

落馬した兵士から巨人に喰われていた。

死ねば死ぬほど調査兵団の名声が地に落ちていく一方で憲兵団の名声上がる。

これが王政の仕組んだ策略なのだろう。

第三分隊の面々は、ただ自分の無力さを嘔み締めるしかなかった。

「ミケさん！大半の兵士が壁内に帰還しました！」

「リーネ！憲兵の死傷者は？」

「現時点で死者7名、軽傷者6名！あとはフローラの所の3名の憲兵を收容すれば作戦

終了です！」

「まだだ、我々には追加任務があつたはずだ！」

「いえ、それが…我々第一分隊は壁内に待機しろとの命令です…」

部下のリーネの報告を聴いてミケは眉をひそめた。

第三分隊3名と104期調査兵2名、フローラの合計6名のみで北東の森にある薬草を採集する。

明らかに戦力が少なすぎる上にそもそも新兵が2人も追加されているのは気に食わなかった。

「その命令はエルヴィンの指示か？」

「いえ、ザックレー総統閣下より上の勅令です…」

「チツ、嫌がらせか!!」

安全な内地でぬくぬくとぬるま湯に浸かっている高官に卓上で駒を動かされる感覚。兵士である以上、命令は絶対であるが、それでも納得できないものがあつた。

「すみませんね！うちの親分は調査兵を嫌っているもんで…」

「あんたは…?」

「見りや分かるだろう？憲兵様だよ！」

鋭い目つきだけで、彼が歴戦の猛者と見抜いたミケ。

それどころか、何か危険な匂いがして距離を取りたいくらいだった。

この感じは、やんちゃな頃のリヴァイ兵士長と同じ感覚である。

この憲兵は肌に染みつくほど血生臭いので更に危険かもしれない。

「大総統様は、どうも調査兵を信用しきれなくてね……我々が代わりに参加するってわけだ」

「長年、壁外で活動している調査兵団を信じられないと？」

「だからこそよ！壁外で何やってんのか調べるのが我々の仕事さ」

リーダー格の憲兵は、短剣を指で回して遊びながら発言していた。

ただし、一見すると遊んでいるようでも斬り掛かれるようにしている感じすらある。

さきほど参加していた憲兵の大半が新兵であった。

腐敗している憲兵団は、新兵に仕事を押し付けてきていた。

ただ、彼を筆頭とする7名は、ベテラン兵のようで風格を感じられる。

「了解した…ただし、何かあったら信煙弾を撃ち上げてくれ」
「分かっているって！優秀な俺達に任せておきなさいって！」

ミケの肩を叩いて再び壁外に向かっていく異様な雰囲気を漂わせるベテランの憲兵。彼らを見た第一分隊の兵士達に警戒感を出させるには充分であった。

「俺も薬草を採集しに行く!!」

「はあ!?!何言ってるの!?!」

マルロは、薬草を採集する任務があると知って参加を志願した。
ボリスもヒツチも寝耳に水であり、同僚が狂ってしまったかと思ってしまった。

「その薬草を集めれば、大勢の命が救えるのだろうか?」

「ええ、100個の感染症に特效薬としての効果があるけど…」

「だから行くんだ…今回も負傷した奴らが居るしな」

フローラですら困惑させるほどマルロは真面目だった。

憲兵団が腐敗していると知って彼は、それを正す為に必死に訓練し入団した！

ところが憲兵団で生活している内に正すのは「人」ではなく「仕組み」だと感じ始めた。

巨人戦で役に立つ【立体機動】が旨いほど、内地に行つて巨人と遭遇しない矛盾。

今回は例外的に巨人と交戦したが、よく考えれば可笑しなことだと気付いた！

「クラースさん、どうしますか？」

「次の作戦の責任者はお前だろう？」「人類最強の女」、フローラ・エリクシア？」

「クラークさんまで頭オルオさんになってしまったのね…」

「おい、どういう意味だ…」

第三分隊出身のオルオは、よくクラークと口論する仲である。

性格は合わない2人だが、何かと接点があり暇さえあれば雑談するほど仲が良い。

退院して間もないオルオがクラーク先輩に異名を伝えたのは間違いないだろう。

どんどん乙女らしくなくなる異名にフローラは頭を悩ましていた。

「で？どうするんだい？」

「どうせ、王都から来た憲兵御一行様がご参加されますし、彼の遺志を尊重しますわ」

「じよ、冗談でしょ!?! マルロ、正気なの!?!」

「ヒッチ、俺は決めたんだ! 何かを変えるなら自分から変えないといけないってな…!」

ヒッチは、マルロの決心した顔を見て溜息をついた。

馬鹿だと思っていたがここまで馬鹿だとは思わなかった。

だからこそ、放置したくないのであった。

「じゃあ、私も行くわ」

「お前こそ正気か?」

「どっかの誰かさんが調査兵団に感化して死なない様にお目付け役は必要でしょ…」

本当は行きたくは無かったが、ここで見送ればマルロが死ぬ感じがしたのだ。

何故かは分からない。

調査兵に志願したマルロを、ヒッチは必死に宥めようとして失敗し、見送るのが精一杯。

そして案の定、戦死して「最後は後悔して死んだだろう」と調査兵に告げられる悪夢。デジャブなのか、並行世界の記憶なのか、未来の出来事かは分からない。

「なによりさ！私の見えない所で死んで欲しくないのよ」

「じゃあ、お前の前で死ねってか？」

「はぁーホント、乙女心を理解できない奴ね」

「…意味が分からん」

愛を向けられる当事者以外の全員がヒッチがマルロを気にしていると察した。

なのに当の本人は、まったく気づかないどころか嫌われていると思っっている。

このままでは、カップルが成立することは無く平行線を辿るだろう。

本人たちの問題であり、誰も介入する気はないがそれでも何かしたくなる関係である。

「俺は遠慮するぞ！また地獄に行くなんてまっぴらだ！」

「ボリスさん、貴方の意見が正しいですわ」

同じくストヘス区支部の憲兵であるボリス・フォイルナーは拒絶した！
それが正しい反応だと第三分隊の隊員達とヒツチは何度も頷く。

「そういうことで調査兵団の馬を手配しましょう」

「馬？馬なんて同じじゃないのか？」

「普通の馬だったら巨人に遭遇した時点で逃げ出しちゃうわ！」

「だから調査兵団の予備の馬を手配しますわ！」

意外にも専用馬を所有している調査兵団の兵士は少ない。

新兵に至っては、コロコロ馬が変わるほどである。

何故なら調査兵団の兵士は戦死する可能性が高い為、相棒になる前に終わってしまうからだ。

兵舎で唯一、私室が兵士に割り振られるほど兵力の消耗率が高い調査兵団。

だからこそ、基本的に人見知りをしない優秀な走りを見せる調査兵団の馬は高額なのである。

「でも良いのか？ 作戦と違った行動をするなんて…」

「マレーネさん！ 先に破ってきたのは王政側ですわ！」

「それもそうね」

一度壁内に帰還したフロローラたちは作戦の変更を書類で知らされた。

調査兵団の第一師団5名は壁内に待機。

代わりに王都から来た7名の兵士が派兵されるといふ事だった。

さすがに新兵ではなかったが、フロローラを含む調査兵は良い顔をするわけなかった。

ベテラン兵とミケの嗅覚リーダーが使えない以上、巨人戦で圧倒的に不利になるからだ。

王政の命令なので、やむを得ず従うが彼らは不信感を募らせている。

「よお！ フロローラ・エリクシアだな？」

「はい、そうです！」

「短い間だがお世話になるぜ」

「こちらこそよろしくお願ひします」

フローラは中々のナイスガイの憲兵と握手をしようと左手を差し伸べた。

「済まん…握手をする文化は苦手だね」

「そうですか…」

王都から来た憲兵の誰もが握手をせず、何か違和感が覚えた。

リーダー格の彼ですら消極的な関係で、作戦に従事する感じた。

そして、憲兵たちも荷馬車を連れてきており何やら補給物資を積んでいる様である。

「こいつも壁外に同行しても良いよな？」

「問題ありませんが…壁外調査専用の馬でしょうか？」

「もちろんだとも！さつきも投入したが使うことは無かったがな！」

「備えあれば患いなしとも言いますし、良いですね！」

何を積んでいるのかは、リストを見せてくれたので確認したが特に問題はなさそうだった。

ただ、荷台は布製のテントのような物に覆われており、中身を拝見する事はできなかった。

悪路で物資が荷台から飛び出すことがあるとはいえ、やりすぎではないか。

巨人が襲撃してきた時、荷台の中から状況を確認する事ができない。

そう思ったが、そもそも壁外に出撃する機会が無いので仕方ないだろう。

フローラは指摘する事はせず憲兵の要請に従うしかなかった。

「出撃しますわー！」

第58回壁外調査は終了し、今度は薬草収集の任務が開始された。

場所は、カラネス区から北東にある巨大樹の森。

第57回壁外調査で利用した巨大樹の森より小規模で、以前から手入れがされていない場所である。

そんな場所なので人の手が入っていない分、更に暗くて視界が悪いのが想定された。

「絶対に薬草を持ち帰ってみせるんだから！」

手綱を新品に交換した荷馬車でクリスタは馬を走らせ、森へと向かっていく。時刻による太陽の位置、地図による建物や山の位置。それだけを頼りに進んで行く。

調査兵団の兵士は6名。

カラネス区の憲兵は2名。

王政の命令で王都から来た7名の憲兵達が巨大樹の森と向かっていった。

「巨人だ!!」

「この距離なら追い付けないだろう!無視だ!」

小規模な長距離索敵陣形を展開して、巨人を無視して行く『葉草収集部隊』。

兵士の間隔が狭く、信煙弾では回避が間に合わないので「閃光弾」を常備している。

閃光弾は、音響弾や信煙弾を装填する専用の銃で撃ち込む代物である。

調査兵団が所有している半数を持ち込むほど、巨人と交戦する気は無かった。

「おいクリスタ、こっちであつてるのか?」

「問題ない…と思う」

「貸してみろ！断言してくれないとこっちまで心配になる！」

行き先が心配になったユミルは、クリスタから地図を受け取って辺りの風景と交互に確認した。

右翼側には、3つの風車が連なっており地図に記載された通りである。

「よし、問題はないな」

「前方で閃光弾が…」

「遠回りで行くか！」

ユミルの指示で「うん」と頷いたクリスタは馬に進路変更をした。

前回の壁外調査と同じように、なるべく巨人を避けて進軍した。

「マレーネ！大丈夫か？」

「巨人のアキレス腱を斬ってきた所だ！問題ない！」

「いや、俺はお前の心配をしていたんだが？」

「同情や心配をするなら酒を奢ってくれば良いよ？」

「破産させるなら団長にしてくれ…」

合計、4体の巨人と遭遇したが討伐する事もなく何とか逃げ切る事が出来た。先ほどとは違い、巨人の掃討作戦でない以上、交戦を避けるのが賢明だった。一見すると、巨人を放置する事で包囲される可能性があったが…。

「ここでも損害を出すわけにはいかないわ」

調査兵団の歴史は、巨人に挑んで屍を積み重ねていくだけのものであった。

ようやくエルヴィン団長の時代で見直されたほど、惨敗の歴史である。

データー・ネス班長が教鞭を取っている時、そんな話を散々にされた。

フローラは良く居眠りしていて時間外に補習講義を何度も受けていたので覚えてい
る。

「はい終わり！」

部隊が遭遇した巨人とは別で、進路に居て邪魔だった10m級と15mの巨人を討伐

したフローラ。

「巨人と遭遇する機会が一番多いから調査兵団に所属している女にそんな事は通用しなかった。」

先代の調査兵団の団長も同じように目の前に出現した巨人を討伐してきた。

…が先代の団長とフローラには決定的な差があった。

「クリスタ！ユミル！巨人の脅威は去ったわよ！」

「だってよ？」

「うん、すぐに行く！」

「ついでにガスの補充をするわ！」

フローラは退き際が良く最悪の事態になるのを回避できる事である。

努力すればいつかは報われると信じている歴代の調査兵団の団長。

努力しても報われないなら、すぐに打ち切つて他を目指す彼女。

死地から何度も生還した経験と、大勢の知り合いから得た情報を活用できるのが強みだった。

あれから特に問題が発生する事もなく、一行は目標である巨大樹の森に着いた。女型の巨人を誘い込んだ森とは違うので、以前取り残された調査兵は存在しない。もしかしたらと思い、フローラは“声”を聴いてみたが無反応で静かであった。残念ではあるが、巨人は森の奥におり、短時間であれば交戦しないだろう。

「クリスタ！どれが目的の葉草か分かる？」

「うん、葉は扇形で根元が赤色だよ！」

巨大樹の森に目的の葉草は存在する。

巨大樹の原始林である以上、日光が当たりにくく背丈が小さい植物は生えにくい。逆に言えば、そこを克服すれば植物界の生存競争に打ち勝つことができる。

日光が少なくとも繁殖できるように進化した植物であったが故にそれらは、そうせい叢生していた。

「なんかあつさり目的地に辿り着いたな……」

「デイルクさんよお！そんなにスリリングな経験がしたいならソロで帰れよ」

「クラース、もしかして俺の事が嫌いなのか？」

「嫌いだったらこんな事を言わねえよ！」

「だよなー」

デイルク班長は、最悪の事態を想定したが、あっさり目的地に辿り着いて肩透かしを食らった。

ミケ分隊長の【嗅覚】で巨人を事前に把握できないほど怖いものはなかった。

巨大樹の影から、いつ巨人が飛び出してきても可笑しくはない。

クラースの辛辣の言葉がありがたく感じるほど気を抜いてしまいそんな感覚である。

「クラース先輩とデイルク先輩は、引き続き退路の警戒をお願いします」

「おいおいフローラ、入団して二か月もしない内に偉くなったものだな」

「では、新兵に相応しくない索敵任務を変わって頂けませんか？」

「死にたくないから嫌だ！」

フローラをおちよくつたら痛恨の一撃を喰らった2人は、即座に提案を拒絶した。

ミケ分隊長からフローラは、自分と同格の巨人察知能力があると告げられていた。進軍ルートで巨人とほとんど遭遇しなかったのは彼女のおかげだと理解している。だからこそ巨大樹の森で索敵なんてしたくなかった。

「ところでどれだけ薬草を摘むつもりだ?」

「少なくとも持ち込んだ荷台に載せられるだけ積む予定です」

「この辺りの薬草を絶滅させる気か?」

「人類が全滅するよりマシでしょ?」

ガスを補充したフローラは上機嫌だった。

前から開発されてきた専用の小型ボンベがついに補給物資になって荷台にあった。

シユツルムシリーズやブリツツシリーズの装備は、通常のカスボンベだと不便だった。

装置が小型というものがあるが、立体起動中にボンベが地面や壁に衝突する可能性があつたせいだ。

そういつた事情もあり彼女は、いつもより返答にキレが出た。

「こつちは準備ができたぞ」

「はい、分かりました！すぐに行きます」

王都から来た憲兵の報告で、フロローラは不機嫌になっていった。

ツーマンセルでお互いの班が見えるように薬草を捜索している。

フロローラはマレーネ先輩と共に索敵、遊撃要員として活動する予定だった。

ところが憲兵たちが、索敵の手伝いをするのと志願してきてしまった。

断り切れず自分と全く知らない憲兵7名が、辺りを警戒することとなった。

「サネスさん、3名の姿が見えませんが…」

「奴らなら我々の反対方向に向かつていったぞ」

「そうですか、もう一度作戦を確認しておきたかったですか…」

無表情な女とスキンヘッドのゴークル男、そして経験が豊富そうなおじさん。

城塞都市から派遣された憲兵は新兵だけだったのに、今回は癖が強い人たち。

もつとも憲兵に参加してもらっている立場なので特に抗議をするつもりは無かった。

ただ、どこに行ったのかフロローラは確認したかっただけである。

「皆さま、これから巨大樹の森の奥に行きますが、問題はありますか？」
「「「ない」」」」

ちなみに馬のライリーは荷台の近くにある巨大樹の幹に待機させている。

本人は、【壁外調査】というのが自由に外を駆け回れるイベントだと思っていた。

だからこそ、待機させられているのに憤っていたが野菜を食べたら特に気にしなくなつた。

それはともかく、フローラは馬を連れて来る気はなかった。

「では、行きましようか！」

フローラの指示に従って憲兵4名が追従し立体機動で巨大樹の森を駆けた！

『薬草収集班』から離れて何分が経つたのだろうか。

少なくとも巨人が出現しても収集班に気付かれない距離であることは確かだ。

風で樹木は揺れて葉は音を立てて不思議な空間を醸し出ている。

ここが巨人と遭遇する壁外でなければ気分転換には良いかもしれない。

「やっぱり、なんかおかしいのよね…」

後方の憲兵に聞こえない程度で愚痴ったフローラ。

背後にはスナツブブレードを構えた兵士2名。

マスケツト銃を構えた兵士2名が続いていた。

一見すると銃を持つている時点で可笑しい話だが、それ以上に気になった点があった。

「だからみんなと引き離れたんだけど」

振り返って特に変わった様子がない憲兵たちを見て彼女は気付かれない様に嗤った。

既に負の感情を『声』として聴ける彼女は、彼らの魂胆を見抜いていた。

だから、わざわざ自分一人だけで巨大樹の森の深部まで連れて来た。

そう、自分だけで戦えるように！

彼らと【戦闘】になってもいいように！

王都から来た【中央第一憲兵団】！

アルミンの両親を射殺した彼らなどフローラは最初から信じてはいなかった！

「久しぶりの感覚ね」

後方から4人の殺意！前方の右側から2名、そして左から強烈な殺意を感じ取ったフローラ！

地面に両方のアンカーを撃ち込んだと同時に！

前方にある巨大樹の幹から1人の大男が未知なる装備を身に付けて出現した。

彼女は慌ててワイヤーを巻き取った瞬間！

発砲音が2発、鳴り響いた！

「バン！バン！ってな！」

「くうっ!!」

さきほどまでフローラが待機していた巨大樹の枝がボロボロになっていた。

1秒でも判断が遅ければ、ワイヤーを巻き取る速度が通常の立体機動装置の2倍でなければ！

彼女は、散弾で肉塊が辺りに飛び散り、ミンチ状態になっていた。

「これを躲けるとは、さすがだな嬢ちゃん!!」

「悪運だけは強いのです!」

「じゃあ、その悪運は今日で終わりだな!!」

中央第一憲兵団のジェル・サネスを含む正規兵4名!

中央第一憲兵団の対人立体機動部隊の隊長、ケニー・アッカーマンとその部下2名!

合計7名の憲兵が!

女調査兵を追撃する!

恒久的な文化の持続を揺るがす技術発展と、本気で巨人を掃討しようとする思考。

調査兵団、駐屯兵団、憲兵団のトップ、そしてザックレー総統との人脈と信頼。

そしてなにより、王政を本気にさせたフローラ・エリクシアを抹消する為に処刑を開

始した!

5 2 話 フローラ VS 対人立体機動部隊

「人類最強の兵士」と称されるリヴァイ兵士長。

その実力は、一個旅団に匹敵すると言われているが実際は1個師団と比べても過小評価である。

そんな彼を『一人前に生き残る』処世術を叩き込んだ男。

老いたといえ、リヴァイ兵士長と互角の身体能力を持つ男が！

新型立体機動装置を纏って散弾をぶっ放してきた！

「ああつ！」

それを見たフローラは感動し、オーガズムで絶頂しかねない快感で震えていた！

新型の立体機動装置を考えるだけで喘ぎ声を漏らし、見悶えていた。

王政に睨まれて暗殺される立場の女がする表情と思考ではなかった。

「ハアハア…ずるいですわ…」

フローラ・エリクシアは、壁にぶつかっていた。

それは、立体機動装置に身体能力がついてこれてない問題だ。

二か月もしないうちにワイヤーを巻き取る速度が2倍になるという日進月歩の開発スピードに！

身体能力が全然追いついていなかった！

もちろん、立体機動が大好きで検証の為に106回も医務室送りになった命知らずの馬鹿女！

そんな彼女でも、リヴァイ兵士長やミカサなどの人外の肉体とは大きな差がある。

「おいおい嬢ちゃんよ…命を狙われているのに暢のんき気に眺めてるなよ。それともビビったか？」

「いつ死んでも可笑しくない兵士からすれば通常運転ですわよ…今回は人間だっただけで…」

散弾を回避して華麗に地面を着地したフローラは、暗殺者のケニーを見上げて待機していた。

その隙を見逃さないケニーの部下2名による散弾攻撃を巨大樹で回避したフローラは返答する。

別に想定していたので、恐ろしくは無いし、なにより立体機動装置を見たい好奇心が強かった。

というか、そもそも殺されかけるなんて日常茶飯事で、もはや慣れた事であった。

「命を狙われる事なんて、両手で数えられる事しかしてませんわ!!」

「充分多いだろうが!素直に死んでおけよ!」

ケニーは、わざわざ自分の居場所を声で知らせてくる女に困惑していた。

多分、馬鹿なんだろうと自分を納得して腿ももに装着したカートリッジから散弾の銃身を交換した。

捨てられた空葉莢は、そのまま落下して音を立てて地面に衝突した。

「死ね!」

「オラア!」

ケニーの部下たちは、その音を合図にしたように一斉に発砲した！

「危なっ！」

フローラの頬を散弾の欠片が軽く擦った！

運よく躲せたが事態は好転していなかった！

スナップブレードを構えた憲兵2名が彼女を両断するつもりで強襲してきた！

さすがにこれ以上、回避できないので巨大樹の幹を利用し、駆けて逃げ出した！

「そっちだ!!」

兵士達の声で相手の位置を把握したフローラは、近くに逢った幹にアンカーを撃ち込んだ！

そして、わざと目立つように飛び出した！

「舐めてるのか!!」

馬鹿にしている様に堂々と出てきたフローラを見て激怒した憲兵！

怒りのあまり周りに気を配る事ができず立体機動で突っ込んでいく彼はワイヤーに激突した！

脚に引つ掛けたせいでバランスを崩し、地面に激突した！

それを確認するまでもなく、握り締めたワイヤーの感触で判断してアンカーを巻き取った。

「それはこっちの台詞なんですけど…」

フローラも、こんなわざわざ回りくどいやり方で暗殺しに来た彼らに困惑していた。

この第58回壁外調査に勅令を出して参加させてきた王政の重臣。

アウリール大臣とゲラルド大總統がこれを仕組んだのは疑いようがない。

少なくとも大總統ではないと、兵士は動かないので彼が主犯なのは理解できる。

ただ、せつかくの特殊部隊の運用が下手くそ過ぎて、無能としか思えなかった。

「わざわざ正々堂々と殺しに来るなんて、紳士な方々ですわね！」

「こっちにも事情があるんでな！分かったらさっさと死んでくれ」

自分だったら、壁上固定砲に細工して整備不良にみせかけた爆発で事故死に見せかける。

壁上固定砲の操作は、立体機動の次に高得点が入る実技で兵士を修了するには必須科目である。

だからこそ訓練兵だけで壁上固定砲を任せられるし、兵士なら誰でも触れる以上、悪用できる。

フローラは、効率の良いフローラの暗殺案を4つ見出した所で兵士たちの連携に違和感を覚えた。

「もしかして…」

その疑問を確信に変えたフローラは巨大樹の幹から飛び出していった。

「あつ、見つかったやつた…」

「撃て!!」

「なんてね」

幹の背後に回ろうとしていたマスケツト銃を構えた憲兵2名に向かっていく。

そのマスケツト銃も制式装備とは別物のようで、連発で発砲してきた!!

狙いを定めている隙にフローラは立体機動で彼らの上空を舞って初弾を回避!

次に巨大樹の幹を思いつき蹴って、急な方向転換とガス噴出で2発目の弾丸を回避した!

そして彼らの背後に堂々と着地した。

「このアマア!!」

「舐めやがって!」

1名が短剣と取り出して襲撃し、もう1人が鞘からスナップブレードを装填し斬り掛かろうとした。

しかし、彼らはフローラを殺すことができなかった。

「ぐふっ!」

「ほっほ!げほっけ、けいい…」

対人立体機動部隊のケニーは、憲兵2名を巻き添えにしてフローラに向けて散弾を撃ち込んだ！

発砲音と共に放たれた散弾は憲兵の腹に穴を空け、もう一人の頭を文字通りぶっ飛ばした！

惨劇の場に残された憲兵は、ケニーに恨み節を呟いて痙攣して数分後に動きが停止した。

「やっぱり！わたくし以外も抹消対象が居るようですわね！」

「おいおい、お前が逃げなかったら死なずに済んだんだぞ」

それを察していたフローラは発砲音がするまでしゃがんで散弾を回避した！

音を聴いた後は、すぐに巨大樹の幹に刺したアンカーのワイヤーを巻き取って去っていく！

「躊躇いもなく同僚を撃ったって事はー」

フローラの抱いた違和感、それは憲兵の負の感情だった。

『死にたくない…』と何度も誰かに殺されるような感情であった。

最初は巨人の事だと思い、特に気にしてなかったが何のことはない。

「暗殺が成功しても殺す癖に良く言うわ!」

こんな回りくどい暗殺方法を選んだ理由は、自分と中央第一憲兵の4名の殺害であった。

おそらく何か失態をしでかして、暗殺を成功させたらチャラにする約束でもしていたのだろう。

賭けは当たり、躊躇いもなく撃つてきた時点で、暗殺成功しても殺される運命だったのだ。

「おいケニー! 話が違うぞ!!」

「時間を稼いでやったのに始末しねえお前らがわりいんだよ!」

「そんなわけで憲兵さんたち! わたくしに協力する気は?」

「ない!!」

「あら、残念ですわ…」

スナツプブレードを構えた憲兵2名が動揺したのを見て同士討ちを計ったが見事に失敗した。

フローラは、口では残念そうに言つて見せたが、そもそも期待してなかった。むしろ、気になったのはもう2人の方だ。

「いつまで減らず口を叩く気!？」

「死ぬまで!」

「さっさと死ぬ!」

ケニーの副長、トラウエ・カーフェンは呑気に姿を見せつけている女に散弾を撃ち込んだ。
んだ。

ところが、散弾を撃ち込む瞬間だけ明らかに動きが違った。

まるで予想していたかのように背後からの散弾を回避する化け物!

追跡されているのに最低限の動きしかせず、逃げる事も振り切る事も考えてないようだった。

それどころか、アンカーを外し落下してオーバーシュートさせられて背後を何度も取られていた。

「グランツ！挟撃するよ！」

「分かっている！だがどこ行きやがった!?!」

同僚の言葉を聴いて彼女は、慌てて獲物を探した。

それでも見つからなかった。

まるで蒸発したように消えてしまった。

「カーフェン！グランツ！上だ!!」

上官のアツカーマン隊長の一言でガスを噴出させて退避した！

その瞬間、背後で高速で落下していく何かを風で感じた。

警告が無かったら殺されていたと分かり、2人は冷や汗を掻いた。

とりあえず何故暗殺されることになったかフローラは必死に考えていた。

そんな事を考えている暇ではないが、いつ死んでもおかしくない戦場に居続けた結果

！

もはや、死にかけるなど日常過ぎて物思いにふけりながら交戦できるようになっていった。

「くそっ！これでもダメなのか!？」

スナップブレードで切り裂こうとした憲兵の真下を潜り抜けてフローラは戦線離脱した！

少なくとも一般兵より上等な装備を身に着けている憲兵は自分を殺さないと処分される。

その恐怖や嘆き、苦しみが「声」になって届いていた。

「一番まずかったのは、あれね」

1年前、南方訓練兵団に訪れたフリッツ王。

その王政で重要な陛下を殴った事のせいかもしれない。

あの日、陛下が訓練兵の訓練を拝見されて、視察が終わり同じ食堂で食事をしていた。それは、間近で生活されている陛下を見る事で、王を意識させるのが目的であった。

「今日は豪華ですね！」

「そりゃあ、フリッツ王がいらつしやるもの……」

サシャの判断は間違っていない。

その日の献立は、煮つ転がした芋にパン、久しぶりに肉の切れ端と豆のスープだった。いつもなら豆のスープと、パンだけであるから、かなりの豪華であることは分かる。

「マルコ……実際に陛下のお姿を見てどんな感じだ」

「陛下の民を想う顔を拝見させて頂いて、絶対に憲兵になってみせると改めて誓ったよ」

「まあ、そうだよな！憲兵じゃないとできない事があるもんだ！」

「その通りだよジャン！」

「うん？まあいいか」

「王にこの身を捧げるためです!!」とまで断言したマルコの思考は一切変わっていない。ジャンは、内地に行つて安全に暮らす憲兵の意味で発言していた。

実際に陛下を拜見して更に覚悟を決めたようでマルコは凛々しい顔をした。

2人とも何か会話が噛み合っていないのに気付いたが些細な問題で気にしなかった。

「あれ?」

訓練兵団の兵士は、兵士として修了するまでフリッツ王の私兵のような存在である。

彼が「主人」であるが故にこの日ばかりは、兵士と同じ食事をする。

それは護るべき王に親近感を抱かせるのと同時に王に忠誠を誓う儀式でもあった。

その王から一番近い席で食事をしていたフローラは違和感を覚えた。

「むぐっ…」

陛下が苦しそうな動作をしており、侍女たちが大慌てで何かをしていた。

「何かあったの？」

「芋を喉に詰まらせたとかじゃないんですか」

「サシヤ…さすがに失礼でしょ…」

“通過儀礼”の際に調理場から盗んできた『蒸かした芋』を食べていたサシヤ。

訓練兵団のキース教官の眼前で芋を食べており、困惑した彼の表情は忘れられない。

とにかくそのインパクトで【芋女】という異名を獲得した。

その芋女が陛下の喉に芋を詰まらせたというのだ。

あまりにも馬鹿らしくてフローラは食事を続行していた。

「陛下!!」

未だに侍女たちが陛下の背中を叩いており、何も解決できていなかった。

というより、背中を叩いている時点で何かを喉に詰まらせたようだ。

陛下から一番近い席に居る彼女は居ても立っても居られなくなった!

「もう!!」

あたふたしている憲兵たちを無視をしてフリッツ王の方へ向かったフローラ。優しく背中を叩いている侍女たちは、彼女の姿を見て動揺した。

「おりゃああー！」

フローラは勢いよく背中を叩いたが、未だに喉に詰まっている様である！

「おりゃあああ！！」

今度は背中を殴った！！

旨い事、衝撃が良かったのか陛下の口から食べかけの芋が飛び出して地面に転がった。

「いっほいっほっー！げほっ！！」

ようやくフリッツ王はつかえていた芋が無くなったおかげで何とか呼吸ができた。

顔は青ざめていたが、辛うじて命に別状はないようである。

とりあえず、調理班が処罰されそうだな…と思っていたが大切な事を思い出した。第三者視点から見るとさきほどの行動は、フリッツ王への暴行！

【不敬罪】以上にヤバい事をしていたのに気付いたフローラ。

「だ、大丈夫ですか!？」

さすがに文字通りフリッツ王に手を出してしまった彼女は声をかけるのが精一杯だった。

侍女に介抱される陛下は、特に気にしている様子がなかった。

それどころか死にかけたのに呼吸が整ったら平常心に戻ったようだった。

さすが、その御年でも未だに公務を行なう事はあるとフローラは感心していた。

次の一言を聞くまでは…。

「ばあさんやあ…飯はまだかのう…？」

小声でフローラに向かって呟いた言葉。

たった一言だったが、彼女が思い浮かべてきたフリッツ王の像を破壊するには充分だった。

「マルコ、貴方が仕えようとしている王は、ただのボケた老人」だと言いたいくらいに。ただしお飾りの王だと発覚すると王政が混乱するのは間違いない。

その残酷な事実を知る事もなく死ねたマルコがある意味、幸せだったのかもしれない。

とりあえずフリッツ王がボケ老人である事は、草葉の陰まで持つていく事にしたフローラ。

とにかく、フリッツ王を救った事に侍女や憲兵から感謝された記憶がある。

「ええい！ちよこまかと!!」

目の前に飛び出してきたスキンヘッドの男の下を潜り抜けて散弾を回避するフローラ。

遠距離攻撃ができる敵部隊に命が狙われているのに暢気に過去を思い出していた。

もしかしたら現在のフリッツ王が「お飾りの王」だと知っているのが問題なのかもしれない。

そのおかげでやりたい放題できる王政の重臣たちにその話を知って狙われるとしたら…。

あり得る話かもしれない。

「ああ、思い出した」

その後の出来事には続きがあつた。

なんとか王から芋を吐き出させる事に成功したフローラ！

感謝されて悪い気持ちがいなくなつたが、その芋がどうなつたか確認してなかつた。

どこに行つたのかと見渡したらサシヤの手にあつた！

「サシヤ！何をしてるの!?!」

「えっ、勿体ないから吐き出された芋を食べるんですよ!」

食い意地があるサシヤは、胃を満たすために老人が吐き出した芋すら食べるつもりだつた！

フローラは思わず彼女を叱つた！

「ダメじゃない！芋を洗ってから食べなきゃ!!」

「そうですよね！今から芋を洗ってきます！」

「違うでしょ!!!」

ミーナと侍女長に同時突っ込まれたやり取りがあつた事を思い出した。

もちろん、これも手帳に書いてある。

ちなみにその後、別室でフリッツ王は侍女長に、フローラとサシャはキース教官に叱られていた。

いつもの事なので、適当に受け流していたら一日飯抜きをされて2人は死にかけて。

立体機動でエネルギーを消費しまくるフローラ、1食でも抜くと倒れそうになるサシャ。

もし、ミーナとクリスタがこっそり差し入れしなかったら餓死していただろう。

「死ね！」

「まだ死ねないわ」

他の事を考えていても身体が勝手に動いて攻撃を回避したフローラ。

ケニー以外の全員が疲弊しているのを確認して口角をつり上げた。

彼女の興味は、新型の立体機動装置であって、命を狙われるのに抵抗はない。

でも殺されるのは嫌なので抗いますというスタンスの彼女は、あえて逃げ切ろうとはしなかった。

「なんだありや？正気じゃねえな」

ケニー・アツカーマンもフローラの動きに警戒していた。

滞空時間が立体機動よりも落下の方が長い彼女。

地面でギリギリで立体機動されるせいで、5人で追跡しても背後を取られてしまった。

そしてなにより、逃走する気もなければ、攻撃してこないのも不気味だった。

まるで対人立体機動装置の性能を調べられているようである。

「妙だな…」

この対人用立体機動装置は、アンカーの射出機と散弾の射線が同一方向である。それは、利点も欠点も混在しているが、今回の場合は欠点になった。

そのせいで、部下達はおろか自分ですら片手で発砲するのが精一杯だった。わざわざ背後に回ってくるのは、その弱点を把握されていたからだ。

問題なのは、そこまで分かかって、攻撃してくるどころかまるで誘い込まれている感覚である。

さきほども自分の部下が盾になるか確かめているような素振りであったのが違和感があつた。

「おいサネス！俺達の出番だ！あの馬鹿女のワイヤーを切り裂いてやろうぜ！！」
「…ああ、そうだな」

ジェル・サネスは、カラネス区で護るべきアウリール伯爵を見捨てて逃げ出した憲兵である。

中央第一憲兵団の兵士でありながら、身を惜しんだ結果、王政の重臣を見捨ててしまった。

すぐに使命を思い出して彼の元に戻ったが時遅く、手配書に載ってしまった。

それでもなんとか、名誉挽回の機会を与えられて藁にも縋るつもりで参戦した。ここで、あの女を殺せなければ死ぬのは自分である。

王政に尽くしてきて手を汚してきた以上、王政に失望されて抹消される末路だけは嫌であった。

一方、頭エレン娘は新型の立体機動装置だけを考えていた。

訓練兵時代、彼女の「三大欲求」が『食欲』、『立体機動』、『鎧の巨人討伐の目標』であった。

そのせいで、性別フローラとか頭エレン娘とか散々な異名で呼ばれていたが特に気にしなかった。

「隙あり!!」

「しまった!?!」

スナツプブレードを両手で構えた憲兵の一人の視覚外から突入したフローラ!

2本のブリッツメツサーIIが彼の喉元を切り裂くこともなくそのまますれ違っただけで終えた。

ここで憲兵の装備が二式刀身である事を確認した。

トロスト区防衛戦でピクシス司令から頂いた補給品の刃が士官用の二式刀身であった。

あのスナップブレードは、頑丈で通常より折れにくかった。

だからこそ、装備の更新を強く意識した。

「高級品か…羨ましいですわ」

「このお！死にやがれ!!」

着地し、立体機動で突っ込んできた憲兵が振りかぶった双剣のスナップブレードを回避した！

回避した直後のフローラに向かって対人立体機動部隊の3名が集中射撃を行なった。

6発の発砲音もむなく彼女は遙か上空に舞い上がった。

「これでだいぶ消費させたわね…」

新型の立体機動装置は、対人に特化しておりガスボンベを背負えるほど小型化されていた。

鞘や替えの刃が無い分、身軽ではあるがガスの容量は少ないと推測を立てたフローラ。

そしてなにより、絶体絶命なピンチの状況を打開してくれる頼もしい援軍が居た！

「それより皆さま良いのですの？」

「何がだ？」

リーダー格の男に話しかけたフローラ。

絶体絶命なのに自分たちを嗤っているように見えるせいで引き金が引けないケニー。

緊張感溢れる読み合いを破ったのはさきほどスナップブレードで斬り掛かった憲兵であった。

「巨人だあああああ!!ぶふっ!!」

泣き叫んだ憲兵に12m級の巨人が飛び込んできて下敷きになった。

壁内で暗躍していた中央第一憲兵団は、対人の経験はあったが巨人の経験などあるわけなかった。

ガス切れを起こした憲兵は泣き叫んで逃げるのが精一杯だった。

そして死んだ。

「巨人の巣にようこそ！せいぜい愉しんでくださいまし！」

背後から両手で叩いて潰そうとしてきた巨人の攻撃を回避してフローラは逃げ去った。

彼女は、殺意を抱いた兵士達から命を狙われたのは過去にもあった。

巨人化したエレンを目撃した駐屯兵団第一師団が確固たる意志で追跡してきた時である。

あの時は、気絶したエレンをミカサが担いで自分と2人で逃げていた。

追跡を撒く為に巨人の群れをぶつけて無事に逃げ切る事ができた。

今回も巨大樹の森の深部に誘い込んで巨人の大群をぶつけてやったまでだ。

「やりやがったなあああ!!」

ケニー・アッカーマンはここで、巨人の群れに居る場所に誘い込まれたと気付いた。巨人の掴み攻撃を回避した彼は、怒りに任せて散弾を巨人のうなじに撃ち込んだ！だが、多少の傷を作っただけで有効打にはならなかった。

「クソツ！何体居るんだ!!」

「15体ですわ」

「そりゃあどうも…何で居るんだ!?!」

「なんとなく…」

さきほどの戦闘で発生した音のせいで、付近に居た巨人達が集って来ていた。

その数、15体！

ケニーも含めて憲兵達は巨人との交戦経験がなく絶体絶命のピンチ！

対人には効果的な散弾銃だが、巨人には全く通用しなかった。

それを確認する為だけにフローラは再び暗殺者の元に戻って来ていた。

「で？お前は何をしたいんだ？」

「共闘、でもしてみますか？」

「しようがねえな！今だけだぞ」

フローラはたつた一言呟いた。

ケニーも彼女を殺せるチャンスであったが、巨人に散弾が通用しない以上、頼るしかなかった。

大切な部下2名は、巨人に追いかけて回されており捕食されるのも時間の問題だったのもある。

「じゃあ、あとでその立体機動装置を触らせてください！」

「正気か？」

「もちろんです!!」

フローラはただ、新型立体機動装置を触りたかっただけである。

それだけで命を狙われているにも関わらず、彼らを放置できなかつた。

もつとも、振り返ちをしても更なる追手が来るので、ここで恩を売りたいのもあつた

が！

こうしてフローラと対人立体機動部隊は一時共闘することとなった！

53話 茶番劇

ケニー・アツカーマンは困惑していた。

自分を暗殺する人間に共闘を持ちかけて、ましてや背後を見せるなんて。

そんな馬鹿などこの世には居ない。

「いや、居たな」

ケニーは、暴力が全てだと価値観を持っており、憲兵を100名以上殺害してきた。

そんな「切り裂きケニー」の人生を変えたのは、同じく暗殺しようとした男である。

ウーリ・レイス、奴は殺しに来た下賤の自分に頭を垂らして土下座までした。

奴には代々受け継がれてきた「力」があった。

その力は、自身の思考を歪めて、殺しに来た男まで友人になれるほどの洗脳がある。

「羨ましいな全く……！」

うなじを削がれた巨人は機能を停止させ巨大樹の幹に激突し、蒸気を噴き出し黒ずんで消滅する。

人間をいとも容易く握り潰せる圧倒的な巨人の力。

それでも死ぬときは死ぬし、殺されたらあつてなく死ぬ。

この世は弱肉強食だ。

弱い者は虐げられ、強者は強者でなければ逆に殺される世界。

強者はいずれ敗れ去り死んでいく過酷で残酷なこの世界。

だからこそ、暴力だけが全てだと思っていたケニーは、あの女にウーリの面影を重ねてしまった。

「アツカーマン隊長！」

トラウテ・カーウエンは、申し訳なさそうに上官に頭を下げた。

散弾を撃ち尽くした挙句、ガス切れで戦えなくなつたからだ。

もちろん、暗殺術や体術で殺人はできるが、相手は巨人！

勝てるわけも無く必死に逃げるので精一杯だった。

スキンヘッドでゴーグルがチャームポイントのグランツも同じだった。

「情けねえな…暗殺しようとした奴に助けられるなんて殺し屋廃業だぞ」

「隊長…」

「とりあえず生き残るのが先だ！お前らは貴重な戦力なんだからよお！」

またもう1体の巨人がうなじを削がれたようでケニーたちの近くに倒れ込んだ。

巨人が倒れ込んだ衝撃で、吹っ飛ばされそうになるのを足を踏ん張ってなんとか堪えた3人。

「予備の銃身を1本ずつ貸してやる！これで牽制くらいはできるはずだ」

「隊長…何をなされるつもりですか？」

「何って！巨人を討伐するんだよお！やられっぱなしは癪に障るし、巨人戦に慣れたいからよ！」

カーウエンの質問に簡潔に返答したケニー。

王政が次に出す目標は、巨人化能力者である。

ならば、ここで巨人を慣らしておくのが良いと判断した。

散弾2発が装填されている銃身を部下2名に渡した彼は、一目散に巨人に向かって駆け出した！

「なんだ、まだ嬢ちゃん死んでねえのか」

「じゃあ死ぬので代わりに戦ってくれませんか？」

「オイオイ、こんな老いぼれたおっさんに全てを押し付けるなよ」

「リヴァイ兵士長並みの戦闘能力を有しているのに、よくそんな弱音を吐けますね」

暗殺対象者のフローラ・エリクシアから出た『リヴァイ』という名。

相変わらず元気になってそうでケニーは思わず微笑んでしまった。

それを見て、リヴァイ兵士長と知り合いだとフローラは見抜くことができた。

「リヴァイか、懐かしい名だ。未だに元気でやっているって風の噂で聞くけどよお！」

「兵士長に見つかからない様に活動していた所を見ると、何かあったようですね？」

「無駄口を叩いている場合か？」

「ですよー」

既に巨人を6体討伐したフロローであったが、巨人の増援が来てしまい不利になってしまった。

合計13体の巨人相手にガスの残量が半分なのは心許ない。

刃であるブリッツメツサーIIは2本消費しただけで、まだ8本あるのでそこは余裕があった。

「じゃあ、ちよつくら着替えてくるからそれまでの陽動を頼むぞ」

「それができると思えますか？」

「このクツソたれ!!こつちに来るんじゃねえ!!」

巨人3体がケニーに向かって進撃してきた!

涎を垂らす巨人、女の子走りで来る巨人、目が異様に飛び出して馬面になっている4m級の巨人!

個性豊かな巨人に追いかけられているケニーは必死に逃げた!

人類最強の男に匹敵する身体能力とアッカーマン特有の戦闘能力を覚醒している彼であつても!

3体同時に巨人を相手にするのは無理であつた。

「3体の巨人に勝てるわけねえ!!」

「言い出しつぺの自分から陽動するとは物好きの殿方ですわね」

「共闘するって言うのは嘘なのかああああ?」

無視するわけにもいかず、樹の枝から飛び出して巨人のうなじにアンカーを突き刺したフローラ!

ワイヤーを高速で巻き取って、ガスを噴出させいつきに巨体のうなじを削いだ!

そのまま飛び出していった。別の巨人の首にアンカーを突き刺して同じようにうなじを削いだ!

瞬く間に2体の巨人を討伐した彼女は、最後の一体を討伐しようとした。

「やばっ!」

フローラは最後の一体になった巨人の討伐を諦めた。

別にその巨人自体は倒せるし、ガスの残量も大丈夫であった。

前方から、特定部位を損傷させないと、うなじを削げない【変異種】が強襲してきた

からだ。

凄まじい勢いの変異種の頭突きが、通常種の巨人の頭を首の根元ごと吹っ飛ばした！

「なんだありや?!」

ケニーはその頭突きをしてきた巨人を見て驚いた！

その巨人は、異様に首が長く、最低でも首だけで6 mはありそうな四足歩行の巨人であつた。

禁じられた書物に描かれていた「ろくろ首」という人間の化け物にそっくりである。

首長の巨人が首を更に長くして鞭のようにケニーに居た場所に叩きつけた！

「巨人って人間なのでかい版だけじゃねえのかよお!!」

「褐色の肌の巨人は、通常の巨人より遥かに強力な個体で厄介な能力持ちです!」

「…なんでそんなに元気そうに言うんだ?」

「では、今度は悲観的に解説しましょうか?」

「勘弁してくれよお!!」

なんとか変異種の攻撃を回避したケニーは、巨大樹の幹に身を隠した！

それを見たフローラは彼の傍に寄って変異種の生き生きとして説明をした！

調査兵団の第四分隊長、ハンジ・ゾエは、「人類の奇行種」と揶揄させる事がある。

その上官に見出されて直属の部下になった女が変態じゃないわけがなかった。

「両肘にある白色の器官がありますよね？」

「ああ、あるな」

「あそこを潰さないと、うなじを攻撃しても変異種を討伐する事はできません」

「はあ？」

「カラネス区の壁内に強襲してきた6m級の巨人と同格の化け物だと思ってください」
「チツ、年貢の納め時か……」

第57回壁外調査は、調査兵団が半壊して半日も経たずに終わった出来事である。

その日、6m級の巨人5体が50mの壁を乗り越えて強襲してきた。

偶然にも調査兵団が居たおかげで巨人による民間人の死者を出すことは無かったが……

駐屯兵団の死者は150名以上であり、更に100名以上が恐怖のあまり退役してしまつた。

その恐怖の元凶と同格の存在が目の前に居るといふのだ。
ケニーは笑うしかなかった。

「その散弾で巨人の両肘にある白色の器官を潰してきてください」

「それをする事で俺のメリットは何だ？」

「壁内に五体満足で部下達と共に生還できる以外何かありますか？」

「器官を潰したら？」

「わたくしが討伐します」

刻々とタイムリミットが迫っている。

部下が巨人に捕食されるまでの時間でもあるが、なにより薬草採集班に勘付かれる。

決心したケニーは、巨大樹の幹から飛び出した！

「なんだこの糞みてえな状況は…」

飛び出した瞬間、4体の巨人とエンカウントしたケニー。

巨人の掴み攻撃をスライディングで回避し、右肩にアンカーを撃ち出してその勢いで

飛び出した。

彼を喰い損なった巨人は追おうとして振り返った瞬間、フロラにうなじを削がれて倒れ込んだ！

14m級の巨体は、複数の巨人を巻き添えにして倒れ込んで一瞬だけ身動きを封じた。

「オラア！憲兵様のお通りだぜ!!」

アンカーを外して落下したケニーは変異種の左肩に散弾を撃ち込んだ！

ガスを節約する為に身体を捻って、近くの巨大樹の幹にアンカーを突き刺した。

対人立体機動装置の仕様上、片手撃ちしかできないがそれでも左肘を粉碎した。

それでも痛覚が無い巨人を足止めする事はできない！

変異種は、ケニーを発見して伸縮可能な長い首で折り曲げて彼を捕食しようとした！

「俺様を喰うなんて100年早い!!」

馬鹿正直に近づいて来た綺麗な巨人の顔に散弾を撃ち込んだ！

巨人討伐には役に立たない代物だが、視界を潰して足止めをすることはできた。

「ぎゃはははは！綺麗な顔を吹っ飛ばしてやったぜえ!!」

「そら！もういつちよ!!」

散弾を撃った衝撃の慣性力を利用して後ろに飛んでいく。

そして空中で空の葉莖を思いっきり勢いよく地面に投げ捨てた。

その音に反応して変異種は頭を叩きつけた。

しかし人間ではなく巨大樹の幹に頭を激突させ脳震盪が発生したのか動きが鈍くなった。

「後は頼むぜ！」

「おりゃあああ!!」

右肘を撃ち抜いたのを確認したフローラは変異種のうなじを削いで離脱した！
ケニーも彼女の後を追って駆け出していく。

「助かったぜ…あやうく巨人の糞になるところだった」

「巨人に排泄機能なんてありませんけど…」

「全く冗談が通じねえ嬢ちゃんだな」

「次、下ネタを発言したら巨人の餌にしますわよ」

「あーおつかねえな！カーウエンより怖ええ！」

ライナー・ブラウンのデリカシーの無さにはうんざりしているフローラ。

どんな悪口や叱られてもすぐに忘れる彼女でも下ネタ系の軽口は苦手であった。

そんな事を呑気に考えている彼女を撃ち殺す事が可能だったケニー。

だが、話しかけている内にただの馬鹿じゃねえと気付いた。

「…何でこっちを向いた？」

「殺意を感じましたので」

少しでも殺そうとすると、反応して様子を伺ってくるやべえ女。

巨人なんて殺意すらないはずなのに、負の感情を的確に感じ取れる能力に彼は戦慄した。

さては、過去に何かあったかと推測するしかできない。

「ぎゃあああああ!!」

壁外では、少しの油断が命取りになる。

たつた今、1人の憲兵が巨人に驚掴みされた。

ジェル・サネスは様々な悪行に加担してきたがたつた今、その罪を死で償おうとして
いる。

いや、強制的に死によつて償わされようとしていた。

「た、助け……てくれえええ!!」

彼は自分が助からない事を自覚していた。

まず、味方である同僚が全滅して、この場に居るのは敵だからだ。

暗殺目標の調査兵はともかく対人立体機動部隊3名も自分の命を狙う敵だった。

王政に忠誠を誓い、様々な汚れ仕事をしてきた彼からすれば悲惨な末路になるところ
である。

「ぐあああつ…あつ!？」

ここでサネスが巨人の掴む力が弱まっていると気付いた。

さきほどまでは握りつぶそうとした巨人が何故か蒸気を噴き出して黒ずんでいた。

「あああああ!!」

何が起こったか分からないが生還のチャンスが目の前に舞い降りた。

地獄に命綱が降ろされて必死に掴んで地上へと登ろうとしていた。

実際は、上空から落下して地面に衝突していったが些細な問題である。

「い、生きてる!？」

「ギリギリ間に合ったみたいですね」

「お前は…」

ここで自分を助けたのは殺そうとした調査兵の女だと気付いた。

「助かった…ありがとう」

とりあえず助かったので素直に感謝したサネス。

それを聴いたフローラは嬉しそうな顔をしてケニーを見る。

何か自分に言う事があるだろう的な視線を送ったが本人は見なかった事にした。

「なんでこいつを助けたんだ？」

「その方が都合が良いからです」

「ヘイトを全部こいつに押し付ける気か？」

「いえ、死体を運ぶには人手が居るからです」

フローラは、自身の暗殺計画があまりにも計画性の無さから本気で抹消する気はないと判断した。

まず、虎の子の対人立体機動装置を装着している3名の内、2名が素人であった。何度もガス欠の経験があるフローラは、できるだけガスの消費を抑えるようにしている。

それが壁外であつたら尚更である。

「意味が分からん」

「おそらく王政は、あなた方の忠誠心を試す意図があつたのでしよう」

「何故、そんな事が言えるんだ？」

「だつて凄腕の刺客なら【殺害】を優先する為、どんな手を使つても確実に仕留めますよね？」

「そりゃあそうだ」

「事故死、冤罪など壁内でわたくしを殺す機会などいくらでもあつたはずですよ」

「何が言いたいんだ？」

フローラは、ケニーの反応から彼も抹殺対象に入っているとは気付いていないと判断した。

王政の本命は、憲兵団の権威挽回と葉草だった。

彼らからすれば、勝手に潰し合つてくれという絶妙な匙加減で投入されていた。

「壁内で暗躍するプロフェッショナルが壁外で暗殺だなんて死ねつて言っているもんよ」

！」

「あくまで憶測だろうか？」

ケニーもサネスも、フローラの背後の幹に隠れていた2名の憲兵ですら戯言だと思っていた。

彼女がジャケットの懐のポケットから折り畳まれた羊皮紙を取り出すまでは…。

「これは？」

「わたくし宛に届いた『フローラ・エリクシア暗殺計画の承認書』ですわ!!」

巨大樹の幹に隠れていたカーウエンとグランツが血相を変えて思わず飛び出す情報だった。

新型の立体機動装置の開発をしている以上、王政に目を付けられていたフローラ。同期や先輩たちを巻き込みたくなかったので必死に王政と取引していた。

特にアウリール伯爵とは文通しており、辛うじて首の皮一枚繋がっている生活を送っていた。

ところが今朝、憲兵に渡された指令書にこの手紙が入っていた。

「はあ!？」

これを見たフローラは思わず声を漏らしてしまったほどである。嫌がらせかと思いきや、内容を読んでいると更に頭が痛くなってくる文面が記されていた。

『調査兵団、第四分隊所属のフローラ・エリクシア君』

『本日、君の暗殺計画が壁外で行われる』

『我々は「君が生き残れる」と分かっているにも関わらず、わざと刺客を仕向けた』

『何故だと思う?』

『答えを見出さず、生還したら我々の元へ刺客と共に出頭せよ』

承認書の空きスペースに書かれていたアウリール伯爵の筆跡と印鑑が本物だと示す証拠だった。

それどころか王政の主要4人とフリッツ王の筆跡と印鑑が捺されていた。

フローラ暗殺計画の参加者で、本人に気付かれていないと思っていたのは刺客だけで

あつた。

「嘘だろおい!!」

ケニーもカーウエンもグランツもサネスも暗殺されるフローラも！

誰もが頭を抱えなくなる事であつた。

当然である。

王政の為に尽くしてきた彼らが王政にドツキリ計画を仕掛けられていたのだ。

ガバガバな暗殺計画に沿って任務を遂行していた彼らにとっては、忠誠心が揺らぐものであつた。

一方、死刑宣告を喰らつたのに生還して顔を見せろという指示に混乱したフローラ。誰もが傲慢な王政の重臣たちに振り回されていた。

「で、この【答え】は壁外調査で戦死した刺客の死体を拝見したいと分かりました」

フローラが憲兵4名を引き連れていた時、本命の3名が襲撃してくると予想していた。

ところが暗殺計画が思いっきりバレているのにそれを知らない刺客たちに困惑した。
【答え】を探している内に憲兵の死がピースだと分かった。

何故なら効率が良い殺し方など壁内でいくらかでもあるからだ。
わざわざ壁外で暗殺しろなんて刺客も死ねと言っているものである。

呆然と暗殺計画の承認書を手にとって文面を眺める4人。
フローラはその隙に寄ってきた巨人の掃討を行なった。

「アッカーマン隊長…」

「アホらしい!!こんな糞みたいな書類なんかあこうだ!こうだ!!」

激怒したケニーは、羊皮紙の端を掴んで勢いよくビリビリに破いた!

更に折り畳んで破いて紙屑になってもなお破いてみせた。

それでも気が済まない彼は、地面に紙屑をばら撒いて踏みつけた!

人類の中で5名ほど居る痛みを嬉しがるM男が、一瞬で肉塊になる勢いで念入りに踏みつけた!

「気が済みましたか？」

「ああ」

「でもよお…巨人が…」

「向かって来る巨人は全て殲滅しましたわ！早く遺体を回収してください」

「えっ…」

未だに10体以上の巨人に懸念していたケニーであつたが問題は解決した。

10体の巨人から徒歩で逃走するにはどうすれば良いか？

フローラの答えは、巨人を1匹残らず駆逐して全滅させて安全に帰還すればいい。

確かに巨人が全滅すれば、巨人に喰われる心配は無くなって安全になる。

それが実現できるのは、リヴァイ兵士長か頭エレン娘だけである問題を除けば！

「もしかして、お前が本気を出していたら…私たち死んでいた？」

ケニーの部下であるカーウエンの呟きに誰一人答える事はできなかつた。

カラネス区壁外で単独で討伐戦績14体を出したフローラ。

一同、それは知っていたが本当にここで再現するとは思っていなかった。

補給さえあれば、何体でも巨人を討伐できるとピクシス司令に判断された頭エレン娘。

実際に目撃すれば、王政の重臣たちが暗殺に失敗すると予想してもおかしくなかった。

「いつまで…突っ立っているおつもりですか？」

「お前ら！早く遺体を回収しねえと俺達が死体の仲間入りになるぞ！」

フローラは不機嫌そうに彼らを見つめていた。

さきほどの巨人を殲滅する狩人のモードから戻っておらず悪魔の様な顔で微笑みながら告げた。

それが自分たちの惨殺宣言の予告だと勘違いして、慌てて死体回収に行く4人。

ケニーの本音が3人の行動を機敏にさせるのに充分であった。

そして、自分を暗殺しに来た人物たちに殺されると言われたフローラは落ち込んだ。

「ま、まだ来ないの…」

クリスタ・レンズは、フローラの哨戒任務が長引いているのが気になった。それにさつきから胸騒ぎがしていた。

彼女が率いていた憲兵は、その辺の憲兵とは訳が違った。

顔は良く見えなかったが、母親の首を短剣で掻き切つて自分を殺そうとした男にそっくりだった。

あの時は夜で顔が分かり辛かったが、あの目は忘れることはできなかった。

「大丈夫だ！あいつの事だからどつかで寝てるんだろう」

「ユミル!!ここでその冗談はやめて!!」

「済まん、悪かったって！」

震えるクリスタの双肩に両手を乗せて脅かすような口ぶりで離れたら激怒されてビビったユミル。

彼女を宥めようと必死に頭を優しく撫でて落ち着かせようとした。

「ところであの憲兵団って新兵とは違ったな」

「確か王都から来た連中だろう？」

調査兵団の第三分隊のクラスとデイルクも異変に気付いていた。

哨戒任務とはいえ、そこまで薬草採集班から離れるわけがない。

なのに、付近で巨人と戦闘が行われた形跡がないのに一度も帰還してこなかった。

「まさかあいつら……」

「馬車を調べてみるか？」

「そうしよう！」

同じく怪しんだマレーネが見張っている憲兵団の荷馬車に向かって行こうとした。

その時、彼らは信じられない事が起こった！

「みんな！逃げてええええええ！！」

血塗れになったフローラが大声で叫んでいた。

なにかしらの要因でそうなのは誰でも理解できた。

ところが彼女の状況は現実離れしており、脳が視界に映る情報を遮断する光景だった。

必死に走る彼女の後ろに前転を続けて転がってくる3体の巨人が迫って来ていた。

「ああああ!! 巨人が前転しないでよおおお!! ボールじゃないのにいいいい!!」

まるで砲弾が転がるようにフローラを押し潰そうと迫ってくる巨人達。

地味にこの状態だと接近戦を行なう調査兵には成す術がない状況である。

巨人にアンカーを撃てないし、突っ込んだら巻き添えを喰らって死ぬからだ。

「お前えええ!! 心配かけた挙句! 余計な事に巻き込みやがって!!」

「なんでいつも騒動の渦中に居るんだお前はああああ!!」

さきほどまで心配していたクラスとデイルクは、問題事を持ち込んだフローラに怒った!

散々迷惑かけてトラブルを持ち込む【兵団一の問題児】に!!

マレーネも呆れて荷馬車から離れてポール型の巨人の対応に向かった。

それを見届けた憲兵たちは、注意を惹いてくれた彼女に感謝しつつ荷馬車の中で着替えた。

「さて、嬢ちゃん！俺達に乗ってきた馬車に見張りが居るんだがどうすればいい？」
「わたくしに良い考えがあります!!」

さっそく遺体を回収した4名の憲兵とフローラであつたが問題にぶつかつた。

第三分隊のマレーネが中央第一憲兵団が乗ってきた荷馬車を見張っていたのだ。

「殺すか」と呟いたカーウエンを制止するように目の前に立つたフローラ。

あまりにも自信満々の姿に誰もが彼女の発言を邪魔しなかつた。

「わたくしが調査兵団に巨人をぶつけるのでその隙に馬車に向かってください」

「おいおい！そう都合良く巨人がうろついているのかよ？」

「調査兵団の兵士の知識と経験を信じないのですか？それとも信じさせても良いのです

か？」

ケニーが真つ先に疑問を投げかけたが、逆に利用されてしまった。

ここで案を承諾しなければ碌な事が起こらないと分かった4名はフローラの指示に従った。

「この幹で待機しててくださいいね」

「お前を信じるからな」

「では、また合流しましょう！」

「無視かよ…やべえ嬢ちゃんだ…」

サネスから弾丸とライフリングが施された連発可能なマスケット銃を受け取ったフローラ。

未知なる武器に興奮したのか、銃を撫でながらスキップしながら森の奥へと消えていった。

そして数分が経過して、複数の銃声の音が辛うじてケニーの耳に届いた。

そのまま待機していると、何故かボールの様に転がる3体の巨人に追われているフ

ローラの姿が！

どうせなら、そのまま潰されたらラッキー程度に考えてケニー御一行様は、馬車に帰還できた。

「どうですか？」

「少なくとも内装を見られた形跡もねえな、小細工もそのまま残ってるし大丈夫だろう」

荷馬車の中身を見られていないと判明してマレーネ暗殺の危機は去った。

代わりにフローラが呼び込んだ巨人3体に殺される危険性が出たが！

「おいサネス！お前は入り口で見張ってる」

「言われなくなっちゃって…」

なんとなく付いて来てしまったサネスを叩き出して、対人立体機動部隊は着替えた。

「絶対！神様はああああ!!わたくしに恨みがあるわああああ!!」

高速で転がってくる巨人から逃げるフローラ。

付近が平地の為、アンカーを突き刺して大空に羽ばたくことはできない。

そもそも撃ち込んでも、逃げる前に潰されるだけであるが…。

「フローラああああ!!」

そしてクリスタが馬に乗って前方から駆け付けてきた！

それを見たフローラは、無言で専用銃に予め装填された音響弾を取り出した。

「もおおお!!」

牛の鳴き声を真似したかのように鳴くフローラ！

彼女から放たれた音響弾は、その声すら打ち消した！

「ガスが限界なのがいいいい!!」

音響弾の衝撃が全身に伝わって混乱した巨人たちを強襲した！

手始めにアンカーを撃ち込んだ一番前に居た巨人のうなじを削いだ！

その衝撃で双剣の刃が折れたが気にすることは無くロツクを解除して刃を巨人に投げつけた！

目を狙ったつもりが口内に消えていったが、咽たので結果オーライって奴だ！

「次！うっ……ここぞでえ!？」

2体目の巨人のうなじを削いで最後の巨人に向かおうとした時に重要な事実気付いた。

ガス切れでアンカーが撃ち込めなくなっていた。

それどころかガスボンベを交換しない限り、立体機動ができなくなった。

「もうどうにもなれー！」

鞘であるブリッツシャイダーIIを手早く外したフローラは生身で巨人に飛び込んだ。

痙攣している巨人のうなじに乗って何度もブリッツメツサーIIで滅多切りにした!!
普通の刃では斬る事はできない皮膚であるが、巨人を両断するというコンセプトで作られた刃。

巨人のうなじを削ぐために、しなやかで折れやすいスナップブレードとは違い!刃が通用した。

こうして第三分隊の3名が到着した時には、巨人と人間の血で汚されたフローラが佇んでいた。

「フローラ、巨大樹の森の奥で何をやってたの?」

「巨人を15体以上討伐してました!」

元気よく返答した彼女に額を手で抑えて座り込んでしまったマレーネ。

呆れて声も出せない調査兵団の同僚達。

クリスタ、ユミルも合流して先輩の3名に事実を告げたフローラは叱られてしまった。

薬草が山ほど積まれた荷馬車を護衛するマル口とヒツチは、その様子を呆れたように見守った。

「薬草を摘んだことだし、早くカラネス区に帰還しましょう！」

「自分勝手な奴のせいで、帰れなかったただけど？」

「マレーネさん！お説教は後日でお願いします！」

こうしてフローラ率いる薬草採集班と護衛班は、無事にカラネス区に帰還した。その道中で屯していた巨人4体をさくつと討伐した記録は無かった事になった。

何故なら報告する前に中央第一憲兵団と共に王政の重臣が居る建物に向かっていたからだ。

「悪魔の居城へ、ようこそお戻りになりました」

「それは皮肉ですか？」

「俺が保証するよ！あんたは悪魔だ！」

「嬉しくありませんわ！」

ケニーの軽口に反撃する余裕があるフローラ。

中央第一憲兵団は、暗殺任務失敗で落ち込んでいたが、暗殺対象は一番元気であった。

もはや死刑執行される囚人と女看守のように建物に入る一行。

「どうする？」

「やべえ……入りたくねえ」

「サネス、お前が行けよ」

「嫌だ！せめて王政に尽くして戦死したいんだ……」

アウリール大臣とゲラルド大統領が居る部屋の扉を誰一人開くことはできなかった。

中央第一憲兵団の兵士たちは、立場が弱いサネスに全てを押し付けようとした！

「第58回壁外調査から帰還したフローラ・エリクシアです！密約に基づいてここに参りました！」

「入室を許可する！」

そんな事知るか馬鹿！と言わんばかりにノックを3回してから自己紹介と要件を伝えた彼女。

魔王の2人も、そうしてくるかと予測していたかのように穏やかな声で入室を許可し

た。

自身を暗殺しようとしてきた魔王の居城の『謁見の間』に臆さず堂々と入るアホ女。それを唾然として見つめていたが、思い出したかのように4人は死体を担いで入室した。

54話 偉そうに椅子に踏ん反り返る大臣と大總統と兵士

ある日、自分が暗殺されそうになったらどうするべきか。

所属している組織の上層部から刺客が送り込まれたらどう対応するべきか。

同期や先輩、お世話になった人にも危害が加わるのを避けるにはどう対処するべきか。

分からない。

分かるわけではない。

「フローラ・エリクシア君、どうしたのかね？座りたまえ！」

「失礼します！」

調査兵団の第四分隊所属のフローラ・エリクシアは指示があるまで待機した。

ピエール・ジョナ・アウリール伯爵の命令でようやく着席することができた。

同席しているのは、ザックレー総統ですら、処刑する権限があるアルフォンス・ゲラ

ルド大統領。

内政を司り、事実上の王政のトップであるアウリール大臣。

彼らと向かい合うのは、彼らに暗殺する計画を立案され、実際に殺されかけたフロラ。

王政の忠実な下僕にして、自分を暗殺しに来た4名の中央第一憲兵団。

そして、中央第一憲兵団の兵士だった3つの肉塊。

「さて、さつそくだが君が導き出した【答え】を聴きたいのだが宜しいかな？」

「はい、問題ありません」

アウリール大臣からの問いに対して返答したフロラ。

言葉1つ1つを慎重に選んで、自滅しないように取引をするつもりだった。

いや、調査兵団の末端である新兵がそもそも交渉する立場ですらないのは分かっていた。

交渉する為のカードがあるから辛うじて会話が成り立っていると彼女自身が自覚している。

「答えは、同じく抹殺対象だった憲兵の死に様をお二方が確認したいという結論に達しました」

「ほう？何故そう思った？」

「何故なら壁内で効率よく殺せる手段などいくらでもあつたはずです」

「ましてや、権力闘争を制して頂点になつた、お二方なら常人の思考に至る事は無い名案を……」

「結構だ！次は我々の意見を述べるとしよう」

大總統の命令で口を噤む彼女。

作り笑いで誤魔化しているが、必死に交渉の勝利条件を確認していた。

最悪、同期たちさえ生き残れば、自分の目標を達成できる。

ならば、それを第一優先にして交渉するべきである。

勝てる敵ではないなら、最低限の勝利を確保して敗北するしかない。

「君が導き出した答えは良く分かつた。では、フローラ君！暗殺される時、どう思った？」

ここでケニーとフローラは、2人が誘導尋問しようとしているのに気付いた。要するに全てを話して無様な姿で命乞いした挙句、処刑される女兵士が見たいのだ。彼女はエレンを含む同期まで危害が行く可能性がある以上、誘導されるわけにはいかなかった。

「暗殺されると分かった時、『またか』と思いました」

「また？ 妙な話だな、我々以外に刺客を送り込んだ情報などないが？」

「ええ、同期ですらその存在を伝えておりませんので……」

そこでフローラは第三勢力を示唆する発言をした。

自分達の指揮系統から外れている勢力。

さぞかし、気分が悪い事だろう。

王政を思うがままに支配してきた彼らすら知らない勢力など許すわけがない。その勢力の存在は、彼らの興味を惹くのに充分であった。

「興味深い話だな……どこの勢力が君を暗殺しにきたのだ？」

「トロスト区のスラム街で居住している極貧層です」

「うん？」

「わたくしは何度も彼らに殺されそうになりました」

思つても居ない勢力の名が出てきて困惑した2人。

質問をしたゲラルドに至つては、最下層の勢力が：？と想像すらできなかつた。

彼らからすれば、学もマナーもない搾取されるだけの愚民としか思つていなかつた。

中央第一憲兵団の面々も予想外の話になつて困惑した。

「巨人に襲撃されたトロスト区が復興が進んでいないのはお二方もご理解頂いているはずです」

「そうだな」

「そして今まで拠点にしていた調査兵団は、見捨てる様にカラネス区に拠点を移しました」

「そのせいで彼らは、調査兵が裏切り者だと決めつけて危害を加えるようになりました」

トロスト区は、超大型巨人に門を破られたせいで住民の3割が犠牲になつた。

復興しようにもまず住民が3割程度しかおらず、門が使えない以上、調査兵団は拠点

を移した。

更に畳みかけたのが駐屯兵団の本部が移転する計画が出た事である。

トロスト区北部にあるウォール・シーナの突出した城塞都市のエルミハ区に移転する
というのだ。

これで辛うじておこぼれで生活してきた住民も飢える事になる。

「たかが、貧乏人だろう？」

ゲラルド大總統は、軽い気持ちで感想を述べた。

たかが貧乏人。

その一言がフローラの負の一面を見せるきつかけとなった。

「木を齧りカビを喰らい排泄物を啜るあばら骨が見えるのに腹が異様に膨れた飢餓の住
民」

「埋葬された腐敗した死体を掘り出して、ガラスの破片を突き刺し分解し持ち帰る墓泥
棒」

「春を売るだけで食い繋いでいける娼婦を殺害し、効率良く三大欲求を満たす強姦魔」

「子供たちに恵んでもらった食料を強奪し貯蓄し、銃器や刃物、違法薬物と交換し成り上がる者」

「そんな彼らに無駄飯を喰らい税金を散財させると揶揄される調査兵が居たらどうなりますか？」

今まで見下してきた調査兵団の女兵士の雰囲気が変わった。

最初は誰もが動揺を誤魔化す為だと思っていた。

ところが、話を聴いていくうちに馬鹿女から悪魔に見えてきた。

瞳孔を最大限に開いて両手を動かして話しかけてくる女が怖くなってきた。

「あら、どうなされたのですか？」

「い、いや、結構だ！これ以上は……」

「ダメですよ……わたくしが返り討ちにしてきた刺客の話を最後までお聴きして頂かないと……」

ズレたのか兵服のジャケットが落ちると、そこには両肩から手の甲に至るまで傷塗れであった。

ここで彼らは、この場に居るのは歴戦の猛者ではなく、2桁以上の殺人者だと理解できた。

口では優しい口調で話しかけているが、目が笑っていない。

そしてさきほど話して人物たちを彼女が返り討ちにして殺害してきたのも充分理解できた。

「ご存じですか？心臓を一突きしても人間って即死しないのですよ。例えば数分後に死ぬと分かっているでも痙攣しているせいでまだ動くと錯覚し、念入りに刺してしまいます。まあ、しょうがないですね。わたくしも最初に返り討ちにして殺人した時は動かなくなるまで滅多刺しにしたものですわ。それに比べれば巨人は良いです。殺しても罪悪感などありませんからね。巨人は死体が消えるのも良いです。死体を隠蔽する手間も必要ないからです。そしてー」

蔑まれていて壁内で評価が著しく悪い調査兵団新兵であるフローラ。

彼女が切れる交渉のカードは少なかつた。

彼女が不利な交渉でひっくり返す手段は、暴力しかない

人は痛みが無いと学習しない。逆に言えば痛みによる恐怖は長続きする。

「なるほどな…」

三桁の憲兵を殺害した「切り裂きケニー」と呼ばれた男は、彼女の違和感の正体が分かかった。

この女は、人間の皮を被った悪魔だと実感した。

自分は、リヴァイに処世術を叩き込んで一人前と判断したら彼を見捨てる様に離れた。

！
掌を血で汚してきた自分は人の親になる資格もなければ、幸せに生きる資格がないと

だが、目の前の女は違った！

「死にかけるなどいくらでもありますよ？」

「商売敵から恨まれて毒を盛られたのでそれを悪用して毒殺した話でも訊きますか？」

まるで人間のしきたりに基づいてしつじぶ交渉している悪魔のようであった。

彼女の瞳だけでも、二桁以上の殺人をしているのに純粋な笑みで話しかける悪魔。

誰もが殺人に嫌悪感を抱いて引き摺るのに…。

目の前の女は、そんな事を気にせずに日常生活を送っている。口ぶりから殺されかけるのが日常生活のように発言していた。

『俺が保証するよ！あんたは悪魔だ！』

『嬉しくありませんわ！』

この建物に來た時、ケニーは冗談で悪魔と呼んであげると彼女は本気で嫌がった。

悪魔は、悪魔と呼ばれるのを嫌がる。

何故なら、『悪魔』という単語を作り出したのは下等の存在である人間だからだ。

だが、悪魔は悪魔と自称する時がある。それは何故か？

「権力闘争を制して頂点に立ったお二方ならご存じのはずです」

「追い詰められた政敵がどんな手段を取るのかを…」

「こう見えても、商人としていろんな所に投資して儲けてます」

「儲かるという事は誰かが大損している事ですし、商売敵の商人が刺客を何度か送ってきました」

悪魔は『悪魔』と自称する事で人間が恐慌に陥り好みである負の感情を欲するのだ。まるで料理を美味しくする一工夫の様にー。

まるで食事を盛り上げる刺激的なスパイスのようにー。

まるで悪魔が絶望した人間を愛しく見る様にフローラは、嗤いながら話しかけてきた。

「分かった！君が我々以外にも狙われているのは良く分かったので話を元に戻すぞ」

ゲラルド大総統は、彼女を脅すつもりが逆に脅されて思わず話を切り上げてしまった。

優しそうに話しかけながらも残酷で非情な性格の彼が怯えたのは、他にも理由があった。

「おい、お前……」

「血が……」

直接彼女と向き合っていない中央第一憲兵団の兵士も異変に気付いた。

フローラの額から、口から、首から、腕から傷が開いて流血が滴れ落ちていた。

彼女は、極限まで興奮すると古傷が開いて流血をする。

106回も医務室送りをされたが、その半数以上が古傷が開いて強制的に送られたものであった。

キース教官は、定期的に出血をする彼女を「瀝血のフローラ」と異名を付けたほどである。

「次は毒殺ですか？事故死ですか？名誉棄損ですか？狙撃ですか？巨人ですか？裏切りですか？」

「あまりにも死にかけてせいでも慣れてしまいましたわね」

至る所から血を垂れ流して発言するその姿は、血塗れのアンデッドが話しかけてくるものである。

大總統と大臣は、無様に死んだ憲兵を馬鹿にして次はお前の番だと告げたかった。

カラネス区壁外で単独で二桁の巨人を討伐する実力者なので、部下では暗殺できないと分かった。

ならば、脅迫して手綱を握るのも良いし、ここで自決させるのも良かった。だが、フローラ・エリクシアという女は、彼らを逆に脅迫した。

「ひいひい…」

フローラは左手をテーブルに軽く押し付けて大總統の顔を見ただけである。しかし、彼はそれだけで戦意が喪失した。

「どうなされたのですか？気分がよろしくないようですけど…」

フローラは瞳孔を最大限に開いて血塗れになり作り笑いしているだけである。ついでに巨人を三桁討伐して、刺客を二桁殺人してきた殺意をぶつけただけだった。ただ睨めつけるだけで、カラネス区正門の守備兵が失禁する威力であるから…。彼らから見れば、地獄に居た死者の集合体が現実に出現した化け物だと思っただ事だろう。

『もう、どうしようもないから切り札を使ったけど、これからどうしようかしらね』

フローラは、王政の重臣たちから発せられる負の感情を“声”として聴いて詰んでるのに気付いた。

どう返答しても、状況が好転するどころか悪化すると分かってしまった。ならばとるべき手段は限られた。

巨人を三桁討伐してきたのに、見くびっている彼らに【恐怖】を教えてあげる事だった。

彼女には、【恐怖】という感情は欠如しているが、どういふものなのか知っていた。

「では、わたくしが刺客に暗殺されないと気付いたのに何故、刺客を送ってきたのですか？」

「えっ…」

「【君が生き残れる】と判断されたのに刺客を送ってきた答え合わせをしませんか？」

既に負の感情で分かっていたが、フローラは2人に追及した。

極限まで興奮しているせいか、心なしか身体に違和感があった。

そしてここで自身が出血をしている事に気付いた。

「いや、その…」

「賢明な大総統閣下なら、素直にわたくしが暗殺される素晴らしい返答があると信じていますわ」

それさえも利用する強かさが、彼女の強みである。

『おいおいアウリールの旦那…失禁して気絶してやがる』

フローラは積極的にゲラルド大総統に話しかけていた。

何故ならアウリール大臣が何故か気を失ってテーブルに突っ伏しているからだ。

経験豊富であるおかげで耐えられるケニーは、誰よりも冷静に物事を判断できた。

調査兵団の末端の兵士が王政の重臣2名を脅すなど予想すらしていなかった。

ただ、面白そうだから自分たちに危害を加えるまでは放置するつもりだった。

「ケ、ケニー…」

「なんだい？そんな震えながら話かけられても困るが…」

「彼女を調査兵団の兵舎にご案内し……」

「閣下！ わたくしは答えを知りたいのですよ？ わざわざ暗殺承諾書を送り付けてきた真意を！」

血塗れの両手をテーブルに叩きつけて思わず立ち上がったフローラ。

置いてあったコップが倒れてお茶が血塗れになった絨毯を更に汚していった。

まるで地獄から抜け出した亡者を捕らえに来たケルベロスのようなであった。

むしろ、少女の皮を被っている悪魔の分、余計に質が悪かった。

「君は物事を焦り過ぎている」

「よく言われます」

「だから少し落ち着こうではないか？」

「刺客を送り付けられた挙句、ここに出頭を命じられたのに？」

「だからこそだ……ちようどそこにお茶があるだろう？ それを飲みたまえ」

「お茶は絨毯に染み込みましたが、それを舐めろという指示でしょうか？」

「ぐっ……！」

毒を入れていたお茶であるが、さきほどの彼女の行動で台無しになってしまった。もちろん、フローラは彼の負の感情から出されたお茶に毒があると分かっていた。

だからこそ、ここで畳みかけて徹底的に牽制する必要があった。

商人の血が流れているからか、リーブス商会やマルレーン商会の会長と交渉できる実力があつた。

故にここで念押しで脅さないと、今度は同期たちがこいつらに殺される。だつたら脅すまでである。

「まるで私が絨毯や靴を舐めさせて見下す男みたいに言うじゃないか？」

「アウリール大臣の手紙にそう書いてありましたわ」

証拠を犯人に見せつける探偵の様に手紙を差し出したフローラ。

優しい口調ながらも殺意剥き出しで渡してくるせいで受け取るしかない大總統。

明らかに立場が逆転していて「暴力こそが全て」というケニーの価値感がここで発揮されていた。

「ひゅー！やるね嬢ちゃん」

「ケニーさんにも言いたい事があるのですけどよろしいでしょうか？」

「大総統閣下が先だろう？何か伝えたい事があるんじゃないか？」

「ああ、そうでしたね」

ケニーとフローラが雑談している時にゲラルドは渡された手紙を必死に読んでいた。要約すると、同格であるアウリール卿が自分に対して良く思っていない事。

そして文脈から大臣の弱みを握られているよういつもの彼らしくない文章だった。

「大総統閣下！」

「な、なんだね？」

「わたくしから2つ提案がありますがよろしいでしょうか？」

「ああ、構わんよ……」

既に悪魔に屈してしまったゲラルドはただ提案を聞くしかできなかった。

「まず1つ目、カラネス区壁内に巨人が侵入してきたのを踏まえて補給拠点を作りたいです！」

「補給拠点？」

「突出した城塞都市同士に線を結び、菱形にして、その辺の中間に拠点を設置します」
「例えば、東のカラネス区と北のユトピア区の間、レイス辺境伯領に置くなどです」
「何故だ？」

「巨人が壁から乗り越えた時の拠点としたいのです」

フローラは、すみやかに補給拠点を作りたかった。

だが、ピクシス司令ですらこの案を実行する事はできない。

何故なら王政に反乱の意図があると判断されるからだ。

ならば、その王政のトップに直訴すれば良いと判断した。

「私がそんな事を許可すると思ったか？」

「では、何故憲兵団の権威挽回をする為に第58回壁外調査を行なったのですか？」

「王を護るのが憲兵である以上、民の信頼と信用を失墜させたままではいけないからだ」
「違いますね」

ゲラルドの意見を一蹴したフローラ。

「あなた方は、今までの負の遺産を次世代に押し付けたいだけです」

「意味が分からん」

「王政府は100年以上に渡って壁外に興味をもつ事をタブーとしてきました」

「もしそれを違反する者であれば、中央第一憲兵団などで排除してきました」

「それは良いです。問題なのは壁外からの干渉ですわ！」

王政府が壁外に興味を持たせないのは何か意味があると分かっているフローラ。

まるで鳥籠のように人類を閉じ込めている50mの壁。

巨人が人類を効率良く捕食する為の養人場であるかどうかは、大して問題ではなかった。

「超大型巨人と鎧の巨人は、確実に壁外から来た巨人能力者です！」

「それをあなた方は受け入れなかった」

「なっ…」

「もし、壁内人類が巨人に滅ぼされるのを待っているのであれば反撃などしません」

「でも、あなた方は反撃したどころか、ウォール・マリアを奪還する意思すらある」

「答えは単純ですわよね？自分の代で終わりたいくないからでしょう？」

フローラは、大臣も大総統も巨人や内戦で滅ぼされる気がないと分かっていた。

壁内人類を壁外の勢力に献上するならこんな非効率なやり方をしないからだ。

なら、何故足掻くのか、答えは単純である。

滅びるなら次世代に責任や責務を押し付けて、現在を最大限愉しんで謳歌するためである。

よって、現時点で人類が滅ぼされるのは彼らも望んでいないと踏んだ。

「カラネス区に侵入してきた巨人5体、運よく討伐できたから良かったものの……」

「何が言いたい？」

「いつ、同じように50mの壁を乗り越えて巨人が侵攻してくるか分かりませんね」

「もしかしたら、この時、巨人がこっそり侵入しているのかもしれない」

「君のいう事はもつともだ！すぐに補給拠点の構築に移るとしよう」

ゲラルドは、彼女の案に反対だった。

だが、巨人が実際に乗り越えているのはそこにいるアウリール卿が目撃している。

少なくとも自分の代で滅びるつもりはない彼は、彼女の提案を受け入れるしかなかった。

「その計画にわたくしや商會を囁ませて頂けますよね？」

「もちろんだとも……」

「では、念書を記入していただきたいですわ！」

フローラはすかさず、証拠となる念書を取り出して記入を迫った。

口だけでは信用していない彼女は、徹底的に怯えた彼を利用して有利のうちに地盤を固めていく。

徹底的に追い詰めるのではなく逃げ道に誘導して優しく本人も納得する妥協案を成立させる。

それが有利になった場合の交渉のやり方である。

「書いたぞ……」

「ありがとうございます」

「これで良いか？」

「いえ、もう一点あります」

ゲラルドは今度は何があるのかと恐怖した。しかし、述べられたのは意外な事であった。

「現在、新型の立体機動装置の開発情報を提供したいと思います」

「ほう？」

「秘密裏に開発していれば疑われるので、こっそりデータを提出したいと思います」
「それによる我々のメリットは？」

「対人立体機動装置の開発に生かせるなどのメリットがあります」

フローラは、別系統の立体機動装置が存在すると知り、その技術が欲しくなった。か弱い自身の肉体では、リヴァイ兵士長と比べなくても限界がある。

だからこそ、新たな技術を求めていた。

要するに技術交換をしてお互いの立体機動装置の性能を高めようとする試みである。技術4班は優秀であるが、所詮1つの班なのでやれることは限界があった。

ならば、王政に認めてもらい公式に技術交換した方がお得と判断した。

「つまり対人立体機動装置に技術をよこせと？」

「その装置に自信がないので、わたくしを仕留めきれないと確信があつたはずですよね？」

「ああ、そうだ」

ゲラルドは、さきほどから無言で黙っている対人立体機動部隊の兵士を眺めた。

実戦で運用して数々の欠点が明らかになっており、何も言い返せる事はなさそうだった。

「もちろん、人目に付く事はしませんけどね」

「断つたら？」

「…大總統閣下なら断る権限など息をするくらい容易ではありませんか」

フローラは大總統に笑ってみせた。

それは単純に諦めの窮地から出たものである。

ここで彼が騒げば、今まで有利状態だった彼女のターンが終わる。

下手すれば駆けつけてきた駐屯兵に射殺されて全てが白紙に戻るだけである。大總統に一般兵が脅迫するなど、死罪同然であるからだ。

「分かった、それも念書に記入しよう」

人は恐怖に陥ると正常な判断が下せなくなる。

ザックレー大統領すら処刑できる権限があるゲラルド大總統は、調査兵の言うままに念書を書いた。

それを偉そうに椅子に踏ん反り返って見つめるフローラ。

明らかに立場が逆転しているが、普通に考えればいつでも逆転して可笑しくない状況だった。

だからこそ勢いで全てを誤魔化している。

「カーウエン、来客を玄関まで案内してやれ」

「了解しました」

この後、気絶から復帰した大臣と大總統に追撃をしたフローラ。

コミュニケーションの化け物で誰とも仲良くなる彼女。

皆から頼られてメンタルケアの達人とまで言われた事があった。

逆に言えば、舌先三寸で精神を追い詰める事が可能であるという事だ。

精神的に追い詰められて涙目になった2人は、ケニーに泣きついてしまった。

さすがに可哀そうに思ったケニーは、フローラを退室させる為に命令した。

上官の命令に従ってカーウエンは、フローラを玄関まで送迎した。

「…なんでこちらを見るのですか？」

「あんたならこの世界を盤上ごとひっくり返せると思つてね」

「あのーわたくしはか弱い乙女なんですけど…」

「調査兵団の一般兵が大總統と大臣を脅迫できるわけないでしょ」

カーウエンは、フローラに感心していた。

自分だったら成す術なく処刑されていたのに、大總統の弱みすら掴んでいた。

アウリール卿が書いた手紙から、彼も何かしら弱みを握られていると分かった。

上官に泣きついて頼ってきた所を見ると、自分達が暗殺失敗を追及されることもないだろう。

「ちよつと良いですか？」

「なに…」

優しくフローラに抱き着かれて困惑した彼女。

「何の真似？」

「これも何かの縁です。忘れない様に抱擁しておきましたわ」

「何か意味があるの？」

「少なくとも一生の思い出にはなるでしょう？」

「そうだね」

あれほど流血していたのに香水の香りで落ち着くほど良い匂いがした女。もしケニーにされれば嫉妬してしまうほど、安らかな気持ちになった。

「また、貴女とは会える気がしますわ」

「今度は、敵じゃない事を祈るよ」

「わたくしもそう思います」

カーウエンは、こういう奴が世界をひっくり返すんだろうなどと他人事だった。

もし、ケニーと出会わなければ彼女の部下になっっているなと思うほどに。

こうして魔王の居城から堂々と兵舎に凱旋するフローラ。

ただ、1つ失敗したのは、脅し過ぎて王政府側が慎重な対応になってしまった事である。

「まあ、しょうがないわ」

使いたくない手であったが、こうしないと生きていけないからだ。

ミーナが見たらさぞかしびっくりするだろう。

そんな他人事のようにフローラは兵舎に向かって歩いていく。

「巨人のおかげで交渉が成立するなんて…変な話よね」

思わず愚痴ってしまうほど、巨人様様であった。

壁内に巨人が侵入してくる。

適当な口実をする為に発言したことである。

それは当たっていた。

まさか、数日以内にウォール・ローゼ内に巨人の大群が出現するとは夢にも思わなかった。

55話 ダリス・ザックレー総統と芸術

事実上、王政府に宣戦布告してきたフローラ。

そもそも王政の地雷原でタップダンスした彼女が悪いのだが、やつちやつたものは仕方がない。

脅迫されたので逆に「鎧の巨人」に向ける殺意をぶつけて逆に脅迫して有耶無耶にした。

さきほどは、なんとか切り抜けられたが次は無い。

「デレトフ閣下にこれ以上借りを作りたくないわね…」

【中央商会連盟】の会長にして王政の重臣であるメテオール・ニコラ・デレトフ。

アウリール大臣やゲラルド大総統と同格の存在である。

全ての兵団を顎で使える大総統や、貴族に対して発言力がある貴族院の長と比べれば目立たない。

だが、平時における王政では、金融と財政政策を担当し、物資の供給を担当している

組織の長。

総統局も貴族院も金と兵糧がなければ動けない以上、王政の裏のトップといつても過言ではない。

「関わりたくないわ…」

商人の血を引いているせいか、彼を尊敬すると同時に恐ろしい強敵である。

利点がある内は泳がしてくれるが、少しでも隙を見せれば人生の終着点まで追い詰めてくる。

そんな性格の彼とは知り合いどころか取引先である。

第58回壁外調査の副産物として、入手した大量の薬草。

それは、中央商会連盟隷下の王立薬剤師会という組織に納品されるのだ。

「とりあえず連絡しないと…」

あくどいやり方で政敵を左遷するなり暗殺してそれぞれの組織の頂点に君臨している2人。

しかし、少しでも陰りがあれば、その座を狙う後任者や政敵がその座を強奪しに来る。調査兵团や同期、自分に危害を加えてくるのを防ぐには、権力闘争させるしかない。それをするには、彼の協力が不可欠である。

「まず壁外調査の報告書、薬草の報告書、戦闘記録の報告、壁外調査の出費報告…あとは—」

ただでさえ書く書類が多い上に、王政の重臣2名を牽制する為に政敵に情報を流す必要がある。

それと同時に離間工作もしなければならぬ。

カラネス区長に提出する書類もあれば、エルヴイン団長に提出する書類もある。

「やる事が多いわ…」

その前に兵服を着替えて風呂に入浴してないといけない。

そして機嫌が悪いライリーに騎乗し走り回ってストレスを解消させる。

更にデレトフ侯爵に提出する書類があるのだ。

やる事が…やる事が多すぎる！

「とりあえずお風呂!!」

壁外調査による重労働で発生した汚れと汗、そしてなにより血痕が付いた兵服を着替えたかった。

血塗れのジャケットを脱いでおり、できるだけ路地を通ってフローラは兵舎に帰還した。

「あつーフローラ！」

兵舎の扉の前にクリスタとユミルが屯しており、なんだか話が弾んでいるようである。

そしてフローラに気付いたクリスタは嬉しそうに話しかけた。

「あの後、病院に薬草を届けてきたんだ。これであの子のお父さんを治せるかもしれないって！」

「薬草はあくまでおまけみたいなものよ。大事なのは彼の身体次第だから…」
「そ、そうだよね…」

詳しい情報は聴いていないが全身が痙攣するタイプの破傷風の致死率が高い。

ましてや、不衛生な巨人に噛まれたとなれば更に酷くなるだろう。

そしてなによりその症状が出て数日が経過していた。

もし、それを乗り越えても兵士として復帰するのは不可能であろう。

「大丈夫よ、死にかけてた経験者目線で見ると、症状は末期じゃないし峠を越えれば回復するわ」

「106回医務室に行ったフローラのお墨付きだぞー」

「そうだよね！絶対に治るよね!!」

「おい、聞いてくれよ！きつきまで『これでダメだったらどうしよう』ってクリスタが泣きつ…」

「あ!!あの時、フローラが上層部を説得してこなかったら！きつと上手くはいかなかったよお!!」

ユミルに内心を晒される前に大声で誤魔化したクリスタ！

彼女が一番、助かるか分からずに経験豊富なフローラの意見を聴きたいほど追い詰められていた。

【こういう事】に慣れていて経験豊富な彼女の言葉は、なによりも安心できるものである。

「任務中にたくさん助けてもらったし、本当にありがとう！」

「ユミルの方にも同じように言っておあげたら？」

「一緒に寝る時に伝える予定で……」

「おっとそれは愛の告白か？」

「あああもう！はぐらかさないでよ!!」

エルヴィン団長ですら赤子扱いにする大臣と大統領を説得して薬草採取任務を加えた彼女。

誰かの為に犠牲になるくらいしかできない自分には、憧れと嫉妬がある。

誰にも愛されなかったから愛されるように偽るクリスタは、素で愛される人に嫉妬していた。

「説得ね…」

言えない…。言えるわけがない。

さきほど、王政の大臣と大総統を「恐怖という暴力」で脅迫してきたなんて…。

これで報復が来る事が確定していてフローラはうんざりしている。

幸いにも貴婦人に香水や化粧品を献上して、取引しているおかげで貴族と顔が利くようになった。

貴婦人たちが築き上げた交流関係は、中央第一憲兵団ですら介入する事ができない暗部である。

大総統が話の1つを聴いて口から泡を吹いて卒倒した情報もそこから入手したものだ。

「どうしたの？なんか気分が良くなさそうだけど？」

「そりやあこいつ。兵士の死体を運んでいたからな、気分が良いわけねえよな」

「とりあえず着替えて風呂に入って寝るわ」

ここでポイントなのは「食事をする」とは言わない事。

これで食い意地がある奴も疲労で寝込んでいると思わせられる。

商人モードが兵士モードに切り替えられていないのでやけに頭が回っている。

むしろ、そうじゃないと80枚以上の書類に書けないのでわざとやっているが！

「また明日ね！」

「ええ！」

まずは、自室に生息する親友を摘まみ出す事から始める！

皆は部屋を転々と移動してるのに荷物が多すぎて引つ越しできない。

故にセキュリティなどあるものではなく、王政の刺客がいつ送り込まれてきてもおかしくない！

自分ならやむを得ず対応するが、ミーナに手を汚させるつもりはなかった！

「ミーナ！これから着替えるから退室してくれない？」

「えー！私が見てないと適当に脱ぎ捨てるんでしょ？」

「むしろ血痕だらけの兵服のジャケットを折り畳む方が可笑しいでしょ！」

「まーた血塗れにしたの？」

「良いから早く!!」

血塗れになった事自体は、フロラーの過去のせいでもここまで気にしないミーナ。

そんな彼女を部屋の外に押し出したフロラーは扉を閉めて急いで予備の兵服に着替えた。

そして浴室で頭と身体を洗って湯船に漬かる事もなく、部屋に閉じ籠り書類を執筆していた。

「よしーよしーよしーよしーよしー!あとはデレトフ会長宛の書類のみねー!」

チャックリストを見て記入した書類の項目に印をつけて文章の内容を再確認!

配達先よし!

数量よし!

名前と日付よし!

指差し確認よし!

デレトフ会長宛の書類を残すのみとなった。

「書きたくない……」

アウリール大臣とゲラルド大統領と同格のデレトフ会長。

前者の2人に離間の計をするつもりなら避けては通れない存在。

王政を運営する4つの組織の長は仲が悪いが、それでも表向きは団結している事になつている。

その中でも交渉や取引のベテランであるデレトフ会長。

一歩間違えれば大きな貸しとなつてしまい、返済しきれず調査兵団生活が破産する可能性もある。

この世の摂理が等価交換の法則に基づいているなら、それ以上の代価を支払わなければならぬ。

「というか、なんで10代のわたくしが王政のトップと取引してるのよ!!」

技術発展を妨げている王政府、それでも立体機動装置を改良する為、無視はできない。

ましてや新型の立体機動装置について憲兵の新装備として配備することとなった。

もちろん、嫌がらせなので実戦データが不足している上に役に立つのか疑問だった。第58回壁外調査では、その実戦テストも兼ねておりヒツチの活躍を見る限り、概ね成功である。

問題なのは、それを王政に報告する語彙力と知識と経験が圧倒的に不足していた。
：じゃなくてたかが15歳程度の小娘が王政府のトップと交渉している時点でおかしい！

「師匠が欲しい…ザックレー總統の知恵をお借りしましょう！」

王政について同僚や上官に伝えることはできない。

もしアドバイスをもらうなら王政と部下に板挟みされているザックレー總統くらいだ。

そう思ったフローラの行動は早かった。

日が暮れて晩飯を我慢してまでトロスト区に向かおうとした！

もちろん、ミーナへのフォローを忘れずに事情をでっち上げて手紙を渡しておいた。

その後、専用装備を着用して書類一式と通行許可書、美術品を持ってライリーの元に向かった。

汗血馬のライリーは不満だった！

【壁外調査】と聞いていて思う存分、平原を駆け巡れると思っていた。ところが、ほとんど走行を制限された拳句、お留守番させられた。拗ねて昼寝をしていたが、走り足りなくてイライラしていた。

「ライリーー！」

自称主人面している女に耳を伏せて威嚇をした！

それでも好物の野菜をもってご機嫌を取ろうとしているのは理解している。蹴ったり噛み付こうとするのは後回しにして、野菜に噛みついた！

「ライリーー！これからトロスト区に向かうわよ！」

それを聴いて「彼女」は伏せていた耳を立てた！

「トロスト区」、「カラネス区」、「ストヘス区」の単語が出てくると長距離で走れるのだ！
外は暗いそんな事よりとにかく自由に成りたかった！

この街に帰って来てから路地裏しか走らされなかったが、これでストレスが解消される。

「待つて！まだ乗れてない…」

主人が袴る前に出発をしたライリー！

振り落されそうなフローラを乗せてウォール・ローゼとカラネス区を繋ぐ門に進撃していった！

「あつ！調査兵団本部に寄っていくわよ…ねえなんで勝手に進んで行くの!?!」

手綱を操作したり舌鼓を鳴らしても独走する相棒に困惑するフローラ。

頭進撃娘すら出し抜く馬は、歩行者に衝突しないようにゆつくりと走っている。
言う事を聞かなくなった相棒に溜息をつきながら仕方なく門に向かっていった。

「おい、この時間に外に出るのか？」

「トロスト区を視察されているザックレー総統に用がありませんね」

「総統局のトップと知り合いとか：：どんな裏技を使った？」

「巨人を二桁討伐すれば自然と注目されますよ」

「そりゃあそうだ！」

門衛から正式に通行許可をもらってライリーとおまけは、トロスト区に進撃した！

珍しく夜空は晴れており、もうすぐ満月なのが分かった。

明かりが無くて目視で障害物が分かる程度に月光で照らされたおかげで楽だった。

これなら夜間に巨人が侵入してきても戦えそうだった。

不謹慎な事を考えつつトロスト区の門を突破したフローラは兵団本部に向かっていった。

「ライリー、満足した？」

「：：そう、また走りましょう」

伝令の早馬を繋いでおく馬小屋にライリーを預けてフローラは兵団本部に突撃しよ

うとした。

「ん？フローラ君じゃないか！」

「ザックレー総統！お久しぶりです！」

偶然にも兵団本部から出てきたザックレー総統に話しかけられてフローラは敬礼をした。

別に畏まらなくても良いと両手を下げるジエスチャーで合図をしたザックレー。

総統命令を受けて彼女は敬礼をやめた。

「…なんかあったようだな？」

「第58回壁外調査で壁外で巨人を掃討してましたので…」

「そうだったな」

「閣下はこれからどちらへ向かわれる予定でしょうか？」

「気分転換に視察するつもりだったが急用を思い出してな、外気で整えたら執務室に戻る予定だ」

ザックレー総統は、フローラの目を見て自分に用があると分かった。抱えている書類を見ると面白そうな情報がありそうである。

「では、後日出直して参ります」

「待たんか、私に用があるのだろうか？」

「ハッ！仰る通りです！」

「一緒に執務室で話をしようではないか」

ザックレーは、兵団一の問題児が何をやらかしてきたのか気になった。

自分を頼る案件は、前例がない問題事を持つてくる彼女。

今回もやらかしたのだと分かり、裏口から秘密の通路を経由して執務室に戻った。

「ダハハハハッ！内務大臣と大総統を脅迫してきたとは、やりおつたな!!」

「閣下…お静かに…お願いします」

「大丈夫だ！この部屋は防音仕様になっておる！いくらでも叫んでも隣室には聴こえん

ぞー！」

ザックレー総統は歓喜した！

目の前の女が王政の主要4名の内、2名を脅迫してきて念書を書かせてきたというのだ。

人生の生涯を捧げて忠実な狗を演じてきて、なんとかこの地位に上り詰めた。

ただ、それ以上の事はできなかった。

総統局の総統という名の中間管理職に縛られて身動きが取れなくなってしまった。

ところが、この女は調査兵団の新兵にも拘わらず自分を乗り越えてしまった。

この快挙を聴いて笑わないわけがない。

「中央商会連盟のデレトフ会長は確かに強敵だな！」

「ハッ！今回は壁外で採取した薬草の大半を彼らが所有する事となっております」

「では、そこを攻めるべきではないのか？」

「えっ？」

「薬草を精製して薬品にして独占するつもりらしいが、それ以上はできないだろう？」

「仰る通りです」

ザックレーですら関わりたくない中央商会連盟のデレトフ。

奴は、他の幹部と違って異様に悪知恵があるせいで油断できない強敵である。

「ウォール・マリアには様々な薬草、鉱物、動物、工業都市、農地が存在する」

「5年前に喪失した影響で、他にも奪取する為、調査兵団を動かしてくるだろう」
「だが、王政は調査兵団の廃止を検討しておる」

第57回壁外調査で大損害を被った調査兵団。

それを意気揚々と王政は喜んでおり、調査兵団は幹部を招集、エレンを引き渡されると予定だった。

まさか巨人が50mの壁を乗り越えて、兵士100名以上殺害してくる事態になるとは思わなかった。

よりによって、王政の狗である憲兵がパニックを広げてせいで…。

盤石だったはずの王政が内部から崩壊しようとしていた。

本日に実施された第58回壁外調査は、それを防ぐ為に行なわれたようなものだ。

「では、壁外に出撃する部隊が無くなったら、その葉草はどうやって採取すると思う？」
「旧調査兵団の人員で結成……いえ、民間から徴兵された部隊ですか？」

「その通りだ！意地でも調査兵団を裁きたい奴らは、絶対に頼ることは無いだろう！」

壁外で任務を行なうのは調査兵団の結成理由でもあり任務としても適任である。

わざわざ廃止して王政の狗として再編成するなど士気も忠誠もあるわけがない。

調査兵団の頭をすげ替えて王政の息が掛かった駒を幹部にするくらいか。

ただ無駄死にするのは確定しているので王政の貴重な駒を喪失するだけである。

ならば以前あったウォール・マリア奪還作戦の様に民間人を使うのが手っ取り早い。

「ところがそれに困るのは中央商会連盟だ！」

「壁外の物資が安定して商会連盟に供給されないからですね」

「その通りだ！奴らは安定した収入を欲しておる！ならばやるべき事は分かるな？」

フローラは、ザックレーの真意をいまいち見抜けなかった。

王政の狗である彼は、王政の幹部を快く思っていない。

それどころか一人残らず排除しようとしていた。

しかし、排除が目的ではなく、むしろ排除してからが本番のような気がした。

「壁外においては、調査兵団が中央商会連盟の期待に応えられると宣伝すればいいのですね」

「ああそうだ、それにー」

長らく王政の中枢で狗として働いて来たザックレー総統。

彼には夢があった。

その為に半生を費やしてきたものだ。

「王政の中枢部は、良くも悪くも君を気に入っておる」

「わたくしがですか？」

「ああそうだ、奇跡的なバランスで保たれているが、もし君が死ねば全て崩壊するだろう」

調査兵団の新兵ながら王政に携わっている貴族層を取り込み始めているフローラ。

公式に記録されていないだけで、有名人になりつつある彼女は王政でも良く知られて

いた。

未だに彼女がピンピンしてるのは壁内で暗殺すると政敵にバレる可能性があったからだ。

王政は一枚岩ではなく、むしろ巨人の脅威が無かったら内戦の火種すら抱えていた。

「閣下、自分を過大評価し過ぎです。たかが個人が影響を与える範囲など限られています」

「中央第一憲兵団ですら評価された君なら、クーデタで王政を転覆させるのも可能だと思っぞ」

「君はどう思う?」

ザックレー総統から「お誘い」された。

ここでフローラが首を縦に振れば、もしかしたら本当に王政を転覆できるかもしれない。

「閣下、自分は巨人を1匹残らず駆逐したいのであって、王政を変えるつもりはありません」

「やはりそうか！ますます君を気に入ったぞ！」

「ここで軽率に首を縦に振る奴ほど面白くない奴は居ないからな」

「はあ……？」

フローラは彼の負の感情の“声”を聴いて王政の重臣たちに尊厳破壊したいのは分かった。

さきほどのお誘いも嘘ではなかったが、その提案を断った。

同期や自分が王政に狙われる危険性は無くなるが、重臣になってしまえば行動が縛られるからだ。

なによりザックレー総統を信用していなかった。

手段の為に目的すら変えている男の提案に乗れるはずもなかった。

やむを得ず断ったら、更に楽しそうに話しかけてくる男に困惑した。

「少なくとも民が王政を支持している以上、暴力で政権を奪取しても民の信頼は得られないだろう」

「はい、少なくとも100年は壁内人類を存続してきた実績がありますからね」

「そこで君に提案したいことがある」

さきほどまで笑っていたザックレーが真面目な顔になった。

それはエレンの処遇を問う特別兵法会議の議長であった顔であった。

王政トップの2人の尊厳破壊を詳しく訊いてきて笑っていた時とは別人の様である。

「君が行なった王政との密約や交渉の記録を、こつちにも秘密裏に情報をまわしてこないか？」

「もちろん閣下が望むなら、いくらでも……」

「感謝する！ 中間管理職のせいで情報の入手手段が限られていてな……」

味方は兵団の上層部が多いほどメリットがあるフローラ。

自分の夢を叶える為に信頼できる非公式な情報を欲しているザックレー。

彼女達の利害は一致し、本日からフローラは総統のスパイとなった。

「ところで3日後に調査兵団の幹部が王都に招集されるのは聴いているか？」

「はい、第57壁外調査の失敗でエレンの引き渡しが行われる予定だと聞いています」

「当初の予定から変更されて、もう一度特別兵法会議が行われることとなった」

そもそも第57回壁外調査は、エレンが人類に有意義だと証明される為に行なわれた。

結果は惨敗、巨人がカラネス区に侵入してこなければ、すぐにもエレンは引き渡されていた。

ようやくカラネス区の駐屯兵団の戦力再編が終わり、巨人掃討作戦が終了した以上！調査兵団がこの街を守備する必要性が薄れたので、王都に収集された。

「調査兵団の勝率はどう思う？」

「絶対に勝ち目がありませんね」

「再び君が証人として証言すれば時間を稼げるかもしれないぞ？」

「さすがに前回の会議で啖呵を切った以上、どうしようもありません」

フローラもザックレーも調査兵団のエルヴィン団長が大人しくしてるとは思っていないかった。

むしろ、この窮地を利用して死に物狂いで何かを仕掛けてくる男である。

すでに策を張り巡らせているのだろう。

「調査兵団の幹部が招集される影響か、104期兵はローゼの南方の地で合同訓練するそうです」

「君には必要ないと思うが？」

「はい、自分と片手で数えられる人員だけは除外されているようです」

「なるほど、また何かやらかす気だな」

壁外調査の損害を受けて、急遽に104期調査兵に合同訓練が行われる事になった。

しかし、今まで訓練すら命令されていなかった以上、何か意図があるのは間違いない。

調査兵団のベテランの兵士が、同期たちと距離を取って監視しているような感じがした。

スパイと疑われていてフローラは不愉快だったが、女型の巨人の動きを見ると仕方ない気がした。

とにかくエルヴィン団長が何か企んでいるのは間違いない。

「既に心臓を捧げている我々は、エルヴィン団長の指示に従うまでです！」

「…そうか、早死にするのではないぞ！【芸術】を語り合う友人を失いたくないのでな！」

「ハッ！生き残ってみせます」

記憶喪失した影響か、同期の顔を忘れたくなくて絵を描いているフローラ。ザックレー総統とは定期的に芸術について語っていた友人関係である。

2人とも兵士モードなので上下関係がはつきりしているが、普段は友人のノリで話し合う。

フローラが持ち込んだ『怪しげなオブジェ』は彼が目標としている芸術品に近い物である。

「そろそろお時間が近づいてきたので…」

「ああ、そうだな」

ハンジ分隊長が巨人を熱く語るのと同じで、ザックレー総統も芸術について熱く語ってくれる。

前者と違うのは、他者の意見を積極的に取り入れて芸術品を作るという心意気か。別にいい事ではあるが、さすがに第58回壁外調査で疲弊していたフローラ。

思った以上に早く相談できたので、さっさとカラネス区に帰還して就寝したかった。

「失礼しました」

適当に話を切り上げて、隠し通路に向かって歩いて行った。

本棚が回転して、秘密の入り口を隠れたのを確認したザックレーは溜息を吐いた。

「割と本気で勧誘したのだがな……まあいい！機会を待つか」

偉くも無いのに名家の血筋だけで偉くなる奴が大っ嫌いのザックレー總統。

だからこそ、王政に命を狙われても壁内人類の為に堪えた彼女を素直に尊敬した。それはそうとして、芸術をどうやって作っていくか、彼は必死に考えていた。

56話 サウナ調査兵団

「で？浮いた話は無いのか？」

「それは自分ですか？それとも同期ですか？」

「どっちもだ」

「今の所、同期で恋愛に発展しているカップルは……ないですね」

ユミルとクリスタと答えようとしたフローラは、喉に出掛かったまま呑み込んだ。

時代や環境のせいだ【同性愛】という恋愛が評価されるどころか精神病扱いされる。

巨人の恐怖で屈した兵士を臆病者と叫ぶ者は居ても、メンタルケアする要員が居ないと同じだ。

軍事心理学が発展途中のように恋愛もそうなので、レズカップルは指を指されて笑われるだけだ。

第三分隊のデイルクは、フローラのネットワークですら存在しない恋愛情報に心底残念に思った。

「ところでミケさん」

「どうした？」

「首元の匂いを嗅ぐのは止めて頂けませんか？」

「す、すまん」

大男が女兵士の首元の匂いを執拗に嗅いでいる。

普通なら変質者扱いされるのだが、誰もが慣れている光景なので気にしなかった。

カラネス区の住民ですら気にせず素通りしている時点で何かがおかしかった。

香水を纏っているので匂いを嗅がれても多少は我慢できるフローラだったが限界だった。

この調子だと股間の匂いまで念入りに嗅がれる感じがしたのもある。

「リラックスハーブでも、いかがですか？」

「こ、これは……！礼を言うぞ、フローラー！」

フローラは、香水の元であるリラックスハーブをミケ分隊長に渡した。

彼は、ハーブを受け取って匂いを嗅いでいたが、すぐに嗅ぐのをやめてしまった。

「このハーブも良いがやはりフローラの匂いが好きだ」

リラックスハーブは白色の花を咲かせるハーブで爽やかな匂いがする。名前の通りリラックスでできる甘い匂いを発するが強すぎる匂いである。

常時纏っているフローラは、その匂いを調整しており、微かに香りが漂う程度に調整してある。

ミケ分隊長は、リラックスハーブの匂いが好きだが、匂いがきつくて香水の方が好きだった。

「その匂いを調整したのが香水ですわ！」

「つまりなんだ？そのカバンに入っているのは全部香水なのか？」

「クラスさん、仰る通りです」

フローラはカバンから自分が付けている香水が入った筒をいくつか取り出した。

「それじゃあ私ももらおうわ！」

「遠慮なく！」

マレーネとリーネは、すかさず香水が入った筒を持っていった。

女性である以上、長期間の任務では風呂に入れず身体も拭けないせいで体臭が気になつていた。

調査兵団の兵士は他の兵団よりも臭い。

その気になればその日に入浴できる壁内と違って、調査兵は川の付近以外では風呂に入れない。

香水で誤魔化すくらいしかできないが、その香水がぼったくりの価格である。

ペトラもリーネもマレーネも調査兵団に所属する女は、体臭を気にするほど死活問題だった。

フローラは香水のおかげで注目されて上官全員と仲良くなれたと言っても過言ではない。

「あれ？ ナナバは、もらわないの？」

「実家から届く果物の香りで充分さ」

ナナバはミケ分隊長からフルーティな匂いと評された。

その評価通り、果物の匂いで体臭を誤魔化している。

以前、サシヤが香りに釣られてナナバの元に來たが悔しそうな顔をして帰ったのが印象的だった。

「そういえば、第58回壁外調査に参加していたクリスタって子も良い香りがしてたな」
「おっと、ヘニング！あの子が気になるか？」

「ナナバ…恋愛で弄るのはやめてくれ」

ヘニングは恋愛話になると人格が変わるナナバに飽き飽きとしていた。

調査兵団の兵士である以上、いつ死んでもおかしくない。

現に恋人がいるリヴァイ班のエルド・ジンは両腕を失う重傷で退役することとなった。

だからこそ、恋愛から身を置こうとして居るのに、わざと煽ってくるナナバに腹が立っていた。

「クリスタもわたくしが作った香水の1つを付けてますね」

クリスタは、フローラの人気が香水のせいだと気付いた。

誰かの印象に残りたい彼女は、良い香りがする女を問い詰めた。

自分にも香水の作り方を教えないと就寝からトイレの個室まで同行すると！

当初、フローラは無視をしたが、本当にトイレの個室まで入ってきたせいで即折れた。

『作り方は簡略化したわ』

『これが私の匂い！』

『ねえ、聞いてるの？』

『この香水さえあれば、皆から注目される…！』

こうして「女神」クリスタは甘い香りを纏って男性陣やユミルを惹き付ける事になる。フローラの香りが安心できる匂いなら、クリスタはいつまでも嗅いでおける優しい香りだ。

クリスタは訓練兵団に入団した時は、そこまで注目されるほどモテなかった。

しかし香水で男の鼻を魅了し、優しく健気で気配りができる様に演じた結果、大人気になった。

ついでにレシピも彼女に教えたので、フローラが戦死しても問題はない。

「話が変わりますが、『サウナ』ってご存じですか？」

「知らない」

「食べ物か？」

「香水じゃないの？」

「宝石とか？」

調査兵団に『サウナ』とは何かと問いかけたフローラであったが、誰も分からないよ
うだ。

質問した自分ですら分かっていないのだから当然である。

なんでも王都で流行っている『サウナ』は蒸気で身体をリフレッシュするものらしい。

「サウナとは個室に高熱の蒸気を満たして身体と心を清める物らしいですよ」

「蒸気か…」

「俺達には蒸気は縁があるが碌なもんじゃねえな」

ただし、調査兵団に蒸気は不審な単語に聴こえた。

うなじを損傷した巨人が蒸気を出すせいで、そちらの印象が強かった。

巨人の蒸気で身体と心を清める儀式。

かつてシガンシナ区で流行っていった巨人信奉者が行なっていたような儀式である。

知られていないが巨人信奉者のせいで、約70年前に巨人がシガンシナ区に侵入していた。

緘口令が敷かれ歴史の闇に消えたが、調査兵団と憲兵団は悲劇を繰り返さない様に継承してきた。

「まさか、俺達を誘いに来たのか？」

「ええ、ちようどこここに8人分の招待状があります」

フローラは、カバンから8枚の招待状をテーブルに広げた。

王都で流行っているらしいサウナの施設がこのカラネス区に開店するそうだ。

だが馴染みがない上に一般市民では高額の為、儲かるわけが無かった。

「フローラ・エリクシア君、サウナってご存じか？」

「いえ、存じておりません」

ちょうど、イノセンシオ商会の会長と取引していた時に話題が出た。

エリクシア家は、シガンシナ区でも有力な商人だったようで、何かと商人と縁がある彼女。

「個室に蒸気を満たして入浴する新感覚の健康法だ」

「蒸気？蒸気ならいくらでも浴びてきました。が……良い物ではないですよ」

「……相変わらず勲章を売り捌いているようだな？」

「部屋に置く場所はありませんし、金になるならさっさと売り払って投資した方が有意義ですわ」

初めて巨人を立体機動装置で討伐したキュクロ・イノセンシオの子孫である会長。

彼は第57回壁外調査の有力なスポンサーであり、貴族では珍しく代々平民と婚約する血筋である。

そんな彼には、フローラも頭が上がない存在だ。

「そんな君にプレゼントをあげよう」

「…これは？」

「カラネス区に開店するサウナ店の貸し切りできる招待状だ！」

彼から渡されたのは9人分の招待状と入店を知らせる記入用紙であった。献上品にしては、あまり嬉しくないものである。

「イノセンシオ会長！さすがに9人分の招待状を渡されても困りますわ！」

「君は、調査をしないのか？」

「えっ？」

「巨人と蒸気は切っても切れない関係だろうか？ならば調査兵らしく調査に向かったらどうだ？」

調査兵団は未知の領域に踏み出していく兵団である。

調査兵団に所属しているフローラも立派な調査兵！

蒸気風呂という未知なる領域を調査したらどうだと言われて反論できなくなった。

「調査兵団の存続に関わる時期だからこそ、愉しんでみたらいいのではないか？」
「仰る通りです」

なんか面倒だったから押し付けられた感じがするがフローラは素直に招待状を受け取った。

すぐさま記入して、自分と8名の兵士が入店すると用紙に記入して伝達した。
だからこそ第58回壁外調査の参加者である8名を誘ってみたが…。

「すまんがこれから用があつてな」

「まずどんな感じか下見をしてきてよ！飲酒できるか訊いてきてね」

「マレーネ、お前…まさか飲む気か？」

「ゲルガーもどう？」

「勘弁してくれよ…」

先輩たちは忙しいようで振られてしまった。

ミケ分隊長に至っては、香水とリラックスハーブを嗅ぐのに夢中で気が付いていなかった。

「それではお会計をしてきますので…」

「ほれ、今回は9人居る分、たけえぞ」

「…半分以上、酒代なんですけど…」

貴婦人に販売した香水の利益が今回の飲み会で消え去った。

マレーネとゲルガーという酒豪が居るのに酒場を選んだフローラが悪い。

上機嫌になったマレーネは、クラスに腕を引っ張られて兵舎に戻っていった。

「次回はいつ来る予定でしょうか？」

「ウォール・マリアの奪還の目途が立った時にしておきますわ」

「お一人でも歓迎しますよ」

「スクランブル出撃ができなくなるので遠慮しておきます」

代金を支払ってしつこい店主を宥めてフローラは店を後にした。

8名分のキャンセル代を支払っても良いが、「サウナ調査兵团」という響きに憧れがある。

単独では【団】にならない為、最低でも、もう1人欲しい所である。

「こうなったら最後の手段よ！」

フローラには秘策があった！

まず兵舎に戻って、同期たちに誘いに行った！

『蒸気』という単語を聞いたベルトルトとライナーが同行してくれた。

更に暇であったジャンとコニー、読書をしていたアルミンも参加してもらった。

これで5人揃った！

何故か女性陣は、嫌がってしまったて誘う事は出来なかった。

ミーナも誘おうとしたが、今日に限って熱を出して寝込んでおり諦めた。

「サウナか！楽しみだな！」

「蒸し風呂なんて考えたことがなかったな」

「おっ！アルミン！興味があるのか！」

「うん、伝聞だけじゃなくて、こうやって実際に経験しておくのも重要だと思うんだ」

幸いにも【サウナ調査兵团】の構成員たちはサウナとやらを楽しむにしている。

ライナーとベルトルトも故郷では聞いたことがない単語であり、興味本位で参加している。

「おい、あそこに居るのはエレンじゃないか？」

「本当ね！ついでに誘ってみましょう！」

エレン・イエーガーは第57回壁外調査で、巨人化で酷使した影響か、意識が朦朧としていた。

第58回壁外調査の2日前に体調が戻り、ようやく本日、久しぶりに外出していた。

「気分はどうだ？」

「問題ありません…」

リヴァイ兵士長は、エレンに気を遣って外出の許可を出したが上手く行かなかった。エレンが人類にとつて有意義だと証明できなかつたせいで再び振り出しに戻った。

つまり、また糾弾されるのは目に見えている以上、気分が好転するわけがなかつた。なんとかして鼓舞してあげたいが自分ではどうしようもなかつた。

エレンの心の拠り所であろう、104期調査兵とも遭遇せず、なんて声をかけるべきか迷った。

「エレンー！」

「…お前らー！元氣そうでよかつた！」

「それはこつちの台詞よ！」

そしたらフローラと愉快的仲間達が居た。

ずつと、塞ぎ込んでいたエレンの目に光が戻つたのを確認したりヴァイは、こつそり微笑んだ。

「これから『サウナ』に向かうんだけど、エレンも参加しない？」

「サウナ？」

「ええ、サウナ調査兵团が王都で流行っているサウナを調査するのよ！」

「…兵長、オレも参加していいですか？」

「別に構わんが、俺も参加させてもらおうぞ」

監視の為とはいえ、まさかりヴァイ兵士長も参加すると判明し、驚く一同。

それはそうとして、フローラ一行はサウナ店を目指しながら雑談しつつ歩いていった。

「サウナって何だ？」

「蒸気風呂で身体を健康を整えるものらしい」

「蒸気って巨人から出る奴か？」

「ああ、違和感があるだろう死に急ぎ野郎！だからこれから調査するって事だ！」

「ジャン、なんでオレの顔を見て発言したんだ？」

「親切に無知野郎に教えてやったのになんだその態度は？」

エレンはサウナについてフローラに問いかけたのにジャンが返答した。

それはいいが、馬鹿にした言い方で腹が立った。

「ああん？」

「やるのかコラア！」

エレンとジャンは胸ぐらを掴み合って睨めつけ始めた。
リヴァイはしようがなく2人に膝蹴りをしようと近寄った。

「ほげっ！」

「ぐほっ！」

2人に軽く平手打ちをしたフローラはそのまま進んでいった。
頬の痛みで思わず女の子座りをして両手で頬を抑えているエレンとジャン。

「フローラ！何をするんだ!!」

「喧嘩を邪魔するんじゃない!!」

「オイオイお前ら、喧嘩するのは結構だが、人類最強の男に膝蹴りをされても知らんぞ」

「そうだよ…みんな仲良くしないと…」

ライナーの一言でエレンとジャンはリヴァイ兵長を見る。

腕を組んで不機嫌そうに睨めつけてくる兵長に恐怖してすぐに仲直りをした。

リヴァイはその様子を見て、自分の顔のせいで仲直りしたと分かりシヨックを受けた。

「ねえ…あそこに居るのエルヴィン団長じゃない？」

「お一人で行動するのは珍しいわね」

アルミンの一言で全員がエルヴィン団長を見た。

なにやら考え事をしているようで、深刻な顔をして歩いていった。

「お忙しそうだから無視をしましょう」

「そうするか」

こうしてフローラ一行は、エルヴィン団長に頭を下げてそのまま素通りしようとした。

「ちよつと待つてくれ！調査兵団の団長を無視してどこに行く気だ？」

「王都で流行している蒸気風呂を調査する為に【サウナ調査兵団】はお店に向かっています！」

「蒸気とは、あの湯気の事なのか？」

「はい、蒸気にトラウマがあります！だからこそサウナとやらを有志で結成して調査に行きます」

「私も参加しよう」

こうしてエルヴィン団長も【サウナ調査兵団】に入団してサウナ店に向かつていった。団長が何を考えているのか分からないが、心なしか少年の様にワクワクしているようであった。

勇敢な先輩方は、戦死したか引退したせいで調査兵団のトップとして組織を引率するエルヴィン。

そんな彼は、新兵時代の様に誰かに引率されて調査に向かうのは刺激的だったのだろう。

少なくとも純粋な笑みを見たりヴァイはそう思った。

「ここがああのサウナ店ね」

フローラは立ち止まり『サイヤマのサウナ店カラネス区支部』と書かれた看板の店舗を確認した。

向き合った全員が頷いて、サウナ店に入店した。

「いらつしやいませ！」

「本日、15時に団体9名で予約したフローラ・エリクシアと申します！」

「お待ちしております！靴を履き替えて頂いて左の通路をお進みください」

膝まであるブーツを脱ぎ捨てて靴を履き替えた一同。

思ったより普通の民家のように困惑していた。

ここで蒸気風呂とやらに入浴できるか疑問だった。

「サウナ利用料金は入湯料金に含まれていますか？」

「いいえ、別料金となっております」

「そうですか…」

「今回は招待状という事でドリンクを除いて無料になっております」

案内していく店員の話の聴いてフローラは安心…しなかった。

発汗する以上、水分補給は大事のはずだ。

だからこそ、ドリンクのみ有料に敏感に反応した。

「ここで一度、水分補給をしてもらいます」

「それは有料なのですか？」

「水は無料、他はメニュー表から注文して頂ければ販売いたします」

待機所にあつたテーブルにあるメニューを渡されてフローラはそれを開いて確認した。

紅茶、オレンジジュース、粉ミルク、アップルティなどいろいろあつて無駄に充実していた。

どれも鋼貨4枚というぼったくり価格である事を除けば良い事だろう。

「よし、俺は紅茶にしよう」

同じくメニュー表を拝見していたリヴァイは呟いた。

「では、アップルティにしてみようか」

エルヴィン団長は楽しそうにアップルティを選んだ。

奢る必要もなく奢られる立場に久しぶりに純粹な笑顔で注文できた。

「じゃあ俺はオレンジジュースで！」

「僕は粉ミルクを……！」

「アルミンは何をするんだ？」

「エルヴィン団長と同じアップルティにしようかな」

その様子を見て同期たちは、好き勝手に注文して頭が痛くなったフローラ。

結局、72枚の鋼貨を支払うことになったが重量のせいで持ち歩いている訳がなく

…。

仕方なく小切手で前払いをした。

一日に4人家族が消費する小麦の72日分である。

さきほど調査兵8名を奢ったのもあり、一日の出費では上位である日に心の中で泣いた。

「今後ともごひいきに」

「他に別料金とか取られませんか？」

「備品を壊さない限り、大丈夫です」

念を押して確認したフローラは、未知なるサウナに興奮している8名を見て作り笑いをした。

サウナ調査兵団の団長として、険しい顔をするわけにはいかないからだ。

「皆さま、次は入浴して身体の汚れを落とすにいきますがよろしいですか？」

「問題ないぞ」

「さすがにこのまま入るのは無理だったか」

フローラは初心者用のサウナガイドブックに目を通して8名を案内していく。サウナ自体は混浴だが、水風呂は男女別のものであった。

城塞都市に流れている川から水を引いているようで水自体はただのような物である。

「よし、身体をキレイにするぞ！」

「どっちがキレイになるか勝負だジャン！」

「おっ！言いやがったな!!」

何故か身体を洗う事に対抗心が出たジャンとエレン。

「リヴァイ、背中を洗ってあげようか？」

「冗談を言ってる場合か？」

「では、私の背中をゴシゴシと強く洗ってくれ」

「皮膚ごと汚れを削り落として綺麗にしても良いならやってやるが？」

「頼む」

エルヴィンは、背中をリヴァイに洗ってもらおうと備え付けられた石鹸とタオルを渡した。

さすがに困惑した彼であったが潔癖症である以上、異様に汚れているエルヴィンが許せなかった！

「リヴァイ！これ以上は結構だ!!」

黙って洗われてろ！こんなに垢塗れでよく暮らせてきたな！」

リヴァイは団長の汚さにキレて背中を洗い始めた！

あまりにも念入りに洗われてエルヴィンが悲鳴をあげたが無視をした。

「団長と人類最強の男と入浴だなんて…一生忘れないよ」

「ベルトルト、お前！ここに何しに来たか忘れたのか？」

他人事のようにベルトルトは、リヴァイとエルヴィンペアを見て感想を述べた。

…が、ライナーの一言で目覚めた！

「そうだった…僕たちは【座標】を奪還して故郷に…」

「何言ってるんだこいつ」

「えっ…」

「俺達、サウナを調査する為にここにきたんじゃないか！ここで満足するわけにはいかねえぞ！」

「ええっ!?!」

戦士モードになったベルトルトであるが、兵士モードのライナーの一言で意気消沈した。

自分達には戦士としての心得を何度も注意してくる癖に自分は兵士になり切っている男。

アニもベルトルトも、ライナーに呆れているが、リーダーが彼のせいだ黙って従っている。

本来の隊長であるマルセルが変なタイミングでカミングアウトした挙句戦死させたのであるが…。

「おっ！アルミンの股間は身体に似合わずご立派だな！」

「ライナー！やめてよ!!」

ライナーは隣にいたアルミンの股間を見て素直な感想を述べた。
アルミンは顔を真っ赤にして両手で股間を抑えて怒った！

「やっぱ、あの野郎! 『そっち側』だったか」

「巨人のケツにぶちこむとか言ってたし、やっぱそうじゃねーの?」

ジャンとコニーは、ライナーが男好きだと勘違いしていた。

確かにがっしりとして立派な体格である兄貴分だが、女より男が好きそうな感じがしていた。

デリカシーの無さも、そう考えると納得できる。

『楽しそうでズルいわ!』

フローラは独りぼっちで身体を洗っていた。

傷塗れのせいで一歩間違えると出血してしまうせいで、上手く身体が洗えなかった。

誰もフローラに関して言及が無いのは、女として見られていない証拠だった。もしクリスタやミカサであったら何かしら言及されているのはフローラ自身が分かっていた。

「次はサウナに行きますわ!」

「待ってたぜ!!」

腰にタオルを巻いている半裸の男のイラスト通り、全員が半裸で腰にタオルを巻いていた。

「あれ?」

ベルトルトは違和感を覚えたがフローラに伝えられなかった。

「おいドアが開かねえぞ!」

「リヴァイ、ここは私に任せてくれ！」

「……まだか？」

「なんだこのドアは……」

自信満々にドアを開けようとしたエルヴィンであったがドアが開かなかつた。

蒸気を使うので特殊な構造になっているのだろう。

フローラは、サウナキーを鍵穴に刺して引つ掛けて引くとドアが開いた。

「「「暑っ!?!」」」

「……なんか想像以上に狭い空間だな」

「そりゃあ、お前! 蒸気を満たすんだからこんなもんだろう」

「えーつとガイドブックでは、上段に座るほど熱くなるそうよ」

「温かい空気が上に行くからな。その関係だろう」

「そういえばそうだな……」

「さすがです!」

入室した瞬間、高熱の蒸気に驚いた一同であったが、新鮮な気持ちになれた。

フローラの説明の疑問に、エルヴィンの一言で全員が感心していた。団長ではなく、一個人として尊敬されたエルヴィンは嬉しそうに微笑んだ。さきほどの失態を無かった事にしようとしていたのかもしれない。

「10分ほど入浴したら水風呂に向かう予定です」

「本当にここで10分も耐えないといけないのか？」

「ん？ジャンはすぐに出て行っても良いんだが！」

「なんだと！お前こそ蒸気に蒸し焼きにされる前に出るよ！」

エレンとジャンは再び喧嘩した。

「どっちがサウナに長く入浴できるか勝負だ！」

「望むところだ！死に急ぐんじゃねえぞ！」

彼らは高熱の蒸気にどこまで耐えられるか我慢勝負になった。

フローラは呆れながら高熱になった石に水をかけた。

凄まじい勢いで蒸気が噴き出して部屋中が更に暑くなった。

そして全員が腰掛けて高熱に耐えながら待機していた。

「…ねえライナー」

「どうしたんだベルトルト？」

「みんな半裸だよね？」

「そうだが？」

ベルトルトはずっと気になっていた事を相棒に打ち明けた。

ライナーは、何故彼が当たり前の事を問いかけるのか分からなかった。

「なんで女の子のフローラも乳首丸出しで居るの？」

「ん？ベルトルト、初めて見たのか？」

リヴァイやエルヴィンですら気にしていなかったがフローラも半裸であった。

フローラからすれば、乳首丸出しで平気な男衆に囲まれているせいかな、疑問に思っていなかった。

ミーナに女子力が無いとまで言われた【性別フローラ】の異名を持つ女は格が違った。

当然、全員が気にするはずだが、まあフローラだしと気にせず蒸気に耐えていた。

「こんなのおかしいよ」

「ベルトルト君」

「エルヴィン団長…！」

ベルトルトはエルヴィン団長がフローラを叱ってくれるのを期待していた。

「考え過ぎだよ。まずサウナを存分に味わおうじゃないか」

「団長!？」

「おいベルトルト静かにしろよ！」

「そうだぞ煩いぞ!!」

「ええっ!？」

当然の指摘をしたはずなのに何故か怒られたベルトルトはショックを受けた。

もしかして自分が頭がおかしいのかと思っただが、アニならこんな事はしないだろう。

「暇だし、フローラの背中傷でも数えないか？」

「エレンにしては良い案だ！」

「一緒に数えて間違えないようにするぞ」

「ああ、そうしよう」

暑さに耐え切れなくなったエレンとジャンは誤魔化すようにフローラの傷を数え始めた。

フローラからすれば、腹が立つことであるが、エレンが訓練兵時代のように戻ったので我慢した。

「2人とも、大声で数えると煩いから静かに数えてよ」

アルミンまでツツコミを放棄しているのに戦慄したベルトルトは頭を抱えた。

「チツ！うるせえな」

「そういえば、こうやって一緒に入浴するのは初めてだったな」

「ああそうだな」

「どうだ、調査兵団に入団して私を恨んだか？」

「最初はな…ただ巨人を絶対、俺の代で一匹残らず駆逐する気持ちの方が大きくなつたな」

リヴァイは、地下街でエルヴィンと出会ったことを思い出していた。
今思えば、荒れていた時期であつたが、それも悪くない気がした。

「101、102、123」

「おい、数を間違えてるぞ！」

「なんでオレに言うんだよ！お前だつて間違えただろう！」

同時に数字を間違えてしまい口論した2人、これでまた数え直しである。
喋るせいで更に暑苦しくて疲弊していく彼ら。

『アニの…乳首』

ベルトルトは、フローラという半裸にアニの頭を変えて想像していた。

すると、顔が真っ赤になり鼻血を垂らした。

「おいベルトルト、鼻血が垂れているぞ」

「ああつ!? うん、えーつと! そうだね!!」

「あーベルトルト、わたくしの身体に欲情してくれるなんて嬉しいわ」

「とにかく乳首を隠してよおおお!!」

ようやく女として認めてくれたベルトルトに嬉しがるフローラ。

大体、こいつのせいで振り回されているベルトルトは必死に女らしくするように提言した。

だが、それを受け入れれば「性別フローラ」など言われない。

「さすがに限界ね! もう出ましよう!」

アウフグースという熱風を送り込もうとしたがベルトルトが限界そうなのでフローラは諦めた。

誰のせいでこうなったと分からない彼女は恨めしそうに自分だけ熱風を送って堪能

した。

エルヴィン、リヴァイ、コニー、ベルトルト、ライナー。

そしてアルミンが退室したが、まだ残ろうとしていた人物が居る。

我慢大会をしているエレンとジャンである。

『おい早く出ろよ……!』

『なんで出ないんだよ……』

『言い出しつぺのオレが残るべきだろう』

『お前に負けたくねえ……』

『やべえ……死ぬ』

『ここで死んだらミカサが……』

さすがに限界だった2人。

それでも負けたくない一心でその場に残っていた。

このままだと死ぬだろう。

「「ぎやあああああ!!」

フローラはそんな2人に呆れて思う存分、熱風を送り付けた。
アウフグースされた2人は、たまらず悲鳴をあげた！

「ほら早く出なさい！」

「でも……！」

「良いからささっと行くわよ」

フローラはエレンとジャンの腕を握り、強制的に立たせて同時に部屋の外に放り出した。

「クソ……」

「まだ……」

ジャンとエレンは未だに我慢大会をしていた。

「サウナ我慢大会の勝者はわたくしよ！敗者は黙って指示に従いなさい」

「…はー」

腰に巻いているタオルに両手を当ててドヤア顔しているフローラの言葉に折れたエレンたち。

彼らが競いあっているのは良い事だが、無駄な意地の張り合いに対してはいつでもよかった。

闘争心で争う彼らを問答無用で双方とも叩き潰す事に定評あるフローラ。

実際、死にかけていてお相手に持ち込んでくれた彼女に感謝しつつ水風呂に向かっていった。

「よし、俺様が一番乗りをするぞ!!」

コニーはサウナから出て汗を流さずに一目散に水が入った浴槽に突撃した!

「俺様一番乗り!!ぎゃああああああああああ!!」

あまりの冷たさにカラスの行水よりも早く浴槽から飛び出してきたコニー。

「コニー！汗を流さずに浴槽に入るのはマナー違反よ！」

「フローラ！マジで冷たいんだって！」

「だから汗を流すのよ」

フローラは話を聴かずに水風呂にダイブしたコニーを叱りながら必死に説明した。

「あのーフローラ。ここ男湯なんだけど…」

「お湯じゃなくて水風呂って言ってるでしょ！」

「違うよ！」

「違わないわよ！ほら！さっさと汗を流してきなさい！」

フローラに勢いで誤魔化されたベルトルトは桶を手にとって、頭から水を被った。

「冷たあああああ!!」

思わず巨人化しそうになるほど彼には衝撃的だった。
それでも必死に汗を水で流していった。

「全員、汗を流したわね？」

「ああ！」

「じゃあ一分だけ水風呂に浸かるわよ！」

一斉に水風呂に浸かって冷たいのを我慢している一同。

何が楽しいのかさっぱり分からないが、口にするに負けた気がして必死に我慢した。

「次は外気浴よ！しっかりと身体を拭いて水分を除去して休憩するわ」

全員が更衣室でタオルを使って念入りに身体を拭いた。

フローラもようやく胸を隠すようにタオルを巻いた。

最初からしてよ！と突っ込みたかったが論破されるだけなのでベルトルトは諦めた。

「本当にここで休むだけで良いの？もう一度サウナに行かないの？」

「ここで足を伸ばして目を閉じて休むであつてるわ」

アルミンの素朴な疑問に対してフローラも自信なさげに返答した。

全員、指示通りに備え付けられたベッドで足を伸ばして寝た。

未だにサウナに関して全然良さが分からないサウナ調査兵団の一同。

そんな彼らであつたが、水風呂で冷えた身体が温まってくると恍惚感に溢れた。身体中が痙攣して解放感に溢れる不思議な感覚。

口に出せないがこれがガイドブックに書いてあつた『ととのう』って奴だろう。

「これが…サウナか」

「なんか思っていたのと違ったな」

「じゃあエレンは一人で帰宅すればいいんじゃないか」

「はあ？もう一回やるに決まつてるだろう！」

エレンとジャンは、もう一度サウナで我慢大会するつもりだった。

「コニーもアルミンはおろか、エルヴィンやリヴァイもチャレンジするつもりだ。

「うーん、なんか変な感じ…」

傷だらけのフローラには、サウナとは相性が悪かった。

それでも、何故か再チャレンジしたくなっていた。

サウナ調査兵団の団長として部下に責務を押し付ける事に恥じていたのもあったが…。

自分の意志というより更に「上位の存在」に導かれている感じがした。

「もう一回チャレンジするぞー！」

エレンの一言で全員が水分補給をして再度サウナにチャレンジをした！

サウナで蒸されて水風呂に浸かって身体を拭いて、ととのえるを繰り返して快感を覚えていった。

そして、あつという間に幸福感溢れるサウナ初体験は終わり満足した一同。

「これはお礼です」

フローラは番頭らしき店員にチップとして鋼貨7枚を手渡して店を出た。

「中々良い経験だったな」

「そうだね」

ライナーの感想を肯定したアルミン。

彼は一同の中でだらしない体格であったが、サウナで身体が立派になった感じがした。

「うーん、もう一回入りたいな」

「俺様も同感だぜ」

「次回はどうする?」

「まだ考えていないけど、また9人で入浴したいわね」

全員がサウナの感想を述べて、もう一度、サウナに入浴する約束をした。

エレン、アルミン、ジャン、コニー、ライナー、ベルトルト、フローラ、リヴァイ、エ
ルヴィン。

サウナ調査兵团の9名は、無事にサウナを調査したがまだ調べ切れていない事がいく
らでもある。

「これでサウナを探求しきれたとは言えないわ！」

「そうだな、プランにあったお香を焚くのも良いかもしれない」

「では、またの機会にサウナ調査兵团を結成しましょう」

再び調査を決意したフローラ。

調査兵团のエルヴィン団長に肯定されて「第二回サウナ調査」を行うつもりだった。

同期たちは約束して、それぞれ帰路に向かっていった。

落ち込んでいたエレンも元気になっており、リヴァイも内心では微笑んでいる。

だが、二度とサウナ調査兵团は結成させる事はなかった。

それを許してくれるほど、優しくない世界。

この残酷な世界は、彼らの仲を引き裂くどころか殺し合いすることとなる。

「次回はいつにしようかしらね…」

フローラはその未来を知らずに、ただひたすらに第二回サウナ調査について考えていた。

5章 平穏な日常が崩れ去っても、いずれ以前の様な日常生活に戻れると思っていた時代

57話 破滅への足音

「どうしよう…」

ミカサ・アツカーマンは悩んでいた。

大切なエレン・イエーガーが再び特別兵法会議に出席しろと招集されてしまった。

前回とは違ってミカサは証人と呼ばれていない。

つまり、このままだとエレンと離れ離れになってしまう事を意味する。

「アルミン、どうすればいい？」

「難しい所だよ…このまま会議に行ったらエレンが憲兵団の管轄になっちゃうよ…」

エレンの幼馴染であり親友であるアルミン・アルレルトも明確な答えを見つけれな

かった。

第57回壁外調査でエレンの存在意義を示そうとしたが、失敗に終わり今に至る。

カラネス区に侵入した巨人騒動のせいで、有耶無耶になったが事態が落ち着いたので招集された。

下手すればエレンどころか調査兵団は解体されて、駐屯兵団の一部隊になるかもしれない。

「確かに、あの野郎が憲兵団に大人しく管理されるタマじゃねえよな……」

「ジャン、君も心配なのか？」

「ふん、いつも喧嘩してきたが……いざ居なくなると寂しくなるっていうもんだ」

ジャン・キルシュタインもなんとかエレンを取り戻そうと考えていた。

だが、調査兵団の幹部が招集されて、同期たちは南方にある施設に移動してしまった。何故、今頃になって集団で訓練させられるのか理解できなかつたが命令だからしょうがなかつた。

「こうなったらエレンの身柄を確保して逃げるしかない」

ミカサは既に王政に見切りをつけてエレンを連れて、ウォール・マリアで暮らそうと
していた。

そこであれば憲兵団の追跡も免れて巨人に気を遣えば平和に暮らしていける。
トロスト区の水門で駐屯兵団に追い詰められた時に思い浮かべていた案を実行しよ
うとしていた。

「でも、僕たちはガスボンベや立体機動装置を許可なく持ち出す事はできない…」

「そうだな…」

「エレン…」

アルミンの言う通り、ガスボンベや立体機動装置は徹底的に管理されている。

もし、許可なく持ち出せば疑われるのは間違いないだろう。

それでもミカサの案にジャンもアルミンも反対しないのは、そこまで彼らは追い詰め
られていた。

具体的な案が思いつかず、全員が人数分のガスボンベと立体機動装置を確保するのを
諦めていた。

「ちよつと待つて！居るじゃないか！全員のガスボンベや刃を持つてこれる人物が！」

「はあ？新兵の俺たちの為に行動してくれるわけないじゃないか……」

「居るよ！僕たちの同期に全員分の装備を用意できる人が！」

アルミンは、同期の中で全員分の装備を用意できる人物を思い出した。

同じく南方訓練兵団104期生のフローラ・エリクシア。

彼女は、ピクシス司令の許可で、最優先で装備を補給できる権限がある。

少なくとも壁内では、彼女はいくらかでも装備を補給できた。

何度も壁外で任務をする時、必要以上に物資を持ち込んでいるのをアルミンたちも知っていた。

管理している兵士も呆れて、フローラに許可を出すだけのお仕事になっていいるほどだ。

「つまりなんだ、フローラにお願いして装備を持ち出してもらおうのか？」

「そうするしかエレンを救う方法はないよ」

「早くフローラを探さないと……」

善は急げ！ミカサはすぐにフローラを探しに行こうとした。

しかし、訓練兵団を卒業してからいろんな場所に居るせいでどこに居るか見当も付かなかった。

昨日、一緒にサウナに行ったアルミンもジャンも、フローラの居場所が分からない。

「とりあえず、サシャに次ぐ食い意地がある奴だからどつかで食事してるんじゃないかねえかな……」

「よし、飲食街に向かってみよう！」

3人は頷いて、フローラが居そうな飲食街に足を運んだ。

ウォール教の南部支部の主任司祭、ニック・ボーデヴィヒはお茶を飲んでいたり飲まされていた。

目の前に居る兵士に助けってもらってなんとか一息ついた所である。

「おかげで助かった…」

「よりによつて、このカラネス区に壁教を布教するなんて命知らずですわね…」

「仕方がないんだ、我々ができるのは宗教という希望に縋るしかないのだから…」

ニツク司祭は上層部に命じられて壁教の信仰が揺らいでいるカラネス区に派遣された。

そして糾弾された。

50mの壁が巨人から守ってくるのは昔の話。

今では、蔑んでいた調査兵団が救世主で今まで信仰していた宗教を邪教として糾弾された。

偶然、通り掛かったフローラに助けてもらわなかったら投石で死んでいただろう。

「巨人の恐怖が薄まるまで布教は諦めた方が良いですわよ？」

「それはできない、私にはこのカラネス区の住民を追い詰められた心を救う使命があるのだ…」

「祈っても巨人は消えませんし、恐怖は時間だけが解決してくれるものです」

ニツク司祭はそれでも布教を諦めなかった。

壁教は、確かに人を救う力があると実感している。

「私はかつて酒に溺れて家族を失い、縋るように壁教に入信した」

「信仰は、私のような人間をも救ってくれた。私は確かに救いを得たのだ」

「別に宗教自体は否定していませんわ……」

「では、どうして邪魔をするのだ？」

「この地区の住民は、すぐに掌を返します。信仰してたのに今では邪教として逆恨みするほどに」

フローラは、自分の意志を曲げて掌を返す輩が大っ嫌いだ。

特に自分の都合の良い事だけ述べて、己はリスクを冒さない癖に他者には強要する輩が嫌いだ。

安全地帯で罵倒し、いざ自分の身に危険が迫ると泣きついてくるのが民衆である。

知識も知恵も経験もない癖に一丁前に口だけ回る愚民共は良く知っている。

トロスト区の極貧層もそうであった。

「食事がまずい！」

「我々は被害者だ！」

「街を護れなかつた兵団に謝罪と賠償を請求する！」

「俺は鬱なんだよ！だからもつと金をよこせ！」

「調査兵団の兵士如きが指図するな！！あと脱いでやらせろ！！」

「人権侵害だ！我々は王政から手厚く保護される権利があるはずだ！」

せつかく食事と住宅を保障して仕事も斡旋したのに、付け上がって全てを台無しにした貧乏人達。

何もできず飢えた癪に、アインリツヒ大学を卒業した王政の幹部候補生以上の待遇を求めてきた。

もちろん、使えそうな奴はリープス商会やフローラが救ってあげた。

それ以外は、おが屑のように産業廃棄物である。

なるべくしてスラム街の住民になった輩に宗教が役に立つわけがない。

カラネス区の住民はマシであるが、子供を使ってニツク司祭に投石させた住民が居た。

少なくとも、布教できる環境ではなかった。

「それでも信仰が誰かの助けになるなら私は死んでもやり遂げてみせる」

「確かに信仰は、精神を落ち着かせて彷徨う子羊を導いてくれる道なのかもしれません」
「ですが、タイミングというのがあります。様子を見てから布教しても悪くないですよ」

ちようど憲兵がニツク司祭の部下を殺害した住民4名を連行していく様子が見えた。

カラネス区に所属していた憲兵団の兵士は左遷か、不名誉除隊され、質の良い憲兵が配属された。

さっそくその仕事っぷりを存分にフローラとニツク、そしてカラネス区の住民に見せつけていた。

「確かにそうだな…」

「貴方は壁教のおかげで改心できた数少ない人間です。だからこそ命を粗末にはいけません」

ニツクはフローラの事を知っていた。

特別兵法会議に出席して証言を目撃したし、集まった住民が彼女の名を呼んでいたからだ。

なんとか窮地を脱出できたのもフローラの人望と実績のおかげだと理解している。

「フローラ、お前の活躍は聞き及んでいる。かなり腕が立つし人望があるようだな」

「必死に築き上げてきたものですから…」

「……お前の様な強い人間は、私の様なろくでなしには眩し過ぎる」

「過去の行いを反省し、自分の使命を認識して他者を救済するニツク司祭も凄いと思いますよ」

ニツクは思わず壁の秘密を話したくなってしまった。

でも、個人ではどうする事もできないし、人類を想うなら秘密のままにしなければならぬ。

「別に我々、調査兵団は壁をどうこうしようと考えておりませんわ」

「それなら良いが…」

「例えニツク司祭が壁の重要な情報を握っているとしてもわたくしは問い詰めません」
「…良いのか？」

「少なくとも、新兵にどうこうする権限も無ければ、情報を聞き出すつもりもありません」

フローラは再びお茶を口にして存分に味わった。

ニツクも喋り過ぎたのを実感して心を落ち着かせる為にお茶を飲んだ。

「旨いな…」

「食べ歩きや飲み歩きして印象に残った店をチョイスしてますから」

「一度、ストヘス区に帰還して信者たちに残酷な世界でも希望があることを諭す事にしたよ」

「待つてくれる方々が居るなら、まずそちらを優先した方が良いでしょうね」

「ご馳走になった！ありがとうございます」

「どういたしまして」

ニツク司祭はフローラに感謝してストヘス区に帰還する準備の為、走った。

命令違反ではあるが、壁教の神父を殺害されたので上層部も現状を把握してくれるだろう。

彼はまだ死ぬわけにはいかなかった。

どうしようもない自分を待っていてくれる50名ほどの信者が居るのを思い出したからだ。

「嬢ちゃんじゃないか!」

「技術4班の方々がカラネス区に来るとは珍しいですわね」

「まあ色々あつてな…」

とりあえずグリズリー班長が率いていた技術4班とお茶会をしたフローラ。

新型の立体機動装置開発は、順調ではないようだが改良が進んでいなかった。

ただ、新たな携行アイテムが開発されていた。

「手投げ式?」

「閃光弾や音響弾って専用の銃に取り付ける銃身だったんだろう?」

「ええ、いちいち取り付けるのが大変な物ですわ」

「そこで開発したのは、ピンを抜いて投げるだけで済むアイテムだ！」

従来の装備を改良した手投げ式の閃光弾と音響弾を班長は力説した。

従来の物は、巨人に向けて専用銃で撃つものである。

ただ、信煙弾を撃ち上げる専用銃と兼任しており、同時に撃つことができない欠点があった。

「つまり、すぐに使用できるアイテムって事ですか」

「その通りだ！」

例えば、巨人を発見して赤色の信煙弾を撃つて、閃光弾を撃とうとするとかなりの手間が掛かる。

まず赤色の印がある銃身を外して、音響弾の銃身を専用銃に取り付けて発砲する暇などない。

そこで開発されたのが、携行できる手投げ式の音響弾と閃光弾である。

安全ピンを抜いて5秒後に発動する様になったおかげで信煙弾と同時に投擲できるようになった。

「それでエルヴィン団長に試験採用のお願いをしたのだが…即座に却下されてな…」

調査兵団のエルヴィン団長は、すぐさま技術4班の新装備の試験採用を却下した。

何故なら基本的に班で行動するので、わざわざ高価な新装備を採用する必要が無かった。

巨人に襲撃された時、1人が信煙弾を、もう1人が閃光弾を撃てば良いという事である。

そもそも手投げ式にしたせいで閃光弾が巨人の視覚を妨害する効果が薄いのも原因であるが…。

「そんなわけだ、無様にトロスト区に帰還するところだ」

「着目は良いと思います。少なくともわたくしは欲しいですわ」

「…いくらで買い取ってくれるんだ？」

「開発費の半分と製造コストくらいが限度です」

「全くお人好しだな」

グリズリー班長は、それぞれ3個ずつの音響弾と閃光弾をフローラに渡した。金貨10枚を支払って受け取った彼女はさっそく手に取ってみた。

思った以上に軽いが試作品なので性能に関しては、そこまで期待していない。

「作った本人が言うのだが、本当に使えるのか？」

「巨人の口の中に放り込んでみるのもいいかもしれません」

「マジっすか？」

「マジですわよ」

フローラは技術4班の面々と会話して、この試作品を更に改良する事、少数生産をする事にした。

どちらかという士兵よりも城塞都市の住民の護身用品としての需要があると踏んだフローラ。

安全ピンを抜いて投擲するのは子供でもできるだろう。

ましてやトロスト区やカラネス区は巨人の脅威に晒されている。

この様な道具でも気休めになるだろう。

「よし、これからはガラクタも嬢ちゃんに買い取ってもらおうことにしよう」

「グリグリさん！今とんでもない事を仰いましたね!？」

「おっと口が滑つちまった!」

逃げ出すように走り去っていくグリズリー班長と技術4班。

フローラは会計してチップを支払ってもなお、班長の言葉にショックを受けていた。廃品をどんどん回収すれば、部屋がどんどん汚くなるのでミーナに叱られるからだ！また廃品を持ち込まれると確信した瞬間、すぐに逃げる様に駆け出した。

アルミン、ジャン、ミカサはフローラを探しに飲食店が並ぶ通りに来ていた。

「クソ！こんなに人が多いと探しにくいな…」

「フローラはどこに居るの…」

この時間帯は混んでおり、探している女が見つからなかった。

もしかしたら訓練所に居るかもしれないし、壁外任務をやっているかもしれない。

同期の中で唯一、訓練兵時代から調査兵団の任務を手伝っているので居場所に見当が付かない。

「僕に良い考えがあるよ！」

しかしアルミンには秘策があつた。

珍しく下衆な顔をしている彼。

頭が良い分、悪知恵を思いつくことがあり、口角を釣り上げた『ゲスミン』の顔をしていた。

それを見てドン引きしたジャンとミカサを気にせずには彼は行動した。

「うわあああああ！あんな所に【鎧の巨人】が！」

アルミンは適当な場所を指差してフローラの両親の仇の名を怯えた様に叫んだ。

他人に話しかける程度の声量であり、他の住民が出す音に打ち消されたと思つたミカサとジャン。

発言したアルミンも声が小さかったと反省したくらいだ。

「なんですつってええええええええ!!?」

異様に聴覚が良いフローラ。

特に【鎧の巨人】の単語には地獄耳であり、アルミンの声を聴いて駆けつけてきた!

「本当に来やがった…」

「すごい…アルミン!」

「ええつ…結構遠くに居たのに聴こえたの…?」

アルミンの策が成功し、フローラと遭遇した【エレン奪還班】の3名。

2人に純粹に感謝されたアルミンであるが凄まじい剣幕で向かって来る彼女に怯えていた。

「むぐぐぐぐ！ 鎧の巨人を！ わたくしを呼ぶために！ わざと!? ですって!」

「フローラ、お願い！ 協力して！」

「…確かに3人分の装備は確保できるけど、本当にやる気なの？」

フローラは、アルミンたちの話を聴いていて不機嫌だった。

両親の仇の名を自身をおびき寄せる為だけに使われていたの事に！

それでも我慢して話を聴くと、本気でエレンを奪還してウォール・マリアに行く3名に驚いた。

「ああ、あの死に急ぎ野郎が実験体として憲兵団に解体されるのは嫌だからな…」

「私、エレンさえ居れば、人類を敵にしてもいい」

「さすがにウォール・マリアまで憲兵団が追跡しないと思うんだ」

行き当たりばったりの作戦に眉をひそめたフローラ。

壁外任務を何度もやっているからこそ、現実的な作戦ではないと分かっている。

「そんな事、不可能よ！ 壁外に人が居るだけで勝手に巨人が引き寄せられるのよ！」

「じゃあ、他にどうすればいいの!？」

相棒が他人事のようにしているのを見てミカサは代案を求めた！

「そういえばエルヴィン団長が貴方達3人を招集していたわよ」

「そうなの？」

「公式に知らせて無いとすると…もしかしたらエレンを救出する作戦かもね」

3人はエルヴィン団長がエレンを重視していたのを思い出した。

彼が策も無しにエレンを特別兵法会議に参加させる男ではないと分かっている。

調査兵団の大半に「巨人化能力者の捕獲作戦」を知らせていなかったほど慎重だった。

もしかしたら、エレンを助け出す方法を教えてくれるかもしれない。

「いつ行けばいい?」

「翌日の午前5時に兵舎近くの食堂よ」

「それって…エレンが憲兵に引き渡す1時間前じゃないか!」

集合時刻がエレンを憲兵団に引き渡す1時間前。

彼の身柄が憲兵団に渡されると、ほぼ外野からはどうすることもできない。

「それでも団長を信じましょう！」

フローラの一言で3人はしぶしぶ納得して、その場を後にした。

そして翌日、寝不足なミカサ、頭が痛いアルミン、泣いていたせいで目が真っ赤なジャン。

彼女達は、食堂の入り口前に集合していた。

「待たせたな」

「「団長……」」

エルヴィン・スミスは、フローラを携えて食堂に到着した。

ミカサたちは、何かを口にしようとしたが何もできなかった。

そんな彼女達を見て彼は深呼吸した。

「大丈夫だ、絶対にエレンを王政に管理させるつもりはない」

エルヴィンは、エレンと仲が良い3人を安心させるように告げた。

「遅いな…エルヴィンの野郎…待たせやがって…クソが出なくて困ってるんだろうな」

「ハハハ…兵長、今日は良く喋りますね…」

「バカ言え、俺は元々、良く喋る…」

「申し訳ありません…」

「謝るな、結果など誰にも分からんと」

エレンとリヴァイは食堂に一足先に着いており向かい合って座っていた。

リヴァイは必死にエレンを励まそうとするが自分が怖いせいか、進展しなかった。

「団長！…お前らも…」

会話をしているうちに扉が開く音がして振り返るとエルヴィン団長が居た。

その隣には、ミカサ、アルミン、ジャン、フローラも居た。

同期達の深刻な顔を見てエレンは、思った以上にとんでもない事だと分かった。

「君達はエレンの近くに座りたまえ」

「「ハッ！」」

団長の指示で全員がエレンの周りに座っていく。

そして全員が座つたのを確認したエルヴィンは口を開いた。

「女型の巨人と思わしき人物を見つけた：今度こそ確実に捕える」

「作戦は我々が王都に招集される途中で通過するストヘス区で決行される」

「そこが最初で最後のチャンスになるだろう」

王都に招集されているエレンと調査兵団の幹部たち。

彼らは、人類活動領域の最東端から壁内の中央に向かって進軍していく。

カラネス区から西に向かうと、ウォール・シーナの最東端であるストヘス区に着く。

フローラは、ストヘス区に何度も行っており、馴染みがある城塞都市である。リヴァイが好物な紅茶もそこで購入したり、同期達のお土産もそこで買っている。その街より西方が王都ミットラスがあり、エレンが裁かれるのはその街だ。

「これに失敗すれば、次は無い。だからこそ全てをここに賭けるしかないだろう」
「間違いないのか？」

「ああ、それを割り出したのはアルミンだ。この作戦を立案したのも彼だ」

それを聴いてエレンはアルミンを尊敬した。

女型の巨人の正体を特定して作戦を立案した彼に！

ここで自分を囿にして壁を壊す巨人化能力者を捕縛すれば一発で除供養が好転するだろう！

彼は、親友の顔を見た。

「…アルミン？」

「うん…」

何故かアルミンは浮かない顔であった。

まるで…。

「女型は、捕獲した巨人2体を殺した犯人であり君達、104期訓練兵…同期の可能性がある」

「えっ…」

一瞬、エレンの頭が真っ白になった。

女型の巨人が自分と3年間過ごしてきた同期の誰かだというのだ。

聞き間違いだと信じたかった。

「その女型の巨人と思わしき女性の名は—」

「まさか、アニ・レオンハートと仰るつもりじゃないですよね!？」

不機嫌になったフローラがエルヴィン団長を牽制した。

エレンはもちろん、その場にいた全員が彼女の顔を見た。

複雑の表情をしており、何か事情を知っているようであった。

「緘口令を敷いて、この場で正体を知ってるのは私とアルミンだけだ。何故分かったんだ？」

エルヴィンは、フローラを問い詰めた。

彼女の活躍や素性で壁内を襲撃する巨人化能力者及び加担している人物ではないと分かっている。

むしろ、中央憲兵や王政トップと何度も接触されている問題児だと分かっていた。そんな彼女が何故、女型の巨人の正体がアニと思っただのか気になった。

「第57回壁外調査における撤退作戦中にアニと思わしき人物が居ました」

「本隊から逸れた残存兵力を率いていたのは君だったな…その時か？」

「はい…」

フローラは、アニが女型の巨人の正体だと薄々気付いていた。

巨人化したエレンにぶつ飛ばされた後、撤退する為に生存者を掻き集めていた。

だが、リヴァイ班のグンタを殺害した【敵】は調査兵団の格好をしていた。

だから、自分が助けた兵士の中に女型の巨人が紛れている可能性があるとは分かっていなかった。

「本隊から逸れた兵士を掻き集めた時に、所属していないはずの女兵士が居ました」
「顔を包帯で巻いており、フードを深く被っており、まるで正体を隠しているようでした」

「声も体格も瞳もアニと同じでしたが、憲兵の彼女が居るわけなので別人物だと思っ
て……」

フローラは負の感情を“声”として聴ける特殊能力がある。

あの時、兵士の声のアニとそっくりだった。

そしてストヘス区で彼女と再会した時、その兵士と声が同じであった。

「わたくしは必死にそれを否定する証拠を集めていました」

「ストヘス区で再開した時に、壁外調査の当日、アニは休暇を取っており不在と知りま
した」

「そこで、アニが女型の巨人だと裏付けてしまいました……ただ信じたくなかっただけで

す…」

知り合ったヒツチから、アニが当日、休暇で職務に着いていないのを知った。

そこで、必死に否定していたフローラはアニが女型の巨人だと皮肉にも裏付けてしまった。

ただ信じたくなかった。

美味しそうにドーナツを頬張って楽しそうに説明してくれる彼女を…。

ヒツチやミーナと楽しく雑談して本心を少し明かした彼女を…。

少しだけ楽しそうに自分やエレンに格闘技を教えてくれた彼女を…。

「そうか…」

エルヴィン団長は、フローラが必死に否定する証拠を探していたのに気付いた。皮肉にも調べるほど疑いが確証になってしまった彼女に同情した。

「フローラ…お前、知っててアニと再会してドーナツとやらを一緒に食べていたのか？」
「何よエレン…あくまで【間接証拠】であって【直接証拠】じゃないのよ！」

「誰もアニが女型の巨人になる瞬間を目撃してないし、裏付ける証拠は…アルミンが…！」

ここでフローラは気付いた。

それこそアルミンがアニが女型の巨人と割り出しているはずだ。

決定的な証拠がなければ、団長を説得できるはずもない。

「女型の巨人は、エレンの顔を知っているどころか、あだ名すら知ってました」

「同期しか知らないはずの『死に急ぎ野郎』で反応しました」

「確かにそうだな…」

アルミンの話を書いてジャンは思い出した。

ライナーと4人で女型の巨人の足止めをした時、確かに反応していた。

そもそもエレンを死に急ぎ野郎とあだ名を付けたのはジャンである。

もしアルミンの一言で動きが止まらなかつたら、殺されていたと彼が一番自覚している。

「何より捕獲した巨人2体を殺害したと思われるのはアニだからだ……」

「あの2体の殺害には使い慣れた自分の立体機動装置を使用して……」

「検査時にはマルコの物を提示して追及を逃れたんだ」

マルコの立体機動装置と聞いてエレンは疑問に思った。

何でそこでマルコが？

そして何より、なんでアルミンがマルコの物だと判断できたのかを……

しかし、その話を聴いて青ざめた男が居る。

マルコの死で、覚醒したジャン・キルシュタインである。

「おいフローラ！マルコの死体に立体機動装置が無かったよな!?!」

「……そうね、戦死した他の兵士は身に着けていたのに何故かなかったわね……」

「アニがマルコの立体機動装置を強奪したとしたら……アルミンの話が裏付けられるな
！」

フローラとジャンは、顔を齧られて死んだマルコに立体機動装置が無かったのを目撃した。

あの時は、フローラは優しい彼が誰かに貸したと発言して有耶無耶にした。もし、それが貸したのではなくアニに強奪されたとしたら……!

「点と点が繋がったな」

「どんどんアニが女型の巨人という証拠が出てくるのを聴いてエルヴィン団長は領いた。」

「作戦を伝達する!」

「アニをストヘス区の地下通路へと誘導する! 例え巨人化しても動きを封じて捕縛する!」

「だが、万が一その前に巨人化した場合……エレン、君に頼むことになる」
「オレが……!」

エレンは、あの時の事を思い出した。

意識を失う瞬間、女型の巨人がアニと同じ構えをしたことを。

そのせいで一瞬、隙を作ってしまったことを。

「アニとの接触は、エレン、ミカサ、アルミンの3人で行ない、他は市民に紛れて周囲に潜伏」

「彼女を取り押さえるが、万一に備えて一部の兵士は武装して待機」

「彼女の監視をしてもらう、フローラはそちらの班に所属するように」

「…了解しました」

フローラは友人に刃を向ける。

自分の顔を見ていつも安心してくれたアニ。

香水を渡す度に顔は変えないが、すぐに香水を使用してくれた彼女。女型の巨人の可能性が高い以上、やるしかなかった。

「奴は何をしてくるかわからねえからな。ちゃんと見張っておけ」
「ハッ！承知しました！」

リヴァイはフローラに念を押した。

同期だからって油断するんじゃないぞ…と！

「オレがアニを…」

「信じたくねえが…あの反応はな…くそっ!」

「オイ! エルヴィン! さつきから女型だと思おうと言ってるが、実際に確認したのか?」
「…リヴァイ、何が言いたいんだ?」

リヴァイは、まだ希望を捨ててなかつた。

アニという女は知らないが、104期調査兵たちの反応から大切な同期だと分かった。

アニがマルコとやらの立体機動装置を所持しており、捕獲した巨人2体を討伐したのは分かる。

ただ、実際に彼女が女型の巨人になったと断言できる証拠がない。

「つまりだ! 【女型の巨人の能力者】にアニとやらが脅迫されている可能性もある」

「えっ…」

「誰もアニが女型の巨人になった瞬間を目撃していない以上、無実の可能性は否定できんぞ」

リヴァイ兵長の話を聴いてエレンはもう一度、同期や団長を見た。

誰もが兵長の意見に反論できる証拠がないと分かった。

「じゃあ、どうするんだよ…アニが女型の巨人じゃなかったら！」

「アニじゃなかったら…アニの疑いが晴れるだけ」

エレンの問いに対して、淡々と返答したミカサ。

むしろ、そうであって欲しいと彼女も思っている。

「女型の巨人がアニじゃなかったら、真犯人はわざとアニを疑わせていると裏付けられるわね」

「…どうということだ？」

「調査兵団にアニを殺害してもらって、『女型の巨人は存在しない』と見せかけるのよ」

「そして、油断したわたくしたちを奇襲してくるかもね」

フローラの発言で、アニを生け捕りする大切さが分かる。

ここで死なせれば、真相が解明できないどころか、第57回壁外調査の犠牲者が無駄になる。

エルヴィンもリヴァイもアルミンもジャンもフローラもミカサも今までの苦労が水の泡になる。

「少なくともアニ・レオンハートが女型の巨人と接点がある以上、作戦をやる価値はある」

「団長…」

「そうだよエレン、僕たちが行動しないと、みんなの犠牲が無駄になっちゃうよ」

アルミンは、ネス班長の事を思い浮かべていた。

自分、いや同期を守るために奇行種を平原で討伐してみせた。

そんな彼は女型の巨人に殺害されてしまった。

それは許される事ではない。

ここで踏み込まないと、第57回壁外調査の犠牲者が全て無駄死になってしまう。

「とにかく君達、3人はアニを地下道に誘導するだけでいい」

「そこで真相が分かるだろう」

エルヴィン団長の言葉が深く押し掛かる。

この機会を逃せば、全てが終わる。

エレンの為にも！

廃止されそうな調査兵団の為にも！

壁内人類の未来の為にも！

そしてなによりアニの疑いを晴らす為にもやらなければならなかった！

「分かりました！必ず遂行してみせます」

「良い返事だ」

エレンの返答に満足したエルヴィン。

この場に居る全員が必ず任務を成功してみせると誓った。

『アニ…』

大切な同期が壁内人類を滅ぼそうとしている勢力ではないと、信じたかったフロラ。

だが彼女の両親を殺害した仇である「鎧の巨人」も同期に潜んでいるとは知らなかった。

両親の仇と仲良くやっていると聞いたくない彼女は、最後までアニを信じていた。

58話 女型の巨人継承者：アニ・レオンハート

アニ・レオンハートは気だるそうに目覚めた。

今日も晴れた日で特に昨日と変わらない一日になりそうだった。

ただ、いつもと違うのは、調査兵団の幹部とエレンがこの街を経由して王都に向かう事くらいか。

「アニ、おはよう」

「…おはよう」

同室のヒツチに挨拶を返したアニは、ブーツを履いて洗面所に向かつていき洗顔をした。

冷たい水が眠気を吹っ飛ばしてタオルで拭くと新しい朝が来たと実感できた。

ブラシで髪の毛を梳かして後ろ髪を髪紐で縛ってまとめておいた。

そしてフローラからもらった香水を使用して部屋に戻り兵服に着替えた。

「きつつ！脚がブーツに入らない…！」

「食べ過ぎで脚が太くなつたんじゃないの？」

「…そのブーツ、私のなんだけど!？」

「通りでブカブカしているわけだ」

ヒッチは未だにアニが寝ぼけていると呆れていた。

おそらく南方訓練兵団に所属していた時もぼらな性格だったのだろう。

一匹狼で他者と関わるつもりが無い女も、こうしてみると可愛い物だ。

返してもらった膝丈のブーツを履くと、少しだけアニの温もりを味わうことができた。

「先に行つてる」

「はいはい、すぐに行きますよって」

アニはお節介の同室の女に一言入れて部屋を後にした。

兵舎は職場と合体しているような物であり階段を降りて通路に居れば朝礼が勝手に始まる。

上官であるデニス・アイブリンガーはマルロに仕事を押し付けて賭博しに去つていく。

そして自分たちはマルロから用紙を見て本日の仕事内容を確認して持ち場に着く。ただそれだけで終わる。

「珍しくヒッチより早く来たな」

「化粧に時間が掛かつてる」

「そうだと思つた」

ボリスに適当に返して通路の壁を背にして彼女は待機した。

「はあーい！お待たせ！」

「おい、たるみ過ぎだ」

「…マルロ、乙女に言うセリフじゃないんだけどお!？」

「良いから早く敬礼しろ」

「はいはい」

マルロは懐中時計を確認して上官が来る時刻を確認していた。

相変わらずアニとヒツチは時間ギリギリで来るので、改善させたかったが…。

そもそも、ここは集合場所ではないが、上官が同僚と賭博する部屋に近いので指定された。

腐り切った憲兵団を立て直すには、地位が足りないと実感し、出世をする努力をする
と誓った。

「うーす！聞いていると思うが調査兵団が王都に召喚されるんだが…本日、この街を
通る」

「俺達の仕事は、奴らがこの街を通過するまでの護送任務をするだけだいい」

「市街での立体機動は一時的に許可される。本部の連中と一緒に並走し警備強化に努め
よ」

「それが終わったら従来通りの任務をしてくれ」

デニスとは、面倒な仕事を新兵に押し付ける気満々である。

ストヘス区の中央通りを通過するとはいえ、大した妨害はないだろう。

むしろ、護送しているエレンが巨人化するほうがよっぽどである。

まあ、奴らもバカじゃないし下手な真似はしないと、マルロに書類を押し付けて去っていく。

「待つてください！護送団を何から守れば良いですか？」

「お前、王政の大臣を護送する時にいちいち理由を訊かないと気が済まない質か？」

「それは…」

「何事もなければそれでいいんだ。その何かが起こらない抑止力にするのが俺達の仕事だ」

デニスは、マルロの真面目さに呆れていた。

そんなものいちいち気にしなくていい。

王政に逆らう者など居ないし、そもそもよつぽどの事が無い限り問題は起きないはずだ。

そんな事よりさつさと同僚の所に向かいたかったのもある。

「我々、上官は忙しい。頑張ってお前達だけでやり通してみろ。以上だ」

デニスがドアを開けると部屋の中で任務中に飲酒、喫煙、賭博している憲兵が居た。それを見てマルロは唇を噛み締めたが我慢して彼を見送った。

マルロたちは上官から受け取った書類を見て支部の建物から出て打ち合わせを行なった。

「ふざけてやがる！」

「確かに想像以上に腐っていたね……この組織。だから選んだんだけどね」

「でも、新兵の内はほとんどの仕事を押し付けられるんだねー知らなかったよー」

ウエーブ髪のヒッチは、近くにあったゴミ箱を腹いせに軽く蹴り飛ばした。

彼女もイライラしていたが、第58回壁外調査に参加する事に比べれば大したことは無かった。

他の城塞都市から参加した憲兵が巨人に喰われたのを目撃した時、失禁しそうになった。

それどころか、薬草採取までしに行つてよく生き残ったものだと思っている。

「後で見てろよ！絶対に俺は腐り切った憲兵団を変えてみせる」

「えーすごい！マルロ、あんたそういう奴だったの!？」

「俺が頂点になったら、憲兵に給料分を働かせる。罪人には相応の報いを受けさせる」
「やべえ！マジで!?!あんた本物じゃん!つまんねえ奴だと思ってゴメンねー!」

マルロの独白を聴いてヒツチは笑った。

憲兵団の兵士は、大きく2つに分けられる。

訓練兵団で成績10位内になった者と、駐屯兵団でキャリアを積んで転属される者だ。

前者は、腐敗した憲兵であり、後者は憲兵団師団長のナイル・ドークなど上層部である。

「おいおいマルロ、腐敗した憲兵のせいで自分か身内が酷い目にあったりしたのか？」

「いや、ないが?でも奴らの悪行は、誰もが知っている事実だろう?」

「はあ?」

「とにかく所構わず本能で動物の様に生きる奴らを……ただの普通の人間に戻す……それだけだ」

きつと腐敗した憲兵を恨んでいるせいなのだろうと思つたボリスは思惑が外れた。復讐でもないのに、わざわざ特権階級を変えようと思わなかつたからだ。

こいつの発言は、兵団上層部に所属して同僚の給料を新兵と同等にすると云つてゐるものだ。

戦場で命を賭ける兵士より、書面で処理する奴らが高給をもらうべきでないという戯言と同等だ。

「あははははは！やめてえよ！笑い死にしちゃうううー！」

ヒツチは、よっぽどツボに嵌つたのか、砂で汚れるのも気にせず笑い転げていた。憲兵団上層部は、基本的に駐屯兵団から転属してきたキャリア組しか所属できない。向上心がある者は、大学に行くか総統局に転属していく為、残るのは腐敗した憲兵だけである。

要するにマルロの夢は絶対に叶わないものだった。

「大層な目標だな…せいぜい頑張れや」

ボリスはマルロの話を書いて呆れた。

訓練兵団で上位10名に登り詰めたのだから、その分だけ楽をすればいい。

収入は生半可な駐屯兵より多く、王政に携わる先輩のコネもあるので将来的に楽ができる。

王政の仕事に携わっても良いし、学歴を求めて大学に行っても良いし、転属してもいい。

腐敗した先輩方も、そういった新兵に〔道〕を作る為に存在しているものだ。

「あんたみたいな『正しい人間』が体制を占めたら、それこそ終わりだと思うよ」

「何だ：お前、ちゃんと喋れたのか：何か言いたいなら喋ってみろよ」

マルロはアニがちゃんと会話できたのに驚いた。

一匹狼で少なくとも憲兵団で誰とも自発的に話しかける女ではなかった。

だからこそ話をもつと聴いてみたいと思つた。

「あんたは正しいよ。正しい事を言うんだから。私はそういう人を知ってる。大きな流れに逆らうのは勇気が居る事だからね。馬鹿かもしれないけどそういう人は珍しいよ」

アニは、エレンの事を思い出していた。

どうしようもない馬鹿だったが、勇気と行動力で皆の考えを変えていく変わった奴だった。

思えば、彼に格闘技を教えた自分も馬鹿かもしれない。

もはやそんな事はどうでもいい。

ただ、ひたすらに口から言葉が溢れていて止まらなかった。

「でも一般的じゃない…あんたのような人物は特殊な人と言われる。人は楽をできるなら楽をしたい生き物さ、他人より自分に利益を追求して楽できるときは楽をする。それをあんたは「悪」と呼んだが、それが一般的じゃないかな」

「少なくとも私の同期たちは、憲兵団を目指す悪党やクズしかいなかったよ。まあ、そういう奴はトロスト区防衛戦で戦死して、生き残ったのは一握りの強者しか居ないけどね」

104期憲兵は、珍しくアニが話し続けているのに注目していたが話が長すぎて飽きていた。

他人の自慢話ほど面白くない話は無いからだ。
やっぱり無口の方がミステリアスな女性で人気があると実感した。

「何が言いたいかというのと、この組織は人間の本質が良く表れる構造になっているだけだと思うから…マルロが変えるべきなのは組織じゃないのかと思っただけ」

思っていたことを吐き出したアニは、自分の長すぎる発言に同僚が呆れているのを実感した。

長時間の話に付き合ってくれるのはミーナとフローラだけであった。

【戦士組】から距離を置いていた彼女は、彼女達が自分の本音を曝け出せる存在である。少なくとも白い目で見られることはなかったはずだ。

「話長すぎ…つまんないし」

「まさに普段喋らない奴が…って奴か」

「もう時間だし、行こうぜ」

長話に飽きたのか、アニから離れる様に持ち場に向かっていた。

マルロは、アニの話の話を聴いて自分が変えるのは人ではなく組織なのかと考えていた。わざわざ優秀な人材が逃すような組織を憲兵団のトップであるドーク師団長が見逃すわけがない。

意図的に残しているのか、それとも巨大過ぎてつぶせないのか分からない。ただ、人に自分の考えを強要するべきではないと思っただけであった。

「俺は本気だからな！手始めにこの任務を完璧にこなしてみせる」

第58回壁外調査に駆り出されて巨人を討伐したマルロ。

最初は不可能だと思っても意外とできるものだ。

少なくとも人が創り出した組織である以上、人が変えられないのはあり得ない。

巨人討伐の経験が彼の妄想の産物から現実の妥協策に落とし込めるほど成長していた。

「全く呑気なもんだね…」

アニは彼らの後を追いかけて歩いていく。

ベルトルトもライナーも碌に連絡をよこして来ないせいではどうなっているか分からなかった。

巨人化できるエレンが王政の中枢の管轄になると厄介な事になるだけは分かっている。

いつそ、フローラに頭を下げて彼の居場所を訊き出そうと考えていた。

「アニ…」

誰かに呼びかけられて、その方向を見るとアルミンが居た。

何故か雨具の合羽を着ており、できるだけ目立たない様になっていた。

何かを企んでいるのはすぐに分かった。

「やあ、すっかり憲兵団だね」

「アルミン…？どうしてストヘス区に？そしてその恰好は…」

「アニ、エレンを逃がす事に協力してくれないかな…このままじゃエレンは殺されちゃうー！」

「…正気？」

「ウォール・シーナの検問を通り抜けるにはどうしても憲兵団の力が欲しいんだ」

アルミンは必死にアニに懇願した！

彼女の協力が無ければ憲兵団の検問を潜り込めないからだ。

「あんたさ、私がそんな良い人に見える？」

「良い人か…その単語は好きじゃないんだ」

「なんで？」

「自分にとって都合の良い人をそう呼んでいる気がするから…」

「ふーん」

アニからすれば、怪しくてしやうがなかった。

エレンを逃がせば、それこそ人類の敵と判断されるだろう。

建前とはいえ、特別兵法会議が控えており、そこから逃亡するのは王政の攻撃材料を増やすしかない。

むしろ、調査兵団の反抗の行為を示せば、王政の逆鱗が触れて即座に兵団が潰される案件である。

「だからこの話に乗ってくれないなら：アニは僕にとつて悪い人になるね：」
「悪いけど乗れないよ、黙っておくから勝手に頑張んな」

アニはアルミンに背を向けて歩いていく。

エレンを逃している間に審議会勢力をひっくり返す材料を集める様だがどうでもよかつた。

「お願いだよアニ：君だけが頼りなんだ！」

「説得力が無いのは分かつてる：それでも大きな賭けをしないといけないんだ！」

「あんたの言つてる事は、借金の連帯保証人になれと言つているもんだよ、やるわけない」

アルミンは焦つた。

アニが全然乗つて来ないからだ。

こつちは心の余裕が無いのに向こうは何故か余裕があつた。

このままでは地下道に誘導できない。

無理やり連れて行くとうすれば、付近に居る憲兵に気付かれてしまい作戦が失敗する。

優秀な頭脳を必死に稼働していると、彼女から香水の匂いがするのに気付いた。

「ねえ、アニ。その香水は…」

「フローラからもらった物だよ。それ以上もそれ以下もない」

ここでアルミンは、アニはフローラと一番仲が良いのを思い出した。

彼女の純粹な笑みは、ミーナかフローラぐらいしか見せる事がなかったからだ。

「そのフローラが『ウォール・ローゼの通行許可証』を用意してくれたんだ」

「これを見せればアニが信用して協力してくれるって言うってたんだ」

アルミンは、どうにかして説得しようとしていたが自分の手札では無理だと実感した。

それがダメならフローラの名を出すだけでいい。

現にフローラの名が出た瞬間、歩みを止めて振り返った。

「ちよつと見せて」

「いいよ」

「…これ、ザックレー總統のサインが入った通行許可証じゃない…」

「そうだよ、總統閣下も【こつち側】だよ。ただ脱出に協力してくれる憲兵だけが居ないんだ」

アルミンもフローラがザックレー總統のサインがある通行許可証を渡してくるなんて驚いた。

ただの新兵が、總統局の長と親交があり、専用の通行許可証を持つてるなんて夢にも思わなかった。

前回行なわれたエレンの処遇を問う特別兵法会議における議長のサインがある通行許可証。

一般兵どころか貴族ですらもらえないものであるからインパクトがある。

「いいよ…のった」

特別兵法会議の議長が味方なら信じるしかないアニは、アルミンの案に乗った。

一応、護身用の指輪を彼に気付かれない様に填めたが使う事が無いのを祈っていた。

「しかし、ここまで上手く行くとは…」

エレンは、ジャンを替え玉にしてまんまと護送された馬車から抜け出せた。

そもそも馬車に乗ってから全然確認されなかったのを見ると完全に油断していた。

影武者のジャンがバレる可能性はあるが、すぐに気づかれる事はないと断言できるほどだ。

思わずそれでいいのかと言いたくなった。

「何で今なの？」

「この入り組んだ地形を利用しないと替え玉作戦が旨いかなかったんだ」

「ある程度、従順にしておいた方が警戒心が解かれて時間稼ぎができると思ったんだよ」

「そう、納得したよ」

アニの素朴の疑問にアルミンは納得できる返答をした。
人間である以上、どこかに欠点がある。

第一印象で判断していたら尚更である。

まさか王政に逆らうという選択肢が思い浮かばない憲兵たち。

従順だからまさか逃走するとは思わない心理。

それを上手く突いたのが実感できた。

…ただ、やたらと街が静かなのに違和感を覚えてしまう。

「よしこいこい」

「こいこいは…？」

「昔、計画されていた地下都市の廃墟の入り口なんだ」

「何で廃棄されたんだ？」

「それは王立図書館で文献を漁らないと分からないよ…」

「エレン、今はそれどころじゃないでしょ」

「そうだったな…」

アルミンとミカサとエレンは地下通路への階段を降りて行った。
アニは彼らを見下ろす様に待機していた。

「おい、何やってんだよ。お前が居ないと街から出れないんだが…」

「エレン、協力してもらってるのにその態度は駄目だよ…」

「アニ、降りてきて。戦力は1人でも多い方が良い」

アニは彼らを上から見下ろした。

とつても薄暗くてジメジメしていそうな通路である。

アニ・レオンハートは、そこから一步も動こうとはしなかった。

「何だよ…まさか閉所恐怖症とか言うなよ」

「ああそうだよ、か弱い乙女の気持ちなんて分からないだろうさ」

「フローラみたいな戯言を言わないでくれ…本当にヤバい状況だからさ…!」

エレンはアニが地下道に降りて来るのを願った。

女型の巨人とは一切関係ない無愛想で一匹狼の女で居て欲しかった。

アルミンもミカサも気付いていた。

地下道の入り口で顔色を変えずに微動だにしない彼女がここを怖がっていない事に
…。

「地上に行かないなら協力しない」

「な、何言ってるんだ！ さっさとこっちに来てくれ!!」

エレンはそれでも信じたかった。

格闘技を教えてもらい、3年間一緒に過ごした女を信じたかった。

「エレン…大声は…」

「もういいよミカサ、これ以上の茶番は傷つくだけだから」

「…いつから気付いていた？」

「さつきから全く人が居ないから…」

アニは悲しい顔をした。

通行許可証が本物だったからまんまと騙された。

騙されたのもあったがなにより…。

「全く傷つくよ…一体いつからアルミン、あんたは私をそんな目で見るようになったの？」

「アニ、なんでマルコの立体機動装置を持っていたの？」

「あれは…拾った…むしろ何で分かったの？」

「一緒に整備したからだよ。僅かな凹みや傷も思い出だったから僕には分かったんだ」

「ここで『104期憲兵』のアニ・レオンハートの人生は終わった。

「ここからは、『マーレの戦士』のアニ・レオンハートが再び始動する。

「はあ、これ以上誤魔化せないか…」

「…信じられないよ…きつと見間違いだと思っていたのに…」

「私だって聞き間違いでいたかったよ…」

シガンシナ幼馴染3人組に正体がバレてしまった。

ならば、フローラやミーナにも知られてしまったのだろう。

ア二は今まで築き上げてきた人生が音を立てて崩壊していく感じがした。

「なんであの時、僕を殺さなかったの？そうしておけばバレなかったのに…」

「ああ、心底そう思うよ。ミーナとフローラとヒッチでドーナツを食べる約束をしていたのに…まさかあんたにここまで追い詰められるなんてね…あの時、殺しておけばまた一緒に…」

ア二は、フローラとミーナとストヘス区で別れる時にまたドーナツを食べる約束をしていた。

今となっては、二度と約束が守られる事はないだろう。

調査兵団を半壊させた元凶なのだから。

いつかは崩壊するスパイ生活。

分かっていたのに、何故かずっと兵士生活を続けたいと思ってしまった。

アルミンを殺さなかったばかりに、幸せな日常は崩れ去った。

「おいア二！本当は女型の巨人の能力者に脅迫されているんだらう!？」

「ここに来るだけでお前の無実を証明できるんだ！」

「……ごめん、そつちにはいけない」

あのデリカシーが無いホモ野郎は、兵士と戦士に精神分裂した糞野郎だ。

いつも面倒な仕事ばかり押し付けてくる癖に他人事のように発言してくるゴリラ野郎。

何度も殺してやろうと思った。

腰巾着野郎も勝手にカミングアウトして死んでいった奴も殺したかった！

一名、既に死んでいるが、自分の手で殺害したかった。

でも、自分も戦士ではなく兵士と過ごしてきた以上、彼らを裁く権利はなかった。

「私は……戦士になり損ねた」

「もう時間が無い！早く来いよ！」

「話してよアニ！まだ話し合う事ができるはずだよ！」

もうやめて欲しかった。

アルミンの一言で説得されそうだった。

「もういい！これ以上聞いてられない！もう一度ズタズタに削いでやる！女型の巨人！」

ミカサが雨具を脱ぐと立体機動装置を纏っており、鞘から操作装置に刃を装填した。その刃をア二に見せつけるように構えた。

「あははは…ははははは！あつはははははははははは!!」

それを見たア二は笑った。

まるで照れる様に顔を染めて腹を抱えて笑った。

今まで一匹狼を演じてきたが、もう演じる必要がなくなり嘘を付く必要が無くなった解放感。

もう二度と日常生活に戻れないという覚悟。

16歳の少女でしかない彼女は笑うしかできなかった。

エレン達は、ただ彼女が笑っているのを見ていしかできなかった。

「ははははは…アルミン…私が良い人で良かったね。ひとまずあんたは賭けに勝った」

あれほど正体がバレるのを恐れていたアニ。

だが実際に女型の巨人とバレるところまで笑う事ができたのは彼女も想定外だった。調査兵団の兵士を殺害してきた事による罪悪感。

皆から蔑まれて自分の居場所がなくなった孤独感。

そしてなにより今ならまだ憲兵に戻れるチャンスはある。

「……でも私が賭けたのはここからだから！」

アニは囁もうと指を口に近づけた。

全てを終わりにして故郷に帰って父に再会する為に！

フローラ・エリクシアは、アルミンからもらった望遠鏡で辺りを眺めていた。

主婦たちが雑談しており、近くではその子供たちが遊んでいた。

貴族が優雅に庶民に見せつける様に歩いており、従者がそれを護るように展開してい

る。

今日は雲が多い晴れの日であり、日差しが眩しかった。

「何か見つけたか？」

「いえ、レスター班長。特に問題は無さそうです」

「おい貸せ！」

「ハッ！」

第三分隊のレスター班長に望遠鏡を貸した。

彼が状況を確認している間に今、得た情報を彼女は手帳に記した。

「目標に接触したはずだが、やけに静かだな……」

「よし、もう少し接近するぞ！」

「了解しました！」

少しの間、望遠鏡で眺めていた班長であったが、もつと接近する事にした。

もしかしたら、無事に捕縛が成功したかもしれないからだ。

それでも向かうのは、実際に捕縛した様子を見ないと安心できないからである。フローラに望遠鏡を返して立体機動装置を使って地面に着地した。

「はあ…」

操作装置のグリップを握ってアンカーを民家の壁に打ち込んでゆつくりと着地したフローラ。

同期であるアニ・レオンハートの負の感情が手に取るように分かった。だからこそ、女型の巨人だと分かってしまい憂鬱だった。

「民家に打ち込んだアンカー跡って後で賠償されるのかしら？」

つい余計な事を考えてしまった。

考えないとやってられないのもある。

「装備の確認は怠るなよ」

わざわざレスター班長が経験豊富の自分にそれを告げたのをみると相当、顔がまぶかつたようだ。

フローラは慌てて緑色の外套のフードを深く被った。

近くにある民家の窓の中は暗く、鏡の様に窓が反射してくれたおかげで姿を確認できた。

呼吸を整えて再び彼を見ると、それを待っていたかのように走り出した。

置いて行かれない様にフローラも全速力で駆け抜けた。

「急ぐぞー！」

「目標は既に捕縛の準備に入った！」

アルミンの発砲音が遠くから聴こえてきた。

それを受けてジルバ、レクソンも加わりアニを誘導する地下道に向かっていった。

「あそこだー！」

レスター班長の怒声を聴いた瞬間、フローラはアニの姿が見えた。

民間人に化けた調査兵たちに取り押さえられている現場であった。だが、フローラはそれを目撃した瞬間、逃げ出した。

「総員、退避！退避！退避！退避！！」

必死に退避を叫んだ！

アニの負の感情は『まとめて吹っ飛ばしてやる』だったからだ。

何言ってるんだこいつと聞き流した第三分隊の3人はアニに向かっていった。

フローラは立ち止まり、近くに民家に隠れようとすると爆発した！

思わず両腕で顔面を守ったがフローラは爆風で吹っ飛ばされてしまった。

地面に全身を打ち付けてもなお、立ち上がろうとするとアニが居た場所に女型の巨人が居た。

「ああ……」

砂煙と瓦礫の破片、そして悲鳴が伝わり、一瞬、現実とは思えなかった。

口内に砂が入り込んで五感でアニが巨人化したのだと分かってしまった。

「まだ…」

フローラはブレードを鞘から抜いて必死に応戦しようとした。

…が視界が揺らいでおり意識が朦朧としていてそれどころではなかった。

痛みは慣れたものだが、それでも身体がついてこれなかった。

「うっー」

女型の巨人はこちらに気付いたように走り出した。

踏みつぶされる！

そう思っていたが、こちらの身体を越えて去っていた。

その後ろ姿を見て追おうとするが力が入らず、フローラは瞼を閉じて倒れ込んだ。

まるでここで休めば、永遠に悲しみを背負う必要が無いと言わんばかりに…。

59話 残酷な世界

訓練兵団に入団して2年目、ミカサ・アツカーマンは調理場に向かっていた。道中ではエレンとジャンが夕飯を巡って喧嘩しており、キース教官に発見されて飯抜きになった。

大切なエレンが飯抜きになったのは重要だが、それより用があった。

「何をしているの?」

ミカサは調理場で芋の皮剥きをしている女に質問した。

「……何って?」

アニ・レオンハートは、深刻な顔をしたミカサの顔を見て何か勘付かれたと分かった。だが、何を気付かれたか分からないので、しらばつくれるしかできなかった。こういう時に下手に発言すると余計にボロが出るからだ。

「見ての通り、調理当番だから芋の皮剥きをしているけど……ミカサこそ当番じゃないだろう？」

ミカサは黙って調理場の扉を閉めた。

一見するとアニの発言や行動、表情には問題なさそうだった。

ただ夜な夜な兵舎から抜け出しており、何かやっているのは分かっていた。

「訓練所に落ちていた……対人格闘訓練の時に貴女が落としたものだと思う」

「……確かに私のだね。どうも……」

アニは、落とし物を拾ってくれたミカサに感謝して指輪をもらおうとした。

ミカサが細工されたレバーを引いて指輪から棘を出すまでは。

「コレは何？」

「……護身用の仕掛け」

半分嘘で、半分本当である。

武器になる時点で護身用には間違いないが、その程度の棘では役に立たない。あくまで気休め程度……と見せかけて巨人化する為の道具である。

アニは、調理場にある包丁の柄から手を放して無防備状態にして会話に参加した。

「護身用？対人格闘に長けている貴女が？こんな棘を出す指輪を？」

「格闘術だけでは対応できない事態があるからね」

「貴女の格闘術で対応できない事態にこの指輪は役に立つわけない」

「……何が言いたいのか？」

指輪をミカサは追及したい様で、明確な答えが出るまで逃がしてくれそうもなかった。

アニは、嘘を交えてその指輪に関して話をする事にした。

「ここで人間の血など流したくないのだから……」

「貴女が何故、何の為にこんな物騒な物を持ち歩いているのか質問したいだけ」

「父親がくれたよ。いくら強くても少女じゃ親なら誰だって心配するものだろう？」

「そうね」

ア二はミカサの視線が気になった。

そして気付いた。

調理場にある包丁の柄を震えるほど強く握り締めていることに…。

「私の父は酷く心配性でね、送り出す直前になって泣いてしまうほど心配していた」

「あの時、格闘術を教え込む鬼ではなく、娘を心配してくれる父だとね」

「あんたの両親だって、同じ事を考えたはず…」

「両親は居ない！殺された!!」

ミカサの両親は人攫いの3人組に殺害された。

ウォール・マリア陥落に続いて2回も日常を破壊された彼女は油断しなかった。

エレンを失わない様に細心の注意を払って敵を排除する…それだけだった。

「フローラと同じシガンシナ区出身だったね…悪いね、変な事を言っただけ…」

度々問題を起こしているフローラ・エリクシア。

彼女はウォール・マリアを繋ぐ扉を「鎧の巨人」が破った時に飛んだ瓦礫で両親が潰された。

その時のショックで、大半の記憶が喪失し、鎧の巨人を討伐する事を夢見る女である。是非とも、絶望した鎧の巨人を討ち取って首を自分に見せて欲しい物だ。

「こちらこそごめん、指輪を返す」

「ありがとう」

ミカサは指輪のレバーを触り、棘を収納したのを確認して持ち主に返却した。

これ以上追及してもはぐらかされると思ったし、事情が分かったので無理やり納得した。

「私はただ、そんな物騒な指輪を嵌めてエレンと対人格闘して欲しくないだけ」

「訓練中に何かの弾みで棘が飛び出したらエレンが怪我をする」

「ああ、なるほどね。安心しな、これはお守りみたいな物で滅多に身に付けないから…」
「…そう、邪魔して悪かった」

一番言いたい事を告げたミカサは調理場から出る扉に向かっていく。その後ろ姿をアニは見る事しかできなかった。

「…アニは何で兵士になろうと思ったの？」

「憲兵になって安全で快適な暮らしをする為さ、他の連中と同じだよ」

「あんたといい、シガンシナ区出身の連中は違うようだけどね」

南方訓練兵团におけるシガンシナ出身の訓練兵は意外と少ない。

誰もが家族を失っており、指を指されて笑われるより開拓地に行き生産者になるのを望んでいる。

だからこそ、巨人の恐怖を乗り越えた者は、誰も憲兵になる事を望んでいないようである。

主席で卒業しそうなミカサも、調査兵团に所属するエレンについていくのは誰もが分かっていた。

「アニが憲兵团に行きたいのは分かる。でも他の連中と理由が違うと思う」

「内地に行きたい、贅沢をしたい、王様に身を捧げたいマルコも居たけど、あんたは違う」
『憲兵にならないといけない』から努力しているように見える」

ア二は憲兵になって王政について探るつもりだった。

何度も偵察に行つたが相応の身分がなければ疑われて追跡されるからだ。

殺人経験が豊富そうな帽子を被つたおじさんに追われて、泣く泣く下水道に逃げ込むのは御免だ。

それに憲兵になれば【座標】に関しての情報に触れられる機会があるかもしれない。
他の戦士も憲兵を目指しているが、真面目に偵察する気が無い以上、自分が頑張るつもりだ。

「誰だつて何かを抱えているだろう？そいつらの抱えている物と大して変わらないよ」
「この指輪は何も役に立たないかもしれないけど、何かしらの役割の為に作られたものだから…」

ア二は【戦士】になりたくてなつたわけじゃない。

時代や環境が許さなかつたから戦士になつただけだ。

ただの駒として扱われて、役割があるからそれを全うするだけである。

104期訓練兵も時代や環境が許さないから「兵士」になろうとしている。

「そういう物に対して冷酷になれないんだ」

「例えどれだけ細やかで誰にも顧みられない物としてもね…」

「多分、それが私の抱え込んでいる問題だよ」

ただ他者と違うのは、自分には「任期」がある。

使用期限のある道具である以上、効率良く行動しなければならぬ。

例え「座標」を指示通り奪還し帰還して、お役御免で使い捨てられる駒だと分かっているても…。

それでもアニは使命を果たすつもりだ。

父との約束を守るだけで…良かった。

「…格闘術の対応できない事態には役に立つ…そんな事が起きない事を祈る」

ミカサは、アニの表情から嘘は言っていないと分かった。

誰かを危害に加える為に指輪を持っていないとようやく納得して調理場から出ていった。

アルミンが専用銃の発砲音の合図で物陰で潜んでいた兵士たちがアニに襲い掛かった。

ウオール・ローゼの通行許可証を偽装した事があるからこそ本物を見て、油断していた彼女。

成す術もなく兵士に腕や脚を掴まれ、舌を噛まれない様に布を噛まされた。

この瞬間の為に、訓練してきた兵士たちに抵抗できるはずもなかった。

「やった……これで」

アルミンもエレンもアニ・レオンハートの無力化し捕縛が成功したと実感した。

だが、ミカサは見逃さなかった。

アニの右手の人差し指に仕込み指輪があるのを！

「くっ！一歩…遅かった」

ミカサは油断した2人を掴んで無理やり強く引っ張った。

指輪から棘が飛び出したのを見て確信に変えた彼女は全速力で奥に向かっていく。

それを見届けたアニは、棘による自傷をトリガーにして巨人化した！

ただでさえ中隊規模すららない調査兵団の兵士を一度に20名以上、巨人化による爆風で殺害した！

「えっ…」

エレンはミカサに引っ張られるまま通路の曲がり角に居た。

さきほどまで居た場所に民間人に扮した兵士達の無残な骸があり、壁を血と内臓で汚していた。

「2人とも怪我はない!?立てるなら走って!」

ミカサは、再び彼らを掴んで無理やり引つ張りながら走った。巨人の手がこちらに迫って来ていたので逃げるしかなかった。

「どうやって巨人化したの!?!舌を噛む暇すらなかったはず…」

「指輪に刃物があった、それで指を切って巨人化した」

「そんな…僕の嘘は気付かれていたのか。もつといいやり方があったはず…くそお…」

ミカサは、格闘術で対処できない事態に役立つ指輪を彼女に返したのを後悔した。アルミンは、ミカサの返答で自分の想定の甘さで死なせた兵士を想い、悔やんだ。エレンは何もできなかった自分を恨んだ。

「反省は後!これからどうすればいい!?!」

「まず奥に居る3班と合流して地上に脱出して二次作戦の通りに女型の巨人と戦う!」

異音と衝撃で気付いた3班がこちらに向かって来ていたのをエレン達は目撃した。ここから巨人化してアニの捕獲作戦に協力する。

本当にできるのかエレンは心配した。

「おーい！捕獲作戦は……がああああっ?!?!」

駆けつけた3班は、アルミンに話しかけようとした瞬間、天井が崩れて瓦礫の下敷きになった。

女型の巨人によって地下道を踏み抜いたせいである。

「助けないとー！」

「エレン下がってー！」

瓦礫の下敷きになった兵士たちを助けようとしたエレンをミカサが制止した。
更に天井が崩れる危険性があつたし、助からないと分かっていたからだ。

「あいつは……エレンを殺す気なの!?!」

「さっきの爆発といい、エレンが死なない事を賭けて攻撃してきたんだ！」

「アニは死に物狂いでエレンを奪取するつもりだ！退路を塞がれた以上、どうしようも

ない!」

地下道から出るには入り口か、さきほど空けられた穴から出るしかない。

ただ、アニが待ち構えており、圧倒的に不利である。

近くに待機していた武装した兵士も、さきほどの爆発で吹っ飛ばされて役に立たないだろう。

「オレが…オレがなんとかする! 巨人化してお前らを守る! その隙に脱出してくれ!」

以前、トロスト区の水門で榴弾からミカサたちを守った時みたいに巨人化しようと右手を噛んだ。

だが、巨人化する事もなくただ痛みと血で地面を汚す結果で終わった。

「またかよ…こんな時に…!」

「目的が無いと巨人化できないんだっけ? もう一度、強くイメージしよう」

「やってる! でもできないんだ! なんぞだ!」

エレンは必死に巨人化しようとした！

ミカサやアルミンを守る気持ちは、砲撃された時と同じである。でも何故か、ここでは巨人化しなかった。

「まだアニと戦う事を躊躇してるんじゃないの？」

ミカサの一言でエレンは固まった。

「まさかこの期に及んで…アニが女型の巨人じゃないと思ってるんじゃないの？」

ミカサは、エレンの足りない物に気付いた。

女型の巨人ではなくアニを殺そうとする覚悟である。

自分は巨人の本能に支配されて暴走するからアニもそうであって欲しいという甘さ。この残酷な世界では不要な感情である。

「あなたの班員を殺したのは、あの女でしょ？まだ違うと言い切れるの？」

エレンはミカサに覗き込まれて目を逸らした。

「分かってる！そんなこと！」

「じゃあ、なんで目を逸らしたの？」

ミカサは確信した！

エレンは、アニに対する特別な感情を抱いており、そのせいで巨人化を妨げていると！

アルミンもミカサの一言で事情を察した。

「作戦を考えたよ、僕とミカサがそれぞれの入り口に入るんだ」

「それって……」

「うん、女型の巨人はどちらかに対応すると思う」

さすがに同時に出てくれば、どちらかに対応するしかない。

立体機動で飛び回れる以上、片方に集中しないとどちらにも逃げられるからだ。

「待てよ！それだとお前らのどつちかが死んじやうじゃないか！」

「ここに居ても3人死ぬだけだよ」

「アルミン、位置に着いて！」

「うん、分かった！」

アルミンは、エレンが戦闘可能な心理状態だと思ったから安全地帯に行ってもらおう事にした。

不測な事態である以上、彼を酷使するより安全地帯に待機してもらおう方が良い。

何故なら、アニの狙いはエレンである以上、再び攫われるのだけは避けなければならぬ。

「な、なんで…お前らは…戦えるんだよ！」

エレンは信じられなかった。

相手は格上の知性がある巨人だ！

まともにもやりあつて勝ち目がないのは誰もが分かっているはずだ。

それなのにミカサもアルミンも躊躇いなく行動で来ていたのに衝撃を受けた。

ミカサもまた、何で歩み続けられるのか分からなかったが、ただ一つ言えることがあった。

「仕方ないでしょ？世界は残酷なんだから」

ミカサはエレンを諭すように振り返って発言した。

世界が残酷である以上、戦い続けるしかない。

突き進む道が地獄であると知っていても戦うしかできない。

そこで立ち止まれば今までの犠牲が全て無駄になる。

ならば、進撃し続けるしかない。

「そうか…そうだよな」

ミカサとアルミンが合図を出し合って外に飛び出したのを見て俯いたエレンは覚悟を決めた！

『エルヴィンめ…何を企んでいる』

憲兵団の師団長であるナイル・ドークは、大人しいエルヴィンに疑問に思っていた。彼なら王都に招集されて特別兵法会議を開かれれば絶対に勝ち目が無いのは知っているはずだ。

同期だったからこそ、何かを企んでいるのは理解している。だが決定的な証拠がない以上、彼らを指摘できなかつた。

「ドーク師団長！報告します！」

「どうした？」

「何故か調査兵団が民衆を避難誘導しております！」

「…はあ？」

ドークは部下からの報告が信じられなかつた。

避難誘導？この内地であるストヘス区で？

人間は想像以上の事を目の当たりにすると思考が停止する。

彼もまた、一瞬、調査兵団が何をやっているのか分からなくなった。

「…つておい！エルヴィン！何で避難誘導を…」

彼は、同期だった男に叱り付けようとした瞬間、遠くで迸る光が見えて言葉をつまらせた。

少し遅れて爆風で辺り一面を吹っ飛ばしたのか瓦礫が空中で飛んでいき爆音が辺りに響いた。

音が止んだ瞬間、馬車から黒髪の男が飛び出してきた。

護送対象のエレン・イエーガーである。

「待て、動くなエレン・イエーガー！」

近くを警護していた憲兵は、彼の双肩を掴んで止めようとした！

「変装ごっこはもう終わりだ!!」

「なっ!?!」

「二度とその名を呼ぶんじゃないぞ！馬鹿野郎！」

アニの捕縛作戦が失敗したと直感で分かったジャン・キルシユタイン！

彼は鬱陶しい黒髪のカツラを外して、憲兵の腕を振り払って駆け出した。

一目散に団長の元へ駆け出した見知らぬ男を制止するのを忘れた憲兵は思考を停止させた。

「団長！俺も行きます！」

「装備は第4班から受け取れ」

「ハッ！」

団長の指示を受けてジャンは駆け出した。

その様子を傍観していたドーク師団長は、ようやく護送していたエレンが偽物と気付いた。

「エルヴィン…あれは何だ!?どういう事だ説明し…」

「団長！装備を！」

「ぐ」苦勞！」

「おい待て待て！何をしているんだ!？」

エルヴィン団長は部下から装備を受け取って素早く着用した。

壁外に進撃する調査兵団の長として恐れどころか眉一つ動かさずに着替えてみせた。

立場が上であるはずなのに無視されたのあるが、説明せずに物事を進めていく同期に困惑した。

「護衛班！ここは良い！状況を確認してこい！」

「[[ハッ！]]」

とにかく異変が起こったのは確かだ。

ドークは速やかに護衛班に指示を下した。

マルロを筆頭とする護衛班は、団長の指示に従って行動した。

「ナイル、速やかに全兵を派兵しろ…！巨人が出現したと考えるべきだ」

「何を言っている！ここはウォール・シーナだぞ！巨人が…」

「ここでドークは気付いた。」

「エルヴィン、お前…一体、何をしているんだ…」

これがエルヴィンの策。

追い詰められた調査兵団の長が下した状況をひっくり返す切り札。

例えストヘス区に居住する罪が無い王政民を犠牲にしても、目標を達成する覚悟。馴染みであった同期の顔は、悪魔の顔に見えてドークは戦慄した。

負傷して治療中のリヴァイは、ただ事の顛末を見守る事しかできなかった。

『やはりか…』

女型の巨人もとい、アニ・レオンハートは敵の動きを待っていた。

同時に穴から飛び出してきた兵士。

まずは動きが鋭い兵士を捕捉して右手で掴もうとした。
ミカサはその指を回転斬りで両断して後方に離脱した。

『あれはミカサ、じゃあもう一人はアルミンか』

アニは、まだエレンが地下道に居ると瞬時に理解した。

巨人化して不意打ちするか、逃げるかどちらか分からないがどうでもいい事だった。

まず一度、襲撃してくる調査兵の追手をなぎ倒して撤退するつもりだ。

嵌められた以上、明らかにここに留まるのは不利であった。

「女型の巨人を逃がすな！」

「足止めするだけでいい！」

爆風を免れた調査兵団の兵士たちは女型の巨人に双剣を構えて突っ込んできた。

“彼女”は高速で飛び回る兵士のワイヤーをチョップして地面に叩きつけた。

その衝撃で、民家の屋根に頭から激突した兵士は二度と動かなくなつた。

「いの……」

一度離脱しようとした兵士のワイヤーを掴み、地面に叩きつけた！

彼は死ぬ前に息子の顔を思い出してそのまま、意識は二度と現世に戻ることは無かった。

フローラと違って弱点のワイヤーを見せている蠅など敵ではなかった。

「ダメだ……立体機動に熟知されていて近寄れん……」

兵士の1人が怖気づいてしまって身動きが取れなくなった。

だが女型の巨人は、戦意喪失したのに全く動く気配のない兵士に注目していた。

『……』

殺意を感じて女型の巨人は振り返って右手で薙ぎ払った。

伏兵は、身体を捻って巨人の腕を勢い良く切り裂いた！

「エレンは…渡さない！」

ガスを何度も噴出して着地点を調整し、再び駆け出したミカサ。

女型の巨人は近くの民家の屋根を薙ぎ払い、瓦礫を飛ばした！

直撃しそうな瓦礫のみをスナップブレードで受け流して屋根に着地した！

それを予測して回し蹴りで屋根を吹っ飛ばされたせいでミカサは身動きが取れなくなった。

「アニー！今度こそ僕を殺さないと『賭けたのはここからだ』なんて負け惜しみ言えなくなるよ！」

アルミンは女型の巨人のうなじに居るアニに届くほどの大声で叫んだ。

それを見たアニは、異様にテンションが冷めてしまった。

どうせこれも囷だと分かっているからだ。

硬質化した右手でうなじをガードして死角からの兵士の斬撃を弾いた！

「チッ！アルミンこつちだ！」

「了解！」

ジャンの指示に従って立体機動で逃亡したアルミン。

それを追って女型の巨人は走り出した。

策士のアルミンを殺さなかったせいで、巨人化しなければならぬほど追い詰められた。

二度と同じ失態を繰り返さない様に終わりにするつもりだった。

「ふふふ…来るよ…！」

振動がどんどん近づいてくるのを身体で実感してハンジ分隊長は笑っていた。

「あの一分隊長…目が泳ぎ過ぎです」

副官のモブリットは、上官が正気である事を確認する為に発言した。

だが、ハンジは女型の巨人で頭が一杯のようで返答は無かった。

煙突や民家の影に隠れている第四分隊は、虎視眈々と待ち構えている。

「アルミン急げ！」

「分かつてる！」

先にジャンが視界に映り、次にアルミンが飛び出してきた。

そして女型の巨人が目の前を横断しようとした…その瞬間！

「撃てえ!!」

号令によって『対特定目標拘束兵器』から多くの矢じりが飛び出して巨人の身体を貫いた。

巨大樹の森で使用した兵器の軽量化して少数量産したものである。

主に脚を貫いたワイヤーを立体機動装置で巻き取るように高速で引き寄せた。

いくら巨体とはいえ、ひとたまりもなく女型の巨人は仰向けに倒された！

「よし！やったぜ！」

「いや、まだまだ！僕は…最後の賭けをする！」

第四分隊が矢じりのついた網を被せて、てきぱきと仕事をこなしていた。

それを見たジャンは、勝利を確信したがアルミンは油断してなかった。

これで終わるわけがないと思い、最後の希望を探しに地下道の入り口に戻っていく。

「おいアルミン…まちやがれ！」

ジャンも慌ててアルミンを追いかけた。

「よし！三次作戦まで出番が無いと思ったけどとんでもない」

「さすがはエルヴィン団長…さてと！」

ハンジ・ゾエは喜びながら立体機動で屋根から降りて女型の巨人の頭に向かっていった。

それは傍から見れば子供がはしゃいでいる様に見えるが本人は真面目にやっている。

「よし、大人しくするんだあ！ここだとの時みたいにお前を喰う巨人は呼べないよお？」

ハンジは殺意を隠しながら女型の巨人の瞳にスナップブレードを突き刺した！

視界に異物があるなんてさぞかし苦痛であろう。

その辺の巨人とは違って怯えた様子を見て歓喜した！

「でも大丈夫、代わりに私が喰ってやる！お前から穿り出した情報をね！」

能力者を脅す為に睨めつけたハンジは、情報を訊き出すのを『喰う』と表現した。

アニからすれば、冗談抜きでシャレにならない事であった。

こんな糞見たいな作戦に従事したのは、後釜になる『戦士候補生』に喰われなくなかったからだ。

ハンジは知らずに特大の地雷を踏み抜いてしまった。

『この！知らないくせに！父に逢うまで喰われてたまるかあああ！』

「彼女」は、唯一動けた右脚で樽状の拘束兵器を薙ぎ払った！

予想してなかった攻撃に混乱した第四分隊の隙を突いて再び女型の巨人は逃げ出した！

「チツ！さすがに罨の数が足りなかったか！」

「分隊長、このままだと壁に登られます！」

「お前たち！逃がすんじゃないよ！逃がしたら人類滅亡だと思え！」

ハンジは、部下たちに激を飛ばし、徹底的に追い詰めるつもりだった。

ところが、別の場所で閃光と爆風が起こった！

「何だ!?!」

「新手か!?!」

「いや、違う！巨人化したエレンだ！」

エレンは、女型の巨人の継承者であるアニを殺しても止める覚悟をした！

14 m級の女型の巨人は遠くからでも良く見える。

彼はアニを殺す為に全速力で駆け抜けた！

「まずい！憲兵に間違つて攻撃されるぞ！」

「ニア、グンタ、アーベルは私の援護を！他は憲兵からエレンを守れ！」

「了解しました！」

「皆さん、祈りましょう。大地の揺れでも壁は不変であります」

ニック司祭は地震でパニックになった信者を宥めて再び祈りを続行させた。

2回も揺れて爆発した音したが、この礼拝堂は兵団支部の次に頑丈である。

扉を施錠すれば、鉄壁のシエルターになるようにそう、50 mの壁の強固さを表すように。

「とにかく信じるのです！神を信じる無垢の心こそが巨人から守る術であり……」

人類を巨人から護る3つの壁に扮するように、三重の円陣を信者に組ませている。

100年以上人類を守護してきた壁と一体感になる事で意識が別次元に昇華されるのだ。

誰もが心を一つにして団結する時、人類は何者にも負けない頑固な存在と昇華する。

「唯一、巨人を退けられる力…」

だが、地面の揺れは収まるどころか、どんどん揺れが大きく、近くなっている感覚がした。

誰もがそう思ったが、これも神の試練だと思い、誰も逃げ出す事もなく祈りを捧げていた。

そんな信者の想いを文字通り踏み躪って、殴り倒された女型の巨人が彼らを来世に送り出した。

「きよ、巨人!?何故ここに…!?!」

奇跡的にニツクは無事だったが、恐れている事がある。

「やめろお！壁に近づくな！」

ニツクは女型の巨人に人類を護る50mの壁を破壊されるのを危惧していた！

一方、ア二は自分のせいで数十人単位の人命を奪ったと身をもって実感した。

だが、悔いている暇などなかった。

とにかく平地に誘導しないと圧倒的に不利であったからすぐに立ち上がって逃げ出した。

「どうして巨人が!?!」

「良いから早く着替えろ！」

デニス・アイブリンガーは同僚達と共に必死に立体機動装置を身に付けていた。

訓練兵団では優秀だった彼らであるが腐敗したせいで装着に手古摺っていた。

式典などの公式な行事以外では立体機動装置を付ける機会が無いせいで付け方を忘れていた。

「来るぞ?!逃げろおおお!」

「うわあああああ!」

「嫌だあああああ!」

巨人2人組が妨げる物を蹴散らして向かって来るのを見た憲兵達は逃げ出した。

その内の一体が自分の部下であるとは夢にも思わないデニスは辛うじて踏まれずに済んだ。

「ハアハア…なんとがあああつ?!」

しかし、後続で走っていた巨人化したエレンに踏み潰されて彼は虫の息になった。

「だあ、だあでえかあ…ああつ…」

同僚に助けを求めようとしたが、隣で肉塊どころか血だまりになっており生存者は他に居ない。

新兵に経験を積ませるといふ名目で仕事を押し付けてきた末路は、経験不足のせいで死ぬ。

もっとも経験が必要だったのは自分だと分かってしまい、その瞬間、力尽きてしまった。

『アニ、いつも周りをつまらんそうに見ていたお前が生き生きとしている時があつたな……！』

『父親から強いられて無理やり教わつた格闘技を披露する時だ』

巨人化したエレンは、広場で立ち止まった女型の巨人を冷静に眺めていた。

『彼女』は肩幅に構えて肘を脇腹に付けて顔面をガードするように拳を見せつけた。

これはアニの格闘技の構えであり、巨大樹の森で最後に見た女型の巨人と同じポーズである。

『なあ、アニ！何の為に戦っているんだ！』

エレンは全力で右の拳でストレートパンチを放った。

それを予測した女型の巨人は下段蹴りで、巨人の片足を吹っ飛ばした！
その衝撃波は凄まじい物であり、近くにあった屋台を根こそぎ吹っ飛ばす威力があつた。

『お前はどんな大義があつて……人を殺せた！』

それでもエレンは女型の巨人の顔面に拳を殴りつける事が成功した。

振動で双方とも意識が飛びそうだったが、四面楚歌であるアニの方が不利であつた。

調査兵が次々と出現しており、その内、リヴァイ兵長が出現する以上、逃走するしか
なかつた。

『いのままじゃ……』

アニ・レオンハートは悩んだ。

このまま格闘術で相手にするのは、疲労が大きすぎる。

壁の向こうにも調査兵団の部隊が展開しているのは分かつており、無駄な消耗を避け
たかつた。

しかし、考えている間にも執拗なエレンの追撃を受けて逃げきれなくなった。

『よし！行ける！』

エレンは更に追撃しようとした。

『あれ？』

ところが、何故か視界の上に地面が見えて、さきほど地面だった場所に眩しい太陽が見えた。

それどころか、身体が利かず回転による遠心力に振り回されて地面に激突した。

その衝撃でエレンは意識を失った。

『こんなもんか』

女型の巨人は、両手の親指の爪を硬質化したまま伸ばして鋭利な刃物にした。

巨人の右肩から左の脇腹を切り裂いたおかげでエレンは何もできずにノックダウンした。

爪を硬質化させて武器にするなど、彼女”は考えた事もなかった。

『変異種のおかげで助かった…』

カラネス区の壁を乗り越えてきた6 m級の変異種をアニは目撃していた。

【顎の巨人】にそっくりな変異種を見て絶望してしまったが、利点もあった。

変異種は、【爪】を硬質化させたばかりか、刃の様に爪を伸ばして駐屯兵を蹂躪していた。

女型の巨人は、強化の為に『脊髓液』を飲んでいたが武器に転用できると知った。

一か八かの賭けに、女型の巨人は見事に勝利したのだ。

「エレンがやられた!?!」

「まさかここまで実力差があったとは…」

焦ったのが調査兵団である。

広場に逃げられたせいでアンカーを撃ち込めずに立体機動に移れない。

更に馬が居ないせいで、追いかけることも攻撃を仕掛ける事もできなかった。

まさか両手の親指から1秒足らずで【爪】を20mも伸ばしてエレンを両断するとは思わなかった。

「まずい！エレンが奪取される！」

「よせ！命を粗末にするな！」

「殺されるわけじゃない！様子を見ようよ！」

女型の巨人は巨人化したエレンの首を爪で捌いた。

長くは硬質化できないのか、爪を構成していた結晶体がボロボロと崩れ去った。

気絶して血塗れになったエレンを掴もうとした女型の巨人には好都合である。

焦ったミカサは、駆け出したが第四分隊の面々に制止されて動けなくなった。

『長くは硬質化できないのか…でもこれでようやく故郷に帰れる』

アニ・レオンハートは、ようやく友人たちの会話以外で純粹に笑う事が出来た。

巨人化できる悪魔の末裔を拿捕できた以上、ようやく祖国に帰還できるからだ。

【座標】ではなく【もう一つの巨人】の可能性もあったが……どうでもいい。

エレンが【顎の巨人】でない以上、持ち帰っても戦士候補生に自分が喰われるわけないだろう。

『あいつらは……見捨てる』

精神分裂した挙句、兵士ごっこを愉しむ糞野郎と腰巾着のストーカー野郎は即座に見捨てた。

代わりに友人達を拉致して、お持ち帰りしたいくらいだった。

役立たずのゴミより、自分を慰めてくれた存在の方が大事だったからだ。

『発砲音?!』

気絶したエレンを優しく掴もうとしたが、発砲音がしたので振り返った。

そこでは、女兵士が黒色の信煙弾を撃ち上げていた。

女型の巨人は、その兵士に見覚えがあった。

「お久しぶりね、女型の巨人!!…いえ、アニ・レオンハートって言えば良いのかしら？」

アニは、できれば再開したくなかった女を見て一瞬だけ頭を垂れた。

残酷な世界である以上、戦闘が避けられないと思っていたが、きついものがある。

心が折れそうになった時、力になった女が自分の名を呼んで刃を向けている。

巨人の中の居ても彼女が作った香水の香りで満ちているからこそ、悲しみがあった。

「調査兵団の第四分隊、遊撃戦闘員、フローラ・エリクシアがお相手しますわ！」

壁内の人類最強の女が、かつて親友だった者に刃を向けていた。

その顔は、トロスト区で巨人を討伐していた狩人と同じものであった。

60話 フローラ VS 女型の巨人 Battle Second

「お願いだから死んでくれ！お前が生きていると皆が苦しむんだ」

誰かの声が聴こえた。

きつと男の声だろう。

少なくとも誰かが自分に死ねと耳朶を打ったのは分かる。

フローラ・エリクシアは鎧の巨人を討伐するまで死ぬつもりはなかった。

「はあ？わたくしは道を進むだけよ！邪魔するなら全て蹴散らしてあげるわ！」

気が付けば、空は天の川で無数の星で埋め尽くされており地面は砂で覆われていた。

まるでアルミンが話していた砂で構成された雪原みたいなものであろう。

薄暗い青色の空間は、とても幻想的であり、すぐにここが夢であると分かった。

「お前は生きちゃいけない人間だ！お前が生きていると大切な人が苦しむんだ！」

声はするがどこにも姿は見えない。

不思議な事に声は聞こえて記憶に残っているのに性別を判断できなかった。まるで正体が自分にバレるのを恐れている卑怯者である。

ただ、その正体が自分にとって大切な人だと分かる。

何故なら、本気で憎んでいるなら、わざわざ呼びかける必要が無いからだ。

「次で何もかも終わらせてやる！そして必ず巨人を……」

声の主は巨人を駆逐するつもりのようなのだ。

それで声の正体が分かった。

「わたくしが巨人を駆逐してあげますわ！」

あえて声の主の名前を叫ばずに発言したフローラ。

そして、くだらない夢から覚めようと指を噛んだ！

「ううっ…ゴホゴホ！」

フローラの口内は、砂や細かな破片で汚されており舌が乾いていた。

視界は、ぼやけているが幸いにも五体満足で動ける様だ。

まずはブレードが挿入された操作装置の柄を握りしめて立ち上がろうとした。

「痛たたた…久しぶりに気を失ったわ」

訓練兵時代では慣れた事ではあったが、久しぶりに気を失う感覚を思い出したフローラ。

慣れた手つきで立ち上がろうとしたが、受け身をしなかったせいか身体中が悲鳴をあげている。

何度も経験した脳震盪というより、単純に今までの疲労が積み重なった結果だと思っ

「レスター班長！レクソンさん！ジルバさん！」

さきほど同行していた先輩たちに声をかけたが返答は無かった。砂埃が晴れていくと、そこには惨状が広がっていた。

「そう…みんな死んだのね」

両脚以外存在しない遺体、壁に減り込んで原型を留めずにスライム状になった赤色の何か。

折れやすいスナップブレードが円弧を描いて曲がっており、凄まじい衝撃だったのが分かる。

その近くには持ち主と思われる腕が転がっていた。

辛うじて原型を留めている死体は、自分の言葉に反応したレスター班長だった物だと分かった。

彼女は、離してしまったグリップを握り直して地面に当てて杖代わりにして立ち上

がった。

「アルミン！あそこで動いている奴が居るぞ！」

「よし、逢いに行くぞ！」

ジャン・キルシュタインは、アニが放った爆心地で動く人影が見えた。

爆心地で他の兵士は無残に死んでいるのに一人だけ五体満足で見ているのを見てもすぐに分かった。

「おい!?無事か!？」

「無事じゃないわよ…！」

「よし、106回も医務室送りされた甲斐があつたな」

「このお！張り倒すわよ！」

アルミンとジャンは負傷兵に駆け寄って膝づくくと、寝ぼけた顔をしたフローラを確認できた。

周りは凄惨な状況なのに今まで呑気に寝ていたのかとツツコミたくなつたほどの顔

だった。

「さつきまで何をしていた？」

「夢の中で誰かに殺害を予告されていたわ」

「寝ぼけてないで行くぞ！」

ジャンは、フローラの軽口から全然問題ないと分かったので気にせずに行先した。アルミンも、リヴァイ兵長に次ぐ兵士を合流できて安心した。

「第四分隊が女型の巨人を捕らえたけど、これで終わるわけない！早く来てくれ！」
「あなたたち！負傷した乙女を少しは心配しなさいよ！ああもう!!」

生きていて五体満足を確認した彼らは、フローラをこれ以上心配しなかった。

大嵐の中で立体機動をして翌日、池で丸太を抱いて浮かんでいた癖にその翌日に復帰する生命力。

夜間特訓と称して、ガスボンベを付け忘れて崖から飛び降りたのに、手首を挫くだけで済んだ運。

2人とも彼女の凄まじさを知っているから、手を差し伸べたりしなかった。

トロスト区での戦いで覚醒するまでこんな扱いだったので、フローラも抗議するのを諦めていた。

「待ちなさいよ！」

さきほどまで気を失っていたのに立体機動をできる時点で化け物である。

その上を行くとしたらリヴァイ兵士長くらいしかないだろう。

「クソ！のんびりしやがって！」

「俺だって本当はあっち側に居られたのにそれがどうしてこうなっちゃったのかな……」

ジャンは、棒立ちで待機している憲兵たちを見て愚痴を吐いた。

成績上位6位である彼は、憲兵になる事もできたが「骨の燃えカス」の影響で調査兵団に入った。

ただ、羨ましいと同時に何も知らずに振り回されなくてよかったという思いもある。

少なくとも本日、ストヘス区で巨人が2体出現する事でシヨック死する事は避けられ

る。

「やっぱり拘束できなかつたか！」

悲鳴や建物が崩壊する音と共に再び女型の巨人が立ち上がり、逃走しているのが見えた。

調査兵が応戦しているが動きを止める事はできていなかった。

「どうするんだアルミン！」

「もう交戦して足止めするしかないよ！」

第57回壁外調査の平原の時のように女型の巨人を足止めする。

ライナー・ブラウンがこの場に居ないのを除けば足止めメンバーが揃っている。

前回と同じように足止めをする事を決意したジャン！

「よしフローラ！足止めをするぞ!!…ってあいつ、どこ行きやがった!!！」

ジャンはフローラに囲になってもらおうと思つて話しかけようとする。彼女の姿は見えなかった。

「ええっ!?!さつきまで居たはずだよ!?!」

「おいフローラ!出て来い!!」

「鎧の巨人!鎧の巨人!!」

ジャンとアルミンは必死にフローラに呼び掛けていた。

それと同時に近くで雷が落ちる様な閃光と爆発音がした!

エレン・イエーガーが巨人化して女型の巨人と交戦する為に駆け出した!

「おい死に急ぎ野郎!民間施設をぶっ壊す気か!?!」

「エレン!いくらなんでもやりすぎだよ!」

エレンの巨人は、女型の巨人に追いついて殴り倒した!

…が、巨体が施設を破壊してしまいジャンは頭を抱えた。

エレンのやり方は、民間人を巻き添えにして女型の巨人と交戦していたからだ!

フローラを探すのも忘れて必死に彼らは遠くから叫んでいた。だが、外野からの声など怒りに燃えるエレンに届くわけなかった。

「グオオオオオオ!!」

必死にエレンは女型の巨人を殺そうとした!

リヴァイ班のグンタの仇!

巨大樹の森で女型の巨人を足止めしようとして戦死した兵士たちの仇!

そしてなにより、同期や自分に偽って人類を滅ぼそうとした女への怒りだった!

しかし、エレンは負けてしまった。

「グオオオオ…」

戦闘や巨人化の経験不足、油断、驕り、いくらでも敗因があるが、致命的だったのが…。

リヴァイ班に護身を想定して特訓させられていたせいで、専守防衛ドクトリンだった。

あくまで巨人での戦闘は、得意である対人格闘術であるがそれはアニの影響が大きかった。

そのせいで、大半の攻撃を見切られてしまい、カウンター攻撃で倒されてしまった。それでもエレンのおかげで女型の巨人の足止めに成功した！

それが次に繋がる一手となった！

「前より強くなっているのね」

フローラは女型の巨人が爪を伸ばしてエレンの巨人を両断したのを目撃した。

『爪ブレード』と名付けたそれは、巨体すら両断する刃物だと経験上分かっていた彼女。だからこそ、エレンのおかげで初見殺しを回避できたのを感謝した。

右アンカーを遠くにある地面に撃ち込んで精神を落ち着かせた。

「ふう……これでいいわ」

一呼吸した後、信煙弾を撃ち上げて女型の巨人に自分の存在を気付かせた。

奇しくも、ミーナの親友同士が殺し合う地獄に彼女は笑うしかなかった。

「お久しぶりね、女型の巨人!!…いえ、アニ・レオンハートって言えば良いのかしら?」

女型の巨人は一瞬だけ頭を垂れたのを見て、アニも躊躇っていると分かった。

フローラも刀身が揺れており、手が痙攣しているように振動が止まらなかった。

双方とも思い浮かべたのは、ミーナ・カロライナの笑顔だった。

彼女がこの場に居たらどんな顔をするのだろうか。

「調査兵団の第四分隊、遊撃戦闘員、フローラ・エリクシアがお相手しますわ!」

それでも成さねばならない時がある!

今がその時だからだ!!

フローラもアニもこれで終わらせるつもりだった!

『死ね!』

女型の巨人は硬質化した爪を伸ばしてフローラの居た場所を薙ぎ払った!

フローラは予め撃ち込んだワイヤーを高速で巻き取って斬撃を回避した！
石畳の地面が粘土細工のように瓦礫が飛散して辺りに激突していく！

「やっぱり厄介ね！」

真つ先の両断するべきなのは両手である。

硬質化している以上、うなじががら空きであるがとてもじやないが攻撃できる手段がなかった。

ここは広場であり、立体機動をするには女型の巨人にアンカーを撃ち込まないといけない。

だが、調査兵団の兵士を殺害し続けた“彼女”も想定していないわけがない。

『さすがにこれじゃ死なないか！でも…えっ?!』

女型の巨人は、フローラとの白兵戦に懲りたので、もう一度薙ぎ払うつもりだった。しかし、フローラは姿を消していた。

砂埃や瓦礫があるが人が隠れる場所などなかった。

人間の足では逃げるのは限界があるし、なにより見下ろせるから見つからないわけがなかった。

『あれ?』

仕方なく適当に薙ぎ払おうとしたら、何故か右手の親指から伸ばしたはずの爪が無かった。

視線を辿っていくと、右手の指が全て切断されていた。

『えっ!?!』

フローラは、一か八かアンカーを硬質化した爪に撃ち込んだ。

そしたら何故かアンカーが刺さってしまい、困惑したが…。

できちゃったので、そのままワイヤーを巻き取って地面から離脱していた。

『アンカーって謎よね…あとでグリズリー班長に訊いてみようかしら』

巨人の皮膚や樹木はおろか、民家の壁や50mの壁までアンカーは突き刺さる。

それは分かっていたが、まさか硬質化した物体まで刺さるとは、フローラも予想できなかった。

フローラは、アンカーが壊れた経験もあつて信用してなかったが刺さった以上、好都合だった。

右手の指を全て切断した彼女は、右肘にアンカーを突き刺してぶら下がっていた。

「さすがに気付かれたわね」

右手を切られたのに気付いた女型の巨人は前転してうなじを斬られるのを防いだ。さきほどまで硬質化していたせいで、うなじの守りが無防備だったからだ。

もちろん、一緒に前転するつもりはないフローラは地面に着地していた。

『だから戦いたくなかったのにいいいい！』

女型の巨人はすぐに立ち上がって左手の爪を伸ばして付近を薙ぎ払った！

右手でうなじを抑えながら目に入る場所を攻撃していた。

やけくそではあるが、フローラも身動きがとれなかったので悪くない判断である。当の本人は、女型の巨人の右足の甲におり、一切効果が無いのを除けば…。

「おい、何が起こっている!？」

「分かん!？」

「どつかの誰かが信煙弾を撃つてから動きがおかしい!？」

「エレンを連れて逃げないのか!？」

あまりの破壊行動に調査兵団も憲兵団も呆然として待機しているしかできなかつた。しかし徐々に行動が可笑しい事に気付いた。

てつきり、巨人の亡骸からエレンを奪取して逃亡すると予想されていた女型の巨人。何故か、逃亡するどころか広場に展開するのを防ぐ為に牽制しているようであった。

「ニアア! 一体何が起こったんだい!？」

「…女型の巨人の足元にフローラが居ます! おそらく彼女を攻撃したいのでしょう!」

ハンジ・ゾエは、単眼鏡を覗いていた寵臣に尋ねると、納得ができる返答が来た。

何故、フローラはそのまま奇襲に移らないのか疑問だったが時間稼ぎなら納得できる。

「第4班、第5班は、50mの壁に展開して捕獲の準備を！」

「了解しました！」

情報を得たハンジは、迅速に部下に指示をして有利な状況を構築し始めた。

この期を逃せば、調査兵団と、人類の未来が終焉に向けて崖から転がり落ちるからだ。限られた資材と人員で、崖に落ちない様に橋を作って「希望」という対岸を繋ごうとしている。

【希望】が目のあるのなら、何としてもそこに辿り着かなければならない。

しかし、女型の巨人が伸ばした爪がもたらす【副産物】に関して、誰も気付くことは無かった。

爪を構築している副産物の危険性に関して、全員が身をもって実感する事となる！

「全てお前の仕業か!？」

「そうだ、全て私の独断専行だ」

憲兵団の師団長であるナイル・ドークは同期の調査兵団団長のエルヴィンを問い詰めていた！

2体の巨人が暴れ回って数多くの死傷者が出たと部下から報告を聴いて彼は怒りに燃えた！

「街中でそんな作戦を執行すれば、どんな事態になるか想像できたはずだ!」

「…人類の勝利の為だ」

民間人の死傷者が出るのは、賢い彼なら分かったはずである。

知ってて作戦を執行し、罪のない人々や生活を破壊した悪魔！

ウォール・ローゼ出身である彼は、内地についてそこまで愛着は無かった。

それでも駐屯兵出身の彼は、民間人を護る事に全力を注いでいた！

だからこそ、わざと民間人を巻き込むように作戦を立案してエルヴィンを許せなかった！

「ふざけるな！貴様は反逆者だ！ここで処刑してやる！」

「構わない、だが後の指揮を頼むぞ。絶対に女型を逃すな！」

「はあ？」

「まずは部隊の指揮をしているハンジ・ゾエと接触し、指示を請え！その後は第1班の残存兵力と共に憲兵団を壁の頂上に展開してくれ。そして補給部隊は第7班だ！その部隊は正門付近に展開しているので…」

「待て待て！何を言っている!？」

ドーク師団長は、独断でエルヴィンを撃ち殺すつもりだった。

それを聞いたエルヴィンは、指揮と責任を彼に渡す為に全て説明するつもりである。

当然、いきなりそんな事を聞かされても、困るのがドークである。

憲兵団の指揮と調査兵団の指揮を同時にできるわけもなく困惑するしかなかった。

それがエルヴィンの狙いと知らずに、思わず銃口を逸らして射殺するのを一時中断した。

「くっ！エルヴィン団長に手錠を！全兵士を派遣し住民の避難及び救助活動を最優先で

行なええ！」

「ハッ！ハッ！」

やむを得ず、巨人に関しては調査兵団に一任して憲兵団は住民の避難と救助をさせることにした。

腐敗した憲兵団が戦力にならないのは、トップであるドークが一番知っていたからだ。

悔しそうにエルヴィンを睨めつけているしか彼にはできなかつた。

「全員伏せろ!!」

エルヴィンの一言で、調査兵団の兵士とリヴァイと発言した本人が伏せた！
突然の奇行に戸惑うしかない憲兵たち。

「えっ？」

「うっ!?ドーク師団長!危ない……ぶほっ!」

副官の一人であるロンメルがドーク師団長を勢いよく突き飛ばした！

飛ばされた彼は地面に激突して転がり回った。

何事かと思う暇もなく火薬庫が爆発した様な音で鼓膜が破れそうになった！

衝撃で脳が揺れて声すら出せず、ただ収まるのを待つしかできなかった！

「ゴホゴホ!!」

「なんだあ!?!」

「にやあにがああ……おこおったあ!?!」

今まで住宅街に居たはずなのに瓦礫の山になってしまい戸惑う憲兵たち。

ドークは、状況を把握する前に突き飛ばしたロンメルを探した！

「おいロンメル……う!?!」

惨状を目撃したドークは、全身の力が抜けて両手と両膝を地面に付き絶望した。

さきほどまで自分が居た場所に人体ほどの結晶の欠片があり、肉片が辺りに散らばっていた。

「なんで…」

女型の巨人も含めて全員が知る由もなかったが、明確な弱点があった。

女型の巨人が左手の親指の爪を伸ばして作った「爪ソード」は時間制限がある。

硬化化で生成される結晶体が自重に耐え切れず崩壊してしまうほど脆かった。

フローラがアンカーを撃ち込む事もできたのも、それが原因だった。

問題なのは、爪を勢いよく薙ぎ払っているせいで結晶同士の間が外れた瞬間！

無数の結晶が、音速を越える速度で住宅街に降り注いだ！

音速の2倍以上の質量がストヘス区のあらゆる物を破壊する殺戮兵器となつてしまった。

当然、近くにいた調査兵団の部隊にも結晶の欠片が降り注いでいた。

「ぶ、分隊長!?!ご無事ですか!?!」

「あ、ああなんとか…」

第四分隊の副長であるモブリットは、上官の安否確認をした。

ハンジ・ゾエは屋根から飛び降りて結晶の直撃を免れたが、手首が捻挫した。ニアア、アーベル、ケイジといった直属の部下が五体満足でひとまず安心した。ジャンとアルミンとミカサも物陰に隠れていたおかげで無事だった。しかし、屋根に待機していた他の班員は、さきほどの散弾で全滅した。

「くそ、あの伸びる爪が……こんな攻撃に転用できるとは……」

ハンジは悔やんだ！

すぐにもフローラに加勢するべきだった。

ちんたらしたせいで、この街の犠牲者は、少なくとも400人は居ると分かるほどの惨状だった。

フローラも女型の巨人も結晶が散弾になる事を想定していなかった。そのせいで双方とも惨状を見て動けなかった。

「ハ」の……」

先に動いたのはフローラだった。

脛に撃ち込んだアンカーを外して地面に着地してアニが見下ろせる場所に待機した。技術4班が作った手投げ式の閃光弾を取り出して女型の巨人を見上げた！

「女型の巨人！それが貴女のしたい事だったの!？」

「結晶体を街に撃ち込んで街を滅ぼすつもりだったの!？」

フローラは叫んだ！

ストヘス区の街を結晶体をばら撒いて滅ぼすつもりだったのかと！

負の感情を“声”として聴ける能力がある彼女は、アニがそんな事思っていないと分かっている。

それでも、内心を揺さぶるように叫んだ！

『違う！私はこんなつもりじゃ…!』

アニ・レオンハートは、人殺しをしたくなかった。

自分を殺そうとする兵士はともかく、民間人を殺すつもりはなかった。

ドーナツ店やトレーニング店、お世話になった人々、ストヘス区を破壊するつもりは

なかった。

だが、眼前に広がるのは無残な瓦礫と化した街並み。

悲鳴など遠くて聞こえないはずなのに彼女の心に直接届くようであった。

「虐殺者アニ・レオンハート！貴女の名前は一生残るわよ!!」

フローラは、手投げ式の閃光弾の安全ピンを抜いて外套のフードを深く被った。

そして女型の巨人に向かって駆け出した！

『うるさいーさっさと死ねー!』

女型の巨人は2つ誤算があった。

まず、閃光弾は銃身にセットする必要があると常識に縛られていた事。

もう1つは、自暴自棄になって伸ばした親指の爪は、使うほど崩壊する時間が短くなる事だった。

“彼女”は、右肩の上に20m以上の爪を掲げて振り下ろそうとしていた。

『ああああ?!』

閃光弾が炸裂して光を見てしまったと同時に爪を振り下ろした!

しかし、その爪は既に崩壊しており、フローラの頭上の遥か上を高速で飛んでいく! さきほどより速度が出た1000個以上の結晶の欠片が街へと降り注いだ!

それは、アニの同僚である104期憲兵で構成された護衛班が居た場所にも降り注いだ!

「クソがああああああ!」

「もう嫌あああああ!」

「ぎゃあつ!」

マルロは、ヒツチを護るように覆い被さって伏せていた。

ヒツチは瓦礫に押し掛かれていますと思えばパニックになっています。

ボリスは結晶が激突して崩壊した建物の瓦礫に埋もれて即死した。

護衛班は、誰一人守れずただ伏せているしかできない。

「おいエルヴィン！」

「なんだリヴァイ？」

「これじゃあ、女型の巨人を捕獲しても調査兵団は解体されるぞ！」

「そうだな」

奇跡的にも2回目の結晶が飛んでこなかった場所に居た2人。

無駄死にさせるのが大っ嫌いであるリヴァイ兵士長。

多少の犠牲者は折り込み済みであったが、いくら何でも犠牲者が多すぎた！

住民の3割が死んだトロスト区ですら、ここまで街並みは破壊されなかった！

「お前の装備を貸せ！俺が奴を仕留める！」

「いや、お前の専用装備はそこだ」

エルヴィンの指示を受けて副官が装備が入ったケースを運んできた。

それを受け取ったリヴァイは装備を着用して、馬車に繋がれた馬を駆りて飛び出していた。

「エルヴィン……これがお前の描いた作戦なのか」

「ドーク、さすがにこんな惨状を引き起こすのは予想できなかったよ」

2回目も結晶が飛んできると思い、伏せたドーク師団長の顔は血だらけであった。もはや、元凶であるエルヴィンを射殺する気力すらなかった。

「すまない……」

エルヴィンはそれを見て瞼を閉じて犠牲者に謝った。

それでも、女型の巨人を取り逃がせば更なる犠牲者が出る。

せめて作戦だけでも成功するのを祈った。

「これで【爪】は潰したわ！」

フローラは、女型の巨人が閃光弾で怯んだ隙に左手の指を切断した。

結晶を生成する過程で必要な硬質化と肉体再生は両立できない。よって、女型の巨人は両手の指を全て切断されている状態である。

「次！」

フローラは更なる攻撃を加えようとした！

しかし、女型の巨人は視界を回復できたのでフローラを蹴り殺そうとした！

『もう死ねええええ!!?』

突然、両目の視力が喪失して恐慌した“彼女”は再び前転した！

「おいこのアマ！よくも街を破壊してくれたな！」

「オルオ！あまり喋ると舌を噛むわよ！」

「ペトラさん!?!オルオさん!?!」

両目を潰したのは、オルオ・ボザドとペトラ・ラルであった。

50mの壁の外で展開していたが騒音と衝撃を受けて独断で参戦した！

女型の巨人はフローラしか注目していなかったせいで後方確認を忘れていた。

それが奇襲に成功した要因であり、彼らがりベンジ戦に参戦できた理由でもある。

広がる惨状にも臆さずに、彼らはスナツブレードを女型の巨人の目に刺して離脱した！

「よおフローラ！俺達も参戦するぜ！」

「まずは両脚を削いで立たせない様にするわよ！」

「分かりました！」

女型の巨人に辛酸を舐められた彼らは、二度と犠牲者を出させないつもりである。

復讐でも怒りでもなく、ただひたすらに女型の巨人をバラバラにする気だった。

「兵士だけじゃなくて民間人の死体も欲しいってか!? あああん!」

「二度と立たせはしない！」

女型の巨人はその声を聴いて座り込んで両手をうなじに当てた！

だが、それはオルオとペトラにとって好都合だった！

両肩と脇の肉をコンビネーションで削いでいく2人。

あまりの隙の無さにフローラは参戦できずに傍観するしかできなかった。

「フローラ！私も協力する！」

「ミカサ!？」

ミカサ・アツカーマンも女型の巨人に恨みがあった。

動きが止まった瞬間、相棒の元に駆け付けて肉を削ぐ気満々だった！

「分かったわ！わたくしは右腕を切断するわ！ミカサは左をお願い！」

「削いでやる！」

最初に右手が力なく地面へと垂れた。

そしてすぐに左手も使い物にならなくなった。

『嫌だ！嫌だあああ！』

女型の巨人の潰された眼球にスナップブレードが突き刺さっているせいで再生が無意味だ。

故にブレードを抜かないと視力は二度と回復しないがその隙すらなかった。

「彼女」は、地面に仰向けに倒れるのを忘れて、うなじを硬質化させるのに精一杯だった。

「ミカサ！」

「潰す！」

「よし行くぞ！お前ら！」

「みんなの怒りを喰らえ！」

ガスを全力で噴出してオルオとフローラは、右肩を！

怒りに燃えているペトラとミカサは左肩を両断した！

これで女型の巨人は壁を登る事はできなくなった。

それどころか巨人の眼球が使い物にならないので、そのままでは逃げられない。

うなじから本体が出て、直接辺りを確認しなければ逃げる場所が分からない。

そして、それは能力者本体に直接攻撃される危険しかない最終手段でもある。

『もうヤダ!!私は故郷に帰るう!』

16歳の少女には、この現状は荷が重かった!

同期を騙し、兵士を殺害し、民間人を虐殺し、その代償を支払わなければならない。視力が戻らず真つ暗なのに立ち上がり走り出した!

例え奇跡的に祖国に帰還できても処刑される道しかないが、それでも逃げたかった。どう足掻いてもお先真つ暗である残酷な世界から、とにかく逃げ出したかった!

「逃がすか!」

「責任を取れ!」

オルオとペトラは、女型の巨人のアキレス腱を削いで離脱した!

走れなくなって倒れそうになるのを必死に耐える女型の巨人!

「アニ…倒れて」

更にフローラとミカサが膝裏を削いで離脱した！

2人には怒りなどなかった。

ただ、同期だったアニが倒れて欲しかっただけである。

立てなくなった女型の巨人は、うつ伏せに倒れるしかなかった。

「今だ！身柄を拘束しろ！」

ハンジ・ゾエは生き残った部下達を率いて捕縛作戦を開始した！

地面に激突した衝撃でアニは意識が朦朧としていた。

もはや、抵抗する気力すらなかった。

ただ、自分は拘束されて拷問され全てを吐かされた挙句、処刑されるのは分かった。彼女が思い浮かべたのは、父と別れる時の事であった。

『アニ…俺が間違っていた』

厳しい格闘訓練をさせてきた父。

うんざりした彼女は、一度だけ彼に逆らつて足を蹴り続けていた。

それ以来、脚を引き摺つて歩く事しかできなくなった。

それでも彼はアニの成長を喜んで、更なる厳しい訓練を課した鬼であつた。

『今更俺を許してくれとは言わない』

そんな彼が泣きながら自分に謝つた。

鬼の様であつた彼が、父親として泣いていた。

『この世の全てを敵に回しても良い…約束してくれ』

3年間も生活してきた同期を裏切つて！

一緒に任務をこなしていた同僚を裏切つて！

愉しく雑談していた友人たちを裏切つて！

自分を期待してくれた訓練兵団の教官を裏切つて！

【座標】を奪還するのを期待している祖国さえも裏切った。

彼女に残された味方は、ただ一人である。

『この世の全てからお前が恨まれても…父さんだけはお前の味方だ』

血の繋がっていない父だけがアニ・レオンハートの味方である。

心を鬼にして娘を育ててきたが、悪魔の住む地に送り出す事になった時、彼は後悔した！

育ててきた一人娘を失いたくない一心で彼女に泣きついた。

ようやく父の気持ちを理解した彼女は、家族となれたのを実感した。

『だから約束してくれ…必ず帰って来るって…！』

アニ・レオンハートは泣いた。

16歳の少女は、父との約束を思い出して絶対に逢うつもりだった。

ここで拷問されて苦痛を味わったまま生涯を終える気は無かった。

いつも精神的な支えになってくれたフローラの言葉を思い出す。

『大丈夫、諦めない限りウォール・ローゼには絶対に帰れます！』

巨大樹の森で巨人に喰われそうになった時に自棄で諦めていた彼女。

そんな自分を気遣ってフローラが発言してくれたのが、その言葉だった。

絶望的だった状況だったが、無事にカラネス区に帰還できた。

諦めない限り、必ず希望があると身をもって実感していた。

「私は諦めない……」

この時、調査兵がうなじの肉を削いで、アニの顔を発見した。

彼女の目尻には巨人の肉が繋がっており、そこからは涙が滴り落ちていた。

「居たぞ！ 巨人化能力者だ！」

「よくやった！ 引き摺り出せ！ できるだけ本体を傷付けるなよ！」

「……了解しました！」

直属の上官であるハンジ・ゾエの命令に従って、第四分隊の面々は肉を更に斬り始めた。

その声を聴いて、アニは最後の力を振り絞って硬質化した！

硬質化のせいで二度と動けなくなると分かっているにもかかわらず、やるしかなかった。

彼女が最後に思い浮かべたのは父ではなく「ごめんなさい」の一言だった。

「この！硬質化しやがった!!」

「てめえ！ふざけんな！出て来い!!」

「大量殺人者があああああ！」

「死んで詫びろ！」

激怒した調査兵団の兵士たちは武器を叩きつけたが、決して結晶が破壊されることは無かった！

父との再会を願って全てを捨てた彼女の覚悟は、鋼鉄よりも硬かった。

それは彼女の全身を包む結晶の硬さに影響しているかのように誰にも破壊できなかった。

『父さん、私、頑張ったよ、褒めてよ』

ア二は現実逃避した。

硬質化による結晶は、彼女を外界から隔離して真つ暗な世界へと意識を誘った。

そして彼女の意識は薄れた。

いつか、きっと結晶から出れて父との再会を願いながら…。

彼女は最終的に硬質化が解かれて脱出する事となる。

『ただいま…』

まさか、その時は現在より地獄の状況に置かれている事となるとは思う事すらできなかった。

61話 人類最悪の日は、いつも唐突に

「お母様……どい？」

真つ青な顔をした少女は、瓦礫の山を避ける様に歩いていた。

茶色のドレスと豪華な装飾が施された上着は返り血で汚していた。

スカートは瓦礫に引っ掛けたせいで破れており、魅力的な脚を露出している。

「わたくし、マリアンヌはここに……」

不自由なく両親から愛された子爵の令嬢である少女は、既に母親を失っていた。

それどころか子爵も姉妹も従者もみんな死んだ。

劇場で演劇を見た後、自宅に帰る途中で馬車に結晶の欠片が直撃して少女以外全滅してしまつた。

「ああ……」

白魚の様な肌の手は傷まみれで、脚を優しく引き締める白色のストッキングは少し破れていた。

少女は穴という穴から液体を溢していたが、彼女自身はそれどころではなかった。

ただ、安全な場所に母親が避難していると思ひ、痛みを我慢して脚を引き摺りながら歩いていった。

「お母様……ああっ！」

少女は石床にあつた血溜まりで足を滑らせて尻もちをついた。

そこには、さきほどまで人間だった者が至る所に転がっていた。

腹部を瓦礫に圧迫されて尻から排泄物と大腸を飛び出している死体。

子供を護ろうと庇つた母親に瓦礫が直撃し、子供と一体化してしまつて絶望な表情で死んでいた。

まだ原型を留めているのがマシの有様で、血と肉と排泄物しかない物体が大半である。

「お母様ああああああ!!」

フローラみたいな、なんちやっってお嬢様ではなく、本物の令嬢には、この惨状はきつかった。

巨人に喰われれば最低でも肉塊は残るが、ここは肉の塊すら残っているのが珍しいくらいである。

この惨状でも平気ているのは、狂人だけで経験豊富なりヴアイですら顔をしかめる惨状だった。

「生存者が居たぞー!」

「大丈夫!?!」

マルロ・フロイデンベルクと、ヒッチ・ドリスは少女の泣き声でようやく生存者を見できた。

彼らは40人以上逢ったが、ようやく生存者を見つけられた有様だった。

「これを嗅いで!」

ヒツチは、フローラからもらった香水が入った筒の蓋を開いて少女に嗅がせた。リラックス・ハーブの成分で落ち着かせるのもあったが、何より安心できる匂いだっただけだ。

嗚咽していた少女であったが、少しづつ落ち着いていったのを見てヒツチは一息ついた。

「よし、この子を連れて行くよ！」

「お前、意外と優しいだな……」

「はあ!? 冗談言ってる場合じゃないでしょ! 早く医者に診せないと!」
「そうだったな……」

マルロは、ヒツチという女を再評価した。

享樂的で不真面目で何事も茶化して行動する女だと思っていたがいざとなると頼りになった。

彼は、少女が泣いているのを見て何もできなかつたのと対照的であった。

ヒツチに優しく手を掴まれて一緒に歩く少女を見ながらマルロは護衛するように歩

いて行つた。

「ここは…?」

「エレン！目覚めたんだね！」

「アルミン…?」

エレン・イエーガーは目覚めた。

アルミンに抱き寄せられており、寝ぼけながらも、また負けたのを実感した。

「女型の巨人は…?」

「調査兵団に倒されたよ…でも…」

「でも?」

ストヘス区を半壊させた女型の巨人は討伐された。

だが目的だったアニの捕縛は、硬質化した結晶のせいで阻まれた。

最低でも民間人が二千人以上死んだのに得られたのは結晶になったアニだけ…。結局、事実は彼女の口から話される事は無く、振り出しに戻ってしまった。

「この卑怯者があ!!出て来い!!この落とし前をつける!!」

「おいケイジ!」

「止めるな!こいつのせいで同僚が!住民が死んだんだぞ!!」

第四分隊所属のケイジ・ランドルフは必死に結晶を割ろうとブレード突き立てていた!

同僚がこいつのせいで戦死した怒りもあつたが街の惨状を見てすぐさま叩き起こしたかった。

「やめなさいケイジ!いつ目を覚ますか分からないこの子を地下に運ぶ事だけを考えなさい!」

「了解…」

ケイジはハンジの説得で折れたブレードを操作装置から外してワイヤーで結晶体を

縛り始めた。

ハンジもまた、アニに対する怒りがあつたがケイジが全てやってくれたおかげで冷静になれた。

誰もが分かっていた。

このままアニから情報を訊き出さなければ何も残らない。

民間人や兵士の人生を闇雲に地獄へ投げ捨てただけで終わってしまう。

「急いで天幕を張れ！民間人に現場を見せるな！！」

「手の開いている者は、負傷者の手当てを急げ！！」

「中央通りで負傷者多数！衛生兵を向かわせろ！！」

「馬を連れて来い！こいつを運ぶぞ！！」

優秀な調査兵団の兵士たちは自分の役割を理解しており、迅速に行動していた。

ジャンとミカサは瓦礫に埋もれた民間人の救助を行なっている。

アルミンは、気絶したエレンを介護しており、今先ほど彼が目覚めて安心している。

フローラは、その様子を見ながら水筒で水分補給をしていた。

「答えてください！あの2体の巨人は何だったんですか!？」

「今は説明している時間が無い！一旦、救助活動に戻ってくれ」

「ゴーグルが似合うアーベル・オツペンハイマーは、新兵である憲兵の質問に答える気は無かった。

一方、救助活動を一度終えて、休憩しているマルロとヒッチは納得できなかつた！

「住民に甚大な被害が出た！何故巨人は居て戦闘が行われたのか！責任は誰が負うんです!？」

「お前ら新兵じゃ話にならん！上官を呼んで来い！酔っ払って寝ていて潰れていなくならん！」

「調査兵団は説明する義務があるわよ！このストヘス区を半壊させてまで何をしたかったの!？」

「我々は極秘で任務を遂行している！まずは我々に任せて救助活動に当たってくれ!」

ただ話は平行線で終わった。

真相を知りたい憲兵や住民に対して調査兵団は口を噤んで事情を説明してくれな

かった。

本来なら引き下がる所だが、マルロたちは調査兵の後ろで佇んでいる顔見知りの女を見つけた。

「あつ！フローラ!!」

「フローラ！そこで何やってんの!？」

まさかの呼び出しに口から水を溢したフローラ。

袖で唇を拭いて知り合いに向けて歩き出した。

「フローラ！教えてくれ！一体何が起こったんだ!？」

「詳しくは言えないけど、この街に巨人のスパイが居てさつきまで交戦していたの」

「はあ!?! 巨人のスパイ!?!」

「調査兵団は極秘に巨人化できるスパイを捕らえようとしたけど…この結果になってしまったわ」

フローラは肩を竦めて刃が欠けたブレードをマルロたちに見せつけた。

巨人の血は消滅していたが、肉を削ぐ時に割れた刃を見せて巨人と交戦していた証拠を提示した。

マルロたちは戸惑ってしまったが、これ以上の情報が得られないと思い踵を返した。

「クソ！調査兵団め！巨人に関する情報を秘匿し過ぎだ！」

「後日、こつそりフローラに尋ねないと分からないね」

「そういえばアニ、どこに行きやがった!？」

「ホント、肝心な時に居ないんだから！どっかで救助活動してるといいけど…」

マルロとヒッチは知らない。

一匹狼のアニ・レオンハートがこのストヘス区を半壊させた元凶だと！

それは彼女の本心では無いが、調査兵団の兵士を殺害し続けた悪魔だと分かるはずもなかった。

今はただ、ストヘス区で救助活動を頑張るしかなかった。

「おいフローラ、情報を漏らし過ぎじゃないのか？」

「彼らは知り合いですので、公式発表まで情報を漏らさないと踏んで発言しましたわ」

「お前、ホント知り合いが多いな……」

アーベルは部下のフローラに呆れていた。

腕つ節と資金力と友人の数は、調査兵団の第四分隊で一番と揶揄される彼女。

新兵である以上、情報を漏らした事に叱責するべきではあるがフローラだからと半ば諦めていた。

彼は巨人に捕食されそうになった時、彼女に救われており、命の恩人を叱れなかったのもあった。

「お願いだから奥で待機しててくれ」

「救助を手伝わなくていいんですか？」

「お前がやると……街が全壊するからやめてくれ」

巨人の戦闘と資金力とコネを頼りにされているフローラは不満に思ったが口に出さなかつた。

彼女は兵団一の問題児であり、いつも騒動の渦中に居るせいで、何かやらかすと思われていた。

アーベルが思い浮かんだのは、フローラがエレンを巨人化させて瓦礫を取り除こうとする光景だ。

「せっかく巨人化したエレンが人類の役に立つ絶好な機会だったのに……」

「はあ……やっぱり本気でやる気だったか」

「ダメですか？」

「ダメだ！エルヴィン団長と会話して巨人化能力者を監視する案でも訊いて来てくれ」

巨人のせいで街が半壊したのに、瓦礫を退かすのに巨人を利用するなど狂気の沙汰だ。

巨人になったエレンが瓦礫を退かして「ストヘス区の英雄」にする案は即座に却下されてしまった。

そのせいで不機嫌なフローラは、しゅしゅエルヴィン団長の居る場所へ向かっていった。

「ああ来たか。実は、君に頼みたいことがある」

エルヴェインの一言で嫌な予感がした。

何故なら新兵の自分に直接指示を下すという事は、自分にしかできない事であるからだ。

「ストヘス区が受けた損害は大きく、我々はもう少しだけ、ここに留まらばなければならぬ」

「そこで君には、ウォール・ローゼ南区の隔離施設に居るミケ達に、今回の事を伝達して欲しい」

同期である104期調査兵の大半は、ミケ分隊長の率いる第一分隊に監視されている。

アニ・レオンハートが巨人化能力者だった為、仲間も104期に居る可能性がある。

ジャンやミカサ、フローラがここに居るのは、作戦を立案したアルミンが除外してくれたからだ。

「早馬を飛ばして104期を監視している連中に事の顛末を伝えろって事だ…異論はねえよな？」

「リヴァイ兵士長、確か旧調査兵団本部の掃除の予定がありますけど……」

「チツ……今回ばかりは特別に掃除を免除してやる」

「ありがとうございます」

ストヘス区の女型の巨人捕獲作戦を終了した後に、旧調査兵団本部の掃除の約束をしていた。

リヴァイは王政から招集を受けたせいで、古城がもぬけの殻になる。

エレンを護衛する為にリヴァイ班も同行するので誰も居なくなってしまうからだ。

つまり、リヴァイ兵士長が帰ってくるまで、フローラは古城で留守番をする予定だった。

しかし、急用なのでやむを得ず彼に頭を下げて断りを入れた。

「この任務を終えたらそのまま104期の兵士たちと合流してもらおう」

「念の為、装備を整えて準備が整い次第、出発してくれ……以上だ」

「ハッ！」

フローラは承諾したものの内心では馬鹿らしく思った。

何故ならストヘス区から隔離施設まで早馬を飛ばしても半日以上掛かるほど遠い。

最短ルートは、内地の王都ミットラスを経由して南のエルミハ区に出て北西に向かう必要がある。

ウォール・シーナの外円部に沿って移動してもいいが悪路なので利用しなくなかった。

「おっ？ 出かけるのか？」

「はい、ミケ分隊長に伝達事項があるので伝令に行ってきます」

「気を付けて行けよ！」

「ありがとうございます」

顔馴染みの調査兵に挨拶をして愛馬のライリーの場所に向かったフローラ。

そこで彼女が目撃したものは……！

「すごく怒ってる……」

両耳を伏せて睨めつけているライリー。

当初は、置いてきぼりにしたせいなのかと思つたが違うようである。

「おいフローラ！この馬、すごく機嫌が悪いぞ！」

「その子は、人見知りで…下手に近寄ろうとすると蹴られますわよ？」

「今さつき、本気で蹴り殺されそうになつたところだ」

「申し訳ございません…」

馬医者がライリーに診察しようと手を伸ばした瞬間、蹴りが目の前に飛んできた！

顔見知りの癖に寂しがり屋のせいで、やたらと他者に攻撃的である「彼女」。

クリスタとミーナは、ある程度認めているが、それ以外は敵意しかなかった。

相棒と認めたフローラに至つては、愛情表現で噛み付いたり蹴つ飛ばしたりするほどである。

敵には牽制をする為に蹴つ飛ばす癖に、相棒には本気で蹴つ飛ばすような馬だつた。

「ライリー！ライリー！痛い!!」

調査兵団の馬に向いていない汗血馬は、自称主人を待つていたように睨んでいた。

フローラは差し出した左手を甘噛みされてしまったが、それでも我慢して身体を撫で続けた。

彼女の覚悟を見たライリーは、彼女の手を口から放して早く乗れと急かしている。

「はあ…ライリーも結婚すれば少しは大人しく…なるわけないわね」

種馬なんて紹介したら、その馬で馬肉パーティーができるほどの肉塊にされるのは想像できた。

時折、巨人の足に全力で蹴りを入れるほど、ライリーは好戦的である。

フローラは鞍に跨って手綱を握って相棒に指示を出した。

「行くわよライリーー！」

涎塗れになった左手をどうするか悩みながらフローラは、ストヘス区から出る門に向かっていた。

道中ではストヘス区が無残な姿になっており、完全に復興するには20年は掛かりそうであった。

失った人員、崩壊した建物、日常生活、たった1時間もしない内に根こそぎ失われた。それでも、人間は前に進んでいける…前に進むしかない。

遠回りになるが、住宅が無事である壁に沿ってフローラはライリーを走らせた。どんな惨状になろうとも、変わらない太陽はまだ登りつつあった。

「暇だ…いっそ、故郷に帰りたいぜ…ここから近いんだぜ俺様の故郷は…」

104期の調査兵であるコニー・スプリンガーは愚痴った。

巨人戦闘の特訓と称して合宿のように隔離された建物に居た。

だが、何故か訓練も装備の着用も許されずここに軟禁させられた。

まるで監視されているが、忠誠心を見るテストなのかと馬鹿なりに考えていた。それでも暇なので、近くにあるラガコ村に帰ろうか見当していた。

「私の故郷も近いですねー」

サシャ・ブラウンも故郷のダウパー村に帰れたかった。

あそこならお肉が喰えるからだ。

くだらない理由になるが、肉が喰えない以上、帰れたかった。

誰もが軟禁状態にされていて苦痛を感じながら待機していた。

「なんでローゼの南区まで来たのに帰っちゃダメなんだよ…やる事もないし」

「そんなに帰りたいですか？ 私はまともになるまで帰ってくるなって言われたんですけど」

「安心しろ、親御さんはお前に期待していないと思うぞ」

「言ってくれますね！ コニーも座学の成績、散々だったじゃないですか！」

サシャは馬鹿にされてコニーの座学の点数を指摘した！

コニーは座学では追試を受けても赤点だったが、立体機動が旨かったおかげで成績上位になった。

座学ができなくても成績10位内に入れるという、明らかに歪な構造ではあるが…。

逆に言えば、忠誠心と立体機動の技能さえあれば兵士になれるって事だ。

さすがに憲兵になったら、座学の技能も必要なのでボロが出るとサシャは思ってい

る。

「しかし、俺様は天才だ！成績10位内になったんだ！故郷に凱旋して見返してやりたいな……」

「でも壁外調査の前に帰ったじゃないですか」

「ああ、でも生還したのは知らせてない」

「そういえば、ジャンの母親の手紙はどうなったんでしょうか！」

「気になるが……何故かあいつは、ここに居ないんだよな……」

馬面の本人が居れば「余計なお世話だ！」と反論すると思われるが、彼らはとにかく暇だった。

何の為にここに来たのかも忘れて、本を読んだりスクワットしたり雑談していた。

「いつそ、夜に抜け出してやろうかな」

「……コニー、お前が本気なら協力するぞ」

「えっ？」

コニーは、冗談で脱走を企てたら、本気で乗る気になったライナーに困惑した。もちろん、脱走は重罪であり、下手すれば牢屋に入れられる行為だと彼は自覚している。

なのに真面目なライナーが真剣な顔をして意見に賛同してしまい、驚いてしまった。

「何で？」

「おかしいと思わねえか？何で私服のまま待機で、訓練しちやいけないんだ？」

「そりゃあ、忠誠心を見る為だろう？ここで逃げ出せばクビだと思うぜ」

「そして上官たちは、完全に武装しているぞ！ここは壁の内側だぜ？」

「フローラだっていつも武装してるじゃん」

「確かに何か知らんが武装しているが……」

訓練兵を卒業してから正式に調査兵団に入団する前から調査兵の手伝いをしていたフローラ。

同期たちは、何をやってたのか疑問に思っていたが、特に口にすることは無かった。むしろ酔い潰れて食堂に帰還した時は、貞操を奪われたとパニックになったくらいだ。

その時まで、精神的に辛かったが、怒りに燃えて全員が精神的に復帰したのは良い思い出だ。

「この付近に熊が出るせいじゃないですか？」

「熊なら銃で充分だろう：とにかくみんな分からなくて困惑している！」

「いっそ、皆で抜け出せば何も怖くないってか？」

「むしろ、上官の反応を確かめてみたいくらいだ」

立派な兵士になろうとしているライナーの意見を聴いて悩む同期たち。

確かに要注意人物として監禁されているのは嫌であるが、抜け出す気は無かった。調査兵団に入団して、壁外調査から生還してもなお、留まっている彼ら。

誰もが兵士を辞めてまで、故郷に帰るつもりはなかった。

「ん？」

サシヤは異音に気付いた。

最初は気のせいだと思ったが、もう一度昼寝をしようとしていた。

だが、彼女は複数の異音が近づいていると感じた。

机に耳を当ててもう一度、しっかり聞き逃さないようにした。
リズムよく、定期的に地鳴りの音がしていた。

「ええっ!?!」

「どうした芋女? 兵舎に芋でも忘れたか?」

「足音みたいな地鳴りが聴こえます!!」

「はあっ!?!」

サシヤが放った一言は104期調査兵の全員を困惑させた。

足音のような地鳴りができる連中は限られる。

それどころか心当たりは1つしかない。

「何言ってるんだ? 巨人がここに居るって事は、壁を破られたか乗り越えて来たって事だぞ?!」

ライナー・ブラウンは、カラネス区の壁を乗り越えてきた変異種を思い出していた。

【顎の巨人】にそっくりな巨人たちは、壁を乗り越えて兵士を虐殺した。

もし再びそれが起こったとなれば、今度こそ人類は滅びるだろう。

しかもサシヤの反応からしてかなりの数の巨人が壁内に侵入してきたとも取れた。

調査兵団の第一分隊の分隊長、ミケ・ザカリアスは104期調査兵の監視をしていた。部下達も半信半疑ながらも女型の巨人の共謀者が居ると思われる新兵を監視している。

「あの子達の中に、アニ・レオンハートの共謀者が……？」

「分からない、だが無視できる確率じゃない」

ナナバの疑問に対して淡々と返答をした。

彼だって、本当は信じたくなかった。

巨人能力者の匂いやスパイの匂いは、さすがに分からなかった。

「少し鼻を休めるか」

「また香水を嗅ぐのですか？」

「鼻が敏感過ぎてな、定期的にリラックスさせないといけないんだ」

ミケはフローラからもらったリラックス・ハーブをカバンから取り出そうとした。ところが、彼の鼻はできれば嗅ぎたくない匂いを感じした！

「トーマ！」

「ハッ！どうなされたのですか？」

「早馬に乗って報告しろ！104期調査兵団に巨人は居なかった！南から巨人数数襲来！」

「了解しました！」

トーマ・カリウスはすぐさま早馬の準備をした！

50mの壁を登り壁内に巨人が侵入してくるのは過去に目撃していたからだ。

「ミケ！ウォール・ローゼが突破されたのか？」

「分からん！だが壁を破られないと、こんな数にはならんだろう！」
「…何体居るんだ？」

ヘニングの問いに対してミケは発言を躊躇った。

それを見たゲルガーは両手で数えられる規模ではないと悟った。

「…20体は居るな！」

「クソ！新兵たちの装備は、ここに無いぞ!？」

「やむを得ん！我々がなんとかするしかない！」

巨人との戦闘経験が豊富とはいえ、二桁の巨人など誰も相手にしたくない。

カラネス区壁外で二桁の巨人を単独で討伐した命知らずのアホ女ではないのだ。

「ナナバは、新兵に伝達！身支度を整えて広場に待機させろ！」

「分かった！」

「クソ！いつも人類最悪の日は唐突だな…！」

ナナバは上官の命令で新兵たちが待機している施設に向かって立体機動で飛んだ！
ゲルガーは、それを見て近くに落ちていたゴミを蹴った。

そんな事してもどうしようもないが、ストレスを貯めたまま巨人と交戦するよりマシだった。

「おっ？ヤケクソになって酒を飲まないのか…成長したな」

「リーネ、冗談を言っている場合か？」

「こんな時だからこそだ…死ぬんじゃないよ？」

「ふん、まだ死ぬ気はねえよ！馬小屋に行くぞ！」

リーネとの軽口でメンタルを回復させたゲルガーは、リーネと共に馬の準備に向かった。

決して樂觀視できる状況ではない。

それでも最後まで希望を捨てるつもりはない。

生きている限り、再起が図れるのだ！

例え、今日が人類最悪の日であっても、命がある限り最後まで使命を全うするつもりだった。

「ミケさん、トーマが出発しました」

「最速で着くとしても…当分時間が掛かるだろう」

「いかがなさいますか？」

「まずは近隣の村に危険を知らせて避難させるしかない」

ミケは必死に住民の避難を考えていた。

覚悟を決めた自分達は巨人に殺されても仕方が無いが、民間人を喰わせる気はなかった。

軍人である以上、民間人を護るのが最優先事項だった。

ハンジ・ゾエに次いで調査兵団の頭脳でもある彼は、必死に作戦を立案していた。

幸いにも、全員分の馬があるので、新兵でも近隣の住民に情報を知らせにいける。

「よし、作戦を立案し終えた！ヘニング！」

「ハッ！」

「この付近の地図を…できる限り確保して広場に集合してくれ」

「了解！」

ヘニングの後ろ姿を見送って、ミケは巨人が来る方角を見た。

今は薄っすらしか見えないが、確かに動いており少しずつ近づいていた。

ここが正念場であるのは間違いない。

全員がそれを理解しているからこそ迅速に動けた。

巨人は待つてはくれないのだから。

62話 未知なる物を見て慄く者達

850年の現在、人類を巨人から護る壁は2つある。

人類の最前線である『ウォール・ローゼ』。

その内円を描くように存在する『ウォール・シーナ』である。

ウォール・シーナの突出した城壁都市に「女型の巨人」が出現し、街を半壊させた。

その事実だけでも盤石な王政を揺るがす事件であった。

しかし、畳みかけるように、その日にウォール・ローゼ内で300体以上の巨人が出現した！

「大丈夫だ……まだ壁が破られてから経っていないはずだ……」

ナナバは、まだ数体の巨人しか壁内に侵入していないと信じていた。

ウォール・ MARIA が陥落したのはシガンシナ区の前門に空いた1つの穴のせいである。

そこから巨人が侵入し、鎧の巨人によって MARIA の扉を破壊され放置せざるを得なく

なった。

もし、今回もそうであれば、壁内に侵入してきた時点で手の打ちようがない。

「全員居るか？」

「ナナバさん!？」

「なんだよびつくりさせんなよ…」

ナナバは頑張つて顔を崩さない様に報告した。

上官である自分がパニックになつていては新兵に示しが見つからないからだ。

「いいか落ち着いて聞いてくれ…南方から巨人の大群がこつちに向かって来ている」

「なんだと!？」

椅子から立ち上がったライナー・ブラウンは、同郷のベルトルトを見た。

ベルトルトからすれば何でこつち見るんだよ…と発言したかったが何とか黙り通せた。

「壁が…壊されたって事なのか!？」

相変わらずライナーはベルトルトの方を見る。

「というか、確認してきた。」

「超大型巨人ですら門の扉を破壊するのに精一杯だから無理だよ!」と言わせたいのか。彼には判断できなかったが、少なくとも相棒が『兵士』なのは分かった。

「南方から…?」

コニー・スプリンガーは『南方』の単語を聴いて脱力して座り込んだ。

何故ならそこにコニーの故郷であるラガコ村があるからだ。

もしここに巨人が来るのであれば、真っ先に巨人が辿り着くのは…。

「さあ!動いて!ぼけつとしてられるのも生きている間だよ!総員、広場に集合してくれ!」

「わ、分かりました!」

「おいコニー!しっかりしろ!!」

「大丈夫だ…ライナー…」

何名か顔色が悪くなっていくのを見て、おそらく故郷に近いのだろうと悟ったナナバ。

だが、嘆くなんて悠長な事をしていない暇ではない。

まずやるべきことは近隣の住民に危険を知らせて避難させる事だ！

104期兵が戦闘服も着ずに慌ただしく部屋から出ていく。

それを確認したナナバは、入ってきた窓から脱出し屋根に登った。

「ミケ、巨人の位置は？」

「前方だ鼻で分かる限りは、南方から来てるな…最低でも20体は居るぞ」

「ハハハ、再び壁が破壊されたって…捉えるべきかな」

ウォール・ローゼは東西南北の4カ所に突出した城壁都市がある。

巨人が人間のみ興味を持ち捕食するので、人口をまとめる事で守りを固めると同時に
囿でもある。

大惨事の舞台になったトロスト区やカラネス区も同じ理由で作られた突出する城壁

都市である。

逆に言えば、人類は壁全体を警備する手段も兵力も持ち合わせていない事を示している。

ナナバは、壁のどこかが破壊されて巨人が侵入してきたと思い込んだ。

「トロスト区やクロルバ区がやられたら報告があるはず……もし扉部以外の壁を破壊されたら……」

「手の施しようがないな。最悪ウォール・ローゼまで捨てなければならぬだろう」

「つまり、考えうる限りで最悪の事態が起こっているという事だ……」

「事実上ウォール・ローゼは突破された……!」

まだ数体だけであつたら、カラネス区に侵入してきた巨人の様に登ってきたと思えた。

ただミケ分隊長の鼻で20体以上の巨人が居ると告げられた以上、その可能性はない。

あの時の巨人は、【変異種】と分類される特殊の巨人であつたからこそ、否定できた。もしあれが超大型巨人の尖兵であつたとしたら……。

「私達は巨人化能力者の正体も、あらゆる敵対勢力を見つけられず、この日を迎えてしまった」

「私達…人類は負けてしまった…」

ナナバはただ座り込むしかできなかつた。

フローラがこの場に居たら、侵入してきた巨人を1匹残らず駆逐すれば良いと言うだろう。

だが、空いた穴を早急な塞ぐ技術など存在しない。

そもそも20体も巨人が侵入してきている時点で穴は塞ぎようがないほど致命的なのは間違いない。

つまり、自分たちの出来る事は、近隣の住民に避難を呼びかけるだけである。

「いや、まだだ！」

それでもミケは諦めなかつた。

生きている限り、何度でも人は立ち上がることができる。

屋根から104期の調査兵を見下ろすと、彼らは自分なりに頑張っていた。荷物を運ぶ者、護身用なのか斧を持つ者、信煙弾を装填した銃を持つ者。

誰もがバラバラで心許ないものではあるが、監視している兵士よりも希望に溢れている。

彼らが経験不足のせいと言われればそれまでだが、彼はその雄姿に感嘆とじていた。

「人は戦う事を止めた時、初めて敗北する。戦い続ける限り、まだ負けていない」

結局、人は死ぬ。

いつか訪れる末路であり、この世が諸行無常である以上、仕方がない事である。では、自分達が今まで行なってきた事が全て無駄だったのか？

答えは否だ！

人は死んでも意志は引き継がれるし、逆に遺志を捻じ曲げる事すらできる。要するに誰かが生きていれば、何とでもなる。

生きるといふ事は希望である。

「急ぐぞ！巨人は待ってくれないからな！」

「…おいサシヤ！それ芋じゃねえーか！」

「食堂から取ってきたんです。昼飯は無理そうなのでせめて間食しようかと…」

「お前！この忙しい時に何してんだ！」

「何言ってるんですか！食事は重要ですよ！立体機動装置で例えればガスみたいなものです！」

鞍を抱えているコニーは、芋を大量に持ち歩くサシヤを見て注意したが開き直られて困惑した。

サシヤからすれば、一食でも抜けば生きていけなくなる自信があるので反論しただけだ。

ライナーはコニーを気遣い、当の本人は強がっている。

ユミルはクリスタを喰われない様に最後まで奮闘する気満々である。

ベルトルトとライナーは、壁内に巨人が侵入した事実には驚きながらも使命を全うする気である。

「私は…最後まで生きる…トーマスの為に…フローラの為に…」

巨人に頭から齧られそうになった事があるミーナ・カロライナは、精神がボロボロであつた。

隙あれば声を出して発狂したいくらいだつた。

それでも彼女を辛うじて正気でいるのは、亡き親友と親友のおかげである。

トーマスの兵服にあつたワツペンが彼女の左胸のポケットに入っている。

それが彼女の【心臓】であり決意であり、そしてなにより呪いだつた。

絶対に生き残つて、トロスト区の門で行なつた『肉の誓い』を達成するまで死ぬ気などなかつた！

そしてベルトルトはいつも通り地味で空気である。

「見ろ、新兵たちは希望を捨ててない。ならば尚更、我々が無様な真似をするわけにはいかない」

「ああ、確かに情けない所は見せられないな」

ナナバは新兵たちの姿と上官の言葉で立ち直つた。

自分たちができる事を全うする、それが兵士というものだ。

作戦は決まった。

まずは早馬を走らせてトロスト区、エルミハ区、ヤルケル区、クロルバ区に巨人襲来を知らせる。

既に各城壁都市に向けて早馬を送り出しており、情報伝達には問題は無いだろう。

「あの巨人が林まで到達したら一斉に離散する！それまでに4つの班に分けるぞ！」

無防備な104期調査兵と武装兵を東西南北に向かう4つの班に分けた。

それぞれの班は離散して、近隣の住民に避難を呼びかける役割である。

特に南班は、壁の穴を特定する任務がある為、人手が必要であるのでミケが班長になつていた。

「誰かこの地形に詳しい者は居るか!？」

「はい！サシャ・ブラウスです！北の森に故郷があります！その地形は詳しいです！」

「コニー・スプリンガーです…南に俺の村があります…巨人が来た方向に…」

「…そうか、サシャは北班に、コニーは南班に来てもらうぞ！」

「…はい」

コニー・スプリングーは最悪の事態を思い浮かべていた。
というより内心では諦めていた。

巨人は奇行種でない限り、近くに居る人間を襲う。

トロスト区防衛戦や奪還作戦で巨人の習性を間近で目撃し、経験していた。

だからこそ、巨人が来た方向にある自分の村がただでは済まないのは馬鹿な彼でも分かる。

「コニー！俺も行くぞ！」

「ライナー!?南は一番危険だぞ！巨人がわんさか居る…」

「何言ってるんだ！俺達は仲間だし…さつき、抜け出しに加担すると言っただろう?」

「済まない…」

「…らしくないな！避難訓練すらしてない5年前と違っておそらくお前の家族は無事だ
と思うぞ」

「ははは…そう言ってくれとありがたいぜ…」

それはライナーの本心だった。

壁を過信して昼間から酒を飲む駐屯兵がうろつく環境ではなく、むしろ罰せられる時代。

もし、何者かが壁を破壊したとなれば、それは人間の手では手に負えないだろう。

壁を10 m以上の穴を空ける為に爆破する爆薬の所持すら王政に定められた者しか扱えない。

では、普通の巨人が壁に穴を空ける事はできるのか？そんな事はあり得ない。

超大型巨人ですら壁を破壊できるわけではない。

せいぜい何度も繰り返して攻撃しないと破壊できないだろう。

「お前は どうする？ベルトルト…強いているわけじゃないが頭数が必要だ」

ベルトルトは判断に困った。

一見すると、コニーを心配したライナーが自分も加えて一緒に彼の故郷に向かうつもりである。

しかし深読みすると話が変わってくる。

彼の目を見ると【戦士】の目をしていた。

つまり、いざとなったら巨人化しろと無言で示している。

超大型の巨人を凌駕する巨人など、人間が相手にできるかも疑問であるし、なにより
…。

人数が足りないのは、どこも同じであり、わざわざ口に出す事じゃない。

「分かった、僕も行くよ」

下手すれば、コニーに同情して超大型巨人でも壁が壊せなかったと告白しカミングアウト。

そこからの裏切り者！証拠隠滅！精神が更に壊れるコンボをしてくるかもしれないライナー。

ベルトルト・フーバーは、その危険性を踏まえて彼と同行するつもりだ。

まさか「ベルトルトが超大型巨人だ！」なんてカミングアウトされても困るからだ。

「分かっていると思うが今日は、人類最悪の日が更新された日だ！」

「そして人類史上、最も忙しく働く時が…今だ!!」

ナナバは必死に認識させる！

今日は人類最悪の日だと！

自分達が動かないと被害は甚大になると！

誰もが分かっているのに誰も発言しようとはしない。

もし、口にすればそれが現実になりそうだったから。

それでも、現実を理解し、絶望に潰されそうな兵士を鼓舞する為にナナバはあえて発言した！

例え何が起こっても自分たちの働きで、犠牲者を最低限に抑えたと認識させる為だ！

「くそ！巨人が走り出したぞ?！」

「全速力で駆け抜けろ！急げ!!」

巨人が走り出したのを見て大慌てで馬を走らせる兵士たち。

基本的に馬の方が早い、それでも巨人が走るといふ事は、それだけ近隣の住民が襲われる可能性が高い。

ミケは、最低でも半分は自分に誘導する気である。

「ゲルガー！南班はお前に任せた！」

「ミケ分隊長!? 単独で2桁の巨人は無茶です！」

「分かっている！それでもやらねばならん時がある！」

「了解…しました！」

巨人を単独で2桁討伐した事があるフローラですら巨人は3体同時に相手にするのが限界である。

それだけ動きが速く、無駄に機敏で、巨大な質量を武器にしている巨人は脅威だ。

リヴァイ兵士長や頭エレン娘のせいで巨人の実力が過小評価されやすい。

駐屯兵団の精鋭数名でようやく巨人1体を討伐できるほどだ。

それでもすぐく、本来なら30名近くの兵士を犠牲にして巨人を1体討伐できるのだ。

なので単独で複数の巨人が相手にできるのは、それだけで勲章がもらえるくらいである。

「ミケ分隊長が囷になったのか」

「無茶だ！俺も…」

「ダメだ！人数はこれ以上減らせん！ミケさんを信じる！」

数か月前までリヴァイ兵士長に次ぐ実力者である第一分隊長のミケ・ザカリアス。

ここ最近、全身頭フローラ100%の女が居るせいで霞んでいるが屈指の実力者だ！

巨人の匂いを感じて向きと数を調べられる嗅覚とその巨体は頼りになる！

だからこそ、調査兵団の第一分隊は、彼を信じるしかなかった。

「これでいいですよね？」

「ああ、問題ない！通行を許可する！」

さきほどフローラ・エリクシアは、エルミハ区からウォール・ローゼの通行許可が下りた。

エルミハ区は、人類最前線の城壁都市、トロスト区の北にある内地の最南端の城壁都市である。

街は基本的にトロスト区と同じであるが、貴族の屋敷があるので内地である事を実感

できる。

そんな彼女は、104期の調査兵が事実上軟禁されている建物に向かっていった。

「ライリー！行くわよ!!」

通行許可証と命令書を兵士から受け取った彼女は馬に乗って門から飛び出していた！

それを見た兵士は眩く。

「おいあの馬、血を流してなかったか？」

「確かに体毛は赤かったが…そうだったか？」

「いや、ここに赤い液体が垂れているぞ」

「本当だ…なんだったんだあいつ」

ライリーは突然変異種の馬であり汗血馬である。

そもそも調査兵団の馬は巨人から逃げられる唯一の移動手段である。

その巡航速度は35km/h、トップスピードは75km/hを凌駕するのがフロー

ラの愛馬である。

人間の肉体が突然変異したのがリヴァイ兵士長であるなら、その馬バージョンがライリーである。

汗血馬は1日に500kmと言われているが内地の半径は約250kmほどである。それを半日も掛けずにストヘス区からエルミハ区に到着していた。

「ライリー！まだ走るわよ！」

ライリーは自由になった！

自称主人がいくらでも走っても許してくれた。

だから全速力で駆け抜けた！

その一時、96km/h、巡航速度が60km/hという…とんでもない速度で駆け抜けてきた。

じゃじゃ馬のライリーの血筋は両親共に最高級であるが、とんでもない馬である。

本来なら誰も信じないが、リヴァイ兵士長の馬バージョンと告げると何故か信じてくれた。

「ええっ!？」

エルミハ区を後にしたフローラとライリー。

興奮すると古傷が開いて血だらけになるフローラ。

汗を掻くと血を流す汗血馬のライリー。

意外と似た者同士である。

そんな彼女たちを待ち受けていたのは1体の巨人であった。

僅か30分、ライリーの足が速すぎてワープしたのかと錯覚してしまうほどあり得ない光景だ。

ここは人類の領土、ウォール・ローゼ内であるはずだから巨人など居るわけがない。

「とりあえず討伐するわよ!」

ここで逃げて戦闘を回避しないのが頭進撃である。

フローラというお肉を見つけて駆け出した巨人の左足にアンカーを撃ち込んで突撃!

ワイヤーを巻き取った勢いで両断し、巨人の後方に飛び出してガスを噴出し、空中で

宙返りした！

身体を捻り倒して倒れ込む巨人の首にアンカーを突き刺してガスを噴出し、うなじを削いだ！

さくつと30秒クッキング、できたのは巨人の死骸である。

蒸気を噴出して汚物に見える黒ずむ巨体は、そのまま消滅していく。

それを見て食用のお肉には向いていないと思うフローラであった。

「なんで巨人が居るのよ…」

さくつと討伐したが本来ならここに居るはずもない巨人。

トロスト区の門はエレンが塞いだ岩で塞がっており、巨人が侵入するわけなかった。

とりあえず巨人を見つけたので専用銃に信煙弾を装填、空に向かって撃ち込んだ！

赤色の信煙弾が空中に向かって煙を出して空中を暫く駆け抜けた後、重力に基づいて

落下した。

エルミハ区の正門の警備兵は、その赤色の煙を見て大騒ぎしたのは間違いないだろう。

フローラみたいに出会いがしらに巨人を瞬殺できるほど人類は強くないのだから…。

ジーク・イエーガーは、疑問に思っていた。

送り込んだ戦士たちが5年経っても帰って来なかった。

さすがに痺れを切らした上層部によってここに送り込まれてきた。

そこで目にしたものは…。

「なんだあれ？何で人間が空中を飛んで無垢の巨人を討伐してるんだ？」

巨人を倒すには専用の重砲か、それか知性の巨人か。

少なくとも真正面で無垢の巨人を撃破したいのなら、それ以外の選択肢はない。

だが、視界に入るのは人間が双剣を持って空中を飛び回っている所だ。

また、巨人が討伐されて5体目になる。

戦士長としてそれを確認しないわけがなかった。

屋根に飛び乗った兵士と思われる男に向かって歩き出す。

「……までやれば充分だろう……」

ミケ分隊長は、5体の巨人を討伐して刃を半分消費していた。

複数の巨人と戦闘になるとは思わず駐屯兵団が使用しているブレードを装備していた。

その為、『強化鞘・2型』にあつた替刃をセットで3つ消費していた。

あと2回替刃を装填できるが、これ以上の戦闘は避けて撤退するつもりだ。

指笛を吹いて馬を呼び戻していたミケであつたが1点気になったのがある。

『なんだあの奇行種は……』

さきほどから自分を見ており、攻撃してくる気配が無い。

壁外調査でもごくまれにそういった巨人を目撃していたが、その巨人は異常だった。

約17mの巨体であり、何故か全身が毛だらけで巨人と呼べなかった。

どちらかというと獣を巨人化したものともいうのだろうか。

全身が体毛で覆われた巨人など見た事も無いし、聞いたことも無かった。

『まあいい、馬が戻ってきたしここに留まる必要はない』

指笛で戻つて来た馬を見て安心した。

これで一旦、エルミハ区かトロスト区に帰還して態勢を整える。

できれば駐屯兵团第一師団の精鋭班を援軍として呼びたいが、エルミハ区の方が近い。

とにかく単独で巨人を相手にしたくない彼は、速やかに戦線離脱したかった！

「なん…だと!？」

自分が乗る予定だった馬が体毛に覆われた巨人に掴まれた。

巨人は人間のみを感知して攻撃する。

その概念は、実際にいくらかでも経験しており常識として身につけていた。だからこそ、【獣の巨人】が行なった行為に思考を停止させた。

そしてなにより…！

「馬を狙った!? そんな馬鹿な!？」

ここで彼は失念していた。

もしあの巨人がエレンと同じ巨人化能力者であったら馬を狙うという考え。

さきほどまで普通の巨人を相手にしており、まだ残っているせいでそこまで考えられなかった。

動揺する彼を見た獣の巨人は、人間の様に馬を投げつけた。

「うおっ!？」

急いで屋根から飛び出して馬の直撃を回避したミケ。

その落下先には4 m級の顔が崩れた巨人が居た!!

「クソが!!」

！。 巨人に掴まれる瞬間、彼は双剣を叩きつけて目を潰してその勢いで地面に激突した

左目を損傷し、右目もダメージを受けた巨人は、目標を失い、その場を去っていった。

「ぐっ…」

一度、巨人で衝撃を和らげたとはいえ全身を叩きつけてしまい、満身創痍である。近くには、さっきの巨人も含めて4体の巨人が居る。

馬という移動手段の喪失、ダメージで身体が動けないというコンボを喰らってしまった。

ここで彼は人生が詰んだのを嫌ほど実感した。

〈その武器はなんて言うのですか？〉

「!？」

〈その腰に付けて飛び回る奴〉

ミケは獣の巨人が人間の言葉を使ってきたのを聴いて戦慄した。

巨人化能力者だと判断できていない彼は恐怖で怯えた。

人は未知なる物を見てしまうと思考を停止して恐怖で怯えてしまう。

トロスト区防衛戦における訓練兵と同じことがミケの心境で起こっている。

その彼が居る後方に、巨人が恥ずかしそうに建物から顔と両手を出して覗いている。

〈おかしいな…言葉は通用するはずんだけどな…怯えてそれどころじゃないのか？〉
〈剣とか使ってるし、やっぱうなじに居るって知ってるんだな〉

獣の巨人の正体であるジーク・イエーガーも未知なる物に怯えていた。

双剣を構えて空中を飛び回って巨人のうなじを削いで討伐する。

それを上層部に口頭説明すれば、精神病院に入院されるほど現実的ではなかった。

100年の間に独自の進化を遂げた悪魔の末裔に怯えている。

ただ、恐怖より好奇心が勝っているのは恩人の影響があるな…と彼は思った。

〈まあいいや持つて帰れば…おい！待てよ！〉

「ぐあああああつー！」

そう思って未知なる装備を入手しようとするジークであったが誤算が発生した！

建物の影に隠れていた巨人がミケに襲い掛かったのだ。

抱き抱えられて内臓を圧迫されて悲鳴をあげる男を見たジークは、無垢の巨人を制止

させた。

〈待てって言うてるだろうが！〉

命令しても捕食行動を止めない巨人に激怒したジークは、その巨人の頭を握り潰した。

うっかり怒りで巨人を潰してしまったが代替えなどいくらでもあると割り切った。

〈今度こそもらうか〉

そう思って未知なる装備を壊さない様に優しく掴もうとした。

それを見たミケは両手を頭に抱えて丸まった！

ミケの脳内では、巨人の王様であり人類を滅ぼす気だと思っていた。

そのおかげで何も抵抗もなく、ジークはあっさり『立体機動装置』を入手した。

そもそも立体機動装置の存在すら知らない彼が名前を知っているわけがなかったが
。。。

戦利品として記念に持ち帰る事で頭が一杯であり、震えている小物には興味が無かつ

た。

『人は戦う事を止めた時、初めて敗北する。戦い続ける限り、まだ負けていない』

さきほど自分で発言した言葉を思い出したミケ・ザカリアス。

震えながらも柄を握りしめて双剣を構えた！

戦う限り、撒けることは無いのだ。

彼は呑気に後ろを向けた獣の巨人を攻撃しようとしていた。

へあつ、もう動いて食べて良いよ

獣の巨人は、無垢の巨人の行動制限を解除した。

残りの3体の巨人は命令に従ってミケに近寄り襲い掛かった！

「やだあああああ!! やめてええええええええ!!」

ミケの覚悟は速攻で消えた。

絶望したのを気力で立ち直らせた分、更に心が折れたので絶望して子供の様に泣き叫んだ！

立体機動もなく満身創痍でただ巨人に踊り食いされる末路に絶望して脱糞した！
その悲鳴を聴きながら、獣の巨人は歩いていく。

〈やっぱ喋れるじゃん…まあしつかし、面白いことを考えるな〉

ジークからすれば、あの怯えた兵士などどうでもよかった。

それよりこの装置を分析する必要がある。

壁内人類が外界から遮断されて100年以上経過してどんな進化を遂げたのか調べたくなった。

その時、爆発音と共にとてつもない異音がした！

〈何事だ!?!〉

慌てて振り返ると、さきほどまで兵士らしき男が喰われていた場所で濃厚な蒸気が出ていた。

さきほど1体の無垢の巨人を潰したが、ここまで蒸気が出ることは無かった。そして、濃厚な蒸気の中から騎兵が1名飛び出してきた！

「おっほっほっほっ！…よくもミケさんをやってくれましたわね！」

フローラ・エリクシアは、獣の巨人に向けて双剣を構えながら発言した。

過去最大級に苛立っている彼女ではあるが、獣の巨人が巨人化能力者である事に気付いている。

だからこそ、怒りや鬱憤をこいつで晴らそうとした。

ちなみにミケは屋根の上で座り込んで放心している。

〈なんだこいつ!〉

この日、ジーク・イエガーは思い出した。

自分が相手にしているのは、エルディアの悪魔だという事を！

この後、惨敗して命からがら50mの壁に帰還して部下の前で泣き叫んだ！

思い出しただけで脱糞して泣き叫ぶ戦士長に部下達を困惑させることとなる！

〈所詮、さつきと似たような奴だろう〉

そして彼は知らなかった。

自分が相手をしたのは、エルディアの悪魔で最強ではないことを！

彼女すら凌駕するリヴァイ兵士長に苦しめられることを知る由もない。

ただ、変な女が話しかけてきたのでジークは適当に相手にするつもりであった。過去最大級の尊厳破壊をさせられると知らずに……。

63話 この日、ジーク・イエーガーは恐怖で脱糞した

フローラ・エリクシアは機嫌が悪かった！

巨大樹の森で彷徨っていたアニを救出した結果、ストヘス区が半壊し住民が大勢死んだ！

正体に薄々気付きながらもドーナツを楽しんでいるアニを見てしまい、それを心の奥に留めた。

あまりにも嬉しそうだったので、後日にドーナツを4人で食べる約束が白紙化した！精神的に追い詰められている親友のミーナに致命的な精神ダメージを与える現実！午前4時に起床して寝不足！そしてなによりお腹が空いた！

「さすがに1人じゃきついわね…ライリーも居るとはいえ…」

エルミハ区から出発して既に3体の巨人を討伐したフローラだったが怒りが収まらなかった！

怒声をあげるのではなく静かに怒るタイプの為、人や物に当たる方ではなかった。

そのせいで数分前によくやく自称主人が激怒している事に気付いたライリー。一瞬、自分の名前を呼ばれたが恐怖を我慢して走り続けた！

「止まって！」

フローラは手綱を引いた！

基本的に馬を止める時は手綱を引かない。

故にライリーは緊急事態と判断して素直に止まった。

『ミケ分隊長と…誰？』

フローラは、負の感情を聴ける “声” で2人の人間と4体の巨人の呻き声を感知した。

問題なのは、ミケ分隊長ではない男の “声” である。

立体機動装置に怯えているようで、何度も妙な単語を口にしていた。

ここでフローラは、そいつが巨人化能力者だと気付いた！

それと同時に腸が煮え返ってその巨人を徹底的に痛めつけてから惨殺するつもりで

ある。

！
何故なら立体機動装置どころか兵士の姿すら知らない者など敵に違いないのだから

「あいつのせいで……！」

ニヤンコとワンコを汚いおっさんで人体錬成して合体したような獣の巨人から発せられていた。

巨人化能力者が居る巨人は、呻き声ではなく人間の声のはつきり聞こえる。

そもそも巨人の口で人語で話しかけているのを見ると、明らかに知性のある人間である。

ミケ分隊長は、得体が知れない化け物だと判断してパニックになっているようだ。

だからこそ、わざとらしく話しかける獣の巨人を討伐したくなった！

歯を噛み締めて殺意剥き出しで睨めつけるフローラを見てライリーは萎縮した。

〈待ってって言うてるだろうが！〉

獣の巨人が巨人の頭を握りつぶした。

別にそこは問題ではない。

問題なのは、両目を潰されている巨人はともかく、2体の巨人が指示に従って待機していた点だ。

人間を見つければ捕食行動に移る巨人らしくない行為。

つまり、巨人を統制しており、壁内に巨人が出現したのは獣巨人のせいだと分かる。

巨人の王様なのはフローラは分からないが、この騒動の発端は大体こいつのせいだろう！

〈今度こそもらうか〉

女型の巨人と接点がないのか、興味深そうに立体機動装置を掴んでいた。

理由は不明だが、アニとはそこまで関わりが無い様に見える。

むしろ、ドーナツを頬張る彼女の姿を思い出すと、こいつのせいで狂ったと感じるフローラ。

威力偵察に来たのか、アニを回収しにきたのか彼女は分からなかった。

ただ言える事は、アニが壊れた元凶をそのまま帰すつもりはなかった！

へあつ、もう動いて食べて良いよ

目標の物を入手した獣の巨人は、あつさりミケを巨人の餌にしようとした！

震えながら刃を向けてくるミケの覚悟などどうでもいいと言わんばかりに無情に切り捨てた。

本命は、良く分からない兵器（後に立体機動装置と判明する）であり、兵士はどうでもよかった。

我慢できなくなりつあった2体の巨人と、顔面が崩れた3m級の巨人はその命令を受けられた瞬間！

意気揚々とミケを捕食しようと3体の巨人が飛び掛かった！

「やだあああああ!!やめてえええええええ!!」

戦う術がないミケは脱糞して泣き叫んだ！

決して後ろを振り返る気が無いジークは、その悲鳴を聴いて満足そうに去つていこうとした。

その声を聞いたフローラは手投げ式の音響弾の安全ピンを抜いて巨人の群れに突っ込んだ！

「邪魔！」

3 m級の巨人のうなじを削いだ瞬間、背後に捨ててきた音響弾が破裂して爆音を辺りに響かせる！

巨人は全身の皮膚が感覚器官と揶揄される。

そのせいなのか、音がした場所に巨人の注意を惹いた隙に邪魔だった巨人の首を両断！

ミケを抱えて、ありったけのガスを噴出して屋根に置いた後、残りの巨人を潰した！

聴覚が優れる彼女は、耳鳴りが残るダメージを負ったが救出失敗に比べれば些細な損害である。

続けざまに死んだ巨人の亡骸から噴出する蒸気のおかげで、彼らは姿を隠す事が出来た！

〈何事だ!?〉

予想してなかった爆音で怯んだ獣の巨人は、音が止んだのをしっかりと認識した後、振り返った！

何故か民家が見えないほどの蒸気があり、さきほど飛び掛かった巨人が全滅した様に感じられた。

「おっほっほっほっ……よくもミケさんをやってくれましたわね！」

フローラはライリーに騎乗して双剣を構えて蒸気から飛び出した！

ライリーが悲鳴をあげるほど胴体を締め付ける両脚からは怒りしか感じられない！

そうとは知らず、わざわざ姿を見せてきた女に困惑するジーク・イエーガー。

多分、馬鹿なんだろうな……と他人事である。

〈所詮、さつきと似たような奴だろう〉

さきほどの兵士らしき男が大した事なかったので、こいつも同じだろうと判断しても仕方が無い。

むしろ、派遣した4名の戦士が何でこの程度の奴らに手古摺っているのか疑問だった。

工業化どころか、原始的な戦い方をする住民がエルディアの悪魔だとは思えないほど滑稽だった。

そんなジーク・イエーガーの常識は、この日を境に崩れ去った！

へとりあえず女の子らしい悲鳴を聴かせてくれ

ジークは、地面を右手で掻きむしって土を投げつけようとした！

子供が砂遊びをするように純粋な気持ちで地面を掘り返して右手にある土を握りしめた！

視線を戻して、いざ投げつけようとしたら赤い馬しかいなかった。

〈あれ？どこ行っちゃった!?!〉

17mという巨体が見下ろしているから分らないはずはない。

さっきの男も空を飛び回っていたから上にいるのかと大空を見上げた。

特に何も変わった様子はない。

耳障りな異音を除いて。

そこで、その異音が何なのか確認しようとした瞬間、右目の視力を失った！

〈ほえ!?〉

人間は想定外の事態に陥る時、思考を停止させ動きが止まってしまふ。

さきほどのミケ分隊長から見た得体のしれない存在であるジークも同じ状況に陥った！

『壁外から来たのね…』

彼が操作している獣の巨人の右目にはスナップブレードが突き刺さっていた！

もちろん、フローラが死角から飛び出してブレードを眼球に突き刺したからである。

それでも呑気に立っているのを見て壁内の人間でない事を理解した。

『それなら好都合よ！アニじゃできなかった事で全てを吐かせてやるわ!!』

ならば、人権など守らなくていいだろう。

人権は人権を守る人間しか適応されないといけないという独自の価値観があるフローラ！

ミケ分隊長を尊厳破壊した獣の巨人を同じように尊厳破壊をしてから尋問するつもりだった！

『こいつのせいでアニが狂ったんだわーこいつのせいで!!』

ハンジ分隊長やエルヴィン団長だったらジークを生け捕りにするだろう。

フローラはこいつを生かして帰すつもりは毛頭ない！

アニが狂った原因がこいつであるならば、人権を踏みにじられて絶望して死んでもらいたかった！

本能が『こいつを痛めつけろ』と囁いてくるほど残虐な行為を容赦なくできる環境になっただけだ。

『毛が邪魔!!』

ジークは、部下であるアニと違って立体機動の知識がないせいでうなじが無防備である！

フローラは、うなじにを斬ろうとするが、毛深いせいで毛を刈るだけで終わってしまっただけ！

しかし、彼女は思った。

『なんて燃えやすい毛なのだろうか』…と。

へ一体何が…

ようやく落ち着いたジークは右目に何か突き刺さっているのが分かった。

なので巨体の眼球付近を抉り取って、肉体再生を目指した。

その隙にフローラは地面に着地してライリーに向かって駆け出した！

そして、馬に取り付けたバックアップから3本の火炎瓶を取り出して微笑みながら駆け出した！

この火炎瓶は、先輩であるニファ・ヴューラーから製造方法を教えてもらい自作したものだ。

『乾いた毛、それなりのそよ風…燃やすにはちょうどいいわね!』

やたらと毛むくじやらで、腹が突き出たおっさん顔の獣の巨人。

うなじを斬るには体毛を除去しないと買ったフローラは、こんがり焼いて終わらせる気だった!

うなじにいる能力者も焼き殺せるならそれが良いが、さすがにそこまでいかないと思っっている。

〈そこか!!〉

しかし、フローラが再度攻撃に移る前に獣の巨人に気付かれた!

馬を乗りこなす騎兵を見つけてジークは拳で叩き潰すつもりだった!
しかし、彼は誤算があつた。

「行くわよ!」

調査兵団という存在をジークは知らない。

そしてその兵団が利用している馬は専用に調教されているのも知らない。

ジークや一般的な庶民から見れば、調査兵団の馬は普通にしか見えないだろう。

巨人を見ても恐れずに温厚で誰とも友好的で順応で、本気で走れば巨人の速度より速い馬である。

ところがフローラが乗っているライリーは、その調査兵団の馬と対極的な存在だった。

へはや!?自動車より速っ!?なんだこいつ!?<

ライリーは巨人を恐れており、好戦的で相棒すら認めず、本気で走らなくても巨人より速かった。

駆け回るのが大好きなこの馬は、大地を我が物のように歩き回る巨人を敵視している!

自分の走行を阻害し、自由を制限されているのは巨人のせいだと分かっているからだ。

だからこそ、フローラが巨人を討伐するのを見るのがカタルシスであり興奮する光景

であった。

よつて、彼女が立体機動に移った瞬間、加速して巨人のアキレス腱を思いつき蹴り飛ばした！

少しでも早く巨人を討伐してもらい、再び自由に走り回りたいからだ！

へうおおおおおっ!?!<

いくら17m級の巨人でも馬の全力の前蹴りの衝撃でフロラへの攻撃が逸れた！
ライリーもただじゃ済まないはずではあるが、普通に何事もなく離脱している。

へ人がワイヤーで飛んでいるのか?!<

移動を停止して立ち直したジークは今までの常識が崩壊するようであった。

まさか巨人を討伐するのにワイヤーアクションをしながら、うなじを斬り付けるなんて…。

ここに来て実際に目撃するまで想定してなかった！

馬から飛び出して何かを突き刺してワイヤーを巻き取りながら双剣を構えて突っ込

んでくる光景。

重力は!? 耐Gは!? 空間認識能力は!? そもそも生身で巨人に挑むのか!?

ワイヤーを利用し、ターザンごっこでアア? アア? しながら巨人を討伐するなんてありえない。

しかし、握りこぶしサイズの人間が飛び回るのを目撃しており、彼は混乱に陥った! だからこそ、彼女の笑みを見逃してしまった。

「臆病者が敵に隙を見せるなんて喧嘩売ってるの?」

ニファは、フローラに火炎瓶の作り方を教えたが、使用する油を指定していなかった。なのでフローラは、「燃える液体」から精製された『揮発油』を使用した。

訓練兵時代に好奇心でその油に着火して死にかけての経験で使用していたに過ぎない。

∴後世で『ガソリン』と呼ばれる油は、少なくとも彼女は最適だと信じていた。

火炎瓶を教えた第四分隊のニファが知ったら卒倒する話である。

「おっほっほっほっ! まるで業火で悪魔を焼き尽くすみたいね」

獣の巨人の毛は燃えやすかった！

それは巨人の皮膚を直接焼くより手っ取り早く！

割れた瓶から飛び出した燃料がばら撒かれて毛に付着し、微かな火種で爆発するように発火した！

〈ぎゃあああああ!?〉

砲撃される事があってもガソリンで焼かれるのは想定外であった。

獣の巨人は、無駄に体毛があるせいで皮膚だったら表面だけを焼くだけで済んだのに悪化した。

剛毛は斬撃はおろか、砲弾の衝撃や熱すら護る盾であったが、ガソリンの前には無力だった。

両手で掻きむしって燃える毛を皮膚ごと抉り取って投げ捨てた！

17 mから飛び降りるのは危険過ぎるし、既に本体の方まで熱が届いたので鎮火するしかなかった。

「もう一発！」

思った以上に燃える獣の巨人に驚きながらフローラは、追加の火炎瓶を投げつけた！
さすがに自分も巻き添えになると思い、投げた瞬間、地面に落下するように逃げ出した！

蓋が緩んだ火炎瓶は、必死に鎮火する巨人の人差し指に激突して割れた。

その瞬間、爆発した！

「火炎瓶も案外、こういう巨人に役に立つのね…」

巨人には立体機動による肉薄攻撃でうなじを削ぐのが有効とされている。

砲撃では巨人の動きに翻弄されるうえに、うなじ付近に直撃しないと有効打にならないからだ。

更に燃やしても巨人に理性がないせいで、そのまま突っ込んでくる為、牽制にはならない。

せいぜい火炎瓶は合図に使うか、巨人に喰われそうな同僚を救出する時に使うものがある。

逆に言えば、知性のある巨人には火炎瓶が有効だとも取れるが、今回の件ではつきり

した！

巨人化能力者には、火炎瓶が有効であると……！

『やべえ……エルディアの悪魔怖っ!?!』

ジークは、火炎瓶を投げつけられたとようやく認識できた。

ワイヤーアクションで空を飛び回り、火炎瓶を投げながら双剣で巨人のうなじを削ぐ戦法。

おそらくこの島にある地下資源を贅沢に使用する途方もないコストがかかる兵士。

硬化化で高熱を防いだジークは、咆哮で巨人を呼び寄せて、いつきにケリをつけるつもりだった。

それが彼の大失態に繋がった。

「ムカつく声を黙らせてあげるわ！」

フローラは獣の巨人の声帯を潰して発音させないつもりだった。

一方、獣の巨人は咆哮しようと空気を取り入れて吐き出そうとした！

そのせいでフローラが斬り付けた衝撃で、反射的に首を縮めた瞬間、圧縮された空気が暴発した！

あまりの衝撃で巨人の頭が取れて地面に向かって落下していった。

「あれ？」

ジークは視界が再び元に戻った。

さきほどまで不快感があった右目の視力は元に戻っており再び大地を見下ろせた。

何故かさつきより景色が遠のいているな…と他人事である。

しかし、戦士長である彼が異変に気付くのはそう掛からなかった。

皮膚を削いでまでして引火した毛を投げ捨てて、爆発の衝撃で致命的なダメージを負っている。

「巨人の…頭が!？」

そこに圧縮された空気がフローラが付けた喉元の傷から爆発するように抜け出した！

その結果、顎から後頭部に向かって応力が発生。

更にうなじ付近を支える筋肉が無くなっていた為、その応力を筋肉に受け流す事ができなかった。

哀れな獣の巨人の頭部は首の根元の結合部を引っぺがし、切れて落下して地面に転がった。

気が付くと、獣の巨人の首のうなじ付近にジークの頭がだけが飛び出している歪な状態になった。

身体は巨人、鎖骨から上は、人間の頭という状況がジークを更に混乱させた。

「ふーん」

爆発の衝撃で吹っ飛ばされたフローラは立ち直して立体機動に移り、首元に到着していた。

ジークとフローラが顔を見合わせてお互いの顔を見た。

彼からすれば、同族であるのは知っているので本当に人間なんだという感想しか思いつかなかった。

「ひゃー！」

フローラは躊躇いもなく左手の親指をジークの右目に突き刺した！

これはアニから習った格闘技の反則技“サミング”という物だ。

なんでこんな物が格闘技の一種なのか疑問に思ったがこういう時に使うのだろう。

「ぎゃあああああ!!？」

向かい合って見つめていたら問答無用で右目を潰されたジークはたまらず悲鳴をあげた！

目の前に居るのは、まさしく「エルディアの悪魔」である！

「うぴよおおおおお!？」

あまりの恐怖で小便をちびらせた彼は巨体を走らせて女兵士を振り落す為に逃亡した！

彼は一度、部下と合流して対策を練るつもりだった！

「待て待てー!!」

「ぎゃああああああああああつ!?!」

声がした所を見ると、さきほどの女が馬に乗って追いかけて来た!

全速力で巨人が逃走しているのに時速100kmで走ってるのかと思うほど追い付かれそうだった!

「おっ!良い所に!お前ら!こいつを喰え!!」

3体の無垢の巨人を見つけた彼は、女兵士が居る所に指差して全力で逃げた!

ジークの脊髄液で巨人になった悪魔たちは、命令通りフローラを捕食しようと襲い掛かった!

見事に無垢の巨人に面倒事を押し付ける事に成功したジークは、額の汗を右腕で拭こうとした。

「ああ、そうだった…頭だけ人間だったな…」

巨人の腕が見えた瞬間、潰されない様に慌てて立ち止まって衝突を防いだ。過呼吸で吐き気がしており一呼吸をついた。

先ほどの出来事が悪夢に見えたが、右手に握っている兵器で妄想ではないと実感したジーク。

さすが悪魔と揶揄される事があるなど他人事だった。

「さて、あいつは…!?!」

さすがに巨人3体ぶつければ死ぬだろうと思ったジークは驚愕した!

1分足らずでその巨人たちが地面に倒れ込んで蒸気を噴出して黒ずんでいた!

「どこを見てるの?」

女が耳元で優しく声をかけてきた。

だが、ジークは知っている。

その声の正体は巨人3体を瞬殺した「エルディアの悪魔」だということをして!

恐る恐る首を動かすと微笑む女が居た。

ただし、真昼間なのに瞳孔を最大限開いている化け物を見てしまった。

その瞬間、激痛と共に視界が真っ暗になった。

残った左目をフローラの親指に中途半端で潰されたせいで完全に失明した！

「うわあああああああああつ!?!」

ジークは奇声をあげて逃げ出した！

痛みを！恐怖を！自分の無力さを誤魔化す為に必死に正気を保つ為に大声で叫んだ

！
この日、ジーク・イエーガーは思い出した！

自分が相手になっているのは、誇張ではない本物の【エルディアの悪魔】だという事に

！
「ぎゃあああああああああ!!」

「待って待って——!!」

頭部を失った毛むくじやらの巨人が騎兵1名に追撃されている。

民家の屋根の上に座り込んだ調査兵団の第一分隊長ミケ・ザカリアスは呆然とそれを眺めていた。

さきほどまで得体のしれない化け物が悲鳴を出しながらフローラから逃げていた。それだけでメンタルが回復するのに時間が掛からなかった。

「来るなああああ！俺の傍に近寄るなああああーっ!!」

「おっほっほっほっ！……まだ逃げられると思ってるの!?あんたは無残に死ぬのよ!!」
「嫌だ！嫌だああああ!!」

例えるなら、旧支配者の1人であるクトゥルフが下級な存在に介入して絶望を振り撒いていた。

そんな化け物もお腹を空かせたフローラには『ただの食材』にしか見えないのだろう。見るだけでSAN値が削られるクトゥルフも、恐怖の感情が無いフローラは食欲が勝った!

化け物の視界を奪い、触手や翼を両断して焼き殺そうと、逃げる食材を彼女が追いかけた!

「ああ、フローラらしいな…」

【食材】は悲鳴をあげて逃走してるが、食い意地がある彼女から逃げきれはるはずもなかった。

こうしてみればクトゥルフが大した事がないように感じるだろう。

目の前で繰り広げられている衝撃的な光景も、そう考えると納得できる。

ミケもそんな感じでフローラのおかげで精神を癒すことができた。

「追いかけてっこは…もう終わりよ!!」

1分足らずで巨人の全力疾走に追いついたフローラはアキレス腱にアンカーを撃ち込んだ!

双剣を構えてワイヤーを巻き取って見事に腱を削いだ!

アキレス腱が削がれた事に気付かない獣の巨人は躓いて、地面にうつ伏せで倒れ込んだ!

「まだ死ねないんだ!!」

ジーク・イエーガーは右目の再生が完了したと同時に巨人化を解除!

巨人の首元から蛇が脱皮するように滑らかに粘液を溢しながら巨体から脱出した!

両手を地面に付き、背を仰げ反って必死に立ち上がろうとした!

両膝を地面に付き、左足を地面に付きしやがんでいる状態に持ち直したがそれでも足りない!

「うおおおおおおおっ!」

ジークは雄叫びをあげて生暖かい濡れたズボンの感触も気にせず立ち上がった!
地面に落ちていた眼鏡を拾って平原を走り出した!

『諦めない限り負けていない』というミケの信念はジークにもあったのだ。

「ぐぎゃあああ!?!」

最後まで諦めずに走ったジークを汗血馬のライリーが蹴つ飛ばした!

無駄な努力ご苦勞様と言わんばかりにフローラは本日で最高の笑みを作った。

人権が存在しない人間など人権を守る必要が無いので、痙攣しているジークを見て満足した。

「どこに行く気ですか？あなたが行くのは裏切り者を憎んで地獄行きを決意した亡者の元ですよ」

フローラの指示でライリーは彼を蹴っ飛ばした！

ライリーがライナー・ブラウンを蹴っ飛ばそうとする度にフローラは必死に止めた！蹴るなら鎧の巨人であって、ライナーではないと何度も止めていた！

もちろん、人間を蹴っ飛ばすのは自分だけで良いとフローラは思っている。

ただし、獣の巨人の能力者は人権が存在しない為、除外した結果、馬に蹴られた！本当に蹴っ飛ばして良いのかライリーは困ったが、とりあえず全力で蹴っ飛ばした！

「ハイハイハイハイ」

悶絶するジークに更なる不幸が到来した。

ライリーが彼に向かって小便をしたのだ。

「ぶぼぼぼーぼーぼーぼぼ!?ごほおっほほ!?」

マニアックな男性は、女性の小便を浴びたり飲んだりして興奮するそうである。

あらゆる変態の中でも特に異端の存在であるが、そんな彼らもドン引きするだろう。

2歳児の少女の小便をジークは口で受け止めて飲み込んでいた。

それだけならともかく牝馬の小便を飲む変態プレイなど、彼らもしたくない。

こうして人類の中でも変態だったジークは更に変態になるという尊厳破壊をされた

!

「駄目じゃないの!存在する価値すらない産業廃棄物未満の汚物に小便をかけちゃ!」

フローラは産業廃棄物未満の存在に小便をかけるライリーを叱責した!

馬の小便が更に劣る汚物になる事に彼女は耐え切れなかった!

産業廃棄物ですら、そうなる前は誰かの役に立っているからジークはそれ未満の価値となった。

かつて、女型の巨人を足止めしようと提言したジャンに馬の小便で頭を冷やせと言った彼女。

実際に馬の小便を浴びてアへ顔を晒す男を見て『これが恐怖…』という嫌悪感を抱かせた。

「他愛もないわね…妄想の世界に逃げられるとでも思ってるの？」

フローラは、ライリーを安全な場所に避難させた後、悪魔の形相になって男に近寄った。

入浴時でもないのに何故か半裸のジークを一瞥し、軽く蹴って気絶しているの確認した。

「いつまで寝てる気なの！起きなさい!!」

「ぐふおっ?!」

そしてその無防備な腹に『二式刀身』というスナップブレードを突き刺した！

それだけでは物足りずに何度も捻り！内臓を掻き回した！

口から吐血して悶絶し痙攣するが、ジークはこの程度では死ねなかった。

悪魔ですらジークを哀れんで泣きつくほどの惨状ですらフローラは無表情で眉一つ動かさない。

「ぐほっ!! ああたっつ!! ああああ!!」

「何だ、まだ声が出るのね…ああ! 腹が立つ声ねえ!!」

「…っ!!」

余裕がありそうなジークの悲鳴を聴いたフローラは、もう一本の刃で股間を何度も斬り付けた!

初撃はズボン越しに股間に付いている玉袋を軽く切り裂いた!

第二撃目は、タマタマがタマ／タマになった!

第三撃目は、汚い棒を切断し、尿道を潰した!

第四撃目には、股間にある器官が肉塊どころか微塵斬りになってしまった。

ジークの粗末の物が更に粗末の物になった。

それでもこいつのせいで、アニを失ったと思えば込むフローラの怒りは収まらなかった

!

「ねえ裏切り者！『王様ごっこ』は愉しかったの？」

「!?」

「とぼけないでよ！両親さえ裏切ったあなたが天国に行けると思ってるの？」

フローラは、ジークの内情を知らない。

だから彼が両親を裏切った過去など知らないし、適当に言ってみただけだ。

しかし、ジークは両親を密告し、裏切った過去がある。

それは彼にトラウマを残しており、激痛のせいで声が良く聞こえたせいで更に絶望した。

「あら、両親を失望させた癖に裏切って見捨てたのね…ああなんてお気の毒な方々なのでしよう」

負の感情を“声”として聴けるフローラは、ジークにピンポイントで急所を抉ったと理解した。

彼女は、同期はおろか先輩や上官、中央第一憲兵団の対人立体機動部隊すら仲良くで

きる。

そんな彼女は、メンタルケアの達人として同期から一目置かれている。しかし、それはコミュ力でメンタルを容易に破壊できる実力者でもあるのだ。

「せっかくあなたの才能を見出して真心込めて育てたのに、この汚物は両親の想いを踏み躪つた……ああ、なんて生きている価値がない下衆野郎なんでしょう！血が特別だっただけの凡人が裏切つて勝ち取った未来……ねえ、飯が旨かったの？ご両親を裏切つて、恩人のおかげで立ち直れたつもりでいる糞野郎さん」

スラスラと適当な事を発言したつもりで、ジークの地雷を的確に踏み抜くフローラ。

当の本人は苦痛で動けず、巨人化するのも忘れて……ただ聞くしかできなかった。

むしろ、痛みのでいで鮮明に聴こえて心を抉つていった。

【驚異の子】と畏怖されて恐れられたジークも、本物の悪魔には勝てなかった。

「数少ない特技で他者より秀でているからって自分が特別な存在だと思ひ込んで、ちやほやさされて食べる飯は旨かったの？美味しかったんでしょね、さきほどまで楽しそうに兵士をいたぶつてる所を見ると、他者を裏切つても平然として生きていたんでしょ

？この図々しさだけは見習いたいものですわね」

ジーク・イエーガーは、目の前に居るのが「エルディアの悪魔」だと分かった。自分達が世界から差別される理由が分かった。

何故、自分たちが悲惨な目に遭って世界から弾圧されてきたのかが分かった。

ここにこんな悪魔が山ほど住んでいるなら、人類の敵になるのは当然である。

「おっ……おっ……」

ジークは、とにかく目の前の悪魔だけでも何として殺さないといけないと思った。肉体的にも精神的にもボロボロにされたが誇りはまだ残っている。

名誉マーレ人として最後に残った誇りで巨人化して悪魔を……殺そうとした。

「てっ……」

「いっ……いっ……」

巨人化になろうとしたジークの感情に気付かないわけもなくフローラは股間にブ

レードを刺した！

無情にもズタボロになった生殖器を破って大腸を破壊し小腸まで刃が到達した！

さすがにフローラもここまで刃が到達したのは分からなかったがどうでも良い事だった。

「さて、下準備は整えたし、これから本番に移りましょうか」

「なんで怯えるの!?…まさか、この程度で拷問だと思ったの？始まってすらないわよ!」

この瞬間、ジークの心は砕け散った！

フローラからすれば、料理を調理する為に包丁や鍋をキッチンに並べた感覚である。

まだ始まってすらいなかった。

さきほどまでの行為は、アニを失った悲しみで無意識でやっていた行為であった。

これからは意識して情報を訊き出そうとしたフローラは、既に怯える男に困惑した。

大怪我を自力で治せる巨人化能力者が「この程度の痛み」で屈するとは思わなかったからだ。

超大型巨人や鎧の巨人の情報を訊き出す必要があるが最悪殺しても身柄を回収すればいいだけだ。

責められたら抵抗して巨人化しようとしたので殺害したと……言い訳するつもりだった。

「初めての拷問をするけど覚悟は良い？合計7個やる予定だけど失敗したらごめんなさい」

フローラは優しい口調で、初めての拷問だから失敗するリスクを絶望したジークに伝えた。

まず気力を全て潰して巨人化させないようにしたので、ようやく尋問できる事に喜んでいる。

巨人化する際に発生する爆風で2回も酷い目に遭ったフローラは、それだけ警戒していた。

壁外でエレンが巨人化した時、ストヘス区でアニが巨人化した時の爆風の経験が活きていた。

そんな事を知らないジークは、ただ死刑台のギロチンが振り下ろされる死刑囚の気分だった。

「まずは、【戦士】というの…!?!」

ここでフローラは、ミケ分隊長の悲鳴で彼を置いてきてしまったのを思い出した。

現在、彼は民家の屋根に集まった複数の巨人に狙われている。

ゆつくりとジークを尋問するつもりだったが、上官を失う訳にもいかず諦めた。

「せっかくないい機会に巡られたのに…残念ですわ」

彼女は対人立体機動部隊のケニー隊長から教わった「7つの拷問術」を試すつもりだった。

例えば発目で全ての情報を吐いても、良い経験だからと全部の拷問を試すつもりだった。

もし、この現場をケニーが目撃すれば必死に制止したことだろう。

加減を知らない頭進撃娘は、人権が存在しないジークに容赦なかった。

「さようなら、髭もじやさん！来世は真っ当な人間になれると良いわね」

溜息をついたフローラは、残っていた火炎瓶をジークに向かって投げつけた。情報を訊き出す暇すらないなら、彼は用済みである。

着火した火炎瓶は、罪人を裁く業火のように彼を焼き殺そうと襲い掛かった！

「…っ!!」

声にならない叫びを出してジークは必死に火を消そうと転がり回った。

しかし投げつけられたのはガソリンである。

そう簡単に火を消せたら扱いに苦労しない。

気化したガソリンが引火して更なる爆発で彼の体表を破壊した！

「ライリー？どうしたの？」

ライリーは、今までのフローラの行為を目撃しておりドン引きした。

そして何事もなく気持ちを瞬時に切り替えていつも通りに話しかけてきたのに戸惑うしかない。

彼女からすれば、いつまでも感情に引き摺られるつもりはないのでそうしただけだ。

アニ・レオンハートの仇も晴らせたので、いつもより楽しそうに話しかけた。これでアニへの気持ちに一区切りついて普段の頭進撃モードに戻っただけである。

「妙に大人しくなったわね…嬉しい事だけど…」

ライリーは必死に走った。

目指すは、ミケ分隊長が居る民家！

ミケの救出を急いだフローラは、ジークが死ぬのを目撃しなかったのを後悔する事となる。

そして復讐チェックリストに獣の巨人が追加されたのは言うまでもない。

「い、生きてる…」

ジーク・イエーガーは奇跡的に生還できた。

気が付けば夕方になりそうである。

どれだけ寝ていたか分からないが股間と腹に刺さった刃が地面に落ちていた。ここで、内臓と股間が集中的に焼かれていたと分かってしまった。

「ひ、ひ…」

近くに男の兵士から回収した『変な装置』が落ちていた。

彼は立ち上がってそれを回収した後、必死に走って逃げた！

この地に送り出した戦士4名が何故、5年経過しても一度も帰還しなかったのか理解できなかった。

嫌ほど肉体的にも精神的にもエルディアの悪魔に分からされた！

ここは人間が来て良い場所ではなかったのだ！

「おうち帰るうううう!!」

ジークは、夜の帳が降りそうな頃に部下達が待つ集合場所に辿り着いた。

部下の1人であるピーク・フィンガーは異変に気付いた。

ジークの脊髄液を含んだガスをばら撒いていた特殊部隊の班員たちも異変に気付い

た。

彼が全裸で両手に良く分からない物体を持って帰還してきたからだ。

「ピークちゃああああああん!!」

「ちよ!何事…いやあああああ!?!」

全裸で焦げ臭いジークは、ピークの顔を見た瞬間、泣きながら彼女を押し倒した!まさかの乱心に止めに入るマーレ兵たち!

ピークは戦士長に押し倒されて抵抗するのを忘れてしまったくらい恐怖であった。

「この地は…!やべえ悪魔が住んでる!!早く逃げないと皆殺しにされるぞおお!!」

「は、はあ!?!何言ってるんですか!?!」

「マジで殺されかけた!!早くこの地から脱出しないと殺されるうううう!!」

ジークはフローラの微笑んだ顔を思い出して脱糞した。

巨人化能力者は欠損した身体は、勝手に再生する。

しかし例外があり、排泄物だけは再生しない。

残っていた大便と下痢状の液体が恐怖でガバガバになったジークの菊門から排出された。

その生暖かくて生み立てほやほやの臭い大便がピークの脚を汚した！

「戦士長が乱心したぞ?!」

「おい、引き離せ!!」

「くせえ！マジ臭い！だからエルディア人は糞なんだよ!!」

「げえ！大便どころか小便まで漏らしているぞ!!」

「触りたくねえ…」

必死にピークの胴体にしがみ付くジークを引き離そうとするマーレ兵4名。

再び悪魔の地に戻されると悟った彼は、更に小便を漏らしてピークの胴体を濡らした

！

脚を大便に、胴体を小便で汚された挙句、全裸で抱かれたピークは泣くしかできなかった。

「あいつら『ユミルの民』じゃない！冗談抜きで人の皮を被った悪魔だ!!」

「戦士長！離れて!!いやああああ！これじゃあ…お嫁さんに行けない!!」

「戦士長！お気を確かに！」

「俺は正常だああああああ!!」

こうしてピーク・フィンガーは誰かのお嫁さんになる事ができず、人生を終える事となる。

彼女がその未来を予知したのは分からないが、少なくとも余命は短いのは確かである。

マーレ兵がジーク戦士長をピークから引き離れたのは、その30分後であった。

「ピークちゃん…まだ怒ってる？」

「【うんこ漏らし】の戦士長、任務以外で話しかけないください」

着替えたピークは、ジーク戦士長に失望して、彼を「うんこ漏らし」と呼ぶ事にした。公式の場でも、上官から咎められても、彼を英雄している民衆の前でもそれ以外で呼ばなかった！

彼女は死ぬまでジークの名前をそのあだ名で呼ぶことは言うまでもないだろう。

64話 サシヤと少女の出会い

ミケ・ザカリアスは、困惑していた。

かつて調査兵団でリヴァイ兵士長に次ぐ実力者と揶揄されていた。

しかし、本物の化け物を見てしまうと、自分は凡人なのだな……と思ってしまった。

リヴァイ兵士長の実力に感嘆としていたが、訓練兵時代から壁外で任務を遂行していたフローラ。

そんな彼女が男物の下着とズボンを持ってきたのを見て何とも言えない気持ちになつた。

「どこからそれを持ってきたんだ？」

「下にある民家から持ってきました」

堂々と窃盗を告白するフローラ。

彼女は、ミケに襲い掛かろうとする2体の巨人のうなじを削いだ後、民家に侵入した！

巨人が倒れて破壊された場所から入れば良いのに堂々とドアを蹴破って窃盗犯罪を行なった！

当然の様にダンスから男の下着とズボンを盗んできてミケに渡そうとしていた。

まるで兵士なら多少の略奪行為を黙認してくれるだろうという感情で動いていたようだ。

「元の場所に返してきなさい」

「…了解しました」

即刻却下されてしまい、しぶしぶ返却しに行くフローラを見送ったミケ。

行動力はあるが何かズレている彼女、だからこそ誰とも仲良くなれるのかもしれない。

彼は獣の巨人のせいで尊厳破壊されてしまい、大便を漏らした事を彼女に知られてしまった。

彼女からすれば、死体や内臓、排泄物などいくらでも見てきたので気にしなかった。

ただ、男としてのプライドがそれを許さないし、調査兵団の尊厳にも関わってくる。

だからこそ、フローラは下着とズボンを渡そうとしたが無理だったので代案を考えて

いた。

「とにかくライリーが分隊長を乗せられるようにしないと…」

近くに馬が居ない以上、ミケ分隊長をライリーに乗せる必要がある。

しかし「彼女」は人見知りで認めた人しか騎乗させないタイプのせいで困っていた。

最初、ミケをライリーにコンタクトさせたところ、かなり嫌そうな顔をした。

『こんな奴を乗せるの!?!』と馬の感情など分かるわけがないのにそんな感じに見えてしまった。

「この民家の避難ルートは……ここね」

ウォール・マリアが陥落した教訓で、ローゼの壁内は避難訓練がされていた。

この地図を見ると、一度近くの村に集合して馬を借りてエルミハ区に避難する手筈になっていた。

幸いにもライリーならすぐに辿り着ける場所だった。

借りようとした物を返却した後、速やかに屋根の上に戻ったフローラは事情を説明！

むりやりライリーに自分とミケ分隊長を乗せて近隣の村に向かって走らせた!

彼の下着は捨てたし、尻とズボンの汚れは拭いてあるし、香水をかけたので大丈夫だと判断した!

「いいのか?」

「はい、なんででしょうか」

「漏らした俺を乗せて…」

「ああ、大丈夫です。さつき獣の巨人とかいう汚物を焼いてきてスカツとしましたので…」

ミケ分隊長は会話が成り立っていないとは分かったが乗せてもらっているので指摘できなかつた。

ただし、自信満々に返答した彼女の事だから、本当に獣の巨人を焼いて来たのだろう。唯一拝借してきた地図を覗いている彼女に対して、何て答えればいいか迷ってしまった。

「あの毛むくじゃらは何だったのだろうか…」

「エレンと同じ巨人化能力者ですよ…巨人の王様みたいな態度でしたけどね」

「ああ、そうか…」

「ミケ分隊長以上に尊厳破壊して股間と両目を潰して焼き殺してきたので安心してくだ
さう」

最後の一言でミケは冷や汗を掻いた。

エレンと同じ巨人化能力者か…と頷いていたら背筋が凍るほどの冷徹な一言に聴こ
えた。

ここで本当にヤバイのはこの女ではないか…と思ってしまった。

頼もしそうな背中が、本当は恐ろしいものではないかと錯覚してしまうほどに…。

『それもしかたないのか…』

ただ、シガンシナ区出身なので巨人を憎んでいるからと思うしかなかった。

骨折した自分に慣れた手つきで包帯を巻いて副木を固定した彼女。

「骨折には慣れてますので…」と優しく微笑んだ彼女を記憶喪失まで追い込んだ鎧の巨
人。

それは、彼女の両親の仇であり、数少ない記憶であった。

彼女が兵士になったのもその影響があるので巨人に過剰に攻撃的なのは仕方ないのかもしれない。

しかし、ミケは迷った。

フローラの同期で巨人化能力者の可能性があると言言すべきかと。

「見えてきました！」

フローラは、目標の村に到着した！

まだ避難が終わっていないらしく住民たちが集まっていた。

つまり、まだ馬は出発しておらず、兵士だから優先的に馬に乗れるだろう。

「ミケ分隊長!?!ご無事でしたか!」

「ダイムラーさん!ミケ分隊長が腕を骨折!馬もやられました!予備の馬を借りたいです!」

「ああ、分かった!すぐに手配しよう!」

調査兵団の第一分隊所属の兵士が居た。

これでミケ分隊長の馬を手配すると同時に彼を押し付けることができた。

もちろん、彼の巨人を感じする嗅覚を失うのは痛手である。

それでも、さきほどからライリーの機嫌が悪いので同行してもらうのは諦めた。

「フローラはどうするんだ？」

「近くに同期の故郷があります！一度そちらに寄ってからエルミハ区に帰還する予定で
すわ！」

「分かった…気を付けてな」

「はい！行ってきます！」

フローラの同期であるサシャ・ブラウスはダウパー村出身である。

ミケ分隊長の出会った場所から北上して村に辿り着いたが、更に北西に彼女の故郷があつた。

上官らしさを取り戻した彼の氣遣いにフローラは感謝して、ライリーを走らせようとした！

実際は、これ以上やらかすなよ…という意味合いがあつたが彼女が気付くことは無

かった。

「おいフローラ！サシヤという新兵が奥の森に向かったぞ！」

「いつ頃ですか!？」

「20分ほど前だ！俺達と別れて更に馬を走らせていった！」

「ありがとうございます！」

20分ならずすぐにサシヤに追いつける。

ライリーのスペックは桁違いの上に巨人と交戦できるので最短距離を通過できるのが大きい。

全速力で進撃する彼女を見てミケ達は、巨人を全滅させるまで帰ってこないだろうと感じた。

負傷したミケからスナップブレードを補充し、兵士からガスの残量が半分のボンベを交換した。

つまり、フローラはまだ交戦する気満々だった。

頭進撃娘を見送った後、避難してきた住民をエルミハ区に護送するべく彼らは動いた。

人生で最も働く日はまだ始まったばかりなのだから。

サシャ・ブラウスは、故郷であるダウパー村に帰還するのは3年ぶりである。

第57回壁外調査の前に調査兵は故郷に帰還して両親や世話になった人に挨拶した。もしくは、リヴァイ班のペトラ・ラルのように最低でも手紙を出している。

サシャは、特にそういう事はやらずに食堂で食事を愉しんで適当に特訓していた。狩人で一人前になるまで認められないという風習もあったが、父に顔を合わす気がなかった。

兵士になって巨人と交戦するどころか、トロスト区で逃げ回るしかできない臆病者。かつて父に臆病と見抜かれた以上、立派になるまで帰ってくる気は無かった。

「そんな…」

サシャは道中で、巨人の足跡を発見した。

獣の足跡は歩幅で大体の全長を予測できるが巨人は経験がない為、何とも言えなかつ

た。

一応、座学で人間の歩幅は、身長半分未満というのは習った気がするがよく覚えていない。

経験で覚えるタイプのサシャは座学が苦手であった。

ただその足跡が複数で3m級から10m級の巨人が多数居るといのは分かる。

「……まで巨人が……奇行種？それとも……」

この付近はウォール・シーナの西部の城壁都市ヤルケル区に近い場所だ。

巨人は近くの間人を襲うので、ここまで来るのは必然的に奇行種になる。

こんな内地に近い場所まで巨人が侵攻している事を足跡が示しており、おそらく故郷も……。

「どげーしようもねえやつちゃ……まだ見てもしんというのに……」

サシャは勝手に悲観的になった絶望している自分を奮い立たせた！

思わず『なまり』が出てしまったのは故郷に近いせいか。

ただ言えるのは、以前の自分とは違うところか。

『あれは新しい村？』

既にここは人が暮らしていける環境ではない。

察しの良い父はみんなを連れて逃げ出していると思うが、他は違う。

もしかしたら逃げ遅れた住民が居るかもしれない。

サシヤは、生存者を確認する為に知らない村へ向かって馬を走らせた。

カヤは村に取り残された。

巨人が出現したと狩りで遠征していた猟師の話で瞬く間に村に混乱が発生した。

彼女は母親を連れてもらう為に懇願したが、村の住民は彼女たちを見捨てて逃げ出した。

足の不自由な母親と少女を連れて行く暇がなかったし、なにより馬が足りなかったからだ。

誰だって自分の命が惜しいし、足手まといを連れて追いつかれて全滅するよりはマシだった。

「に、逃げて…」

カヤは俯いて家に帰ると母親は既に巨人に喰われていた。

先に内臓を喰われて右脚も噛み付かれて生きたまま咀嚼されている。

シヨックのあまり少女は、その隣に座り込んで呆然としていた。

必死に逃げる様に娘に小声で話しかけているが、もともと病弱のせいで声が全く聞こえない。

『誰も助けてくれないならそのまま死んだ方が良いかも…』

父親は5年前に死んでおり、母親は病気で動くことができず村の住民がお情けで助けてもらった。

それも今日で終わり、生きていく気力はなくなっただろうか。

すぐそこで巨人に母親が喰われているのに少女は動くことはなかった。

3 m級の巨人も少女の存在に気付いており、何度も見ているが獲物を食べるのが先のようにある。

こうして、また1人犠牲者が増えようとしていた。

「…?」

近くで物音がしたと思ったら、何か声が聴こえてきた。

既に近隣の住民は見捨てて逃げ出したのに居るわけがない。

そう思っていたのに誰かが助けてくれるのを祈っている少女。

そんな彼女の願いは天に届いたのか。

「うああああああ!!」

サシャは切り株にあつた斧を手を取って中年女性を食べている巨人を強襲した!

必死に何度もうなじに斧を叩き込んだ!

叩き斬つて巨人を討伐しようとするが、全く効果が無い様に感じられた。

サシャ自身、訓練された兵士であり女性陣ではミカサに次ぐポテンシャルがあつた。

それでも、うなじを斬る事ができなかった。

スナツプブレードは巨人のうなじを削ぐのに特化するまで多くの血が流されてきた。そう簡単にうなじを斬れたら巨人は脅威ではないのだ。

「ああつ！」

手を滑らせて斧があらぬ方向に刺さってしまった。

取りに行こうとすれば背後を巨人に見せてしまう。

サシヤは近くにいる少女の手を取って立たせて家から脱出した。

既に母親とみられる中年女性の腹から腸が飛び出しており助からないと分かったからだ。

必死にサシヤは少女の手を取って、柵に留めている馬に向かって逃げ出した。

少女の母親はそれを見届けて力尽きた。

「あなたの名前は？」

サシヤが少女の名前を問うが返答は無かった。

さきほどまで母親が喰われていてシヨックを受けているかもしれない。

そもそも中年女性の様子がおかしいから逃げなかったのか。

少女が話してくれるまで分かるわけが無かった。

「もう…大丈夫ですよ」

「何が？」

「え、えっ!？」

安心させようと根拠が無いのに「大丈夫」と告げると少女からツツコミが入った。

さすがにサシヤは予想できず手に取った手綱を思わず放してしまった。

すると馬は走り出してしまった。

「そ、そんな！待って！嘘でしょ!?!待ってくださいよ!!」

必死にサシヤが指笛を鳴らすが、馬は逃げ出したまま帰ってくることはなかった。残されたのは私服を着たサシヤと、母親が今さつき死んだカヤだけである。

「なんでそんな喋り方なの？」

「えっ？」

少女が他人事のように告げてくるのを聴いてサシャは判断に困った。

本当に彼女を助けるべきだっただろうか。

見捨てて故郷を周った方が良かったのではないか。

サシャは分からなかった。

だが、2人だけしかいないと思っていたが、もう1体居た。

「ああっ……」

獲物が死んだのを感じた3m級の巨人は、新たな獲物を探しに家から這い出てきた。

狙うのはロングスカートを履いたサシャか、薄着の寝巻のような物を着ているカヤか。

それは分からないが、このままでは逃げ切れないのは2人は理解した。

「もう……調査委兵団の馬なんですから、あんな3m級にビビらないでくださいよ……」

巨人を前にして震えながらもサシヤは必死に武器になりそうな物を探した。すると都合よく弓と弓矢の束を発見して頂戴した。

こんな物が役に立つわけがないが視覚を潰せば足止めはできる。

「さあ走ってください！」

「何で？みんな逃げちゃった…お母さん足が悪いの知ってたのに見捨てて逃げたの」
「私は貴女を見捨てません！絶対に巨人から逃げきつてみせます！」

サシヤが思い出したのは訓練兵時代のやり取りである。

ユミルとクリスタに自分の丁寧語を指摘されて苦笑していたあの頃。

まだ希望があり、樂觀視していたわけじゃないが充実した3年間。

巨人に喰われるかもしれないというのに楽しかった訓練兵時代の記憶があふれてきた。

まるで走馬灯のように感じられた。

『なんで…ここでこんな時に…いつもの日常ばかり思い出すのかな』

必死に走って逃げても3m級の巨人から逃げられそうもなかった。だからといってそのまま喰われるほどサシヤは諦めてなかった。

「聞いてください。この道を走ってください。決して後ろを振り返らず走り続けてください」

サシヤは巨人を討伐した事が無い。

ガスの補給をする為に兵団本部で巨人と交戦した時は、巨人のうなじを削ぎきれなかった。

確かアニとミカサに加勢してもらって討伐してもらった。

狩人と失格であるが、それでも彼女は少女を護りたかった。

「貴女を助けてくれる人が必ず居る。すぐに逢えないと思うけど、それでも逢えるまで走って！」

カヤは、頑張って作り笑いをするサシヤが印象的に見えた。

自棄になった自分を助けてくれて今から巨人と戦う女性が記憶に残った。

もしかしたら彼女が巨人を倒してくれると思いい、踏み留まりたくなるほどに安心してしまった。

「ざあ、行って！」

サシヤは名も知らない少女の手を放した。

彼女が見据えるのは、口を開けて手を伸ばして追って来る3m級の巨人である。

久しぶりである弓を構えて巨人に向かって狙いを定めた！

「走らんかい!!」

サシヤの怒声でカヤは必死に走った。

辺りを見れば巨人がうろついでおり、もし助けてくれた人が巨人を倒しても新手が来る。

それでもあの人合流してくると信じてカヤは走り続けた。

「あっ……っとうー！」

石に躓いて転んでしまったがそれでも必死に立ち上がって走った。

自分を助けてくれる人に逢えると信じて走り出した。

何分経ったのだろうか。

代わり映えがしない景色、相変わらずの曇り空、更に増える巨人。

カヤは、分かっていた。

自分を助けてくれるのは、あの女性しか居なかつた事を…。

「ライリー！・ダウパー村はまだ先よ！」

諦めかけたカヤの前方から騎兵が1名出現した。

さつき逃げ出した馬より一回り大きい赤い馬と双剣を構えている緑のフードを被つた兵士。

これが自分を助けてくれる人なのかは分からないが、少なくとも人には逢えた。

「向こうに…！」

必死に少女は腕を振って、さっきの女の人が向こうに居るのを告げた。声にならずにジェスチャーするだけで精一杯だったがなんとか伝わったようだ。

「…そう、まだ生存者がいるのね」

フローラは生存者に遭遇するのは想定外だったが、遭遇した以上、見捨てられなかった。

幼い少女が5年前の自分の姿を彷彿させて他人事じやなかったのもある。

“声”を聴くと少女の悲痛な叫びと、サシャの必死な覚悟が聴こえてきた。

「貴女も一緒に来なさい」

フローラはライリーに少女を乗せた。

ライリーからすれば重みが増えた上に赤の他人が乗るのは苦痛だった。

ただ、ジークを颯り殺しにしようとしたフローラの姿をはっきり見届けたので黙って走り出した。

動物には人間と違って感情が分かりにくい、絶望と怒りは理解できる。

少なくともフローラが激怒していたので振り落とすと碌な事にならないのは理解していた。

「良い？手綱を絶対に離しちや駄目よ？分かった？」

「うん」

「それならいいわ」

少なくともライリーという馬は巨人より遥かに速い。

逃げに徹すれば追いつかれることは無いだろう。

「ハアハア…返り血のおかげで助かった…」

巨人の片目を潰したサシャであったが、それで油断してしまい巨人に抱擁された。

とてつもない力で潰されそうになったが、さきほどの斧で傷つけた傷から垂れた血で

助かった。

巨人の熱い血が潤滑油代わりになって何とか抜け出す事に成功した。

「あの子は…!?!」

ここでサシヤは巨人が1体だけじゃないのを知った。

道中で複数の巨人が居るのは足跡で分かっていたはずだ。

それでも前しか見ていなかったせいで周りを見るのを忘れていた。

「ははっ…これじゃあ逃げられないじゃないですか…」

軽く見渡しただけでも8体の巨人がうろついているのに気付いてしまい笑うしかなかった。

少女を逃したつもりで死地に送り込んでしまった。

これなら適当な民家に隠れて居る方がマシだった。

「何をしてるの?」

「逃げようと思ったんですが、どうやって逃げて良いか分からないですよ」

「走って逃げれば良いじゃない」

「簡単に言ってくれますね…フローラ!」

他人事のように話しかけてくるフローラ。

確かに巨人の戦闘経験がある彼女ならたった数体の巨人に怯えるのは可笑しく感じるだろう。

ただし、巨人を瞬殺できる彼女はともかく自分は未だに巨人を討伐した事が無い。

さっきの巨人も左目を射抜いて、残った右目を矢で突き刺して逃亡してきた。

だからこそ、走って逃げれば良いという答えにサシャは反論しようとした。

そこで、フローラがこの場に居るのに気付いた。

「フローラ! 何故ここに!?!…それより子供を見てませんか?」

「あの子ならわたくしの馬に乗せたわ」

「えっ…あの暴れ馬に乗せたんですか…?」

「何故か今日は大人しくてね…ほら、あそこでじっとしてるわ」

一瞬フローラから殺意を向けられたと思ったサシヤ。

だが、どちらかという逃げ出そうとした馬を睨んで牽制したような感じがした。もしかしたら気のせいかもしれないし、巨人を睨んでいたのかもしれない。

とにかく巨人を倒せる実力者が居るといふ安心感がサシヤの精神を回復させた！

「私が巨人の注意を惹きます！その間に奴を倒して……しまったのですね……」

サシヤは子供を護るために積極的に囷になろうとしたら、既に巨人が蒸気を出して倒れていた。

頭進撃が巨人を見逃して会話を黙って聴くわけがなかった。

勇気を振り絞って発言した彼女は拍子抜けしたが、フローラがいるだけで空気が変わった。

これには必死に手綱を握っているカヤも驚くしかない。

あれほど得体のしれない化け物があっさり人間に負けたからだ。

「助かりました！ありがとうございます！……」

「じゃあ早く逃げましょう」

「巨人を殲滅しないんですか？」

「ブレードとガスの補充ができないならどうしようもないわ」

助太刀を感謝していたサシャは、てっきりフローラは巨人を殲滅するかと思った。

ガス切れを経験しているフローラは、そこまでやる気は無かった。

いくら巨人を討伐してきてもガスと刃がなければ戦えない。

もちろん、補給し放題だったらいくらでも狩る気ではいたが！

「逃げ遅れた人が居ないか探さないんですか？」

「少なくともこの村には居ないわ」

実は村の北部にある丘で数十名が居るのをフローラは知っている。

しかし、そこに行くのは馬が必要であり、必然的にサシャたちを見捨ててしまう事になる。

既に巨人の群れに追われていて“声”が少しずつ減っていた。

だったら、見捨ててサシャたちだけでも安全地帯に誘導したかった。

「どこに逃げるんですか!？」

「この村の東部にある橋を渡って林道に向かうわ」

「なんかあるんですか？」

「大群の馬を連れた集団がそこに向かっていたので合流しようと思うの」

とにかく足が欲しいので彼らと合流するのが最優先である。

馬さえあれば何とか逃げ切る事ができる。

村の住民と思われる集団は切り捨ててフローラは逃げに徹した。

「なんかフローラらしくくないですね…いつもなら巨人を駆逐するって言うと思うんですが…」

「個人じゃ出来る事なんて限られるわ…早く行きましょう」

フローラは助ける命より見捨てた命が多かった。

トロスト区の4人家族や100人以上の同期。

カラネス区にあと一步で落馬して巨人に喰われた先輩。

ストヘス区では、急いで止血すれば助かった少女。

個人ができる事など限られているのを嫌でも実感していた。

「そんな…巨人が集まり始めてます…！…囲まれる前に討伐して逃げ道を確保しましょう！」

「簡単に言ってくれるわね…」

フローラはとにかくこの場所から逃げ出したかった。

巨人が自分達の存在に気付いて集まって来ている。

そう、さつきから相手にしているのは奇行種ではなく通常種だった。

通常種なら壁付近の集落を狙うはずだし、こんな所まで短期間で来れるわけがない。

彼女が危惧していたのは、巨人が壁内で自然発生したという点だ！

もし、それが事実であれば逃げきれなければ全滅するだけである。

「強行突破よ！サシャはライリーの手綱を握って移動して！討伐したら橋まで走るわよ！」

「分かりました！」

サシャが手綱を握ったのを確認したフローラは双剣を構えて巨人に突撃した！
幸いにも【変異種】ではないので初手でうなじを攻撃して討伐できる相手だった。

「行くわよー！」

フローラの存在に気付いて手を伸ばして駆け出した巨人の左アキレス腱を斬って離
脱！

もう1体の7m級の巨人のうなじを削いだ後、倒れ込んだ巨人のうなじを削いで終わ
らせた。

「これで何とかこの場を切り抜けられそうですね」

「…そうね」

巨人が討伐された事でサシャやカヤの歓喜と対称的にフローラの気持ちは暗かった。
さきほどの攻撃でスナツプブレードが4本使い物にならなくなった。

専用装備のブリッツメツサーと違って、うなじを削ぐのに特化している刃。
アキレス腱を斬るだけで2本折れてしまった。

更に2体目を討伐した瞬間、刃が欠けてしまい捨てるしかできなかった。

「残り8本か…きついわね」

フローラが積極的に巨人を殲滅する気がない原因がこれだった。

『二式刀身』という比較的、質が良いブレードを使用しているが折れやすかった。

特に根本が折れたらどうしようもないので何度も捨てていた。

「橋の周りに巨人が!?!」

「この忙しい時にいいいい!」

サシヤは目の前の橋に出現した巨人の群れに慄いていたがフローラはそれどころじゃなかった。

後方からも巨人が来ていた。

付近には住宅どころか樹木すらなく柵しかなかった。

さすがに守り切れないのでサシヤをライリーに乗せて子供と共に逃げてもらった。

しかし、更に事態が悪化した。

「右方面から兵士の一団が見えます!!」

「1個班…5名ね」

別方向から味方部隊が出現した。

それだけならありがたいが、どう見ても巨人の群れに追われていた。

既に1名吹っ飛ばされて生存者が4名となっている味方部隊。

巨人10体を同時に相手にしなければならぬ残酷な状況である。

「ライリー!走って!!」

フローラの号令で子供が乗ったライリーを走らせた!

「あのー私はどうすれば…」

「とりあえず巨人の動きに注意して逃げてくれればいいわ」

サシャを乗せる暇がなかったが、仕方が無かった。

逃亡を諦めたフローラは、巨人をまとめて相手にするつもりだった。

「かかってきなさい！相手になってあげるわ!!」

まず、少しでも味方が欲しいので、フローラは巨人に追われている部隊の救出に向かった！

幸いにも向こうから巨人と共にやってくるので馬は必要なかったのもある。

65話 臆病な男と頭進撃の女 VS 双頭の変異種

ダズ・ウイズリーという男は臆病である。

ウォール・マリアが陥落して以降、世間では兵士に志願しないと白い目で見られる様になった。

彼は周りに流されるタイプであり、幼馴染や数少ない友人と共に104期訓練兵団に入団した。

結果は散々でキース教官に叱責される度に突発的に自殺衝動が出るほど精神的に不安定だった。

そんな彼も定期的に医務室送りとキース教官に叱責されるのがノルマな女のおかげで立ち直れた。

『フローラ・エリクシア！貴様は問題を起こし過ぎる！！訓練兵団を除隊してもらおうぞ！！』
『分かりました…最後にお世話になったキース教官を気絶させてもいいですか？』

『…大した自信だな！もし私を気絶させる事に成功したら除隊処分を取り消してもいいだろう』

『…良いんですか？』

『良いだろう！貴様の様な小娘はあつつ!?…は…あつ…』

ある日、立体機動で巨人の模型を攻撃する訓練で、立体機動装置を爆発させたフロラ。

ガスボンベじゃなくて立体機動装置を爆発させるという前代未聞の事故を引き起こした彼女。

当然、キース教官は、見慣れてしまった血塗れの問題児を叱責し除隊処分をしようとしていた。

しよげた彼女は、腹いせでキース教官に一矢報いる気満々だった。

それを見た彼は、完膚なきまで根拠のない彼女の自信を潰す為に失言をした。

その結果、彼女のハイキックで顎を強打し脳震盪で倒れた鬼教官。

『キース教官!?!嘘でしょ!?!この程度で倒れないでください!!』

まさかこの程度で倒れるとは思ってなかったフローラは泣きついて教官を看護した。余計な事をするな…と医務室から放り出されたりしたが結局、彼女は飯抜きと左手骨折で済んだ。

そして特定の角度でアンカーを巻き取ると想定の30倍以上の負荷が掛かる事が検証で発覚。

フローラがやらかした事故のおかげで立体機動装置が改良されて、調査兵団の事故死が減った。

リミッターを外した制限から開放されたリヴァイ兵士長が一騎当千の活躍ができるようになったのは別の話。

功績を表彰された時のフローラとキース教官の筆舌に尽くしがたい顔は、ダズには印象的だった。

「やっぱ、あいつは特別だったんだな…」

フローラは才能のある特別な人間だから調査兵団に行っても活躍できるんだ。

それと比べて自分は臆病で、なんとか生き残る事で精一杯の男に過ぎない。

せいぜい巡回任務が見張りか、掃除くらいしかできない凡人だとダズは思っていた。実際、自分の実力を把握して役割に徹する事ができる者は少ない。

ダズは、彼なりに壁内人類の役に立とうと日々の任務をこなしていた。

「ダズ！緊急招集だ！速やかにウォール・ローゼの見回りに行くぞ!!」

ダズは駐屯兵として毎日のノルマをこなして平凡な人生を終えるつもりだった。そんな彼の願いは打ち砕かれた。

「何があつたんですか…?」

「壁内に巨人が侵入してきたという情報が入った！住民を避難させるぞ！」
「えっ…」

先輩からの話を聴いてダズは目の前が暗くなった。

50mの壁を巨人が乗り越えてくるのはカラネス区の件で聴いていた。

しかし、100年以上人類を護り抜いた強大で頼もしい壁。

それが突破された。

「わ、分かりました。せめてトイレに行かせてください！」

「これが許可証だ！30分後に『ローゼの扉』に集合せよ！」

「りよ、了解しました！」

先輩が立ち去った後、ダズは吐いた。

彼の脳裏に浮かんだのはトロスト区防衛戦の光景だった。

誰もが助けを求めている絶望したまま痛みを伴って死んでいった。

特に自分に助けを求める4人家族を見つけた時、助けられたのにフローラの意向で見捨てた。

それが自分と家族に投影……どちらかというと被害者側に置き換えられた。

ダズと妹と両親が兵士4人組に見捨てられて巨人に喰われる光景を思い浮かべてしまった。

「死んでいた方がマシだったのか……？」

ダズには分からなかった。

フローラがどうしようもない自分を助けてくれたのか。

こうして生きているので感謝はしているが、自分でも助ける価値などないと思っ
てい
る。

それでも彼は兵士として任務をこなすつもりだ。

家族を守るために兵士になった以上、やけくそでも良いからやるつもりだった。

「ダズじゃないか！」

「サムエルか…もう大丈夫なのか？」

「まだリハビリ途中だけどこうやって門衛はできるよ」

サムエル・ナスヴェッターは、ダズと同じ南方訓練兵団104期生である。

唯一、トロスト区で地獄を見ずに生還できた人物でもある。

超大型巨人が出現した時に噴出した蒸気で飛んできた物で彼は頭を打って気絶した。

そのまま落下した時にサシヤのアンカーが足に突き刺さって、辛うじて落下死を免れ
ていた。

そして彼女に運ばれた後、トロスト区の外に移動したので1人だけ安全地帯で治療さ

れていた。

「本当に大丈夫なのか？」

「同期のみんなが必死に戦ったのに自分だけ戦線離脱したのを後悔していてね……」

負傷兵になったサムエルはトロスト区防衛戦から外されて安全地帯で治療を受けていた。

そのせいで生還した同期の中で疎外感があった。

彼は死んでいった同期の分まで兵士として全うする気である。

それを見たダズは、彼の真面目と覚悟を見て自分に悲観的になってしまった。

「駐屯兵団第一師団精鋭班が巨人の戦闘を行なう！諸君らは住民に避難を呼びかけろ！」

「中隊長殿！住民はどこに避難させればいいのでしょうか!？」

「各班の班長に知らせている！班長の指示に従って迅速に行動せよ！」

「ハッ！ハッ！」

駐屯兵团のお偉いさんが『ウォール・ローゼ住民避難作戦』の指揮をしていた。ダズは未だに他人事に感じており、班長の指示を聞いていても事実だと受け入れられなかった。

誤報とか訓練だと思い込みたかったのかもしれない。

しかし、ダズはこれが現実で起きている事だと実感する光景が目に入った！

「巨人だああああ!?!」

馬に跨ってトロスト区から飛び出してきて30分も経たないうちに巨人が見えてしまった。

悲鳴にも感じられる兵士の叫びから巨人が壁内に侵入していると嫌でも実感できた。

「街道を死守せよ!ここを奪われたらトロスト区が陥落するぞ!!」

「先遣班は交戦せよ!」

「交戦って…平原じゃ立体機動に移れません!!」

「壁に誘導しろ!とにかく街道から巨人を引き離せ!!」

ウォール・ローゼの最南端トロスト区と内地の最南端のエルミハ区を結ぶ大きな街道がある。

そこはウォール・ローゼの動脈であり、ここを喪失すると事実上人類は敗北する。物資や兵器、兵員を輸送するどころか避難民すら誘導できなくなるからだ。

「クインタ区の教訓を生かせ!!」

「もうすぐ援軍が来る!それまで持ち堪えろ!!」

かつてウォール・マリアの最西端のクインタ区で籠城した結果、犠牲を増やしただけで終わった。

巨人を誘導する為に作られた城壁都市は、せいぜい川で魚を釣るしか食料を自足できない。

更に補給が断たれて兵士達は暴走するし、更に退路が巨人だらけになってしまった。最終的に籠城を諦めて住民を脱出させたものの大半が巨人の餌で終わった。

ウォール・ローゼの最西端であるクロルバ区に逃げ込めた難民は、7人と公式記録に記された。

今回も同じ過ちを繰り返してはならないと駐屯兵団の士官たちは必死に街道を死守

する気だった！

「ダズ！いいか！俺達は住民を避難させるだけでいい！」

「分かってますよお！」

ダズは班長と共に必死に馬を走らせた！

後方では悲鳴や断末魔の叫びが聴こえてきたが振り返ることは無かった。

5名で交互に確認し合う事で死角から巨人が飛び出してくるのを防いでいた。
何時間馬を走らせたか分からなかった。

「村が見えるぞー！」

「ここはどこだ!？」

「ノーデンベック村です！開拓地拡大で作られた急造の村です！」

「行くぞ!!」

班長の指示に従って班員たちは馬を走らせた！

しかし、彼らはいくつかのミスをした。

「巨人が来やがった!!」

「逃げろ! 逃げるんだ!!」

村の住民を避難させる事に意識し過ぎて確認を怠った。

そのせいで民家の影に隠れていた四足歩行をする大型巨人に見つかってしまった。

巨人は馬よりも遅いので引き離せば逃げ切れるはずだった。

調査兵団の馬ではの話であるが。

「ぎゃあああああ!!」

巨人に追いつかれて兵士が片手で潰されてしまった。

彼らは、あくまでも住民の避難が任務だった為、普通の馬を連れてきてしまった。得体のしれない化け物が地鳴りと共に襲って来るのは人間でなくても恐怖である。

たちまち馬はパニックに陥って操作が利かなくなった。

伊達に調査兵団の馬は高額ではないのだ。

サシャから逃げた馬の様に完璧ではないが、少なくとも巨人から逃走できる様に訓練

されていた。

「うわああああああ!!」

「とにかく走れ!!」

「馬が言う事を聞きません!!」

「なんとか持ち直せ! 民家で巨人を撒くぞ!」

ダズは必死に手綱で馬を誘導した!

死にたくない一心で必死に口鼓で馬に自分の意志を伝えて走らせた!

それでも巨人の速度に負けており、差は縮まっつていくばかりだった。

「嫌だああああ!!」

ただでさえ老け顔のダズは顔を歪めて泣き叫んだ!!

あらゆる感情を込めた魂の叫びで必死に逃げていた。

そんな事しても巨人の動きは止まることは無かった。

「前方から兵士が向かってきます!!」

「ああつ!? 馬鹿かあいつ!?」

「ダズ、あいつに巨人を押し付けろぞ!!」

「はい!!」

班員から情報を知らされて、ダズは前方をよく見ると緑の外套を纏った兵士が見えた。

馬に乗っておらず双剣を構えてこっちに向かって来ている。

自殺志願者かと言わんばかりに突っ込んでくるので彼は避けずにそのまま突き進んでいった!

「ハアハア…おい、嘘だろう!」

疲れたのか急に速度を落とした馬にダズは両手で頭を搔いて取り乱した。

このままじゃ巨人に追いつかれる!

馬を捨てて逃げ出そうとしたが身体が震えて動けなかった。

「大丈夫か!？」

「大丈夫じゃないですよ！巨人に追いつかれます!!」

「もう討伐されたぞ…」

「えっ…」

顔が真っ青に染まった班員の一言でダズは硬直した。

誰が？一体どうやって？

恐る恐る振り返ると蒸気を噴出して黒ずむ巨人の前に見慣れた女が居た！

「サシヤ!？ど、どうしてお前がこんな所に!？」

「ダズこそ何で居るんですか!？」

「何でって、俺は逃げ遅れた住民を避難させる為にここに来たんだが…」

「奇遇ですね！私もこの子を連れて街から脱出する所だったんですよ!」

芋女のあだ名で呼ばれているサシヤ・ブラウス。

馬鹿と称されるが、上位7位の実力者であり、生粋の狩人でもあるので生半可な駐屯兵より強い。

そんな彼女が女らしい私服を纏っているのに困惑するしかなかった。とりあえず馬から降りて彼女の元に駆け付けた。

「ところでダズ、フローラを見ませんでしたか？」

「フローラ？」

「さつき駆け抜けていったはずなんですが……」

柵の影に隠れていて巨人が討伐された瞬間、逃げようとしたサシヤはダズと再会した。

頼りない男でも顔馴染みと再会できるだけで安心感が違った。

一方、ダズはフローラの名が出てきて嫌な予感がした。

「大変だ!!」

「どうしたんですか!？」

「巨人に囲まれた!!」

「もう終わりだああああああ!!」

先輩の一言でダズは絶望した。

1体ですら脅威で逃げ回っていたのに巨人に挟撃されてしまった。

「サシャ!…な、何で丸腰なんだよ?ううつ、お前がそんなんじや…」

「大丈夫です!何とかしますから!ダズも手を貸してください!」

「いやいや、こんな所で立体機動できないし、俺は弱いぞ!」

まさかの無茶ぶりでサシャの提案を全力で拒否した!

アンカーを撃ち込む場所はない、平原、巨人に挟撃された、成績上位の女が丸腰。死亡フラグ満載であり、彼は必死に彼女の提案を拒絶するしかなかった。

「正確に言うと、あなたのガスとブレードが欲しいみたいです」

「…?意味分からん」

サシャの言葉にダズは混乱するしかなかった。

自分の装備を強奪して巨人を狩るのかと思った。

それなら『みたいです』など言わないし、奪う感じではなかった。

「ほら、ダズ達が囿になってくれたおかげで楽に倒せたみたいですよ！」

「ええっ？」

戸惑う暇もなく眼の前で巨人が倒れて黒ずみながら蒸気を噴出していた。

同僚がやったのかとダズは視線を移すが、班員全員が硬直しており違うのはすぐ分かった。

では、一体誰が巨人を討伐したのか？

ヒントが出されており頭に引っ掛かっていたが彼は思い出す事ができなかった。

「ばあー！」

「ぎゃあああああああ！」

背後から脅かされたダズは涙目でサシヤの後ろに隠れた。

巨人討伐数150体を越える化け物女は、気弱なダズを脅かして反応を楽しんでいた。

「フローラじゃねえか！脅かすなよ…」

「今のお気持ちは？」

「めちやくちやビビったぞ」

「そう、元気そうでよかったわ」

フローラと関わると、ダズは調子が狂う。

なんかこの女には負けたくない對抗心や向上心が溢れてくる。

彼女もそれを分かっているわざわざ行動や言動を選んでやっていた。

「感動の再会は後だ！ダズ！まずは住民の避難に全力を尽くせ！」

「もつと早く指示を出してくれませんか…」

「いや、巨人をあつさり討伐されるとは思ってなかったし…」

駐屯兵团第一師団精鋭班ですら複数で1体の巨人を相手にするのが精一杯だ。

本来は巨人と人間のキルレシオが1：30で、巨人を討伐するのに30人ほどの犠牲者が必要だ。

これでも立体機動による肉薄戦術で犠牲者を大幅に減らしていたがそれでも巨人は

強大である。

そんな巨人が複数、瞬殺されるとは誰も思っていなかった。

3名を除いて。

「じゃあダズ、この子のエスコートをお願いしたいんだけど…」

「少女じゃないか…」

「ええ、避難が遅れた最後の住民よ。丁重にエスコートしてあげてね」

指笛を鳴らしてライリーを呼び戻して、乗っている少女を同期に見せたフローラ。

そんなものを見せられてもダズはどうする事も出来ず、ただ見ているしかできなかった。

「この子を橋の先ある林道に連れて行きたいのよ!」

「なんでそこに行くんだ?」

「そこに馬の大群を連れた人達が居るから助けてもらおうのよ」

フローラは、ダズ達に少女を保護する案を伝えた。

駐屯兵たちは躊躇ったが自分達だけでは守り切れないと分かっているので案を飲むしかなかった。

「さきにサシヤ達と共に橋を渡って頂けませんか？」

「お前は どうする気だ？」

まるで殿を務める様に発言した調査兵の女に疑問を抱いた駐屯兵の班長。

さきほどと打って変わって不機嫌そうな発言に上官を侮辱したいのかと思うほどだ。

何故かアンカーを柵に撃ち込んでいる不可解な行動をしているのも、困惑させる要因だった。

しかし、その理由がすぐに分かった！

「ゲーリング！ベン！ダズ！少女たちを連れて橋を渡るぞ！！」

班長は号令を出して少女を護るように馬を走らせた。

サシヤもライリーに袴って少女を護るために走らせた！

班員たちもすぐに状況を把握して走らせた！

何故なら褐色な肌で醜い顔が印象的な6mの巨人が走ってきたからだ。

「さすがにここで相手にしたくなかったわ！【壁登り】の変異種！！」

ダズ達が橋を渡るのを確認したフローラは双剣を構えて走り出した。

目の前に居るのは、50mの壁を乗り越えてカラネス区を強襲した変異種にそっくりの巨人！

その巨人は硬質化した鋭利な爪を伸ばしてくる上に仲間を呼ぶ習性があった。

なにより女型の巨人戦で硬質化した爪が散弾になるのが判明した為、早急に狩る必要があった！

「もう！鬱陶しい！！」

当然の様に硬質化した爪を伸ばしながらフローラに飛び掛かってきた変異種。

種が割れているおかげでフローラはブレードを投擲したと同時にワイヤーを巻き取った！

巨人の右目に折れたブレードが掠って視界を狭めたと同時に死角に移動した。

「いっちょよ!!」

一瞬、獲物を見失った変異種であったがフローラが声を出したおかげで居場所が分かった。

その声のした方に伸ばした爪を薙ぎ払った!

それは罨であり手投げ式閃光弾が破裂して巨人の視覚を一時的に潰した!

「……変異種まで居るとは厄介ね!」

視界が乱れて取り乱した巨人の隙を突いて両手の甲にある白色の器官を潰してうなじを削いだ!

あっさり変異種を倒してみせたフローラだったが、浮かない顔でダズ達と合流に向かった。

この巨人は、弱点の部位を先に潰さないと、うなじへの攻撃が通用しなかった。

更に厄介な特殊能力と凶暴性、アンカーが刺さると転がる習性など初見殺し満載だった。

もし、1分でも討伐に手古摺ったら逆に自分が殺されていたのをフローラは実感していた。

「驚いたぞ…あんなにあっさり巨人を倒してしまうなんて…」

「むしろ速攻で討伐できなかつたら逆に殺されていましたわ…」

駐屯兵団の兵士達は、巨人を簡単に討伐した調査兵の女に感心していた。

ダズだけはフローラの浮かない顔を見て、本気でやばかったのかと分かってしまった。

「大丈夫か？」

「珍しく気を遣ってくれるじゃない…」

「いや、すごく真つ青な顔じゃないか」

「ええ、そうね」

フローラの動きを見てトロスト区戦より腕をあげているのは明白だった。

彼女が巨人を3桁討伐しているのは知らないが、リヴァイ兵士長並みに巨人を狩った

と予想した。

そんな彼女でもさきほどの巨人に向ける感情は、厄介さで警戒している感じだった。とりあえず声をかけたダズにフローラは驚きながらも気遣いに感謝した。

「見ろ！あそこに人が居るぞ!!」

「よし、合流するぞ!!」

先行した駐屯兵たちが避難している集団を発見したようだ。

サシヤもカヤもダズも全員喜んでいた。

フローラだけは暗い顔をして他人事のように喜ぶダズに駆け寄った。

「どうしたんだ?」

「ブレードが欲しいの!ガスボンベも交換できるならして欲しいわ!」

「別に構わんぞ。俺じゃブレードを使い潰す前に死んじゃうからな」

「ダズ、ありがとう」

珍しく純粋に感謝されたのにダズは照れ臭そうに頭を掻きながら喜んでいた。

それとは対照的に彼女は暗い顔をして無言で彼の鞆に装填されたブレードを補充していた。

「やけに暗い顔してるな…お前らしくないぞ？」

「ダズ、まずいのが来ちゃった」

「…もしかして便意なのか？」

「違うわよ!!巨人よ!!」

ダズはあれだけ頼もしかったフローラが暗い顔をしていたので便意だと思った。

当初は、橋を走って渡ったせいで息を切らしていると想像したが違うのでそう考えた。

人間である以上、仕方が無いが巨人と交戦できるのは彼女だけである。

必死に便意を我慢してると思い、短時間なら持ち堪えてみせると発言するつもりだった。

しかし、フローラの返答は巨人が来るといふ一言だった。

「巨人？巨人ならさつきみたいに討伐すればいいんじゃないか？罔くらいならやるぞ

「？」

「じゃあ、あいつの囿になってくれない？」

フローラはダズの後方に向けて指を指した。

彼は、ゆっくりと後方を伺って絶句したがすぐに声に出したほど衝撃的だった！

「なんじゃあこりゃあああ?！」

「【双頭】の巨人なんて…初めて見たわ!!」

そこに居たのは、四足歩行をする大型の巨人だった。

褐色の肌で額に白色の器官が付いているのでフローラは一瞬で【変異種】と判断した

!

問題なのは、下半身より先が枝分かれしており、2体の巨人の胴体があった!

1つの下半身2つの上半身がくつついた【異形の巨人】だった。

「ううっ!こんな時にあんな大型巨人…なのでしょうか?」

「なんじゃありや!?!」

サシャも駐屯兵も全員が異形の巨人を見て驚愕するしかなかった。奇行種を通り越して【結合双生巨人種】という新たな種を発見した瞬間だった。もし調査兵団のハンジ分隊長が目撃したら泣いて感動する光景であろう。

「とりあえず林道に向かうぞ!!ここじゃ分が悪い!!」

「おいゲーリング!!」

「なんだよ……この忙しい時に何か用かよ……ぐあああああつ?!」

ゲーリングは班長に先駆けて林を目指した!

しかし、彼は自分が巨人から最も遠いおかげで襲われなという思考があった。そんな彼を双頭の変異種は易々と追い付いて驚掴みをしてしまった。

この巨人は奇行種という遠くの獲物を狙うタイプのものであった。

「クソ!ゲーリングがやられた!!」

「散開しろ!これじゃ餌にしかならん!」

ゲーリングと呼ばれた兵士を引き千切って部位を取り合いながら咀嚼する変異種。

巨人には人間と同じように癖や個人差があり、今回は獲物を引き千切って咀嚼するタイプだった。

「死になさい!!」

餌に夢中になっている隙にフローラは飛び掛かって額を切り裂いてうなじを斬り付けた!

しかし、刃は硬い肌にも阻まれてはじき返されたと同時に刃が欠けた。

折れた刃の破片が彼女の左腕を掠るが気にする事もなく離脱した。

「両方潰さないと効果がないの!」

そして絶望感溢れる光景が広がっていた。

巨人にはうなじを損傷しない限り無限に肉体が再生する。

しかし、その速さが異常だった。

「嘘でしょ!? もう治ったの!」

硬質化を解く為に白色の器官を潰す必要があるが、1分足らずで元通りになつてた。

双剣で削いでいるので通常なら最低でも2分は再生に時間が掛かるが既に元通りになつていた。

つまり、双頭の額の器官を潰したと同時にうなじを削ぐ必要があつた。

「よっしゃあああ! これで勝つて…ないいいいい!」

フローラがうなじを攻撃したのを見て討伐できたと思つてしまつた兵士は迂闊に近寄つた。

そのせいで変異種に目を付けられて飛び掛かれてしまつた!

辛うじて攻撃を回避したものの、すぐに追いつかれるのは明白だった。

「フローラ、怪我してますが…」

「怪我をするなんていつもの事じゃないの」

「そうですね…」

「ダズや…班長さんも来てくれてありがとう」

フローラはダズとサシャと班長が来てくれたのに感謝した。

1人ではあの巨人には勝てないから協力してもらおうしかなかった。

「皆さん、お願いがあるの！」

フローラは簡潔に作戦を説明した。

巨人の額をサシャが刃を括りつけた矢で射抜いてもらった瞬間、フローラがうなじを削ぐ！

もう1体も班長が額を攻撃して、ダズがうなじを削ぐという戦法だった。

それを同時にやれというのだ。

誰もが正気を疑ったし、作戦を立案したフローラも正気じゃないと分かっていた。

「本気で言ってるのか？」

「巨人の弱点は、うなじにある縦1m、横10cmの部位を攻撃するしかありません」

「そうだな…」

「それが2つあります！どちらかが外れだった場合、勝率が著しく落ちますわ」

額の弱点部位を潰せば、その巨人のうなじの硬質化が解かれるのは分かっている。

だが、さきほどの攻撃でそれぞれの額の部位を潰さないと硬質化したままなのが判明した。

更にとどの巨人でも『縦1m、横10cm』のうなじ部分が弱点である。

つまり、どっちかのうなじが「外れ」ということになる。

「だから皆さんに協力してもらいます。わたくしでは同時に攻撃できないので…」
「何でもいい！ベンが喰われる前にやるぞ!!」

とにかく班長は同僚を救出したかった。

既に部下を2名も失っている彼は、これ以上死者を出したくは無かった。

「無理に決まってるだろう!!そもそも何で俺なんだよ!」

ダズはフローラの案を拒絶した。

不可能の事やって犬死する気など毛頭なかった！

「ねえダズ！立体機動に始めた触った晩の日にやった『夜間特殊訓練』を覚えてる？」

「確か俺達が1位になってお肉を食べたあの班別の合同訓練だろう」

「そうよ、マルコとコニーは居ないけど、また同じ班になったわよ」

「何が言いたいんだ？」

初めて立体機動装置を装備して立体機動をした日の晩、夜間特殊訓練を行なった。

コニー、サシャ、ダズ、フローラといった問題児を抱えたマルコは、さぞかし大変だっただろう。

当然、作戦中でガスを切らして班で最下位だった。

キース教官も狙って班を分けたので、予め叱責するのはその班に決めていた。

ところが、マルコに班長の権限を委任されたフローラは指示を出して好成績を叩き出した。

ビリから1位になってしまい、キースは自分の浅はかな思考を責めて純粹に褒めた。

予想外の快挙を受けて教官に出される肉料理を全て彼女たちに渡したくらい嬉し

かった。

「ああ、そうだったな」

「もしうなじを削ぐのが失敗してもフォローしてあげるわよ」

「だからうなじを削ぐ役割を俺にしたのか」

「その通りよ！」

自信満々で胸を張っているフローラ。

何故そこまで言い切れるのか分からないがダズは不思議と失敗しない気がした。

「おい早くしろ！」

「班長！大丈夫です！一呼吸して落ち着きました」

「5、4、3、2、1の1って言ったらサシャと班長さんは同時に額の器官を攻撃してください」

「1の次の0でわたくしとダズがそれぞれのうなじを削ぎます」

フローラも成功率が低いと自覚している。

まずサシヤが弓で射抜くのと、班長の攻撃を同時に器官へ与える必要がある。遠距離攻撃と肉薄攻撃、どちらかが少しでもズレればうなじへの攻撃に失敗する。

そしてフローラとダズは、一撃でうなじを削げなければ返り討ちに遭う可能性が高い。

それでもやるしかなかった。

「数のカウント開始はどうするんですか？」

「それなら私が音響弾を撃つ！その瞬間、5、4、3、2、1のテンポでやるぞ」

サシヤは冷や汗を流した。

弓による狙撃は慣れているが、こうやって合同で射抜くのは初めてだからだ。

一番ズレやすいのはサシヤであり、相当近寄らないとタイミングが合わない。

失敗する可能性が高いのは狙撃のタイミングである。

班長はカウントのテンポを指導したが実際は、音響弾が聴こえたら即射抜かないと間に合わない。

だからこそ弓を持つ手が汗で濡れていた。

「ベン!!こつちだ!!こつちに来い!!」

部下の限界が近いと察した班長の怒声に近い命令を聞いたベンは必死に馬を走らせた。

巨人はそうとも知らず、逃げ回る獲物を追撃していた。

ここで作戦に従事する全員が巨人の動きを止める手段を考えていなかったのに気付いた!

「お馬さん!!どうしたの!?!」

カヤを乗せているライリーは、変異種に向かって突撃した。

何でそんな事をしたのか分かっていないが、巨人の注意を逸らすつもりでやったただだ。

そして巨人の目の前を横断するように駆け抜けていった。

新たな獲物を見つけてしまい、巨人は一瞬どうするか迷ったように動きが止まった。

「今よ!」

フローラの号令で配置にしていた4人が作戦を開始した。

「これで終わらせます！」

「2人の仇を討つ!!喰らえ!!」

その瞬間、サシヤは弓を構えて欠けたブレードを括り付けた矢を引いた!

白色の器官にアンカーを撃ち込んだ班長は音響弾を巨人に撃ち込んだ!!

巨人に直撃して動きが鈍ったのを確認する事もなく無言でワイヤーを巻き取った!

サシヤは音響弾が聴こえた瞬間、矢を放った!

「ダズお願い!!」

「分かった!!」

レンガの壁すら貫通するアンカーは硬い皮膚さえも突き刺した!

音響弾が聴こえる前にワイヤーを巻き取って突撃する2人!

もはやタイミングなど気にしておらず、勝手にやっている状態だった。

「ぐおっ!!」

「くっ!」

「このお!」

音響弾の衝撃で手元が狂いそうになったが班長は白色の器官を削いだ!

それと同時に刃が付いた矢がもう1つの器官を潰した!

ダズとフローラは器官が潰されたと信じてうなじを斬り付けた!

結果は成功して、2人は無事に同時にうなじを削ぐことができた。

「ダズ!!アンカーを外して!!」

勝利の余韻を味わう事すらできずダズは言われた通り補助スイッチを操作してアンカーを外した。

その瞬間、フローラはダズを抱き寄せて倒れ込む巨人から脱出した。

巨人の下敷きにならないようにアンカーを巨人の亡骸に何度も打って後方へ離脱した。

「ダズ！ダズ！しつかりしろ!!」

「は、はい班長！申し訳ございません！」

ダズはいつの間にか馬を走らせていた。

とりあえず迷惑を掛けた班長に謝罪して状況を把握しようと努力した。

「ダズ、私はお前の事を甘く見ていた」

「そんな…過大評価ですよ…」

あらゆる面で上位互換の班長の褒め言葉にダズは萎縮してしまった。

他人から褒められる事が少ない彼は、褒められ慣れていないという情けないと思っ
ている。

班長はその姿を見て自分と違って彼は成長途中だと感じていた。

もしかしたら、自分を越える逸材になる事を期待して彼の成長に賭けようとしてい

る。

「そういえばフローラはどこに行ったんですか？」

「ああ、彼女か。東部戦線に援軍に行ってもらったぞ」

双頭の巨人を討伐した後、班長はフローラの腕を見込んで東部戦線の援軍をお願いした。

街道を死守する駐屯兵団第一師団精鋭班の援護をお願いされて困惑したフローラ。

今日は女型の巨人も含めて連戦続きだったので休憩したかった。

それでもトロスト区奪還作戦でお世話になった部隊を見捨てられずに向かう事にした。

「すごいなあいつ…」

「駄目元でお願いしたら承諾してくれたよ」

「そういえばダズ、あの子とどんな関係だ？」

「え？」

ベン先輩に横槍を入れられてダズは困った。

質問した彼の期待に応えられる返答ができないのを実感していたからだ。

「あいつは、俺と同期で104期訓練兵の中で最強で…」

「それで？」

「訓練兵時代で辛くなった時に慰めて精神を回復させた問題児の女です」

「はあ…」

意気揚々と質問したベンは、つまらない返答に溜息をついた。

せっかく「大切な女です」などと発言したら、くつつくように努力するつもりだった。うだつの上がない男には、勿体ない女であるが相性抜群に見えた。

故にダズの本音を探ってみたが縁がなさそうに諦めた。

「ベン、そんな与太話はエルミハ区まで民間人を護送するまで謹んでおけ」

「了解！」

ダズ一行は、サシヤの父が率いる避難民たちを護送していた。

ダウパー村から脱出した村人たちは馬を近隣の住民に貸し出して避難を促していた。さきほどの巨人の戦闘も目撃しており、変異種が討伐された瞬間、兵士達と合流した。サシヤは父と親子水入らずの会話を繰り返して広がっていたが班長たちは無干渉を貫いた。

「ダズ、お前は何故兵士になろうと思った？」

「家族を守るために力を手に入れたかったからでありますう！」

「そうか、その力、ここに居る人達を護るために使ってくれないか」

「もちろんです！」

ダズ・ウイズリーは臆病だった。

だが、彼は104期訓練兵団で上位15位の實力者であり弱くは無かった。

一度腹を括って覚悟を決めれば、コニーに匹敵する立体機動ができた。

だからこそ、フローラはわざと彼を煽って本気にさせる為に努力してきた。

「俺は絶対に家族を！故郷を！彼らを守って見せます！」

巨人を討伐して自信満々になった彼は避難民をエルミハ区に送り届けた。

その瞬間、力尽きていつもの気弱なダズに戻った。

班長たちは呆れながらも、新兵の活躍を祝って彼の活躍を同僚達に宣伝した。

恥ずかしがったダズはその日の夜、今日の出来事を思い出して眠る事はできなかった。

『フローラはどうしてるのかな…いや、あいつは寝てるか…』

同時刻、フローラ・エリクシアは眠る事ができなかつた。

まさかの夜戦で彼女は涙目になりながら必死に交戦している。

女型の巨人から連戦続きでやっと休めると思った矢先に巨人と交戦させられた。

まるで全ての巨人の戦闘を網羅させられるかのように激戦地に投入されている。

更に翌日に連戦を控えているとは知らない彼女はただ巨人を倒す事しかできなかった。

そうとは知らず、ダズは充実した一日だったと思いつつ疲労で瞼を閉じて睡魔に呑まれた。

66話 東防衛線

城壁都市であるトロスト区とエルミハ区を繋ぐ街道。

それを死守するのは、駐屯兵团第一師団である。

構成員は1万の規模で駐屯兵团で最大規模の師団であり、「人類の盾」でもある。

「精銳班が到着するまで足止めしろ!!」

「大隊長殿！第三波攻勢部隊が全滅しました！戦力の逐次投入は犠牲者を増やすだけです！」

「ここを奪われるわけにはいかん！第四波攻勢部隊による突撃を開始せよ!!」

「もう無理です！既に戦力2割を損失しました！」

「ここが陥落すればトロスト区はおろかうオール・ローゼが陥落するのだぞ!!やれ!!」

士官の命令で突撃して無力に散っていく駐屯兵たち。

巨人の戦闘を継承している調査兵团ですら逃げに徹するのだから勝てるわけがなかった。

ましてや立体機動ができない平地での戦闘となれば猶更である。

「工兵！さっさと土嚢を敷き詰めろ!!」

「やってるが、こんなもの巨人の足止めになるわけねえだろう!!」

「いいからやれ!!」

駐屯兵团第一師団南方区第6工兵班フェーダーは上官の無理難題に怒り心頭だった！

立体機動装置を身に着ける暇もなく戦線に投入されて塹壕やら土嚢の壁を作らされた。

仮想敵が人間であったのなら効果的なのかもしれないが、巨人には無意味だった。

「突撃命令が出たぞ！第8分隊とつ……こはっ!？」

「犬死なんてまっぴらだ！死にやがれ!!」

「部隊長が名誉の戦死を遂げたぞ！指揮系統は私が継ぐ！我々はトロスト区守備任務に戻る!!」

「了解しました!」

上官を殺害して武器やガスボンベを捨てて敵前逃亡する1個分隊。あれだけ必死に訓練したのに巨人の餌になる勇敢だった兵士。

恐怖で逃げ回って馬ごと土嚢に激突して動かなくなる兵士。

30を超える巨人を見て泣き叫んで縮こまる兵士。

既に半数以上が兵士として使い物にならなくなっていた。

「おい工兵！」

「うるせえ!!」

「ごがつ!」

フェーダーは偉そうに叫んでいた三下の兵士をシャベルで殴打し殺害した!!

度肝を抜いて同僚が自分を見たが彼は特に気にしていなかった。

殺害した兵士から固定ベルト、立体機動装置、ガスボンベを剥ぎ取って着用した!

「よし!撤退するぞ!!」

「フェーダー!正気か!」

「俺は正気だ！こんな肥溜めで死ぬ気はねえ！俺に続く者は武器を取り…」

フエーダーはそこまで発言して眉間を撃ち抜かれて脳髓と血が勢いよく傷口から飛び出した。

同胞殺しをした彼は、皮肉にも同胞から撃ち抜かれる末路を辿った。

「全く、嫌になるね…」

「「リ、リコ班長!!」」

駐屯兵团第一師団精鋭班のリコ・ブレツェンスカは同期を悲痛な思いで撃ち抜いた。先行した友軍は士気が低下し過ぎて規律は崩壊しており敵前逃亡する者が相次いでいた。

それどころか部隊単位で逃亡しており、戦線維持どころか兵团として機能していなかった。

「よく持ち堪えてくれた！後は我々精鋭班に任せてくれ！」

「リコ班長！巨人が30体以上居ます！いくら精鋭班でも…」

「だからどうした！ここで逃げてでも喰われるだけだ!! 私は最後まで諦めない!!」

トロスト区防衛作戦と奪還作戦で大勢の兵士が戦死した。

トロスト区の住民も3割死ぬという大惨事の中で何とか人類史上始まって以来の勝利を手にした。

それが2カ月も経たない内に戦況をひっくり返されてしまった。

ここで街道を守れなければ、彼らの死は全て無駄になる。

だからこそリコ班長は最後まで戦うつもりだった。

「リコ、先行し過ぎだ」

「すまない、同期が暴走していたからつい…」

「じゃあ暴走しそうな女班長を止めるのは俺たちの仕事ってわけかい」

「イアン、ミタビ…」

トロスト区奪還作戦で生き残ったイアンとミタビは絶望的な状況でも笑ってみせた。

リコが死地に向かうのを察して彼女を留めようとする為の笑みだった。

彼女は同僚の班長の思考を読んだからこそ、顔を歪めてしまった。

「おっと！珍しく乙女らしさをみせてくれるのか？」

「ミタビ!!」

「悪い悪い！それどころじゃなかったな!!」

付近の兵士を喰らい尽くした1体の巨人が彼女たちに向かって突っ込んできた！

ミタビとイアンは目配せで巨人に向かって突撃した！

彼らもトロスト区奪還作戦で無力を感じて平原でも交戦できるように訓練していた
!

「ミタビ班長！イアン班長！無茶です!!」

「無茶ではないぞ！」

「キッツ隊長……」

精鋭部隊隊長であるキッツ・ヴェールマンは、断言した。

以前のように精鋭という勲章のぬるま湯に浸かって満足していた自分たちではない
と！

巨人の脅威を再認識してこの日に備えて全員が訓練し直した！

脚は震えているがそれでも巨人から人類を護る盾として彼はこの戦場から逃げる気が無かった！

「貴様！無駄口を叩く暇があるなら、さっさと持ち場に戻らんかい！」

「申し訳ありません！お前らも為すべき任務をこなせ!!」

「はい!!」

工兵部隊は慌てて持ち場に戻り塹壕の構築や土嚢づくりにも勤しんだ！

これが人類の勝利になると信じて！

「イアン班長！ミタビ班長！さすがです！」

「たった1体討伐したただけだ!!まだ来るぞ!!」

走れば時速60km以上の速度で突っ込んでくる巨人という化け物。

アンカーを突き刺したところで動きに振り回されるのがオチであった。

どっかの誰かは、巨人を利用して立体機動していたが精鋭班ではその技量も勇氣もな

かった。

「どうする?」

「死ぬまで戦うまでだ!」

3体の巨人を目撃したミタビは思わずイアンに質問した。

彼は質問の意図を察して、ただ思った事を口にした。

もはや勝機などないし正気じゃないかもしれない。

それでも生きている限りは最後まで足掻くつもりだ!

「ん?」

「なんだ!」

ミタビとイアンに向かってきた巨人の内の1体が倒れた。

更に傍にいたもう1体の巨人が転倒した。

黒ずんで蒸気を噴出しており誰かが討伐した様である。

「赤い馬だ…」

彼らの眼前で赤い体毛の馬が駆け抜けていった。

他の馬より一回り大きくて頼もしそうな馬であった。

それと同時に残っていた巨人が倒れ込んで蒸気を噴出して消滅しつつあった。

何が起こったのか分からないが、巨人より遥かに強い存在が居るのが確かである。

生半可な馬より速い巨人が瞬く間に3体が討伐されたのに精鋭班は驚きを隠せない。

「ライリー!!戻ってきて!!」

懐かしい女の声がしたと思うと、指笛が鳴った!

すると、さきほど駆け抜けていった馬が血相を変えたように戻ってきた。

「おいイアン!あいつは…」

「どうやら勝利の女神は我々を見放さなかったようだな」

ミタビとイアンは、トロスト区奪還作戦でお世話になった女兵士と再会した。

フローラ・エリクシア、104期訓練兵でありながら精鋭班全員より強かった女。奪還作戦から2カ月も経過していないのに更に腕を上げたようで彼らは悔しそうに彼女を見た。

「キッツ隊長！あの女兵士が巨人を3体も討伐しました!!」

「あいつは……ちようどいい!」

猫の手を借りたいどころか槍を手にした農民すら欲しかったキッツ。

平地で巨人と戦闘ができる兵士が精鋭班を援護した女兵士だと気付いた。

ただちに彼は、彼女を戦力に加える為に駆け出した!

「あんた……確かトロスト区奪還作戦の時に居た……助かった、心強いよ」

リコも駆けつけて確認すると懐かしい顔を見た。

あの時に居た女訓練兵の片割れ、フローラ。

イアンが前例がない逸材と認めたミカサ・アッカーマンと互角の実力者である。

フローラは平地で巨人を利用して立体機動ができる実力者だ。

トロスト区奪還作戦では、精銳班は彼女に巨人を狩ってもらおう事で生還した。その戦力がこの街道に来ているのは頼もしい。

「援軍を申請していたけど、フローラが来るとは思わなかったよ」

「避難を援護していた部隊から援軍を頼まれまして参りました」

「ちようど良かった！私達に協力してくれ！」

「はい、大丈夫です！」

「頼もしいね……期待させてもらおうよ」

リコは、彼女の元気そうな返答に一安心した。

何故かはわからないが、根拠が無いのに彼女を見ると安心してしまった。

「調査兵团でも憲兵でも農民でも何でもいい！戦えるならすぐに出撃してもらおうぞ！」

浮かれたリコを見てキッツは喝を入れた。

戦況は悪化しており、ここから巨人を掃討し防衛線を再構築しなければならないからだ。

彼は油断はせず、巨人の全滅が確認されても100日経過しないと一切信じる気は一切ない！

「貴様らも配置につけ！グズグズしている暇などないぞ！」

「ハッ！」

援軍として最前線に到着した精鋭部隊もキッツの号令で慌ただしく交戦の準備に入った。

もはや先行した部隊は壊滅しており、防衛線が巨人に突破される寸前だった。

戦意を喪失した兵に代わって人類の勝利を歴史に記すまで彼らは戦い続けるだろう。

「巨人はなんとしてもここで食い止めないと…死んでいった者に顔向けできないからね」

「行くぞ…力を貸してくれ」

「良いですけど、まずブレードを頂きたいです！」

「…その死体の鞘にあるブレードを持って行ってくれ」

リコはさきほど殺害した同期だった男に指を指した。

彼の装備は、別の兵士のものであったがこのままでは双方とも浮かばれない。せめてフローラに使い潰してもらって彼らの犠牲を無駄にしたくなかった。フローラも事情を察して無言でブレードとガスボンベを頂戴して交換した。

「さあ行くよ！一匹たりとも通しはしないよ！巨人共!!」

リコ班長率いる3名の精鋭兵と共にフローラは戦場に戻った！

辺りはすっかり夕焼けであり、その日光は人類の未来を揶揄させるような不気味でありながら幻想的だった。

「付近の巨人を駆逐し、防衛戦の完成まで時間を稼ぐんだ！…みんな死ぬんじゃないぞ！」

「ハッ!!」

既に防衛線は崩壊しており、中央部である本拠地付近すら巨人に侵入されていた。幸いにも巨人は少なく、数体の巨人を討伐すれば奪還できる。

ただし、近くに木や民家が少なく、後方に辛うじて塹壕と土囊の壁があるくらいだ。短時間で重砲など持ってこれるわけもなく、牽制程度にしかならない野砲くらいしかない。

それでもないよりマシだった。

『もう倒したのか…前より動きが鋭くなってるな…』

頭進撃は、精鋭班が苦戦している2体の巨人を一瞬で討伐してみた。

リコも含む精鋭班は驚くしかでできなかったがフローラからすれば、あまりにも巨人が弱すぎた。

硬化化した爪を瞬時に伸ばしたり胃液を飛ばしたり、転がったりする変異種に比べれば弱かった。

後に「異形の巨人」と呼ばれる巨人たちと交戦して生還した甲斐がある。

「フローラ、トロスト区の時より更に腕を上げたようだな」

「壁外任務を何度もしてきましたし、単純に巨人戦との経験の差だと思えます」

「いやいや、新兵なのに壁外任務を何度もやったのか…?」

「巨人を駆逐する為なら何でもやりますわ!!」

調査兵団は基本的に巨人との戦闘を避ける。

調査兵団の歴史上、巨人に挑んで碌な目に遭わなかったのは100年以上の歴史が示している。

中には突撃戦法で何度も生還して五体満足で団長を辞退した例外を除いて巨人に積極的に挑む兵士は居ない。

キース団長の再来とも噂されるフローラは、王政ですら看過できない存在になっていた。

「防衛線の展開を急げ!! 巨人の侵攻をこの地で止めるのだ!」

「ここを失えば今度こそ人類は滅亡する!!」

「ここに居る勇敢な兵士が全滅するまで、いや! 刺し違えてでも巨人を喰らえ! 討伐せよ!」

「我々の努力が、人類の未来に掛かっている! 自分の使命を全うせよ! 正義の名の元に!!」

キッツは啖呵を切って必死に兵士としての責務を説いた！

もはや根性論ではないが、そうするしかなかった。

規律が崩壊して敗残兵のように逃亡する兵士を追及する余裕などなかった。

1人でも演説を聴いて踏み留まってくれるだけでいいと彼は思いつつ演説をしていた。

「緑色の信煙弾を複数確認！救援要請です！」

「まずは近い方から向かうぞ!!」

リコ班長の指示に従って馬を走らせる一同。

戦況は最悪だが、幸いにも精鋭部隊が参戦して巨人の侵攻速度が鈍っていた。

「イアン！無事か!？」

「ああ、リコ良い所に来てくれた!!そこのでか物をやってくれ!!」

15m級の巨人に追われているイアン班を発見した。

異様に巨人のスタミナが多いようで振り切れずに必死に逃げ回っている様である。

「わたくしがうなじを狙います！リコ班長は左脚を削いで動きを止めてください！」
「従うよ！」

リコは側面から侵入して馬上から立体機動に移って巨人の左脚を削いだ！

その勢いで巨人が転んだ瞬間、フローラはうなじを削いで離脱した！

バディアクションをやるのは初めてだったが意外と息の合ったコンビネーションだった。

「さすが…馬に乗るのが早いな…」

「これは相性やタイミングに寄りますから…」

フローラはライリーを呼び寄せて素早く騎乗できたがリコは馬に乗るまで4分掛かった。

調査兵団の兵士の死因の3割が馬に見捨てられたとされている。

なので調査兵団の兵士は馬を相棒と認識して大事に扱っている。

駐屯兵団の馬は、馬上で立体機動に移る訓練はしてないので、リコの馬は混乱してし

まった。

それでも瞬時に落ち着かせて騎乗できるのは精銳の証といふべきか。

「イアン班はミタビ班と合流してくれ！」

「お前達だけで大丈夫なのか？」

「こつちにはフローラが居る」

「おいずるいぞ！こつちによこせ！！」

イアンはトロスト区奪還作戦でフローラに巨人を押し付けた。

あの時は巨人にアンカーを突き刺して立体機動に移れる技量が無かった。

そのせいで唯一平地で戦える彼女に巨人を押し付けるしかできなかった。

その反省を活かして訓練して平地でも巨人に交戦できるようになった！

それでも不安な要素があり、巨人に関してはベテランの彼女の動きを参考にすることもりだった。

「また後でな！」

「仕方ないな……これからミタビ班と合流をする！巨人をこの世から叩き出す！異論は無

いな？」

「ハッ！」

駐屯兵团第一師団精銳部隊の活躍により、少しずつ巨人が減っていた。始めは30体以上に攻め込まれて絶望的だったが半数未満になった。

戦況が有利になるにつれて敵前逃亡をしていた兵士や班が帰還していた。

トロスト区やエルミハ区からの砲兵の部隊と先遣班が到着して戦力が整いつつあったのもある。

「キッツ隊長！砲兵部隊の展開が終わりました！更に4個分隊の援軍が到着しました
！」

「よし！拠点の準備が整ったな！これで防衛線の展開は完了だ！」

一時はどうなるかと思っただが、防衛線を維持できるほどの戦力が整った。

更に巨人の戦力が半壊しており、このまま防戦すれば勝てるだろう！

否、キッツは油断しなかった！

戦況には鮮度というのがある。

一旦有利になつても腕つ節だけで状況をひっくり返せれるのが巨人である。

「攻勢の準備を各班に伝達せよ！」

「隊長！平原に進軍させるのは無茶です！」

「防戦一方では必ず突破される！我々はうつつ出て巨人を駆逐し侵入場所を特定するのだ！！」

圧倒的に巨人の方が強い。

誰もがこの戦場で思っているはずである。

壁に穴が開いてそこから巨人が侵入してきた以上、いくらでも巨人が補充されると……。

トロスト区の門に空いた穴の様に塞がない限り永遠に巨人が補充されると！

「陽動班は予め定めている2個班で行なえ！！巨人を誘導するのだ！」

まず巨人の特性として人間が近くに居れば捕食する為に襲撃してくる。

動きが読めない奇行種もいるが基本的に行動原理はそれである。

そこで巨人をわざと餌を見せつけて誘導し、有利な状況に連れて行く事ができる。つまり壁上固定砲がある場所まで誘導して一斉砲撃で蹴りを付ける算段である。

「ハンネス！陽動班を利用して巨人を避けて壁に沿って穴を搜索せよ！」

「ハッ！」

5年前までは勤務中で酒を飲んでたハンネスも立派な隊長である。

トロスト区の守備隊長である彼は、部下のファイル達と共に壁にできた穴の搜索を担当する。

「陽動班が出撃しました！」

「よし！砲兵は陽動班を援護せよ！残りは進軍する準備を！」

キッツは予想以上に作戦がうまくいったのに困惑していた。

当初は巨人が30体近く居たのに既に3割程度まで減らされているのもあった。

「おっほっほっほっ！」

「よし！ やつちやえフローラー！」

「なんで他人事なのですか!？」

頭進撃がデザートは別腹でいくらでも食べられるように巨人を狩りまくっていた。

彼女は巨人討伐数をまともに報告せず、同僚や先輩の討伐数や討伐補佐数を盛って報告する。

そのせいでフローラーの討伐数150体以上は、同期や先輩などがそれを目撃した数で加算された。

つまり、彼女はその2倍くらい巨人を討伐している疑惑がある。

「まるで巨人にとって悪魔だな」

「シガンシナ区で死んでいった亡霊たちが力を貸してたりしてな」

「【鎧の巨人が生み出した悪魔】だ。面構えが違う」

また1体の巨人が討伐されて歓声をあげる精鋭班たち。

もはやフローラーの巨人討伐ショーを観戦する観客のようである。

「ホークマンさん！ブレードを頂きたいです！」

「いくらでも持つていけ！俺のガスボンベと交換してもいいぞ！」

「ありがとうございます」

トロスト区の穴を塞ぐ岩を「転がす」というヒントを作ったホークマン。

彼もまたフローラの活躍に魅了された一人である。

いくら彼女が強くてもブレードとガスを喪失すれば瞬く間に巨人に捕食される。それを防ぐ為に補給物資や食料を提供して戦い続ける様に努力した。

「報告！陽動班が巨人を壁に惹きつける作戦が発令しました！」

「よし、これで防衛線を突破されるという悪夢はなくなつたな」

伝令の話を聴いてリコ班長は、戦況が有利と分かりようやく笑う事が出来た。

到着した時は逃亡兵や上官殺しが発生しており、もはや兵団として機能していない絶望的状况。

それが今では、兵士が一丸となつて巨人を掃討し、巨人の侵攻を押し返そうとしていく。

たった一人加入しただけであるが、ここまで有利になるとは思わなかった。

「残りは壁上固定砲に片付けてもらおうと考えていいのか」

「おそらく…それとハンネス隊長の部隊が壁の穴を探索します」

巨人がウォール・ローゼに出現した以上、壁のどこかに穴が空いていると考えるのが普通だ。

巨人が穴を掘ってそこから出てきたとは、知性がない巨人ができるわけがないと考えていた。

せいぜい、巨人を信奉する狂信者か、人類と敵対する巨人化能力者が誘導した点くらいか。

とにかく、ここまで巨人の数が居るなら必ず大規模な穴があるのは疑う余地は無い。ハンネス・ルドマンは最も危険な任務に挑もうとしていた。

「フェル！準備は良いか!？」

「もちろんです！お前らも良いよな？」

「「はい！」」

副長のフェルの確認に返事をする班員たち。

誰もが緊張しながらも、危険過ぎる任務に挑む気満々である。

「今から『壁の破壊箇所の特定制務』を開始する！誰一人死ぬんじやねえぞ!!」

「ハッ！ハッ！」

「出撃!!」

ハネス班は、壁の破壊箇所の特定制務の為、壁に沿って進軍していく。

例え巨人に喰われようとも破壊箇所を特定制務して報告するのが使命である。

幸い、巨人は壁を登れるのは「例外」を除いて居ないので最悪壁を登って逃げればい
い。

「フローラ、お前が何故ここに……まあいい、巨人が邪魔で進めねえんだ！」

「巨人を駆逐すればいいのですね！」

「……まあ、そういう事だ！壁の破壊箇所特定制務をするので手伝ってくれ！」

意気揚々と出撃したハンネス班であったが、複数の巨人に発見されて作戦が頓挫した。

やむを得ず、信煙弾を撃ったところ、リコ班が到着し、フローラとハンネスが再会した。

フローラは落とした調査日誌を彼に拾って仲良くなった経緯があり、偉大な先輩である。

ミカサの昔話でも良く名前を耳にして、腐敗した軍人から立派な隊長になる話を聴いていた。

エレン、ミカサ、アルミンは彼を慕っているが、フローラも彼を慕っている。

「フェル！全速力で逃げろ！」

ハンネスの副長が巨人に狙われており、馬を全力疾走させて振り切ろうとしていた。フローラはその姿を見てライリーを走らせて巨人の背後についた。

時速65km以上で走る巨人に易々と追い付いてアンカーを撃ち込んでうなじを削いだ！

その勢いで飛び出て倒れる巨人を回避するために地面にアンカーを撃ってワイヤー

を巻き取った！

片方ずつのアンカーを交互に撃ち込む事によって身体の負担と引き換えに動きが鋭い彼女。

ワイヤーを巻き取りガス噴出で離脱してアンカーを外し、近くの木にアンカーを撃つた。

頑丈そうな枝に振り子のような動きで衝撃と速度を落とした後、地面に着地した。

「ほんとお、見ていて危なっかしいな」

「巨人と戦う時点でそういうものですよ」

「そうだな」

巨人との戦闘できついのが討伐した後の着地である。

たった2mでも両脚で着地しようとすると骨折するリスクがある。

転がって衝撃を殺そうとすると、立体機動装置が壊れるリスクもある。

リヴァイ兵長も着地まで考えて巨人に攻撃を行なっているが誰もがそうできるわけじゃない。

むしろ、それができれば英雄になれるほどその技量を持つ者は居ない。

訓練兵時代に何度も事故つた経験でフローラは着地に慣れることができた。

普通なら身体で覚える前に事故死するが106回も医務室送りされた彼女は気にしなかつた。

「これで俺らの方は何とかかなりそうだが、このまま素通りできないな」

「何かくれるんですか？」

「音響弾や閃光弾とか持つていくか？」

「音響弾を2個頂きます」

従来通り銃口に取り付けるタイプの音響弾をもらったフローラ。

手投げ式も1個あるが、それだけだと不十分だと感じていたので新たにもらった。

閃光弾は、とりあえず手投げ式があるので充分である。

あまり装備をするとライリーに負担が掛かるのでここまでにした。

フローラは装備を受け取つて、作戦を続行するハンネス班の健闘を祈つた。

「これから攻勢に出る！まず前線を押し上げるのだ！」

「大隊長！貴様が先陣を切れ！」

「了解しました…」

さきほどまで無謀な突撃作戦で兵を死なせ続けた大隊長にも指令が下った。わざわざ名指しにしたのは理由があり、それは全員が理解している。

要するに先鋒で突撃して死ねという事である。

今まで部下の命を湯水のごとく消費した彼もまた、消費される人生である。

「攻勢部隊は突撃せよ！人類の領域を奪還せよ!!」

「[[[[ハッ!!]]]]」

キッツ隊長は、人類の領域を取り返すように部隊を進めた。

さきほどまでは防衛戦であったが、これからは奪還戦である。

全員が一丸となってウォール・ローゼの領土を奪還する為に攻勢を開始した。

「どうしたんだ？」

「ミタビ班長！新手の巨人が複数来ました！」

フローラはミタビ班と合流して軽い休息をしていた。

攻勢作戦が開始されて、一度様子見をして不利な場所に迅速に援軍に向かうつもりだった。

そして、新手の巨人を感知した。

「妙ね……」

「何がだ？」

「いえ、なんでもありません」

戦場に出現したのは褐色の肌で凶悪な顔をした複数の「変異種」である。

駐屯兵団どこか調査兵団ですらも中々交戦する機会がない凶悪な強さの巨人。

そんな巨人達の視線を一瞬だけ一斉にフローラに向けられていた。

まるで出現した巨人の捕食目的が彼女のように視線を向けていた。

すぐに近くに居た兵士を襲撃したがフローラは怪訝な顔をして巨人の動きを観察していた。

『タイミング良く出現して、一斉にわたくしに視線を向けた…まるで』

『世界一美味しいお肉』と自称した事がある彼女。

確かに女の子だし、筋肉質で臭い男より美味しそうなのは自覚している。

そんな事を考えてしまうほど、巨人に狙われやすい体質である。

巨人を効率よく掃討できたのもフローラを視認すると優先的に襲ってくるおかげであつた。

それはともかく、さきほど狙っていた兵士を無視してまでフローラを襲って来ていた状況。

巨人の注目を集めただけなら分かるが、遠くに居るはずなのに巨人の視線を集めるのはおかしい。

『まさかね…』

フローラは誰かが巨人を操作して自分を殺そうと差し向けたような感じがした。

変異種の出現するタイミング、やたらと巨人の関心を向けてしまう体質。

今まで交戦してきた巨人が実は自分を抹殺したい誰かが操作をしたと思うと納得してしまふ。

『まあ、わたくしの道に立ち塞がるなら粉碎するだけよ!』

頭進撃にはそういった障害ですら乗り越えてみせる。

例え誰かが自分を憎んでいようが、全力で進撃する!

それが行動であり、性格であり、彼女の人生だからだ!

「いきまますわよ!!」

フローラは新たに出現した複数の変異種に向かってライリーを走らせた!

ただ、目の前の巨人を駆逐してゆっくり就寝する為に!

明日に向かって進撃する為に双剣を構えながら進撃した!

「単独で先行するな!!」

ミタビ班も遅れて彼女についていった。
人類の希望を喪失させないように！

67話 駐屯兵団第一師団精銳部隊 VS 穴掘りの変異種

ある暑い日の夜、1人の抗夫が地下からウオール・シーナに侵入しようと思つた。

内地であれば、奴隷の様に扱われる事もなく優雅な暮らしができると思つたからだ。

彼は20年以上も休むことは無く穴を掘り続けており絶対な自信を持っていた。

「穴掘りの名人」と自慢する事はあり、人氣が無い森で穴を掘り進めて坑道を造り上げた。

誰にも見つかる事もなく抗夫は穴を掘り、麻袋に土砂を詰めて外に捨てる一日を繰り返した。

抗夫としての経験と知恵と技術、そしてなにより内地への想いで掘り進んでいた。

ところが彼は壁にぶつかった。

文字通り、壁の基礎部にシヤベルが衝突し、侵入を防ぐ様に地中深くまで根を下ろしている。

彼は必死に基礎を潜り抜けようと必死に穴を掘った。

何度も硬い基礎に阻まれても掘れる場所がある限り手を動かし続けた。

もはや内地の生活など彼の頭に無く、壁を征服したい一心でシャベルで穴を掘り進めた。

そして、8 mほど下に掘った時に硬い岩盤が出現した。

それは壁の基礎と同じ材質でできているようで、どうやっても破壊する事はできなかった。

彼は、壁教を信仰していなかったが実際ここまで頑丈なら入信しても良いと思つてしまった。

その話を友人に酒場で打ち明けた翌日に抗夫は行方不明になった。

友人や兵団の搜索隊は必死に搜索したが見つかることは無く、その友人も忽然と消息を絶つた。

駐屯兵団第一師団精鋭部隊のキッツ・ヴェールマン隊長は戦況を楽観視していなかった。

さきほどと打って変わって巨人に攻勢をかけているが、いつ逆転してもおかしくなかった。

「報告します！大型の巨人が複数体、出現しました！こちらに向かつてきます！」
「ここに来るといふ事は奇行種か……」

奇行種は、巨人の中で動きが予想できない存在である。

遠くに居る人間を狙うか、その場で踊っているか、巨人とじゃれ合うのか一切分からない。
ない。

少なくとも遠くにある本拠地に向かっているという事は奇行種で間違いないだろう！

現に変異種の3体は奇行種のように捕食より移動を優先している感じである。

「くっ……今更押し返されてたまるもんか！総員、突撃！私も出るぞ！」

「えっ、隊長自ら……？」

副官は彼の言動に驚いた。

キッツ隊長は、ピクシス司令から『図体がでかい割りに小鹿のように繊細な男』と称された。

それは的確であるが人によって判断が分かれるものである。

ある人は、身体がでかい癖に子犬の様に臆病な性格でいちいち反応する男と称する。

ある人は、恐れながらも常識に囚われず繊細な疑問を逃さずに的確に指摘できる男と称した。

双方の意見でも臆病ではあるが何かしらの行動をする男と評価できる。

そんな臆病な彼が部下達を鼓舞する為に最前線に突入するといふのだ。

副官は、隊長の成長を目撃して意見を却下させる事ができなかつた。

「防衛線の指揮は貴公に執ってもらおう。異論はないな？」

「必ず生還すると約束してくれるなら異論はないです」

「うっ……もちろん生き残ってみせる!!」

「(武運を!)」

キッツは専用馬に騎乗して護衛兵を引き連れて最前線に向かつていく。

それを見て戦闘を躊躇っていた兵士たちも次々と参戦した!

「精鋭部隊の隊長自ら交戦なされるぞ!我々は全力で援護するぞ!!」

「第三輸送班も来い！野砲でも無いよりはマシだ！」

「ここには人類最高の戦力が揃っている！この機会に全ての巨人を駆逐せよ！」
「第12分隊突撃ー！！」

冷静に考えれば蛮勇しか見えないキッツ隊長の行動。

だがこの戦場の最高指揮官が巨人に突撃して鼓舞されないわけがなかった！

「道を切り開け！人類の領域を奪還するのだ！！」

内心で怯えながらも大声で恐怖を誤魔化して突撃するキッツ。

左右後方には50名を超える騎兵が追従しており決戦を予見させる戦力である。

「前方から四足歩行の大型巨人！奇行種かと！」

「私が相手をする！その隙に後方へ回り込め！！散開せよ！！」

褐色の肌であり白色の刺青のような筋が全体に施されている凶暴そうな巨人。

キッツは、目の前の巨人が【変異種】だと分かった。

彼は超大型巨人によるトロスト区襲撃を受けて、巨人について徹底的に分析をした。トロスト区奪還作戦における死者は、奇行種の行動で振り回されたせいだと分析で判明した。

そこで褐色の肌をした強力な巨人の存在が発覚し、調査兵団から情報を得て対策を行なった

弱点部位を潰さなければ、うなじを削ぐことができない化け物。

故に精鋭部隊は今日まで変異種を仮想敵として訓練してきており実戦の機会が訪れた。

「隊長!?!何を…」

「ひっ…う、うおおおおお! うおおおおお!!」

彼は、自ら囿になって巨人に向かって単騎で突っ込んでいく。

狙うのは、喉元にある白色の器官である。

それをさえ潰せば、刃がうなじに通るのを知っているからこそ雄叫びをあげて突撃した!

「お前の相手は私だ!!」

キッツは馬上から飛び出してアンカーを巨人の喉元に射出して立体機動に移った。

臆病な老兵には似合わない筋骨隆々とした体躯の彼は双剣を巨人の喉に突き刺した！

「今だ!!うなじを狙え!!」

隊長の指示を聞くまでもなく選りすぐりの護衛兵たちが巨人にアンカーを突き刺して立体機動に移った。

しかし、変異種は横に転がって狩人たちを地面に激突させてそのまま潰すように転がった。

「ぐおっ!!」

キッツは必死に振り落されない様に柄を握りしめて放す気はなかった。

意識が何度も飛びそうになるが、気力と責務で耐え続けた!!

「怯るな!! かけ!!」

「たかが1体の巨人に後れを取るな!!」

「キッツ隊長を死なせるな! 総員突撃!!」

変異種が転がったせいで2名の人命を失った40名以上の兵士がまだ居る!

ただひたすらに彼らは巨人のうなじを狙って突撃をした!

「ぎゃあああああ?」

変異種は右腕を薙ぎ払い馬ごと兵士達を吹っ飛ばして、その内の1人に飛び掛かって貪り食った。

103期に配属された若い新兵は何度も咀嚼されて痙攣するだけの肉塊となった。アンカーを突き刺した感触をしたら転がって兵士を動けなくして食べる。

それでも避けるようであれば四肢で薙ぎ払って吹っ飛ばして咀嚼して食べる。

そんなルーチンで動いているように同じことを繰り返していた。

「やったぞ!!」

そんな変異種も年貢の納め時が訪れた。

巨人が近くに居た兵士に気を取られている内に荷馬車にあつた軽砲を設置した工兵部隊。

動きが鈍つた所に顔面に砲撃してこめかみ付近の肉を吹っ飛ばした!

その程度では巨人を倒せるどころか牽制にすらならない。

だが、一瞬の間が命取りだった。

「人類の怒りを…思い知れえ!!」

砲撃のせいでアンカーを撃ち込まれたのに気付かなかつた巨人は、うなじを削がれて倒れ込んだ。

ここでもようやくキッツは巨人の揺れから開放された。

「キッツ隊長!ご無事ですか!?!」

「ごほつ!ごほ!…あー!つくそ!無事だ!」

駆け寄った兵士に情けない面を見せながらもキッツは五体満足で生還した。小鹿のようだと評された彼ではあるが1人の兵士として任務を全うした。

もし彼が耐え切れずに刃を器官から抜けば、うなじが硬質化された皮膚に守られていただろう。

「点呼終了しました！」

「…何名やられた？」

「死者7名、重傷者2名、軽傷者4名であります!!」

「くそ!こんなに戦力が居ても犠牲者が大勢出るのか…!」

たった1体の巨人を殺すだけで死者7名、両脚欠損2名、軽傷者4名を叩き出した。調査兵団は壁外調査の度に兵員を大きく減らす但实际上に交戦するだけでこれである。補給も援護も受けられない壁外の環境など考えたくもない。

「隊長!新手の巨人がこちらに向かっています!!」

「巨人って…変異種じゃないか!散開しろ!これじゃあ餌になるだけだ!」

同格の変異種が40名近くの兵士に向かって突撃してきた。

このペースで兵員を喪失されるにもいかず、キッツは事実上の撤退命令を下した。

これは撤退ではない！転進であると言いたかったが、現場を混乱させるだけなので黙っていた。

「隊長が出るほどではありません！」

「我々だけで充分です!!」

「馬鹿！よせ!!」

キッツの制止を振り切って駐屯兵団の期待のルーキーたちが変異種に向かっていった。

四足歩行の巨人は元気そうな獲物を発見し、一度踏ん張ってから勢いよく跳び出した！

馬と巨人の速度が噛み合った結果、騎兵から見た巨人の相対速度が100km/hを余裕で超えた。

「まず…」

「逃げ…」

「うげ…」

1秒間で約28m以上で突っ込んでくる全長15mの物体など騎兵が回避できるわけがなかった。

回避行動をしようとした瞬間、激突して肉片が辺りに散らばった。

それでも勢いが止まらない巨人は、バウンドしてあらぬ方向へ跳んでいった。

最初の巨人の着地点から300mほど離れた騎兵に15秒足らずで激突してようやく巨人は止まった。

「ひょ…」

誰かが悲鳴を漏らした。

無理もないだろう。

巨人が跳んで30秒も経たないうちに騎兵が4名戦死した。

当の巨人は何事もなかったように姿勢を元に戻して獲物を虎視眈々と狙っている。

「ここでようやく足元に人間の死骸を発見して両手で掴んで潰れた上半身を噛み千切った。」

「散開しろ！散開!!」

「うわああああああああ!!」

「退避！退避!!」

キッツの再度の散開命令を受けて40名未満になった護衛兵達は散開した。桁違いな身長と重量とパワーがこの残酷な世界で生き残る秘訣である。

そのどれも手に入っていない人類など巨人に蹂躪される程度の餌でしかなかった。

「いい加減にしろ」

イアン・デイトリツヒは静かに怒りを燃やして変異種の露出した器官を削いだ。

巨人は突然、目の前に飛び込んできた人間に驚いたようだったがすぐに捕食しようとした！

「頭が高くてよ！」

「人類の恐ろしき！思い知れ!!」

フローラとリコ・ブレッツェンスカはバディアクションで変異種の両脚を削いだ。その衝撃で勢い良く倒れることは無かったがこれで跳んでくる事は無くなった。

「アーンだ!!」

思うように動けなくなった巨人のうなじを削いだのは、ミタビ・ヤルナツハである。強面で坊主頭でありぶっきらぼうな口調なので威圧感には精鋭部隊一である。人を思いやる気持ちも精鋭部隊一であり亡き同胞たちの仇を取った！

「この巨人とは二度と逢いたくないな…」

「イアン！美味しい台詞をもっていくなよ！」

「巨人を全滅させて最後に総括の一言を告げる役割があるじゃないか」

「それはキッツ隊長の役目だろうが！」

軽口を叩き合うイアンとミタビであるが相棒であるからこそこういった関係である。リコは呆れながら彼らのやり取りを見ているがフローラは新鮮だった。相棒はライリーが居るが、こうやって戦友同士が励まし合う事に憧れを抱いてしまった。

「…うん、そうよね。うまくいくわけないよね」

フローラは駆け寄ったライリーに視線を向けた。

ここで馬と兵士の感動的な物語が始まる事もなく彼女は蹴られそうに終わった。

彼女の脳内では抱き寄せてナデナデして友情を育む事をイメージしていた。

現実には跳び出してきた女を避けたのに追従したので蹴り飛ばそうかとライリーは考えていた。

何とも締まらない展開で終わった。

「これで大体は片付いたか？」

「『呻き声』はほとんど聞こえないのでこの辺りは大体片付いたみたいですね」

「呻き声？」

ここでフローラは失言をしてしまったのに気付いた。

フローラは、負の感情を“声”として聴ける能力の副産物に巨人の居場所が分かるようになった。

実際、副産物なのかは知らないが、同時に才能を開花させたのでそうなのだろうと考えた。

もちろん、巨人の呻き声が聞こえるので居場所が分かります。

…なんて発言されれば、檻がある病院に入院させられるのは間違いないだろう。

「いえ、巨人と戦闘をしていると呻き声が印象に残ってまして…」

「まあ、そういう事もあるだろう」

「マジかよ、そこまで巨人と戦闘したくないな…そうなる前に逃げるか」

「おつとイアン、それは問題発言だぞ」

「ミタビが居るから大丈夫だろう？」

「勘弁してくれよ…」

イアンとミタビは相変わらず漫才を続けていた。

一体何の役に立つと問われれば、これが彼ら流のコミュニケーションなのだろう。

部下の命を預かっている班長として同格に気軽に話せる環境を意識しているのかもしれない。

しかし、リコ班長の様子からただ軽口を言いたいだけなのだろうとフローラは分析した。

「あれ？」

フローラは「呻き声」がする方向を見たがどこにも巨人が居なかった。

出現した変異種は3体。

1体はキッツ隊長の部隊が討伐し、さきほど2体目を討伐した。
では、残りの変異種はどこに行ったのか。

『近くにいるわ』

まさかの透明にできるような特殊能力だったのか。

フローラはそう思ったが振動を誤魔化せるわけではない。

現に揺れていて…酔ってきそうな…か、ん、じ、が…。

『…まずい!!』

最初は巨人が近くに歩いているせいで地面が揺れているのだと思った。

しかし、揺れが大きくなり地中深くから地鳴りが聴こえてきた。

このままでは雑談しているミタビ班長とイアン班長が喰われると察したフローラ。無言でライリーに騎乗して銃口に音響弾をセットして走らせた。

「ライリー！撃つわよ！」

ライリーに騎乗したまま音響弾を撃ちたくなかったが仕方がない。

フローラは『緊急事態の合図』を相棒に伝えて音響弾を撃ち込んだ！

その瞬間、地面が大きく盛り上がって土砂が吹っ飛んだ！

「穴掘りの巨人なんて聴いたことが無いわよ!!」

残りの変異種は地面を掘り進んでいた。

音がする方向に向かって地下に潜んでいたが精銳班の騒がしい会話で動き出していた。

もし接近に気付いたとしても声を出せば足元から狙って来るといふ嫌らしさが厄介である。

ライリーは耳元で音響弾を撃たれたのに怒り心頭だったが巨人を見て過剰反応を諦めた。

「巨人だあああああ!?!」

「どっから現れた!?!」

「地下から出てきました!まさか地下に潜んでいたのか!?!」

フローラが何もない所で音響弾を撃つたのに不審に思った一同。

しかし、不振だなど感じる暇すらなく地下から巨人が跳び出してきた。

それを見て精銳部隊は再び態勢が崩れて混乱に陥った。

「なんで真つ暗なのに動けるのよ!?!」

フローラが真つ先に思ったのは「巨人は完全な暗闇では動けない」という常識だ。今でこそ常識であるが、この情報を得るまで調査兵が1000名以上死んでいる。

以前フローラがトロスト区で参加した巨人捕獲作戦で実験済みである。

4 m級のソニーは内向的で日光の遮断の一時間で動きが鈍くなった。

7 m級のビーンは日光を遮断しても3時間は動けたそうなので個人差はあるだろう。とにかく調査兵団の第四分隊に所属していれば嫌でも上官に聞かされる情報である。

「こつちに来ないでよ!!」

何故暗闇であるはずの地下に潜んでいるにも関わらず動けるのか疑問だった。

ただ、さきほどは地上に出たのである程度日光を浴びれば多少は活動できるかもしれない。

そんなことなど知るわけがないし、変異種なのでそう考えるしかない。

少なくとも捕獲は不可能なのでここで討伐するしかない。

「あの巨人を逃がすな!!」

「こいつが壁外から巨人を連れて来た元凶だ！」

「第9分隊は穴を見張れ！ 新手の巨人に備えよ!!」

「「了解しました！」」

暗闇なのに巨人が動けるロジックなど解明している暇ではないのは駐屯兵でも分かる。

下手すれば奴の来た穴から壁外からの巨人が侵入したと憶測を建てた。

こうなった以上、穴掘りの変異種を討伐しない限り、彼らはこの戦場から離れる事はできない。

『あと、掘った土砂をどうしたのよこいつ!?』

この場に居た全員が巨人が地下にもぐっているのに動けるのに疑問に思っていた。

フローラも思っていたが、更なる疑問点を見つけた。

穴を掘って地下を移動していたならその分の土砂はどこに行ったのかさっぱり分かっていなかった。

「地盤が……きやああああああああ!!」

「アデーレが落ちた!?!」

「退け! 巻き込まれるぞ!!」

駐屯兵のアデーレは震えながらも地下から飛び出してきた巨人を追跡していた。

そしてある地点で馬で通過しようと瞬間、足場が崩れて地下に馬と共に落下した。

同僚達はなんとか穴を避ける事ができたが彼女は生き埋めになってしまった。

10 m以上の底に落下し土砂に埋もれて彼女の転落人生はすぐに終焉を迎えた。

「まさか……!?!」

ここでフローラは転落事故を起こすほどの失った土砂は巨人の体内にあると予測を立てた。

すぐに口から吐かれても極力回避できるように蛇行で馬を走らせている。

彼女の不安は的中して、変異種から大きな土団子を撃ち込まれた。

「ライリー……ここじゃ良い的よ! 巨人に沿って周るわ!」

地中で動く関係か、顔には眼球がなく異常に大きな口しかなかった。

裂けた口しかないのつべらぼうの巨人は今までの巨人と一線を画す化け物に見える。

幸いにも外部に露出している弱点の部位は損傷しており、うなじを削ぐことができる。

フローラは、隙を見て討伐するつもりだった。

「なんてね」

ライリーの足跡を音で感知している穴掘り巨人に背後から襲撃する精銳兵たち。

そもそもまともに巨人と戦うのが間違っていて奇襲上等！勝てばいい！

精銳兵の2名は無言でうなじにアンカーを突き刺してガスを噴出して突撃した。

『勝った！』と誰もが思った。

フローラですら動きに対応できず討伐されるものだと思っていた。

「ぐぎやああああ!?!」

「がつああ!?!」

変異種は肌に敏感らしくアンカーを突き刺すとカウンター攻撃を行なう。キッツ隊長が挑んだ変異種は、転がって兵士を地面に叩きつけるタイプである。穴掘りの変異種は背中から高熱の蒸気を拭き出すタイプだった。

「(ぎ)ほっ……」

「あ……」

問題なのは、蒸気の中に体内にある砂利を大量に含んでいた。

凄まじい勢いの蒸気は兵士達の表皮を抉り取り肉体が赤く溶けるように消滅させた。アンカーを取り外す暇すらなく10秒も経たないうちにボロ雑巾と化した。

エレンとジャンのサウナ我慢大会で蒸気には慣れてるなんて言ってる場合じゃない。
い。

蒸気を浴びた瞬間、即死するカウンター攻撃だとフローラは感じた。

「撃て撃て！」

キッツ隊長に号令で、砲兵部隊が野砲を！工兵部隊が迫撃砲で変異種を砲撃した！
風を切った複数の砲弾が巨体に直撃して爆炎で巨人を吹っ飛ばした！

それでも兵士たちは油断せずに何度も砲撃を繰り返して爆炎を広げていく！
榴弾ではないので効果が薄いながらも集中砲火すれば巨人を討伐できる威力がある。

黒煙が夕日に染まる天を貫き、その大きさは動員できる砲では最大火力である。

「合計30発以上の砲撃だ……これで効いてると良いが……」

キッツは油断せずに更なる砲撃を加えるつもりである。

やるなら徹底的に念入りに巨人が消滅する瞬間まで彼は巨人を甘く見ない。

ピクシス司令に評された小鹿は、過小評価しない性格で精銳部隊の隊長に成り上がった。
た。

ただし、集中砲火のせいで彼は一つ重要な事を見逃した。

「黒煙が晴れるぞ！」

「構えろ!!」

総員、臨戦状態で砂埃と黒煙が晴れるのを待っていた。

そして晴れた瞬間、蟻すら見逃さないように地面を耕すほどの砲撃跡が見えた。

そこには巨人の姿は無かった。

「どこ行つた？」と一人の兵士が呟きそうになった瞬間！

「ぎゃああああああ？！」

「そこだ！！」

砲兵部隊の居る地面の真下から変異種が飛び出してきた！！

上空を飛ぶ砲兵や野砲、砲弾の数々が地面に落下した。

「舐めやがって！！」

同僚を殺された兵士は、怒りに身を任せて巨人にアンカーを突き刺して突撃した。

それを嘲笑うように変異種は高熱の蒸気を噴出させた！

散らかった弾薬が高熱で引火し、突撃した兵士どころか砲兵部隊の陣地を丸ごと吹っ

飛ばした!!

高熱の爆風があらゆる物を巻き上げて兵士を見るも無残な肉片を散らかした。

「ぐおっ!？」

伊達に歳を重ねてないキッツは地面に伏せて両手で頭を守った。

巨人が地面から飛び出した瞬間、啞然とする部下を見捨てて距離を取った。

自分の生存に最善を尽くす小鹿の異名も伊達ではない。

「こっちよ!!」

頭進撃のフローラは、この程度で怯えるわけが無かった。

ライリーを安全地帯に送った後、すぐさま音響弾を撃ち込んで専用銃を投げつけた。

音に機敏だと判断したので音響弾なら怯ませられると思っただからだ。

アンカーを突き刺してワイヤーを巻き取らなかつた。

「うっ!？」

音が止んだ瞬間、彼女はアンカーを取り外して全力で逃走した。アンカーを外してから3秒ほどで殺意のある蒸気を噴出した。

「音響弾が破裂してる間だけ効果があるのね…」

さすがに即死サウナを受けるわけにもいかず、様子見をしていた。

巨人は、近くに落ちた銃に反応せず、音響弾の撃った場所に反応していた。つまり大音量なら人間でなくても襲撃するようである。

「音響弾を撃って！早く!!」

フローラは呆気にと取られている兵士に必死に呼びかけた。とてもではないが1人で倒せる敵ではなかった。

音響弾を装備している兵士に援護してもらい、怯まし続けるしか勝利する術が無い。

変異種はフローラの叫び声に反応して駆け抜けていく。

彼女も分かかっていて大声で居場所を知らせた。

一か八かである。

彼女は観念したかのように立ち止まった。

『やっぱり…』

変異種はフローラを乗り越えて彼女を求めて突撃した。

そして獲物の音がしなくなると付近の音を頼りに徘徊し始めた。

『呼吸程度では反応しないのね』

穴を掘るせいで視力を退化させて聴覚を発達した存在。

銃の落ちた音すら反応しないなら呼吸程度では発見されないと踏んだ。

賭けは成功したが馬が居ないので再度発見されたら逃げきれない。

「続けざまに音響弾を撃て!!」

キッツの大声に反応して変異種が穴を掘り始めた。

地上より地下が音が感知しやすいと思つたのか、巨人にしか分からない事だ。

少なくとも無駄な動作の隙を突かれて音響弾が放たれた！

空気が振動が感じられるほどの爆音が巨人の動きを鈍らせた。

「うっ……ついぎいい!!」

第二波、第三波の騒音が耳を貫き視界を歪め、動きが鈍る。

それは巨人も同じ事である。

フローラは変異種のうなじを削ごうと駆け出した！

ここで重要な事に気付いた！

「弱点部位が再生してる!?!」

時間をかけすぎたせいで肉体の再生が終わっていた。

白色の器官は腹にあり、地下に潜る都合上、負傷する部位なので気にしてなかった。

しかし、地上に出た時間が長すぎて再生しきっていた。

これではうなじを削ぐことはできない。

「あああ!!」

フローラは、がむしやらに巨人の腹にアンカーを撃ち込んで突撃して部位を削いだ。音響弾の音は止んでおり、蒸気が噴き出すのは時間の問題であった。

「うおおおおおおお!!」

フローラと同時に駆け出したキッツは変異種のうなじを削いだ!

奇しくも彼女が器官を削いだ瞬間に彼の放った斬撃が巨人の皮膚に届いた。

もし、彼が臆病のせいで一瞬だけ攻撃を躊躇わなかったら、時間差で刃が届かず失敗していた。

それほど奇跡的なタイミングで変異種を討伐できた。

『えっ?』

歓声をあげる兵士達に取り残されたようにフローラは呆然と消滅する巨人の死骸を見つめた。

キッツも着地に失敗して地面を転がって悶絶していたが、そのまま胴上げされて涙目になった。

もちろん、嬉しくないわけではないが、タイミングが悪かった。

「た、隊長があのような勇猛さを示すなんて……」

未知なる変異種で動けなかったリコ班長は、上官の行動に感嘆としていた。

規律を重んじて時には冷酷な行動を取る臆病な隊長。

そんな彼が精鋭班の班長を差し置いて単独で巨人を討伐した。

これが最後の1体だったようで巨人はこれ以上出現してこなかった。

多大な損害を払ったが東防衛線付近の巨人はこの世から駆逐したようだ。

『なんとか巨人の侵攻を喰い止めたな……これで終わるとは思えんが……』

水を差すように新手に警戒するキッツは胴上げされながらも必死に次の一手を考え

ていた。

彼の用心深さと臆病の性格が噛み合って精銳部隊は、駐屯兵团で最強の部隊となっている。

「よし、よくやった！ 貴様の手柄は記録しておくぞ！」

「そこまで大げさに記録されても困りますわ……」

「いずれ駐屯兵团精銳班に推薦するつもりなんだが、実績が必要でな！」

フローラは自分の実績が公式記録に残るのを嫌がった。

「まず王政に目を付けられて、排除する為に対人立体機動部隊を差し向けられた実績がある。」

「なんやかんや大総統と大臣を脅迫して事なきを得たが、そもそも問題が解決していないかった。」

「同格であり2人と敵対しているメテオール・ニコラ・デレトフ会長に庇ってもらっている状態だ。」

そんな時にこんな目立つ真似などしたら、更に厄介になる事は嫌でも自覚していた。兵団一の問題児でも、壁内人類に自身の存在が知れ渡るのを恥ずかしがったのもある。

「私は規律を守る人間と、自身の実力で戦績を重ねる者が大好きだ」

「あ、ありがとうございます」

とりあえず調査兵団の新兵が桁違いな戦績を一度に報告すると信憑性に欠けることになる。

だからこそ、巨人騒動が落ち着いて検証になった頃に小出しに情報を出す事にした。結局、情報は公開されてしまうが、多少の時間稼ぎにはなったはずである。

「いけますよリコ班長！この調子なら防衛線が維持できそうですよ！」

「いや、巨人の恐ろしさは数の力だ。更に巨人が増えたらここは突破されるだろう」

リコは部下の樂觀を素直に受け入れる事はできなかつた。

さきほどの変異種が2体居たら絶対に勝ち目が無かつたと分かっているからだ。

一體ならなんとかなるが、巨人の群れに來られたら突破されるのが目に見えている。しかし、おかしな点がある。

「フローラはどう思う？この状況……」

「もしかして壁は破壊されていない……とか？」

「ああ、地下で移動する巨人が居たんだ。地下から出てきたのもあり得る……だが妙だ」「何かあったんですか？」

「……巨人の死骸から人が喰われた痕跡が無いんだ。ここまで内地に攻め込まれているのに……」

巨人は基本的に近くに居る人間を捕食する。

それはトロスト区防衛線や奪還作戦で嫌ほど実感している。

しかし、精鋭部隊や一般兵が討伐した巨人の死体からは異様に人の死体が少なかった。

巨人は討伐されれば消滅するが、人の死体は消えることが無くそのまま残る。

巨人には消化器官が無い以上、一定の肉塊が残るにもかかわらず死体が少なすぎた。それで、リコは恐ろしい仮説を考えた。

ここに来た巨人は「壁内で自然発生した」のではないかと…。

『巨人の行動は人類の理解を越える』とキッツ隊長は口癖のように発言していた。

実際、穴掘りの巨人が出現したので、間違っていない。

では、花が咲くように巨人は自然発生するのだろうか。

それを否定する材料がないからこそ、リコは部下を諫めるしかできなかった。

「調査兵、ご苦労であった。ここは我々に任せて今のうちに調査兵団に合流しておけ！」
「ハッ！」

ぶつきらばうに命令をするキッツ隊長に向けてフローラは敬礼をした。

一見すると横暴な態度だが、この後も街道の死守をするがお前は離脱しろと言っていた。

巨人が再度出現したら、調査兵団に合流するどころか身動きが取れなくなる可能性があった。

フローラという兵士を重要視しているからこそ、安全な場所に向かわせるために発言をしていた。

「ライリー……もう居るのね」

ライリーは呼び戻すまでもなくフローラの近くに居た。

今日は散々な目に遭ったせいで機嫌が悪いが、フローラが怖いので大人しく戻ってきた。

「おっ？もう行くのか？」

「勝利の女神様が去つちまうと白けた場所になるな」

「イアンさん！ミタビさん！後ろ！」

「……おっと、リコ班長」

「ミタビ、あとは任せた」

「おい逃げるな！戻ってこいイアン！あの野郎……見捨てやがった！」

フローラを見送りにイアンとミタビも駆けつけた。

相変わらず軽口を叩き合う面々を見てその場に居た者達は少しの間、安らぎを得た。フローラはお別れの抱擁をしたかったが、時間が無いので諦めて騎乗した。

「どこに行く気だ？」

「同期が未だにローゼの壁付近に展開してるので合流する予定ですわ！」

「まだ戦う気か…恐れ入ったな」

「一緒にいかがですか？」

「リコに叱られる役目があるからまた今度な」

ミタビに振られたフローラは手を振って駐屯兵団第一師団精鋭部隊と別れた。

地図によると、南方に拠点になりそうな古城が示されていた。

もし、南班が一度休息をとるならここだと思い、フローラはその場所に向かって進撃した。

それが更なる地獄になる場所と知らずに…。

68話 黄昏のラガコ村と月明りのウトガルド城

キッツ隊長率いる駐屯兵団が巨人と激戦を繰り広げている頃。

南班に所属するコニー、ベルトルト、ライナーは南部にある村に向かっていた。

そこは、コニー・スプリンガーの故郷であるラガコ村である。

「落ち着けコニー！どこに巨人が居るか分からんぞ！一旦下がれ！」

必死のライナーの呼びかけにコニーは応じなかった。

分かっていった。そんな事などとつくに分かっていた！

それでも奇跡的に村に巨人が来てない事を祈って彼は馬を走らせた！

見慣れた看板を通り過ぎて村の門を越えて彼は故郷に帰ってきた！

「俺だ！コニーだ！立派な兵士になった俺が帰ってきたぞ！」

しかし現実是非情だった。

民家の至る所が破壊されており、地面には複数の巨人の足跡が残っていた。

風に揺れる木材や金属が擦れる音だけが廃墟を賑わらせていた。

黄昏で染められたラガコ村は人類の終わりを比喻しているかのように静かだった。暗闇がこの村を染めようとしているようにコニーの心も絶望に染め上げていく。

「俺の家…母ちゃん、父ちゃん…マーティン、サニー」

きつと、みんな逃げて無事なはずだ。

いや、民家に隠れているかもしれない。

下手に逃げれば巨人に追い回されるのできつと隠れているはずだ。

家に帰れば家族が震えながら隠れており、自分の声で安心して出てくるはずだ。

そして家族全員、合流して安全地帯に帰るんだ！

「大丈夫だ…俺より頭が良い奴が馬鹿みたいに死ぬわけがない…」

コニーは脳裏に横切る『全滅』という単語をなんとか振り払おうとしていた。

『認めれば楽になるぞ』という悪魔の囁きに耐えて実家に向かって馬を走らせた。

天才の自分の血が流れるみんなが死ぬわけないと何度も思いながら。

だが、コニーの実家は巨人に潰されていた。

いや、巨人に潰されている。

「あ、あつ…」

コニーは思わず馬を止めた。

自分の家に仰向けで押し潰している巨人。

頭だけが壁から飛び出しており、その視線が彼と合った。

この瞬間、時が止まり全身が冷却して汗が揮発した感じがした。

「おい下がれ!!」

なんとか追い付いたライナーはコニーの馬の手綱を握って移動を促した。

ベルトルトも追い付いて辺りを警戒している。

「下がれ! 周囲を警戒しろ!」

「何か異常な物を見つけたら大声で叫んでくれ！」

調査兵团第一分隊のリーネとゲルガーはスナップブレードを構えて慎重に接近した。無防備の彼らは固唾を呑んでその様子を見るしかできなかった。

「なんだ？来ないのか!？」

「ゲルガー、こいつの手足を見てみろ！」

「ん!？」

リーネの一言で巨人の手足を一瞥すると衝撃的事実が発覚した。

その巨人の手足は異様に細く、餓死寸前のように骨に薄皮が張られた程度に感じられた。

おそらく胴体を支えることができずに民家に転倒してしまつて動けなくなつたのだろう。

しかし、ここで新たな疑問が発生した。

「じゃあ、どうやってここまで来たんだこいつ…」

ゲルガーの疑問に答えられる者は居なかった。
ただ分かるのは、コニーの故郷は壊滅して巨人が1体取り残されている事だけだった。

「思ったより巨人が少ないな……」

「おそらく駐屯兵団が迎撃した影響でそちらに向かったのでしょう」

「ヘニング、この先に集落はあるのか？」

「……いえ、壁に近いので人が住んでいる領域ではないはずですよ」

「そうか、思ったより早く終わりそうだね」

西班のナナバはヘニングの返答で近隣住民の避難の呼びかけが終わったのを知る。

それを喜んだのはユミルである。

これでやっと安全な場所に帰還できる。

「よし、このまま南下してして破壊された壁の位置を特定するぞ」

「ナナバ、さすがにこの手勢じゃきつくないか？」

「想像より巨人が少ない気がしてね。西側から壁に沿って移動してみようじゃないか」

無防備な104期女調査兵たちを率いるナナバは、壁の破壊場所を特定したかった。

巨人が通れるほどの穴があるなら付近に巨人が集っているはずだ。

つまり壁付近で巨人の群れを見つげるだけで大体場所を推測できると分かる。

クロルバ区から壁を沿って南に向かい、トロスト区に向かう。

どこかに穴がある以上、必ずトロスト区に着く前に巨人と遭遇するだろうと踏んだ。

「待ってください！ 私たちは戦闘装備がありません！ 前線から一旦引かせてください
！」

「連絡要員を確保しておきたいんだ…諦めてくれ」

「君たちは兵士だ！ 初期対応に掛かっている以上、頑張ってください」

ユミルの提案は上官であるナナバとヘニングに却下された。

わずかに4名の中で戦闘ができるのは2名のみ。

圧倒的に戦力が足りておらず、巨人を早期発見できなければ一瞬で巨人の餌になりかねなかった。

自己犠牲精神の塊である彼女は、確実に囷になってしまふからだ。

「ねえユミル？ 私は調査兵団に志願したから良いけど、ユミルは違うでしょ？」

「クリスタ：何が言いたいんだ？」

「貴女が調査兵団に志願したのは私が……」

「私が!? はっ！ 私の為って言いたいのか!？」

「じゃあ、何でここに居るのよ……理由が無いなら逃げてよ」

クリスタは、お節介のユミルが自分を心配して調査兵団に入団したと察した。

頭皮を嗅いできたり「お嫁さん」とか発言する気持ち悪さはあるがライナーほどではない。

いや、ライナー・ブラウン如きと比較するのは親友に失礼かもしれない。

それにユミルが自分に成績上位10位を譲ってくれたと分かっている。

「クリスタ、貴女……どんな手で10位になったの？」

「メルダ……私だつて分からないよ」

104期訓練兵団を卒業したその日の晩、メルダ・プリントはクリスタを問い詰めた。

普段の実技ではクリスタを上回つて教官の評価が高い彼女は、成績12位だった。

さすがにサシヤレベルじゃないのは自覚しているが華奢なクリスタ如きが10位になるわけがない。

憲兵を目指していたメルダからすれば彼女が不正をしているしか思えなかった。

「おいメルダ！『私のクリスタ』に何をしている!!」

「あら、成績11位のユミルさん、順調にいけば10位に入れたのに何かハマしたの？」
「何が言いたい……!」

メルダは、ユミルが普段の実技でクリスタより点数を稼いでいるのを知っている。

だからこそ卒業試験で手を抜いたのは明らかである。

「貴女の愛するクリスタに10位を譲ってあげたんじゃないの？」

「お前…!!」

「だって、こんな華奢の子が同期の女で2番目に身長が高い貴女に勝てるわけがないじゃない」

「立体機動に体格は関係しないんだが？」

「確かにコニーはそうだけど、戦闘能力が低いクリスタがユミルに勝つわけがないもの」

意識するとクリスタは成績上位10位に入れるわけがなく、ユミルが譲ったと言っている。

教官や男子の前では良い子ぶって裏ではあくどい事をしてきたメルダは、彼女も同じだと思った。

クリスタは何故、自分が10位なのか表彰されても分からなかったがようやく納得できた。

本来10位だったユミルが自分に譲って憲兵になって欲しいという気遣いと分かっ
てしまった。

「そういうお前こそ、フローラを蹴落として12位になったんじゃないのか？」

「あの子は色々やらかしてるからね。実技成績が高くてでも10位にはなれないよ」

「私も口が悪くてな！印象が悪いせいで…もしかしたら11位にされたかもな！」

「あたし見たんだ…ユミルが相手を妨害してクリスタを10位にゴールさせた事を…」

「こいつ…!!」

メルダは不正で12位になっていたのでユミルの発言に肩を竦めて誤魔化した。

それと同時に凶星を指されて苛立ったので、メルダはあえて煽った。

その一言を聴いたユミルは、クリスタにちよつかい出してくる女に殺意を向けた！

この女のせいで自分のお嫁さんになるはずのクリスタが気弱で怯える性格になってしまった！

ここで糞女を殴り倒せればどんなに楽なのか…!

むしろ、メルダはそうするように促しており乗って殴れば、被害者面してユミルの成績は剥奪。

罪悪感があるクリスタを利用して、今からでも10位になる魂胆があると察したからこそ動けない。

「何をしてるの?」

「成績13位、フローラ・エリクシアさん。何か用ですか？」

「晩御飯ができたので報告にしに来ただけですわ」

「…ですってユミルさん、ひとまず食事をしませんか？」

「ああ、良いだろう！」

成績10位から13位の女が勢揃いしてしまい修羅場になる…事はなかった。

同期の女の中で最も長身で成績13位のフローラを見てメルダは適当な建前を述べ
て逃走した。

さすがに「コミユカの化け物」を巻き込むと、自分が不利なのは明確だったからだ。

クリスタとそこまで仲良くないフローラだが、論争していればボロが出てしまうと分
かっていた。

ユミルはフローラに感謝しつつ、自分の嫁を愚弄する女狐を不快ながら見送るしかで
きない。

メルダは退き際が良いので、あくどい事をして証拠が掴まれず、今まで暗躍してき
た。

一時は、『クリスタと双璧の人気』と男子から揶揄される事もあったほどの実力者。

そんな彼女から『自分は10位を譲られた』と知らされてクリスタはずっと引き摺る

事になった。

「誰に訊いたって成績10位は貴女だと答えるはず……なんでそこまでお膳立てしたの？」

「クリスタ、考え過ぎだ！」

「憲兵団に促すばかりかその権利すら私に渡そうとした……私の生まれた家と関係がある？」

「ああ、ある！」

ユミルの返答にクリスタは前を見ることができなかつた。

母親から自分の存在を否定されたところか恨まれた過去がある。

それほど自身に流れている血は【特殊】であり公になる事ができない。

それをユミルが知っているというのだ。

もしかしたら彼女は王政の……。

「安心してくれよ！私がここに居るのは全て自分の為なんだ！」

「そうなの？」

「ああ、第二の人生は自分の為に生きると決めた！誰にも私の意志は束縛できないさ！」

「そっか…よかった」

クリスタの苦し紛れの笑みを見てしまいユミルは自分が疑われたのを知った。

確かに内地の教会で金品を漁っていた時、クリスタの噂を聴いて気になっていた。

まるで自分の前世のような感じがしてじっとしていられず彼女と接触した。

そしてずっと仲良くやってきて気付いた。

クリスタは女神で運命の相手だと！

「でもクリスタと結婚して束縛されるのは良いけどな！」

「もう！こんな時に!!」

結婚という言葉を聴いて頬を赤くして狼狽えるクリスタを見てユミルは笑った。

自分を良い子として演じるクリスタではなく本来の彼女の姿が見えたからだ。

ナナバとヘニングは後方のやりとりを聴いて何とも言えない気持ちで馬を走らせた。

同性愛は重度の精神病として壁内では常識であるが、そんな事など気にする余裕すらなかった。

南班に所属してコニーの故郷に来たベルトルト・フーバーは焦っていた。

明らかにライナーの様子がおかしくて、何て声をかければいいのか分からなかった。ここで何が起こったのか…少なくとも外側に飛び出した瓦礫を見れば分かるはずだ。それなのにさつきから落ち込んでいるコニーを気にしており、同情しているようだ。

「コニー…生存者は居たか!？」

「いねえよ…もう…ない…おしまいだ…故郷は…俺の故郷はもうどこにもなくなっちゃった…」

松明を抱えながら泣いているコニーを見たライナーは頼れる兄貴分として動いてい

る。心中を察するように目を閉じてコニーの左肩に右手を置いて元気づけた。

申し訳ないという意思表示なのは間違いないが、複数の意味に取れた。

『すまない、失言をした。辛いのは俺も同じだ』という失言を謝罪して勇気づけようとした。

『すまない、お前の村の住民は巨人化されたようだ：俺達のせいだ』という感情かもしれない。

『すまない、マルセルを喰われたのに作戦を続行した俺のせいだ』というカミングアウトか。

『すまない、悪魔の末裔だから犠牲になるのは辛い事だが我慢してくれ』という思考か。

『こうやって同情したフリをすればクリスタに評価される材料になる』という下心か。

『寝ぼけたベルトルトが超大型巨人になって壁内に巨人を入れた』という頭マーレか。

ベルトルトにはライナーの思考が読めなかった。

兵士と戦士の切り替えがシームレスで行なわれており、精神分裂した爆弾になっていく。

下手に突くと爆発してエルディア人に味方するのか、自分に味方をするのか分からない。

ここに居るコニーたちを皆殺しにして発狂するか。

壁を破られたと推測した瞬間、こつちを見てきたので敵対するかもしれない。

内心を読んでいる素振りがあるフローラに訊かないと分からないくらいライナーの頭がおかしい。

自発的に動けない彼は、2人のやり取りを黙って見ている事しかできなかつた。

「妙だな……ここまで破壊された跡があるのに血痕は無いな」

「さつき村の馬小屋を見てきたら馬が繋がれていた……避難した形跡が無い」

「まるで住民が蒸発したようだな」

「コニーの故郷じゃなかつたら廃村にしか見えないくらい不自然だよ……」

ゲルガーとリーネはお互いが得た情報を小声で交換し合つた。

民家の破壊具合から巨人が人を察知して破壊したと思われた。

ところが捕食した様子はなく血痕が一滴も垂れていなかった。

その時点で不自然であるが、馬小屋に馬が繋がれており逃げた形跡が無い。

家の中に料理が残されているなど、さきほどまで人が居た痕跡が所々残っている。

なにより巨人が民家を徹底的に破壊しているので、実際に人が居たはずである。

巨人は人にしか興味を示さないし、それ以外には攻撃する素振りすらしないからだ。

「少なくとも…あの馬小屋はコニーに見せるわけにはいかないね…」

「見つかったらどうする？」

「巨人騒動の裏で盗賊団に村人が攫われたと、ごり押しするしかない」

リーネは盗賊団に村人が拉致された後、巨人が人間を探して村を破壊したと推測した。

そんな事あり得ないが、少なくともこのオカルト現象を説明しようとしたらこうなつた。

数年前まで人身売買が行われた地域があり人攫いは、数年前まで存在していた。

ウォール・マリア陥落から人減らしの一環で戸籍が徹底的に管理されたので自然と消滅した。

それでも東洋人など珍しい人種は未だ人攫いに狙われている。

少なくともお茶会でフローラが同期のミカサの過去を述べてくれたので作られた説である。

「コニー、ライナー！ベルトルト！死体を見なかったか？」

「見てません…」

「いいえ」

「…なかったです」

彼らの様子から死体を目撃しておらず、村の馬を発見できていないようだ。死体どころか血痕の一滴すら無いなら僅かではあるが希望はある。

「さっき村の馬小屋を見てきたんだけど…馬は1頭も居なかったよ！」

「ほ、ホントですか…!？」

「ああそうだよ！家族も村の皆も誰も喰われていないよ！巨人の発見が早かったんだ！」

「そうか、そうですよね！」

コニーはポニーテイルの髪型が印象的なりーネ先輩の話聴いて希望が湧いて来た。

元気づける為の嘘かもしれないが、それが本当であると願って信じる事しかできなかった。

「馬小屋には色んな荷物が散らばっていた！慌てて逃げた証拠だ！」

「聞いてくれよ！こんな非常事態なのにゲルガーは酒代の為に火事場泥棒しようと……」

「リーネ！変な事を言うんじゃないやねえええ!!」

嘘も方便という事もあり、リーネは嘘をできるだけ信じ込ませる為に更なる嘘を付いた。

ゲルガーからすれば新兵から悪人に見られてしまうので、たまったものじゃなかったが！

彼の慌て具合からコニーは本当の事だと思ったので、涙を服の袖で拭いた。

「これより！壁の破壊箇所を特定しに行くぞ！松明をもって出発するぞ！」

「ほらほら、私たちの任務はこれからだよ！早く騎乗して出発だ！」

「……はい」

上官たちに乗馬を促されたコニーは松明を抱えて自分の馬に向かって走り出した。家族が避難した以上、ここに長居するつもりはなかった。

安心した彼は鞍にしがみ付いて跳んで鎧に足を乗せて、もう反対側の鎧にも足を乗せようとした。

〈オ…アエリ…〉

自分の後方から誰かの声があった。

南班は目の前に居て自分が一番後ろのはずだ。

それより後ろは誰も…いや、1体居る。

コニーはゆっくりと振り返ると仰向けに倒れている巨人と目が合った。

その巨人は良く見ると自分の母親にそっくりな感じがした。

「お、おい今…」

コニーの鼓動が高まっていく。

信じたくないが今の声、発言した単語、そこから導き出せるのは…。

座学など知識や馬鹿と呼ばれるほどに頭脳運動が苦手だったが頭の回転自体は速い方だった。

「コニー！急ぐぞ！先輩たちに置いて行かれるぞ!!」

「ライナー！聞いたかあいつが…」

「ああん!?俺には何も聴こえてないぞ!そんな事より任務に集中しろ!!」

「なんか…あり得ないけどさ…あの巨人…母ちゃんに…」

ライナー・ブラウンは、コニーが事実には気が付き始めたのを勘付いた。

だからといってどうする事もできない。

彼ができるのは一っただけだった。

「コニー！お前は今どんな状況か分かってるのか!!」

「でも…」

「今の俺達の働きが数十万の命に直接影響するんだぞ!!それともなんだ!あり得ない妄想の方が大勢の人命より大事な事なのか!!お前が考えるのは避難した家族の事だろうが!!守りたい物を考えるならやるべきことは決まってる!兵士なら最善を尽くせ!!」

作文力で【戦士】になったと言っても過言ではないライナー・ブラウン。

相手に大声でまくし立てて思考させる暇すら与えず、自分の意見を承諾させる技能があった。

アニ・レオンハートの苦難は大体、こいつのせいだと過言でなく何度も殺意を向けられた。

その癖、兵士ごっこを存分に楽しんでおり、心身共に疲弊したアニはミーナに癒しを求めた。

子猫の様に守ってあげたくなる小柄な少女との会話だけが彼女の癒しであった。

そして鎧の巨人討伐を掲げるフローラを心底応援していたほどライナーが大っ嫌いだった！

「……ああ、そうだ！その通りだ!!」

コニーは、さきほどリーネ先輩から住民が避難したと聞いた。

だからさっきのは幻聴だと思い、先輩たちに付いていくように馬を走らせた！

ライナーの作文力の高さは切羽詰まった状況下ほど口八丁で誤魔化せる技術となった。

それでも油断せず彼は、『巨人化』について気が付いたコニーを監視していた。

そのライナーを見てベルトルトは余計に相棒の真意が掴めずに混乱した。

コニーを見張るライナーを見張るベルトルトを見送る仰向けの巨人という不思議な構図になった。

夜の帳が下りた頃、1人の少女が暗闇の中で馬を走らせていた。

104期調査兵のミーナ・カロライナは暗闇で迷子になっていた。

東班に所属していたが巨人の群れと遭遇して班員と離散して未だに誰も遭遇できなかった。

「ああ…嫌…」

激戦を繰り広げていた東防衛線が近かったのが彼女の運の尽きであり逃げ回っていた。

しかし、最低限な装備すら持たずに伝令役になってしまったのが運の尽き。

地図も松明も巨人と交戦する装備がないまま、馬と共に暗闇を彷徨っていた。

「やだやだ…」

馬と違って夜目が利かない少女は夜に怯えていた。

近くに巨人が居ても感知できないのもあるが、死後の世界だと思ってしまうからだ。

トロスト区防衛戦で、見つめてきた巨人に頭を齧られそうになった事がある。

その時は親友が助けてくれたので事なきを得た。

しかし、あまりにも助かった気がせず、実は自分は死んでいるのではないかと思っていた。

自分だけ転生できず悪夢の中を彷徨っているのではないかと…。

それを考えるだけで過呼吸で苦しくなり自分の存在が分からなくなった!!

「ああああっ!!! あああああああああ!!!」

大声を叫んで必死に恐怖から逃れようとするが心が更に追い詰められた。

両手で髪の毛を搔いて何本か毛を抜いたがそれでも落ち着く事はできなかった。

馬は何事かと思い、停止したので更にミーナはパニックに陥った。

「ミーナ、こんな所で何をしてるの？」

「見て分からないの!?! 東班から逸れて彷徨ってるのよ!!」

他人事のように訪ねて来た女の声に反論したミーナ。

すぐに暗闇の中で誰かが居るのは分かった。

「偶然ね! わたくしも暗闇で彷徨っているわ」

「フローラ!?!」

「ミーナの声が聴こえてね…何かあったと思って駆けつけてきたの」

フローラは夜になってから照明道具を持ってくるのを忘れたのに気付いた。

だからといって死ぬわけじゃないので「まあいいか」と気にせずそのまま進撃していた。

トロスト区やカラネス区の外に暗闇の中でライリーで駆けまわった頭進撃に隙は無かった。

「どうしよう!?!」

「少なくともこの近くで人の“声”がするから合流しましょう」

「何も聞こえないけど…そんなに聴覚が良かったの?」

「トロスト区奪還作戦の時に転がった鋼貨の音で枚数を聞き分けるくらい良いわよ」

フローラは聴覚が優れており、微かな音すら聴き取れた。

だからこそ東防衛線で音響弾の連発は耳に堪えたのだが生還できたので特に気にしなかった。

更に負の感情を“声”として聴ける能力のおかげで、人の特定などお茶の子さいさいである。

「でも前が暗くて見えないよ…」

「じゃあ、わたくしが手綱を引っ張って誘導するわ」

「…馬を捨ててライリーに騎乗して良い?」

「駄目に決まってるでしょう!!」

とにかく温もりが欲しかったミーナはフローラに甘えた。

アニに甘えた様に親友にも甘えたかった。

そんな彼女の願いは意外な事で砕かれた。

「雲が晴れた…」

「今日は満月ね…月光のおかげである程度見えるわ」

「合流するの？」

「そこに古城が見えるわ…一旦そこに避難しましょう」

フローラは暗闇が晴れたので一度古城に向かう事にした。

最初の目的は、このウトガルド城であったので場所が分かった以上そこに向かう事にした。

さきほどと意見が変わっているがミーナは疑う事もなく城に向かった。

「巨人は…居ないけど何かおかしい！」

「ねえフローラ、人が居た痕跡があるんだけど…」

フローラとミーナは、観光名所だったウトガルド城に辿り着いた。

予想以上に荒廃しており二本の塔とそれを繋ぐ回廊だけが辛うじて残っている。

長居すると崩壊しそうな感じがしたが、少なくとも平原で野営するよりマシである。

ただ、部品や道具が転がっており数日前まで何者かが拠点にしたような痕跡が残っていた。

「馬小屋に…馬は居ないわね」

「ここにライリーを繋いだら？」

「良い提案ね！さっそく実行しましょう！」

親友の一言でフローラは相棒のライリーを馬小屋に待機させようとした！

しかし、ライリーは束縛を拒絶するように大暴れして抵抗した。

「ライリー!!…落ち着くまで馬小屋に入れられないわね」

「どうするの？」

「一旦、自由を謳歌してもらって帰って来てもらおうしかないわ」

人見知りのライリーに様々な人を乗せてしまい苛立っていると思ったフローラ。

牝馬なので、ミーナが乗ってきた雄馬が隣で繋がれているのが気に食わないかもしれない。

そんな事など分かるわけも無いので、仕方なく合図を送って一旦解散の指示を伝えた。

定期的に指示を聞かないのでフローラは、ライリーの興奮が収まるまで自由にさせた。

人見知りでありながら寂しがり屋なので、いつか落ち着いて戻ってくるのを知っていた。

「さあ、ミーナ。この城を探検しましょうか」

「えっ?」

「わたくしたち、調査兵团でしょ? 未知なるこの城を探索しましょうか」

月明かりに照らされた親友は、好奇心旺盛の少女に見えた。

巨人がいつ襲撃してくるか分からないのに一切恐れを抱いていない。ミーナはそれが羨ましかったが、何のことは無い。

「うん、一緒に行こうね！」

別に弱くても良いんだ。

親友と一緒にどこまでも行ける。

月明かりが独特な雰囲気を漂わせており、はつきり顔が見えないから表情を想像する事ができる。

きっと純真で無垢な笑みをしていると信じてミーナはフローラの後についていった。調査兵団らしくこの古城を調査する為に！

6章 全てを偽っても過去は変わる事無く自身や裏切つた者を苦しめると分かってしまった時代

69話 壁外から来たと察した者達

「妙だな、穴に近づいているはずなのに未だに巨人と遭遇しないとは…」

「ハンネス隊長、やはり例の「穴掘り巨人」の仕業だったのでは？」

「フィル、伝令から聞いたのだが、掘り返された場所から巨人は出現していないそうだ」

「厄介ですね…」

「ああ…」

壁の破壊箇所を特定する任務を遂行してるハンネス・ルドマン隊長。

副長のフィルとの会話で分かった事がある。

巨人は想像以上に少ないという事だ。

もちろん、油断はできないがシガンシナ区といいトロスト区と比べると巨人が少なすぎた。

東防衛線で大半の巨人を駆逐したと言わんばかりに壁付近では巨人と遭遇しなかった。

「思ったより事態は深刻ではないのでしょうか…」

「分からん。奴らは穴を空ける時に大量に集まって来るからな…いつ来てもおかしくないぞ」

ハンネスができるのはこのまま進軍して壁の穴を見つけろ事だ。

トロスト区からカラス区、つまり北東部の地域では巨人が発見されていない。

なので破壊された箇所は、トロスト区からクオルバ区の間だと推測できる。

なのに巨人の姿が見えないということは、穴はまだ遠くにあるという事だ。

「願わくば、このまま穏やかなままであつて欲しいが無理そうだな」

ハンネスはできれば、巨人と遭遇しないまま穴を発見できる事を祈った。

彼は5年前にエレンから「駐屯兵団から壁工事団に改名しろ」と言われた事がある。

あの時は悪くないと思った。

真面目に壁の補修工事を取り組んだ晩に飲む酒は格別といったもんだ。もしあの墮落した日々を取り戻せるなら彼は何でもする気だった。

「壁の穴を放置するなんて【壁工事団】として失格だからな…」

「隊長？」

「何でもない…忘れてくれ」

部隊長として兵の命を預かる立場になったハンネス。

それでも全てが終わったら墮落した生活を送りたいと願う中年のおじさんだった。

これ以上の日常を奪われない為にも彼は壁の破壊箇所を目指して進撃した！

期兵。

ミケ分隊長の命により東西南北の4つの班に分かれた調査兵団第一分隊及び104
そのうちの南班は、壁の破壊箇所特定できないまま壁に沿って進んでいた。

「ハアハア…まだ見つからんのか」

ゲルガーは真つ暗を松明で明かりを灯して馬を進めているが、本音は帰還したかった。

いつ巨人と遭遇してもおかしくない真つ暗で道なき道を進んで行くなど正気の沙汰ではなかった。

「点呼でもする？」

「フローラみたいな事を言うんじゃねえよ！」

「あらやだ、私はあの子に憧れを抱かれている女だというのに…！」

「大人の女性の肉体として憧れを抱いているだけで、お前自身には憧れてないと思うぞ」

「言つたなリーゼント野郎！それを松明で火を灯すともっと明るくならないと思うんだけど？」

「勘弁してくれよ…」

同僚のリーネは、震えた声でゲルガーと軽口を叩き合つた。

新兵3名を率いている以上、弱さを見せるわけにはいかなかったからだ。

穴に近づけば、必然的に巨人と遭遇する。

その時点で、探索を打ち切って新兵たちを安全地帯に逃がす必要がある。

誰か1人でも生き延びれば、情報は伝わるからだ。

それでも誰も死にたくないのは同じで馬の速度を落として一同は進軍していた。

頭フローラのように明かりを付けずに真っ暗の中で全速力で馬を駆けるほど馬鹿ではないのだ。

「うっ！」

ゲルガーは空中を彷徨う4つの鬼火を見つけた。

人魂は迷信と言う者がいるが調査兵団には縁があるものである。

土葬した死体から発せられるガスと発光する物質が反応して鬼火が発生するのだ。

ここに墓地などあるわけないから、もしかしたら巨人に喰われた死体だと思った。

それでも先輩として勇気を振り絞って馬を進めた。

「なんだよナナバかよ…」

期待して損したわけじゃないが……そもそも期待してはいけないものだが、ゲルガーは拍子抜けした。

西班牙であるナナバが出現するとは思わず、悪口の一言でも告げてやろうかという気持ちになった。

「お前らも壁に沿って来たのか？」

「ああ、それで穴はどこに？」

「はあ……？」

「かなり西沿いからここまで来たが異常は無かった。だからそつちに異常があるはずだ」

西班牙を率いるナナバは、南班のゲルガーの反応から異常が無かったと分かった。

考えたくもないがどちらかが見逃したか。

それともトロスト区のすぐそばで穴があるのか。

ただ言える事は、双方とも壁に沿って移動したのに壁の異変を発見できなかったという事だ。

「いや、こちらにも穴を見てない」

「見落とした可能性は？」

「巨人の大群が通れる穴だぞ…あり得ない」

「まさか…カラネス区の変異種のように50mの壁でも登ってきたか？」

南班と西班は予想外の出来事に戸惑うしかなかった。

複数の巨人が悠々と通れるほどの穴を見つけられなかった。

つまり、巨人は壁から登ってきた可能性が浮上した。

第57回壁外調査が実施された日、巨人が5体も壁を登ってきたのであり得ない話ではない。

「どうする？」

「もう一度探索と言いたい所だが、馬も我々も限界だ」

ゲルガーの問いに対してナナバが返答をした。

全員が長時間に渡る搜索で限界に達していたので一度休息をとる必要がある。

とはいえ、こんな真つ暗な平原で野営をするわけにもいかなかった。

「せめて月明かりがあればな……」

ゲルガーの願いは神に届いたのか、雲から満月が顔を出して月光で辺りを照らした。本を読むほど明るくは無かったが、少なくとも遠くに居る巨人を発見できそうなほど明るかった。

そして月明りのおかげで近くにある古城を発見した。

要塞になりそうな場所を見つけて歓喜した彼らは、城を指して馬を走らせた。

幸いにも巨人と遭遇する事がなく辿り着いた一同。

そこで彼らを待ち受けていた物とは……！

「ライリー！扉を蹄で叩かないで！扉が壊れちゃうわ！」

「まだ乗って欲しいんじゃない？」

「いやいや、もう無理よ！ずっと戦い続けて身体がボロボロよ！」

この世で一番自由な奴である牝馬のライリーが塔の中へ進撃しようとしていた。

さすがに扉を破壊されるのは困るフローラは立体機動で降りてきて制止している。

塔の窓から顔を出して他人事で述べるミーナは嬉しそうに漫才を見下ろしていた。

「なんかフローラが居るぞ」

「まーた何かやらかしたのか」

「フローラだから仕方がないよ…」

南班の104期調査兵の野郎共は、またフローラがやらかしてると思ってたため息を吐いた。

トラブルメーカーの彼女は、いつも騒動の渦中に居る。

トロスト区で覚醒しなかったら…いつも死にかけるやべえ奴としか言いようがない。

「良かったなクリスタ、これで巨人に囲まれても安心だな」

「うーん、何か変だけど…確かに安心だね」

ユミルはクリスタを守り切れる自信がなかったからフローラが居て安心した。

クリスタの本性を見抜いている同期の中で友好的なのがこいつしか居ないのもあった。

さきほどまで震えていたクリスタは、彼女と馬のコントを見て笑みを溢すまで精神が回復した。

「ビビッて損した…フローラと分かっていたら震えずに済んだのに…」

「人類最強の女か。ひとまず両手で数えられる巨人なら対応できる」

「一応、新兵なのにその扱いは可哀そうじゃない？」

「じゃあ、リーネが代わりになってやれよ」

「ゲルガーがリーゼントを刺したら考えてあげるよ」

「どんだけリーゼントに恨みがあるんだ…」

第一分隊の面々は、人類最強の女を見て安心した。

104期の同期達以上にフローラの実力を知ってるからこそ安堵していた。

もし、フローラが同行していたら怯えながら暗闇の中で進軍しなかった。

むしろ、驚異的な聴覚で巨人を見つけ出して巨人を掃討する彼女を観戦するくらいだった。

104期訓練兵出身の同期がフローラに癒される様に彼らも戦闘では安堵する存在だった。

女としては…男衆と雑魚寝するくらいならフロローラの横で寝る方がマシな程度な扱いだ。

とりあえずフロローラを女性と認めるのは、全国の乙女に失礼である。

「とりあえずフロローラは放置して城内に入ろうじゃないか」

緊張がほぐれたナナバは、馬とコントを繰り広げているフロローラを無視して城内に侵入した。

疲れ切った一同は、無言で肯定し、腕を馬に噛まれて暴れる女を無視してそのまま付いていった。

兵団一の問題児の扱いは慣れたものである。

ちなみにライリー以外の馬は全員、大人しく馬小屋で休んだ。

フロローラが人類で変異した存在であるようにライリーも馬の中で変異種であった。

「出発は日の出の4時間前だ。我々が交代するから新兵は良く休んでおけよ」

ゲルガーの一言を聴いてフローラは嬉しそうに笑った。

104期調査兵のフローラは、新兵であるので堂々と眠ることができる。

考えれば今日は、女型の巨人からずっと戦いつばなしであった。

誰だよ、こんなハードなスケジュールを組んだの…と怒鳴り散らしたいくらいきつい

1日だった。

頼れる先輩に見張りを任せてフローラは早朝まで眠るつもりだ。

「あつ、フローラは別だからな！ちゃんと交代してもらおうからな」

「なんで!?!わたくし新兵ですわ!!」

「巨人討伐数が三桁超える新兵が居てたまるか!」

「ライナーやクリスタと同期なんですから新兵扱いでしょ!?!」

先輩であるナナバの一言を聴いたフローラ・エリクシアは納得できなかつた。

おそらくこの場に居る人の中で一番身体を酷使したはずである。

なのに見張り任務までさせられるなんてたまったものじゃない!

必死に反論されるが本気にされず涙目になってしまった。

「あの…もし壁が破壊されてないなら巨人はどこから侵入してきたのでしょうか？」

「それは明日、考えればいい。新兵はゆっくり休んで疲れを取ってくれ」

「わたくしも疲れを取りたいので交代任務は偉大な先輩たちに任せたいですわ！」

午前4時に起床したフローラにとって睡眠時間は死活問題である。

クリスタとの会話を聞く限り、彼らは巨人の戦闘をそこまでやっていないと分かる。だからこそ、自分は優先的に睡眠をとる権利があると思っている！

「できると思うの？」

「ふええ…」

「無垢でか弱い乙女を演じても、フローラの悪評は調査兵団に知れ渡ってるからな」

「分かりましたわ！でも3時間は先に眠らせてください！」

「ああ、いいだろう」

現実是非情である。

せめて睡眠時間を確保する為に先手を打った。

妥協し過ぎて損している事に気付かないフローラは先輩の許可でなんとか機嫌を持ち直した。

「おい、ところでフローラの方はどうだったんだ？色々走り回ったようだが……」
「色々ありましたがお腹が減って死にそうですわ」

ライナーの質問に対してお腹を鳴らしながら返答したフローラ。
あまりの間抜けな状況に彼女を除く全員が笑ってしまった。

「奇遇だな、私もだ……この城の中に何か腹の足しになるものがあるといいんだが……」
顔を真っ赤にして珍しく乙女らしい仕草をしているフローラにユミルは助け舟を出した。

単純に食事の話題を出してくれた女に感謝しただけの事だ。

「休む前に情報交換をしよう。特にフローラは色々見てきたようだし、状況を聴かせてくれ」

「分かりました」

ナナバの意見に賛同したフローラは、アニの正体と女型の巨人と戦闘を行なった事を伏せた。

精神的に辛くなっている同期、特にミーナには聴かせる状況ではないと判断したからだ。

エレンを護送している時に馬車のトラブルが発生し、王都召集の件が遅れた事を伝達しに来た。

ところがエルミハ区を出て巨人と遭遇して討伐しながら突き進んだ。

そしてローゼの北部でミケ分隊長とサシャと再会。

彼らは安全地帯に行ったのを確認して東防衛線に参加して巨人を一匹残らず掃討した。

ついでに拝借した地図を持ってこの城に向かう道中で東班のミーナと合流してここに来た。

疲れているので簡潔に伝えたが、全員が聴き入っており、建前上は情報伝達が成功した。

「…そうか、ミケ分隊長が負傷したか」

「北班と合流して住民と避難したと聞いて安心したぞ」

「さすがに2桁の巨人じゃきつかったか」

「直属の上官が四肢が健在で生還しただけで嬉しいよ」

第一分隊の面々は、ミケ分隊長の情報を入手して久しぶりに明るい話題で精神的に安定した。

実際は、機密情報をフローラが抱えていると分かっているが、ここでは口に出さなかつた。

さきほどの「交代のやり取り」は、預かつた伝言を監視している新兵に聴かせない為であつた。

しかし、予想外に疲れているようでフローラが反抗してきたのですぐに聴くのを諦めた。

「ところでコニー……お前の村はどうだった？」

「壊滅した…巨人に……踏みつぶされた後だった」

「そつか…そりゃあ……」

ユミルとコニーは犬猿の仲である。

いつも口の悪いユミルが仕掛けてコニーと喧嘩していた。

だが、さすがに生意気な坊主頭のドチビの心中を察して彼女は言葉が続かなかった。喧嘩するほど仲が良いというが、こういう時になんて声をかけるべきか迷った。

「でも皆、うまく逃げたみたいで、それだけは良かったんだ」

「お前は小柄ですばしっこいからな、親御さんもそりやあ速いだろうな……」
「ただ気になってるのは、俺の家に居た巨人だ」

ユミルとライナーとフローラは、コニーの表情から何か悩んでいるのに気付いた。

コニーは自分の顔が歪んでいるのに気付かずそのまま話をつづけた。

「自力で動けねえ身体で、何故か俺の家で寝てやがった……それに何だか母ちゃんに似てるんだ」

「コニー……まだ行ってるのかお前は」

ライナーはコニーの戯言を止めようとした。

このままでは、コニーの故郷の住民が巨人になって辺りを蹂躪したと発言しそうだったからだ。

「ダハハハハ！お前の母ちゃん、巨人だったのか！じゃあなんでお前はチビなんだよ」

「…うるせえな…馬鹿らしくなってきた」

「馬鹿が馬鹿だと自覚してないとか…」

「うるせえええええ!!クソ女もう寝ろ!!」

ユミルに慎重で弄られたコニーは大声で彼女を牽制した！

次、変な事を発言したら殴るつもりだった！

「そろそろわたくしたちも休みましょう」

「うん、そうだね。ゲルガーさんの仰った通り今は身体を休めなくちゃ」

「さすがクリスタ!!」

「「ああん!」」

フローラの発言を肯定したクリスタの女神っぷりに感動したライナーとユミル。

そして互いに向き合ってそのままいがみ合う2人。

クリスタと結婚したい2人は、彼女と結婚する前に血痕になりそうな雰囲気になった。

「さて、おしゃべりはここまでにして君たちは休んでくれ」

「じゃあ、わたくしは寝ます！おやすみなさい」

上官であるナナバからの正式な休憩の許可が下りた瞬間、フローラはそのまま床の上で寝た。

トロスト区防衛戦の兵団本部でもそうだったが、巨人が襲撃してくるリスクがあるのに眠る女。

あまりにも、滑稽な姿であり図太くて精神的に最強な存在である。

あつという間に寝息を立てる彼女に呆れる一同。

フローラのおかげで精神的に落ち着いたナナバは、ゲルガーを連れて上階に登っていった。

自由時間を得たユミルは、城内にある木箱を漁っていた。何か腹の足しになる物を探していたが、情報を探る意図もあった。壁内で使われている文字ではなく、壁外の代物だったからだ。

「…たく…この壁内で何をしてたんだか…」

ゲルガー先輩が酒瓶を見つけたがラベルの文字が読めなかったのに違和感があった。そして調べてもらおうと壁外の文字で書かれているのを確認した。

ついさきほどまで「壁外人類」が滞在した痕跡があった。

【悪魔の島】と呼ばれているパラディ島の奥地まで潜入するなど碌な奴じゃないだろう。情報収集も兼ねて彼女は、残された物を物色していた。

「ユミル、何をしているんだ？」

「なんだよライナー…夜這いに来たのか？女の方に興味があるとは思わなかったが…」

「ああ…お前も男の方に気があるとは思えないけどな」

「ふん、クリスタを巡るライバル同士、ここだけでも停戦といこうじゃねえか」

ユミルは、背後に居るライナーを気にしながら引き続き木箱の中を物色した。ちようど、この箱は当たりのようで色々役に立ちそうな物がある。

「私はこうやって腹の足しそんな物を探してるのさ、手が空いてるなら手伝ってくれよ」
「ああ、そうだな」

「これが最後の晩餐になるかもな、クリスタの分を確保したら山分けして食べようぜ」

ライナーは、ユミルが壁内人類じゃない疑惑があつて見に来ていた。

「コニーは、巨人が母親そっくりと言っただけで巨人になつたとは言っていない。

それにも拘らず、彼女は全力で巨人化を否定した。

まるでこの壁内人類が巨人になれると知っているかのように。

「コニーの村の件だが、わざとはぐらかしたよな?」

「そりゃあそうさ、コニーが狂つちまつたらこつちまで調子が狂うからな」

「できれば、その調子で続けて欲しい。あいつが家族の事で余計な心配をしないように

…

「何言つてんだ…私はただ…おっ！」

ライナーの話を適当に聞き流したユミルは包装を解くと缶詰を見つけた。まだ開封されておらず、コニーから短剣を借りれば食べられそうだった。

「こりゃあいい鯨にしんだ！…味は好みじゃねえが贅沢は言えんか……！」

ここでユミルは自分が失言したのに気付いた。

もちろん、同期たちだったら問題ないがライナーのさきほどの発言を聴いて違和感があつた。

まるで奴が巨人に関しての秘密を隠そうとしているのではないかと…。

「他にもあるのか？見せてくれよ」

「…ほらよ」

「こりゃあ、缶詰か。良いのを拾ったな……！」

ユミルの失言に気付けなかったライナーは缶詰を見て喜んだ。

しかし、よく見ると「マーレ文字」でにしん鰯と書かれていたのを見て気付いてしまった。

「……何だ、この文字は？俺には読めない……『にしん』って書いてあるのか？」

「よくこんな文字を読めたな……」

壁内人類が読める文字ではない事に！

ユミルも壁内に存在しないはずの缶詰を理解したばかりか名前を知ってるライナーに警戒した。

つまり、ここにいるのはパラディ島の外から来た存在であるという事だ。

ユミルとライナーは向き合って得体のしれない存在を警戒していた。

「全員起きろ!!屋上に来てくれ!!」

リーネ・ハウズドルフの尋常じゃない叫び声に内心で不安だった全員に緊張が走った。

最悪の事態が起こったのは間違いないだろう。

ユミルとライナーは警戒しつつも彼女の言葉を聴いて屋上へ目指した。

「全員すぐにだ!!」

声で起こされた104期生やナナバとゲルガーも階段を駆け上った。

そんな緊急事態に1人だけ熟睡している奴が居る。

本日、過労死しそうなほど酷使されたフローラ・エリクシアである。

『起こさないで！死ぬほど疲れているの！』と言わんばかりの熟睡している。

「起きて！フローラ！」

温もりを求めてフローラの横で寝ていたミーナは必死に親友を起こす為に身体を揺すっていた。

それでも起きる気がしないので、どうにか起こそうとした。

『どございよう?!?!このままじゃ…』

下手に蹴ったり殴ったりすると怒ってしまう。

親友を嫌われるのは嫌だけどこのまま寝かしておくわけにはいかない。

訓練兵团の中で45位の成績だった女は必死に状況を打開できる行動を考えた。

そして昔読んだ本に『王子様が寝ているヒロインにキスすると目覚めた』童話を思い出した。

『緊急事態だからいいよね…』

割り切ったミーナはフローラの唇に接吻した。

そしてすぐに唇を放した瞬間、フローラは目覚めた！

寝ていたら何かされそうな感じがしたが眠かったので無視をした。

しかし、負の感情が聴こえてきたので慌てて目覚めた！

「ミーナ、何かしたの？」

「フローラを起こそうと思って色々やったの」

「まあ、特にひどい事をされていないみたいだし、気にしないわ」

「ありがとう」

地味にファーストキスを親友にしてしまった。

それどころか親友のファーストキスを奪ってしまった。

その事実気付いた時、ミーナはもつと良いタイミングでやるべきだと後悔する事となる。

人生で最初で最後のファーストキスがあっさりやってしまったのに後悔するしかなかった。

意中の人に接吻するなら甘いムードでやりたいというのが乙女心である！

それは置いておいて目的であるフローラを起こす事に成功して満足したミーナ。

「リーネさんが全員、屋上に来るように言ったの！」

「あ、ああ…うん…そうね、こんなに巨人に囲まれているもの…しようがないわ」

「…本当なの？」

「入口付近に3体、この城を囲むように13体、少し離れた場所に18体…ね」

フローラはそこから中から聴こえる呻き声から巨人に囲まれたのを察した。

数は30体ほど、遠くに別の巨人の群れがおり、寝不足だとか抵抗する状況じゃな

かった。

「何で数が分かるの？」

「それはまた今度ね、早く屋上に行くわよ！」

フローラは速やかに鞆と立体機動装置を装備して屋上に向かって階段を駆け上った。ミーナは、頼れる親友がどんどん遠い場所に行くような気がして呆然としていた。それでも置いて行かれない様にすぐに彼女を追いかけた。

「月明かりが出てきて気が付いたら……」

「最悪だね……」

リーネの説明を聞いたナナバは浮かない顔で地面を見下ろした。

そこには巨人がこちらを包囲するように集合してきた。

屋上の焚火に反応したのかは分からないが、疑問が1つあった。

「何でだよ！日没からかなり時間が経ってるのに…何で動いてるんだ!？」

ゲルガーの言葉に第一分隊とフローラはその疑問を抱いていた。

新兵である同期は、まだ知らないが巨人は夜間になると活動が鈍くなる。

全く動かないという事は無く、過去では夜間に罪人を置き去りにしたら喰われるくらいだった。

だからこそ、真つ暗な夜道を怯えながら西班と南班は移動していた。

しかし、ここまで活発的に巨人が動く事なんてありえなかった。

「おい…待て待て!!ふざけんな!!塔を登って来るんじゃないやねえ!!」

ゲルガーが見下ろすと、巨人が塔を登ろうとしている様子を目撃してしまった。

厄介な事に巨大樹の幹と比べると登り易いようで、塔に登る事に成功していた。

もちろん、それを見て彼は激高するしかできなかった。

「新兵は下がっているんだよ!」

ナナバは怯えている新兵たちを中央部に集めた。

最優先で護らないといけない存在を確認した。

新兵たちは無防備であり全ての責任は監視していた自分達にある。

だからこそ未来の調査兵団を担う者たちを死んでも守るつもりだった。

「けど、フロローラには戦ってもらおう……ここからは立体機動装置の出番だ」

しかし、新兵の癖に人類最強の女であるフロローラを遊ばせるわけにはいかなかった。

むしろ、戦ってもらわないといけないからこそ名指しで指名した。

フロローラはただ頷く事しかできなかった。

拒否するには異常事態過ぎてどうしようもなかった。

ストヘス区の女型の巨人戦から1日すら経過していないのに連戦である。

もし公式記録として記されても信じる者が居ないほど激務だった。

『誰よ……こんなに肉体と精神を酷使する筋書きを書いた神様は……』

第一分隊の4名は鞘からブレードを取り出して構えた。

涙目になったフローラも鞘からブレードを構えて全員を見た。

武装した兵士5名は頷いて、先に先輩4名がお手本を見せる様に塔の屋上から飛び下りた！

「フローラ！行きます!!」

フローラも遅れて啞然とする同期に見送られながら塔から飛び降りた。

この時、老け顔で有名なダズ・ウイズリーは睡魔に負けて寝た。

直前まで『フローラは寝ている』という予想は当たっていた。

しかし、さすがに夜間に彼女が巨人と戦闘するなど思いつくはずもなかった。

「知ってたわ…」

フローラが塔から飛び降りると、さっそく先輩たちが巨人と交戦していた。

それを見て彼女は覚悟を決めて立体機動で舞って掴み掛かろうとした巨人のうなじを削いだ。

こうして本日、壁内人類史上初の夜間防衛戦が始まろうとしていた……！

70話 ウトガルド城防衛戦

巨人発見から12時間後、伝令のトーマはエルヴィン団長と合流、状況説明をした。「ウォール・ローゼに複数の巨人が出現した」という衝撃的な情報は一同を驚愕させた。

「エルヴィン、どうする?」

「そうだな、まず戦力を掻き集めないといけないな」

「それは良いが、巨人は待ってくれんぞ?」

「第四分隊だけでもエルミハ区に送るとするか」

リヴァイ兵長と意見を交わしたエルヴィン団長は、ストヘス区に居る部隊を2つに分けた。

ハンジ分隊長が率いる第四分隊と自身が率いる部隊だ。

まず第四分隊はウォール・シーナ南部にあるエルミハ区に向けて出撃させた。

それと同時に、エルヴィンは伝令を走らせて駐屯兵や憲兵を掻き集めさせた。

時間が無い以上、王政や総統局を無視をして独断にローゼ奪還用の戦力を用意するつ

もりだ。

「一体、どうすればいいのでしょうか。いきなりウォール・ローゼを突破されるなんて……」

「起きてしまった以上、仕方がねえ：問題はこれからどうするのかだ……！」

荷台に居るアルミンはウォール・ローゼに巨人が出現したという一報を聴いて俯いて発言した。

無理もないだろう。

トロスト区奪還作戦で命を落とした兵士たちの犠牲が水の泡になってしまったからだ。

リヴァイ兵士長は、新兵たちが落ち込んだ様子を見て何とも言えなかった。

「大丈夫よアルミン！私達が居るわ！」

「そうだとも！この俺様が居れば兵長が動く必要もなく巨人を駆逐できっ！」

「いい加減、馬に乗ってる時は舌を噛まない様に黙ってなさいよ」

「うふあいへほはあ！」

勇気づけようとペトラに続いてオルオが発言するが、馬の振動で舌を噛んだ。

オルオの舌は、巨人の部位と噂されるほど再生能力が高いとされる。

それだけ噛み続ければ毎日のノルマになりそうだが、実力は本物なので馬鹿にされなかった。

「エレン、大丈夫?」

「大丈夫だミカサ! ようやく痺れが収まってきた所だ」

「まだ巨人化の後遺症が残ってる…もう少し大人しくしてて」

「分かった…」

ミカサに心配されたエレンは手足を動かして元気になったのをアピールした。

しかし、彼女はまだ大切な人が絶好調じゃないと分かっているので軽く抱き締めて座らせた。

ここにフローラが居たら『ミカサの胸が柔らかい』という彼の負の感情を感じ取った事だろう。

思春期のエレンは幼馴染の胸と香りを堪能しながら必死に感情を爆発させないよう

に耐えていた。

「ところでハンジ、お前がただの石ころで遊ぶ暗い趣味なんてあったか？」

「ああ、そうだよこれはただの石じゃない」

「ほう？」

暗い話題で落ち込む空間を打開するべくリヴァイは石を弄るハンジに話を振った。

もちろん、巨人関係なのは知っているが部外者が説明するわけにもいかず、ハンジに頼った。

「これは女型の巨人が生み出した硬い皮膚の破片だ」

「…えっ!? 消えてないんですか!？」

「そうだよアルミン! 能力者が巨人化を解いてもこの通り蒸発してないんだ!」

ハンジが目目していたのは、女型の巨人が生み出した硬質化の爪の元になっていた物質だ。

本人の意図では無かったが結合が解除されて散弾となってストヘス区の街を破壊し

た結晶体。

たった2回、欠片を街に飛ばしただけで街が半壊して犠牲者が2800名以上発生した原因である。

まるで水晶のような物質が大勢の命を奪ってしまった。

それはともかくハンジは、巨人から切り離されても存在する結晶に目を付けた。

「結晶が残るのは知ってました」

「ミカサ!？」

「カラネス区を襲撃してきた変異種が伸ばした爪も同様に残ってました」

「でも私たちが現場検証した時には何も無かったよ!？」

「王都から来た駐屯兵団の部隊が全て回収しました」

ミカサ・アツカーマンは、女型の巨人より厄介な変異種の事を思い出していた。

知性がない巨人なのに両手の爪を巨体より伸ばして大暴れしていた。

討伐されてもなお、その爪は残されており、王都から来た駐屯兵団が回収していった。ハンジは、住民の安否確認に気を取られたせいでここでようやく事実に気付いた。

「つまり王都の連中が何か隠そうとしているわけか」

「ああもう！何で先に言っちゃうんだよ!？」

美味しい所をリヴァイに奪われたハンジは大げさに驚いて彼の双肩を揺さぶった。

鬱陶しそうに突き出した兵長には勝てず、しよげた顔でハンジは何かを呟いていた。

「話はそれで終わりか？」

「違うよ！この結晶を利用して…」

「穴を塞ぐとか？」

アルミンは、巨人が生み出した結晶で壁の穴を塞ぐ事を思いついた。

また美味しい所を彼に奪われてしまってハンジは油まみれの頭を掻くしかできなかった。
かった。

「もしエレンがこの結晶で穴を塞げれば人類の未来は明るいですよ!」

「オレが!？」

「お前しか巨人化できる人間が居ないじゃねえか」

「兵長、そうでした…」

エレンは女型の巨人が使用した硬質化の物質で穴を塞ぐイメージをした。最近まで巨人化できなかつた…いや、今日もすぐに巨人化できなかつた。なのに、自分が今すぐにも穴を塞ぐ為にこの結晶を生み出す事ができるのか。彼は必死に考えたが答えは出なかつた。

「エレン、迷ってるだろう？本当にできるかと…」

「兵長、さすがです…」

「できそうかどうかじゃねえだろう…やれ！やるしかないだろう！」

「やってみます！」

「違う！必ず成功させるんだ！こんな状況だからこそ文字通り必死にやれ！」

「はい！！オレが必ず穴を塞ぎます！！」

兵長に檄を飛ばされてエレンは力強く頷いた。

時代は変化しつつある。

今までだったら巨人から逃げ惑うしかできなかつた人類は反撃できるようになった。

今度は、自分たちが巨人から全てを奪う番だ！

失われたウォール・マリアはおろか、外の世界も全て取り戻すと誓った！

「分隊長！もうじきエルミハ区に着きます！」

「モブリットありがとう！そこに着いたら30分ほど休憩してウォール・ローゼに行くぞ」

調査兵団第四分隊は、ストヘス区から出発してエルミハ区に辿り着いた。

そのまま南下したい所だが…さすがに休憩しないと集中力が持たなかった。

そこでハンジはエルミハ区で休憩を取って気力を回復させる事にした。

「兵長は引き続き同行なされるのですか？」

「いや、俺はこの街に待機する。…ここを陥落させるわけにはいかねえしな」

「そうですか…」

リヴァイ兵士長にペトラ先輩、オルオ先輩がメンバーから抜けると知ってエレンは落ち込んだ。

104期の同期たちと同じくらいに安心できる班だったからこそ、彼は悲しい顔をした。

「おい小僧！しけた面してるんじゃないやねえ！穴を塞いで笑顔で凱旋するまで入らせないからな！」

「オルオ、自分ができない事を他人に押し付けなさいよ！」

「ふん、甘いペトラ！エレンはこうやって背中を押してあげないと成長しないタイプだぞ！」

オルオは、エレンが誰にも束縛されない意志があるが思考は凡人の為、迷うと知っていた。

その点フローラは、頭進撃でありどんなハードルも潜り抜けるか乗り越えていく！かつてエレンを含めたリヴァイ班が単独のフローラをライバル視していた。

それは、驚異的に成長し続ける頭進撃に対抗するにはチームワークが重要だったからだ。

だから迷っている新兵に道を示して背中を押して、達成したら素直に褒めるつもりである。

「俺からのアドバイスだ…ミカサ、自分を抑制しろ！もうしくじるなよ！」
「はい、もちろんです！」

リヴァイ兵士長はオルオに感化されて、ミカサに忠告を告げた。

ミカサは巨大樹の森で女型の巨人を追跡した時に感情を剥き出しにて飛び掛かった。その時に兵長が庇ってくれなかつたら大怪我をしていただろう。

彼の足の怪我はだいぶ治ったようではあるが、自分の責任である以上、彼女は忠告を受け入れた。

兵長が居ない分、自分がエレンを守り人類の未来に導くために！

一方、ミカサとリヴァイ兵長の会話に疎外感を覚えるエレンは、聞き耳を立てて情報収集をした。

ミーナ・カロライナは塔の上で震えているしかできなかった。

彼女だけではなくフローラ以外の104期調査兵はただ巨人が全滅するのを祈るし

かない。

「ゆ、ユミル！ 私たちにできる事って何かありそう？」

「そうだな、巨人の居場所を教えてあげればいいんじゃない？」

「そうだよね…」

戦闘を開始して僅か3分で8体の巨人が討伐された。

蒸気を噴出した巨人の死骸が転がっており月光で照らされている事もあり幻想的な光景だった。

「この世界は残酷だ」というミカサの口癖を具現化するような地獄絵図。

満月の光は遠くまで見通せる明るさを提供しているが本を読む明るさではない。

それにも拘わらず調査兵の5名は巨人の屍を次々に増やしていく。

「すごいな…」

「どうしたコニー？」

「だってよライナー、あれだけ逃げ惑うしかできなかった巨人が瞬殺されていくんだぞ

…」

「そうだな、俺たちも兵士としていつかあの領域に達するといいんだが…」

「生き残れば、いくらでも強くなるさ！破壊されたラガコ村の分まで強くなってみせる！」

コニーは城壁に身を隠しながらも定期的に下を見下ろしていた。

時折、巨人が体当たりしてくる以外は特に不安になる要素はない。

あえて言えば先輩たちやフローラの刃やガスが持つくらいか。

ライナーはこの光景を見て思った。

絶対に立派な兵士になってみせると！

それをベルトルトが知ったら、兵士じゃなくて戦士でしょ…とツツコミを入れるはずだ。

しかし内心を読んで気遣いができるならアニに失望されるわけがなかった。

冷静に見えるベルトルトも混乱しており、巨人と視線を合ってしまったて右手を噛もうとしていた。

「何やってんだベルトルト!?!」

「え、ええっ!?!ああ、噛んで痛みで正気を保とうと思って…」

「良く分からねえよ。ホント、しつかりしてくれよな…」

コニーのツツコミで自分が無意識に馬鹿な事をやらかそうとして居るのに気付いたベルトルト。

このままだと自分以外を吹っ飛ばすところだった。

むしろ、そうすれば胃痛の種は無くなって平和になるかもしれない。

一瞬でもそう思った彼は、さすがに正気の沙汰ではないと冷静になった。

「さすがは調査兵団！他の兵士とはわけが違うってか」

「あれは……!!ユミル！後ろから巨人の群れが近づいてきたよ!?!」

「チツ！おいフローラ…は行っちゃったな…」

惚れ惚れする戦いっぷりに世界でここが一番安全ではないかと錯覚するほど巨人が討伐される。

ユミルは感嘆と眺めていたが、愛するクリスタの叫び声に危険が迫っているのが分かった。

近くに居るフローラに呼び掛けようとしたが、既に新手が出現した場所に向かってし

まった。

「ああ!!多すぎるわよ!?!何でここまで集まって来てるの!?!」

フローラは愚痴をぶつけるように回転斬りで巨人のうなじを削いだ!

たまたま近くに他の巨人も居たので同時にうなじを削いでしまい、2体同時討伐に成功した。

それでも油断せず倒れ込む死骸にアンカーを突き刺して滑空し5m級の巨人を狙った。

しかし、当の巨人に見つかってしまい跳んできたのでアンカーを外して落下し、攻撃を回避。

身体を捻って倒れ込んだ巨人のうなじにアンカーを撃ち込んで巻き取ってうなじを削いだ!

『まだ60体以上居るの…!?!』

戦闘を開始した時点でフローラが身に着けている『強化刀身・2型』は12本。

ナナバやゲルガーと同じ『強化韜・2型』を身に着けているのでそこまで刃が収納されている。

更に東防衛線から補給担当に頭を下げた余分に刃6本とガスボンベを2本持つてきていた。

それでも圧倒的に装備が足りなかった。

巨人は20体以上討伐されてフローラーが半数近く討伐しても新手が増えていく。同僚4人の装備を全てもらっても倒しきれないほどの数だった。

「フローラー！頑張つて！」

ミーナの応援を受けて唇を噛んで新手の巨人の掴み攻撃を回避して首にアンカーを突き刺した。

死角から飛んできたので巨人はフローラーを発見する事ができず、首を挟まれて倒れ込んだ。

この際、2本のブレードの根元が折れてしまった。

これで残りの刃は6本、ガスボンベは半分ほどの残量しか残ってなかった。

それでもフローラーは絶望することは無く塔に登ろうとした巨人に向かってアンカー

を突き刺した。

「クソツ！休む暇もねえってのか！」

ゲルガーは力強く巨人のうなじを削ぐ癖があるせいで悉く刃を消費にした。フローラと違って旧式の刃である『強化刀身・1型』のせいで折れやすかったのもある。

「捕まるかよ!!この野郎!!」

ゲルガーを掴み掛かろうとした巨人の指を切断した。

そして巨人が残った片手で掴もうとした瞬間、死角に居たナナバにうなじを削がれた。

機能を停止された巨体が小さめの巨人を複数巻き添えにして倒れ込んだ。

「ゲルガー、今のは危なかったろ…」

「これが俺のやり方だ！ちゃんと討伐補佐にカウントしておけよ」

「たくましいね…覚えておきたいが何体討伐したか忘れたよ…」
「俺達5名で何体、巨人を狩ったんだろうな」

ナナバはゲルガーを援護したが、もはや疲労で身体をうまく動かせなかった。いくら訓練された兵士とはいえ、巨人と交戦し続けるのは想定外だ。

リヴァイ兵士長やフローラ以外は、そこまで長期間に渡って巨人を討伐することは無い。

「アッ!!」

倒れ込んだ巨人の下敷きになった巨人のうなじを削いだリーネ。これで安心したと思いきや、絶望的な光景を目撃してしまった。

「クソ、遅かった!扉が壊された!」

「どうする!?!…ああ、分かった!ここは任せておけ!」

リーネはヘニングに目配せして入り口を警戒してもらい、塔のアンカーを突き刺して

登った。

塔の屋上に登ると半ば他人事になっている新兵たちが居た。

どう発言すればいいか、迷ったが彼女はストレートに巨人の脅威を伝えた。

「巨人が塔に入って来てる！急いで中でバリケードを作って防いで！」

「嘘だろう!？」

「まずい……！」

「もし防げなかったら屋上に戻ってきて！それでも助けられるか分からないけど……」

リーネは付近に居る巨人の個数を把握していない。

むしろ、ミケ分隊長とフローラ以外で、見えてない巨人の分まで数を把握できるはずがない。

そしてフローラは巨人がまだ50体以上居るといふ絶望的な状況を黙っていた。

嘘も方便とラガコ村の事実を隠蔽したリーネは、フローラから半ば騙されている形となった。

「生きている内に最善を尽くして！」

「了解！行くぞお前ら!!」

ライナーは松明を持って、真っ先に階段を降って行ってドアの施錠に向かった。遅れてコニーとベルトルトが、そして女子3名も向かった。

「巨人がどこまで来てるか！見てくる！お前らは棒でも板でも掻き集めてきてくれ！」
「ライナー待てよ！単独行動は危険だぞ！」

素早いライナーに置いてかれるコニー。

女子たちは既に追いかけるのを諦めて徒歩で歩き始めた。

「待てよ！ライナー！待つんだ！」

彼の単独行動で一番焦ったのはベルトルトである。

真っ先に巨人に喰われたら全てが無駄になる。

というか、兵士モードになっており、自分達が課せられた任務を忘れている様だった。最悪、自分たちは生き残れる最後の手段がある以上、生身で真っ先に危険を冒す必要

は無かった。

「訓練でも本番でも変わんねえな…いつも真つ先に一番危険な役割を引き受けやがって…」

「ああ、悪い癖だ…僕がしつかりしていれば…」

ベルトルトは、遠回しに自分の不甲斐なさを嘆くコニーの意見を肯定した。

もし、自分がしつかりしていれば、もう少しライナーはまともになっていたはずだ。いつか、精神状態が良くなると思つて放置した結果、更に症状が悪化した。

会話していて戦士じゃない時があるせいで余計に指摘しづらかった！

おかげさまでアニをサポートする事ができず、メンタルケアはフローラに全振りしてしまった。

「これがいいか！」

壁に掛かっていた農業用フォークを手に持つてベルトルトは階段を駆け下りた。

そこには木製の扉に背もたれている相棒が居た。

「ここだ！何でも良いから持つてきてくれ！」

巨人に発見されたようで扉を閉めて施錠したものの脆いせいで破壊されそうだった。余計な事をしやがって…と叫ぶ余裕は無かったがやるべき事は決まっている。

「ライナー!!」

彼は扉から飛び出した巨人の顔に向けて農業用のフォークを突き刺す為に走り出した。

『やべえ…このままじゃ死ぬ!?!』

一方その頃、ライナー・ブラウンは走馬灯を振り返っていた。

マルセルが6 m級の巨人に捕食されそうになった時、ライナーは立ち上がって走り出した。

迂闊に巨人化できないベルトルトは退避していたのに自分を見捨てたと勘違い!

泣き叫びながら彼を抜いてドベだったライナーは全速力で逃げた。

『どうするの!?!どつちが巨人化…!?!』

アニは振り返ると、ベルトルトを抜いて敵前逃亡したライナーを見てしまった。

ここでパニックになってしまい、彼女は正常な思考で判断できず釣られて泣いて逃げ出した。

自分のせいで作戦が失敗しそうになった事を知らないライナーは…ここで死ぬ…。

『絶対帰るんだ! 故郷に帰るんだ!』

ライナーとベルトルトが心を一つにした瞬間、フォークが巨人の顔面に突き刺さった

!

「ライナー!ここで死ぬんじゃない!一緒に故郷に帰るんだ!」

「ああ、そうだ!故郷に帰るんだ!」

自発性がなくて頼りないベルトルトに助けられたライナーは故郷に帰還する想いを強めた。

2人が巨人を抑えている内にコニーたちは大砲を発見！

これを転がして扉に居る巨人にぶつける気だった！

「ライナー！ベルトルト！そこを退け！」

「大砲ごとくれてやる！さっさと退避しやがれ！」

大砲を見て2人が横に逃げた瞬間、階段に落とされた大砲は転がって扉に激突した。

扉から顔と腕を出した中途半端な巨人は大砲に押し潰されて身動きが取れなくなつた。

「よし！動かなくなつたな！」

「あいつの体格じゃ動かせねえ…奇跡的にうまくいったな」

階段を降りて来たコニーは短剣を取り出して巨人のうなじを斬ろうとした。

うなじを削がない限り、復活するので止めを刺す気だった。

「おいやめておけ！ 掴まれただけで重傷だぞ」

「みんな！ 今のうちに避難して！ 上の階の扉を閉めるだけで違うわ！」

ミーナの呼びかけによって下階に降りた男子たちは階段を昇って行った。

コニーは名残惜しそうに扉からゆっくり離れた。

しかし、その扉からは新手の2m級の巨人が出現した。

「コニー!!」

死角から喰おうとした巨人の頬をライナーは両手で押して噛み付かないようにした。

しかし、巨人の方が身体のスベックが上で抑える事ができず噛み付かれそうになった

！

「ぐっ！」

「なっ!?!」

ベルトルトは右腕を嘯ませたライナーに驚愕するしかなかった。

簡潔に言えば、一歩間違えれば喰われるのになにやってんだ…と発言したかった。

仮ではあるが、リーダーが彼である以上、戦死されるとまずいし、なにより喰われるのは…。

ベルトルトの疑いが確信に変わり、ライナーは護身術で巨人を担ぎ上げて慎重に移動した。

彼は窓に向かっており、自己犠牲で飛び下りる気満々だった。

「ら…ライナー!?窓から飛び折る気か!」

「そうするしかねえだろう!!」

ベルトルトの問いに対して当然の様に返答したライナー。

腕を嘯まれて放されない以上、取るべき行動は制限された。

つまり、ライナーは自己犠牲によって窓から落下して兵士として死ぬつもりだった。

しかし、悪魔が「もつと良い死に場所があるだろう?」と言わんばかりに助け舟が来た。

「オラあー！」

「落ちろ!!」

コニーが巨人の顎の筋肉を斬ってライナーの腕を解放させた。

そしてユミルが全力で蹴っ飛ばして2m級の巨人を窓から落とした!

なんとかライナーの右腕一本、犠牲になっただけで済んだ。

全員、上の階に避難して扉を閉めて木材でつつかえ棒で抑えて固定させた。

もし、巨人に目撃されてなければ扉は破壊されないので一先ず安全になった。

「ライナー、染みるけど我慢してー！」

「うっー！」

ゲルガーが見つけた酒を持ってきたクリスタは傷口を消毒するのに使った。

同期の中で106回も医務室送りされた女が居るのでこういう事に慣れている。

むしろ、傷口の消毒を香水に使用している油で代用してる疑惑があるフローラ。

それはともかく、ライナーは看病してくれるクリスタを見て痛みなど吹っ飛んだ。

思わず、肉体の再生をさせずに大人しく看病されるつもりだった。

「後は添え木と包帯…そうだ！」

クリスタは立ち上がってスカートを破って包帯代わりにした。

彼女の生の太ももを目撃してしまったライナーは一瞬で痛みが快樂に代わった。

オーガニズムが刺激されて股間が元気になったどころか、乙女っぽく顔を赤く染めた。

「こんな汚い布しか無くて…ごめん…」

「いや…助かる」

この瞬間、電撃が迸ってライナー・ブラウンの精神は、兵士モードと戦士モードが混同した。

今までは、二重人格が1つしか表に出て来なかったが、今後は両立して生きていく。

以前、ベルトルトは「多重人格の人を治療するにはどうするべきか」とフローラに質問した。

メンタルケアの達人である彼女ですら匙を投げたライナーの精神治療をクリスタが

行なった。

ここで正常に戻ればいいのだが、問題なのは兵士と戦士の境目が有耶無耶になった。

『結婚しよ』

つまり、【始祖奪還】と同じくらいに【クリスタと結婚する】のが重要課題になった。むしろ、『クリスタと結ばれて、いつかお父さんになる』のが最優先課題になった。

要するにライナーは、クリスタと結婚する為に戦士になったと勘違いをした。

元々英雄志望があつた彼は、得意な作文力も手伝つて気持ち悪い男だつた。

肥大化した妄想は、陰湿な戦士候補生時代と充実した訓練兵時代が混ざつた。

コニーを救つた英雄は、クリスタを見返してそのまま恋愛に発展する事を期待した。

結論から言うと、この時に『気持ち悪い男』として精神が成熟して余生を引き摺る事になる。

『ライナーの精神がおかしい…なにこれ』

フローラは聴力に優れているが、負の感情を“声”として聴ける能力もある。そんな彼女の元に届いた“声”は絶望の感情が欠如したはずの彼女の精神を蝕む物であった。

『クリスタと結婚しておじいさんになったライナーが幼女の曾孫娘に求婚してる…』

超高速でクリスタと結婚したライナーの妄想がフローラに“声”として聴こえていた。

そして何故か彼の結婚式の仲介役が自分になっていた。

世界を救った大英雄のライナーとウルトラスーパー女神クリスタを仲介する自分。

『大英雄ライナー・ブラウン、永遠の愛を誓いますか？』

『はい、誓います！』

『大女神クリスタ・ブラウン、映連の愛を誓いますか？』

『はい、誓います！』

『それでは誓いの接吻を！』

フローラは結婚の仲介役として恥ずかしい言葉を話していた。

その後、糞みたいな生活が超高速で終わって曾孫に求婚してライナーが天に召された。

そんな負の感情を知ってしまい、今後、どうやって彼に接すればいいかフローラは迷った。

余談だが、結婚式には同期の戦士候補生と訓練兵が勢揃いして椅子に座って笑顔で祝福していた。

戦士と兵士時代を混同してしまったライナーは本当に気持ち悪い妄想していた。

「あつ、変異種……」

強力な巨人の証である褐色の肌は、月光を反射せず光を吸収しているようだった。

そんな不気味な存在でも、ライナーの気持ち悪さには勝てなかった。

負の感情を聴こえるせいで、フローラは無理やりライナーの妄想を追体験させられた。

それ以上に不気味な事などあるわけなかった！

「とりあえず殺す!!」

あまりの気持ち悪さに怒りに変わったフローラは、弱点部位を削いで巨人の首を刎ねた。

この時だけはリヴァイ兵士長の身体能力を凌駕しており、今後ここまで動ける事はないだろう。

怒りと鬱憤を晴らして賢者タイムを通り越して冷めてしまった彼女。

「なんか凄い動きをしたんだけど、何かあったの？」

「いえ、リーネさん…身体の酷使で頭が可笑しくなったようです…」

「私から見れば最初から可笑しいから大丈夫だよ」

「そんなひどい…」

駆け付けたリーネに内心を打ち明けようとしたが即否定されてフローラは落ち込んだ。

ライナーの気持ち悪さを熱く語っても困るのは分かっているがどうすればいいか分

からない。

幸いにもサンドバッグになる巨人は、いくらでも居るが刃が足りなくなってきた。

「これであらかた大きなサイズの巨人は片付いたな！」

「この塔のおかげだね。こんな好条件で戦えるなんてめったに無いよ！」

「ああ、なんとか凌げそうだ」

塔にぶらさがったナナバとゲルガーは蒸気を噴き出す巨人の死骸を見てそう思った。ここでの巨人討伐は30体を越えており、大量の勲章がもらえるだろう。

もちろん、勲章をもらうより家に帰りたいし、休みたい。

一時はどうなるかと思ったがフローラという最強の女のおかげで休めそうだ。

彼らは絶望的な状況は去っていないが笑みを溢す余裕はあった。

「ちよつと新兵の様子を見てくる！」

新兵が心配になったヘニングは2人に理由を告げて塔を登っていった。

リーネも同じ考えだったようで、入り口をフローラに任せて遅れて登り始めた。

これが彼らの命運を分けた。

「ん？何の音だ？」

ゲルガーが少しずつ大きくなる異音に気付いた。

その瞬間、大きな衝撃と共にどこからか飛んできた岩が馬小屋に激突した。中に居た馬は全滅して巨人から逃げることはできなくなった。

「なっ！馬が！」

「まただ！？何が……」

馬小屋に駆け寄ったゲルガーとナナバ。

そして塔の屋上に居るヘニングと、塔の真ん中で警戒しているリーネ。フローラも何が起こったのか状況把握に努めていた。

「なにあれ……」

フローラが空を見上げると岩が飛んでいた。

それが塔の天辺に激突してそこに居た先輩2名が吹っ飛ばされた！

「リーネ!？」

「ヘニング!？」

「リーネさん!?!ヘニングさん!?!」

岩の激突を免れた3人は、2名の兵士の名を同時に叫んだ！

明らかに人為的な投石！

フローラは岩の跳んできた方向を知っていたのでそちらに向かって振り向いた。

「あいつは…!!」

50mの壁の上で両腕をあげている巨人が居た。

フローラはその巨人を知っている。

あの時、殺したと確信していたはずだった。

ジーク・イエーガーは古城に明かりが見えて昼間の失態の腹いせで投石した。わざわざ巨人化したのはこうしないと岩を投げられないからだ。

むしろキャッチボールしてた時が一番幸せだったのでストレス発散がこうなつてしまった。

愉しかった思い出が人殺しや建物を破壊する技能を磨いたのは皮肉としか言いようがない。

『とりあえずこんなもんでいいかな…よし当たった！』

1発目の投石は外れたが、2発目の投石は見事、塔の屋上に命中した！

トム・クサヴァーさんとのキャッチボールの経験が活きたものだと言える。

腕は人間の時より長いし、バランスを取るのには難しいが慣れれば楽しいもんだ。

『あとは勝利の雄叫びをあげて帰ろうかな』

ジークは、ストレス発散の為に投石をした。

ついでに巨人を古城にけしかけて壁内人類に恐怖を叩き込むつもりだった。だが、彼は失態を犯した。

『よし、一度深呼吸だ！』

あの場に自身を恐怖に叩き込んだフローラ・エリクシアが居た事。

そして2回目の投石で彼女が慕う先輩を殺害してしまった事。

フローラは獣の巨人の正体を知っている事。

そしてなにより、彼女の復讐リストに『獣の巨人』が加えられた事。

『2回だけで命中したんだ！きつと良い事があるぞ！』

ジーク・イエーガーは知らなかった！エルディアの悪魔があのように居ることを…。

フローラ・エリクシアは知らなかった！髭もじやを殺せておらず惨殺して欲しいと懇願した事に！

そして地獄の釜の蓋が開いた。

『クサヴァーさん見ててくれよ！俺は絶対に夢を叶えてみせる!!』

そして2人はそれぞれの想いを胸に再び戦場で邂逅する事となる。

『俺はエルディア人を苦しみから解放してみせる!』

【エルディアの悪魔】に勝てるはずもなく、ジーク・イエーガーは惨敗する事となる。

ジークは、初戦で死んだ方がマシなほどの尊厳破壊と苦痛を彼女から与えられる事となる。

例え生還しても、突発的な自殺衝動で毎日苦しめられて死ぬまで続く事となる。

『【エルディア人安楽死計画】を成功させてみせる!!』

身をもって彼は実感する事だろう。

『エルディア人は生まれてくるべきでなかった』という彼の価値感を地獄で実感する事に！

その日、ジーク・イエーガーが思い出せられた！

あの時されたのは、本当に拷問じゃなくて、ただの前座だったという事に！
「絶望の感情を欠如している「エルディアの悪魔」に絶望させられる未来をジークは知らない。」

71話 ユミルの覚悟

「今度は死に様を見届けてやるわ！首を刎ねて！心臓を潰して！脳を叩き潰して焼き殺す！！」

獣の巨人による投石が馬小屋に命中し、中に居た馬が全滅して巨人から逃げる術を失った。

二度目の投石は塔の屋上に命中し、ヘニングとリーネが吹っ飛ばされた！

おそらくあの高さから落下すれば即死の方がマシと言えるだろう。

先輩たちが自分のミスのせいで死なせたと分かった以上、今度は徹底的に潰すつもりだった。

首を刎ねて心臓を潰し、脳を叩き潰して火炎瓶で徹底的に焼いて死に様を見届けてやるつもりだ！

「何事だ!？」

104期調査兵たちは、ライナーの手当てで中に居たおかげで難を逃れた。我慢強くて頼りがいがある事に定評あるライナーが真つ先に階段を駆け上った。

「待つてよライナー！こういう時は、中で待機してないと！」

「馬鹿野郎！俺が行く！おれのせいで怪我をしたんだからな!!」

続いて相棒の動きが読めなくて苦労してるベルトルト。

自分のせいで怪我をさせてしまい、自己嫌悪に陥っているコニーが塔の屋上に出た。

「何があつた!?!石壁が壊れていて…咆哮?」

ライナーは屋上の一部が破壊されており、何かが激突したのが分かった。ただ煙の匂いがせず、砲撃で破壊されたわけでないのがすぐに気付いた。そして注意深く破壊箇所を見ている時に咆哮した方を見た瞬間、固まった。

「ライナー!…どうしたんだ?」

「ベルトルト…あれを見ろ」

何故か能天気につ立っている相棒を見てベルトルトは異常を察した。顔が強張っており、身体が震えていたからだ。

そして話しかけてみると、何かが発見した様なので彼の視線を追って固まった。

「おいどうしたんだ2人も!? らしくないぞ…」

先行した2人が固まっているのにコニーは疑問に思った。

巨人の大群でも発見したのかと思い、恐る恐る彼らの視線の方へ顔を向けた。

「なんだありや!?! 毛だらけで気持ち悪い巨人だな… 獣っぽい巨人で気味が悪いぜ」

「ああそうだ、あれは『獣の巨人』だ」

「ん? 知ってるのか?」

「ま、まあな…」

コニーは彼らの反応から獣の巨人とやらを知っているようだ。

ウォール・マリアの南東の山奥の村出身だから避難した時に見たのだろうか。

フローラが鎧の巨人を恨んでいる様に彼らも獣の巨人と因縁があるのは分かる。真つ青な顔をして巨人を凝視したまま固まっているからだ。

特にライナーは、巨人と遭遇しても冷静な対応をしたのにあそこまで青ざめるなら何かある。

「ゲルガー!!」

「分かってる!!」

悲痛な想いを胸に抱いてナナバとゲルガーは、ヘニングの遺体を塔の屋上に持つてきた。

新兵を心配して屋上で警戒していたのが仇となって岩が激突した衝撃で落下、地面に激突した。

左胸が潰れており、上半身が原型を留めていない事から衝撃の凄まじさが一目で分かる。

即死した彼の死体を持つてきたのは、巨人に喰わせたくなかったからだ。

「うお！巨人が多数接近！さつきより多いぞ!？」

「巨人が作戦行動をでもしているかのようなタイミングだね…」

コニーの報告を聴いてナナバは半ば諦めた様に迫ってくる巨人を見下ろした。刃は使い果たし、ガスは切れかかっついていて戦力は減った。

まだ夜が明けてないので信煙弾は効果が無く友軍が来るのも期待できない。

さきほどヘニングを抱えて登ってきたのを見られたせいで巨人に居場所がバレていた。

「おいナナバ、諦めてるだろう?」

「じゃあ、策はあるのか?」

「そんなもんねえーよ」

「だと思つたよ…」

人間というのは絶望的な状況に追い込まれると笑ってしまう。

生存本能が危機的状況から脱出させる為の起爆剤なのかは分からない。

ただ恐怖で怯えたのは自分だけじゃないと分かり、2人は危機的状況なのに安心してしまった。

「いくか！」

「ああ！」

彼らは、新兵を守るために迫ってくる巨人の群れに突っ込んでいった。

補給と休息があれば、きっとこの規模の巨人でも倒す事ができたかもしれない。

何とかなるといふ過信と妄想に縛られた2人は限界が近づいていたのに気付かなかった。

「リーネさん！」

「ふ、ふろ…逃げ…。私を捨てて…」

比較的軽傷だったリーネであったが、左脚を瓦礫で押し潰されて動けなくなっていた。

心配して駆け寄るフローラの後ろから巨人の群れを見てしまった。

もう助からないと思つた彼女は、せめて新兵だけでも逃がすつもりで声を溢した。

『結局、50体以上の巨人と戦う羽目になったわ…』

伏兵のように巨人の大群が居るのは知っていたがあえてフローラは報告しなかった。あまりにも絶望的な状況で、同僚や同期が自害しかねないからだ。

「なんとかしないと…!」

フローラは何とかして巨人の群れを塔から引き離す為に誘導したかったが馬が居ない。

さきほどの投石で馬小屋が崩壊して中に居た馬が全滅した。

巨人から逃げきれぬ唯一の移動手段が馬である以上、詰んだ。

「お願いがある…楽にしてくれ…」

彼女ができるのは、全身を打って瓦礫に押し掛かれて動けないリーネに止めを刺す事だった。

このままでは痛みを伴って喰われるので、その前に安楽死させてあげるといふ物だ。

状況を察したリーネは自分の遺体を巨人に注目されているうちに姿を隠せと言った。フローラという戦力をここで失うのは人類の損失だからだ。

「…ちよつと取り込み中だから後にして…!？」

フローラは近寄ってきて外套のフードに噛みついて来たライリーを追い払おうとした。

緊急事態なのに空気を読まずに身動きを取れなくする相棒を威嚇しようとした。

ここで気付いた。

ライリーは馬小屋に入らずに外で駆けまわっていたので助かった事に。

そして「彼女」は巨人を恐れているので自分に早く狩って欲しいと促している事に。

「分かったわよ…ちよつと退いてて…」

フローラがスナップブレードを構えると、ライリーは噛むのを止めて離れた。

変な棒で地上の覇者のように振舞っている大きな物体を倒してくれるのを知ってるからだ。

しかしライリーの思惑は外れて、フローラは倒れ込んでいるリーネに近寄った。

「そうだ…早く」

「ごめんなさい…」

ブレードを振りかぶったフローラは、リーネの左脚を斬り落とした！

彼女がそれを望んでいないと知っていても憧れの先輩をここで死なせる気は無かった。

「ぎゃあああああああ!!!」

「ライリー!!」

まさかの奇行にライリーは動く事ができなかった。

その隙にフローラは、鞍に備え付けられた紐を取って痛みを悶える先輩に駆け寄った。

これは女型の巨人戦で両腕を喪失したエルドの止血する物がなかったという教訓で用意した。

「ああああああっ!!」

「止血します!!」

フローラは医務室にお世話になった時、彼らから色々教わった。

106回もお世話になってるので診るのが面倒だったというのもある。

自力でなんとかしろと言わんばかりに応急措置を学んだ知識と経験がここで活きた

!

「な、なんで…」

「ああもう!黙ってて!」

止血が完了した瞬間、先輩の鞆と立体機動装置を外して身軽にした。

リーネが何をされているのか把握する前に空を舞った。

「痛い!いたあああああ!!」

「巨人に喰われるよりマシです!!我慢してください!!」

無理やりライリーに乗せて予備の紐で彼女を固定したフローラはライリーに合図を出した。

そんなに走るのが好きなら最後まで走ってもらうまでだ。

本当は先輩を塔の屋上に避難させたかったが、仲間を呼ぶ暇も移動する暇も無かった。

事情を察したライリーが走り出した瞬間、巨人がフローラを掴み掛かった！

「邪魔!!」

回転斬りで掴み攻撃を受け流した彼女は巨人の股間にアンカーを撃ってワイヤーを巻き取った。

勢いよく加速して股を潜ったり抜けた瞬間、アンカーを外してそのまま離脱した。

数体の巨人がライリーを追っていたが、追い付かれる事はないだろう。

それより、先輩たちが心配だった。

「次から次へと…」

壁内に出現した巨人が全てここに集結したかのような地獄絵図。

かつてトロスト区で20体以上の巨人に追いかけられた事があるがそれと同じ状況だった。

むしろ、巨人の体当たりだけで塔が倒れそうなほど脆い建築物なので圧倒的に最悪な状況である。

それでも彼女は恐怖などなかった。

あつたのは怒りだけだ！

「そこまでわたくしを殺したいの!?!」

目の前に飛び入り参加してきた6m級の巨人の首を刎ねた！

スナツプブレードの先端が折れたが彼女は気にせず近くに居た巨人の首を刎ねた

！

怒りと疲労で判断がおかしくなっており、うなじを削ぐどころか巨人の首を斬り落としていた。

骨でブレードが欠けても気にせず巨人の首を抉り取り！刃をへし折りまくった。

刃が根元まで折れてようやく巨人の目に向かって投擲し、新たな刃に装填した。

「ライナー……フローラがやばい事をしてる……」

「またなんか覚醒したな……」

ベルトルトは、フローラの異常さを目撃した。

さきほどまでクリスタとの結婚生活の妄想をしていたライナーもフローラの行動にドン引きした。

「……今度、あいつを怒らせたら首を刎ねられそうだな……」

巨人の弱点は、うなじにある縦1m、横10cmの範囲である。

そこは斬るのではなく肉を削ぐ必要がある。

何故なら切断しただけでは、傷を再生する上に異様に皮膚が硬いからだ。

サシャが斧で3m級の巨人のうなじを攻撃しても効果が無いのはその為である。

しなやかなスナップブレードの刃は、わざと折れる事により柄や手の衝撃を和らげる役目がある。

「わたくしの前に立ち塞がるなら薙ぎ払うまでよ!! さっさと死になさい!」

一方、フローラは折れた刃のまま、うなじの肉を斬り骨を断った!

鎧の巨人を討伐し、獣の巨人の能力者を惨殺するまで彼女は死ぬ気など無かった!

その思いが彼女に力を与えて、巨人の首を容易く刎ねてしまった!

以前から首を両断することがあつた彼女。

アニとの戦闘、獣の巨人、寝不足、パシリ、なによりライナーの気持ち悪さでイライラしていた。

更に専用装備だったブリッツメツサーが短剣型なものもあつて巨人の肉を斬るのに慣れていた。

それに怒りが組み合わさつた結果、「空飛ぶギロチンの刃」として巨人の首を刎ねまくった!

「見ろよゲルガー…フローラが巨人の首を刎ねまくってるぞ」

「こんな事なら…あいつに刃とガスをあげとくべきだったな…」

巨人との連戦が続いた彼らは立体機動などの疲労の蓄積で気力が落ちていた。更にフローラと違って予備のガスボンベを所持しておらず、ガス切れが近かった。ゲルガーに至っては、刃をへし折る豪快な戦い方のせいでブレードを使い切った。ナナバも2本しかブレードが残っておらず、塔にアンカーを突き刺して待機するしかなかった。

「限界……」

フローラも疲労困憊で巨人の首を10体ほど刎ねてきて塔に戻ってきた。

さきほどの交戦で巨人を減らしてきたが未だに30体近くの巨人が残っていた。

さすがに勝てないと分かって、逃げ出してきたが先輩たちの姿を見て敗北を悟った。

「もう塔がもたないなあ……」

「充分頑張ったが、これで終わりだね……」

「俺達5名で巨人何体討伐したんだろうな……」

「さあ？ 少なくとも勲章を売るだけで孫まで働かせずに養っていけるんじゃないか？」

「ハハハ、その金で酒を飲みたいぜ……」

やれることはやった。

残ったのは疲労感と絶望感だけだった。

最後まで足掻いた結果、救いようがない未来に辿り着いてナナバもゲルガーも笑うしかなかった。

「だらけている俺にしちやよくやったと思ってる…すまねえお前ら…新兵たちの事を頼んだぞ…」

戦闘で頭を打ったゲルガーは脳震盪による操作ミスでアンカーを外してしまい落下した。

薄れていく意識の中で自分の絶望的な未来を悟ってどうでもよくなった。

「ゲルガー!!」

ナナバは相棒を掴んだ巨人のうなじを削ぐと同時に最後に残っていたブレードが折れた。

巨人の手から離されたゲルガーは塔に空いた穴の奥にあった木箱に激突し動けなくなった。

絶望的な状況だったが、ナナバは急いで彼を助けに行こうとした瞬間、複数の巨人と目が合った。

「ナナバさん!!」

慌てたフローラは、巨人の群れに突っ込もうとしたが新手の巨人に発見された。

勢いよく伸ばされた手を見て彼女は少ないガスを噴出して回転斬りをして巨人の指を切断!

疲労で意識が飛びかけたので、一目散に塔にアンカーを撃ち込んで屋上に向かって逃走した!

「退いて!!」

勢いよく屋上に飛び出してきた兵士に慄く104期調査兵たちは傍観するしかできなかつた。

受け身をせずには仰向けに倒れ込んだ兵士の顔を覗くと脂汗を掻いたフローラだった。

「フローラ!？」

親友が死にかけているのを見たミーナは血相を変えて彼女の元に駆け寄った。

あれほど親友は運動していたのに過呼吸どころか虫の息だったせいで完全にパニックになった。

「ミーナ、寝かせて…」

「駄目!!寝ちや駄目!!」

瞼を閉じればそのまま死んでしまいそうでミーナは必死に親友の意識を保とうとした。

フローラからすれば、女型の巨人戦から交戦し続けたせいで限界なので休ませてほしかった。

そんな事など露知らずに彼女は必死に親友の身体を揺すり頬を叩いた!

トロスト区の門でやった『肉の誓い』を達成するまでこれ以上、死んで欲しくなかつ

たのはある。

それ以上に無力の自分のせいで親友が死んでしまうのは繊細なミーナの心では耐え切れなかった。

「朝に…この信煙弾を…あとは頼んだわよ…」

「やだ!!ウオール・マリアを奪還して肉を食べる誓いをしたじゃない!」

「お願い…寝かせて…揺らさないで…」

休むだけなのに親友に止めを刺されそうになっているフローラ。

せめて信煙弾だけでも渡そうとしたが、逆効果になってしまった。

「おい大丈夫か!」

ライナーの確認に対してフローラは双剣を改めて構えて…すぐに力尽きた。

ミーナに抱き着かれてしまい胴体を圧迫されて気を失った。

それでも最後の力を振り絞って親友を斬らない様にブレードを石床に降ろした。

「フローラ!!? 嘘でしょ!？」

「大丈夫だ! 疲労で気を失っただけだ!」

「こいつの事だ、3時間もあればすぐに復帰するさ!」

「放して!!」

「ミーナが離れるんだ!」

ライナーとコニーが泣き叫ぶミーナを引き離して説得した。

冗談抜きでフローラを殺害しようとしているように身体を揺すっているのを見逃せなかった。

「良かった…無事で…」

クリスタは同期が助かって思わず膝を石床に付けて安堵した。

だが、状況は悪化を辿っていた。

「誰だよ! 酒を全部飲みやがったのは!?!…ぐはっ!?!」

辛うじて息があつたゲルガーは自身が見つけた酒の瓶を見つけた。

喰われる前に呑もうとコルクを取つて瓶を口に近づけたが一滴しか無かつた。

それも唇を濡らすだけで終わり、酔うどころか味すら分からなかつた。

最初に見つけた時は中身があつたので誰かが飲んだのは確定である。

絶望した彼は巨人に掴まれても酒を飲んだ犯人に激怒したが頭に瓦礫が衝突して気を失つた。

「お父さん!!ごめんなさいごめんなさい!もうしません!やだああああがあああああ
!?!」

右太腿を噛み千切られたナナバは最後に父の顔を思い出して巨人に謝罪していた。

そんな戯言など気にせず巨人は胴体を噛み千切つて下半身を地面に落とした。

その半身ですら他の巨人が群がって噛み千切つて咀嚼していた。

それに比べればゲルガーは頭を強打して気を失つた分、苦痛を味わわずに戦死できたともいえる。

「ハの…!!」

「よせクリスタ！もう塔がもたないぞ！」

「だって…私たちの代わりにゲルガーさんが…ナナバさんが…」

「彼らの死を無駄にするわけにはいかないんだ…堪えてくれ！」

クリスタは近くにあった瓦礫を巨人に向かって投げつけたがユミルは必死に制止した。

建前上は彼女を落下させないようにしたが、囀りのおかげでひとまず自分たちが安全になった。

現に巨人が新たな獲物を探して周囲をうろついているので、発見されるのを防ぐためもあつた。

「クソー！」

どうにもできないという八方塞がりの状況に無意識に拳を床に叩きつけたコニー。

ライナーやベルトルトも同じ気持ちである。

こんな所で喰われるつもりは無いが、恩人たちがこうして無残に喰われるのはきつかった。

「それにしても…良く眠れるな…」

そんな絶望的な状況下で寝ているフローラ。

疲労困憊だったとはいえ、信煙弾を託して刃を地面に降ろした瞬間、寝息を立ててしまった。

泣きじゃくるミーナから受け取ったライナーは、黄色のラインの信煙弾を眺めて溜息を吐いた。

これを使えば緊急事態を近隣に知らせることができがまだ夜中、撃てるわけがなかった。

フローラが知らないはずはないので、朝になるまでよろしくという意味合いで渡したのだろう。

「塔が崩れてただ喰われるのを待つしかないのか…」

「最終兵器のフローラが目覚めるのが先か、塔が崩れるのが先か」

「もう少しフローラの事を心配しない？なんでみんな、そんな薄情なの？」

ベルトルトは嘆いている同期たちの会話を聴いていると誰もフローラについて触れてなかった。

ミーナは仰向けで倒れているフローラに添い寝しており物理的に触れている。

それ以外は、フローラが復帰してくれるまで待機している異様な雰囲気違和感があつた。

「何言つてんだベルトルさん。フローラだからだよ」

「ああ、どんなに怪我をしてもすぐに復帰するからなこいつ」

コニーは、訓練兵時代に何度も事故でフローラが死にかけているのを目撃していた。

それでも翌日には復帰しており不死身さを知っていた。

もしかしたら、塔が崩れる前にフローラが復帰するのを待った。

いつの間にかこの場に居る同期の大半がその考えだと察したベルトルトは何とも言えなかった。

馬のライリーは散々の1日だった。

人見知りの「彼女」の鞍に乗せられたのはミケ分隊長、サシャ、カヤ、そして負傷した女兵士。

普段だったら振り落して全力で蹴り飛ばすのだが緊急事態なので必死に異物感を堪えていた。

いつも以上に頑張った事を褒めて欲しいのに自称主人面した女は現れなかった。

さすがに死んではないと確信しているが、巨人がいつまで経っても居るのに腹立たしかった。

「痛い……よ」

リーネ・ハウズドルフは唯一、104期調査兵以外で古城防衛戦で生き延びた兵士である。

左脚の膝から下は切断されてしまって無いはずの部位が痛んで馬の振動で苦しんでいた。

残った意識は、一足先に戦線離脱してしまった事による自分の無力さを恥じていた。

まだ、同僚達が交戦しているのに自分だけ敵前逃亡しているようで泣いて呻くしかで

きなかった。

既に同僚は全滅しているとは知らずにただ巨人への恨みと痛みを積もらせてただだった。

「私も…私も戦いたい！何か武器があればいいのに」

クリスタ・レンズは巨人と交戦する気満々だった。

守られるだけの存在では居たくない彼女。

あれほど頼りがいがあった先輩達が喰われて塔は崩壊寸前、このままでは犬死するだけだ。

「そうしたら一緒に戦って死ねるのに…」

「クリスタ…まだそんな事を言ってるのかよ」

以前からクリスタが死にたがっているのをユミルは気付いていた。

自分の存在を否定されたくなくて「女神」として印象に残そうとしている少女。

かつて女神の様に讃えられていたユミルからすれば反吐が出る話である。

「彼らの死を利用するな！お前の自殺行為を口実になる為に上官たちは死んだんじゃねえよ！」

「だって…だって…！」

「お前は、コニーや上官と違って『本気で死にたくない』と思つてないだろう？」

「えっ…」

「いつも、どうやって死んだら皆から褒めてもらえるか考えているだろう!？」

冗談じゃなかった！

女神として演じて人々を救ったつもりで生活してきた彼女は迫害して一度人生を終えた。

誰かの為に女神を演じることなど人生を破滅する事と身をもって体験をしている。

こんなに素敵な自分のお嫁さんになる予定のクリスタに同じ轍を踏ませるわけにはいかなかった。

ユミルは本気でクリスタを諭すように彼女の顔をまじまじと見た。

一同も心配そうにクリスタの方を見ていた。

「ち、違うよ…私はただ皆を救う為に…!」

「だってよ!おいフローラ!まだ交戦する気はないのか!」

「もう少しだけ休ませてよ!」

「駄目だ!これ以上放置したらクリスタが自殺願望で暴走しちゃうからな!」

そもそもクリスタより遙かに強い存在が居て復帰していた。

メンタルケアの達人と揶揄されるフローラは、数時間の睡眠で完全復活した。

それどころかヘニングと呼ばれた兵士の鞘からブレードを抜き取っており交戦する気満々だった。

もちろん、疲労は残っているが起床した直後に缶詰の中身を喰わせたら元通りになった。

「フローラが死んだら、その時に考えような」

「ゴメン…」

「分かってくれるのならそれでいい」

「ちよつと待ちなさい!縁起が悪い事を言わないでよ!!」

フローラからすればクリスタを守るために自分が特攻する役目になっていた。クリスタとの違いは自殺願望の有無であるが、傍から見れば自殺にしか見えない。1体の巨人に30人の人命が失われるというのに、塔の周りに30体近く居た。刃は6本、ガスの残量は半分ほどであり、どう足掻いても巨人の群れに負ける装備だった。

「最後に日を拝めるとはなあ…」

コニーは、死刑執行の当日の朝を迎えた気分だった。

何故か、恐怖などなくてこのまま終わるのかという穏やかな心境だった。

「コニー、短剣を貸してくれ」

「ん？まあいいけどよ…何に使うんだ？」

「何って、これで戦う為だよ…ありがとな」

犬猿の仲であるユミルに短剣を渡したコニーは異常に気付いた。

いつもなら弄ってくる癖に今回は素直に感謝して坊主頭を優しく撫でてくれたから

だ。

そもそも武装したフローラが交戦するのであって、ユミルは戦う必要はない。

もう少し、日が上に登ったら信煙弾を上空に撃ち出して友軍に場所を知らせるだけでいい。

「ユミル…何をやる気だ？」

「さあな、自分でも分からん…ただ自分のやりたい事をしただけさ」

ライナーの質問にユミルは自分の考えを述べた。

ユミルこそ自分がこれからする事を考えて憂鬱になっており歩きまわるしかできなかつた。

今なら何とか誤魔化せるが、秘密というのはいつかバレてしまう。

少なくともクリスタは生存が確定するので正体を隠しきれないと分かってしまった。

「クリスタ、お前の人生に口を出す権利などないと思ってる…だからこれは願望なんだ

けどさ」

「ユミル？」

クリスタはユミルの様子がおかしくなっているのは分かった。

自分の代わりに自殺をするのかと思ったが巨人と交戦すると言い出した。

なので自殺ではないが、ただ事の騒ぎになるなどは予測を立てた。

少なくともさきほどの立場からすれば、今度はユミルが追い詰められている様だつた。

しかし、フローラが動かないのを見ると自殺はする気がないと分かる。

ではここから何をするのかは、想像しようがない。

「お前…胸張って生きろよ」

「えっ…」

ユミルは、ようやく愛するクリスタに告げたかった単語を述べることができた。

ついでにもう少しだけ自分のお嫁さんのミニスカート姿に癒されたいが時間が無い。

さきほどの会話で複数の巨人に勘付かれて、塔を登ろうとしてきたからだ。

「ユミル!? 待って!」

クリスタの制止を振り払ってユミルは塔から飛び降りた。

金髪の少女が塔から手を伸ばしているが、ユミルはその手が届かない先に居る。

それは、彼女たちの不穏な未来を暗示されるかのような状況だった。

『チッ！』

予めフローラから巨人の数を聴いていたが実際に塔から飛び降りたユミル。

落下する彼女の視線には口を開けたり手を伸ばしながら塔を破壊している巨人たちの姿だった。

「おりゃー！」

生まれ変わったら自分の為に生きる事を願ったユミル。

今回は、クリスタが本来の彼女に成る為に代わりに自分が自己犠牲をする事だった。

結局、他人の為に動いているな…と実感して自嘲しながら彼女は短剣で掌を切った！

落下しているせいで痛みと共に自身の生暖かい返り血が顔に浴びたが気にする事は

なかった。

『私は！私のお嫁さんを守る！！邪魔するなあああああ！！』

もつと大切なものがあつたからだ。

ユミルが確固たる意志と肉体が自傷された事実により巨人化のトリガーが発動！

雷の閃光らしき光が回りながら衝撃でユミルの首から骨が出現した。

それはユミルを基礎として自身の身長何倍以上のサイズとなり骨格が構成された。すぐに大量の肉の筋が新たな骨格の大半の覆つて筋肉とし、血肉を造り上げた。

同時に眼球と牙が生成された後、表皮と根深い毛が生えて人体と化した。

腕を広げると鋭利な牙が生えた6 m級の巨人となり、下に居た無垢の巨人に襲撃した。

「あああ！！どいつもこいつも！！」

フローラは「好き勝手に行動するな」と言いたい所だった。

だが、それは普段の彼女の振舞いで特大のブーメランになるので口を噤んだ。

『行くしかないわ!』

ユミルが塔から飛び降りた瞬間、アニが巨人化する時と同じ閃光と爆風が発生した。つまり…そういう事だ。

同期たちの思考が停止して動けなくなっている時、フローラは双剣を構えて走り出した。

巨人のうなじを噛み付いて暴れまくるユミルを援護する為に。

「お、おい!？」

クリスタのスカートの切れ端で右腕を固定されているライナーの制止を振り切る頭
進撃!

同期たちが動けない以上、自分がなんとかするしかなかった。

先陣を切ったユミルに続いて、フローラは塔から飛び降りた。

6 m級の巨人になったユミルと一緒に30体ほどの巨人を駆逐する為に!

72話 本当の名前

ある所に薄幸で両親から認知されていない金髪の少女が居た。

使用人だった母親は、あわよくば領主の妻になれると思ひ領主に取り寄つて捨てられた。

以降、領主の忘れ形見の少女はお荷物となり『無かつた物』として母親から育児放棄された。

少女は、本を読んで外の世界に興味をもつて母に接触したが拒絶された。

そして父となる男と再会したが、結果は母親を殺されて偽名を使って開拓地送りされた。

『自分は存在しちやいけないけど、せめて誰かに感謝されて死にたい』

『クリスタ・レンズ』と名付けられた金髪の少女は誰かの役に立つ為に兵士になる事にした。

ウォール・マリア陥落を受けて、健康的な若者は兵士になるべきという世論の後押し

があった。

そのおかげで華奢でか弱い肉体の彼女でも兵士志望を怪しまれる事はなかった。

『貴様は何者だ!?!』

『トロスト区北部の村出身、クリスタ・レンズです!』

『…貴様、まさか兵士になれるとも思ってるのか!?!お前は罔にすらなれん自殺志願者だ!!』

『うっ…』

『尻尾を巻いて開拓地に帰るがいい!不相応に兵士になるより豚の方が素質があるからな!』

キース教官の通過儀礼にも泣きながら耐えたか弱い少女。

正式に104期の南方訓練兵団に所属した彼女は、誰かの役に立とうとした。

お腹を空かせた女にパンをあげたり、男の子を応援してあげたりと『女神』を演じていた。

しかし、同期の中で3人に本質を見抜かれてしまった。

ユミル・ゲッティン、フローラ・エリクシア、メルダ・プリントは、彼女の本質を見

抜いた。

『やっぱ、お前を放置できねえよ！私が守ってみせる！』

ユミルは内地の教会で聴いた前評判通りの『女神様』を守って人間にするつもりだった。

自殺願望の持ち主の彼女を放置して自由に生きていくつもりはなかった！

前世は【女神】だったので女神として振舞う彼女が他人事じゃなかったのもあった。

『他者に迷惑を掛けるほどの献身的な態度と可愛い女神を演じている女…なんか嫌ね』

数多くの同期と友人になったフローラは、献身的過ぎる女神様の不気味さで避ける事にした。

訓練兵で唯一香水を自作できる彼女は、クリスタにとって最難関の攻略対象だった。

『誰からも愛されるクリスタ』になるには、フローラに認めてもらわないといけないからだ。

それと彼女の人気は香水の影響があると分析して、香水を求めていた。

結果的に甘い香りがするクリスタ専用の香水の作り方を教えてもらい、人気は上昇した。

『“良い子”ね…あたしと同じタイプか…！さっさと退場してもらわないとね』

良い子ぶって男子や教官から注目されていたメルダは、同類の匂いを感じ取った。憲兵になるには最大の障害になると思い、陰湿ないじめと策略を駆使して排除しようとした。

一時は知力がコニーと同等、身体能力は低いおかげで挫折させるには容易である。当のクリスタが破滅主義者というのもあって開拓地送り一歩手前まで追い詰めた。

『なるほど…あいつがクリスタを追い詰めてるのか！だったらこっちにも考えがあるぜ！』

ユミルが見逃すはずもなく遅刻を有耶無耶にした代わりにパシリにしたフローラを使つて対抗。

彼女が成績上位陣と仲が良いのを利用して、クリスタの成績を底上げする事にした！

座学はアルミンやマルコ、実技はミカサやアなどのトップ勢に指導させてもらう事に成功した。

更に成績上位の人物と友情や信頼を構築させて彼女が破滅しないようにした。

こうして彼女は成績上位になり、上位10位も夢じゃなくなる頃、クリスタに転機が訪れた。

「クリスタ…諦めろ」

「嫌だ！私は諦めない…」

ユミルは重荷を引き摺るクリスタに諦めさせた。

人類活動領域の最北端にあるユトピア区にほど近いアトラス山脈

104期訓練兵は体調不良を訴えたフローラ以外がこの地域で雪上訓練を行うことになった。

「ダズなら虫の息だ。評価欲しさで死にかけるなんて滑稽じゃないか」

「笑い事じゃないよ！」

クリスタは倒れたダズを防寒具で包んで紐で結び付けて引っ張っていた。本来なら下山ルートを目指さないといけないのだが、坂道が急なので遠回りで移動していた。

ユミルは、改めて愛するクリスタが馬鹿だと思った。

「このまま毛虫の速度で移動していたら私達もやべえぞ…朝までもたない」
「それでも見捨てられないよ」

「選択肢は2つだ。ダズを見捨てて2人は生き残るか、3人共凍え死ぬか」

雪が降りだして風が出てきた。

今はまだ方位を理解しているおかげで移動できているが、このままだと遭難する。

本来は複数の下山ルートを利用して装備を抱えて麓まで降りるだけであり競争ではない。
ない。

班で一致団結して装備を身につけたまま移動困難な場所の効率的な進軍を考える訓練であった。

「3つ目にする。私は麓にダズと共に辿り着いて先行したユミルも助かる…これでいい

「でしょ?」

「私が行って応援を呼べばいいのか」

「うん、そうして!早く行かないと危ないし:早く行ってよ」

クリスタは倒れたダズを最後まで引き摺って行くつもりだ。

最後まで諦めたくないし、何より自分の存在意義が失われるからだ。

「良いのかクリスタ?」

「何が?」

「良い子を演じているならまず私に相談しないのか?お前の案だと私しか助からんぞ」

「えっ…」

「死ぬほど良い子になりたいからって、他人を巻き添えにして殺しちゃ悪い子だろう?」

まずクリスタは、ユミルに倒れたダズに対して何も相談をしていなかった。

むしろ、ユミルがここに居る事自体がおかしかった。

そもそもユミルはクリスタの下山ルートを選択していなかったからだ。

「何が言いたいのか？」

「最初からダズを助ける気はねえだろうって話だ。少なくとも私に相談してこない時点でな！」

ユミルが心掛けたのは、クリスタを孤独にさせない事だった。

女神を演じているが組織では孤立していていつ消えてもおかしくない心理状態を見抜いた。

彼女の献身的な態度を悪用して下半身だけで生きている獣や女狐から護るのもあつたが。

「そもそも私がダズを引っ張った方が速いと思うぜ？」

「何でそこまで私を気にするの？」

「内地の教会で、家から追い出された妻の子って話を聴いてさ。他人事じゃないと思つたのさ」

「…じゃあ、私を探しに訓練兵まできたの!?!何の為に!?!」

クリスタの人生は否定されるだけの人生だった。

父も母も領民の子供からも否定され続けた。

【良い子】として演じている時だけ皆から高評価されるだけの空しい人生だった。それでも訓練兵団に入団してようやく居場所ができたような気がした。

「私と友達になりにきたの？」

「違うな……お前と私は違う！私は一度死んで生き返った！第二の人生を有意義に生きる為になー！」

「……何が言いたいなの？」

「私は過去に『ユミル』という女神を演じて酷い目に遭った！」

「だから同じように女神を演じられるのは嫌なんだよ！」

「女神？」

「ああそうだ！与えられた役を演じて誰かが幸せになれると思つて女神と演じたが裏切られた！」

「分かるか!?良い子でも奴らは平気で踏みにじつて来るんだ！利用した挙句捨てて来るんだ！」

ユミルは、クリスタが自分と同じ轍を踏んでいるのを見てイライラした。

誰かの為に献身的に尽くしても、裏切られるのは一瞬だ！

利権の為、自己愛の為、嘘の為、性欲の為、見下す為に人は容易く裏切る。

ユミルは自由に生きてやると決意したのに女神だった時の癖で人生で迷う人を放置できなかった。

「私は生まれ持った不幸な運命なんて無いのを立証してみせる!!この呪われた名でない！」

「無理だよ…運命なんて変えられないよ」

「良いか！お前は努力して成績上位に近づいた！私と違って容易く運命を変える力があるんだ！」

クリスタは成績上位の同期たちの指導のおかげですくすくと立派な訓練兵に成長した。

この世の全てから否定された少女は、立派な兵士に慣れる素質があった。

彼女にはその気がないだけで本気になれば誰にも負けない女になると！

人生相談の経験豊富なユミルは感じ取っていた。

「無理だよ！ここから3人助かる方法だなんて…」

「あるさ！この真下に基地があるだろう？このミノムシ野郎を崖から落せば運が良ければ助かる」

「それじゃあ落ちて死ぬだけだよ！」

「こいつも助かるにはそれしかないんだ…私がうまい事やつておくからさ！先に行つてろ！」

ユミルに優しく突き飛ばされたクリスタは雪原を転がった。

それでも立ち上がった彼女は、慌ててユミルが居た場所に向かった。

『いない…この崖から本当にダズを落とすの？ユミルもどこに行つたの!？』

そこにはダズどころかユミルが居なかった。

足跡が無い以上、飛び降りたのは明白だったが暗いせいで崖の下まで見れなかった。

30 m以上の崖から飛び降りたら、深く積もった雪は衝撃を抑えてくれるクツシヨンにはならない。

自分のせいで二人を死なせたと思つたクリスタは急いで下山して基地の元まで走つ

た。

「おっ！思ったより遅かったじゃないか…もしかして私を探していたのか？」

「ダズは!？」

「あいつなら寝室で泣きべそ掻いてたぜ。凍傷だったが切断は免れてホツとしたところだ」

「良かった…」

「参加してない女がダズに厚着させたおかげで手足が挽げずに済んだってよ」

低体温症だったダズは、唯一訓練に参加してなかったフローラからもらった防寒具で命拾いした。

更にその寒がりの女は新聞紙を嫌がる彼の外套の内側に入れたのも功を奏した。

さすが気遣いできる女だと素直にユミルは感心している。

「ねえユミル…ロープも無しにどうやってあんな崖からダズを降ろしたの？」

「うーん、お前ならいいか…」

少しだけ迷ったユミルは、クリスタの素朴の疑問に対して答えることにした。

「ただし約束だ！私とその秘密を明かした時、お前は元の名を名乗って生きろ！」
「…いつ教えてくれるの？」

「そうだな…自発的に自分の名前を話してくれる時かな」

塔から飛び降りたユミルは巨人になった。

いつも一緒に居たクリスタすら知らない真実。

頭皮を嗅いだり、お嫁さん宣言したり、下心で近づいて来た男を牽制してきたユミル。それが人を喰らう巨人となって暴れ回っていた。

「嘘だろう!?!ユミルまで巨人になるなんて!?!」

コニーはエレン以外にも巨人になれる人物が居ると知って驚いた。

昨日から碌に眠っていないせいで悪夢を見ているのだと思ってしまうほどだ。

「あ、あれは…!？」

ライナーとベルトルトは、その巨人に見覚えがあった。ここに来る前にマルセルを喰った巨人にそっくりだった。というよりそのものであり、ユミルが巨人化できる謎が一瞬で解けてしまった。

「お、おい!？」

ライナーはフローラがユミルに続いて塔から飛び降りるのを察した。

彼は言いたかった！

あいつは自分の同期を喰った無垢の巨人だと！

しかし彼の想いは頭進撃に届くことは無く塔から飛び降りてしまった。

「おいおいあいつ…ユミルを援護しに行く気か!？」

ライナーはただ巨人の首を刎ねる処刑人の女と顎の巨人を眺める事しかできない。

いや、それ以上に訊きたい事がいくらでもあった。

「うおっ!?!」

「あっ…」

うなじを噛み千切られた巨人が塔に激突した衝撃で大きく揺れた。

真っ先に塔から上半身を出したクリスタは揺れて塔から空中に投げ出された。

一瞬、浮遊感があったが彼女はこれから落下死するのを覚悟した。

「うっ!?!あ、ありがとうライナー…」

ライナーは反射神経でクリスタのブーツを掴んだ。

なんとか落下せせずに済んだクリスタであったが更なる悲劇が襲った!

「痛い!痛い痛い!!ライナー!脚が…」

「おい、もう放して良いぞ!?!聴いてるのか!?!」

「クリスタが痛がつてるよ!早く放してあげて!!」

あたふためくベルトルトはいつもの事として、コニーとミーナがクリスタを引き戻した。

それでもライナーは脚を掴むのを止めないどころか強く握ってしまった。

ユミルの存在がマルセルの仇だけではなく過去の自分の失態でもあつて思わず力を入れていた。

コニーとミーナの呼びかけにより我に返ったライナーは手を放した。

「す、すまん…動転してた」

「ううん、ありがとう。助かった」

クリスタは初めてライナーに心の底から感謝したのを実感したが彼はそれどころじゃなかった。

「クリスタ…ユミルが巨人だつて事、知ってたのか？」

「知らなかった…3年間も一緒に居たのに…あれがユミルなの!?!」

ライナーの問いにクリスタは返答をする事はできなかった。
一緒のベットで同衾した時でもこんな秘密など教えてくれなかった。

「つまり、あいつはこの世界の謎の一端を知っていたという事か」

ユミルは壁外の産物である缶詰やマーレが使用している文字を読めた。

その時点で、壁外出身だと察したが顎の巨人の継承者だとは夢にも思わなかった。

冷静に考えれば、マルセルが巨人に喰われたら継承される為、人間に戻るはずである。

もし、あの時に逃走しなければと思ったが後の祭りである。

『いや！もつと大切な事があった！』

ここでライナーはさらに重要な事を見逃したのに気付いて後悔した。

ユミルの事を考えていたせいでクリスタのスカートの中を覗くを忘れていた。

ミニスカート状態であり、塔から落ちそうになった時、ブーツをしっかりと掴んでいた。

つまり合法的にクリスタのスカートを覗いて生パンを見れる絶好の機会であった。

二度と訪れない奇跡の瞬間に立ち会ったにも関わらず彼は見逃してしまった。

大体、マルセルのせいだが、もう一度、塔が揺れて同じ状況になって欲しいと願った！

「ああ、そうだね！正体を明かして兵団に貢献する事ができたはずだ」

またしても何も知らないベルトルトは相棒の発言を肯定した。

「エレンみたいに！でもそうしなかったのは…そうできなかつたのかな」

しかしベルトルトは油断しなかった。

すかさず「エレン」と発言したのは、ライナーが正体をカミングアウトするかと思つたからだ。

「こいつも5年前にシガンシナ区を破つた超大型巨人だ」などと発言されてないように釘を刺した。

何を考えているのか分からないせいで牽制する必要があつた。

ライナーがクリスタの下着の事を考えているなんて夢にも思わなかつたが。

「エレンは巨人になれるのは知らなかったけどユミルは知っている感じだったわね」
「あの暴れっぷりからそうだと思ったぜ…あいつはどっちなんだ？」

ミーナとコニーは、ユミルが人類の敵か味方か分からなくなった。

味方と思いたいが、今まで巨人の力を隠しているのは不自然過ぎた。

コニーに至っては、ユミルと喧嘩する機会が多いせいで判断に困った。

「どっちって…ユミルが私たちの敵だとも言うの？」

「考えてみればどんな状況でも涼し気な顔をしてたからな。こんな力があれば当然だろうが…」

クリスタはユミルが人類の敵だとは思えなかった。

かつては誰かの為に…今でも自分達を守るために交戦しているユミルが敵のはずではない！

何か事情があつて自分に報告できなかつたと信じるしかなかった。

『…ダズをあの崖から無事に降ろせたのはこの力のはず！』

ユミルは歯に衣着せぬ辛辣な発言をするが、何かとお節介で優しかった。

ダズをミノムシと称していたのに冷静な判断を下して助けた時点で女神だった。

『ねえユミル…ロープも無しにどうやってあんな崖からダズを降ろしたの？』

『うーん、お前ならいいか…』

『ただし約束だ！私とその秘密を明かした時、お前は元の名を名乗って生きろ！』

これが彼女の秘密であり、人類に敵対するリスクを知っていながら披露してくれた。ならば、次は自分の本当の名を告げないといけない！

女神クリスタ・レンズはここで終わって！

ヒストリア・レイスと名乗ってユミルと一緒にクリスタは自由に生きるつもりだ！

「信煙弾を撃ったわ！これで誰か気付くといいいけど…」

ミーナは親友からもらった黄色の信煙弾を上空に向かって撃ち上げた。

黄色の意味は、作戦成功か、非常事態の意味である。

細かな指示ができないのが難点だが、緊急時に撃つには最適な物であった。願わくば、すぐに援軍が来ることを祈り、一同は塔の屋上で祈っていた

『ライナー!!わたくしに何させる気なの!?!』

巨人と交戦しているフローラはライナーの負の感情の“声”を聴いた。

女神の下着を見るのを諦めた彼は、フローラに確認してもらって同様の下着を購入してもらおう。

そして彼女と同じ香水を下着に付着させて譲渡して欲しいという感情だった。ぼそぼそと話しかけてくる声に本気で気持ち悪かった。

『あんたたちに恨みは…ありまくるわ!!』

怒りでパワーアップしたフローラは次々に巨人の首を刎ねていく。

ユミルも必死に巨人の弱点を潰していくが多勢に無勢だった。

「ユミル！後ろは、わたくしに任せて!!」

すぐにガスが切れるのを悟ったフローラはユミル巨人の首の後ろにアンカーを突き刺した。

逃げにくいので巨人に掴まれて捕食される可能性が高いがこうするしかできなかった。

ユミルの巨体の動きに翻弄されながらも必死に後方で応戦するフローラ！

「多い…」

指を切り、腕を抉り、目を折れた刃で投擲して傷付けて、首を刎ねても終わる気配がなかった。

それどころか戦闘能力が低いユミルの巨人が押されてしまい圧倒的に不利になった。複数の巨人に足を引っ張られてユミルは塔から手を放して応戦し続けた。

「なっ！ユミルの奴、手を放しやがったぞ!？」

「まるで塔の損傷を気にしてるみたい…」

「……そうだよ！巨人の力を使えば1人で逃げられるのに私達を命懸けで守ろうとしてるから！」

「コニーとミーナの感想を聴いてクリスタは確信した！」

「ユミルはあんな姿になってもユミルであり大切な人だと！」

「自分たちを守るために勝てない戦いをしているのだと！」

「フローラが頑なに無視されているが、彼女はそんな事など気にしてられなかった。」

「おいまずいぞ…」

「おそらくフローラはガス切れが近いな！動きが鈍すぎる」

「いやいや！この短時間で6体の巨人の首を刎ねてるんだけど!？」

「あとその4倍の数を倒してくれないと無理だぞ！」

「巨人化したユミルは複数の巨人に襲われて身動きが取れなくなつた。」

「フローラは救助したいが、目の前に居る巨人6体に手古摺っていた。」

同時に巨人を相手にできるのは3体までの彼女には荷が重かった。

「なんでよユミル!!」

クリスタは、ユミルが秘密を暴露したのに自分の本当の名を知らずに死ぬ気だと分かった。

女神を演じている自分を嫌がった癖に彼女は同じことをやろうとしていた。

頼みの綱のフローラは5体の巨人による同時攻撃を回避するので精一杯に感じられた。

「こんな所で死ぬなユミル!」

クリスタは必死に叫んだ!

塔から飛び降りる勢いでしゃがんでコニーが支えようとするのを気にせずに叫んだ!

その声は、ユミルの耳にもしつかり聴こえた!

「なに良い子ぶってるの！そんなに格好良く死にたいのか馬鹿!!」

「おいクリ…」

「性根が腐っているのに今更天国に行けると思ってるの!?!このアホが!!私にあれだけあんな事言っておいて自分だけ勝ち逃げをするつもり!?!お前こそ自分の為に生きろよ!!」

豹変したクリスタに1名を除いて誰もが驚いた。

ライナーは、彼女の意外な一面を見て満足したと同時に罵倒して欲しかった。

妄想は更に研ぎ澄まされていき、無駄に彼の“声”で聴かされてフローラは無理やり追体験した。

「こんな塔を守って死ぬくらいなら…こんな塔なんてぶっ壊しちゃえ!!」

愛するクリスタの本音を聴いたユミルは塔の石壁を破壊し始めた。

寄ってくる巨人に石を投げつけて、大きく溝を作るように塔を解体していく。

「本気で壊しやがった!?!」

「嫌ああああ！フローラ助けて！」

「やりやがった…」

「いいぞユミル!!」

ハイテンションになったクリスタは立ち上がって塔が倒れそうにも関わらずガッツポーズをした。

意外と活発的で今まで抑圧された感情が解放される様に自由になった。

さっきまで自由だった女が必死に巨人の足を削いで動けなくしてるのを考えると一番自由だ。

「うおっ!?!」

目の前に巨人が出現してベルトルトは思わず右手を噛んで巨人化しようとした。普通ならそんな事をしないがマルセルを喰った巨人にトラウマがあったからだ。中身がユミルで味方だと知っても生存本能でやってしまいそうだった。

へイキタカツカアレ

「生きたかったら掴まれ」と聞こえたライナーが真つ先に巨人の髪の毛を掴んだ。

それに続いてクリスタとミーナが続いてコニーも髪の毛を掴んでいった。

ここで助けてもらえると分かっていたベルトルトはようやく手を噛むのを止めて皆の行動に従った。

「い、いけえええええ!!」

巨人化したユミルの髪の毛にしがみ付く5名はただ塔が倒れてくれるのを祈った。

これで複数の巨人の足止めできれば充分と考えるほどである。

あくまで身動きが取れなくなれば、逃げ切る事は可能だからだ。

崩壊したウトガルド城の建物はヘニングの死体と共に複数の巨人を瓦礫の下に追いやった。

「まさか巨人を塔の下敷きにするとはな…」

「これで何とかなれば良いけど…」

「おいフラグを建てるのを止めろ!」

音を立てて崩壊した古城の音は遠く離れた地域にも聞こえたはずだ。

土埃のせいで中々息ができなくて苦しかった104期調査兵だが全員無事だった。

『これは…避難させた方が良くわね!』

援軍の音を感じたフローラは、同期達に安全地帯に誘導させるつもりだった。

ここは平原、巨人と追いかけてここで勝てるわけがない不利な場所だったからだ。

振動と共に巨人が立ち上がってくるのもあった。

「巨人が立ち上がってきたぞーブスー・フローラー!早く止めを刺せよー!」

巨人が体勢を立ち直したのを見たコニーは、当然の様に発言した。

確かに無防備でどうしようもない状況だったが、彼女たちは当然、分かっていた。

『…んな事、分かってる!!』

『さすがにこの数は瞬殺できないわよ!!』

クリスタに背中を押されたユミルは必死に無垢の巨人のうなじを噛み付いた！
フローラの場合は、アンカー射出と双剣の構えのせいですぐに動けなかった。

「やべえ…ユミルがやられる！」

コニーの指摘通り、ユミルは巨人の群れに抑えつけられて身体を喰われ始めた。
必死に抵抗しているが、これではすぐに喰われてしまう。
フローラもあの中に突っ込むのは危険と判断してどうする事も出来なかった。

「このままじゃユミルが巨人に喰われるな…」

「ああ、相当まずいよ！」

ユミルの巨人の部位を分散させて喰おうとしている巨人たち。

ベルトルトとライナーは彼女が巨人に捕食されるのを危惧した。

どちらかと言うと巨人に捕食された後を気にしていた。

もし、捕食されて引継ぎされれば、エルディア人が事実気付いてしまうからだ。

「そんな…待ってよユミル！」

やっと本当の名前を告げられると思った矢先にユミルが喰われるとクリスタは判断した。

「まだ話したい事があるから…私の本当の名前、教えてないでしょ！」

同期の制止を振り切って、ユミルに近づいたクリスタ。

そんな彼女の想いを踏み躪って捕食するかのようには瓦礫の影から巨人が出現した。

『やだ…まだ名前を伝えて無いのに…』

フローラが世界一美味しいお肉なら彼女は二番目に美味しいお肉である。

目の前にご馳走が生えたのを発見した巨人は泣いた女の子を掴もうとした。

「わ、私の名は…」

クリスタは最後まで自分の本当の名前をユミルに告げる事は出来ないのだろうか。すると金髪の少女を捕食しようとした巨人のうなじを何者かが削いだ！うなじを挟まれた巨人は蒸気を噴き出して派手に倒れた。

「ミ、ミカサ…!？」

絶体絶命のピンチを救ったのは同期であるミカサ・アッカーマンであった。

104期訓練兵団を首席で卒業した最強の女。

巨人討伐数と友人の数と不死身さ以外ではあらゆる面でフローラを凌駕する存在である。

「クリスタ…みんな下がって！後は私たちに任せて!!」

瓦礫の上に飛び乗ったミカサの遙か真上に立体機動を行なう調査兵たちが居た。次々と巨人のうなじを削いで討伐していく頼もしさに全員が笑みを浮かべた。

「間に合った…」

ミーナの放った信煙弾とウトガルド城跡の崩壊でハンジ班が気付くことができた。

間一髪、先行したミカサが巨人のうなじを削いでクリスタは五体満足で生還できた。

「ああ、良かったわ！これで休める」

ここで一番嬉しかったのはフローラだった。

巨人化したユミルにぶら下がって巨人を滅多切りにしていた彼女の身体は限界だった。

文字通り、気のままに飛び回るユミルの動きに振り回された彼女は傍観する予定だった。

「後続は散開して周囲を警戒！他の兵員は巨人討伐と104期の救助へ向かえ！」

珍しくハンジ分隊長が分隊長らしい指示を出しているとフローラは思っていた。

現在戦闘を行なっているのは自分が所属している第四分隊。

全員、顔馴染みであり彼らの顔を見た瞬間、彼女の力が抜けた。

「おっ！フローラ…この厳しい状況下で君は本当によく持ち堪えてくれたよ」
「疲れました…あとはお願いします」

フローラはこれで休めると思い、適当に上官に挨拶して眠るつもりだった。
巨人と戦闘中に眠るわけにはいかないが、そう思うほど身体が限界だった。

「刃もガスも切れたんだね！ちゃんとして用意してあるよ！」

「…えっ？」

「ほら、ぼさつとしてないで君も装備を身に付けて交戦するんだよ！」
「待つてください！女型の巨人戦からぶっ通しで戦い続けて身体が…」

まさかの参戦指示にフローラは混乱した。

ハンジ分隊長からすれば、何でフローラが巨人との戦闘に消極的になつてのかわからない。
エレンと同じ巨人を駆逐する夢がある以上、その手助けをしたただけであつた。

「ぎゃあああああ！フローラ！助けてくれ！！」

「喰われるうううう！！」

「あなたたち助けにきたんじゃないの!？」

フローラは無意識に装備を変えていると、巨人に捕食されそうな調査兵が続出した。

さきほどまで新兵に気を取られたり、瓦礫を退けて立ち上がってきた巨人が脅威になつてきた。

奇襲攻撃のタイミングを逃した瞬間、巨人に掴まれて同僚が喰われそうになった。

「あああ!!もう!!」

休めなくなったフローラは無防備な同期どころか同僚を助けに向かった。

それを見たハンジ分隊長は満足そうに頷いて彼女に同行した。

フローラの闘いはまだ続いていく…。

73話 正体

「いける！」

「あんたは攻撃しなくていい!!」

エレン・イエーガーはユミルの巨体を齧る巨人に向かってアンカーを射出した!

人類の希望である彼の軽率な行動にハンジ・ゾエは焦ったが頭進撃を止めることはできなかった。

「死ね！」

巨人に不意打ちをして見事にうなじを削いだエレン!

訓練では何度も成功してきたが実際に巨人を討伐する快感をようやく味わう事ができた。

「やった!!討伐数1！」

なにより巨人を始めて公式記録として討伐できたのが嬉しかった。

巨人体ではトロスト区で巨人を20体ほど葬ったが公式記録で残るわけがなかった。

ようやく訓練の成果を果たせた彼は、嬉しさのあまり着地の事を考えられず、地面に衝突した。

「馬鹿野郎！下がれ！」

「痛たた…はい、すみません…」

先輩からの叱責でエレンは申し訳なさそうに頭を下げた。

「巨人を1匹残らず駆逐してやる」と決意したのに討伐実績0は情けなくて悔しかった。

謝りながらもこの調子で頑張っていけばライバルのフローラを越えると思っていた。

「えっ…」

顔をあげたエレンは見てしまった。

同じ夢を掲げた同志であり同期でありライバルであるフローラ。

そんな彼女は、続けざまに巨人の首を刎ねて巨人を討伐していく姿を見てしまった。巨人のうなじを削ぐのではなく、首ごとぶっ飛ばすという豪快過ぎる攻撃。自分は叱責されたのに同じように討伐した彼女には歓声があがっていることに。巨人を初めて討伐して満足していた自分が馬鹿らしくみえるように。

『負けられねえ…!』

エレンは考え直した!

1人では彼女の記録は越えられないと!

『みんなの力でフローラを越えてみせる!』

さきほどまでオルオの討伐実績の自慢で感化されていたエレンは決意した!
リヴァイ班や先輩たちと協力して巨人を討伐していく事に!

『痛いわ…!』

一方その頃、フロローラは巨人の討伐による疲労で限界だった。

首を刎ねるのは刃が欠けていてもできるので刃の消費は抑えられる。

その代わりに腕への負担が異常に掛かってしまつて両腕から血が滴れ落ちていた。

巨人の首を刎ねるのはそれだけの衝撃が両腕に負荷をかけてしまうと同意義である。

先人が思いついて、あえてやらなかった理由だった。

「すごいよフロローラ！一体どこでその技能を磨いたんだ!？」

「ハンジ分隊長、磨いたのでなく刃が枯渇したせいでやらざるを得なかったんです!」

ハンジは直属の部下が巨人の首を刎ねるのを見てリヴアイを越えたと実感した。

しかし、彼女の興味を惹く技能は産廃、つまり戦闘教義には加える必要が無いものだ。

ただ、こういった失敗の積み重ねが新たな技術確立と成功に繋がっていく。

巨人を討伐する手段が『うなじを削ぐ』から『うなじを破壊する』に発想が変化した。

これは後に「地獄の処刑人」という対巨人兵器に繋がっていく事となる。

「フロローラ鬼つええ!このまま巨人を1匹残らず討伐しようぜ!」

「なんで救出しに来た貴方が他人事なの!？」

「だって俺らが1体の巨人を狩る時間で、お前は複数の巨人を討伐できるし…」

新兵を助けに来た兵士が逆に新兵に助けられてしまった時に思わず発言してしまつた言葉。

それがフローラの耳に届いて彼女は抗議したが完全にスルーされる結果で終わった。もつとも誰もフローラを新兵と認識しておらず「人類最強の女」として認識されていた。

その結果、彼女の巨人討伐がただのシヨールになつてしまった。

『もうやりたくないのにいいいい!!』

かつて専用馬を入手する資金作りでカラネス区壁外で単独巨人討伐シヨールをやつた。

その結果、成功して半日も掛けずに大金を入手した経験がある彼女。

奇しくもその影響が今にも響いており調査兵もハンジもフローラが活躍するのを期待していた。

要するにこの惨状を招いたのは、フローラの自業自得だった。

「なんでこっちに来るんだ!!」

ライナー・ブラウンは飛び掛かってくる8 m級の巨人から逃げ回っていた。ただし、あらゆる面で向こうの方が勝っており彼が捕まるのも時間の問題だった。その前に巨体に衝突して肉塊になるのが早いかもしれない。

「こっちだ!!」

アルミンが巨人に向かって怒鳴り声をぶつけた。

目の前の獲物に夢中だった巨人であったが一瞬、彼の方に気を逸らした。その瞬間、閃光弾を撃ち込んで巨人の視界を一時的に封じた。

「アルミン!？」

「ライナー、ここは僕に任せてくれ!!」

ライナーは非力だったアルミンの成長に驚きながら彼に任せて逃亡した。ただでさえ負傷した身のうえ、寝不足で頭が一切まわっていないのもあった。

「無事か!？」

「いや、無事じゃない…クリスタに診てもらわないと…」

「馬鹿な事言つてないで早く城壁の影に隠れるんだ!!」

頼れる兄貴分だったライナーが夢か現実か区別がついてない様にふらついていた。

このままでは巨人に捕食されると思ったベルトルトが彼の手を握り、必死に逃げた。

「うわああああ!」

ライナーを無事に逃がす事に成功したアルミンも逃げ回った。

当初は、自分が囿になって先輩2名に巨人を狩ってもらうつもりだった。

ところが先輩方は新手の巨人と交戦してしまったので孤立無援の状態で逃げ回る羽目になった。

「ぐっ…よし!」

「モブリット副長! あ、ありがとうございます!」

「調査兵団の未来を担う新人を喰わせるわけにはいかないからね」

モブリットはアルミンが掴まれる寸前、間一髪にうなじを削ぐのに成功した。

参謀タイプの彼は、アルミンを高く評価しており、こつそりついてきていたのが功を奏した。

「うおおおっ!?喰われる!早く助けを!」

「いい加減にしろ!!アニや僕に散々迷惑をかけやがって!!せめて喰われる前に自害しろ!!」

せつかく隠れていたのにコニーを狙う巨人を見つけて突撃していったライナー。

頼れる兄貴分と兵士ごっこを楽しんでいた彼は巨人に掴まれて捕食されそうになっていた。

あまりの馬鹿さ加減に苛立ったベルトルトは初めて彼に強い口調で叱責した。

「ライナーを!放せ!!下衆野郎が!!」

妄想癖が激しくて戦士組に迷惑をかけているライナーであったが救いの手は差し伸べられた！

散々気持ち悪い妄想を聴かれたフローラだったが彼を見捨てるほど薄情ではない。

「わりい助かったぜ…ホントお前は頼れる仲間だよ」

「疲れている上に負傷者なんだから大人しくしなさいよ！」

「ああ、ベルトルトにも怒られたよ」

「クリスタと仲良くなりたいたいなら大人しく負傷兵として振舞った方が良いわよ？」
「確かにこういう事には怒りそうでもないな」

視界が霞んでいるフローラは、最後の力を振り絞って巨人のうなじを削いだ。

手を離されて落下するライナーを抱き込んだ彼女はアンカーを刺した死骸を利用して着地した。

以前、こうやって彼から助けられた彼女はようやくあの時の恩返しができる瞬間だった。

「ライナー…今度やったら絶交するぞ!!」

「さすがにやり過ぎた…すまん」

ウトガルド城でまともに寝たのはフローラだけで他は全く眠れなかった。

その為、疲労と寝不足と空腹で判断力が鈍ったベルトルトは相棒に暴言を吐くほど苛立っていた。

温和な性格で協調性しかない彼には相応しくない険しい顔を見た頭兵士は素直に反省した。

「まあ、その英雄志望さもライナーの良い所だからね…なんとも言えないわ」

「ああ、仲間が黙ってやられる所を見てられない…これ以上失いたくないんだ！」

「そんなライナーにプレゼントをあげるわ」

「なんだこれ」

理性と本能の狭間で苦しんでい兄貴分を見かねたフローラは役に立つアイテムをプレゼントした。

トロスト区の技術4班が開発した手投げ式の閃光弾と音響弾である。

「手投げ式の閃光弾と音響弾よ！ここの安全ピンを抜くと5秒後に炸裂するからうまく使つて！」

「いいのか？」

「少なくとも生身で巨人から仲間を助けるよりマシでしょ？」

「ありがとうな！」

ウトガルド城から妄想を聴かされたせいでフローラはライナーが気になっていた。

男子だからそういった妄想はしてもおかしくないかと我慢していた。

それでも命の恩人であるライナーが巨人に喰われるのが耐えられなかった。

「フローラ、ライナーに気を配り過ぎだよ……」

「ベルトルトがそんな事言うなんて、よっぽど馬鹿をやらかしたようね」

「分かつてるなら本気で止めて欲しいよ!!」

「それがライナーの良さであるんだからどうしようもないわ」

ベルトルトの懇願を軽くあしらつて肩を竦めてフローラはそれどころじゃなかった。

今までの経験上、絶対これで終わるとは思えないからだ。

新たな変異種か、それとも巨人の大群が別の場所に出現するのかは分からない。ただ、この巨人を掃討して終わりなどという楽観視などできるはずはなかった。

「何やってきたんですか？」

「ストレス発散の為に石投げを…」

「ついに頭脳まで『頭うんうん』になったんですね」

「ぐおっ…痛いよ！心が痛い!!」

昨日、散々な目に遭ったジーク・イエーガーはストレス発散で岩を投げてきた。

島の悪魔を巨人化させて動きと生態を観察する実験自体は成功していた。

ところがあの悪魔のせいで死にかけるわ、ピークに嫌われるわ、良い事とは無かった。

マーレ兵すら自分を汚物のように見てくるせいで彼は精神的にすり減っていた。

だから先日まで居た古城に岩を投げて満足して帰ってきたらこの有様だった。

「作戦が成功しましたので早く『悪魔の島』から脱出させませんか!」

「ああ、そうだ！こんな魔境に居たくねえ！」

マーレ兵たちは壁内の異様な雰囲気には押しされていた。

300匹以上のエルディア人を巨人にしたのに巨人化した以外では1体も目撃していない。

つまり既に討伐されたかそれに近い状況だと分かった。

獣の巨人が返り討ちに遭ったという情報が無ければ考えもしなかった。

「そういうえばこの作戦の意図って何でしたっけ？」

「まずは俺の脊髄液が島内のエルディア人にも通用するか、また操れるかが目的だった」

「【うんこ漏らし】には聴いて無いんですけど？」

「一応、現場責任者だからそれくらい話させてくれよ」

ジーク率いる特殊部隊がパラディ島に来たのは島内のエルディア人の調査及び実験だった。

5年前に潜入した戦士4人組の連絡が途絶えており、痺れを切らしたマーレ上層部に送り込まれた。

とはいえ、広大な壁内から潜入している戦士を探しだすのは不可能である。

「始祖の巨人の継承者が手強いのでしょうか。ここは陽動作戦をしてみても如何でしょうか？」

「…何が言いたいのだ？」

「今後のマールレの更なる発展の成果を得られる実験を兼ねた威力偵察というのはどうでしょうか」

「ふむ、さすがに保護しているエルディア人では人体実験できんな…マガト、貴公に一任しよう」

「ありがとうございます」

そこでマガト隊長は、ジークの脊髄液が島内の悪魔に通用するか試験を兼ねた潜入調査にした。

頭マールレである軍上層部には、今後のマールレに発展に不可欠な実験と嘘について納得させた。

そうしなければ、島内に潜入させた戦士組の家族が【楽園送り】される危険性があつたからだ。

『成果がなければ即座に用済み』、それがエルディア人を使役するマール軍の上層部の思想だ。

「今までと比べて遥かに危険な任務だが頼めるか？」

「もちろんです。必ず成果を持ち帰ってみせます！」

「頼んだぞ！ただでさえ『成果』を欲しているのだ。成果を得られずに帰還はできないからな」

「大丈夫です！やりきってみせます！」

マガト隊長は、特殊部隊4名とピークを編入したジーク班を結成し、パラディ島に潜入させた。

敵对国家の想像を上回る技術発展により対巨人兵器が次々に産声をあげている。

例え戦士組と再会できなくとも、実験結果を得られれば軍上層部を満足させられると考えていた。

時には冷酷なマガト隊長でも4名の戦士の家族を楽園送りにさせるつもりは断固として無かった。

幸いにも特殊部隊の発言は、軍上層部にも信頼されているので証人としてはうつつ

けであつた。

『マガト隊長は正しかった…冗談抜きでやべえ民族だった。そりやあ全世界から迫害されるわ…』

あの時、軽い気持ちで作戦を承諾したジークは、【エルディアの悪魔】に分からされた。自分たちが迫害される理由、そしてこの世に存在しちやいけない理由を！

とはいえ、実験結果が出た以上、一度船に帰還して指示を請うつもりだった。

「私は島内の悪魔が巨人になる実験しか知らされてませんが他にあつたのですか？」

「そうだ、むしろそっちの方が重要だったからな」

「勿体ぶらないで早く教えてくださいよ！うんこ漏らしの戦士長」

「ああ、簡潔に説明するぞ」

大便と小便で汚されたピークは、一生ジークを許さない。

それが分かっているからこそ、ジークは彼女の発言の訂正を求めなかった。

「ピークちゃん、「異形の巨人」って知ってるかい？」

「エルディア帝国から使役されている強力な無垢の巨人の事ですよね」

「うん、間違っていないが、実はそれらは特別な脊髄液で作られた人為的な巨人なんだ」

本人たちが知る余地はなかったが、壁内人類に「変異種」と呼ばれている巨人。

それは壁外では「異形の巨人」と恐れられる強力な巨人である。

無垢の巨人とは違って、特殊能力を所持しており、初手でうなじを狙っても倒せない強敵である。

「何が言いたいんです？」

「【異形の巨人】はな…俺らの脊髄液、つまり複数の巨人継承者の脊髄液で誕生したものだ」

「そういえば、定期的に抜かれましたね」

「もちろん、そのまま使っても無垢の巨人にしかならないが、ある条件で奴らが生まれる

んだ」

かつて存在したエルディア帝国から使役されていた異形の巨人。

しかし、とある理由のせいで無垢の巨人と比較すると圧倒的に作られなかった。

「例えば顎の巨人が居るよな！その脊髄液に少量の俺の脊髄液を加えてある事をすると誕生する」

「そういえば、顎の巨人みたいな異形の巨人が居ましたね」

ピークは、数週間前に顎の巨人そっくりの異形の巨人を目撃した。

褐色の肌に全身に刺青が入ったような風貌を忘れられるわけがなかった。

「話を戻すが、その顎型の異形の巨人は、複数の脊髄液によって誕生する事は分かるよね」

「そこまでは分かります」

「つまり弱点が本体のうなじと、もう一カ所に点在してるってわけだ」

変異種は、通常種と違ってうなじだけを攻撃しても効果がほとんどない。

理由は、本体がうなじだけではなく複数に点在しているからだ。

異形の巨人を討伐するには弱点部位を潰してからうなじを攻撃しなければならない。何故ならどつちも巨人を構成している本体だからだ。

「じゃあ、あの弱点部位は……」

「撃ち込まれた脊髄液を含んでいる器官ってことだ」

「でもそれだと何でうなじは初手で狙えないんですか？」

「分かり易く言えば、うなじを守る為の封印みたいなもんだね」

全身を張り巡らすように存在する刺青の様な筋は、サブの脊髄液の効果を出させる血管である。

そのおかげで含まれている巨人の脊髄液の効果を発揮できる。

それと同時に本体の脊髄液を守る結界の役割を果たしている。

厳密に言うとうなじでうなじを狙えるが、うなじに付近に血管の様な物を塞がないと倒せない。

血栓のようなもので他の脊髄液の力をうなじに届かせないようにすれば倒せる。

でもそこまでするくらいなら、弱点部位を潰してうなじを損傷させる方が楽という物だ。

「ピークちゃんが見たタイプだと【顎】を基礎にして【戦鎚】と【女型】で構成されている感じ」

「それだどうなるんですか？」

「弱点部位が2カ所、そして爪を自在に硬質化させて、仲間を呼ぶ性質を持ち合わせた巨人だ」

カラネス区の壁内に侵入してきた変異種は、顎タイプの異形の巨人だった。

戦鎚の能力で硬質化した鋭利な爪で駐屯兵をこの世から一掃させた化け物である。

また同類を呼び寄せる能力で集団で行動できる知性を有したような行動をしてきた。

「ただ問題なのはね！複数の脊髄液のせいで凶暴過ぎるんだよ！」

「うんこ漏らしの脊髄液ならコントロールできるじゃないんですか？」

「だからそれを兼ねてこの島で実験を行なったんだ」

始祖の巨人の継承者が居ないマーレどころかエルディア帝国ですらほとんど使役されなかった。

理由は複数の脊髄液のせいでフリッツ王家の意志さえも無視する事が多々あったせいである。

自由に動かせないどころか反乱してくる兵士など、どれだけ優秀であつても損でしかない。

「結果はどうでした？」

「最初の内は言う事を聞いたんだが、如何せん、凶暴過ぎて見送る事しかできなかったよ」

「では実験は失敗では？」

「中々厳しい事を言うよねピークちゃん……」

他の能力者と違って、ジークの脊髄液をエルディア人に投与しただけでは巨人にならない。

確固たる意志を持った彼の咆哮で初めて巨人となる事ができる。

その巨人は、主である彼の支配下であり、月明かりがあれば夜でも進軍できる代物

だった。

先代までの獣の巨人継承者にはない能力の為、ジークは「驚異の子」と呼ばれた。

「いつそ、【獣】を基礎にして異形の巨人を作れば良いんじゃないですか？」

「実は、それは過去に何度もやってきたのだが…できたのが蛇や半魚くらいしかできなかった」

「つまり獣の巨人は役立たずって事ですわね！」

「おいピーク！いくら何でも戦士長に失礼じゃないのか!？」

「そうだぞ！これほどマールに忠誠を誓っている戦士は居ないぞ！」

「はい、言い過ぎました」

さすがに煽り過ぎたピークに激怒したマール兵たちが叱責した。

今やジークの存在なしではマールという国家が成り立たないほどの重要人物である。

確かに排泄物を漏らした事は、彼らも色々考えたがそれ以上に偉そうにしてる彼女に腹が立った。

彼らからの評価が下がれば『戦士候補生』に喰われる危険性がある彼女は我慢するしかなかった。

「今回の件でだいぶデータが取れた。いずれ言う事を聞く異形の巨人も夢ではないだろう」

「はい、実験結果では戦士長の話に従う素振りを見せてました！これならいけますよ」

「ククク、敵対国が巨人に蹂躪される光景が浮かぶぜ」

「ふーん」

ピークからすれば半信半疑のことである。

始祖の巨人を有したエルディア帝国ですらまともに運用していなかった異形の巨人。

いくら時代と研究が進んだからと言ってそんな好都合などあるわけがないと思っ
いた。

「良いんですか？ “アジ・ダハーカ” の伝説のように異形の巨人が暴れても？」

「それだよピークちゃん！壁内でわざわざやったのはそれが理由だよ！」

「はあ？」

「ここなら異形の巨人が暴走しても全世界に損害は被らないからな」

かつてエルディア帝国では、「アジ・ダハーカ」と呼ばれる異形の巨人が居た。

フリッツ102世が始祖の巨人を除く8つの脊髓液を使用して作られた巨人だった。

きっかけは、エルディア帝国が属国や敵対国などの50か国以上に増税を課したせいだった。

強大な力があつた故の傲慢さが各国を団結させてエルディア帝国に反旗を翻してしまつた。

さすがに全世界を相手にはできなかつた帝国は、彼の指示の元で最強の脊髓液を2つ作つた。

それは圧倒的な強さで連合国を次々に滅ぼして当時の人と動物の1/3を殺戮したほどであつた。

『陛下、アジ・ダハーカが操作不能です！帝都に向かってきます!!』

『馬鹿な…始祖の巨人の操作を受け付けねはずが…』

ところが生み出した【殺戮兵器】は敵国を全て滅ぼした後、エルディア帝国に牙を剥

いた。

フリッツ王は【座標】の力で必死に操作しようと試みたが無意味だった。

8つの脊髄液の影響のせいか【始祖】に近い異形の巨人はフリッツ王すら歯向かった！

始祖ユミルに最も近い存在ではあるが、血の繋がりが無いせいで王家の指示を受け付けない存在。

それは動く者全てを捕食対象にしており、巨人さえも対象としているほど凶暴な化け物だった。

たった3日で、2万の無垢の巨人で構成された軍団が滅ぼされた。

『フェアリードゥーン・ブラウン！クルサーズパ・イエーガー！諸君らの健闘を祈る！』

時間稼ぎに成功したフリッツ王は、最高戦力の2名に異形の巨人討伐を命じた。

当時の鎧の巨人と超大型巨人の継承者は従者たちと共にアジ・ダハーカに戦いを挑んだ！

フェアリードゥーンは、超大型巨人の大爆発で攻撃したが奴を大怪我させる事しかできなかった。

体高40m、全長200m以上の3つ首で尻尾が生えた異形の巨人を仕留めきれぬわけがなかった。

結果として戦闘を開始して3代目の超大型巨人の爆発でようやく討伐できたほどの怪物とされる。

「まあさすがに伝説なので本当なわけがないと思うが…」

「いや、残念ながら事実だ！」

「頭うんぐんにしては、中々メルヘンチックな事を言いますね」

「ついでにその髄液が今、ピークちゃんが持つてる木箱に保管されているぞ」

マーレ兵は、速やかにピークから離れた。

嚴重に梱包された木箱を怪しんだ彼女は違和感があった。

だが真実を知って青ざめて震えながら小さな木箱を静かに地面に置いた。

「な、なんでこんな物を持ち込んだのですか!?!」

「それが唯一、【地鳴らし】に対抗できて始祖の巨人の操作を受け付けられない巨人だからさ！」

かつては栄華を誇ったエルディア帝国は『巨人大戦』という内戦で疲弊して自滅した。その隙を突かれて世界から報復されたエルディア人は世界最大の難民となった。

そして同族の大半を置き去りにしてパラディ島に退いたフリッツ145世は抑止力を作った。

世界を踏みつぶせる幾千万の超大型巨人を抑止力として以降100年以上、鎖国してしまった。

しかし、マーレの英雄ヘーロスは、同志のタイバー家からそれに対抗できる兵器を授かった。

かつての破壊者である「アジ・ダハーカ」と同格の異形の巨人が作れる脊髄液を入手した。

「まさか……これをここで使うおつもりですか!？」

ピークの一言によってジークを除く全員が身体を硬直させ固唾を呑んで彼の返答を

待った。

「…んなわけないじゃん！あくまで『地鳴らし』された時に報復で使う奴だよ」

全員が安堵して汗を拭きとって帰り支度を始めた。

壁内人類を護っている50mの壁が海外を滅ぼす超大型巨人で作られているのを知ってるからだ。

「そういえば『アジ・ダハーカ』を討伐したエルディア人の苗字にイエーガーが居ますよね」

「ああ、それは先祖が伝説にあやかって付けたものだ。特に血筋には関係ないぞ」

「ふーん」

「ブラウン家は王家の武家しか名乗るのを許されなかったから英雄の血を引いてるじゃないかな」

「ライナー如きが？冗談は顔だけにしてくださいよ頭うんうん！」

「ひでえホントひでえ！俺、泣いちゃうよ」

ピークの辛辣な一言にジークは心が折れそうになった。
まあ、エルディアの悪魔と相手をするより大分マシであるが。

「どうぞご勝手に」

「うえーん！ピークちゃんが俺を虐めるううううううう！」

「うるさい！」

「はい……」

ジークは素に戻って帰り支度を始めた。

研究成果と実験結果をマガト隊長に報告する為に。

『あれ？』

フローラは何事もなく巨人を一掃できてしまったのに困惑したがすぐにそれを忘れた。

クリスタがユミルに「ヒストリア」の名前を告げていたのを聴いていたがどうでもよかった。

そして移動することになって、ライリーに騎乗してたりーネさんを先輩たちに託した。

『移動はライリーに任せて寝ましょう…』

疲労困憊どころか疲労混倍になったフローラはライリーに騎乗して走らせたまま寝た。

第四分隊と同期たちは、馬を走らせながら寝る彼女に驚きながらも無視をして壁に向かった。

もはや寝たまま馬を走らせる程度ではツツコまれなくなっていた。

「おいおい、まだ寝てるぞ…」

「誰か起こせよ…」

「なんか、この馬怖いんだよな…」

元々、どこかにある壁の穴を塞ぎに来た第四分隊は、壁に到着した後、立体機動で登っていった。

もちろん、寝ているフローラは置き去りにされたが、さすがにこれ以上無視はできなかった。

だが、ライリーに睨まれている兵士たちはどうする事もできなかった。

通常の1.5倍もありそうな好戦的な馬に睨まれては経験豊富な猛者も手が出せない。

大声で起こそうとしているが、フローラは起きる素振りすらなかった。

「俺達は5年前に壁を破壊して攻撃を始めた。俺が鎧の巨人で、こいつが超大型巨人って奴だ」

「……はあ!？」

同期であるライナー・ブラウンの発言でフローラは目を覚ました。

50mの壁の上で小声で会話していたが彼女は異常な聴覚で聴き取った。

突然、目覚めた彼女に兵士たちはおるかライリーすらも驚いた。

「寝不足で頭が可笑しくなったのね…しばいてこないとー!」

寝坊助のフローラはアンカーを壁に突き刺して慣れた手つきで壁に登った。

「最後に登ったのはトロスト区防衛戦以来ね」くらいの懐かしい思い出が溢れていた。友軍から砲撃されたがそれ以上にピクシス司令や参謀のグスタフさんと仲良くなれた。

だからこそ、壁に登る事自体は良い事だと思つて能天気に登つていった。

とりあえず『両親の仇』の名でボケるライナーを軽く平手打ちして正気に戻させる算段である。

「えっ…!」

そこで彼女が目にしたのは、ミカサがライナーの右腕と首を切り裂いた瞬間だった。

更にミカサは流れる様に隣に居たベルトルトの首に斬り付けて止めを刺そうとしていた。

「ミカサ!!なにやってるのよおおお?!」

それを目撃しながらフローラは操作装置で鞘からブレードを装着。

凶行に走ったミカサを止めるべく双剣を構えて彼女の元に突撃した。

他の連中も同じ考えだったのか駆けつけてきたように感じた。

ミカサが「エレン、逃げて！」と叫んで、アルミンは「エレン!!逃げる！」と叫んでいた。

まるでライナーたちが人類の敵のような状況な感じがしてフローラは夢を見てると思っただ。

「痛っ!?!」

頬をつねると痛みがあったので現実である。

つまりミカサはライナーとベルトルトを殺害しようとしたのは事実である。

ミカサやアルミンが、エレンに逃亡を呼び掛けているのも事実である。

首を斬られたはずのライナーがミカサを蹴っ飛ばしたのも事実である。

そして怪我をした2人が巨人が傷を修復させるように蒸気を噴き出してるのも事実である。

「ええつと…つまり！」

以上の事からミカサの行動が正しくて、ライナーたちは巨人化能力者であると結論付けた。

その瞬間、フローラは爆風で吹っ飛ばされた。

それどころか付近にあった物や近寄ってきた兵士たちも吹っ飛ばした。

「…あああつ!? やっぱり!!」

ウトガルド城跡の巨人掃討戦があっさりしていた理由が分かった。

やはり運命というのは碌でもない物で世界は残酷なのを改めて思い知ったフローラ。あまりにも戦場で生き残ってきたので誰よりも早く体勢を立て直した。

『…そう』

そこで彼女が目にしたのは、上半身を具現化させた超大型巨人と鎧の巨人だった。

シガンシナ区出身なら全員が答えられる名前の巨人である。

そんな壁内人類の仇ともいえるコンビがライナーとベルトルトが居た場所に出現した。

フローラは他人事のように思考をして目の前の衝撃的事実を緩和させようとした。

『そうか、そうなのね…』

壁内人類の敵ともいえる2体の巨人が勢揃いした。

いつかは討伐したいと思っていた存在が目の前に居た。

フローラは笑うしかできなかった。

『もう…ライナーもベルトルトも人類の敵って最初から示してくれれば良かったのに…』

人類の仇と共に生活を送っていてさきほどまで仲良く話していたというのだ。

自分の命の恩人とも言える2人が人類の敵でしたなんて分かるはずが無かった。

特にライナーに至っては、気持ち悪い童貞丸出しの負の感情を音読された。

あれでどうやって鎧の巨人と結び付けろと言うのだ。

『あー疲れたわ…』

とりあえず言いたい事はたくさんあったがフローラが思った事は一つだけだ。

『殺す！』

たったそれだけ。

鎧の巨人がエレンを掴んで壁外へ降りて行ったが彼女からすれば些細な出来事だった。

どの道ここで皆殺しにするのだから。

せめて同期として苦痛なく葬ってあげるのが優しさか。

フローラには分からなかった。

ただ言えるのは、商人の令嬢を「エルディアの悪魔」に転生させた存在がそこにいるだけ。

そして悪魔が『ライナーには苦痛よりも絶望を味わせよ』と甘く囁いた。

それと同時に額から双肩から腕から胴体から股間から脚から血が滴れ落ちた。

過剰な興奮によって古傷が開いて「れきりつ瀝血」のフローラという異名通りの血塗れの悪魔になった。

悪魔は刃を振るう！悪魔は嗤う！悪魔は恐怖の感情を喰らう！悪魔は決意した！

まずはベルトルト・フーバーを殺すと！

これでライナーブラウンに恐怖の感情を教えてあげようと……！

エルディアの悪魔は、蒸気を噴き出す超大型巨人に向かって嗤いながら双剣を構えて突撃した！

74話 奪取

「信じてください！ユミルは私たちを助ける為に巨人になったんです！」

「大丈夫、フローラから聞いたよ！安心してくれ！解剖なんてさせないよ！」

クリスタ・レンズもとい、ヒストリア・レイスは、ユミルの丁重な処遇を求めて頭を下げていた。

ハンジからすれば、仲間を助ける為に奮闘したユミルを罰するつもりはなかった。

寵臣のフローラから一通り聞いてるので、どちらかという王政にどう対応するかが課題だった。

幸いにもユミルが巨人と知っているのは、調査兵団の兵士のみなので緘口令を敷いて隠蔽できる。

エレンの扱いからして碌でもない未来が待っているので、情報統制させる事を考えていた。

「ユミルは我々人類にとって味方です！」

「同衾した事もある私からすれば彼女は見た目よりずっと単純です」

それより『同衾』やら『一緒に入浴』など異様に仲の良さをアピールしているのが気になった。

ユミルとやらの潔白を客観的に証明するつもりが、恋人なのをアピールしている感じだった。

「大丈夫だ、彼女の持つ情報は我々人類の宝だからね。友好的な関係を築いていく予定だよ」

「ありがとうございます……えーっと」

「ハンジ・ゾエだ。ハンジ分隊長って呼んでくれればいいよ」

だがヒストリア・レイスと名乗った少女には警戒するしかなかった。

レイスと言えば、真っ先に貴族であるレイス家が彷彿する。

しかし、そんな高貴な令嬢が偽名を使って訓練兵団に入団できるわけがない。

つまり【忌み子】である可能性があり、この名前を秘匿しないと厄介な事になるのは明白だった。

「ところで君の苗字のレイスってあの貴族の？」

「……はいそうです」

「…そう、よろしくねヒストリア。でも友人と私以外には口外しない方が良いと思うんだ」

「…はい」

事情が分かった以上、瀕死のユミルをトロスト区…ではなくカラネス区に輸送しなければならぬ。

原因は、トロスト区における調査兵団の印象が悪過ぎて危険地帯と化していた。門が使えないと分かると、あっさりカラネス区に拠点を移転した兵団を許すわけがなかった。

逆にカラネス区では調査兵団は英雄扱いなので活動しやすいのがある。

「ニアア！ユミルの様子はどうだい？」

「昏睡状態が続いてますが、右の手足の出血が止まり蒸気を噴き出して再生を開始しています」

「やっぱり巨人化能力者は、人間形態でも巨人の性質があるってことか」

ユミルと呼ばれた少女は、巨人と同じ様に蒸気を噴き出して欠損した内臓と手足を修復していた。

この世の理である質量保存の法則と等価交換を無視した異様な存在である。

「とりあえずカラネス区まで運んでまともな医療を受けさせないとね……丁重な輸送を任せたよ」

「ハッ！」

医学の知識を齧っているニファに一任してハンジは当初の目的の壁の穴について考えていた。

未だに壁に穴が見つかっていない点についてだ。

では、巨人は壁を乗り越えてきたのか。

あり得るかもしれないが、それを証明する証拠はない。

『まだまだ巨人は奥深いね』と違和感を覚えながら気分転換に歩く事しかできなかつた。

「骨折でもしたのか？」

「巨人に腕を噛み砕かれたんだ」

「お前の事だから誰かを守る為にやったんだろ？」

「まあな…だがあの時は、いや何度も死ぬかと思ったぜ」

エレンに心配されたライナーは本音をぶちまけた。

もしクリスタが手当をしてくれなかったら、エレンの様に巨人になって暴れたかった。

それだけ睡眠不足と疲労で頭が朦朧としていた。

「巨人に喰われるのって本当に唐突なんだなアルミン」

「えっ？」

「ただだけ注意深く行動しても1発のミスでお陀仏だ。…このままだと早死にしちまうな」

「…まあ、みんなと行動するだけで違うと思うよ」

「だよなー」

ライナーに名指しされたアルミンは驚いたが彼の言いたいことは分かった。もし、トロスト区防衛戦で自発的に動けたら誰かを救えたのか。

フローラがミーナを救った様に同期や住民を救えたのか。

少なくともアルミンの悲鳴のおかげで現場に急行できたとフローラは言っていたが……。

ただ自分が言えるのは、仲間が居るだけで違うという事くらいしかなかった。

「自分で選んだが『兵士』っていうのは身体より心が削られるみたいだ」

「もうそうなってるよ」

「ベルトルトはいいよなー兵士として割り切れて……俺は兵士の道がこんな困難だと思わなかった」

ベルトルトは、兵士として悩んでいるライナーに一言を申したかった。

「お前は兵士じゃなくて戦士」だと！

ただし兵士モードである以上、下手に突くと爆発しかねない不発弾を見守るしかできない。

「ここで巨人を止めないと2人の故郷が遠のくからな」

何気ないエレンの一言で彼らは目覚めた。

良く考えれば、故郷に帰れる。

だって、座標とみられるエレンに顎の巨人継承者と思われるユミルが居るのだから。

「そうだよ……！ライナー故郷に帰ろうよ！」

「あーそうだな！俺達、もう帰れるんだな！あと一歩まで来たんだ！」

「おいおい何言ってるんだ？まだ壁の穴を塞ぐ任務が残ってるぞ」

さきほどまで兵士の責務って言っていたライナーが故郷を口にしていた。

エレンからすれば、悩み過ぎて気が狂ったのかと思った。

何故なら彼らの故郷は、ウォール・マリアの南東の山奥の村だ。

このまま故郷に直行したら巨人に喰われるだけではない。

「おい大変だ!!」

エレンがツツコミを入れる前にハンジ分隊長が駐屯兵たちを伴って合流した。その中には彼の顔馴染みであるハンネスさんも居てこれ以上の追及を避けた。

「ハンネスさん!?!」

「エレン!?! まあいい!?! とにかく伝えたい事があるんだ!」

「何かあつたんですか!?!」

「壁に穴が見当たらないんだ!!」

「!?!「えっ?」!?!」

壁破壊箇所を特定する任務に就いていたハンネスが放った一言。

これには穴を塞ぎに来たエレンもアルミンも戦士組の2名も困惑するしかなかった。むしろ「壁は破壊できない」のを知っている戦士組だったが次の一言で凍りついた。

「その代わり地下を掘り進んできた巨人が出現したんだ! そのせいで駐屯兵が何名も戦死した!」

「なん…だと!?!」

「そんな馬鹿な…」

ライナーもベルトルトも地下を掘り進める巨人など知らなかった。

カラネス区に出現した顎の巨人に似た異形の巨人も把握してなかった。

彼らが知っているのは、フローラの話で褐色の巨人は手強い存在だとしか知らない。

5年前に戦士が4名も欠員した影響で、生み出された異形の巨人なのだから知るわけが無かった。

「それでどうなったんですか!？」

「駐屯兵団第一師団が討伐した!だからその巨人については安心していい」

「つまり壁に穴がないのに巨人が出現したのは…」

「ああ、地下から来た可能性があるってことだ」

アルミンの質問にハンネスはとりあえず巨人は討伐された事を告げるしかできなかった。

ハンネス率いる部隊は、クロールバ区の兵とかちあつて引き返してきた。

つまりトロスト区からクロールバ区の間壁には異常はない。

だとすると、地下を掘り進めた巨人が一番怪しかった。

「まさか、ついに地下を掘る巨人が出現するとは…」

「ですが、壁に近いほど巨人が見えない理由にはなりません」

「でも第一分隊の連中は南から来たって言ってたんだ」

「複数の穴でも空けられたんですかね？」

「人海戦術で調査するしかないね」

ハンジとモブリットは今後の作戦を考えていた。

エレンの力を使って壁の穴を塞ぎに来たが、問題だったのは壁ではなく地面であった。

壁付近に巨人が居ない以上、ウォール・ローゼ内の中央部に穴がある可能性が高い。

あくまで推測でしかないが、無視できない以上、部隊をどう編成するか打ち合わせをしていた。

『ジーク戦士長が居たんだから多分、その影響だと思うけどなんでこんな事を…』

『あれから5年経っても進展が無いせいで最終警告でもしてきたのか…』

ライナーとベルトルトは、ウトガルド城で顔馴染みの巨人を見つけた。

最初は、自分たちを肅正に来たのかと焦ったがそうではなさそうだ。

だが、戦士長が壁内に潜入してきたという事は、残された期限が短いのは間違いないだろう。

「とにかく気を抜くなよエレン！俺達は先に戻るぞ」

「ハンネスさんも気を付けて！」

「ああ」

エレンは壁から降りるハンネス隊長を見送って空を眺めた。

相変わらず昨日と変わらない水色の空。

雲の動きは意外と速度があるという発見もあったが、それ以外は特に変わらなかった。
た。

5年前から変わらないはずなのに巨人が日進月歩で巨人が変化している。

「エレン、話があるんだがちよつといいか？」

「ああ、いいぞ」

神妙な面持ちで語りかけて来たライナー。

それを見てエレンは何かあったのかと察して快く彼の発言を待った。

「俺達は5年前に壁を破壊して攻撃を始めた。俺が鎧の巨人で、こいつが超大型巨人つて奴だ」

「何を言ってるんだよ…」

「ラ、ライナー何を言っているんだ!？」

ライナーの唐突なカミングアウトにエレンとベルトルトが困惑するしかなかった。

エレンからすればそんな事実が唐突に明かされるなんて想定外だった。

ベルトルトから見れば、ライナーはついに壊れたのだと思った。

「俺達の目的は、壁内人類に消えてもらう事だったが、もうその必要はない」

「エレン、お前が一緒に来てくれれば、俺達はこれ以上、壁を破壊する必要が無いんだ」

ライナーは、エレンに分かるように説明した。

自分たちの正体は超大型巨人と鎧の巨人の継承者だという事を！

そして事情があつて壁を破壊して巨人を侵入させる必要があつたという事を！

エレンが座標の可能性があるので一緒に同行してくれれば、これ以上手を汚さずに済むと！

なにより事情を説明すればエレンが納得して同行してくれると思つていた。

「どうしたんだ急に？」

「ああそうだ、急の話になつて済まんが俺達と来て欲しいんだ」

「今から？どこに行くんだよ!？」

「ここだと人が多いしな…3人で移動してる時に話すつもりだ」

さすがにマーレの事を調査兵団の先輩たちに話せないと実感しているライナー。

妥協して3人で故郷に向かう道中で全てを話すつもりだった。

不信感はあるし、なによりエレンが本国で利用される事情を説明しておいた方がいい。

彼の今までの経験からそれが一番だと信じていた。

「で？どうだエレン！悪い話じゃないだろう？ひとまず壁内の危機が去るんだからな」
「うーん、どうだろうな」

「早く決断してくれ！早くしないと戦士長が去っちゃまうからな…」

優柔不断なのはしようがないと思うが早く決めて欲しかった。

全てを話せばエレンが納得してくれるとは思われないが勢いで承諾してもらおうつもりだった。

「おいライナー、お前疲れているんだよ」

「お前こそ何を言ってるんだ？俺は本気だぞ」

「ベルトルトもそう思うよな？フローラにメンタルケアしてもらった方が良いよな？」

「あ、ああそうだ！ライナーは疲れているんだ！」

事情を打ち明けたのに信じてくれなくてがっかりした。

せっかくなあとちよつとで故郷に帰れるというのに。

エレンは疲労による戯言だと思い、ベルトルトも適当に流すつもりのようなのだ。

とりあえずライナーは、あとでベルトルトに説教するつもりだった。

しかし、彼らは気付かない。

その後ろでライナーの発言でミカサが瞠目して鞘からブレードを取り出した事に…。

「大体さ、人類を殺しまくった【鎧の巨人】が何でそんな相談を俺にするんだ？」
「そんな事を言われても『はい行きます』なんて頷くわけがないだろう」

エレンの返答を聴いてライナーは硬直した。

ようやく自分が馬鹿な事をやらかした事に気付いた。

エレンもライナーに疑いが掛かっているのは知っているが唐突過ぎて信じられなかった。

なんならサシャが清楚貞淑の女となって貴族に嫁ぐ与太話の方が納得できるくらいだ。

「ああ、そうだよな、何をやってるんだ俺は…本当におかしくなっちゃった」

「早くいくぞ」

「長居し過ぎたんだな…こんな馬鹿たちに3年間も居たら感化されるか」

ライナー・ブラウンは戦士である。

だが壁内では、兵士として振舞わなければならない。

だから兵士ごっこをして：兵士として同期を救い巨人を討伐しようとした。

エルディア人を救って世界の英雄を志望した少年は、悪魔の島で悪魔の尖兵になっていた。

「俺達は一切知らなかったんだ。もし知っていればこんな半端な野郎にはならなかった」

「……どうした？」

「何が正しいのか分からん……ただ自分の選択や結果に対して戦士として最後まで真つ当する！」

ライナーは右腕に巻かれていたスカートの切れ端を解いてポケットに仕舞った。

そして巨人に噛まれた右腕を蒸気を噴出させて全力で再生させた。

エレンはただ呆然と兄貴分の怪我が完治するのを見届けるしかできなかった。

「ライナー……やるんだな！今ここぞ！」

「ああ、勝負はここで決める！これで最後…」

ライナーが頷いたのを確認したベルトルトは、自分の覚悟を彼に伝える事はできなかった。

ミカサが不意打ちで斬り掛かってきたからだ。

咄嗟にライナーは両腕でガードしたが右腕が切断されてそのまま首を斬られた。すかさずベルトルトの首を斬り付けたが傷が浅かった。

「ぐあっ!？」

「ああっ!？」

首を負傷した2人は息苦しそうに倒れ込んで必死に流血を手で抑えた。

庇うように出現したミカサの行動に信じられない様に見えるエレン。

騒動で何が起こったのか把握した調査兵団の兵士たち。

「エレン、逃げて…:…ぐっ!」

ベルトルトに止めを刺そうとしたミカサを吹っ飛ばしたライナー。もはや誤魔化しがきかない以上、やるしかなかった。

意図してなかったとはいえ、自傷済みであり、いつでも巨人化になる事ができた！

「はあっ…」

エレンは理解できなかった。

いや、理解しようとしなかった。

「あれほどエルミハ区でライナーとベルトルトが巨人化能力者と警鈴を鳴らされていた。」

彼は「ベルトルトはともかくライナーは違う」と全力で否定した。

爆風でぶっ飛ばされて落下してもなお、彼らを信じていた。

「ぐっ!?!」

そしてエレンは何かに掴まれた。

それは鎧の巨人だった。

実物は見たことが無かったが鎧っぼいので多分そうなのだろう。
ウォール・マリアの陥落の原因にしてフローラの両親を間接的に殺害した元凶。

『ライナー……ベルトルト……このっ……!』

思い浮かぶのは男子部屋で彼らと雑談していた光景だった。

不安ながらも輝かしい未来を同期として熱く語っていた。

巨人から故郷を取り戻す話で盛り上がっていた!

だからこそ許すわけにはいかない!!

「裏切り者がああああああああああああつ!!」

エレンを掴んでいた鎧の巨人の左手は破壊された。

手を噛んだエレンが確固たる意志をもって巨人化したからだ!

怒りに任せて彼は鎧の巨人の顔面を殴り付けた!!

それは今までの培った友情の決別であるように!

超大型巨人もとい、ベルトルト・フーバーは吹っ切れた。

だが辛うじて残された理性で巨人化の爆発をできるだけ上空に飛ばすようにした。

超大型巨人の爆発は辺り一面を焼け野原にする威力があった。

だからこそ威力を抑える為にコントロールして上半身だけ出現させた。

『久々にやったから感覚が狂ってるな…』

エレンを殺さないようにするのもあったがもう1つ理由があった。

勢いで壁を破壊して中に埋まっている超大型巨人を目覚めさせないようにする為だ。

むしろ、こっちの方が重要だった。

上半身だけなので3分くらいなら保てるオリジナルと違って奴らはいくらでも動ける。

フリッツ145世の生み出した巨人の大群に壁外人類が対抗する手段などない。

『目標は2つ！それ以外はどうでもいい』

悟りを開いたベルトルトは左腕を振り下ろして壁上に居る兵士の一団に向けて手を叩きつけた。

壁を破壊しない程度に手加減したが、兵士の一団は急いで離脱した。もつとも彼は殺すつもりはなかったが。

『ユミルを回収、ついでに立体機動装置を回収するか』

狙いは同僚だったマルセルを喰ったユミルと立体機動装置だ。

もちろん立体機動装置が落ちているわけがなく、兵士から回収するつもりだ。

無垢の巨人は味方ではないので対抗手段がないときついからだ。

エレンやユミルも脅威だが数の暴力の方が恐ろしい。

目標を確保したのを確認して巨人の口内に仕舞った。

「総員、戦闘用意!!超大型巨人を仕留めよ!!」

ハンジ隊長が大声で叫んでいるが想定内だ。

最初から殺すつもりなどなかった。

「人類の仇そのものだ!! 一斉に掛かれ!!」

わざわざ攻撃してくるタイミングを逐一報告してくれた。

皮肉にも人類の仇である悪魔の末裔がこんな事を告げてくれた。

「遅い」など「凶体がでかいだけ」などわざわざ嫌われる様に罵倒してくれた。

ようやくここでベルトルトは吹っ切れて躊躇いもなく殺す事を決意できた。

『みんな単純過ぎるんだよ…』

超大型巨人の攻撃を回避した兵士一同は、巨人のうなじにアンカーを突き刺していった。

うなじを削ぐつもりであるが、知性の無い巨人のような扱いである。

『僕がそんな弱点を放置するわけがないだろう』

体内にある空気を肉体から噴出させた。

大量の熱せられた蒸気が体外に噴出して調査兵を一掃した。

いや、蒸気にたまらずにアンカーを外して逃走した。

「ぎゃあああ!？」

ライナーに向かう兵士を腕でぶつ飛ばすつもりだったが上手くいかなかった。

一名の兵士を叩き落す事に成功したくらいか。

見下ろせば、エレンに対してライナーが有利に見えるがまだ分からない。

数の暴力ほど厄介な事はないからだ。

『着替えるか…』

上半身だけを出現させているとはいえ超大型巨人は燃費が悪い。

蒸気を噴き出して体積を削っているせいで寿命が短い。

消滅する前に立体機動を身に付けようと付着した筋肉の筋を解こうとした。

その瞬間、壁の上を歩く1名の兵士が見えた。

それは血塗れだった。

『なんだあいつ!?!…まさか!』

小さいせいで顔は良く見えないが大体察する事が出来た。

蒸気を噴き出した巨人に向かってくるなど一人しか居ない。

フローラ・エリクシア：同期でありながら巨人の首を刎ねる処刑人。

その殺意を向けられてベルトルトは熱さとは別の汗を掻いた。

『死ね!!』

彼女との思い出が大切だからこそ即死して欲しかった。

一番仲が良かったからこそ死んでもらわないと双方とも引き摺るからだ。
ベルトルトはさっさと終わらせるために両手を彼女の元に叩きつけた!

『まだだ!!』

叩きつけただけでは死なないと思い、腕を薙ぎ払ったり瓦礫を拾って辺りに投げつけた。

ついでに鎧の巨人に襲撃しようとしている兵士一団に向かって瓦礫を投げつけた。当たりはしなかったが、こちらを警戒したようなので援護自体は成功した。

『これで死ぬと思えないんだけどな…』

そう思つて再び壁上を見下ろすと血塗れの兵士が歩いていった。

何事も無かつたように笑いながら歩いていった。

それを見てベルトルトは恐怖しか感じられなかった。

身体から蒸気を噴き出すのを忘れて何度も右手を叩きつけようとした。ところがうまく右腕がうごかなかつた。

『やばいーやばいー!!』

右肘の関節部にスナップブレードが3本突き刺さつていった。

そのせいで曲げることができずに上手く動かせなかった。

異常事態になったと悟った彼はパニックに陥った。

『これで終わりにするわ!』

負の感情を聴いたフローラは、右肘に右アンカーを射出して壁から飛び降りた。

振り子の様に一旦落ちてから上に登った瞬間、左アンカーを撃ち込んだ。

そして右アンカーを外して両方のワイヤーを巻き取る。

図体がでかいだけの超大型巨人のうなじが見えた瞬間、再び右アンカーを撃ち込んだ。

「おりゃああ!!」

ガスを噴出させて双剣を構えて突撃してうなじを斬り付けた!

ここで失敗したのは削ぐのではなく首を刎ねるつもりで斬り掛かってしまった。

そのせいでうなじに切り込みを入れただけで終わってしまった。

しかし、フローラはそれで満足して離脱した。

『ぎゃあああああああ!!』

うなじを攻撃された感覚を実感したベルトルトは蒸気を噴出させた!

そして自身のうなじ以外の肉を外して飛び出した。

柔軟で伸びる肉のおかげで口内に辿り着いた彼は慌てて装備を装着した。

このまま巨人体でいるとフローラにぶつ殺されると思ったからだ!

幸いにも訓練したおかげで兵士から装置を外して見に付けるまで時間は掛からなかった。

『離脱の準備をしないと!!』

ユミルを抱き寄せた彼はひとまず元の場所に待機した。

崩れる巨人の体内の中で一番安全な場所に待機していつでも脱出できるように準備をした。

うなじは左手で覆っているが、いつ彼女に破壊されてもおかしくない!

フローラの実力を知っているからこそ油断しなかった。

「次は鎧の巨人ね」

フローラは壁外の領域に出て鎧の巨人を見ていた。

あれほど殺したかった両親の仇。

しかし実際にこうして見ると、手が届くせいか、そこまで殺そうとは思わなかった。エレンがライナーに向かって負の感情を爆発させているのもある。

『お前ら本当に糞野郎だよ！多分、人類史上こんな虐殺をしたのはいねえよ』

『ライナー、お前は存在しちやいけねえ奴だ！一体その頭で何を考えていたんだ』

『本当に気持ち悪いよ！正義感溢れた面構えを見るだけで吐き気がする!!』

『このでけえ害虫が!!オレが今から駆逐してやる!!』

こんなエレンの感情をぶつけられたら彼に任せるしかない。

言いたい事を全て言われたような感じがして冷めてしまったのもある。

『とりあえずライナーの気を逸らさせますか』

フローラは信煙弾を鎧の巨人に向かって撃ち込んだ。音を立てて緑色の煙を吐き出しながら飛んでいく弾。その煙はライナーを気を惹いた。

『信煙弾?!…あれはフローラ?!まずい!!』

ライナーはフローラが自分を殺意剥き出しで狙って来ているのを思い出した。

エレンだけで精一杯なのに彼女まで相手にしていたら確実に敗北する。

巨人の首を刎ねまくる味方の頃は頼もしかったが、敵にまわれれば脅威でしかなかった。

『何故来ない!?!畏か!?!それとも…ぐあああああ!?!』

あれほど鎧の巨人を恨んでおり討伐するのが夢だと何度も発言してたのに来る気配が無い。

何かあるのかとライナーが警戒していたが、エレンを意識するのを忘れて不意打ちをされた。

巨人自体にはダメージは無いものの関節技を決められたので動けなくなった。

『まずい!!クソ!!こんな所で終わるわけにはいけねえんだよ!!』

エレンの巨人による関節技に必死に抵抗する鎧の巨人。

それを見届けたフローラは軽蔑した目で鎧の巨人を見つめていた。

『こんなものでいいでしょ…問題なのは!』

むしろ、フローラからすれば脅威なのは鎧の巨人ではなかった。

彼女が警戒しているのは巨人の群れの方だった。

『なんか動きがおかしいわ…』

騒動のせいかな、付近に居た巨人の群れがここに向かって来ていた。

問題なのは、急に切り替わった点である。

何故か騒動の中心であるエレン達ではなく、壁の近くに居る自分を狙う様に進撃してきた。

まるで鎧の巨人に復讐を果たす事をさせないように。

『先にベルトルトを仕留めますか』

フローラは、先に超大型巨人を仕留める為に壁に登った。

そうしないと勢い余ってエレンまで殺害しそうになるほど手が震えていたからだ。

「あれ?」

ところが壁上に着地した瞬間、超大型巨人が倒れ込んだ。

それは質量兵器となって鎧の巨人に向かって落下した。

「うっ!?!」

壁外で交戦している味方を全て見捨てたフロローは1人だけローゼ側に飛び降りた。その瞬間、超大型巨人が蒸気を噴き出して爆発した！

「ああああっ!! やっぱり仕留めておくべきだったああああ!!」

爆発が収まるまで彼女はぶら下がっている事しかできなかった。

そして、衝撃が収まった瞬間、再び壁を登って爆心地を見下ろした。

そこには大きなクレータができており、中央部に鎧の巨人と巨人の残骸が転がっていた。

「逃がさないわよ!!」

さきほどの一撃でエレンがやられたと察した頭進撃は熱風に耐えながら壁を飛び降りた。

そして鎧の巨人に向かって走っていると異変が起こった。

「ライナー!! ここだあああ!!」

超大型巨人の残骸からユミルを抱えたベルトルトが飛び出してきた。
そして彼はフローラと鉢合わせをした。

「や、やあフローラあ！元氣そうだね！」

「ベルトルトも女の子を抱えるなんて大胆な事をするわね！」

男は青ざめて女を抱き抱えながら後退りをした。

女は唇を舌で舐め回して双剣を構えた！

「ライナー助けてええええ!!」

「首をよこしなさい!!」

片や巨人化能力で疲弊している上に長身の女性を抱き抱えているベルトルト。

此方、復讐と怒りに燃えている首狩りの処刑人のフローラ。

どちらが有利か分かりきったことだ。

『しまったベルトルト!!』

ようやくライナーはフローラの狙いがベルトルトと気付いた。

巨人のうなじを喰らい付いてエレンを回収するのに気を取られて相棒から目を放した。

その結果が、ケルベロスが泣いて謝るくらいの鬼神に追われているベルトルトの姿であった。

そして逃げ惑う彼に更なる不幸が舞い降りた。

「巨人だああああ!？」

前門の虎、後門の狼ならぬ、前門の巨人、後門の鬼神。

涎を垂らしながら四足歩行で突撃してくる巨人を筆頭に4体の奇行種が彼を狙っていた。

交戦するには、ユミルを放さなくてはならないし、巨人化の疲労でまず戦えない。

そして動きを止めた瞬間、フローラに首を刎ねられる。

だからと言って、そのまま直進すれば70km/h以上で突っ込んでくる巨人と激突

する。

ベルトルトは人生が詰んだのを感じ取った。

「うおおおおお!!」

彼はユミルを盾にしてフローラに向かって突撃するしかできなかった。
いわゆる【肉の盾】であるが、巨人化能力者である以上、効果は薄かった。

「ベルトルト!!ユミルを放せええええ!!」

「はい…」

鬼気迫るフローラに怒鳴り声で怒られたベルトルトは素直にユミルを放した。
発言した本人も人質を放すとは思わず、そのまま巨人と交戦した。
意識を失っているユミルは、巨人から逃げる術がないからだ。

『意外とうまくいったな…』

改めて投げ捨てたユミルを抱き抱えたベルトルト。

フローラに巨人の群れをぶつける作戦がうまく行ってしまい困惑した。

そして恐る恐る交戦している彼女の様子を確認する為に振り返った。

「ひいひいひい!!」

彼は鎧の巨人に向かって一目散に走りだした。

そこには、巨人の首を刎ねまくる悪魔が居た。

あの短時間で2体の巨人を討伐しており、すぐに自分の番が巡ってくるのは明白だったからだ。

「ライナー！」

駆け寄ってくる鎧の巨人を見て安堵した彼はアンカーを撃ち込んで巨体に飛び乗った。

用が済んだ以上、長居は無用だった。

「もういいよ！故郷に向かって進撃しよう!!」

ライナーは走り出した。

明るい明日に向かって走り出した。

壁内で暮らしてきた過去を切り捨てて逃げ出すように全速力で駆けた。

『チツ！こんな時に巨人の群れか!?!』

6体の巨人が地平線の彼方から出現した。

巨人化能力が切れそうな時に最悪のタイミングで出現した。

1体ならともかく最悪ユミルを囷にしても逃げの一手をしようかと彼らは思った。

『なんだ？俺達を無視しやがった…』

しかし、出現した巨人は奇行種のように気絶した調査兵に向かっていくようだった。まるで鎧の巨人を守るように無垢の巨人達は走り去っていった。

「全部、奇行種ね…」

巨人の呻き声は2種類ある。

悲しい“声”と楽しそうな“声”である。

前者は通常種で後者は奇行種である。

「しょうがないわね…」

その気になればベルトルトの首を刎ねられたフローラはあえて見逃した。

鎧の巨人と交戦できるのも嬉しいが、同僚を喰らう奇行種を無視できなかった。

「救助を急げ!!」

「早く引き揚げろ!!」

熟練兵ほど超大型巨人の爆発に巻き込まれてしまった。

よって救助を行うのは経験が浅い調査兵たちである。

乙女のように腕を振って走ってきた巨人の首を刎ねたフローラは溜息を吐くしかできなかつた。

「フローラ！手を貸してくれ!!」

「分かつたわ!!」

彼女ができるのはただ一つ。

負傷した同僚を襲おうとした巨人の首を刎ねる事だった。

両親の仇を逃がした怒りもあって3分足らずで付近の巨人が全滅した。実際どんな感じに討伐したのか彼女ですら良く分かつていなかった。

「大丈夫!？」

「アルミン、鎧の巨人を逃がしちゃった…あとちよつとだったのに……!」

「大丈夫だ!あの調子だと遠くには逃げられないよ!」

「だと良いけどね…」

アルミンはフローラの顔が亡者のように見えた。

両親の仇であり人類の仇でもある鎧の巨人討伐を夢見ていた彼女。

それがまんまと逃げ果せてしまった心境を察して励ました。

「腕も脚も腰も痛くなつてきちゃつた…あのまま戦闘しても返り討ちだったかもね」

「ずっと戦い通したみたいだからね！しょうがないよ！」

「だから眠るわ…そこで寝ているミカサには悪いけど…」

フローラは寝込んでいるミカサを見て眉を顰めた。

エレンの処遇を巡った特別兵法会議の晩に彼女と約束したのを思い出したからだ。

「死んでもエレンを守ってみせる」という約束だった。

結果は、またしてもエレンを守ることはできなかった。

「ごめんなさいミカサ…今度はしつかり命がある限り守ってみせるから」

悪夢でも見ているのか苦しむミカサを見た彼女は倒れ込んだ。

アルミンの呼び声が遠のくに気付いて、ようやく自分が限界だったのを知った。

エレンを奪還して鎧の巨人を討伐するのを誓ってフローラは瞼を閉じて意識は闇に
吞まれた。

75話 発覚

「くっ!!」

ミカサ・アッカーマンは鎧の巨人を見つめる事しかできなかった。

『鎧』と称されている事があり、刃が全然通用しなかった。

何度もうなじを削ごうとしたが刃が折れて両腕が痺れる結果で終わった。

「エレン！殴り合ってもどうにならない！壁に寄るんだ!!」

アルミンの必死の呼びかけにエレンは答えずにただひたすら攻撃していた。

それはトロスト区奪還作戦のように理性を失っているように見えた。

「怒りで我を忘れたのか!？」

「まづいぞ！このままじゃ奴の思うつぼだ!!」

巨人同士の肉弾戦に人間は参戦できない。

ただひたすらに鎧の巨人の隙ができるのを待つしかできなかった。

『最大のチャンスを逃した!!あの時、2人の首を刎ねていれば!!』

ミカサは2人を殺せなかったのに後悔した。

せつかく不意打ちをしたというのに首を刎ねる事が出来なかった。

フローラが巨人の首を刎ねていたようにきちんと首を刎ねるべきであった。

『なんかおかしい…』

ミカサは、そこまで考えて何か引つかかっていた。

鎧の巨人は人類の仇であると同時にフローラの両親の仇である。

なのに、これほど騒動になっているにも関わらず、未だにフローラの姿が見えなかった。

『何で来ないの!?!相手は鎧の巨人なの!?!』

ここでフローラが来てない事に彼女は驚愕した。

あれほど鎧の巨人を憎んでいたのに無視をしているからだ。

『あいつはまだ来ないか…都合が良いが不気味だな…！』

鎧の巨人もというライナー・ブラウンもフローラの事を気にしていた。

自身が彼女の両親の仇である事を知っている。

むしろ、何度も聴かされており、その度に故郷に帰るのを誓い合った仲である。

だからこそ裏切ったのにすぐさま襲撃してこない彼女が気になっていた。

『なんであいつ来ないんだ…』

『誰か起こして来いよ…』

『絶対、全員が思っているよな…』

この場に居る全員がフローラの動向を気にしていた。

いつもなら鎧の巨人に向かって突撃する頭進撃の癖にやけに大人しかった。

彼女らしくないムーブに全員が何をやらかすのか畏怖していた。

『最低の気分だ!!』

一方、本家頭進撃であるエレンは、ただひたすらライナーに向かって突撃した。

走馬灯のような記憶を思い出してしまい、思わず敵に向かって駆け出してしまった。

『相変わらず猛突猛進だな！動きが分かり易い!!』

ライナーは殴り掛かってきたエレンを見て殴り返そうとした。

鎧の巨人である以上、その様なチンケな攻撃など通用しないどころか自滅するだけである。

しかし、エレンは彼の懐に潜り込んで首を勢いよく抱きしめて投げ出した！

『ぐおっ!?!』

何が起こったか把握する前に地面に叩きつけられた鎧の巨人。

その隙を見逃さずに両脚で敵の首を引っ搔けて右腕を掴んで引き寄せた。人体の構造上、首に過重の負担となり急所を痛めつける対人格闘術であった。

『くそ！そういうえば対人格闘術2位だったなこいつ!!』

焦ったライナーは逃げ出そうとしたら、更に拘束を強められて右腕をもぎとられてしまった。

ここでようやく彼はエレンを敵として認識できた。

目の前に居るのは同期ではなく祖国が欲しがる能力でもなく自分を殺そうとする敵である！

『馬鹿だなエレン！極め技で俺を倒せると思ったか!!』

鎧の巨人は蒸気を噴出させてエレンの巨人の拘束から脱出した。

巨人化の継続時間が短くなる欠点があるが、顔の装甲が破壊された以上、極め技は脅威であった。

『なるほど、あれはわざとか！意外と成長してるじゃねえか!!』

エレンは壁を背にして付近には調査兵が守るように展開していた。

こちらの目的はエレンの奪取である事に気付かれたと同時に関節部を狙っていると分かった。

『なんならタツクルはどうだ!?!』

！
全身が硬質化した皮膚に覆われている鎧の巨人のタツクルは、凄まじいパワーを持つ

かつてウォール・ローゼの扉を破壊したその威力はエレンの巨体を壁に叩きつける威力があつた。

『チツ、距離が狭すぎたか！じゃあこれならどうだ!!』

もう一度タツクルをすればエレンは隙を見て拘束技を使って来るのは目に見えた。

だからライナーは【奥の手】を使った！

『そんな腕が欲しいなら……いくらでもくれてやる!!』

エレンが殴ろうとした左腕を射出して彼の顔面に鉄拳を打ち込んだ!

音を置き去りにする速度で激突した左拳は巨人の頭蓋骨を紙細工の様に變形させ粉砕した!

圧倒的な破壊力は、巨人の脳髓や骨の欠片を辺りにばら撒いて地平線の彼方へと飛んでいった。

「エレンがやられた!?!」

「総員突撃!! エレンを奪われるな!!」

音速の2倍で切り離された左手で巨人の脳が破壊されて操作不能に陥って動けないエレン。

それを見たハンジ・ゾエの号令で調査兵は次々と鎧の巨人のアンカーを突き刺した!

『じゃあ地獄に付き合ってもらおうか!』

あえて調査兵の集団にアンカーを撃たせて近づいてきた時に鎧の巨人は前転した。フローラからアンカーを変異種に撃ち込むと前転をすると聞いてこの発想が生まれた。

こうして、まんまと釣られた調査兵は地面に叩きつけられて動かなくなった。

「クソー！手ごわいな!!」

ハンジは、敵が想像以上に厄介だと分かった。

訓練兵団で学んでいるせいで、立体機動の弱点を熟知されていた。

そして鎧の巨人は関節部を自分の意志だけで切り離せるようである。

鎧で覆えない股や脇や膝裏を狙うとか言っている場合じゃなかった！

『どうせ死んでいるんだ、最後は有効活用させてもらうぜ!!』

鎧の巨人は再生した右手で身体に突き刺さったワイヤーを回収した。

そしてそれを武器にして生存している調査兵に目掛けてぶつけようと振り回した！

ワイヤーが引つ掛かった兵士は悲鳴をあげてあらゆる方向に跳んで行つて壁の染みに
なつた。

その影響により調査兵の一団は戦線離脱して壁にぶら下がつて待機せざるを得な
かつた。

『牽制は、これで充分だろう!』

ベルトルトを回収する必要があつたライナーは調査兵を追い払う事に成功した。

あとは咆哮をあげて合図を伝えるだけである。

ところが、順調に進んでいた作戦に支障が出る事態が発生した。

『信煙弾!?!あれはフローラ!?!まずい!!』

緑色の煙が視界に映つて発射元を見ると血塗れの女兵士が居た。

天真爛漫な笑みを浮かべているが、目が一切笑つておらず殺意剥き出しに見えた。

さきほどまで彼女に助けられていたライナーはようやく敵対していた巨人の気持ち
になれた。

『何故来ない!? 罨か!? それとも…ぐあああああ!?』

フローラに気を取られていたライナーはエレンの不意打ちを許した。

怒りのあまり巨人の限界を超えた彼は奇跡の復活をしてライナーを両腕と両脚で拘束された。

『まずい!! クソ!! こんな所で終わるわけにはいけねえんだよ!!』

エレンのせいで身動きが取れなくなった以上、フローラに首を刎ねられる!

できるわけがないと思いつつ、自分が彼女の両親の仇である以上、やられる可能性があった。

そもそも首が音を立てており、エレンにへし折られるのも時間の問題であったが!

『ベルトルト!!…おい、何で合図を出してないのに落下してるんだ…』

仕方なくライナーは咆哮しようとすると、既に超大型巨人が落下していた。

本来は爆心地に近づけるつもりであったが、予想以上に蒸気を噴き出して原型を保てなくなった。

そんなことなど露知らぬ彼は、ただひたすら落下するのを待つしかなかった。

ミカサは目覚めて起き上がった！

超大型巨人が壁から落下してきたのまでは覚えている。

そこから記憶が無かった。

「アルミン！エレンはどこ!?!」

「駄目だよ！まだ怪我の度合いが分からないだろう!」

駆け寄ってきたアルミンを振り払って壁から見下ろした。

そこには大きなクレーターがあり、巨人が数体集まっているだけであった。

「エレン!?!」

「エレンもユミルも奴らに連れて行かれたよ…」

「詳しく聴かせて!!」

アルミンから事の顛末を聴いて青ざめたミカサは疑問に思った事がある。

「だ、誰か追ってるの?」

「追ってない…あれから5時間、誰も追えなかったんだ…」

「なんで!」

自分が氣を失ってから5時間が経過したと彼から聞かされた。

なのに未だに追跡する部隊が送られていなかった。

彼女は詰め寄って理由を尋ねるしかできなかった。

「馬を壁外に運べないからだよ!リフトが来ない限りあつちに移す手段が無いんだ!!」

アルミンの言う事はもつともである。

巨人に追いつく唯一の手段は馬である。

ただし、ここは門から離れた壁。

積み荷や馬を降ろすりフトを取りに行ったが時間が掛かってしまった。

「ううっ!？」

「大丈夫かい!?!もう少し安静にしていた方が…」

「精神的に追い詰められると頭痛になる癖があるだけ…心配しないで」

大切な人を失いそうなタイミングで頭痛がする。

まるで誰かに脳内を覗かれて思考が荒らされているようである。

それでもエレンを助ける為なら何でもやるつもりだった!

「ねえアルミン、どうしてエレンは私たちから去っていくの?」

「そういえばそうだね。いつも単独で進撃していくんだ。僕らを置いて行って…」

ミカサは唯一の家族の傍に居たかっただけである。

訓練兵団に入団したのも調査兵になったのも全てそれだけであった。

「…私はただ傍に居るだけでいいのに！それだけなのに…」

エレンからもらった赤い色のマフラーを顔に包むようにミカサは巻いた。

大事な人からもらったそれは、先端がほつれてきていた。

大事に扱っていても、いつも身に着けているマフラーはボロボロになってきている。

それは、いつかエレンが自分の元から離れていくのを示唆している感じがした。

「よおお前ら！野戦糧食を持ってきたんだ！一緒に食べようぜ！」

「ハンネスさん…」

「腹が減っては戦はできぬってな！まず腹を満たして今後を考えようじゃないか！」

三角座りをして静かに泣いていたミカサの前に恩人であるハンネスが現れた。

彼は、エレンを奪取された2人が精神的に追い詰められていると思ひ、夜戦糧食を持ってきた。

「でも！エレンが連れて行かれてから5時間も経っているの！」

「あいつが大人しくしているタマかよ！今頃暴れて抵抗してるぞ！」

「そうなの？」

「生け捕りにされた以上、あいつは最後まで足掻くぜ！ いじめっ子を相手にするようにな！」

久しぶりに女々しく泣いていたミカサは彼の励ましによつて食事がとれるまで精神が回復した。

そしてマフラーを解いて、一心不乱に糧食に噛みついた。
保存食なので乾燥していて正直まずかった。

それでも消費したカロリーを摂取できて食欲を満たす事で精神的に落ち着いてきた。

「そもそもあの悪ガキの面倒を世話するのは昔っからお前らの役目だろう？」

「1人で突撃するエレンを無視できず何度も止めに行ったりサポートしたり…腐れ縁つて奴だ」

ハンネスは、ミカサ達を諭しながら5年以上の前の事を思い出していた。

喧嘩が弱いエレンがいじめっ子3人組と殴り合つてミカサが乱入してアルミンが制止する。

それをツマミにして同僚と酒を飲みながら笑っていた日常。
もう二度とその時代は戻ってくることは無い。

「あいつは、喧嘩が弱くて兵士やミカサに止められた時はボロボロだったな」

「うん、何度も負けて…それでも不屈の精神で立ち上がってきました」

「私は、エレンを守りたくて…ひたすらあいつらを蹴散らしていた」

「ホント、お前らは5年前から変わってねえな！まあ、あの時が一番良かったがな…」

ミカサもアルミンの脳裏にも懐かしい光景が浮かんでいた。

もう戻れない日常だった光景を…。

「俺はな！あの日常が好きだ！まやかしの平和かもしれないねえがあれで充分だったよ」

「「ハンネスさん…」」

「あの何でもない日常を取り戻す為なら俺は何でもする!!」

シガンシナ区では、飲んだくれの役立たずの兵士だったハンネス・ルドマン。

壁工事や近所のおばさんに頼まれたおつかい、犬に散歩。

今となつては武装した兵士の仕事ではなかったが充実はしていた。墮落していると言われても、兵士が兵士として働かない以上、平和という事である。

「お前から3人が揃っていないと俺の日常は戻らねえ！エレンを必ず奪還するぞ!!」
「はい!!」

ハンネスは、握り拳が震えるのも気にせず必ずエレンを奪還する事を誓つた！
自分の実力不足でエレンの母、カルラを見捨ててしまった不甲斐ない男。
彼ができるのは、その身を犠牲にしても、3人組に戻す事だけである。

「ハンネスさん！フローラの所にも糧食をあげてください」
「ああ、もちろんだとも!!」

訓練兵团では、サシャに次ぐ食い意地があるフローラ。

やらかして飯を抜きにされたら地面を掘り返して野草や根っこを噛み付く女。

そのせいか、身長が180cmを越えている彼女は、自分たちの倍以上の糧食が必要であった。

ハンネスは、そう思つて糧食を詰められるだけ詰めた麻袋を寝込んでいる彼女の元に置いた。

「良い食いつぶりだな！これならエレンを奪還できるぞ!!」

ミカサとアルミンは必死に腹を満たした！

これから起こる激戦に備える様に!!

「むっ！食べ物匂い!?!」

嗅覚も鋭いフローラは起き上がって発見した麻袋から糧食を取って食べ始めた。怒りやストレス、疲労を誤魔化すかのように胃の中を満たしていった。

エレン・イエーガーは目覚めた。

何故か両腕が挽がれていたが、目の前に居る2人を見れば大体原因が分かる。

ライナーとベルトルト、自分や同期を欺いて兵士ごっこをしていた糞野郎共だ！隣に居るのは右腕と右脚を喪失して肉体が再生するまで待機しているユミル。とりあえず状況を把握した彼はこいつらを殺す覚悟で右腕に噛み付こうとした！

「おいやめておけよ」

「何で邪魔をするんだ！」

「ここはウォール・マリアの巨大樹の森の中だ。巨人の領域つて事を忘れるな」

ユミルに左手で制止されて代わりに彼女に噛みつくろうとしたエレン。

しかし彼女の発言で冷静に辺りを見渡すと、真下には複数の巨人が集っていた。少なくとも10体、そして敵は立体機動装置を身に着けている。

ライナーの物は自分が身に着けていた物であり、少しきつそうにしているのが分かる。

「闇雲に巨人化しても得策とは思えんだらう？」

「奴らも同じ事ができる上に樹の上に逃げられるつて事か？」

「それもあるが、辺りに巨人だらけだ。夜になるまでどの道、動けやしないぜ」

エレンは身体が動くならさっさとライナーを殺害したかった。

しかし、自分より軽傷に見えるユミルの話を聴いて暴れるのは得策ではないと理解した。

煮えたぎる本能は「暴れろ！」と叫んでいるが、一度気を失ったせいかな冷静な思考ができた。

「そういえば、あの城の巨人は夜なのに動いて居たな！こいつらは大丈夫なのか!？」

「それは私も思ってた事さ！おいライナー！大丈夫なんだろうな!？」

「巨人は夜に動けない。巨人だったお前が一番知っているはずだが?」

「そうだったな…」

ここでエレンはユミルが巨人に関して自分より詳しいのを知った。

むしろ、最近まで知らなかった自分とは違って、最初から知っているはずである。

目的どころか味方なのかも分からない。

ただ一つ分かるのは、クリスタと仲良くし過ぎて夫婦のように見えたくらいか。

『アルミンなら情報を集めるだろうな！俺も感情を噛み殺して情報収集しなくては!!』

できるなら今すぐにも奴らを殺したい！

だが、もし殺してしまつたら奴らの目的が分からない。

自分を生け捕りにしているのも、まどろこしいやり方で壁内に潜入しているのも分からなくなる。

敵がライナー、ベルトルト、アニだけでは無いのは確実である。

尖兵だけを殺しても解決できないと分かっているからこそ彼は必死に我慢した。

「エレンが目覚めた事だし話してくれよ！私たちをどうする気だ？」

「一緒に故郷に来てもらうとしか言いようがない」

「じゃあ、何で鎧の巨人のまま故郷とやらに向かわなかったんだ？」

「…お前の想像に任せる」

さつそくユミルがライナーに話しかけていた。

故郷は少なくともウォール・マリアの領域には無いのは分かる。

そうでなければわざわざシガンシナ区を襲撃しないからだ。

つまり、ライナーの故郷はウォール・マリアより外側にあるという事だ。

そして故郷という事は、少なくとも人類が存続しており、少なくとも国家クラスの集団が居る。

『わざわざ休憩してるって事は、奴らも巨人化で疲弊しきつているのか？』

さきほどの話を聴くまで巨人に囲まれたせいで巨大樹に逃げて来たと思っていた。

ところが、ユミルの話からその気になれば故郷に戻れたという事だ。

巨人化は長時間できないという事はエレンも実感していた。

ユミルが逃げないのも疲弊したまま巨人化すると、逆に弱体化するだけという可能性がある。

そうでなければユミルがクリスタから離れる事を許すわけがないし、抵抗するはずである。

『奴らはただの尖兵、そして巨人化能力者を生け捕りにする…一体何がしたいんだこいつら！』

得られた情報を必死に考えるが、情報が少なすぎて結論は出なかった。だからもう少し、情報を得たいがなんて発言をするか分からない。コミュニケーションの達人のあいっならなんて訊くのかだろうか。同期であり同じ夢を掲げた同類の彼女の言動を必死に思い返していた。

「おい水は無いのか？このままじゃ干物になっちゃまうぜ」

「死活問題だがこの状況じゃ手に入れるのは無理だな」

「しょうがねえな！暫く黙っている事にするよ」

ユミルから水を訊かれたライナーは彼女の意見を一蹴した。

自分だってウトガルド城で休んだ以降、水分を一切取っていない。

汗で全て飛んでいったのか未だに尿意すら感じられない。

「そーいや、巨人が湧いたせいで昨日の午前中から碌に飲まず食わずで寝てねえな…」

思い返せば、昨日から昼飯は抜きにされるわ、任務中のせいで碌に飯を食べていない。

巨人の襲撃に警戒して眠る事は出来なかった。

帰ったら表彰されて勲章を授与されてもおかしくないだろう。

「まあ壁が破壊されてなかったし、ひとまず休ませてもらいたいもんだ。昇格の話はまたいい」

「…？ライナー？」

「それだけの働きをしたと思うぜ。兵士としてそれなりの評価と待遇があると良いんだが…」

落ちこぼれだった自分が兵士として一人前に任務を遂行した。

ポルコには馬鹿にされていたが、ようやくマルセルに恥じない活躍をできたと思う。

ここは楽園だ。必死に頑張れば評価されて馬鹿にされる事もなく功績があれば英雄になれる。

誰にも否定されずに自身の努力がそのまま評価される。

英雄志望で誰よりも評価を得たかったライナーからすれば文字通りここは楽園である。

「おいおいライナーさんよ。何を言ってるんだ？」

「そりゃあ、すぐに部隊長に昇格してもらおうとは言っていないだろう」

ライナー・ブラウンはエルディア人を、世界を救う英雄になりたかった。

世界一の自慢の息子に成る為に彼は今まで頑張ってきた。

すぐに英雄になれるわけではないが、これを足掛かりにして調査兵団で出世したいはず、憲兵に！

そして兵団のトップになって狂った常識を変えて巨人との確執を自分の代で終わらせる！

それが母親への恩返しであり、父親に認めてもらえる唯一の手段だと彼は信じていた。

「コニーを庇った時は死ぬかと思ったぞ！でもそのおかげでクリスタと仲良くなれた。」

コニーが死角から巨人に喰われそうになった時、ライナーは身を挺して庇った。

ベルトルトは混乱し、ライナーが喰われそうになったが結果が良ければ全て良し。

右腕を噛み砕かれる負傷だったが、そのおかげでクリスタに手当をされた。

甘い香りを堪能しながら彼女のスカートの切れ端が良く肌に馴染んだ。

そして彼女の太腿を見て覚醒したライナーは人助けをして彼女からの好感度を稼ぐ作戦を考えた。

「ありや、どう見てもクリスタは俺に気があるよな？ベルトルト！ユミル！お前らも思うよな？やっぱり彼女の好感度を稼ぐには人助けが一番良いって事が分かった。お前らも困っている事があつたら早めに俺に相談してくれよ！」

「おい！てめえふざけてるのか!？」

もちろん下心で動いているのはライナー自身が一番分かっている。

エレンに怒られて自分の状況を把握しようと試みたらすぐに異常が見つかった。

無意識にズボンのポケットからスカートの切れ端を取り出して匂いを嗅いでいるのを気付いた。

真面目な話をしていたエレンが激怒するのもしようがないと彼は思った。

『確かにエレンの言う通り、ふざけてるな…』

でもいいじゃないか！思春期だしこうやってクリスタと交際する為に頑張っても良

いだろう。

今はスカートを通して彼女を味わう事しかできないが、すぐに直接、肌を合わせるつもりだ！

女神であるクリスタにはライバルが多すぎるし、結婚まで辿り着けるには困難な道りがある。

ライナーは、将来の嫁との結婚を妨害してくる障害を「愛のパワー」で乗り越えるつもりだ！

「何怒ってるんだよエレン！確かに下心ありきで動いてるけどさ！男なら分かるだろう！？」

「ふざけんじゃねえぞ！あんな事をしておいて何を言ってるやがる!!」
「待てよエレン！ありやあ普通じゃねえよ」

怒鳴り散らそうとしていたエレンを止めたユミル。

元から可笑しいとは知っていたが、ここまで重症だったとは思わなかった。
だからこそ、さきほどから黙り込んでいる男に声をかけることにした。

「そうだからベルトルトさん？いい加減、黙ってないで対応してやったらどうだ？」

話を振られたベルトルト・フーバーは分かっていた。

ライナーの精神が兵士と戦士に分裂していたことを。

こつそりフローラに相談したが、彼の実績を評価して元の人格に誘導するしかできなかった。

先日まではそれで何とかなったが、昨晩から完全に彼が壊れていた。

調査兵団の増援が合流したにも関わらず、無防備な同期を助ける為に突撃していく男。

それを見ていて初めて自分の怒りをぶつけるほどベルトルトは苛立っていた。

「おいベルトルト…どういう事だ？」

ライナーは話の意図が掴めずベルトルトに向き合った。

ここでようやく事実を告げる事にした。

「ライナー…君は兵士じゃないだろう。僕らは戦士なんだから…」

この時、ライナー・ブラウンは思い出した。

かつて世界が始祖ユミルの血を継ぐエルディア人に支配されていた恐怖を…。

あれほど罵っていた鳥籠に引き籠った悪魔の末裔共の尖兵になっていた屈辱を…。

「おかしいと思ったよ。壁を破壊した奴が命懸けでコニーを助けるなんてな」

「どういう事だ？」

「ライナーは矛盾した行動を自覚してなかったって事だ。おそらく精神的にやられてたな？」

ユミルは、ライナーの不可思議な行動についてようやく納得した。

フローラから自分が両親の仇であると知っているのに背中を押して応援していた。

それどころか積極的に兵士として活躍をして功績を稼ぎたい行動も分かる。

「本来は壁を破壊する戦士だったが、兵士として演じていくうちに自分を見失ったんだろう」

「罪の意識に耐え切れなくなったのか、いつしか心の均衡を保つ為に壁を守る兵士と逃

避した」

「ベルトルさんの様子を見る限り、割と頻繁に話が噛み合わなくなったようだな？」

ベルトルトはユミルの推理に対して何も言えなかった。

『ウォール・ローゼを破壊する』

5年も経ったのに進展がないのでウォール・ローゼを破壊する事にした。

ライナーの案に困惑した2人だったが代案が出せなかったのでやるしかなかった。

3年間一緒に過ごした同期が大勢死ぬと分かっていたいながらも決行した！

『ライナー…話と違うじゃないか!?!』

『何を言ってるやがる？邪魔になる巨人を討伐するんだ!』

ところが実行すると、ライナーは率先して巨人を討伐してマルコに巨人討伐の実績を

稼がせた。

…かと思えば、秘密を知られたマルコを抹殺する為に得意な口論で押しア二をけしかけた。

なのに巨人がマルコの頭を齧っている時、戸惑った彼は激怒してその巨人を討伐した。

ベルトルトは、ただ彼の行動を監視して見守るしかできなかつた。

「無言は肯定と捉えていいか？」

「その通りだよユミル。ライナーは疲れすぎて頭がおかしくなったんだ」

それを聴いてエレンは一瞬、思考が停止した。

平和だった壁内を混乱に陥らせて大勢の人が死ぬ事になった元凶。

それが罪に悩んで兵士ごっこで精神を落ち着かせようとしていた。

「てめえら！ふざけんなよ！！なんで被害者面してるんだよ！！」

超大型巨人が蹴破った扉の瓦礫がエレンの家に直撃して母が動けなくなった。そして穴から入ってきた金髪の巨人に母は喰われた。

それを訓練兵時代の男部屋で話をしていた。

あの時は、衝撃的な話でショックを受けたのか返答は無かったが何のことは無い！
彼らは自分のした事を思い出して、必死に忘れようとしていたのだ!!

「ベルトルトのせいで俺の母ちゃんは死んだ！ライナーのせいでフローラの両親が死んだ！」

フローラの両親は鎧の巨人がマリアの壁を破った際に発生した瓦礫の下敷きになって死んだ。

そして彼女は大半の記憶を失い、鎧の巨人を含めた復讐と怒りに燃えた悪魔に転生した。

「なあ、どう思ったんだ？俺らの家族が死んだと知ってどう思ったんだ！答えろよ!!」

「…あの時は、気の毒に思ったよ」

「そうか、そうだよなーお前らは…」

ベルトルトの返答を聴いたエレンは心の奥深くに残っていた同期としての情が失われたのを感じた。

目の前に居るのは憎悪すべき敵であり、自分たちを騙っている外道共だ！

「お前らは兵士でも！戦士でもねえよ！！ただの人殺しだ！大量殺人鬼だ！！」

「んな事分かってるんだよ！！お前にわざわざ教えてもらえなくてもな！！」

誰もが分かっていた。

戦士組が介入してこなかったら壁内は平和だったことを！

だが、既に住んでしまった事！ここでいくら口論しようが現実を変える事もできない

！

ライナーは逆ギレをしたように言い返すしかなかった！

「だったら一丁前に人間らしく悩んでるんじゃないやねえよ！！一生苦しんでいろよ！悪魔が

！！

「その人殺しに何を求めているんだ!? 謝罪か? 反省か? 人殺しは悪いって説教したいのか!」

エレンはライナーの返答を聴いて冷静になった。

これでは、母を守れなかったハンネスを責めていた頃と全然変わらない。

むしろ、あれから成長したからこそ無意味なのは実感している。

「そうだな…オレが間違っていたよ…甘すぎたんだ」

だから彼は選択する。

巨人を一匹残らず駆逐して自由を目指した少年に新たな目標が加わった。

「オレが頑張しかねえよな…! お前らができるだけ苦しんで死ぬるように努力するよ…」

彼は進み続ける。

自分の大事な人々を世界が傷付けるならその世界すら滅ぼしてやると誓った。

目の前の悪魔が無様に…いや、こいつらをけしかけてきた悪魔共を1匹残らず駆逐してやると!!

「勝手にしてくれ…僕らは使命に従うまでだ」

「お前は世界を知らねえだけだ! だからそんな事を言えるんだ! 井の中の蛙が!!」

「相手は、そんなちっぽけなもんじゃない。ガキの様な事を言っているようじゃ敵わねえよ…」

現実を知る3人は、即座にエレンの言葉を否定して本気にする事は無かった。

巨人化できるからといって個人どころか、壁内人類を集めても絶対に勝ち目はないから否定した。

しかし、負け惜しみのように発言した彼は4年後に実現する事となる。

『戦え! 戦え!!』

彼は最後まで進み続ける!

大事な人を守るために最後まで進撃する!

例え人類が滅びようとしても…。

76話 追跡

「嘘だろう!? 壁の上を馬で駆けるなんて…」

「あれは…エルヴィン団長だ!! まさかトロスト区から来たのか!」

壁の上を待機していた調査兵の一団にエルヴィン団長が駆けつけた。

憲兵団、駐屯兵団などを含めた80名程度の手勢であったが、居ないよりマシンである。予備の馬を連れてきているので、リフトで壁外に降ろすだけで済むので時間短縮になった。

「クリスタ、君には残って欲しかったんだけど…」

「それは無理!」私のユミルが攫われたのにここで待つ事なんてできない!」

クリスタはユミルを必ず奪還するつもりだった。

鬱陶しくて適当にあしらっていた過去の自分に腸が煮え返るほど苛立っていた。

今ならユミルのプロポーズを受け入れるつもりは彼女にライナーが付け入る隙など

無かった。

「そうだぞ、俺だってベルトルトやライナーに直接逢うまで帰る気はないぜ！」

コニー・スプリンガーは、ウトガルド城でライナーに助けてもらった。

ベルトルトはともかく頼もしい兄貴分が人類の敵など聴かされても信じられるわけが無かった。

巨人が2体出現した時に、真つ先に2人を心配していたのに元凶が彼らなど分かるわけがない。

実は、誰に操られているというのに賭けたかったほどだ。

「エルヴィン団長！間に合ったのですね！」

「ああ、事情は分かっている。我々はどこに向かえば良いか見当はあるのか？」

「ハッ！ハンジ分隊長によると、南東にある小規模の巨大樹の森に目標が居るとの事です！」

「よし、さつそく馬と人員を壁外に降ろすでしょう！」

エルヴィンは目的地が判明した瞬間、速やかに兵員を壁外に降ろす命令を下した。もうじき日が暮れるので、時間が惜しいのもあったが、ハンジを信頼しているのもあった。

そこで賭けが外れば、人類は滅亡するが少なくとも時間切れだけは阻止したかった。

「お待ちください！憲兵団の連中も降ろすのですか!?!」

「一人でも兵員が必要だからな！責任は私が取る！速やかにリフトの準備を！」
「ハッ！」

ここに連れてきたのは、下手すれば新兵の能力ですら劣る憲兵や駐屯兵である。精鋭部隊などは壁内の守備で忙しい為、まともな戦力を引き抜く事はできなかった。それに連れて来た馬も巨人に怯える普通の品種であり、圧倒的に不利なのは間違いない。

「エルヴィン……」

「ハンジ、ここは私に任せてしっかりと療養してくれ」

「あいつらは巨人化の力があっても巨人に襲われるようだ。巨人は奴らの味方じゃない……」

「貴重な情報だ、さっそく活用させてもらおう」

エルヴィンは、鎧の巨人や超大型巨人ですら巨人に襲撃されるのを知った。

過去のデータでは、トロスト区戦のエレンの巨人体に巨人が群がっていたと知っていた。

得た情報を元に思考した結果、巨人は巨人化能力者の味方ではないと結論付けた。

『使えるな』

さすがにこの戦力ではエレンを奪還できない。

ならばウォール・マリアに生息する勢力の力を借りるまでだ！

「離れて!!」

一方その頃、ライリーに挨拶して壁を登ろうとしたフローラ。

置き去りにされるのを察したのかライリーはフローラを襲撃した。

それだけだったら逃げ切れるはずだが、ミーナも置いて行こうとしたせいで妨害された。

「ミーナ！ライリー！いい加減にして!!」

「私も行く!!肉の誓いの同志を見捨てられないわ!!」

右腕をライリーに噛まれてミーナに抱き着かれたフローラは身動きが取れなくなつた。

さすがに甘噛み程度ではあるが、少しでも動こうとすると大怪我をするのは間違いないだろう。

「フローラ！何をしている！早く来い!!」

「こいつらのせいで動けないんです!!」

「リフトを降ろすからこつちに来い!!」

「何で助けてくださらないの!?!」

「その馬が怖いに決まっているだろうが!!」

調査兵団の馬とは対極的な存在であるライリー。

赤い体毛で気性が荒く最低でも5時間走らせないと機嫌を損ねる人見知りの馬。

調査兵が騎乗していたフローラを起こせなかった原因そのものだった。

そんな馬など関わりたくない兵士達は素直にリフトを降ろした。

「私も兵士！絶対に同志を奪還してみせるわ！」

「その割には最低限の刃以外はわたくしに渡したわね？」

「だって重いもん……」

さきほどの戦闘で使用した刃はミーナから受け取ったフローラ。

彼女の言い分も分かったが、問題なのはライフル銃を持ち出しているという事。

おそらく壁上に置いてきた憲兵の装備から持ち出してきたものだろう。

親友として るべきか迷ったが狙撃能力で助けられた以上、追及できなかった。

「エルヴィン団長！フローラが地上に降りました！」

「やけに遅いな？」

「壁内で発生した巨人と交戦した場所全てに参戦したとの噂です」
「あり得るな……」

王政幹部を相手にするより厄介な存在であるフローラ。

兵団幹部やザックレー総統と仲良しで巨人相手ではまず負けない頼もしい女である。

それ以上にトラブルメーカーでありエルヴィンの頭痛の種の主な原因である。

副官の話を真面目に受け止めてしまうほどヤバい奴であった。

「タイムリミットは夜までだ！それまでに人類の希望であるエレンを奪還する！心臓を
捧げよ！」

「「ハッ！」「」」

それでも団長らしく号令を下した。

エレン奪還作戦の開始である。

勝利条件は、文字通りエレンを奪還してウォール・ローゼ内に帰還させる事。

エレンさえ帰還できるならエルヴィンはこの場に居る兵士を全滅させるのを厭わな

い覚悟だった！

「進めーっ!!」

「「「おとおおおとおお!!」」」

エルヴィンが先頭となつてエレン奪還部隊は目的地である巨大樹の森を目指して進軍を開始した。

集団で馬を走るのを見たライリーは対抗心を燃やして団長の馬を抜いて突撃していった。

その動きに振り回されながらもフローラは、さつそく発見した巨人に向けて殺意をぶつけた!!

「なあ、ユミル？」

「何だ糞ゴリラ、私を口説くのはクリスタだけと決まっているんだが？」

「お前は、あの世界に先があると思うか？」

ライナーはユミルを説得するつもりだ。

マルセルを喰った無垢の巨人がユミルならば、重要な情報を握っている可能性があるが、
る。

いくら巨人の継承者の記憶を引き続けるとはいえ、限界があるから直接聞く方が良かった。
からだ。

「ねえな！ 少なくともお前ら【戦士】が派遣される時点で束の間の安息ってわけだ」

「そこまで分かっているならお前次第でこっちに來る事ができるはずだ！」

「冗談は妄想の中だけでやってろ！ 私はお前を信用できない」

「いいや信用できる！ お前の目的はクリスタを守る事だろう？」

凶星を指されたユミルは硬直した。

クリスタが本名を名乗りだしたせいで、彼女の身が王政に狙われるようになった。

例え本人は隠しても同期の会話を隠密に聴かれてバレる可能性がある。

既にクリスタという少女の居場所は、壁内には無かった。

だからといって、壁外に連れて行っても良い事などない。

「それだけは、信頼し合えるはずだ！クリスタは可愛いし守りたくなる気持ちとは同じだ！」

「そうかもな…」

「おいユミル、ライナー…何を言っているんだ？『さる』って何だ？『ごりら』って何だ！？」

「さあな、昔の記憶から咄嗟に出た名前だ」

エレンはユミルと人類の敵だけ会話が成り立っていて疎外されているのを実感していた。

『さる』のような巨人、『糞ごりら』など暗号文としか読めず、気になっていた。

「正直に言うが、俺達に付いて来てもお前の身は保証されないだろう…」

「だろうな！ああ、なんて可哀そうなんだろう私は！せつかく巨人から人に戻ったというのに」

「ただクリスタは俺らが守ってやれる。彼女一人くらいなら保護できる!!」

「気持ち悪い奴がクリスタの騎士になろうって訳か？ふん、バカバカしいよ！」

「この壁内の平和もお前の寿命は短い。お前が【任期】で死んだら誰がクリスタを守るん

だ？」

「ぐっ!!」

無垢の巨人だったユミルは幸運にも戦士を喰って第二の人生を手にした。しかし、その人生は13年と短い。

既に5年以上消費してしまつたので余命は持つて7年ということだ。

「自分の僅かな寿命を取るか、クリスタの未来か。選ぶのはお前だ」

「チツ、相変わらず嫌な奴だ…少しだけ考えさせてくれ」

「ユミル!? お前!! 何を言つてやがるのか分かつてるのか!？」

「あまりうるさいとあいつらに寝返つてもいいだぞ?」

「ぐっ!!」

エレンを黙らせたユミルは考えていた。

壁内は平和と見せかけていつ滅びてもおかしくない状況だった。

今は巨人という防壁があるおかげで攻めてこないが、いつ滅びてもおかしくない。

その前にクリスタが王政に消されるのが早いだろう。

ただでさえ不貞の子で、偽名を使って暮らすなら生存は許可する程度の扱いだった。だったら、ベルトルトにクリスタを任せられた方が彼女が長生きできる可能性が遥かにある。

「良いのかライナー？あいつはマルセルを喰ったんだぞ？」

「その通りだ、だがあいつは自分より大切な存在がでっちまつた。クリスタという女神がな」

「…君は戦士なのか？」

「ああ、俺は戦士だ。クリスタが可愛い以外にも理由はあるから安心しろ」

「理由？」

ベルトルトは再びライナーが兵士モードになったと勘違いした。

何故ならユミルを味方に入れるのは脅威であるしかなかった。

いつ裏切るか分からない存在など信頼できるわけがない。

「俺は昔からクリスタの事が好きで彼女の様子を観察していたんだ」

「やっぱり兵士じゃない？頭大丈夫？」

「良いから聞け！そしたらクリスタを監視する存在に気付いたんだ。そこでアニに調査させた」

「ああ、可哀そうに…」

「そしたら王政の大総統や内務大臣の側近と面識がある壁教の高官の貴族だった」

酷使されるほどアニで調査させたライナーはクリスタが王政に狙われているのを突き止めた。

だからこそ結婚して彼女を守って見せると誓った。

その影響でアニは、精神がすり減って話し相手のミーナとの会話で癒しを求めてしまった。

そんな事など露知らぬライナーは、クリスタが王政が注目する重要人物だと相棒に説明した。

「もし、エレンが座標じゃなかったら、その時はクリスタが居れば捜査が楽になるはずだ」

「貴族の隠し子であつて、そこまで重要じゃないと思うけど？」

「正直、フリッツ王が座標を継いでいるとは思えん。行政幹部が気にしてる彼女が重要

だ」

「そりゃあ、そうだね」

ベルトルトとライナーは、フリッツ王の正体が王政幹部に操られたボケた爺さんだと知っている。

芋を吐き出せる為とはいえ王を殴ったフローラからそう告げられたからだ。

アニだけで情報収集をさせるのはまずいと気付いた2人はある作戦を行なった。

コミュニケーションの化け物であるフローラから王政の情報を事細かく報告してもらう事だ。

『ライナー、アニの機嫌が悪いよ…』

『しょうがねえ…フローラに手紙を渡してもらおうか』

リーダー面して口でパワハラをするゴリラ、それに追隨して半ばストーカーと化した腰巾着。

もし、海外に父親を置いて来ていなかったら即刻、敵に寝返るほどアニからの印象は最悪だった。

ベルトルトもライナーの精神分裂に耐え切れず、直接話しかけるのがトラウマになった時がある。

そのせいで、フローラを利用しないとすら戦士同士が情報共有できない時期があった。

「…あれだけ世話になったフローラを裏切っちゃったね」

「お前なんてまだ良いだろう？俺なんて両親の仇だぞ…」

そして色々相談して仲良くなった彼女を戦士組は裏切る事になった。

ただ裏切るのではなく自身の中では一番の親友を裏切る形となってしまった。

「今度、来るとしたら座標をもってクリスタとアニを回収して終わりにするぞ」

「そして二度とここには来ない」

「それで仕事は終わりだ」

エルディア人である彼らからすればここは理想郷である。

血で差別される事もなく実績や成績がそのまま評価される。

巨人に怯えているせいも一致団結しており隣人への仲間意識が高い。

ここに居るだけでマーレへの忠誠心は瓦解して消滅してしまう。

比喩で『楽園』と呼ばれていたが、実際、彼らからすればここは楽園である。

「ただ故郷に帰ったらアニに告白しろよ」

「な、何で知ってるんだ!？」

「あんなにガン見していたら誰だって気付くさ」

ベルトルトはアニに告白する為に努力をしてきた。

彼女と仲が良いフローラのアドバイスで自分磨きをしていた。

そもそも第57回壁外調査が終わった時からずっとアニと再会したかった。

労わりの言葉も色々考えてきて、彼女の好物である甘いお菓子も用意するつもりだった。

「すぐに彼女と再会して想いを伝えるさ!」

「先の短い殺人鬼同士、仲良くやっつていこうぜ」

しかし彼らは気付かない。

ライナーの想いがクリスタに届かない様にベルトルトの想いもア二には届かない。根本的に相性が悪いのもあったが、当の本人が硬質化で結晶に閉じ籠ってしまった。昨日の昼前に女型の巨人が調査兵団に敗北したという情報を聴かされていない彼ら。絶対にありえない未来を！叶わない夢を希望に熱く語っていった。

『ユミルさえ味方だったら逃げられたのに!!』

蚊帳の外に置かれたエレンは悲しそうな顔をして座るしかできなかった。

一応、重要人物のはずなのに話しかけても全員にスルーされていた。

逃げようとするれば、ユミルの妨害の可能性が捨てきれなかった。

こんな時には小便を建前にして逃げるのが良いが、残念ながら尿意は無かった。

「ん？あれは…信煙弾か!？」

「嘘だろう!?!あんな短時間で馬と兵員を用意できるわけが…」

「エルヴィン団長だろう!あいつくらいしかこんな事をする奴はいねえ!」

「調査兵団か…所属していた組織に追われるなんてね…」

「良いから出発だ！」

遠くから信煙弾の煙を見た2人はすぐさま移動の準備をした。

何故場所を特定されたか分からないが、エルヴィン団長ならやるといふ確信がある。

「何だよ!? まだ夜になってないぞ!？」

「気が変わった! すぐに出発するぞ! 抵抗はするなよ?」

「…乱暴な真似はよしてくれ…こんな状態で抵抗できるわけないだろう!？」

エレンは虎視眈々とライナーを出し抜く事を考えていた。

1人でも殺害すればユミルが味方になると思った彼は、彼を殺害する為に演技した。

ライナー目線からすれば、慣れない事をやっているせいでバレバレであったが。

「死ね!! ぐがっ!!」

「慣れねえ事してるんじゃないやねえよ! バレバレなんだよお前は…」

エレンのパンチを回避したライナーはカウンターでハイキックを繰り出した。

顎を強打して巨大樹の幹に後頭部を激突したエレンは気を失った。

うなじさえ無事であれば多少の頭への攻撃もセーフなのが巨人化の能力者の特権である。

遠慮なくエレンをKOしたライナーは紐を使って背負って固定するつもりだった。

「やっぱ、あんな単純じゃ負けるわな…」

「ユミルも行くとよ」

「なあ、私を恨んでいるのか？」

「分からないよ…君だって人を喰うつもりはなかったはずだ。一体何年彷徨っていたんだ？」

「60年ぐらいだな。終わってみれば、あれは悪夢に居た感じだったよ」

「そうか」

ユミルが楽園送りされたのは60年前である。

実際に数えたわけではないが、壁の歴史を考えるとそんなもんだと思った。

ユミル様と讃えられた女神が元凶なのに人を喰らい、生き返ってしまった。

しかし、悪夢を見ずに済んだことに彼女は死んだ戦士に感謝した。

「ん？煙！？調査兵団が来たのか!?」

「ああそうだ！だから一緒に来てくれ!!」

「駄目だ!!クリスタがすぐそこまで来ている！連れ去るなら今ぞぞ！」

「ああん!?何故分かる!?」

「あいつは、絶対私を助けに来るはずだ！あいつは馬鹿で度の越えたお人好しだ！」

ユミルの直感があの集団の中にクリスタが居ると告げた。

実際、彼女が参加しているが、それ自体は問題ない。

むしろ助けてもらえれば自分は殺されないで済むからだ。

「あの集団を相手にして保護が成功するわけねえだろう！またの機会にしろ!!」

「それは私が戦士に喰われた後だろう!?信用できねえ!!」

問題なのは、ここはウォール・マリアであり巨人の領域である。

フローラとかいう例外を除けば、あの部隊は決死隊に近い存在であった。

調査兵団が過去に5桁以上の人員の命を投げ捨てる狂気の集団というのは知っている

る。

あの中に居れば、すぐにクリスタが巨人の餌になるのは確実だった。

「今じゃなきややだ！このままじゃ二度とあいつに逢えなくなる!!」

「無理だよ！僕らだけでも逃げられるか分からない状況なんだ！」

「よし、決めた！お前らが今、クリスタを連れて行かないならここで戦って妨害する」

ユミルにとってはクリスタは自身の前世の存在みたいなものである。

無理に良い子になって女神を演じている少女。

みんなが喜んでくれるからという動機で身の破滅が待っている地獄に行こうとしている。

先人の轍を踏ませたくない彼女は、少女を必ず助けると決めた！

自分の第二の人生は、クリスタを守ると決めた以上、保護しないなら敵対するしかない。

「お前のわがままでクリスタの未来を奪うつもりか!？」

「そうだよ！未来を奪ってでも私はあいつと逢いたいんだ!!」

ライナーは焦った。

顎の巨人を巨大樹の森で相手にするのは不利であると知っている。

マルセルとの共同訓練で厄介さは良く知っていた！

相手は素人なので負けはしないが、調査兵団から逃げきれぬ自信が無い。

巨人化できるのは持って10分くらい。

それまでに巨人に注意しつつ調査兵を殲滅できる自信などなかった。

「落ち着いてよ！」

「私は本気だぞ！女神ごっこなんて前世で捨てた！私は糞みたいな人間に転生したんだよおー！」

「おいよせ!!…やめろお!!やめろおおお!!！」

ベルトルトとライナーはユミルを必死に制止しようとした。

だが彼女はそれで止まるほど良い子ではなかった。

「エルヴィン団長！巨大樹の森で発光！巨人化した際の光だと思われませう！」

「間に合ったか！総員散開！エレンを見つけ出し奪還せよ！！」

副官からの報告を聞いたエルヴィンは覚悟を決めた。

この場に居る兵士の半数以上をここで使い潰す事を！

「敵は巨人化したと思われるが！戦闘は目的ではない！！なにより奪還だけを優先せよ！！」

あとは、優秀な部下たちが巨大樹の森を囲むように展開するだろう。

彼らを信じてエルヴィンは引き連れて来た憲兵や駐屯兵を率いて作戦に移った。

「ファイル！馬を一カ所にまとめておけ！俺たちは索敵を行なう！！」

「ハンネス隊長！了解しました！！」

ハンネスは副官に馬を任せて巨大樹の森に侵入した。

自分の命を変えてもエレンを奪還する為に!!

「お前ら！俺たちも森に行くぞ!!」

「なんでジャンが指示するんだよ!？」

「うるせえコニー！黙ってついてこいよ」

「それが人に指示する態度かよ!!」

104期調査兵で構成された部隊は、ハンネス隊長の後を追って巨大樹の森に侵入した。

第57回壁外調査では侵入しなかったが改めて入ると不気味としか言いようが無かった。

あり得ないほど大きな幹、いつ巨人が飛び出してきたもおかしくない環境。

「フローラ！本当にここにユミルが居るの!？」

『私を助けてくれ』って言う“声”が聴こえたんだからしょうがないじゃない!」

立体機動で駆けるフローラにクリスタは質問した。

もちろん彼女の聴覚は信じている。

むしろ、ライナーとかいう奴に大切なユミルが痛めつけられていないか心配だった。それを打ち消す為は何度も、念入りに彼女の居場所をフローラに確認していた。

「すぐそこにいるわー！」

「どっよ!?!」

「目の前!!もうすぐ接触するわー！」

そして104期調査兵は巨人化したユミルと合流した。

何故か1人で枝にぶら下がって佇んでおり逃げて来たというより待っている感じであつた。

『は?逃げて来た割りには身体に傷が無いわね!?!』

フローラはさきほどまで助けを呼んでいたがユミルが負傷した様子が無くて訝しんだ。

すぐにその予想が当たる事となつた。

「おいブス！エレンはどこに居るんだ!!」

「ライナーたちを警戒しているみたいだ！」

「でもおかしくねえか、こいつ誰かを探している感じだぞ？」

同期がユミルに向かって話しかけるが彼女から何も反応は帰って来なかった。フローラはその時点で、ユミルがじぶんたちと敵対していると見抜いた。

「ユミル!!良かった！心配したんだよ!!」

ヒストリア・レイスは、大切なユミルを見つけて一安心した。

何の疑いを抱かずに高所から飛び降りて振り子のように彼女の元に飛んでいった。

「えっ？」

ヒストリアはユミルと逢いたかった。

ユミルもヒストリアと逢いたかった。

ただそれだけなのにユミルの巨人は口を大きく開いて飛び込んできた獲物を待った。突然の裏切り行為に彼女は逃げるのを忘れて口を開いた巨人に向かつてしまった。そしてユミルは口内に大事なお嫁さんをしまい込んで口を閉じて逃げ出した。

「あいつ、クリスタを喰いやがった!？」

「ぼさつとするな!あいつを追うぞ!!」

「速い!!最初からこうするつもりだったのか!？」

コニー、ジャン、アルミンは必死にユミルを追いかけるが追いつける速度ではなかった。

突然の裏切り行為と同期が巨人に喰われたショックで出遅れたのが大きかった。

「フローラ!!クリスタが!!クリスタが喰われた!!」

「分かっているわよ!すぐに追いかけるわ!!」

付近の巨人を掃討していたフローラも出遅れた。

必死に情報を知らせるミーナを伴って、敵対したユミルを追いかけた。

「ユミルが何で!？」

「俺はあいつが味方だと限らないって思ってたよ!」

戸惑うミカサを元気づけようとジャンは発言するが華麗にスルーされた。

ミカサの好感度が低すぎてジャンの発言は雑音と感じていたようだ。

「ユミルはライナーに協力する気なんだ! 僕らはおびき寄せられていたんだ!」

しかしアルミンはジャンの発言を聴いて意見を肯定した。

ジャンからすればアルミンの肯定など要らなかつた。

ただミカサに振り向いてもらいたかつただけである。

「もう限界だ! エレンだけでも連れて行くぞ!!」

「ライナー! ユミルが来たぞ!!」

「よし、出発だ! こんな場所なんておさらばだ!!」

ライナーはブレードで切り込みを入れた傷で巨人化した。爆風と発光で調査兵に気付かれてしまったが、もはやそんな些細な事など構っていない。

鎧の巨人の背中に巨人化したユミルが抱き着いてベルトルトも彼の肩に乗った。

「あつ…エレンが連れて行かれる!!」

その瞬間をミカサが見てしまった。

大事なエレンがおとぎ話のヒロインの様に攫われていく様子を発見してしまった。

鎧の巨人の肩に乗っているベルトルトに背負われているエレンが遠い場所に行ってしまう。

「思考も動きも止めるな！馬を使って追跡するぞ!!」

「はい!!」

ハンネスも追いついて呆然と枝に佇むミカサに喝を入れた。

ミカサも彼の言葉を受けてシヨックから立ち直って捕食者の目になった。

同期達もその声が届いてファイルが率いている馬の群れに飛んでいった。

「わたくしも馬を呼ばないと!! きゃあああああ!!?」

地面に降り立ったフローラも指笛でライリーを呼ぼうとした。

しかし後ろから激しい鼻息を耳に当てられて珍しく女々しい声をあげて振り返った。

「ライリー! 何をするのよおおお!!」

自分を置き去りにして他の馬に浮気しようとしたフローラにライリーは罰を与えた。

聴覚に優れているせいか耳が敏感なのでこうやって鼻息を与えると悲鳴をあげるのを知っていた。

ついでに呼ばれる前に待機してみせて自分が役立つ事をアピールしたかったのもある。

先に見つけられるとインパクトが薄れると馬でも感じていた。

ちなみにそれを横で見たミーナは、満面の笑みを浮かべて親友の弱点を発見して喜んだ。

「団長！巨人から巨大樹の森から出てきました！」

「あれは……！」

エルヴィン・スミスは、15m級の巨人の肩にエレンが居るのを発見した。
「ここで奴らを逃がせば、人類は敗北するしかない。」

「各班、巨人を連れたままで良い！私に続け！」

「エルヴィン！俺たちを囮にするつもりか!？」

「この悪魔が!!」

「君たちはよく戦っている！これが最後のチャンスだ！」

エルヴィンは口とは裏腹に憲兵や駐屯兵を囮にした。

調査兵団の未来を担う104期調査兵を一纏めにしたのもその為である。

本来は新兵たちに護衛をつけたかったが、フローラが居るのであえてやらなかった。

そのおかげで憲兵や駐屯兵は予想より戦死せずに済みそうである。

「【鎧の巨人】がエレンを連れて逃亡する気だ！絶対に逃すな!!」

エルヴィンは馬を走らせて、駐屯兵や憲兵はそれに続いていくしかできない。

元々巨人との戦いをする気ではなかった彼らは、壁外のベテランについていくしかできなかつた。

「ぎゃあああああ!!」

「またやられたか」

調査兵団の団長の作戦に背いたり敵前逃亡した兵士は巨人の腹に収まった。何度も壁外調査を生き抜いてきた猛者は伊達じゃなかつた。

「追い付ける速度だ!!」

「間に合うぞ!!」

「これが終われば俺達は憲兵になれるんだ!!」

参加した駐屯兵の一部は既に壁外任務が終わった感覚であった。目標条件がエレンの奪還であり交戦しなくても結果さえ良ければ功績になる。それは駐屯兵から憲兵になる為には重要な戦績である。

『今度こそ躊躇いなく殺してやる!!』

ミカサは、自分が不意打ちで2人を殺せなかったことを引き摺っていた。

巨人化する前に殺せば、こうなることは無かった。

もし奴らが死んで有罪になっても、エルヴィン団長なら庇ってくれるはずであった。だからこそ、彼女はベルトルトとライナーを殺そうと双剣を構えた。

「殺す!!邪魔するならユミルも例外じゃない!どんな手を使っても肉を削いでやる!」

ミカサは叫んだ!

自分はエレンを引き離す存在を殺してやると!

例え大切な同期であろうと、惨殺してやると!

自分がそうするから周りもそうする様に同調圧力をする想いもあった。

『これ以上、家族を死なせない!』

ミカサは唯一の家族を奪還する為に馬を走らせた。

ジャンは、愛されている死に急ぎ野郎に嫉妬して馬を走らせた。

コニーは未だにライナーとベルトルトの裏切りが信じられずに馬を走らせた。

それに続く104期調査兵、そしてエルヴィン団長率いる部隊が鎧の巨人を追跡していた。

「ああ鬱陶しいわね!!」

「ごめん…」

「良いのよ!悪いのは、こいつらなんだから!」

一方、頭進撃は巨大樹の森から出れずに立ち塞がる巨人の首を刎ねまくった。

何故か執拗にミーナを狙って来るせいで彼女はうまく動けなくなつた。

そして5体の巨人を討伐して、ようやく森から脱出する事ができた。

「もしかして置いて行かれちゃった!？」

「すぐそこに団長を追っている巨人の群れが見えるわ！そこに突っ込むわよ！」

「近道しないの!？」

「行き先の方が読めない以上、それは無理よ!!」

案の定、鎧の巨人に置いて行かれたがエルヴィン団長のおかげでどこに行ったのか一目でわかる。

フローラは目の前に居る巨人の群れに向かって突撃した。

ミーナも親友を信じて突撃するしかできなかった。

ここは、巨人の領域。

部隊から逸れて彷徨うのは自殺行為になってしまう過酷な環境だからだ！

77話 再会

巨人化したユミルは口内に入れたクリスタを取り出した。涎塗れになっているが息があるのでひとまず危機は去った。

『この状態も可愛いな……って何を思ってるんだ私は!?!』

びしょ濡れの美少女の寝顔を見たユミルは思わずライナーと同類に堕ちそうになった。

なんとか残った理性で堪えたが、糞ゴリラと同類になるのは御免だ!

「ゴホゴホ!ゲホッ!!」

高熱の唾液を体内から吐き出したヒストリアは何度か咽た後に目覚めた。気が付くと自分が求めていた巨人が居た。

「ユミル!？」

「ゴホッ! やっぱ、うなじから出るのはきついな…」

顎の巨人のうなじから飛び出したユミルは、愛する女性を見た。

何故か敵対行動をしたか疑問に思っている事だろう。

「すまねえクリ…じゃなかったヒストリア。いきなり喰っちまったのは…やっぱ怒ってるよな?」

「な、何で!? 私は貴女を助けに来ただけなのに! ついでにエレンも…」

「助けなくていい!! このままじっとしてくれ!」

彼女に有無言わずに付いて来てもらうしかない。

平和に見えた壁内は、既に安全ではなく破滅する運命である。

壁外の勢力もそうだが、壁内の勢力もヒストリアを狙っている。

むしろ、壁内の方が事情を知っている分、放置できなかつた。

「私はこいつらと付いていく! お前も私と来てくれ! 壁の中には未来なんて無いんだ

！」

「意味が分からない！」

「いいか、壁外は案外良い所だぞ！お前の存在を否定してくる奴らなんていないしな！」

実際は、始祖ユミルの血を引くエルディア人は世界から弾圧されていた。

しかし、收容所が存在して生存を許可されている分、存在を否定された壁内よりマシである。

「そりゃあ、巨人はそんな事しないけど、すごい勢いで食べようとしてくるじゃない！」
「だ、誰にも短所はあるだろう！？そこさえ目を瞑れば良い奴らなんだよ！」

巨人の正体は壁内と同じ人種だった成れ果てである。

ここに来る時点で罪人だが、大体的場合は『良い事』をしたばかりに連行された連中だ。

「本当の悪党は、案外うまい事、楽園送りを回避するので、結果的に巨人は良い人が多い事になる。」

「ユミル！発言と行動がむちやくちやだよ！」

「いいから私を信じてくれ！お前を救うにはこれしか手段が無いんだ！」

「やっぱりベルトルトたちに脅されているのね？」

ベルトルトもライナーもクリスタの発言に反論する事はできなかった。

もうじき壁内は地獄になる。

今は巨人という障害があるから手出しはできないが、「空の脅威」が迫っている。

そもそも自分たちがここに派遣されたのは、壁外の勢力が看過できなくなったからだ。

巨人の力ですら凌駕する勢力が、自分たちを！壁内の悪魔が占領する資源を狙っている！

「私も一緒に戦うから！この手を放してよ！事情はどうあれ私は貴女の味方だから!!」

ユミルは迷った。

壁外に連れて行ってもクリスタは家畜のように扱われる。

だからといって壁内に戻せば破滅が待っている。

クリスタの意志を尊重するならライナーと交戦して壁内に帰還するべきである。

「ユミル!! 調査兵団が迫っている! すぐに逃げたら距離を離れたはずだ」

「なあ、何の為にここまでしたんだよ! また気が変わって裏切るのか!」

「今度は自分の為にクリスタを壁内に留めるつもりなのか!」

ユミルのわがままを受け入れた戦士組は、調査兵団の部隊に追いつかれようとしていた。

2人は彼女の意見を尊重して、こうなったのにユミルは未だに迷っている様子だった。

優柔不断の彼女に痺れを切らしたベルトルトは意志を確定させる為に問いかけた。

「ユミル! この手を放して!」

「駄目だ!!」

「何で?」

「正直言うと、お前をさらった理由は私が助かる為だからだ」

無垢の巨人だったユミルは偶然、戦士を喰ったおかげで人間に戻れた。

しかし、それは戦士や派遣してきた勢力と敵対する事となった。

このまま彼らと同行すれば、戦士候補生に喰われる末路でしかない。

「私は、こいつらから『巨人の力』を盗んだ。そのせいで、壁内にも壁外にも私の居場所は無い」

「このままじゃ私は殺される！でもお前が来てくれたら罪を不問にする約束をしたんだ
！」

「真の王家と血が繋がっているお前さえ居れば、二度と壁内の住民が死なずに済むんだ
よー」

ユミルは戦士組に事実を告げた。

クリスタの本名は、ヒストリア・レイスで、レイス家は偽名で偽ったフリッツ王家そのものだ。

座標の力を使うには【王家の血】が居る以上、丁重な扱いは確定していると同然だ。

『王の血があれば、座標を扱えることができる』

戦士は【座標】の奪還を命じられていたが、それはあくまで手段であり道具でしかない。

その真意を發揮するのは、【穢れたユミルの血】ではなく【王家の血】が必要だった。マール軍上層部は気付かなかつたが、マガト隊長は、その重要性を戦士候補生に叩き込んだ。

『…私の生まれた家と関係がある？』

『ああ、ある！』

ヒストリアは昨日の夕方でもやり取りしていた会話を思い出した。

王政の議会から命を狙われている理由は、自身に流れている血のせいである。

誰かに愛されない少女は、極端に良い子になって自己犠牲で死ぬ自殺願望者になりつつあった。

「私はあの塔の戦いで死にかけて…死ぬのが怖くなった！何とかして助かりたいと思つた！」

「ユミル……」

「笑つちやうよな……お前の為って言いながら自分の都合で巻き込んだ……」

ユミルは第二の人生は自分の為に生きると誓った。

クリスタを守る為に生きてきたが、結局は奪った力を奪われるのを恐れている腰抜けだった。

あの悪夢を味わった身としては、無垢の巨人には同情している。

もし、自分ではなく他の連中だったらもっとうまくやっていたのかもしれないと。

ヒストリアという少女に逢って一緒に居たいと思った実年齢70代後半の女であった。

「私を、私を助けてくれ！私は死にたくないだけなんだ！」

「言ったでしょ！私は貴女の味方だって！」

ヒストリアは、ただユミルを助けたかっただけだ。

ユミルと一緒に何でもできる。

そう、このまま壁内の人類を裏切ってユミルと一緒に行く事もできる。

だって、ヒストリアは正式にプロポーズを受けてないだけのユミルのお嫁さんなのだから。

「ユミル！このままだと調査兵団の先鋒と交戦するぞ!!」
「…つたく！客でもねえ癖に注文が多いな！」

ベルトルトの発言を受けてユミルは巨体のうなじに潜り込んで再び巨人を操作し始めた。

ヒストリアは自分の行動で意思決定をしてくれると分かった。
ならば、自分の道に進むだけである。

「ライナー！エレンを守ってくれ!!」

ベルトルトは縛り付けた紐を解いてエレンを鎧の巨人に預けるつもりだ。

ユミルが覚悟したならば、自分も覚悟しなければならぬと思った行動だった。

『ベルトルト?!まさかお前…!』

鎧の巨人は両手でエレンを優しく包み込むようにした。

そして両手を胸部に抑える様にして動かないように固定した。

ライナーはベルトルトが調査兵団と交戦すると察してしまっただが拒絶する事はできない。

「ユミル！ 僕も君を守るよ！ 仲間ならこっちも相応の覚悟しないといけないからね！」

「ベルトルト!?!」

「クリス…じゃなかったヒストリアは、ユミルのうなじを守ってあげてくれ」

ベルトルトは、内心では同期と戦うのを恐れていた。

ウォール・マリアを陥落させて大勢の人々を死なせた悪魔だが心まで堕ちたつもりは無い。

トロスト区の門を破壊する時にエレンたちを見てしまった時もそうだ。

その時、行動に躊躇ってしまい、壁上固定砲を破壊するしかできなかつた。

同期を殺さずに目標を達成できるなら迷わずそれを選択したかった。

「もう僕は大切な人が死ぬのを見るのは嫌なんだ！もう失ってたまるか!!」

自分が退避したせいでライナーもアニも判断ミスでマルセルを死なせた。

あの時、無力ながらも立ち向かって居ればマルセルは死なせずに済んだ！

過去には戻れないが未来は作る事ができる。

マルセルの力を継いだユミルを調査兵団に渡す気など毛頭なかった！

「くたばれ!!」

調査兵団第四分隊所属のラシヤドがユミルの巨人にアンカーを撃ち込んで舞い上がった！

狙うは、急所である巨人のうなじ！

「がっ!?!」

しかし彼は一太刀浴びせるところか逆に一太刀浴びせられてしまった。

兵士の後頭部に刃を振り下ろして殺害したベルトルトは速やかにアンカーを外した。

巨体に刺さったアンカーが外れると死体が地面に激突し、そのまま遠ざかっていく。

「まだまだ!!」

自分の意志で初めて人殺しをしたベルトルトは割り切った。

迷う事も無く鎧の巨人から飛び降りて騎兵隊の進路を妨害するように立ち塞がった

!

「よくもラシヤドを!!」

「ぶっ殺してやる!!」

「人類の敵が!!あの世で後悔しろ!!」

同僚を殺害された第四分隊の隊員たちは、鎧の巨人から逸れたベルトルトに向かった。

同僚を殺害された怒りが彼らに力を与えている様であった。

「人類の敵か…もう壁外で聴き慣れたよ…」

それを鼻で笑ったベルトルトは、本気で殺す覚悟で指を切って巨人化した。

疲れているせいか、両肩と頭部しかない超大型巨人を具現化するしかできなかったが充分だった。

接近していた調査兵4名を跡形も無く粉碎して、この世から存在自体を抹消する威力はあった！

「ぐぎゃあああああ!?!」

「超大型巨人だ!?!」

爆風で吹っ飛ばされて陣形を乱された調査兵団の先鋒は、これ以上の追撃はできなかった。

その隙に走行を止めていたラシャドの馬に飛び乗ったベルトルトはライナーの後を追った。

彼は、上半身のみを出現させたり、ピンポイントの爆発をするなど歴代の中でも天才だった。

惜しむらくは、『意志の弱さで本領を發揮できない』せいで宝の持ち腐れであった。

しかし、フローラとの特訓で弱点を克服したベルトルトは、一人前の戦士としても成長していた。

「古い方のフリントロック式の拳銃か…いつか持って帰りたいな！」

ベルトルトは馬のバックアップから拳銃を見つけた。

戦士時代にパーカッションロック式を触った事があるが、それと比べると精度と連発性に劣る。

しかし、飛び道具を発見すると弾数を確認し、生き生きとして銃口に弾を装填した。

銃マニアだった彼は博物館に展示されている銃すらも手に取るように扱える隠れた才能がある。

「逃がすな!!ぐほっ!？」

接近してきた駐屯兵の眉間を見事に撃ち抜いたベルトルトは、再度弾を装填した。

馬上で弾を装填して精度が低い銃でも正確に狙撃できるという点は、追手にとつて脅威となる。

射撃の才能で戦士になった彼からすれば、銃を手にとった時点で水を得た魚であった。

「ごがつ！」

「狙撃されている！一旦速度を落とせ!!」

「畜生が!!」

2人目が撃ち殺されたのを確認した追手は、馬の速度を落として距離を取る事しかできなかつた。

それを見届けたベルトルトは鎧の巨人に向かって全力で馬を走らせる。

「異常は無いか!？」

「無いけど…殺してきたの?」

「仕方が無いんだ!ユミルを守るなら僕は手を汚す!君は盾になるから必死に守ってくれ」

ヒストリアは、同期のベルトルトが兵士を殺すのを目撃してしまった。

敵対しているとは知っていたが生身で殺人しているのを見て現実だと思った。大量殺人者の彼から話しかけられても罵倒する気力が無いほど不思議な感じだった。

「おいベルトルト！てめえ！オレたちに挨拶も無しに帰る気かよ！」

「なあ嘘だろう！俺たちを騙してたのか!?そんなのひでえよ！」

「ジャンにコニーか」

顔馴染みの兵士を見かけてベルトルトは一瞬だけ眉を顰めた。

3年間、1つの屋根で過ごしてきた同期。

それは確かに大切な思い出であり、宝物であった。

「お前の寝相の悪さは、芸術的だったな！いつからかお前の生み出す作品を楽しみにしてた」

「そうだぜ！みんなが天気を占ったり、フローラがどんな事故で負傷するか予想したもんだ！」

ジャンの言う通り、彼はとても寝相が悪かった。

それは男部屋に居た同期全員が知っていた。

あまりにも芸術的な作品なので、いつからかそれで占う事になるほど寝相が悪かった。

「…なあ、あんな事した加害者がよくもまあ、あんなにぐっすり眠れたな？」

「全部嘘だったのか!? 皆でどうすれば生き残るのか、おっさんまで生きて酒を飲む約束も！」

ベルトルトは、ライナーと同じように自分が犯した罪に耐えきれなかった。

だから潜入調査以上に兵士を演じて訓練兵時代を過ごしてきた。

「お前ら、今まで何を考えてきたんだ!？」

純粋なコニーの問いが彼の心を傷付ける鋭利な刃物となった。

誰もこんな事など望んでなかったし、殺さずに済んだらそれで良かった。

でも、世界はそれを許さない! 残酷な世界がそれを許してくれるわけがなかった!

ライナーも思う事があったのか速度を落としたおかげで後続のミカサが追い付く。

「ベルトルト！ エレンを返して！」

「…返すもんか！ これ以上、僕から大切な物を奪わせるもんか！」

「じゃあ、死んで！ 大量殺人者を殺して私はエレンを取り戻す！」

ミカサは今度こそ、ベルトルトの首を刎ねてエレンを奪還する。

相手は人を喰わないだけで他は巨人と同じだ。

躊躇ったら殺されるなら躊躇なく殺すしかない！

「誰が！ 人なんかを！ 殺したいと思うんだ!!」

あまりにも罵倒されたベルトルトは本音を暴露した。

今まで抑えていた感情が解き放たれる様に発言するしかできなかつた。

「殺されて当然の事をした！ ここに来る前から汚れ仕事をしてきた！」

「必死にそれを僕らは耐えてきたんだけど、罪を受けきれなかつた！」

「兵士を演じる時だけ少し気が楽だった！ あの時の発言は嘘じゃない！」

「確かに嘘はついたけど、本当に君らは仲間だと思ってるし、今でも戦いたくないんだ！」

ベルトルトは、壁内で暮らしていくうちに同期に愛着が湧いた。

さきほど殺してきた兵士たちは面識が無かったから殺せた。

しかし、同期を殺すと成れば話は別である。

ここにいる彼らは、戦士候補生を殺害すると同意義くらいの存在だった。

たった3年間、その短期間でも培った友情と思い出を否定する事などできるわけがなかった。

「僕らに謝る資格などあるわけがない……でも道は変える事はできた」

課せられた使命と楽園のような環境、そして今までやってきた過ちが重く押し掛かってきた。

アニもライナーもベルトルトも！全員が悩み苦しみ、同僚だった仲も信じられなくなつた。

そんな時だった。

栗色の髪の少女が手を差し伸べてくれたのは…。

「僕らは変わる事ができた。消えそうだった僕らを見つけてくれた少女が居た」
「でも僕らは彼女を裏切つたんだ！もう僕らを見つけてくれる人など居ない」

ユミルは、ベルトルトの話を聴いて心当たりがあつた。

女神として演じていた頃に悩む信者の相談に乗つてあげた経験から分かつていた。

ライナーもベルトルトも一時期、悩みを抱えて成績が低迷した事があつた。

しかし、ある存在のおかげで立ち直つて精神的に成長して彼らは成績上位で卒業した。

『あいつ…もつとうまくやれば、こいつらは壁内人類に寝返つたじゃないかな』

相談に乗つてアクシデントを起こしながら立ち直るきつかけを作つた少女。

いつ死んでも可笑しくないのに不思議と一緒に居るだけで元気になる少女。

いつからかユミルも彼女だけは心を許して、一緒にクリスタの自殺衝動を止めようとした少女。

「最終通告！ベルトルト！エレンを返して！」

「駄目だ。死んでもできない。僕らに残されたのは、その使命だけだからね！」

絶対に分かち合えないのが全員が理解している。

それでも必ず希望があると模索したが、結局、変わる事が無く時間だけが過ぎていく。

「軍人である以上、君達もいつか分かるさ。誰かがやらなきゃいけないんだ！」

「誰かが…自分の手を！血で！人の血で手を汚さなければならぬんだ！」

「分かってたまるか！そんな事!!」

ベルトルトの発言をコニーは即座に否定した。

自分が誰かに偽って、その手を血で汚すなどあつてはならないし、するつもりはない

！

ただ外道に堕ちたかつての同期の考えを否定するしかできなかった。

「お前ら！そこから離れろ！」

交渉が決裂した104期調査兵たちは、一斉に鎧の巨人に飛び掛かるつもりだった。だが、ハンネス隊長の一言で我に返った。

「うっ!!」

「おいおい!!」

「マジかよ!!」

全員が鎧の巨人から離れていく。

交戦を恐れてエレンを見捨てたわけではない。

「やりやがった!!エルヴィンが巨人の集団を引き連れてきやがった!!」

ハンネスは、ただ叫ぶしかできなかった。

シガンシナ区で嫌ほど味わった巨人の群れが真正面から突っ込んできたからだ。

小回りが利く馬とは違って鎧の巨人はその中を突き進んでいくしかできなかった。

「総員散開!! 巨人から距離を取れ!!」

エルヴィンは巨人の群れを鎧の巨人にぶつけた。

ハンジ分隊長のアドバイスが正しければ奴らは鎧の巨人を襲撃するはずだ。

その為にフローラを酷使して奇行種を討伐したのだ。

ここで逃げられるくらいなら巨人の餌にするつもりだった。

「何だこりゃ!?! 地獄か!?!」

「参ったな…オレは天国に行くつもりだったんだが」

「マジかよ。俺も付いて行っていい?」

「勘弁してくれ」

動けなくなった鎧の巨人に群がる巨人の集団を見たジャンは怖気づきコニーと軽口を叩き合う。

誰もが思った。

あそこにいるエレンを奪還しないとイケないのかと。

「こつちを見ないでよ!!」

一斉に視線がフローラに向けられて、彼女は抗議するしかできなかった。さすがにあそこの大嵐に突っ込むのは、頭進撃でも躊躇うしかなかった。

「総員突撃!!」

「えっ?」

「はあっ!?!」

「またまたご冗談を…」

エルヴィン団長の号令に全員が耳を疑う。

30体以上の巨人の群れの中に突っ込めって言うのだ。

誰もが即刻否定して逃亡しようとした。

「人類の命運は今…この瞬間に決定する!! エレン無くして人類が地上で存続する未来など永遠に訪れない!! エレンを奪還して即帰還するぞ!! 心臓を捧げよ!!」

覚悟を決めたエルヴィンは、馬を巨人の群れに向かって走らせた!!

「行くわよ！フローラ！」

「もうどうにもなれー」

続いてミカサとそれに引つ張られる形でフローラも馬を走らせた。

そして団長の号令を受けて調査兵団の兵士も突撃した。

更に駐屯兵も本隊から離れない様に必死に馬を走らせる。

「「「おおおおおおお!!」」」

人間は絶望的な状況になると何かに酔っ払っていないとやってられない。

壁内に侵入した戦士組が兵士を演じて精神を保ったように。

調査兵団の兵士も大声で叫んで全員の意志を一つにして特攻するしかできなかった。

人間は一人では生きていけないが、誰かが居れば何かに酔えて生きる願望が湧いてくる。

全員が一つの弾丸となってエレンを奪還して壁内に帰還する為に突撃した。

「馬鹿な奴らだよ」

憲兵団のアルトマンは、馬鹿な事をやっている奴らを見て見下した。自殺しに特攻する感性など彼には到底理解できるわけがなかった。

「おい！」

「ん？」

同僚から叫ばれて返答しようとした瞬間、視界が真っ暗になった。

後方から近づいて来た巨人に頭を砕かれたアルトマンは特攻より無様な死に様で終わった。

「ぎゃあああああ！！」

慌てて逃げ出した憲兵も巨人に掴まって踊り食いされて腹に収まった。

皮肉にも忠告した憲兵の方が苦痛を長く味わって死ねたのは7時間後だった。

『やりやがったな!』

鎧の巨人は、無垢の巨人に群がれて動けなくなっていた。

両手にはエレンを保護しており、ここからパンチなどできるわけがなかった。

得意のタックルも集団で抑えつけられると分かっている以上、できるはずもない。

蒸気を噴出すればベルトルトや可愛いクリスタが負傷する危険性があって使用できない。

「邪魔をするな!僕たちは故郷に帰るんだ!みんなと一緒に!!」

覚醒したベルトルトが2体の巨人を討伐したが、まだ30体ほどの巨人が居る。

ユミルも巨人のうなじを齧るなり引っ掻くなりしているが多勢に無勢であった。

「きゃあああああ!!」

ユミルにしがみ付いているヒストリアはいっ捕食されてもおかしくなかった。だが彼女の悲鳴はライナーに力を与えた。

『うおおおおおおお!!』

土壇場で力を発揮できる事に定評あるライナー!

巨人の口の中にエレンを収納して群がった巨人を殴り倒した!!

「エレンはどっ!?!」

ミカサは突撃してきたのは良いが、肝心のエレンが見つからなかった。

兵士は巨人の群れに突撃して次々と捕まって捕食されている。

それでもエレンさえ取り返せば戦線離脱できる。

その彼が奪還できなければ全員が無駄死にで終わってしまう。

「鎧の巨人の口内にいるわ!!」

フローラの指摘でミカサはどうするか迷った。

そのまま突撃しても口をこじ開けるなんてできるわけがない。

顎の筋肉は装甲で覆われているようなので刃が通じないからどうしようもない。

「団長！危ないいいいいい！」

「フローラあああああ!?!」

隣に居たエルヴィン団長を捕食しようとした巨人の首を刎ねたフローラ。

しかし、彼女はそのせいで落馬して地面に叩きつけられた！

それでもミカサは前に進むしかできなかった。

「進め!!エレンは鎧の巨人の口内だ!!なんとしてもこじ開ける!!」

エルヴィンの号令を受けて全員が巨人に突貫する！

鎧の巨人に群がっていた巨人の半数が兵士の集団に目を付けて突撃していった。

「ぐぎやああ!？」

「あああつ!？」

巨人に叩き潰されて、噛み殺されて、踏んづけられて、押し潰されて次々に戦死していく兵士。

鎧の巨人の装甲すら噛み砕いて、筋肉を齧り始めた無垢の巨人と地獄の光景は続く。

『装甲が保てねえ……このままじゃ捕食される!!』

鎧の巨人の装甲が案外脆い。

常時硬質化した肌で守られているが所詮、肌なので表皮が砕かれればただの皮膚ではない。

誰が言ったか、鎧の巨人は、薄氷で動きが鈍い硬いだけの巨人という評価が合っていた。

『ぐおおおおつ!?!』

無垢の巨人に顎を噛まれて砕かれようとしていた。

生半可な榴弾では砕けない装甲も巨人に噛まれ続ければ破壊される。

更に巨人化できるのも限界が近づいており、このままでは……じり貧で負けてしまう。

『欲しければくれてやるよ!!』

鎧の巨人の特性として、顎や顔の装甲は文字通り鎧である。

なので昆虫が脱皮するように装甲を殻のように捨てる事ができる。

顎の装甲が外れたせいで滑って転んだ巨人を蹴っ飛ばす事が出来た。

『うおっ!? エレン、てめえ死にたいのか!?!』

誤算だったのは、どさくさに紛れてエレンが拘束から脱出した事か。

すぐさまベルトルトが保護したものの落下して逃げようと足掻いている。

「エレン大人しくしろ!!」

「んんん——んんんんっ!!」

猿轡を噛ませたエレンは喋る事はできなかつたが、抵抗する事はできた。

「エレン!! うっ!! ああっ!!」

ミカサは大事な人を助ける為に突撃したが、それが運の尽きだった。死角に居た巨人に胴体を掴まれて人外の力によって肋骨をやられた。

「ミカサに手を出すんじゃないよ!!」

激怒したジャンは巨人の眼球を攻撃してミカサを助けることはできた。

調査兵団の先遣班は、次々と鎧の巨人に飛び移ってベルトルトと交戦しようとする。

「抵抗するな」

「んぐっ!?!」

ベルトルトはエレンの額を巨人の装甲に叩きつけて動きを鈍らせた。

気絶した彼の首に刃を突き付けて抱き寄せながら兵士と交戦するしかなかった。

「この…ぎやああああああ!!」

ユミルはベルトルトに向かった兵士を次々と叩き落として巨人の餌にした。

そのユミルに掴み掛かって捕食しようとした巨人は見事な動きをする女に注目する。

「うあああ!!」

ヒストリアは、その巨人のうなじを削いだ。

か弱いなど女神など弱い印象だった彼女が初めて兵士として巨人を討伐した瞬間だった。

「やった。初めて巨人を倒した…ユミル」

「クリスタ!!」

「あっ」

着地したヒストリアは馬で走行していたコニーに発見されて腕を掴まれた。彼は無理やり引つ張って自身の前方に座らせた彼女からは良い匂いがした。

「何やってんだよクリスタ！」

「私はいいの！ほっといて！」

「はあっ!？」

クリスタの発言に困惑するしかないコニー。

拉致されたと思ったら誘拐犯に好意的な感情を抱いていたから当然の反応であった。

「ユミルが私を連れて行かないと殺されるって言ったの！だから邪魔しないで！」

「何言ってるんだお前？」

「降ろしてよ！」

「事情は分かんねえがお前を死に物狂いで守ろうとしていたブスがそう言ったのか？」

「ブスじゃない！」

「問題はそこじゃねえよ!!」

コニーは馬鹿だからクリスタの発言が理解できなかった。

ユミルが殺されるからクリスタと一緒に同行しなければならない。

じゃあ、ユミルがクリスタと一緒に壁内に帰れば殺されないとしか思えなかった。

ハンジ分隊長もエルヴェン団長も彼女に好意的なのだから心配する必要が無いと思えた。

「とりあえず落ち着け。ここに2人で居たら殺されるのは馬鹿でも分かるぜ」

「でも…」

「ユミルが本気を出す時なんてお前を助ける時だけだ。彼女を思うなら離脱するぞ」

「でもユミルが!!」

「お前が居ればユミルもこっちに来る。少しは考えてみる」

現にユミルがクリスタを乗せたコニーを追いかけていた。

会話内容もしっかり聴いており、どうするべきか迷っている。

『アルミンか!』

乱戦の隙間を抜けて駆け付けた来たアルミンは、ベルトルトの前に立ち塞がった。このまま斬り掛かって蹴落としてもよかったが、大切な同期なので手が出せなかった。

「ベルトルト!!」

「君と話をする気はないよ！死にたくないなら早く逃げてくれ」

アルミンの呼びかけは、一蹴されて話し合いが成り立たなくなった。

それでも必死にどうするべきか考えてベルトルトの人間関係を思い出して彼は笑みを浮かべた。

それを見たベルトルトは眉を顰めた。

そこには『ゲスミン』としか言いようがない暗黒の笑みを浮かべた悪魔が居たからだ。悪魔は口を開いて呪いを告げる。

「…良いの？仲間を置き去りにして帰るなんて…」

その一言でライナーもベルトルトも同志であるアニの事を思い出した。

そもそも、ここでエレンを奪還して帰るのは予定になかった。

そのせいでアニを壁内に置いていくしかなかった彼らには、大きく心に響いた。

「アニを置いていくの？アニなら極北の「ユトピア区」の地下深くで拷問を受けてるよ」

アルミンの一言が彼女の好意を抱いていたベルトルトの心に深く突き刺さった。

この始祖奪還作戦が終わったら彼はアニに告白するつもりだった。

そのアニが拷問を受けていると聞いて動揺してしまった。

「彼女の悲鳴から身体の怪我は直せても痛みを消す事ができないのが分かったんだ。死なない様に細心の注意が払われてね。今、この瞬間にもアニの身体には休む暇もなく拷問を受けてー」

「もういいよアルミン」

「えっ!？」

ベルトルトは死角から飛び込んできたエルヴィン団長の斬撃を刃で受け流した！

あまりにも出来過ぎている話を聴いて、すぐに自分を狙っている奴が居ると分かっていた。

「なに!?!」

「やっぱり囷か!!」

「ぐおっ!」

不意打ちに失敗して離脱したエルヴィン団長にベルトルトは追撃して斬り掛かった!

彼を逃せば、いずれ人質のエレンを奪還される危険性があつたからだ。

一方、エルヴィンはエレンに気を取られた影響で敵の間合いに飛び込んでしまう形となった。

やむを得ず胴体への斬撃を受け流す為になぎと右腕と引き換えにして逃走に成功する。

「団長!?!」

フローラとの交流で精神的に成長していたベルトルトはそんな戯言で躊躇う事は無かった。

そしてゆっくりと動けなくなったアルミンの方に向いた。

「僕が泣きごとを言つて許しを請うと思つたか？アニの話で取り乱すと思つたか？」

「ベルトルト…いつもの君じゃないよ……」

「僕はようやく決心がついたよ！君は大切な仲間だけどここでちゃんと殺そうと思う
！」

いつも他人に受け流されて意志が弱いというイメージしかないベルトルト。

そんな彼が団長の腕を斬り落としたの見て逆にショックで動けなくなつてしまったアルミン。

思考を停止したアルミンは、その裁きの刃を受け入れるしかできなかった。

「同志を…返せ!!」

「ぐあっ!!」

そのピンチを救ったのは、同期のミーナ・カロライナだった。

トロスト区の門で肉の誓いをやった7人は同志となり強固な絆で結ばれた。

彼女は、その誓いの同志であるエレンを助ける為にベルトルトの脇腹に斬り掛かった

！

ミーナが弱いイメージしか無かった彼は、その姿を見かけても警戒をしなかった。

その結果が、不意打ちでミーナにエレンを奪われる失態を犯した。

「おのれ…悪魔の末裔が…」

脇腹から内臓が出ない様に右手で抑えて、左手で鎧の装甲を掴むしかできないベルトルト。

彼は、悪態について大切なエレンが奪取される様子を傍観する事しかできなかった。

「まさかミーナが助けるなんて…」

「誉めるなら後にして」

「とりあえずお礼を言うわ。ありがとうミーナ」

「ふふん！もつと褒めていいよ！」

ミカサもアルミンもミーナがエレンを助けるとは思っていなかった。誰もが予想できなかったからこそ、奇襲が成功したとも言えた。優秀な2人に褒められたミーナは嬉しそうにドヤア顔をした。

「エレンを奪還したぞ!!総員退避!!」

調査兵の1人がそう叫ぶと、その場にいた全員がウォール・ローゼに逃走した。目的はエレン奪還であつて、巨人と交戦するつもりは一切なかった。

目標を達成した以上、長居は無用とばかりに鎧の巨人に背を向けて逃走した。

『エレンが奪われて!クリスタも奪われた!これじゃあユミルも逃げちまう!!』

ライナーは自分たちが不利になったのを理解した。

エレンを失ったのもあるがクリスタも奪取されたのに気付いたからだ。

ユミルはクリスタと一緒に居るのを条件に裏切りに同意した。

つまり、クリスタが居ない自分たちにユミルは味方をしないと瞬時に理解してしまっ

た。

「ううっ！」

「エレン!!」

「ミカサ…?」

何度も気絶させられたヒロインのエレンは目覚めた。

彼の為に全員が動いており、ある意味誰からも愛された真ヒロインと言えた。

鼻血を垂らしていた情けない姿のエレンであったがミカサは一緒に居るだけで良かった。

大切な家族を取り戻した彼女は、絶対にエレンを放さないつもりだ。

「一体、何が…」

「喋らないで！エレンを助けたから壁に帰るの」

「……そうか、また迷惑をかけちゃったな」

エレンは寝ぼけながらも自分の為にまた大勢の人が死んだのを理解した。

情けない自分の為に優秀な人材が死んでいくのに耐えきれなかった。特別な力があると持て囃されて、実際は何もできない少年だという事を理解していた。

「すまねえ…みんな…オレは…」

「避けるミカサああああ!!」

ミカサは打ちひしがれるエレンを見てしまい、気を取られて判断が遅れた。

誰かの声を聴いて馬の手綱を握ろうとしたが遅かった。

近くに飛んできた巨人の衝撃で2人は落馬した。

「ライナー…あの野郎! 巨人を投げてきやがった!!」

呼びかけたジャンは、助けに行こうとしたがその進路上に巨人が立ち塞がる。

鎧の巨人は、エレンを逃がすくらいなら巨人の餌にするつもりだった。

欲しいのは、「巨人の力」であってエレンそのものではなかったからだ。

「今行くぞエレン!!」

「ハンネス隊長!独断行動は…クソ!!」

ハンネスは3人組のピンチを感じ取って独断で馬を走らせる。

副長のファイルは制止しようと呼びかける為に気を取られてしまった。

そのせいで投げられた巨人に分断された。

「エレン!ミカサ!?!…なんでだよ!エレンは大切な存在じゃなかったのか!?!」

アルミンの誤算は、『巨人の力は他者に引き継がれる』の知らなかった事である。

エレンという人材が大切だから殺せはしないと、心のどこかで高を括っていた。

そのせいで、ミカサと離れてしまって援護に向かえなくなった。

「アルミン!助けてくれ!オレー人じゃ勝てん!!」

「分かった!!」

平原では立体機動に移れない。

得意の立体機動ができないジャンは、アルミンに助力を求めるしかできなかった。アルミンは目の前の仲間を見捨てられずに加勢した。

「うぐっ!!」

ミカサは立ち上がったが巨人に肋骨をやられて動けなかった。成績上位5位のうち、唯一人間で主席になったミカサもこれでは戦えなかった。

「エレエ…ン…ううっ!」

それでも気力を振り絞って上半身を起こした彼女の眼前に映ったのは衝撃的な光景だった。

エレンやミカサにとって因縁の巨人であり、5年前までの生活を終わらせた元凶がそこに居る。

「(ト)で…(ト)いつ!」

「なんで…あいつが!」

ミカサもエレンも思考を停止してしまった。

そこに居たのは、金髪で口角を釣り上げているエレンの母親を喰った15m級の巨人だった。

自分たちの人生を狂わせた仇が、今、最悪な状況で立ち塞がった。

『よし、こいつで全部だ！あとはエレンを奪還するだけだ！』

ライナーは近くに居た巨人を片っ端から投げた。

エレンを逃すくらいなら喰われてしまってもいいという逆転の発想。

それが功を奏して調査兵団は大混乱に陥った。

幸いにもエレンが逃げた場所は確認していたのでそこに向かって走るだけで良かった。

「お久しぶりね鎧の巨人！」

しかし、彼は動く事ができなかった。

かつて、自分の親友であり共に目標を称え合った仲の女に釘付けになった。

「ねえ！素晴らしい舞台じゃない？手を汚してきた…わたくしたちにとつて最高の舞台よー！」

フローラ・エリクシア。

マリアの扉にタックルした際に発生した瓦礫で彼女の両親は潰されて死んだ。

そのせいで記憶喪失になって鎧の巨人に復讐を誓った少女。

『お前…何をしてるんだ!？』

その少女は、巨人を3桁討伐しても、なお傷が癒えることは無かった。

鎧の巨人を討伐する為だけに生きて来た悪魔は、ようやく最高の場所で戦える事に感謝した。

阿鼻叫喚の地獄の環境でも彼女からすれば、立派な鎧の巨人の墓標にしか見えなかつ

た。

「ねえ！私はずっと貴方の相手をしたくて今まで練習してきたの！」

フローラの近くには討伐された巨人の死骸から蒸気を噴き出して黒ずんでいた。

それは舞台のスモークの様な物に感じられた。

この惨状を舞踏会と表現した彼女は既に正気では無かった。

もはや人の感性を捨てて悪魔としての感情を剥き出しにしていた。

しかし、ライナーが警戒したのは、フローラだけでなくその背後に居た存在だった。

『ホント、お前はトラブルの渦中に居るな!!そんなに地獄が好きか!』

フローラの後を追ってきた巨人10体が涎を垂らして向かって来ていた。

だが、彼女は動揺するどころか笑っていた。

1体でも脅威である巨人でも彼女からすれば、ただの観客でしかなかった。

「さあ、鎧の巨人！わたくしと踊ってくれない？」

フローラはわざわざ巨人を引き連れて鎧の巨人と向き合った。

それは自身の迷いを断つと同意義でもあり、自分が死んでも巨人に喰わせる策でもあった。

敵の敵は味方理論で、無垢の巨人すら利用する強かな女である。

「どちらか死ぬまで！最高のダンスを踊りましょうよ！ライナー・ブラウン!!」

フローラは最高の舞台を用意してくれた運命に感謝した。

自分以外の邪魔者は存在せず、ただ食べちやうほどの熱狂なファンが10人居るだけである。

『ああ、ようやくたどり着いたわ!』

これで鎧の巨人を存分に殺せると感じたフローラは絶頂した。

三大欲求すら凌駕する興奮が彼女の心を満たした。

あまりにも不気味過ぎて鎧の巨人は、ただ彼女の会話を黙って聴くしかできなかった

た。

「さあ、始めましょうか!!」

フローラは駆け出した!

全てのしがらみにケリをつける為に!

【地獄】という名の舞踏会で、鎧の巨人と舞う為に! 全ての因縁にケリをつける為に!
今まで培った技能と経験と知識と怒りの集大成を鎧の巨人に魅せ付ける為に!!

『いいぜ! 乗ってやるよ!! お前が死ぬ時の舞を! 俺に見せてみる!!』

鎧の巨人は、鎧の巨人が生み出した悪魔と交戦した!

酸酷な世界に魅入られた2人の因縁の連鎖は、まだ続いていく。

78話 因縁

「さあ、鎧の巨人！わたくしと踊ってくれない？」

フローラが鎧の巨人に向かって発言している時、ベルトルトは拳銃に弾を装填していた。

いつも通り空気扱いだったが奇襲するには最適である。

「さあ、始めましょうか!!」

そして双剣を構えたフローラが走り出した瞬間、ベルトルトは発砲した。

ところが、放たれた弾丸は刃に当たり金属音が響いた。

『外れた?!…違う?!弾かれた?!』

負の感情が読めるフローラに奇襲など通用しなかった。

ベルトルトの狙いが自分の顔だと分かったのでわざと無視していた。そして駆け出した瞬間、顔を刃でガードして彼の元に切り込みにかかる。

『2人で踊ろうとか言ってた癖に最初から僕が狙いだっただけ!!』

ベルトルトは、銃を捨てて操作装置に鞘にある刃を挿入してロックさせて引き抜いた。

そしてフローラが突き出した刃を受け流して逸らす!

胴体をぶった斬る為に薙ぎ払いをするとフローラはしゃがんで双剣を突き上げた!

「危なっ!」

ベルトルトは、手首を捻って全身の体重をかけて双剣を叩きつけた!

双方とも全てが必殺の一撃、訓練兵時代とは違って手加減無しの殺し合い。

巨人の肉を削ぐためにしなやかに唸る刃は、刃を受け止めるほど大きく曲がった。

「酷いじゃないか…僕たちは仲間だったじゃないか」

「だったからでしょ？今は違う…でしょ!!」

彼女は刃を滑らせ護拳に見えるワイヤーを巻き取るレバーから伸びていたケーブルを切断した。

地味な嫌がらせだが、巨人が迫っている時にワイヤーを巻き取れなくする外道な行為だった。

「うっ!？」

ベルトルトは刃を振り払って追撃される可能性があるにも関わらず後退した。フローラも追撃せずにそのままの位置で双剣を構えたまま待機する。

彼女の背後から飛び掛かってくる11m級の巨人。

それすら想定したように巨体の右肩にアンカーを撃ち込んで舞い上がるフローラ。

「ちょっと待ってよ!!」

「待ったなし!!」

ライリーという暴れ馬を乗る為に時折立体機動で乗馬を試みていたフローラ。巨人に飛び乗ってベルトルトにけしかけるなど造作も無かった。

『ベルトルト!!』

鎧の巨人は、相棒を狙った巨人の顔面を強打し殴り倒した！

鉄塊より硬い物体が高速で激突し、頭部がうなじに肉や脊髄を巻き添えにして転げ落ちた。

蒸気を噴き出す巨人を見てライナーは相棒を救えて安堵する。

だが、何かを忘れているのに気付いていない。

「隙あり!!」

蒸気の中から飛び出してきたフローラは、鎧の巨人の眼球に刃を突き刺してロックを解除。

言葉に反応した彼が動いた瞬間、落下し後転して地面に左アンカーを突き刺して巻き取った！

「ううっ!？」

追撃をしようとしたら別の巨人が伸びたワイヤーを掴もうとしたのをフローラは発見した。

やむを得ず右アンカーを巨人の眼球に打ち込んで気を逸らして残りのアンカーを外した。

同時にワイヤーを巻き取ると同時に“声”を聴いて敵の位置を把握。
巨人のうなじを削いで横たわった死骸の上に待機し蒸気で身を隠した。

『来たわね』

右アンカーを打ち込んで飛び上がってきたベルトルトはミスを犯す。

彼女はワイヤーを掴むと高熱で手が焼けるのを我慢して死骸から飛び降りた。

彼は狙撃する直前にワイヤーを引っ張られたせいでバランスを崩した。

おかげで手元が狂ってしまい、フローラの頬を弾丸が掠めるだけで終わった。

フローラはベルトルトの顔面に唾液を吹き付けて逆手持ちしたグリップの底部で腹を突いた。

痛みで怯んだ隙に足を絡めてバランスを崩させ逆手持ちの峰で刃を振り上げさせて反らした。

そのまま振り戻して片刃で胴体を斬り付けるつもりだったが右のガスボンベに激突して弾かれた。

更に一撃を加えようとしたがフローラは諦めてそのまま後退りして刃を構え直す。

『これでベルトルトは立体機動ができないわ』

彼の左手にある護拳に見えるレバーから伸びるケーブルを切断し、ワイヤーを巻き取れなくした。

更にさきほど、右側のガスボンベを損傷させて使い物にならなくした。

これで立体機動ができなくなったので巨人の前では、彼は困にすらならないだろう。

落ちていた拳銃を回収したフローラは、ベルトルトの機動力と攻撃手段を削いで無力化させた。

『わたくしの狙いは鎧の巨人よ!!』

狙い自体は、鎧の巨人であるが覚醒したベルトルトを放置できなかつた為、徹底的に追い詰めた。

更に追撃しても良かつたが、同僚を爆死させたように巨人になる可能性があつた為、諦めた。

『一体、何が起こつた!?!』

ライナーは、覚醒している双方が発した殺陣に威圧され介入できなかつた。

腰巾着の相棒と、いつも事故で負傷していた女が殺意剥き出しで殺し合う光景は凄まじかつた。

一撃が全て必殺で、しなやかに唸る刃が夕日の光を反射させて人生の黄昏を表している様である。

ただ、実戦経験はフローラが上回っているせいで相棒が押されているのは分かつた。

『とりあえずあいつをぶっ飛ばす!!』

正直、2人の攻防に動体視力が追い付いていなかったが彼女が疲弊してると思って突撃した。

それがフローラの罠と知らずに。

『今行くぞ！ベルトルト!!ってお前?!』

フローラに向かって飛び出していった鎧の巨人を待っていたかのように無垢の巨人が飛びついた!

彼女がベルトルトから離れたのはフレンドリーファイアを恐れていたライナーを釣る為だった。

不意打ちされて身動きが取れない獲物を見逃す狩人などこの世には存在しない。

『なるほど装甲は再生しないのね!だったら!!』

フローラは向かって来た複数の巨人を足掛かりに鎧の巨人へと向かっていった。

刃どころか榴弾すら効かない装甲であるが、亀の甲羅と同じ外殻と気付いた。装甲が取れても一向に再生する気配を感じなかったのでそう思っただけだ。

『邪魔だ!!退け!!』

鎧の巨人は得意の対人格闘術で巨人を持ち上げてフローラに投げつける。

「ライナー……こつちを巨人を投げないでくれ！立体機動装置が使えないんだ!!」

ベルトルトはフローラに操作装置とガスポンペを破壊されて立体機動できなくなつた。

それだけでも壁外では詰んだのに巨人が近くに落下してきた。

基本的に巨人は近くに居る人間を優先的に襲うので…。

「うわあああああああつ!!」

ベルトルトが巨人に追いかけられるのは必然であつた。

徒歩で歩かれても全力疾走する人間より速いので捕食されるのは時間の問題である。

『しまった!!』

致命的なミスを失敗してから気付いた鎧の巨人は相棒を助けに走り出した。

「余所見をしないで!!」

わざわざ隙を見せた鎧の巨人の右膝の裏をフローラは削いだ。

装甲では覆われない弱点部位を削がれて巨人の動きが鈍くなった。

やむを得ず立ち止まったライナーは左ストレートでケリをつけるつもりだった。

空中で回避は諦めた彼女も負けじと回転斬りで攻撃を受け流すつもりであった。

『おいおい!鎧を斬りやがった!?!』

巨人に噛まれて脆くなっていった装甲は回転斬りで削がれてそのまま指を切断した。

その勢いで手首を削いで離脱した彼女は刃が欠けた双剣で振り下ろすと奇跡が起

こった。

鎧の巨人の装甲はブロックごとに分かれているが、隙間を狙われたせいも左手首が切断された。

巨人化の限界で弱体化したとはいえ鎧の巨人の左手を刃で斬り落とせた事にライナーは驚愕する。

「なんだ…もろいじゃないの…」

刃を節約していた彼女は、想像以上に装甲が脆いのに気付いた。

というより巨人化に限界があるので硬質化した肌がポロポロと剥がれ始めていた。そこからは彼女の独壇場であった。

『やべえ！限界だ…』

短時間で2度も巨人化してよく保った方であった。

もはやただの無垢の巨人レベルに落ちた巨体に3桁の巨人を討伐した女は荷が重すぎた。

右肘まで切断されて身動きが取れなくなり肉体の再生が追い付かない。

弱点であるうなじに硬質化を集中しているせいで、他が更に脆くなる悪循環に陥った。

『ああ、ようやく夢が…』

うなじに集まっていた結晶体ですら維持できず全て剥がれ落ちたのを確認した女。

それは、とても愉しそうに嗤う悪魔のような顔であった。

いぎ、巨人のうなじを削ごうとした時！

ベルトルトとライナーの脳内に電撃が迸る！

フローラも巨人の“声”が呻き声から怒りの“声”になって攻撃を躊躇った。

「何事?!」

フローラが連れて来た巨人たちは、凄まじい勢いでその場から去っていた。

厳密に言うとう、一カ所に巨人の集合が場所がありそこに向かった様である。

『はあ!?!この場に居る全ての巨人がたった1体の奇行種を襲ってるの!?!』

“声”に耳を傾けると巨人の集合場所には人の“声”がしたが、ひとまず大丈夫そうだった。

とにかく何かしらの原因で巨人が奇行種に狙う事になったとフローラは理解して行動に移る。

鎧の巨人も足を引き摺りながら、巨人が集う場所へ向かっていく。

エレンとミカサ、そして顔馴染みとなっている2名の兵士が居る場所に。

時を遡る事、5分前、フローラとベルトルトが本気で殺し合っている頃。

ミカサとエレンは家族の仇である巨人と遭遇した。

金髪で口角を上げる15m級の巨人は5年前と一切変わってなかった。

「エレン!!」

巨人の手が動いたのを見たミカサは身を挺してエレンに覆い被さるように庇った。肋骨がやられて立体機動ができない上に恐怖で最後の家族を守る事しかできなかった。

巨人は、何事も無かったように捕食しようと、彼女に掴み掛かろうとしていた。

「させるかよ!!」

「ハンネスさん!?!」

ハンネスは巨人の右手の親指を切断して手を刃で弾き飛ばした。

衝撃で右手が飛ばされて、巨人は掴み攻撃に失敗したがすぐに立ち直る。

「ははは!おいお前ら!ついに敵討ちができるぞ!」

ハンネスはその巨人を見て笑った。

5年前に立ち向かおうとして敵前逃亡する選択肢しか選ばせなかった存在がそこに居る。

恐怖に負けてエレンとミカサを抱えて逃げるしかできなかったのを彼はずっと後悔

していた。

それが今、母ちゃんを殺された2人の眼前におり、ここでカルラの仇を討てるというのだ。

「お前らの母ちゃんの仇を！俺がぶつ殺す所を！ちゃんと見とけよ!!」

かつてエレンにハンネスは、こう告げた。

「いざとなったら兵士として戦う」と！

その結果がエレンの母親を見殺しにする結果となつて、彼はそれを悔やまなかつた日はない。

努力し続けた結果、トロスト区の一部隊の隊長にまでなつたが心は決して晴れる事は無かつた。

目の前の巨人を討伐するまでハンネスは、あの時の無力な存在なままである。

「逢いたかつたぜ！今度は絶対逃げねえぞ!!」

彼は刃を振るう！勝利だけを信じて！仇を討てると信じて！

「ミカサ！オレの手を縛ってる紐を斬ってくれ！早く!!」

「え?…うん」

「オレが！オレがあいつをやらなきゃいけないんだ!!」

両手を縛られて芋虫状態であったがエレンは足掻いた。

ボロボロになっているミカサに代わってあいつを必ず討伐すると!

過去と決別する意味でも絶対にあいつを倒すまで逃げる気など無かった!

「エルヴィン団長!!」

「私は捨てて置け！それよりエレンを真っ先に保護して離脱させろ！」

右腕をベルトルトに斬り落とされたエルヴィンは、止血をしたものの意識がはつきりしなかった。

それでも必死に意識を保っていたら副官の声が聴こえてきたので彼にエレンの保護

を訴えた。

自分の夢は大事であったが、人類が敗北するくらいなら命など投げ捨てるつもりである。

「ぐぎゃあ?!」

しかし、彼の視界に映ったのは巨人に頭から捕食される副官の姿だった。

優秀でハンジに次ぐ知将であった存在を失ったせいか氣力を失ってエルヴィンは意識が途切れた。

「団長?!」

「衛生兵!!」

「巨人に喰われました!」

「畜生!なんとしても団長に生還してもらおうぞ!!」

熟練兵や指揮官を戦死か負傷して戦力外にされた結果、指揮系統が崩れた。

まず真っ先に経験が浅い憲兵が巨人に喰われた。

次に同僚を守ろうとする調査兵が喰われて、逃げ回った駐屯兵も喰われた。

「乱戦というより兵団が巨人に各個撃破されている状況であり、圧倒的に人類は不利だった。」

『エルヴイン団長のせいで地獄になったな！これじゃあライナー案は無理だ！』

ユミルはヒストリアを壁外に逃がそうとしたが、計画は失敗で終わった。

ライナーはあそこでなんか遊んでるし、兵団の兵士は次々に戦死していた。

自分一人の力で彼女を守り切る自身がないので決断が遅れていた。

「ねえユミル……自分が助かりたいって嘘だよな？」

ヒストリアは、コニーとの会話でユミルの矛盾点を発見した。

自分が王家の人間と証明する書物や証明書など無いのにそれを証明できるわけがない。

ましてや巨人をけしかけてきた勢力に口頭で告げても信用されるわけがない。

「私、また貴女に守られるの?」

ユミルはクリスタという少女を守るために色んな事をしてきた。

憲兵団に所属できるように成績を調整したり、いじめっ子を排除したりするのは知っていた。

ただ、守られるだけの…か弱い女だと思われるのは嫌であった。

だって、一人前の兵士になるまで必死に訓練してきた軍人であるからだ。

「ユミル! 私たちは人の為に生きるのは止めよう! これから私たちは2人の為に生きよう!」

ヒストリアの目の前に巨人が1体出現した。

今までだったら人を喰らう得体が知れない化け物としか見えなかった。

「何だか不思議なんだけど、貴女と居ればどんな世界でも怖くないや!」

かつてミーナは、巨人に喰われそうになった時、精神的に病んで壊れていた時期が

あった。

でも彼女は親友のおかげで立ち直ってエレン奪還の立役者となった。

ヒストリアもユミルと一緒に生きられるならどこでも生きていけるつもりだ。

「私たちの夢の邪魔を…するな!!」

ヒストリアは巨人にアンカーを刺して飛び込んで、双剣で巨人のうなじを削いだ。

巨人はユミルの方に気が取られていたとはいえ、2体目の巨人討伐に成功した。

その達成感で着地を考えるのを忘れていたが巨人化したユミルがやさしく受け止めた。

ユミルは、破滅願望者だった少女が成長したのを目撃して絶対に生還させると誓った。

「ジャン！援護するぜ!!」

「頼む!!」

「ありがとうコニー！」

ジャンとアルミンは、駆けつけて来たコニーの援軍に感謝した。

巨人1体は討伐したもののもう1体追加されて動けなくなってしまうからだ。

平原で立体機動すると必然的に落馬するので討伐直後は機動力が無くなる。

そこを突け狙われた形であったので馬に乗った彼の雄姿は頼もしかった。

「練習の成果を見せてやる!!」

第57回壁外調査で自分の無力さを知ったコニーはフローラと特訓した。

訓練兵時代から壁外で任務を行なって誰よりも巨人と交戦してきた技術はここで活きる。

彼女に生き残る技能を教えてもらって身体が覚えるまで訓練した成果はしっかりと発揮された。

「おおっ！これがうなじを削ぐって奴か」

うなじを削ぐ行為は、彼にとって点数を稼ぐ絶好の機会であったが実戦では不安が残っていた。

動く物体での訓練は無かったがフローラとの練習で一人前となった彼には迷いはない。

「コニーの身体能力自体はフローラを凌駕しているので巨人のうなじを容易く削ぐことができた。」

「よしやあ!!コニー!よくやってくれた!!」

「まだ来るよ!?!しかも2体!!」

だがさすがに騒動になり過ぎて巨人が次々と戦場に集結してきていた。

鎧の巨人が投げて来た巨人以外にも交戦しなければならず、兵士は次々と追い詰められた。

「ぐおおおおつ!?!」

一方、孤軍奮闘で巨人と交戦していたハンネスは巨人に胴体を掴まれた。

頭進撃やリヴァイ兵長のせいで感覚が麻痺しているが、巨人はチームで挑むものである。

もし喰われそうになってもカバーできるし、気を惹き付けて奇襲や援護ができる。副官のフィルなどと共闘が断たれた彼は、痛みで動けないミカサを庇って捕まってしまう

「な、なんでだよ…」

エレンは必死に巨人になろうとしたができなかった。

母親の仇が目の前に居るが、兵士としての訓練を修了したので巨人を討伐できるはずだった。

しかし装備はライナーに没収されて、唯一の能力である巨人化も何故かできなかった。

女型の巨人戦でもそうだったが、何故巨人化できないのか分からなかった。

そうこうしているうちに掴まれた恩人が巨人の口元に近づいていた。

激痛に耐えているミカサは泣きながらそれを黙って見る事しかできなかった。

『俺は終わるのか!?!カルラの仇討ちもできず、恩人に恩返しができないのか』

ハンネスは喰われそうになった時、エレンとミカサを見下ろす事しかできなかった。もし、あの時、こいつと交戦していれば、彼らを救うことはできなかった。

今、できる事といえば、自分が喰われている間にエレン達が逃走を成功する事を願うだけだ。

「させない!!」

突如、ハンネスは女性の声が聴こえたと思うと衝撃を感じて落下した。

一瞬戸惑ったが、脱出できたので立体機動で巨人の背後に回った。

「ミーナ!？」

「エレン、ミカサ! 私が乗ってきた馬で逃げて!!」

104期調査兵であり、エレンの同期だったミーナ・カロライナはハンネスを救出した。

それと同時に連れて来た馬で彼らを逃がすつもりだった。

「すまねえ！この恩は絶対に返すぞ！」

「今返して！巨人を討伐するの!!」

「もちろんだとも!!」

ハンネスもミーナもここが死に場所と覚悟していた。

巨人が怖かったが、それ以上にエレンを失うのを恐れて必死に交戦するしかなかった。

その隙にミカサは立ち上がろうとしたが肋骨をやられているせいで動けなかった。

「エレン聞いて…伝えたいことがあるの」

ミカサは絶望で泣いて打ちひしがれるエレンの顔を見て話しかけた。

近寄ってきた別の巨人を見て自分の死期を悟り、せめて大切な人に感謝したかった。

「私と一緒に居てくれてありがとう。私に生き方を教えてくれてありがとう」

エレンを安心させる為に笑顔で彼女は話しかけた。

母親が泣く子供を安心させてあやす時に見せる笑みを無意識にやっていた。すぐそこには、新手の巨人が来ている。

最後に想いを伝えて巨人に突撃して囷となってエレンを救うつもりだった。

「……私にマフラーを巻いてくれてありがとう……」

溢れる感情に耐え切れなくなったミカサは、涙を流してエレンに感謝した。

その泣き顔はエレンが見て来た中で一番可愛かった。

いつも無表情で訓練に励む彼女ではなく純粋な乙女としての感情が見えた。

追い詰められた極限の状態で唯一心が癒されるオアシスだった。

「そんなもん！何度も巻いてやる！これからもずっとオレは何度でも！」

エレンは誓った！

絶対に彼女を守って見せると！

「きゃああああ!!あがつ!!」

巨人のうなじを削ごうとしたミーナは失敗して軽く傷つけるしかできなかった。そして横に飛び出した瞬間、彼女は叩き落とされて地面に激突した。

「おい！嬢ちゃん!?ぐおっ?!」

命の恩人が地面に落下したのを見てハンネスは動揺した。

そのせいでワイヤを掴まれた彼も同じように地面に叩きつけられた。

「オイ!!お前ええええええ!!」

エレンは両手を握りしめて叫んだ!

それは巨人に自分の存在を気付かせてぶつ殺す為に!

巨人も声に反応して彼の方に向き合った。

「ああああああああああ!!!」

エレンは手を伸ばしてきた巨人に向かって右手で殴りつけた。

それは無力であり、せいぜい数秒だけ時間を稼ぐ程度の攻撃だった。

その時、偶然にもエレンの脳裏に父親の言葉が響いた。

「いいか、母さんの仇は…お前が討つんだ!!」というグリシヤの最後の言葉を!

その瞬間、奇跡が起きた。

「ああああああ!!」

エレンの怒りに感化されたように近くに居た巨人が、エレンの母親の仇に喰らい付いた。

それだけではなく、ほぼすべての巨人が彼の怒りを共感したように喰らい付いた。

彼の怒りはライナーやベルトルトに届いたように脳内で電撃が迸った。

フローラは、突然巨人が通常種から奇行種に切り替わったのを実感し衝撃を受ける。

「何が起こった!?!」

ハンネスは目の前の光景を信じる事ができなかつた。

巨人が巨人を喰らい、自分たちが倒す事が出来なかった巨人があっさりとやられた。本当は自分が喰われて死に際に夢でも見ているのではないかと錯覚するほどあり得ない光景。

「嬢ちゃん大丈夫か!？」

「痛い…痛いよ……」

肉の誓いのメンバーを守ろうとして覚醒したミーナは心が折れて泣いた。

フローラに教わった通り、巨人を討伐しようしたのに失敗して叩き落された。

また自分が巨人に喰われると思って絶望して泣くしかできなかった。

ハンネスは彼女を立たせて右腕を伸ばし肩をまわして一緒にそこから離れた。

「なんであいつが喰われているの…!？」

ミカサはエレンに抱っこされていたが未だに目の前の光景が信じられない。

彼らは、何故あの巨人が喰われているのか理解できなかった。

ただ言えるのは自分たちが助かったという事だけだ。

「帰るぞ！オレたちの居場所に！」

「……うん！」

エレンはミーナが連れて来た馬に向かったが、いざ迫り着いたら少しだけ脱力をした。

彼女は目印の為に馬のタテガミに2つのおさげが作ってあり、少しだけ同情したのだ。

『最悪だ……！よりによって【座標】が最悪の奴の手に渡っちまった！』

ベルトルトを乗せた鎧の巨人は、フローラの追撃を振り切ってエレンに向かって駆け出した！

さきほどの電撃を受けて本能で【座標】、つまり【始祖の巨人の力】を発動されたのを理解した。

『絶対に取り返さないと……！断言できる！エレン、お前だけはその力を所持しちやいけ

ねえ！』

エレンは巨人を全て駆逐しようとしている。

だが、現実を知られたら壁外の人類を駆逐する事になるだろう。

【座標】の力を発動されれば、【地鳴らし】で世界が滅びる！

だからこそ、なんとしても彼から【座標】を奪還する必要があった。

「来るんじゃないやねえ！てめえらぶつ殺すぞ!!」

馬に乗ろうとしたエレンは鎧の巨人を見かけて自分を狙っていると分かった。

どうする事もできなかったが、ただ怒りを彼らに向かってぶつけただけだ。

無意味な行為であるが、そのせいで再び彼の中に眠っていた力が発動した！

『うっつ!?!』

再び巨人化能力者に電撃が迸り、哀れな巨人を喰らい尽くした全ての巨人に影響を及ぼした。

エレンの怒りに扇動されたように巨人の大群が鎧の巨人に向かって走り出した！

『まずい!!このままだとベルトルトを守り切れねえ!!』

フローラとの戦闘で立体機動装置が事実上、使用できなくなったベルトルト。

そんな彼に巨人を20体もぶつけられたら勝ち目などない。

そして厄介な事に鎧の巨人で居るのに限界が近づいており目の前が真っ赤に染まっていた。

「今だ！鎧の巨人を囷にして全力で離脱しろ!!」

エルヴィン団長が気を失った為、代わりに第三分隊の副長のディルクが号令を下した

！

その命令を聞いて兵士一同が全力で戦線離脱を開始した！

それはユミルと一緒に居たクリスタも例外ではなかった。

『そうか、だからあいつらはエレンを必死に狙っていたのか』

ユミルは2度味わった感覚で、あれが始祖の巨人の力だと納得した。逆に言えば、この力さえあれば大切なクリスタ：ヒストリアを守る事ができる。

『それなら壁内にも未来がある』

どういう理屈か分かんが、エレンが巨人を操って外敵を排除する事ができるのは見ての通りだ。

巨人化能力者が複数居ても無垢の巨人がその3倍居れば勝ち目が無いほど戦力差がある。

壁外の技術がどれだけ発達したのか分からないが、暫くはヒストリアが破滅することは無い。

「ユミル!どうしたの!?!一緒に逃げようよ!!」

「おいブス!何やってんだ!?!逃げるぞ!」

「ユミルはブスじゃない!」

「んな事どうでもいいだろう!?!」

「どうでも良くない!!」

ユミルは悩んだ。

このまま帰ればきつと自分は歓迎されてヒストリアと一緒に居られるだろう。

だが、これはライナーたちの仲間から強奪した力。

その力を持ち逃げしたまま、無垢の少女として演じて暮らしていける事ができなかった。

「うわああああああ?」

ベルトルトの悲鳴を聴いてユミルは決断した!

奪った力があるべき場所に返すべきだと!

ヒストリアは自分が居なくても生きていけると実感して、彼女は泣く泣く離れる事にした!

「早く帰ろうよ! 私はもつとユミルの事を知りたい! ユミルの身体や過去を知りたいから!!」

「ゴエンア」

「え？」

ヒストリアは困惑した。

一緒に生きると誓ったお嫁さんが自分の告白を拒絶したような感じがしたから。そしてそれを裏付けるようにユミルは自分の元から去るように走り出した。

「コニー！ユミルをおいにかけて！！」

「駄目だ！本隊から逸れるわけにはいかねえ！！」

「やだやだ！！ユミル！！なんで！？どうして！？」

ヒストリアは泣き叫ぶしかできなかった。

あれだけ自分にプロポーズしてきた癖に、いざ受け入れようとすると彼女は去ってしまった。

お嫁さんの自分より、人類の敵対している鎧の巨人に向かって走ってしまった。

一緒に暮らそうと誓ったのに裏切られた彼女は、ここで逃げ出したのを一生後悔する事になる。

「エレン、ミカサ！無事か!?」

「ハンネスさん！オレは…オレは………！」

「何泣いて居るんだよ…お前はよく頑張ったさ！」

結局、何もできなかったエレンは泣きながら馬を走らせる事しかできなかった。

第57回壁外調査の時みたいに自分のせいで大勢の人が命を落とした。

何もできない自分のせいで、次々と間接的に人を殺したのに心痛めて自決しそうなほどだった。

「お前のおかげで俺らは助かったんだ！男ならその事に自信満々で胸を張れよ！」

「ハンネスさん…でも！」

「巨人の大群がああなったのは、エレン、お前の中に眠っている力だと思うぞ」

泣いているエレンを見て父親が励ますようにハンネスは声をかけた。

昔から負けず嫌いで決して屈しない性格だったが、それ以上に泣き虫だったのを知っている。

「とりあえず、母親の仇討ちはできたんだ！主役のお前がそんな面する必要はねえよ！」
「オレのせいでみんな、死んで…オレだけが…こんな役立たずの…」

「馬鹿野郎！死んでいった奴らの事を思うなら、それこそ前に進まなきゃならねえ！」

エレンは、気を失ったミーナを乗せて馬を走らせているハンネスの顔を見る。

5年前より老けているが、とつても頼りになる兵士の顔であった。

酔っ払っていた時しか見たことがなかったせいで、無能とか役立たずとか思っていた。

しかし、そこに居るのは、経験豊富で親密に相談に乗ってくれる兵士である。

「…ありがとうハンネスさん」

「よし、決まりだな！今夜はエレン奪還祝いをするぞ！ミカサは…大丈夫か？」

「大丈夫です…」

「ミカサの怪我が完治した頃にやった方が良いか…アルミンも誘つてな…」

ハンネスは、エレンとミカサとアルミンが揃っていないと意味が無いを思っている。

いつもの三人組が揃って居なければ、彼の日常は戻ってこないからだ。

ミカサを無視してしまった事に恥じた彼は、周囲を警戒するように馬を走らせた。

「ユミル！一緒に生きるって約束したのに！」

コニーの馬に乗せられたヒストリアはユミルを恨んだ！

ユミルの行動に理解できず、自分の元から離れた事に怒るしかできなかつた。

「なんでよ……」

フローラは、鎧の巨人に群がっている巨人の大群を見て呟いた。

両親の仇が今、ここで死のうとしている。

このまま放置していれば、きっとライナーの後を追ってベルトルトも死ぬだろう。

「鎧の巨人はわたくしの獲物よ!!」

フローラは、今まで鎧の巨人を討伐する為に生きて来た。
この手で！鎧の巨人を殺さなければ意味が無い！

「わたくしの邪魔を…しないで!!」

怯えながら近づいて来たライリーに騎乗した彼女は、巨人の大群に向かって突撃した！
別に鎧の巨人を助けるつもりなどなかった。

「こいつら、全員討伐してやるわ!!」

巨人を掃討した後は、鎧の巨人を討伐する気満々であった。
既に身体は限界だったが、怒りと気力で乗り越えた彼女は悪魔を通り越して鬼神になった。

目の前の巨人をこの世から一掃するまで止まることは無い！
フローラの戦いはまだ続いていく！

79話 撤退

『やべえ…もう巨人化できねえ…』

本日二度目の巨人化によって疲弊し我慢し続けたが限界が来たライナー。

トイレまで我慢できなかったら社会的に死ぬだけで済むが、ここでは文字通り死ぬ。気力で耐えてきたが、鎧の巨人の肉体を維持する事ができず脱出するしかできなかった。

『お願いだから気付くなよ…』

幸いにも無垢の巨人は、蒸気を噴き出した鎧の方に夢中になっているが目くらませ程度である。

その間にベルトルトと合流して速やかに戦線離脱しなければならない。

「た、助けてくれええええええ！」

「ベルトルト!？」

立体機動が不可能になったベルトルトは、巨人に掴まれて捕食される寸前だった。彼の悲鳴を聴いてライナーは駆けつけようとしたが時間も距離も足りなかった。

『何やってんだこいつら…』

そんな哀れで苦労人のベルトルトを救ったのはユミルであった。悲鳴を聴いて駆けつけて巨人の顔面を爪で抉って捕食を防いだ!

「あ、ありがとう…」

ベルトルトは彼女に感謝したが、更に状況は悪化していた。鎧の巨人が消滅して貪り喰っていた巨人の大群が近くに居る獲物を狙い始めたからだ。

兵士の死体から装備を拝借して着替えたいが、そんな暇など無かった。

「無事か!？」

「なんとか…」

「とにかく馬を拾って逃げるぞ!!」

ライナーは相棒の無事を確認して、すぐさま馬を呼ぶために指笛を鳴らした。

だが、兵団が連れて来たのは壁外用の馬ではないので、巨人を恐れて1頭も近寄って来なかった。

「ライナー、呼んだかしら？」

「呼んでねえよ!!」

代わりに来たのは、赤い体毛で凶暴な馬と、それすら凌駕する女だった何かだ。

双方とも普通ではなく、馬も化け物も身体中から血を垂らしており、地面を赤く染めていた。

巨人の血は蒸発して消滅するので、残るといふ事はそういう事だろう。

「フローラ…!」

「ああ、良かった。まだ生きていたのね…」

ライナー・ブラウンという男は、目の前の化け物と親友だった。

クリスタと仲良くなるためにアドバイスしてもらったし、アニへの伝言役にもなつてもらった。

相棒のベルトルトが自分の意志で行動できるようになったのも彼女のおかげである。それが、無垢の巨人の大群よりも質が悪い化け物として出現した。

「嬉しいわ！あんなに群がれていたら巨人に喰われたと思つたのに！」

「悪運だけは良いからな…」

「わたくしに殺される為に生き延びたなんて嬉しいわ！」

残酷な笑みを浮かべている悪魔を通り越した何か。

知性がある生物ならあるべき『恐怖』という感情を欠如した化け物。

立ちはだかる様に飛び出した巨人を討伐し、再び華麗に馬に乗って見せた狩人。

鎧の巨人の継承者であるライナーの死を求めて殺意剥き出しで突っ込んできた！

「死んでたまるか!!ぐほっ!!」

馬鹿正直に馬で突っ込んできた彼女を迎撃しようとしたライナー。

そんな彼の思惑は投擲された刃で碎かれた。

ライナーの喉元に彼女が護身用として持ち歩いていた短剣が突き刺さる!

「ぐおっ!!」

それでも堪えたライナーは煌めく刃を持っていた刃で受け止めきれなかった!

彼女の悪意が染まり切ったように刃は、彼の右肩を削ぎ落して腕を地面に落下させた。

「がはっ!!」

呼吸をするのが最優先のライナーは、左手で生暖かい柄を握り締めて喉奥に刺さった刃を抜いた。

仕返しに投擲しようとしたが、既に斬撃が眼前に迫っていた。

左手で握った短剣で構えて受け流そうとしたが、柔軟に曲がる刃には無意味で左肘を両断された。

「フローラ!!僕が相手だ!!」

さきほどまで相棒がやられていたのを傍観していたベルトルトはフローラを挑発した。

しかし、彼を相手にしたのは彼女ではなく巨人の群れだった。

「なんでだああああ!!」

ベルトルトは気付くことは無かったが、フローラは巨人を誘導していた。

さきほど10体の巨人をけしかけたのは、巨人化能力者を2人も同時に相手にできなかったからだ。

3桁の巨人を討伐してきた彼女は、既に巨人の動きを大体分かるようになっていた。

フローラは、ベルトルトに巨人が襲撃できるように調整しており、意外と冷静さが残っていた。

「うわあああああああ！」

『立体機動ができない兵士など囿にすらない』という教官の教訓にあるように無力だった。

彼の逃走劇を見届ける事もせず、彼女は、瀕死のライナーを殺そうとライリーを走らせた！

「おっほっほっほっ！どこに逃げる気？」

「畜生が!!」

髭もじやの男、後にジーク・イエーガーと名乗る能力者を殺し損なった彼女は容赦ない。

ライナーの首を刎ねて！脳を潰して！心臓を切り刻んで！死骸を火炎瓶で焼くつもりだった！

巨人よりも速い騎兵から逃げきれずもなく両親の仇は復讐気に追い詰められていく。

運が良いのか悪いのか、草むらに隠れていた石に躓いてライナーは前屈みに転倒した。

それを彼女が見逃すはずもなく、しなやかに曲がる刃が胴体を切断しようと振り下ろされた！

「ユミル…何故、邪魔をするの？」

「転んだライナーを守ったのは、ユミルが操作している巨人である。

フローラは、両親の仇を守るように両手を広げて立ち塞がった巨人に対して問いかけた。

「…わたくしはミカサより甘くないわよ！これ以上邪魔するなら『事故死』として片付けるわ！」

それは最終通告だった。

僅かに残った理性と冷静な判断によって、数秒間だけユミルに猶予を与えた。

『分かってくれ！こいつらを殺したところで壁内の侵攻は終わらないんだ！』

ユミルは、必死にフローラを抑えようとしたが、そんな事で止まる進撃娘ではない。僅か数秒で、クリスタとの思い出を走馬灯として振り返って、人生が終わると実感していた。

巨人が【恐怖】を具現化したものであるなら、フローラは【死】そのものだったからだ。

だが、女神として演じて困っている人を見捨てられないユミルは立ち塞がり続けた。

「……そう、クリスタを捨ててライナーと一緒に逝くのね！手伝ってあげるわ！」

フローラは、カラネス区を強襲した変異種とそっくりのユミルの巨人を殺す事にした。

彼女には恨みなど無くただ、鎧の巨人の付属品だから片付ける感覚だった。そうしないとやってられなかった。

『やっぱ、おつかねえ……！』

ユミルの巨人は、両手をフローラに近づけた瞬間、両断されてしまった。

第58回壁外調査やウトカルド城防衛戦で目撃しているので彼女の実力は知っているはずだった。

巨人の首を刎ねて、少し休憩するだけで復帰できる化け物。

味方であれば頼れる存在が敵対した瞬間、巨人の気持ちを実感して同情する羽目になった。

『爪は伸ばさないし、顎は装甲で強化されてないし、仲間も呼ばない……劣化じゃないの』

フローラからすれば、ユミルの巨人は変異種の劣化版で拍子抜けだった。

両手の爪を鋭利な刃物として瞬時に6m以上伸ばす事も無い。

顎など装甲のような硬質化した皮膚が表皮を覆っていない。

胃液を飛ばすわけもなく同格の巨人を呼び寄せない劣化した巨人である。

『目の前に居るのは巨人。わたくしは巨人を殲滅するだけ』

そこら辺で転がっていた兵士の死体から刃とガスボンベを回収したフローラは、まだ戦える。

ベルトルトは巨人7体に追われており、ライナーは無様に息切れして必死に体調を整えていた。

そしてユミルは限界が来たのか、うなじから本体が飛び出して地面に転がっていた。

「フローラ！話を聴いてくれ！」

「ライナーの時間稼ぎには…乗らないわよっ！」

「鎧の巨人や超大型巨人ですら歯が立たない勢力が壁外に居るんだよ！」

「じゃあ、そいつらも！一匹残らず駆逐してやるわ！」

ユミルは「個人の力でなんとかなるもんじゃねえよ」と叫びたかった。

だが、今の会話中で流れる様に2体の巨人を討伐したフローラを見て何とも言えなくなつた。

冗談抜きで彼女が壁外人類を虐殺しかねないヤバさを感じ取つた。

「貴女も分かつてるでしょ。エレンの力があれば巨人を操り敵勢力を滅ぼせるって事を！」

「お前が考えている以上に単純な話じゃないんだ！」

「言つたでしょ？ 巨人を1匹残らず駆逐するって！ ライナーに命令した元凶も抹殺するわ！」

フローラは壁外がどんな世界なのか知らない。

ただライナーやベルトルト、ユミルが壁外で生まれた人間だという事は分かる。

彼女が興味があるとしたら壁外に人類は存続しているくらいだった。

『壁外人類がわたくしたちに滅んで欲しいのであれば、巨人で塵殺してやればいいわ!!』

それと同時に壁外の人類は滅びたと習つたので、だからどうしたとしか言いようがなかった。

壁内の平和を乱す勢力なのは分かっているんで、教わつた通り、巨人で壁外人類を滅ぼせばいい。

エレンには「巨人を操る力」があるのだから！

『やばい……こいつ！エレンで世界を滅ぼす気だ！』

壁内の王は50mの壁に大量の超大型巨人を埋め込んで壁外人類への抑止力とした。壁内に介入すれば幾千もの超大型巨人が地上を踏み潰し蹂躪して壁外勢力を滅ぼすと！

それらの巨人を行使するのは、『フリッツ王家』と『始祖の巨人』の力が必要だった。さすがにユミルの知識ではそんな情報は無かったが放置すると碌な目に遭わないのは理解できた！

『やべえ……それだけは阻止させなければならぬ。俺の首を差し出してでも……』

フローラを除く3名は、その力がさきほどエレンに宿っていると身をもって分かってしまった。

どういう条件で発動するのかわからないが、フローラを放置すると発動しかねなかった。

ライナーはそれだけは阻止したかった！

「フ…フローラ…!!」

「あら、わざわざ殺されに來たの? ご褒美に樂に死なせてあげるわよ」

「お願いだ…俺には壁外に大切な家族が居るんだ…」

「だから?」

ライナーは最優先で喉を再生してフローラの前に出て説得するつもりだった。

自分を恨むのはしょうがないが、彼女のやり方だと世界が滅びる。

「俺は恨んでくれてもいい! でも「とりあえず死んで」うおっ!」

フローラは、説得しようと発言したライナーの首を目掛けて双剣を横に薙ぎ払った!

ユミルがとつさに押し倒さなければ、ライナーの頭は胴体からさよならバイバイする所だった。

もちろん、それで終わるはずもなくフローラは冷静に構え直して刃を振り下ろした!

「あれ?」

しかし、刃が振り下ろされたのは2人ではなくその手前の草原であった。

何故外れたのかフローラは両腕を確認すると、無意識に震えていた。

同期を殺したくない恐怖なのかと思ったが、単純に両腕に負荷をかけ過ぎてボロボロだった。

「……でえ!!?ようやく!!……まで来たのに!!?ああ!!肝心な時に!!」

フローラは再度攻撃に移ろうとしたが、巨人の群れが襲撃してきた為、それに飛び込んで行った。

ライナーはユミルを振り払って立ち上がったが、何故見逃されたのか理解できなかつた。

「何があつた?」

「さつきから両腕の動きがおかしかったんだ。多分、あいつは限界だと思うぜ」

ユミルは、さきほどからフローラの動きがおかしいのに気付いていた。

巨人のうなじを削ぐのではなく首を刎ねるといふ行動。

ただでさえ疲弊しきっているのに明らかに身体に負荷が掛かるやり方で巨人を討伐していた。

あの時は、刃もガスも枯渇したせいでああなったが、今は装備が揃って居るのにやっていた。

つまり彼女も口ではああ言っているが、相当動揺しており、自分たちを助けにきたのだと思った。

何故なら、両親の仇を討つならそのまま放置しているだけで確実に達成できるはずだからだ。

「ライナー、ベルトルさんの所に走ってやれよ」

「…何でだ？」

「お前が巨人に殺されたくないからあいつは追撃してきたんだ。早く行かないと死ぬぞ」

「なるほどな…ユミルも来てくれ」

「はあー、なんでこいつらの所に来ちまったんだかな…」

ベルトルさんは覚醒したが、すぐに役立たずになった。

クリスタの狙う恋敵のライナーは、精神が分裂するほど気弱な男である。

ユミルは、彼らにもらった力を返却しに来たが、愚痴ってしまうほど頼りなかった。

後ろを振り返れば、巨人が次々と討伐されており、この場に居る巨人を掃討する勢いだった。

皮肉にも彼女が頼れるのは、敵対した女だけであった。

「ぜえぜえ……すまねえ…動けねえ…」

「糞ゴリラ…さっさと動け！立て！お前のせいで大勢死んだんだ。分かってるのか!？」

ライナーは既に限界だった。

精神的に参っているのもあったが、昨日の疲労が重なって動いているのが奇跡の状態である。

身体の再生も目に見えて遅くなっており、自分の限界を実感するしかなかった。

「追い付いたわ」

「もう来たのかよ!？」

「ライナー、刃とガスをよこしなさい…」
「えっ…」

フローラは所持していた刃とガスを全て消費してしまった。
ライリーで逃げ切る事ができたが、それだとライナーを自分の手で殺せない。
だからと言って、死体から武器を拝借する時間などなかった。
そこで彼女は、敵から装備をもらうしかなかった。

「いいだろう…お前しか巨人と交戦できないからな」

「わたくしが貴方を殺すまで首を洗って待つてなさい」

「ははっ！おっかねえな…！」

フローラはライナーから刃とガスボンベを受け取った。

彼の身に着けていた物はエレンから強奪した物である。

敵対している人物に巡る奇妙な運命を辿った装備は、ようやく本来の用途で使用される事となる。

「ベルトルトを助けてやってくれ。俺が言う資格はないが……」

「もう行っちゃったよ」

「そうか……」

英雄に志望して必死に努力してきた少年は、現実を知り、何もできない男となった。自分で進めた物語だということにどこかしら他人事で、仲間の心境を考える事は無かった。

目の前であれだけ脅威だった巨人が次々に討伐されていく。

正直、両親の存在が居なかったら壁内人類に味方して祖国を裏切っていたライナー。

そんな彼が意図してなかったとはいえ、両親を殺してしまった少女のおかげで反省した。

「ユミル、俺はあいつに何て声をかければ良いんだ……?」

「私がそんな事知るか! 自分のオツムで考えて面に向かって話せよ! お前ならできるだろう!」

「そうだな」

突然の人生相談にユミルは困惑した。

前回、相談を受けたのは60年以上前という事もあり、反応に困った。

それでも、彼の思考を読みとってできる範囲のアドバイスはできた。

巨人になっても崇められる【女神】は、第二の人生を歩んでも変わることは無かった。

「日が暮れるな」

「これで巨人は脅威じゃなくなるな！あー長かったぜ！」

「分からん…月光で巨人が動き出すかもしれない」

「あれは、お前たちの親分がやった事じゃないのか？」

ユミルの問いに対してライナーは返答できなかった。

そもそも、壁上で正体をバラしたのは戦士長を目撃して【期限】が迫っていると焦ったからだ。

訓練と称されて事実上、監視状態であったので、行動せざるを得なかったのもある。

巨人に関しては、自身の能力と先代までの僅かな知識しか知らない。

「少なくとも俺たちの扱いは、お前の時代から変わってない」

「…そうかい」

無垢の巨人だったユミルが何十年生きて来たのかは知らない。

ただ、巨人だった時点で、壁外の環境が糞だという常識は共通している。

「終わったみたいだぞ！ベルトルさんは泣きながらこつちに来てるな」

「これで俺は終わりだな……後は任せた」

「つて！おい!?お前、ふざけんな!!起きやがれ!!」

ライナーは巨人が掃討されてこれ以上、ベルトルトに危害が及ばないと知ると力尽きた。

実際は、人類の敵であるので直後にフローラに殺害される可能性があったが思考できなかつた。

彼が求めたのは、訓練兵時代のように功績を褒められて仲間と切磋琢磨する夢だけだつた。

「負傷者の処置を急げ！」

「あれだけ居たのにこれしか居ないのか！」

「動ける者は明かりを灯して誘導の準備を！落下したらシャレにならんからな！」

エレン奪還作戦に参加して生存した者は、1名を除いて壁上に集結していた。

100名以上居た兵士は、30名足らずとなっており、その内動けるのが半数程度だった。

「ホント、104期兵は悪運だけは強いな」

「腕や運が悪い奴は、トロスト区で全滅したからな……まだ生還した実感が無いぜ」

「コニー、せつかく生還したんだから気分が悪くなることを言うなよ」

「ジャン、お前だって、昔と違って巨人に特攻して喰われかけたじゃねえか」

「腹括らないと生きていけないからな。自分が選んだ道とはいえきついな」

ジャンやコニーは生還した実感が湧かなかった。

実戦経験がほとんどない憲兵団どころか調査兵団の熟練兵も大勢失った。

それなのに新兵がこんなに生き残るとは思わなかった。

「ハンネスさん！ミカサは！ミカサは、どうなったんですか!？」

「アルミン、安心しろ！五体満足だ。ちよつとばかり肋骨をやられただけだ」

「でも…！その状態で馬に長時間、乗ってたんですよ!？」

「もつと重傷なエルヴィン団長を心配してやれよ！お前らの最高指揮官だろうが…」

アルミンは、ハンネス隊長にミカサの安否を確認したが、彼の表情で無事だと分かった。

それでもいつ、症状が悪化しても可笑しくないと考えていた。

ところが、彼の言葉を聞いて、これからの調査兵団について考えてしまった。

『確かにそうだ。団長が負傷して熟練兵を失った調査兵団はどうなっていくんだろう』

団長が居たから調査兵団は存続してきたが、負傷兵になった以上どうなっていくのか。

彼は優秀な頭脳で必死に考えるが答えは見つかることは無かった。

「おいエレン！しけた面してるんじゃないやねえよ！こっちまで暗くなるだろうが！」

「なあジャン、俺のせいで一体何人死んだんだ？」

「さあな！100人以上居たみたいだが、帰ってきたのは30名程度、動けるのはその半分くらいだ」

ジャンの返答を聴いてエレンは自分の無力さを再度知ることになった。

第57回壁外調査といい、皆が勝手に自分の為に死んでしまう現状。

お世話になったハンネスさんまで戦死しそうになった現実には彼は項垂れて悩むしかできなかった。

「エレン、お前は悪くねえよ！むしろ30人も生還できたなんて快挙だ！そうだろう？」

「ハンネスさん……」

「昔からお前が志願したがっていた以前の調査兵团なんてこんなもんさ。気に病むもんじゃない」

ハンネスは、昔からエレンが自分の実力について悩んでいるのを知っていた。

今では成績5位で卒業したが、以前は実力が伸びずに嘆いて落ち込んでいた時期があった。

もちろん屈しないし、同期の励ましもあったが一番欲しいのは、道を示す両親の存在だろう。

無理やり巢立ちさせられた雛鳥を養育して一人前にする為に彼は努力を惜しまなかった。

「でも…」

「馬鹿野郎！調査兵団の歴史は、負けしかねえよ！ここ最近だぞ？調査兵団が成果を出したのは」

「…何でみんな、オレをそこまで守ってくれるんですか？」

「エレンという存在を認めてくれた証拠だ。良かったな！ここにはお前の居場所がある！」

「そうですよね…」

エレンという存在に必要なのは、気軽に相談できる大人だった。

普通は、親や友達と喧嘩して仲直りしていく事で大人として成長していく。

だが、彼は子供のままで世界の命運を握る立場となつてしまった。

ハンネスは、それでもエレンは自分の子供のように接して、親の代わりになろうとした。

母カルラを助けられなかった無力感から始めた行為は、エレンの精神を支える事となつた。

「ささつと飯を喰いに行くぞ！温かい飯と酒ほど心を癒してくれるものは無いからな！」

「ハンネスさんも行くんですか？」

「そうだとも！こんなに活躍させられたんだ！調査兵団が奢ってくれなきや駄々を捏ねてやる！」

「お酒は飲まないでくださいよ！」

「何言つてやがるアルミン!!エレン、ミカサの生還祝いで飲みまくつてやるぞ！」

エレンは、昔の泥酔したハンネスの姿を思い出して思わず笑つた。

あの時は、不自由な環境だと思つたが、今では本当に幸せな時間だつた。

「見ろよコニー、親切なおじさんに甘えてるエレンが居るぞ！」

「マジかよ、ジャン坊のマザコンみたいに…痛っ!？」

「てめえ！次言ったら壁から突き落とすぞ！」

ジャンもコニーもエレンが想像以上に落ち込んでおらずほっとした。

思わず、漫才をやってじゃれ合うくらいには、気力は回復していた。

「俺はなあ！お前らのアイドル、ミカサちゃんを助けた恩人なんだぞ！」

「それを本人の前で自慢して来いよ！」

「さすがに本人に言ったら嫌われるに決まってるだろう！」

「分かってるなら止めてよ！ただでさえ人相が悪いのに更に好感度が下がるよ」

「アルミンこの野郎…！よーし、お前ら！後でぶっ飛ばす！」

新兵たちが元気を出したおかげか、生き残った兵も微かに口角を上げて前に進む事ができた。

現実を知らない故の活発な新世代は、調査兵団の希望であった。

「ありがとうなジャン！」

「はあ!？」

「お前のおかげで、うじうじせずに済みそうだ！」

「ふん、ライバルが落ち込んでたら張り合いが無いからな！」

エレンは、いつも通り：ではなく気持ち悪いジャンの言葉で勇気づけられた。

いつも喧嘩しているが、その分、相手の気持ちを理解できるからこそ感謝した。

現に感謝されたジャンは恥ずかしそうに頬を掻いており、友情がそこにはあった。

「ライナーと：腰巾着野郎を捕まえて皆の死を人類存続の功績とする！それがー」

「おいエレン、それは兵舎に戻ってから発言するべきじゃないか？」

「ハンネスさん!？どうして邪魔するんですか!？」

「家に帰るまで安心するんじゃない。なにより飯を喰って休んでからでも良いだろう?。」

「そうでした!。」

それでも本日失った物は大きく、なによりこの場に居る全員は疲れ切っていた。

「先ず帰還して飯を喰って休みたいと、この場に居る全員が思った事だろう。しかし、それを望まない者達が居る。」

「待つてよ……まだ終わってない」

「クリスタ！ミーナまで……お前ら、まだ休んでおけよ」

「違うよ。私はヒストリア」

「そうだよ。まだ帰れないよ」

ミーナに支えられたヒストリアが彼らを呼び止めた。

彼女たちからすれば、まだ終わっていなかった。

「エレン、壁の向こうへ早く行こう」

「おいおい、もう日が暮れてるんだぞ。まずは身体を休めてー」

「ユミルを早く取り戻さないと！あいつらに連行されちゃう！エレンの力でなんとかしてよー！」

ヒストリアは、今までユミルの気持ちを軽くあしらってきた。

誰かに愛されたい少女は、実際に愛してくれている女を無視し続けた。

ようやく想いに気付いて相思相愛になれたというのに引き離された。

2人で自由に生きていくと約束したのに反故にされた彼女は亡者の様にエレンに詰め寄った。

「少し落ち着け！いつものお前らしくない！」

「フローラがまだ戻ってこないの!!きつとまだ生きてる！早く助けにいかない!!」

「ミーナ、お前まで……」

ミーナ・カロライナも肉の誓いの同志であり親友であるフローラを探しに行くつもりだった。

巨人と交戦して無様にやられた彼女はトラウマを再発して、親友を見つけ出すまで帰る気はない。

2人とも共通してるのは、壁外に残された同期であり親友の温もりを欲している点である。

「ユミルは脅されているの！だから私の傍から去った！すぐに助けに行こう！」

「フローラは鎧の巨人を追ってるわ！すぐに援軍を連れて行かないと!!」

この場に居る104期兵たちは、豹変した少女たちの言動と気迫に押されるしかなかった。

気弱で優しくして真面目な印象しかなかった彼女たちからは、死者が具現化したように見えた。

「巨人だ!!壁外の下に3体!!」

その時、兵士の叫び声によって帰還する兵士の列が乱れた。

さきほどまで希望すらあった雰囲気は消し飛んで兵士全員が臨戦状態に移行した。

壁外に居る巨人であっても、壁を乗り越えたりして侵入する可能性があったからだ。

「なんだよ！俺たちを狙ってきたのか!？」

「いや、なんかおかしい！何でこいつら、両腕が切断されているんだ?」

駆けつけてきた兵士が見たのは、何故か腕を両断された巨人たちであった。

兵士の列を狙ってきたというより何者かから逃げて来たような様子である。

「応戦しますか!？」

「動かない巨人をわざわざ狩る必要はないだろう!」

その瞬間、巨人の首が飛んでいった。

断頭台の刃が振り下ろされたように巨人の首は少し上昇した後、自由落下して地面に激突した。

そして2体の巨人の首が刎ねられて倒れ込んで消滅していった。

「何か居るぞ! 巨人より化け物が!!」

「明かりを照らせ!! やべえ奴が居るぞ!!」

索敵班は、固唾を吞んで角灯や松明の明かりを巨人の死骸に向けて照らした。

そこにいたのは、確かに化け物であった。

「フローラじゃないか」

「確かにやべえ奴だな…」

そこに居たのはライリーに騎乗し直したフローラ・エリクシアだった。

結局、鎧の巨人の正体であるライナー・ブラウンを取り逃がしてしまった。

彼女ができたのは、戦死した兵士のワッペンをできるだけ回収して壁に戻ってくる事だった。

そしたら巨人が3体居たので腹いせに殺害しただけである。

「フローラ!?良かった!良かった…」

「フローラ!?ユミルは!ユミルが居ない!!」

フローラを発見したミーナとヒストリアは正反対の反応をした。

ミーナは親友が生還してきた事で安堵した結果、疲労を実感し、その場に座り込んだ。

一方、ヒストリアは、横に居るはずのお嫁さんの姿が見つからず、憤慨して髪を掻きむしった!

「よくあんな地獄から戻ってきたな」

「何を言ってるの？まだ地獄よ！この手でライナーを殺しそこなったの！うふふふ!!」
「やべえ…何か知らんが、これ以上触れない方が良いな！」

リフトに乗って馬と共に壁上に帰還したフローラ。

ジャンが気になって駆けつけてみると、彼女が更に壊れた感じがして逃げ出したくなった。

「フローラ！なんでユミルが居ないの!? 貴女なら私のお嫁さんを奪還できたじゃない!!」

「わたくしだって敵を皆殺しにしてユミルを奪還したかったわよ！」

「じゃあ何で居ないの!？」

「しょうがないじゃない!! ユミルがあっちを選んだせいでどうしようもなかったわ!!」

フローラは、気を失ったライナーを起こそうとした！

自分の罪を認識して裁かれるようにしたかった彼女は、なんとしても叩き起こした

かった。

しかし、ライナーは限界であり、傷口の再生すら上手く行っていない現状。

下手に弄れば、そのまま眠ったまま死んでしまうので手が出しようがなかった。

『フローラ！休戦にしないか？』

『ふざけないでよ！あとちよつとで殺せるのよ!!』

『ここは双方とも退いた方がメリットがある』

『戯言を!!』

煮え湯を飲まされたフローラは、何としてもライナーを殺したかった。

それでも彼女が退いたのは、彼に罪を認識させて殺す手段が無かったせいだった。

せめてユミルを連れ戻したかったが、ベルトルトと交戦して相打ちになる可能性があった。

ライナーに生き地獄を味わせるならそれでも良かったが…。

『君が死んだらライリーのお世話は誰がするんだ？』

『余計なお世話よ！ライリーはわたくしが居なくても壁外で生きていけるわ!!』

『当の本人は、君に甘えているようだけど？』

『うぐぐぐ！あとちよつとなのに!!』

彼女はライリーを残して死ぬ事ができなかった。

相棒として過ごしてきた時間は短かったが彼女たちにとっては、大切な存在となっていた。

それはライリーも感じていた様で相打ちを覚悟したフローラの袖を噛んで攻撃を妨害していた。

『3人で探せば死体は更に見つかるはずだよ』

『わたくしはワツペンを探しにきただけよ！共闘する気はないわ!』

『良いから早くしようぜ！照明が無い以上、暗くなったら探せねえぞ!』

しづしづ休戦を受け入れたフローラは、ベルトルトとユミルと共に死体を搜索した。

2人は、ウォール・マリアまで行くための装備の確保を！

フローラは戦死した兵士のワツペンを回収する為に行動を共にした。

『ライナーを馬で引き摺らせるのは譲らないわよ!』

『成人男性を抱える余裕は無いし、それでいいよ』

『良いから早くしようぜ。気が変わる前にこんな所なんておさらばしたいからな』

寝てるライナーの両足を縛ってライリーに括り付けて無理やり引つ張る案は誰も反対しなかった。

馬に引き摺る案に誰もが否定しなかったのは、それだけヘイトを稼いだ証拠である。瀕死のライナーが死ぬ危険性があるにも関わらず決行した時点で全員が狂っていた。叩き起こすよりも、よっぽど致死率が高いのに気付いたのが壁に辿り着いた瞬間だった。

「結局、ユミルは自分の意志でライナーの元に行つたと…」

「俺もそう思ったがマジだったのか…」

「結局、ユミルの正体は分かない奴だったな」

「少なくともクリスタを想っていたのは確かだった」

フロラーの話を聴いてジャンとコニーとエレンはそう眩くしかなかった。

あれほど鎧の巨人の討伐を狙っていた彼女ですら撤退の道を選ぶしかできなかった。遙かに弱い自分たちが参戦したところで足手まといで何もできないのは確実である。

「何で…私よりあっちを選んだの…いい、一緒に生きようと約束した…のに！」

「2人で生きるって言ったのに、私を置き去りにするなんて…裏切り者…絶対に許さない！」

ヒストリアは、自分がユミルに置き去りにされたのを知った。

知りたくないし、理解などできるはずも無かった。

皆から女神と呼ばれて、お嫁さんの自分より人殺しの集団に付いて行ったのが信じられなかった。

「フロラー！今すぐ出発する！ミーナと3人でユミルを奪還するの！今からでも間に合うよ！」

「お願い…もうわたくしは…」

「クリスタ、フローラが死んじゃう！休ませてあげて！」

「あははは！クリスタ？そんな少女なんてもう居ないの！ユミルに捨てられて死んじゃったの!!」

ヒストリアは、全てが馬鹿らしくなった。

自分だけを見ていたはずのユミルは、糞野郎に取られてしまった。

一緒に壁外に行こうとしたミーナに約束を反故されてしまった。

巨人を操る力を持っているエレンはユミル奪還には役立たずである。

そして最後の希望であるフローラも気を失って、壁外に出撃するのは不可能になった。

「クリスタ？お前らしくないぞ」

「そうだぞ。お前はもつと優しく大人しい子のはずだ」

「とりあえず野戦糧食と水筒を持ってくるか。正常な判断力がなくなっちゃってる」

「ハンネスさん、お願いします」

誰もが演じていた【女神】しか見ておらず『良い子』を演じるのはアホらしくなった。

無償の愛を振り撒いても、感謝するどころか付け上がって、恩を仇に返してくるだけだった。

フローラとユミルだけは、本来の自分を見てくれたがそれだけである。
ヒストリアは、ユミルが自分に戻ってこない事を実感してしまった。

「クリスタは死んじゃったの。今、私の胸の中で死んだの。あははは……」

「クリスタなんて私が生きる為に与えられた役で、もう私はその子に縛られないの」
「その名前は、確か……子供の頃、読んだ本に出てきた女の子だった……はず」

ヒストリアは確かに子供の時に読んだ本に『クリスタ』という名前の少女が出てきた
と思った。

だが、詳細に思い返す事ができず、記憶がすっぽりと抜け落ちている感じがした。
そしてユミルとの思い出もそのうち忘れてしまいそうで彼女は泣くしかできなかつた。

「フローラは……私を見捨てないよね？」

ヒストリアの問いに対して血生臭い女は返事をするには無かった。ただ、抱擁したら温もりが感じられて、彼女は後を追うように瞼を閉じて寝てしまった。

『ハイハイはどハイ?』

夢の中ならユミルと再会できると思ったように彼女は黒髪の女と再会する夢を見た。

『ユミル!?……違う』

そこに居たのは、ユミルと同じ黒髪の女であるが、何故か自分と目の形が同じの美女である。

初対面の人であるのに何故か懐かしくて恋しい存在である。

『なんだか懐かしい……ちよつと臭いけど温かい』

彼女は悲しそうな顔をして泣いていたヒストリアを抱きしめた。

それは、久しぶりに再会した姉妹のような感じがした。

7章 何気ない日常は儂く過ぎていき大切な思い出は少しずつ失われて残るのは絶望だけの時代

80話 奪還を目指す者達

駐屯兵団の増援と共にトロスト区に帰還した調査兵団。

ここ数日間で失った損害は甚大であり、2個小隊にも満たない兵力となってしまうた。

更に2名の分隊長と団長が負傷して、第三分隊のデイルク副長が指揮を執る羽目になった。

団長の副官は戦死し、同格のモブリット副長は負傷しており消去法で選ばれたからだ。

「団長代理は、リヴァイ兵長の方が良くないか？」

「兵長は強いですけど、兵団を指揮する能力はありませんし、ここには居ませんので」

「マレーネ！もう少し俺に優しくしてくれてもよくないか？」

「寝言は寝てから言ってくれ。団長代理になると酒が飲めやしないからね」

上官であるマンシユタイン分隊長は、第57回壁外調査の時に巨大樹の森で戦死。だが、第三分隊くらいしかまともな戦力が残っていなかった。

他は戦力の5割以上を損失しており、第二分隊に至っては構成員が全滅していた。

故に働かされているデイルクは、マレーネに暗に変わってもらおうとしたが即座に却下された。

「じゃあ、寝ちやおうかな」

「私に酒を1年分奢ってくれたら考えてあげるよ」

「王政が財政難になってひっくり返っても足りない感じがして無理そうだ」

兵団一の酒豪であるマレーネの飲みっぷりは異次元である。

噂では、どこかに居る巨人の胃袋と共有してるまで言われるほど化け物である。

巨人を全滅させるよりムリゲーの案を却下したデイルクは、今後の作戦について頭を唸らせた。

「動けない…」

一方その頃、フローラ・エリクシアは死にかけていた。

昨日の時点でボロボロだったのに大暴れしたせいで動けなくなっていた。

ついでに立体機動で飛び回っていたせいで「女の子特有」の症状が早まった。

腰と脚と腕と腹と背中が強烈な痛みに襲われている時に出血大サービスの日となつてしまった。

「むーむきゅー!!」

ついに疲労からかフローラの頭脳が異次元に達したのか人語を発する事は無くなつた。

ここは駐屯兵団の宿舎、調査兵団の兵舎と違い女兵士が複数過ごす大部屋である。

そんな大声を発したら他者に迷惑を掛けるが幸いにも女部屋には彼女以外は居なかった。

「いくら何でもフローラを酷使し過ぎてない？」

「フローラが復帰しなきゃユミルは取り戻せないの！たくさん食べて復活してもらわないと！」

「むきゅ？」

ミーナとヒストリアの話し声が廊下から聴こえてきてフローラは焦った。

ただでさえ、全身が痛いのに毎月の重荷がここで噛み合わさって地獄と化した。

これでは、オシメを変える様に赤ちゃんプレイさせられるのは目に見える。

「フローラ、ごはん持ってきたよ……やっぱり寝てるわ」

「油断しないで！前回は逃げられたんだから鍵を閉めないと！」

「ヒストリア、分かってるよ！フローラはこういう時に……」

2人が自分に意識を逸らして会話しているのを見計らってフローラはベッドから飛び出す。

頭進撃という異名通り、部屋から飛び出して廊下で転び回った後、四足歩行で逃げ出した。

「むぎゆううううううううう！」

「フローラが逃げた!？」

「今度は逃がさない!人海戦術で捕まえるの!!ユミル奪還をするのは彼女が必要だから!!」

ミーナとヒストリアは、逃走した囚人を追いかけるように追跡をした。明らかに病人や負傷兵に見せる表情では無かった。

「ライナーとベルトルトが敵だったなんてまだ信じられねえ…」

「コニー、あいつらは死んだんだ。巨人に喰われて死んだ!」

「でもよー!」

「うるせえ!死んだ事にしないとずっと引き摺っちゃまうぞ!!」

コニーとジャンは、同期が敵だったのに信じられなかった。

だが、ベルトルトが積極的に殺人をしたのを目撃して現実に戻った。

だからジャンは、2人が巨人に喰われて死んだ事にした。

良くも悪くも同期たちは、ほとんど死んでいるので心を誤魔化す事ができる。

「むぎゆううう!!」

「おい、あれフロローラだよな？鳴き声を出して何をやってるんだ？」

「昨晚までの疲労が蓄積して動けないって聞いていたがやっぱりあいつ、元気そうだな」

ジャンとコニーを颯爽と追い抜き、四足歩行で駆けまわるフロローラを見て呆れた二人。

彼女の元気そうな姿を見て、さきほどまで落ち込んでいたのが馬鹿らしくなった。

「ジャン!!フロローラを見なかった!?!」

「あ、あいつなら、その角を左折していったぞ」

「ありがとう!行くわよヒストリア!」

「ええ、私から逃げた事を後悔させてあげる!絶対に!!」

血眼で睨みつけながら服を力強く掴んできた彼女たちに思わず嘘を言ってしまったジャン。

異様な雰囲気を出しながら獵犬のように駆け出していくフル武装した女たち。

あまりにも現実離れしているせいでたまたま様子を目撃したアルミンは混乱して寝室に戻った。

「なにやらかしたんだあいつ」

「相変わらず女の子にモテモテで羨ましい。俺にもあそこまで積極的になる乙女は…」

「居るわけないだろう！アニがベルトルトに告白するほどあり得ないぞ！」

「言つたなこの坊主野郎!!」

喧嘩を始めた2人だったが、すぐに取っ組み合いを止めた。

このまま喧嘩してもライナーが仲介する事は二度とないと思つてしまい、空しくなつたからだ。

「なんかデジャブがしないか？」

「奇遇だな、俺も丁度、そこに思い至つたところだ」

彼らは、トロスト区奪還作戦の翌日の事を思い出していた。

瀕死だったフローラが部屋から抜け出してミーナとクリスタが追いかける。

そして自分たちが喧嘩してライナーに仲介されて休戦という名の仲直りをしたものだ。

「ジャン、どつかで食べに行かねえか」

「コニーにしては良い案だ」

「うるさい！オレは家族の土産をかうついでに行くだけだ！」

「ああ、そうだな。今となつては両親の有難味が身に染みるな……」

ジャンは、久しぶりに両親に元気な顔を見せようと思いついた。

幸いにも新兵には任務が振られておらず、実家もここから徒歩で行ける距離であった。

『どうやってクリスタやミーナから逃げようかしら……』

フローラは男子トイレの個室で用を足して、逃走ルートの確認をしていた。

男子が女子トイレに入れば犯罪だが、女子が男子トイレに入っても犯罪ではない。

男女平等ではないが、そもそも身体の構造が違うのだから平等など無理な話である。

男は好きな子を想って股間を弄るだけで済むが、女は周期的に出血大サービスで酷い目に遭う。

現在進行形で出血している彼女は、男女の身体の違いを嫌でも思い知らされた。

『君は興奮すると、全身の古傷が開いて出血するのに股間だけは周期的しか出血しないんだな』

訓練兵時代に教官の一人に言われた事だが、よく考えてみればセクハラではないのか。

殴り倒してやろうと思ったが、これ以上キース教官を激怒させたくないので諦めたのを思い出す。

とりあえず、*“声”*を聴ける能力で兵員の居場所を把握したフローラは溜息を吐いた。

そして腹を括って、壁に手をつきながら男子トイレを脱出した。

「お前、何をやってるんだ？」

「サムエル！内緒にして！ミーナとクリスタから逃げてるのよ！」

「いや、その恰好の事を言ってるんだが？」

「パジャマなのはしようがないわ！」

「壁に背中を付けて逆立ちしてる事を言ってるんだけどな！」

フローラは立体機動のせいで三半規管の感覚が狂っていた。

馬小屋は彼女達に先回りされていると踏まえて技巧室に隠れて感覚を取り戻そうと
していた。

偶然、同期であり駐屯兵になったサムエルに見つかったがドヤア顔で会話する余力は
あった。

「おいサムエル！いつまで探し物に時間が掛かってるんだ！」

「あつ…」

「何やってんだこいつ!？」

「三半規管を治す為に特訓してるそうだ」

「意味が分からん」

サムエルが帰って来ないのに痺れを切らしたフロックが技巧室に突入すると馬鹿女

を発見した。

いつも死にかけている女がまた馬鹿な事をやっていると思ってしまった。

風の噂では、巨人の首を刎ねて倒したとか王政幹部を泣かしたとかあったが眉唾ものである。

「わたくしは今、鎧の巨人を討伐する為に特訓してるの！」

「別に良いけど、無理をやって医務室送りされるなよ」

「言われなくても分かってるわ！」

サムエルとフロックが去つたのを確認したフローラは逆立ちを止めて技巧室から逃げた。

美少女のクリスタに頼み込まれれば、居場所を吐かれると思ったからだ。

「ユミル、なんで俺達を助けてくれたんだ？」

「そりゃあ、私が馬鹿だからだ」

ウォール・マリアに辿り着いて休憩しているライナーの問いに対してユミルは単純な返答をした。

自分が死ぬと分かっているのに馬鹿ツ面共に付いてきたのだから馬鹿としか言いようがない。

「里の土産になってやらんとお前ら、帰れないだろう」

「このまま故郷に行けば、お前は助からねえぞ！逃げるなら…今だ」

わざわざ付いて来たユミルにライナーは思わず優しさをかけた。

自分が糞野郎と分かっているからこそ、ユミルの優しさに良心が耐え切れなくなつたからだ。

「私はもう疲れたんだ。もう良いんだよ」

「ユミル、何で僕をたすけてくれたの？」

「お前の声が聴こえたからだ」

ユミルは無垢の巨人になってからずっと悪夢を見ていた。

永遠に覚めない悪夢を見続けて同胞を喰い尽くすまで歩み続ける化け物に。

ところが、偶然こいつらが島内に現れて奇跡的に仲間を捕食したおかげで人間に戻れた。

それは、奇跡としか言えず、運命であると思っている。

「お前らがこの壁を破壊しに来なきや私はずっと覚めない悪夢を見ていたんだ」

「私は、ただその時に借りた物を返そうと思ったただだよ」

「お前らの境遇を知っているのは私だけだしな。私も同じさ。どうしようもなかったんだ」

自分が人間に戻れたのが運命なら、その力を本来の持ち主に返すのも運命である。

この世に誕生した以上、何かしらの役目を持っており彼女はそれを全うする気である。

「…ありがとうユミル。すまない」

それを聴いたベルトルトは涙ぐんでユミルに感謝した。

もう、自分たちは詰んでいるのを理解しているからこそ彼女の選択に感謝するしかなかった。

ライナーもユミルの覚悟を聴いて最後まで使命を全うするつもりである。

「いいや、悲しむなよ。女神様もそんな悪い気分じゃないからな」

ユミルが大空に手を伸ばそうとしたが何も掴めなかった。

昔は、高い所に登れば雲が掴めると思ったが、50mの壁の上でも掴む事などできなかった。

「それに感謝するのは、私だけじゃなくてフローラにもしとけよ」

「…えっ?」

「あの時、あいつが追撃したのは、暗にお前らを巨人に喰わせたくなかったからだと思うよ」

「なんでそんな事が分かるんだ!?!」

「だってよ。加勢がなかったら私たちは全滅してたんだぞ。無意識にあいつは助けに来

「ただ……」

フローラは両親の仇である鎧の巨人を憎んでおり、復讐を誓っていた。エレンを奪還された時点で、退却する事も出来た。

鎧の巨人も超大型巨人もあの場で巨人に喰われて終わりにできた。

だが、彼女はそれを許さなかった。

「ライナー、お前が寝ている時にいつでも殺せたのは分かるよな？」

「ああ、何で寝ていたのに生きてるのか疑問に思ったさ」

「多分、あいつはお前の事が好きだったと思うぞ」

「そりゃあ、俺を殺したいほど愛してるだろうな。寝てなかったら死んでた」

フローラは鎧の巨人を憎んでおり討伐をしたがっていた。

それなのにライナーが生かされた要因は、眠っていたからだ。

復讐対象が人間だと気付いて罪を意識させてから殺害する気である。

瀕死状態でそれどころじゃないので見逃されたのはライナー自身が分かっている事だ。

「次、逢う時にあいつとケリをつけて全てを終わらせないといけないな」

「ライナー……」

「大丈夫だ、俺はもう戦士だ。今度はフローラを悪魔の末裔として全力で殺して見せるさー」

「アニも絶対に奪還しようよ」

「もちろんだとも!!」

ボロボロであるが眼力だけは立派な戦士に戻ったライナーは両手を握り締めた。

復讐の連鎖を断ち、全てを終わらせる覚悟をする為に！

誰もが秘めた想いは、表に出ることは無いが、太陽は平等に全員を照らして見守るようであった。

「……そう、あれから壁内に巨人は湧いて出てきてないのね」

「内地担当の駐屯兵团第二師団が人海戦術で夜回りをやったそうだが、見つからなかつ

たそうだ」

「つまり、ウトガルド城で殲滅したのが最後だったのね」

入手した情報を軽くメモをしてフローラはゆっくりと手帳を閉じた。

ウォール・ローゼ南西部に出現した巨人は全て掃討されたようである。

どこから湧いてきたのかは不明だが、あの毛むくじやらの巨人継承者が関わっているのは確かだ。

フローラは、あの半裸の髭もじや野郎を今度こそ殺すと誓っている理由の一つである。

「それより大丈夫なのか!?前より酷いことになってるが!」

「ゴードン!これが大丈夫に見えるの?」

「いや、見えんな!大人しく宿舎で安静にして休んだらどうだ?」

「心遣い感謝するわ。でも動かないと色んな意味で死ぬから内緒にして!貴方を信じてるわよ!」

情報提供してくれた同期のゴードンに感謝しつつ芋虫の様に地面を這い蹲って彼女

は移動した。

もはや転がる方が早いと思うが、無理をし過ぎて腰をやられたのでどうしようもなかった。

義理堅いゴードンは黙って彼女を見送ることしかできなかった。

『想像以上に身体がダメね……いつそのこと、訓練兵団の医務室にお世話になろうか迷うわ』

フローラは、お節介女から逃げる為に訓練兵団時代にお世話になった場所で休もうとした。

恥を掻くのは同じであるが、少なくとも衛生兵や医者の方が断じてマシである。

『むっ！サシャとサンドラの“声”！わたくしを探しているようね！』

フローラはパジャマが雑巾のように汚れているにも関わらず、気力で立ち上がって移動した。

目指す場所は、訓練兵団の兵舎・・・ではなくトロスト区正門である。

あそこは、巨人が侵入してきた場所であり、人氣が少なくて治安が悪い。逆に言えば、駐屯兵团やミーナの追手から隠れられると思っただからだ。

「フローラは、どこに行ったのでしょうか」

「目撃情報だとパジヤマ姿でうろついているからすぐに見つかるとは思っただけけど…」

サシャとサンドラは、ミーナから無理やり手伝わされてフローラの搜索をしていた。何故か姿を発見できず、サシャは自慢の鼻で探そうとするが効果は無かった。

もし、フローラが朝食を食べれば、その匂いで追跡できたが断念するしかなかった。

「そういえばサンドラは何で搜索の協力したんですか？」

「フローラの討伐数が不明で、確認をしたかったの」

「えっ、公式記録が存在しないんですか？」

「うん、何故か意図的に記録が残ってないから確認しようと思って」

駐屯兵团のデスクワーク派に所属しているサンドラは、フローラの記録が曖昧なのに気付いた。

トロスト区戦で巨人を10体以上討伐してるはずなのに記録が存在しなかった。それどころか、勲章を売り払って同期に奢っている癖に公式記録では名前が存在しない。

つまり何者かが意図的に彼女の存在を隠蔽しているという事になる。

聞屋の娘であるサンドラは、興味津々に真相を知ろうとした！

「少なくとも一昨日と昨日で巨人を40体以上、討伐してるはずですよ」

「そうなのよ！こんなにすごい戦績なのにリヴァイ兵長と違って記録されてないのよ！」

「……つまり兵長の心酔する勢力が記録を誤魔化したんですか？」

「いえ、おそらく総統局が情報を操作してると思うの」

サンドラの話の聴いていたサシャは、やばい事に踏み込もうとしているのに気付いた。

馬鹿でもさすがにここまで情報が検問されているとフローラ関連が機密情報なのは分かる。

「サンドラ、あまりフローラの個人情報暴露かない方が良いでしょう！」

「なんで？」

「明らかに隠蔽されていますって！私の直感がやばいって言ってますよー！」

「だからこそ真相を暴いて表に出したいじゃない！」

「マジで貴女、死にますって！マスコミごっこをやり過ぎるとこつちまで命が危うくなります！」

サシヤは肉が喰えない事を知った以上に恐怖した。

思えば、フローラは訓練兵時代から壁外で任務をやっており異常な事態であった。

おそらく、そういう異常な事が多すぎて臭い物に蓋をしているのだろう。

異様な資金力もきつと、王政の口止め料で入手していると感じた。

「でもフローラと交渉すればお肉を食べ放題になりそうじゃない」

「確かにそうですね！」

お肉の話題が出た瞬間、サシヤの理性は崩壊してサンドラに脳死で賛同した。

そして彼女たちは、仲間を集めてフローラ包囲網を形成していった。

『なんかお尋ね者になつてるわ…』

フローラは、自身を探査者が増加しているのに気付いてどう逃げるか迷った。兵服を着てないせいで軍事施設には立ち寄れない。

だからといって、身体の痛みが限界を迎えてどこかで休みたかった。

『ワグナー製菓に匿ってもらいますか！』

ワグナー製菓は、同期のトーマス・ワグナーの両親が経営している店である。

親友は戦死してしまつたが、両親はトロスト区を勇気づけようとお菓子を作り始めた。

メイン製品は、『復興饅頭』であるが、ドーナツなどのメニューが増えている。

まだ庶民には、食事をする難易度が高いが、もうじき店舗が拡張して大きくなる。

そんな人気店のパトロンであるフローラは、お邪魔しようとしていた。

『…付けられているわね』

そしてフローラは店に向かおうとしたら集団で追跡されているのに気付いた。

負の感情を『声』として聴ける彼女は、敵に殺意が無いのを感じ取った。

だからといって、親友の両親の店まで連れて来るつもりはなかった。

『誘導しますか』

行き当たりばつたりのフローラは行き止まりがある路地裏に侵入した。

そして近くにあった大きな木の板の影に隠れた。

「……隊長！逃げられました」

「マジかよ、なんで気付いたんだ」

追跡してきたのは、中央第一憲兵団の対人立体機動部隊である。

副官のカーフェンの報告を聴いたケニーは、フローラの用心深さに慄いた。

馬鹿だと思ったが、何故か感知能力が高く危機回避能力が異様に高かった。

いくら巨人との戦闘で生き残ってきたとはいえ人間の悪意を感知する術は知りた
いほどである。

「パジャマ姿と言いつき方と言いつ、掴めん女だな」

「付近を捜索してみますか？」

「いいや、あいつのことだ。とある単語を言えば反応して飛んでくると思うぞ」「単語？」

カーフェンは、上司の邪悪な笑みに困惑しつつ発言を待った。

ケニーは一度、深呼吸して気分を落ち着かせて一言小声で呟いた。

「新型の立体機動装置の相談をしようと思ったのにな」

「なんですって!？」

すると木の板を倒してフローラは飛び出してきた。

あまりの馬鹿さ加減に困惑するカーフェンであったが、ケニーは想定内だった。

撃ち殺されそうになった時、何故か装備の方を意識していたので、こういうのに弱いと踏んだ。

しかし、住民に正体がバレたくないで小声で呟いたのに反応したのは驚いた。

「よお、嬢ちゃん、その恰好でお散歩かい？」

「昨日の戦闘でボロボロになったわたくしを同期が搜索してるので逃げ回ってるんです」

「そこは、素直にお世話になっておけよ…」

「赤ちゃんプレイさせられるなら巨人に喰われた方がマシですわ！」

ケニーは思った以上にフローラが馬鹿で困惑するしかなかった。

パジャマ姿でこんな危険地帯を闊歩していざ、確認していると身体がボロボロだった。

下手すれば、無法者に遭遇する可能性があるというのになんて暢気な奴だと言えなかった。

「ところで何の用ですか？」

「簡潔に言うとうと6日後の午前4時にクロルバ区壁外で任務があるんだが誘いに来た」

「あなた方が壁外任務を？」

「そうだ」

フローラが疑問に思うのは当然である。

中央第一憲兵団は、言わば壁内の平和を守る秘密憲兵なみたいのものである。つまり仮想敵は、人間でありわざわざ壁外に行くことは無い。

そして何より彼らは、調査兵団を仮想敵にしている対人立体機動部隊である。

巨人と戦闘になる場所に行くはずはない。

「先日の巨人騒動でな。慌てた上層部が俺らに巨人の戦闘に転用できる装備を用意してくれた」

「やっぱり、新技術を隠し持っていたのですね……ずるいですわ」

「ところが、俺らは壁外については専門外だ。そこでお前を誘いに来たってわけさ」

フローラは判断に迷った。

確かに新装備が見れるなら参加しても損は無いが、一度彼らに殺されたかけたのである。

警戒しないわけがないし、王政上層部を脅迫してきた過去があるせいで後ろめたいのがあった。

「他は専門家は居るのでは？」

「しようがねえだろう。調査兵でお前以外には正体をばらせないんだから」

あくまでケニーの独断であつた。

壁外に関しては、専門外であり育ててきた部下を全滅させる可能性があつた。

なのに王政上層部は自分の命惜しさに新装備の成果を報告しろと抜かしてくる。

育ててきた部下を糞野郎共の護衛にする為に育成したわけではない。

だからといって、無視するわけにもいかず、できるだけリスクが低くなる選択肢を選んだ。

「この状態なのに数日後に壁外調査に行けると思つたんですの？」

「大丈夫だ、お前の頑丈さと不死身さは徹底的に調べてレクチャー済みさ」

「少しは乙女を労わってくれても良いのですのよ？」

「巨人を150体以上討伐する奴は、か弱い乙女とは言えんさ」

大總統もフローラの素性を調べた結果、信じられず部下を何十人も叱責した事があ

る。

それだけやらかした事が多くて、色んな意味で王政が彼女の功績を隠蔽しなければならなかった。

『新兵で巨人を150体討伐できるならベテラン兵はもつとできるはずだ』

もし、彼女の戦績が世間に発覚すれば、彼女基準で兵士が巨人に挑まなければならぬ。

王政民は、貪欲で他人事で付け上がってくる愚か者である。

フローラの戦績のせいで王政が内部崩壊しかねないので隠蔽せざるを得ない事情があった。

そして巨人を殲滅する事は、平和な楽園を壁外勢力に侵攻させるリスクが発生するのもある。

「どうだ？ やってみるか？」

「やりますけど、自身の馬と装備は持ち込んで良いですか？」

「いいぞ、お前の装備まで管理する気は無いからな」

「ありがとうございます」

カーフェンは、隊長が何故そこまでフローラを信頼しているのか分からなかった。懐から拳銃を取り出すとケニーに制止される前にフローラが物陰に隠れた。

「な？ 殺意を感じられる化け物って事だ。ああいう輩は味方においておいた方が良さぞ」
「わかりました…」

さつきまでポロポロだったくせに機敏な動きを見た瞬間、油断できない存在である。できれば敵対しない事を祈る彼女であった。

『とりあえず6日後の午前4時にクロルバ区ね』

フローラは暗号文でメモをして手帳を閉じた。

対人立体機動装置は、巨人に遠距離で攻撃できる装備であった。

ただ、文字通り対人を想定してるのですぐにガス欠する上に威力が甘かった。

それが秘匿されてきた技術で向上しているというのだから興味が出ないはずが無かった。

「おっ！英雄様じゃないか」

「英雄がこんな格好してるわけありません」

「まあ脱走してきたな？」

「はい、そうです。どうです？儲かってますか？」

リーブス商会は、トロスト区を牛耳っている商会である。

トロスト区戦で、大幅に弱体化したもののフローラとの取引で再び利益が向上している。

「ここ最近、甘くて安らぐ香水がブームだな。お前のおかげで稼がせてもらってるよ」

「それは良かった。マルレーン商会との輸送費の賃金交渉はどうなりましたか？」

「上手く行ったぞ。お陰様で物価が下がって暮らしやすくなったぜ」

「それはよかった」

最近では、マルレーン商会と手を組んでフローラが案を出した香水で莫大な利益を出した。

体臭は人の個性とし、香水は身分の標準とされており、あくまで異臭を誤魔化す物だった。

それが、工作でアロマセラピーのブームを造り上げて貴族に高値で売り付けた。フローラが生み出した複数の香水は、今や王政の貴族が買い漁る物である。

「クロルバ区の北部から獲れる『燃える水』のおかげですわね」

「アインリツヒ大学出身の連中が旨くエタノールを生成してくれるおかげでもある」

「そして原料は、ハーブ。いくらでも手に入りますわ」

「…良いのか？こんな話をここでしちまって？」

「ここには、わたくしたち以外の気配がしませんので」

フローラは世間話をしているうちにリープス会長が個人的に用があると感じた。

何故なら彼は無駄な時間を過ごさないからだ。

いちいち話題を変えているのに喰らい付いてくる時点で何か隙を狙っているのは明白である。

「ところで何かわたくしに用があるのですか？」

「フレーゲルという少年に逢わせたいのだが、どこか都合がある日は無いか？」
「……子息じゃないですか。なんでわざわざ密会のような真似を？」

デイモ・リーブスは、フローラと取引しているうちに息子に逢わせたくなくなった。

それは幼少期の頃、息子が彼女に個人的な約束をしているからだ。

もちろん、記憶喪失の彼女は覚えていない訳が無いが、だらしのない息子の意識を向上で
きるだろう。

壁内に巨人が出現した話を聴いて、戦死する前に一度でも良いから再会させてあげた
かった。

「うーん、3日後の午後だったらトロスト区に来れますわ」

「では、3日後の午後3時に例のお菓子店で集合しようではないか」
「分かりましたわ」

再び調査手帳を開いて暗号文でメモをしていくフローラ。

珍しく会長が感傷的になってるのに気付いたがあえて触れなかった。

その話は3日後にするべきだと思ったからだ。

「これからどこに行くんだ？」

「駐屯兵団の宿舎に帰還しますわ」

「良いのか？逃げ回っていたんだらう？」

「歩いている内に身体が動けるようになったので帰ります」

「そうか、気を付けてな」

「デイモさんもお元気で」

個人名で呼ぶほど周囲を警戒しているフロローラと会長。

人の気配はしないが、それでも儲け話を他者に渡す気など毛頭ない。

フロローラはリーブス会長と護衛3名を見送った後、帰路に着いた。

ワグナー製菓は、3日後に行くことになったので予約を取る程度にした。

『さて辿り着いたわけだけど…』

フローラは宿舎に帰還して就寝部屋に入る事ができなかった。とてつもない負の感情を漂わせている2人の少女が居るからだ。女性の尊厳を失うことは無かったが、代わりに別の意味で尊厳を失いそうになっている。

『さすがに命は取られないでしょ』

ノックを3回やってドアを開けて入室するとフル武装したミーナとヒストリアと目が合った。

速やかに退室してドアを閉めて逃げようとしたが退路は、サシャとサンドラに塞がれた。

仕方なく窓から逃げようとしたら、負傷して治療中のはずであるミカサが外に待機していた。

負けはしないが完璧に包囲されたのを感じてフローラは動けなくなった。

「お帰りなさいフローラ」

「ずーっと逢いたかったの」

動けなくなったフローラの両腕は、ミーナとヒストリアにそれぞれ掴まれた。

男なら羨ましいと思う光景であるが、実際は精神を病んだ2人に掴まれているから質が悪い。

男の妄想のように都合が良い展開に転がるはずはなかった。

「ねえフローラ！なんで私たちから逃げたの？」

「わたくしは、トロスト区で用があつたからよ！看護されたら皆に逢えないじゃない」

「じゃあ、逢つた人を教えてよ？」

「……言えないわ」

勝ち目が無い尋問が開始した。

ミーナとヒストリアは精神的に壊れており、フローラのそのものを求めていた。

それなのに拒絶したせいで更に症状が悪化した。

「私たち親友でしょ？なんで秘密にするの？」

「ユミルなら身体の隅々まで教えてくれたのに？なんで教えてくれないの？」

巨人討伐に失敗して再び死後の世界を彷徨っている妄想をしているミーナ。大好きになったユミルを消失して、女神から墮天使になったヒストリア。彼女達の尋問には的確な答えなど存在しない。

フローラは無理やり長時間縛り付けるのが目的だからだ。

「フローラ、早く話してくださいよ！」

「スクープの匂いがするの！早くしてくれない？」

サシヤとサンドラもしつこく喰い付いてくるせいでコミュニケーションなどできるわけがない。

フローラは必死に逃げる策を考えたが上手く行かないと分かり、一昨日までの出来事を報告した。

知り合いの第一分隊の兵士が死んだこと、サシヤと再会するまでの道中。

毛むくじやらの巨人からはエレンと同じ巨人化能力者だったこと。

東防衛線やウトガルド防衛戦の話をした。

「それで？」

「わたくしはー」

「だから？」

「トロスト区で…」

「何で？」

追及されるならまだ良かった。

しかし、ミーナが自分の弱点を見つけたせいで思考が乱れた。

「ふーふー！あれ？感じてるの？もしかして！耳が弱いの？ねえフローラ？」

「聴覚が良いからその分、敏感なのよ！」

「やっぱり反省してない！」

ミーナとヒストリアの尋問は彼女たちが満足するまで続くとか分かっていない。

問題なのは、精神が病んでいるせいでどこまで続くか分からない。

その点、サシャとサンドラはすぐに居なくなると分かっているので対応は楽であった。

『トーマス：何で死んだの』

『ユミル：私を置いて行かないでー』

結局二人を寝かしつける事にしたフローラだったが、さすがに精神的に疲弊してそのまま寝た。

そのせいで丸一日ご飯を食べる事ができず、翌日の朝は午前4時からずっと食堂に待機していた。

「ここならお話できるよね？」

「フローラ、今日こそはつきり私を拒絶させないから！」

「分かりましたわ。朝食ができるまでお話を思う存分しましょう」

ミーナとヒストリアが目覚めるのは誤算であり、暫く愚痴を聴き続ける事しかできなかった。

それでも残酷な世界の中では数少ない癒しであった。

何故ならこれから大惨事の悲劇が起ころうとしているからだ。

『こーやって思う存分、会話できるだけ幸せな事かもね』

それはフローラも例外ではなかった。

81話 人類の希望であるエレン・イエーガーの価値

3つの50mの壁は、人類の活動領域を巨人から守るように囲んでいる。

そして円状の壁には、東西南北の4カ所に突出している城壁都市が存在する。

それは人に反応する巨人を惹き付けて防衛をしやすくする為に設置された。

しかし、壁の外側に突出しているせいで補給が断たれると即座に飢えると同意義である。

「巨人が出現してから4日目、未だに巨人が壁内で発見されておりません」

「うむ、ウォール・シーナの兵力も総動員しているが、特に問題があったとは聴いて無いな」

駐屯兵団第一師団精鋭班の兵舎でキッツ・ヴェールマンは部下のリコからの報告を聴いていた。

現在、ウォール・ローゼ内の住民は、ウォール・シーナの旧地下都市に避難している。壁が突破された際の模擬訓練通りに避難させたが様々な問題が発生した。

一番大きいのが、想定された通り、人類の半数を喰わせる食料の備蓄は1週間が限界だった。

「兵団上層部は、安全が確認次第、避難民を順々にウォール・ローゼに送還せよとご命令です」

「何故、巨人が発生したのか！その原因が分からぬ以上、再び巨人が出現するのだから」「それと問題なのは、現在トロスト区及びクオルバ区の補給が途絶えております」「そんなもの分かっている」

ウォール・ローゼのトロスト区からクオルバ区の間で巨人が出現した。

つまり、そこから巨人が壁内に侵入してきたと結論付けられる。

そのせいで、商人や兵団の輸送団が怖気づいてローゼ南西部の補給が期待できなかつた。

「対策はできているのか？」

「リース商会とマルレーン商会のおかげで、なんとか我々は飢えずに済んでいます」

「速やかに巨人が出現した原因を特定したいものだ」

キッツは、民間人が怯えて暮らしているのに心を痛めており、速やかに安全を確保したかった。

ウォール・シーナではローゼどころかシーナの住民の半数も養えない。

いつそトロスト区で義勇兵を募って壁内の搜索をさせようか考えるほど追い詰められていた。

「隊長！第18回壁内巨人搜索部隊の報告をしに参りました」

「イアン、簡潔に問おう。巨人もしくは、穴を発見したか？」

「いえ、双方とも発見できておりません!!」

イアン班長の報告を聴いてキッツは予想通りの内容でため息を吐いた。

何としても数日以内に壁内が安全だと宣言しなければならぬ。

だからといって、今は安全だからと言ってそれが続くとも限らない。

今度、巨人が出現したら避難民の人口を養えなくなると同時に兵団の発言力が信用されなくなる。

「しかし、今回の調査で奇妙な点がありました」

「よし言ってみろ。些細な事でも重要な手がかりになるかもしれないからな」

「ローゼ南部にある巨人に破壊された複数の村で馬が残されているのを発見しました」
「ん？」

キッツは、今の報告を聴いて違和感を覚えた。

リコも巨人に襲撃されたのに馬が村に残っているのに疑問を感じた。

「馬が？」

「はい、詳細に調査すると家屋が内側から破壊されてました。いえ、考えたくないのですが……」

「つまりなんだ。巨人の正体は村人で、巨人化して壁内人類を襲撃したとも言えるのか？」

「……あくまで私の仮説に過ぎません。しかし、さきほどの情報は確かです！」

この場に居る誰もが否定できなかった。

何故なら巨人化できる人間は最低でも4人居た。

つまり壁内人類が巨人化しても可笑しくないという事である。

「しかし、その村々では血が一滴も見つかりませんでした」

「血痕？」

「エレン・イエーガーの例では、自傷行為をすると巨人化できます。それが無いとすると……」

「自傷行為で巨人化したのではないという事か！」

僅か数か月で状況が大きく変わった。

100年以上、壁内が平和に保たれていたのが、もはやどこも危険地帯となっている。シーナに避難している住民の中に巨人化できる能力者が潜伏している可能性もある。イアンの報告を聞いたキッツは更に頭を痛めるしかできなかった。

「隊長！ご提案があります！」

「どうしたリコ？」

「エレン・イエーガーと接触し、情報を共有をした方が良いと提言します」

キッツは、エレンを異端と判断して排除しようとした。

結果的に壁内人類の味方と判明したが、未だに得体が知れない存在。

いつ暴走しても可笑しくないので未だに彼と接触するのを恐れていた。

「幸い、エレン・イエーガーはこのトロスト区で待機しております！面会されては？」

「……私はこれから街の哨戒任務に行く。代行はイアン、貴公に託す！」

「ハッ！」

「隊長、私もお供します」

キッツは隊長代行をイアンに移行し、リコと共にトロスト区の哨戒任務に出た。

街は復興したとはいえ、未だに瓦礫が転がっており、人々の表情は暗い。

希望に満ちていた活気ある街は、巨人によって奪われて更に失う可能性があった。

「隊長！あそこで子供たちが遊んでおります！」

「まだ、この地に子供が残っていたのか……」

「我々の努力で治安が向上した影響ですね」

「そうか……まだ希望はあるか」

トロスト区は人口の3割を喪失し、3割程度の人口しか戻ってこなかった。

治安も悪化し続けていたが駐屯兵团や商人たちのおかげで立ち直れた。

今では、こうやって子供たちが外で遊べるまで治安が改善したのを目の当たりにしたキッツ。

特に意識したことは無かったが、次世代には刃を取ってもらいたくないと感じた。

「ふん！親御さんは何をやっているのだ！子供だけで遊ばせるなど!!」

「近くに駐屯兵4名が見張っています。おそらく彼らに任せているのかと…」

「我々は子供の御守り役ではないのだぞ！全く、壁内に巨人が出現したというのに暢気な事だ…」

かつてキッツは幼少期から兵士になって人類を守るといふ夢があった。

その夢自体は叶ったが、実際はいつ人類が減んでも可笑しくない現実に蝕まれた。

彼らには刃を持たせない様に努力するつもりである。

憧憬しょうけいの眼差しを向ける子供たちに彼は手を振って、早歩きでその場から離脱した。

「ねえ、ミーナ。いつになったらわたくしの手を放してくれるの？」
「フローラが私から逃げなくなったら！」

同期であるミーナに目を付けられたフローラは何とか振り切ろうと考えていた。騙して逃げ出しても良いが、さすがに親友相手にそんな事をしたくないのが本音だった。

「よおフローラ！女の子とデートか？」

「クラスさん、冗談でも言っただけで良い事と悪い事がありますわよ」

「誰？この人？」

「調査兵団の第三分隊所属のクラスさん、手が器用で工兵経験がある人よ」
「ふーん……」

ミーナは親友と親し気に話しかけてきた男を見た。

第一分隊のゲルガー先輩と同じリーゼント頭で油の匂いがして嫌になった。

「デイルク団長代行は、お元気ですか？」

「マレーネに酒を強請られて兵団と板挟みになってるぞ」

「それは残念ですわね。そういえば、壁内の警備任務があるかと思いましたが何もないですね」

「新兵なら駆り出すべきなのだが、色々あつたせいで、あえて任務を指名してないってわけだ」

「わたくしの休暇届は、いつ受理されるのですか？」

「状況を考えてみるよ。まだ壁内に巨人が居るかもしれないって言うのに何でお前は」

段々、フローラと親しげに話している兵士に嫉妬した。

誰とも仲良くなれる親友であるが、それだけ自分と過ごす時間は減るからだ。

ここだけ見ても調査兵団の団長代行と知り合いの兵士と世間話で自分抜きで盛り上がっていた。

「フローラ！早く行こうよ！」

「おっと彼女を怒らせてしまったようだな！」

「用があるならすぐに行きますけど……」

「残念ながら現時点では、お前を徴用するほどの事態にはなっていないぞ」

フローラは大義名分で親友から離れられるチャンス逃してしまった。

クラスと別れた以上、どうやってミーナを満足させられるか必死に考えていた。

「あそこに居るのエレンじゃない？」

「本当ね。オルオさんとペトラさんが居るとはいえ、こんな無防備で歩き回るなんて」

「誰？」

「エレンを守っている調査兵団の選りすぐりの護衛集団よ」

ミーナはまた置いて行かれた感じがした。

そもそも入団したばかりの新兵がそこまで先輩方と仲良くなっている事自体が可笑しい事である。

彼女からすれば、どんどんフローラが遠くに行ってしまう感じがして苛立ちがあった。

「いつまで気を病んでいるんだ。俺様を見習って堂々と歩けば良いんだ」
「オルオさん、オレは兵団の一員なのに任務の度に何もできなくて……」
「ちよつと力がある新兵如きが調査兵団の中核を担えるわけないだろう」

オルオからすれば、新兵如きが自分を越えられるとは思っていない。

何故なら自分は特別であるうえに努力してここまで這い上がってきたからだ。

さすがに兵長やミケ分隊長には実力は及ばないと思っているが、三番手なのは間違いない。

悩み過ぎるエレンには、天才ながらも実績を地道に積み上げていく自分を見習って欲しかった。

「とつくにフローラに追い抜かれた奴が何か言ってるわね」

「あいつは例外だ！なんだよ巨人の首を刎ねて討伐するって！あり得ないだろう!!」

「天才で実力者のオルオが真似できないと思うけど？」

「腕を痛める非効率なやり方などやらん主義でな！兵長の技を次世代に伝えるのが俺の役目だ」

「素直に認めればいいのにね…」

そんなオルオが仮想敵にしているのがエレンと同じ新兵のフローラだ。

公式記録が何故か存在しないが訓練兵時代から壁外任務を行なっていたので思う事はある。

いわば、質が悪い事に非公式にせざるを得ないほど巨人を討伐している化け物だった。

リヴァイ班で奴に対抗しようと何度も告げたが、自分だけでは太刀打ちできないという事だ。

もし勝てるのであれば、「俺の戦績のサポートにできるようになれ」と発言するからだ。

「エレン！ペトラさん！オルオさん!!」

そんな事を考えているとヤバい奴が来た。

リヴァイ兵長が人類最強の男であるならば、あいつは人類最強の女である。

兵長が短期決戦で巨人を全滅させるなら、あれは長期戦に持ち込めば同数の巨人を狩

れる化け物。

それでも臆さないオルオは見栄を張って彼女の前に出た。

「フローラ！なんで俺様を最後に呼んだ!?!そこは先輩を気遣って真っ先に呼ぶべきだろうが！」

「すみません、見つけた順でお呼びさせて頂きましたので、こうなりましたわ」

「次回からは気を付けろ！」

「申し訳ございませんでした！」

調子に乗っているフローラを先輩を敬うように躡けて満足してドヤア顔になったオルオ。

それを見てミーナとペトラが彼を不快な視線を向けているのに気付く事はなかった。

「フローラ…お前は良いよな」

「えっ？」

「オレは兵長たちに守られてばかりで巨人化も制限されてる……お前みたいに戦いたいのに！」

エレン・イエーガーという男は、親友で同志のフローラ・エリクシアという女に嫉妬していた。

自分と違って多少の無理ができる上に自由に街を移動できるし、何より巨人と気軽に交戦できる。

生存競争において男は、他のライバルを出し抜く為に名声と功績と実績を求める性がある。

ライバルとして認めた女が活躍しているのを指を咥えているほど、悔しい事は無かった。

「わたくしたちは、壁内人類を守る為の消耗品だからね。エレンと違って酷使されるのよ」

「オレは巨人を討伐しようとしただけで怒られるのに！お前は褒められるのは羨ましいよー！」

「良いじゃない。壁内人類が貴方を認めているって事だから。使い捨てるの駒よりマシな扱だよ」

「オレが無力のせいで、先輩方が大勢死にしまった。みんな、オレを過小評価し過ぎなん

だよ……」

エレンは未だに自分の無力さのせいで、調査兵団の兵士を死なせた事に後悔していた。

過去の経験と実績から『巨人化できる』という力があるだけの凡人だとエレンは自覚している。

もし立場が逆転していたならば、大勢の兵士が生還し、身の丈が合う自分も活躍できたはずだ。

だからこそ、特別な力が無いのにリヴァイ班と互角以上の実績と実力があるフローラに嫉妬した。

「……なあ、フローラ。オレは……どうすればいいと思う?」

「まずは巨人化の能力を使いこなすのが先ね」

「お前もオルオさんとペトラさんと同じ事を言うのか?」

「エレン、貴方は切り札なのよ!カードを切った時に動けなかったら意味ないでしょ……」

フローラも含めて全員に同じことを言われているがエレンは納得できなかった。

巨人化できてもあつさりやられて拉致される事がここ最近で2回もあつたからだ。

立体機動の訓練が活きておらず、ただ制限をされた毎日を送るのはもう嫌であつた！

「じゃあ、逆にオレは何ができるんだよ!!」

「巨人化した時の爆発で大量の巨人を吹っ飛ばせるじゃない」

「えっ!?!」

ペトラやオルオがエレンを諫めようとした瞬間、フローラから爆弾発言が飛び出した。

言い出しつぺのエレンも彼女が一体何を言っているのかと戸惑うほど衝撃な一言だった。

「ストヘス区で女型の巨人が巨人化する際に爆発して死傷者が出たのは分かるわよね？」

「ああ、そのせいで…能力者を捕縛する兵士がみんな死んじまつたな」

ストヘス区でアニ・レオンハートを捕縛しようとして突撃した民間人に扮した兵士は

全滅した。

エレンたちはミカサのおかげで地下室に逃げ込んだおかげで助かっただけである。フローラに至っては、逃げるのが遅れて一回、気を失うほどの爆発であった。

「じゃあ、同じようにエレンが巨人化しただけで巨人の大群を吹っ飛ばせるじゃない」「…うまくいくものなのか？」

「ウトガルド城で同期を守っていた先輩たちは、巨人の数の暴力で喰われてしまったわ」「つまり、そうなりそうな時に巨人化するだけで先輩方は助かるのか？」

「あくまで仮説だけど、エレンが能力を使いこなせば起死回生の一手になりそうじゃない？」

巨人化による爆発を想定していなかったエレンは考え直した。

良く考えてみれば、自分が巨人化した時にフローラを吹っ飛ばした記憶がある。

あの時は、壁外で初めて巨人化した時で、右手だけ巨大化して、リヴァイ班に警戒されていた。

でも、そのおかげで爆発が小規模であり幸いにも死人は出なかった。

コントロールできなければ、いつ、あの悲劇が起こるか分からない。

爆発しても可笑しくない爆弾を制限するのは当たり前であり、ようやく自分の立場を理解できた。

「そうだよな…とにかくやってみるしかねえよな！ハンジたちさんにも協力してもらおうよ」

「おいおい、俺様の言う事を従っていれば、ゴールはすぐそこにあるんだがな」

「こいつ、直属の後輩ができたのが初めてで無理に先輩面してるだけだから無視して良いわよ」

「ペトラ、いくら俺の女房面したいからと言って、さすがに辛辣な言葉過ぎないか？」
「偉そうな男は嫌われるって忠告してるだけなんだけど…」

エレンもペトラもオルオですら発言する単語を選んでいた。

理由は、フローラが連れて来た新兵のせいであった。

「えーつと、エレン！私、応援してるから!!頑張って巨人化をコントロールしてよ！」
「ありがとうミーナ」

アニ・レオンハートの正体が女型の巨人とは公式発表がされていない。

その彼女と親友であったミーナにそれまで情報を伏せるように釘が刺されていた。

口が悪いオルオも実は、単語を選んで発言しており気遣いができる男である。

「結果を出さなきゃいけないえ……死んでいった人の命を無駄にしない為に！」

エレンの精神が向上心に繋がったのは良いが、代わりに自分を追い詰めていた。

ミーナと本人を除く全員がこのままでは成長するどころか悪化すると分かっている。

フローラにミーナの精神状況を知らされたエレンは、話の話題を変える事にした。

「ところで、フローラ！ミーナ！お前たちにはオレはどう見えるんだ？」

「何って同期でしょ？一緒に3年間訓練してきた兵士になって巨人の全滅を夢見るエレンでしょ」

「私は、肉の誓いで同志として、一緒に巨人を滅ぼして奪還する仲間よ！一緒に頑張ろう！」

「ありがたいな、オレを化け物と思わないのはお前くらいだ」

巨人化できる人類のうち、唯一人類の味方であるのがエレンである。

ユミルは不明であるがライナーに同行した時点で、壁内人類を想っていないのは明白である。

そのせいか、再び調査兵や駐屯兵からも疑いの目を向けられるようになっていた。

同期の言葉を聴いて、104期兵は全員同じ気持ちだと思い、彼は少しだけ安心できる事ができた。

「ところで皆様はどこに向かわれようとしていたのですか？」

「装備の補充に来たのよ。壁内は安全じゃないからいくつあつても過剰じゃないから」

「俺様が居れば、負けはしないが万能じゃないからな。仕方なくここに来たって事だ」

「とりあえず、フローラたちも装備の点検を忘れないで。いつ駆り出されても可笑しくないから」

「はい、心に留めておきますわ。先輩方もお気をつけて！」

フローラは、先輩たちの話を聴いて例の補給基地の事を思い出していた。

王政幹部を脅迫して、補給拠点を壁内の数力所に作る計画を無理やり承認させていた。

しかし、想像以上に巨人が壁内に侵入してきたので、更に重要になっていると実感している。

ウトガルド城で交戦していたゲルガーとナナバの敗因は、刃とガスが切れたせいであつた。

気遣いが優しくて分かり易いペトラの忠告を深く心に留めてその場を後にした。

「待つてよフローラ」

あつさりエレンと別れた親友に困惑しながらもミーナは必死にその後ろ姿を追いかけた。

自分が知らない世界で道標になってくれる存在から離れたくない様に手を握り締め同行した。

「ねえ！どこに行くの!?!」

「馬小屋からライリーを連れ出して壁内を走らせるの!」

「巨人が出るかもしれないんだよ!?!」

「むしろ、幸運じゃない。出ないせいで出現した場所が特定できてないんだから」

フローラはライリーをウォール・ローゼ内で走らせるつもりである。

長時間走らせないという事を聞かない暴れ馬なので日課になっている。

幸いにも時間指定など無いので思い付きで行動できた。

…というのは建前でミーナとそろそろ別れたいのが大きかった。

「私も付いて行く!」

「ミーナの配備された馬はそこまでスタミナ無いでしょ?」

「だって、2人居る分、装備も2つあるから安心できるでしょ!」

「それもそうね!」

ウトガルド城で死なせた先輩たち。

もし、もう少し頑張っておけば彼らは生き残れたのかもしれない。

後悔しても遅いが反省して次に活かせる事はできる。

ミーナの提言を聴いてフローラは素直に納得して同行させる事にした。

1人分のガスボンベと刃で足りるとは限らないからだ。

「でも、装備が切れる前にここに報告するのが優先だからね？」

「フローラなら巨人を1匹残らず駆逐するんじゃないの!？」

「巨人の侵入ルートを特定したいから優先事項は、あくまで報告よ」

さすがに頭進撃でも壁内に巨人が出現したのは何か原因があると思っっている。

思いつくのは、殺したつもりで見逃してしまった髭もじや野郎である。

あいつの叫び声で巨人をけしかけられた記憶があるので巨人を操ってるのは間違いない。

次、見かけたら脳を真っ先に潰して思考できないようにするつもりだ！

もし、それで情報を引き出せなくても持ち物からある程度推測できると思っている。

「なんか怖い顔をしてるけど…何かあったの？」

「人類の仇である巨人を逃しちやっつてね。今度は二度と逃がさないと思っていたの」

「ライナーやベルトルトが人類の敵だったもんね。アニにも伝えてあげないといけないね」

ミーナは、新しく親友になったヒッチと共に4人でドーナツを食べる約束をしてい

る。

美味しそうにドーナツを頬張っていたアニが同期が人類の敵だったらどう思うのか。少なくともライナーやベルトルトを嫌っているがさすがに傷つくかもしれない。

その時は、いつも慰められていた自分が慰める番だと感じていた。

『そのアニがストヘス区を半壊させた元凶なんだけどね…』

フローラは親友にどうやって事実を告げようか迷っている。

日々、精神が悲観的になって悪化を続けており、鬱病になっているのを感じている。

こうやって会話しながら手を握っているのも、彼女に存在意義を見出している。

ようやく立ち直ってきた時に特大の爆弾をぶつけたくないのが本音である。

「わずか2か月ほどで4人も巨人化能力者が出たのよ。もしかしたらまだ居るかもね」

「信じたくないけど、ヒストリアにぞっこんだったライナーが能力者だったもんね」

「だから想像してない人物が巨人化能力者かもしれないわ」

「ストヘス区を半壊させた女型の巨人の正体もそれかも…絶対に許してはいけないわ

！」

ミーナの何気ない一言で事実を告げるタイミングを計るフローラ。いつそのこと、2人で馬を駆けている時に次げた方が良いと感じた。絶望はするが、少なくとも危険地帯なので自分に付いて来てくれるから。

「待ちたまえ！今、『ヒストリア』と言ったか!？」

「えっ？ヒス…「ミーナ!!」 んぐっ!？」

ミーナの何気ない一言を聞いたニック司祭が血相を変えて飛び出してきた。負の感情の「声」を聞いたフローラは相方を黙らせたが時遅し、バレてしまった。

「ヒストリアと言ったな？」

「いえ、ヒストリックな出来事が起き過ぎて色々大変だと思っていましたの」

「その兵士からヒストリアと聞こえたのだが!?!それに口を塞いでいるのではないかい！」

「気のせいですよ。重要な機密を漏らしちゃう子なのでちよつと罰を与えただけです」

ニツク司祭は、壁教の支部長と同格である主任司祭である。

フローラは、彼の負の感情を知って、クリスタの本名がバレるのがまずいと知った。

「では、何故黙らせている?」

「エレン・イエーガーが人類の味方という事実を揺るがす情報をカミングアウトしたせいですわ」

「情報?」

「ええ、エレンと仲が良い人物が敵という事が判明しまして…彼の価値が揺らいでいて…」

ヒストリアの名前が広がるのは双方ともデメリットしかないと分かったので必死に誤魔化した。

幸いにも親友が重要機密を漏らしていたのでちょうど大義はあった。

「そうか、私も特別兵法会議に参加したが、あいつは未だに人類の味方だと信じられん」「ええ、善良な王政民や兵団の常識を揺るがす存在なので壁外に隔離する声が根強いです」

「その通りだ！速やかに壁外に隔離しなければならん！ここは神聖な壁の領域なのだ！」

「ただでさえ、彼の存在価値が危ういのはこの子が不利な情報を漏らして困っているんですわ」

「んー!!んんん!!んぐ?!」

ニツク司祭の追及を適当にあしらって足掻くミーナを軽く小突いて全力でフローラは誤魔化した。

彼は怪しんだが、巨人化能力者の名前が聴こえたのもあってとりあえず追及を弱めた。

もし、壁内人類に巨人化能力者が複数居ると、ここに居る住民に知られなくなかった。教団の上層部からトロスト区に事実上左遷させられた彼は、住民の混乱を避けたかったからだ。

「ミーナ、兵士として秘密にしないといけない事があるわ」

「んんんー!!」

「反省したなら一緒に居てあげるわ。反省しないならちよつと隔離生活になるわよ」

「とりあえず、ヒストリアと自称した少女は居ないのかな？」

「あら、わたくしたちの知り合いにそのような少女が居るのですか？」

今度は、ニツク司祭が失言したのをフローラは見逃さずに追及した。

彼はすぐに自分の発言した意味を理解して引き下がった。

「そのような名前の少女を発見したら王政府に報告した方がよろしいのでしょうか？」

「いや、結構だ！居ないならそれでいい!!」

「ならいいのですけどね」

フローラは彼の反応で緘口令を敷く事は確定した。

真つ先にやるべきなのは、目の前で涙目になっている親友に対してだが！

「ニツク司祭、トロスト区の正門付近は治安が悪いです。あそこは避けた方が良くかと」

「ああ、私もそう思っていた。忠告を素直に受け取っておくぞ」

「行くわよミーナ。今度は口を閉じて馬小屋に向かいましょう」

「んー…」

ニツク司祭と別れたフローラ一行は、馬小屋に向かった足を進めた。

さきほどは人気が少ないのもあって助かったが、もし情報が洩れると厄介である。

第58回壁外調査を巡って王政幹部とヒストリアが意味深に会話していた時があった。

おそらく彼らの言葉を深読みすれば、名前がバレれば彼らから消させるのは明白である。

「良い？クリスタは自分が狙われないように偽名を使ってきたの。だから気軽に言っちゃ駄目よ」

「良いけど、小突く必要はあったの？」

「人は痛みを身をもって味わないと成長しないから……勉強代と思って我慢しなさい」
「はーい」

今度は不機嫌になったミーナの扱いにフローラは困りつつあった。

初めて親友になった片割れだからこそ、距離感というのは掴めない。

「あの人、知り合いなの？」

「まあね」

「いくら何でも知り合いが多くない？」

「確かに顔と名前を覚えるのが大変になってるわね」

「記憶力が良くて羨ましい！」

ミーナはフローラの人脈の凄さより記憶力と誰とも仲良くなれる能力に嫉妬した。

親友としてずっと一緒に居て欲しいのにその人物の数だけ自分に割かれる時間が少ないからだ。

「今度はキッツ隊長が居るわね」

「誰？」

「駐屯兵団の精鋭部隊の隊長よ！」

今度は、駐屯兵団の精鋭の隊長と知り合いなのが発覚した。

さきほどエレンを護衛していた人たちの名前すら覚えてないミーナは苛立ちを隠せなかった。

「その調査兵！哨戒任務を我々に押し付けて良い生活を送ってるな？」

「役割分担です。2個小隊に満たない規模の兵員で広大な壁内の哨戒はできません」

「では、いざとなったら巨人と交戦するのか？もちろん貴様を除いてだが……」

「もちろんです！壁内の住民を守る気持ちは兵団全員が思っている事なので……」

凶体がでかい分、高圧的で偉そうな男。

ミーナから見ればそう思うしかなかった。

何故親友が嬉しそうに会話できるのか分からないほど相性が悪い上官であった。

「もちろん、それは知っている。だが奴らはエレン・イエーガーを重視している感じがしてな」

「トロスト区の正門に空いた穴を塞げたのは彼だけです。扱いはさすがに違います」

「……私は未だにあいつが人類の味方なのか信じられん。ましてや他の能力者を知ればだ

……」

キッツ隊長は、エレン・イエーガーがスパイという疑惑を払拭できなかった。

他の巨人化能力者は、人類に打撃を与えているのでむしろ、エレンが異端に見えた。リコ班長の報告で理性が無いまま味方に攻撃を加えたという事実が更に疑惑を深めた。

人類の味方の振りをして、巨人共に壁内人類の情報を送っていると推理が頭に残っていた。

「ピクシス司令も認めておりますわ」

「司令のお考えには理解しがたい……あんな得体のしれない物を信じ切るなど……」

キッツは、あらゆる事態を想定して手を打っている。

門が再び破られても良いように幾度の策を巡らせてもなお、安心できない臆病者である。

エレンが100%人類の味方だと判明しない限り、気を許す事はできなかつた。

「隊長……司令の立案した奪還作戦に参加した者は、最後はエレンを信じて戦い抜きました」

「リコ、分かっている。だからこそ作戦は成功したのだからな」

「もちろん、不安定な彼の力に頼り続けるのは私も心配です」

フローラは、彼らが抱いているエレン像を否定できなかった。
未だに暴走するかもしれない強力過ぎる力。

さきほどエレンが悩んでいたように誰もが人類の味方だと証明できる物はない。

「失礼ながらも、兵士であるならば、上に従うべきだと存じ上げます」

「ほう？一兵卒ですらない新兵の貴様に私が説教されるとはな？」

「我々、104期南方訓練兵团もエレンを信じて奪還作戦に参戦し18名が帰還しませんでした」

「うむ、貴様らよりベテランの駐屯兵团ですら役立たずで、最終的にはエレン頼りだったからな」

「彼らは最後は、後悔していたでしょう。ただ、エレンが居なかったら無駄死にでした」

フローラは、無力さ故に大切な友人を救う為に100名以上の同期を見捨てて来た。

個人の實力では、どうしようもなく今ですら同時に相手にできる巨人の数は3体まで。

一斉に襲われれば、成す術もなく巨人の胃袋に収まってしまふ肉でしかない。

「イエーガー自身は、その事についてどう思っている？」

「彼は、今まで犠牲になった兵の事を想い、悩み、望まぬ力で苦しんでおります」

「：口だけならいくらでも言えるだろう」

「直接、彼を否定した隊長殿に直接面会して頂ければ、彼は前へと進む事が出来ます」

フローラは、駐屯兵团でも一目置かれている精鋭部隊をエレンの味方にしたかった。

調査兵团と104期の連中では、エレンを王政から守れないからだ。

とにかく頼れる味方が居なければ、彼はずっと自分について悩み続けて前に進めない。
いい。

一度、エレンを拒絶したキッツ隊長が味方になるほど頼もしいことは無い。

【小鹿】という異名があるほど、危機に関して敏感な彼が味方なのは説得力が段違いだからだ。

「トロスト区の水門で隊長殿が言及した事が先日、事実となりました」

「『巨人が人に化けて人類を欺いていた』という事か？」

「はい、仰る通りです！その素晴らしい洞察力と経験で、今度こそ彼の正体を見抜けるはずですよ」

「お世辞は要らん……私はただ、人類の事を想って行動しただけだ」

とにかくキッツ隊長が味方ではないと、エレンの後ろ盾がおらず王政から守れなかった。

一応、憲兵団の保守派も建前では、エレンを解体すると言っているが、味方に近い。ただ、この壁内の政治の中心は、貴族で構成された王政の議会である。少しでも彼らを牽制するのは、頼れる仲間が欲しかった。

「つまりフローラは、隊長にエレンと面会して欲しいという事か？」

「リコ班長、ご明察通りです！客観的に判断できるようになったからこそ面会して頂きたいですよ」

「ほ、本当にやるつもりなのか……？」

元からリコ班長もキッツ隊長をエレン・イエーガーと面会させたかった。

だからフローラの助け舟を借りて、わざと彼女の意見で行かせようとした。

副官である以上、理由もなしに上官の行動を無理やり変えるなどできないからだ。

「…そこまで言うなら面会してやろう。ただし、私は印象で判断するからな！」

「では、スケジュールの空いている日に面会させます。指定日は独断でよろしいでしょうか？」

「構わん。エレン・イエーガーの都合も考えてやらんといかんからな」

「キッツ隊長、お心遣い感謝いたします！」

キッツも褒められて悪い気がしなかったので、面会日の決定は副官とフローラに任せ
た。

寛大な態度に見せかけて、副官を立たせて有利にし、代行できる能力の育成させる魂
胆もある。

次世代の精鋭部隊の隊長の育成を考えているので、上に立つ者の道を示す必要があつ
た。

彼は、後に駐屯兵团第一師団精鋭部隊の隊長となる女の成長を楽しみにしていた。

『全く口を挟めなかった…フローラ、いつも…こんなやり取りしてるの？』

ミーナは、フローラとリコ班長と呼ばれた女兵士のやり取りを見ている事しかできなかった。

親友がコミュニケーション力に秀でていて、メンタルケアの達人なのは知っていた。まさかここまで交渉術が凄くて、上官とやり取りできるとは思わなかった。

『王政幹部である大總統と内務大臣を脅迫して誘導させるより楽だわ』

壁内人類の支配者である2人を脅迫してまで交渉していたフローラからすれば楽だった。

自分の抹殺命令を下してきた存在と面を合わせて交渉する事自体が間違っているのは確かである。

少なくとも味方である彼らと交渉するのは、巨人を相手にするより断然に楽としか表現できない。

『ミーナの機嫌を取るより断然楽ね！これで少しはわたくしを見直してくれると良いけど…』

キッツ隊長をエレンと面会させるより、ミーナに許してもらおう方が難易度が高かった。

一見、可笑しいようでミーナが居なければ、フローラの女子力はあつという間に喪失する。

だからこそ、フローラは親友を見捨てないし、見捨てられない。

彼女が居なければ、人の皮が剥がれて「エルディアの悪魔」しか残らないからだ！

82話 フレーゲル・リーブスの約束

「おいフレーゲル！」

「なんだよ親父？」

「會長って呼べって言ってるだろうが！」

「家の中なんだからこれで良いだろう!？」

フレーゲル・リーブスは、リーブス商会の會長デイモ・リーブスの長男である。

腹は妊婦と違って役立たずの脂肪で膨らんでおり、親の七光りを体現する馬鹿息子だった。

顔を満に洗わないせいでソバカスがニキビで覆われて更に豚に見えた。

そんな彼は気持ちよく昼寝していたら父親に叩き起こされて不機嫌さをアピールする為に睨んだ！

「全く！お前といい！娘といい！俺の血はどこに流れているんだか…」

「髪の毛！」

「じゃあ、お前は将来、俺みたいに側面以外禿げるな！ご愁傷様でした!!」

「親父！気にしてる事を言わないでくれ！」

「大丈夫だ、俺が禿げ始めたのは三十路後半だ！まだしばらくは大丈夫だ！」

「充分、はえーよ!!」

フレーゲルは、はつきり言つて商人としての素質は無かつた。

不衛生で油で輝いている顔を見れば社交性皆無で身だしなみを整えていないのが分かる。

これは取引先に内心で馬鹿されるといふ商人としてはあつてはいけない事である。

この時点で失格だが、食べ物と女の名前以外の記憶力は皆無で指示待ち人間。

正直、傀儡にされて部下に商會を乗っ取られた方が色んな意味で長生きできる有様だつた。

「で？何の用？俺は忙しいんだけど！」

「お前に逢わせたい女が居るんだが、やっぱ止めておいた方が良いな！」

「なんだよ親父！勿体ぶらずに教えてくれよ!!」

「そういう所がダメなんだ！まず推理して仮説を立てて話してみろ！」

父親から叱られたフレーゲルは、必死に自分に逢わせる女の事を考えていた。お見合いならば、こんなに乱暴に起こさないし、家族が大騒ぎしているはずである。とはいえ、それ以外思いつかなかったので、考えた結果をそのまま伝えた！

「分かった！俺のお嫁さんだろう！全く親父は水臭いんだから…さ…あ？」

ところが父親からの返答が帰って来ない所か悲しい顔をしてしまった。

さすがにそんな事は無いと思ったが適当な事を言い過ぎて失望されたと感じた。

何とか名誉挽回しないと、快適な家から追い出されると慌てて何か告げようとした。

「珍しくお前にしては、良い線いつてるな」

「えっ？」

「正確に言うとお前が幼少期に結婚を約束した女だ」

「ん？そんな馬鹿な!？」

父親から告げられてフレーゲルは頭を抱えた。

自分が駄目人間だという事は自覚しており、そんな都合が良い女など居ない。そう居なかつたはずである。

「あれ？なんか昔の頃、一緒に遊んだ女の子が居た気が…」

「そう、そいつだ…！お前が幼少期に世話になった少女さ」

「でもよ！あそこはシガンシナ区だ！もう逢えるわけないじゃないか！」

「そいつが生き延びてな…死ぬ前にお前と逢わせてやりたいと思つたんだ」

珍しく氣遣われたドラ息子は、父親の意図が読めなかつた。

死ぬ前つて事は、余命が分かつており長く無いという事である。

「つまり、もうじき死ぬのか？」

「そいつ、自体はピンピンしてるが、このご時世だ！いつ死んでもおかしくねえ」

「でもよ！それは俺たちも同じじゃん！」

「そいつはな！兵士なんだよ！しかも調査兵团！本当に頭が可笑しいぜそいつは…」

フレーゲルの記憶には、その少女の記憶がほとんど抜け落ちていた。

ウォール・マリア陥落から大混乱してようやく落ち着いたと思つたらトロスト区防衛戦。

再び、商会はそれどころではなく一時的とはいえ会長の息子の食い扶持すら養えなくなつた。

そのせいで、当時の記憶はほとんど抜け落ちていた。

「お前さ、男が女にした約束を覚えてなきや駄目だろう！商人どころか人として失格だぞー！」

「そういつてもさ、そんな話なんて覚えてねえよ。もし指摘されたらどうすれば良い!?」
「その点は安心しろ！向こうも忘れてるからな」

「はあ!?!」

父親に翻弄されているドラ息子は、一瞬殴つてやろうと思つたほど混乱した。

つまり双方とも記憶が朧げで再会しても感動など無いのに逢う必要があるのか疑問だつた。

「あーあー勿体ねえな！お前の母ちゃんに出会わなかったら結婚しているほどの女なの

になー！」

「あー！もう！何だよさつきから！俺を馬鹿にしにきたのか!?」

「そいつのおかげで俺たち！商売繁盛してるんだよ！この大馬鹿野郎!!」

リープス会長は、フローラの完全劣化版のこいつを追放して、彼女を養子にしたいくらいだった。

巨人を討伐し過ぎて勲章を売り払う余力がある身体能力は言わずもがな。

商人としての交渉術や僅かな情報でリスクヘッジを考えて即座に実行する行動力。

調査兵団の新兵でありながらピクシス司令やザックレー総統とのコネや人脈がある。

そして何より複数の商会や商人ギルドと有利に交渉して双方とも儲けられる手腕。

なにより、そんな才能の塊が容易く散ってしまう環境に居る事を悔やんでいた。

「怒鳴られてもどうしようもねえよ！というか、いつ逢うんだ!？」

「翌日の午後3時に茶菓子店って集合する事になっている」

「もう24時間無いじゃないか!？」

「ああ、そうだ。話す内容をよく考えておけ。もう二度と逢えないからな」

自慢ではないが会長の勤はよく当たる。

それも悪い方に当たるのだからついていない。

胸騒ぎがして右脚の膝裏が痛くなるといつも大惨事になるのを知っている。

その時、脳裏に浮かんだ事が酷い事になるのを知ってるから息子を彼女と逢わせようとした。

そうしないと二度とフロラ・エリクシアという女に逢えなくなる気がしたのだ。

「つまり何をすれば良いんだ？」

「顔でも洗って幼少期の質問でも考えてろ」

「そんな事で良いの？告白とかはしなくていいのか？」

「もうあいつは、壊れちまってな…巨人と死ぬまで戦い続けて死ぬしかないんだ…」

フレーゲルは、父親の表情を見て何とも言えなくなつた。

それは、悲しみでもあり怒りでもあり自嘲している笑みでもある複雑な表情だつた。

仮面を複数使い分けて本性を中々見せない父親のありのままの表情を見てしまった。

それだけ責任重大だと思ひ、とりあえず好きな食べ物や誕生日を訊こうと考えた！

「いいかフレーゲル。昔の約束くらい男なら思い出してやれよ」

「ああ、分かったよ」

「商人の跡継ぎとして約束を忘却するのは恥どころじゃないからな…」

デイモ・リーブスもフローラの父親と結んだ約束を忘れていた。

とても重要な事であったが、もはや誰にも分かることは無い。

息子を叱つていながら、特に思い出す事ができず自嘲するしかなかった。

「ふふふ、人払いが成功したわー」

リーブス会長と面会するフローラは、邪魔者のミーナを駐屯兵団の共同訓練に参加させた。

人手不足のせいで、トロスト区に居住する健康的な男女をも動員する可能性があったからだ。

土嚢作りや防衛柵の作成など基礎をど覚える訓練であるが、非力なミーナにはびつた

りだろう。

「ごめんくださいー！」

「おや、いつらつしやい！」

「午後3時に予約したフローラ・エリクシアです！」

「息子の同期なんだからそこまで言わなくていいのに……」

「やはりこうやって挨拶するのが好きなんです！」

フローラは集合時間の30分前にワグナー製菓に着いて予め注文した茶菓子を確認した。

ストヘス区のドーナツを参考に造り上げた物である。

オリジナルと比べて腹は膨れないが、本家と違って型なので量産しやすいメリットがある。

「この蜜が美味しそうですね！」

「息子のトーマスが好きだった蜜だよ！あの子は何でもこれを掛けて食べようと……」

「……えーつとごめんなさい」

「こちらこそゴメンね！フローラさんと逢うとどうしても息子を思い出してしまつて…」

トーマス・ワグナーは、104期訓練兵でありフローラやミーナと親友だった。

あの日、奇行種に丸呑みされて討伐した時には死亡していた。

遺品は、ミーナが彼のワッペンを持っているだけで他は、ほとんど残っていない。せいぜい店に額縁で飾っている彼の手紙しかなかった。

「ところでミーナちゃんは呼ばないの？」

「取引先と打ち合わせをしたかったです。ここは共同で出している店なので…」

トーマスの母親は、息子の同期に経営が助けられていた。

当然、近所にバレて騒動になったが、今では兵団の御用達になるほど人気店になった。

そこで周りの店は、その顧客を取り込もうとした結果、裕福で治安が良い場所になった。

「親父!?!どうやって入れれば良いんだ!?!」

「お前の頭には何が詰まってるんだ…」

リーブス会長と若い男の声が聴こえてフローラは世間話を止めた。

何故かのれんに手古摺っているが、どう見ても護衛には見えないほどの体形だった。

「潜れば良いだろう！」

「そうだった…」

「挨拶は？」

「今からする予定！」

「今しろよ！」

コントでもやっているのかと疑問に思うほどグダグダだった。

一応、トロスト区の経済を支配している商会のトップがこんな有様では今後が心配である。

「いらつしやいませ!!」

「えっと！おはようございます！」

「午後3時前なんだが？」

「じゃあどうすればいいんだよ!？」

「もうお前、黙ってる!？」

「痛い!？」

ついに殴られたフレーゲル。

赤っ恥をかいたリーブス会長は、息子を殴った後、すぐさま表情を変えた。

「すまねえな俺のせがれが迷惑掛けちまった。午後三時に予約したデイモ・リーブスだ」

「お待ちしておりました!こちらの席におかけください!？」

「ほら、痛がつてないで立て!？」

「…は、はい」

全てが初めてのフレーゲルは大人しく椅子にこしかけた。

すると正面には栗色の髪を後ろで束ねて三つ編みをしている女兵士と視線があつた。

家族以外の女と接点が無いが何故かそこまで緊張はしなかった。

だが、何故か振り回されそうな予感はある。

「こんにちは。わたくしの名前はフローラ・エリクシアと申します」

「えーつと俺の名は、フレীগエル・リーブスだ！」

「デイモ・リーブスのご子息の噂は良く知ってますのでいつも通りくつろいで大丈夫です」

「じゃあ、遠慮なく！」

名前を聴いても全く感慨が無いので言われた通りフレীগエルはくつろいだ。

父親からの視線は気になっているが、さすがに目の前に来客が居る手前で叱らないと思っている。

そして真ん中に穴が空いた円状のお菓子があつたので手に取って食べた。

「うぬ!? うめええ! 蜜の甘味と感触が噛み合つてとろけるぜ！」

「お前は、とりあえず手を拭くとかしないのか？」

「いつも通りやって良いって言われたからそうしただけど？」

「もう、リーブス商会は終わりだな……」

父親が額に手を当てているのを気にせず、2個目のドーナツを頬張るグレーゲル。そして2個目を胃の中に直行させた時、目の前の女が食べていないのに気付いた。

「食べないのか？」

「ええ、何かお話があると思うので：何かと思っていたのですが」

「俺も知らねえんだけど、ここのお菓子旨いよな！今度買って食べてみるよ」

「そうですわよね。ようやくここまでちゃんとしたお菓子になりましたもの」

「最初は違ったのか？」

「もちろん、こここの店主やその協力者が試行錯誤の先に生み出した物ですから」

こんなに美味しいお菓子を食べないで話を続ける兵士に疑問には思わない。

この店がリーブス商会在投資しているなど夢にも思わなかった。

「ところでお前：じゃなかった！あんたと約束していたそうなんだが何か知ってるか？」

「いえ、わたくしも覚えてませんわ」

「そうだよな…！もうそんな昔の事なんて覚えていないもんなー！」

一瞬フローラの眉が動いた感じがしたが、特に気にせず話を続けるフレーゲル。父親に至っては、護衛か部下で優秀な人材に会長を継がせようと考えていた。

「ところで兵士がこんな所でお菓子を喰ってて良いのか？」

「少なくとも士官クラスは貴族と接待がありますので、慣れる必要はありませんね」

「そーなんだよな！俺は会長になれる頭じゃないので社交界に行けっとうるさいんだ」

「もしかして、お名前とか顔を覚えるのは苦手ですか？」

「そうなんだよ！何でみんなあそこまで覚えられるんだ!？」

親しい女友達のように愚痴をこぼしているが、特に拒否反応は無くしっかり聞いてくれた。

それだけで母親より優しい感じがして次々に本音を暴露していく。

「顔の特徴を覚えるのが楽だと思えますよ」

「例えば、どんな感じにすれば良い？」

「そうですね。フレーゲルさんならソバカスに膨よかな身体、オールバックの髪型」

「覚える事多すぎじゃないか」

「これは、慣れるしかありません」

相手の提言を聴いても無視をしたり駄々を捏ねても怒ることは無い。

若い女性に向かって言うのは恥であるが何故か口から出てきてしまう。

まるで女に誘い込まれている様に自分の習性や性格を把握されているのに彼は気付かなかった。

「ところで兵士なんだよな？何で兵士になったんだ？」

「両親の仇としか言えませんがね。シガンシナ区陥落で両親が死んでしまったので」

「それはこつちも同じだな！トロスト区も巨人のせいで散々な目に遭ったから！」

「トロスト区もシガンシナ区も超大型巨人のせいで巨人に蹂躪されましたからね…」

「それとー」

ついに腰掛けたまま倒れかけた会長を護衛が支えて、水や茶菓子を注文し始めた頃。何気ないフレーゲルの一言でフローラの雰囲気が変わった。

「記憶喪失したんだろう？ 記憶を取り戻そうと考えたのか？」

「記憶……？ いえ、考えた事ありません」

フローラには恐怖の感情は存在しない。

シガンシナ区で鎧の巨人がマリアの扉を破った時の破片で両親が死んだ時！

ショックで記憶喪失したせいと同時に「恐怖」という感情を喪失していた。

だが、さきほどの質問には、彼女の表情には『恐れ』があつた。

「なんでだよ！ 今までの両親の記憶や友達、知り合いの過去が思い出せないんだぞ！」

「立ち止まって考えるより今を生きていきたいのですわ」

「だってさ！ 今まで両親に愛されてきたわけだろう！？ 思い出せないと悲しいじゃないか
！」

フローラには恐怖という感情自体は存在しない。

そのせいで頭進撃とか106回も医務室送りされても平気だった。

ただ、それは恐怖という足枷が無いから今まで頑張つて来れた。

「今は、頼もしい同期や戦友、先輩、知り合いがいるのですもの。問題ありません」
「そうじゃないだろう！シガンシナ区の生き残りとして、先人の歴史を紡ぐ義務があるはずだ！」

フローラは過去など興味が無かった。

むしろ、鎧の巨人を討伐する未来、もしくは現在は現在を重視していた。
ただし、ミカサの昔話には興味が有り、何度も話を聴いていた。

「もちろん、今度忘れても良いように手帳で記しています」

「必死に思い出すんだ！俺もお前との約束を思い出して見せるからさー！」

フローラは、エレンやミカサ、アルミンの過去が知れる昔話が好きだった。

だが、シガンシナ区に興味がなく、お世話になったハンネス隊長など人物の過去が好きだった。

彼女は、自分の過去に繋がる出来事をできるだけ思い出さない様に無意識に防いでいた。

「何故、貴方はわたくしをそこまで想ってくれるのですか？」

「だって悲しいじゃん！俺たち、こんなに親しい関係だったんだらう？」

「そうですわ…ね…」

フローラには恐れがあつた。

恐怖の感情という足枷が無いから今まで戦えて来た。

では、記憶を思い出すと同時にその感情も蘇ったらどうなるか。

それは、負の感情を“声”として聴ける能力の彼女には分かり切っていた。

『これ以上は、黙らせないと！今のわたくしが全て崩れ去ってしまうわ！』

デイモ・リーブス会長が息子を連れて来た理由が彼女は理解した。

要するに自分の封印された過去を思い出せようとしている。

もしかしたら防衛反応で咄嗟に自分で封印した記憶かも知れない。

それは分かりようがないが、このまま会話を続けるわけには行かなかつた。

「中々有意義なお時間でしたけど、そろそろ兵舎に戻らないといけませんので」

「フローラ、逃げるのか？」

「逃げるも何も兵士たる者、自由時間は限られてますのでお暇させて頂きます」

「君は、何も知らなかった我儘なお嬢様のはずだ！」

フローラはリーブス会長のご子息の言葉に困惑していた。

我儘だったのは向こうの方であり護衛たちや会長も呆気に取られているのを確認できた。

「フローラは高慢ちきなお嬢様だった！いつも俺を巻き込んで振り回してきた！」

「確かに兵士になっても上官を振り回しては居ますけど……」

「思い出したよ……君は俺と3年間だけだったけど友達だったんだ」

「それは良かったですわ。ではわたくしは……」

速やかに退席しようとしたら左手首を自称友達に掴まれてしまった。

このまま、聴いていると今の自分が崩壊すると悟ったフローラは少しずつ本性を現した。

「…放してくださいさらない？」

「嫌だ！もう放さない！」

「武装した兵士に喧嘩を売らない方が良いでしょう！」

「君は変わってしまった！俺は…なんて馬鹿だったのか今では理解できる！」

「私がわたくしで居られる内に…放しなさい!!」

今まで親の七光りで生きていたボンボンのご子息は、覚醒して好青年に見えた。

逆に良き相談役に乗っていた女兵士が豹変して力づくで振りほどこうとしていた。

ワグナー夫妻もリープス会長も護衛3名も豹変した2人に黙って慄くしかなかった。

「君の父親の名前を言っただけだろうか？」

「結構です！過去より未来に向かって進むので知る必要はありません」

「君の父親の名は、ミオソティス・エリクシア」

「……」丁寧ありがとうございます

さきほどまでのんびり会話を楽しんでいた女兵士は豹変して立ち上がった。

言葉では感謝しているが表情までは誤魔化しきれず、怒りを感じられた。

誰もがこのような彼女の表情を見たことは無く、どんなに追い詰められても出ないはずだった。

「君の母親の名前も思い出した！」

「武装した兵士をよくもまあ、ここまで挑発できますわね……！」

「フレーゲル！これ以上は良い！止める！」

「親父、邪魔するな！俺は伝えなきゃならねえんだ!!」

デイモ・リーブスはお得意先を激怒させているのに気付いた！

息子との約束を知っているからこそあえて発言してこなかった。

しかし、それは彼女のトラウマを抉る物だと知って制止させようとした。

だが、運悪く同じく覚醒した息子によってフローラを更に激高させた！

焚火に油と可燃物を次々に追加して強風で煽って大火事にする如く彼は更に煽った。

「母親の名前も思い出したんだ」

「それは良かった。お時間ですので後日、聴かせて頂けませんこと」

「おい、そこまでしておけ!!」

「母親の名前は、アネモーネ・エリクシア」

腹が飛び出ている裕福な坊ちゃんがただ目の前の女兵士の母親の名前を告げただけだった。

それなのにワグナー製菓の店舗内は静まり返っており、季節外れなほどに肌寒く感じた。

たった一言、その名前を告げたフローラは固まって動かなくなつた。

「そうですか」

フローラはそう呟いて、脇に備え付けられたホルダーから操作装置を手を取つた。

そして慣れた手つきで回転させて鞘に近づけてアタッチメント部に刀身の中茎に装填した。

ロックを確認する事もなく双剣の刃をフレーゲルに突き立てた！

ハサミの様に手を捻れば彼の首を刎ねるなど造作は無かつた。

「……やっぱり君は我儘で高慢ちきなお嬢様だ！」

「坊ちゃん!？」

「おいフローラ!? 何の真似だ!？」

怒りのあまりか、僅か5秒足らずで刃を抜いてフレーゲルの首を刎ねようとしたフローラ。

辛うじて残った理性と複数の約束で堪える事ができた。

もし、刃を抜く時にエレンとミカサとミーナの3つの約束を思い出さなかったら首を刎ねていた。

「こうやって気に食わない事に痲癩を起したんだよ! 君は……!」

それでもフレーゲルは彼女を挑発するのを忘れない。

それがフローラが転生した悪魔の正体だからだ。

「確かに無意識にやった所を見ると過去の私は酷かった様ね」

「それでも俺は君が好きだった。いや今でも好きだよ……」

「この状態で告白だなんて……命乞いかしら?」

「刃を降ろしてくれ…上手く話せない」

冷静さを瞬時に得た彼女は刃を鞘に装填し、補助スイッチでロックを外してホルダーに仕舞った。

実戦経験豊富だからこそ、無駄がない動作で何事もなく刃は仕舞われた。

2人を除いてさきほどの光景は夢だったのかと錯覚するほどあっさりフローラは引き下がった。

「あそこまで挑発するなんて…」

「それでもしないと昔の約束を思い出さない思ってたんだよお…」

「残念だけども思い出せないわ」

「じゃあ、言っても良いか？」

「どうぞ、ご勝手に…」

フレーゲルは、今度発言すれば首が刎ねられると自覚していた。

それでも、彼女には昔やった約束を伝えたかった。

10分前までなら約束など思い出さなくて良いと思っていたが、それでも言いたかった

た。

「俺はフローラに『結婚の約束』をしていたんだ」

「今、思い出したわ……ああ、あったわね」

傲慢でだらしないフレーゲルさえもこき使ったフローラ。

僅か3年間、過ごした時間は、2週間も満たなかったかもしれないがそれでも大切な日々であった。

景気が悪化してシガンシナ区から手を引いたリーブス会長。

それと同時にエリクシア家と縁を切ることになって永遠に別れる事となった。

決まった後に知らされた幼少期の彼は、取り乱したが結果は変わることは無かった。

「ふろーらー！」

「なに、ふれーげる？」

「ぼくたち、お別れになっちゃうんだ」

「そうね。さびしくなるわ……」

だから彼は約束した。

今は別れてもまた逢えるようにと大好きだった彼女に告げた。

「もし、ぼくがおおきくなったら、そのときは、ふるーらとけっこんしよう！」

「わたしたち、ふうふになるの？」

「そうだよ！それなら！にどと！わかれなくすむよ！」

「うん、いまはわかるけど、またいつしよになろうね！」

彼らは忘れない様に何度も確認し合った。

その結果が双方とも記憶から落ちており、そのまま闇へと葬られようとしていた。唯一、リーグス会長だけは遠くからその約束が聴こえていた。

そして現在、壁内に巨人が出現して、彼女が死地に行くこと直感した。ただし、フローラが狂乱して息子を殺そうとするとは夢にも思っていなかった。

「思い出した？」

「そうね、何度も手を繋いで忘れない様にしてたわよね」

「2人で駄々をこねていた。でも無理だった」

「だからせめてもの…という事でわたくしが抱擁をしたのよね…」

フローラは誰かと別れる時に抱擁する癖があった。

それは幼い頃、別れてしまうフレーゲル・リーブスの温もりを感じたくてやった事であった。

そんな記憶は喪失していたが、別れる時に習慣になるほど、抱擁を忘れることは無かった。

今では、ミーナ・カロライナと毎回別れる時にやるくらい習慣になっている。

その原点が『結婚の約束』であった。

「なあ、フローラ。俺はまだその約束が生きていると思うんだ…良かったら」

フレーゲルの刺し伸ばしてきた手。

それを受け取れるならどんなに幸せであったことなのか。

もし、知り合いの女子が居たら運命の相手だと盛り上がる事だろう。

そんな彼の手をフローラはー。

「無理よ。もうその手は取れないわ！」

「なんでだ！確かに俺は今まで腐ってたけど……」

「それでいいのよ……わたくしは貴方の手を握れるほど綺麗じゃないの」

フローラの両手は、既に巨人3桁の血と人間2桁の血で汚れていた。

あんなにボンボンで甘やかされて育った坊ちゃんの子の純粋な手を握れるものではなかった。

「もし、訓練兵団卒業前に再会したら手をとっていたかもしれないわ……でも遅すぎたわ」

「今からでも遅くない！俺も変わるからさ！フローラも変われば良いんだ!!」

「言ったでしょ！もうわたくしは自分の物ではないの……兵士として組み込まれた駒なの

よ

復讐に囚われた女は、いつしか治安維持という名目で凶悪犯を殺害しまくった。

王政のトップである大総統と内務大臣を脅迫した話は嘘では無かった。

しかし、調査兵団どころか駐屯兵団ですら知られる事は無かった。

何故ならそれだけ装備を特例で持ち出す事ができて、数など記録されていないからだ。

「ワグナーさん、憲兵団に通報してくれませんか？」

「えっ…通報ですか？」

「そう、善良な市民を手に掛けようとした調査兵が居るって伝えればすぐに現場に急行するわ」

フローラは無意識にフレーゲルを手に掛けようとした。

既に5年前のあの日、鎧の巨人によってフローラ・エリクシアという女は死んだ。

今、ここに居るのは、そんな女の皮を被って悪魔でしかないのを自覚している。

「被害者がそれを認めなければ犯罪にはならないぞ！怪我すらしてないし！」
「ですって、どうするの？」

「会長はどう思われますか？」

「俺としても有力な取引先を失いたくねえな」

誰もがフローラの失態を見逃してくれた。

だが、彼女はそれを受け入れられるわけがなかった。

親友の両親が経営している店で、取引先のご子息に手を掛けようとした。
辛うじて理性が思いとどめたが、いつしかまたやらかすのは明白だった。

「フローラさんは、先日の戦闘で疲れているのよ。お饅頭をあげるから元気を出して！」
「トーマスが見ていたら嘆くからまた元気な顔を見せてくれよ」

ワグナー夫妻に慰められても彼女の心は変わることは無かった。

恐怖を失った悪魔は、過去を取り戻すのに拒絶して民間人をも殺めようとした。

「おいフレーゲル、振られちゃったがどうするんだ？」

「親父、俺は今日から変わるよ！フローラが変わったように俺も成長するよ!!」
「だってよ、どうするんだ？」

リーブス会長から問われたフローラは返答できなかった。
息子を殺そうとしたので何とも言いようがなかった。

「じゃあ、フローラ。また約束をしよう！」

「約束？」

「双方とも生きていたらこのお菓子屋で再会するって！」

「どうしようもない女に約束だなんて……」

「約束してくれるよな!!」

幼馴染の一言でフローラは領くしかなかった。

既にこの場で立場は彼女が一番下であった。

その次が展開について来れていない護衛3名くらいか。

「約束するわ！」

2人は忘れない様に暫く抱擁した後、離れた。

フレージェルは忘れていた香水の匂いが彼女から漂ってきて思う存分嗅いだ。

フローラは、油臭くて体臭が酷いが、昔の様な匂いがしたのでとりあえず満足した。ここにて、涙ぐんだ2人は再び再会の約束をした。

「ご迷惑をおかけしました…」

「また来いよ」

「ありがとうございます」

フローラはワグナー製菓から出た後、早歩きで逃げた。

両親の名前を聴いただけでここまで取り乱してしまった。

もし、記憶が全て戻ればどうなるかは予想できないが二度と巨人と交戦できなくなるだろう。

せめて、鎧の巨人が討伐できるまで…できたはずだった。

『どごやらわたくしは、もう長く無いようね…』

自分の身体なのに誰かが操る様に動いている実感がした。

ただの少女が巨人を討伐できるように悪魔に魂を売り払った結果、あんな結果を招いてしまった。

いずれ、ミカサの昔話を聴いても同じ発作が出てくる可能性がある。

今回の事態を受けて、彼女は自分について考え始めた。

83話 過去は変えられないが未来は変えられる

ウォール・ローゼの壁内に巨人が出現してから1週間。

未だに巨人の侵入ルートが特定されていないが避難民を匿うのは限界だった。

ウォール・シーナ全体では、避難民どころか内地の貴族以外養えなかった。

一応、シーナ内部にも牧場は存在するが、人類全体をカバーできるわけがない。

「今日が期限だ！何としても巨人の侵入ルートを特定しなければならん!!総員出撃!!」

「ハッ!」

食糧配給は本日の晩まで、どう足掻いても避難民はシーナ地下街から追い出される。

再び巨人が出現しても、今度は避難民用の食料など無いので彼らは見捨てられるしかない。

ピクシス司令は、馬を所有している民間人を拡大動員してウォール・ローゼの壁内を調査させた。

それと同時にトロスト区壁外に居る巨人掃討作戦が計画されていた。

「ザックレー総統、まさか最前線にいらっしやるとは…」

「視察ではなく、ありとあらゆる物を見なければ本質を見抜けないからな」

ダリス・ザックレー総統は建前はそうであったが、単純に内地の政治ごっこに疲れただけだった。

たった5年で壁内の環境は劇的に変化していた。

王政の議会やフリッツ王の忠誠が揺らぎ、その配下である憲兵団の権威は失墜していた。

偉くない奴が大騒ぎするのを横で眺めているのは好きだが、軍事作戦の全責任を押し付けられた。

形式上は、総督局の総統が兵団の頂点に立っているが実際は中間管理職である。

「議会は、クロールバ区、トロスト区、カラネス区の壁付近に居る巨人を掃討する命令を下した」

「ただでさえウォール・ローゼの壁内調査で兵員が割かれているのにこれは…」

「そう思うだろう？それでも命令を下された以上、やるしかないのだ」

しづしづ彼は、残された人員だけで掃討作戦の短期間で立案しなければならなかった。

幸いにも西方のクロルバ区は、中央第一憲兵団とその配下の駐屯兵団が実行すると判明！

残された2つの掃討作戦を考えれば良かった。

駐屯兵団の参謀であるグスタフと共にトロスト区の作戦の最終調整が終わり一息ついていた。

「駐屯兵団第一師団は余力がありません」

「トロスト区に駐留している調査兵団は動かせないか？」

「本隊はカラネス区外の掃討作戦に参加する為に撤兵しました。残っているのは新兵だけです」

「新兵？」

ザックレー総統の脳裏には、「おっほっほっほっ！」と高笑いする女を思い出した。

あれも新兵のほずであるが、もはや新兵としての枠に入る奴ではなかった。

「カラネス区壁外の巨人掃討作戦は、調査兵团で委任されるとするか」

「では、早馬を走らせてカラネス区の守備隊に情報伝達をさせましょう」

「私は視察に出る」

「護衛を一個小隊お付けしましょう」

「いや、結構だ。総統局から連れて来た兵で充分、これ以上、迷惑を掛けられないからな」

ピクシス司令の代行である参謀のグスタフは、総統の発言に戸惑った。

むしろ勝手にトロスト区内を闊歩されるほうが迷惑だったからだ。

馬の調教師や狩人まで動員して壁内調査を行なっているほど兵員不足だった。

個人的には兵团本部に留まってもらおう方がありがたいが拒否できる権限など無かった。

「どこに向かわれるのでしょうか」

「顔馴染みの新兵に逢いに行きたくてな」

「フローラ・エリクシアならトロスト区の正門を警備させております」

「そこに向かおうとしよう」

ザツクレー総統とフローラは芸術について語り合う友人関係である。階級は天と地ほどの差があるが、芸術を騙るのに階級など関係ない。

自分の芸術を更に高めるなら新兵だろうと幼児の意見だと取り入れる柔軟性が彼にはあった。

「お前もトロスト区の巡回任務に参加するとは思わなかったぞ」

「兵団上層部のご使命だからね」

「今も手帳に出来事を記してるのか？」

「もちろん、忘れたくないからずっと書き続けてるわ」

ダズ・ウイズリーは、フローラと共にトロスト区の正門付近を警備していた。

同期とはいえあまりにも差を付けられてしまったが、それでも気軽に話しかけられる関係である。

「お前、変わったよな」

「何が？」

「なんかさ、人間らしきっていうか。前よりどこか影があつて悲しそうな顔をしてるぞ」
「昨日に色々あつてね……人生に悩みができちゃつたのよ」

フローラが迷うのは珍しい。

それこそ事故が起ころうが叱られようが、喰つて寝れば翌日に復帰する女である。

だからこそ、未だに何かを引き摺っているのを見て彼は、すごく貴重な光景を見ている気がした。

「そういえば、そろそろ手帳を替えた方が良いんじゃないのか？」

「そうね。もう書くスペースもほとんど無くなつてきたし、表紙がボロボロだもんね」
「訓練兵団に所属した日にもらつた手帳を使い続けているのはお前くらいだぞ」

シャーデイス教官による「通過儀礼」が終わつた後、全員に手帳が配布された。

訓練兵はその手帳で授業のメモをしたり、スケジュールの管理をする為に使用した。

そして訓練兵団を卒業する頃には、フローラ以外の全員が手帳を処分した。

去年のカレンダーや学生時代の試験の答案用紙を大事に取っておく奴が居ないと同じ事である。

「わたくしの半生とも言える手帳が終わりに近づいているの」

「また手帳を替えて書き続ければ良いじゃないか」

「……新しい人生を次の手帳に記せるといいわよね」

ダズの言葉はもつともであるが、フローラは『手帳の終わり』に別の意味を考えていた。

それはここに居る兵士としてのフローラ・エリクシアの人生がもうじき終わると考えていた。

リースス会長のご子息とのやり取りで自分の人生を見つめ直した結果、別の感覚を抱いた。

人の人生を本で表す事ができるなら、この手帳が書き終わる時、自分が死ぬような感じである。

「お前はまだいいよ。俺なんか巨人と交戦して兵士として向いてねえのが分かって悩ん

でるんだ」

「確かに自分の事すら自分で決められないなんて、他人を守る兵士として失格よね」

「俺は家族を守るために兵士になったのにいつ巨人が壁内に出るかわからねえ…」

ダズは両親と妹を守るために兵士に志願した。

そうすれば、巨人と交戦できる技術が学べて家族を巨人から守る事ができるからだ。

そしてトロスト区防衛戦などの巨人との戦闘を通じて理解した。

他の連中と違って自分の命を賭けて巨人を討伐する兵士になれないと！

「家族を守るために装備を借りパクしようだなんて結構大胆ね」

「いやいや、そこまでするつもりはないぞ」

「その駐屯兵！ちようどいい所に！これから壁外の巨人討伐任務に行ってもらえないか？」

「えっ…今からですか!？」

フローラもダズも今から壁外の巨人討伐任務をさせられるとは想定外だった。

まず壁内の巨人に着いて調査するべきであって、壁外に進軍するべきではないから

だ。

実際に壁外で巨人を討伐した経験がある彼女からすれば駐屯兵団が出るべき案件ではない。

「え……い、嫌ですよ！勘弁してください……」

「じゃあ、ダズ頑張つてね！お墓なら自費で立ててあげるわよ！」

「何でお前はそんなに他人事なんだ!？」

「だって他人だし……」

ここでフローラはダズに向かって冗談を言った。

急かしても説得しても彼は自分から動かない以上、こうやって定期的に突き放す必要があった。

「クロルバ区、カラネス区に先駆けて我々が巨人掃討作戦を行なう！兵士の義務を果たせ！」

「一体、いつ開始する予定なのですか？」

「約1時間後には、リフトで壁外に兵を降ろす予定で今から1時間半後には開始する予

定だ」

「お待ちください！いくら何でも急過ぎませんか!？」

「軍事作戦というのは、長期間かけて準備をされるのであって、思い付きでできるわけではない。」

「クロルバ区の件は、おそらく中央憲兵が無理やり駆り出されているのは知っている。あれでもそれなりに猶予があるように見えて、作戦の規模を考えると準備期間が短すぎた。」

「実際は、巨人が殲滅したところでまた寄って来るので形だけの作戦であつた。」

「あくまで王政府は、壁内人類を安心させる実績を早急に欲していただけである。」

「くそ、俺だつて！俺は家族を守るために兵士になつたんだ！これくらい!？」

「ダズは、勇気を振り絞つて任務に参加しようとしていた。」

「「やっぱり怖え!…な、なあお前も一緒に参加してくれないか!?!…無理か!お前調査兵だし!…」」

「調査兵団の人手を借りる許可をもらっている。フローラも手を貸してほしい」
「ここに調査兵団って新兵しか居ませんが…」

「お前は新兵の枠に入る奴じゃないだろう」

「…」もつともです」

どうも自分ありきで作られた作戦のようでフローラは気に食わなかった。

断る事ができたが、さすがにこの兵力を投入した所で結果は見えているので参加するつもりだ。

ダズとは腐れ縁で彼の持ち込んだ植物図鑑が無かったら餓死していたくらいに感謝している。

だから、彼を死なせるのは、自分が死ぬと同意義であり傍に居る限り守るつもりだ。

「参加しますけど、確認したい事が一点。誰が作戦を立案したのですか？」

「このトロスト区に滞在しているザックレー総統の指令書によって行われる。妙な話であるがな」

「ザックレー総統ですか……」

賢明なザツクレー総統がこんな作戦など自発的に立案するわけなので王政のせいであろう。

第58回壁外調査といい、ここ最近の王政は迷走しており相当混乱しているのが分かる。

「では、1時間前までにこの正門で待機してくれ」

「ハッ！」

フローラは敬礼した後、ライリーを連れ出す為に走り出した。

正門を警備している兵士すら今、作戦を伝えられる時点で失敗が確定している。

駐屯兵団の主力はトロスト区から出払っていて、居るのは新兵か最低限の人員しか居ないからだ。

「ライリー！壁外に行くわよ!!」

フローラは馬小屋に辿り着いてすぐさま出撃の準備をした。

先日で酷使し過ぎた影響か、運動不足で激怒する事が無いがその分、張り合いが無く

なっていた。

あつさり鞍を取り付けられたのは、ようやく自分を認めてくれたと信じたかった。

単純に寂しくて甘えたかっただけで、すぐに元通りになったのを騎乗してから彼女は
気付いた。

「見ろよ調査兵が馬に乗ってるぞ」

「あの方向は、壁外でも行くのか」

「この街から逃げ出した兵団が闊歩するのは気に食わねえな」

トロスト区民における調査兵団の印象は最悪である。

門が使えないと分かるとあつさり切り捨てた兵団に好印象があるわけないであるが。

顔が見えない様に緑色の外套のフードで顔を隠して周りから素顔を見えないように
している。

そうすれば、少しは気が楽になれるから。

「あれフローラだよな？」

「赤い馬に乗ってるしそうだよな」

やらかし過ぎてトロスト区でも名前で呼ばれるようになった。

やはり初期に『訓練用巨人模型』を作る時に実名で計画したのが失敗だった。

そのせいで、トロスト区の有力者にバレてリース商会に目を付けられるきっかけになった。

それ自体は良かったもののこうやって追いかけられるのは何か嫌である。

「巨人を100体討伐して来いよ！」

「トロスト区の壁に張り付いている巨人を殲滅するまで帰って来るなよ！」

「勲章を売り払ったらその金で街に還元しろよ!!」

応援されている様に見せかけて商人や店主に金を落とせと、せがまれる有様。

人類最強の男であるリヴァイ兵士長は、このような事は言われないので完全に自業自得である。

とりあえず調査兵団を好印象にする為に手を振って英雄ごっこをするしかなかった。

「そこに居るのはフローラ君ではないか」

「ザックレー総統閣下!? その手勢でトロスト区の正門にいらしたのですか!」
「うむ、危険と聴いていたが思ったより活気があつて良い所だな」

ザックレー総統に呼びかけられたフローラが心配したのは、1個班だけでここに来た事である。

仮にも兵団トップがこんな所に来られて何かあれば、ピクシス司令が後送される事態になる。

それだけ兵団に影響力がでかくて何より芸術を語り合う友人関係だからこそ心配してしまった。

「閣下、兵団本部にいらつしやる話を聴いてましたがこんな所までいらつしやるとは想定外です」

「こう見えても駐屯兵団上がりでな。こうやって新兵時代を振り返るのも悪くないと思つたのだ」

「は、はあ…」

護衛をしている総統局の局員たちは呆れるフローラを見てお前も同じだという視線

を送ってきた。

その視線を感じた彼女は、気が付かないフリをしてザックレーと向き合った。相変わらず威厳があるお顔であるが、中身は自分の芸術について考える向上心がある人物である。

「ところで君は、最近絵を描いているのかね？」

「第57回壁外調査から絵を描く余裕が無くてやっておりません」

「なんと勿体ない！私は君の絵が大好きなんだがな！」

「閣下に褒められると恐縮してしまいます」

ザックレーは馬から降りたフローラが縮こまっているのに疑問に思っていたがすぐに解決した。

この公共の場では、総統と新兵という壁のせいであまく会話が出来ていなかった。

本来ならば、密室で芸術について語り合う友人関係なのだから寂しい気持ちがある。

「すまないな。その様子だと私が立案した巨人掃討作戦に参加するようだな」

「そんな…栄光ある任務に抜擢されるなど亡き家族が泣いて喜ぶ光栄な話であります

!

「ところでクロルバ区の掃討作戦にも参加するみたいなのだが…本当にやる気か？」

「もちろんであります！」

「あの部隊から信用されるなど、ありえない事であるのだが…」

彼らは、公共の場に居るからこそこんな堅苦しい会話をしているが、段々破綻してき
た。

ザックレーは今まで築き上げてきた芸術の準備段階が最終フェーズに入った。

いつでもやっても良いが、時期が悪いという事で泣く泣く後回しにしてきた。

だから、その分、更に満足できる芸術に仕上げに閑して色々模索している。

ピクシス司令ですら相談できないので、芸術を語り合う友人である彼女に逢えて嬉し

かった。

「更に君に迷惑を掛けてしまいが良いか？」

「はい、なんででしょうか？」

「この掃討作戦の様子を絵に描いて見せて欲しいのだ」

「閣下の立場では、前線での兵士の活躍を拝見できる機会がありませんからね…」

ザックレー総統の脳裏には、若き頃の思い出が蘇っていた。

シガンシナ区から出発する調査兵団を支援する為に支援砲撃をしていたあの頃。

血気盛んで共に夢を語り合っていた青二才の頃の記憶は、ほとんど残っていない。

あの時から今でも兵士を続けている者など両手で数えられてしまう。

更に歳のせいも、記憶を喪失し続けている実感があつた

「もちろん、個人的な依頼であり、蹴つてくれても構わん」

「了解しました！脚色無しで戦場であつた出来事を絵にして記録していきますー！」

「任務に支障が出ない範囲で構わん。知り合いを失ってしまうほど悲しい物はないからな」

彼に報告されるのは、人類の活躍を脚色した絵か、活躍を盛られた文字だけの報告書であつた。

王政の茶番劇に付き合い続けたせいで自身の老いを感じてしまうこの頃。

絵師に自分の姿を描かせれば、威厳ある総統として描いてしまい、自身の姿が分からなかつた。

これから作る【芸術】は自身の人生の集大成である。
だからこそ、客観的に見た自分の姿が分からないほど辛い物は無かった。

『君なら戦場で発生している出来事を切り取って私に伝える事ができるはずだ』

ザックレーは、エルヴィン団長の推薦されたフローラに自分の肖像画を依頼した。
そしたら『指を指して大笑いをする爺さんの絵』を受け取った。

『ダハハハハ！滑稽な爺さんだな！ああ、確かにこんな顔をしていたな！』

以前、自分が芸術と思える物を持参してきて欲しいという無理難題をフローラに押し付けた。

そして持ってきたのは、『怪しげなツボ』など使い道が分からないような絵画やオブジェだった。

これをドヤア顔で持ってきた彼女の顔を見て大笑いをした時を描いてくれたものだと分かった。

ようやく第三者視点の評価が描かれた自身の肖像画を受け取った彼は、彼女の腕を信

用した。

彼女であれば、かつて自分が見た光景をありのまままで描いてくれると信じている。

『どんな手を使って総統閣下と知り合いになったんだ』

『閣下の顔があそこまで歪んでいる所など見た事ないぞ…』

『いろんな意味で有名人とはいえ閣下と仲良くなれる要素など無いはずなのだがな…』

事情を知らない総統局の部下たちは、彼らの会話を横で聴いていて疑問しかなかった。

ザックレーは部下ですら自分の本性を曝け出してないのでこうなる事は必然であった。

彼からすれば、自身の【芸術】は異端と理解しているからこそ、分かち合う者以外には伏せた。

「引き留めて済まなかったな」

「はい、問題ありません!!」

「期限は特にない。必ず生きて私に渡してくれるだけでいい。これは命令だ!」

「了解しました！すぐさま準備に取り掛かります！」

フローラは、友人から白紙とそれを収める筒を受け取って馬に騎乗し出発した。こんな無理難題を引き受けたのは、自分も難題を押し付けていたからである。ザックレー総統が発行した通行許可証のおかげで支障なく壁内を出入りできた。取引先の商会や王政幹部とやり取りする際も彼のおかげで有利に立てた。その恩返しをする為に彼女は、必ず今回の戦場を絵として残すつもりだ。

『本当はもう少し語り合いたかったのだが…』

友人が去って昂った感情が冷めた総統は、無言で踵を返して兵団本部に向けて歩き出した。

慌てて総統局の配下が後を追いかける様に追隨していった。

「さて、どんな絵を描こうかしら」

フローラはライリーに出す指示を時折間違えながら宿題について考えていた。

ライリーは自分を無視されているのが大っ嫌いだが、フローラの感情には気を遣っている。

暴れ馬でもジーク・イエーガーを蹴っていた悪魔の光景を忘れる事などできなかったのだ。

「なんだフローラ、お前も参加するのかわ？」

「むしろ参加しないと任務達成できるのですか？」

「無理だな！とはいっても新兵のお前に活躍してもらうのも何か大人としてみっともないな」

「ハンネスさんはよく頑張っている方ですよ。エレンも貴方を尊敬してますしね」

「あいつに尊敬されるなんて5年前まで思っていなかったんだがな」

フローラは、壁外任務にハンネス隊長が参加するのは意外に感じられた。

彼はどちらかというと壁の警備をさせられる立場であり、進んで壁外に行く性格ではないからだ。

「こうしてみると次世代が優秀過ぎて俺たちの面目が保てないな」

「5年前までの常識と今では環境が違いますからお気になさらない方が良いと思います」

「そうだよな。立体機動が廃れない様に成績上位しか憲兵団に入団できない餌を与えてたもんな」

立体機動は、5年前までほとんど重視されていなかった。

実際に活用されるのは、壁外に進出して巨人に突撃する調査兵団しか使わない技能だったからだ。

せいぜい目標に向かってアンカーを打ち込んで正確に登ればそれで卒業できた。

だが、それだと立体機動の技術が廃れる為、苦肉の策で憲兵団に入団する条件として評価される。

廃れない様に点数が大きい立体機動術であるが、皮肉にも旨い人ほど安全地帯に行ってしまった。

「あの時、立体機動について頑張っていたら別の未来があったと思っっているんだ」

ハンネスは、自分が優秀で真面目な性格では無いと自覚してるので適当に頑張ってし

まった。

成績は、23位で成績上位で間違いないがちよつと余裕をもって立体機動ができる程度だった。

あの頃は、巨人の弱点を削ぐ練習などなく、調査兵団に入団してから教わる物であった。

講師として来ていた元調査兵団の負傷兵だけが熱くその重要性を語っていた。

思えば、ちゃんとあの時に話を聴いておけばエレンの母親を救えたと今でも後悔している。

「でもそのおかげで人類は大きく前進しましたわ。ハンネスさんの行動は間違っていないせん」

「それでも俺は、エレンの母親を救う事ができなかったんだ」

「もし、救われていたらわたくしは兵士として居なかつたかもしれない」

「避難船に居たエレンの言葉を聴いて兵士になったんだよな。本当にこの世界は歪んでいるな」

ハンネスは、フローラの事情をよく知っていた。

シガンシナ3人組を気にしていた彼は、必然的に彼女の存在を知って話をよく聴いていた。

彼女が落とした手帳を出来心で中身を覗いたら、エレンが充実した人生を送っていて安心した。

あの時は、手帳を返して謝ったが今でも続きを読みたいと思っている。

「世界は残酷だが、それでも守りたいものはある。お前にもあるだろう?」

「そうですわね。同期、特にエレンとミカサの関係はずっと続いて欲しいですわ」

「全くあいつらも相思相愛なんだからくっつけば良いのにエレンが頑固でな…」

「殿方は、好きな女性ほど素っ気ない態度を取って見栄を張りたいたいものですよ…」

ハンネスは、近くにフローラ以外居ないからこそ本音を告げた。

ミカサがエレンが大好きなのは、巨人が人類しか捕食されなくらいほど周りに周知している。

ところがエレンも彼女が大好きであり、気持ちは同じなのが驚くほど周りに周知されていない。

ハンネスは、やんちゃな頃のエレンを知っているからこそ気持ちの変化を見抜けただ

けである。

それほど、エレンは想いを徹底的に伏せており、恥ずかしがっている思春期の少年であつた。

「お前にも居たよな……気持ち隠して素っ気ない態度を取つた挙句、死んじまつた奴が……」

「同期のデント・アクアですね。良くも悪くも事故死のおかげで、絵を描くようになりました」

「男ならやつぱり好きな人に想いを告げて死にたいものだな」

「残された者は、たまつたもんじやないので本当に止めてください……」

ハンネスは、訓練兵団で教官しているキース・シャーデイスと知り合いである。

今では鬼教官として恐れられているが、1人の女性に想いを告げられなかつた腰抜けだつた。

『自分が成果を出せば、きつと彼女に振り向いてくれる』と信じて進み続けた結果、挫折した。

ハンネスは、酒瓶を片手に「想いを本人に告げろ」と何度も伝えたが頑固者は聞き入

れなかった。

皮肉にも彼と自分が助けた医師とその女性が結婚して生まれたのが、エレン・イエーガーだ。

「でも死んでしまった彼には感謝しています。おかげで絵を描くことになったのですから」

フローラは、死んでしまった同期をきっかけに絵の練習をした。

最初は円に棒を複数付け足しただけの絵であったが描いている内に上達した。

遠近法などの要素を取り入れてカオスな期間を得て、ようやく他人に見せられる画力になった。

そして現在、ザックレー総統に絵を依頼されるほどになった。

「それでもやっぱり、みんなが生き残って笑っている世界が欲しかったよ」

悪ガキのエレンが暴れてアルミンに報告されたミカサが行動する光景。

それを見て酒の肴にして同僚のフーゴと楽しむのが日課だった。

決して帰って来ない光景であるが、それでもハンネスは何気ない日常が好きだった。現実には、フーゴは5年前に戦死して「エレンは人類の希望」など言われてしまっている。

「俺はこんな未来なんて望んでいなかったよ」

「でも、今からなら未来を変えられますわよ」

フローラからすれば、大切なのは未来である。

鎧の巨人を討伐して壁外の勢力を一掃し、壁内を平和にする。

今は巨人のおかげで壁内が一致団結してるのでもしかしたら内戦になるかもしれない。
い。

それでも彼女は、残酷な世界である現在を変えたいと思っていた。

ハンネスも同じ意見であり、これからやる掃討作戦もその未来への一手である。

「行くか。みんなが笑って暮らせる未来を！次世代は平和で生きていける未来を！」

「もちろんですわ！」

馬に騎乗している彼らは通行人を轢かないように細心の注意をしながら正門に向かった。

輝かしい未来の為に！自分たちを奮い立たせる為に！そしてなにより平和の為に！

壁内人類に恐れられている巨人を掃討するという行為が、壁内の平和を遠ざけると知らずに……。

84話 鎧の巨人 VS 獣の巨人

ウォール・ローゼに巨人が出現してちょうど1週間。

ウォール・シーナに貯蓄した食料が尽きようとしていた頃、王政の議会から命令を下された。

全ての兵団は、壁内の安全を確保すると共に壁外の巨人を掃討し、壁内人類を勇気づけろと！

ザックレー総統は、無茶な命令を受けて作戦を立案し、トロスト区でさつそく作戦を開始させた。

「正気で言ってるのか？」

一方その頃、ウォール・マリアに巨人を侵入した元凶がシガンシナ区の正門に佇んでいた。

その犯人の1人であるライナー・ブラウンは、戦士長にアニの奪還を優先する様に懇

願っていた。

「もちろんです！ユトピア区で囚われた彼女を奪還するのが座標奪還に繋がると思っています！」

ベルトルトからアニがユトピア区に居ると知ったライナーは必ず彼女を助けると誓った！

ずっと迷惑を掛けてきたのを実感しており、せめて彼女を救出しないとプライドが許さなかった。

ジークは、その感情自体がくだらない物であり、軍人である以上、覚悟していると思っている。

一見、非情であるが、よく考えれば自分たちを誘き寄せる罠であるのは明白であった。

「…島の悪魔と仲良くし過ぎて頭がおかしくなったか？」

「返す言葉ありません…俺は兵士として演じていく内に狂って、洗脳されかけました…」

「ならば、戦士として使命を全力で全うしろ！」

「その使命を達成するには、女型の巨人の力が絶対に必要です!!」

戦士長の宥める言葉を聞き入れる事ができず、ライナーはアニの奪還を懇願していた。

壁内で習った『心臓を捧げる』敬礼をしてジークに考えを改めるまで動くつもりは無かった。

「ライナー！その話はアルミンが言ってたんだ！実際に拷問されていたなら話すわけがないよ！」

アニの件を報告したベルトルト自体がアルミンの話を真面目に受けていなかった。

何故なら、アルミンの性格から考えれば、彼女が拷問されるなど黙っているわけがないからだ。

エレンを奪還する為に口から出任せを言っただけを動揺させる策だと思っている。現にエルヴィン団長が死角から飛び出してきて斬り掛かってきたのを覚えていた。

「ベルトルトは、そう言ってるが？ライナー、お前は疲れているんだ」

「うっ!？」

「どうした？」

ライナーは『疲れているんだ』の言葉に反応した。

戦士と兵士が融合して正気じゃなかった時、エレンを同行を誘った時に返答された言葉であった。

あの時、どうすればよかったのか分からなかったが、監禁生活が続くと思つて行動に移した。

その結果、顎の巨人継承者を壁内勢力から奪還したが、振り出しに戻ってしまった。否、アニが兵団に囚われている以上、完全に敗北していた。

「戦士長！戦士アニの奪還を目指すべきです！あいつが居なければ始祖奪還は不可能です！」

「アニちゃんは大事だが本当にユトピア区とやりに居るとは思えんぞ」

ジーク戦士長は、ライナーの妄言に付き合っている気は無かった。

建前では、始祖奪還を優先しているが実情は、さっさとこの島から脱出したかった。

エルディアの悪魔に尊厳を破壊されて命ガラガラ敵前逃亡した彼は逃げたかった。子供の様にホームシックになっており、とにかく家族に逢いたかった!!

「分かりました!では、俺だけでアニ・レオンハートを奪還しに行きます!!」

「正気か!?!任務を放棄して私情で行動するのか!?!」

「俺はあいつに贖罪しないとイケないんだ!!あいつをこれ以上孤独にはさせたくないんだ!!」

ライナーは戦士長の制止を振り切って立体機動で壁を飛び降りようとした。

ベルトルトも彼の行動を無視できずに同行するつもりだった。

「よし!お前の気持ちは良く分かった!」

「戦士長?」

「じゃあ、男らしく決闘して決めようじゃないか!!恨みつこ無しだぜ?」

「受けて立ちます!!必ず戦士長を越えてアニを奪還させる!!」

ジークは、図体が大きくなったライナーが調子に乗っていると感じた。

戦士候補生の中でドベだった奴が戦士長の意見に口を出してくる時点で狂っていた。戦士長の命令は、上層部の意図や命令に反しない限り戦士は従うしきたりになっている。

彼が狂っていて歯向かおうとしているのなら、【痛み】をもつて躰けなければならぬ。

「ライナー？戦士長？本気でやる気のか!？」

「やはり男というのは拳で決着させなきゃいけない時がある。全く嫌になるけどね」
「戦士長の仰る通りだ！ベルトルトは判定を頼む」

残されたベルトルトは、2人の行動を止める事が出来ずにただ見送るしかできなかつた。

決闘の舞台は、現在待機しているシガンシナ区、ここならいくら暴れても良い。
巨人化能力者同士の決闘という過去にもあまり例がない事が起ころうとしていた。

「条件はどうしましょうか？」

「そりゃあ、男らしく一騎打ちをして戦闘不能になったら負けで良いだろう」

「戦闘不能なんですか？」

「だって、徹底的に敗北させないとお前は納得できんだろう？」

「仰る通りです」

建前では大幅にライナーへ譲歩したように見えるジーク。

実際は、エルディアの悪魔に自身がやられた事をやり返す感じであった。徹底的に敗北させて尊厳を破壊されて無力化させるといふ事である。

「ベルトルト！お前が合図の鐘を鳴らせ！」

「で、でもそんな事したら敵勢力に気付かれないの!？」

「奴らは壁内の巨人で手一杯さ。こんな所まで来るわけないだろう」

上官に言われて納得しようとしたベルトルトであったが1つだけ心当たりがある。

異様に聴覚が良いフローラが気付いて単身突撃してこないかと…。

もちろん、巨人化能力者が3名も居るのだから負けるわけが無いが…。

彼女なら殲滅できると思ってしまうほどの感覚があった。

『……もう良いかな？』

塔にある鐘の前に待機するベルトルトに向かつて2人は手を振った。それを見下ろして確認した彼は、覚悟を決めて鐘に向き合った。

『鐘か……』

正門の付近にある建物にある鐘は地獄を知らせる用途に使用されない。

基本的に壁外に出撃する調査兵団を見送ったり帰還を知らせる用途で利用される。

前回到聴いたのは、第57回壁外調査でカラネス区に帰還した時である。

「誰かの無事を願って鳴らす物が危害を加えるきつかけになんてね……」

前もってハンドルを回して綱を巻き取って鐘をゆっくりと傾けて固定してある。

あとは、留め具を外してハンドルを回せば、鐘が揺れて音色を届ける仕組みであった。

彼がハンドルを回した瞬間、音色が静かだったシガンシナ区に鳴り響いて騒乱の幕開けとなった。

『勝てるのか？あの戦士長に……でも勝てたらアニを救いに行ける！』

ライナー・ブラウンは、自身の方針に従って行動させる為に戦士長と一騎打ちを選んだ。

鎧の巨人と獣の巨人、双方もマーレに必要な不可欠の巨人の情け無用の戦いが始まろうとしていた。

ベルトルトが鳴らした鐘の音を聴いて双方とも巨人化、大通りで向き合った。

『まず小手調べと行きますか！』

タツクルして来る鎧の巨人を見たジークは近くにあった瓦礫を手にとって顔面に投げつけた。

大きな衝撃音と共に瓦礫がぶつかるが鉄仮面のおかげで何ともなさそうであった。

とりあえずひるまなかつた彼を見て、ドベだった時から成長したと思い、タツクルを

回避した。

『かわされた!?!ぐあああああああつ!?!』

近くに逢った民家に激突した鎧の巨人は、後ろからうなじを直接殴られて吹っ飛ばされた。

獣の巨人は異様に手が長くリーチ差によって圧倒的にライナーが不利である。

それ以外にも拳を硬質化させて遠心力で殴りつけるだけで立派な鈍器になるという事でもある。

「ああ、本当に始まってしまったか…頼んだよライナー」

ベルトルトはライナーを応援する事しかできなかった。

自分もアニ奪還を懇願したが私情よりも任務に優先してしまう彼はそこまで踏み込めなかった。

そのせいで、ライナーに全てを押し付けてしまう形となってしまうた。

彼は情けない様に見えるが、私情で爆破しまくりの人材を頭マーレでも選抜する訳が

なかった。

よって、マーレ本国からすれば、ベルトルトは継承している巨人の相性は抜群である。

『クツ…さすがジーク戦士長…強!!』

立ち上がった鎧の巨人であったが目の前の瓦礫が飛んできてもう一度態勢を崩された。

その際に獣の巨人は更に後方に下がって瓦礫を集めた。

『ホント、良い的だな！外す方が恥ずかしいな！』

ジークは鎧の巨人の特性を全て知っているので肉弾戦などやるわけなかった。

要するに勝てばいいのだから、こうやってハメ技を駆使して一方的に廻り倒すだけである。

鎧の巨人は、人体で例えると爪が体表の全身を覆っているだけでそこまで厚くない。

故に皮膚は無敵では無く、音速を越えた瓦礫をぶつけ続ければ装甲は勝手に剥がれていった。

『立ってるのがやつとのような？よし、一押ししてところか？』

何度でも立ち上がる鎧の巨人の顔面に向かって硬質化パンチをぶつけてジークは無脱していく。

ヒットアンドアウェイであるが、卑怯では無いし、動きが鈍いあいつが悪い。鎧の巨人も踏ん張って殴り掛かろうとするが、リーチ差で一方的に殴られた。

特定の部位を切り離してロケットパンチもできるが、歪んだ装甲のせいで射出できなかった。

『ふん、他愛もない。だから作文力で戦士になったお前の行動は無謀だったんだ！』

視界が見にくいので眼鏡が曇っていると思ったジークはレンズを拭こうとするが無理だった。

巨人化による無駄な時間と労力、そしてなにより虚しさを感じて溜息を吐くしかなかった。

居るのは、審判のベルトルトと倒れ込んだ鎧の巨人、そして頭を手で掻いている自分

である。

『俺は…俺は、アニに誓ったんだ…みんなで故郷に帰ろうって…』

ライナー・ブラウンは糞野郎である。

不利になると、それっぽい事を言ってみくし立てて、相手の思考をさせる暇もなく畳みかける。

そういう時は、急を要する事が多く、仲間はそのを受け入れて無駄に苦勞するしかなかった。

特にアニ・レオンハートは、中途半端に優秀だったので酷使し過ぎてしまった。

『王都に忍び込んで情報を探って来てくれ』

『何が!?!』

『お前しか一晩で兵舎と王都を往復できないんだよ！戦士なら使命を果たせ!!』

座標の情報を掴むためにアニに諜報をさせて、ライナーたちは兵士ごっこに興じた。昼間は訓練、夜は諜報という激務に彼女はいろんな意味で追い詰められた。

『教官の頭突きは嫌か？』

事情を分かっている癖に兵士の訓練をサボるなど嫌味を言うライナー。

わざわざ「ここに来た時を思い出して真面目にやるんだな」という煽り付きである。その時からか。アニがライナーを殺そうと計画をし始めたのはー。

『もう駄目…宿題が、課題が…できない』

『アニ、疲れすぎだよ！私がやつとくから少しでも寝ておきなよ！』

『ミーナ、ありがとう。あとは、フローラに頼んで…』

寝不足で鬱になったアニは、自害も考えたが友人のミーナに宿題を任せて睡眠時間を確保した。

それでも寝たい時は、フローラに頼み込んで授業を潰してもらって貴重な自習時間で休んだ。

自分のせいで彼女が教官に叱られてしまうが、毎回、睡眠時間を作ってくれる彼女に感謝した。

糞野郎共はミーナに介入を牽制してもらって、堂々と昼寝するのが数少ない安らぎだった。

他人事で事情を知らないライナーは、アニがサボって寝ている様にしか見えなかった。

『あんたらの顔なんて見たくない!!二度と話しかけるな!!』

ついにライナーの横暴な態度と、ベルトルトのストーカー行為に激高したアニは彼らと絶交した!

戦士としての絆は、皮一枚で繋がっている状態であり、彼女は親友以外の人間関係を全て断った。

ようやく過ちに気付いた彼らは、フローラを通して彼女と交渉すると共に仲直りを模索した。

フローラの自由時間を犠牲にして、自分のせいでアニが追い詰められたと知ったライナー。

何とか3人で仲直りして以降も、猜疑心で彼女を警戒しており、裏切りを恐れていた。

『アニ!!マルコの立体機動装置を外せ!!』

自分のミスでマルコに秘密を知られてしまい近くに居たアニに人殺しを手伝わせた。

泣きながら拒否する彼女を弱点である父の事と忠誠を問い、無理やり共犯者にさせた。

こうすることで壁内人類に味方せずに戦士として意識されるのが目的だった。

『あいつを連れて故郷に帰る!それがマルセルの代わり…!いやリーダーとしての役目だ!!』

意識が飛びかけたライナーは、気力のみで復帰して全身に力を込めた。

身体は痛み、口内は乾いて、視界は歪んで、耳鳴りをしている。

だがそれは彼女が味わった事を考えれば些細な事だった。

へよし、勝ったぞ。アニちゃんの事は…マジかよ

ジークが勝利宣言をしようとしたら顔の装甲が剥がれた鎧の巨人が立ち上がった。

ガキの喧嘩で負けを認められない弱い奴がいじめっ子に負傷してもなお、立ち向かう構図である。

実際は、命令違反のガキが私情を諦めきれず無駄に足掻いているだけの馬鹿な行為だった。

へははっ！勝負はまだこれからだ！ってか？そう来なくつちやな、ライナー

ボロボロのライナー相手にマウントを取っているジーク・イエーガー。

実際は、「エルディアの悪魔」に一方的にボコられて名声も精神も地の底であった。

目が覚めた瞬間、全裸で逃亡して、ピークに抱き着いて大便と小便を漏らして泣きついた。

それほど追い詰められた彼からすれば、ライナーは精神を回復させるサンドバッグだった。

〈延長戦と行こうじゃないか！サヨナラゲームで徹底的に負けを認めさせてやるよ!!〉

獣の巨人は、嬉しそうに腕を振ってチャレンジャーである鎧の巨人を待った。もちろん、両手には瓦礫を握り締めており、一方的に投擲する気満々である。

「ライナーには意識があるかもわからないけど、戦う意思是、まだ残ってる」

ベルトルトは、既にライナーは意識が無いと感じていた。

あれだけ顔面に衝撃を受けたら能力者の脳も揺さぶる事になるのできついのが分かる。

更に足元がおぼついているのも拍車にかけた。

〈さて、目指すは完全試合！無傷でやっちゃまうよ!!〉

「ぐおおおおおおおおおっ!!」

獣の巨人が投石しようとするすると巨人の叫び声があがった。

位置的にはライナーでは無いし、ベルトルトが横槍を入れてきたわけでもなかった。

「……何だ？まさか鐘の音のせいで巨人が迷い込んできたか？」

フローラを含めた壁内人類は、獣の巨人は無垢の巨人の長だと勘違いしている。

実際は、ジークの脊髄液で巨人になったものだけ大雑把な指示を出せるだけである。他の脊髄液で巨人化した者は、完全に敵であるので獣の巨人からすれば厄介な事だった。

配下の巨人でシガンシナ区に居た無垢の巨人を追い払ったつもりだったが、まだ居るようである。

「オイオイ、戦士と戦士の決闘を邪魔するなんて、無粋もいいところだぜ？」

声が出た方向には、褐色の肌をした14m級の巨人が居た。

あれは、女型の巨人をベースにした「異形の巨人」であり、通常種より厄介な巨人だった。

『女型で、器官は〔赤〕、プロトタイプか！ライナーは…まだ来ないし先に潰すか!!』

巨人化能力者は、別の巨人化能力者の脊髄液を摂取すると、その能力を手に入れる事がある。

それを無垢の巨人に転用しようとして誕生したのが、異形の巨人である。

エルディア帝国時代から運用されていたが、意外にも作られた個体は少ない。

1人の子供に複数の精神を付与された様なものであり、始祖の巨人ですら操作不能だったからだ。

後にマーレでも製造されたが、『女型』は初期型であり、運動神経がある巨人に過ぎない。

〈なんだよ？アニちゃんみたいに構えちやつてさ！……むかつくんだよ!!〉

人類を捕食するしか行動しないはずの異形の巨人は格闘の構えをした。

それを見たジークは人間ごっこをする女型に向けて怒り任せに投石を行なった！

〈ああ、無垢の巨人如きにマジになっちゃったよ！〉

両足ごと器官を潰して這い蹲った女型タイプの巨人を見下ろして熱が冷めた。残ったのは、哀れなエルディア人の末路である。こんな奴にムキになってもしょうがないだろう。

〈さつさと楽にしてやるか…〉

「あああああああああああああああああああああああつ!!!」
〈うるせえ!〉

憐れんだジークがうなじを潰そうとした瞬間、異形の巨人は叫んだ!!

その巨人は、うなじを潰しても力尽きるまで叫び続けた!

『クソが…だから情を…ライナーはそこか…』

両耳をやられたジークは、耳鳴りが発生したと同時にバランス感覚を失いつつあった。
た。

そして待っていた様に鎧の巨人がふらつきながらも寄ってきた。

〈邪魔者は片付けたな…では続きをしようじゃないか〉

あくまで勝つのは、下級生物が良いのであって、無垢を相手にするのは空しいだけである。

だからこそ、ドベだったライナーが成長したのを叩き潰すの達成感が良い物だ。他者の努力を踏み躪るほど優越感に浸れる物はないからだ。

〈なんだよ……まだ馬鹿正直に突っ込んでくるのか。ちよつとは学習しろよ……〉

殴り掛かろうと突っ込んできた鎧の巨人に呆れたジーク。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と誰かは語ったそうだが、責めはできない。

誰だつて成功した経験を活かそうとするし、間違つた行動など自分で判断できるわけがない。

ただ、無謀と分かつて突っ込んでくる蛮勇は見てられなかった。

〈お前らサボつてたんじゃないか？威勢の良いだけのガキになるとは失望したぜ……〉

思いつきり顔を殴り倒して鎧の巨人は仰向けに倒れた。

案外呆気なく倒れたが、意識が朦朧してるのに意地で向かってきたのを考えれば良い方だろう。

少なくともジークには、多少の同情はあった。

へふう、片付いた。これでどうだ？……全身から蒸気を噴き出してるし俺の勝ちか！〜

傷口を回復する程度ではない蒸気の量を見てジークは勝利を確信した。

客観的に見ても彼が巨人化を維持できないのは明白であった。

「ライナー!？」

安全地帯で見守っていたベルトルトは、鎧の巨人に近づいた。

いくら一騎打ちしたとはいえ大事な戦士が死んでしまつては意味が無い。

獣の巨人は彼の救出作業を見守るつもりだった。

さすがにここから立ち上がって攻撃するのは、男として失格なのは奴にも理解してる

と思ってる。

「あれ？」

〈おい、どうしたんだ？早く負傷したライナーを救出してやれよ〉

「ライナーがうなじに居ないんです!!」

〈はあ!?!〉

ベルトルトが目撃したのは、もぬけの殻であり、うなじには誰も居なかった。

巨人の空骸には、文字通り巨人の死骸でしかなく、本体はどこかに消えていた。

〈そんな馬鹿な！よく探して見ろ！さっきまで…う…ご!?!〉

獣の巨人は、さきほどから何か音が聴こえていた。

崩れ落ちる瓦礫や巨人の音、そして自分たちの会話ではない異音が聴こえていた。

そして、彼は嫌でもそれを知っている。

ベルトルトも良く知っている。何故なら3年間もその修行をしてきたのだから!!

「ジーク戦士長!!」

ライナーの言葉が聴こえてきたと同時にジークは右目を失明した。慌てふためく彼と違ってトラウマを克服した戦士がそこにいた。

「まだ試合は終わってない！勝利条件は戦闘不能だ!!」

巨人化直後は疲労で動けない弱点があるが、休憩する時間は意外とあった。

戦士長が変異種と交戦している時、ライナーは身体を休める事ができて少し余裕ができた。

そしてそれが終わったのを確認すると、殴り掛かる振りをして、うなじから離脱した。巨体が負傷していたおかげで、元から蒸気が噴き出しているので上手く隠れる事ができた。

『()からは兵士としての経験で戦士長を倒す!!』

戦士のままだったら戦士長に負けていたかもしれない。

巨人同士の戦いでは、自分の性格や戦い方を知られている分、不利である。だが、戦士長は壁内の兵士の戦い方を知らない！

それこそ、生身の人間で巨人を狩る戦法など知るわけが無いからこそ有利に動けた。

『ハ、これはあの時の……?!』

更に好都合だったのは、ジークはフローラに立体機動で翻弄された挙句ボコられていた。

そのせいで、立体機動の音に恐怖を感じてしまい、躊躇ってしまった。

『落ち着け！あいつはこの戦い方を知っているだけだ！あいつとは違う!!』

今までジークが立体機動で巨人を狩った例を目撃したのは、2件だけ。

名前など知るわけが無かったがミケとフローラだけである。

明らかに練度が劣っているはずだと思い、彼は自身のどこかに刺しているアンカーを探した。

そこに繋がっているワイヤーを握れば勝利するからだ。

〈奇襲で勝った気になるなよ！青二才が!!ぐおっ!?〉

必死にライナーの姿を探す獣の巨人であったが視界は何かによって奪われた。そして何か嫌な感触と共に完全に失明した。

『なるほど、手投げ式は役に立つな!』

ライナー・ブラウンは、フローラから受け取った『手投げ式の閃光弾』を使用した。元々、これは単独で巨人と対峙している兵士が使用する目的で製造された物である。調査兵団は、そのコンセプト自体を即座に否定したが、ここで活用される事となった。目くらましで視界が乱れた獣の巨人の左目に2つの刃を突き刺してライナーは離脱した。

『皮肉にもあいつから受け取った奴が役に立つとはな…』

両目を刃で潰された獣の巨人は、もはや脅威ではない。

投石しようにも的是は見えないし、リーチ差も活かす事は出来ない。
それでもジークは負けを認めずに暴れ回った！

〈どこだライナー!!よくも俺をコケにしてくれたな!!〉

「戦士長!!あんたは5年前から変わってませんね…!」

〈そこかああああああ!!〉

ベルトルトが近くに居るはずなのに失明した獣の巨人は声をした方に攻撃を仕掛けた。

それは、さきほどジークが想っていた負けを認めないガキと同じように見えた。

『アニに迷惑を掛けた俺は、あんな感じに痼癩を起していたのか…』

マルセルを失った時点で『座標奪還作戦』に失敗に終わった。

ところがライナーは、作戦続行をする為に2人を無理やり説得して再開した。

自分の描いた未来にならないと駄々をこねて暴れ回る子供の様に彼は難題を押し付けた。

そして今、壁内人類と戦士を巻き込んでこんな決闘をしている。

『これで終わりにします。これ以上は見てられない…』

ライナーは、手投げ式の音響弾を見つめた。

これは、ウトガルド城でフローラから『自分を犠牲にしないで仲間を失わない』ように渡された。

現在、その仲間は、調査兵団を半壊させたアニであり、本当に助けたいのは彼女である。

『すまねえ…フローラ、ジーク戦士長。それでも俺はアニを救いたいんだ…！』

換装した双剣を毛深い獣の巨人のうなじに突き刺して音響弾を固定させて安全ピンを抜いた。

そしてライナーが立体機動でジークの巨体から離脱した瞬間、音響弾が炸裂した！

へぎやあああああああああああつ!?<

さきほどの異形の巨人の叫ぶとは比喩物にならない騒音がジークの全身を揺らした。遠くに居る巨人の気を惹く物であって、直接、括り付ける物ではなかった。鼓膜どころか脳すら揺らして脳震盪になったジークは気を失って倒れた。

「ジーク戦士長、勝ちましたよ。ア二奪還を優先してもらいます」

「ライナー!? さすがにやりすぎじゃないか!？」

「…確かにそう思うけどな。ベルトルト、俺の勝ちで良いよな?」

「うん、誰が見てもそう思うよ」

巨体から救出したジーク・イエーガーは、気絶しており戦闘不能になっていた。音響弾の騒音と衝撃を受けたせい、失禁してズボンの股間を濡らしている。

そして悪夢にうなされて居るのか、時折痙攣させてその度に意味が分からない事を叫んでいた。

救助に当たった彼らも何故戦士長がここまでうなされているのか理解出来なかった。

『お久しぶりですわね』

『お前は…!?!』

『じゃあ、さっそく拷問の続きをしましょうか！頭蓋骨なんて邪魔だから退かしますわね！』

『やめてえええええ!!ぐあああああああああ!?!』

夢の中でフローラと再会したジークは個室の椅子に縛り付けられていた。

エルディアの悪魔と遭遇したジークは頭蓋骨を割られて脳を剥き出しにさせられた。

『ぎゃあああああああ!!あがつ!!がばあああつ!あつば!あつ!!あ!ああつ!』

『貴方は一体何者かしら?』

『あつ!俺は!あつ戦士長あつ!ああつ!!マーレの!あつ!!』

『なるほどね。マーレ、戦士長。続けて?…もう傷が塞がるの?もう一回、割ろうかしら?』

ジークは、脳に何度も木の枝を突き刺されて掻き回された挙句、情報を吐かされる夢を見た。

実際は、音響弾の衝撃のせいで時折、無意識に痙攣しているだけだが、現実の様な感

じがした。

そう考えてしまうほど、ジークから見たフローラは悪魔でありトラウマだった。

『誰か!!俺を助けてくれ!!この際、グリシャでも良い!俺を助けてくれええええ!!』

そして偶然にもフローラが最初にジークにやろうとしていた拷問と一致していた。

違うのは、木の枝が落ちて無かったので、スナップブレードで代用しようとしたくらいである。

ジークの人権を認めていない彼女は、容赦が無かったし最も優しい拷問と思っていた。

元を辿れば、罪人の頭を針を突き刺す尋問術があるとケニーが言ったので拡大解しただけである。

それが民間人を拷問する中央憲兵ですらドン引きする行為であるのは間違いないだろう。

「それにしても何で戦士長はこんなに苦しそうなんだ?」

「音響弾を直接、受けたとはいえ、ここまでなるとは思えないんだけどね…」

ベルトルトもライナーも何故、こんなに戦士長がダウンしているのか分からなかった。

暫くして起き上がった戦士長の説明を聴いても、全く理解できなかった。

容姿を聴く限りフローラであるが、さすがに話を盛り過ぎていると感じていた。

必死にジークは、そいつがマジでやるつもりだったと説明してもスルーされて泣き叫んだ！

——

「ハンネス隊長、鐘の音に続いて、なんか男の叫ぶ声が聴こえますけど…」

「なんだよフローラ、また幻聴か。やっぱり、東防衛線から耳を傷めてるだろう？」

「確かにあの時に音響弾を使いまくりましたけど…」

フローラは、微かであるがシガンシナ区の鐘の音が耳に届いていた。

もちろん彼女ですら気のせいだと思っっているが、そこまで聴き取れる能力があった。

ジークの叫び声も遠すぎて名前すら分からなかったが糞野郎が泣き叫んだのは分

かった。

「それより返り血を拭いておけよ。他人の血は有害と聴くからな」

「お氣遣い感謝します。もうじき門に到着しますので、あとで布で拭いておきます！」

トロスト区から壁外の飛び出した巨人掃討部隊は無傷では居られなかった。

参加した35名のうち、3名が巨人に喰われて6名が負傷した。

それでも巨人を39体も葬ってるから人類の歴史上からすれば大勝である。

フローラは、2名の兵士を救援しようとしたが間に合わず返り血を浴びて帰ってきた。

「フローラ！俺を置いて行かないでくれよお！」

「一緒に着いてくるだけで良いのよ」

「だってお前、巨人に突っ込んでいくじゃねえか！どうしろと?！」

「でも、そのおかげで巨人討伐5体、討伐補佐7体になれたじゃない！」

「俺は生き残るのが優先で、そんな事なんて望んでなかったぞ！」

ダズはフローラに付いて行った結果、何故か巨人を5体討伐できた。実際に他の隊員も目撃している為、否定する事ができない事実となった。

巨人5体を討伐すれば、勲章がもらえて周りから尊敬の眼差しを受ける事には間違い無いだろう。

「よし、リフトが見えてきたな！ダズ！巨人はまだ居るか？」

「いえ、残ってません！」

「じゃあ帰るぞ！俺たちの仕事は終わりだ！」

トロスト区の正門付近でうろついていた巨人は一掃された。

これでしばらくはトロスト区の住民が不満に思うことは無いだろう。

「これで…終わったのか!？」

「とりあえず掃討作戦は終了したわね。ダズ、お疲れ様」

「やっとな、帰れるんだ」

ダズだけではなく駐屯兵団の兵士の全員が同じ気持であった。

犠牲者が出たが、それでも以前と比べれば成果がある分、無駄死には無かった。50mの壁から見渡せば、地平線の彼方には巨人が…居るがそれでも平和に感じられた。

フローラは、総統から戦場の風景を忘れる前に手帳にメモしていった。さすがに戦場で絵を描く行為は、頭進撃でも躊躇う行動であった。

「これで当分、平和になるな」

「もう二度と駆り出されないのを祈るだけですよ…」

「壁外も慣れれば良い所よ！ダズも慣れれば気が楽になるわよ！」

「フローラみたい慣れちゃう方が可笑しいんだよお！」

わざと煽ったフローラにダズは反撃をして、壁内の平和が続くのを願った。

だが、シガンシナ区でライナーがジークに一騎打ちで勝利した為、その願いは叶う事は無かった。

それどころか、トロスト区の防衛戦を凌駕する最悪の日が迫っていた。

しかし、その舞台は人類の最前線であるトロスト区ではない。

壁内の兵力の半数を投入する規模の大激戦は最前線から遠く離れた地で起ころうと

していた。

85話 対人立体機動部隊と頭進撃娘

ウォール・ローゼの東部にあるカラネス区は調査兵団の拠点となっている。

トロスト区の正門が使用不可能になった関係で、拠点や装備、設備を移行した為である。

第57回壁外調査や壁外にうろつく巨人の掃討など事実上の本拠地となっていた。

『僕のせいで…みんなが…』

アルミン・アルレルトは、ディルク団長代行に招集されて調査兵団本部の待合室に待機していた。

『僕がユトピア区なんて言わなければ…！』

原因は、女型の巨人継承者がユトピア区で拷問を受けているとベルトルトに告げた件であった。

気を逸らす為にやったが、結果は奇襲したエルヴィン団長が右腕を斬り落とす重傷となった。

そしてなにより、ユトピア区の住民が危険にさらされるという要因を作ってしまった事である。

その為、ユトピア区だけはウォール・ローゼの住民が内地から帰還できなかつた。

「アルミン・アルレルト様、お待たせしました！ デイルク団長代行殿の面会の用意が整いました」

「は、はい！ すぐに行きます！」

調査兵団のトップであるエルヴィン団長とは、会話する機会が多く、緊張はしなかつた。

しかし、今回は自分の失言のせいで、大勢の人に多大な迷惑を掛けていると実感している。

それにデイルク団長代行とは一切接点が無いのも彼の緊張を高まらせる原因だった。兵士に呼ばれたアルミンは緊張した足並みで、廊下を歩いて会議室の前に立った。

「104期調査兵、アルミン・アルレルトです！」

「入室を許可する！」

「ハッ！失礼します！」

第二会議室の前に居たアルミンは、覚悟を決めて入室した。

そこに居たのは、リヴアイ兵長やハンジ分隊長、そして同格そうな熟練兵が座っていた。

そして、目立つ席には、団長より少し年上の年齢に見える厳格そうな男が椅子に腰かけていた。

あまりのプレッシャーに押されたが、それでも彼は指定された番号の札がある席の前に立った。

「アルミン・アルレルト君」

「はい！」

「そこまで緊張しなくて良いぞ。肩の力を抜いて着席してくれ」

「ありがたいお心遣い、感謝致します！」

デイルク団長代行は、新兵が緊張しているのを見てどうするべきか悩んでいた。

そもそも彼は、兵団の幹部が負傷したせいで無理やり団長代行をさせられている哀れな男である。

だからアルミンに関しては、リラックスさせるように粋な計らいをした。

「マレーネ！会議室に酒瓶持ってくるなど何度も言ってるだろうが！」

「馬鹿だね。会議が終わってから飲む予定だよ！」

「お前はちよつと、その新兵の純粹さを見習ったらどうだ!？」

「はいはい、主役が揃ったんだからさっさと会議を始めて終わらせてね」

「このアマ!!」

調査兵団第3分隊の副長であるデイルクは、配下のマレーネの素業の悪さには呆れかえっていた。

同じ酒飲みのゲルガーと取り換えて欲しかったほど、胃がアルコールで満たされている女だった。

説教しようとしたデイルクであったが自分の置かれた立場を思い出して咳払いした。

「ごほん、失礼した。そんなわけでアルミン君、君も楽にしたまえ」
「は、はい…」

緊張している新兵を彼女の軽口を聴かせて、自分を責める事は無いと察せられるようにした。

エルヴィン団長の秘蔵つ子を脅迫する事などするつもりは無いし、やる気なかった。

「さっそくであるが、諸君らが気にしているエルヴィン団長の安否の事だ」

前置きをせずにいきなり本題に入ったディルクに呆れるハロルド班長。

急な話に対応できてない兵を見て、もう少しアドバイスしておくべきだったと後悔している。

「団長は会話できるほど回復しており、もうじき復帰されるだろう！というかして欲しいー」

「ディルク団長代行!?!」

「うるせえ！お前らが復帰したなら即刻、第三分隊の副長に戻りてえんだよ！」

「デイルクからすれば、兵団の頭脳であるハンジやモブリットが負傷したせいで貧乏くじを引いた！」

「だから彼らが業務ができる様になった時点で代行はあっちの管轄になると思っただけだ。」

「その結果、引継ぎが曖昧になってしまい、ずるずる引き摺ってここまで来てしまった。」

「幸い、団長は左利きであるので、書類のサインなどに困ることは無いだろう。以上だ。」

「デイルク、お前の感想を聞きに来たんじゃねえんだぞ！ちゃんとした本題に入れ！」

「リヴァイ兵長は、相変わらずお優しい。はい、調査兵団の幹部のみを招集したのは訳がある。」

「リヴァイ兵長に叱責された彼は、しぶしぶ本当の招集理由を述べた。」

「アルミンが今日まで寝不足で思考能力が落ちている原因でもある。」

「巨人化能力者の一団がユトピア区を襲撃してくる可能性についてだ。」

「申し訳ありません！僕の失言のせいで！ユトピア区の皆…「はいはい気にするな！」…」

えっ？」

「アルミン君を招集したのは、責め為じゃないんだ。むしろこれからの作戦について相談したい」

「ええっ？」

アルミンは謝罪について色々考えてきたがデイルク団長代行に阻止されて困惑した。気付けば全員、怪訝な視線というよりも自分に期待している視線のように感じた。

「我々は、巨人化能力者が！いつ！どこで！どういう目的で攻めてくるか見当が付かなかった」

「でもアルミン君が虚言したおかげで、次回の襲撃する場所を絞れたんだよ！…酒飲んで良い？」

「クラス！マレーネを退席させろ！あいつのせいで話がこじれる！」

「えー面倒だし良いんじゃない？」

「もうダメだこいつら…エリック分隊長さえ居ればこんな事には…」

マレーネが重要な話までふざけ始めて、デイルクは両手で顔を覆うしかなかった。

調査兵団の兵員の内、5割以上が第三分隊の兵員で構成されているせいでもここまでふざけられた。

ミケ分隊長なら喝を入れてくれるが、リヴァイは意外とこういうのに介入してこなかった。

彼の言葉を借りるとするなら「お前らで解決できる問題は、お前らで解決しろ」という事である。

「良いから本題に入れ」

「そこで、アニ・レオンハートの結晶体をユトピア区の兵団支部の地下に保管する事となった」

「えっ!？」

リヴァイ兵長に急かされたディルクは、ユトピア区にアニ・レオンハートを輸送する事にした。

半壊したストヘス区では、保管する場所が限られるうえに再び戦場のできる環境では無かった。

更に憲兵団が王政の不利になりそうな物的証拠を隠蔽しかねないのでこうするしか

なかった。

…ただ、ストヘス区の復興でそれどころじゃないのか、珍しく彼らは調査兵団の提案を承諾した。

これには、デイルク団長代行も意外であつたが、問題ない以上、理由を問う事はしなかった。

「待つてくださいい！」

「ああ、気持ちには良く分かる。同期でミスティアスの女の正体を知ってしまったらな」
「こつち見るな」

デイルクとマレーネが漫才している時、アルミンは焦っていた。

アニ・レオンハートに危害を加えられていないのは、彼女自身を覆う結晶体のおかげである。

それは不明確が多いのと同時に不安定でもある。

もし、移動中で目覚めたり結晶が壊れてしまったらアニの人生が…そこで終わってしまう。

「アニ・レオンハートの結晶体は動かさないといい方が良くないか？」

「大丈夫だ、お前が想っている末路にはしない。むしろ衝撃で目覚めてくれた方が良い方だ」

アルミンは気にしていなかったが、アニという女性になってきている思春期の男である。

まだ『恋』という感情に芽生えていないだけの男だった。

ベルトルトがそれを知ったら即刻妨害するが、残念ながら彼女もアルミンを気にしていた。

第57回壁外調査で、女型の巨人が目撃者である彼を始末しなかったのはそれが大きかった。

「なるほど、例の結晶体をユトピア区に移動させるのは分かった。」

「だがまだ別の課題は残されているだろうか？」

リヴァイが一番、聴きたかったのは、壁内に巨人が出現した件についてだ。

ユトピア区の住民が住居に戻れない以上、壁内がどうなっているか気になっていた。

駐屯兵团や王政、新聞では、巨人は全て掃討されたと書かれていたが、彼は信じなかった。

「…それはさつきから寝ているハンジ分隊長が一番存じてるはずだ」

「おい奇行種!?! 駄目だ…誰かこいつを起こしてやれ!」

「やけに静かだと思つたら!?! 分隊長! 起きてください!」

「ううん!?! うひゃああああ?!」

ハンジ・ゾエは分かり切っていた会議と把握しており、寝不足から椅子に座った瞬間、寝ていた。

全員が仮にも会議の内容を聴こうとしている時に爆睡していた。

むしろ、寝ていたから会議が静かであった事に全員が気付き、呆れかえった。

そんな視線を気にしないハンジは、奇声を出して飛び起きて唯一、席から立ち上がった。

「あれ? もう会議が終わったの?」

「そんなわけないだろう? 例の物をユトピア区に護送する話が終わった所だ!」

「そうかい。じゃあ、それに関係して、寝るのも惜しんで巨人が壁内に出現した調査結果を…」

「するののか？」

「いや、しない」

回りくどい緒言を聞かされるのが大っ嫌いのリヴァイは、結論だけを求めた。

運動競技に例えると、選手の過去やそれに伴う挫折を踏まえた感動話より結果を重視していた。

そして、いざ聴こうとした瞬間、出鼻を挫かれて、ハンジ以外の全員が拍子抜けした。

「いやだってさ！エルヴィン団長の寝室でピクシス司令と待ち合わせてさ！その時に…」

「本当、ハンジって自分勝手にできる時だけは、喋るんだから…」

「なんか言ったかマレーネ？」

「あら、怖っ！調査兵団一お怖い奴が脅してきたよ！」

マレーネはモブリットに次いでハンジの事を理解している。

だからこそ、こうやってタメ口で話せる関係であるし、ライバルでもある。

「えーっと、僕は何で呼ばれたんですか？」

「そうだな、アルミン君は、アニ・レオンハートについて知ってる事を話してもらいたいんだ」

「知ってる事ですか……？」

「怪しげな行動から好物まで知っている事があれば、包み隠さずに報告して欲しい」

アニ・レオンハートを敵対勢力が奪還を狙っていると分かっている以上、対策が必要である。

しかし、同期からの聞き取り調査では、アニに関する情報が少なかつた。

アニと仲良しであるミーナですら、不明な点が多いせいで調査は難航していた。

そこで、女型の巨人の正体を見抜いたアルミンに詳細な情報提供を望んだ。

会議室に招集したのは、信頼できる人物以外に情報を聴かせない為である。

「すみません。アニの生活習慣や友人関係など僕も把握していません」

「別に脅迫してるわけではない。思い出したらハンジ分隊長などに知らせて欲しい」

「ただ…フローラがアニやライナーやベルトルトと深い接点がありました」
「どういう事だ？」

アルミンは、アニとライナーたちが一時期、仲が悪かった時期を知っている。

デリカシー無しの男にストーカーと化した腰巾着だったので、同期は大体原因を察していた。

今となつては、その時に何かしらの作戦で揉めていた可能性が高かった。

そして何故かフローラがパシリにされて、手紙の配達などをさせられていたのを思い出した。

意外とフローラは謎が多く、豊富な資金力の入手手段や人脈を把握している者は居なかった。

「実は、人類と敵対したアニは、ライナーやベルトルトと仲が悪かった時期があったんです」

「そして一時期、絶交した時期があつてそれを修復させる為に走っていたのがフローラでした」

そこで出て来た疑惑が、フローラ・エリクシアが巨人化能力者という可能性である。実際、3人共一番仲が良かったのがフローラという有様だった。

ならば、彼女も巨人化能力者のスパイとしての疑惑が出るのかもしれないがなかった。巨人化能力者だったら、ここ最近の活躍などにも納得できる回答になるのもある。ただし、この場に居る全員が彼女を疑うほど疑心暗鬼になっていると信じたくなかった。

「まあた、フローラの名が出て来たぞ」

「いつもあいつの名を聴くな。さすが兵団一の問題児……!」

「ここに居る全員、あいつ知り合いという有様だ。まるでスパイみたいじゃないか?」

フローラの名が出て話で盛り上がっていく調査兵団の幹部たち。

その話を聴いていて疑問に感じたクラースの発言を受けて全員が黙り込んだ。

彼女は、調査兵団どころか駐屯兵団のピクシス司令、憲兵団のドーク師団長とも知り合いである。

— 所在地どころか全兵団トップのザックレー総統のお気に入りでもあり王政幹部ともやり取りがある。

もし彼女が敵勢力のスパイであるとしたら、作戦の根本が崩れ去ってしまう。

「そういえば、フローラもこの会議に出席する予定だったな？」

リヴァイは、出席簿を見てフローラがこの会議室に居ないのは確認していた。

鎧の巨人を恨んでいた癖にいざ、討伐できる機会になると何故か無視をしていた。

彼女の性格上、絶対に鎧の巨人を討伐するまで帰還するわけがなかった。

そこで彼の脳裏には、彼女がスパイである可能性が高まっていた。

「あいつなら今、クオルバ区に居るぞ」

「デイルク？なんでこっちに来させなかった？」

「いや、それが中央憲兵と共に巨人を掃討すると言いついてな……」

「……はあ？」

全員がデイルク団長代行の言葉を信じられなかった。

王都ミットラスを警備している中央第一憲兵団が壁外で巨人を掃討などあり得ないからだ。

「そんな馬鹿な話があるか!？」

「俺に言うなよ……!これがその書類だ!マジで長いから覚悟しておけよ!」

「……全く、あいつを知れば知るほど謎が多い……何やってんだこいつ!？」

団長代行から書類を受け取ったリヴァイ兵士長がその書類が事実であると直感で分かった。

何故ならフリッツ王の筆跡からザックレー総統、各王政の幹部のサインまで本物だったからだ。

それだけなら良かったのだが、彼の目を引いたのは以下の文面だった。

『中央憲兵の備品を破壊したり口にしない事を誓う』などの念書に見える文面が書かれていた。

更に読んで一番下にフローラのサインを見たりヴァイは、呆れてしまい無言で隣人へ手渡した。

「今度は王政の議会で何かやらかしたな……あいつ!」

「何をどうすれば、中央憲兵の備品を食べない念書が書かれるんだ!？」

「やべえ…有名人だらけのサインだ。売るだけで大金が稼げるぞ…」

「フローラをスパイにするとフリッツ王を含めたあらゆる勢力に喰い付く事になるな」

彼女が残した書類からいろんな契約が書かれていたが誰もが呆れる物であった。

要するに王政の議会でも知られた問題児であり、馬鹿な真似をしないように約束した念書だった。

全員がフローラのやらかしに大体、心当たりがあつたのも、脱力した原因である。

目の上のたんこぶである王政ですら、悩ましい存在であると分かり、ある意味平和になつた。

いがみ合う複雑な勢力図でも、フローラのやらかしについては、全会一致していたという事だ。

つまり、どの陣営から見ても呆れるほどの問題児であるという事だ。

「クシヨン！」

「何だ？風邪を引いたのか？」

「まさか！こんな時に布団を被って寝てられませんか！」

「なら良いんだがな」

クシヤミをしたフローラを心配したケニー隊長。

調子が悪いならさっさと安全地帯に行つてもらうつもりだった。さすがに壁外の専門家を失えば自分たちがどうなるのかは理解していた。

「それより巨人に追いかけてるんだが何か言う事は？」

「別に問題ないでしょ！想定通りですから！」

「そりゃあそうだけだよお！もおーちよつとだけ怯えたりしないのか？」

「それをして何かメリツトがあるのですの？」

「いや、無いけどよお！もうちよつと乙女らしくしてくれれば男は頼もしくなれるんだがなー」

フローラとケニーは並走をしているが、その後ろを巨人の大群が追いかけて来ていた。

馬に騎乗しているとはいえ巨人に追いかけるのは誰だって拒否反応がある。

それだけ巨人に背を向けて走っていくというのはケニーにとって辛い事であった。

「予定通り、アツカーマン隊長がこちらに向かってくる予定です」

「カノン砲班、準備は良い!?」

「「ハッ!!」」

カーフェン副長の指示に従い、黄緑色の装備で構成された班が巨大樹に待機していた。

それだけではなく王政が隠し持っていた新技術を対巨人用兵器として転用している。彼らは囷になっている最強コンビが来るのを待っていた。

「おい、まだか!?もう馬より俺がバテそうなんだが!?!」

「合図が出ました!巨大樹の森に突っ込みます!」

「イーヤツホイ!!ただいままだああああ!ベイビー!!」

合図を確認して囷役の2名が巨大樹の森に駆け抜けていった。

それを追いかけて巨人の大群が森に侵入しようとしたその瞬間、複数の発砲音が響いた

発砲音と共にライフリングから飛び出してきた弾丸は巨人の膝や踵、脛を貫いた。

「狙撃班の攻勢が成功しました！」

「意外と威力がありますね。これならうなじを狙っても良かったかもしれません」

RF-01 クリーガーカスタムは、対巨人に改良したライフル銃である

TN-01 クリーガーカスタムは、その予備の銃身を左右で合計8本格納できる

MC-01 クリーガーカスタムは、狙撃して隠密をする立体機動装置なので静音性に優れている

狙撃部隊は、指定された巨人の部位を見事撃ち抜く事に成功した。

巨人の首を正面から狙っても弱点のうなじを吹っ飛ばす威力があった。

カーフェン副長は、ライフル型の装備の威力に満足した。

「副長！ 新手です！ 巨人3体、こちらに向かっています！」

「射線状にいるか。カノン班！ 構え！ ……撃てえ！！」

副長の号令を受けたカノン砲を構えた部隊が一斉砲撃を開始し、巨人の頭を吹っ飛ば

した！

野砲や壁上固定砲が使用する榴弾とは違うのは、まずその威力！

鎧の巨人はともかく巨人の頭を狙えば頭部どころか鎖骨付近まで吹っ飛ばす威力であった。

ハードカノンmk-2は、片手で砲身を持てるほど精度と軽量化された砲身である

ハードホルダーmk-2は、替えの砲身を左右含めて6本装填できる

ハードモーターmk-2は、重量があるが、最低限の立体機動ができるようにポンペを増量している

「う、羨ましいですわ！この威力……」

「……おい、嬢ちゃん？駄目だこりゃあ、完全に魅入ってやがるぜ……」

フローラは、容易く巨人の頭部を吹っ飛ばしたのを見て目を輝かせて涎を垂らした！

この兵器が量産化すれば、野砲以上に頼れる空飛ぶ砲兵になれるだろう。

今回は待ち伏せであったが、本当の使い方は巨人にアンカーを打って間近で砲撃する戦法である。

威力的には充分過ぎて、むしろ爆発に巻き込まれないか心配になるくらいだった。

「巨人7体討伐！残り5体、全員負傷して回復待ちの模様！」

「自動小銃班と散弾班を投入！いつきに潰す！」

「ハッ！自動小銃班、散弾班、攻勢を準備を急げ!!」

クイーンバレルは、弾数30発が装填された赤色のマガジンを装填する小銃である

クイーンバレルは、左右にそれぞれに予備のマガジンを4つ、合計240発の弾丸を保管できる

クイーンシリンダーは、ワイヤーの巻き取る速度が尋常ではなく文字通り跳び回れる装置である

これは、主に散弾銃ではカバー出来ない遠距離攻撃や支援攻撃に特化した銃の一式である。

対人用であり、巨人相手には威力不足だが、騒音と衝撃で巨人の動きを怯ませる効果がある。

あまり意味が無い様に見えるが、遠距離で一方向的に敵を攻撃できるのは利点である。

リヴァイ兵長ですら、遠距離の攻撃手段がブレードを投げつける事しかできないからだ。

そう考えると、赤い色で統一されたこの装備は、調査兵を殺すのに最適なのかもしれない。

「自動小銃班は出る幕があるのですか？」

「散弾班の援護というのが強いね。だって、射程範囲内に撃てるとは限らないから」
「確かに散弾では、よっぽど近づかないと威力が出ません。良いご判断かと思います」

元々、対人立体機動部隊の武器は、『一式銃』という対人用の散弾銃だけであった。ところが、王政が急遽、巨人にも対応できるように隠された兵器を解禁した。

巨人の硬い表皮を貫通して、うなじに命中すれば破壊できるようになっている。

これで巨人にも通用するようになったが、散弾なのでよっぽど接近しなければ効果が無い。

そう考えると、奇襲ができないのであれば遠距離による援護攻撃は必須であった。

二式銃は、散弾が細かな硬質化の結晶を高速で打ち込む事で巨人の表皮を貫通できる

ようになった

二式弾幕は、銃身を変える為の予備のカートリッジが合計10本ある

二式機構は、旧式の1式機構を改修してガスの残量も含めて性能が向上した

「しかし、二式銃を装備した兵は多いはずですが、そこまでする必要があるのでですか？」
「全員が生き残るには、過剰に警戒した方が良いから」

念入りに警戒している副長に部下が疑問を投げかけるが、彼女は一蹴した。

王政の議会の為ではなく隊長に忠誠を誓った彼女たちは一兵足りとも欠けてはいけなかった。

中央憲兵の中で唯一王政の忠誠心が無い部隊の構成員なら尚更、死なせられなかった。

「ようやく俺の出番だ！思う存分、暴れてやるぜ!!」

ケニー・アッカーマンは上機嫌で巨大樹の幹にアンカーを打ち込んで飛んでいった。

ある程度空中に上がった時、アンカーを外して、巨人のうなじに向けて二丁拳銃を発

砲した！

これは『両手射撃』という技能で短時間でより多くの弾丸を撃ち込む技能である。操作装置にある銃口とアンカー射出の向きが同じの為、両方発砲するにはこうするしかなかった。

「アツカーマン隊長に続け!!」

部下達は巨大樹や巨人にアンカーを打ち込んで片手撃ちで巨人に弾丸を撃ち込んだ！

これは『片手射撃』という技能であり、比較的安全で正確に獲物を撃つ事が出来る。ただ、クイーンバレルという自動小銃以外は1発撃つたら、銃身を装填しなければならぬ。

そう考えると、慣れれば両手射撃の方が威力も命中する精度も上がる。

散弾銃が配備されていたのは、立体機動をする調査兵にできるだけ命中させる為であつた。

「やっぱり撃つ度に装填するのは面倒だな…おっと部下に獲物が取られちゃう」

発砲した銃身を捨てて、大腿部に装着した銃身を装填し直したケニーは更に猛攻を仕掛けた！

まだまだ覚悟をしきれてない部下に自分の雄姿を見せつける事で指揮を鼓舞する狙いがあった。

訓練しているとはいえ彼らは、瞬時に特定部位を狙って射撃する事ができなかった。立体機動をしながら近づく為、近くにある部位しか狙えないのである。そんな彼らに『お手本』を示して、能力向上を狙った。

「羨ましいわ…」

フローラ・エリクシアは唯一、通常の立体機動装置を身に付けていた。

さすがに彼らの装置を身に付ける事はできなかったが、その装備については必死に分析していた。

『ミーナがこの装置を身に付ければ、射撃の技能を生かす事ができるのに…』

親友であるミーナ・カロライナは、双剣を構えて立体機動で巨人に挑むのは向いてなかった。

力は弱いし、立体機動で身体が振り回されており、白兵戦をさせるには問題があった。以前では、巨人に挑むには、その戦闘スタイルしかなかったので仕方なかった。しかし、この装備を纏えば、非力な彼女でも正確に巨人を討ち取る事ができる。

カラネス区壁外で見せた射撃の腕前を知っているフローラは、親友こそ相応しい装備だと思った。

「これで掃討完了だ！全員生き残ってるか？」

「はい！！」

「そうだな、今のうちに使用した銃身を回収しておけ。再利用するかもしれない」

「ハッ！！」

点呼を取る前に即答されたケニーは困惑しながらも、全員生還したのを感じて笑みを溢した。

巨人の位置を把握できる巨人専門家のフローラの動きから、暫くは安全だと結論付けた。

『さて、今回の実戦で欠点がいくつも発見できた。どう欠点を潰すかだな』

ケニーは、今回の掃討作戦に新型の兵器を運用して発生した欠点を分析していた。

特に問題だったのは、カノン砲やライフル銃を二丁にする必要性である。

重量があるうえに銃身が長いせいで立体機動に支障が出ていた。

クリーガーカスタムは発砲する前に銃身を交換しないといけないほど激突させた件もある。

『カノン砲に至っては、発砲の衝撃のせいで次弾装填できなかつたな』

2。 巨人に効果がある榴弾を携帯できるようにした様な砲身であるハードカノンmk—

片手で試し撃ちをさせたら、発砲した衝撃で砲撃手が吹っ飛んでしまった。

地面に居たからよかつたものの立体機動で片手撃ちさせれば、事故になるのは目に見えている。

そのせいで、待ち伏せさせて一斉砲撃をさせるしかなかった。

『たったこれだけでほぼ全員がガス切れか。きついな…』

そして一番問題だったのは、ガス切れである。

ガスボンベを背負う形となっている対人立体機動装置。

訓練では良かったが、実戦ではガスの量が少なすぎて、動きづらかった。

巨人のうなじを狙う為に動き回ったらガス切れなど本末転倒である。

『多分、あの立体機動装置マニアの嬢ちゃんも欠点に気付いているな』

ケニーは、対人立体機動装置を見て興奮しているフローラを見て溜息を吐いた。

彼女は、索敵と壁外での活動のアドバイスをもらう為に同行してもらった。

もちろん、それは建前であり、これらがお前に襲撃してくるといふ脅しであった。

「私も装備してもいいですか!？」

「いや、訓練してなきやできないよ」

「じゃあ、訓練すれば使わせてくれるんですね!？」

「えーつと…」

「この辺りの巨人を一掃しました！訓練する時間はありますわ！」

なのにあの女と来たら、さきほどから改善のアドバイスばかり口にしていた。

それどころか隙を見て装備で飛び回れるように部下を口説いている有様だ。

副長のカーフェンが彼女に絡まれて、無言で自分に助けを呼んでいた。

『部下だったら可愛いんだが、敵にあんな事されたら対応に困るよな…』

子供の様に強請るフローラを見て、とりあえず叱る為にケニーは歩き出した。

なんで敵を叱るのか。彼自身も理解できなかつたが仕方が無かつた。

兵服のジャケットを脱ぎ捨ててノースリーブ姿になっている馬鹿女に向かって行った。

そして傷だらけの両腕を見て内心でドン引きしながらケニーはフローラを叱った。

その時に巨人の群れを感知したと分かつたので余力がある内に部隊を退却させた。

『対人立体機動装置があればミーナが活躍できるわね！どうやって装備をもらおうかし

ら』

フローラは、親友のミーナが身に着けるべき立体機動装置をここで見出した。

身長143cm、体重48kgの少女に腰に鞘をぶら下げさせて立体機動させるのはきつかった。

だが、この装備であれば他の立体機動装置と比べて遥かに軽い。

更に彼女の特技である射撃も活かせる利点があった。

操作装置の底部からアンカーを射出する分かり易さもポイントである。

腰部にある射出装置でアンカーを射出する通常の装置の方が移動の難易度が高かった。

『どうにか王政を説得させて似たような物を作れないかしらね』

対人立体機動装置の豊富な種類の試験運用を行なって様々な欠点を発見していた。

この実戦データのおこぼれを狙っているフローラ。

もちろん、この立体機動装置が調査兵団に牙を剥くのを理解している。

だから王政のトップと敵対している内部勢力を支援してそれを妨害させるつもり

だった。

『立体機動装置は奥が深いわ！ミーナを絶対に死なせない様に頑張るわ！』

しかし、その対人立体機動装置が牙を剥くきっかけを作ったのはフローラのせい。
それを調査兵団が気付いた頃には手遅れであった。

86話 叶わぬ夢と叶う夢

調査兵団は、兵士1人に兵舎の部屋が割り振られている。

これは兵団でも珍しいが、単純に死傷率が高いせいであつて、同室する兵士が居ないから個人で利用できるという悲しい事情である。

「調査兵団の総兵力は、2個小隊未満らしいぞ」

「【カラネス区守備隊】に改名してもいいんじゃないか？」

「まだあいつら、壁外調査をするみたいだぜ」

「税金の無駄遣いだな…」

現に2か月前まで300名居たはずの兵員は、100名足らずとなつており、もはや守備隊と化した。

巨人に対する危機感が薄れている王都の住民ですら噂されるほどに貧弱な兵力だつた。

調査兵団ができるのは、兵士の個性を重視し、個室を割り振り自由に生活してもらった事だけだ。

「今日こそ、フローラの秘密を暴いてみせる！」

ミーナ・カロライナは、フローラの様子が可笑しい事に気付いた。

元から可笑しい行動をしていたが、訓練兵団を卒業してから秘密が異様に多くなつた。

知り合いが1万人を超えていると思うほど、親友はコミユカの化け物である。

しかし、裏社会の権力者とも接点があるのか、詳細を一切話さない時がある。

「やっぱ鍵が変えられてる！ここまで排他的になるなんて……！ヒストリア！準備は良い？」

「もちろんよ！」

ミーナは、事前に打ち合わせたヒストリアとフローラの個室の扉で集合した。

目的は、最近怪しい行動をしている親友の秘密を突き止める事である。

昔なら『報告会』で起きた出来事などを話してくれたのに今は秘密しかなかった。ここまではあからさまにされたら、解明したくなるのが人の心理である。

「……開きそう？」

「鍵穴が特殊みたいで手応えが全くないの……」

「私が代わりにやるから見張っておいて」

「分かった！」

「悪い子」になったヒストリアが針金や小道具でピッキングしようとしたが、苦戦していた。

代わりにミーナがやろうとしたが、彼女より不器用なので解錠ができるわけがなかった。

そもそもこの鍵は、磁石で施錠しているシリンドーを外す仕組みである。鍵に付いている磁石がなければ開くわけなかった。

「何をしているの？」

「見れば分かるでしょ！フロアーの寝室に入ろうとしているの!?!」

「フロローラ!？」

フロローラ・エリクシアという女は、人類の歴史上、最も巨人と交戦した人物である。トロスト区防衛戦から巨人と交戦する全ての作戦に従事していると言っても過言ではない。

カラネス区壁外の巨人掃討作戦を一発芸をやるノリでやつても誰も驚かないほどである。

そんな酷使された彼女が寝室に戻ろうとすると、2人の同期が扉の鍵をこじ開けようとしていた。

それを見て潜入任務の様に見張りの視界を掻い潜り、彼女たちが隙を見せた瞬間、話しかけた。

「えーつと…汚部屋になってないか調査しに来たの!」

「前に来た時は、汚れたからミーナと一緒に掃除をする予定だったの!」

「貴女達とは共に学び合う関係でいたかったんだけど、ここまでされると…きついわね」

さきほどまで心を躍らせながら遊んでいたフロローラだったが話しかけた瞬間、気持ち

が冷めた。

残ったのは、友人たちがあくどい手で部屋を覗こうとしている失望感だけだった。

それを感じ取った2人は何とか誤魔化そうとしたが更に関係が悪化しただけで終わった。

「なんでそんなにわたくしを気にするの？」

「だって！部屋の前に郵便物が山盛りになってるもん！絶対、部屋を掃除しないでしょ！」

「確かに『郵便受け』は毎日、溢れているけど…」

フローラは【鮮度】というのは、食料以外にも存在して、恐怖と情報にも存在すると思っている。

その為、世間の流行や情勢には敏感であり、商会の機関紙や新聞、政府刊行物を集めていた。

良くも悪くも商人の血を継いだ彼女は、情報入手する為に独自の流通ルートを構築していた。

ところが、調達し過ぎた上に酒場や肉屋などのチラシまで来ているのだから処理しき

れなかった。

そのせいでフローラの部屋の前には、郵便受けどころか、その隣に書類の山が鎮座していた。

「別に部屋に入りたくないならわたくしに一声かければいいでしょ？」

「そしたら、部屋を整理しちゃうじゃない！」

「まあね！」

兵士たる者、整理整頓が出来なければならない。

何故なら、兵士はチームで動く以上、誰もが公共物を平等に利用できるようにする必要がある。

以前、フローラがライナーにあげた『兵士心得帳』の1ページ目に書かれているほど重要である。

ところが、彼女は大量の私物を持ち込んでいたので、そう言われると反論しようがなかった。

「ああ、分かったわよ。見るだけなら良いわよ」

致命的な情報は暗号文にしているので、特に入室されても問題は無い。追いついたのを諦めたフローラは解錠して2人を部屋に入室させた。

「やっぱり汚れているじゃない！」

「これでも整理整頓した方なだけけどね…」

彼女たちが見たのは、無数に積まれた木箱と書類の束、そして作業台には工具が散らかっていた。

兵士としては失格どころか、障害物で通路の様になっており、汚部屋ではなく汚通路である。

お節介なミーナは、それについてお説教すると覚悟したフローラだったが予想が外れた。

「これは…何？」

「依頼されて描いた絵よ」

「フローラらしくない絵ね…」

ミーナが気になったのは、目立つところに置いてある絵画だった。

その絵は、壁の近くで巨人と兵士の集団が戦闘しているシーンを切り取った様な絵であつた。

『もつと明るい絵を描かないの…？』

内容としては、巨人に捕食された兵士を助けようとした兵士も喰われる様子を描いていた。

敵討ちと言わんばかりに泣いた兵士が巨人のうなじを削いでいたが、悲壮感溢れる絵である。

それだけで不気味な絵であるが、血が本物の血痕であり、いつもの彼女が描く絵ではなかつた。

「わたくしがここに来たのは、完成したこの絵を依頼人に届ける為なのよ！」

「戦闘が終わったばかりなのに、もう別の事をやるの？」

「時間は有限だからね。やれる事はその日のうちにやるわ」

完全に塗料が乾いたのを確認したフローラは、ミーナに返答しながら額縁に絵を入れた。

そして慣れた手つきで、台車に乗せてある緩衝材が入った木箱の中に絵を入れて封をした。

その様子を見ていたヒストリアは違和感を覚えて思わず口を開いた。

「何でこんな絵を私室で描いていたの？もつといい場所があつたと思うんだけど？」

「絵自体を内密して欲しいという依頼でやったのよ。だからみんなに内緒にして！」

「トロスト区の絵画コンクールに応募するなら隠れてやる必要がないのにな」

「こんなのを提出しても世間に受けないし、しょうがないわ……」

ザックレー大統領とフローラは、芸術という事について語り合う友人関係である。

ところが、階級差のせいで気軽に会話したり文通する事ができなかつた。

プレゼントにしても、賄賂と思われぬように徹底的に秘匿する必要があつた。

故に総統が主催した絵のコンクールに提出するという回りくどいやり方で、送るつもりだつた。

というより、彼はフロラーの描いた絵を受け取る為にわざわざコンクールを開催していた。

『ザックレー総統なら他の参加者の絵も拝見されて喜ばれると思うけど…回りくどいわよね』

壁内に巨人が湧いたご時世で、呑気にコンクールを開いた総統に批判の意見が集まった。

しかし、何としても壁内の混乱を収めたい王政府は、総統のコンクールを全力で支援した。

おかげで、堂々と一兵卒がザックレー総統に直接、絵画を渡しても怪しまれなかった。トロスト区奪還作戦で損失した美術館を建て直すほど芸術が大好きなのは知れ渡っていたからだ。

「ちよつと待つて！依頼人は誰なの!？」

「…言えないわ!」

「また秘密なの?」

「そういう約束だからよ」

ミーナは、こうやってフローラが秘密にするのが大っ嫌いだった！

契約、約束、命令、守秘義務、彼女が口にするのはそういう事ばかりだった！

共に仲良く学んで称え合って成長していたのに今では、完全に親友に置いて行かれていた。

自分だけがあらゆる面で取り残されているの実感しているからこそ、焦って親友にしがみ付いた。

「私たち親友だよね!？」

「もちろん、3年前に貴女と出会ってからずっと親友だし、今もそうよ」

「…気付いているの。先輩や同期が私に何かを内緒にしてるって事くらい」

「ええ、そうね」

「だから教えて!どんな秘密を私に隠しているの!？」

調査兵団に所属しているミーナは疎外感があった。

フローラの寝室で気持ちを打ち明けたのは、ここであれば真実を教えてくれると思っ

たからだ。

ヒストリアが心配そうに見つめて来たのを感じたフローラは、隠し事を打ち明ける覚悟を決めた。

「良いわよ。ミーナに秘密にしてる事を話すわ。でも絶対に自棄に成つちや駄目だからね?」

「大丈夫…覚悟はしてるから」

ミーナは自分の力不足のせいで、調査兵団から外されると思っている。

実際は、不意打ちでベルトルトを斬り付けるなどガッツがあり、上官も感心している少女である。

そんな彼女に告げられたのは残酷な事実だった。

「第57回壁外調査で暴れた女型の巨人の正体がアニ・レオンハートだったの」

「……………えっ?」

「ストヘス区が半壊した事件があったでしょ?あれはアニの捕縛作戦に失敗したせいなのよ」

「もう！こんな冗談を言うなんて……！ヒストリアも言つてよ……ねえ反論してよ」

馬鹿らしくなったミーナは、ヒストリアに反論してもらおうとしたら、顔を背けられた。

それだけで全てが事実だと知ってしまった。

「な、なんで!?何で黙ってたの!?みんな知ってたの!？」

「そうね」

「どうして教えてくれなかったの!？」

「ミーナが真実を受け止められる精神状態になるまで待つていたの」

「意味分からない!!ふざけないで!!」

泣き出して取り乱したミーナはフローラに飛び掛かった。

それを予想していたフローラは、絵画を安全な場所に移動したのを確認して、彼女を受け止めた。

泣きじやくる親友の頭を優しく撫でながら、彼女を落ち着かせる言葉を必死に考えていた。

「調査兵団に破れたアニは、硬質化で作った結晶体で全身を覆って閉じ籠ったの」

「聞きたくない！聞きたくない！そんな話だなんて!!こんな事なら知らなきゃ良かった!!」

「その動けなくなったアニをユトピア区に護送するんだけど、ミーナにも手伝ってもらいたいのに」

「なんで!？」

フローラは、取り乱したミーナの涙をハンカチで拭きとって頭を撫でた。

少し落ち着いて見上げてくるまで待機してから、その狙いを語り始めた。

「孤独で疲れていたアニは、ミーナの純粹さと行動に惹かれていたのよ」

「もう……やめてえ……聴きたくない」

「だから一緒に居てあげて。孤独に戻ったアニに話しかけて欲しいのよ」

ミーナは、アニが敵だったのを信じる事は出来なかった。

一緒に過ぎごして共に笑い、雑談して苦悩を打ち明ける仲であった。

つい先日では、親しくなったヒツチと4人でドーナツを食べる約束をしていた。

ベルトルトやライナーが敵だったのは、正直、心に響かなかったが、アニだけは特別だった。

「アニと交戦したけど、彼女は調査兵団に追い詰められたから自棄で暴走したと思ってるわ」

「じゃあ、私が傍に居たら、そんな事しなかったって事？」

「少なくとも他の巨人化能力者よりもミーナの友情の方が上だと思うの」

実際、事実でありアニは、好意があるアルミンによつて説得されていた可能性があった。

血の繋がっていない父親がマーレに残されていないければ、今の生活は彼女にとって心地よかつた。

痺れを切らしたミカサが刃を見せなかつたら、笑つて開き直す事も無かつただろう。

そんな事情などフローラは知らなかつたが、アニと一番仲が良かった女なので大体察している。

「どうやって、アニと向き合えば良いの？」

「アニの事を想うなら、いつも通り、彼女に話しかけてあげるだけで良いわ」

「……私の事、嫌いになつてない？」

「疲れ切ったアニは貴女に癒しを求めていたのよ？そんな事などあり得ないわ」

フローラは、ミーナの思考誘導を行なつて、アニの力になれるのは彼女だけと刷り込んでいた。

親友の精神が疲弊しきつて、微かな灯が消える前に新たな燃料を追加させるつもりである。

すなわち、アニを救えるのはミーナだけという思考誘導で「肉の誓い」と同じく生きる糧にした。

マインドコントロールは、フローラの十八番であり、同期を前向きにするのに多用している。

こつそり自分を有利にするも得意であり、やらかしても『フローラだし…』と済ませている。

「もうじき、カラネス区に保管しているアニの結晶体をユトピア区に輸送させる手筈よ」

「その前に逢いに行きたい！」

「団長代行に『面会許可』が取れるようにしておくわね」

「ありがとうフローラ」

どさくさに紛れて王政や商会と取引しているのを伏せる事に成功したフローラ。

とりあえずミーナが自棄で暴れる事が無い事を確認したうえで、もう一人の方に向き合った。

「ヒストリア！何やってるのよ!?!」

「えっ!?!えーっと、片付けする為に仕分けしてるの!」

「ユミルのラフ画があるスケッチブックを盗もうとしか思えないんだけど!?!」

「何でバレたの!?!」

ヒストリアはユミルを奪還してもう一度、彼女の告白を受けるつもりである。

それは別として、二度と逢えない予感がして彼女との思い出を失うのを極度に恐れていた。

毎日を必死で生きて来たせい、傍に居るのが当たり前だったユミルの顔を忘れてたく

なかった。

以前、ミーナから訓練兵の顔を描いた画集がフローラの部屋に転がっていると聴いていた。

ミーナの作戦に賛同した上で、さきほどまで掃除していたのは、その画集を探していたからだ。

『これは……ユミルの絵！しかめっ面してる所から笑顔まで！これを床に放置するくらいなら……』

そして、ぞんざいに床に置いてあったスケッチブックからユミルのラフ画を大量に見つけた。

フローラはミーナとの会話で、気が逸れたと思って、拝借しようとしたが即座にお縄についた。

「駄目じゃないの。いくら散らかっているからって、人の物を盗むなんて」

「だって、こんな大切な物を床に放置したらゴミになっちゃうじゃない！」

「盗む事自体は否定しないし、行動を省みないのね」

フローラは、『クリスタ』という女神を演じていた女が苦手だった。

何かを演じていると、すぐに勘付いていたのもあったが、性格の相性が悪かった。

亡霊のように彷徨う姿が彼女の進撃魂と正反対だったのもある。

「ミーナもそうだけど、どうして一声かける勇気が無いのよ」

「じゃあ、スケッチブックを持って行っても良い？」

「そんなに欲しいならあげるわ。そんなに大事にしてくれるなら作者としても本望よ」

クリスタという少女は、自発的に自分を犠牲にしても「良い子」として他者を喜ばそうとした。

今では、自分の為に行動して、「悪い子」になっても、目的を達成しようとする女になつた。

ザックレー大統領が自身の芸術を誰かに理解を得たい様に彼女も生み出した作品に誇りはある。

大事に両手で抱えられているスケッチブックを見て、叱責しつつも彼女に献上する気満々だった。

「ありがとうフローラ！私、まだこの部屋に宝物が眠ってると思うの！」

「私も発掘作業を手伝うわ！」

「…勝手にして。ただしそこ以外は弄らないで！そして欲しかったらわたくしに一声かけてね？」

「分かった!!」

ヒストリアは、ユミルの思い出を描かれた物を更に搜索する為に掃除する気満々だった。

ミーナも宝物がフローラの部屋で発掘できると分かって、許可をもらって持ち帰る気だった。

『発掘』という単語で不満に思ったフローラだったが、限定的に許可をした。

機密情報は全て暗号化してあるし、本当に重要な物は別の場所に保管してあるからだ。

「じゃあ、わたくしはトロスト区に行つて来るわ！」

「いつてらっしやい!!」

「帰ってくるまで留守番をしておくね！」

片手で額を抑えながら台車を押して退室するフローラを見送った2人。

部屋の主が扉を閉めて施錠した音を確認した瞬間、部屋を物色し始めた。

ヒストリアは、失われたユミルの記憶を思い出して後世に残す為に！

ミーナは、再びフローラの秘密を暴く為に活動を開始した！

「これはどう？」

「なんて書いてあるか分からない！」

明らかに暗号文が書いてある書類が発見できたが解読は不可能だった。

商人たる者、部外者に情報を漏らさない工夫は、遺伝で無意識にしていたのかもしれない。

必死に秘密を暴こうとしているミーナは、ヒストリアと協力して突き付ける証拠を探していた。

「ねえ……これ、ファッション誌じゃない？」

「フロローラがファッションに興味があるなんて変ね。クローゼットには私服が一着しかないのに」

フロローラが部屋から去って一時間くらいが経過した頃だろうか。

ヒストリアが、ファッション誌を発掘してミーナに手渡した。

フロローラがお洒落などしないのを知っている彼女からすれば、疑問に思うしかなかった。

例えるなら、ジャンが女装してアルミンに告白するくらいあり得ない事であるからだ。

『王都の若者は、膝丈のスカートと靴下がブーム?…これで男もイチコロ?。ふーん』

ミーナは雑誌の頁をめくって、体臭を誤魔化す用途の香水がアロマセラピーになっている事。

それがブームになっていて香料の値段が高騰している事。

貴婦人たちの間では、『化粧水』という新しい製品に夢中になっている事。

王都では、従来の習わしに反抗する若者の中で膝丈のスカートと靴下が流行っている

事。

そもそも自分が手に取っているのは、内地の裕福な若者向けのファッション雑誌だと分かった。

「なんでこんなものがフローラの部屋の中で眠っているの？」

「女子力皆無の人の部屋で見つかる物じゃない…」

化粧もファッションも疎いどころか、面倒なのでやる気が無いフローラ。

そんな事をするくらいなら、両親の仇と発覚したライナーの首を刎ねる練習の方が大事だった。

だが、商人魂があるので流行には敏感である。

流行には『仕掛け人』が存在するので、その意図を読み取り、今後を見据えて行動していた。

その為、自身はお洒落自体に興味は一切無かったが、これを見たミーナは勘違いした。

「私、決めた！」

「何を？」

「内心ではお洒落を望んでいるフロローラが女として磨けるようにサポートするの！」

「私も手伝う！あのフロローラがどんな感じに変身するか見てみたい！」

「ありがとうヒストリア！一緒に頑張ろうね！」

男性からの評価は、「野郎と雑魚寝するくらいならフロローラの方がマシ」の扱いとなっている。

それだけぶっ飛んでいるせいで、ジャンですら異性として認識されていない哀れな女である。

自分が居ないと、女子力が無くなると自負しているミーナは、フロローラを乙女にする気になった！

ヒストリアも同期としてそれを応援したくなった。

「クツション!!」

「風邪か？お前らしくもないな」

「なんか寒気がしましたの」

通行許可証をカラネス区の門衛に手渡したフローラは、背筋が冷えたと同時にクシャミをした。

進撃女の珍しい乙女アピールに門衛たちは、明日、太陽が壁内に落ちてくると思ってしまった。

「大丈夫だ、お前なら風邪を絶対に引かないから安心しろ！」

「もし、風邪を引いたら、俺が全裸で踊っても良いぜ」

「最近、わたくしの扱いが雑過ぎませんか？」

「鏡で自身を見つめ直してからその発言をするんだな」

カラネス区守備隊の中では、フローラは『頭のヤバイ女』という単語で通じてしまっている。

それだけやかかしており、一般兵からザックレー総統、更にも上の存在からも扱いが同じだった。

ただ、仲が良いので、わざわざからかって、彼女が憤慨するのを見て楽しんでいた。

『絶対になんか可笑しいわ！何者かが！わたくしの扱いを雑にしようとしてるわね!!』

対人立体機動装置の散弾銃に使われている弾薬を調べる為に舌で舐めていたフロラ。

装備を拝借できない以上、五感を最大限に使って、彼女は真面目に分析しようとしていた。

その光景を目撃したケニーは呆れて叱りつけて、備品を食べない様に念書を書かせた。

念書の複製を見てザックレー総統は抱腹絶倒し、王政の真の支配者は、困惑するしかなかった。

彼女自身は、真面目なのに行動がズレているせいで、各勢力の評価が同じだったのである。

「気を付けて、お土産を持ち帰ってこいよ！」

「どうせなら俺の彼女になりそうな女の子を連れて帰って来ても良いぞ！」

「わたくしを何だと思ってるんですか!?!」

「フロラに決まってるだろう！」

「ああ!? もう、行きます!!」

褒められているのか馬鹿にされているのか分からないフローラ。

少なくとも彼らの悪意は感じられるが、言い返す気分ではなかった。

商会から荷馬車を借りたら、ついでにトロスト区宛の荷物をありつたけ積まれてしまった。

『おかしいでしょ! 何でこうなるのよ!』

好感度が高いのは、必ずしも利点にならないのを証明していた。

そのせいで、上記のやり取りになっているのを実感している彼女は逃げる様に馬を走らせた。

「ライリー! 嫉妬してる?」

フローラの愛馬であるライリーは、荷馬車の馬を敵視していた。

暴れ馬で人見知りで、主人ですら反抗するのにいざ、他の馬を見ると嫉妬する繊細さ

がある。

『自分が認めてるからフローラは自由に動ける』という変なプライドがあるせいだ。

そのせいで、本当は寂しがり屋なのにフローラくらいしか構ってくれなくなつた。

もはや嘸んだり蹴つ飛ばしたりする事すら愛情表現となつている。

「やけに興奮しているな？」

「他の馬に浮気したと思われたようですわ」

壁内の巨人騒動で休職状態だつた御者は、フローラの馬が興奮しているのを見抜いた。

金で雇われたとはいえ、馬に何度も嘸まれる依頼人を見て、つい口に出してしまつた。

フローラ視点では、正常でも他人から見たら異常なのが評価が可笑しいのに繋がっている。

「とにかくトロスト区に向かいますわ！」

「次は、いつ契約してくれるんだ？」

「その話は、また今度でお願いします!!」

金払いが良いカモとも知られているので、フローラに近づく者は多い。

少なくともトロスト区とカラネス区の有力者からは、大金を落としてくれるカモの扱
いだった。

郵便受けから書類が溢れ出している女の評価は伊達じゃなかった。

「ダハハハハハハ!!」

「閣下、笑い事ではありませんよ！このままでは、わたくしの評価が！」

「安心したまえ！既に君を知っている者たちの評価は同じとなっておる！」

「どこに安心できる要素があるのですか!?!」

ザックレー総統は、絵画を受け取って満足して世間話という本題に入った。

必死に抗議をするフローラの話の聴いて、本性を曝け出して笑う総統。

悪意が無いと分かってるからこそ、更に抗議をしているが無意味になっている気の毒
な女。

一見するとすれ違っている様に見えるが本質は同じである。

「自分の真の姿など他人には評価しきれんよ。私もそうであるからな」

ザックレーという男は、自身だけを満足させる芸術では物足りないと思っている。

素晴らしい作品が評価されないまま、歴史の闇に埋もれていくほど悲しい物は無い。

もちろん、万人受けはしれないと思っているが、少なくとも友人には評価されたい男である。

ピクシス司令に高評価してもらいたいが、奇人と見せかけて常識人なので諦めていた。

「個人的には、君は【悪魔】だと思っている」

「わたくしが…ですか」

「そうだ。皆、君に魅了され過ぎて疑問に思ったことは無いか？」

「心当たりがあります」

いろんな人材を見てきて目が肥えている彼からすれば、悪魔だとは言いようが無い

かった。

悪意があるならすぐに気づくし、全員が警戒するはずである。

ところが中央憲兵ですら、彼女の扱いを持って余しており、排除すらできなかつた。

不思議な魅了で、人々の心を奪って無垢な女兵士の皮を被っている悪魔としか思えない。

そして、それを理解している自分ですら魅了されているのだから化け物である。

「君は、君自身が想っている以上に影響力があるのを忘れてはならぬぞ」

「確かに……皆様から散々な評価を受けてますが、基本的には好意的ですからね」

フローラ自身、仲良くなり過ぎて自分が異端である事に気付いていた。

憲兵団のドーク師団長とも交流があるので、全ての兵団のトップと知り合いであった。

たかが新兵がそこまで兵団上層部と仲良くなれるわけがないと常識的に分かっていた。

最初は、それで良いと思っていたが、自身の終活を見据えた時に異常である事に気付いた。

「兵士である以上、君はいつ死んでも可笑しくない環境に置かれている」

「仰る通りです」

「では、君がもし、戦死したらどのような未来になるか考えた事があるかね？」

「所詮、個人です。最初は大勢の人を悲しませても、いつか記憶が薄れる事でしょう」

「そうだと良いのだが……」

ザックレー総統が懸念しているのは、フローラではなく彼女の影響力である。

今でこそ保っているが、王政は彼女の存在を民衆や兵団に隠しきれていない。

抹殺しようにも芋づる式に政敵や表向きの権力者が一網打尽にできる影響力があった。

今や王政の議会ですらフローラの提言を素直に聞き入れて補給拠点の急造をしていた。

はつきり言つて、異常である。

「感想であるが……君の絵は旨い。それは芸術の域に達している。表現力に嫉妬するくらいにな」

「芸術に老いは関係ありませんから：閣下のお役に立てるなら幸いです」

「もし、芸術作品が完成したら真つ先に見せて感想を聴きたいのだが良いかね？」

「はい、閣下の作品を楽しみにしておりますわ」

「ああ、楽しみにしてくれましたまえ」

ザックレーは半生以上に時間をかけて芸術作品を作ろうとしている。

文字通り、彼の人生の集大成であり、失敗が許されないものである。

「とはいえ、その作品の完成は、私の夢が叶った先にある」

「夢と目標を両立させるのは苦難の事です。中々思い通りに行かないでしょうね」

「その通りだ。着々と準備を進めているが、まだまだ時間が掛かるだろう」

数少ない友人ですら、その芸術は理解されることは無いだろう。

だが、目の前に居る友人だけは芸術について語り合った仲である。

必ず評価してもらえると彼は信じている。

フローラに皆が魅了されるのは、とりあえず彼女なら分かってくれろという肯定が欲しい。

そんな感情を抱いているのかもしれないと思うほどであった。

「私の作品を君に見せられるその日まで、お互い生きられる様に最善を尽くそうじゃないか」

「はい、復讐以外で生き延びる目的が増えて嬉しい限りです」

「フローラ、手間をかけてすまなかつたな。これからの君の武運を祈ってるぞ」
「ハッ！」

フローラは思わず心臓を捧げる敬礼をしてしまった。

最後の一言は、友人関係ではなく上官としての命令として受け止めてしまったからだ。

ザックレーはそれに悲しむどころか、安心してしまった。

命令と受け止めたから、絶対に生き延びてくれると信じていたからだ。

「君は、君の思っている以上に影響力がある。決してそれを忘れないでくれ」
「はい、閣下のお言葉を深く心に留めておきます」

ザックレーは、友人が執務室から退室するまで、彼女の存在感について考えていた。彼女を損失した時、どのような結果を招くのか考えたくも無かった。

それは友人を失う恐怖ではなく、もつと悪夢のような光景を思い浮かべてしまったからだ。

そしてその嫌な予感、最悪の形となつて的中する事となる。

87話 エレンとキッツ隊長の再会

「申し訳ありません。オレなんかの為に護衛してくれるなんて……」

「ああ、全くだ。まあ！兵長以外じゃ俺しか頼りになる奴はいないからな！しようがないよなー！」

「エレン、大丈夫よ。後輩に頼りにされているって、こいつ昨晚に喜びの舞を踊ってたから」

「ペトラ！余計の事を言うんじゃないねえ!!」

エレン・イエーガーは、訳があつてトロスト区に来ていた。

さすがに個人で行動する事ができず事前に先輩方に頭を下げて同行してもらつていた。

誰かに頼りにされるのが嬉しいオルオは、照れを隠そうとしたが、ペトラに台無しにされた。

そんな彼女も頼りにされるのが嬉しくて、ついエレンとオルオの手を繋いで歩いてた。

そのせいかな、彼らは、ペトラに引き摺られるように歩いている感じがした。

「しかし、キッツ・ヴェールマンか」

「ご存じなんですか？」

「部下の面倒見は良いんだが、厳しいから新兵には不評なんだよな」

「彼の用心深い性格と試練を乗り越えた兵士は、一人前の兵士としてやっていけると噂ね」

エレンはトロスト区の内扉の水門付近でキッツに抹殺されそうになった。

彼は疑心暗鬼で不確かな情報に惑わされず、人類の為なら不要なリスクを抹殺する性格だった。

おかげでエレンは殺されそうになったが、ライナーやアニの事を考えれば仕方がない気がした。

「少なくとも長年の彼の忠誠心と活動は、王政の議会からも高く評価されるの」

「味方に付けられるなら、これ以上、頼もしい事はないぞ？しつかりやれよ！」

「はい!!」

先輩方からキッツ隊長の話を聴いて、エレンは気を引き締めた。

調査兵団だけでは、活動できないのは明白であり味方が1人でも欲しかった。

現在、エレンの居場所は104期の同期と、リヴァイ班しかない。

それだけでは、あまりにも王政を味方にするのは不利であった。

色々弄られがちだが、キッツ隊長と直接対面できる機会を作ってくれたフローラに感謝した。

「見ろよ…あそこにいるの。巨人化できるエレン・イエーガーだぞ」

「なんで兵団本部の建物に居るんだよ…」

「うわっ…化け物がこっちを見た」

「やめなよ。あいつが怒って巨人化したらどうするのさ」

兵団本部の建物の中を歩くと、駐屯兵のグループがエレンを恐れて静かにひそひそ話をしていた。

というより排除できない腫れ物の扱いであり、眉をひそめて影口をしていた。

「おいお前ら！ エレンの悪口を言ったな！」

「やべ、やっぱ聴こえていたか」

「もうやめなさいよ。オルオ……」

当然、自慢の後輩を馬鹿にされて苛立ったオルオは、睨みながら彼らに突っ掛かった。駐屯兵団の一般兵からすれば、調査兵団は異常集団としか思われてなかった。その為、オルオがエレンの味方をしていて思わず、彼らは口を滑らせた。

「なんだよ？ ああ、化け物のお友達はお友達か」

「所詮、無駄死にしかできない税金泥棒だもんな。お似合いのお友達ごっこだな」

「な、なんですって!!」

「……ペトラ!! 手を出すな!!」

「無能な調査兵団が私たちに喧嘩を売るとか、やっぱりこいつらはゴミ集団ね」

そこで激怒したのはペトラ・ラルであった。

オルオですら軽く突っ掛かったらさっさとエレンを連れて離脱するつもりだった。

しかし、怒りで我を忘れたペトラは、駐屯兵を殴り掛かろうとしてオルオに羽交い締

めされた。

誰とでも優しく接する彼女は、大切な存在を侮辱されるとオルオ以上に感化される癖があった。

「何をしている?」

「「キッツ隊長!」」

誰もが引けなくなつてヒートアップしそうな時に助け舟が来た。

通り掛かつたキッツ隊長に話しかけた彼らは、震えあがつて真つ青な顔で無意識に敬礼した。

「お前たち……! 私が根拠のない事で他者を貶めるのは大つ嫌いとは知つての発言か?」

「いえ、滅相ありません!ただ税金泥棒の調査兵団を……」

「貴様らは市民と違つて、調査兵団の功績を知りながら、わざわざ私の前で侮辱したのだな?」

「その……!」

駐屯兵団第一師団精鋭部隊のキッツ・ヴェールマン隊長には様々な権限がある。

ピクシス司令に「小鹿」と評価されたり、柔軟性に欠け臆病で小物と評価されがちである。

しかし、実際には彼の一言で、駐屯兵団の兵士を即座に処刑できる権限があった。

トロスト区奪還作戦を聴いて敵前逃亡した兵士を一人残らず、処刑できる権限だった。

幸いにもピクシス司令の勅令で、混乱は避けられたが、市民や王政は彼を熱狂的に支持している。

「ミタビー！こいつらの名前を控えて置け！管理を放棄した上官を含めて、徹底的に問い詰める！」

「了解しました！」

「待つてください！私は……」

「言い訳無用！こつちに來てもらおうか！」

黙々と任務をこなす彼らに集団は言い訳をしようとしたが、更に罪状が増える結果となった。

鬼となつたミタビ班長によつて、誹謗中傷の発言をした一団は、近くにある部屋に連行された。

エレンたちは、即座に裁きを判断して実行したキッツ隊長の言動を聴いてるしかできなかった。

「すまないな。未だに調査兵団を見下している兵が居るのは我々の落ち度だ」

「リコ班長、そこまで頭を下げなくても。俺達も功績を示せず狼藉をしそうになつたので……」

「そんなことは無い。調査兵団のおかげで、南部の住民が内地に避難できたのだからな」
「我々の無理難題な作戦でも迅速に行動できる駐屯兵団には、頭が上がりません」

キッツ隊長に追隨していたリコ班長が頭を下げるのを見て、オルオは慌てて彼女に話しかけた。

見栄を張りがちで口は悪いが、面倒見が良くて冷静な判断を下せる彼も素直に謝罪できた。

エルヴィン団長の独断で壁上に馬を走らせて現場に駆け付ける作戦を彼らは受け入れてくれた。

そのおかげで、迅速に兵が移動できて鎧の巨人からエレンを奪還できた事を知っていたからだ。

意外にも頭を下げるのは、ペトラよりも行動が早い男である。

「フローラ、助かったぞ。お前の聴力が無かったら公平に裁く事はできなかった」

「いえ、キッツ隊長がわたくしの話を信じてくれて行動してくださったおかげですわ」

「ふん！私は認めた者の提言は、無駄足になろうとも聞き入れるようにしているだけだ」

壁内に出現した巨人についてフローラと情報交換をしていたキッツ隊長。

ところが急に彼女が「調査兵団が侮辱されている」と聞かされて現場に急行した。

そこでは、駐屯兵団の一団が侮辱しており、一步遅かったら両成敗せざるを得ない状況だった。

彼は、現状を見て嘆くと共に緩み切った規律をもう一度、末端の兵まで教育するつもりである。

フローラは、会話を打ち切って自分の話を聴いてくれたキッツ隊長に感謝するしかなかった。

「ホークマンは、エレン・イエーガーの護衛を第2応接室に案内したまえ」

「ハッ！では、護衛の方々をご案内させて頂きます」

「頼む」

「よろしく願います」

残されたのは、エレンとフローラ、そしてキッツ隊長とリコ班長だけであった。彼らは、予定時間より早かったが、キッツの執務室に案内されて入室をした。

「エレン・イエーガー、フローラ・エリクシア。着席したまえ」

「ハッ！失礼致します!!」

エレンがキッツ隊長と向き合うのは、トロスト区の水門の以来である。

『人類の味方』と発言しても彼には、信じてもらえず自分の存在自体を否定した人物だった。

そのせいか、緊張してしまい、指示されてもすぐさま座る事が出来なかった。

フローラが座ったのを確認して慌てて座ると、彼女が膝を離さず足を揃えているのに驚いた。

『お前、珍しく乙女みたいな事してるな…』

当初、フローラはお嬢様キャラを演じていたがすぐに破綻した。

そしたら開き直ったのか、ぶっ飛んだ性格になったので、エレンは女として意識しなくなった。

だからこそ、乙女みたいな仕事を目撃して驚いたと同時に緊張が吹き飛んだ。

とにかく真面目そうなりコ班長や頑固なキッツ隊長が居るので、彼女と居ると安心した。

時折、不安になって、動悸や叫びたくなる発作になりそうな時には、ありがたい存在である。

「イエーガー…まだ、わ、私は、貴様の事を信用していないぞ！」

キッツも得体が知れないエレンに関しては、未だに距離感を掴めてなかった。

一応、フローラやリコと打ち合わせをしたものの上手く彼と会話ができなかった。

そのおかげで、エレンも少しは落ち着く事が出来た。

「聞けイエーガー……トロスト区の件の成功を受けて、調査兵団は、あんたの力を前提にしている」

「だが、その力の不安定さは、直接目撃した私が良く知っている」

「あんたは、この状況をどう思っている?」

リコ・ブレッツェンスカは、未だに隊長が悩んでいると察して先手を打った。

あくまでも隊長をエレンと引き合わせる提言したのは自分でありフローラはそれに乗っただけだ。

エレンの本音と信念を引き出して、彼の評価を決めようとしていた。

「オレ自身も、この力を制御できるようにならなければいけないと思っています」

「けど今は、上官の命令無しに巨人化は禁じられているんです」

エレン・イエーガーは、自身の力が不安定だと自覚している。

ならば、練習あるのみであるが、中々その機会に恵まれず、ここまで引き摺っていた。それだけなら良いが、調査兵団は自分の能力が使いこなせている前提で作戦を立案し

ている。

「力が不安定なのは、よくわかってます」

「それでも、みんなの期待に応える為にこの力を使うしか…いえ、使ってみせます！」

「不安定な力を使うだと……ふざけんな！」

「意気込みだけでは、解決する問題ではないだろう。暴走した時、巨体を制御できないんだぞ」

当然、キッツはそのような状況で不安定な「力」など使用してもらいたくなかった！
リコもいつ、暴走しても可笑しくない「力」を切り札にする調査兵団が信じられなかった。

今までの行動で、人類の味方だと分かっているが、その力を容認するかと問われると別である。

エレンは予想通りの返答が来て反論できずに俯くしかなかった。

「ですが、エレンの力がなければ、人類は勝てません。お二方も実感しているはずです」

フローラは、苦しんでいるエレンの心情を察して、上手く話を誘導しようとした。これは打ち合わせと違うが、下手すると関係が悪化すると分かったので、流れを変えようとした。

「…確かに調査兵団の働きだけでは、人類の領土を拡大するまで途方もない時間が掛かるだろう」

「その間にウォール・ローゼが突破されたらお終いですね」

そもそも人類が巨人に勝利したのは、トロスト区奪還作戦が初めてであった。

前から人類は、巨人を討伐できていたが、その度に人命と税金を壁外に投げ捨て来た。

その奪還作戦も人類が所有している財産をマイナスからゼロに近づけただけで、損失ではある。

このままでは、いつか巨人に押し切られて人類が減びるのは、目に見えていた。

「それに駐屯兵団精鋭班の方々の死を無駄にしない為にもオレがやらなきゃいけないんです」

トロスト区奪還作戦だけで多くの死者が出た。

困らなうて巨人を惹きつける為に戦死した駐屯兵や同期たち。

エレンを守る為に参戦した精鋭班では、犠牲者4名、重傷者2名、軽傷者5名。

更に彼らを援護する為にグリード・ホルツマン班長を含む4名。

門に空いた穴を岩で塞ぐだけであの損害、壁外奪還作戦は、何十倍の死者が出るのは明白である。

エレンは彼らの犠牲を無駄にしない為にも前に進撃するしかなかった。

「……私たちも同じ気持ちだよ。犠牲者の意志を継ぐならば、前に進まないとな」

「イエーガー、貴様の考えはわかった。だが、それはどうやって証明する気だ？」

エレン・イエーガーの反応は、キッツヤリコは既に分かっていた。

何故ならフローラと何度も今日の為に交渉しており、彼の事をよく聴いていたからだ。

実際にエレンの目や言動、そして覚悟を確認して、信用するべきか決めるつもりだった。

それと同時にどうやって、それを証明するか気にしていた。

本題は、むしろそこにあつたと言つても過言ではない。

「それを証明するには、駐屯兵団のご協力が必須となりますわ」

「何故だ？」

「王政がエレンを管理するとなつており、今は調査兵団で一時的に身柄を預かっている形です」

「確かに特別兵法会議で第57回壁外調査の結果で判断しようとして、あの結果になつたな」

エレンは、特別兵法会議で、エルヴィン団長の提言で一時的に調査兵団に身柄を預けられた。

だが、第57回壁外調査の結果で、エレンが人類に対して有意義性を示す事が出来なかつた。

そのせいで、王都に召喚されて再び審議を掛けられる事になつたが、今度は勝ち目が無かつた。

そこで、エルヴィン団長は、女型の巨人の能力者を捕縛する為に召喚命令を利用した。結果は更に失敗したが、壁内に巨人が湧いたおかげで、何とか有耶無耶にしている状

況である。

「このままでは、エレンは王都ミットラスで一方的に裁かれてしまい、活動できなくなり
ますわ」

「二応、憲兵団の保守派も味方になるのではないか？あの件は建前だと思っていたが？」
「王政は、何としてもエレンを裁いて排除したいようので、王政派の審判員を揃えて来て
ます」

「つまり、このままではエレンが処罰されて、彼らの犠牲が無駄になるのか」

「リコ班長、仰る通りです。このままでは、人類の勝利へ導く可能性の1つが失います」
商人の令嬢であったフローラは、交渉術に優れている。

エレンを信用するか、しないかの問題ではなく、そもそもエレンに選択肢が残されて
いない事。

彼らは『証明』を求めているが、証明する機会など一切与えられていない事。

調査兵団や憲兵団の保守派だけでは、エレンを王政から守り切れないと短時間で発言
した。

『なんか良く分からないが、空気が変わったな…』

エレンは戦術眼はあるが、頭脳戦は苦手であった。

なので、上官との交渉などでできず、自分の感想や意見を言うしかできなかった。アルミンという完全上位互換がいるので、すぐに自分に素質が無いと気付いてしまったのもある。

ただ、そんな彼でも、キッツ隊長やリコ班長の考えが変化したと感じた。

「やはり、私はイエーガーの力を信用する事はできん！」

「そうですよね…」

「だが、貴様が味方であると信頼はしてやる！」

「えっ？」

キッツは、エレンが巨人化能力をコントロールできてない実績や言動で信用していない。

しかし彼も譲歩して、人柄や現状を踏まえて不安定であると分かりつつも信頼する事にした。

彼によるエレンの評価は、得体のしれない化け物から、不安定な力を持つ味方と定義した。

それが最大限の譲歩であるが、エレンという人間性を評価したのは大きな前進である。

「隊長？」

「前から思っていたのだ。守るだけでは、いずれ巨人に人類が負けてしまうと……」

キッツは、人類を守るために兵士になったが、防戦を強いられる現実に不満がある。

専守防衛とは聞こえが良いが、要するに人類の領土を死守するだけで終わっていた。

王政府は、壁外に興味を持つ事を禁じており、その制限を課せられて壁を守るしかなかった。

その点、調査兵団が壁外に遠征する点については評価していた。

その過程で優秀な人材を捨て駒にして、税金と希望を投げ捨てていくのが嫌いであっただけだ。

「エレン・イエーガー！もし貴様が追い詰められたら私が味方になってやろう」

「ありがとうございます！」

「だが、調査兵団を過信するな！あいつらは定期的に優秀な人材を見殺しにするからな」

キッツは、調査兵団の戦闘記録や遠征記録を確認して思った事があった。

それは、優秀な人材を使い捨てにしている現状だった。

未知の領域を夢見て壁外に出ていく異常な思考の集団であるのは知っていた。

だが、いくらなんでも殺し過ぎた。

「私が今、恐れている事が分かるか？」

「いえ、分かりません」

「私はな！イエーガーやエリクシアが調査兵団に所属したせいで犠牲になるのを恐れている！」

キッツは、いずれ精鋭部隊の隊長をリコにしようと考えていた。

もちろん、イアンやミタビも候補として育成しているが、変革も必要だと思っていた。

それは、エレンやフローラといった巨人を討伐しようとする者である。

「私は、いずれ調査兵団から貴様らを引き抜こうと考えている」

「調査兵団はあくまでも、未知なる領域を求めて遠征する兵団。巨人自体を殲滅する気はない」

「そこで、巨人討伐専用の部隊を作り上げて、経験を積ませた後、貴公らに参加してもらいたい」

リコも同意見である。

調査兵団に彼らを預けていくと、結果として死なせると考えてしまった。

『何故か知らんが、調査兵団には預けると碌な事が起きん気がするー！』

キッツは、そうなる前に彼らを精鋭部隊で経験を積ませてから班長にするつもりである。

何故か知らないが、調査兵団に預けておくと、エレン・イエーガーを死なせる気がしたからだ。

それは酷使とか事故ではなく意見や目的の違いで、仲違いした末に殺されるという予感があった。

「いきなり仰られても……」

「心に留めておくだけでいい。…話は終わりだ。退室していいぞ」

「は、はい、失礼しました」

困惑したエレンだったが、退室の許可が出たので慌てて立ち上がって頭を下げた。

そして、逃げる様にドアノブを掴んで再び、頭を下げると逃げる様に彼は去っていた。

「イエーガーの話を聴いて、少しはあいつを信じる気になったよ。あんたのおかげだ」

「エレンを信じてくれるだけでいいですわ」

「そうだな。私にもハンジという仲の良い同期が居たよ」

フローラは、彼女の発言の仕方や負の感情から何かあると察した。

とはいえ、まだやる事が残っているので詮索するつもりはなかった。

「とにかく、フローラには世話になった。……働きは認めてやっても良いぞ」

「ハッ！」

「ところで、例のユトピア区防衛はどうなっているのだ？」

「今の所、ユトピア区の住民の大半は他の地区に待機させてます」

「問題はそこではないのだがな…」

キッツは、大勢の犠牲者が出たトロスト区防衛戦ですら霞むユトピア区の防衛戦を気にしていた。

巨人化能力者共の仲間をその地域に囷として置く以上、激戦が予想されたからだ。

民間人を避難させているとはいえ、彼は未だに調査兵団のやり方が気に食わなかった。

目的の為にストヘス区の民間人を犠牲させた彼らを許してはいなかった。

「さっき話したことは、本心だ。このまま調査兵団に留めると貴様らを失う気がしてな」
「新兵であるわたくしたちには、ありがたいお言葉だったと思います」

「…良いか？死ぬなよ？どうも嫌な予感がする」

「大丈夫です。目標が達成するまで死ぬ気はありませんから」

フローラも退室する為に立ち上がって頭を下げた。

そして彼女が退室したのを見届けた彼は溜息をついた。

「…よく我慢しましたね」

「ああ、エレンは検討するとして、あいつは引き抜いておきたかった」

「私もです。何か胸騒ぎがしてしょうがない」

彼らは、フローラ・エリクシアという存在が大きくなりつつあった。

冷静に考えれば、たかが1人の兵士に向ける感情ではない。

しかし、ここで無理やり編入しないと二度と駐屯兵団に所属させられない予感がしていた。

だが、規律を重んじているので、私情でやる事ができずにただ、彼女が変化をするのを待った。

それが唯一、自分たちの元に来てくれると信じて、見送るしかできなかった。

「よお！久しぶりだな！」

「グリズリー班長、お久しぶりですね」

「二応、文通ではやり取りしていたが、やっぱり対面するのが一番だな」

フローラは、ストヘス区の女型の巨人戦から制式装備しか使っていないかった。

刃や大砲が通じない鎧の巨人を討伐するのは、更なる装備の改良が必要だった。なので、キッツ隊長と別れた後、技巧科の技術4班の元に向かった。

「ブリッツシリーズを改良したヤークトシリーズはどうか？」

「スペックは良いのですが、鎧の巨人を討伐するには力不足ですわね」

「そうだな。さすがに砲撃すら弾く装甲相手じゃこいつはきついな」

ヤークトシリーズは、フローラが愛用した装備の上位互換であり目立つ様に青色に統一された。

しかし、仮想敵が鎧の巨人になったせいで、不運な装備になってしまった。

ヤークトメツサーは、彼女の戦闘データを元に巨人の肉を斬るに特化した短剣である

ヤークトシャイダーは、多くの技術班で並行して素材を調べて最適な素材である

ヤークトハーケンは、アンカーの強度を更に高めてガスの容量を高めた物である

「それでは、打ち合わせ通りに新型装備を拝見したいのですけど…」

「よし、まずこれから紹介するぞ！」

グリズリー班長が手に取ったのは、通常のスナップブレードの2倍がありそうな刃である。

フローラは装備を観察していると、明らかに量産できる装備じゃないと見抜けた。何故なら、使い捨ての刃であるはずなのに、豪華な模様があつたからだ。

近くにある鞘や装置は、金色と赤色の模様であり、まるで炎をイメージした感じがした。

「これは『ヒートソード』というものだ」

「つまり、炎を放出する刃なのですか？」

「ああ、その通りだ！毛むくじやらの巨人に火が効果があるって聞いてな！作ってみたんだ」

「ですけど、刀身が長すぎて扱えませんかよ」

フローラは、立体機動するには刀身が長すぎて扱えないと思った。

更に火を出すなら尚更、短時間しかできないし、火傷する未来しか見えなかった。

「そこで小型に改良したのが、ヒートソードジュニアだ！」

「刀身は短くなりましたけど、単純に燃料のスペースを減らしましたわね？」

「痛い所を突くなよ！これでも頑張って作ったんだぞ」

ヒートソードジュニアは、特製の装備で刃に炎を纏わせて斬撃と共に肉を焼き斬る事ができる

ヒートアクセルジュニアは、替え刃が4本しかなく完全に短期決戦用である

ヒートマシーナリージュニアは、ヤークトハーケンの上位互換だが、値段は跳ね上がった

「相当、生産性を度外視したみたいですけど、生産コストはどれくらいですか？」

「1個大隊を半年養えるお値段だぞ」

「わたくしを破産させる気ですか？」

「分割払いで良いぞ」

フローラは、事前に炎を出せる刃の情報入手してテストするつもりだった。偶然にもキッツ隊長と面会する為にトロス区に来ていたので、ついでにここに来る予定にした。

百聞は一見に如かずとはいうが、実際、触ってみないと効果が分からない。

訓練兵団時代に使った訓練所を借りる事が出来たのでそこで試すつもりだった。

「それと、鎧の装甲を貫通する刃も作ったぞ」

「例の硬質化の爪を分析したものなんですか？」

「いや、頑張つてその爪を超硬質スチールと組み合わせで作った刃だ」

「合成都すか…」

カラネス区に侵入してきた6m級の変異種の伸ばしてきた爪で作られた刃である。今思えば、ユミルの巨人にそっくりな感じがするが特に気にしなかった。感心があるのは、鎧の装甲を貫通して肉を斬れる刃であった。

「こいつは、『三式刀身改二』と命名した」

「つまり、制式配備されている一式鞘や強化鞘と互換があるのですか？」

「もちろんだとも！まあ、4本しか製造できなかったがな」

「実質2本ですか」

人類最強の矛は、巨人が生み出した結晶で造り上げた。

鍛冶職人どころか、500人以上の協力者の手によって作られた物である。

他の刃は、コストを無視すれば量産できるに對してこれは、再現できる刃ではない。

最初にして最後の刃であり、試験として利用された双剣を考えれば、2本しか存在していない。

「どうだ？」

「巨人が生み出した結晶で武器が作れるのですね」

「俺たちも驚いたさ！でもよ！巨人を狩るなら巨人が生み出した物質が手っ取り早いだろう？」

「確かにそうですわね」

対人立体機動部隊の散弾銃の弾は、ストヘス区で回収した巨人の結晶体の欠片が入っ

ていた。

威力は、巨人にも通用しているのを彼女は確認しているので、この刃も信用した。

「どれを選ぶんだ？」

「どれも実際使用してみないと分かりませんわ」

「だよな！よし、俺たちも訓練所に行くぞ!!」

グリズリー班長率いる技術班は、すぐさま支度をした。

ヒートソードは、動作テスト済みだが、実戦ではどうなるか分からない。

高熱の刃が鞘に装填されたガスボンベを熱して爆発させる可能性があった。

だが、あくまで仮定でありどうなるかは誰もが分からなかった。

必然的にフロアで人体実験するような感じになってしまったのを全員が反省した。

「大丈夫ですわ！わたくしは訓練兵時代に106回も医務室に送られた経験があります
！」

「毎回、思うけどよく生きてるな…」

「ですので、安心して観察してくださいね！」

フローラ・エリクシアは訓練兵時代、医務室の常連であった。

おかげで彼らは、経験豊富になって本を出したりトロスト区戦での治療がスムーズにできた。

奇しくも炎を纏った刃だという事で、フローラは彼らにスタンバイしてもらおう事にした。

訓練所にある湖の畔でやるとはいえ、念のために医療班をお願いして待機してもらった。

「本当に大丈夫なのか？ ヒートソードジュニアは動作テストしてないんだぞ……」

「技術班がそんな事言ったら、わたくしでも心配になってしまいますわよ！」

「すまん……だが、何か嫌な予感がするんだよな」

グリズリー班長は、嫌な予感がしていた。

再設計して何度も素材を変えて軽量化と刀身を短縮しようとした。

だが、何か忘れている気がした。

「行きますわよ！」

「あ、ああ！」

テストする気満々の彼女を見て、彼はどうにかなるだろうと結論付けて出発した。根拠もなく安全だろうという意識ほど危険な物はない。

刃を短縮した分、刃に纏う火の調整を忘れているのに気付く事はなかった。

こうして、フローラ・エリクシアは106回の医務室送りを更新する事となる。

『今度こそ、鎧の巨人を討伐してやるわ!!』

そうとも知らないフローラは、ヒートジュニアシリーズを身に付けて訓練所に向かっていった。

リスクをちゃんと確認しなかったせいで、酷い目に遭う事を知らずに地獄に向かって進撃した。

88話 負傷兵と残された者と少女の決意

トロスト区方面の訓練所は、2カ所ある。

1つは四方を壁に囲まれた城壁都市の内部で、壁付近にある訓練所。

もう1つは、トロスト区郊外にあり、南方訓練兵団が所有する訓練所である。

「久しぶりに訓練兵団の訓練所に来たな…」

「グリズリー班長が珍しく感慨深げに回想してるっスね」

「なんか悪いか!？」

「班長にも若い頃があつたと思つて…」

フローラ一行は、訓練兵団が所有している訓練所の湖の畔に来ていた。

ここは、内地から流れる川から水を引いて人工的に造り上げた湖となっている。

水を堰き止めて、立体機動の訓練をする為の峡谷の副産物として誕生した経緯がある。

今では、豊富な魚が生息しており、いぎという時の非常食となっている。

「意外と安全面では用意周到だな？」

「事故の経験が豊富ですの…」

「その時点でおかしい気がするっス」

グリズリー班長は、調査兵団の新兵が用意できるわけがない環境に驚いた。

訓練兵団に所属している者以外は、利用できないし、わざわざ専属の医療班まで呼べていた。

訓練兵団がフリッツ王の直属である組織と考えると信じられない事である。

『いくらなんでも大げさ過ぎたかも…』

彼女は、火を使う新型装備の情報を入手した瞬間、訓練兵団に許可をとった。

訓練用巨人模型も借りると同時に医務室搬送班も待機させている。

もはや顔馴染みとなった彼らからは、「またやらかすんだろうな…」という顔である。

これは、成長した姿を彼らに見せつけるチャンスだと思つて、彼女は我慢するしかなかった。

「操作装置には問題なさそうね。ガスボンベも大丈夫…よし！」

ヒートソードジュニアは、刃に火を纏う以上、専用のガスボンベを用意していた。

立体機動装置を動かすガスの原料は、「氷爆石」という可燃性のガスの結晶体である。もちろん、そのまま使用すれば火達磨になるので、専用の不燃性のガスを使用している。

失敗続きのフローラは、ボンベを間違えそうだが、彼女も成長しており、確認を怠らなかつた。

「行きますわよ!!」

周りに知らせてからフローラは、アンカーを射出して巨人の模型に飛び掛かった。

まず移動確認をして、他の立体機動装置の利点と欠点を分析しようとした。

「動作には問題なさそうだな」

「実戦じゃないと分からない点があるので何とも言えません」

技術班は熱心にフローラの描く機動を観察して、改善点を模索した。

立体機動装置は、ある動作をすると負荷が30倍以上になる場合があり、油断できなかつた。

少なくともリヴァイ兵士長が本領を發揮できるようになったのは、その改善がされてからだつた。

もちろん、負荷が掛かり過ぎると、わざと壊れるようにしているが戦場ではありがたくなかつた。

『点火装置…えっ』

立体機動をしているフローラは増設された補助スイッチで刃を点火した。

そうすると、可燃性のガスで刃が燃え上がって、赤熱結晶で燃え続けられるからだ。しかし点火した瞬間、彼女の全身は炎に包まれた。

『何でこうなるの!?!』

アンカーを外して、湖に刃を投げ捨てたと同時に湖に飛び込んで行くフローラ。ワイヤを巻き取ると身体に激突すると思つて巻き取らず落下する様に湖に着水した。閑静とした湖に大きな水柱と飛び込む音で暗転とした状況を知らせるようであった。

「嬢ちゃん!？」

「フローラ!？」

「お得意さん!？」

技術班の8名は自分たちのミスでフローラが火達磨になったと理解できた。

慌てて救助しようとしたが、既に動いている部隊があった。

フローラのせいで増設された医務室搬送班である。

「まーたやらかしたのか!？」

「今回は違うんです!？」

「言い訳無用!？」

ボートを用意して機をうかがっていた搬送班は、事故つた女を見てすかさず救助活動

を開始した。

彼女が事故を起こす日を賭けるほどの腐れ縁であつた為、生き生きと活動しているように見えた。

あつさり救助された女は、必死に弁明を繰り返すが適当に受け流されて診察を受けていた。

「ジャケットを焦がしただけで済みました！だから大丈夫です!!」

「なるほど、頭は大丈夫じゃないみたいだな」

「なんで!?!」

「さつさと医務室に運ぶぞー!」

「了解!」

慣れた手つきで担架に無理やり乗せられたフローラは医務室に連行された。

何故か逃げられない様に布で拘束されてまるで誘拐されるようであつた。

動揺して動けないグリズリー班長一行は、その様子を見送るしかできなかった。

「またお前か！訓練兵団を卒業しても、負傷してここに来るのは、お前くらいなもんだぞ！」

「申し訳ございません!!」

必死にフローラが頭を下げている相手は、初回に運ばれてからお世話になっている医師である。

あまりにも彼女が負傷して、一度だけ匙を投げた事もある苦勞人だった。

『モールフィン』という鎮痛剤の取り扱いと管理方法を叩き込んだ師匠でもある。

「診察した所、問題は無さそうだが、安静しろ…って言っても聴かないだろう?」

「仰る通りです！まだわたくしにはー」

「診察書には、頭に異常があり、緊急入院が必要と書いてやろうか?」

「ひいひいひい!!」

医師や衛生兵は、フローラという馬鹿女のせいで無駄に経験豊富だった。

落下、火傷、凍傷、水難、打撲、骨折、転倒、熱中症、破傷風、脳震盪、切断、感電。

何をどうすれば、ここまでコンプリートするのか分からないが、実際にやらかした一例である。

「冗談はさておき、これで107回目だ」

「もう……ここに来るとは思わなかったのに……」

「我々も同意見だ。全く貴様という奴は――」

フローラは、左中指が皮一枚で繋がっている時に切断しようとした医師や衛生兵から逃走した。

民間療法ですらない怪しげな事をして無理やり接着したのを医療班は目撃して治療を諦めた。

もはや、治療するどころか診察する事自体が馬鹿らしく思えた。

しかし、何故か治療したくなる女であり、その経験がトロスト区戦で活きる事となった。

そう考えると、様々な経験をした彼女に感謝をしたくなるのが悔しくなる点である。

「思い出話で感傷に浸る場合じゃないのだがな……何故か貴様を見てると……懐かしいな」

「いろいろとご迷惑をおかけしました」

「現在進行形なんだが？」

「申し訳ございません」

フローラは『貴様』と呼ばれるのを嫌がったが、そうなのは自業自得なので聞き入れた。

休暇中にも迷惑を掛けた事もあるので、医師たちには感謝するしかなかった。ただ、彼らが無か企んでいるのは、会話から読み取れた。

「ところで、湖に何か忘れ物とかあるのか？」

「いえ、片付けは別の部隊に任せてありますので…」

「本当に無いのか？」

執拗に訊いてきたのでフローラは何か置いてきた物を思い出していた。

そして、気付いた！

「火達磨の原因になった刃が湖に沈んでいますわ！」

「ならばさっさと、引き上げて来い」

「えっ？」

「後始末は基本中の基本だろう！つべこべ言わず行つて来い」

さきほどまで安静にしてろという指示だったのに何故か、引き上げをするように命じて来た。

患者に向かって発言する内容ではなく困惑している彼女に魔の手が迫った。

「……あのー！何で担架に乗せられるんですか？」

「その理由を湖に着くまでに考えておけ」

「ちよ、嘘でしょ!?!こんな格好で行くの!?!」

フローラは診察を受けた為、装備を外されて半裸状態だった。

一応、タオルを巻いており、さらし状態であるが、外出する格好ではなかった。

そんな抗議も空しく彼女は、逃げられない様に担架で輸送されることとなった。

「班長、申し訳ございません」

「謝るならフローラに謝っておけ」

「ですが、どの面下げて謝罪すればいいんでしょうか」

「多分、怒らないから正直に話せばいいと思うぞ」

グリズリー班長は、部下の確認ミスの報告を受けて溜息を吐くしかなかった。

技術班としてミスで兵士を負傷させるものほど悲しい物はない。

兵士の命を預かっている者として、叱責をしたいもののみならず、彼女への謝罪が先だった。

片づけをして搬送された医務室に向かおうとした所、違和感を覚えた。

「班長！何故か担架がこちらに向かって来ていますー！」

「んっ？」

担架を担いで来ているが何故か人を乗せて湖に向かって来ていた。

班員たちが行動を訝しんでいると、フローラが乗せられているのに気付いた。

「本当にここに落としたんだな？」

「はい、ここです！」

「オラア！行つて来い！！」

「きやあああああああ!!？」

湖の畔に着いた搬送班は、顔を向き合つた後、フローラを担架から放り出した。

哀れな患者は、医務室医療班によつて湖にダイブして水しぶきを上げて沈んでいった。

あまりにも雑な扱いに困惑するしかなかった技術班一同。

さきほどまで致命的なミスで落ち込んでいたのにあまりにも馬鹿らしくなる光景だった。

「なんで湖に放り出されたつスカ？」

「三桁以上、医務室送りされた女だ。治療を拒否されたんだろう」

「その割には、雑に扱われましたんですけど？」

「…本人に聞いてこいよ」

グリズリー班長は、湖に沈んでいったフローラを心配そうに見守つた。

班員たちは、ただ彼女の安否を確認できるまで待機している事しかできなかった。

医務室搬送班の担架から彼女が湖に捨てられた事実については見なかった事にしたが…。

「見つけました！早く救助してください!!」

フローラは目当ての刃を発見して、水上に顔を出して救助要請を出していた。

そして再び、ボートで駆けつけて来た搬送班は、刃を二本受け取った後、そのまま発進した。

「ひどい!!」

置いて行かれるのに憤慨したフローラだったが近くに浮き具がある事に気付いた。

さきほど湖に強制送還される道中で聴かされていたのを思い出して、必死にしがみ付いた。

ボートに繋がれた浮き具を抱き寄せた女は、心地よい揺れで陸地に着くまでに寝てしまった。

立体機動で高負荷がある彼女からすれば、その程度の揺れは、ゆりかごみたいな物である。

そして陸地に揚げられた時に彼女は搬送班に叩き起こされて叱責された。

「フローラ!!他人事だと思って寝ていただろう!!」

「これには事情があるんです!!」

「言い訳無用!!診察が終わったら覚えておけ!」

「いやああああああ!!」

「逃がすな!追え!!」

逃げようとしたフローラは、タオルがはだけているのに気付いた。

そこで彼女は、最後の手段を選択した!

「てめえ!ふざけてるのか!?!」

「絶対に逃がすな!!」

「ごめんなさいいいいいいい!!」

なので、わざとタオルを取って上半身を裸にして色仕掛け攻撃をしたが無駄だった。それどころか搬送班の怒りを買うだけで終わってしまい、あえなく御用となった。

傷だらけの身体のせいで、ジャンですら異性の身体だと見ないのだから当然の結果である。

ベルトルトがこの場に居たら赤面してツツコミを入れたが、残念ながら彼はここに居なかつた。

そのせいで、ツツコミ不在で物事が進んでおり、慣れていない者は硬直する光景が続いた。

「取引しましょう！」

「馬鹿言つてないで、大人しくしてろ！この痴女野郎!!」

「女なのか男なのかはつきりしてくれませんか!？」

「やかましい!!」

5人の兵士に勝てるわけが無かつたフローラは得意の交渉術で危機を回避しようとした。

しかし、もはや慣れたやり取りの彼らには通用しなかつた。

呆然としたグリズリー班長らに見送られた彼女は、強制的に医務室に送られた。

「なんだったんですかね…」

「とりあえず、試作した刃を受け取ったが…まさかこれを取りに行ったわけじゃないよな？」

技術班はどうすべきか迷ったが、悲劇を繰り返さないように研究に戻ることにした。

そして閑散とした本来の湖の姿を取り戻した頃、フローラは治療を受け終わった。

「で？何か言う事はあるのか？」

「まさかここまで怒られるとは思いませんでした」

「久しぶり過ぎて長引いてしまったな…」

このやりとりも久しぶり過ぎて医療班は、感慨深げに過去を振り返っていた。

アンカーで左太腿を強打して搬送されてから108回目である。

治療を含めれば更に回数が倍増するのでたった3年間で毎日逢っている事となる。

だからこそ、医師たちは馬鹿女のやり取りで叱責しながらも、懐かしく感じていた。

「貴様の噂は良く聞いていますよ。調査兵団に迷惑をかけているそうだな？」

「…はい」

「全く、貴様と来たら…」

医師や衛生兵は、トロスト区奪還作戦で負傷した兵士や民間人に治療を行なっていた。

その時に感じたのは、口きけぬ重傷者は気楽に対応できたという事だ。

致命傷を受けていながら、辛うじて話しかけてくる負傷者の対応ほど辛いものは無い。

死の恐怖に怯えて、自分たちに助けを求めて力尽きていくのは見るに堪えなかった。

「たすけて…くれ」

「痛…痛い」

「ああ」

「死にたくない！死にたくない！お願い！助けてえまだあしにいたあぐなあ…」

さきほどまで生きていた者が物になる時ほど悲しい物は無い。

駐屯兵団の衛生兵は、あつという間に精神が擦り減って泣き出して使い物にならなくなった。

その時、恐怖の感情が無いフローラとのやり取りを思い出して治療に当たっていた。

あの馬鹿女を思い出すだけで凄惨な状況でも怒りが湧いてきて鬱状態にならずに済んだ。

「いいかフローラ、108回という数字には大きな意味がある」

「縁起が良いのでしょうか？」

「さあな、少なくとも貴様に教えることは無い」

「そんなひどい……」

成長した馬鹿女は、調査兵団でも精鋭中の精鋭として巨人を掃討している。

そんな話を上官を通じて密かに活躍を楽しみにしていた医療班。

だが、それと同時に兵士を続けて行けば、いずれ戦死すると分かっているのが辛かった。

「だからその話をするまで死ぬなよ」

「えっ？」

「返事は？」

「はい!!」

医務室搬送班や医師、衛生兵が感じたのは、フローラが死を受け入れている感覚だった。

昔だったら、最後まで足掻いていたのにさきほどの行動からどこかしら諦めを感じられた。

以前とは違って、どこかで死を願っている感じがしたからこそ、叱責する時間を長くした。

どんな負傷でも1日経てば復帰する女が二度と復活しないのを否定するように。

「お世話になりました！」

「108回を更新するなよ!!」

「分かっています！」

フローラを見送った彼女たちの目には、死地に行ってしまう顔馴染みの女が映った。永遠に続いていく日常が突如、破綻するようにあの女も戦死するかという感覚である。

必ず生還すると念書を書かせて承諾した返事をさせようとしたが、そこまでやれなかった。

今までのやり取りで、申し訳ない気持ちで一杯だったからだ。

そして、それが彼女たちを後悔させる事となった。

「なんかここ最近、変な感じに心配されているんですよ」

「頭が？」

「リーネさん！真面目に相談してるのに酷いですわ！」

医務室から脱出したフローラは技術班と合流、軽く雑談してトロスト区から出発した。

思ったより早く終わってしまったので、顔馴染みが入院している病院に向かった。カラネス区第三病院は、兵団の関係者専用の診療所として機能している。

なので、フローラは気軽に訪問して左脚を失ったリーネ先輩に逢いに行った。

「…ねえフローラ、私だけ生き残ってしまったんだ。また戦えるかな…」

フローラは、軽い気持ちで逢いに行ったら病んでいるリーネ先輩と遭遇してしまった。

司令官のエルヴィン団長と違って、もう二度と調査兵団に配属される事はないだろう。

復員されてもなお、諦めきれずに辛い表情でリハビリをしているリーネ。

負傷してから笑顔を見せることは無かったが、フローラとの雑談で久しぶりに笑う事ができた。

それでも、残っていた不安をつい打ち上げてしまった。

「少なくとも調査兵団に動員される事はないでしょう」

「そうだよね…それでもナナバやヘニング、ゲルガーの犠牲を無駄にしたくないんだ！」

「だから、わたくしが兵団内で出世したら、必ずリーネ先輩を迎えに来ますわ」

リーネは、フローラの顔を見た。

さきほどまでは、おちよくついていた相手ではあるが、今では頼もしい女兵士の笑顔だった。

手を差し伸べて来たので、思わず手を取ると、とても温かった。

「治療待ちの兵士じゃないんだ！復員された傷痍軍人なんだよ？」

「巨人を駆逐したいのは同じ気持ちですわ！だから必ず迎えに来ます」

「こんな私でも、また一緒に戦ってくれるのか？」

「はい!!」

根拠がない約束である。

それでも、フローラなら守ってくれるという不思議な感覚があった。

訓練兵団にスカウトされているリーネであるが、彼女はそこに行く気は無かった。

ジャンがマルコの死を引き摺っているように彼女も同僚の死を引き摺っている亡霊だった。

そんな彼女が笑っている姿を見た医師や看護婦は、一安心して様子を伺っていた。実際は、更に地獄への道をリーネが選択したと知らずに…。

「その時は、こんな情けない姿を見せないようにするよ」

「そうですわね。リーネさんは、わたくしのあこがれなんですから…」

フローラにとつては、リーネは頼れるお姉さんポジションである。

そんな憧れの先輩が落ち込んでいるのを見てちよっかいを出した。

その結果、彼女は元気になったと同時に負の感情が強まった事に気付いた。

そこに居るのは、未知なる領域を目指す調査兵ではなく、自分と同じ復讐鬼になったという事に。

「またお逢いしましょう。今度逢う時は、兵士として勧誘しに行きます」

「それじゃあ、つまらなくなるね」

「お食事にお誘いしますから大丈夫です」

「もちろん、奢ってもらうからね？」

「大丈夫です」

フローラはリハビリ中のリーネ先輩と別れた後、エルド先輩に逢いに行くつもりだった。

第57回壁外調査で両腕を食い千切られた彼であったが、何とか生還した。

一時は、危篤状態だったが生命力と気合で復活した男である。

「ドロテアさん、お元気そうですね」

「あら、フローラも見舞いに来たの？」

「はい、彼には色々お世話になりましたから」

ドロテア・メビウスは、リヴァイ班に所属していたエルド・ジンの恋人である。

彼女は、第57回壁外調査に向かう彼の無事を祈ったが、望みは叶う事はなかった。

それでも、調査兵の半数が帰還しなかったのを踏まえると、生還して戻って来ただけで良かった。

「貴女には感謝してるわ。応急措置が間に合わなかったら彼は死んでたもの……」

「エルドさんが最後まで生き残ろうとした結果です。わたくしはその手伝いをしただけ

です」

「貴女のおかげで、どうにか王政府の検閲を合格して出版できる段階に入ったの！」
「そつちですか……これで負傷兵が報われると良いですね！」

ドロテアとフローラは、壁外調査の後に遭遇したが、特に修羅場になる事はなく友人となった。

そしてドロテアは、記録に残らない恋人の兵団生活などを日誌に記していた。
いづれ、出版して同じような境遇に置かれている負傷兵の支援金にするつもりだ。
それほど、調査兵団の負傷兵は、恩給がほとんど支給されず苦しい立場だった。

「おい、ドロテア！ 恥ずかしい事を言わないでくれよ」

「もう少し自信を持ったらどうなの？」

「いやだって、まだ中身を読んでないんだぞ？」

「ちゃんと読み聞かせるまで内容は見せないからね！」

エルドは立ち上がって歩けるまで回復していた。

もちろん、彼女に手伝ってもらわなければ、日常生活に支障がある。

それでも、今の状態になっても見捨てなかつた恋人には感謝している。ただ、フローラが傍に居るのは別の話である。

「フローラ、教えてくれ！一体何が書かれているんだ!？」

「それはお楽しみなので、こちらからは告げられませぬわ」

「いやいや、個人情報をみんなに公開されるなんて嫌なんだが!」

「ペトラさんやオルオさんの黒歴史を打ち明けた人が言う事じゃありませんね」

ここにペトラやオルオが居れば、「お前が言うな!」の嵐だっただろう。

初陣で恐怖のあまり失禁した2人は、徹底的にエルドを追い詰めるだろう。もちろん、同じようにはからかうようにするつもりであるが。

「うっ!痛い所を突くな…」

「日頃の行いの賜物ですわよ」

「じゃあ、兵団からのフローラの扱いも同じだろう?」

「酷いです!ドロテアさん!何か反論してください」

エルドから反撃されたフローラは、恋人からの援護攻撃を期待した。だが帰ってきたのは、当然の返答だった。

「エルドの言う通りだと思っただけ？」

「ああもう！知りません！ペトラさんとオルオさんを引き連れてここに来ます」

「ああ、待つてるぞ。3体1ならお前の口論に勝てそうだからな」

憤慨したフローラは、逃げる様に去っていった。

見送った2人は、その姿は言い負かされて逃亡する子供のように見えた。

「全く！わたくしを何だと思ってるのよ！」

フローラは今の扱いに不満だった。

訓練兵団及び3つの兵団、王政府、総統局、商会、民衆、飲食店からの扱いが同じであつた。

つまり知る人ぞ知る【問題児】であるという事だ！

普通に考えれば、全ての勢力が気にする存在などあり得ないが、やらかしのせいで目

立っていた。

その常識を覆そうと必死に頭を働かせる彼女であったが、外に出ると顔見知りにも遭遇した。

「あつ…フローラ！」

「クリスタ！元氣そうね！」

「違う！クリスタじゃなくてヒ…むぐっ！」

「駄目じゃない。ここでは女神の方の名前じゃないと通用しないわよ」

ヒストリアは、本当の名を呼んでくれなかったフローラに反論しようとしたが口を塞がれた。

フローラからすれば、余計な事を言いそうになった女の口を塞いだだけである。

王政から目を付けられているのが判明している以上、本名は徹底的に伏せるつもりだった。

「聞いて！薬草のおかげであの子のお父さんが起き上がれるようになったの！」

「良かったじゃない。これで一安心ね」

フローラとヒストリアは、第57回壁外調査で負傷した調査兵を救う為に薬草を求めた。

そしてユミルを加えて第58回壁外調査で、どきくきに紛れて薬草を回収してきた。その薬草を服用した兵士は、少しずつ症状が改善して、今では話せるまで回復した。さすがに寝た切りで体力と筋力が落ちているので暫くりハビリ生活は続いていくだろう。

「まだ一件落着とは言えないけどね」

「大丈夫よ。きつとそのまま良くなっていくわ」

「そうね！フローラと…ユミルと一緒に居たから…ね」

ヒストリアは、ユミルと一緒に居たから作戦に成功したと思っている。

彼女の後押しが無かったら、きつと前には進めなかつただろう。

それが彼女の心を傷付ける事となった。

「フローラ、なんでユミルは私よりベルトルトの方に行つたんだろう…」

ヒストリアは、自分を愛していると発言した伴侶に裏切られたのにショックを受けていた。

未だに「女神のクリスタ」を演じているのは、そうしていれば帰ってくると錯覚しているからだ。

またピンチになったら颯爽と伴侶が駆けつけてくると思ってしまうほど落ち込んでいた。

本心を見抜いて気を遣ってくれるフローラの真意を聞きたくて、本音を打ち明けた。

「女神様は、貴方より困っていたベルトルトたちの方に行つたのよ」

「なんで!?! 私はユミルと一緒に生活できるだけで良かった!ただそれだけなのに!」

フローラの腰に抱き着いたヒストリアは、怒りをぶつけるしかなかった。

自分勝手だと思つていても、色んな想いが心から溢れて来ており、吐き出したかった。

「…私はこれからどうすればいい?」

「貴女がしたい事をすれば良いんじゃないの」

「何で他人事なの？」

「ユミルくらいよ。他人を気にかけて自分の人生を捧げてまで救おうとする女神だなんて…」

クリスタという少女の傍らには、ソバカスで長身の女が居た。

虐められたらいつも駆けつけて追い払って、落ち込んでいる時には励ましてくれた彼女。
女。

ヒストリアは、ユミルが自分だけ気にしてくれたと思っただけだが、実際は違った。

かなり口は悪かったが、誰かを常に気にしており、自分については疎かだった。

だから同じように自己犠牲をしようとするクリスタを許せなかったとフローラは分析した。

「きつとユミルは、自分の人生に後悔してはいないと思うわ！」

「嫌だ…ユミルが居ないなら私！悪い子になる！」

『胸張って生きろ』って言われたんでしょ？だからクリスタも新たな人生を選択すればいいわ」

「どういう事？」

結論をはぐらかしている同期に女神を演じていた少女は、腹が立った。か弱くて女神のクリスタだと未だに思っている女に！

「自分の夢を目指して前に進めばいいのよ！貴女ならできるわ！」

全てから存在を否定された少女は壊れて、自己犠牲と引き換えに愛を求めた。

しかし、気付かなかっただけで愛は目の前に転がっていた。

何気ない日常が破綻してようやく、自分が幸せな生活を送っていたと気付いたヒストリア。

引き離されたから分かる悲しみは自分だけでは無かった。

「私の夢？」

「別れもあれば出会いもあるの。生きていくには夢という目標が大事なのよ」

いつか大切な人と別れがある。

エレンは唐突に母親を失った。

喧嘩別れして和解する前に巨人に母親を喰われてしまったのは、同期では周知の事実である。

そう考えれば、ユミルが一方的に謝罪して別れた分、ヒストリアは幸せであった。

「…そうだよね。あの子のお父さんもたまたま助けられたけど、いつも上手く行くわけではないよね」

「ええ、家族と永遠に分かれるなんて日常茶飯事よ。世界は残酷だから仕方ないけどね」

ヒストリアには夢があった。

何かしらの事情で、孤独になっている子供たちを救いたい夢を！

愛されたかった少女は、同じ境遇に置かれる存在を何としても救いたかった！

「私には夢があるの」

「どんな夢なの？」

「家族を失った子供たちを何とかして助けてあげたいって夢…いえ、すべきことだと思う」

「素敵な夢ね」

トロスト区では、大勢の民間人と兵士が命を落とした。

それは悲劇であり、支援する者も居れば、語り継ぐ人も居た。

しかし、孤児に関しては、王政府どころか復興の支援団体も無視していた。

リーブス商会が復活して、活動を再開するまで子供たちは弱者であり、カモであった。そんな弱者の境遇をフローラに聞かされたヒストリアは、子供を守ろうと決意した！

「えへへ……まだ、具体的な事はまだ考えて無いんだけどね」

「大丈夫よ。わたくしやエレンみたいに具体的に達成できる夢なんて少ないだから……」

「でもね！もし夢が叶ったら……フローラも協力してくれる？」

「わたくしが？」

フローラはトロスト区で両手で数えられるほどの殺人をした。

巨人襲撃直後のトロスト区は、荒廃した弱肉強食の世界だった。

兵団本部と内扉以外の場所の治安が悪いどころか、殺人が多発していた。

それは、彼女も例外ではなく、凶悪犯を全て返り討ちにしたら結果的に平和にはなっ

た。

そのせいで、彼女の手は血で汚れており、無垢な子供たちを撫でられる手では無かつた。

「良いわよ！次世代の子供たちを同じ目に遭わせたくないからね」

「ありがとう……フローラが居てくれたら、やれる気がするよ！私、頑張るね！」

「その意気よ！何気ない顔をして帰って来たユミルを驚かせるのも良いかもね」

「うん、だからユトピア区で、あいつらを必ず一網打尽にしてやる！」

ヒストリアは、アニを餌に釣られてきた腰巾着野郎とストーリーカー野郎を懲らしめるつもりだ。

捕らえて、紐で縛り付けて罵倒して蹴ってユミルの居場所を吐かせるつもりである。

そして、奪還したユミルの告白を受け入れて一緒に孤児たちと共に暮らす夢を…。

きつと恥ずかしがるだろうが、無理やり聞き入れさせて胸を張って生きる自分を見せつける。

それが自分を裏切ったユミルへの罰になるとヒストリアは本気で思っていた。

『ヒストリア、ライナー相手だと逆にござ褒美になると思うんだけど…』

フローラは、ウトガルド城の防衛戦の時に気持ち悪いライナーの妄想を聴いていた。負の感情を“声”として聴けるせいで無理やり彼の本性を知ってしまった。

そしてヒストリアの負の感情を“声”として聴いたせいで、何て返答するべきか迷った。

彼女の罵倒や蹴りは、ライナーにとってござ褒美でしかなく、罰ではない。

下手すれば、首輪をされて犬の扱いを求めてくる両親の仇を思い浮かべて頭が痛くなった。

「とりあえず、死んだらそこで終わりだから注意した方が良いわ」

「だからフローラに頼んだの！あいつらをぶっ倒してユミルを奪還する為にも！」

「分かったわ！ユトピア区で決着をつけて、全てを終わらせましょう」

「うん！」

ヒストリアを導くようにフローラは手を繋いで兵舎に向かって帰路に着いた。

「ところで生臭い気がするんだけど？」

「ちよつと池に落ちてきたの」

「身体、洗ってあげようか？」

「勘弁して!!」

「あつ!逃げないでよ!!待ちなさい!!」

お節介女に気付かれたフローラは全速力で逃げ出した。

もし、ライナーがこのやりとりを聞いて居たら羨ましがらるだろう。

しかし、フローラからすれば傷だらけの身体を他者に見せたくなかつた。

なので全速力で逃げたが、個室の前に居たミーナによつて御用となつた。

『今日は、よく捕まる日ね…』

本日は、よく捕まる日だと思ひながらフローラは念入りに身体を洗わされた。

もはや、物扱いであるが、それでも2人の笑顔を見て何とも言えない気持ちだつた。

精神的にお辛い時期が続いた時にここまで笑顔になる機会などなかつたからだ。

決戦の時が近づいていると分かっているので、何気ない日常を壊すほど彼女は鬼では

無
か
つ
た。
。

89話 104期女調査兵の女子力アップ大作戦

巨人に追い詰められた人類は、大きく2つに分けられる。

物資を生産する〔生産者〕か、壁内の安全を守る〔兵士〕か。

実際は、下民を搾取する貴族や商人が居るものの大体、こんなものである。

「だからって兵士は、お化粧もお洒落もできないってきついと思うのー!」

「開拓地の女性も同じでしょう。余裕が無いんだからそんなもんよ!」

ミーナ・カロライナは、トロスト区出身の104期調査兵で期待の新人である。

様々な困難にぶつかって泣く時もあるが、元気いっぱいに話す思春期の乙女であった。

そんな彼女は、必死に親友であるフローラに語りかけたが、完全に無視されていた。

「女の子はね!手入れをしないと男よりも老けやすいのよ!」

「手入れをしていて、死んだら意味ないでしょう!」

「でも！ここに所属した同期だけでもお洒落をさせたいと思わない？」
「思わないわよ…それより邪魔しないでくれない？」

フローラは、王政から許可された補給拠点についての書類を書いていた。

諸事情により秘密裏になってしまったので、仕方なく情報伝達の為の書類を書くしかなかった。

限られた兵士しか使用できないのは、悲しい事だが、王政の議会を動かすだけ進歩していた。

「なにこれ!? 遺書を書いているの!？」

「なんでこんな物が必要なの!?! 死んだあとなんて書くななんてフローラらしくない!？」

「中央第一憲兵団? 駐屯兵団第一師団精鋭部隊? なんで有名どころ宛に書いているの!？」

そしたら部屋を掃除する為に入室してきたミーナによって介入されてしまった。

あまりにも邪魔だったので、真面目に嘘をついた挙句、適当に受け流す事にした。

その結果、前に参考にしていたファッション雑誌の話題となり今に至る。

「そもそも、兵士がお洒落をする余裕なんて無いわよ！ 飲酒するより可笑しいわよ！」
「そういった密かな愉しみが人生を分けるかもしれないのよ!？」

「女の子が全員、お洒落に気を遣う乙女だと思ったら大違いよ！」

「フローラみたいに？」

「そうよ！」

最近、女として扱われていないフローラは力説している親友の話に耳を貸せなかった。

そんな事をするくらいなら訓練をした方がいくらかマシである。

訓練しても巨人に勝てるとは限らないが、少なくとも訓練不足で死ぬことは無い。

「ミカサがお嬢様ファッションになったり、カジュアル系のヒストリアを見たくない？」
「確かに気になるけど…」

フローラは、お嬢様ファッションのミカサに近寄ったジャンが無視される光景を思い浮かべた。

確かにふわふわとしたドレスを着込んでいるミカサは気になる。

だからといって、無理やり着させれば、ファツションハラスメントになるのは間違いないだろう。

エレンに言われて髪を切ったとはいえ、ミカサも赤の他人から指図されるのは嫌いのはずである。

「でしょ！だから一回みんなでお洒落をしてみない？」

「まさか…先輩たちにもやる気なの？」

「104期調査兵だけだよ。さすがに上官に強要できないし…」

「その気遣いをわたくしたちにも向けてくれると良いのだけど…」

ミーナが目をつけているのは、同期である104期調査兵である。

ミカサ、サシャ、ヒストリア、フローラ、そして自分。

たった5名ならそこまで大胆ではないし、密かに盛り上がりたと思っていた。

「ねえ、みんなを呼んでお洒落をしてみない？」

「うーん、まあいいわね」

やたらと氣遣われるようになったフローラはイメージチェンジを目指していた。

性格は、すぐに変えられるものではないのだから見た目を変えてみるかと考えていた。

なので、ミーナにそう告げられると参加したくなってしまうた。

「さあフローラも来て！貴女が居ないとお洒落をするお金が無いから！」

「さつそく金蔓扱いとか…どうにか印象を変えないとね」

こうしてミーナに引つ張られて同期の女性にお洒落について話しかけた。

彼女自身は成功するとは思わなかったが、何故か上手く行ってしまった。

「私も参加する！」

「嘘でしょ!？」

「だよねー」

ミカサ・アッカーマンは、エレンの視線をどうにか乙女として認識してもらいたかった。

自分への好意があるのは知っているが、異性としてどう認識されているのかさっぱり分からない。

ミーナに女として認めてもらえる様に訓練をされると言われてあっさりとお洒落を承諾した。

「お肉が喰えるなら何でもいいですよ！」

性欲が食欲に置き換わっている様なサシャ・ブラウスもお洒落をするつもりだ。

やはり乙女らしくと両親から言われてきたが、どんな物か理解できなかった。

そんな時にミーナにお肉をあげるからお洒落をしないかと言われて即座に承諾した。

「フローラがお洒落に参加するなら見逃さないわけにはいかないよね！」

「お願い！そんな事言わずに断って！」

ヒストリア・レイスも可愛いだの女神だの言われてきたが、あまり褒め言葉ではなかった。

演じている少女の方が評価されていると感じており、本名を明かしてから顕著であつ

た。

なので、同期がお洒落をすると知って、さっそく参加した。

『どうやって逃げようかしら…』

なお、費用は全てフローラが負担する上に彼女自身はお洒落に乗り気じゃなかった。

どうにか逃げようとするがミカサが敵に回っている以上、逃走は絶望的であった。

ファッシュヨンデザイナー脳になっているミーナを説得しようとしたが全て失敗に終わっている。

「それじゃあ、エルミハ区に向かおう！」

ミーナに誘導されて一同は、トロスト区の北部に位置する内地であるエルミハ区を目指した。

そして一同は、彼女によって服を選ばれて試着する事となった。

最初は、104期南方訓練兵団の首席であるミカサがターゲットだった。

『まあ、ミカサは元から可愛いから何を着ても似合うわよね』

フローラは他人事の様子に親友に振り回されているミカサを眺めていた。ところが試着室から出て来た彼女を見て衝撃を受けた。

「…か、可愛い！お嬢様みたいよ!!」

ファッションには興味は無いが流行は追っていたフローラ。そんな彼女から見ても、一目惚れしそうな恰好であった。

「そんなに似合ってる?」

「素敵ですね！これならお嬢様に見えますよ!」

「うん、令嬢みたいだね」

サシャもヒストリアもミカサのファッションに満足していた。

自分たちもこんな感じに変われると思ひ、興奮しており、ミカサは照れ臭くなっていた。

「そんなに可愛いのか？」

ミカサが疑問に思うのも仕方なかった。

まだ化粧してないのに露骨なお世辞に感じてしまうほど同期が褒めていたからだ。

「うん、ミカサはこれで決まりねー！」

ミーナは、ミカサを名家の令嬢に見えるようなコンセプトで衣服を選んだ。

黒髪の東洋人とは対極に位置する白いのワンピースで、清楚感と純真な乙女にした。

白色のタイツと水色のパンプスが彼女の引き締まった軍人の肉体を乙女に見せかける事に成功。

スカートは膝丈までにして、男共の視線を集めると同時に麦わら帽子で、身近な存在に見せた。

まるで、名家の令嬢がお忍びで、領民の祭りに参加してきたような姿であった。

「ところでミカサ！マフラーはどうしたの？」

「洗濯して部屋に干してる最中」

「えー」

「そもそもこの格好じゃ似合わないし…」

ミカサの言う通り、赤いマフラーは、この服装には似合わなかった。

しかし、フローラはトレードマークのマフラーが無いのに不満だった。

エレンとミカサがくつつくなら何でもする気である彼女は、絆の証が無い事が苦痛である。

とはいえ、この格好でエレンとやり取りするのを想像するだけで胸がときめくのも事実。

本人の気が変わる前にさっさとお会計を済まそうとした。

「すみません！お会計はいくらですか？」

「鋼貨120枚だよ！」

「ひぎっ！」

内地に住む一般の4人家族の消費するパンの120日分である。

一見すると安いように感じるが、満足にパンを食べる人など全体の1割未満。下手すれば生涯年収になりかねない大金であった。

「お会計お願いします。支払いは小切手で…」

「……確かに本物だね！すぐに領収書を書くから待ってておくれ！」

それでも新たな自分を見つけて喜んでいるミカサを見て、フローラは素直に支払った。

払えない額ではないが、新型装備のせいで出費が激しく貯金を崩す形となった。

「次はサシヤね！」

「どんな感じになるのか楽しみですよ！」

次はサシヤが着替える番であった。

何故か全員のスリーサイズを把握しているミーナ。

「兵士辞めて、ファッションデザイナーになったらどう？」と告げなくなる才能が眠っていた。

全ては、フローラの部屋でファッション雑誌を見たせいであるが、人生とは分からない物である。

「皆さん！着替えが終わりました！」

そんな哲学をフローラは考えていたら、サシヤの服が決定した様である。

さきほどもそうであったが、既に何を着させるか決まっているようにすぐに決まっていた。

どんな感じになったのかとフローラ一行が確認すると衝撃的な光景であった。

「嘘でしょ?！」

サシヤは膝丈までのスカートにヘッドドレスを身に着けた侍女の格好をしていた。

機能性を重視した正式な制服とは違って、所謂萌えに特化した服装である。

だが、中身は芋女でもフローラと違って正統派の美女である彼女には似合っていた。芋を盗み食いをする未来しか見えない侍女さんだが、可愛いは正義である。

ミカサが清楚で大人しそうなイメージがしたが、サシヤは可愛さに全振りである。

「主人に出す料理につまみ食いしそうな恰好ね」

「ミカサ！ひどいですよ！私を何だと思ってるんですか！」

「「芋女」」

「みんなまで!?!」

キース教官の目の前で蒸かした芋を堂々と食べていた女。

訓練兵団に配属されて兵服に袖を通した初日にやらかした。

そのインパクトは誰もが忘れることは無いだろう。

「私は狩人なんですよ！強いんですよ！弓と矢があれば何でも射抜けるんですよ！」

「じゃあ、恋のキューピットになってよ」

「いやさすがにそこまでは無理です……そんな目をしてもしませんよ！」

ミーナの冗談に本気になったサシヤは更に墓穴を掘ってしまった。

果たして彼女の底知れぬ胃袋を満足させる伴侶は居るのだろうか。

自分も似たような存在と気付かないフローラは他人事のように感じていた。

「この侍女さん、料理する前につまみ食いしそうね」

「味見をしたいただけだと思います」

「料理当番の時、全部平らげた実績から言っているんだけど…」

サシャ・ブラウスという女は食欲旺盛だ。

なんなら料理担当で料理が完成したら平らげてしまうくらいに。

ヒストリアのツツコミに彼女は狼狽えるしかなかった。

ちなみにフローラは主食である根っこを勝手に入れようとして叱責された。

その為、この2人は調理場から出禁処分となった。

「このお会計は？」

「鋼貨140枚となります」

「まだ、まだ大丈夫…これくらいなら払えるわ」

どこにそんな金額が掛かっているのか…疑問であるが職人が凝って製造していると納得した。

良く見れば、こんなコンセプトの服装などマニアックな貴族以外に売れるわけがない。

逆に言えば、ミーナが予め調べ上げて予約していたとも読める。

それでもサシヤの可愛らしさにメロメロになったフローラは豪快に支払った。

「次は私の番ね！新たな自分を探してくる！」

「頑張つてね！」

次はヒストリアの番である。

最初から男子人気1位である彼女ならどんな姿でも殿方の心を鷲掴みする事だろう。

しかし、可愛さで挑むとサシヤと被るのだがどうするつもりなのか。

ミーナ女史の答えはすぐに出た。

「どう!?!これが新しい私！」

「まさかのスポーティ!?!いや、似合ってるけど予想外だったわ！」

出てきたのは世にも珍しいスポーティファッションに身を包んだヒストリアであつ

た。

この時代では、女性は男性を立たせる裏の役目というものである。

なので、お淑やかさと可愛い以外のファッションですら流行になつていない。

なのにそれ以上に異端であるスポーティファッションが出て来て驚くしかない。

「もしかして似合わなかったの？」

「そんな事は無いわ！本来の性格に一致してるわ！」

小柄なヒストリアは非力なイメージが強かった。

しかし、靴にズボン、そして薄着のシャツから活発的な少女に変貌した。

侍女服で可愛さをアピールするサシヤに対して、ヒストリアは新たな一面を見せた。

「とつても活発的で自分を主張する女の子って感じ！」

ミーナは腰に手を当ててドヤア顔でコンセプトを発表した。

しかし、ミカサもフローラもサシヤもヒストリアに夢中になつており無視された。

なので、彼女は少しだけ悲しくなった。

「不安なんだけど、この格好はどう思う？」

「とつても似合ってる」

「ミカサの言う通りですよ！もつと自信を持ちましょう」

「そう？私が守られるだけの存在じゃなくなるなら良いけど…」

兵士である以上、一般的な成人男性より遥かに強いがこれならか弱く見られる事無いだろう。

ライナーがこの場に居れば、「一緒に訓練しよう」と意味深な発言をすと思われる。それほど、活発で明るいその姿は、女神パワーも合わさって太陽のイメージとなった。

「眩しいわ！服装だけでイメージが変わるとは思わなかったわ！」

「だから言ったでしょ！服装を変えるだけでここまで変わるって！」

第一印象は、視覚が9割で占められており、それほど見た目は重要である。

しかし、女性の服装は全て似たような物であり、悪く言えば個性が無かった。

そのせいで、身だしなみや顔で選ぶ男性が多く、女性は苦勞する時代だった。

女が主役の時代はまだ先だが、これは時代の最先端の先にあると感じるものである。

「それでお値段は？」

「金貨5枚となります」

「ですよねー」

特注品で売れる要素が皆無であるファッションは、高額であった。

調査兵団の馬が金貨6枚と考えると、たかが服装ではあるが、とんでもない金額である。

これより高額なのは、見栄を張る貴婦人たちのドレスくらいだろう。

しかし、新たな自分を見つけたヒストリアを否定する事はできず、フローラは泣く泣く支払った。

「次はフローラの番よ！」

「絶対、ヒツチに影響を受けてるわよね？」

「当然よ！友人のおかげで色々勉強したんだから！」

「ああ、なんて事なの……」

思い返せば、ストヘス区で出会ったヒツチのお買い物に付き合ったのが運の尽きだった。

そこから女子力やら掃除やら口煩くなった。

明らかに彼女の影響を受けているのは明白であり、何としても対策をしなければならなかった。

「ふふふ、親友を着せ替えるのは嬉しいね」

「着せ替え人形になっている身にもなつてよ…」

フローラは、ライナーに匹敵するほどの長身であるので私服は中々見つからなかった。

更に彼女自身、年齢を重ねていくうちに乙女らしさが皆無になりつつあった。

そのせいでパジヤマが男物という有様で、ミーナが居なければ乙女では居られなくなつただろう。

だからといって、好き勝手に弄られるのは違つたと反論したいところである。

「じゃじゃん！」

「ジャンに興味があるの？」

「違う！こうやって服装を紹介したかったの！」

地味にミーナはジャンに脈無しと言ったような物だが、本人は気付いていなかった。愛の反対は無関心とは良く言ったものであるが、その愛は恋人に向けて欲しい。そんなフローラの願いも空しく無理やり彼女に着させられた。

「少し太った？」

「せめて筋肉が付いた…って言って欲しいのだけど…というか何で知ってるの？」
「秘密！」

何故かミーナはフローラのスリーサイズを知っており、困惑するしかない。しかしフローラは長身であるので、中々サイズが合う服装が無いと思われた。

「意外と着れたわね…」

「前もって特注しておいたの」

「やだ、こういう時だけ行動が早いよね…」

フローラは淡い紫色のミニスカートと膝丈の黒色の靴下を着用した。

これは王都で流行っているファッションであり、従来の女性観を変える服装である。

「王都の若者は、本当にこの格好で男を誘惑してるのかしら？」

「とつても魅力的だと思うよ！特に肉を食いこんでいる靴下が魅力ポイント！」

令嬢たる者、脚はなるべく見せない様にロングスカートを履く風習の対極に位置する。

背徳感があると同時に眠っていた商人の令嬢魂がフローラの中で目覚めそうになっていた。

「……やっぱり着せ替え人形じゃない？」

興味津々で親友に色々着せられるフローラは、そんな魂などすぐに眠らせた。

どうやらミニスカートと靴下を先に考えており、他は複数の案があったようだ。

そして選ばれたのは、できるだけ肌を見せない恰好である。

「せっかくのミニスカートなのにこれで良いの？」

「傷だらけの肌を見せるのは、痛々しさしか見えないからこれで良いの」

長袖の淡い緑色のトップスにベレー帽、地味な感じに見えて逆に目立つ恰好だった。色を地味にしたところで異端な格好は誤魔化せないし、なによりスカートを履くのが苦手だった。

下着を見せない様に立ち振る舞いをしなくてはならず、動き辛い恰好である。もちろん、ミーナはそれをさせる為にわざわざこの服装を選んでいた。

「大丈夫そう？」

「お化粧がまだね！」

「もうよろしくてよ！お披露目会と行きますわ！」

どこに持ち歩いていたのかミーナは化粧道具を取り出したが、無視をした。

一見すると非情に見えるが、そもそも他の3人はすぐに出てきたので当然の反応だっ

た。

人を待たせているのに自分だけ呑気にお化粧するなんてもつてのほかである！

「お待たせ！」

「フローラ、1人で着替えられなかったの？」

「ミカサ、酷くない!？」

容姿より先に1人で着替えられなかったのかミカサに心配される有様。

普通に考えれば、兵士が装備を身に着けるより遥かに簡単な事である。

なのに時間が掛かっただけで第一印象がそれだったのだからよっほど女子力が皆無
であろう。

少なくとも辛うじて残っていたフローラの乙女心に重傷を負わせた。

「どう？わたくしの姿」

「フローラには娼婦は向いてないと思うよ！」

「なんでこうなるの!？」

ヒストリアから強烈な一撃をお見舞いされて泣きそうになるフローラ。
ミーナもさすがにこの反応は予想外らしく困った顔で親友を見つめた。

「黙つてないで反論してよ!」と叫びたかったが、店に迷惑を掛けるので黙つて佇むしかない。

「似合つてますよ! さて、お買い物も済んだことだし、お肉を食べに行きましょう!」
「まだお会計が終わつてないわよ!」

サシャは、フローラの服よりお肉が大事だった。

さきほどまでは、友人たちを褒めていたのに今はお肉で頭が一杯だった。

ベルトルト曰く「何で君は同期から好かれているのに扱いは雑なの?」というありがたいお言葉。

それを存分に噛み締めながら、フローラは会計をしようとした。

「今度からは一括でお支払いされても…」

「さすがにこれ以上は破産しますので当分、様子を見ます」

「お会計は、鋼貨70枚となります」

お会計を済んだので次はミーナの番だと思っただけに既に着替えていてお会計待ちだった。

ミーナは成績上位の女子たちが美少女だらけという事もあり地味な女の子だった。

しかし、そこに居たのは、フローラと似たような服装なのに可愛らしい美少女。

ミーナはパンプス、フローラは兵士が着用する膝丈のブーツしか差がないのにこの有様。

あまりの女子力の差に愕然としたが、それでも親友が楽しそうだったのでお会計をした。

「ミーナ、可愛い」

「フローラったらそればっかりね」

私服も地味だったが、化粧と服装でだいぶ改善された。

生まれてくる時代を間違えたような少女。

もし平和な世の中だったらファッションデザイナーとしてデビューしていただろう。

だからこそ、絶対に巨人を1匹残らず駆逐してやると誓ったフローラ。

「お肉を食べたら今度はお化粧の練習をしようね」

「エレンからの印象を変えたい。その話に乗る」

「やめてミカサ！わたくしが実験台にされるわ！」

お肉を求めて彷徨うサシャに率いられた104期の女調査兵。

「次回は、ユミルも連れて行くの」というヒストリアの妄言で財布は更に薄くなりそう
だ。

「おいそこの嬢ちゃん！俺たちと遊びに行かないか？」

店を出てエルミハ区の繁華街を歩いていると、屈強な男たちに声を掛けられた。

ジロジロと見つめてきており、下半身で生きてきたのは間違いないだろう。

「大変ね…」

「あんたの事を言ってるんだよ！」

「わたくし!?!」

名家の令嬢がお忍び姿になっているしか見えないミカサ。

機能性よりお洒落に全振りしているようなフリルが付いた侍女服で可愛いサシャ。元気で明るくて運動神経抜群そう。笑顔でライナーが成仏されそうなヒストリア。ミニスカートと膝丈の靴下で殿方の視線が釘付けになるミーナ。それを無視して暴漢らが狙ったのはフローラだった。

『こいつならやらしてくれそうだ』

『ちよろそうだし、うまくやれる』

『取り巻きが厄介そうだが、なんとかなるだろう』

単純に馬鹿そうに見えたのがフローラだったので目を付けられただけだった。普通なら無視をするか撃退するのがセオリーだろう。

「面白そうね！わたくしも参加するわ！」

「「「フローラ!?!」」」

とりあえず逃げたかった彼女からすれば、彼らは助け舟を出してくれた優しい集団である。

もちろん、貞操の危機であるのは負の感情を知る能力があるので分かり切っている。だが、巨人や王政府の刺客、商売敵などを相手にしてきたのでそう考えれば楽である。

「よしーじゃあ俺達と…」

しかし、彼らはフローラに絡んだことを後悔する事となる。

人類最強の女と言っても過言ではないミカサ。

弓なら百発百中、慣れない銃でも成績3位の狩人であるサシヤ。

一見可愛いだけの美少女に見えるが、対人格闘術で10位内に居るヒストリア。

突出した技能は無いが怒ると手が付けられなくなるミーナ。

そんな彼女たちの逆鱗に触れてしまった。

「いてえ…」

「女怖い…」

「助けて…」

釣れたカモを引き留める仲間にも業を燃やして飛び交った男6人組。
10秒足らずで返り討ちにあって瀕死となった。

「フローラ！怪しい男に付いて行くな…って何度も言ってるでしょ！」

「分かってるわよ！」

「分かかってない!!全然反省してない!!」

「ミカサ！分かかってるってば！」

襲い掛かって来た男のポケットから違法薬物コデロインが発見された。
なのでヒストリアとサシヤは憲兵団に通報した。

その間、ミカサとミーナにお説教されてしまったフローラ。
早く憲兵が来る事を祈るしかなかった。

「では、お肉を食べましょう！」

「待って！さつき食べたよね!？」

「迷惑掛けたんだからそれくらい良いでしょう！」

お肉を奢らされたどころか、何件も周る羽目になってしまった。

このせいでフローラの貯金がほぼ無くなった。

一応、投資用の資金はまだ残っているが、手を付けずに済むならありがたいくらいである。

104期の女調査兵たちはガールズトークで盛り上がった。

「エルヴィン団長って昔、想いの人が居たんだったって」

「でも、調査兵団の道を選んだそうよ」

「大変ですよね。覚悟を決めて自分から別れるなんて……」

「酷い言われようね！憲兵団のドーク師団長に託したのよ!!」

独自の情報網を持っているフローラだが、ゴシップ話はあまりしない。

なので、それを聴き出そうと彼女たちはあれやこれやと話題を振った。

エルヴィン団長が話題になった時は、さすがにフローラはフォローを入れた。

どんどん変な方向に流れていく話を戻すのも彼女の仕事である。

「お化粧って奥深いんですね」

「今度、フローラで実験してみようよ！」

「賛成！」

「まあ、フローラなら…」

「なんでこうなるの!?!」

さきほどの件もあり強く出れないのを分かっている彼女たちは弄りまわした。

そして着替え直してカラネス区に帰還した頃には日が暮れていた。

まるでこれから先は聞かないように。

「暗くなっちゃったね」

「明日の10時から出発ですからね！寝坊しないようにしましょう」

楽しい一時を終えてサシャの一言で、フローラたちは身を引き締めた。

何故なら翌日から本拠地のカラネス区を出発してユトピア区に向かうからだ。

「ここに帰って来れるのかな…」

「ミーナ、大丈夫よ。またみんなと楽しく雑談できるから…」

ミーナ・カロライナは、翌日に結晶に包まれたア二を目撃する事となる。

それだけでも落ち込むのに新天地のユトピア区では長期任務となる。

ライナーたちが攻め込んでくる可能性が高いからだ。

そのせいで、通行許可証があるフローラですら当分、戻って来れない。

「忘れ物が無いか。ちゃんと確認しておきましょう」

「でも…」

「兵士である以上、責務は果たさないとね！」

ヒストリアとミカサとサシャと別れてもなお、ミーナは落ち込んだままである。

もう二度と今日みたいな日常が戻ってこない気がして怖かった。

親友からの励ましの声も何故か今日だけは他人事に聴こえた。

「ねえフローラ」

「どうしたの？」

「トーマスみたいに死なないでね…」

フローラとミーナとトーマスは親友だった。

共に励まし合って一週間に一回、報告会をして情報を交換しながら切磋琢磨で訓練した仲である。

もはや家族より仲が良いと言っても過言でないトーマス・ワグナーの死はあまりにも大きかった。

「ミーナも約束してくれたら、その約束を守るわ」

「分かった。一緒に生き延びようね！」

「カラネス区に帰ってきたらみんなを集めてパーティをしましょう！」

「よし、同期全員集めてくる！もちろんユミルもね！」

「えっ……そうね！」

フローラは破産を覚悟しつつミーナと生き延びてカラネス区でパーティを開催する約束をした。

ユトピア区で全てを終わらせて、みんな楽しんで気力を養う！

そして次は、シガンシナ区に向かって穴を塞いで巨人を掃討する！
そんな夢や希望、未来を2人で確認し合いながら約束をした！
だが、世界は残酷である。

「今日はフローラの部屋で寝て良い？」

「いいけど…寝ている時に部屋を漁るのが目的でしょ？」

「だって、部屋の片づけをしたいじゃない」

彼女たちの待ち受けている未来は残酷であった。

8章 破滅だと分かっても人は前進するが、更に地獄の釜の蓋が開くと後に発覚する時代

90話 人類活動領域の最北端ユトピア区

壁内人類を守護する駐屯兵団の兵力は約3万。

その兵団は大きく2つに分かれている。

南部を守護する部隊か、北部を守護する部隊かである。

だが、巨人が南部からやって来る関係上、主導権は南部の兵団。

【現人類領土北部最高責任者】であるメルセデス・ジークフリートは話題になる事は無い。

「ピクシスとは飲み仲間だな。あやつは奇人と見せかけて一番常識人じゃった」

「それは周りが極端過ぎて常識人にならざるを得なかったのでは？」

「ザックレーは良く注意してくれたまえ。昔から何を考えているか分からん奴じゃ」

「芸術しか考えていないと思うのですけどね…」

チェスの勝負をさせられているフローラは、早く終わらせたかった。お偉いさんとの接待という名の拷問ほど面白くない物は無い。

正直、ピクシス司令と比べると遥かに弱く純粹勝負で2勝2敗だった。勝たせるつもりが、真面目にやり過ぎて勝ってしまった。

「待った!」

「待ったなし! チェックメイト!」

「少し手心というものを…」

「本気で勝負しろと仰ったのは、ジークフリート司令じゃないのですの」

キングとポーン2体しか残っていなかったが辛うじてフローラは勝てた。人によって戦術は違うが、あえて彼女は駒を取らせて総崩れさせていた。守りが異様に硬い以上、攻勢させるように操作するしかなかった。

「さすがにピクシス司令とチェスをやりあつた奴は違うのう」

「1勝52敗、とてもじゃないですが勝ち目はありませんでしたわ」

「だが、戦場はチェスのように駒は動かない」

「巨人が規則に基づいて行動していたら、とつくの昔に人類は滅亡していますわ」

人類を守るのは、南部に展開している駐屯兵団である。

では、北部に展開している駐屯兵団は何を担当しているのか。

答えは、工業都市や鉱山、職人の警護などを担当している。

「…ユトピア区に來ると思うか？」

「間違いなく來ますね」

王都ミットラスより北部は、過酷な環境で人口が少ない代わりに資源が豊富だった。

西のクロルバ区を北上すると燃える水が豊富に取れる油田がある。

東のカラネス区の北上すると、鉱脈があり金属成分を吸って育った黒金竹が取れる。

人類活動領域の最北端であるユトピア区は、火山地帯の為、温泉と鉱石が豊富である。

それらの拠点であるのがユトピア区で、北部の駐屯兵団の本部が置かれていた。

「参ったのう。穩便に引退したかったのだが…」

「でもそのおかげで3つの兵团と王政府が1つになりましたわ」

壁内に存在する3つの兵团は、【総統局】によって統括され管理されている。

…というのは建前であり、実際は権力が拮抗しており、もはや機能していなかった。

例えば憲兵团は、内地を護る駐屯兵团第二師団の5000名を事実上、私兵として運用している。

かと思えば、有事における巨人戦では、調査兵团の団長が独断で憲兵团の部隊を動かした。

もはや各兵团が好き勝手に動いているのが現状であり、巨人のおかげで団結しているに過ぎない。

「それを聴くと耳が痛いんですけどー」

「ああ、申し訳ありません」

黒髪のサイドテールが印象的なラナイ・マクロンは、不機嫌そうにフローラに不満を打ち明けた。

ラナイは、総統局に所属している駐屯兵であり、王政府の議会に出席できる権利を有

している。

各兵団の指揮系統が有耶無耶なのは、こうやって総統局の構成員が各兵団に所属しているからだ。

つまり、総統局には派閥があり、ザックレー総統の息が掛かった兵士は一握りしかない。

彼女は、その数少ないザックレー派の兵士である。

「シユツルムシリーズの開発を手伝ってあげたんだから……もう少し感謝したらどう？」

「あの時は助かりましたわ。色々とお礼を……」

「もつと感謝してくれてもいいよ！」

専用装備を身に着けたフローラは、カラネス区壁外で巨人を狩るパフォーマンスをした。

馬を買う金が欲しかったが、専用装備のせいで憲兵に目を付けられた。

なんやかんやあって、何故かその装備が正式に採用されて急遽生産しなくてはならなくなつた。

そんな時にザックレー総統が助っ人として呼んだ内の一人であり、ありがたい存在

だった。

何故なら工業都市やその守備隊に顔がきいてスムーズに話が進んだからだ。

「感謝してますので、こうやってチェスを代行してやっているのですけど…」

「誠意が足りないと思わない？」

フローラがジークフリート司令とチェスをしているのは、彼女に押し付けられたからだ。
だ。

お偉いさんとの接点ができるのはフローラに利点があるが、それでも厚かましい感じがする。

どうも彼女は、お偉いさんに取り入るより上官である隊長と密着して行動するのが好きそうだ。

「こうやってチェスをする事しか若い娘さんと仲良くできなくて…」

「あまりにも階級差がありますからね」

「だからと言って毎日の様に誘うのは止めて頂けませんか！」

ジークフリート司令は、ピクシスと違って白髪がすっかり残っている老齢な紳士である。

しかしピクシスとは違って優秀な女参謀が居ないどころか、部下は男しかいなかった。

故にラナイとチェスをするくらいしか女兵士と接点がなかった。

だから前から問題児と聴いているフローラと会話しながらチェスをするのを心底楽しんでいた。

「エルティアナ隊長とチェスをされるのがよろしいのでは？」

「ねえ…隊長は忙しいのです!!」

思わずいつもの癖で発言したくなる単語を抑えてラナイは簡潔に提案を拒絶した。

「姉さま!」と呼んでしまいたくなる癖を治したいが、やはり無理であった。

「総統局が久しぶりに3つの兵団を指揮するのでチェスをする暇がありません!」

ラナイの上官であるエルティアナ隊長は、ユトピア区に展開する3兵団を管理する立

場である。

最前線の指揮は、ユトピア区守備隊長だったりエルヴィン団長で任せられる。

しかしそのクラスでは、緊急時に別の兵団を動かすには限界がある。

とはいえ、ピクシス司令級の高官を前線に出すわけにも行かなかった。

王政府の後押しもあり、中央憲兵すら展開しているので総統局が担当するしかなかった。

ザックレー総統を激戦が予想されるユトピア区に招くわけにも行かず、彼女が受け持っている。

「もうじきピクシスが来るし、わしの出番は無い！」

ジークフリート司令とピクシス司令は同期であり、かつては切削琢磨しあったライバルである。

今では、僻地に飛ばされて腐敗した彼と違って、現役であるピクシスは最前線で頑張っている。

なので、彼はバックアップ体制を敷くだけで後は同期に投げていた。

そしてその愚痴を聞かされると察したフローラは逃げようとした。

「チエスの決着はつきましましたので、わたくしはこの辺で…」

「おっと！勝ち逃げはさせぬぞ！もう一度真剣勝負じゃ!!」

ここでラナイ・マクロンが自分にチエスの代行させた真意を知る事となった。

要するに彼は自分の気が済むまで離してくれないという事だ。

とりあえずフローラは彼女に助けを求めようとしたが、既にその場から逃走済みだった。

仕方なく司令官と向き合つてチエスの続きをする為に駒を置き直した。

ついでにお茶を出したら彼に褒められたがリヴァイ兵士長の時と違って全然嬉しくなかった。

ウォール・ローゼ壁内で巨人が出現した騒動で内地に避難した住民は帰還させた。

避難民を養える食料が尽きてしまい、強制的に帰還させるしかなかったからだ。

前線から遠く離れて未だに平和な雰囲気は漂う王都ミットラスですら他人事では無

い。

「下級国民がまた来たらどうしましょう」

「汚らしい奴らめ！ 私たちの暮らしを脅かす気か！」

「憲兵団は何をしているの!?!」

「ストヘス区の悲劇を忘れるな！ 絶対、あいつらはこの街を狙っている！」

内地であるウォール・シーナでは、貴族たちが様々な憶測で次々と噂を広げていた。

大体は自己保身からの下級な存在を見下す事で不安な気持ちを晴らすように雑談している。

ベルク新聞社の記者であるロイとピュレは、そんな彼らを満足させるネタを探していた。

「ロイさん！ やはりユトピア区に調査兵団が何かを搬送させてから警備が嚴重になったようです」

「そのネタで叩こうと思ったが、既に記事にされているんだ。もつと詳細に踏み込まないといかん」

何かが搬送された後、ユトピア区の警備が嚴重になったので何かあったと分かった2人。

しかし、そんな事など他の新聞記者たちも調べあげており、ネタにしていた。軍事機密の為、詳細が載せられていない以上、彼らは必死に情報を得ようと走り回っていた。

「やはり妙です。駐屯兵団第一師団精鋭部隊もユトピア区の警護についています」
「それなら指令書があるはずだ。憲兵団と違って、あのキッツ隊長が疎かにする訳がない」

ザックレー総統、ピクシス司令、エルヴィン団長、ドーク師団長。

各兵団と総統局のトップが王都に集結しているこの日に何か特ダネを見つけようと奮闘する2人。

そんな彼らの努力は報われることは無かった。

「巨人の大群が北上していったけど？」

「はい、間違いありません！北東に向かったのをトロスト区の観測手4名が確認しております！」

早馬で駆けつけて来た伝令の報告を受けた調査兵団の団長であるエルヴィン・スミス。

彼が思い浮かべるのは、巨人の大群によるユトピア区強襲の悪夢。

あくまでもトロスト区は、超大型巨人に空けられた穴から巨人が侵入しただけである。

今回の場合は、巨人が意志疎通をして進軍しているという決定的な違いがある。

「事前に伝えていた例の巨人は目撃したか？」

「ハッ！装甲の様な物で覆われている巨人を目撃しております！」

「そうか…報告ありがとう。君は持ち場に戻ってくれ」

「ハッ！失礼しました！」

敬礼して頭を下げて退室していった伝令。

その後ろ姿を見届けたエルヴィンは溜息を吐いてから髪型を整えた。

そして、平常心を心掛ける様に早歩きで会議室に居るザックレー総統らと合流した。

調査兵団の団長が巨人に関する情報を報告する時に息が上がってるわけにはいかな
いからだ。

「エルヴィン君。何かあったのかね？」

「さきほど、伝令から巨人の大群が北上しているとの連絡がありました」

各兵団のトップとザックレー総統の顔が歪む。

最終決戦の日が近づいているのは明白である。

だが、この情報を一般に公開するわけにはいかなかった。

つい先日壁内に巨人が出現した騒動が後を引いているからだ。

「狙いはユトピア区か？」

「厳密に言うとは結晶で覆われたアニ・レオンハートの奪還が目的かと」

「来るとは思っていたが予想より早いな」

ザックレー大統領とエルヴィン団長の会話で、壁内人類には時間が残されていないのを知る。

憲兵団のナイル・ドーク師団長は、再び街が大惨事になるのを知って拳が震えた。

内地であるストヘス区が半壊した事件ですら頭が痛いのに更に大惨事になると分かったからだ。

あれは、女型の巨人1体にもたらされた惨劇だった。

今回は、最低でも巨人化能力者が3名居ると判明しているので更に被害が出るのは予想できる。

「その中には、先の騒動の際にも姿を見せた鎧の巨人を確認したとの報告もあります」「ふむ、3兵団の総力を結集させた緊急防衛戦を敷いたのは正解だったな」

ザックレー大統領は最悪の事態を予測し、直属の部下2名をユトピア区に派遣している。

調査兵団、駐屯兵団、憲兵団の3つの指揮をできるのは総統局の構成員だけである。

「ユトピア区は歴史上、巨人の脅威に晒されたことは無く、他の地区と比べると守りが軟弱かと」

「あそこは工業都市であり、周囲には資源地帯が集中しているのう」

「そこが陥落すれば、間違いなく継戦能力が低下するでしょう」

エルヴィンとピクシス司令の会話が他人事のように話している様に聴こえる。

そう感じてしまうのは、ドーク師団長の故郷に近いのは無関係ではないだろう。

もちろん、同じ北部訓練兵団出身のエルヴィンがそんな事を知らないはずはない。

むしろ、分かっているであえて発言している節がある。

調査兵団の夢を諦めてまで自分が守ろうとした妻マリーがその南部の街で暮らしているのだから。

「ユトピア区の陥落は何としても阻止しなければなりません」

だからナイルは、絶対に陥落を阻止するつもりで強く発言した。

もうじき3人目が生まれる妻を何としても守るために！

「ところでユトピア区で意識を失う者が相次いでいるようだな？」

「メルセデス司令の報告によると火山や炭鉱の毒ガスではなかった」

ザックレー総統が気になっているのは、ユトピア区の住民の体調不良である。

報告書によると、発見時には硬直して痙攣しており、すぐに意識を取り戻したという事である。

あそこは、火山や炭鉱から噴き出す毒ガスで倒れるのは日常茶飯事だった。

更に南部にあるアトラス山脈に遮られるせいで豪雪地域。

換気をせず暖房を焚き続けて意識を失ったり、死亡する事例など山ほどあった。

しかし季節外れであり、老若男女の軍民が場所を問わずに意識を失っていたのに疑問しかない。

「では何だ？」

「ユトピア区の憲兵団が調査したところ、全員、直前に料理店で食事をしておった」

「つまり料理店を出されていた料理に使われていた食材が原因だった……？」

「料理人と給仕を敵性スパイとして投獄し尋問を行なったそうじゃが特定には至っていない」

「食中毒はありえんと思うが、毒だとしても復帰が早過ぎる」

「エルヴィンに同感じゃ。何かしら裏がある」

ピクシス司令は、報告書を疑っている。

もし料理人や給仕がスパイであるならば、こんなに容易く捕まるわけがない。

つまり、真犯人が別に居ると予想している。

料理は、パンをジャムを塗って充分、加熱した物であり食中毒の可能性は著しく低い。食材の原産地を調べるべきか、もしくは何者かが店内に侵入したのを疑うべきである。

「これを受けて兵士の食事は、専用の食材と料理人によって管理しています」

「もちろん、兵士全員を守らせるように厳命しています」

憲兵団のナイルは、そう説明したが一人だけ守らなそうな奴を思い浮かべている。

ピクシスもエルヴィンもザックレーも内心では、絶対に守らない女を思い浮かべた。

それほどフローラ・エリクシアという女はどこかしらで食事をしている。

特にエルヴィンは、団長として心当たりが多すぎた。

「フローラは絶対に守らないと思うのだがどうかね？」

「訓練兵時代では、根っこを齧っていた野生児だぞ」

「あやつの情報は、とてもじゃないが世間に公開できんのか……」

「心当たりが……心当たりが多いな……！」

真剣な話題だったのに規則違反で外食に行くフローラの姿を4人は同時に思い浮かべた。

それも誘った調査兵や駐屯兵、もしかしたら憲兵どころか総統局の構成員と食事をしている。

そんな光景を思い浮かべてしまうほど、無駄に彼女は信用されている。

彼女が在籍している調査兵団の長は頭を抱えるしかない。

「エルヴィン、お前がしつかりとあいつを管理しておけよ」

「分かってるよナイル」

「それと『黒金竹栽培キット』のお礼も伝えてくれ」

「はっ？」

エルヴィンは、かつての同期の発言が一瞬、信じられなかった。

いきなり黒金竹栽培キットなんて話が出てくるのだから衝撃を受けるしかない。

これより衝撃的だったのは、調査兵団を諦めてマリーを守ると彼が言い出したくらいであろう。

冷静沈着で大切な物を犠牲にできるエルヴィンはキャラ崩壊しそうになった。

「実は盆栽にハマっているんだが、子供たちが手伝おうって言い出してな」

「いや、そんな事を聴いて無いんだが？」

「黒金竹ならそう簡単に壊れないとアドバイスをもらって頂いたんだが中々良い物でな」

「ナイル、こつちに戻って来てくれ…」

まさかの伴侶のマリーと子供たちの惚気話が彼の口から始まるとは思わずもない。

慌ててエルヴィンは、素敵なパパを演じている同期の右肩を掴んで揺らした。

すると、悲しそうな顔をして自分に向き合った。

「さつさと終わらせて家族に逢いたい…」

中央憲兵と腐敗した憲兵団に板挟みになっているナイル。

そんな彼を癒してくれるのは妻子だけである。

ウォール・シーナに暮らさせても良かったが、やはり平民である以上、内地は諦めた。単身赴任で内地で執務を行なっているが1週間で2日は帰るようにしている。

「…どうやら異存はないようだな。引き続き警戒を続けよう」

「お待ちください！まだ報告したい事が…」

「それは書類に書いてあるのか？」

「もちろんです」

「では、執務室に戻って確認するとしよう。以上だ」

ザックレー大統領もやる気が無くなってばつさりと会議を切り上げた。

部下が1名でも居れば厳格なドーク師団長として演じている彼。

家に帰れば、一緒になって遊んでいるパパに過ぎない。

別にそれは良いのだが、この場にその空気を持ち込まれても困る。

ばっさり和大雑把に切り上げてお開きとなった。

ベルク新聞社の記者2名が注目した会議がまさか惚気話で終わるとは予想できなかった。

「クシヨン！」

「フローラ、最近クシヤミが多くない？」

「うーん、風邪かしらね？」

「変な物喰ってるからじゃないの？」

「ミーナまでそんな事を言うの……」

フローラはやたらと自分が目を付けられているのを気にしている。

いつもの事であるが、やたらと心配されるのだ。

まるで自分が死地に行くみたいなのがして嫌である。

鎧の巨人もというライナー・ブラウンをこの手にかけるまで死ぬ気など無い。

しかし、その目標が達成したらどうなるのか分からない。

燃え尽き症候群になるのかはその時にならないと分からないが何故か号泣する自信はある。

「フローラでも風邪を引くのか」

「…エルティアナ隊長！」

「誰？」

「総統局のお偉いさんよ！ここに居る3兵団をまとめあげている指揮官よ！」

緑色の外套を羽織ってフードを深く被っており、顔に包帯を巻いている憲兵の女性。

見るからに怪しいが、5年前にシガンシナ区で巨人と交戦して顔を負傷した経緯がある。

貴族出身のように見える部下のラナイと比べると実戦経験が豊富な将校に見える。

「活発そうな女兵士は同期なのか？」

「はい、同じく104期調査兵のミーナです！」

「ああ、畏まらなくて良いよ。憲兵ほど厳しく接する気はないからね」

ミーナは、エルヴィン団長より上の存在に失礼な事を言ってしまったって硬直してしまっ
た。

それを察したエルティアナは一言掛けて肩の力を抜かせた。

第一印象は厳しそうだが部下のラナイの「お姉さま」発言を看過してる時点で優しい
女である。

「姉さま！姉さま！お姉さま！あだつ!？」

「こんな感じに度が酷いとお仕置きはするけどね」

部下であるラナイの抱き着き攻撃を受けた女隊長は無言で頭を軽く叩いた。

黒髪の女性は頭を両手で抑えて痛がっているが、過剰に見えるので気を惹こうとい
るのは分かる。

あんまりの光景に唾然とするしかないミーナだったが、1つだけ思った事がある。

その黒髪の女兵士みたいに堂々とフローラに抱き着いてみたいと！

実際やったら怒られそうでやりたくないが感化されたと言い訳したら許してくれる
かもしれない。

「ミーナ、わたくしにあれをやらないでね」
「うっ」

負の感情を聴く事ができるフローラは親友の感情を知って先手を打って釘を刺した。
牽制されてしまった以上、ほとぼりが冷めるまで諦めるしかない。

「ところでわたくしに何か御用なのでしょうか？」

「外食とかしていないか訊いてみたくてね」

「滅相も無い！ちゃんと指定された食堂で食事を愉しんでおりますわ！」

報告書を読んだり総統から話を聴かされているエルティアナ。

絶対にフローラが約束を守らないと踏んで、念を押して規則を守っているか確認しに
来た。

「本当に？」

「本当ですってば！」

「飲料水もちゃんと指定された水筒で飲んでいるよね？」

「あつ……」

返答を聴いて予想通りの結果で呆れるエルティアナ。

「だから言ったのに！」と発言したいがお偉いさんの前なので我慢しているミーナ。過剰に痛がって隊長の気を惹こうとしたが、失敗して周囲に恥を晒したラナイ。

そして、長いお説教と罰則を覚悟して青ざめたフローラ。

「今度やったら晩飯抜きを1週間やらせるから覚悟しておきなさい」

「待ってください！そんな事したら餓死してしまいますわ！」

「規則を守り上官の命令に従う。そんな事も出来ない奴に晩飯を抜くだけで妥協したのに？」

「……ありがとうございます」

次回やらかしたら晩飯抜きという事は、今回は見逃してくれた。

しかし、次が無いと警告されてしまった以上、不要に動かない事を誓うフローラだった。

「ここだけの話、終わりが近い」

「そうですか…」

「せいぜい夜更かしせずにも出撃できる態勢にしておきなさい」

「はい！分かりましたわ！」

絶対に守りそうもないフローラの返答に彼女は小言を入れようとしたが諦めた。

その代わりにエルティアナは、姿勢を曲げてミーナと呼ばれた少女に向けて顔を覗いた。

初々しい少女の顔が抜けきつていない女兵士であるが、彼女に任せれば大丈夫だろう。

「フローラが何かやらかさないか見張って欲しい。規則を破ったら報告して」

「フローラをちゃんと見張ります！」

「罰則は貴女に任せる。調査兵団の上官や食堂の連中には話を通しておくから安心して欲しい」

「大丈夫です！絶対にさせません!!」

フローラは、ミーナにとんでもない権限が付与されたのに衝撃を受けた。

【恐怖】という感情が欠如した彼女が初めてミーナに恐怖とやらの感情を感じた瞬間だった。

ミーナのドヤア顔が更に絶対に見張るといふ感じがして憂鬱になった。

「私にも何か罰則を！」

「さつき与えたばかりじゃない」

「なんか物足りないです！」

立ち直ったラナイは、何故か上官による更なる罰則を求めた。

何がそんなに彼女を奮い立たせているのかは、フローラも上司も分からない。

でもミーナは何となくわかる気がした。

「じゃあ、別居で！ついでに転勤依頼も出しておくから」

「嫌ああああ！隊長！それだけは！」

同室なのか「別居」の一言で取り乱す彼女。

フローラは他人事のように『総統局つて一癖どころか色々癖がある人物が多いわね』
と思った。

そう思ったら『君が一番、可笑しいからね』というベルトルトのツツコミが聴こえた
気がした。

何故か彼は、自分だけにはつきり意見を言うので発言しそうな言葉である。

それが気に食わずに彼女は頭を振って歪んだ思考を吹き飛ばした。

「せいぜい一日持つことを祈る」

「いくら期待していかないからってそれはあんまりですわ！」

「普段の行動と態度でそう考えただけだ。周囲の態度を気にする前にまず自分を直せ」
「…仰る通りです」

こうしてエルティアナ隊長は、部下を引き摺るように去っていった。

それを遠くに見送った後、フローラは落ち込みながら兵舎に帰還しようとした。

「ねえ、さっきの隊長さんの声がアニにそっくりじゃなかった？」

「確かに性格といい、発音といいアニにそっくりだったわね」

アニ・レオンハートは、フローラとミーナにとって親友である。

だからこそ裏切られたと知ってショックを受けたがまだ諦めきれなかった。

フローラは、あの毛むくじやらの巨人のせいでアニが狂ったと思っっている。

なので、今度こそあの巨人の継承者を惨殺に見えるほど徹底的に殺す予定である。

こうしてジーク・イエーガーはこの世に誕生して後悔する痛みを知る事となる。

「他にもそつくりな声が居るんだけどね」

「えっ？他に居た？」

ミーナは未だに親友が気付いていない事を知った。

いつも秘密にされて地団太を踏んでいる身としてはチャンスである。

「教えてあげない！」

「じゃあ良いわ」

「待って！知りたくないの!?!」

「別にそんな事知っても何も変化しないし…」

ミーナの秘密大作戦は、親友が秘密を知ろうとしないせいで破綻した。それでも頭を下げるまで意地でも教えなかつもりだ！
何故なら…ミーナにとって大切な人の声なのだから…。

「…つてどこに行くつもりなの？」

「駐屯兵団第二師団の部隊長の所よ！」

「食べちゃ駄目って言われたじゃない！」

「逢つて軽く話をするだけよ」

さつそく命令違反をしようとする親友を追いかけたミーナ。

駐屯兵団第二師団は、フローラも接点がほとんど無く初めて逢う勢力だった。

しかしその隊長は、調査兵団の第三分隊長の兄と分かったので気楽に会話するつもりだ。

振り落せない親友を連れてユトピア区に哨戒任務の報告をしに来た彼に逢いに行つた。

これが後に調査兵団に打撃を与えるとは知らずに…。

9 1 話 終わりの始まり

「この厳戒態勢はいつまで続くんだ…」

104期調査兵のコニー・スプリンガーはユトピア区の中央通りを警備している。

何とも暇な任務であり欠伸が出そうでしょうがない。

巨人の大群が北上してきたと報告を受けて厳戒態勢を敷かれているので必死に我慢していた。

それでも民間人はこのユトピア区には居ないのだから少しだけ休んでも良いじゃないか。

悪魔が「少しサボってもバレないだろう」と耳元で囁いて甘い誘惑に乗りそうになっていた。

「駄目ですよコニー！ちゃんと警備しなきゃ！」

「だってよ！医師や看護婦、武器や装備を作る職人以外は全員軍人なんだぞ…」

「確かに最後まで残っていた兵士ご用達の酒場も閉まりましたけど…」

「だからさ……ちよつとだけ筋トレしてもバレないだろう」

サシャ・ブラウスは、コニーを咎めようとしたが自分もお腹が空いて仕方が無かった。食べ物匂いがするとお腹が空くが定められた時間帯でしか食えないと分かると更にお腹が空く。

「病院の門の後方だ、こっそり隠れて筋トレやつてもバレないだろう」

「もう知りませんよ！連帯責任で飯抜きにされるのは嫌ですからね！」

「フローラみたいに根っこを齧っていればいいんじゃない？」

「巻き込む前提ですか!？」

サシャとコニー、馬鹿と呼ばれた兵士が高学歴の医師が居る病院を守るといふ不可思議な光景。

もし、ジャンが見たら思わず吹き出してしまうほど間抜けな感じがした。

そんな事に気付くことも無く2人は何事も無く時間が過ぎてくれるのを祈っている。

「おいお前たち！」

「はい！なんでしようか!!」

いきなり兵士に呼びかけられてサシヤは元気に返答をした。

コニーはサボろうとしていた時に不意打ちを喰らったので無言でサシヤの後ろに隠れた。

「壁外で哨戒していた調査兵団の部隊が巨人の大群を発見した！速やかに迎撃の準備をせよ！」

「ハッ！」

ついに決戦の日が来てしまった。

夜間に巨人は動かないという事で日が出てるうちに侵攻してくると思っていた。

実際は夜間でも動ける巨人が居たが、やはり常識に縛られがちである。

そして現在、できれば永遠に到来して欲しくなかった運命の日。

地獄はすぐそこにあった。

「よ、よかったですね……これで暇じゃなくなり……ま、ますよ」

「ああ、やっぱり、平和が一番だった……ぜ」

コニーもサシャも緊張しながら事前にやった訓練通りにユトピア区正門に向かった。その門から先は巨人の領域、3秒の判断ミスで命取りになる過酷な環境。彼らは壁外で巨人を迎撃する事となっている。

「エルヴィン、どうした？クソでも我慢しているような面だな……」

「少し気になっていいる事があってな……。リヴァイは今回の襲撃をどう思う？」

「やけにおせえと思った。トロスト区で観測されてから4日経ったせいかな」

ユトピア区正門の壁上で待機しているリヴァイはエルヴィン団長の異変に気付いた。いつもの彼らしいと言ったら何だが、何か疑っている感じがした。

「おかげでこのユトピア区に1万名を超える兵力が展開できている」

「それだ。何故ここまで戦力が集中するように仕向けたのだろうか」

「そりゃあ、こっそりトロスト区を奇襲するとかじゃないのか？」

リヴァイが恐れているのが戦力が手薄になっていくトロスト区への奇襲攻撃である。駐屯兵团第一師団精鋭部隊がこのユトピア区で展開している以上、襲撃されたら敗北必須だ。

「いや、私はそうではないと思っている」

「ほう？じゃあ何があるんだ」

「壁内に巨人が出現すると予測を立てた」

「馬鹿な……」

エルヴィンは少しづつ以前、壁内に出現した巨人の正体を掴みつつあった。

だが、明確な証拠がない上に常識的に考えると信じられないので明言していかないだけである。

壁内人類が巨人になって同胞を喰ったなどと言えば、真つ先に精神病院行きは確定している。

しかし、否定できる根拠がない上に何か違和感を抱いていた。

「この場に居る大半は壁外の旧市街地で巨人を食い止める気満々だが……」

「もちろん、正門も内扉も厳重な警戒態勢を敷いている。ただ何かあると思う」

ここまで証拠も無しに疑うのは、長年彼と接してきたリヴァイですら初めての出来事だった。

だがやる事は決まっているし、今更変える事はできない。

ただ、彼の忠告を耳に入れていざとなったら壁内に戻れるように気を配るだけだ。

「エルヴィン、見ろよ。あそこに居る奴らがこの旧市街地……いや最終防衛戦を死守するそうだ」

「5年前では信じられない出来事だな」

ユトピア区正門の上から見下ろすと広大な世界が映っている。

以前は人類の領域だったのに1回のミスでユトピア区まで人類の活動領域は狭まってしまった。

そしてその領域をこれ以上縮小しないように3兵団が共同で戦線を敷いている。

なんとも泣ける話ではあるが、それはこの決戦で勝利しなければ意味は無い。勝者だけが歴史を記す事ができて敗者は消えていく事しかできないのだから。

「へ、兵長！ 巨人の先鋒を確認できました！」

「そうか、何体押し寄せて来た？」

「16体です！ ま、間違いありません」

「ああ、分かった」

訓練兵団を卒業していない105期の訓練兵すらも動員している。

なんともあんまりな扱いだが、見張りと装備のメンテナンスくらいはできる。

兵士を志願した以上、動員されるのは仕方が無かった。

リヴァイも単眼鏡で覗くとおそろく巨人と交戦するまでに30分は無いだろうと分かった。

「オイお前！」

「な、なんでしようか!?!」

「死ぬなよ！ 必ず生き残れ！」

「はい!!」

若い奴らが実力不足で無様に死んでいくほど嫌な物は無い。

少なくともリヴァイは新兵どころか修了していない訓練兵を最前線に投入する気など毛頭ない。

次世代を担う若者が一人でも生き残れるように彼は心の中で安全を祈っていた。

それを察したエルヴィンは、今できる事を必死に考えて最悪の事態に備えて策を練っている。

「あれ？ 装備を変えたの？」

「ええ、鎧の巨人に通用する刃の為に特注で用意したの」

一昨日に装備を更新したフローラ・エリクシアはミーナの質問に返答をした。

彼女が装備しているのは、特注装備となってしまった専用の鞆と立体機動装置である。

名は、強化韃・2型改フローラモデル、強化装置・2型改フローラモデルである。

「ヤークトシリーズだったからお揃いだったのに…」

「ごめんなさいミーナ…」

ミーナが身に着けているブリッツシリーズは、量産されているシュツルムシリーズの新型装備。

それは以前、予備であったブリッツシリーズをミーナがもらい受けた物である。

小柄で非力な彼女に軽量化して飛び回れるこの装備は合っていた。

フローラも最新モデルであるヤークトシリーズを受け取ったが、今回は身に付けなかった。

「やっぱりその専用の刃の為なの？」

「そうよ。この2本の刃は鎧の巨人の装甲すら貫く刃。もう1式は燃える刃、他は強化刀身ね！」

カラネス区で暴れていた6m級の巨人の爪を混ぜて作った『三式刀身改二』2本。

ヒートソードジュニアの上位互換であるフレイムソードジュニアの2本。そして残りは、調査兵団の精鋭が愛用している強化刀身・2型の6本。

「第57回壁外調査みたいにライリーに持たせれば良かったんじゃないの?」

「あつちは予備の鞘とポンベを持たしているわ」

更にこの壁外に待機しているライリーにはガスポンベ6本と刀身6本を持たせてある。

その関係で、短剣型の装備であるヤークトシリーズは技術4班に返却する事にした。

機密情報の塊である以上、管理できないなら彼らの元に返すしか道が無かった。

そしてこの装備は後に別の人物が使用する事となる。

「本当は『手投げ式』の閃光弾とか入手したかったんだけどね…」

「え?何か言った?」

「何でもないわ」

フローラはその時、手投げ式の閃光弾と音響弾を入手しようとしたが、あいにく品切

れだった。

誰が買ったのかと尋ねると意外にもキッツ隊長が購入しており、憲兵にも売れていた。

東防衛線で使用した手投げ式シリーズが精鋭部隊の隊長に高く評価されたのは嬉しい。

ただ、立体機動しながら投擲できる閃光弾が無いのはきついものがある。

「作戦はなんだったつけ？」

「先遣部隊は、最終防衛戦である旧市街地の死守よ」

「でもなんで個別に招集しているの？合流に間に合わないのに……」

「気付かれない様に部隊を移動させているみたいね」

壁内にまだ巨人勢力のスパイが居るのは捨てきれない可能性である。

ましてや、このユトピア区だけで総兵力の3割以上が展開している。

4年前にウォール・マリア奪還作戦という名の口減らし以降で最大規模の作戦。

さぞかしエルティアナ隊長とピクシス司令には大きなプレッシャーが押し掛かっているだろう。

「ここで敗北したら…」

「ミーナ、わたくしたちは絶対に勝てるわ。そんな事言わないで」

ちなみにジークフリート司令は、南部にある内地のオルプト区で部隊を指揮している。

もしユトピア区が陥落したら農民や若者に持たせた竹槍で突撃するという無謀な作戦。

しかし、ここまでしないと気が済まないのが偉そうに後方で踏ん返り返っている貴族共だ。

内地に避難民が押し寄せるのを防ぐ為に最低限のイエスマン以外は全て切り捨てるつもりである。

このせいでザツクレー総統は、芸術を完成させる事を強く誓った。

「ちよつと巨人の様子を見て来るわ」

フローラは適当に壁を登ってアルミンから頂いた単眼鏡で覗いて素敵をした。

そこにはあの毛むくじやらの巨人をリーダーとする15体の巨人。

まだ他にも100体近くの巨人が居るのを特殊能力で把握している為、驚きは無かった。

ただ気になったのは、『見事に引つ掛かったな』という“声”か。

『嫌な予感がするわ』

人数が多いせいで負の感情の“声”が煩いほど聴こえている。

そのせいでユトピア区にライナーやベルトルトが侵入しているか不明だった。

長期間の積雪に耐えられるように独自に地下道が存在するせいで隠れられると発見が難しい。

それはユトピア区壁内の守備隊の仕事であるから…と彼女は気にせずに壁から降りて着地した。

巻き取る時のアンカーはしっかりと気を遣っており、以前の様に脚にぶつけずに済んだ。

「フローラ！敵の数はどうだ？まあ聞くまでもねえか…」

ジャン・キルシユタインは敵戦力を訊きたかったが、フローラの顔からかなり多数だと察した。

それを見たコニー・スプリンガーは俯いて地面と向き合った。

「私たち、本当に最前線で戦うんですか!？」

サシャ・ブラウスは今からでも逃げ出したい。

3 m級の巨人ですらあそこまで苦戦した拳句、自身で倒す事はできなかった。

1体ですら脅威なのに編成して侵攻しているのだから絶望感しかない。

「あんな数にどうやって勝つって言うんだよ……」

コニーは心が折れていた。

避難したはずの家族が未だに行方不明なものもあつたが何より巨人が怖かった。

この世界で怖い物は、死よりも巨人と揶揄されるほど恐ろしい物である。

トロスト区防衛戦の時によく漏らさなかったと自慢できると今なら思う。

「いた!?……何だよ。やる気満々かよ」

フローラは俯いていたコニーの坊主頭を軽く叩いて喝を入れた。

既に鞘から強化刀身を抜いており自信満々で巨人を狩るつもりだった。

それを見て彼は、いつも通りの彼女に安心して何とか立ち直れた。

「やるしかないよ!ここを突破されたら人類は…」

「アルミンの言う通り!絶対にここで殲滅する!」

アルミンとミカサは既に覚悟を決めていた。

なんとというか他の同期と比べて様々な困難にぶつかってきた影響もある。

ただ言えるのは、みんなが協力すれば勝てるという根拠のない自信で成り立っている。

「フローラ!あいつらを全部ぶつ倒してユミルを奪還しよう!」

「ヒストリアが一番やる気だな…」

ヒストリアにとつてはここがユミルを奪還できる最後のチャンスだと思つている。自分から離れていつた事を身をもつて後悔させる為にも巨人なんて怖くなかつた。ジャンは。やたらと好戦的になつたクリスタを見て、どう対応するか迷つている。男らしく戦いたいが。フローラとかいう完全上位互換に任せただ方が良いからだ。彼は全てが終わつたら妻を娶つて内地で優雅に暮らす夢はまだ諦めていない。

「フローラ…」

何故かミーナは自分がこの場に居ていけない人間だと悟つている。

未だに自分が死人で悪夢の中を彷徨つているイメージが消えていない。

こうして息をして生きているのに何か怖かつた。

「注もおおおおおく!!」

ピクシス司令の怒声のより、3つの兵団の兵士全員が彼の方を見た。

ザックレー総統代行のエルティアナ隊長は、「なにやってんだこのハゲ!」の感情であ

る。

最高司令官が前線に出ないように奮闘したのにハゲが独断で前線に出ているのだからたまらない。

ピクシス司令からすれば決死の覚悟を兵士に見せたかった様だが彼女視線では余計な真似だった。

「これより我々は、巨人との決戦に臨む！」

ピクシス司令が演説するのはトロスト区奪還作戦以来の2か月半振りである。

しかし前回とは大きく違う点がある。

「ウォール・ローゼの陥落は！すなわち、人類の滅亡を意味する！ならば我々がやる事は1つ！」

今回はトロスト区の内扉がある壁の上で演説をしていたが、今回は地上に降りて演説をしている。

すぐそこに巨人の群れが迫っているにも関わらず兵士に向き合っていた。

その為、巨人の群れに背を向けて彼は演説をしていた。

「最後の一瞬まで抗い！人類の……愛する未来を守る事である!!」

この決戦が壁内人類の運命の分水嶺である事は誰が見ても明白だった。

兵力1万という前代未聞の動員、巨人側も100体を越える大群！

総力戦であることは誰も否定できやしない！

この日、人類は思い出した。

今からやるのは戦闘ではなく絶滅戦争だと！

「「「ハッ!!」」」

その場にいた全員が心臓を捧げた！

この場にいる全員の意志は1つとなり、巨人へと挑んでいく！

個人が赤の他人と意志を1つにして群れとなり巨人に群がる蟻となる！

圧倒的な地上の覇者に群がり幾千万の犠牲を払って壁内人類は存続してきた！

死者の意志を継ぎ！例えば誰かが倒れても最後まで戦いを挑んでいく！

心臓を捧げた数だけ生者に課せられた夢と責任は膨れ上がる！
滅びを待つくらいなら滅びの元凶に挑んでいくマインドコントロールがあった。

『茶番ね』

フローラは同時にピクシス司令を聴いてそう思った。
マインドコントロールが得意の彼女だからこそ兵士を特攻させると感じた。

「エルヴィン！」

「ああ、ついに決戦が始まったな！」

壁外にある旧市街地を最終防衛戦として死守する先鋒部隊。

ユトピア区正門を死守する砲兵と先遣班で構成された前衛部。

ユトピア区壁内の兵団本部で巨人を待ち構える中衛部。

医師やわずかに残った技師や職人、退役軍人を加えた前線を支援をする後衛部。

そしてウォール・ローゼの内扉を死守する最後の砦である。

総兵力は1万、壁内人類が所有する兵力の3割が動員された過去最大規模の防衛戦と

なる！

さすがにリヴァイ兵士長ですらも、そう簡単に破られない布陣だと信じていた。

『しかし時間を掛ければ完璧に布陣されると分かったはずだ』

エルヴィンは、巨人の長と見られている獣の巨人がこんな正直に侵攻するとは思っていない。

フローラの報告だとズボンを履いただけの髭もじやの変態野郎という評価は知っている。

それは置いておいて一方的に獣の巨人を追い詰めた兵士が居るのに稚拙な戦術で攻める訳がない。

何か策があると思っている。

『何かあるな。少なくともフローラと直接戦闘しないはずだ』

そしてエルヴィン団長の不安は的中する事となった。

『いやー参っちゃうね！ここまで予想通りの布陣をされるとは』

獣の巨人もといジーク・イエーガーは壁内人類の布陣を見て嘲笑した。

抱いた感情は、やはり例外を除いて壁内人類は大した事がないという見下す感情である。

『まだあいつら、俺達が正直に交戦すると思っていやがる！』

遠くから兵士の一団が敬礼したように見えたので特攻みたいな事をさせると考えた。

壁内に引き籠ってから全く成長しておらず、愚者は歴史を繰り返そうとしていた。

どうしようもない現実には彼は思わず歯茎を剥き出しにして愚行に激怒している。

『あーやつぱり悪魔の島だ。ここまで精神が狂わせられるとは思っていなかった』

壁内に侵入した戦士のライナーやベルトルトが洗脳されかけたという言葉を一蹴し

た。

しかし、ここまで一致団結させられると数年間暮らしただけであなるのは分かる。だが、エルディア復権派とかいうお遊びグループに参加していた両親を思い出してしまおう。

『あそこに親父によって狂わされた弟が居るのか』

そしてなにより戦士2名の話から父親のグリシャ・イエーガーが生きていたのに驚いた。

自分のせいで楽園送りになったが調べるとその楽園送りは失敗していたと知った。

糞つたれの親父がマーレ兵を戦艦ごと殲滅できるとは思っていなかったがようやく理解した。

『おそらくマーレで行方不明になっている【進撃の巨人】の継承者になって生き延びたな』

グリシャは何かしらの手段で【進撃】を引き継いでマーレの追手を滅ぼしたと悟った。

そして【任期】が近づいて息子であるエレン・イエーガーに自身を喰わせたのだろう。そう推測すると、親父のせいで腹違いの弟の人生が振り回されている。そんな現実を知ってしまい、どうにか救ってあげられないかと考えてしまう。

『エレン・イエーガーか！逢えると良いんだけどねー』

できれば逢いに行つて顔を見たいが彼の脳裏に浮かぶのは【エルディアの悪魔】の女である。

彼女に一方的にボコられて、泣き叫んで全裸で逃亡した挙句、排泄物を垂れ流させられた黒歴史。

なんとしても部下のピークちゃんからの評価を返上したい。

そんな考えに支配されて複雑な思いで自身の脊髄液を加えて誕生させた巨人を率いている。

へさて、始めますか！〜

今回の目的は、戦士のアニ・レオンハートの奪還である。

なので壁内人類と全面戦争する気はない。

いくら王家が滅びを受諾しても兵士まで徹底している訳が無い。

少なくともウォール・マリアが陥落しても壁内人類を存続している時点で滅びは認めない。

哀れな悪魔の末裔ではあるが、だからといって手心を加えるほどジークは優しくな
い。

『ライナー、ベルトルト…頼んだぞ』

巨人を率いていた獣の巨人は立ち止まって両腕を真上にして深呼吸をした。

その光景は巨人がする行動ではなく壁内人類は固唾を？んで行動を見守った。

へウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!〜

獣の巨人の叫びがユトピア区に展開している壁内人類全員に届ける大声で叫んだ。

圧倒的な肺活量の上に獣であるゴリラの特性も加わって音響弾を越える音量で響き渡った。

その瞬間、壁内や壁外問わずに眩しい閃光が迸った！

ユトピア区の第一病院を警備している兵士は安心していた。

壁内とはいえ前線から離れているので、すぐさま自分たちに危害が及ぶとは思えなかった。

「ユリアン、お前…前線じゃないからって安心していいかい？」

「だってそうだろう？壁外の旧市街地に展開している部隊から見れば欲望の環境だ」

駐屯兵团第一師団の北部担当のパスカルとユリアンは最前線に出れずに済んだ。

なので通常任務と同じように病院を警護し、人類の勝利を壁内で祈るしかできなかった。

「おい…病院が光ってないか!？」

「なんだ…化学反応で光ったのか!？」

突然、病院の窓が光ったと思ったら稲妻が壁内で発生した様な爆音が鳴り響き！

気付けば彼らは瓦礫と共に宙を舞っていた。

ジークの叫び声で前もって脊髄液を飲ませた被験者が巨人化！

ストヘス区でアニが巨人化したように閃光と共に巨人化の爆風で病院を吹っ飛ばした！

「……あ……っがー！」

ユリアンは即死し、病院の建物から離れていたパスカルも巻き込まれて爆風で吹っ飛ばされた。

彼が最後に見たのは、壁内で巨人の大群が出現した状況でそれを実感する前に落下し潰れた。

そして生の足掻きの様に痙攣して動かなくなった肉塊を巨人が踏み潰した！

「エルヴィン!!」

同時刻、壁上からエルヴィンを突き落としたりリヴァイは彼を抱えて立体機動に移っていた。

毛むくじやらの巨人が咆哮した瞬間、安全を祈った105期訓練兵の身体が光った！その瞬間、リヴァイはエルヴィンを突き落として自身も落下して逃走した！すぐさま爆音と爆風が響いたが、辛うじて大切な者を掴んだ彼は壁にぶら下がった。

「ぐっ……なにがあつた!？」

「最悪の展開だ……兵士が巨人化した!」

異常事態に対して迅速に行動して戦えると自負しているリヴァイ。

そんな彼でもさきほどまで会話していた訓練兵が巨人化するなど夢にも思っていないかった。

『クソが!いつからだ!訓練兵はあの料理店など利用していなかったはずだ!』

ザックレー総統を含む兵団上層部は、意識を失った者だけを警戒していた。現実、症状に個人差があり巨人化のトリガーを持った者を見逃している。

その結果、医師35名、看護婦200名の他に兵士700名以上がその爆風で跡形も無く絶命した。

「巨人だああああああああ!!」

「エルティアナ隊長！人間が巨人になりました!!」

「壁内で巨人が出現！数は…30体以上！指示をください!!」

「なんてこと！絶対に壁内で掃討！一体たりともローゼの侵入を許すな!!」

壁内人類が巨人化するという予測はエルヴィンだけではなく兵团上層部も推測していた。

壁内の巨人騒動の後、いくつかの村が無人化しており行方不明になっていた。

そして巨人の足跡がそこを中心に広がっているのです、推測自体はしていた。

ここで最悪なのは、王政府の上層部はそれを知っていながらも黙秘を貫いていた。

そのせいで、最悪な形となって人間が巨人になる証拠を発見する羽目となった！

「人間が巨人に……あの毛むくじやらが!!」

旧市街地に展開していた兵士が巨人になったのを目撃したフローラは激怒した！

それと同時に獣の巨人の継承者に止めを刺さなかったのを後悔した！

ガソリンを含んだ火炎瓶を投げつけて満足するべきではなかった！

心臓を潰し！首を刎ねて！脳を潰してから焼くべきだった！

後悔しても過去には戻れないが未来は選択できる！！

「巨人だああああ!!逃げろおおおお!!」

「嘘だ！人間が巨人化するなんて!!」

負傷した兵士が阿鼻叫喚で叫んでいる中で冷静になった兵士が居た。

104期調査兵のコンニーである。

『に、人間が巨人化するのか…!?じゃあ！オレの家を潰して寝転んでいたあの巨人は…』

彼の故郷のラガコ村は巨人によって徹底的に破壊されていた。

何故か血痕が残されておらず、先輩方から馬で逃げたと知らされて安心していた。

ところが、家族どころか村人全員が行方知らずになっており、不満は徐々に増してい

た。

そして、本日答え合わせとなった。

自分の家で寝転んでいた巨人は、自分の母親だと気付いてしまった！

『だからあの時、ライナーは否定したのか！』

村の終わりを感じさせる夕暮れの時、巨人が自分の母だと思っていた。

そんな時、ライナーはやけにそれを否定していた。

頭は良くないが回転は速いコニーは、ユミルも馬鹿にしていたようで必死に否定していた。

良く考えれば、巨人化に否定的だったのは、巨人化能力者だけだと思いついてしまった。

「コニー！何をしているの！死にたいの!?!」

コニーに飛び掛かった元駐屯兵の巨人のうなじを削いだフローラは彼を罵倒した！

最終防衛線である旧市街地に爆風と共に巨人が6体出現した！

爆風で陣形が乱れて所に巨人に強襲されたせいで総崩れとなった。

『それだけじゃない…ユトピア区壁内に巨人が出現したみたいね…』

フローラは以前から巨人の“声”を呻き声として聴けるのに疑問があった。

負の感情を“声”として聴けるのは人間のみで動物には通用しなかった。

なのに何故か巨人の呻き声を聴けるのか仮説を立てていたが、今回で解決した。

巨人の正体は、人間であり呻き声をあげているのは苦しんでいるのだと…。

残念ながら人数が多いせいで絶望の感情で巨人の数は把握できなかった。

「フローラ！巨人が旧市街地に侵入してきた！急いで迎撃するぞ!!」

ジャンの一言でスナップブレードを構え直した彼女はコニーを一瞥した。

シヨックを受けて立ち直れていない彼を察して声をかけた。

「コニー！今やるべき事は分かってるでしょ！兵士なら守りたい物の為に最善を尽くしなさい！」

「…そうだよな！まずはこいつらを全部討伐しないとイケないよな！」
「そうよ！ここで生き残れなければ真相は不明のままよ！」

皮肉にもその時に発言したライナーと同じ言葉でコニーは立ち直る事が出来た。

母親が生存している可能性が浮上してそれを確認する為にも生き残る想いが強いのもあった。

【守りたい物】と曖昧にしたのは、コニーは母親が巨人化したと考えているのもある。だから生き残ってラガコ村で確認するまで死ぬな！…と言うしかなかった。

「来るぞ!!」

ジャンの警告を受けてフローラは双剣を全速力で駆けてくる巨人に向けて構えた。

旧市街地に出現した6体の巨人のせいで陣形が崩壊して総崩れとなってしまった。

さきほどまで同胞だった巨人を全て討伐した頃には、15体の巨人が旧市街地に侵入してきた。

「ようやく訓練の成果を果たせそうね！」

「だってよジャン?」

「全くお前らと来たら……まだ死ぬわけにはいかねえな!」

フローラとコニーは、口を開いて走ってきている巨人を討伐する気満々である。

それを見たジャンは呆れてしまったが恐怖は何故か吹き飛んでいた。

彼はマルコの遺灰によって調査兵団に加入する事を覚悟したので後悔はしていない。

だが、未だに内地で妻を娶って優雅に暮らす夢は諦めていない!

何としても生き残る気持ちがジャンという青年を精神的に成長させていた。

「お前ら行くぞ!!」

ジャンの一言によって104期調査兵たちは先陣を切った奇行種と交戦を開始した!

後に「ユトピア区最終決戦」と呼ばれる戦争は、火蓋を切ったばかりだ。

この戦争は壁内勢力を大きく変化させる事となる。

そして勝つても負けても地獄への道しかないと知らずに彼らは必死に生き残ろうとした…。

92話 ユトピア区旧市街地防衛戦

誰もが油断していなかった。

だが、現実はいつも非情で残酷である。

共に理想や野心を語り合った同志が突如、巨人になるとは思うわけがない。

それでも戦わなければ生き残れない。

「巨人が防衛線に触敵！またユトピア区の壁内にも巨人が出現しました！」

「ユトピア区壁内の内扉を緊急閉鎖！速やかに壁内に出現した巨人を駆逐しなさい！！」

ザックレー総統より3つの兵团を統括し指揮をする権限を移譲されたエルティアナ総隊長。

そんな彼女は間違っても人間が巨人になったなどと口が裂けても言えるわけなかった。

こんな情報が壁内人類全体に広まれば、猜疑心の延長で内戦が発生しかねない。

緘口令を敷くのは当然として、今やるべきなのは明確な戦略を部下に伝えるだけだ。

「ファルケンハイン班長！」

「ハッ！」

「オルプト区に待機しているジークフリート司令に拡大動員を発令したと伝達せよ！」
「えっ…もう動員されるのですか!?!」

5年前までシガンシナ区の憲兵であり4年前のウォール・マリア奪還作戦に参加した彼女。

真つ先に巨人と交戦する羽目になった数少ない憲兵の1人であり、どこか悲観的な思考である。

鎧や超大型の能力者が兵士に紛れており、内扉が破られるのは時間の問題と分かっていた。

故に最後の手段である特攻隊の動員を決意し、内扉の外に展開させるつもりだ。

「ですが、彼らは戦力外です！4年前の奪還作戦でご存じのはずでは!?!」

「時間稼ぎにはなる！鶴翼の陣で内扉の外周を守れとでも伝えておきなさい！」

「了解しました!!」

4年前に行なわれた奪還作戦という名の口減らしでは、民間人など役に立たなかった。

せいぜい威勢が良いマリアの住民を囮にして巨人を数体討伐して終わったくらいか。少なくともエルティアナは1個大隊規模の竹槍を装備した民間人を率いて9割以上死なせた。

そのような悪夢の光景を今度は自身の命令で再び繰り返そうとするのに笑うしかなかった。

「報告申し上げます！ピクシス司令が旧市街地に留まっております！」

「壁内の巨人を殲滅後、迅速に司令を保護し安全地帯に後退させよ！これは最優先命令とする！」

「ハッ！」

更に不運な事にピクシス司令がよりによって最前線に居るのが彼女を悩ませた。

トロスト奪還作戦と違って士気高揚の為にそこに行ったのは良いが撤退できなくなった。

よって彼女は、ユトピア区壁内の巨人を掃討し、司令を安全地帯に撤退するのを目標に定めた。

ここで司令を死なせれば、上司であるザックレー総統の【夢の実現】に大きな打撃になるからだ。

『所詮、調査兵団や訓練兵団など捨て駒。せいぜい利用させてもらう』

105期訓練兵団を動員したのは、彼女の独断であり戦力とカウントしていない。

104期訓練兵団を卒業した者たちを壁上固定砲の整備をさせたような予備戦力ですらなかつた。

ただの観測手、もしくはは巨人の興味を惹く餌でしかない。

それでも人類の滅亡を阻止できるなら自身の命すら捧げる覚悟があった。

『必ず内扉を破壊しにくる。あの忌々しい鎧の巨人か超大型巨人によって!!』

工兵部隊が慌ただしく動きだしたのを確認したエルティアナは密かに握り拳を震わせた。

あの日、扉に突っ込んできた巨人を過小評価したせいで大勢を死なせたという過去。シガンシナ区の内扉の守備隊の責任者だった彼女にとって、リベンジを果たせる絶好の機会だ。

「今、この時、この一戦に人類の存続が懸かっている！今一度…心臓を捧げよ!!」

調査兵団の団長であるエルヴィンは、負傷した身でありながら最前線に立った。

人間が巨人化したのに錯乱した状況を打開する為でもあったが1つ意図があった。

『これでピクシス司令が退いてくれると良いのだが…』

エルティアナと同じようにエルヴィンもピクシス司令の扱いに困っていた。

ザックレー総統ですら『偉いんだから後方で踏ん返り返っているべき』と認めた人が戦場に居る。

前者は最悪失敗しても責任とって死ぬ覚悟はあるが、後者は死ぬつもりなど毛頭な

い。

彼は「世界の真実」を明らかにしたいという夢がある以上、死ぬるわけがなかった。しかし、できるのは、ピクシス司令から指揮を移譲されたように見せかけるしかない。

「ピクシス司令！お下がってください！」

「アンカ、わしはここを死地と決めておる！」

「では、飲酒禁止令を発令します」

「な、何で……」

「死ぬんですからお酒など必要ありませんよね？スキットルも没収致します！」

ピクシス司令は「生来の奇人」と称されるが意外と常人の思考である。

むしろ周りがおかしいのだが、今回は彼にとって自分が正常でいられる最後のチャンスであった。

ボケ老人として生き延びるくらいなら人間として死ぬ事を密かに願っていた。

なのに副官のアンカは、彼を叱りつけて真っ先にスキットルを没収して後退した。

最後は酒と共にあると信念を掲げている彼は、可愛い参謀の後を追いかけて行った。

それを見たエルヴィンは、少し安心したように笑みを溢した。

「これで少し楽になる…」

「団長!!」

「どうした?」

突然、部下から呼び止められた彼は思わず馬から降りた。

壁外である以上、馬から降りる事は自殺行為だが何故かそうしなくなった。

自身でもさきほどの光景に動揺しているのを身をもって実感した彼は部下からの報告を待った。

「毛むくじやらの巨人が妙な動きをしています!!」

「ああ、獣の巨人か…」

長く調査兵団に所属している彼でもあそこまで毛だらけの巨人を見たことは無かった。

だが、正体は知っている。

いろんな意味でぶっ飛んだフローラがその巨人化能力者を殺し損なったと報告を受

けている。

弱点は火炎瓶という事だが、実際にそこまで接近するにはきつい相手だと感じていた。

『心臓を潰し！首を刎ねて！脳を破壊するべきです！揮発油で全身を焼くだけでは復活します！』

頭蓋骨を割って脳をブレードで弄る【初歩的】な拷問で情報を吐かせようとしていたフローラ。

ミケ分隊長の悲鳴を聴いて慌ててガソリンで焼いて満足して去つたのを後悔しているそうだ。

既にツツコミどころ満載だが、全身大火傷でも復活する底知れない生命力があるのは確かだ。

『何を企んでいる!?!』

フローラの発言には驚かされる事が多いが、奴が巨人襲撃の元凶だというのは理解で

きる。

なので、その巨人が更に壁内人類に対して攻撃してくるのは予測していた。

壁内で巨人が湧いたのは想定内だったが、それだけで終わるわけが無いと彼は感じている。

何故なら巨人の統率が取れておらず、明らかに挟撃するような戦略ではない。

兵力が分断されたのは、別の意味があると考えている。

「最終防衛戦を死守するのだ！これ以上の侵入を許せば人類の滅亡は避けられん！」

駐屯兵団第一師団精鋭部隊のキッツ隊長は、発言と違って敗北を感じていた。

彼からすれば壁内に巨人が湧いた時点で敗北だったからだ。

それでもトロスト区と違って壁内の巨人を殲滅できる事に賭けて目の前に巨人を相手にした。

「イアン班長！巨人が突っ込んできますす！」

「ならば利用してやるまでだ！」

イアン・デイトリツヒはトロスト区防衛戦の経験を得て実力不足を実感し、精進してきた。

東防衛線では、なんとか障害物があるなら巨人を狩れるようになった。

それでも平原で巨人を狩れる調査兵団のベテラン兵には勝てなかった。

よって彼は部下達と連携すると事で巨人の動きをコントロールする戦術を見出した。

「ホークマン！このまま進むぞ!!」

「了解！このまま惹き付けます！」

旧市街地に侵入した巨人の目の前を横切つて興味を惹かせた先遣班は、路地裏に侵入していた。

2名の兵士を追つて街を破壊しながら侵入する巨人の群れ。

そんな人類の領域に土足で入り込んだ化け物共を熱く出迎えたのは榴弾の雨であった。

「撃て撃て！出し惜しみするな！ここで仕留めろ!!」

身動きが取りにくい路地に誘い込んで一点集中の砲火が放たれた。

当たれば巨人の打撃を与えられる砲撃は兵士にとってありがたい存在である。

砲撃を受けて転倒した巨人の群れをミタビ班とリコ班が飛び掛かりうなじを削いでいった。

「よし！巨人3体を討伐してやったぞ！」

短時間で犠牲者無しで巨人を3体狩れたのを全員が歓喜したがそんな彼らを驚かせた光景がある。

「巨人共め！単にでけえだけだな！」

「よし！やってやったぜ！」

スリーマンセルで次々に巨人を葬っていくコニーとジャン。

彼らの身体能力自体は、フローラを凌駕しておりその気になれば強かった。

足が竦んでしまう恐怖はあったがフローラという手厚いサポートでそれぞれ巨人を

3体討伐した！

そんな彼らを見て精鋭部隊が負けじと巨人を狩り始めたのは言うまでもないだろう。

「後2体討伐すればオレたちはエースだぜ！」

「おいコニー！張り切り過ぎて死ぬんじゃないぞ！」

精鋭班が見たのは、新兵たちが巨人に臆せずに次々と葬ってお互いを称え合う光景だった。

フローラとかいう例外がいるが、104期の上位成績10名は評価通りに立体機動に優れている。

リミッターを外せば、生半可な駐屯兵より動くことができる。

再び自分が身体能力の差で負け始めたとフローラは実感し始めたが悲しむ事は無かった。

『やけに稚拙な作戦なこと…何かあるわね！』

フローラは獣の巨人の戦術が稚拙過ぎて何かあると思った。

真の巨人の恐ろしさは、その数である。

調査兵团でも実戦経験が豊富なナナバもゲルガーも巨人の数に押し切られて喰われてしまった。

それほど恐ろしいものなのに各個撃破されるように巨人を展開しているのに違和感があつた。

「いけるぞ！このまま押し切る！」

「行こうぜフローラ！オレたちはまだまだやれるぞ！」

「待って！一度後退するわ！何か可笑しい!!」

巨人を複数討伐した実績と感触で興奮状態であつた彼らを呼び止めた。

ジャンもコニーも不満であつたが、仕方なく実戦経験豊富な彼女の指示に従つた。

巨人の気を惹いたり手足を両断する彼女が居ないと討伐できないのは分かつていたからだ。

それが彼らの命運を分けた。

「リコ班長！フローラが後退しました！」

「あの子が後退？何かあるな！精鋭班も後退しろ!!」

リコ・ブレッツェンスカもフローラの行動に違和感を覚えて部下たちを前線から後退させた。

「やれる！俺たちでもやれるぞ！」

「行くわよ！」

当初は奇襲によって総崩れになった旧市街地の守備隊は態勢を整えた。

市街地に侵入してきた巨人が掃討されたのもあり、既に反撃を開始している部隊も居た。

そんな彼らは高速で飛んできた物体によって粉碎された！

それどころか爆音のような音と衝撃が辺りを襲った！

「な、何事だ!?!何があつた!?!報告しろ！」

建物が崩れて衝撃と共に激臭と砂埃が鼻に入るのを感じる暇すらなかった。

旧市街地で防衛線の指揮をするキッツは伏せて頭を両手で抱えながら部下の報告を

待った。

しかし、いくら待っても傍に居たはずの部下の返答がなく恐る恐る彼の居た場所を見た。

「…おのれ！投石か!!」

大きな岩が住宅跡に減り込んでおり、崩壊した住宅の瓦礫で部下が潰されていた。上半身が瓦礫の下敷きになって痙攣すらしておらず生存は絶望的であった。

「人類を舐めるな！この巨人め!!」

すぐさま精鋭班の元に急いだキッツは反攻作戦をするつもりだ。

精鋭部隊を指揮する身として一般兵では生還できない激戦区に投入されるのは想定済みだった。

獣の巨人は投石によって旧市街地にいる敵勢力の排除に掛かった。

時代遅れの戦力ではあるが接近させたら碌な事が無いのは経験済みである。

よって、先行させた巨人に釣られてきた敵兵力の主力を早期に潰すつもりだった！

『これでアニちゃんが救出できればいいのだがな』

そもそも今回の襲撃は、女型の巨人の継承者であるアニ・レオンハートの奪還が目的である。

事前に情報収集してきたライナーとベルトルトはこの街に彼女が居ると確信していた。

何の根拠でそこまで自信満々に言えるのかジークは疑問であったがそれは別にいいだろう。

『ほら！もう一発！』

【車力の巨人】に岩を運ばせて、それを獣の巨人が手に取って投石をする！

かつてはコミュニケーションの一環としてキャッチボールする為に磨いたフォーム

!

それを遠距離から物体を激突させて人命を奪う事に繋がっている。

マーレ軍上層部は歓喜したが、ジークにとっては複雑な気持ちである。

『アニちゃんを奪還したらみんなでキャッチボールでもするか』

巨人になればあらゆる物が小さく見える。

人も建物も植物も価値感すらも小さく見える。

人が虫けらの様に微かに足掻いて死んでいくのを見続ける。

それが大つ嫌いだった！

『人をゴミのように思ったらその時点で終わりだからな』

グリシャ・イエーガーによつて散々振り回されてきた人生だった。

大義に酔つて自分を見失い、人を物と扱つて他人を巻き込んで破滅した糞野郎。

そんな親父と同類にはなりたくなかった。

『だから早くしてくれよ！俺は人間のままで居たいからな！』

壁上有る砲門の列に向かつて投擲した岩が命中し、あらゆる物がゴミとなって地面に降り注ぐ。

1 発、2 発、3 発……10 回は投げただろうか。

巨人に侵入されて放棄されたと思われる市街地が無残な跡地になってしまった。

〈第二波！行け！！〉

次は獣の巨人を護衛する様に展開していた巨人共を市街地跡に突撃させた。

砲撃だけでは敵戦力は殲滅できないのと同じように彼は投石の威力を評価していた。

やはりどの時代でも決着を付けるのは敵陣地を占領する歩兵であった。

〈うんこ漏らし！いくら何でも警戒し過ぎでは？〉

〈ピークちゃん！奴らは空を飛ぶんだ！まだ安心できない！〉

〈何言ってるんですか！頭うんうん未満だとは思いませんでしたよ〉

〈酷い！！〉

車力の巨人の継承者であるピーク・フィンガーはジークを嫌っている。

誰得のおっさんの全裸で抱き着かれた挙句、全身を小便と大便で全身が穢された。

これは思春期の乙女心を深く傷つける共にトラウマとなったのをジークは負い目に感じている。

彼女は自分が戦士長だからしぶしぶ従っているという現状を知っているからこそ！

ジークも無理やり従わせるわけにもいかず、このやりとりが続いている。

へでも良いんですか？何の成果も無く帰還するなど「上」は黙っていませんよ？」

「世界を滅ぼせる巨人化能力者が4名も居て2名しか帰還できなかったんだ。もう無理だ」

外の世界では、既に超大型巨人や鎧の巨人など4名の巨人が不在だとバレてしまった。

いつの間にか本国は、工業化に乗り遅れて敵対国に後れを取った。

属国から青写真や資源を提供させているが旧式の装備を揃えるので精一杯だった。

仮想敵国は対巨人砲や航空戦力の発展させており、巨人の時代は終わりつつあった。

「今、俺たちができるのは、女型の巨人だけでも奪還して一度本国に帰還するしかないさ」

送り出した巨人が残存する敵兵力を駆逐し、壁内に侵入するなどどうでも良い。

阿鼻叫喚の悲鳴など風と巨人の呻き声で消えている。

そんな惨劇より情報と戦士を本国に持ち帰るべきだ。

「ピークちゃん。もしかしたら俺達は近いうちに脊髄液を提供するだけの存在になるかもな」

「【異形の巨人】の量産計画のせいですか？」

「ああ、そうだ。先日に行った壁内における特殊作戦の成果で更に加速するだろう」

異形の巨人自体はエルディア帝国の時代から造られていた。

無垢の巨人と比べて遥かに強い上に複数の脊髄液による強化ができるのが魅力であった。

だが、それ以上に凶暴過ぎて【座標】の力をもってしても完全にはコントロールでき

なかった。

ところがジークの脊髄液の特殊性に気付いた軍の上層部は活用できないか検討を始めた。

「ジークの脊髄液を注入した異形の巨人を座標で操作すれば再びマーレは頂点に！」

マーレ軍の高官が放った一言は、権力闘争しかしていない政治家を巻き込んだ。

能天気な彼らでも取り巻く世界情勢は無視できなかつた。

かつては、残虐の限りを尽くしたエルディア帝国を崩壊させたマーレは世界の尊敬を集めた。

だが、巨人の力をもって各国を虐げた結果、かつてのエルディア帝国以上に嫌われた。打倒マーレを掲げた中東諸国が連合を組んだ以上、残された時間は少ない。

〈ピークちゃん！岩をありつたけ掻き集めて来てくれ〉

〈巨人使いが荒いですね！〉

〈これもアニちゃんを救う為だ！〉

〈…良いですよ。でも持つてくる前にうんこを漏らさないてくださいよ！〉

車力の巨人は偉そうに命令してくる獣の巨人にうんざりしていた。

それでも同期のアニを救えるなら仕方がないと我慢している。

彼女が居ない分、糞つたれのジークと自分で世界情勢を何とか保っていた。

『5年間、長いようで短かった』

落ちこぼれでドベだったが、作文による忠誠心によって鎧の巨人を継承したライナー。

射撃は歴代最高記録で成績も良いが付和雷同でアニのストーカー、ベルトルト。

他者との関わりを極限まで避けて誰にも笑顔を見せなかったファザコンのアニ。

兄貴分に見えて他者をサポートする事で自身のメンタルの弱さを隠していたマルセル。

『どいつもこいつもパラディ島の潜入作戦に向いていなかった』

ピークは同じ戦士候補生とはあまり深く関わらないようにしていた。

巨人の継承を奪い合うライバルでもあったが、それ以上に怖かったのだ。自分も含めて家族を救う為に戦士に志願したが、それと引き換えに短命になる。人として最低限の生活の保障をされるが短命で散るか、人間と扱われず治療も受けずに死ぬか。

どちらが良かったのか。

未だに彼女の中で答えは出なかった。

それを同期にバレるのを恐れていた。

『でもアニとは親近感があるんだよね。早く助けてあげないと…』

最高戦力の4名が5年間、悪魔の島に潜入して音沙汰がない。

それはマーレはおろか、自分にとっても耐えがたい事であった。

彼らの家族がいつも自分に進展を訊いてくるのだから。

特にアニの父親と話す時ほど辛い物は無い。

自分も父親を救う為に戦士に志願したのだから。

『でも…』までやる必要があるの…』

エルディアの悪魔やライナーの件で立体機動装置が脅威なのは分かった。なので極限まで近づかずに投石で戦略爆撃で防衛線を崩壊させた。

それでも何故か戦士長はやたらと敵戦力を警戒していた。

ピークからすれば、うんこ漏らしの糞野郎の話をにわかには信じがたかった。

マールレの誇る獣の巨人がたった一人の女に瞬殺されて、拷問された挙句、死にかけるなんて…。

『でもしょうがないか』

戦士長の命令だからしぶしぶ従っている。ピークの士気は低かった。

だからなのか、作戦中にも関わらず余計な考え事をしながら投石用の岩を集めていた。

そのせいでジークのピンチに気付くのが遅れてしまった。

『ピークちゃん遅いな…』

獣の巨人もといジーク・イエーガーは、いつきにケリを付けたかった。

50 mの壁を破壊するのは不可能なのは分かっていた。

むしろ破壊すれば碌な事が起きないのは分かっていたので、退路を作るつもりだった。

念入りに瓦礫の山と化した市街地に巨人をけしかけて敵を掃討していた。

だから彼は一切、油断していなかった。

『あの女もあそこにいるんだらうな…』

3体の無垢の巨人をけしかけたら瞬殺された時の衝撃は忘れられなかった。

それどころか、あの女に一方的に殺されかけたのに壁内人類では最強では無かった。

その事実をライナーの話で知って投石で一方的に蹂躪する戦術に切り替えていた。

敵を過小評価して無様な失態を晒した彼に隙など作るつもりはなかった。

へ…にしても学習能力が無いなこいつら！

騎兵が信煙弾を撃ちあげながら突っ込んでくる光景。

まるで追い詰められた政府が民間人に竹槍をもたせて突っ込ませる光景を思い出した。

お国の為に戦って死ぬと言わんばかりに無謀にも突っ込んでくる特攻兵！それは他者の犠牲を強いるのが大っ嫌いなジークの逆鱗に触れた。

〈ふざけんなよ！〉

民家の瓦礫を手にとって握り潰し、いつものように投石する。すると一瞬で、瓦礫が散弾のように飛んでいき目標を粉碎した。それでも学習能力が無いかのように同じ行動を繰り返してきた。

〈そんな豆鉄砲で俺を殺せると思ってるのか！？〉

ジークの視界に映った騎兵の1人は銃を装備していた。さすがに1万名の兵力だと、巨人を狩る刃やガスを全て揃えられなかった。

駐屯兵団の一部は、対人用の装備をしておりライフル銃しか持たされていない兵も居た。

「ジークからすれば豆鉄砲で巨人を相手にするなんて滑稽を通り越して怒りしかなかった。」

「ぐぎゃあああああ!!」

デコピンで突っ込んできた騎兵を吹っ飛ばした獣の巨人。

それだけでは済ませず駐屯兵の両足を踏みつけて擦るように何度も潰した。地面に激突して動けない哀れな駐屯兵はただそれを受け入れるしかない。

「がああああ!! ああああああつ!!」

「オラア!! どうした!! 威勢が良いのは最初だけか!!」

たまたま地面に居た蟻を踏み潰したくなることはあるだろう。

日常生活を送っている自分とは関係なく脅威ですらない存在。

だが意識すれば何か弱者を踏み躪って優越感に浸りたい事がある。

「ぎやああああああああ!!」

〈ホント、弱者は身の程をわきまえていればこんな事にならなかつたんだよ!〉

蚊を両手で叩き潰す時に理由は必要ない。

血を吸うから、羽音が煩いから、追い払ってもしつこくこつちに来るから。

様々な理由で人は蚊を叩き潰す。

ジークもまた、巨人視点で地べたに転がっている【虫】を圧倒的な力で蹂躪していた。

へハハッ! やっぱ、こいつらは馬鹿だ。悪魔と言われているがこんなもんだ!〉

ジークは、壁内の兵士を目撃した事例は少なかった。

巨人を数体討伐して興味津々で近づいたミケ分隊長。

彼のトラウマであり、今なお警戒しているエルディアの悪魔。

そしてその壁内人類で共に5年間潜入任務をこなしていたライナー・ブラウン。

彼が初期に目撃した兵士が例外だっただけで、大半は張子の虎だと分かってしまった。

「愉しそうね？」

「もちろんだとも！俺の尊厳を踏み躪った報いさ！〜」

「無力な赤の他人をいたぶって鬱憤を晴らしているのですか？」

「ピークちゃん！これは必要な犠牲なんだよ！だって…!?!」

ここでジークは気付いた。

車力の巨人であるピークが「人間の声」で話しかける事はない。

そして共にここに来たマーレの特殊部隊の兵士は全員が男であった。

だからここで女の声ができるわけがなかった。

そして彼はその声を知っていた。

「そうですか！じゃあ、わたくしも彼の無念を貴方で晴らしても良いですよね…!!」

獣の巨人は、たった一人の駐屯兵を嬲り殺しにする為に投石を止めてしまった。

残念ながら駐屯兵は絶望の表情で固まったまま死んでいた。

それでも、投石の隙を作って次に繋いだのは、心臓を捧げた彼の功績であろう。

少なくとも獣の巨人に話しかけたフローラ・エリクシアはそう思っていた。

〈げえ!!〉

さきほどまでの高揚感は薄れて代わりに絶望的な感情が溢れて来たジーク。

無理もないだろう。

だって、そこに居るのはエルディアの悪魔なのだから！

「あの時ほどわたくしは優しくないわよ？ 覚悟なさい！」

この日、ジーク・イエーガーは思い出した。

先日に行なわれた行為は、本当に手加減していたのだと！

そしてジークは、この世に生まれてきたのを後悔した。

彼は油断していなかったが、父親との確執を断ち切れなかったせいで詰んだ。

比較的楽に死ねた騎兵と違ってジークは無駄に再生能力がある以上、苦しむしかない。

〈出たあああああああ!〉

それから彼は一生、一日に何度も自殺衝動に駆られるトラウマを残す事となった。その経緯からか、以前から構想していた「安楽死計画」を更に実現しようと考えてるようになる。

『この世に生まれて来なければ苦しまなくて済む』という理念を身をもって知る事に！後にリヴァイ兵長に殺されかけてもそこまで恐怖を感じられないほどの絶望を！口では笑っているが目では笑っていないエルディアの悪魔に一方的に教えられた！

「絶望を知って死になさい！」

エルディアの悪魔は、ジーク・イエーガーに死んだ方がマシな苦痛と恐怖を教えてあげた。

前回と違って明確に【敵】と判断されてしまった以上、彼は原型を留められなかった。むしろ、これでも生還してしまったジークは更に地獄に叩き落される事となる。

93話 この日、ジーク・イエーガーは悪魔を思い出した

『惨殺してやる!!』

頭に思い浮かんだのはその一言だけであった。

本能か、第六感か、悪魔の囁きか分からないがそう思い浮かべた。

両親の仇である鎧の巨人ですら、そこまで殺し方には拘らなかった。

それと同時にここであの糞野郎と逢えた事をフローラは祈ってすら居ない神に感謝していた。

「投石による被害は甚大だ！精鋭班！獣の巨人の討伐に向かえ！」

駐屯兵团第一師団精鋭部隊のキッツ隊長の指示に誰もが同調した。

だが、【投石】と言う音速を越えている散弾を前に前進などできやしなかった。

岩の破片が地面に激突した衝撃で馬がパニックになり使いものにはならない。

それどころか、旧市街地が少しずつ破壊されており、身を守る障害物が無くなって

いった。

「おいフローラ！なんとか投石を止められないのか!？」

「無理に決まつてるでしょ！一旦下がって遠回りであいつを殺処分するしかないわ!」

「…殺処分?」

リヴァイ兵士長も精鋭班も投石のせいで獣の巨人に突撃する事ができない。

ジャン・キルシュタインは、建物を盾にしているフローラに状況の打開をお願いした。返答は想定通りだったが、「殺処分」という単語に引つ掛かった。

女型の巨人や鎧の巨人など正体が判明しても能力者をそこまで貶めていなかった彼女。

そんな彼女が何故か獣の巨人に関しては、存在する事自体が罪のような感覚を彼に印象付けた。

「報告します！四足歩行の巨人が岩を運送しております!」

「だからどうした!？」

「いえ、巨人らしくない動きなので巨人化能力者だと思われれます!」

「……そうか。まだ人類に敵対する巨人化能力者が居たか!!」

キッツ隊長は、部下の報告により遠くに居る四足歩行の巨人も能力者と理解した。

それだけだったら状況打開の鍵にはならない。

問題なのは、異様にその巨人が動いているという事だ。

投石する獣の巨人であるが、意外にもそこまで機動力が無いように思えた。

エレンの報告書に目を通していている彼は、体力の消耗を避けて行動していると考えた。

『つまり、移動して投石はしてこないという事だ…!!』

固定砲台と化している獣の巨人であるが、ある一点を見落としていた。

この地は、豪雪地域の為、排水機能が充実していると同時に地下道が発展している事に!
に!

つまり地下から部隊を展開させれば奇襲攻撃が可能であった。

さすがにユトピア区の壁内ほど地下道は充実していないが、それでも兵を移動させる事はできる。

「駐屯兵団第三師団は信煙弾を撃ちあげて分散して突撃せよ！」

「キッツ隊長!」

「その隙に我が精銳班が獣の巨人を叩く!できるだけ惹きつけよ!」

意識すると「囨になつて死んでくれ」という命令を受けた駐屯兵団第三師団。

トロスト区を除く3つの突出した城壁都市を守護する兵士たちに衝撃が奔つた。

それでも獣の巨人という化け物を討伐できると断言できる勇気ある兵士など居ない。時間を稼げば、勝手に巨人を討伐してくれるなどありがたいものはないだろう。

「俺がいくぞ!意見に賛同する者はついてこい!!」

「ハッ!」

この場に居る兵士は全員、壁内人類の為に心臓を捧げた身!

駐屯兵団第三師団の師団長であるパウル・エツテルが突撃を開始した。

彼を慕う部下達も賛同して分散しながら突撃を開始した。

しかし彼らは二度とユトピア区に生きて帰る事はなかった。

「ぐぎやあああ!？」

「げえ!!？」

通常、人として発する事はない声がすぐに置いて行かれた者たちに聴こえてきた。建物から出た瞬間、勇ましい彼らは投石の餌食となってしまった。

それでも、確信的な勝利を祈って後続部隊は突撃を開始した！

これには投石している獣の巨人は困惑した。

『えっ？マジで特攻するの？何考えてるんだあの馬鹿共!？』

お国の為に戦って死ぬと言わんばかりに無謀にも突っ込んでくる特攻兵。

前衛が壊滅したというのに士気は衰えるどころかむしろ増していた。

そのせいか、独善的な思考を持つリーダーに他者に犠牲を強いる戦法が嫌いなジーク。

ムキになってしまい、第二波としてけしかけた巨人ごと投石で敵兵力を壊滅させた。

『ああ、すごいわね……あらゆる感情で自分が上書きされそうよ』

地上が大惨事になっている間、フロローラはライリーを地下道で走らせていた。誘導灯どころか松明も無しに暗闇の道を全速力で駆け抜けていく。

怨嗟、後悔、憤怒、憎悪、絶望、あらゆる負の感情が「声」として聴こえてくる。その中で【獣の巨人】の能力者の声を聴き取って口角を釣り上げながら走らせた。

「ふふふ、やっと殺せるわ…今度は死に様を見届けなくてわね…」

ライリーは自称主人が激怒しているのに気付いていた。

いつもならフロローラをわがままで困らせる馬も冷酷な悪魔と化した女には順応である。

「音が聴こえるわ…風の音が…出口はすぐそこに…」

地下道に進んだ精鋭班は、獣の巨人に奇襲攻撃する事ができなかつた。

まず、目標の位置が分からないというのもあったが、地下道を馬で走らせるのが無理だった。

なにより問題点があつた。

「リコ班長！暗すぎて前進できません！」

「仕方がない……速度を落とす！」

前方が暗すぎて馬を走らせる兵士は慎重に移動するしかなかった。

松明などで照らせばすぐに中毒になるし、角灯では一部しか見えない。

いくら精鋭兵といえども暗闇の中で馬を走らせる蛮勇さはなかった。

『突撃!!』

一方、頭進撃に真つ暗な地下道など関係なかった。

ウォール・ローゼ壁内で明かり無しで馬を走らせていた馬鹿女。

微かな空気の振動と風の音を聴き取って最適なルートを割り出していた。

馬は夜目が利くがそれ以上に聴覚と触覚で地下道を把握している。

皮肉にも常人では自殺行為に見える経験が彼女の力となっていた。

『…………ふふふ！』

地下道を抜け出したフローラが見たもの。

それは、獣の巨人が駐屯兵をいたぶっている場面であった。

相変わらずニヤンコとワンコを汚いおっさんで人体錬成したような巨体。

まだその辺に居る奇行種の巨人の方が可愛げがあるというものだ。

この光景を目撃したフローラの怒りのボルテージは限界突破した！

へハハッ！やっぱ、こいつらは馬鹿だ。悪魔と言われているがこんなもんだ

ジーク・イエーガーが不運だったのは、トラウマを刺激されて思考が鈍ったことだ。
そのせいか、圧倒的な力で駐屯兵をいたぶって気を晴らしていた。

「愉しそうね？」

〈もちろんだとも！俺の尊厳を踏み躪った報いさ！〉

「無力な赤の他人をいたぶって鬱憤を晴らしているのですか？」

〈ピークちゃん！これは必要な犠牲なんだよ！だって…!?〉

過去にフローラが口先三寸でジークのトラウマを見事に踏み抜いた。

今回は、ジークが地雷原でステップダンスをやって見事に地雷を全て踏み抜いた。

「そうですか！じゃあ、わたくしも彼の無念を貴方で晴らしても良いですよね…!!」

絶望のまま、死んでいった名も知らぬ駐屯兵。

それはとても悲しい事ではあるが、彼が作ってくれた時間に感謝した。

そして双剣を構えて心臓を捧げた彼の冥福を祈ると同時に獣の巨人に刃を向けた！

〈げえ!!〉

「あの時ほどわたくしは優しくないわよ？覚悟なさい！」

ジークは前回にあったトラウマを刺激されると同時にライリーは全速力で逃げ出した！

決して“彼女”は振り向かなかつた。

そうでもしないとフローラを乗せる事自体が恐怖になりかねないからだ。

「絶望を知って死になさい！」

そう告げた死刑執行人は、フレイムソードジュニアを構えた。
まだ着火する気は無いのでジークから見ればただの双剣しか見えなかった。

〈お前が死ね!!〉

獣の巨人としてもここに来た以上、悪魔と交戦する覚悟はあった。

だからこそ、馬鹿女が奇襲の利点を潰して喋り出したので速攻で攻撃した。

〈ははは、どうだ!?!〉

うなじを硬質化でガードして両手で地面を叩きつけた巨人は油断していなかった。

両手を地面に叩きつけた後、わざと横になって転がり回った。

これならワイヤーを撃ち込む隙は無いし、なにより回避しようがない。

傍から見れば駄々をこねている子供の様に見えるが防御では有効である。

『さて、どうなった!?!』

思う存分、転がり回った獣の巨人は満足して立ち上がると一面が廃墟と化していた。平原の佇む小屋は巨体で粉碎されて草原は潰されて白のようになぎ倒されていた。

『なんだ、意外と呆気ないな…』

獣の巨人は必死に悪魔の死体を探すが見つかることは無かった。

代わりに悪魔が乗っていた赤い体毛の馬を見つけた。

ジークはあの馬に全力で蹴られた事があり、復讐対象の1つである。

〈あいつもあの世に送ってやるか!……ん?〉

ジークはそう思って、投石しようとして準備に取り掛かったが違和感を覚えた。巨人体の口から黒煙が噴出していたからだ。

そして何事かと確認しようとした瞬間、爆発音とともに彼の脳内が揺れた。

『ふふふ！』

あえてフローラは獣の巨人に話しかけて自身の存在を気付かせた。

奇襲の利点を潰していたが、短期決戦で獣の巨人を討伐できるとは思っていないなかった。

だから今回は巨人の中で大暴れをした！

『逆転の発想…何か嫌だけど…』

獣の巨人は口を開けたまま、両手で潰そうとした瞬間、彼女は口内に飛び込んだ。

かつては世界一美味しいお肉と自称した女は、ある意味本来の目的を達成したともいえる。

人体だったらすぐに噛まれて御臨床する羽目となるが、獣の巨人は特殊な口腔であった。

全て鋭利な歯で構成されており、丸呑みを想定しているのか噛み締めるといった機能が無い。

そのせいか、お肉を効率よく飲む為に大きな空洞があるので、彼女は生き残る事が出来た。

『巨人の口内ってこんなに臭いのね』

アンカーのおかげで歯にぶら下がっているフローラは、口内の匂いで顔を顰めた。そしてジークが喋る度に全身が揺れて吐き気を必死に我慢する羽目となった。

『気持ち悪い…』

更に獣の巨人が地面に転がったせいで全身がフラフラになっていた。

幸いにもこれ以上に酷い事故など何度もやらかしたので特に問題は無かった。

『今がチャンスね!!』

だからといって時間を無駄にするわけにはいかず着火装置に点火した。その瞬間、低温で発火する赤熱結晶が激しく燃え上がり刃を炎で包んでいく。それは巨人を断罪する業火のようであった。

『汚物は消毒しなきゃ!!』

頻繁に動く舌に…そして噛まれないように注意しながら歯茎を焼く!

唾液で燃えにくいとはいえ、人肉である以上、当て続ければ勝手に引火した。

『ああ、熱い!もつと焼かないと!!』

引火するガスを使用している為、前回の様にいつ火達磨になっても可笑しくなかった。

それでも彼女はガソリンが入った火炎瓶を手を取って奥歯に投擲して外へ飛び降りた。

歯に激突した瓶が割れて元々高温だった口内で気化したガソリンは爆発した。

「…さすがに中からの攻撃は弱いよね」

顎より下は人体の構造上、視覚外である。

故に獣の巨人はお肉が口腔から逃げたのに気付かないし把握できるわけが無かった。

ジークは爆発の衝撃で何が起こったのか把握できていない。

爆発の衝撃でうなじの硬質化が解かれているのを発見したフローラは笑みを浮かべた。

「その刃はあげるわ」

燃え上がる刃をうなじに突き刺して彼女は颯爽と離脱した。

乾いた毛が燃え上がり突き破った肉は更に加熱していく。

仰向けに倒れ込む獣の巨人に巻き込まれないように着地した彼女は刃を換装した。

すると獣の巨人が動こうと何か足掻いていたが微動しかなかった。

『ぎゃあああああ!?!燃えてるううううう!?!』

ジークは気が付いたら本体が居る空間が燃えていた。さすがに自身の肉体を丸焼きされたら死ぬしかない。脱出するにも仰向けで身動きが取れないのに気付いた。

『…駄目だあ!?!』

巨体を動かそうとするが、巨人の脳を損傷したのか体勢を変える事ができなかつた。そのせいで、巨人化を解除するしか火から逃げる手段がなかつた。自身に繋がっている肉の筋を切り離して脱出を図るジーク。すぐに空間が潰れて彼は巨人の肉や骨で潰されそうになつた。

『俺は…まだ死ねないんだああああ!!』

イエーガー家特有のド根性と必死な足掻きで空洞を這いずりながら出口を目指した。彼にとって幸いだったのは、巨人の骨が意外と頑丈で自身を守ってくれた事だ。

「うおおおおおおおっ!」

首を刎ねて心臓を潰して脳を粉碎する！

前回で討ち取り損なつたせいでこうなつた以上、フローラは即座に彼を殺すつもりだつた。

『こいつを殺したところで、心臓を捧げた同胞は報われない』とどこかで思っている。ただ殺せば、これ以上の犠牲者を出さずに済むのもう一度、双剣を構え直した！

『本当に良いの？』

「えっ？」

誰かが耳元で囁いた。

少なくとも男ではない。

怒りによる幻聴？第六感？神託？自分の内なる想い？

フローラには理解できなかつた。

ただ【悪魔】が耳元で囁いた。

「簡単に死なせたら死んでいった者達の心臓を捧げた価値に釣り合わない」と！

「…外した!？」

「いぼっ!？」

怒りで判断力が鈍ったのか、ひげもじやの能力者の左腕を両断した!

もう一度構え直そうとするが、それ以上に感情が爆発しそうで過呼吸で苦しくなった。

気を晴らそうとするが鼓動は高まっており、戦場であるにも関わらず私情を優先した。

そして気が付いたら男の口内に左手を突っ込んでおり、舌を引っ張っていた。

『何をしているの…』

頭ではさっさと殺すべきだと思っっているのに身体が勝手に動いていた。

生物が無意識に呼吸しているようにフローラは彼の舌を刃で切り取って近くの草原に投げ捨てた。

その時にさきほどまで生きていた駐屯兵の死体を見つけた。

『痛い痛い!!死にたくない!!やだああああ!!』

駐屯兵から発せられた絶望の感情は、しっかりとフローラに届いていた。

そのせいだろうか。

犠牲者の苦しみの分だけこの糞野郎に負債を返済してもらおうと思考してしまっただけのは…。

「弾は…装填済みね」

近くにあったライフル銃の状況を確認した悪魔は、哀れな男を見る。

残された右手で窒息しないように舌を必死に抑えていた。

獣の巨人体は大半が塵と化しており彼を抑えつける物は何もない。

顔から蒸気を噴き出しており、必死に肉体を再生しようとしているのは分かる。

ここでフローラは1つ疑問に思った。

『異物を体内に入れたまま肉体が再生したらどうなるの？』

疑問に思ったら、とりあえず試して見るのが彼女の性分である。

邪魔になりそうな刃を彼の脇腹に刺して操作装置を自分の脇のホルスターに仕舞った。

まるで吸い込まれる様に駐屯兵の死体に近寄った彼女は物色を始めた。弾倉から数発、小道具を手にとって逃げようと足掻く弱者に向かう。

「おりゃー！」

「ぐぼっ！」

動き回っているとはいえ固定されていれば目を閉じても当たるといふものだ。

発砲音と共に見事に巨人化能力者の腹に散弾を撃ち込む事に成功した。

獣の巨人の能力者のせいで気分が悪いフローラは更に銃身に弾を込めた。

「痛いのか？わたくしたちはもつと痛かったわよ？」

次は異臭を放っている男の股間に銃口を向けた。

残された左目からは涙と共に「やめて欲しい」という意志が読み取れた。

しかし、負の感情を感知できるフローラにとってはどうでもいい足掻きだった。

発砲音と共に股間に散弾が撃ち込まれて粗末な物が悲惨な事になった。

男女と共に急所である股間に大打撃を受けたジークは気を失ったようで動かなくなつた。

この一撃が後にとんでもない後遺症を残す事になるが、フローラは思った事がある。

「なんで……寝てるのよ!!」

悪夢ですら生温い現実から逃亡する男にフローラは感情を爆発させた。

ライフル銃を地面に置いて突き刺した刃を換装し直して構える!

巨人が近くに居ないのを改めて確認した彼女はジークの腹に向かって刃を振り下ろした!

高熱の血と内臓が彼女の身体を汚したが眉を微動させずに何度も振り下ろす!

「ぐっっ! ほっっ! おぎっ! いぎっ!」

「まだ寝ないでよ。安息の眠りはまだ先に! して! ちょうだい!」

刃を叩きつける初撃は無防備な腹に大きな傷跡を残した!

第二撃目は、肋骨を粉碎し折れた骨が内臓に突き刺さった！

第三撃目は、傷口を広げて肉体の再生能力を追い付かなく様にした。

第四撃目は、あまりの衝撃のせいで、広がった傷口から小腸が零れ落ちて来た。

「熱っ!?!」

戦利品の小腸を左手で掴もうとしたが熱くて手を放すフローラ。

それが更に火に油を注いだのか、今度は両手で腸を掴んで我慢して引っ張った！

さすがにこんな事をされれば起きないわけがなくジークは現実に戻って来た。

『痛い痛い痛い!!』

そして視界に入ったのは、安らかな笑みを浮かべて自分の腸を引っ張っている悪魔だった。

夢だと思いたくても、感触で夢でないのを無駄に頑丈な肉体が脳に知らせて来る。

この時、ジークはこの世に誕生したのを本気で後悔した。

これは後に自身が思い浮かべた「エルディア人安楽死計画」に大きな影響を与えた。

「まだよ！ゲルガーさんやナナバさんが味わった苦しみはこんなものじゃないわ！」

弾力があるように見えて意外と硬い感触に驚きながら腸を引き千切ってみせたフローラ。

中にあつたあらゆる物を傷口から溢す腸をジークに噛ませた。

痛みと絶望で動けない彼はただ自身の腸を熱さを唇と舌で感じる羽目になった。温もりと言えない高熱を腸を彼は強く顎を強打されて噛みきった。

「~~~~~!!」

「はいプレゼント！」

彼はまだ死ぬことはできなかつた。

巨人化能力者である以上、脳を損傷しない限り死に事は無い。

そんな事を見越してか、再生中の右目の眼窩にライフル銃を突き刺された。

「これはさつき投石で潰された兵士たちの分よ！」

フローラは喋りながら発砲したせいで銃口がズレてしまい散弾が脳に届く事は無かった。

だが、それは急所を外しただけでジークを更に苦しめる事になった。

『なんでこんな事をしているのかしら…』

フローラ自身、やりすぎたと思っている。

さっさとこいつを殺してユトピア区壁内に湧いた巨人を掃討するべきである。

まだ鎧の巨人や超大型巨人が残っているのだから。

何度も殺そうとしているのに重傷者を無駄に苦痛を与えているだけだ。

これではこいつと同類でどうしようもないじゃないかと…思っても無意識にやっていた。

「もっと！股間を切り取って眼窩に埋め込んで…」と悪魔が耳元で囁いている。

フローラは自身の身体が自分でコントロールできなくなっていた。

幸いにもまだ味方にはこの行為は見つかっていないが、時間の問題だった。

地下道の入り口付近に精鋭班の「声」が聴こえてきている。

獣の巨人が倒れて15分も経過していないが長い悪夢を見て来た気がした。

「ねえ、少しだけ特別な力があるって思いあがった糞野郎さん。兵士をいたぶるのは愉快だった？ 実際にはわたくしもやってみるけど空しいだけよ？ でもあなたに苦痛を与える度に死んでいった兵士が報われている気がするの！ あなたがどういう過去を送ってきたのか知らないけど、こうやってわたくしに一方的に蹂躪される人生だったのよ！」

さつさと殺せばいいのにフローラは未だにどンドン彼を苦しめる方法が頭に浮かんだ。

誰の入れ知恵か、知識か、経験か、憎悪が愛情に転換している様に純真無垢な笑みを浮かべている。

「次は五感を一つずつ潰していくわ！ 最初は視力を奪ったから次は聴覚を奪うわ。やめて欲しい？ でもあなたは地面に転げ回っていた兵士の命乞いを聴かなかったじゃない。

なのに何でわたくしがそれを守らないといけないわけ？」

彼の負の感情を読める彼女は、悪魔のように拷問されている理由を告げた。

未だにジークは右手で斬られて短くなつた舌を喉の奥に落ちないように抑えている。

あえてフローラはその行動を見逃していた。

それは優しさではなく窒息したら意識を失つて思う存分、苦痛を味わう事ができないからだ。

「~~~~~！」

「ほら！人の言葉を聴かない耳を刈りつつたわ！次は鼻ですよ。あなたは口呼吸で充分でしょう。こんなに臭いのにももしない糞野郎！」

衰れなひげもじゃ野郎の鼻を何度も蹴りつけ再び刃を操作装置に取り付けて斬りつけた！

無残に潰された鼻を見ても彼女が感じている乾きは収まる事は無かつた。

段々、芸術作品を造り上げていると錯覚するほど念入りに能力者を虐めていた。

『これが【芸術】？ありえないわ！』

寂しくなったミカサがエレンに抱き着く方がよっぽど芸術である。

絵画に残して後世に伝えてもいい。

ジャンは嫉妬するが芸術というのはそういうものだと思っている。

それでもやたらと悪魔が自分に指図してきた。

我が道を行くフローラにとつてとつてもない苦痛を与えている悪魔にも怒りに向けた。

そしてようやく気付いた。

『自分が自分に嘔いて居るの!?!』

甘い言葉で更なる惨状をもたらすように嘔いてくる声の正体が自分である事に！

復讐に囚われ過ぎて精神が分裂している感覚だった。

不？戴天のライナー・ブラウンと同じような精神状況となっている。

それは、彼女にとつて精神的苦痛を味わせた！

「なんで手を休めてるの？」と自分が嘔いてくる。

「煩い！黙れ！」と反論したいが既に髭もじやの頭蓋骨を無意識に割っていた。

これ以上苦しませずに殺すべきと脳を枝で弄る拷問をするべきと対立している。

『『邪魔しないで!!』』

ついに彼女は自分と喧嘩している有様だった。

更に味方は屍の山を築いており、悲惨な惨状が更に悪化を辿っている。

刻一刻と戦死者が増えていくのに自分は自身の精神と戦う羽目になった。

そのせいなのか。

新たな巨人化能力者の接近に気付かなかった。

『戦士長!?!』

女の声がしたと思った瞬間、無意識にその場から離れた。

瞬く間に背中に荷台を乗せている四足歩行の巨人が彼を啜えて去っていく。

そんな事などさせるわけはなくアンカーを首に打ち込んで彼女はワイヤーを巻き

取った!

加速して双剣を構えて首を刎ねようとしたが、ジークの返り血で手元が滑った！

「あああああああああああ!!」

フローラは後悔した。

四足歩行の巨人の右目を潰し右耳を抉り取るしかできなかった。

ならば、うなじを削ごうとしたが返り血のせいで手元が滑って操作を誤った。

両方ともアンカーを外してしまい、再度打ち込もうとしたが更にミスを犯した。

アンカーの打ち込む角度調整を忘れて巨体にアンカーを打ち込めなかったからだ。

このままでは、あの髭もじゃを取り逃がしてしまうだろう。

「ライリー!!」

フローラは相棒を呼びつけようとしたが…すぐには来なかった。

なんか主人が激怒していて自分が出る幕じゃないな…と離れていた。

そのせいで、名を呼ばれてもライリーはすぐに反応できなかった。

元々調査兵団の馬と対極的な性格である汗血馬の「彼女」は臆病である。

凄惨な行為を生き生きとする主人が怖すぎて呼ばれても寄るのを躊躇わさせた。

「フローラ大丈夫か!? それに獣の巨人は!？」

「能力者を巨体から引き摺り降ろしましたが…逃げられました!!」

「血塗れだが何があつたんだ!？」

「能力者に致命傷を与えた時の返り血です! 早く四足歩行の巨人を追ってください!」

リコ班長に話しかけられたフローラはただ正直に白状するしかなかった。

ただ、さきほどの蛮行に関しては黙るしかなかった。

顔馴染みの精鋭班の兵士の馬を強奪して追おうとする事を考えるほど余裕がなかった。

『思ったより強い!!』

ピーク・フィンガーは糞野郎を啜えて必死に逃亡するしかなかった。

背後からの奇襲したのに即座に右目を潰されるとは思わなかった。相当敵が動揺していたのか、すぐに追ってこなかったのが幸いだった。

「っ！」

ジーク・イエーガーの身体は限界だ。

無垢の巨人と違って肉体再生能力は限度がある。

すぐに手当てして…もしかしたら助かる可能性が否定できないほどの惨状だった。

『やはり悪魔の末裔…油断できない相手！』

元々車力の巨人は持久性特化であり、戦闘向きではない巨人である。

砲兵を乗せていればまた違ったのだろうが、さっきの結果だと悪化すると思った。それほど、敵の落ち度が無かったら2人とも殺されていた。

『壁内から爆発…このタイミングで!?!』

超大型巨人が出現したのを確認した車力の巨人。

しかし、早急な治療を施さないと戦士長が死ぬせいで戦線離脱するしかなかった。

「このタイミングで!?!」

ライリーに騎乗したフローラは精鋭班と共に四足歩行の巨人を追撃しようとした。

その瞬間、ユトピア区壁内で爆発音と閃光が発生して瓦礫が宙を舞ったのを目撃した。

あの中には兵士だった物も含まれているのは間違いない。

「フローラ!一度ユトピア区壁内に戻るぞ!!」

トロスト区奪還作戦から知り合いであるホークマン先輩からそう告げられた。

現状を考えれば、追撃を諦めて帰還するべきである。

ただあの四足歩行の巨人が「戦士長」と言っていたので糞野郎が大物なのは間違いない。

ここで追撃して討ち取れば、今後投石どころか、巨人の侵攻が無くなる可能性がある。

『でもあそこには…』

壁内に居る兵士たちからの負の感情で、出現したのは超大型巨人で間違いない。

更に鎧の巨人がどこかに潜んでいる。

シガンシナ区のように正門と内扉を破壊される可能性がある。

それは想定内だが、更に壁内には無数の巨人が居る。

『あれは単独でも勝てる自信はあるけど…』

精鋭班に先行して帰還してもらい自分は追撃で掃討後、帰還する。

普段の彼女だったらそう判断したのだろうが、今回は違った。

「分かりました！一度ユトピア区壁内に帰還しますわ!!」

フローラは…あの獣の巨人の能力者と逢うのを拒否した。

あいつと逢う度に精神が狂わされるので一旦、気持ちを切り替える事にした。

戦術的勝利をしてもウォール・ローゼが突破されるといふ戦略的敗北はできない。そう心に言い聞かせて彼女は正門に向けてライリーを走らせた。

「なんか…あつたみたいだな」

「そりゃあ、あの獣の巨人を逃がせば落ち込むだろう」

「それにしてもあの子らしくないね…」

精鋭班はフローラがあつさり追撃を諦めたのに驚愕したがすぐに並走した。

もう投石の脅威が無い以上、壁外に居る部隊の全滅は免れた。

駐屯兵団第一師団精鋭部隊は、それを防ぐ為にここに来ていた。

獣の巨人が脅威ではなくなった以上、引き続き巨人の掃討を担当する。

『復讐に囚われて身を亡ぼすとは言うけど…』

獣の巨人が連れて来た巨人の大部は投石に大半が巻き込まれていた。

そのおかげで何とか全員が無事に帰路に着く事ができた。

地下道ではなく地上なのは、壁内と地下道が繋がっていないからだ。

『もう…わたくしは限界みたいね…』

復讐鬼は、現実を知り少しずつ悪魔によって精神が蝕まれている。

今はいつものフローラで保っているが、いつ破綻してもおかしくない。

この辺りからフローラ・エリクシアは「死」という安らぎを渴望する事になった。

9 4 話 超大型巨人 VS 悪魔の末裔達

敵味方から「驚異の子」と畏怖されるジーク・イエーガー。

そんな彼は悪魔と揶揄される事があつたが、本物のエルディアの悪魔には勝てなかつた。

一方的に暴力と悪意と殺意に晒されて失禁して大便を漏らすどころか、腸が腹から零れている頃。

「妙だ…」

「気のせいじゃないのか。ベルトルト、お前は考え過ぎなんだよ」

同胞、アニ・レオンハート奪還に向けてユトピア区壁内に侵入している者たちが居る。ライナー・ブラウンとベルトルト・フーバーは、ただ彼女を助きたい一心でここまで来ている。

ユトピア区の地下道を利用して彼女が保管されているとされる場所まで侵入していた。

「…守備隊の戦力が手薄過ぎる」

「一応道中には見張りが居たからそれで充分だと思っただろう。今は緊急時だしな」
「だといいいけど…」

ベルトルト・フーバーが懸念したのは仕方がないだろう。

地上の通りは警備が万全だったので、地下道を利用した結果、敵と遭遇しなかった。厳密には敵兵は居たものの、壁内に沸いた巨人に対応するべく部隊が移動していただけた。

そして交戦する事も無くあっさりと兵団支部の建物の地下まで来ていた。

「よしここだ。この程度なら解錠できる…ベルトルト、後方を見張っててくれ」
「分かった」

工業地帯のユトピア区は迷路のように地下道が張り巡らされている。

無計画に地下街を作ろうとした王都やストヘス区と違って計算ずくで建築されていた。

雪解け水を工業用水に使用したり、豪雪地域の為、暖房用のパイプが張り巡らされている。

故に増築が難しく兵団支部の地下は、無理やり地下道の施設と繋げた形となっていた。

「よし、空いた。準備は良いかベルトルト？」

「……いいよ」

警告マークが描かれた札が取り付けられている鉄格子のフェンスを開いていく2人。彼らの脳内では、ここを選定する思い出が走馬灯のように流れていた。

今日までの潜入捜査で手に入れた地図を角灯で照らして必死にルート選定をしていた。

藁にも縋る気持ちで与太話も取り入れてアニの居場所を必死に導き出した。

結局、噂通り、兵団支部の建物の地下に安置されているのが一番、信憑性があった。

『お前ら、落ち着けよ。明らかに罠だぞ？そんな機密情報が一般兵が噂される事ないだろう！』

ジークからすれば、2人が立案したアニ奪還作戦に疑問に思っていた。

緘口令が敷かれているはずなのに情報が一般兵から洩れている。

一昔前であつたら時代遅れの連中だと思つていたが「エルディアの悪魔」に分からされた男。

先見の明で絶対確な事が起こらないと警告したが彼らは受け入れなかった。

「……誰も居ないな」

ライナー・ブラウンは、アニが安置されるとされる部屋にゆっくりと侵入した。

二丁の拳銃を構えたベルトルトも後方を確認しながら彼の後を追う。

入室して目に入ったのは、僅かばかりに角灯で照らされているパイプや空調設備。

調べた通り、元は地下道の施設を兵団支部の地下室にしたようであつた。

無理やり建築したのか、鉄杭に上から木板を打ち付けられた螺旋階段がある。

「出口は二カ所だけだね」

「ベルトルト、出口を抑えておけ。俺は辺りを詮索する」

そしてライナーは、暗闇の中で僅かに見える布で覆われた物体を発見した。

彼は呼吸を整えてから罨が無い事を確認するとその布を引っぺがした。

『『アニ!!』』

そこには、固定ベルトで拘束されている大きな結晶体があつた。

同じ戦士であり、同期であるアニ・レオンハートは結晶の中に閉じ込められていた。

硬質化のせいかな、身体の機能は完全に停止しているのか微動もしない。

生きているのか死んでいるのか。

判断はできないが、少なくとも彼らは前者を信じている！

「クソ！拷問されたようには見えんが、よっぽど追い詰められたみたいだな」

ライナーはすぐにアニの結晶体から拘束しているベルトを外そうとした。しかし、それは相棒に止められる事となった。

「やっぱり何か可笑しいよ。何で見張りが一人も居ないんだ？」

「地上の巨人に気を取られているからか」

「違う…何か音がする……これは」

ベルトルトが退路を確保しようと侵入してきた出口に向かおうとした瞬間！突然、石壁が落下し地下から侵入してきた出口を封鎖された。

それと同時に地上に出る出口も石壁で封鎖されて完全な密室になった。ベルトルトはすぐに地上に向かおうと階段を登ったが手遅れだった。

「隔壁を全て降ろしました！」

「ガスを放て!!」

地下室に巨人化能力者が侵入したのを確認した駐屯兵は隔壁を降ろした。

ベルトルトの危惧した通り、敵を一網打尽にする罠であった。

彼の予想と違ったのは、有毒ガスで巨人化能力者を仕留めるという事である。

『エレン・イエーガーの例を見れば他の能力者も身体的には大差ないだろう』

総指揮官のエルティアナは、巨人化能力者について分析をしていた。

結論から言うと、巨人化能力以外は通常の人間と変わらないと事を見つけた。

怪我すれば出血するし、食事も睡眠も必要とし、何より限界がある。

そこで彼女がやったのは、火山から発せられる有毒ガスで仕留めるという事だ。

『しかし、兵団支部の地下にガスを流すなど上層部が知れば何と言われるか…』

『別に良いじゃない。真っ向勝負に挑んで巨人化で吹き飛ばれるくらいなら』

ユトピア区でアニが巨人化した時の余波で拘束を狙った調査兵が壊滅した。

つまり、巨人化能力者はいつ爆発しても可笑しくない爆弾という事だ。

ならば、迂闊に巨人化できない地下に誘導してガスで仕留める作戦を彼女は選定した。

ここに勤務する駐屯兵からすれば、今後職場で中毒死する可能性がある事を懸念して

いる。

『元々、火山に近いせいで地下道が頻繁に封鎖されているのだろうか？別に良いじゃない』

人類活動領域最北端のユトピア区では、温泉が名物である。

それと同時に地殻からガスが漏れ出す事が多く中毒死する者が後を断たない。

特に冬場は密室の暖房による中毒死を相まって死者が異様に多かった。

エルティアナからすれば、使えない建物などいつでも放棄すれば良いという考えである。

「畜生！嵌められた!!ここじゃ巨人化できん!!うっ!」

「ライナーまず、地図を確認……ライナー?」

ライナーが巨人化すれば天井にある建物全体が崩落して最悪、生き埋めとなる。

超大型巨人なら脱出できるがそれだとアニが瓦礫の下敷きとなる。

巨人化の特性上、誰かを抱き抱えてできる事ではないし、だからといって放置はできない。

更に最悪な事にライナーはガスのせいで呼吸できなくなつて倒れ込んだ。

『人間とは何とも脆い。気が付いた時にはお陀仏つてわけ』

『ですが、その戦術だと二度と地下道が使用できなくなります!』

『勝手に奴らが巨人化して通気口を開けてくれるよ。そこまで危惧する事は無い』
『では何故?!』

エルティアナは元からこの計画で巨人化能力者を仕留められると思つていない。
むしろ、狙いは巨人化してもらうという点であつた。

エレンの件で壁の外でうろつく巨人と違って巨人化には限界があると判明した。
特に超大型巨人の活動時間は過去の例から長く無いと分かっている。

『奴らを巨人化させて活動時間を削れば、こつちにも勝機はある』

守備兵が恐れているのは、ユトピア区の正門と内扉が同時に破られる事である。

巨人化能力者に多大な損害を払つて勝利しても、巨人が侵入されては意味が無い。

そこでユトピア区の中央部にある兵団支部の建物にアニを安置。

そこから奪還しようと動く巨人化能力者に巨人化してもらおうという算段だ。

『貴公らはこう思っているのだろうか？逃げられはしないかと…』

部下達が不服なのは彼女自身が分かっていた。

敗北条件は、ウォール・ローゼに巨人が侵入される以外にもある。

アニを奪還されて壁外に逃亡を図られれば、本作戦は水の泡となる。

だから彼女は手を打った。

後は、彼らがどう動くかで作戦が変わる事となる。

彼女にとって誤算だったのは、思ったより彼らの中毒症状が進んでいたという事だった。

『ラ、ライナー…』

ベルトルトは意識が朦朧として倒れ込んだ相棒を見落とした。

隔壁が落ちて来た瞬間、地上の出口を目指して螺旋階段を駆け上がった彼はまだ動け

だが、拘束しているベルトを外そうとしたライナーは上に逃げるのが遅れて中毒で倒れた。

ライナーは首元を抑え込んで苦しむ事すらできずにただ痙攣するしかできない。放置すれば死に至るところかベルトルトも中毒で動けなくなるだろう。

『ど、どうすれば…』

気を失ったライナーは超大型巨人の爆風には耐え切れないだろう。だからといって中途半端で巨人化すれば瓦礫で生き埋めになる。

『何か手は…』

エルティアナは既に兵団支部の建物を警護している守備兵を事実上捨て駒にしていた。

さすがに事情を説明してガスを投入したら避難する算段という事になっている。

それを達成する前に巨人化で避難できる前に守備兵が肉片になると予想していた。

現実、巨人化能力者の身体能力を高く見積もり過ぎており、経験が浅いただの新兵

でしかない。

『そういえば…』

ライナーを救出したいが、近づけば同じように倒れるのを危惧しているベルトルト。彼は必死に解決策を模索している時に頭が吹っ飛んだ女の事を思い出した。

第57回壁外調査の後、ライナーやジャン、コニー、アルミンで訓練を頼み込んだ時の事を！

『これならいけるか』

まずベルトルトは、壁に左アンカーを打ち込んでしっかりと固定させた。すぐに転落防止用の柵の隙間から右アンカーをライナーに定めた。そして躊躇いも無く彼の肉体に向けてアンカーを射出した。

『よし、いけた』

感触を感じた瞬間、両手を手すりに掴んでワイヤーを巻き取った。

通常は、巨人に撃ち込む特性上、兵士は突っ込んでいくが今回は固定されている。

では、どうなるかというライナーがこっちに向かって飛んでくるという事となった。

逆転の発想で、兵士が突撃するのではなくアンカーを突き刺した物を手元につけてきた。

「ぐおっ!!」

ライナーが激突して思わず彼は意識を飛びそうになるが必死に耐えてみせた。

力任せで彼を担いで右アンカーを外して柵の内側に放り込んだ。

『これですぐには死なない』

フローラ・エリクシアという女は、昔からやたらとアンカーを打ち込み直す。

そのせいで、いつも負傷していて医務室送りされるのが日常茶飯事だった。

いつもアンカーで負傷する彼女の言い分は、「マスターすれば何でもできる」という事

だった。

『おかえりライナー…』

最初は「何をやっているんだこの女」とベルトルトは思っていたが、面白い事に気付いた。

自分も含めて全員がアンカーを打ち込むのは、「巨人に討伐する事に必要な手段」と考えていた。

ところが、フローラだけは「移動の方向転換をする為の手段」と考えている。

『さて、どうしよう』

いろんな好条件のおかげで彼はガスに満ちたライナーを階段まで連れ戻す事が出来た。

もし、螺旋階段の真下にライナーが倒れていたら。

もし、吹き抜けがなく柵ではなく壁の階段だったら。

もし、第57回壁外調査の後にフローラとアンカーを打ち込む訓練をしていなかった

ら。

様々な好条件で一時的にライナーを安全地帯に移動させる事が出来た。

『アニの結晶体に賭けるか…』

危機的状况は大して変わっておらず、すぐにベルトルトの居る場所にもガスが来るだろう。

密室であり、降ろされた隔壁は巨人化以外で破壊できそうもない。

ところがライナーは気を失っている為、鎧の巨人で爆風を防ぐことはできない。

ではどうするのか。

ベルトルトが導き出したのはアニの結晶でライナーの盾にする事であった。

「ごめんライナー…」

せつかく救出した相棒を地上に降ろす為に抱えて立体機動に移った。

圧倒的な重量オーバーにも立体機動装置は見事に耐えてみせた。

これも無茶な機動で立体機動装置を破壊するフローラのおかげで強度が改善された

おかげだった。

ベルトルトはアニの結晶体の後ろにライナーを放り投げて、彼女の正面に移動した。さきほど、ライナーが激突したおかげで負傷したのですぐにでも巨人化できる状況である。

『僕はみんなと故郷に帰るんだ!!』

彼は3人で故郷に帰るのを諦めずに覚悟を決めて巨人化した。それと同時にユトピア区の兵団支部の建物付近が全て吹っ飛んだ。

突如発生した閃光、広がるキノコ雲、全てを吹き飛ばす爆風。

苦痛に満ちた悲鳴すらも爆音は飲み込んで行き、ユトピア区壁内は大きく揺れた。

爆心地から逃げきれなかった兵は生きた証すら残さずこの世から抹消された。

こうなるように仕向けたとはいえ、エルティアナはその惨状を見て笑うしかなかった。

「報告!! 兵団支部付近で大爆発です!!」

「予想以上に時間が懸かった。意外と無事に脱出できた兵が良そうね」

「は?」

部下からの報告を聴いても、特に慌てる事がなかったエルティアナ総隊長。

報告を他人事のように軽く聞き流して兵を適当に扱っているのを告げる女に困惑する部下。

爆発が止んだと同時に超大型巨人が出現した。

人類の敵、巨人の代表格、頭マーレの象徴、破壊の神、ただのどかい的。超大型巨人には様々な異名があるがここでは、人類の敵以外になかった。

「超大型巨人がこちらを目指して進んできております!!」

「想定通り、内扉を破壊するつもりか…あの時とは逆ね」

情報通り、超大型巨人はゆっくりと、だが確かに前進して内扉へと向かって来る。

ウォール・ローゼとユトピア区の境を繋ぐ重要な扉。

シガンシナ区の内扉の責任者であったエルティアナには感慨深い事である。

845年、忌々しい鎧の巨人のせいで彼女の人生はそこで終わつたと言つても過言ではない。

「すぐに部隊を展開させます！」

「…やらなくていい。私たちはそのまま傍観せよ」

「ですが!!」

「命令に従え」

「……ハッ！」

しかし、エルティアナは壁内を防衛している主力部隊を動かさなかつた。

元から捨て駒であつた部隊を除けば、大半の戦力は壁の縁に寄せて展開させている。

1万と言う兵力を満遍なく展開させなかつたのは訳がある。

そうとも知らずに呑気に超大型巨人は、内扉へと進んで行く。

「超大型巨人の姿を捕捉!!」

「よし！撃ち込んでやれ!!」

それを待っていたのは、地下道を通じて展開済みであった工兵達である。

巨大樹の森やストヘス区で使用された『対特定目標拘束兵器』。

その改良版から矢じりが放たれて超大型巨人の両足首を貫いた！

それだけなら巨人が動くだけで蜘蛛の糸が切れるように振り払われるだけで終わるだろう。

「もつと撃ち込んでやれ!!」

超大型巨人にとって不運だったのは、壁内人類が手加減しなかったことだ。

実は、王政府は技術発展を妨げて文明レベルを130年以上前より劣化させていた。

その為、少しでも巨人を殲滅できそうな兵器ができる度に難癖を付けて潰して隠蔽してきた。

そもそも壁内人類の頂点である王家は、外部からの干渉を受け入れる気であった。

「まだこの世代で滅びるわけにはいかんだ!!」

ところが王政府の上層部は、自分の世代で滅びるつもりは毛頭なかった。

緩やかな自滅、エルディア帝国の罪を償う王の思考には、王政を担う貴族は内心で嗤っていた。

145代フリッツ王もとい、初代レイス王の計画に貴族たちは賛同したが願望まで継承していない。

そのせいか、自分たちが滅びると知った彼らは、一時的に技術レベルの上限を引き上げた。

「撃て撃て！巨人化には制限時間がある！それまで時間を稼げ!!」

中央憲兵及び駐屯兵団第一師団精鋭部隊の砲兵班が砲撃を開始した！

女型の巨人の顔面を槍だらけにした『鉄杭射出装置』が超大型巨人の膝裏に猛威を振るう！

それと同時に鎧の巨人の装甲すらも貫きそうな迫撃砲の砲撃の雨を受ける羽目になった！

「いけます！いけますよ!!超大型巨人の野郎！身動き取れないどころか跪いています

!!

「中央憲兵め……!やはり兵器を隠し持っていたか」

「えっ……隊長殿?」

「……何でもない。引き続き鎧の巨人の動向に警戒せよ」

「ハッ!!」

中央憲兵の監視の元、隠し持っていた巨人を吹っ飛ばす迫撃砲を提供した。

砲兵の経験があるエルティアナは、どう見ても従来の迫撃砲ではないと感じている。

王政府の脅威となる兵器は、巨人用であつても火力制限があつた。

「最新鋭の迫撃砲にしては、やけに古臭いな。実際そうなのだけど」

故に爆発音や精度、威力ですぐに「最新鋭」という名の「骨董品」を持ち出してきたのはすぐに分かった。

手軽に設置できる迫撃砲など厳しく制限されており、たった2種しか存在しないのを知っている!

訓練用と主要都市防衛用の砲しか存在しないからだ!

「姉さま!!壁内に沸いた巨人の半数を討伐しました!!」

「野砲、迫撃砲の間接支援の許可を下す!速やかに巨人を掃討しなさい!」

「イエス、姉さま!!」

「そこは、イエス・マムでいいのよ…そして身体を触らない!!」

「えー」

「えーじゃないの!!」

エルティアナの妹分のラナイ・マクロンは嬉しそうに私情で身体に手を触れながら返答をする。

それを見て彼女は、真剣に物事を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。

一番、そう感じるのはフローラのやらかしの尻拭いをしている時だ。

それでも忠実に任務をこなす部下には違いないので叱るだけで終わった。

『なんだ!?!やたらと手強いぞ?!』

一方、超大型巨人を動かすベルトルト・フーバーは壁内人類の実力を甘く見ていた。

その結果、跪くどころか左腕を集中砲撃で飛ばされてうつ伏せに倒れる有様。そんな無様で無防備のうなじを見逃すわけもなく砲兵たちは既に砲口を調整してきていた。

照準調整をしており、すぐにうなじに砲撃される事になるだろう。

『ハの……!!』

ベルトルトは蒸気を噴き出して元凶を全て吹っ飛ばすことにした。

両足を拘束していた『対特定目標拘束兵器』の矢じりを全て吹っ飛ばした。

しかしそれは、超大型巨人の活動時間を著しく短縮する諸刃の剣である。

「超大型巨人が蒸気を噴き出し始めました!! 砲撃も通用しません!」

「ならば自分、動かないか。地下爆破の信煙弾の合図を出しなさい!」

兵力の大半を地下道や地上から壁の縁に寄せていた一番の要因。

それは、蟻の巣のように張り巡らせた地下道を利用して爆破するからだ。

砲兵には予め爆破ポイントを伝達しており、巻き込まれる可能性を減らしている。

「お待ちください！2個班が超大型巨人と交戦しております」

「私は、待機と厳命した。それを守れぬ者など構ってられない」

血気盛んで士気がある兵士なのだろうか。

自己判断で超大型巨人と交戦している若き兵士達。

実に勇敢で、仲間思いで、人間として立派な志をもつ兵士。

だが、ここでは蛮勇でしかなく、哀れな彼らは無情にも味方に爆散させられる羽目になった。

「……爆破成功しました。足元を崩された超大型巨人は前のめりに倒れました」

「展開していた兵はどうした？」

「全滅しました。少なくとも動く気配はありません」

「そう…彼らは壁外の前線に送っておくべきだった」

単眼鏡で爆破の瞬間を目撃した総責任者は、ただ彼らの冥福を祈るしかなかった。

それと同時にどこかに潜伏している鎧の巨人に警戒している。

もしかしたら女型の巨人の能力者を抱えて逃亡しているのかもしれない。

「どちらへ？」

「異様に静かになった正門へと向かう。ラナイも来なさい」

「はい！お姉さま!!」

現在判明している人類に敵対的な巨人化能力者は4名。

1名は捕らえており、もう1名はそこで転倒している。

そして残りは壁外に居る獣の巨人と、行方不明の鎧の巨人。

だが、ユミルという少女など不確定要素の存在の他にまだスパイがいる可能性がある。

悲観主義者なエルティアナは、正門をスパイに開門されるのを危惧して向かう事にした。

負傷兵を壁内で治療したい

兵站の装備を前線に送りたい

伝令を送りたい

もつともらしい建前でスパイに動かれるほど苛立たしい事は無い。

特に憲兵に扮して行動されれば、同格以上の存在が無ければ無理難題が通る危うさがある。

「お待ちください！ここは貴女が責任者です！何かあったらどう動けばいいのですか!?」

「この場における開門の責任者はこの私。ならばそこに向かうべきだと思わないか？」
「仰る通りです！」

「内扉の責任者は貴公に命じる。私の許可無く内扉を開けるのを一切、禁じる。良いかい？」

「ハッ!!」

ピクシス司令が最高司令官であるならば、エルティアナは最高指揮官である。

常に変動する戦況を読み取り、王政の望む【勝利】の2文字を達成しなければならぬ。
い。

人情で敵性スパイを手助けさせないように殺人をしてでも止めてみせる。

それが3つの兵団の上に居る自分の役割と彼女は自負している。

「よろしかったんですか？野心しかないあいつに任せちゃうなんて…」

「あれは、出世して椅子に踏ん返り返っている方が無害だからあれで良いのよ」

ザックレー総統は、総統局でも異質の存在で、彼の配下は一握りしかない。

エルティアナの部下の大半は、スパイか、野心家か、経歴が欲しい貴族しかいなかった。

だからこそ、その中で建前上とはいえ、トップであるザックレー総統の異質さが目立つ。

そんな彼に忠誠を誓っている彼女もまた、孤児出身の異質の存在である。

さきほどの部下とのやり取りも総統や自分を失脚させようとする【敵】との攻防であつた。

『ああ、鬱陶しい。だから総統局の人間を極力避けていたのに』

彼女も権力闘争に巻き込まれており、人類滅亡の危機にも関わらず足の引つ張りをす

る。

そんな醜い人間の性を嫌でも思い知っており、その点、巨人の相手は楽とも言えた。

「姉さま！光が視え「伏せろ!!」ま!?!」

ラナイが光を目撃した瞬間、尊敬するエルティアナに地面へと身体を押し付けられた。

超大型巨人とは比べ物にならない爆発が直後に襲った。

『ん？ライナーじゃないな？』

超大型巨人は新たな爆発の規模からして鎧の巨人が出現した可能性を排除した。

マールレの特殊部隊によって新手の巨人を出現させたと思うほど爆発の規模が可笑しかった。

そのおかげで、攻撃が止んだので何とか罨から立ち直った超大型巨人は爆発した方向を向いた。

『嘘だろう…!?何を考えているんだ!?!』

超大型巨人もといベルトルトは、その巨人を目撃して絶望した。

超大型巨人の身長は約60m、それは遠望まで見下ろせると言う事だ。

そんな巨人の視界ですら遮る巨大な化け物がそこに居た。

おとぎ話であり、エルディア帝国の大罪の一つとされる伝承に出てくる化け物。

体高40m、全長200mを越える6本腕で、3つ首で尻尾が生えた褐色の化け物がそこに居た。

“アジ・ダハーカ”

それはエルディア帝国で【暴君】と名を馳せるフリッツ102世が生み出した【異形の巨人】

その化け物は、対エルディア帝国の連合国を滅ぼしたどころか、人類の3割以上が死んだ。

それどころかエルディア帝国の領土すら半壊させて2万の巨人軍団を滅ぼした。

『やばいやばいやばい！ライナーとアニを探して逃げない！！』

【九つの巨人】のうちの1つ、【戦鎚の巨人】を継承するタイバー家。

マーレの英雄であるヘーロスと共にエルディア帝国に反旗を翻した救世主。

そんなタイバー家は、密かにフリッツ145世から脊髄液を託された。

曰く、世界を滅ぼす事が出来る【地鳴らし】に唯一対抗できる抑止力であり手段である。

この地に潜入する直前、上官であるマガト隊長に知らされた衝撃的な事実。

その禁じ手の虐殺兵器が戦場に降臨したと知った超大型巨人は逃げに徹した。

「……なにこれ」

マルロとヒッチを引き連れて50mの壁の上に来たフローラはその巨人を見て唾然とした。

超大型巨人が出たと思ってユトピア区壁内に戻ってきたら更にヤバい巨人が居た。そしてなにより不気味な光景を彼女は目撃する。

「笑った……？」

ケルベロスを彷彿させる3つ頭の巨人が獲物を探すように辺りを見渡し始めた。顔を見上げており、まるで壁の上にいる人間を探しているようであった。

その内、フローラを姿を目撃した瞬間、一瞬だけであったが同時に3つの表情が笑った。

まるでフローラ・エリクシアという女がそこに居ると確信しているように。

95話 3つ首の尻尾が生えた変異種

先祖が大虐殺をしていたと知ったら何をすべきなのだろうか。

謝罪、祈り、告発、懺悔、賠償、改竄、隠蔽、伝承、贖罪、自決。

あらゆる手段がある上で1人の男、「王」は最悪の一手を打ち続けた。

「これでよい。我々先祖の犯した大罪は消える事はない」

まず「王」は、自身の思考に反する親族をあらゆる手段を用いて抹殺をした。

次にしたのは、密かに反乱軍を支援し、王家の抑止力を放棄して内戦を悪化させた。

更に手回しで英雄と救世主を造り上げて、自身を「悪」とした。

「ならば我々は被害者の末裔によってこの美しい地上から滅ぼされるべきなのだ」

「王」の自己満足をする為だけに自国民だけで7桁も犠牲になった。

だが、それで彼は現状に満足する事は無かった。

「私は最後に残された楽園へと引き籠る。我々の犯した罪は償いきれないが罪は重ねる事はない」

「王」は、僅かな国民を引き連れて楽園という名の牢獄へと閉じこもった。

被害者が決起して自分たちは裁かれても仕方がないと自覚している。

ただ「王」は、自分の代で滅びる気は無かった。

あくまで自己満足をする為にあらゆる物を犠牲にしただけで我が身可愛さは人一倍あった。

「だから束の間の平和を保つために壁外に、そして壁の中に抑止力を封じ込めた」

被害者視点からみれば【平和への反逆者】である「王」であるが自身は聖人だと自覚している。

だが、子孫はその聖人の血を継ぐだけで滅ぶべき存在だと認識していた。

故に自分の子孫が【平和】への礎になるべきと、それまでの抑止力を【始祖】に作ってもらった。

「今後我々に干渉するのであれば壁に潜む幾千万の巨人によって滅ぼされるだろう」

エルディア人は滅びるべきであるが「王」は自分の世代で滅びる気は無かった。

始祖に頼めばすぐに滅ぼす事ができたかもしれないが、充実した余生を過ごしたかった。

もちろん、抑止力を行使させる気など毛頭なく完璧な対策をしておいた。

とはいえ何かしらの手段で子孫が「地鳴らし」を行使する可能性を「王」は警戒した。

「タイバーク公、もし私の意志に背き「地鳴らし」が発生したらこれを使うとよい」

「……これは？」

「フリッツ102世が生み出した「アジ・ダーク」の片割れである脊髄液だ」

世界を滅ぼした実績がある巨人。

2万を超える巨人すら喰らい尽くした巨人。

始祖の巨人の力すら受け付けず、超大型の巨人の継承者2名の犠牲を払って何とか討伐した巨人。

そんな制御不能で世界を滅ぼす異形の巨人を自身の忠実な配下であったタイバー公に託した。

彼ならきつと、贖罪を拒む子孫を裁いてくれると信じて…。

「穢れた一族め…意外とやるな」

「ささつと脊髓液を射出容器に注入しろ」

マーレの特殊部隊の隊員たちは、悪魔の末裔の奮闘に焦っていた。

一度、壁内に侵入して脊髓液を混入したガスをばら撒いた実績がある彼ら。

今回も料理店に使うお手拭きや洗剤に入れる容器に脊髓液を混ぜて壁内を混乱させた。

しかし、戦況が悪化しており、超大型巨人が討伐される危険性があった。

それを防ぐ為に車力の巨人に装備された荷台にあった脊髓液で戦況を打開しようとした。

「ん？こんな箱に入っていたか？」

「おい！早くしろ！」

「りよ、了解！」

もしもの時にと、持ち込んだ脊髄液が入った箱の中で1個だけ違うな…と男は気付いた。

しかし上官から急かされた結果、特に考える事も無く無駄に嚴重な箱の拘束を解いた。

そして慣れた手つきで脊髄液を容器に移して専用銃に装填をした。

「いいか、撃ち込んだらすぐに物陰に隠れるんだ」

「分かっていますよ」

男は特殊部隊に配属されてから半年しか経過していなかった。

従来なら誰かが追隨して動作確認をしておくべきだが、今は緊急事態。

上官が彼を確認した時には、専用銃を構えた新兵の姿であり問題はなさそうだった。

「あいつを狙え」

「了解」

壁内は大混乱に陥っており、特に兵力が少ない中央部は指揮系統が乱れていた。故に新兵が班から逸れて状況を確認するべき作戦本部に向かつていた。

それに狙いを付けた男は何の躊躇いも無く狙撃した。

「がっ!?!」

地獄すら生温い訓練を修了した男は見事に標的に命中させた。

確認する手間も惜しい男は、すぐに物陰に隠れて次弾を装填しようとした。

「よしー!」

部隊長は目標に命中したのを指差して確認をした。

後は新兵を連れて別のポイントで巨人を出現させるつもりだった。

そこから5秒足らずで巨人化の爆風で即死するとは思うわけなかった。

「クソツ……巨人などに負けてたまるもんか！」

「無理無理！何やってんの馬鹿マルロ！早く逃げようよ!？」

104期憲兵のマルロとヒツチは壁外の前線に居た。

本来は壁の外縁部の哨戒任務であったが投石のせいで離脱するしかなかった。

そして投石が止んで壁に戻ろうとしたら巨人と遭遇した。

「こんなの絶対勝つてこないって……誰か助けて……!？」

馬無し、平地、巨人3体、新兵2名のみという死亡フラグ満載の状況であった。

2人とも巨人の討伐経験はあるが、お膳立てのおかげであって2人で巨人を倒す事など不可能。

手を伸ばしてきた巨人にアンカーを打ち込んで空中を舞うマルロに続いてヒツチも突っ込んだ。

それでも恐怖に耐え切れずに思わず本音を溢してしまった。

「まだ死ぬるか!!」

憲兵団を変える覚悟があるマルロは、シュツルムメツサーを巨人のうなじに振り下ろした。

超硬質スチール製の刃は巨人のうなじを削ぐに特化した刃で斬るには向いてない。

しかし、憲兵団に先行配備された刃は巨人の肉を斬るのに特化していた。

故に熟練兵でなくてもしなる刃に振り回されずに直感でうなじを斬り取れた。

「まだだ!!」

それでもまだ2体の巨人を残している以上、彼は再度攻撃を試みた。

その移動先に巨人が口を開いて突っ込んでくるのを見てしまった。

「いやあああああああ!?!」

ヒッチの悲痛な叫び声が彼が詰んでいる実感を嫌でも感じさせた。

そう思っていたのだが、何故か巨人は倒れ込んで蒸気を噴き出しながら黒ずんでいく。

困惑する2人を狙おうとした最後の巨人も首が両断され頭が地面に転がっていく。

「ひいつ!？」

「おい!?!何してるんだ!？」

「やだやだ!!だから来たくなかったのにいいいい!!」

巨人をも上回る何かが居ると理解したヒッチは着地したマルロの後ろに隠れた。

「ヒッチにマルロ!良かった!生きていたのね!」

しかしその正体がフローラと判明した瞬間、ヒッチは恥ずかしそうにマルロから離れた。

異性として気になっていると彼女に告げていたので、羞恥心が勝ってしまったからだ。

「おい…巨人の首を刎ねたのか!？」

「削ぐ暇すらなかったから頭をぶっ飛ばしてあげたわ!」

「ホント、お前は規格外だな…」

赤い馬に乗馬し直したフローラは双剣を振り回して上機嫌に返答をする。

さきほどまで生死を賭けた戦場だったのに頭進撃が来ただけでこの有様である。

ライリーは双剣を振り回して暴れる自称主人の行動に嫌がって抵抗していた。

「ちようどよかった! 私たち、壁に戻りたいんだけど護衛してくれない?」

「わたくしも壁内に用があったから一緒に行きましょう!」

く。
超大型巨人が出現したと直感で理解したフローラは2人を連れて壁へと向かって行く。

移動の障害になりそうな巨人は殲滅したが、それでも油断できなかつた。

残る刃は、鎧の巨人用の刃セットと、強化刀身・2型の2本。

さきほどの交戦で刃の先端が折れており刃を換装する必要があつた。

「そんなわけでライリー！……ここで留守番をしててね！」

いぎ壁に着いた瞬間、フローラはライリーを壁外で乗り捨てた。

厳密にいうと正門を開門できず、リフトもないので放置するしかなかった。

そうとは知らず汗血馬のライリーは自分が見捨てられたと勘違いしてパニック状態に陥った。

仕方なくフローラは「彼女」が落ち着くまで毛を撫でてたりわざと噛まれたりした。

「行かないのか？」

「帰りたいんだけど壁内も巨人が居るし、フローラが来るまで待つといた方が安心だから……」

ここはウォール・マリア、支配者である巨人が闊歩する危険な領域だった。

そんな中でコントをやっているのかと思うほど馬鹿をやっている女と馬。

死を恐れて泣いていたヒツチは、精神が落ち着くまでコントを見るつもりだ。

「もう…こんな事をやっている場合じゃ…」

いつも以上に文字通りに食い下がって来るライリーの対応に苦戦しているフローラ。今回は、そのおかげで命を救う事となった。

落ち着いた隙を見計らい彼女は、ライリーに持たせた刃6本とガスボンベ2個を鞘に装填した。

その直後、地面を揺らがすほどの地震と鼓膜が破れそうになるほどの爆音が到来した。

衝撃の凄まじさに人間、巨人問わずに転倒するほどの規模であった。

「ごぼごぼっ!!げぼっ、な、なんだ!?!」

衝撃が止んで少し経った後、砂と血塗れになったマルロは地面から起き上がった。

頭痛と耳鳴りを我慢しつつ状況を確認しようと思上げるとフローラが壁を登ろうと
していた。

「置いていくなよー!」

「わ、私も行く！」

マルロの声を聴いて立ち上がったヒツチも鼻血を気にせず、彼らの後に続いていた。

そして50mの壁の上でフローラ一行が目にしたのは、衝撃的な光景であった。

「嘘……なんて大ききさなの!？」

座学をサボりがちだったヒツチですら超大型巨人という名は知っている。

人類を守る壁よりも高い身長で、シガンシナ区陥落の元凶。

そうだとしても目の前に居る巨大な化け物の事では無いと分かる。

巨人と言うよりは蜥蜴に近いようで全身が鱗で覆われている化け物ではない。

「……なにこれ」

フローラは超大型巨人とは遭遇済みだし、その正体も知っている。

ただ、それ以上のサイズの巨人は想定していなかった。

頭進撃であつても思考を一時的に停止するほどの緊急事態であつた。

「笑つた…？」

ヒッチやマルロは想像を絶する巨人を目撃して怯えているがフローラはそれどころではない。

またしても巨人が自分を見て笑つたのだ。

意志のないはずの巨人が誰かに操作されているように。

「ヒッチー！マルロ……つてもう伏せてるのね」

「こういうのは専門家の出番でしょ！」

「そりゃあ、そうですけど」

フローラが警告するまでもなく壁上固定砲の輸送に使うレールにしがみ付いて伏せる2人。

凡人なら固まって動けないので即座に対応できる彼らは腐つても軍人である。

「砲撃開始!!」

一方、壁内の砲兵部隊も爆発から立ち直っており集中砲撃を開始した。

だが、超大型巨人にすら有効打に程遠い以上、大したダメージを与える事はできない。

「なんでこんな化け物が!？」

「とにかくここで仕留めろ!!」

兵士の努力も空しく3つ首の変異種は6本の手と4本の膝を地に着きながら這い始めた。

ゆつくりとだが確実にウォール・ローゼに繋がる内扉へと進んで行く。

あまりの巨体のせい、鱗に見える肌から熱風が噴出していた。

「野郎お！内扉に向かってやがる！」

「こいつも能力者か!？」

とりあえず応戦はしているものの誰もが絶対に勝てるわけがないと実感している。

幸いにも動きは鈍く巨体が故に人間の存在に気付いていないようであった。上手く誘導すれば、なんとかなる。

そんなユトピア区に集った守備兵たちの思惑はすぐに破綻する事となる。

「嘘だろう!?!」

誰もが目を疑った。

3つ首の化け物は、ユトピア区に残った巨人を手で掴んで捕食し始めたのだ。

巨体過ぎて人類の脅威である巨人ですら奴からすれば、ただの「一人」に過ぎないのだろう。

両手で掴んで頭から咀嚼していき残りの双頭も同じ事をやり始めた。

「巨人が巨人を食ってやがる…」

「奇行種なのか……?」

こつそりと変異種を追ってきた偵察兵たちは、ただ物陰から見ている事しかできない。

砲手も未知なる行為に魅入ってしまったのか砲撃は止んでいた。その隙に超大型巨人はゆっくりと兵団支部の跡地に向かって行く。これから何が起こるか分かっている様に。

『早くしないと世界を滅ぼした「アレ」が来る!!その前に…』

ベルトルトは逃げに徹した。

もしあの遅さで巨人を捕食するなら3日で2万の巨人など滅ぼせない。

伝承を知っているからこそ…それが来る前に逃げるしかなかった。

そうとも知らず1人の兵士は、あの化け物を狩る気満々である。

「兵長！巨人化の許可を！」

「駄目だ。まだやるべきではない」

「でも…!!」

「忘れたのか？まだ鎧の巨人が残っているんだ。その有り余る気力は温存しておけ」

エレンはすぐにも巨人化してあの化け物を止めるつもりだった。

ところがリヴァイ兵長は、それを窺めてひとまず様子を見ていた。自分ならあれを囿にして鎧の巨人を運用すると考えているからだ。迂闊に動けば逆に戦況が悪化すると分かっているからこそ堪えている。

「どうも奴らの作戦じゃねえな。出現するタイミングが可笑し過ぎる」

とはいえ、あまりの唐突な出来事にリヴァイは必死に敵の真意を探っていた。敵の特殊部隊の隊員が盛大なミスで出現させたなど思いつくはずもなかった。

「兵長、あの巨人は熱量が凄まじいようです通り道は焼け野原のようでした」「チツ！厄介だな。どうやってあいつに近づくべきか」

リヴァイ班の紅一点、ペトラの報告を聴いてどうやって討伐するかりヴァイは思案する。

普通の巨人ならうなじをさくつと削げば良いが、あれは変異種。

弱点部位を潰さない限り、うなじを狙って攻撃しても効果が無い。

更にその弱点部位が発見したとしても熱風のせいで近づけない。

「オルオ、単眼鏡はあるか？」

「はい、あります!!」

「ちよつと借りるぞ」

オルオから借りた単眼鏡で50mの壁の上から見下ろして巨人の弱点部位を探す人類最強の男。

だが、体表が鱗の様に覆われており、蒸気も出ているせいで探すのに一苦労しそうだった。

幸いにも巨人の捕食に夢中になって動きが鈍い好機の間に見つけるつもりである。

「あれは…フローラか」

予想通りにエレン以上の死に急ぎ娘を発見して彼は呆れるしかなかった。

しかし、何かを発見したのか彼女は慌てて地下道に逃げ込んだのに注目した。

「何かあるのか？」

わざわざ装填済みのブレードを投げ捨ててまで逃げ出した女。

奴の性格上、少なくとも用も無く刃を捨てるのに違和感があった。

何事かとリヴァイは視界が狭くなる単眼鏡を覗くのを止めて変異種を観察した。

「背中に針を生やしてやがる…」

よく見ると全長200mを越える化け物の膨らんだ背中に山ほどの針が生えている。人体ではありえない構造だが、針を構成している物質自体は見たことはある。

『あれは結晶体!? 面白い!!』

硬質化自体は女型の巨人との交戦で存在自体は知っていた。

だが、この世界では身体の部位を守る盾だけでないのは身をもって知っている!

「総員壁外に退避!! 急げ!!」

リヴァイの怒声を聞いてペトラとオルオは速やかに壁外へと飛び込んで行った。続いて情報収集したハンジ分隊長とエルヴィン団長も壁外へと飛び降りた。

「死にたくねえなら俺の指示に従って飛び降りろ!!」

リヴァイは今なお動けない駐屯兵の班員たちに激を飛ばして近くの兵を突き落としたりした。

そのままの勢いで彼自身の落下した兵を追うように50mの壁から落下した。

一方その頃、大きな的と化した超大型巨人を倒れ込んで蒸気を噴き出しながら塵になっっていく。

そのままだとただ的だと分かっているベルトルトは巨人化を解いたのだ。

「もう来るのか!?!」

巨人化を解いてへトへトなベルベルトの視線の先には大気を吸っている変異種が居た。

腹が地面に垂れてもなお大気を吸収しており、背中が剣山を作るように反っている。

おとぎ話に出てくる世界を滅ぼす技の1つを繰り出そうとしているのは直感で理解した。

幸いなのは、この状態になると動かなくなるがそんな事は些細な事だ。

「あああああああああ!?!」

慌てたベルトルトは、敵勢力が地下道を爆破して空いた大穴の中に飛び込んだ。

それと同時に息を止めた3つ首の変異種は、貯め込んだ大気を蒸気に変えて噴出した。

その勢いで背中に刺さっていた硬質化の針千本が音速を越えて天空へと駆けていく。天から降り注ぐ物が世界を滅ぼす

“アジ・ダハーカ”を語るには避けられない。

鋼鉄よりも硬い背中から発生する幾千万の結晶で生成された針が一度天空に射出される。

放射上に飛んだ針は大洋をも超えて破片をばら撒きながら電のように地上に落下する。

遙か後世で開発される『クラスター爆弾』の概念すら覆す大量殺戮兵器である。

「何をしたんだ…」

体高40mで全長が200mを越える化け物を討伐しようと駆けつけた駐屯兵の部隊は気付かない。

さきほど天空へと撃たれた針が空中分解して鋼鉄より硬い物質が音速を越えて落下する。

「背中に生えた針を放出したのか!？」

「何だそれ?」

「俺に訊くな!!俺だって分かんねえんだよ!!」

女型の巨人の親指から生えた硬質化した爪、たった4本分でストヘス区が半壊した。今回は質量も数も段違いで、わずか1本の針で王都ミットラスを全壊できる。

そんな事気付く事はできないし、気が付いた時点で手遅れであった。

天から降り注ぐ物が世界を滅ぼす

それは比喩でなく傍れた針千本が天空で分解して質量兵器として落下してくる。

握り拳ほどの大きさの結晶が10万個以上もゲリラ豪雨のように降り注ぐ。

更に厄介な事にその鋼鉄より硬い結晶が激突しても無傷の装甲が異形の巨人を守っている。

伊達に唯一【地鳴らし】に対抗できる異形の巨人と畏怖されない。

「総員退避いいいいい！さきほどの【針】が落下してくるぞおおお!!」

「に、逃げるってどこに!?!」

「どこでもいい！とにかく屋外に居れば即死だあああ！うわああつあが?」

ついにその脅威に気付いた士官が退避命令を出すも既に後の祭り。

天の川にある星々が流星群としてユトピア区に落下する隕石のように結晶が降り注ぐ!

天から降り注ぐ硬質化で生成された結晶は、ただひたすらに破壊を望んだ。

運が良かったのは、熱源で発生した上昇気流によって針の大半が遥か北東へと流れていった。

ユトピア区に降り注いだ結晶は、全体の1%も満たない。

だが、ユトピア区の中心部にある物を全て滅ぼすには充分であった。

「ぎゃあああああがつ?!」

「嫌あああああつ?!」

「助けてくれ!建物が崩れ…うぎゃあああああつ?!」

落下した結晶体が建物を貫通して地下道へと減り込む。

激突した衝撃で建物の土台が崩壊し宙に舞って避難した兵ごと地面に叩きつけられ潰れる。

大砲を100門掻き集めて一斉に砲撃してもこれほどの衝撃は出ないだろう。

人も建物も巨人ですらもまるで「死」が具現化したように平等に落下地点へと降り注ぐ。

散弾が散弾となり、一度地面に落下しても跳弾する破片でひとまず生き延びた生存者を襲う。

ただ1体、その惨劇を生み出した異形の巨人のみ自慢の装甲で全ての結晶体を弾き返した。

「グオオオオオオオオオオオオッ!!」

何事も無かったように3つ首の異形の巨人は、この世に誕生したのを認識させるように咆哮した。

次にその巨人が向かったのは、ウォール・ローゼとユトピア区を繋ぐ内扉であった。さきほどまで地上に居た兵は、肉塊どころか地面が崩れ去って崩落していた。

だが、壁上に居た者や壁に備え付けられた建物に居た者は無事であった。

「ま、待って……く、くるな！来るなああああああああ！！」

上官であるエルティアナから内扉の指揮を譲渡された憲兵は必死に大声で叫んだ。

その声は、しっかりと巨人に届いており、更に事態を悪化させていると気付かずに。

右脚を結晶体で潰された憲兵は視界を防ぐように両手を前に出して必死に後退りした。

だがその行為は無意味だった。

「嫌だあああああ！！私はこんな辺鄙な地へんびで！志半ばで死ぬのだああああ！！」

器用に4本の腕で3つの頭に瓦礫や人だった物を口に詰めていく。

もし、この屍や肉塊を喰い尽くしたら南部にあるオルプト区を目指す事であろう。遅かれ早かれこの巨人がここに留まっていられるのも時間の問題だった。

「くたばれ化け物が!!」

1人の兵士が大声で叫びながら壁上固定砲を3つ首で尻尾が生えた変異種に向かって砲撃した。

正門がある壁の上から放たれた砲弾は、反対側の内扉には届かなかった。

されどその砲撃の音は、静まり返ったユトピア区全体に響いた。

その音は、変異種にも届いており、3つの首が音がした方を向く。

「い、い、い、これ以上は行かせん!!私の屍を越えてからにー!しろ!!」

砲撃した兵士は、駐屯兵团第一師団精鋭部隊の部隊長、キッツ・ヴェールマン。

小鹿と称された臆病者は、世界を滅ぼした実績のある巨人に喧嘩を売った。

声自体は届かなかったとはいえ、そこに捕食できる存在が居ると理解させた。

「私はここだ！喰えるもんならいつ！」

更に大声を出した瞬間、一つの頭から食べた瓦礫を噴き出して壁上固定砲に向かって飛ばした。

胃液と共に飛んでくる瓦礫をキッツ隊長は壁内に飛び降りて回避する。

回避できなかった壁上固定砲は瓦礫に激突して音を立てて壁外に落下していく。

「俺達はここだ!!」

あえて双剣同士を激突させて音を鳴らして気を惹こうとする兵士は後方から飛び出す。

ウォール・ローゼに南下させないように生存した兵士は何とか手を打とうとした。そんな彼らの願いは叶ったのか変異種は南下する事は無かった。

「つていくら何でも早過ぎ……ぎゃあああああ!」

刃を当てて音を鳴らした兵士を変異種は掴み上げて口内に放り投げて咀嚼した。

巨人の本能に基づいて救援に駆け付けた兵士を片っ端から捕まえて捕食を開始した。

「オルオ、ペトラやれるか？」

「はい兵長、私はまだ動けます！」

「大丈夫です！」

壁外に飛び降りた後、壁にぶら下がっていたリヴァイ班は黙ってそれを傍観するわがなかつた。

リヴァイは、自分が突き飛ばした兵士を抱えながら部下の状態を確認していた。

返答から特に問題ないと判断し、呆然としている兵士を地面に置いて壁を登った。

「兵長、オレも参加させてください」

「エレン、お前の相手は鎧の巨人だ。それまで力を温存しておけ」

上官から参戦を却下されたエレンは齒痒かった。

こうやって巨人化を制限されており、自分の力不足を嫌でも実感できるからだ。

「役割分担って奴だ。いつ、鎧の巨人が出現してもおかしくないからな？頼むぜ？」
「オルオさん、オレは…」

「お前しか鎧の巨人に有効打を与えられないんだ。その重要性を理解してるのか？」
「……はい」

オルオもエレンの気持ちはよく分かっている。

だが、まだ巨人化するタイミングではない。

いつの間にか消失している超大型巨人、そして未だに姿を見せない鎧の巨人。
不確定要素が多すぎて博打はできずに慎重に行くしかなかった。

「そんな暗い顔をするなって！すぐにお前の力が必要になるうう!？」

「オルオ！戦闘前に舌を噛まないで！」

「ふははっ!!」

相変わらず舌を噛む老け顔を更に響めるオルオ先輩の顔を見てエレンは落ち着いた。
自分は兵士だという事を思い出して精一杯責務を果たそうと考えた。

「精銳班の被害報告を!!」

「5名軽傷! 1名が右目を失明しました」

精銳班のリコ班長の問いに対して部下が状況を報告する。

1名は気の毒ではあるが、さきほどの攻撃で誰も戦死していないのは奇跡であった。獣の巨人を討伐する為に大半の兵が地下道に居たのが功を奏した。

「戦える者は私に続け! 奴を討伐しなければ人類に未来は無い」

「おいおい、死に急ぐなよ。まずは巨人の動きを把握するべきだ」

死に急ぐ女班長を窘める様にイアン班長は右肩に手を当てて落ち着かせた。

「班同士の連携が必須って事だ。イアンや俺を無視するなよ」

ミタビ班長も同僚であるイアンに同意した。

それを聴いてさきほどの行動をリコは恥じながらも頼もしい仲間に囲まれて気力を

回復させた。

「まずはあのか物の動きを止めるべきだ」

「眼球を潰すだけでも骨が折れそうだがな」

「じゃあ尻尾を巻いて逃げ出すか？」

「あの巨人の尻尾を巻くだけで英雄になれるぞ」

イアンとミタビは軽口を叩きながら尻尾の生えた変異種を見る。

まるで蜥蜴のように感じられる姿から鎧の巨人のように装甲があると判断した。

まず視界を潰さない限り、有利に立てないと判断し、作戦を立案し始めた。

その同時期に手当を受けている憲兵が居る。

「おいおい！もうちよつと丁重に扱ってくれよ！負傷兵なんだぞ俺様は!？」

「こめかみに石が掠っただけでしょに……ここまで包帯を巻く必要があるのですか？」

「ひでえ！怪我人に対して辛辣過ぎる！お前らもそう思うよな!？」

対人立体機動部隊の隊長、ケニー・アッカーマンは副長のカーフェンに手当を受けて

いる。

一見ミステリアスな女性と見せかけて心は意外と熱血な女であるが普段は辛辣である。

そんな彼女は、大した怪我では無いのに大げさに包帯で顔を隠そうとする上官に呆れていた。

「いいか？俺は表舞台に出るべき人間じゃねえんだ！下水道を這う鼠を喰う猫…」

「はいはい、だから包帯で顔を隠してあの巨人を討伐したいんですよ？」

「そうだとも！この俺様をコケにしておいて…」

「少し黙っててください」

「ひでえ！フローラの方がまだ乙女心があるぞ」

ケニーは温泉が有名な工業都市であるユトピア区をめちやくちやにした巨人を討伐する気である。

部下からは呆れられたが、自分の夢を叶える為には、あの化け物を討伐しなければならぬ。

ここまで来てちやぶ台をひっくり返されるのを傍観する気は無かった。

という事情は分かるが、暴れるせいで包帯がうまく巻けないのでカーフェンは叱責していた。

「お前ら、人目に付かずに攻撃する準備はできているよな？」
「狙撃兵くらいしか動員できませんが援護はできます」

対巨人用のライフル銃であるRF-01 クリーガーカスタム。

対巨人用の携帯型カノン砲、ハードカノンmk-2。

元は対人装備だったのを無理やり巨人用の装備にしたものである。

「おいおい！前よりチビになってるじゃねえか。今度は数十倍の巨人が目標だつていうのに！」

「安定性を考えて軽量化しました。駄目だったら次回までに改良しておきます」

前者は銃身を短くして威力を抑える代わりに狙撃の安定性と移動に支障がないようにした。

後者は銃身から全身に与える衝撃を逃がす為にわざと銃身と短くし砲口も小さくし

た。

長らく進化が停滞していた通常の立体機動装置と違って発展途中の装備。何が起こるか分からない以上、コストを度外視して安定性を狙っていた。

「そういう隊長も短剣を装備してるじゃないですか」

「あつたりめえよ！ やつぱ俺様は短剣が似合ってる。…にがつ?! 油塗ってやがる!!」
「なにやってるんですか」

ケニーは、士官用に先行生産された短剣型のブリッツメツサーの刃を舐めた。

通常のスナツプブレードには防錆油が塗られていないが、今回は新品と言う事で油が塗ってある。

カッコつけて刃を舐めた結果、すぐにケニーは口内の違和感を感じて吐き出した。唾を撒き散らして必死に油を吐き出している上官を見て「汚えな」と思う隊員たち。それでも彼らは、鋼よりも！ 王政府よりも！ ケニーに忠誠を誓っている。

「気を取り直して行くぞお前ら！ あのでかい的で試験運用だああああ!!」

「ハッ!!」

誰もが一丸となってユトピア区を崩壊させた巨人を討伐しようとしていた。

もつともその新装備のある意味発端となった元凶はまだ地下道を抜けられてなかった。

「やっと見つけたわ！」

フローラ・エリクシアは地下道に逃げたが瓦礫の下敷きになりそうで酷い目に遭っていた。

あくまで地上よりは安全なだけで、崩落すれば生き埋めにされる危険地帯には変わらない。

何とか窮地を脱したものの瓦礫で地上に出れずに必死に地上に出るルートを探していた。

そしてようやく穴から抜け出す事に成功し、お天道様が照らしてくれる地上へと出れた。

「あっ！フローラ」

「ミカサにジャン！無事だったのね」

「そういうお前は……出血してるが無事みたいだな」

「もう少しわたくしを労わってくれない？」

「訓練時代を思い出せばその程度の怪我なんていつもの事だろう？」

「そうですけど……」

フローラを出迎えたのは工業都市から廃業都市になったユトピア区の惨状。

そして刃を構えて巨人を狩る気があるミカサとそれを止めようとするジャンの姿であつた。

「あいつを削いでやる！フローラも手伝って!!」

ミカサはエレンに危害を……否、大切な居場所を奪おうとする巨人を討伐する気だつた。

それを見てジャンは愛しの女の子が死地に向かおうとするのを必死に止めていた。

だが、フローラの姿を見た瞬間、その気持ちは吹き飛んだ。

根拠は無いが、頭進撃娘が居ればミカサは生還できると信じてしまう不思議な感覚が

あつた。

『クソ、情けないな……ここで男を魅せればみんなオレに惚れると思うんだが……』

ジャン・キルシュタインは、自分の無力さに嘔み締めた。

大好きな女の子が勝ち目が無さそうな巨人に向かって行って、自分は見送りしかできない。

必死に悩んだが、自分にできる事をしようと考えた。

『あの死に急ぎ野郎を守りに行くか』

指揮系統が崩壊した今、敵前逃亡しない限りは罰せられる事は無い。

ミカサの次にエレンの顔を思い浮かべたジャンは、エレンに悪態を突きに行こうと走り出した。

それは、プレッシャーに押し潰されそうなエレンの心を救う事になった。

『何でいつもわたくしの進む道はこんなに困難を極めた山道なのかしら?』

こうして、人類最強の部隊が結成された。

狙うは、最強の異形の巨人である「アジ・ダハーカ j r .」。

それはともかくフローラは強敵しか当たらない不運な人生を心の中で恨んだ。

96話

最強の異形の巨人

“アジ・ダハーカ jr.”

“戦

「こいつは巨人というよりとかげ蜥蜴だな……」

人類最強の男、リヴァイ兵士長は、凶体がでかいだけではない3つ首の巨人を見てそう感じた。

全身が鱗で覆われて尻尾が生えており、うつ伏せの姿勢からとかげ蜥蜴を彷彿させる。だからどうしたと彼自身でも感じていたが、その思考が功を奏した。

「クソが！」

変異種は両手で地面を固定して踏ん張って身体を急旋回させた。

そのせいで振り回された尻尾が瓦礫を吹っ吹っ飛ばしてリヴァイの居る場所に飛んでいく。

立体機動をしたくても瓦礫の山にアンカーを突き刺すのを躊躇うせいで走るしかない

かった。

想像より機敏な巨人のようですぐに体勢を立ち直し、兵士が居る場所に飛び掛かった。

「チツ！」

今度は彼は立ち止まって障害物になりそうな瓦礫にしがみ付く！

その直後に大きな衝撃と共に瓦礫や硬質化で生成された結晶体、肉片が周囲に飛び散っていく。

体表から噴き出す熱風により加熱された物体が吸い込まれるように地面に激突する！

その後、悲鳴と表現できない断末魔の叫びが壁内に響かせており、嫌でも死が実感でききる。

「兵長、無事ですか!?!」

遅れて駆けつけて来たペトラの問いに頷いたりヴァイであったが、逆に言えばそれし

かできない。

まず巨人の体表を埋め尽くしている鱗にアンカーが刺さらないと分かってしまったからだ。

そうでなければ、結晶体のゲリラ豪雨の直撃を受けても平然としていない。

更に接近するだけで巨人が発する高熱に炙られており、すぐに自分が全身火傷で死ぬのが分かる。

『このままじゃ近づくだけで丸焦げだ。何か手はねえか!?!』

リヴァイは周囲を見渡すと所々で水が噴出しているのを発見した。

地上どころか地下道を貫通した結晶が水道管をぶち抜いてそこから水が漏れているのだろう。

潔癖症の彼からしたら不本意ではあるが、きたねえ水浴びをしても熱から身を守る必要がある。

「兵長！俺に行かせてください！弱点部位を特定してみせます!!」

「オルオ、班だという事を忘れるな。単独で突出した行動は許さん。特に未知なる化け

物にはな」

「申し訳ありません」

「まずそのきたねえ水で熱から身を守る！ 気付かれねえうちに行くぞ」

「ハッ！」

今のやり取りで巨人に気付かれたか冷や汗ものであったが、幸いにも気付いて無さそうだった。

ただ、リヴァイは変異種の動きが可笑しいのに気付いている。

思い出したかのように人間を捕食しているようで、無垢の巨人を演じている感覚がしたのだ。

悪い予感だけは的中する彼ではあるが、すぐにその考えを放棄して部下と共に水源に向かった。

「あーあ、何で俺には優しい部下はいねえんだよ」

ケニー・アッカーマンは部下から水を掛けられて全身が水浸しである。

絞れば2しくらいの水が出るのではないかと錯覚するくらいだ。

もちろんあのクソでさえ化け物が発する熱から身を守る意図があると分かっている。とはいえ、無言で真正面から水をぶっかけられるのは嫌に決まっている！

「ヒューー！ベイビーにしては成長がはええな！パパもママもいねえのに独り立ちしていきやがる」

ケニーが見たのは、巨人が握り締めた兵士を地面に何度か叩きつけてから食事をする光景だった。

そこから少しばかり視線を逸らすと成長したりヴァイと部下らしき2名の兵士が見えた。

さきほど思わず悪態を付いたのは、その賢明で忠実そうな部下が羨ましいと思ったのもある。

『バレたか!!』

ケニーはアンカーを瓦礫に打ち込んでその場から飛び跳ねたと同時にワイヤーを巻き取る！

身体を捻り目の前から突っ込んでくる10本の硬質化の爪を回避した。

最低でも1kmの距離があると思ったが、あまりの巨体のせいで遠近感覚が狂っていたのだろう。

むしろ彼は発見されてから3秒足らずで両手の爪が自身の居た場所に到達したのを注目した。

『普通の巨人の行動じゃねえぞ?!中に誰か居るのか?!いやそれよりも…爪攻撃か』

肉に齧りつく為、そして爪を伸ばしてきた両手、残りの両手は自重を支えるのに精一杯な感じだ。

思ったより隙が無くて近寄れないのを情報分析で更に判明しただけで終わった。

不意打ちをして憲兵の喉を短剣で掻っ切ってきた彼からすればどうしようもない巨人である。

だからといって自身の夢を諦めておらず、その夢を砕こうとする巨人を討伐する気満々であった。

『あの嬢ちゃんは、まず弱点部位を削ぐ必要があると言ってたな』

フローラ・エリクシアを王政府の命令で抹殺しようとしたらいつの間にか友達になっていた。

今考えても何で暗殺者と標的が仲良くしているのか彼にも分からない。

ただ、肝心な時に頼れるのと話をしていておもしろえ女というのは大きい。

その頭フローラ100%によるとどっかに白いの弱点部位があるはずだ。

「まあ、そうなるよな……こっちに来るんじゃねえ!!」

などと呑気に考えていたら体高40m、尻尾も含めれば全長280m越えの化け物が向かってきた。

さつき存在をバレている以上、襲撃されるのは当然ではあるが彼からすれば理不尽だった。

だが、それは好機を狙っていた暗殺者だった男には好都合である。

幸いにも援護してくれそうな連中が居たのだ。

ケニーを狙って駆け出した3つ首の巨人は後方で鳴り響く音響弾に足を止める。

「速やかにこの巨人を討伐せよ……ここで逃がせば人類は滅びるぞ!!」

イアン班長の魂の叫びが負傷したり怯えていた兵の原動力となる。

これ以上の悲劇を止める為に蟻のように彼らは一丸となり巨人を襲撃していく。

無謀にもアンカーを突き刺し飛び掛かろうとした兵士。

だがゲリラ豪雨のように天空から落下する結晶体を無傷で耐えた鱗はそれを阻む。

「クソツ！弾かれた!!」

「狙うのは関節部分だ！鱗を狙っても意味がねえぞ!!」

少しでも足を止めれば、体表から噴き出している熱風に焼き尽くされる。

近づくだけで引火性がある物質が発火をし始めて業火のように辺りを焼き尽くす。

それでも彼らは、何とか討伐しようと立体機動で飛び掛かる。

「まず一つ!!」

1人が首にアンカーを突き刺すのに成功して立体機動で滑空する。

目標は、うなじ部にある縦1m横10cm、どの巨人でも共通の弱点である。逆に言えば全長200m越えの巨人であつてもそれは変わらない。

「弾かれた!?外れだあああがつ」

とりあえず双剣で削ごうとしたが刃が弾かれて失敗を悟る兵士。

実際は、弱点部位を何とかしないとうなじへの攻撃が有効にならないのを知らない。座学で習っていないから仕方が無いと言えるがここでは命取りとなつた。

「畜生!やられた!!」

「そんな事言つてる場合じゃねえ!逃げろおおお!!ぎゃあああああ!!」

変異種は、アンカーを突き刺すと前転や後転をする癖がある。

そのせいで体高40m、全長200mが当たり判定となつて付近を転げ回つた。

接近した勇敢な兵は全滅し、遅れた後続班や指揮官の士気の低下をさせる結果となつた。

「これじゃ近づけない！モブリット！何か手はないか!？」

「やはり砲兵に支援砲撃してもらうしか…!!」

「そんな事をしたら壁を突破をされるぞ!!やはり精鋭班に賭けるしか…」

ハンジ分隊長は、何とか巨人の動きだけでも止めたいが案が浮かばなかった。

副官のモブリットの案はもつともだが、あまりにも巨体過ぎて壁を突破される危険性がある。

「いつその事、正門に誘導してウォール・マリアに向かわせては?」

「駄目だ!ここで討伐しなければ更に犠牲が増える!!何か手は…」

寵臣のニファの案も先延ばしの上に逃がせば更に厄介になりそうである。

だからといって放置すれば、あの結晶の雨が再び降り注ぐ可能性に危惧している。

「とにかく眼球を潰して視覚を奪うしかない!」

「すぐに兵達に伝達してきます」

「頼むぞケイジ!」

足止めすら不可能である以上、せめて視覚を奪うしかできない。

ただ、眼球は何かの物質で覆われており、刃で突き刺すのが難しそうだった。

「お待ちください！我々の刃では突き刺すのは難しいのでは？」

「確かにそのままだと突き刺すのは無理だろうね」

超硬質スチール製の刃。

それだけなら刺さりそうだが、うなじを抉るのみに突出した特殊な刃で刺すのに向いていない。

アーベルの危惧は、巨人研究の先頭を走るハンジだからこそ分かっている。

それこそフローラが身に着けていた短剣型刃ではないと効果がなさそうだった。

「ならば刃を折って鋭利にして突き刺せばいいじゃないか！」

「確かに！すぐに情報伝達をします！」

「私も行きます！」

直属の部下であるケイジとアーベルを見送るハンジ。

ニファの心配そうな視線に気づいて声をかけた。

「大丈夫だよ！調査兵团だけなら負け続きだけどここにはみんなが居る。きっと勝てるよー！」

無理やり作り笑いで励ましているハンジであったが、すぐに笑みが消える事となる。

何故なら再び背中から硬質化で生成された針が生え始めたからだ。

「オルオ！ペトラ！急いで眼球を潰すぞ！！」

「はいー！」

同時刻に同じ光景を目撃したりヴァイは、すぐに行動に移した。

しかし、それを嘲笑うように巨人は尻尾を振り回してくる！

動きが予想できない上に巻き込まれた瓦礫や砂埃が彼らを襲いかねない。

『近寄れねえ……』

スリーマンセルで接近していくリヴアイ班であるが、瓦礫を利用して接近するしかない。

巨人にアンカーを突き刺した末路を知っているし、そもそも刺せる場所が極小である。

おかげで班の機動力が生かせなかった。

「兵長！ フローラが結晶体にアンカーを突き刺して行きました！」

「チツ！ その手があつたか！」

一方、頭進撃は背中に生えた結晶の針にアンカーを突き刺して宙を舞っていた。

実は彼女が結晶にアンカーを突き刺すのは初めてでは無かった。

ストヘス区の女型の巨人戦で親指から生えた「爪」にアンカーを刺した経験がある。

『まるで結晶の森ね』

1本で全長10mはありそうな結晶の針。

その中は意外と熱風は吹き荒れておらず、火傷をする事も無く掻い潜っていた。

針の射出は貯め込んだ大気を装甲の蓋のような弁を開ける特性のせいかもしれないな
かった。

詳しい事情など分かるわけでないが、視界から隠れるのにも好都合であった。

『あぶなっ?!』

しかし針が生えて来たという事は、そこはいつ串刺しにされても可笑しくない場所である。

空間認識能力や立体機動術だけではなく一瞬の皮膚の変化を見逃さない観察眼も必要だった。

現に自分の後方に居た兵は事故死したか、一旦退くなりして全滅している。

『さて、弱点部位はどこかしら?』

フローラの目的は弱点部位を搜索する事である。

普段の変異種は裸であるので、刺青を追って行けばすぐに弱点となる器官が発見できた。

この巨人は蜥蜴のように全身が鱗で覆われているので刺青が全く見えなかった。

ただでさえ蒸気のせいで見づらいのにカモフラージュされているので発見するのが困難過ぎた。

『何か関連性は無い……？』

闇雲に搜索しても発見できないと理解したフローラは結晶にぶらさがって思考に耽る。

今までの戦闘経験を超高速で回想して、何かヒントを得ろうとする。

30秒以上経過しても何も思いつかずに溜息を吐きそうになった時、戦況が動いた。

「命中しました！」

「次弾装填を急げ!!」

「いつでも撤退できるように準備しな。もしかしたら今ので気付かれたかもしれない」

駐屯兵団の砲手による砲撃で気が取られた隙に対巨人ライフル銃で眼球を撃ち抜いた。

だが、歓喜するにはまだ早く、残り5つの眼球を潰さなくてはならない。

副長のカーフェンは、決して油断せずに崩れ掛けた建物から顔を出して警戒していた。

「まだ気付かれてませんか？」

「今のところは…目撃者が居ないと良いのだけどね」

対人立体機動部隊の辛い所は、他の兵団に存在がバレるのも厳禁な点だ。

元々調査兵団に対抗する為に成立したので、兵器や組織の存在を伏せる必要がある。

それにも拘わらず王政が前線に投入した所を見ると完全に焦っているのが分かる。

「弱点部位は判明したの？」

「それらしき物は発見しました…ただ」

「ただ？」

彼女は部下の口もごりに気になった。

明らかに狙いにくい所にあるのは明白である。

「歯茎にあるんです！あんなピンポイントで狙えませんよ!!」

慌ててカーフェンが単眼鏡で巨人の口を覗くと時折見える歯茎がその器官だと判明した。

巨人の口内は完全に盲点であると同時に接近しないと狙えないのが問題である。ブレードを装備した兵や砲兵がピンポイントで口内の歯茎を狙うのは難しい。だからといって自分たちが動けば、王政に逆らう事となる。

『あの王政府なら反逆しても…いやダメか』

別に王政府自体はどうでも良いがそれだと上官であるケニーの夢が叶わない。どうしようもない自分達を導いてくれた彼の為を考えるとできなかつた。

「グラントツ！弱点部位が3つの口内にある歯茎だと伝えろ！」

「了解！」

この中でスキンヘッドでゴーグルを付けたグランツのみが通常の兵服を羽織っている。

ケニーと自分たちの連絡要員にしていたとはいえ彼しか伝達する事ができない。

いつ、あの結晶を天空に撃ち込まれても可笑しくない状況下で彼に頼るしかない。

「事前に情報があればこうならなかったんだけどね」

「カーフェン……」

「カノン砲班と狙撃班でこっちに惹きつけるからその隙に伝達して」
「分かりました」

グランツが近くにあった穴から地下道を通じて移動を確認した一同。

安全地帯に行つたと実感できた頃に集中攻撃を仕掛けた！

「やっぱり遠すぎます！全然効いていない！」

「足元を狙え！地下道を崩壊させて足場を崩せ!!」

最初は鱗の装甲で全ての狙撃や砲撃を防いでいる巨人。

それでも執拗に狙われればどんなに鈍感でも違和感に気付かれる。

巨人の顔が全て自分達の方に向けた瞬間、一同は地下道に逃げ込んだ。

部隊長であり測定手であったカーフェンが穴に飛び込んだ瞬間、巨人が突っ込んだ。た！

「もぉおぉお!!」

それは結晶体にぶら下がっていたフローラに吐き気を催し傷だらけにするのに充分だった。

彼女は全身を結晶にぶつけてこめかみから血を垂らして頭が冷えた感じがした。

下手に動けば、背中から放り出されて不利になるのは嫌でも分かる。

『“声”が聴こえる…これはケニーさんの部隊ね』

負の感情を“声”として聴こえるフローラは嫌でも絶望的な感情を周りから教えら

れた。

恐怖という感情が欠如しているので、気分が重くなるだけで済んでいる。

それでもすぐに死体になる兵士の感情やネガティブ思考を聞かされれば判断力が鈍る。

そんな中で彼らの“声”はどうやって口内の歯茎を狙うべきかというものであった。

「歯茎?! そんな所にあるの!?!」

巨人に好かれているのか下手すれば調査兵団の巨人討伐総数に並びかねないフロラ。

そんなに巨人と交戦してきた彼女でさえ、弱点が歯茎にあるとは予想できなかった。

『あつ無理ねこれ…!』

彼らの話を統括するとそれぞれ歯茎の上下に弱点部位が存在する。

つまり巨人の歯茎を狙う為、最低でも6名の兵力が欲しいという事だ。

火炎瓶、手榴弾があればいいが、口内に近づける練度の兵など限られている。

しかも巨人のうなじは3カ所あるのでそれを狙う3名の兵士も欲しかった。

『リヴァイ兵長とわたくしとミカサなら口内を……でもそれだとうなじを狙える人が……』

双頭の巨人を相手にしたときは、弱点部位を潰したと同時に2人がうなじを削いだ。その時は、異様に肉体の再生能力が高くて、そうするしか倒せないと判断した。

『と言う事は、歯茎6ヶ所を一斉に潰したと同時にうなじ3カ所を攻撃する必要が……』
ここでフローラが9人になるように分裂すればできたかもしれないが彼女はただの人間。

自分の身体能力はコニー未満の人間だとフローラ本人が理解している。
そんなご都合主義が存在しない以上、8名の兵士を集めてくるしかない。

『後方から兵士長とミカサ、前方にはケニーさん』

まず3名はクリアした。

残り5名の兵士を探さなければならない。

『時間が無いわ!!』

とにかく情報伝達を急ぐ必要がある。

フローラは黄色の信煙弾が装填された専用銃を取り出した。

『誰でも良いから来て!!』

音を立て信煙弾が天空へと撃ち込まれた。

弾は黄色の煙を吐き出しながら円弧を描いて地面に落下した。

その煙を見た変異種は信煙弾が落ちていったところに向かって行く。

ここでフローラは選択肢を間違えたと後悔した。

『しまった?!? こうなるのは……』

意識が飛びそうになり歯を噛み締めて意識を保とうとする。巨体の割りには機敏な動きをする巨人は正門付近に辿り着いた。

「やばい！正門が破られるぞ!!」

指揮系統が崩れ去った以上、班長クラスに判断が任された。彼らは正門が破られればシガンシナ区陥落の再来と考えた。その結果、動ける兵を正門に向かって突撃させた！

「フローラ!？」

「無事か!？」

「ごほっ!!おええっ!!……へ、兵士い長お?ミカサア!？」

心配する2人に対して口内から吐瀉物を溢してから心配するフローラ。

「良かった無事ね!」

「オイオイ……そんなわけねえだろう」

「動いて息をすればフローラは無事です」

「なんだそれは…意味が分からん」

息をして動いている時点でミカサはフローラが無事だと判断して安堵した。

そんな彼女を見て困惑したのはリヴァイである。

頭から血を流して喘いで吐瀉した女に向かって掛ける声ではない。

どんだけ普段から死にかけてのかと困惑する暇はないが一瞬だけ硬直はした。

「兵長、すみません！遅れました!!」

「よく舌を噛まなかったわね」

「うる…むぐつ「静かにしろ」むうん」

巨人の動きに振り回されたもののペトラとオルオが合流した。

これで残り3名居れば小数点以下切り捨てであるが勝機はある。

「何があつた？」

「弱点部位を発見しました。それぞれ巨人の歯茎、6カ所です」

情報提供を求めたリヴァイに対してフローラは予想外の事を口にした。

リヴァイ、フローラ、オルオ、ペトラ、ミカサの5名。

全員が口内に狙いに行けば、うなじを削ぐメンバーが居ない。

だからといって兵力を割り振れば、弱点部位を全て潰しきれない。

「さてどうする？このままだと全滅するが…」

「俺たちが弱点部位を潰す！フローラとミカサは巨人のうなじを削げ」

仕方なくリヴァイは部下達と共に歯茎を潰す作戦にした。

自分が選別して任命した部下を信じるしかない。

選択肢を間違え続けた彼は、自分と同等の活躍を部下に強いるしかなかった。

「待ってください。一齐に弱点部位を潰したと同時に全てのうなじを削ぐ必要がありません」

「なんででめえがそんな事知っているんだ？」

「似たような2つ頭の変異種と交戦したからですわ」

「お前……」

そんな情報など彼女以外は知らなかった。

フローラは自身の巨人討伐数を過小に報告しているせいで整合性も糞も無かった。下手すれば845年に討伐した巨人でフローラから譲ってもらった件が山ほどある。そう実感しても可笑しくないほど、新兵のはずの彼女は巨人と交戦し過ぎていた。

「何かおかしい……」

「どうしたペトラ?」

この中で唯一ちゃんとした女性であるペトラ・ラルは異常を感じ取った。すぐに残った彼らも嫌でも感じ取る事になる。

「巨人が大気を吸い始めました!」

「もうやるしかねえ!!」

ずっしりと地面に伏せた変異種は、再び3つの頭が口を開けて大気を吸い込み始め

た。

わざわざ弱点部位を晒してくれて攻撃しやすくなった。

だが、それは一歩間違えれば巨人の体内に吸い込まれてお陀仏となるという事でもある。

「おいペトラ」

「何よ？」

「絶対に生き残ろうぜ」

「……いいわ。あんたもしっかり生き残ってよ」

「俺様が死ぬわけねえだろう」

死期を悟ったペトラとオルオは最後の確認をし合った。

口では死ぬなど言ってるし本心だが生き残れるとは思っていない。

ただ、ペトラには父が、オルオは弟たちや親を守るために腹を括った。

「フローラ！向こうから騎兵が3つ来た」

「……あれは！精鋭班の班長たち！」

ミカサの一言でフローラは下を見下ろすと騎兵が3名、こちらに向かってきた。駐屯兵団第一師団精鋭部隊のイアン、リコ、ミタビ班長であった。

「おい！なんかあつたのか!？」

「ミタビさん！弱点部位を発見しました。それぞれの巨人の歯茎です！」

「何だと!？」

時間が無い以上、居場所をバラしてでも大声でミタビ班長に情報を知らせた。

その声に反応したのか、巨人は3名の騎兵がいる方向に向かって腕を払う！

「ついて…ねえな…つと！」

「よいしょ！」

「うおっ!？」

3名の騎手は鞍から飛び出して立体機動に移った。

少し反応に遅れたミタビ班長に腕が掠りそうになる。

幸運な事に熱風のおかげで彼は上方に押し出されて辛うじて生き残った。

「何だこれは？人類最強部隊の結成か？」

「イアン班長、冗談を言っている場合じゃありませんわ……」

「こうでもしないと緊張がほぐれねえだろう？」

「まあ、確かに……」

さきほどまでは緊張感で押し潰されそうだったのに呆れた“声”になった。

それだけでフローラは、イアン班長に感謝しきれない。

何故ならあの空気で生還できた兵は自分の記憶の中で居なかつたからだ。

「お前ら急ぐぞ！いつ針を射出されてもおかしくねえ！」

「でもこれで8人。あと1人は？」

何とか8人揃ったが、あと1人不足している。

時間が無いと分かってもミカサは疑問を投げかけた。

「大丈夫よ。最後の1人はわたたくしの知り合いがやってくれるわ」

フローラの根拠のない言葉。

昔からこんな感じだけど何故か信じたくなくなる。

それは親友と言うより背中を預けられる仲のおかげなのか。

「分かった。フローラを信じる」

ミカサはフローラを信じるしかなかった。

「囿は誰が行く?」

ミタビ班長の一言で1人を除いて全員が同じ人物を見た。

当然、囿役に無言で任命された人物はたまったものではない。

「なんでわたたくし!?!」

「お前が一番生き残りそうだから」

「分かりましたわ！リヴァイ兵士長とミカサはうなじを攻撃してください」
「残る一つはどうする気だ？」

それを答えようすると背後からフローラの肩が叩かれて『手投げ式の音響弾』を手渡された。

全員、その人物に面識は無かったが彼女はケニーだと気付く事が出来た。

「そいつは？」

「わたくしに立体機動術とか色々教えてくれた師匠ですわ！」

「……ああ」

「兵長と黒髪の女性と共にうなじの攻撃をお願いします」

「分かった」

フローラと謎の人物を除く兵士は、誰もが疑問に思った。

特にリヴァイは、何か懐かしい雰囲気を感じられた。

だが既に巨体の腹は膨れており、いつ針を射出しても可笑しくなかった。

彼は、頭に巻かれた包帯を取って確認したい気持ちを抑えて気持ちを切り替えた。

「ミタビとイアン、私はフローラと歯茎を潰す！」

「じゃあ俺はペトラか」

時間が無い。

最低限の確認をしてジェスチャーで情報伝達をした。

「では、行きます!!」

覚悟を決めたフローラはアンカーを外して巨人の視界に飛び降りて行った。呑気に大気を吸っている巨人に注目されて気を逸らす重要な役割。片手で安全ピンを取り6つの目を注目させた。

「はーい!!注目!!」

そして音響弾を地面に向かって投げつけた。

一瞬だけ全ての目がそれに向けられるがすぐに落下するフローラを見る。

獲物を獲ろうと両手を動かした瞬間、音響弾が鳴り響いた。通常なら巨体には支障が無いが大気を吸入している影響か。逆に変異種は大気を吐き出して見悶えていた。

「うぐっ」

音響弾によって全身が揺れて目が霞んだがフローラは近づいて来た歯茎にアンカーを打ち込む。

同時に5人の兵士が飛び込んできて唇にアンカーを突き出した。

最初で最後のチャンス！

壁内の最精鋭部隊が巨人の歯茎に向かって行った。

「ううああああああ!!そこおおお!!」

フローラは何も考えなかった。

下の歯茎を削ぐ事以外は。

上はリコ班長がやってくれと信じて双剣を構えた。

「うぐっ!？」

誰かの踏み台にされた感覚が一瞬だけした。

その時、時が止まったように静かになった。

ゆったりとした時間の流れを感じられる。

何が起こったか分からないが、彼女がやるべきことは1つ!

「はあ!!」

双剣が肉を斬りつけしなやかに曲がり白色の肉を削いでいく。

その時、発砲音がしたが彼女は気付くことは無かった。

それより何度も味わってきた肉を削ぐ感覚ではあるが、それで終わりではない。

アンカーを外して補助スイッチを触り、刃のロックを外して捨てた。

「うぐっ!」

身体を捻り頭を地に向けて空が真下に見える光景。
フローラは、そこへはばたく為に今度は唇の裏にアンカーを打ち込んだ。

『合図だ!!』

リヴァイとミカサとケニーは、それぞれ任せられたうなじを削ぐ!

常人ではGに耐え切れない姿勢で何度も身体を捻りながら、双剣を構える!

狙うは、うなじの肉!

目紛るしい視界の変化に対応しながら相方同士のタイミングを合わせた。

「終わりだ!!」

「これで仕留める!!」

「おおおらあああよつと!!」

同時にうなじの肉を削いで脱出していく3人。

かつて世界をどん底に落とした化け物の片割れは、その本領できずに倒れ込んだ。

力尽きて倒れ込む巨体の衝撃によって付近にあった物は全て宙に舞う。

「針にアンカーを打ち込んで脱出しろ！」

リヴァイのアドバイスを聴くまでも無く全員が針にアンカーを打ち込んだ。

結晶体の結合が外れ始めて鱗のように剥がれ落ちて来る。

それでもあのまま着地すれば巻き込まれるのは明白なので利用するしかない。

『やったわ』

オルオ先輩やイアン班長、リヴァイ兵士長やミカサ、ケニーさんがどうなったか分からない。

それでもフローラは意識が飛びかけながらも巨人を討伐したという事は分かった。

身体を酷使し過ぎて、もはや気力のみで支えていたが、何とか尻尾方面に逃げて行った。

最後は、張りぼてのように一枚の壁しかない障害物にアンカーを突き刺して力尽きた。

「やったか!？」

「おいやめろ!!」

ユトピア区の壁内に居た兵士の誰かがそう叫んだ。

復活フラグの呪文が聴こえたので誰かがそれを咎めた。

そんな声を意識が薄れたフローラに届いた…感じがした。

「ハアハアハア……(ぼ)ほ(っ)ほ(っ)……これで…終わり?」

全ての地域に平等に死をもたらす幾千万の結晶体の脅威は終わった。

足場は崩れ去った消えゆく巨人の死骸と結晶体と瓦礫の山。

何も知らない第三者から見れば人類は負けたと錯覚しても可笑しくない。

内扉は破壊されたものの正門はまだ壊されていない。

総力戦となったが壁内人類は勝利したと言えるだろう。

『本当に?』

壁内、壁外含めて100体以上の巨人。

超大型巨人もけむくじやらの巨人もさきほどの3つ首の化け物。人類を滅ぼそうとする者を全て撃破した。

誰もがそう思っていたが、ごく少数のみはそう思っていない。

「まだ終わりじゃない。鎧の巨人が残っている」と誰かが囁いた。

その時、フローラの意識は完全に回復して辺りを見渡すが…。

それをやった人物を特定する事はできなかった。

巨人が討伐できた事に喜ぶ声、泣き噉る声、生き残った事を感謝する声。その中で異質な声が聴こえた気がした。

「今のうちに逃げるぞ」…とよく知っている人物の声が聴こえた。

その瞬間、震え始めた両手で操作装置を握り締めた。

アンカーを外して着地して双剣を構えて直して声の下方方向である正門へと走る。

「正門はミカサたちが行ったのね。わたくしも急がないと…」

気を失いかけていたのは僅かな間と思つたが距離からして意外と経過していたようだ。

音を阻む障害物が無くなったせい、か聴力の良いフローラにエレンの声が聴こえて来た。

リヴァイ班の生還を喜ぶエレンの表情を思い浮かべるだけで口角が吊り上がってしまった。

でもまだ鎧の巨人がいるせいで一悶着あると分かっているのですぐ憂鬱になった。

「呑気そうでいいわね……」

ケニー隊長は旨い事、逃げられたのか。

破壊された内扉方面にいるようである。

おそらく王政府に伏せられている兵器を回収しているのだろう。

「やりたくねえ」とか「いつそ爆破しちまうか」とかいう愚痴が聴こえて来た。

その声は、負の感情を『声』にして脳内に届けているのか。

走りながら余計な事を考えてしまうフローラの前に人影が見えた。

「どこに行くんだフローラ？」

「リコ班長、鎧の巨人の能力者の声がしましたので現場に急行する所ですわ！」

リコ班長に呼び止められたフローラは、行き先を簡潔に伝えた。

すぐにでも止めないと油断しきつたこの状況では逃げられるのが明白だった。できればリコ班長にも協力を要請したかった。

「そうか、わたしは班を編成し直して壁内を警戒するよ」

「そうですか……」

「オイオイ、フローラらしくないな」

「ミタビ班長、それにイアン班長も……」

リコ班長と違って2人は血塗れだった。

理由はどうあれ彼らにも壮絶な事があった事は疲れ切った顔に浮かんでいた。

そのせいで救援を要請できる状況ではないと分かってしまつて落ち込むフローラ。

「ここは俺達が絶対に死守する！お前はやるべきことをやれ！」

「イアンの言う通りだ。お前がいつも通りじゃないとこっちも拍子抜けするんだよ」

「それは酷くないかミタビ？」

「じゃあ、このフローラの顔はいつもの奴か？」

「そりゃあ違うが…」

ポロポロの2人に励まされた所を見ると相当顔が酷かったのだろう。

恥ずかしくなって緑色の外套のフードを深く被ってしまったフローラ。

そんな乙女らしい姿にツボに入ったのか大笑いをする2人。

「もう！笑わないでくださいよ!!」

「すまんすまん！乙女っぽくてつい…!」

「酷い!!」

この場に居る全員は疲れ切ったがそれでも彼らは信頼している。
きつと彼女が生きて帰ってくることを。

「お前たち！フローラを引き留めて遊んでるんじゃない！」

「おっと鬼隊長のお出ました」

「頑張れよフローラ」

「はい!!」

気力で立っているミタビとイアンはそれをバラさないように取り繕っていた。そして手を振っていた頭進撃娘が全速力で走り出した瞬間、倒れ込んだ。

「ミタビ、イアン。負傷者は大人しくしてくれ」

「しようにねえだろう。先輩がこんな格好悪い姿を見せられないだろう？」

「ミタビの言う通りだ。これは男のプライドって奴だ」

トロスト区奪還作戦のように力尽きて動けない2人。

そんな彼らを介抱するように残らざるを得なかったリコ・ブレッツェンスカ。

「実はフローラと一緒に行きかけたんだらう？」

「俺らは大丈夫だからついてやれよ」

「あの子は大切だけど、同僚は見捨てられんさ」

リコ班長は、このままフローラを行かせると二度と帰ってこない予感がしていた。

その悪い予感の中してしまい、後にリコは彼女に同行しなかったのを後悔する事となる。

さきほどのやり取りが、リコとフローラ・エリクシアとの最後の会話だった。

そしてこれが駐屯兵団第一師団精鋭部隊とフローラとの今生の別れとなってしまった。

9 7 話 アニ・レオンハート奪還作戦

「(っ)ほ(っ)ほっ!! かつー! ペっペっペっ砂が…(っ)ほ(っ)ほ!!」

鎧の巨人の継承者であるライナー・ブラウンは目覚めた。

何が起こったのか分からなかったが彼がやったのは体内から異物を外に出す事だった。

土、砂、埃、断熱材、よくわからない物を吐き出すまで咽たり嘔吐した。

胃の中が空っぽになっても吐き出そうとし、胃を強く締め付けられる感覚で悶えていた。

『アニは!?!』

次に同じ戦士であるアニの安否確認だった。

さすがに無傷とはいかず結晶の一部が欠けていた。

だが、アニの意志の固さを示すように結晶体は彼女を守り抜いている。

「良かった…これ以上アニに何かあつたら俺は…」

ひとまずアニの入った結晶が無事だったので安堵して座り込むナイスガイ。しかしすぐに潮風に長年当たり続けて老化が激しい翁のように顔を顰めた。

「ベルトルト…」

もしかしたら自分を被って瓦礫の下敷きになったのでは!?

兄貴分であつたマルセルの件がある以上、ありえない話ではない。

「いや…違う。ここまで大穴が空いてるなら脱出したはずだ」

天井に大きな穴が…と表現できないほど日光が彼を照らしていた。

地下室だったはずなのに解放感溢れる職人の技には感服するしかない。

器用なベルトルトは自分を守るために頑張つたのを感謝した。

「それしても妙だな……何でこんな静かなんだ？」

問題なのは異様に静かであり、戦時中とは思えなかった。

幼少期から瓦礫の山など見慣れてしまった彼だからこそあまりの平穏さに恐怖した。

立体機動装置を駆使して地上から顔を覗くライナー。

そこで彼が見たものとは…!?

「……見なかった事にしよう」

たった今、目撃した巨人を全力で受け止めるのを拒否してライナーは地下に潜った。

エルディア帝国が犯した7つの大罪の1つである“アジ・ダハーカ”を見てしまったからだ。

その異形の巨人が起こした殺戮で、文明が500年退化したとも言われている。

それが現世に再臨しましたと言われても受け入れられるわけがなかった。

彼ができるのは、十八番の『現実逃避』でその巨人が居なくなるのを待つだけである。

「いや、駄目だ。それだとベルトルトを見捨てちまう」

せめてベルトルトがどうなったのか確認するべきだ。

優秀な彼の事だから必ず何かしらのヒントを残しているはずだ。

『まずアニをどうやって運んでいくか考えるか』

ここは、ちようとユトピア区壁内の中央部に位置する。

“アジ・ダハーカ”が居るとはいえ見逃すほど警備は甘くない。

協力者が居ても荷台を引っ張る馬車が無ければ意味が無い。

『ん？なんか可笑しい！何で誰も来ないんだ?!』

ここでライナーは異変に気付いた。

ガスを投入するので警備を手薄にしたのは分かった。

だが、何でここに警備兵の1人も居ないのか。

アニは重要な証人であり壁内人類が手に入れた数少ない戦利品である。

瓦礫の下に埋もれたとはいえ放置するなどあり得ない！

「ライナー」

「うわ「シツ！」ああ……」

急に呼びかけられてライナーは大声を出したがベルトルトの声を聴いて即座に落ちて着いた。

「どこに行ってたんだよ」と叫びたいが、さつきまで寝ていた罪悪感がある為、彼は堪えた。

「荷馬車を連れて来た。アニを乗せて脱出するよ」

「そうか、でもオレら2人で載せられるのか？」

「そこにパワーリフターがある。それを使って載せる」

「分かった。俺に任せておけ」

ライナーは油圧式パワーリフターを手に取った。

詳しい原理は忘れたが密閉空間に外部から圧力を加えると中の反力は同等の力が働

くという物だ。

それは、押された面積だけ押し返す力に変換するという事でもある。

今回はアニを持ち上げる為にシリンダーへ押し返す力は少なくて済むが、かなり押し込む必要がある。

何故なら押し込む面積が力になるので、彼女を浮かせるなら、それだけの面積が必要だからだ。

そこにテコの原理と併用すれば、僅かな人力で時間があれば1000kgでも持ち上げる事ができる。

「良いかライナー、フオークを拘束具の空いている隙間に突っ込んでくれ」

「そしたら僕が拘束ベルトを切断して支柱になっている木材を排除する」

思い返せば、戦士候補生の知識のおかげでここでの座学の成績はトップ5位内に入っていた。

戦士候補生時代ではどん尻で、落ちこぼれと馬鹿にされていたが、ここでは優秀と讃えられた。

この座学をみんなに伝えれば、もっと人気者になれるし、クリスタも自分を…。

「ライナー?」

「…すまん、すぐにやる」

戦士候補生時代に習った座学がライナーの脳内を横切っている間に相棒の準備ができたようだ。

壁内は楽園であつたが、どうも自分を正気にさせてくれないようだ。

ハンドルを引つ張つて歩くと、キヤスターが地面の凹凸でガラガラと鳴る音が彼を現実に戻す。

「疲れているんだよ。きつとここから脱出すれば正常に戻るよ」

「ああ、さっさとアニを連れて帰るぞ…つと!」

唇を噛み締めているのを見たのかベルトルトのフォローが入るが空しいだけ。

ライナーはハンドルを上下させてアニを包み込んでいる結晶体を持ち上げた。

慣れた手つきでベルトルトがベルトを切断し木材を退かしたのを確認してハンドルを切った。

「これでよし。ひとまずアニを移動できるな」

「このまま地下道を通って正門の前まで行くよ」

「俺が運転する」

「ライナーはまだ重労働があるだろう？僕が運転するよ」

ベルトルトも巨人化で疲弊しているのに氣遣われる。

それはライナーにとって更に辛い気持ちにさせられた。

この地下道に荷馬車を持ち込んだのは相棒なので彼に任せるのが一番だ。

ただ、何か別の事に意識しないとライナーは罪悪感で潰れそうになっていた。

『アニ、俺を恨んで良い。だがベルトルトだけは嫌いにならないでくれ。あいつは良い奴なんだ』

訓練兵時代、いや現在進行形でアニに迷惑をかけていると実感している。

彼ができるのは、ここから脱出させて無事に彼女の父親と再会してもらおう事だ。

だが、軍上層部が結晶を破壊してアニを戦士候補生に喰わせる事になったら？

…ライナーの心はどんどん悪い方向に転がっていく想像力に疲弊していった。

「地下道は壁外には繋がっていない。ここで終点だ」

ベルトルトの一言によりライナーはさきほどまで寝ていたのに気付く。

偉そうな事を言おうが、覚悟を決めようが本質は変わってなかったようだ。

だが、ここからは腹を括らないといけない。

「先に俺が外の様子を見る。チャンスだったら巨人化してアニの結晶を掴んで逃げる」

「僕は君にアンカーを刺して立体機動で自力で登って来るよ」

「よし、じゃあ決まりだ。そこで待っていてくれ。合図は巨人化の音だ」

ライナー・ブラウンは地上に出る鉄製の梯子を登っていく。

足を乗せて地上に近づく度に閉ざされた環境から開放されるような感覚。

束縛から自由になれる。そんな気分だった。

「なるほどさすがに正門を手薄にするわけないか」

ライナーが地上に出て正門の守備兵を軽く観察したが警戒態勢だった。ただ疑問なのは、〃アジ・ダハーカ〃の姿が見えなかった事だ。壁内人類の兵士たちがあの化け物を倒せるとは思えない。

「とにかくもつとも厄介な奴が居ないならチャンスか」

強行突破するしか道はない。

何故だから知らないがそんな気がした。

そうと決めたらライナーは落ちていたガラスの破片で右手の甲を切り裂いた。血が4滴ほど床に垂れた時、ライナーは見張り塔から飛び降りた。

落下する彼の肉体から閃光が放たれて、うなじから肉の筋が出現した。

そして飛び降りた彼は赤色の信煙弾を撃った女兵士を目撃した。

「……………覚悟を決めるしかないな」

巨人化を察したベルトルトは荷台から馬を切り離した。

地下道に響く音と衝撃でパニックになったのか。

嘶いた後、ここまでアニを運んでくれた恩人は、全速力で来た道を逆走していった。

「それでいいよ。ここに残っていたら君も巻き添えになるからね」

共犯者の無事を祈って彼は梯子を全速力で登り出した。

「ね、姉さま。やっぱり休まれては？」

「休めない。休めないよ。だって私はここの最高指揮官だもの」

部下のラナイ・マクロンに心配されているが、それどころではなかった。

前代未聞、想定外、分析ミスとかで御託を並べて逃げるべきではない。

脳震盪の影響で意識がまだ朦朧としていたがエルティアナはそれでも足を進めた。

「鎧の巨人は必ずここに来る」

「でもわざわざ正門から逃げる必要がないと思いますけど……」

「地下道からもっとも近い場所がここだ。だから必ずここに辿り着くはずだ」

今まで壁内人類を見守って来た正門が目の前に見える。

自分の命令ではない限り、絶対に開かないはずの鉄壁な門。

だが、今までの常識を覆す出来事から紙細工のように脆い扉に見えた。

「エルティアナ総隊長、少しは休まれたらどうだ？」

「……エルヴィン団長か。ふん、みっともない所をお見せしてしまったな」

調査兵団の団長、エルヴィン・スミス。

何を考えているのかよく分からない奴だったがここでは純粹に心配されたと分かった。

ただ、彼に譲れない物があるようにエルティアナも譲れない物がある。

「見張り塔の前で寂しく1人で待機しているという事は、考えているのは同じ事か」
「そうだ、鎧の巨人はここに現れると踏んでいる」

「ならば部下に椅子でも用意させるが？」

「ずつしりと腰掛けるわけにはいかないさ。総指揮官殿こそ椅子が欲しいのでは？」
「私が欲しいのは、椅子ではない。人類の勝利だけ。ただそれだけで良い」

痛い所を突いてくるが、エルティアナも負けじと反撃をする。

ラナイも何か言おうとしたが、2人とも笑って口論しているのを見て黙り込んだ。
意外と相性が良いのか。

お互いにいがみ合っているようでどちらも身体に気を遣っていた。

「ラナイ。頼みがある」

「はい姉さま！」

「動かせるだけの騎兵と荷馬車を掻き集めて欲しい」

「まさか逃げられるとでも？」

「あくまで念の為だ。この世に絶対は無いからね」

「イエス・姉さま！分かりました!!」

ラナイは上官モードになったエルティアナの命令を素直に聴いた。そして溢れる元気の良さで全速力で兵を集め始めた。

「良い副官だ。我々の組織に居たら調査兵団は更に発展しただろうな」

「買い被り過ぎだ。王政府の議会すら動かす貴公の副官の方が優秀だったよ。」

エルヴィンが一人で居ると言う事はそういう事だろう。

分かってはいたが、彼の副官の優秀さは彼女が一番知っていたのであえて告げた。

調査兵は死ねば、そのまま忘れられて遺族の支援など皆無に等しかった。

その副官は、得意の弁論術である王政府に弔慰金や治療費を譲歩させた強者だった。

「そう言ってくれると彼も浮かぶ事だろう。もともと君の根回しが効いたのもあるが」

「…私に媚びを売っても良い事などないが？」

「王政府で唯一、政治的駆け引きをしなくて済む君の存在はありがたい」

「では、さきほどのやり取りは何だ？」

「ただの社交辞令だ……とも言うべきかな」

相変わらず掴めぬ男、優秀ではあるがどこか信用してはいけない男。

第一印象とほとんど変わってはいないが、ここ最近是人間らしさを感じられる。

やはり、巨人化能力者の出現など巨人に関して進展があったのが大きいだろう。

だからこそ彼女は言うべきか迷った。

この戦争が終わったら王政府が本気で調査兵団を潰しにくると。

「兵団の待遇を良くしたいなら【実績】が不可欠だ。貴公の健闘を心から祈るよ」

「分かっているさ。夢はすぐそこにある。ここで立ち止まるわけにはいかない」

とりあえず今回の作戦で自分が失脚するのが目に見えている彼女は激励するしかなかった。

なぜそこまで王政の上層部がエレンを欲しがるのか理解できないが大体察しは付く。

エレンという巨人化能力者という存在を1日でも早く抹消したいのだろう。

それを防ぐには、民衆が調査兵団を祭り上げる実績を作るしかない。

「ところでエルヴィン団長、見張り塔に兵を配備したか？」

「…いや、していない」

「私もそこに兵を配備していない」

「ここまで動きが無いなら敵か」

「だろうね。我々の会話を聴いている素振りが無かった」

2人とも見張り塔に怪しい人物が居るのは分かっていた。

立体機動装置を装備しているが私服を着た金髪の男。

ただ、すぐに指摘しなかったのは、王政のスパイである可能性を考えていたからだ。

さきほどの会話は、その可能性を炙り出す物だった。

そして自分たちの会話に興味が無いと分かった今、敵だと認識した！

「おいエルヴィン！そこで何をしてやがる」

「リヴァイ！鎧の巨人だ！備えろ!!」

「なんだと!?!」

呑気にエルヴィンが会話していると思っ指摘しようと歩いて来たリヴァイ。

いきなり鎧の巨人と言われてもすぐに対応はできなかったが、刃を構える事はできた。

エルティアナは前もって隠し持っていた赤色の信煙弾を撃ちあげた！
だが、時遅く空中から鎧の巨人が降って来た。

「ようやく逢えたな…鎧の巨人めえ!!」

845年、シガンシナ区の内扉の責任者であったエルティアナ。

鎧の巨人に内扉を破られたせいで、彼女の人生はそこで終わった。

避難してくる民衆を守れず、迫って来る巨人を食い止められず全てが終わった。

過去は変えられないが未来は変えられる！

どう足掻いても失脚する未来しかないユトピア区の最高指揮官に名乗り出た！

キャリアアや人望、部下を切り捨ててまでも！鎧の巨人をここで仕留めるつもりだった

!!

「やはりそれが狙いか……!」

エルヴィンの読み通り、大事そうにアニの結晶体を掴んだ鎧の巨人。今までの軍事作戦は全て囿であり、狙いは彼女の奪還。ただそれだけだった。

「リヴァイ！」

「ああ………チツ！クソ!!」

さきほどの超大型巨人を上回る巨人と交戦した時に立体機動が壊れたようだ。

やはり一番狙いにくいなじを攻撃する時に無理な機動が駄目だったみたいである。

近くに立体機動装置を身に着けている女将校が居るが、さすがに上官の物は奪えなかった。

そうこうしている内に1人の男が鎧の巨人の首元に飛び乗った。

リヴァイは面識は無いが、あれが超大型巨人の継承者という事はすぐに気付いた。

「おい、待てエレン!!」

仕方が無いので正門に向かって兵士の装備を借りようと走ろうとした矢先。

エレンが壁から降りて来た！

制止しようとするが、彼には聴こえていないのか鎧の巨人を追跡をしている。

「好き勝手しやがって!!」

「追うぞ!!」

リヴァイ兵士長とエルヴィンは急いで鎧の巨人を追った。

だが、エルティアナはその場から動かなかった。

私情を押し殺して自分の使命を全うしようとしたからだ。

「エルティアナ総隊長!ご命令を……ってあれ!」

赤色の信煙弾を見て駆けつけて来た騎兵は馬から降りて上官に駆け寄った。

ところが、その上官は無言で自分が乗って来た馬に飛び乗ってしまい困惑するしかなかった。

「貴公は先鋒に正門に集合しろと伝えろ!私はやるべき事をする!!」

そう言い残して彼女は、馬を駆けてどこかへ行ってしまった。

新たに黒髪で怒り狂った形相をした巨人が出現して更に守備兵は混乱する事となる。

それを見た鎧の巨人は壁をよじ登っており、砲兵による支援砲撃は期待できそうになかった。

「どうした!?何があった!?!」

「何で馬から降りているんだ!?!」

呆然としていた彼は後続で駆けつけた部隊に命令を下した。

ただ命じられた事を1人でも多くの兵士に伝える事に尽力するしか選択肢が無かったのもある。

「さっさと開門しろ!!鎧の巨人に逃亡されるぞ!!」

「駄目です!ユトピア区の正門は開門させません!」

リヴァイは正門の開門を命じたが守備兵は聞き入れる事は無かった。

内扉を破壊された以上、ここを開門すれば巨人が侵入してくる可能性がある。

ウォール・ローゼの土地に家族が居る兵士は全員、聞き入れる事はなかった。

「我々調査兵団の兵だけで充分だ！開門してくれ！」

「例えピクシス司令のご命令であっても開門できません!!」

相手は巨人である以上、馬が必要だった。

正門の先にある旧市街地にも部隊は存在したが今は使い物にならなくなっていた。

原因は、獣の巨人の投石によって前線部隊が壊滅していたからだ。

天空から降り注いだ結晶体の破片によって更に被害を拡大しているだろう。

リヴァイやエルヴィンが無事だったのは偶然に過ぎない。

エルヴィン団長の懇願でも彼らは心が動かされない。

「クソ！やるしかねえか！」

「ひいひい…」

「調査兵如きが！我々駐屯兵に指図するな!!」

せつかく【足】を確保したのここで時間を潰されるわけにはいかなかった。

時間が無い以上、殺人を犯してでも強行突破するしかない。

リヴァイは躊躇いも無く守備兵の部隊に向けて刃を向けた。

数多くの巨人を葬って来た人類最強の男の眼力に怯える守備兵だが逃げる事はしなかった。

「総統局の命令だ！さっさと開門せよ」

「エルティアナ総隊長!？」

武力衝突が起こる直前、ユトピア区の守備部隊を指揮する総指揮官の助け舟が来た。

総指揮官の命令以外では開門は全て禁じられていた。

逆に言えば、総指揮官の命令であれば開門するしかない。

「できません!!」

「例え総指揮官殿の命令であっても！巨人を招き入れるリスクはできません!」

「壁は我々を守ってくださいました！例え貴女であってもここは開門させません!」

ところが、巨人の恐怖が嫌でも染みついてしまった正門の守備兵は開門を拒んだ。

結晶の破片から守ってくれた壁付近以外は、全壊していた。

この終末の光景を見ているからこそ、それでも健在な壁を神と崇めてしまった。意図せずに絶望から逃げるように壁教に入信してしまった彼らは、既に正気ではなかった。

「これが分かるか？」

「それは…」

そこでエルティアナはある物を掲げた。

それは、子供たちがユトピア区を守備する兵士を応援する為に描いた絵であった。緊張が続いて士気が低下すると想定していた彼女が子供たちに絵が描かせた絵だ。守るべき人達を目に見える形で意識させる。

そうでもしなければ、決死の覚悟にならないと思っていたからだ。

「たった今、鎧の巨人がストヘス区を半壊させた元凶を抱えて壁外へと逃亡した。ここで逃がせば奴らは必ず再びこの壁内人類に向けて攻撃を仕掛けるだろう!!」

「ですが…」

守備兵が動揺したのを確認したエルヴィンはすかさず追撃をした。心が揺れている以上、後押しをすれば突破できると思ったからだ。

「問おう！貴公らは、勝利を願う子供たちの応援を踏み躪つて！このまま巨人共を見逃す気か!?心臓を捧げた同胞たちの命を無駄にする気か!？」

エルティアナは最終通告を行なった。

これで動かなければ命令違反として正門の守備兵を文字通り掃討するつもりだ。

「開門！開門しろ!!」

「そうだ、それでいい!!」

無垢の子供たちを犠牲にするわけにはいかない。

次世代には、目の前に広がっている地獄を見せたくない。

それは兵士全員が想っている事であった。

「鎧の巨人の対応は主力部隊に任せてある！お前たちは巨人と交戦しなくて良い！」

主力部隊？そんな物とつくに壊滅してるし、精鋭部隊は壁内の守備に手一杯だ。

エルヴィンの作戦に乗ったエルティアナは口から出まかせの命令を下した！

「我々の目標は、鎧の巨人に奪取された結晶で包まれた巨人化能力者を奪還するだけだ
！」

ここに居る兵士は、新兵、もしくは軽傷者だけだった。

巨人と交戦できそうな兵士は壁外の前線に送っている。

なので、巨人と交戦するのが目的では無いと明白にする必要があった。

「我々は、鎧の巨人に奪取されたアニ・レオンハートの奪還を行なう！覚悟は良いか!?」

「「「ハッ!!」」」

この場に居る全員が心を一つにする中、身体が震えている男が居た。

『おいおい、ライナーと交戦しないとアニを取り返せねえじゃないか。正気じゃねえよ……』

新兵だからと壁内の帰還を許されたジャン・キルシユタインは震えていた。結晶を飛ばしてユトピア区を全壊させる化け物が居ると知ってしまった。

もう二度と出現する事が無いと知らない彼は、心が折れていた。

『ハハハ……もう自慢する人は居ないんだけどな』

コニー・スプリングガーも巨人を見るのが嫌になっており敵前逃亡したかった。

横に居るサシヤを見れば顔が真っ青だったので同じ事を考えているだろう。

ただ後ろに金髪の美少女、ヒストリア・レイスが居る以上、格好良い所を魅せるしかない。

最後は男としてのプライドが彼らの正気を保たせていた。

『……ここで生き残ればご褒美にお肉が出るんでしょうか……』

サシャ・ブラウスは青ざめたコニーと目があつた。

死が間近に迫っていると分かっているからか、額から脂汗が垂れまくっていた。おそらく自分も相当酷い顔をしているのだろう。

手綱を握る両手が震えており、開門して欲しくないと願っている！

それでも父親から頂いた励ましの声が彼女を兵士に繋ぎ止めてくれる鎖となつた。一人前になつたと父親を安心させる為にも唇を噛んで痛みで正気を保たせた。

『ここをライナーを逃がせば、ここでの犠牲が無駄になる』

アルミン・アルレルトは、自分達に課せられた作戦の重要性を理解している。

そもそもこのユトピア区が戦場になつたのは自分のせいであると自覚していた。

ベルトルトに向かって「アニがユトピア区で拷問されている」と告げたせいになつた。

『みんな僕を責めなかったけど、大勢の人が僕のせいで死んだ……』

調査兵団の上層部は、次に狙われる場所が特定できたとフォローをしてくれた。

王政府ですら自分を責める事は無かったがその氣遣いが彼の心を傷付けた。招集されて馬で正門に向かつて行く時に兵士だった物を幾度となく見かけた。あの時、あんな事を言つて無ければ彼らは死ぬ事は無かつただろう。

『覚悟を決めない!!』

エレンもミカサもフローラも兵長もハンジ分隊長も自分が逃げてでも責めないだろう。だが、彼は自分を犠牲にしてもアニを必ず奪還する氣だった。それが心臓を捧げて死んでいった者達への償いだと本気で信じていた。

『みんなすごいね。まだ生き残ろうと考えている』

ヒストリア・レイスの人生は、生まれた時から詰んでいた。どうすればよかつたのか分からないが、今でも分かつていないので答えは無いだらう。

せいぜい自分を巨人の囷にしてみんなに頑張ってもらうべきか。

『できない。そんな事なんて…もうできないよ…!』

そんな事をしたら同期は全力で自分を助けに来るだろう。

両親から愛されず、近隣の住民からも煙たがれながら育った少女の心は既に壊れていた。

でも、104期南方訓練兵団の同期は、自分を愛してくれている。

『クリスタ』という少女の仮面を脱ぎ捨てて本来の自分になっても変わらずに相手をしてくれた。

そんな同期達を泣かせるわけにはいかなかった。

『必ずライナーをとつちめつて!ユミルの居場所を吐かしてやる!』

自分の罵倒がライナーのご褒美になると知らない少女は、親友を奪還する気だった。

その為にもアニを奪還する為に手綱を握り締めた。

『なんだろう。このまま行くと死ぬ気がする』

ミーナ・カロライナは、自分の死期を悟っていた。

このまま壁外に行けば、自分はそのまま死ぬという嫌な直感があった。

悪夢で見たのか、ここに居る風景がデジャブで、ここに来ると分かっている感覚だった。

第57回壁外調査で門に待機していた記憶と経験が夢に反映されたかもしれない。

分からないがそのままみんなと付いて行けば、二度とみんなと逢えなくなる予感があった。

「大丈夫？時折頭が垂れて意識が飛びかけているように見えたけど？」

「ラナイさん……大丈夫です」

招集された兵の中でもエリート兵であるラナイに心配されてしまった。

階級は、下手すればエルヴィン団長より上の立場である。

そんな彼女から心配されたミーナは嘘をついてまでここに残ろうとした。

「本当に大丈夫？そこそこ偉いから私の命令で動けば撤退できるよ」

「そんな事、ここで言っていないんですか？」

「大丈夫、大丈夫。だって、最後尾だもん。前の人には気付かれないよ」

同じ黒髪の兵士であるラナイは、怯えているミーナの表情で限界だと見抜いた。

「姉さま」としか言わない彼女であるが、工業都市を監督するエリート駐屯兵である。

生半可な憲兵なら黙らせられる彼女は、王政の議会に参加できる権利を有している。

「私はこう見えても王政府の一員なんだよ。新兵を後方に下げる事なんて造作も……」

「嫌です……私は同志に誓ったんです。ウォール・マリアを奪還してお肉を食べると……」

「私には君が死地に行く気がするんだ。素直に従っておきなさい」

何故ここまでラナイがミーナに気にしているのかと言うとフローラのせいだった。

いつも尊敬している姉さまに迷惑をかける問題児。

そんな暴走している頭進撃娘を止められる数少ない存在だと知っているからだ。

フローラの性格上、ミーナが戦死しても心が折れる事は無いだろう。

ただ、ストッパーが居なくなれば、大惨事を引き起こすのは目に見えていた。

「フローラをコントロールできる貴女に死んでもらいたくないの。分かってくれない

「？」

「大丈夫です。ラナイさんと会話していて気分が落ち着きました」

「完全に開門されたら逃げられないよ。逃げるなら今だよ？」

「氣遣われ過ぎて逆に落ち着いたミーナは、甘くて優しい誘惑を断ち切った。

確かにここで退いても良いが、それだとフローラには絶対に追いつけなくなる。

死んでしまった親友のトーマスの無念を背負って生きている彼女は逃げなかった。

「私はフローラの親友！絶対に追いついて見せます！」

「そこまで言うなら止めないよ。ただ心配だから並走させてもらうよ」

「ミーナを舐め過ぎていたと反省したラナイは、彼女の想いを尊重する事にした。

そして開門が完了した瞬間、エルヴィン団長の号令を聴こえた。

「只今より女型の巨人の継承者の奪還作戦を開始する！ここで逃がせば人類に未来はない！女の子が封じられた結晶体を奪還したら速やかに壁内に帰還する！！心臓を捧げよ

！！」

「「「ハッ!!」」」

「進めえー!!」

最前列に居たエルヴィンは、突撃命令を下して壁外へと飛び出した!

後続の調査兵がそれに続き、新兵や負傷兵が慣れない手つきで馬を駆けていく!

そしてミーナも前列に続いて馬を走らせた!!

「来ないわね…」

フローラは指笛を何度か鳴らしたがライリーが駆けつける事は無かった。

先に壁に放置したのは自分なので見捨てられても可笑しくない。

いや、そもそも生きているのかも疑問であった。

何故なら旧市街地は投石と結晶体の破片で崩壊していたからだ。

「まあいいわ。最悪エレンを利用すれば良いものね」

目の前には壁外へ飛び降りた鎧の巨人と対峙する巨人化したエレンが居た。馬が無くて追跡できなくてもエレンにアンカーを刺せば追う事は出来る。アニの弟子であるエレンは、彼女と同じ構えを鎧の巨人に向けていた。尻尾を巻いて逃げる隙が無いと考えたのか、両親の仇は動く事は無かった。

『鎧の装甲を貫通する刃は2本だけ…慎重に使わないと！』

フローラの鞘には、カラネス区を強襲した変異種の爪で生成された刃が2本収まっている。

壁内人類が持つ刃でもっとも鋭く、鎧の装甲すら貫通するという話である。実際に試してはいないが、今から試すのだからそこまで気にしていない。

この刃を優先したので、本来見つける予定だったヤークトシリーズ一式を返品してきた。

『ライナーはすぐにも逃げたいはず…そろそろ変化があるはずよ』

切り札は最後まで取っておくべきである。

鎧の巨人を間近に見て両手が震え始めたのを実感し、神様にここに來れた事を感謝した。

そもそも神など信じていないが、占いと同じように都合が良い時だけ神に感謝してしまった。

「ねえフローラ」

「どうしたのミカサ？そんな顔をして？」

ミカサに声を掛けられて振り向くと彼女は真剣な眼差しで自分の顔を見つめて來た。あまりにも脅迫染みだした視線に恐怖の無いフローラも押されてしまった。

「たとえ元は仲間でも敵だと分かったら殺すしかない……そうでしょう？」

「そう簡単に割り切れるつもりはないわ。時と場によつて判断は変えるべきよ」

「貴女はまだ甘い……この世界が残酷であるべき事を理解するべき」

「ここでフローラはミカサの言いたい事に気付いた。

実は自分でも勘付いていたが、第三者から見てもそう感じられるとは思ってはいなかった。

「何よ。わたくしがライナーを殺すのを躊躇っているとでも言うの？」

「少なくとも前回の時は、ライナーを殺さなかった…それが答えでしょう」

そう、ライナーが意識を失っていた時にその場にフローラは居た。

その事実は、誰にも伝えていないが、何であの時に殺さなかったのか良く分かっていない。

意識がある時に殺すのが、彼にとって罰になると何度も考えていたが、その結果がこれだ。

あの時にライナーを殺せば、ユトピア区における犠牲者は減ったのは確かだった。

「安心してミカサ、わたくしは両親の仇である鎧の巨人を…」

「殺すんでしよう？」

「そうよ、わたくしはその為にここまで生きて来たわ！これで終わらせる!!」

グリップを握り締めた彼女に迷いは無かった。

咆哮が聴こえた方向を見ると鎧の巨人が巨人化したエレンに突撃していた。

それが合図となってミカサとフローラはエレンを援護する為に戦闘に乱入した！

ここで鎧の巨人との因縁を終わらせる為に！

98話 世界は残酷だ……されど……とても美しい

エレン・イエーガーの人生は散々だった。

何度も殺されかけたし、自分のせいで大勢が死んでいった。

全ては自分の実力不足と責めている暇も無く時は刻一刻と過ぎていく。

『オレが！絶対に倒す!!』

目の前にはシガンシナ区を滅ぼすきっかけの2人が居る！

失った人命や物は帰ってこないが、これ以上の犠牲はここで止める事はできる！

『絶対に!!』

左手に噛みついたエレンは、巨人化に成功し、鎧の巨人の前に立ち塞がった。

もちろん逃がすわけもなく足の速さでエレンは、彼の前に躍り出た。

『ここがお前の墓場だ！』

アニの結晶を左手で握っている鎧の巨人は、動くことができない。

巨人化したエレンだけであつたら、壁から距離を取ってから対処を考えただろう。

『フローラにミカサか！さすがにここで交戦するのはまずいな…』

壁外に展開していた敵兵は壊滅していたが、それ以上に厄介な存在がそこに居る。

3年間の訓練兵時代で共に過ごしていたこそ、彼女たちの実力を知っている。

あれから実戦を幾度もこなしてきたので、更に強くなっているのだろう。

『もうこりこりだ！』

先に仕掛けたのは、鎧の巨人であつた。

時間が経過するほど敵兵が自分たちを追跡してくるのだからやるしかない！

退路を完全に断たれる前に右ストレートで殴り倒そうとした！

『チツ！関節技を狙ってやがるな!!』

だがエレンはそれを回避する素振りも見せずにはわざわざこちらに向かつてきた。

前回と同じ轍を踏むわけには行かず、相棒を守るために左手を右肩に添えて突っ込んだ！

エレンはその衝撃で吹っ飛んだが、それとライナーは倒れ込むのを必死に堪える。

だがその隙は、アンカーが射出される音と共に双剣を構えた2人の女の襲撃を受ける羽目となる。

「ライナー！相手は馬が居ない！振り落して逃走すれば僕らの勝ちだ!!」

ベルトルトは相棒を鼓舞すると同時に拳銃で顔馴染みの女を撃ち落とそうとする！

しかし、鎧の巨人の左手で庇われている以上、身動きが取れなかった。

「フローラー！」

「分かっているわ!!」

フローラとミカサはまず鎧の巨人の視界を潰す事を最優先にした。

視力を失われれば、逃走に支障が出るし、なにより増援が来るまでの時間稼ぎになる。さきほどの攻撃でエレンが倒れてしまった以上、2人で何とかするしかなかった。

「硬っ!!」

「透明な膜?!? 前回は無かったのに!?!」

視線だけで自分が担当する眼球を伝えて眼球に双剣を振り下ろしたが、弾かれてしまった。

特にフローラは、前回の戦闘では刃が眼球に突き刺せたので困惑するしかない。巨人化するほど能力が劣化するが、今まで巨人化を温存していた鎧の巨人は最盛期の実力である。

攻撃が通じないと分かった瞬間、2人は眼球から離れて別に作戦に移った。

「僕たちの邪魔をするな!!」

牽制する為に手の隙間から発砲したベルトルトだったが、居場所を知らせる事となっ

た。

「肉を削いでやる!!」

「ベルトルト、覚悟なさい!」

やむを得ず鞘から刃を抜いて装填したベルトルトは、2人と交戦する事にした。

すぐに鎧の巨人が動き出して振り落されるリスクより彼女たちを殺害するのを優先した。

彼女たちの実力を知っているからこそここで仕留めないと生還できないと悟っていたから!

「くっ!!」

彼が左手から飛び出した瞬間、フローラから投擲された刃を弾き返す!

巨人の首元にアンカーを突き刺してその場から脱出を図った直後にミカサの攻撃が空振りした。

一瞬だけできた隙を狙ってベルトルトは飛び掛かるが、フローラがその刃を受け流し

た。

「邪魔だ!!」

「あなたもね!!」

再度攻撃をしようとするのと鎧の巨人が動き出した。

アンカーでぶら下がれるベルトルトと違ってフローラは落下した。

当然、そのまま落ちるつもりなど無くアンカーを巨体の腰に打ち抜けてぶら下がって距離を取る!

「エレンやっちゃえ!!」

「クソ!!」

ベルトルトは追撃をするか迷ったがエレンが殴りかかってきたせいで飛び降りた。

その直後、エレンの右ストレートは見事に鎧に巨人の左顎に命中!

急所を狙われて意識が飛びかけたライナーは必死に足を踏ん張って堪えた!

「これ以上僕たちの邪魔を！するなああああ!!」

双剣を振りかぶってフローラに斬り掛かるベルトルト！

力の限り叩き斬ろうとする彼に対して彼女は冷静に刃だけを狙って双剣を滑らせた！

超硬質スチール製の4本の刃は、激しく音を立てて激突して刃の役目を終えた。

「あっ…!?!」

「ぐっ…!?!」

4本の刃の破片が2人の顔や兵服を掠り切れた肌から血が零れだした。

同時に刃を換装した彼らは、再び刃を敵に向けて双剣を構えた！

「そっ!!」

「ああああ！死ぬるか!!」

「さっさと死んで!!」

「あああっ!?!」

背後から斬り掛かろうとしたミカサの刃を辛うじて目撃したベルトルト！

常人離れの反射神経で刃を受け流したが回避しきれず左耳を削がれた！

痛みを感じる暇も無くミカサを左脚で蹴り落とすが、今度はフローラが飛び掛かって来た！

操作装置の護拳部に見えるレバーを引き彼女に向かってアンカーを射出させるが避けられた！

「捕らえたわよベルトルト!!」

「それで僕を束縛できると思ったか!!」

高速で打ち込まれた右アンカーと繋がるワイヤーをフローラは熱に耐えながら握り締める。

これでどうやってもフローラという質量のせいで思うように立体機動できなくなつた。

巨体の右肩に乗っている鬼神染みた女兵士に臆さずにベルトルトは打って出た！

「あああああああああ!?!」

「この道は駄目だ!引き返せ!!」

鎧の巨人に奪われたアニが眠る結晶体を奪還しようと馬を走らせる兵士達。彼らの道に立ち塞がったのは、変異種が撃ち出した結晶体の破片であった。撒き菱のように尖った破片は見事に馬の蹄に突き刺さり、落馬する者が相次いだ。

『向こうから音が聴こえる!フローラの叫び声!』

ミーナ・カロライナは阿鼻叫喚の状況下で、親友の声を聴き取った。きつとそこに結晶体に閉じ込められたアニが居ると信じて独断で馬を走らせた。

「待ちなさい!編成から逸れないで!!」

「こつちです!こつちにフローラが居ます!!」

「何で分かるの!?!」

「声が聴こえたからです！」

死にそうなミーナを監視していたラナイは、死地に向かおうとする馬鹿女を止めようとした。

そしたら声が聴こえたという返答を受けたが、もはやそんな事はどうでもよかった。

「お前たちも来なさい!!」

「ハッ！」

とにかくミーナを見捨てられないラナイは騎兵3名を引き連れて彼女の後を追った！

結晶で押し潰された民家跡や兵士の死骸を次々に通過して馬を走らせる！

「落ち着け!!うわあああああ!!あがつ!!」

草むらにあつた結晶の破片を踏みつけた馬は痛みで転がり込んで騎兵を前にと放り出す。

落馬しても彼を助ける事などでできず、ひたすら前に進まなければいけなかった。

「巨人同士が殺し合ってる!?!まさかあれがそうなの!?!」

4名の騎兵が落馬するのを恐怖しつつ、馬を走らせ続けると巨人同士の殺し合いが見えた。

「フローラ!!」

巨人が居る場所には必ず親友が戦っているとミーナには確信があった。

だから彼女は手綱を更に握り締めて巨人の殺し合いに乱入する気満々だった。

だが、彼女は大切な物を見落としてしまった。

「右から来る!!回避して!!早く!!」

「え?」

ラナイさんからの怒鳴り声を聞いたミーナは、すかさず右を見た。

四足歩行の巨人が口を開いて自分に飛び掛かろうとする光景が見えた。

『ミーナ?!』

親友の悲鳴を聴いたせいで手元が滑ってベルトルトの右目だけしか潰せなかった。すぐさまフローラは追撃をするが、逆に刃を首元に向かって突かれそうになり回避した。

「ハアハア……これでえわたくしたちの勝ちね!!」

「まだ負けてない!!」

「手古摺った……でもおこれでえ終わり!!」

鎧の巨人から引き離されたベルトルトは、人類最強の女たちを相手をしなければならぬ。右アンカーは破壊されて右目を潰された彼は、追い込まれた状況だった。

一方、104期生で成績3位の実力者の奮闘により、彼女達も疲労と運動で動けなかった。

「グオオオオオオオ!!」

エレンは怒りに任せて鎧の巨人の顔面を何度も強打した。
その度に拳が割れて血肉が飛び散っていく。

『お前だけは絶対に許せねえ!!』

自分のせいでマルセルを失ったと自覚しているライナーは意外と冷静だった。
落ちこぼれだった時の自分の失態をよく思い出した彼はエレンの動きを伺った。
殴り合いでは埒が明かないと考えたのか巨人化したエレンは距離を取った。

『これが最初で最後のチャンスだ!!』

関節技を決めようとするエレンを回し蹴りで吹っ飛ばした！

アニの格闘技を学んで好んで使うエレンに対して彼は、彼女から技を直伝されていない。
い。

彼女の親友だったフローラ経由で教えてもらった蹴りをここで披露した。

『ベルトルト！今行くぞ！！』

エレンがダウンした千載一遇のチャンスを彼は見逃さなかった。

急いでベルトルトに向かって掛けつけようとする彼の前に1人の女が立ち塞がった。

「ライナー！！あんただけは絶対に許さない！！」

フローラは『三式刀身改二』を鞘から抜いて鎧の巨人に向かって構えた！

彼女の人生は、シガンシナ区の内扉を鎧の巨人が破ったせいで振り回された！

それから5年間、両親の仇であり、ウォール・マリア放棄の元凶を殺す為に生きて来た！

そして今日、自分に偽って親友面してきた鎧の巨人を殺す為にグリップを握り締めた！

『俺はどうしようもない…だが邪魔するならお前を殺す!!』

一緒に理想を語り合い、お互いの夢を尊重して励まし合った仲。

特にアニ・レオンハートとの関係修復やクリスタと仲良くする為に協力してもらった親友。

良く分からない気持ち悪さで同期の女子で嫌われている中で唯一仲良くしてくれた女。

自分が彼女の仇と知っていないながら彼女を利用してきた彼は、ここでけじめをつけるつもりだ！

「殺す!!」

『殺す!!』

立場が同じであれば、ずっと親友の関係で居られた彼らは親友を殺す為に走り出した！

互いの殺意が自身の理性すら焼き捨てて全力で潰しに行った！

『これで終わりだ!!』

鎧の巨人は右手で親友を潰そうと拳を振り下ろした!

それを予想していたかのように彼女は拳に目もくれずに走り出した!

大きな衝撃と共に土埃が上空を舞って吹き荒れる!

『どうせどつかに潜んだんだろう?!』

彼女の戦い方を熟知している鎧の巨人はすぐさま寝っ転がって辺りを潰した。

巨人能力者には奇襲や不意打ちを狙って来ると訓練時に豪語したからこそ…。

ライナーが巨人に喰われないように訓練をしたせいでフローラの戦術が見破れた。

「ひどいわライナー…わたくしがその程度で死ぬと思ったの?」

アンカーを交互に打ち込んで無茶な立体機動をするフローラ。

転がるうとする鎧の巨人に何度もアンカーを刺し直して空中に飛び出した。

寝つ転がる鎧の巨人を見下ろした鬼神は、双剣を構えて落下した。

『そこか!!』

だが、ライナーは彼女の姿を目撃して左手で殴りかかった!

逃げる事が不可能と察したフローラは回転斬りで殴打攻撃を受け流そうとした!

『嘘だろう!?!』

顎型の異形の巨人が生み出した硬質化した鋭利な爪を特殊な金属で合成し、精製された刃。

その刃は、壁内人類の技術力では貫通できないとされる鎧の巨人の装甲は見事に貫いた!

左手の甲から左肩まで装甲を貫き皮膚を抉り取った回転ノコギリはそのまま飛び出していく。

『クソが!!』

鎧の巨人は装甲が無意味だと知って慌てて左肘を後方に突き出した！
しかし既に手遅れだった。

目標は既に左脚のアキレス腱にアンカーを打ち込んでワイヤーを巻き取った！！

「あんたのせいで失った進むべき道を！！」

巨人の首を刎ねて来た処刑人は、双剣でアキレス腱を削ぎ落した！

その瞬間、身体を捻じ曲げて地面に背を向けた。

そしてアンカーを倒れ込む鎧の巨人の眉間に差し込んでワイヤーを巻き取った！

「あんたのせいで失った光を！！」

鎧の巨人の瞳を防護している透明な膜を回転斬りで貫通して左目を抉り斬った！！
それでも怒りが収まらない彼女は、アンカーを左腕の上腕三頭筋に打ち込んだ！！

「あんたのせいで失った希望を！！」

巨人の首を刎ね続けたギロチンの刃と化した鬼神は、加速して急降下攻撃を行なった。

鎧の巨人の装甲を貫く刃は、彼女の怒りに応えたのか想像以上に肉を削いでいく!!
さきほどの回転斬りでボロボロになった上腕三頭筋はひとたまりも無く切断された!

『左腕を切断しやがった!?!』

榴弾を弾き返す鎧の巨人の左腕を刃だけで彼女は切断してみせた!

これは人類史上の快挙であり、最初で最後の記録となった。

『やっぱりあの時、見捨てておけばよかったのか!?!クソが!!』

ライナーの脳裏に浮かんだのは、フローラと初めて顔を合わせた日だった。

あの日、立体機動になれず訓練用巨人模型に撃ち込んだアンカーが外れた瞬間!

姿勢を崩して落下した彼女をライナーは立体機動で駆けつけて安全地帯に運んだ。

あのまま見捨てて負傷させれば、こんな事態にならなかつたかもしれない。奇しくも今はあの時と同じ夕方であつた。

『ははは…何思い出してんだ…』

両親を殺害した元凶がその被害者の娘を助けるといふ不思議な運命。

充実していた訓練兵時代では、自分を殺そうとしている女と一番仲が良かった矛盾。

鎧の巨人を討伐する夢を語つた彼女に「お前ならできる」と背中を押してしまつた過去。

たつた今、本体である自分の顔を刃が掠めた感覚でようやく気付いた。

これが走馬灯だと…。

「ぜえぜえ…まだあいけるう!!おえつ…ごほごつほ!」

無茶な立体機動で胸部と内臓を痛めたフローラは、吐き気と腹痛を我慢して立ち上がった。

口からは涎と共に血が垂れており、既に肉体は限界を迎えていたがもはやどうでもよ

かった。

彼女の人生は、鎧の巨人を必ず殺すと誓ってこれまで生きて来たのだ。何故か座り込んだまま動かない鎧の巨人を殺そうと双剣の刃を換装した。

「グオオオオオオオッ!!」

脳震盪から回復したエレンは巨体を走らせて鎧の巨人に殴り掛かった!

その雄叫びで正気を取り戻したライナーは、先に彼の顔面を殴り返した!

気力で意識が飛ぶのを堪えたエレンは、突き出された右腕を左手で掴んだ!

『ライナー!!お前だけは、俺が倒す!!』

鎧の巨人の右脇に回り込む形になったエレンは更に引き手で脇下にとつて背中を丸めた!

哀れな巨人はエレンの肩に担がれてしまい、成すすべなくバランスを崩す!

その勢いのまま、一本背負い投げで無駄に頑丈な鎧の巨人を地面に投げつけた!

大きな砂埃が砂嵐の様に巻き上げてフローラとミカサは刃を盾にして顔を庇った!

「エレン!？」

最後の力を振り絞って限界が来たのか、巨人化したエレンは倒れ込んだ。

ミカサはすぐさまエレンを助ける為に駆け寄っていく。

最後の最後で美味しい所を彼に取られてしまったフローラは笑う事しかできなかった。

「おい無事か!？」

「なんとか…」

コニー、アルミン、サシヤ、ジャンといった同期たちの顔を見れた彼女は安心してしまった。

後は、気を失ったのか動かないライナーに止めを刺すだけで良い。

そう思った彼女は、倒れ込んだ鎧の巨人に向かって行こうとした。

「見ろ、アニが……!」

ジャンの一言でフローラが振り返ると親友だったアニが入った結晶体が無雑作に落ちていた。

ストヘス区を半壊させて調査兵団の第二分隊を全滅に追い込んでユトピア区を地獄にした元凶。

憎むべき要素しかないのに親友だったせいか、彼女の想いに気付けなかった自分が良かった。

「あれは!？」

「巨人の群れだ!!まだ残ってたのか!?!急いでアニを運ぶぞ!!」

アルミンが巨人の群れが向かって来るのを目撃してジャンはアニを回収しようとした。

だが、フローラからすればどうでもよかった。

『あとはライナーを殺せば!!それでいいの!!』

鎧の巨人に向けて歩き始めたフロローラの前に顔馴染みが立ち塞がった。

「……今は、アニの奪還が優先だ！ 気持ちは痛いほど分かるけど、こらえてくれ……」

私情を優先する復讐鬼にアルミンが理性で行動しろと問いかけた。

兵士たる者、私情より任務を優先しろという事である。

要するにコニーが連れて来た荷馬車にアニの結晶を乗せる手伝いを優先して欲しい。彼にそう告げられたフロローラは目の前が真っ暗になった。

『な、なんで手が震えてるの…すぐに殺して運ぶのを手伝えばいいのに……』

操作装置に結合している強化刀身・2型の刃が激しく震えていた。

巨人のうなじから飛び出しているライナーを双剣で殺せばすぐ終わる。

それなのに彼女は手が震えているのに困惑した。

「フロローラ！ 手伝って!!」

ミカサの一言で折れた彼女は、アニの結晶体に近寄って運ぶ準備をした。あれほど殺したかった宿敵より同期達を優先したかのように。

「どんどん巨人が増えて来るぞ!!」

「どうなっているんですか!?なんでこんなに来るんですか!?!」

ジャンとサシャは必死に馬を走らせるが荷馬車の速度に合わせている。

そのせいで巨人の群れに追いつかれそうになっていた。

『なんでわたくしは、ライナーを殺せなかったんだろう…あんなに殺そうとしたのに』

フローラは、荷馬車に乗った今でもライナーを殺せなかった原因を探っていた。

ユトピア区で激戦があり、大勢の人の命を落としても太陽は地平線へと沈もうとして
いる。

今思えば、ちょうどこの時間帯に立体機動の訓練中にライナーに助けもらった。

『あの時はパニックになってたわね…助けてくれたライナーとベルトルトに感謝してるわ』

今では敵同士であるが、あの頃はとつても頼りがいのある2人だった。特にライナーに助けられた後は、彼に恩返しする事を誓った。

『……そう、わたくしはライナーの為に…恩人の為に……捧げようと』

そしてフローラはライナーが殺せなかった答えに辿り着いてしまった。

『ああ、そうか。だからわたくしはライナーを殺せなかったのね…』

ライナーに助けられた瞬間からフローラは無自覚に恋をしていた。

彼を異性として意識しており恋心を抱いていた事に…ようやく気付いてしまった。

『酷いわライナー…両親や家だけじゃなくて、わたくしの心も奪ったのね…』

両親の仇と認識して、鎧の巨人を死ぬほど憎んでいたのにその能力者を好きだった事実。

今思えば、女型の巨人にライナーが握り潰されたと錯覚した時、かなり動揺していた。本気で女型の巨人を憎んで差し違えてでも彼の仇を取ろうと考えていた。

今思えば、ライナーがらみで自分が取り乱していたのはそういう事なのだろう。

『こんな皮肉な事ってある？……自分の両親の仇に恋心を抱くなんて、あはははは……』

フローラ・エリクシアという845年から5年間作られた少女の人生は音を立てて崩れ去った。

鎧の巨人をこの手で殺す為に生きて来たのに愛してしまっただけで殺せないと知ってしまったからだ。

そしてクリスタ・レンズに苦手意識があった原因も分かってしまった。

『そっか、クリスタに嫉妬してたんだ。ライナーから性的な視線が向けられている事に……』

自分がどんだけ女子力を磨こうが、ライナーとの関係は、親友止まりで終わっていた。その愛する彼は、ずっとクリスタという少女だけに性的な視線を送っているという嫉妬。

それどころか、クリスタとの恋の進展を手伝ってもらおうと彼から頭を下げられた現実。

彼が恋敵と結ばれる為に自分の数少ない自由時間を割いて手伝わされた過去。

どう足掻いても自分がライナーと結ばれないと嫌でも分かってしまう未来。

『愛しているの一言でも言っておけばよかったのかな…』

——この関係を1人だけ知っていた人物が居る。

104期南方訓練兵団に所属していたクリスタの親友であるユミル・ゲツティンだ。

彼女は、1回だけライナーに向かつて「フローラはお前の事が好きだったと思うぞ」と告げた

当の本人は、復讐相手という意味と受け取って、3年間も密かに抱いた恋心は届いていなかった。

更にライナーは、フローラが自分とクリスタの結婚式の仲介役をする妄想をしていた時があった。

それをウトガルド城の防衛戦中に“声”として届けられた彼女は、狂乱状態に陥った……。

『わたくしの人生の象徴だった手帳も残りページ……』

ライナーと初めて出会った時から彼が大好きだった。

それは知っていたが、まさか彼に恋心を抱いていたなんて想定外にもほどがある。

その真実を知った時、フローラの手は震えて字を書くのも辛くなっていた。

もはや残すのは、記録では無くメツセージしか書けない。

不思議と同期達に残すメツセージは頭にすぐに浮かんで書き殴れた。

『誰かが意志を継いでくれれば、わたくしの人生は報われるの……それととっても美しいわ』

リープス商会の会長のご子息であり幼馴染であるフレーゲル・リープスと再会した日

から…。

自分の過去を振り返って、終活について今まで考えた甲斐があった。

『逃げたい…救われたい…こんな残酷な世界から開放されたい…』

今までは鎧の巨人討伐という信念が中核となりフローラの精神を支えていた。

それが崩れ去った今、彼女は急速に生きる希望を無くして、この世から逃げたくなくなった。

『ようやくわたくしは本当の意味で自由になれるのね…清々しい気分だわ』

善は急げと、インクが乾くの待つ前に手帳を折り畳んで懐のポケットに仕舞って周囲を伺う。

「コニー、もっと速く！」

「こんなもん乗せて早く走れるかよ！」

自分の人生を示唆するように真つ赤な曇り空が目の前に広がっている。そしてその日が沈む方向から巨人の大群がすぐそこまで迫って来ていた。見張りのアルミンは、速度を上げる様に御者のコニーに指示するが過重で無理の样だった。

『…エレンなら最後までやってくれるはず』

フローラはミカサに膝枕されて寝息を立てるエレンを見た。

きつと彼なら自分の意志を継いでくれると…そんな気がした。

再び懐のポケットから調査手帳を取り出して床に置いてエレンの左手で重しとして押さえた。

「待つて、何するつもり…?!？」

ミカサは、親友がエレンに手帳を託したのを目撃した。

自身の記憶では、風呂以外では絶対に手放さなかつた手帳を彼に託した。

それを意味するのは、1つしかない！

「ミカサ、物事には順番というのがあるのよ。今回はわたくしの番ってわけ」
「何を……まさか!!」

馬鹿な真似を制止しようとしたミカサにフローラは、アルミンの単眼鏡を手渡した。彼女は、思わず受け取ってしまいそれを一瞥した後、親友の顔を見た。既に緑色の外套のフードを被っており、彼女の表情は分からなかった。

「行きますわよ!!」

覚悟を決めたフローラは後ろを見る事も無く抜剣した。

程良い樹木のでっぺんにアンカーを突き刺して天空へと登っていく。

一瞬だけすれ違ったサシャとジャンの顔は決して忘れる事は無いだろう。

「行かせはしないわ!」

フローラに気付いた巨人が樹木に飛び掛かったが当の本人は飛び降りた。

慣れた手つきで巨人の鎖骨にアンカーを突き刺して落下した。ブランコのように外に飛び出した彼女はアンカーを外して巻き取っていく。

「まずー体！」

落下しながら巨人の背後に回ってうなじ部にアンカーを突き刺した。

そして双剣を構えて巨人に突撃してしなる刃で巨人の肉を削いで離脱した。

最後に残った2本の刃は、主人に従うように応力に耐えて元の形状に戻ろうとする。その痺れる様な感覚ですらフローラにとっては心地が良いものである。

『いっしがわたくしの最後か…』

フローラは今まで人命を見捨てて来た。

トロスト区の防衛戦では、同期と民間人を見捨てた。

第57回壁外調査での巨大樹の森で調査兵の集団を見捨てた。

カラネス区の正門に帰還できる直前に落馬して自分に呼び掛ける兵士を見捨てた。

それが自分の番に回って来たただけだと感じていた。

『お前たちの相手は、このわたくしよ!』

フローラが所持するのは、ガス切れ寸前のガスボンベとたった2本の刃である強化刀身・2型。

連戦で疲弊して呼吸すら苦しく肉体は立体機動で悲鳴をあげて視界が酷く歪んでいる。

馬で逃げる事もできずに壁外の深部に1人で取り残されたので味方の救援も期待できない。

そして相手は、特に疲弊など気にしない18体の巨人の群れ。

更に後方からは、12体の巨人が迫って来ている。

勝ち目など最初からあるわけなかった。

「かかってきなさい!」

だが、フローラはその絶望的な状況でも笑っていた。

奇行種ではないのか、自分の姿を見て足を止めた時点で事実上勝利している。

今回は、コニーが操縦する荷馬車と護衛班がユトピア区に帰還できればいい。それがこの戦闘の勝利条件なのだから。

「さあ、思う存分相手にしてあげるわ!!」

恐怖の感情が欠如した「エルディアの悪魔」は笑みを浮かべながら巨人の群れに飛び込んだ！

全ては、思う存分戦って満足して戦死して、この世から逃げて救われる為に！